

魔法少女いろは☆マジ  
カ —Paradise  
Lost— 1部(二部に向  
けて充電期間中)

hidon

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界観設定 及び 設定協力：オーバードライブ様

——魔法少女の存在はある大事件をきっかけに、世界中へと知れ渡った。

国際連合は、彼女達を人間社会の摩擦によるストレスや、孤独による絶望から守るべく、『保護区』を設立することを総会にて提案。

協議の結果、加盟国内には一つだけ、魔法少女の保護区を設立することを確約する。

日本、神戸市――

日本政府の指示を受けて、魔法少女保護区として新たに生まれ変わったその街では、魔法少女達は自分の素性を隠す事無く、大人達の庇護を受けながら、自由気ままに暮らしていた。

迷い込んだ少女、環いろはは、そこで何を見るのか。

※現在諸々編集集中につき、本文中のリンク先がおかしなことになっております。何卒、ご了承くださいませ。

※2023/09/14 一話ごとの文章量が多いため、本文の内主軸から外れてしまった一部をカットし、「サイドストーリー集」の章にペーストしました。

※2023/09/11 一話ごとの文章量が多いため、下部に「各話ざっくり解説」を作成しました。

※2023/05/17 投稿再開しました。

※この作品は、『マジアレコード――魔法少女まどか☆マジカ外伝――』を元にした二

次創作です。

※メインストーリーを再構成しています。それに伴い、世界観及び舞台となる神浜市の設定も再構築しています。また、登場する魔法少女達の設定及び住所も一部改変があります。

※オリジナルキャラ、オリジナル設定、独自解釈多数です。

※別の作品の連載も兼ねているので、不定期投稿になります。

※にわか知識で突っ走る可能性が高いので、ご意見、ご指摘は大歓迎です。

※一部、他作品とのクロスオーバー展開が有ります。(2020/01/16)

※オーバードライブ様より、設定に関する資料をご提供頂きましたので、掲載させて頂きます。(2021/03/06)

2019/11/09 作者が管理できなくなり、長らく放置状態にあった為、「arcadia」に投稿した文章は削除致しました。

# 目次

FILE #01	そして“いろは”	1
は告げられる	—	1
FILE #02	その街の仕組み	20
FILE #03	心の奥底で沈んだ	39
ものは	—	39
FILE #04	覚悟は、あるか？	72
—七海やちよ 編—	—	72
FILE #05	頂きに立つ者	98
FILE #06	孤高の絶対者に追	261
子供達	—	261
FILE #11	氷の部長と燃える	241
副部長	—	241
FILE #12	みにくいアヒルの	213
ばたき始めた	—	213
FILE #10	“翼”は静かに羽	189
—七海やちよ編 終了—	—	189
FILE #09	生き場を失った心	161
為にっ!	—	161
FILE #08	全ては“勝利”の	143
FILE #07	鶴の怨返し	124
いつく術は?	—	124

FILE #13	始まりの詩が聞こえてくる	289	もの	FILE #20	無邪気な大人	409
FILE #14	斯くて、進み行く者達	315	人へと向かう子供	FILE #21	暗晦の中樞で囁く	427
FILE #15	一番強く信じられるものは?	341	魁物	FILE #22	正しさを誰が正	435
FILE #16	掃き溜めの鶴が笑う時	358	解”と決めるのか	FILE #23	正しさが必ず届く	451
FILE #17	由比鶴乃 追憶編	379	とは限らなくて	FILE #24	その陽光は希望の	472
FILE #18	掌の林檎を齧る前に	391	朝日か 或いは 総てを焼き払う灼熱か	FILE #25	戦うべき相手は、	488
FILE #19	戦意の底で根差す	391				

此処には居らず	FILE #26	二度と“そこ”か	507	FILE #32	鶴が掃き溜めに落
ら抜け出せなくなる前に	FILE #27	親になろうとする	519	FILE #33	その手を掴んだ先
男	FILE #28	お互いに歩み寄る	536	に	——由比鶴乃 追憶編 終了——
為に	FILE #29	本当にそれしか手	555	FILE #34	Does Dea
は無かったのか	FILE #30	凡愚が喚き、足掻	583	th dream a dream d	
こうとも	FILE #31	『それ』は降つて落	599	arker than Darknes	
ちるもの	FILE #31	『それ』は降つて落	616	s?	
				FILE #34.5	その少女は何
				者でもなく (短編)	
				FILE #35	賢人達の座す園へ
					725
					734
					696
					681
					639

FILE #36 戦う為の第一歩

758

FILE #37 手掛かりの行方

780

FILE #38 奈落の底で煌く紅

蓮

FILE #39 人と獣の

(改訂版) FILE #39 人と獣の

狭間に生きる者

FILE #40 いろはの新しい生

活へ①

FILE #40.5 その少女は何

者でも無く② (短編)

FILE #41 いろはの新しい生

活へ②

FILE #42 いろはの新しい生

活へ③

FILE #43 それぞれの思惑①

FILE #44 それぞれの思惑②

FILE #45 目の前の白き光は掴

むに値するものか

FILE #45.5 その少女は何

者でもなく③

FILE #46 その正しさは誰

が為に

―七海やちよ 追憶編―



FILE #47	女神と爆裂と古町	1018	海の向こうへ	——七海やちよ	追憶編
1043	と鬼と(※クロスオーバー有ります)		終了	——	1155
FILE #48	外の世界で見えた		FILE #52・5	何者でも無い	
もの(※クロスオーバー有り)	——	1071	少女は、神を憎む(短編)	——	1213
FILE #49	“帝皇”		FILE #53	いつか万年桜の木	
(※クロスオーバー有り)	——	1089	の下で	——	1219
FILE #50	MMではなく		FILE #54	魔法少女いろは☆	
LICHT	の為に	1116	マジカ	——	1249
FILE #51	戦いの幕開け		FILE #55	彼女達のスタート	
1132			地点	——	1272
FILE #52	鶴は飛び立つ	七	FILE #56	MONSTER	
			〈凶犬〉	——深月フェリシア	編
				——	1298

FILE #57	PARASITE	
<寄生>		
FILE #58	LONELINE	
SS    <蠱毒>		
FILE #59	FELICIA	
<恵>		
FILE #60	REPENTAN	
CE    <懺悔>		
FILE #61	UNDERCAR	
D    <余興>		
FILE #62	GODDESS	
EYES    <炯眼>	(※クロスオ	
バー有り)		
1473		
1449		
1417		
1384		
1354		

FILE #63	IMPACT	
<衝突>		
FILE #64	KILLER	
<完殺者>		
FILE #65	WISH	
<私利私欲>	— 深月フェリシア編	
了		
FILE #66	嵐の後に転がり込	
んだもの		
FILE #67	修羅同舟	
1628		
FILE #68	集結する百火	
工匠大祭 編	(※ 冒頭に注意文有り)	
1604		
1571		
終		
1539		
1506		

FILE #74	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1788
中堅戦   前編		
FILE #73	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1754
次鋒戦		
FILE #72	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1729
け追加)		
先方戦 (2021/03/11)	おま	
FILE #71	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1707
FILE #70	集結する百火3	1685
FILE #69	集結する百火2	1653

中堅戦   中編		
FILE #75	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1814
中堅戦   後編		
FILE #76	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1841
副将戦   前編		
FILE #77	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1898
副将戦   後編		
FILE #78	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1929
大将戦   前編		
FILE #79	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	1977
大将戦   中編		
FILE #80	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	2003
大将戦   後編		
FILE #81	蒼海幫 vs 竜ヶ崎	2034

	FILE #81	終宴	2069
	FILE #82	怨悔	2094
	FILE #82.5	祭りの終わり	2119
	(短編)	— 工匠大祭編 終了 —	2119
	FILE #83	次に向けて	2129
	FILE #84	黒幕	2145
	FILE #85	生きて進むために	2163
	FILE #86	深淵から伸びた手	2176
	が、彼女に触れる	—	2192
	FILE #87	少女が見る世界は	2192
	神の未来か、悪魔の過去か	—	2192

	FILE #88	いろはの新しい道	2208
	①	—	2208
	FILE #89	いろはの新しい道	2223
	②	—	2223
	#エピローグ	そして二人は進み始める。	2242
	☆ 魔法少女ストーリー ☆	—	2242
	FILE #15.5	二葉さな 第1話 『新しい家』	2251
	二葉さな 第2話	『羽ばたけない鳥の子は』	2281
	二葉さな 3話 『行きどまり』	—	2306

二葉さな 4話 「アイちゃん」A

2321

第1話 「双竜邂逅」

2415

二葉さな 5話 「アイちゃん」B

2334

七海やちよ 第2話 「一番手

2451

若虎・孫(スン) 鈴紗(リンシャ)」

FILE #91 二葉さな 6話

七海やちよ 第3話 「二番手

「小説家と迷い猫」

2349

蒼鬼・劉(ラウ) 蓮穂(リエンウエン)」

二葉さな 7話 「迷い猫は愛された

2486

い」

七海やちよ 4話 「三番手 武神

二葉さな 8話 「あなたのために

鄭(チャン) 咲蘭(シャオラン)」(第一

きる」と

2521

部 最終ボス戦)

二葉さな エピローグ 「いま、ここ

七海やちよ 5話 「三番手 武神

にいるわたし」

2394

鄭(チャン) 咲蘭(シャオラン)」2

FILE #68.5 七海やちよ

2536

七海やちよ 6話 「三番手 武神

鄭(チャン) 咲蘭(シャオラン) 3

2553

七海やちよ 7話 「三番手 武神

鄭(チャン) 咲蘭(シャオラン) 決着

2566

七海やちよ エピローグ 「グランド

マスター」

2590

サイドストーリー集

FILE #10—S いなくなった

両親と、忍び寄る “名無し”

2600

FILE #11—S 女帝か独裁者

か!? 明京町の常盤ななか!

2614

FILE #15—S 『春』が齎す情

報、不審な二葉父子

2633

FILE #16—S 『雉』の黄昏

と、『鶴』の傷痕

2650

FILE #17—S 鶴乃の前に立

ち塞がる二人の影! 八坂おけらと、常

磐ななかの野望!?

2659

FILE #18—S 常磐ななかの

野望!?! 燃える鶴乃の怒り!

2666

FILE #19—S 七海やちよ・

追憶

2678

FILE #26—S 向かい合う龍

と雉! 深くなつていく親心!

2687

FILE #33-S 囚われの父、

迫りくる魔の手 ————— 2698

FILE #37-S 目的は何!?

いろはを取り巻く神浜の女達! ————— 2708

FILE #50-S スーパーIT

企業経営者と危険な傭兵 ————— 2716

FILE #52-S ご当地ヒー

ロー到来!! その名はカミハマン!

2728 FILE #54-S 下ろされた役

目 ————— 2741

各章ざっくり解説集! (読み飛ばしたい

方向け)

0章 プロローグ 環いろは編 FI

LE #1 ~ #3 各話ざっくり解説!

2749

1章 七海やちよ編 FILE #4 ~

#9 各話ざっくり解説! ————— 2754

1. 5章 環いろは編 FILE #1

0 ~ #15 各話ざっくり解説 ————— 2767

2章 FILE #16 ~ #33 由

比鶴乃編 ざっくり解説! ————— 2784

2. 5章 環いろは編 FILE #

34 ~ #45. 5 ざっくり解説!

2829

3章 七海やちよ 追憶編 FILE

# 4 6 5 2 ざっくり解説！

2870

3. 5 章 環いろは 幕間 FILE

# 5 3 5 5 ざっくり解説！

2893

設定資料集

神戸市の地方公共団体組織図並びに公

務員 wiki

2909

神戸市の住民 wiki 《魔法少女 編》

用語集 wiki

2958 2944

提供資料集

魔法少女が公的に認められた場合の保

険制度およびその課題整理（提供元：オ

ードライブ 様）

3003

各国の魔法少女事情（提供元：オーバ

ードライブ 様）

3008

※※※ブラックボックス（閲覧注意）※※

※

FILE # 4 8. 5 童謡

3018

FILE # 8 7. 5 陽白（こく

はく）（短編）

いろはの『夢』

3034 3026



## FILE #01　そして“いろは”は告げられる

——ああ、まただ。

また、私は、あの場所に居る。

ここがどこにあるのか、記憶を何度探しても未だに分からない。

分かるのは、ここが病院の中で、私は誰かの面会に来ている、ということぐらい。

白を基調とした病室には、林檎を二つに割った様な甘い匂いが漂っていて、鼻を柔らかく撫でてくれた。

ふと、目線を窓の方へと向けると、街並みが一望できた。ビルやマンションといった大型高層物が密集していることから、この病院は都会の中心部に位置していることが分かる。

それにしても、この病院自体もかなり大型なものらしい。窓の風景から察するに、1

0階以上の高さぐらい有るのではないか。

「  
」  
考えていると、誰かから名前を呼ばれた。

ああ、いつもの女の子の声だ——穏やかな柔らかい声色。でも、空気に溶けてしまふようなぐらい細く、弱々しい声。

私は、昔からその声を知っている。自分が小さかった頃——いや、それよりもつと、遙か昔から聞き慣れていた。

どうしようもなく懐かしい思いがして、私は声の方向を見る。

一台の電動式ベッドの上では、小さな女の子が横たわっていた。桃色のロングヘア——に、丸い瞳——彼女は、私とよく似ていた。初めて有った時、鏡でも見た様な錯覚に陥った程だ。

もしかしたら、自分に近い親族の者なのかもしれない。でも、思い当たる節が無い。私には妹がいない。いとは居るが、病気を患っている子はその中に存在しなかった。

少女は、私を見つめている。病室のベッドの上で寝ている状態からして、この子は何らかの病気に掛かっているのは間違いない。でも、浮かべている笑顔は、病の苦痛さなんて微塵も感じさせないぐらい明るくて、まるで陽の様な暖かさが感じられた。

いつまでも見つめていたい——そう思っていると、

「」

彼女は口を開き、再びわたしの名前を柔らかく呼んだ。

ああ、終わりだ——と、私は思った。

その先は紡がないでほしい。言ったら、この心地良さは無くなってしまう。

全てが暖かさに満ちたこの世界で、この子が最後に伝えてくるその言葉だけが、異常だった。

奇妙で、不可解で、不気味で……ぞつとする様な怖さがあつて、その意味を深く考えたく無かった。

「私はね」

しかし、そんな私の懊悩など、知った事では無いというふうに、彼女は笑顔のまま、

「■■と会う約束があるの」

そう、紡いでしまった。

夢が終わっていく。

彼女はどこにもいなくなり、病室の風景が闇夜の様な漆黒に覆われていく。私の足が浮遊してどこまでも落ちていく。

ただ、林檎の匂いだけは、最後まで——鼻腔を優しく、くすぐっていた。

☆

「深淵を深く覗き込み過ぎれば、奈落の底に引きずり込まれてしまうであろう」

☆

意識が、現実へと戻されていく。

頭がボンヤリとしながらも、僅かに目を開けると、白い光が目を刺して、痛かった。

「それで、この子の容態はどう？」

最初に聞こえてきたのは、男性の声だ。野太く、身体に響いてくる様な声量であったが、不思議と威圧感を感じられない。

「問題ナツシングですな。外傷は完全に塞ぎましたし感染症も無し。血圧、脈拍、体温、SPO<sub>2</sub>（血中酸素濃度）共に安定しております。ただ……心拍数だけが少々高めですが、これは多分心意的ストレスが原因ですので、時間を置けば直に落ち着くと思います

な」

次に聞こえてきたのは、女性の声だ。どこか、なまりの混じった言葉遣いだ。

「ありがとうね、美代さん。忙しいのに」

「いえいえ、わうちにはコレしか収入を得る手段がありませんから、お呼び頂けるならいつでも大歓迎ですな」

「そうね、確か魔法少女は——」

「魔法少女」、男性の口から発せられたその単語が私の意識を刺激する。

「ええ、看護資格を持っていても一般的な病院や診療所で働く事はできません。医師会や医療法人団体から猛反発に遭いますし、『保護条例』でも遂に禁止されてしまいましたからな」

この『魔法少女専門の訪問医療』を始めるのだから、彼らに大分妨害されましたからなあ——と彼女はそう口にしなながら溜息を付いた。

「——」  
「ほごじょうれい？ 保護って何？ 何を保護するもの？」

——不意に気になってしまった。目の痛みを堪えながら、パツと開かせる。

視界に映ったのは、白い天井。しかし、先の夢の中と同じ病院で無い事は、どういふ訳か、即座に理解できた。

「おつ、目覚めたようすな」

「美代さん、後は私に任せて。次の仕事があるんでしょ？」

「そうですが……よろしいのですか？」

「あら、この子が問題無いって言ったのは貴女じゃない？ 私にも多少は医療の知識が

あるから、あとは大丈夫よ」

「ありがとうございます。では、わっちはこれで」

「美代と呼ばれた女性は荷物をまとめると、ドアをボタンつと開けて駆け足で去って  
いってしまふ。」

—— 男性との会話から察するに、自分の身体を診てくれたのは間違いないから、  
お礼を言いたかったのに……意識が微睡んでいるせいで叶わなかった。なんとかドア  
の開放音がした方へ顔を向けるが、既に姿は見えない。

残念。そう思つて再び顔を天井へ戻すと……

心臓が止まりそうになった。

「大丈夫？」

男の顔が、視界全面を覆った。

「——ッ」

息を飲む。

恐らく、今しがた出て行った女性と話していた男性だろう——だが、問題はそのではない。

外国人だ。しかし、少女漫画のヒロインが一目惚れしそうな王子様風の色白イケメン美男子だったらどれほど良かっただろうか。

色黒で、岩肌のようにゴツイ顔つき、美男子と呼ぶには程遠い巨顔——少し前に、たまたまTVで見た、洋画に登場する外道なマフィアの殺し屋に近い風貌。

それが、眼前で、ニンマリと笑みを浮かべているのだ。

「いっ……いっ……」

15 歳の無垢な少女にシヨックを与えるのは、必然。

自然と眼尻に涙が浮かんだ。

混乱、恐怖、絶望、悲嘆。様々な負の感情が、一遍に脳を埋め尽くす！

「いやああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

絶叫が、静養室に響きわたった。



☆

そして——10分後……

「本当にごめんなさい……………」

「いえ、いいのよ」

少女が謝罪と同時に頭がテーブルにくつつきそうならいのお辞儀を行うと、色黒の外国人男性は手をひらひらと振って宥める。

このやりとりはかれこれ20回は交わされている。

「まさか、市役所の人だったなんて……………」

「まあこんなナリだからねえ…………。それよりも、あなた、身体、痛むところは無い？」  
そう問われた途端、アツと驚いたような顔を浮かべて、全身を確認する少女。

確か、意識を失う寸前に、下腹部をやられたのは覚えている。他にも至る箇所を叩きつけられた筈だったのに——外傷は全く無かった。多分、『美代』って女性が治してくれたのだろうか？

「よし、美代さんの治療は完璧ね」

正解だった。

「……じゃあ、自分が何で此処にいるのか、理解できる?」

「え、えくくつと……」

少女は、困った様に眉を八の字にして小首を傾げる。

混乱の渦中にある頭の中を、どうにか整理しようと考えてる。

まず、自分の今の状況を確認しよう。

外国人男性とは、木製の小さなテーブルを挟んで、黒い革製のソファに腰かけている。部屋の空間は小さくて、狭い。グレー一色の壁と天井が余計に圧迫感を与えてくる。だが、右側にあるブラインドテラスからは、陽が差し込んでいて、無機質な室内の一部を暖かな橙色に染めていた。

どうやら、此処は応接室のようだ。

次に対面している男性だ。自分を驚愕させた張本人。彼もまたソファに腰かけている。

体格は山の様で、自分の父親を遥かに凌駕する肉体だ。露出された両サイドの剛腕と、Yシャツ越しでも分かるぐらいのパンパンの胸板がそれを証明している。

肌は色黒——黒人のそれというよりも、日に焼けた黒さに近い——で、強面。陽を浴びてキラキラと光る金髪は角刈りに切り揃えられており、市役所の職員と名乗ったにも

関わらず、両耳にハート型のピアスをぶら下げている。

かなり異様な風貌だが、不思議と威圧と恐怖は感じられなかった。

——と、いうのも、彼の仕草と喋り方に理由はある。

端的に表すなら、凄く『女性的』なのだ。足を組んで、テーブルに置かれたコーヒ―を手を取って口に運ぶ動作も、猫を撫でる様な甘く優しい喋り方も、自分の母親を彷彿とさせた。

(それに……)

少女は、男性の瞳をじつと見つめる。

綺麗だ。海よりも薄くって、まるで山奥の湖の様に澄みきった水色に、自分の顔が映っている。

(この人は、悪い人じゃないのかも——)

水晶の如き瞳は、男性の純粹さを表している様に思えた。少女は心の中でそう確信を持つ。

「あらやだなーにいい？ そんなに見つめられたら照れちゃうじゃない？」

直後、男性は頬を淡いピンク色に紅潮させると、オホホホ、と口元に手を翳して、笑った。

うっ、と少女は息を飲む。やはり笑顔は不気味に極まる。

そして、先ほどから気になっていた、女性的な話し方——  
(もしかして……)

所謂「頭にオがつく三文字」に該当する人なのかもしれない。と少女は思ったが、これは確認しないことにした。

——再び、頭を整理しよう。

次に、何で自分は此処——神浜市役所にいるのか、ということだ。

まず、自分は神浜市にどうしてもいかなければならない衝動に襲われていた。

意気込んで足を運んだものの、道中で魔女に襲われてしまった。使い魔の群体に一方的に飛ばされて、全身を痛めつけられて、地面に叩き伏せられた。

そこで、視界が暗転——気が付いたら、白い天井が見えた。

此処、神浜市役所の静養室に行き着いていた、という訳だ。

「ええ、分かります」

はつきり思い出すと笑顔で伝える。男性はうんうん、と満足げに納得した。

「そう、なら良かったわ」

そういつて、席を立とうとする男性に、少女はハツとなる。

「あの……！」

咄嗟に声を掛ける少女。

「助けてくれたんですよね……だったたら、お名前を……!」

「正確には違うけど、いいわよ」

男性は座りなおすと、ニコリと笑みを浮かべる。スツと、手を差し伸べてきた。

「私は、ピーター・レイモンドっていうの」

「私は、環いろはって言います。ありがとうございます、ピーターさ……じゃなかった、

レイモンドさんですよ、ごめんなさい」

「ピーターでいいわ」

ピーターはいろはと握手を交わすと、再びスツと立ち上がる。

「そろそろお昼ね。どう、いろはちゃん。お腹空いてない?」

「え? え〜つと……」

「良い店があるの。一緒に行きましょう。奢るわよ」

「ええっ!? そんな……!」

自分には早急にやらなきゃいけないことがあるのだ。

別にいいですよ、と断ろうとした途端、お腹がキュルキュルと音を鳴らした。

そういえば、朝から考え事をしていて何も食べていない。

咄嗟にお腹を両腕で抱えるようにして抑えるいろはだが、ピーターには聞こえてし

まったらしい。不適な笑みを浮かべている。

「ここで会ったのも何かの縁、ゆっくりしていつて頂戴な」

「でも……」

「なくに、軽い女子会よ。取って喰いはしないから安心なさい。ね☆」

丁度、紹介したい人もいるしね——とピーターはパチン☆とウインクをする。

そういう問題じゃ———と思っただったが、ピーターは彼女の手を引き上げて、どこかへと導いていった。

☆

結局、空腹に負けてしまった。

一刻も早くやらなければならぬことがあるのに、なんて呑気なんだろうか———と、いろはは自分を心の中で自嘲したが、空きっ腹のままでは、満足な力が出せない。

魔女と出会ってしまえば、先の二の舞になるのは目に見えている。

なので、諦めるしか無かった。

現在、いろはとピーターはエレベーターに乗っている。

所内食堂に向かうのだろう、と思っていたが、到着先に設定されたのはあるうことか地下3階。神戸市役所は一般的な地方のそれよりも遥かに巨大な建造物であり、職員も倍は多く勤務しているため、地下2層に立体駐車場が設けられている聞いたが……それより更に下の層に食堂があるのだろうか？

「着いたわよ」

「っー」

ハッとするいろは。エレベーターの扉が開かれる。

その先に見えたのは、夜間のトンネルを彷彿させるような先が真っ黒で見えない通路だった。

（ええっ！）

目を丸くして胸中で驚きの声を挙げるいろは。本当にこの先に食堂があるのだろうか……。

心配になって、チラリとピーターに目線を送るが、彼はニコニコと人の良い笑みを返すだけだ。何か不純な目的がある様には見えない。

「さあ、行きましよう」

「あ、ちよつとっ！」

ピーターは慣れた様子で、スタスタと歩き始める。いろはも慌てて後を追った。「本当にこの先にあるんですか？」

「あるわよ。……それよりもいろはちゃん」

「？」

「貴女、どうして神浜にやってきたの？」

ピーターが問いかけた途端、いろはは若干顔を俯かせる。顔が複雑そうに歪み、曇り掛かった。

何か深い事情があるらしい——と、察したピーターは、目を細める。

「実は……小さいキュウベえを追って……」

「ふむ……」

「知ってるんですか？ あの、キュウベえの子供みたいな……」

「ええ、見たことはないけど……魔法少女達の間でウワサになってるわ」

小さいキュウベえと聞いて、ピーターには思い当たる節があった。

ここ最近の神浜市で数多く発生している怪奇現象の一つ——市内に出現するキュウベえが尽く小さく（幼く？）なっているのだ。

しかも、『モキユ』としか鳴かず、思考力は無いに等しい。警戒心も高く、魔法少女を



見るとすぐに逃げてしまう。

その性質は、普段のキュウベえとは全く正反対だそうだ。

元々そいつは、傲岸不遜でお喋りで、積極的に魔法少女と絡んでくる奴だと聞いていた。全く対照的な存在に変化してしまったのは、不可解だった。

「だけど……そんなのを見つけてどうするの？」

もしかしたら、この少女はその原因を知っているのかもしれない、と暗に期待を込めて問いかけるピーター。

「分かりません」

「……へ？」

だが、いろはの答えは全くの想定外だった。ピーターは目を点にして口をぼかんと開けてしまう。

「よく分かりませんが……あの小さなキュウベえを初めて見た時に思ったんです……っ！ 私の記憶と何か関係があるんじゃないかって……っ！」

いろはの音量はとても静かなものだったが、その言葉尻には強い決意が込められているように、ピーターには聞こえた。

「ふっむ……」

それを聞いて、顎に手を置き、虚空を見上げて考え込むピーター。

この少女を支援すれば、もしかしたら、怪奇現象の一つの原因を突き止められるかもしれない。だが……

(あの子は、なんていうかしら……)

「ピーターさん？」

目線を落とす。どこか消極的に見えるその表情を横目で見上げながら、いろはが心配そうに尋ねる。

「いえ、なんでもないわ……おっと、着いたようね」

ピーターが顔を戻す。二人の眼前には、木造りの扉が存在していた。

『MIRROR』（ミロワール）……？』

その前にある立て看板に白い文字で店名が書かれていた。いろはがじつと見ながら読み上げる。

「フランス語で『鏡』って意味よ。治安維持部の子もよく来るの」

「ちあんいじ……？」

ピーターの言葉に混じったある単語に、引つ掛かりを覚えるいろは。どこかで聞き覚えがある。

(ちあんいじって、『治安維持』のことだよね……？ ……!! まさか!!)

その時——いろはの頭に電流が、バチリと走る。衝撃と同時に、一気に思い出し

た。

神浜市が、どんな場所であるのかを――  
そして、守護者たる、『英雄』達のことを――

# FILE #02 その街の仕組み

☆

神戸市……………

いろはが現在居るこの街は、10年前に世界初の魔法少女保護特区として生まれ変わった。

保護特区とは言っても、魔法少女が隔離されているとか、外部との繋がりは一切無い、とかそういうものではない。

寧ろオープン。魔法少女と人は一緒に住んでおり、普通の都市と何ら変わりはない。ただ、この街に訪れた魔法少女は、市へ申請することで、『保護』の対象とされ——市内限定であるが——様々な高待遇を受けることができるのだ。

主な例を上げると、未成年でも正社員として企業に雇用されたり、一軒家の一人暮らしや、開業すらも何の成約を受けずに行うことができる。

だが、当然のことながら、保護対象となった魔法少女が、優越感を覚えて一般人に対

して横暴を振る舞うケースも少なくない。また、魔法少女が集う街では、必然的に魔法少女が集う確率も高まり、被害の増加も懸念されている。

——そこで、7年前に市役所内で発足されたのが、『治安維持部』だ。

これは所謂市役所管轄の独立警察組織であり、実行部隊は魔法少女で構成されている。

一般の犯罪事件を警察が担当するのに対して、治安維持部は、魔女の撃退、及び、魔法少女による犯罪事件を担当する。

その一期生であり、現在は実行部隊の総隊長にして、治安維持部の『部長』を務めているのが——七海やちよだ。

彼女は現役大学生の身でありながらも、個性的な魔法少女達を規律良くまとめ上げ、長きに渡って神浜市内の治安を護り抜いてきた『英雄』と称されている。

また、——いろいろはも、雑誌やTVで彼女の姿を確認したことがあるが——『女神』の如き美貌を持ち主で、熱狂的なファンも多いと聞く。

(いるんだ……。ここに、あの七海やちよさんが)

神浜市きつての有名人と自分が、今、同じ場所にいる。

そう思うと、興奮の感情が、身体中を熱してきた。心臓の鼓動が高まり、全身の血の循環を加速させる。

「いろはちゃん？」

ドキドキする胸を抑えていると、ピーターが怪訝そうな表情を向けてくる。ハツとなり、我に帰るいろは。

「あつ、ごめんなさい！ なんでもないんです」

「……入るわよ」

「あつ、はい」

いろはの仕草が少し気になった様子のピーターだが、『なんでもない』と言った事で、あまり重大な問題でも無いと判断したのだろうか。彼は顔を戻すと、扉のドアノブに手を掛けて、ガチャリ、と開ける。

堂々と店の中へ入っていくピーター。

その後ろをピツタリくつつくようにして、ゆっくりとした忍び足で、恐る恐る入っていくいろは。

「うわあ……！」

刹那——その光景に目を奪われて、うっとり感嘆を挙げてしまった。

まるで、劇場のホールの様な広大な空間。

こんな地下深くに存在しているだけでも驚きだが、それ以上に幻想的な洋装で彩られていて、いろはの視覚を刺激した。

マリンプルーで淡く照らされた薄暗い世界。

そして所々に設置されている見たこともないアーティスティックなオブジェが、生命を持つているかの様に宙空を漂っている。

例えるなら深海の底にいるかの様な幻想的世界。

眺めていると、頭の中で散々悩んでいた事柄が吹き飛んで、感動一色に染められていく。

「みたまちちゃんよお~~~~ツ!! 俺はなあ~~~~ツ!!」

「~~~~つ?!?!」

しかし、それも一瞬。

対極といえる程に不釣合いな酔っ払いのしゃがれた叫び声が響いていき、いろはは現実に戻されると同時にズッコケそうになる。

一体誰が——と、呆気に取られた顔のまま、聞こえてきた方向にバツと目を向けると、見えたのは二人の男女だ。

男性はカウンター前の丸椅子に、どっかりと座っており女性に対して何かを捲し立てている。女性は、カウンターの向こうでニコニコと人の良い笑みを浮かべて、黙っている。

「出会った時から……………アンタの事が好きだったんだ!!」

「……………」

いろはが見た男性の評価は、一言で表すなら、みずぼらしかった。

古ぼけた灰色の薄汚れたコートを羽織り、肩まで伸ばしたボサボサの白髪。皺まみれの顔つきで、お伽噺で見る仙人の様に、真っ白な髭が深々と伸ばされている。

風貌から伺える年齢は、60代半ばか70代直後と言ったところだろうか。明らかに浮浪者染みた老人が、若い女性に求愛する姿は、滑稽を通り越して異常という他なく、いろはは若干の戦慄を覚える。

「はいはい」

「今度の日曜日デートしてくれよ! なっ!?」

「……………どうせまた競馬場でしよう?」

先週2万負けたばかりじゃないですかあ、とニコニコと柔らかく微笑みながら遠



回しに拒絶する女性。

こちらは老人とは対象的に、幻想的な内装にぴったりな風貌の美女であった。

以前、TVで観た『七海やちよ』が透き通った氷と例えるなら、こちらは神秘的で可愛らしい水仙の様な印象があった。

「なあ頼むよお〜!! 付き合ってくれよお〜!!」

「昼間から飲み過ぎですよ。春<sup>ハルミチ</sup>径さん」

開いた花の様に愛らしい笑顔を向けているが、反面、酔っ払った勢いで求愛しまくる老人をあしらう声には、結構な冷たさが籠もっていた。

「おおっ、それもそうだな!」

「っ!」

春径と呼ばれた老人は、腕時計を確認すると、何かに気付いた様に後ろを振り向いた。

刹那、いろはと老人の視線が交わる——その眼から一筋の鋭い光が放たれた様に見える。いろはは瞬間的にビクリと震える。

だが、彼はフツと笑みを浮かべると、丸椅子から立ち上がった。

「そろそろ帰るが、返事は次に来たときでいいぜ……!」

みたまと呼んだ女性の方へ、僅かに横目を向けると、わざとらしく声をバリトンボイスにしてそう言う。

「じゃくくなあくくく!!」

そして、大声で別れの挨拶を告げると、手を大きく振りながら出入り口の方へと去っていく。

みたまは、相変わらずにこやかな笑みを向けながら手を小ぶりに振って見送った。

「……………」

いろはは、唾然とした様子で去っていく老人を眺めている。

——結局、何者だったのだろうか、あの人は。

やがて姿が見えなくなると、後ろで「はあくくく……………」と深い溜息が聞こえてきた。

振り向くと、みたまの上半身が、一切の力を失くしたかのように、カウンターの上で、ぐでえくつともたれていた。

「やつと帰ったあ……………」

ドロドロと暗いオーラを漂わせながら、みたまは心底疲れ切った様子で、呻く。

あの神秘的な雰囲気と、花の様な笑顔は演技だったのか——というははそう思っ  
てしまうぐらいに、彼女の様子は一変していた。

リアル20代女性の姿が、そこにはあった。

「あの爺さん、また来たのね」

そこで、いろはの隣で一部始終を眺めていたピーターが、みたまの方へと歩み寄る。

心配しているのかと思いきや、ニヤニヤと愉快な笑みを浮かべていて、明らかに楽しんでる様に見えた。

「悪い人じゃないんだけどねえ、はあ〜……」

ぐつたりとテーブルに突っ伏しながら、げんなりとした顔で呟くみたま。

「おつかれのところ悪いんだけど、『仕事』よ」

「っ!!」

ピーターがそう言った途端——みたまの様子が再び一変!!

シャキーンツ! と背筋を伸ばすと、いろはの姿を視認。先程の老人に向けたのと同じ満開の花の様なスマイルをばあつと向けてくる。

「いらっしや〜い♪」

(ええ〜……)

まさに変身! 神業の如き切り替えの速さに、いろはは驚きのあまり言葉を失う。これが大人の女性というものなのだろうか。

「お名前は?」

「あ、えつと」

「環いろはちゃんって言うの。新顔よ」

名乗ろうと思ったが、ピーターが紹介してくれたので、みたまに向かって、ペコリと

頭を下げるいろは。

「流石に市役所の地下にこんなお店があったらビックリしちゃうかしらねえ」

「あなたは……?」

「私は八雲みたま。市長からの命令で、このお店で勤めさせて頂いてます」

「店長をね。それに、『調整課』の課長も」

自己紹介するみたまだが、その内容に違和を受け取ったピーターがすかさず横槍を入れた。

刹那、彼女にムツと眉間に皺を寄せる。

「ちよつとピーター」

プンプンと頭上から湯気を吹かしつつ、怒りをぶつけるみたま。

なんだろう、顔立ちが良いせいで、あまり迫力を感じない……。

一方のピーターは全く意に介さず、フン、と得意気に笑っている。

「そつちの肩書で名乗ったら、私がオバサンだつて思われちゃうじゃないつ」

攻め立てるみたまだが、彼は、オホホホ、と楽しそうに笑うだけだ。

「せっかく17で通そうと思つたのに……」

腕を組み、頬をぷくりと膨らまして、プイツとそつぽを向くみたま。

「お酒を扱っていい17なんていやしないわよ」

「17……え？」

冷ややかに突っ込むピーターの隣で、いろははみたまの言った変なことにポカンとなっていた。

「みたまさんって、本当はおいくつなんですか？」

純粹というものは恐ろしい。

頭のとっぺんに？マークを付けた彼女は即座にピーターにそう尋ねてしまった。

「私と初めて出会ったのが15の頃だったから……今は」「それよりもピーター、その子  
を連れてきたってことは——『調整』でしょ？」

「まあ、そうね」

「ちようせい……？」

（よっしや！）

自分の言葉尻に付けた単語に、ピーターといろはは食らいついた。

さらに話を差し替える事に成功。心の中でガッツポーズを取るみたま。

「『調整』って、なんですか？」

「私よりは……」

ピーターに尋ねるいろはだが、ピーターは魔法少女でない自分よりも、彼女に教わった方が良く、みたまにアイコンタクトを送る。

みたまはコクリとうなずくと、

「『調整』っていうのはね、文字通り、魔法少女の魔力を調整するものよ」

満面の営業スマイルで説明を始めた。

☆

—— 神戸市内の魔法少女は千差万別だ。

武器、魔法は個々人によって異なっている。

武器は、剣・槍・弓矢・杖などオーソドックスなものから、大剣、ハンマー、銃、爆弾、デスサイズ、モーニングスター、グローブ、ヌンチャク、トンファー、刀、薙刀、笛、鉤爪、水晶玉、モ……etc etc 実に多岐に渡る。

魔法も、身体強化、変身能力、人体の治癒、物質の変化、時間操作、未来予知、幻覚、洗脳……と挙げれば、枚挙にいとまがない。

これらは、全て魔法少女の天敵である魔女と戦う為に、そして、犯罪を行う魔法少女を取り締まるのに必要な力ではあるが——一般人にとっては危険の対象となりかねない。何の力も無い彼らが、魔法少女の戦いに巻き込まれてしまえば、怪我どころでは済まなくなる。

よって、市内にいる魔法少女は、八雲みたまを始め、各役場に点在している『調整課』の魔法少女と会って、魔力の『調整』を施して貰わなければならない。

「これは、保護条例で義務付けられているのよお♪」

みたまは実に楽しそうだ。

彼女の説明は続く——

調整とは具体的にいえば、『魔法に判断力をもたせる』というものだ。

例えば、人体を損傷、あるいは殺傷能力を持つ武器や魔法を扱っていたとしよう。それを魔女と魔法少女か、一般人に振るつた場合——前者相手なら通常通りの威力を発揮するが、後者相手だと指でつついた程度に軽減される。

これによって、人々は魔法少女を『安全な存在』だと認知できるし、同時に、魔法少女側も気兼ねなく人々の暮らしに馴染める、というものだ。

「あつ、でも……」

黙して真剣に話を聞いていたいろはだったが、そこでハッと顔を上げる。

「私の家は市外ですし、用が済んだらすぐに帰るつもりですから……そこまでして頂かなくたって」

「ダメー！　そういう訳にはいかないのよ」

自身の武器や魔法によって、人が傷つかなくなる『調整』は確かに魅力的だ。だが、別に市内に居住する訳ではないし、何より自分にはやらなきゃいけないことがあるので、ここで多く時間を取ってはいられない。

そう思い、いろはは断ろうとするが、ピーターが割り込んできた。

「帰り道に魔女に襲われなくても限らないでしょ？」

「それなら、一人でもなんとか……」

「そういう問題じゃないのよ」

ピーターはフツと笑う。その笑みの意図が分からず首をかしげていると、みたまが割り込んできた。

「いろはちゃん。神戸市ではね、魔法少女は『調整』を受けた後に、『保護申請書』を届け出さないといけないの。でないと、市内に於いての、変身と魔法の使用は一切禁止だから♪」



「ええっ!!」

衝撃が走った。何せ、つい一時間前に、この街で魔法少女に変身して使い魔と戦ったばかりだ。

慌てて、ピーターの方を見ると、彼は微笑のまま、パチンツ☆とウインクした。

(もしかして——!!)

彼の意味深なその仕草が意図しているのは唯一つ——自分の条例違反を見逃してくれた、ということ以外に他ならない。

「も、もし……条例を破つてるところを誰かに見られたらどうなるんですか?」

「そうね……、貴女は訳アリそうだから、今回は容認したけど……もし、市民の誰かに見られて、通報されてたら、間違い無くアウトね」

「アウトっ!」

ピーター曰く、市内に住む魔法少女達は、全員、『調整』を受けた後に、市役所か各町役場で『保護申請』の手続きを申し込んでいるのだそうだ。

なお、登録済みの魔法少女は、神浜市公式HPで名前と顔写真が閲覧可能になっている。一部の市民団体からはプライバシー保護違反だと批判の的にされているが——

——これは実のところ仕方ない側面も有り、外部の魔法少女が悪意を持って市内に踏み込んでこないとも限らない。よって、市民全体に、神浜市内に住む魔法少女を認知しても

らう必要があるのだ。

治安維持部に所属する魔法少女達は、いずれも概ね優秀だが、万が一見逃してしまった場合は、市民の目を防衛策に据えるしかないのだ。

「でも、私、別に悪さしようって訳じゃ……」

「悪意の有る無し関わらず、『保護条約』に触れた魔法少女は、未成年でも成人と同等の刑事責任を要求されることになるのよ」

「けいじ……せきにん……?」

「『犯罪者が刑罰として負わなければならない責任』のことね」

犯罪者!?

——その単語にいろはの心臓が、ドキリと大きく弾みだす。

「銃砲刀剣類所持等取締法——早い話が銃刀法ね。その違反と同等の罰が課せられるのよ」

「変身だけで1年以上10年以下の懲役。魔法の使用は無期又は3年以上の有期懲役ねえ」

至って平然とした顔つきで淡々と説明するピーターとみたま。

「……!!」

いろはの背筋が凍りつく。顔からサーツと血の気が引いて、一気に青褪めていく。

刹那——頭にある光景が降って沸いた。

薄暗い牢屋の中で、作業服を着せられて、臭い飯を泣きながら食べる自分の姿を――

!!

「ただし、例外として『魔女の結界の中でなら』許可されているわ」

「そうしないと死んじやうものねえ」

(!!) ……なんだ、良かった……)

その言葉に、一時間前の自分の行動がギリギリセーフだったのを知って、ホッとするいろは。

……実のところ、結界に入る『前』に変身してしまったので、ギリギリアウトなのだが――使い魔に痛めつけられた場所が悪かったせいか、彼女はすっかり忘れていた。

「じゃあ、早速、施術室へ♪」

「ちよつと待って、その前にお昼ご飯でしょ？ いろはちゃん、何食べたいの？」

仕事に取り掛かろうとするみたまだが、ピーターが制する。彼はいろはの方を向いて尋ねた。

「えっ……!!？」

いきなり話を振られて、狼狽するいろは。

そういえば——この場所に来てからいろんな話を聞かされたせいで、すっかり忘れていた。自分達はそもそも食事を取りに此処に来たのだ。

みたまが立っている場所をよく見る。ドラマや映画なんかでたまに見かけるBARのカウンターテーブルそのものだが、メニュー表らしきものは見当たらない。ピーターの言葉から考えると、希望するものを作ってくれるのだろうか？

「じゃ、じゃあ……『和食』で」

気になりつつも、答えるいろは。

「へ？」

まさかの注文に、ぽかんと目を点にするピーター。そこで何を思ったのか、即座にみたまの真ん前へピヨンと飛びつくと、耳元に口を近づけて、小声で相談する。

「……以外ね。今は女子学生の間でも健康志向が流行っているのかしら……??」

「私に聞かれてもお……」

「あなた、設定上は17で通したいんでしょ？ その辺よくリサーチするときなさいよ。

でないとバラすわよ……っ！」

「それだけはやめてっ!!」

「??」

何やら妙に盛り上がってる二人に、怪訝な顔を浮かべるいろは。

ピーターは再びピョンと、いろはの隣へ飛びつくと、ニカツ☆と輝かしい笑みを魅せた。

「じゃあ、早速作ってくるから、そこに座って待ってなさいー！」

「あ、はい」

キッチン借りるわよ——とみたまに一言告げると、カウンターに入り、彼女の背後に入り口から調理場へと足を運ぶピーター。

言われるまま、カウンター前の丸イスに腰を下ろすいろは。

しかし——

「——つて、ええええ!?!」

驚きのあまり、ビックリ仰天の声を挙げた!!

「び、ピーターさんが料理するんですか……? その、みたまさんのお店なのに……!?!」

目を丸くしながら、カウンターのみにたまに訴えかける。彼女はニコニコしながら、「私、鼻は効くけど、味覚はてんでダメなのよお♪」

と笑顔で両手を合わせて身体を振って、そう言った。

「ええ………?!?!」

妙齢の女性らしからぬまさかの発言に、いろはは呆然となるしか無かった。

奥の調理場からは、ピーターの軽快な鼻歌が響いていた。

## FILE #03 心の奥底で沈んだものは

☆

やるべき事が増えてしまった。

そもそも神浜市に来たのは、『小さなキュウベえを捕まえる』というたった一つの目的しか無かった筈だ。

ところが、体力不足で『昼食』が必要になり……ソウルジェムの『調整』と、『保護申請書』の登録手続きが必要になり……いつの間にか、4つぐらいに増えているではないか。

——どうしてこうなった。

どこかで誰かが、そんな言葉をよく口にしていた気がするが……今の自分の心境とは正にそれだった。

「できたわよ」

「!! ありがとうございます」

考えている矢先に、ピーターがカウンターの奥の厨房から現れた。筋肉山盛りの大柄の巨軀に、少女さながらのハート柄のエプロンを掛けているせいで違和感が半端ない。

その両手にはお膳を携えており、いろはの前にそつと置いた。

(仕方ない、か……)

腹が減っては、戦ができぬ、と言うじやないか。

ならば、まずは、この『昼食』から済ませるとしよう。一つずつ、やれることから、こなししていくしかない。

いろはは、思考をそこで一旦リセットさせると、目線を下に向けて、お膳の内容を確認する。

お店さながらの定食御膳が、そこに有った。

16穀米のご飯に、ナメコとネギが入った味噌汁、焼き鮭、豚肉入りの野菜溜めに、大根の漬物……色とりどりの料理が並べられている。

特にこんがりとした表面に焦げ目が付いた鮭と、野菜炒めに掛けられた醤油ダレの匂いが鼻腔を刺激して、唾液腺を活性化させてくる。

「うわあ……!」

いろはが感嘆の声を挙げる。



自分もよく料理はするし、「和食」も作れるが、ここまで見事にはできない。それも10分という短時間で。

「ピーターさん、凄い……！」

ゴクリとツバを飲み込みながら、いろはが褒め称えると、ピーターがカウンター越しにフン、と微笑する。

「昔、花嫁修業してた時期があつてね、バイト先の料亭で女将からいろいろ叩き込んでもらったのよ」

「へ〜、はなよm………え？」

奇妙な単語が混じっていた気がするが空耳だろうか？

——いや、きっとそうだろう。確認しない方が良い。絶対に。

「隣、失礼するわね」

困惑に目を泳がせていると、隣に圧迫感。

チラリと見ると、いつの間にか、ピーターが座っていた。彼の手元には、自分と同じ和食御膳が置かれている。

(……！)

真近で見る色黒の巨体は、インパクトが凄まじい。圧倒されて、いろはは思わず息を飲んだ。

座る丸椅子も、料理も、何もかもが小さく見える。

「それでは」

そんないろはの驚愕の視線を一切気にせず、ピーターは手を合わせる。

いろはも慌てて、それに倣った。

「いただきます」

バリトンとソプラノが綺麗に合わさった。

二人は、ご飯茶碗を左手に持ち、右手で掴んだ箸を、副菜に伸ばそうとするが――

「うふふふふ〜♪」

「っ!!」

いろは、箸で野菜炒めの人参を捉える寸前に――硬直ッ!

耳に聞こえてきたのは、不気味な鼻歌。そして、誰かに見られている様な感覚が、恐怖を齎した!

咄嗟にバツと顔を上げると、そこには――!!

「うふふふふ〜♪」

「あの、何してるんですか……?」

カウンターから上半身を乗り出して、自分を見下ろすみたまがいるではないか！ それも、心底嬉しそうに、ニコニコと笑みを携えて！

——呆気に取られつつも、おそろおそろ尋ねるいろは。

「私ねえ、女の子が食べるところを見るのがあ、けっこー好きなのよお〜♪」

「は、はあ……」

「……だったら鏡でも見て一人で食べてなさいよ。食べづらいつたらありやしない」

慄くいろはの隣で、ピーターが冷ややかにツツコミを入れると、みたまはジト目で睨み返す。

「あなたは眼中に無いわよ」

「! ……そういえば、みたまさんのお昼は?」

職員のピーターが此処で昼食を取っているのだから、当然みたまも、食事休憩の筈だろう。

そう思つて、尋ねてみると——みたまは「よくぞ聞いてくれましたあ!」と得意気な笑みを浮かべて、あるものをカウンター裏から取り出した。

「私のお昼はこれよお!」

ドンッ! と鈍重な音を立てて、カウンターに置かれたのは、ジョッキ大のグラス

だった。白いドロドロとした液体が一杯に入っている。

目を丸くするいろはだが、

「これって……スムージーですか？」

バナナに似た甘ったるい匂いが鼻をくすぐってきて、もしやと思った。

尋ねると、みたまの笑顔が一層光り輝く。

「ご明察。名付けて『みたまスペシャル』！ 午後に消費するカロリー量と栄養素を緻密に計算して作り上げたオリジナルスムージーよ！」

「料理はてんでダメなのに、それを作るのだけはほんつと天才的よねえ……」

「えっ、でも私達と一緒に飯じやないんですか？ ちゃんと食べないと、力が……」

自分とピーターは和食なのに、彼女は飲み物一杯だけ。

カロリーを計算していると云ったが、それだけで、午後をもたせるつもりだろうか。

働く人というのは、概ね大変だ。

自分の父親は、昼の12時にお弁当を食べて、それから夜の19時〜21時まで何も食べずに仕事をする事だってある。

毎日多忙を極める父親を見てきたからこそ、いろははみたまの身体のことを心配になつた。

しかし――

〈……いろはちゃん〉

隣のピーターが小声で話しかけてくる。

〈こいつね、味覚がダメなのよ〉

「あ……っ!!」

そういえばみたまが先程自分で言っていたのを思い出した。申し訳ない感情が瞬時に沸いてくる。

「ご、ごめんなさい!!」

咄嗟に、頭を下げて謝るいろはだったが、みたまはなんてことない、という風に笑っていた。

「いいのよ。もう慣れたから」

「……」

そう言つて首を小さく振るみたま。

相変わらず屈託の無い笑顔だったが——その水面の様な瞳の奥で、僅かに寂しそうな色が浮かんでいるのを、いろはは見逃さなかつた。

(みたまさん……)

いろはは直感する。辛い過去が有つたに違いない。

自分が想像すらできない、壮絶な過去が。

でも、彼女は受け入れて、乗り越えている。  
だからこそ、今の彼女は、笑っていられる。

(みたまさんって……)

—— 凄くカッコいい人なのかもしれない。

彼女の笑顔が、なんだか眩しく見えて、そう思った矢先だった。

グビグビグビグビグビグビグビグビグビグビ……

「プツハア—— ツ!!!」

幻想とは脆く儂いものである。

理想とは呆気なく打ち碎かれるものである。

腰に手を当てて、スムーズを一気飲みする姿は—— 正に中年オヤジさながらであつた。

(あ——……)

いろはが、彼女への憧憬を即座に脳の隅に追いやったのは言うまでもない……。

## ☆

—— 昼食を終えて一休みした三人が次に向かった先は、『施術室』と呼ばれるところであった。

部屋自体は、先程の広大な空間と比べると、かなり小さい。

シングルベッドと、脇に——みたまが施術中に座るのだろう——丸椅子が置かれているだけの簡素な部屋を、天井のライトが青白く照らしている。

「ここが施術室よお♪」

そう言つて準備するみたまは、実に愉しそうだ。鼻歌まで歌つて、そんなに仕事が好きなんだらうか。

「あの、『調整』つて、どうやるんですか？」

いろはの脳裏には、かなり前に、ある魔法少女が言っていた事が浮かんでいた。

—— 「魔法少女の『魔力』は全身に漲っている」と。

なので、もしかしたら身体中を弄られるんじゃないか、という不安が強かった。

「大したことじゃないわ。ソウルジエムをちょこつといじるだけよ」

「あ、それだけなんですわね」

ピーターの説明にホッと安堵の息を吐くいろは。

「じゃあ、ソウルジェムを出して」

準備を終えたらしいみただが、いろはに指示を出す。

「あ、はい」

いろはは、右手を伸ばすと、人差し指に付けられた銀の輪が桃色に発光。卵の形をした小さな寶石に、変化する。

「そして……服を脱ぎます」

「えっ」

まさかの要求に目を丸くするいろは。

「!! やっぱり、身体を触る必要があるんだ……!」

恥ずかしさで顔を紅潮させるいろは。だが、それは予想していた事。何より、この試練(?)を乗り越えなければ、自分の目的は果たせない。

「わかりました……!」

いろはの覚悟は決まった! 意を決した表情で上着の裾に両手を掛ける!

「ストリップ」

——が、ピーターが咄嗟に静止。危ない領域に踏み込むのを寸手で阻止できた。



「何市長のお膝元で、堂々とセクハラやらかそうとしてんのよアンタは？」

「うふふ〜♪」

そして、じつとみたまを睨みつけて叱るが、彼女は全く悪びれる様子も無く……寧ろイタズラが成功した子供の様に、無邪気に笑っていた。

「あの、どういうことですか？」

みたまがみたまなら、いろはもいろはであった。

なんの疑いも抱かなかつたのだろう。

全く理解できてない様子で、頭に疑問符を浮かべながら、純度100%の澄んだ瞳を向けてくるいろはの今後が、心配になった。

(この子……悪いやつに騙されやしないかしら?)

ピーターはハア、と溜息を付くと、片膝を付いているはと目線を合わせる。そして、両肩をぐつと掴んだ。

「落ち着いて考えなさい……服を脱ぐ必要、ある？」

「えっ……あー！」

ピーターの言ったことを理解するのに数秒掛かった。

——— そうだ、彼が言ってたじゃないか。「ソウルジエムをちよこつといじるだけ」  
だつて。

ようやくそこで、まんまと騙されたことを悟ったいろはは、頬を膨らまして、みたまをキッと睨みつける。

「ふふ、嘘でした☆」

しかし、整った顔立ちのせいで迫力は無きに等しい。みたまには全く通用せず、笑顔を返された。

「前に本当に裸になった子がいてね……後でその子の親御さんが役所にクレームを訴えて大変なことになったんだから」

ピーターの弱々しい声。

振り向くと、頭がガツクリとうなだれていた。心無しか、ドロドロと暗いオーラが漂っている様に見える。

「すごかったのよ……。マジで……。『家の娘の身体に何をした!? 児童性的虐待で告訴するぞ!!』って責め立てられて、納得して頂くのに5時間は掛かったわ。当然その間は、他の業務が滞っちゃってね……。翌朝まで残業するハメになったんだから……っ！」

ピーターの言葉が次第に震えだす。よっぽど辛い状況に立たされたのだろう。彼は太い腕で両眼を覆うと、オイオイと泣き始める。

「ああ、あの時は大変だったわねえ……。首が飛ぶかと思ったわ」

「もしもし？ 対応したのは私よ。貴女はクレーム処理を押し付けてとつと帰つたでしよう」

やれやれと言つて溜息を付くみたまただったが、ピーターが泣くのを止めて、すかさず睨みつけた。

「まあ、過去の話は置いてくとして……施術を始めましょうか」

「置かないでよ」

「まあまあ……」

涙目で目蓋を赤く腫らしたピーターをいろはが宥める。

そして、みたまはいろはにベッドで横になり、ソウルジエムを胸の上に置くよう促した。

ピーターは何もツツコまなかつたので、今度こそ真面目にやるつもりらしい。言われた通りにするいろは。

「じゃあ、始めるわよ……」

みたまは微笑を浮かべるが、その瞳は細められて真剣な色合いが映り込んでいた。

やがて、彼女の細い指先が、いろはのソウルジエムに、そつと触れる。

——そうリラックスして、深呼吸ー。

—— ゆったりい身を任せて……大地に沈んでいく……。

—— しずかに——……しずかに——……。

—— 力を抜いてえ……もう少し……ふか——く……。

みたまの声が段々遠のいていく。

視界が薄くボヤけていく。

そして—— 全てが、黒に染められた。

☆

——ああ、まただ。

目に見えたのは、いつも夢で見る世界。

林檎の甘酸っぱい匂いがどこからともなく漂っていて、『あの子』が優しく迎えてくれる。

でも、今回は少し違った。

病室にある三台のベッドには、いつものあの子の他に、もう二人の女の子が存在していた。

「アドルフ・ヒトラーはね」

最初に口を開いた女の子の声を聞いた時、いろははアツと口を声をあげそうになった。

長い茶髪に、ころころ変わる表情。一度聞くとずっと耳に残るぐらいの凄く特徴的な声色をする彼女を、良く知っていた。

「官使であった父親を脳溢血で亡くして、父が残してくれた少ない遺産を母の看病に費やしたの。やがて、母も亡くなり、私産も底を付きたヒトラーは、孤児年金だけじゃあ到底生きていくことができなくて、日々一切れのパンを得るのに必死だったそうよ」

——政治家になるまで、地を這って泥を嚙るような努力を重ねてきたの、立派よね。

そう付け加えて、虚空を見上げる少女の目は、キラキラと羨望の光が瞬いていた。「それは嘘っぱちだよ」

が、ピシヤリと上から叩く様な指摘が入った。

声の方へと目を向ける。茶髪の少女の対面側のベッドに、赤いフレームのメガネを掛けた同じ年ぐらいの女の子が上半身を起こしていた。

どこか機械のように無機質な声色をする彼女のこと、いろはは良く知っていた。

「ヒトラーは父親の孤児年金と遺産収入で当時の大学卒よりも良い暮らしをしていた事が明らかになっている。1908年2月にヴィーンへ来てからは、確かに浮浪者収容所や、独身者合宿所に住んでいたこともあったが、日々の暮らしは贅沢三昧だったそうだ。嵩む食費と趣味の劇場通いで次第に生活が困窮していったときえ言われている」

彼女は茶髪の少女とは対照的に、慥然としたまま淡々と解説すると、最後に目を細めてこう締めくくった。

「青年時代の彼は、とんだ自堕落者だ。親の仕送りや、生活保護頼りのニートと同義だよ」

彼女のぶつきらばうな物言いに、ムスツと顔を顰める茶髪の少女。

「どうしてそう思うの？ 本人が自著で言っているじゃない」

「第三者の目線で明らかになっている方が事実さ。主観混じりの人生なんて、信用に値

しない」

僅かに語気を荒げて訴えるも、メガネの少女は冷徹さを崩さない。

「私は、本人が自分で、伝えてることが真実だと思うけどな。ねむのいう第三者なんて、どうせナチス政権崩壊後に、ドイツを分断占領した連合国軍が広めた中傷でしょうに」  
茶髪の少女はそう言つて睨みつける。

——二人の視線が激しくぶつかり合い、宙空でバチバチと火花が弾けた。

(この二人は——)

そんな二人の一部始終のやりとりを眺めながら、いろはは二人のことを思い出していた。

——まず、一人目の、茶髪の少女の名は『さとみとうか里見灯花』。

母親は科学者、父親は東京の有名大学で教授をしているらしく、その血を受け継いだ本人も、相当に頭が良かった。曰く、幼い頃に行ったIQテストで「200」もの数値を叩き出し、講師達を唖然とさせてやった、と豪語していた。

——確か、彼女は、自分の事を『エゴイストエゴイスト』だつて言つてたっけ。

自分の事が極端に好きであり、自分の言うことは一切間違つていないという。だから、自分の発言の理論立ては一切妥協しなかつたし、他の人が意見を挟むのを決して許そうとはしなかつた。

——もう一人の赤いフレームのメガネの少女の名は『柊ねむ』。

母親は小説家、父親は生物学者をしている彼女もまた、灯火に匹敵する知性の持ち主だった。小説を書くのが好きで、小学校低学年の頃から、趣味半分で書いた物語をネット上で投稿していたのだという。

7歳の頃に書いたという処女作を読ませてもらったところ、難解な文章塗れで何か書いてあるのかサツパリだったが、サイトのランキングでは一位を象徴する黄金の冠マークがキラキラと輝いていたのは、はつきりと思いつける。

彼女は自分の事を『ラシヨナリスト』と自負していた。

(聞き覚えのない言葉だったので、本人に確認した所、『合理的主義者』という意味らしい)

高すぎる夢や理想を望まず、今現在の自分の能力、周囲の環境、人間関係を熟慮し、その全てを用いて勝ち取れそうなものが有れば、挑戦するという思考で、冷徹に物事を判断する姿勢は、一般的な女の子からは掛け離れていた。

確か、この時読み合っていたのはアドルフ・ヒトラーの『我が闘争』——自分は彼のこともその書物のことも全く知らないが——だったか。

二人は、偉人や著名人の書物を読み回して口々に感想を言い合っていた。

そこで、お互いの考え方の違いや価値観、信念が垣間見れるのが面白かった。特に『自



伝』を読んだ時は、棘でチクチクと相手の神経をつつき合つてゐるな、と思つてたら——いつの間にか、ズバズバと相手を斬りつけ合う口論に発展していた。

灯花は『著者が自分の目で見て、耳で聞いて、身体で経験したことなのだから信憑性がある』と主張すれば、ねむは『近い者や後世の人間による客観的な評価こそ真実だ』と意見して、ぶつかり合った。

(あの子と、同じ病室に居たんだつけ——)

二人もまた、なんらかの重い病気を患つており、一日の大半を病室で送るしか無かつた。『あの子』と同じだ。

(そうだ、あの子は——)

振り向く。あの子は、ベッドの上で上半身だけ起こして、何かを読んでいる。

表紙を遠目で伺うと、『我が闘争』と書かれていた。恐らく、あの二人のいずれかに回されてきたのだろう。

『あの子』は二人と違つて普通だった。本の内容は難しいのだろう、眉間に皺を寄せ、一文一文睨みつけている様に凝視していて、「ムムムム……」と唸り声を漏らしていた。

そんな姿を眺めていると、自然と顔が綻んだ。今の自分は、とてもニコニコしているに違いない。

それもそうだ。未だ、口から火や雷を吹きつつ争っている灯花とねむと比べると、なんだか微笑ましくって——

(!! そうだ、名前——!!)

そこでいろははハッと、顔を上げた。

灯花とねむのことだって思い出した。この子の事だって、今度こそ思い出せるかもしれない！

いろはの足は自然と動いた。駆け足で、ベッドの下へと——

誰かに腕を、グツと掴まれた。

——瞬間、世界が様相を一変させる。

「っ!!」

そこが病院の通路だと、いろはが理解したのは——直後のことだった。

白いコンクリートによって一切の光が遮られた無機質で薄暗い通路は、先の「あの子達がいいた」病室と同じ建物の中にあるとは信じ難いぐらい、別世界に感じた。

前方に目を向けると、無限の闇が広がっている。

一度足を踏み入れたら、二度と抜け出さえない——直感でそう思ってしまうぐらいの、濁りの無い、深い漆黒。

だが、いろはは怖じけ付く事無く、一步を踏み出した。

あの闇の中から、心配がする。『あの子』と、灯花とねむがいる。そして、僅かに……林檎の匂いが漂っている。

間違いない、と確信した。三人がいる病室は、すぐ近くにある。

——急いで戻らないと。私は今度こそ、あの子に聞かなかいけけない。

もう片方の足にグツと力を込めると、飛び出すように駆け出した。漆黒の闇の先に、光り輝く世界があると信じて。

しかし——

「ツッ！」

上腕部に生じた痛みに、いろはが呻いた。

——さつきと同じだ。誰かが自分を止めようとしている。

駆け出した後に後ろに振った右腕が、ゴツゴツとした大きな手で強く握り締められて

いる。

苦痛で顔が歪むが、いろはは堪えながらも、その人物の顔を確認するべく、バツと後ろを振り向き、

「——!?!」

硬直した。白衣を纏った男性が、佇んでいた。

伸び切った前髪が顔の上半分を覆っており、表情は何えない。

しかし、両顎をキツく噛み締めており、零れ出る荒い息づかいが、鬼気迫る迫力を感じさせた。

(誰なの、この人——!?!)

一つの困惑が、頭の中に垂らされた。それは、思考の海を荒々しい波濤へと急変させて頭蓋を内側から叩きつけてくる。

この病院の医者せんせいだろうか。でも、見たことも無い人だった。

……………いや——灯花とねむのこともすっかり忘れていたのだ。

もしかしたら、彼も以前お世話になっていながら、忘れているのかもしれない。

荒れ狂う思考の海の中で、必死に記憶を探ろうとするが——残念ながら、彼に関する記憶是一片も見当たらなかった。

自分を握りしめる彼の手は、熱が籠もっている。

そして、全身から発せられる必死な感情——彼が自分の事を知っているのは明らかだったし、何としても自分を止めなければならぬ事情が有るように感じた。

「環、いろは」

開かれた彼の口から、自分の名前が呟かれて、目を丸くした。慌てて言葉を返そうと口を開く。

「あなたは、何をしているんだ」

あなたは、誰?——と、彼に問おうとした、その矢先だった。彼の怒りに満ちた声が、耳に突き刺さる。

「なんで、そつちに行こうとする?」

嵐で荒みきった波の様に声を大きく震わせながら、訴えてくる。

困惑、憤怒、嫉妬、悲嘆——全ての負の激情が複雑に混じり合って形成された言

葉の剣が、胸に突き立てられた。

だが、いろはは怯まない。

—— 灯花とねむのことを思い出せたのだから、あの子の事だつて……！

どうして彼は邪魔をするんだらう。自分の欲しいものが直ぐ近くにあるのに。その為、自分はここまでできたのに！

頭の中で荒れていた思考の水面が、収まった。同時に、沸々と滾つてきて、頭頂部が熱くなる。キツと眉間にしわを寄せて、目を鋭くする。質問の答えでは無く、怒りの形相を彼に返してやった。

「離してよっ！」

力任せに大きく腕を振るうと、彼の手が祓われた。

彼の顔に浮かぶ複雑な感情に、僅かな驚きが混じった。

「どうして、止めるの!? あの向こうに、大事な場所があるのに……！」

彼はどこか呆気にと取られた様子で、黙して聞いていた。

「灯花ちゃんと、ねむちゃんと、『あの子』が、私を待つてるのに……！」

しかし、そこまで叫ぶと、反応が見られた。

自分を止めようと伸ばされていた腕が、力を失ったかのようにガクリと垂れる。

表情は歪ませたままであったが、そこから伺える感情は一つに整理されているように

見えた。

「あなたは、こつちへ来るんだ」

深い悲しみで顔を青く照らしながら——彼は、静かに言う。

ゆつたりとした動作で再び手を上げると、いろはを手招きする。

「三人が待つてるんだよ! 私求めているものがあそこにあるのに……どうして……!？」

彼は間違い無く、自分に対して特別な思いを抱いている。しかし、自分はその場所へ戻りたい。どうしても、取り戻さなきゃいけないものが、あるから——!!

そう思つて彼を睨みつけた瞬間だった。

彼の顔が、鬼の形相と化す。

「そこはあなたが居ていい場所じゃないからだよッ!!」

鼓膜を貫かんばかりの激昂が、巨大な杭となつて、いろはの全身をその場に打ち付けた。

「——っ!?!」

身体がビクリと震えて、固まる。

頭の中で再び思考の海が荒れ狂い始めた。波状する混乱は、彼の顔を見ていると余計に強まった。

前髪の隙間から僅かに赤い光が瞬いている。よく見ると、その奥を、彼の瞳が確認できた。

ずっと働き続けて、何日も睡眠を取っていない様な、疲れ切った目は、すっかり乾ききつて、充血を起こしていた。

——何かを諦めたけど、それでも強く求めている様な、複雑な情熱が籠もる瞳が、痛烈に心を射抜いてきた。

「……………じゃあ」

暫し沈黙して、白衣の男と静かに睨み合ういろはだったが——静寂を破るように自分から口を開いた。

「あそこは、私にとつての何だっというの?」

恐らく彼は知っている。

あそこが——いつも夢で見るあの眩しくて、優しく、甘い世界が、自分にとつて何か意味を持つ場所であることを、よく知っている。



真実を知らなければ。自分が前に進むためにはそうしなければ——!!  
焼け付くように痛む胸を抑えながら問いかけると、彼は紅い目で強く凝視したまま、  
こう言った。

「『闇』だ」

「えっ……?」

思考の海が、液体窒素を豪快に流し込まれた様に、ピタリと冷えて固まった。

——刹那、後ろで気配。

だけれが、スタスタと、軽い靴音を響かせて近寄ってくる。

林檎の匂いが鼻腔を刺激して、いろはは直感した。

——『あの子』が、迎えに来てくれた。

その時感じたのは、喜びだったのか、それとも困惑だったのか……頭が混乱している  
せいで、判別が付かなかった。

ただ、この時、反射的に後ろへ振り向いていた。

思った通り、数歩ぐらい先に、病室で見たのと寸分違わぬ姿の『あの子』が居た。

パジャマ服に腰まである桃色のふんわりとした質感の髪をフワフワと揺らし、腕に刺

しままれた点滴棒を押しして、ゆっくりと近寄ってくる。

後ろで白衣の男が、必死に何かを訴えているが、もう何を喋っているのか理解できなくなった。

「——ちゃん」

自分が駆け寄るよりも早く、あの子は一步先まで近づくと、自分の名前を呼んだ。

——ああ、終わりが告げられる。

緊張と興奮で、すっかり苦くなつた唾液をゴクリと飲み込む。

結局、この子の名前を聞くことはできなかった。

後ろの男が邪魔さえしなければ、自分は一番大事なものを思い出せたかもしれないなかつたのに。

「私はね」

穏やかに言葉が紡がれている。これ以上は何を言っても無駄だと分かりきっていた。だから、黙って待つことにする。

最後に、この子の顔をしかと目に焼き付けようと、じつと見つめた。

——しかし、場所が薄暗い通路だったせいか、彼女の首から上は、漆黒に覆われてしまつて、表情が確認できなかつた。

「“死神”と会う約束があるの」

視界が徐々に暗転していく。まるで闇に飲まれていくかのような、不思議な感覚。

——でも、多分、あの子は笑って言ったのだろう。そうに違いない。

☆

——三十分後。

いろはの魔力の『調整』は、無事に完了した。

目を覚ました彼女が次に向かうべくは、役所の2階にある治安維持部。そこの受付

で、魔法少女であることを証明し、保護申請書を記入して、登録手続きを申し込まなければならぬ。

よつて、一息付く間も無かった。彼女はみたまに、別れの挨拶を告げると、足早に『MIRRIOR』から去っていく。みたまは笑顔で手を振って見送ってくれた。

「じゃ、私もそろそろ行くわね」

治安維持部の職員は魔法少女で無くっても、癖が強い者が多い。みたま相手にあれだけ手古摺っていたのだから、間違い無く足止めされるであろうことは目に見えている。

更に、施術中に失礼だと思いつながらも、彼女の手荷物を確認させてもらったが……案の定だ。

手続きに必要な、重大な書類が、欠けている。

（あの子が、この街で起きている怪奇現象の原因を究明してくれるかもしれない。ここで、足を止めてもらったら、困るのよ……!）

目を鋭くしながら、ピーターは思考を巡らす。事務手続きはスムーズに行ってもらおう。その為の知略を張り巡らす。

無垢な少女を利用するなんて、なんとまあ意地汚い大人になったものか——と、ピーターは自嘲する様にフツと笑った。

しかし、だ。自分は本来、市の治安を守る職員である。仕方の無いことだ。その為な

らあらゆる手を尽くさなければならなかった。

「いつてらっしや〜い」

振り向くと、みたまがいろはに向けたのと同じく、眩しい笑顔で見送ってくれた。ピーターも手を振って返す。

——瞬間、みたまの身体が、ガクリと崩れ落ちた。

「みたまっ!？」

驚愕するのと同時に、ピーターが駆け寄った。慌てて彼女の身体を抱き起こそうとする。

背中を触ってギョツとした。大量の発汗でビツシヨリと濡れている。

「……………! ……あの……………子……………は……………!」

みたまの目が震えている。

上手く呼吸ができないのか、パクパクと口を動かしながら、言葉にならない声を発していた。

「……………無理して話さなくていいわ。あの子の何を見たのか、それだけ教えて頂戴っ」

みたまの能力——魔法少女のソウルジェムに触れると、その人間の過去が垣間見

れる。

恐ろしい物を見たのだと、彼女の形相が必死に訴えていた。故に、余計な説明は不要。重要な部分をできるだけ簡潔に伝える様にピーターは促した。

怯懦一色に染まりながらも、しかと、ピーターの目を見て、彼女は懸命に伝える。

「深淵」

彼女が、ポツリと、消え入りそうにつぶやいたその一言に——ピーターは言葉を失った。

呆然と、みたまの顔を見つめている。だが、みたまは目を逸らす様に首を動かした。視線を向けたのは、ある一点。

「環、いろは……。あなたは、一体、何者なの……？」

言葉の中の存在が、出ていった入り口をじっと見つめるその表情は——複雑に歪んでいた。



FILE #04 覚悟は、あるか? —七海やちよ

編—

——エレベーターは静かな機械音を立てて上を目指していく。

先程の慌ただしさが嘘の様に、小さな白い縦長の空間は静寂に満ちていた。

やはり、一人の方が落ち着ける。一人の方が色んな事に熟考できる。

(でも、楽しかったな……)

ピーターとみたま、この街で最初に出会い、自分に優しく接してくれた二人組。

一回り以上歳が離れているかもしれないのに、性格は子供のように無邪気なところがあつて……だからなのか、自分が大人になった気がして、凄く話し易かった。



あんなに喋ったのは久しぶりだと思う。

(ねむちゃん、灯花ちゃんと、『あの子』が居た頃は……もつとよく喋ってたんだっけ)  
ふと、思い出すいろは。

それがいつかは、はつきりと思い出せない。

でも、あの3人が近くに居た頃は、正に光溢れる輝かしい日々だったと記憶している。

(でも——)

いろはは顔を俯かせる。

今、現在、あの3人はどうなってしまったのか、分からない。

退院したのだろうか。いや、確か……あんな小さな体では到底背負えそうにない重い病気を患っていた筈だ。

最悪、死——

(ツ!!)

いろははそこで、ブンブンとかぶりを振る。今、自分は最低な事を考えようとした。  
3人の友達失格だ。

そんなことは、『小さなキュウベえ』を見つけないと分からない。

どうしてかは分からないが、アレを見た時、直感した。アレは自分に関わっていると。アレに触れれば欠けていたものが取り戻せると。

(だけど——)

調整課を出る前に、みたまが言っていた事が、気になる。

『私ね……ソウルジェムに触れると、その人の過去が、頭に流れ込んでくるの』

『勝手に見たのはごめんなさい……。でも、一つだけ、聞かせてもらえる?』

『貴女は、何を願ったの?』

(私の願い事って、何……?)

魔法少女がキュウベえと契約する時に叶えた願い事……みたまに言われてずっと引つかかっていた。

全く、思い出せない。ただ、凄く大事な事を願った気がする。自分では無く、誰かの為に——。

(!!)

そこまで考えて突然、ハッと顔を上げるいろは。

もしかしたら、あの3人の誰かの事かも。「病気を直して欲しい」って、願ったのかも  
しれない!

一番、有り得そうなのが、自分と一番距離が近い、『あの子』——!!

(でも、『あの子』が夢の最後にいつも言う……「死神」と会う約束」って何のこと?)  
しかし、不可解な言葉が引つかかった。

「死神」———ということは、あの子は死を望んでいたのか。自分はその願いを裏切ったのか。

(でも、生きたいって思うのは誰だって同じの筈……)

間違った願いでは無かった筈だ。

本当に、キュウベえにそう伝えて契約したのかどうかは、まだ、確証は持てないが。

(それに、あの白衣の男の人は誰? 病院の医者?)

そして、施術中に見た夢の内容を思い出す。あの3人が居た場所を彼は、「闇」と断定した。

(私の知り合い? 「闇」ってなんなの? 私の何を知ってるの?)

一度思い込み始めると段々ネガティブに染まっていく。それはまるで、深い底なし沼にズブズブと足元から吸い込まれていくかの様だ。

ピーター達と一緒にいた時は、そこまで考えなかったのに……。

(つつ! とにかく……!!)

暗澹とした気持ちを抱く様に、もう一度かぶりを振ると、フンスツ! と鼻息を蒸すいろは。

悩んだところで、解決しない。とにかく今は、やるべきことをやるだけ——！  
市役所2階で保護申請の手続きを済ませる。そうすれば、自分は神浜市内で自由に動  
ける。

(そうすれば！)

小さなキュウベえを探しに行ける！

魔女に襲われてから大分時間が経ってしまったが、まだ大丈夫だという確信があつた。自慢するつもりは無いが、自分の魔力感知能力は高い、と思っっている。

それが告げているのだ。キュウベえはまだ近くに居る。この市役所付近に——  
！

(よしっ！)

エレベータの扉が開く。

希望を胸に込めて、いろはは飛び出した——！！

☆

5分後——

「だ、ダメなんですか……?」

治安維持部の窓口で、呆然となる少女。

「ええ、申し訳ありませんが」

カウンター越しに相對しているのは、眼鏡を掛けた、如何にも生真面目でクールそうな雰囲気的女性職員。

「そ、そうですか……」

先程の勇姿はどこに行ってしまったのか。

希望の火が掻き消され、すっかり意気消沈した少女が、ガツクリと頭を項垂れていた。心なしか、ドロドロと黒いアトモスフィアが漂っている様に見える……。

「な、なんとかならないんですか……っ?!」

「保護条例で定められていますので、こればかりは」

それでも諦めきれずに、目尻に涙を溜めて必死に訴えるが、女性職員の応対は実に冷ややかだ。

——お役所仕事というものを、すっかり舐めていた自分が、忌々しい。

保護申請の手続きは、まず、魔法少女であることを受付で証明しなければならぬ。ソウルジェムが有るか、魔法少女に変身できるか——それはクリアした。

次に、『調整』を受けた証明書の提出。これも難なく、クリア。自分のサインとみたまの名字の印鑑が押されている書類を職員に提出した。

だが、最後で、しくじった。

『身分証明書』——いわば学生証の掲示を要求されたのだが、今日は生憎、「土曜日」である。

休みの日の外出に、そんなものを携帯している学生がいるのだろうか。いや……大半は自宅の自室の机に置いている事だろう。自分もそうだ。

更に——

「『身分証明書』と『住民票』が無ければ、保護登録は致しかねます」

(『住民票』って……)

極めて冷徹に言う女性職員の言葉に含まれたある単語に、いろはは目眩を覚えそうになった。

——身分証明書はまだいい。家に帰ればもって来れる。だが、住民票は違う。

(確か、自分の住んでる町の役場で、お金を払って貰わないといけないんだっけ?)

時間が掛かるし、結構面倒くさかったと記憶している。それをわざわざ作りに戻れ

ば、時間が掛かるのは必定。

もし、その間に、小さなキウウベえが何処かへ行ってしまったら——最悪、明日に持ち越さなくてははいけなくなる。

(神戸市つて凄い大きい街だと思うし……探しきれるのかな……?)

最悪のケースを考えてしまう。

先程、エレベーターから下りた直後、前方の壁に貼られたポスターには『神戸市、人口300万人突破!!』とデカデカと表記されていた。

それだけの人が住んでいるということは、つまり、土地も広大な筈だ。巨大な都会で、一匹の小動物を探すなんて困難を極める。一週間……いや、一ヶ月……一年……

(永遠に見つからなかったら……どうしよう……)

いろはの纏うアトモスフィアが漆黒に染まっていく。

この少女は、勝ち気そうな吊目と、人が良さそうな顔つきからあまり思われぬが、その実態は——内気で根暗な……典型的な草食系女子であった。

自分に自身が持てず、友達もいない。更に、一度ネガティブに思考が向かうと、とことん泥濘ぬかるみにハマっていく悪癖を持っていた。

——そんな彼女を、女性職員も流石に見かねた様子だ。

眼鏡をクイツと直すと、打って変わって温和な愛想笑いを浮かべてから、こう告げる。

「……もし、事情がお有りでしたら、治安維持部の方で承りますが」

「へっ」

まさに願っても無い申し出。

いろはは顔を上げる。女性職員は、スツと、一枚の紙を差し出した。

「こちらに要望をご記入して頂ければ、後で私の方から、部長の七海にお伝え致します」

七海と聞いて、ハツとなり顔を上げた。

暗い顔に、天井の光が差し込み明るく照らし出す。

七海やちよ——治安維持部の長であり、神浜で『英雄』と称される魔法少女が協力してくれるなんて、心強い!

「七海さ、じゃなくって……部長さんはいらっしやるんですか?」

期待を胸に込めて女性職員に問いかけるいろは。

「生憎、出張中にして……17時頃には戻られるかと」

「……えっ?」

17時〓PM5時。

即座に脳内変換したいろはの顔が、驚愕に染まる。

バツと首を、女性職員の後ろの壁に有る丸時計へと向ける。

現在の時刻は12:00。七海やちよがこちらに戻るまで——まだ5時間もあ



る。

(そんな……！)

いろはの顔が青褪めて、複雑に歪む。頭上のエアコンから暖房が吹いている筈なのに、悪寒が走って震えそうになる。

——諦めるしか無かった。

「……あの……出張から戻ったばかりの、部長さんに……申し訳、無いので……住民票、作って、また……もどり、ます……」

そうした方がまだ早い。いろはは、青褪めた顔のまま、消え入りそうな声でボソボソと女性職員に申し出る。

「……そうですか」

女性職員も何処か哀れみが含んだ目を向ける。

彼女に背を向けて、いろはは暗い気持ちで、真つ黒いオーラを全身に纏ったまま……頭をガツクシと項垂れ、煙の様な溜息を吐きながら、トボトボと去っていく——

「その必要はないわ」

瞬間だった——

鈴の音色の様に綺麗な声が、唐突に耳朶を叩いた。

「えっ?」

いつかテレビで聞いたことのある声と、よく似ていた。

いろはは、顔を上げる。

「七海部長っ!?!」

女性職員も、その姿を視認したらしい。いろはの後ろで声を張り上げる。

——目の前で歩み寄ってくるその人は、紛れも無く女性だった。

だが、普通とは明らかに隔絶していた。

誰もがその姿を見た瞬間に目を奪われるであろう、そう思ってしまうぐらいの美貌の持ち主だった。

白く細い手足、腰まである藍色の長髪は絹のようにサラサラと舞い、うつすらと化粧が施された相貌には、少女の様な幼さが残っていた。

反面、紺色のスーツとタイトスカートを身に付けて、スタスタと歩く姿は凜としており、彼女の内面に有る男性的な力強さを感じられた。

(七海、やちよさん……!!)

この人が、神戸市が誇る英雄。

テレビで広報活動をしているのを何度か観たことあるが、受けた印象としては——  
—見た目とは対照的に庶民的で、緊張もあるのだろう、しどろもどろに芸能人達と話し合う姿は、可愛気が有った。

だが、今此処にいる彼女は微塵も、そんな雰囲気は無い。正に、女神と呼ばれるに等しき神々しさを放っていた。天井の証明が、まるで後光の様に映える。

「部長！ お帰りなさいませっ！」

真横で声がしたので、振り向いたら——ギョツとした。

いつの間にか、受付の女性職員が自分の隣に立って、深々とお辞儀している。

「ただいま、白木さん」

七海やちよは、軽く会釈すると、慈母の様な柔らかい笑顔を女性職員へと向ける。

「しかし、部長、出張中の筈では？」

「予想以上に要件が早く終わりましたね。溜まつてた事務所類をいい加減片付けようかと思ひまして」

と、そこで、やちよはいろはへと目を向けた。

「……この子の様子から見るに、何かあったようですね?」

「……!!」

柔らかい笑みのまま、目を細めて見つめてくる。深い海色の瞳は、まるでサファイアの様に、溜息が出るほど美しくして——心拍数が自然と上がった。ドキドキと高鳴る胸を抑える。

「ええ、実は——」

白木と呼ばれた女性職員は、やちよの隣に立つと、耳元に口を寄せて、かくかくじかじかと伝える。

「それなら、話が早いわ……」

事情を飲み込んだやちよはフツと笑うと、そう独りごちた。

「え?」

その微笑の意図が読めず、きよとんと首を傾げる白木を尻目に、やちよはいろはの眼前へと歩み寄る。

「……『治安維持部長発言令』を行使します」

「!!」

「えっ? えっ?」

やちよがそうはつきりと宣言した瞬間——白木の顔が、ギョツと驚きに染まる。

何が何だか分からず、困惑するいろは。

「環いろはさん、と言いましたね。私の権限で、貴女を『仮登録』と致します」

その一言に、いろはが驚いて目を丸くする。

「今から24時間——翌日の午後12時10分まで貴女は保護の対象となります。市内で自由に魔法少女として活動することを許可します」

つまり、時間限定ではあるが、神浜では自由の身——！

それを理解したいろはの顔が、驚きから、歓喜の色に、パアツと明るく染まっていく。

「ぱぱぱ、部長！」

そこで、白木が慌てて割り込んできた。やちよの両肩をガシツと掴んで詰め寄る。

『治安維持部長発言令』は市長から、緊急性のある案件で無いといけないって仰せつかった筈じゃ……！」

「目の前で困っている魔法少女が居る。これも十分、緊急性のあるものです」

「しかし——」

納得いかずに顔を顰める白木は、再びやちよの耳元に口を寄せて、ボソボソと語る。

（この子が、反社会的組織のスパイの可能性もありますよ……！）

いろはを横目でチラチラ見る白木。

（それは、ありません）

やちよは小声でそう断じると、いろはの方を見つめる。

『何を話してるのかなあ?』と聞きたげに頭上にハテナマークをポコポコと浮かべて、小首を傾げる女の子。純粹無垢な桃色の瞳で、二人を見つめている。

(この子から悪意の類は感じられない。私の「勘」がそう告げています)

(しかし……『部長発言令』をそんな簡単に行使されては、貴女の威信と沽券に)

(もしこの子が、何かを起こしたら……私が責任を持って対処します。それで、宜しいですか?)

関わりますよ! と訴えようとしたが、迷い無き言葉にピシヤリと遮られた。

その刹那——やちよの瞳から蒼い光が瞬き、白木はウツと息を飲む。

絶対零度の眼光。まるで百戦錬磨の狩人が、獲物の猛獣を遠くから狙撃する際に、息を殺しながら見せる、凍てついた瞳。

一般人である白木をその場で震えさせ、硬直させるには十分だった。

「それでは環さん、貴女が早急に保護申請をしなければならぬ理由をお聞かせ願いたいのですが?」

ピシツと凍りついた白木はほつとくとして、やちよはいろはに温和な笑みを見せながら、問いかける。

「実は、小さなキュウベえを追ってまして……確か、ピーターさ、レイモンドさんも知っ

てると思うんですが……」

同じ職員であるピーターも知ってることだから、恐らくやちよも知ってるに違いはない。彼の名前を出せば何かしら反応を示す、と思った。

やちよは、「ふむ……」と顎に手を当てて、僅かに視線を下に向けて、考え込む仕草を見せると、

「それなら、心当たりがあります」

そう、顔を上げた。

「本当ですか！」

「もし、宜しければ……私も一緒に搜索を協力願いたいのですが」

「っ!!」

いろはの顔が歓喜に染まる。暗雲に覆われて冷たくなった心に、陽の光が差し込んで温まっていく。

断る理由はない。一人より二人の方が良いに決まってる。まして彼女は、治安維持部長、神浜の地理は詳しいだろうし、大いに助けになってくれる！

「お願いします!!」

いろはの決断は早かった。90度深くとお辞儀して、歓喜混じりの声色で要請する。

やちよはコクリと頷いて承諾。

二人は、並んでエレベータへ向かっていくと——二階から離れた。

☆

エレベータに乗った二人が向かった先は一階ではなく、何故か屋上であった。

先をスタスタと足早に歩くやちよの後ろを、いろはは慌ててついていく。

20階もある高層物の頂上から眺める、神戸市の街並みは盛観の一言だが、今は悠長に観賞している暇は無いはずだ。

怪訝な表情で、やちよを見つめるいろは。対するやちよは、屋上の中心部まで歩くと、そこで足を止めた。

くるりと振り向き、2mぐらい後ろに立ついろはと、真正面から向き合う。

「……………」



人形の様な色白の相貌に浮かんでいるのは、先程の人当たりの良い笑顔では無く——  
——無の表情。

感情を一切削ぎ落とした様な、空虚さが感じられる顔面を向けながら、睨みつけてくる。

「……っ！」

いろはは、一瞬ビクリと肩を震わしてから、ゴクリと唾液を飲んだ。

やちよの雰囲気は確実に変わっている。その証拠に、彼女の瞳から放たれる凍てついた光が、体をぞつと怯えさせた。

すると、やちよは肩に掛けていたバッグのジッパーを開けると、中身を弄った。

そして——取り出したものに、いろはは愕然となる。

「小さい……キュウベえ!!」

自分が探し求めていた存在を、彼女が持っていたのだ。

小さなキュウベえは、透明な袋に詰め込まれた状態だが、窒息で苦しむ様子は無く、  
「モキュツッ! モキュツッ!」と元気に暴れている。

やちよは、そつと、足元に置いた。

「!!」

自然と、いろはの足が飛び出す!

やちよの足元のそれに向かって、姿勢を屈めて両手を伸ばした!

刹那——ガンツと何かが、叩きつけられた。

「……っ!!」

いろはは瞠目。

自分と小さなキュウベえの間に割って裂く様に、青い槍が床に叩きつけられた。

「……なんの、つもりですか……」

ゆつくりと立ち上がり、もう一度やちよと向き合う。

既に、彼女の姿は変わっていた。

——いくつものサファイアを付けたヘアバンド。

——肩と胸部を覆う上半身のアーマー。

——下半身は深い青色のドレスだが、左側に大きく開いたスリットからは艶やかに

白い太ももが露出している。

魔法少女——神浜市の英雄を体現するその姿を初めて目の当たりにした。

圧倒されそうになる。しかし——

「その子を、わたししてくださいっ！」

眉間に皺を寄せ、相手の顔をしかと見据えて、精一杯のお腹に力を込めて、叫ぶ。

「欲しければ、奪ってみなさい……！」

刹那、やちよの瞳から放たれる冷気が絶対零度へと変わる。

「環いろは」

やちよは叩きつけた槍をヒュンツと旋回してから持ち直すと、切っ先をいろはへと向けて、その名前を読んだ。

その態度が表すのは、彼女に対する、明確な敵意——！！

ピリピリと突き刺す様な空気が、いろはにかつてない緊張感を齎した。

「私と、戦いなさい」

最強の味方は、僅か数分で、最悪の敵に変身した。

その事実——いろははただ混乱するしかない。頭が激しく揺れて、おかしくな

りそうだ。

(でも——!!)

目的のものが目の前にあるのだ。ここで下がる訳にはいかない。

七海やちよの意図が全く読めないのが不気味だが、今は早くあの小さなキュウベえを手に入れなくては!!

——そう思うと、いろはも魔法少女へと変身。目眩をなんとか堪えて、やちよと睨み合う。

「!!」

刹那——やちよの姿がフツと、消えた。

直後、下に気配。目線を下に向けると、驚愕!!

いつの間にか、やちよが身を屈めた状態で肉薄していた。

「っ—」

咄嗟に両手をクロスして防御姿勢を取るいろは。

しかし、やちよは踏み込んだ足に力を入れると、その反動を使って勢いよく槍を振り上げる。先端が両手のガードを弾き飛ばし、いろはの態勢が崩れた。

「ああっ—」

倒れながらも、思った以上にダメージが少ない事が不思議に感じて、やちよの槍を確

認するいろは。

柄の部分が空に向かって弧を描いている。刃の切っ先では無く、そこで攻撃したらしい。

「あぐっー！」

仰向けで倒れ伏すいろは。傷は無く済んだものの、両手が受けた衝撃は凄まじく、激しい痛みと痺れに襲われて動かせない。

呻いていると、やちよが更なる追撃を加える。

「がっー！」

腹部に圧迫感。胃酸が込み上げてきて、口から押し出されそうになる。

ハイブーツを履いたやちよの足が、いろはの下腹部を踏みつけてきた。

「パスカルが書いた『パンセ』を知っているかしら？」

無で染まった能面と、底冷えするような冷眼で見下ろしながら、ポツリと呟くやちよ。  
「……………っ!!」

——聞いたことが無い。パスカルって誰？ パンセって何？

いろはは、苦痛に顔を歪めながらも、未だ痺れが治まらない両手を床に付き、いつばいの力を込めて上半身を起こそうとする。

まだ、彼女の戦意が失われていないと、感づいたやちよは、冷ややかに語った。

「第六編・思考の尊厳にこう書かれていたわ。

『彼が自慢したら、私は彼を遜へりくだらせる。彼が遜へりくだたら、私は彼を褒めてやる。

そして、いつまでも彼に逆らつてやる。彼が認めるようになるまでは。

自分が不可解な怪物であることを』

「どういう……意味……ですか……?」

猛烈に襲つてくる痛みと吐き気に意識が澱んでくる。それでも、いろはの目は、やちよの顔を捉えて離さない。

「神戸市の全てよ」

そこでやちよは、足を離した。

解放されたいろはが、ゼエ、ゼエ、と荒い息を吐く。

「この街には、様々な思惑が飛び交っている。生半可な覚悟では生き残れない」

「わたしは……ただ……その小さなキュウベえに……触れたい……だけで……」

「実を言うとね」

やちよが後ろを振り向く。いろはもそれに倣つて彼女の目線の先を見つめた。小さなキュウベえは相変わらず袋の中で藻掻いている。

『『小さなキュウベえ』は一匹だけじゃない』

「!!」

いろはの目が大きく見開く。

「この街に生息する全てのキュウベえがアレと同じになっている。神戸市全体で起きている、未だ原因不明な現象なのよ」

「そんな、ピーターさんは、一言も……!」

ピーターはウワサになっていっていると聞いていたが、沢山いるだなんて言っていなかった。自分もつきり、一匹しかいないものだと思い込んでいた。

「よく身に覚えておきなさい。神戸市とは、そういう場所なのよ」

いろはの脳内で、重たい物がガンと押し付けられた感覚がした。

やちよが何を言いたいのか、分からなかった。

「貴女を利用して、怪奇現象を暴こうと思った」

やがて、騙されたのだと——いろはが理解した瞬間、ヒュン、と風切り音。

やちよの獲物の柄の部分が視界を覆った。

それで、頭を叩き潰されるのだと、思ったいろはは、静かに目を閉じる。

☆

いつまで経っても、痛みはやってこない。

いや、寧ろもう既に叩かれてしまっていて、意識を失っているのだろうか——  
でも、不思議だ。いつも見る筈のあの夢が、今回は浮上してこない。視界は漆黒に覆われていて、何も見えてこなかった。

「やれやれ、新人指導にしては些か行き過ぎでは無いですか？ 七海くん」

暗黒の世界で、聞いたことのある声が耳を叩く。なまりの強い、特徴的な声だ。

そこで、いろはは、自分がまだ意識を失っておらず、目を瞑っているだけに気がついた。

気になって、瞼を解放すると——驚く。

自分がこの街で、味方を作り上げていたという事実。



「それは、貴女の仕事では無いはずよ」

やちよの、苛立たしさを含んだ低い声が、聞こえてくる。恐らく、割り込んだきた邪魔者を睨みつけている筈だ。

「……朝香美代さん」

直後に、タツと踏み込み音。やちよが槍を携えて、飛び出した。

## FILE #05 頂きに立つ者

視界が、濃紫に覆われた。

それは、やちよと横たわる自分の間に、誰かが割って入ったことを意味していた。

「確かに、わっちの仕事ではないですな」

「わっち」という一人称、「ですな」という語尾。声色のみならず特徴的な口調も強く印象に残っていた。

痛みを堪えつつ両手で体を起こして、全体像を確認。

分厚いローブを深く羽織ったその姿は、魔法少女というよりは、西洋の占い師か、呪術師さながらの風貌だった。

眺めていると、美代は右手を振り上げる。一瞬、その動作の意図が分からなかったが、指先で摘まれているものを見て、ハツとなった。

——縦長の『紙』だ。いや、彼女の風貌からすると、『護符』と呼ぶべきだろうか？

考えている内に、やちよは美代に肉薄。「危ない」といろはが声を挙げようとした瞬間だった。

「っ!!」

美代が勢いよく護符を足元に叩きつけると、同時に白い煙幕が噴散!

攻撃を加えようと、足を踏み込んでいたやちよがたじろいで、バランスを崩した。後ずさりながら、腕で両目を覆う。

『ですが、折角治療した患者が、間を置かずに傷つくのを、黙って見ている訳には参りませぬ』

両目を解放すると、視界が白一色に染め上げられていた。そして、目の前に居たはずの美代というはの姿が見当たらない。

白煙には魔力が込められているのか、四方八方に魔力が感じられてしまつて、感知能力が上手く働かない。

しかし——美代の声はしっかりと、やちよの耳に届いていた!

やちよは、声が聞こえた方向へ振り向くと、槍を真っ直ぐに構えて、突進。魔力を帯びて輝く先端によって、煙が払われていく。

「……………」

声の発進源に辿り着いた瞬間、目を見開くやちよ。

美代の姿はそこには無かった。代わりにあつたのは、一枚の『護符』。

☆

一方、美代というははというと……

「大丈夫ですか？」

「は、はい……」

やちよから5 m程距離を置いた場所に居た。小さな背にいろはを背負いながら、自身の魔法によつて発生させた白煙を遠巻きに眺めている。

「ありがとうございます、美……朝香さん。二度も助けてくださって……」

「美代でいいですか」

「でも、どうしてまた市役所に？」

問いかけると、美代は切れ長の瞳を僅かに細めた。

彼女は巨大な宗匠頭巾に似た被り物を深く被っており、ローブの襟は長くネックウォーマーの様に口元を覆っている為、顔の中で感情が伺えるのは両目だけになる。

「お恥ずかしながら、忘れ物をしてしまいました……」

僅かに黒目が泳いだ様に見えた。

彼女が忘れ物に気付いたのは10分前の事だ。

慌てて市役所に戻ってきたら、屋上の方で魔力同士がぶつかり合う反応を感知。

何事か、と思い急いで駆け上がってきたら——愕然とした。

——この少女は、七海やちよを怒らせる真似を仕出かしたらしい。ある意味、大物だ。

「とにかく、話している暇はありませんまい。わたちの魔法で七海くんを引きつけている間にここから逃げ」

「待つて下さい！」

よう、と言おうとしたが、いろはの声に遮られた。

「あの小さなキュウベえも……！」

「……………」

いろはの目線は、少し離れた位置で未だ、モキュツ、モキュツ、と袋の中でもがいている小さなキュウベえに向けられていた。

なるほど、あれが原因か——と、美代は確信すると、護符を一枚取り出して、口元に当てて何かを呟きだした。

「??」

背中でキュトンとするいろは。

美代は護符に向けてボソボソ言いながら、小さなキュウベえの元へと歩み寄っていく。

☆

——同じ頃、やちよは、美代が置いたと思しき護符と向き合っていた。

『きみと直接やり合うつもりはありません』

護符には、行書体で「声」とだけ書かれており、美代の声が聞こえてきた。恐らくこれはトランシーバーの様なものか。いろはと美代はどこかに隠れているに違いない。

その事を理解できれば、この符は即刻無視して二人を追従すべきだろう。

——しかし、やちよは、あえてそうしなかつた。

美代は仕事柄、争いを毛嫌いする性格なのは、良く理解している。よつて、話し合いで穏便に解決したいという想いが、この魔法に込められていた。

『ただ、この子を攻撃する理由を教えて欲しいですな』

尋ねる声には疑惑の色が混じっていた。

治安維持部の長たるもの、街に住む魔法少女の意見を無碍にする訳にはいかない。自分と対峙する者でもだ。

よつて、真正面から応える事に決めた。

「この子は、〝小さなキュウベえ〟の事を追っていたわ」

やちよは、護符をじっと見下ろしながら返答。

『見たら、気になるのはしょうがないですな』

「でも、『自分の記憶と関わっている』とも聞いた……。何か深い因果関係があるに違いないわ」

やちよの目が鋭くなる。

同時に、槍を握りしめる手にもギユウ、と力が込められた。

キユウベエの幼体化は、神浜市内のみで発生している怪奇現象——つまり、小さなキユウベエと触れあえば……環いろはは、神浜の事情に関わっていくことになる」

『だから、実力行使で撮み出そう、という訳ですか……』

「ええ、貴女には分からないでしょうけど……魔法少女同士だと、それしかないのよ」  
そう断言すると、護符からハア、と聞こえる。恐らく溜息でも付いたのだろう。

『……まだ、あの件を引いているみたいですね』

あの件——一拍置かれて、呟かれた言葉の中に混じっていたそれに、やちよの感情が微かに波立つ。

能面に初めて感情が表現された。苦々しそうに下唇をクツと甘噛する。

「私は、同じ誤ちを繰り返したくないし、同じ思いを誰にもさせたくない」

『気持ちには分かりませんが……だとしても、もつと別のやり方がある筈ですね。市内での魔法少女同士の争いは条例で禁止されている筈。この一件が露呈すれば、きみの立場が危うくなりますな』

『調整』を受けている為、同族で争ったとしても、一般市民や建造物が被害を受けることは無い。



だが、魔法少女の戦いは一言で表せば、『派手』だ。

始まれば、たちまち人集りが作られ、見世物と勘違いされて盛況を呼び、金銭が投げ込まれるケースも多々ある。

(事実、一部の地域ではハブとマンガースの戦いの様に、ショーの一環として公開されている)

とはいえ、魔法少女は、プロレスラーでは無い。

本来は青春、学業、恋愛に専念すべき女の子が争うなど——更にその光景を観て楽しむなど言語道断。

よって、神浜市内での魔法少女の戦いは、『人倫に反している』治安の悪化を招く』と判断され、一切禁止とされている。 Ⅱ 治安の悪化を招

しかし——

「治安維持部では『チームリーダー』以上の役職を持つ魔法少女のみに付度された権限があるわ。『市外から訪れた魔法少女が不穏分子及び市内の治安を害する意図の持ち主と疑われる場合、武力を行使して問い質しても構わない』、と」

『それは職権乱用というんですな!』

やちよのいい草に、我慢できなくなつたのか、護符の声が叱りつける様に大きくなる。

「これ以上、貴女と話しても無駄のようね」

美代との会話が平行線を辿ると判断したやちよ。

左足を半歩引くと、それを軸にして一瞬で後ろを振り向く。その際に生じた遠心力を用いて勢いよく、右腕を振るった。

——ヒュンツ、と音を立てて、槍が手から放れる。

まるで、プロ野球選手が放つ豪速球の様に、一直線に飛翔して、先端で白煙を払っていく。

「あつ」

やがて、ガスツと音を立てて、床に突き刺さった。

同時に、素つ頓狂な声が聞こえてきて、凝視するやちよ。

状況がはつきりと伺えた。

いろはを背負った美代が、袋詰のキュウベえをコツソリ拾おうとして……真横から飛んできたやちよの槍に遮られた。

ギョツと目を丸くして、硬直。

「あなたの様に戦闘力が乏しい魔法少女が考えることなんて、見え透いているわ」  
離れた場所からやちよの高らかな声が響く。

苦々しさを目元に浮かべる美代。

「くぬつ、行けそうな気がしたのですがな……っ!! やむを得ん! 撤退っ!!」

叫ぶと、右手を大きく振り上げて符を地面に叩きつけようとする。

瞬間——やちよは目を凝らした。書かれている文字が「煙」と確認した彼女の動きは、

「なっ!?!」

正に光の如き迅速! 僅か一瞬の内に肉薄された。

人形のような相貌が視界一杯に映り込んで、美代が呆気に取られる。

刹那——やちよの裏拳!

右手首に鈍い衝撃が走り、美代の顔が歪んだ。指先の力が抜けて、呪符が離れていく。

「ああっ」

「遅いわ」

風に乗ってヒラヒラと飛んでいくそれに目を奪われた直後、やちよの鋭い声が耳を貫く。

「公務執行妨害よ。覚悟なさい」

既に槍を拾い上げたやちよが、柄の部分で美代の頭上に振り下ろす!

「ひいっ!」

やられる——!!

そう思った美代の目に涙が浮かぶ。迫りくる痛みにも備えるべく目をギュウツと瞑つ

た。

「Wait!!!」

この場の三人からは決して出る筈の無い低い声が、雷が落ちた衝撃の如く響いた。

——パシツと音がして、棒が止まる。

「Waitよ、やっちゃん」

同時に聞こえてきたのは、艶やかな野太い男の声。

新たな闖入者を目の当たりにした3人は、先の雷音の発生源は彼だったのか、と即座に理解し、ハツとなる。

一斉に、視線が注がれた。

彼は急いで飛び込んできたのか、息をぜえぜえ、と切らしながら、伸ばした右手でやちよの槍を掴んでいた。

その光景に、美代におぶさっているいろはが呆然となる。

一般人の彼が、堂々と魔法少女の戦いに割って入っただけでなく、更に、やちよの攻撃を止めるとは。

「ピーターさん……！」

「何も知らない子に、力で現実を教える……貴女はお婆様と市長からそう教わったのかしら？」

只者で無いと思った矢先に、会話が開始された。

戦意を削がれたのか、やちよは槍をゆつくりと戻すと、口を開く。

彼女の顔は相変わらず人形のように能面だが、言葉からは彼に対する忌々しさが滲み出ていた。

「貴女がこの子に『意図的に』現実を教えなかったからよ」

やちよの発言に、ピーターの眉が困った様に八の字になった。

彼の視界の中で、美代の肩からひよっこり顔を出しているいろはの顔が、険しくなっていく。

「あの……騙したんですか？ 私のこと……？」

刺す様な視線を突き付けられて、彼はムツと口をへの字に結ぶと、顔を俯かせて頭を掻き始めた。

「……美代さん、今の内にその子の治療を」

「合点承知ですな！」

顔を複雑に歪めたピーターはいろはの質問には答えず美代にそう促す。

美代は力強く首を縦に振ると、いろはを床に下して、治療を開始した。

「だから、私が教えることにしたのよ」

一方、先のピーターの仕草を凶星と捉えたやちよは、更に、冷徹に告げた。

「随分ひどいやり方ね……。いつの間に、そんな血気盛んになったの？」

美代から治療魔法を受けるいろはの痛々しい姿を横目でチラリと確認すると、ピーターは反論。

しかし、やちよは口撃を止めない。

「自分は酷くないとでも？ やり方の違いはあれど、非道さの度合いなら貴女も変わりはない筈よ」

「そうね……。確かに私は狡い大人よ」

ピーターの顔が僅かに歪む。

「あの時だつて……やっちゃんを支えてあげられなかった」

「!!」

複雑さを孕んだ表情とは対極的に穏やかな口調で囁かれた言葉————やちよの脳

裏に急激に嫌なものが沸き上がる。

再び、下唇をクツと噛むと、表情に怒りを含ませた。

「あの時の貴女と同じ思いを、誰にもさせるもんですか！つて、誓っていないながら……結局、繰り返そうとしている……。全く、どうしようもないわね」

「やめて……！」

自嘲気味にフツと笑みを浮かべる彼を、やちよが鋭く睨みつける。

肉体の傷を治癒魔法で治し、ソウルジェムの穢れをグリーフシードで吸い取ってもらいながら、いろはは二人の様子を眺めていた。

ふと、今のやちよの細められた瞳が気になり、凝視すると——呆気に取られた。

先刻、自分に襲い掛かる前に見せた、あの絶対零度とは、まるで違う。明らかに熱が籠っていた。

怒りか、悔しさに似た感情が、深海の様な瞳の奥底で瞬いている様に、いろはには見えた。

「いろはちゃん……ごめんなさいね」

「?!」

直後、ピーターがいろはの方に体を向けてペコリと謝ってきた。いろはは目を丸くする。

「貴女を利用しようって思ったのは確かよ。正直に謝るわ」

深々と頭を下げるピーター。しかし、

「どういう、つもりだったんですか……?」

納得できない。

あんなに優しくしてくれて、純粋な色の瞳を持っている彼が、自分を騙したなんて信じたく無かった。

何か理由がある筈だ——困惑が頭の中をグルグルと掻きまわして、気持ち悪かったが、いろはは何とか堪えつつ、体を起こして立ち上がる。

細められた桃色の瞳に精一杯の疑惑の念を込めて、ピーターを捉えた。

彼は観念したかの様に、顔を俯かせて、ふう〜、と嘆息。

「やっちゃんと同じよ。私も、貴方が小さなキュウベえと深い因果関係があると見たの。怪奇現象を暴けるって思って……。けどね……」

ピーターはそこで、一泊間を置くと、隣立つやちよを横目でチラリと見た。

「その為のやっちゃんだったのよ」

「え?」

いろはは、再び呆気にと取られると目を丸くして、やちよを見つめた。

彼女はいろはには振り向かず、ピーターの顔を睨み据えたままだ。



「要請したのよ。いろはちゃんに『協力してあげて』って……。いやに素直に承諾してくれたから、違和感があつたけど……まさか、こんなことになるなんてねえ……」

ピーターは、申し訳なさそうに、後頭部を搔き始めた。

「っ!!」

いろはは、彼の言いたいことが理解できた。

——つまり、こういうことだ。

ピーターは自分に協力してもらおうべく出張中のやちよに連絡して、わざわざ呼び寄せてくれたのだ。

そう思うと、彼を疑ってしまったことが、申し訳なく感じる。後悔の念が押し寄せる。だが、やちよの思惑は、その時点で彼とすれ違っていたのだろうか。

「ピーターさん、私はこの子の為を思って行動したまでです」

やちよは腕を組んでひややかに告げると、いろはの方へと首を向けた。

途端、凍り付かせる様な冷眼を浮かべて、静かに告げる。

「環いろは、貴方の実力、試させてもらったわ」

——当たりだ。

やちよは、ピーターの要請通りに動く気はさらさら無かった。

自分に『仮登録』を施し、屋上で暴力を振るった一連の不可解な行動……その全ては魔法少女としての自分の実力を試す為だったのだと、彼女の言葉を受けて、初めて理解した。

「……っ!!」

とは言え、神浜の『英雄』と呼ばれし魔法少女が、狡猾極まる手段で自分を陥れたという衝撃は、計り知れない。

シヨックを受けたいろはは、悔しさも、怒りも顔に表現する事が出来ず、ただ蒼褪めていた。

「手が早い女は年取ってから孤立するわよ。暴力なら尚更ね」

一切、悪びれる様子も無いやちよの言い方に、流石に不満を感じた様だ。ピーターは顔を彼女に戻すと、ピシヤリと語気を強めて叱る。

だが、やちよは、ふん、と鼻を鳴らして一蹴した。

「はつきり分かりました。この子には、神浜市で生きていく実力はありません」

そう言いながら、やちよは、袋詰めの小きなキュウベえに歩み寄ると、拾い上げた。

普通の動物ならとつくに窒息死するであろう時間を、密封された袋の中で過ごしている筈だが、苦しむ様子は見られない。

寧ろ、未だ元気そうに「モキュツ、モキュツ！」ともがいている。

キュウベえという種族が特殊なのか、それともこの小さなキュウベえだけが特殊なのか——？

いろはがそう考えている間に、二人の会話は続いた。

「だから、それを渡せないって？」

「ええ」

「そんな……」

いろはの顔に浮かぶ青筋が更に濃くなる。『絶望』の二文字が、顔全体を埋め尽くした。

しかし、

(冗談じゃない——!!)

対照的に、頭の中には猛烈に悔しさと怒りが噴きあがってきた！

いろはは、クツと歯噛みすると、じつとやちよを睨みつける！

「わたしはただ……欠けていた記憶を取り戻したいだけなんです……！」

やちよが怜悯な瞳と感情を落とした能面を向けてくるが、いろはは真正面から立ち向かう。

「その子に触ったら、すぐに帰ります……！」

元々は、その為だけに此処に訪れたのだ。

道中、様々なアクシデントに見舞われ、想像を絶する苦勞をしたが——その甲斐もあつて、ようやく目的の物の前まで辿り着くことができた。

ここで引き下がれば、今日の苦勞は全て水の泡だ。それだけは、絶対にしたく無い！

「その『欠けていた記憶』が神浜市と深く関わっているのかもしれないわね」

「神浜市に來たのは今日が初めてです！」

「じゃあ何故、この『小さなキュウベえ』が氣になるのかしら？」

「それは……！」

「そう言われているのは押し黙ってしまふ。

特に理由は無い。『触れれば記憶が戻る』という確信めいたものを感じただけ。  
「分かなければ尚更ね。貴女がこの街に縛り付けられてしまふ可能性がある。危険に晒したくないのよ」

「でも、折角ここまで來たんです……！」

「死ぬ可能性だつてあるわ。だから……さっさと帰りなさい」

「帰りません……っ！」

「貴女……っ！」

やちよの瞳が、熱を帯びてくる。沸々と湧いてくるものに冷徹さを保てなくなつたの

か、顔がムツと苛立たしさを孕み始めた。

対するいろいろはも、やちよの顔を捉えて離さない。

「……参ったわあ。完つ全に平行線ねえ……」

ピーターはハア、と溜息を吐くと、頭を両手で抱える。

「いやはや、七海さんと真正面から立ち向かうとは……やはり、あのいろいろはくとやらは中々剛の者のようすな」

やちよは、『英雄』という呼称が示す通り、神浜市内の魔法少女中でも最強の実力の持ち主と謂われている。

彼女に打ちのめされたばかりだというのに、一步も引き下がらないいろいろの姿に、美代は感心。パチパチと静かに手を叩いて、賞賛を送った。

……大人二人が説得しても考えを変えないやちよも、相当なものだが。

「……言ってる場合？」

ジト目で、美代を睨みつけるピーター。

そこで、美代は何か意を決した様な熱を瞳に浮かべると、テクテクと歩き出した。

未だ空中で火花を散らす二人の頑固者の間に、割って入る。

「七海くん、いろいろはくん。僭越ながら、わっちから一つ提案がありますな」

両手を広げて、二人を納めると、美代は更に続ける。

「『ゲーム』をするのは如何でしょう？」

「『『ゲーム』??』」

まさかの申し出に、先ほどまで真剣な顔をしていた三人が、一斉にポカンと間の抜けた表情になってしまう。

「武器を取って争うのではなく、何か違うことで勝負をするのですな」

——もし、やちよが勝てば、いろはには今日は諦めて自分の町へ帰ってもらう。いろはが勝てば、小さなキュウベえに触らせてもらう。

そう付け加える美代だが、やちよは納得いかない様子だ。無然とした顔を向けてくる。

「美代さん、名案だとは思いますが、貴女も知っての通り、この子は……」

「それを言うのであれば、わっちも非力な女ですが、此処で長らく過ごしているのですな。調整課の八雲くんだって」

「……神浜で求められる強さは力だけじゃない。時に他人を利用する様な狡賢さも必要なのよ」

「それを見定める為の『ゲーム』なのですか、七海くん」

美代の言葉に、波面を浮かべて、僅かに顔を俯かせるやちよ。  
「わかった。良いでしょう」

だが、やがて意を決したのか、顔を上げた。相変わらずの能面だが、張り出した声には絶対の自信が伺えた。

「あの、ゲームの内容は……？」

対するいろはは、どこかソワソワとして落ち着かない様子だ。

彼女自身、得意なことは料理以外に、特に無い。

ましてや相手はあの七海やちよだ。不安にならない方がおかしい。

「それは私にやらせて」

ピーターが挙手する。

そこでいろはは初めて彼が背中に迷彩柄のリュックサックを背負っていることに気が付いた。

彼はそれを両肩から外して床に下すと、ジッパーを開けて、中に手を入れる。

上部にプロペラを付けた4本足の、ヘリコプターに似た形の、小型の機械を取り出した。

「それはっ……」

『『ドローン』よ』

初めて見るロボットの様なそれに、いろはが怪訝な表情で尋ねると、ピーターは即答。  
(……………)

——何でそんなものを持つてるんだ、というツツコミはこの際野暮なので、やちよと美代はあえてしなかった。

彼は、ポケットからスマホを取り出すと、軽快な指使いで操作する。

「あつ」

すると、いろはが思わず口を開けてしまう光景が目映った。

『ドローン』とピーターが呼んだロボットのプロペラがブンブンと音を立てて旋回すると——青空に向かって高く飛翔した。

「こいつを神浜町内のどこかに着地させるわ。先に見つけた方が勝ちよ」  
なるほど、それなら自分にも、できそうだ。

そう思ったいろはは、安心と同時に、絶対見つけてみせるっ！と心の中で意気込んで、真剣な表情を浮かべた。

「でも、環さんにはハンデが必要ね」

鼻息を荒くするいろはに、やちよが横目を向ける。

「ハンデ？」

「今日初めて街に来た貴女が、地理や住民について詳しい筈が無い。あなた一人だけだ



と勝負にならないわ」

——あ、そうか。それじゃあ先の二の舞じゃないか。

いろはの心に再び暗雲が立ち込めるが、

「ならば、わっちがいろはくんとペアになりましょう」

「!!」

すぐに陽が刺し込み、顔がパアツと明るくなる。

美代が、いろはの隣に立つて、そう名乗り出てくれた。

「それで、よろしいですか？　七海くん」

「ええ、いいわ」

やちよは了承。そして彼女はいろはに確認。

「環さんも、いい？」

「大丈夫です。ありがとうございます。美代さん」

いろはも了承すると、美代にペコリと礼儀正しくお辞儀した。

「存分に御身を扱いなされ」

美代は、目を閉じて、僅かに会釈する。

そして、魔法少女三人は顔を空に向かって見上げた。

既にドローンは遙か彼方まで飛ばされており、空の青に溶け込んでしまつて、見えな

くなっている。

やがて彼女達は、屋上の中心に集合すると——綺麗に横に並んだ。

「では、ピーターさん、合図を」

「わかったわ」

やちよの声を受けると、ピーターは両手を広げる。

「いちについて~~~~」

三人の魔法少女が表情を険しくすると、クラウチングスタートの姿勢をとる。

「よ~~~~い、ドン!!!」

その合図で、計六つの足が同時に発射!!

豪速で駆け出した三人は、やがて屋上に端に辿り着くと、飛翔した。

——市役所の各階で業務に従事する職員の一部が、偶然窓から見えた、3つの少女の姿をした落下物に、腰を抜かしそうになったのは、言うまでもない……。



FILE #06 孤高の絶対者に追いつく術は？

☆

神浜市役所屋上——

『そうなのねえ、そんなことがあ……』

「みたま、あんたも心配？」

そこで、ピーターは、スマホでみたまと連絡を交わしていた。

『心配に決まってるじゃない。相手はあのやちよさんよ？』

「そうよねえ」

『美代さんが付いてくれたっていつでも、ねえ……相手が強すぎるわ。ピーターは？』

心配じゃないの？ と問いかけるみたまの声は心配のあまり、沈んでいた。

ピーターは、目を細めて眼前に広がる神浜町の町並みを捉える。

いろはと美代のペア、やちよの3人の魔法少女が飛び降りてから既に5分が経過——

——ドローンは現在、オート操作に切り替えており、市役所前の神浜中央商店街と神浜公立中央小学校が有る住宅街の空域に差し掛かろうとしていた。

いろはと美代はもう商店街を抜けた頃だろうか。そしてやちよは、もつと先を進んでいることだろう。恐らく彼女のことだから、ドローンに真下でピッタリと付いて放さないかもしれない。

(確かに、やつちゃんが強すぎるわね……)

ふう、と溜息を吐いて、視線を足元に向けるピーター。

そこには、袋詰にされたキュウベえが居た。とはいえ、一般人の彼にその姿は見えない。

なので、縛られたビニール袋が何故か膨らんでいて、内側からガサゴソ音を立てて動いている、という軽くホラーな光景が映し出されていた。

「私も心配よ。……けどね」

だが、ピーターは別に気にせず、会話を続ける。僅かに口元がフツと笑みを作った。  
『ピーター?』

相手が不敵な笑みを浮かべた事を察したみたまは、怪訝な声を挙げる。

「ちよつと期待している自分もいるのよ。いろはちゃん、もしかしたらやれるかもつて……」

『根拠は？』

「実力差を思い知ってるのに、真正面から食って掛かった。あんな新顔、久しぶりにみたわ」

いろはは先程、七海やちよに完膚なきまでに叩き伏された。

普通なら、そこで確実に『恐怖』を覚える筈だ。やちよと自分との間に越えられない壁があるから、絶対に敵わないと——しかし、彼女の闘志は一片も衰えを見せず、やちよに立ち向かい続けた。

神戸市管轄の各町でチームリーダーを務めている魔法少女ならまだしも、他所から来た新顔が、それをやってのけるとは——あの時、美代が驚嘆していたのを隣で呆れて見てたが、自分も実のところ、内心は同じ気持ちだったと、みたまに説明する。

『ふ〜〜む……』

どこか期待で声色を弾ませているピーターに対し、電話越しのみたまは納得しきれない様子だ。いろはに対する心配がまだ拭いきれていない。

とは言え、これはいろはとやちよの真剣勝負だ。部外者であるみたまには何も出来ない。

なので、これ以上口を挟んでも二人に失礼だと思い、黙るしか無かった。

「——っ!! そうだわ!!」

そこで、ピーターは何かを思いついたらしい。急にカン高い声を挙げた。  
『どうしたの?』

「ドローンの着陸地点よ。旧商店街より2 km先に有る中央運動公園にしようかって  
思ってたけど……決めた!」

そう断言して、新たに決めた着陸先を伝えるピーター。

『……………』

直後に、みたまは沈黙。

『……………ピーター、貴女って本当に、嫌な大人』

「オホホホホッ!!」

恐らく電話越しで、呆れ返っているのだろう。みたまの至極うんざりとした声が飛んできたが、ピーターは口に手を当てて、豪快に笑うだけであった。

それから、二、三言交わして、連絡を切る。

スマホの画面が、ドローンが撮影していると思しき映像に切り替わった。

住宅街を抜けて、旧商店街が見えた。その左隣には、神浜中央農林公園がある。ドローンのカメラの向きだけを、そちらに向ける。

「環いろは…………、『深淵』を抱えた魔法少女…………」

それは、画面一杯に広がる農林公園の森林よりも深く、暗いものであろうか——  
そう思い、真剣な眼差しで見つめながら、ピーターは静かに、誰にでもなく呟いた。

「さてと、彼女が神浜に呼び込むのは、希望の光なのか……。それとも、破滅かしら……？」

——いずれにしても、混沌極まるこの街に、何らかの風穴をブチ開けてもらいたいものだ。

微笑を浮かべながらそう考える彼の真意を知る者は、今は誰もいなかった。

☆

市役所の正門を出てから少し真っ直ぐを歩くと、神浜中央商店街に差し当たる。

此処は、神浜市が魔法少女保護特区として指定されてから、政府の全面的な援助を受



けて都市開発の一環として開発された地帯だ。

平日の昼間にも関わらず、人で賑わっている。

人気の飲食、アパレルのチェーン店が両サイドに並んでおり、視覚的にも刺激が広がっているせいか、若者が騒がしい。

道路にも構わず、人混みがわらわらと蠢いている様子は、まるで、東京・東池袋のサンシャイン通りを彷彿とさせた。ほぼ完全に歩行者天国となっているそこでは、車が走る姿も滅多に見当たらない。

「おっ」

「どうしたの?」

市役所から見て、右側の歩道を仲良く腕を組んで歩く二人組の男女。

カップルの彼氏の方が、ふと何か近づいてくる気がして、目線を向かい側に建つスポーツ用品チェーン店の屋根の上に向けた。

彼女の方は不思議に思いながらも、彼氏と同じ方向を見遣る。

刹那——バビュンツ!! と、青い何かが通過した。

「なんじやありやあ……!?!? 新幹線……!?!」

「スカイフィッシュ……!?!」

突然視界に発生した怪奇現象にカップルは、呆然となる。目を震わせながら、あんぐ

りと口を開けて、固まった。

二人は神浜市外で暮らしており、今日はたまたま二人揃って休みだったので、神浜まで遊びにきていたのだ。

「で、でも、人の形をしてたような……?？」

「ありやあ、七海部長だね〜！」

「婆さん今の見えたのかよっ!？」

「お勤めご苦労様ですう〜」

困惑するカップルの隣で枯れた声が聞こえてギョツとなる。老婆が隣に現れて、両手を合わせて拝んでいた。

「おい、今の見たか?」

「ああ、七海やちよだ……っ!! クツソ〜!! カメラ用意しときや良かったなあ〜ツツ!!」

「……いや、撮るの無理だろアレ」

「それにしても、どうしたんだろ? 魔女でも出たのかしら?」

「……いや、だったら町内放送ある筈だろ」

「出張じゃないの? テレビ出演してから、市外の広報活動で忙しいみたいだし」

「でも、七海やちよがいなくなったら、神浜町が手薄になるぜ? その間、誰が守ってく

れんだよ?」

「そりゃあ、流石に他所の町のチームに頼むとかしてるんじゃないか? あとは、フリーの魔法少女とかにさ」

「……でも、『治安維持部』なんだからさあ、もうちよつとそつちに尽力してほしいわよねえ……」

「ほんとほんと。この神浜町じゃあ、お役所勤めは七海と八雲しか居ないつてのによ」

「そいつらに比べりゃ、明京町の常磐ななかは相当ビシツとやつてるみたいだぜ。やつば市民の安全を第一を考えてくれる奴がいいよなあ」

噂の有名人が通りかかると、歩道を歩いていた若者達が足を止めて、即座にワイワイと騒ぎ立てる。

七海やちよ個人に対する思いの丈を——主に不満に感じてる事を、口々に発露し始めた。

「おつ、今度は何だ?」

そこで、また向かい側の屋根の上を誰かが走ってくるのが見えて、一人の青年が声を挙げた。

他の若者達も一斉に青年と同じ方向を見遣る。

「あつ、美代さんだ! 美代さ~~~~ん!!」

濃紫色の深いローブに身を包んだ女性が飛来してくるのが見えて、女性が声を張り上げる。

届いたらしい。美代は顔を向けると、僅かに手を振った。

「美代さんの後ろに誰かいるぜ！」

「ああ、ありや新顔の環いろはだな」

『『仮登録』扱いになってんだな？』

「なんだろ、訳アリかな？」

「……っっていうか、寒くないの？ あの格好……」

既にいろはの顔と名前は、神浜公式HPにアップされており、神浜町民にも知れ渡っていた。

新しい魔法少女に、若者たちは注目する。

☆

—— 一方、注目を集めるいろははというと……。

「凄、い……！」

視線をチラリと横に向けると、商店街の歩道や道路に存在する人の大群が、自分に注目して騒ぎ立てる様子がはつきりと見えた。

元々住んでいる町では、自分が魔法少女であることを隠す必要性が有った。

魔法少女の存在が世界に認知された、とは言え、まだまだ人々に理解されるには程遠く、自分が魔法少女だと知られてしまえば差別の対象にされることもあった。

両親に迷惑を掛けたく無かったいろはは、暗くなつた夜だけに魔法少女活動を行っていた。

だが、神戸市では、昼間から魔法少女活動が許される。魔法少女の姿を露呈しても、自分が差別や非難を受ける事は無い。

—— 改めて、神戸市が『魔法少女保護特区』であることを認識した！

「で、でも……は、恥ずかしい……っ」

若者の大半がスマホを持ち上げて、自分の姿をカシャ、カシャ、とカメラで撮っている。顔が紅潮してきた。穴が有つたら入りたい、という諺の意味を始めて理解した気がする。

る。

(美代さんはいいいけど……私の格好って……)

途端に、目の前を走る美代が羨ましくなるいろは。

何せ彼女の魔法少女衣装は占い師か呪術師の様な、全身を覆う厚いローブ。肌色は、目元を除いて一切が隠れている。

いろはの魔法少女衣装も、「肌色が一切露出していない」という点は美代と同じだ。しかし……

(このタイト、薄過ぎるよ……!)

顔を戻して、目線を下に向けるいろは。

お腹が丸見えだ——!!

胸下から、下腹部に掛けてを覆っているそれが、全く頼りない事を改めて認識すると、愕然とした。咄嗟に両手で抱え込んで隠す。

更に足元まで見下ろすと、短い丈のスカートから生える両足も、ピッチリとタイトで覆われているが——腹部同様に薄く作られているせいで、太ももがほぼ完全に露出していた。

(何でこんなに大胆なの……っ!?)

両目の尻に涙を浮かべると、心の中で絶叫を挙げるいろは。

根っからの草食系根暗女子である彼女にとって、人々から注目されるのは好ましい事ではない。寧ろ精神的暴力に等しい。

加えて、若い男性から厭らしい目線で見られてるかもしれないと思うと、顔がカーツと熱くなってきた。もし、池か湖が近くにあったら即座に飛び込んで冷やしたい。

「いろはくん、あまり心配なさるな」

と、そこで、前を走る美代がスピードを緩めて、いろはと横並びになった。切れ長の目を細めて、声を掛けてくる。

「で、でも……」

美代が心配してくれるのは分かっているが、いろはの顔は浮かない。

「もっとエッチイ子はいっぱいいますな」

「ええっ!？」

とんでもない発言を至極冷静な目を向けながら告げる美代に、いろはは目を丸くしてビックリ仰天!!

「これに耐えることも立派な試練ですなっ! さあ、なるべく気にせず、急ぎましょう!!」

「ううう……っ!」

自分は見せてないからって——!!

そう思うと、一言文句を言ってやろうと口を開きかけたが、その瞬間には、美代は既に自分を置き去りにして前を走ってしまっていた。

涙をポロポロ零しつつも、いろはは慌てて後を追う。

☆

「はあ……はあ……」

「ふう……ふう……」

しばらくして、新商店街を抜けた二人だが、その顔は疲弊に満ちていた。

———といつてもいろはの方は、緊張と恥辱で、心拍数が跳ね上がっていたから。美代の方は、単純に運動不足が原因だが。

「七海部長さんも、ドローンも、全く見えませんね……」

息を切らしながらそう呟くいろはの目線の先には、商店街とは打って変わって閑散とした住宅街が広がっていた。やちよどころか人の姿も全く見当たらない。空に顔を向



けるも、燦々とした太陽が目を焼き付けてくるだけだ。

「流石七海くん。我々とは鍛え方が違うのですな……」

美代も、相変わらず平靜とした態度のままだが、その額にはじわりと汗が浮かんでいた。

目的物を見失ってしまった事に意気消沈する二人。

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~

と、そこで音楽が鳴り響く。いろはがハッと顔を向けると、美代がポケットに手を突っ込んでスマホを取り出していた。

通話ボタンを押して、耳に当てる。

「もしもし?」

『美代さんね。いろはちゃんも、聞こえてるかしら?』

バリトンボイスだが、女性らしさを存分に感じさせる艶やかな口調で呼ばれて、いろはは目を見開く。間違いない、相手はピーターだ。

「あつ、はい!」

美代がスマホを耳から離す。いろはは咄嗟に近づいて、スマホに顔を近づけると、短く返事をした。

『やっちゃん相手じゃ辛いでしょから、私からハンデをあげるわ。ドローンの着陸地

点よ』

「!!!」

ピーターからのまさかの出血大サーブスに、いろはと美代が驚愕の顔を浮かべる。

「それは、どこですか!？」

間を置かずにいろはが食らいついてきた。ピーターは『慌てないで』と宥めると、説明する。

『流石に直接教える訳にはいかないから、キーワードを2つ出すわ。【神浜中央運動公

園】と【元通り】よ』

「なるほど、さっぱり分かりませぬ」

真顔でそんな言葉を返す美代に、ピーターは、はあ、と溜息。

『言うと思った……。だから残り一つのキーワードを隠しておいたの。この町に住む、魔法少女の誰かが知っているわ』

「それは……?？」

「魔法少女の誰か」——その言葉がピーターから紡がれた瞬間、いろはの顔が険しくなった。目を細めて、問いかける。

『それは自分で探しなさいな。それじゃ』

だが、ピーターは冷ややかに返すと、プツリと通話を切ってしまった。

「ふむ、どうしたらいいのでしょうか……いろはくん？」

美代はポケットにスマホを入れると、いろはに顔を向ける。

細められた瞳には、どこか様子を伺う様な色合いが込められていた。

それもその筈——美代はいろはを試している。もし、此処で「どうしよう」「わかりません」と返し、自分に縋る様だったら、いろはの実力はそこまで。美代の中で、七海やちよに軍配が上がる。

そうしたら、この場で解散し、とつとと本業に戻る腹つもりでいた。非情だが、やちよの言ったとおり、神戸市では強さと算術が無ければ生き残れないのだ。

しかし——

「……………」

いろはは、顎に手を当てて、考え込んでいる。

商店街で恥ずかしさのあまり涙を零していたのが嘘の様に……今さっき、息を切らして疲弊していたのがまるで、無かったかのように……冷静と真剣に満ちた表情を浮かべていた。

美代は心の中で「おおっ！」と感心の声を挙げる。どうやら、自分は全く分からなかった。ピーターの言葉に、彼女は何らかの光明が見えたらしい。

「美代さん、一つ相談が有ります」

低い声で呟かれた言葉の中に、『相談』と単語が混じっていた事に美代は、ほお、と納得した様な声を挙げる。

あくまで、彼女は、『自分の意志』で決定するつもりらしい。

「なんですかな」

「スタート前に、言いましたよね……。『自分を存分に使って』って……」

「確かに、申し上げましたな」

「つまり、それって……美代さんの持つてる『情報』も含まれてるってことですよね？」

いろはがそう伝えると、美代が目を細める。

「……君はわつちを使つて、何がしたいのですかな？」

腕を組んで、やや威圧するような棘のある声色で返す。ここで彼女が怖気づくのなら容赦はしない。

「美代さん、私が目覚めた時に、『仕事が忙しい』って言っていました。この町に住む魔法少女の事は、詳しいんですか？」

だが、いろはは、美代の顔をしかと見つめて、はつきりと問いかける。

確か、ピーターの話では、美代は『魔法少女専門の訪問医療』だと聞いていた。つまり、顧客は魔法少女しかいない、ということだ。

「自惚れではありませんが……」

美代はそこで、フン、と鼻息を吹かす。

「神浜町どころか、神浜市内に知らぬ魔法少女は居ないと自負しております」

胸を張って尊大に言い放つ美代。

「だったら……『連絡』してほしいんです」

「キーワードを一人ひとり尋ねるつもりですか。それは構いませぬが……途轍もない時間が掛かりますぞ。その間に七海くんがドローンを捕まえる可能性も……」

「いえ、掛ける相手は『一人』で良いんです！」

その言葉に、美代は思わず「えっ？」と素つ頓狂な声を挙げてしまう。

そう高らかに言ういろはの表情は——見たこともないぐらいの自信に溢れていた。



## FILE #07 鶴の怨返し

☆

——BAR・MIROR。——

春径が帰り、いろはが去って以降、魔法少女も訪れ無かった為、仕事にも関わらず暇を持て余していたみたまは、中心にあるソファに座って、のんきに小説を読んでいた。そこで、突然携帯が鳴ってハツとなる。画面を確認すると、『朝香美代』の名が表示されていた。

『もしもし……みたまさんですか？』

通話ボタンを押して耳を当てた直後に聞こえてきたのは、美代ではなく、自分が先程調整を施した少女の声だ。

「あら美代さ……じゃなくて、いろはちゃんねえ。どうしたの？」

『実は、みたまさんにしか頼めない事があって』

「それは……?」

みたまがきよとんと目を丸くして問いかけると、電話越しのいろはは毅然とした声色で言い放つ。

『ピーターさんから預かってるキーワードを、教えてくれませんか?』

彼女が何を言ってるのか分からなかった。

まさか、こんな短時間で辿り着くなんて全く思わなかっただけに、みたまは目を丸くして、硬直。

『みたまさん……?』

いろはの怪訝そうな声に、みたまはハッと我に帰る。

「あ、ああ! ごめんなさいねえ……ちよつとビックリしちゃって……」

その際、ズルツと身体がソファから滑り落ちそうになった。慌てて姿勢を直すと、強引に笑みを作つて、いろはに返事をする。

「でも、どうして、私が知ってるって思ったのかしらあ?」

『みたまさんなら、ピーターさんから話を聞いてると思ひまして……』

「あら、そう……」



根拠はあ？ と付け加えて問いかけるみたまの目が、じつと細められる。

いろはが自分とピーターと出会ってから、間もない。にも関わらず、彼女は自分とピーターの僅かなやりとりから何かを見抜いたのだろうか？

それが、気になる。どうしても、知りたい。

『私が和食を食べたいって言った時です……』

意を決した様ないろはの声が、静かに、耳に入り込んでくる。

「うん」

『ピーターさんとみたまさんがコソコソ喋ってて、仲良いんだなって……』

「それだけ？」

いろはの答えにみたまは拍子抜けしたように目を丸くする。

しかし、言葉はそこで終わらなかった。

『最後に、ピーターさんが何か言った後に、みたまさんの身体が、ビクツつてしたのが見えたんです』

そこで、いろはは感づいたらしい。

【この二人は、人には言えない秘密を共有している仲】なのだと——

そこまで説明すると、みたまは、観念したように、ハア、と溜息を付いた。

「参ったわあ……」

—— 鋭い。ある魔法少女に匹敵する洞察力に、みたまは心の底から感服した。

「でもねえいろはちゃん、これって反則になるんじゃないかしらあ？」

『……………』

レフェリーのピーターと近い自分から情報を得るのは——柔らかな声色だが棘が存分に込められたその言葉に、いろはは沈黙。

流石にこれは効いたか、とみたまは思ったが、

『それは、無いと思いますな』

すかさず、美代から言葉が飛んできた。

『これは「いろはくんと七海くんの勝負」ですな。レフェリーは確かにピーター殿でしたが……八雲くんは、別に立ち会ってはいませんでしたな』

つまり、この勝負にみたまは最初から無関係である。よって、彼女から情報を得ることとは正当性が認められる。

断言するように言い放たれた言葉には普段冷静な彼女らしからぬ強い熱意が込められていた。

みたまはきよとんと目を丸くして、呆気に取られる。

「……………美代さん、それはいろはちゃんが私に言うべき台詞じゃないの……っ?!」

しばらくすると、ジト目で電話を睨みつけてそう訴えるみたま。

『申し訳ありません。なんだか滾ってしまいました……』

そう謝られて、みたまはふう、と息を付いた。

本当に『環いろは』という少女は何者なのか。

並々ならぬ洞察力に加えて、一人の魔法少女の心をいとも簡単に突き動かした。惜しむらくは戦闘力が低いことだが……こちらは、経験を積めば自然とカバーできる。

間違い無く、治安維持部にとって将来有望な逸材。まさに期待大だ。

だが、彼女が抱えているアレを考えたら——

みたまの顔が沈んで影を落した。

不安でいっぱいでもあった。このまま、神浜市内で動かしていいものか——？

『みたまさん!!』

迷っていると、今度は、いろはから言葉が飛んできた。

『私達には、立ち止まっている時間は無いんです!!』

「ツ!!!」

迷いの無い発言が突風となって、みたまの不安を吹き飛ばした。

そうだ——自分は『調整課』の魔法少女だ。魔法少女は全て平等に支援し、助ける義務がある。

自分だって、立ち止まっている暇は無い。

「キーワードは、アルファベットの『U』よ」

みたまの覚悟は、そこで決まった。一人の魔法少女が全力で助けを求めているのだ。だとしたら、自分は全力で、役目を果たすまで。

そう思っただけで顔に、一片の迷いは無かった。

『【神浜中央運動公園】、【元通り】、【U】……これだと、何処を差しているのか……』

しかし、告げられたいろはから返ってきたのは、困惑。

『キーワードの順序を入れ替えてみてはどうですか？』

『あ、そうか……なら、【神浜中央運動公園】、【U】、【元通り】ならどうでしょう……？』

『これなら、なんとなく繋がりそうな気がしますな。全てがドロインの行き先を差しているとしたら……【神浜中央運動公園】で【U】ターンして、【元通り】……つまり』

『ドローンの行き先は……………【神浜市役所】』

「はい、正解♪」

いろはが辿り着いた答え——まさかのスタート地点に、みたまは、満面の笑みを浮かべて、拍手の音を送って称賛する。

「そのまま市役所に戻ってくれば、OKって事よお♪ ただやちよさんも一緒に戻ってくるかも?」

七海やちよのことだから、未だにドローンを視界に捉えて放さないだろう。

つまり、彼女を何処かで足止めしなければならぬと——暗に告げる。

『ありがとうございます!』

「じゃあ、またね♪」

心からのお礼を告げられて上機嫌のみたまは、笑ってそう返すと、通話を切った。

☆

「さて、ここからはどういたしますかな、いろはくん？」

「このまま戻ったとしても、七海部長さんをどこかで足止めしなくちゃいけない……！」

しかし、既にやちよは大分離れてしまっている。今から追いかけるのは至難だ。

かといって、此処で待つて迎え撃つのも得策ではない。やちよの戦闘力の前では自分達など赤子同然。軽々と突破されるか、ひらりと躲されてしまう。

うゝゝん、と首を唸るいろは。

「……ドローンの向かってる先は？」

美代に尋ねると、彼女は即座にスマホで神浜町のマップを開いてくれた。

「このまま真つ直ぐ突き進んでいたとしたら、旧商店街の方へ入りますな」

「旧商店街？ さっきの商店街とは違うんですか？」

「国が推し進めた都市開発計画のせいで廃れてしまった場所ですな。『魔法少女保護特区』として指定される以前は、それなりに栄えていたのですがな……現在は、大半の店のシャッターが下りてますな」

経営者もご高齢の方しかおりませぬ、と美代は付け加えると、マップに映る商店街を見る目を細めた。

「ただ、七海くんはそこを避けて、農林公園の方へ迂回するでしょうな」

美代の言葉に、いろはは不思議そうな目を向けた。

「それは……どうしてですか？」

「彼女にとって因縁深い場所だからですな。特に……『万々歳』の『あの子』とは……」

「万々歳？ あの子？」

美代が口から紡ぎ出した2つの単語が気になるいろは。特に後者が印象に残った。

『あの子』——どうも、七海やちよが避ける程の存在が、この町に居るらしい。「唯一常連客で賑わっている中華飯店ですな」

——そこには魔法少女の看板娘がいるのですな、と付け加える美代。

「その子の実力は？」

いろはが真剣な表情で問いかけると、美代は、ふむ、と顔を俯かせて考え込んだ。何か答えようか迷っている様子だ。

しかし——数拍間を開けてから、顔を上げると、

「市内では、唯一、七海くんに匹敵する実力の持ち主ですな」

はつきりと、そう答えた。

「!!」

いろはは目を見開く。

「しかし……、あの子は……いくらなんでも……」

美代は再び顔を俯かせると、ブツブツとつぶやき始めた。何か彼女を七海やちよと合わせてはならない事情があるらしい。

しかし、いろはの答えは既に決まっていた。

「その子に、お願いしてみましよう」

「ええっ!?!」

迷いの無い桃色の瞳と同時に、高らかに宣言された言葉に、美代はギョツとなる。

「きみは先程のわっちと七海くんの話を聞いていなかったのですかな!?! 魔法少女同士の争いは市内では禁止されているのですな!!」

「ごめんなさい」

いろはは、ペコリとお辞儀して謝る。

「でも、今の私達にはそれしか勝てる方法が無いと思います」

その子の強さに頼ることしか——言いながら頭を戻すいろはの目には、強い決意



を込められていた。

「……むう、それはそうかもしれないませぬが……七海くんとかち合えばその子とて無事に済ませぬぞ」

その気迫に気圧されそうになる美代だったが、迷いはそう簡単に拭いきれない。彼女が争いを好まない人だというのは、先のやちよとの会話で確認済みだ。

いろはとて、それは願わぬ事。手伝ってもらおう手前、彼女は危険な目は晒したくは無  
いという気持ちは強い。

——だからこそ、考えがある。

「だから、こう伝えて欲しいんです。『ドローンが見えなくなるまで足止めするだけでいいから、怪我しない程度にやり過ぎして』って」

「……………」

あんまりな、無茶振りに等しい指示に、美代は絶句。

襟の中で隠れている口があんぐりと、開いていた。

だが、よくよく考えれば、そう伝える意味はあるかもしれない。

美代の腹は——ある意味ヤケクソ気味に——決まった。ある連絡先を入力すると、通話ボタンを押して、

「……もしもし、鶴乃くんですか」

賭けに出た。

☆

ドローンの影が旧商店街内の道路に入ったのを確認した七海やちよの判断は早かった。

直前で左側に迂回すると、神浜中央農林公園に入った。中央に湖が有り、木々や芝によつて、緑が溢れる広大な公園だ。

（旧商店街を抜けた先にある神浜運動公園と比較すると、幾分か規模は小さい）

平日である為、人は疎らだが、散歩途中の老人がベンチで休憩していたり、若者がジョギングしていたり、母親が、子供を連れて気晴らしに訪れている姿をちらほら見かける。

治安維持部の魔法少女たるもの、一般市民の平穩を妨げる様な真似をしてはならない。よってやちよは、人目に付きやすい歩道コースは避けて、林の中を突っ切る事に決めた。

木から木へと飛び移っていく姿は、猿や蝙蝠より遥かに俊敏で、漫画やアニメに登場する忍者に近い。

(少し急ぐ必要があるけど……仕方ないわね)

ドローンは旧商店街の上空を真っ直ぐ進んでいった。よって、現在農林公園内に居るやちよの視界にドローンの姿は無い。

なので、少し足を早めて、此処を突破し、ドローンが旧商店街を出る前に、出口付近まで回り込む必要が有る。

(それに……)

念の為、後ろを振り向くが、いろはと美代の姿は無い。魔力反応すらも感知できない事から、距離はかなり離れている筈だ。

自分が圧倒的に優勢である——にも関わらず、危惧している事が、一つだけ有った。

(問題は『鶴』ね……)

脳裏に過る、一人の少女の姿。自分とは尽く対極に位置する、猛虎の如き魔法少女。

恐らく美代のことだ。声を掛けている可能性は高い。此処は急いで突破しなければならぬ。魔女との戦い以外で、魔力を消費する真似はしたくなかったが、仕方ない。やちよはそう思うと、木の幹に付いた両足から魔法陣を展開——瞬間、加速!! ジェット噴射の如き爆発力で、グンと飛び立つ。

しかし——

「七海やちよおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

突然が、獣の如き咆哮が、空気を震撼させた。同時に凄まじい波動が発生し、木々を激しく揺らす!

「!?」

ロケットと化したやちよが、それに制止された。地面に足を付くと、周囲をキョロキョロと見回す。

刹那——

「!!」

キューーン! と、やちよの脳裏に一筋の閃光が走る。まるで某機動戦士の二〇一タ  
○プの様な反応だが、真上に魔力反応と気配を察知した。

咄嗟に顔を上げると——薄い服装の魔法少女が『大』の字の形をして降ってくるではないか！

避けようとするやちよだったが、視界に縦二文字の赤い閃光が走った。それが攻撃だと気付いた瞬間、やちよは反射的に携えていた槍を横向きに構える。

ガキインツ!! と、けたたましい金属音が鳴り響いた。

「……で会ったが百年目っ!!」

「……っ!!」

そう叫ぶ魔法少女の顔をはつきりと視認した途端、やちよは忌々しそうに唇を噛み締める。

丸い栗色の瞳に、右側に長いサイドテールを作った長い茶髪、そして、スラリと細い肢体に纏わされた、活動的な中国風衣装——間違いない。

『鶴』ね！

「積年の恨み、晴らしてやる!!」

『鶴』と呼ばれた中国風衣装の魔法少女は、怒りに満ち溢れた声を張り上げると、両手に携える武器——扇に力を込めて押し付ける！

やちよの槍とギリギリと擦り合わさって火花を散らした。薄暗い林の中で、二人の間だけが、まるで太陽が出現した様に瞬く。

「此処は、市民の憩いの場よ……!」

やちよが『鶴』の顔をじつと睨みつける。

「貴女のそれは、此処を焦土に変えてまで達成しなければならない事なのかしら?」

「くっ……!」

氷の眼差しで訴えると、『鶴』の顔が、僅かにだが、苦々しく歪んだ。

「ほざけっ!! あんた達市役所の使い走りがっ!! 二年前に商店街の皆に何をやったのかっ?! 忘れたなんて言わせないっ!!」

「っ!!」

やちよはそこで槍を持つ手に力を込めて、押し退けた。バアンツ!! と、弾ける様な爆裂音が響いて『鶴』が弾き飛ばされる。

だが、彼女は空中でクルリと旋回! 即座に態勢を直すと、空中で魔法陣を発生させて、それを足蹴にして突進する!!

紅蓮の魔力を纏い猛突進する『鶴』の姿は、まるで戦車の榴弾だ。真面に受け止めた場合、槍が耐えられない……いや、それ以上に、自分の身体が焼き潰される!!

そう危惧したやちよは『鶴』の顔が視界を埋め尽くした瞬間に、バツと横に飛んで転がった。

『鶴』が芝生に直下すると、ドオンツ!! とまるで爆発の様な激しい音と煙が発生!!

(なんて威力……っ！)

その衝撃の威力は真近に居るやちよが存分に味わった。全身がピリピリと痺れて、呆然と見つめてしまう。

——暫くして、煙が晴れると、屈んだ状態の『鶴』の背中が見えた。彼女の直径1m辺りの芝生が焦土どころか、地面が軽く陥没していた。

「美代さんは、『適当にやり過ぎせ』って言ったけど……」

「……」

やはり、彼女が動いたのは美代の指示か。しかし、だとすると、どうして自分の居場所を知り得たのか——気になったやちよは目を細める。

「わたしは、そんなつもりは無い。あんたはここで……潰す!!」

背中越しに聞こえてきたのは強大な憎悪と、怒り。まるで鬼神の如き威厳と迫力を携えた『鶴』が、ゆっくりと立ち上がる。

「わたしと、戦え……っ!! 七海やちよ……っ!!」

ギロリと剥いた瞳の中で紅蓮の光が炎のように激しく揺らいでいた。

やちよは顔から表情を消して、凍り付いた瞳で彼女を見据える。槍を構えてじっと待

っ。

それを臨戦態勢と受け取った『鶴』は、両手に紅蓮の魔力を纏わせた扇を広げて――突進した！

衝撃が発生し、林を大きく震撼させた。



## FILE #08 全ては“勝利”の為にっ！

☆

市役所屋上————そこではピーターが一人佇んでいた。足元には袋詰めの小さなキユウベえが居る。

前方の縁への方から、スタツ、スタツと二つの足音と同時に、魔法少女が姿を現した。

——環いろはと、朝香美代だ。

まさか、短期間で『答え』に辿り着いたのか、それとも——

「おかえりなさい、二人共」

にこりと、笑みを浮かべて迎えるピーターだが、その瞳は鋭利な眼光を放っていた。

「帰ってきたってことは、降参ってことでもいいのかしら」

「いいえ」

即座に美代が否定。次いでいろはが告げる。

「私達は『勝つ為に』、ここに戻ってきたんです」

はつきりとした口調と、表情からは一片の迷いは無い。ピーターは笑みを浮かべたまま、いろはの方を注視する。

「みたままさんから最後のキーワードを貰って、答えに辿り着きました」

「ここがドローンの着陸地点ですね？」と問いかけると、ピーターは観念した様に、ふう、と溜息を吐いた。

そして、パチパチと、小さな拍手を送った。

「正解よ」

よもや、ここまで早く見つけ出すとは思えなかった。やはりこの少女は只者では無い。い。

みたまも、さぞや驚いた事だろう——そう考えると、自然と笑みが顔に浮かんだ。しかし、

「でも、やつちゃんはどうするの?」

まだ終わりではない。七海やちよを足止めしなければ確実にこの場所で衝突する事になる。

それを暗に込めて問いかけるが、いろはと美代の顔から自信は崩れない。既に対策済みの様だ。

「鶴乃さんって人にお願ひして、足止めして貰っています」

『鶴乃』——その名を聞いて、ギョツと目を見開くピーター。いろはの策は、ある意味、禁じ手である。

「あっちの方で、野蛮な展開にならない事を祈るばかりね……」

「怪我しないようにって、伝えているから、多分、大丈夫だと思えますけど……」

呆然としながら、心配そうにボヤクピーター。鶴乃とやちよがぶつかれば、ゲームどころでは済まなくなる可能性が有る。

二人の因縁を余り知らないいろはは、苦笑いを返すしかない。

「いろはくん、ドローンですな!」

!!

と、そこで美代が声を張り上げた。慌てて振り向くと、美代が注視していた前方の上空に小さな黒い飛行物体が見えた。

——バラバラと、プロペラが旋回する様な音が聞こえて間違いない、と断定する。

同時に、全身を電撃が走った!

「美代さん……っ!」

「承知しておりますな……っ!」

二人の顔に緊張が走る。プレッシャーが錘となつて胃の中に落とし込まれた。

横並びになると、互いに武器を召喚。いろはの右手首にはボウガンが装着され、美代は、護符を手の中に出現させると、強く握り締める。

二人は、臨戦態勢を構えると、電撃の発生源を、じっと待つ。

「まさか、スタート地点だったなんてね」

——やがて、ドローンが来るよりも早く、その人物は、屋上に足を付けた。

「完全に盲点だったわ」

ピーターさんにしてやられたわね。と呟く彼女の声は鈴の様に綺麗でか細いが、揺るぎない闘志が存分に込められていた。

「七海部長さん……っ！」

ゲーム前に彼女に痛めつけられた記憶がフツと通り、恐怖で視界が揺れ始めた。

（でも……！）

だが、今は一人では無い。隣に美代もいるのだ、とそう思う事でなんとか視界の揺れを抑えつつ、やちよの姿を中心に焦点を合わせる。

「自分の力では無く、街の魔法少女で足止めなんて、随分卑怯な手を使うのね」

これはどちらの策かしら——と、睨みつけてくるやちよ。その絶対零度の眼差し

にいろははウツと息を飲む。

「……………」

「このゲームにそんなルールはありません。故に、卑怯ではありません。」

たじろぐいろはの隣で、美代が即座に反論。

「ただ、鶴乃くんが突破された事が……信じられませぬ。一体、どんな秘術を？」

「それはね——」

やちよは淡々と説明を始めた。

☆

時間は、少し遡る——

「しゃっ……灼アアアアア!!」

掛け声と同時に鶴乃が、やちよに更なる追撃を加える。

両腕を広げると、右腰をグツと捻ってから旋回!! 遠心力を伴って威力が倍加した紅蓮の扇をやちよに叩きつける。

「く……っ!!」

先端で受け止めるやちよだが、その表情は苦々しい。鶴乃の攻撃は一つ一つが重く、受け止める度に両腕の骨にまで衝撃が走ってくる。

加えて素早い上に、苛烈!! これ以上は長く持ちこたえられそうにない。何処かで隙を見つけて、早めに勝負を付けなくては——!

「噴っ!!」

「っ!?!」

そう思った矢先に、両腕がフツと軽くなった。

鶴乃が攻撃した際に、自動的に下になった左手の扇を一思いに振り上げて、自身の槍を弾き飛ばしたのだ。

「奮っ!!」

驚愕に目を見開く間も無かった。隙有り判断した鶴乃の蹴りが飛んでくる! 咄嗟にガードするやちよ。

(上と下はガードしてみたんだけど……)

蹴りを飛ばしながら鶴乃はその姿勢を注視。右肘を折り曲げて上腕で頭部を、右膝を

高く上げて下段を護っている。

(ボディがガラ空き!!)

方向性が決まった! グンツと足を伸ばす。鋭い爪先がガードの薄い腹部へと――

「っ!？」

突き刺さることは叶わなかった。寸前で本能が危険を察知して、鶴乃は足を引っ込める。

(『蹴り足挟み殺し』かつ!?)

やちよの体勢をもう一度注視する鶴乃。単なる防御の様に見えて、実は攻撃の構えで有った事に気付いた。

それは空手の高等防御法――上段と下段をガードし、ボディは全くのガラ空きだと相手に思わせて、蹴りや拳をそこに誘い込む。そして、直撃する寸前で、肘と膝で挟み込んで押し潰すという、難易度の高い技だ。

今さつき蹴り飛ばした足は、後少しで、肘と膝の間に入るところだった。危ない。自分の勘の良さに感謝する――

「っ!？」

間もない。攻撃を止めてしまった事が隙になった。一気にやちよが肉薄してくると、

右手の掌底が、顔面に迫る！

咄嗟に顔を横に傾けて回避するが、胸ぐらを左手に掴まれた。

「やばっ!!」

次いで右手も胸ぐらを掴んでくる。これは拙い、と思ひ、抵抗するべくその手を掴もうとする鶴乃だったが——それよりも早くやちよは一本背負いの要領で鶴乃を後ろに投げ飛ばした!!

そのまま、背中から木に直撃!!

バアッ! と手榴弾が弾けるような爆裂音が響いたと思うと、次の瞬間には、木の幹がメキメキと音を立てて——根本からポツキリと折れた。

ドスンッ! と音を立てて、地面に横たわる。

鶴乃も合わせる様に、地面にうつ伏せに倒れ込んだ。

「……くそっ!」

背中を強かに叩きつけられた事で、全身に痺れが走る。

思わず毒づく鶴乃だが、両手を地面に付いて、なんとか立ち上ろうと身体を起こすが、  
「……もう済んだことよ」

「っ!」

直後、そのザマを、冷ややかに見下ろすやちよから、鋭利な言葉が飛んできた。



耳に突き刺さった途端、鶴乃の動きが、止まる。

「私を倒した所で、意味は無い」

「……っ!!」

やちよは平然と近づくと、槍を拾い上げて、淡々と告げる。

その酷薄に満ちた言動と態度が、鶴乃の怒りを更に湧き上がらせた。ギリギリと歯軋りすると、キツと強い眼差しを向けて、訴える!!

「無くは無いッ!!」

そう叫んで見開いた瞳の奥の闘志は、未だ衰えずに激しく燃え上がっていた。

やちよの顔は一切の感情を削ぎ落とした様に凍り付いていたが、瞳はじつと鶴乃の顔を捉えている様だった。

「あの時……わたしは……商店街を守れなかった」

両手に精一杯の力を込めて、なんとか身体を起こす鶴乃。

「自分の事に手一杯で……ようやく抗う力を手にした時には、もう全部、終わってた……」

言ってから、当時に味わった悔しさが猛烈に頭を叩きつけてきた。ギュツと握り締めた拳が、震える。

「止むを得ず店を畳んだ人、商店街を去ってしまった人、諦めて家族の元へ帰った人を、

たつくさん見てきた……」

その灼熱の眼差しには、最大級の怒りが込められていた。しかし、やちよの凍てついた表情は全く溶ける素振りも見せない。

能面のまま、何も言わずに、鶴乃の言葉を聞いている。

「みんな優しかった……暖かくて良い人達だった!!」

だが、瞳を通して放たれた鶴乃の熱は、やちよにじわじわと伝わっていた。

お前たちはそれを消し去ろうとしたのだと、商店街から日溜まりを奪ったのだと――

――籠められていた。

やちよの額に一筋の汗が垂れる。気圧されたのか、半歩、足が退いていた。

「あの時の後悔を二度としたくないし、もう誰にも味わわせたくない!!」

「っ!!」

その言葉に、やちよは息を飲む。能面だった表情が驚愕に染められた。

当然であろう、何せ鶴乃の今の言葉は――――先ほど自分が美代に告げたものと全く同じ『決意』だったのだから――――!

鶴乃は更に灼熱を吐き続ける。

「確かに過ぎ去ったことかもしんないけど……今も、商店街の皆は怯えてる!! 市が、あんたたち治安維持部が……いつか、本格的に此処を潰しに掛かるかもしれないって!!」

だから、わたしは——!!

鶴乃はそう付け加えると、全身に紅蓮を纏わせる。

「絶対に、あんたを倒すっ!! そうすれば、神戸市 “最強” の魔法少女はわたしだ!!」  
ジリジリと、滲み寄る鶴乃。一步進む度に、足元の草花が焼き尽くされて、プスプスと硝煙を漂わせる。

「商店街の皆にとつての “英雄” になれるっ!! みんなが希望を持つてくれる!!」

そこで、両膝をグツと屈めると——勢いよく飛んだ!! 業火を纏わえた鉄拳がやちよの顔面に迫る。

「みんなが、安心して暮らせる様になるんだあああああああ!!」  
「くうっ!!」

やちよが咄嗟に反復横跳びの要領で避ける! 背後の木に紅蓮の拳が衝突した!!

瞬間——やちよが思わず瞠目する様な光景が映り込む。

木の下半分が、弾け飛んだ。

支えを失った上半分が、まるで蹴られた空き缶の様にクルクルと回転しながら遙か彼

方へと飛んでいく。

「……」

「思い知れ七海やちよ!!」

「っ!!」

呆然と眺めていたやちよだったが、即座に怒号が飛んできて、ハツと振り向くと——  
——既に鶴乃の右拳が迫っていた!!

「これは川野のばあちゃん分だああああああああ!!」

もう避けられない! そう思ったやちよは頭から『逃避』の二次を消し去った。

覚悟を決めて顔を顰める。鶴乃に一步足を踏み込むと——掌底!!

「なあっ!」

それが右肩に叩き込まれたせいで、鶴乃の拳がやちよの眼前で止まった!

まさかこんな形で攻撃を止められるとは思ってなかった鶴乃の顔が、驚愕に染まる。

隙有りと見たやちよは、身体を屈めて足払い。見事に足元を掬われた鶴乃は空中でひっくり返り、背中から地面に転げ落ちる。

その間にやちよは、バックステップで2 m程距離を置いた。

「くうっ……まだまだだああああ!!」

だが、即座に立ち上がると、猛烈な勢いでやちよに突進する。

「……………」

だが、彼女は構えていた槍の先端をスツと下に向けると、同時に臨戦態勢を解いた。その姿に、鶴乃が目を見開く。

相手が明確な攻撃の意図を持って迫っているのにも関わらず——彼女はゆつたりとした動作で、地面に槍を寝かせると、自分もまた両膝を地面に下ろした。

「……ッ!!」

異様に不可解な行動に愕然となった鶴乃は、彼女の眼前で思わず足を止めた。

綺麗な正座の姿勢を取るやちよの表情は能面で、その行動の意図が伺いしれない。だが、何か意を決した様にも見えて——

そう思った瞬間、やちよが自身に向けて、深々と上半身を倒した。

「あっ!! えっ!! ええっ!!」

先程まで死闘を繰り広げていた相手が、突然戦いを止めて、土下座——!?! 全く理解出来なかった。鶴乃は困惑して、素っ頓狂な声を挙げ続ける。

「『鶴』……いえ、由比鶴乃さん、お願いが有ります」

地面に付くぐらいに頭を下ろしたやちよが、静かに丁寧な言葉を発する。鶴乃が目を細めた。

「何っ!? 降参して、見逃してもらおうって訳!?!」

「いえ、降参はしない。でも、見逃して欲しい」

「はあっ!？」

僅かに頭を上げて、そんな事を言うやちよ。鶴乃がそう驚くのも当然の反応と言えた。

「お願いします」

グツと頭を下げるやちよ。だが、鶴乃の怒りは収まらない。

「ふざけるなっ!! 承諾できる訳ないでしょっ!？」

睨み下ろして怒声を張り上げるが、やちよの姿勢は変わらない。

「誤ちを繰り返したくないのは、私も同じです……!？」

「っ!？」

静かに返された言葉に、鶴乃はハツとなる。

「お願いします……っ! 行かしてください……っ!？」

頭を地面に擦りつけながら懇願するやちよ。鶴乃は、じつとその姿を見つめている。

どこかで見覚えのある姿に見えてならなかった。

これは——

「このままだと、一人の魔法少女が、神浜に縛り付けられてしまう……っ！」  
考えていると、やちよから震えた声が飛んできた。

「……だから？」

「最悪、死ぬことになるかもしれない……っ！」

「あんたに……っ！」

ギリツと音が出るくらい、齒を噛みしめる鶴乃。握り締めた両手の拳がワナワナと震えている。

「人の心配をする資格が有るっていうの……っ!? お爺ちゃんのを潰そうとして……仲間を二人も死なせて……相棒とも喧嘩別れした……あんたが……っ!!」

鶴乃の声は未だに怒りに満ちていた。やちよの下げたままの顔が、苦々しく歪む。

——やはり駄目だったか。

自分と彼女は似ている。同じ思いを抱えて、貫こうとしている。

だから、理解してもらえないかもしれないと希望を抱いたのだが……。

諦め掛けるやちよだったが——

「……………分かった」

時間にして5分程間を置かれてから——鶴乃の口からそんな言葉が呟かれた。

「!」

バツと、顔を上げる。

「……行ってよ」

見上げた先の鶴乃の頭上には陽が刺しており、逆光のせいで顔が影に覆われてしまつていて伺えない。

だが、やちよは気付いた。鶴乃の声色は静かだが、一片も怒りは含まれていなかった事に。

「……止めなきやなんですよ。だったら……きつさで行けばいいじゃない……」

透き通った声色を聴きながら、やちよは、ゆつくりと立ち上がる。

「ありがとうございます」

ペコリと、背筋を直角に曲げて、礼儀正しくお辞儀するやちよ。

そして、上体を起こすと、鶴乃に背を向ける。

「恩に着るわ」

最後に、それだけ伝えてから、走り去った。



## ☆

「そんなことが……」

やちよの話はそれで終わりだ。舞台は再び市役所屋上へと戻る。

話の全てを聞き終えたいろはの顔は、複雑に歪んでいた。まさか、二人の間にここま  
で根深いものが存在していたなんて思いもよらなかったのだ。

そう思うと、やちよ、鶴乃双方に申し訳ない気持ち芽生えてきた。

「あとで、万々歳に寄ってあげなくっちゃね」

話し疲れたのか、ふう、と溜息を吐くやちよ。

「鶴乃さんとは、過去に一体何が……？」

「教えてあげるわ」

私に勝てばね、と言った瞬間——やちよの眼光が蒼く光る。同時に姿がフツと消

えた。

「え？」

目を丸くして呆気にとられるいろはだが、

「いろはくん、上ですな！」

「!!」

直ぐに美代の声が耳朵を叩いた。

刹那、頭上に気配。見上げると——自分達を飛び越えているやちよの姿が有った。

彼女はそのまま、驚愕する二人の真後ろに着地、既に100m先に着陸を終えたドローンに向かって、直進！

「美代さん！」

やちよをなんとしても止めなくては。

振り向き、右手首に装着したボウガンを構えると、隣の美代に声を掛ける。

「承知っ!!」

美代も両手いっぱい護符を握り締めると、威勢よく返事をした。

闘志を滾らせた二人の瞳が、やちよの背中を睨み据える。

「っ!!」

バシユツと何かが発射する音が響いた。

やちよが後ろを振り向くと、一本の矢が迫ってくる。咄嗟に槍を構えて身構えるやちよだが、それは彼女の脇を横切ってしまう。

(狙いが甘いわね……っ！)

そう思っていると二度目の発射音。今度の矢は、正確に自分に迫ってくる。

先端に美代の護符が刺さっているのが気になったが、やちよは槍を横振りして——  
—カナンツ！と、弾き飛ばした。

直後、護符から煙幕が発生!!

やちよの全身が白い煙に包まれる。

(なるほど。私の視界を遮って混乱させようって訳ね……でも)

これでは、いろは達も自分の姿が見えない筈だ。白煙はどんどん広がりを増していくので、向こうも狙いを定めるのが難しい筈。それに、自分はドローンの位置も特定している、

よつて、この攻撃は全くの無意味——

「っ!」

に思われた瞬間——やちよの顔が驚愕に染まる。

前方を覆う白煙の一部が揺らいだかと思うと……いろはの矢が飛んできた! 明後

日の方向ではなく、正確に、自分に向かって!!

くつ、と苦い顔を浮かべて槍の先端で弾き飛ばすやちよ。

(まぐれ? それにしては……)

思考する間もなく白煙から次々というはの矢が飛んでくる。狙いが定まっていた。やちよは槍を旋回して、尽く弾き飛ばす。

いずれの矢の先端にも護符が突き刺さっており、弾く度に白煙が発生して、視界がどんどん遮られていく。その都度、槍を振って先端で切り払い、視野を広げる。

一進一退の攻防が繰り返されていった。

一方、いろははというと……

「いろはくん、11時の方向ですな!」

「はー!」

直径10mにも広がる白煙。やちよの姿なんて二人の目には全く確認できない。

しかし、美代にはやちよの居場所が分かっていた。白煙のある一方を見つめて、隣のいろはに指示を出す。

「その角度で、右に微調整しつつ連射ですな!」

「はい！」

バシユツバシユツ！ とボウガンから矢を連射するいろは。

——最初は、同じ魔法少女を傷つけてしまうかもしれない、と躊躇いを見せた彼女だったが、そこで美代がアドバイスをくれた。

今、彼女が飛ばしている矢は、対象に当たっても刺さる事は無い。但し、確実にダメージを与える特殊なものだ。

——一方、やちよは……

「どうして……!?!」

弾き飛ばしながら思索していた。いろはは正確に自分の位置が分かっている、そのクラクリを。

「もしかして……!?!」

ふと、ある事に勘付いた。

先程、鶴乃が襲撃した時も、どうして彼女が自分の位置を特定できたのか気になった。そういえば、戦っている最中どうも、踏み込んだ時に力が上手く入らなかった事を思

い出し——鶴乃と分かれた後、靴底を確認すると、有った。

美代の護符——『発』と表記されていた——だ。クラウチングスタートの姿勢を取った時に、貼り付けられたのかもしれない。恐らくこれを発進機代わりに使っていたのだろう、とやちよは推測。

すぐに剥がして、バラバラに破り捨てた筈だったのに——

「まだどこかに、貼ってあるっていうの……!?!」

ヒュンヒュン飛んでくる矢を槍で弾き、或いは躲しながら、自分の身体中に目を回す。

そこでふと、股下が気になった。上体を倒して両足の間を覗き込むと——

「あつた……!」

スカートの内側に、美代の護符が一枚、ペタリと貼り付けられていた!

なんとという不覚! やちよは苦々しい表情を浮かべると、即座にひつぺがして槍の先端でひと思いに切り裂いた。

途端に、白煙越しに飛んでくる矢は正確性を失い、明後日の方向へ向かっていく。

「よし、これで——!」

私の「勝ち」だ——そう確信したやちよは、後ろに振り向くと同時に槍を振って白煙を切り開いた。

視界を明確にしながらドローンの方へと、一心に走る!

「っ!？」

が、ドローンの着陸地点に辿り着いた瞬間——やちよの顔が驚愕に染まった。

「無い……う？　一体、どういうこと？」

心底困惑に満ちた様子で、誰にでも無く独りごちる。

それもその筈、着陸地点と捉えていた場所から、ドローンの姿が忽然と消えているのだ。

「オーライ、オーライですな〜!!」

刹那——背後から美代の声がして、ハツと振り向いた。

同時に、プロペラの回転音が聞こえてきて、ギョツとなる。慌ててやちよは、音の方  
向へと直進!!　白煙を切り払うと、その光景がはつきりと確認できた。

「っ!!」

思わず口を開けて呆然と見つめてしまうやちよ。

白煙の先に映ったのは……あろうことか、ドローン进行操作して、自分の元へ引き寄せ  
ようとする美代の姿だった。

彼女の手元にあるのは、ピーターのスマホではなく、一枚の護符。それを指でなぞつ

てドローンを動かしている。

(まさか……っ!!)

やちよは目を細める。

—— 一番最初にいろはが飛ばしてきた矢は、自分を外れた。いや、正確には、狙いは自分では無かったのだと確信した。

(よく見なかったけど、あれにも美代さんの護符が付いていたとしたら……!)

一番最初の矢の狙いは、ドローンだった。

自分の脇を通過したものが、それに直撃して、美代の護符——『操』——を貼り付けたのだ。

(小賢しい真似を……!)

狐の様に細められた瞳が、研ぎ澄まされた刃物の様な光を瞬く。

眉間に皺がグツと寄った。やちよの顔にじわじわと、怒りの感情が表現されていく。

よもや、他所から来た新顔と、治安維持部で無い魔法少女にここまで手を焼くとは思わなかった。

部長としてのプライドが傷つけられた気がして、腹立たしい。

自然と、槍を握りしめる手に力が籠められた。あまりの力強さに槍がミシミシと静かに悲鳴を上げている。



刹那——やちよはバツと飛び出した!!

「オーライ、オーラ……っ!?!」

上空を舞うドローンが美代の真上で静止して、ゆっくりと降下を始めた矢先だった。

——殺気がして、美代の身体がブルリと震える!

咄嗟に前方に目を向けると、恐ろしい形相をしたやちよが眼光を蒼く瞬かせて、猛烈な勢いで迫ってくるのではないか!!

「ひよえええええええ!!?!」

悲鳴を上げる美代。1m手前でやちよが飛んだ!

「のわっ!!」

顔をぐにっと踏んづけられる。やちよはそれを踏み台にして更に高く飛翔!

ドローンを両手でキャッチした。

「無念……」

顔面に真っ赤な足跡を付けた美代が、両目をぐるぐるの渦巻きにまわして、バタリと仰向けに倒れ込む。

やちよはというと、少し離れた位置で、着地。ドローンを天高く掲げて、

「私の勝ちよ」

と、勝利宣言した。

しかし——女神は彼女に微笑まなかった。

「いいえ！ 勝ったのは私です!!」

毅然とした少女の声、耳朶を叩いて、やちよは啞然となる。

———そういえば、ドローンに集中し過ぎたせいで、いろはの事をすっかり見落としていた。彼女は一体何をしていたのだろうか。

声の方向を、恐る恐る振り向くと———そこに居たのは、どこか諦めた様に苦笑いしながら、ペタリと床に尻もちを付くピーター。

そして、その背後で仁王立ちしているのは———!!

「環、いろは……!!」

声を震わせて、その名を呟くやちよ。やちよと同じく、いろはもあるものを天高く掲げていた。

それは———袋詰にされた小さなキュウベえ!!

「ピーターさんっ!!」

これは一体、どういうことだと、ピーターに訴える。

「ごめんなさいやっちゃん。取られちゃった」

やっぱり魔法少女には敵わないわね、とピーターは頭を小突いて、ペろりと軽く舌を出す。

俗に言う「テヘペロ」の顔であるが、そんな気色悪いものを視界に入れてる間は無い!

既にいろはは、袋を開けて、小さなキュウベえに触れようとしていた!

「ま、待ちなさい!!」

咄嗟に走り出すやちよだが、距離が大分離れており、間に合う筈もない。

——そして、いろはの手が、それに触れた。



## FILE #09 生き場を失った心 —七海やちよ

## 編 終了—

☆

流れ込んできたものが、脳の隙間に入り込んでいくと、自分の視野いっぱいには、コマ送りみたく次々と映し出された。

何れもが見たことのある映像で、『自分のもの』だとはつきり認識した。

——『あの子』は、先天性白血病だった。

生まれてから、たった一ヶ月でそう診断された。

それからというものの、『環』の家で家族と過ごした時間はごく僅か。人生のほぼ全てを病院で過ごす事を余儀なくされたのだ。

里見灯花と終ねむがいる。院内学級で彼女達と一緒に勉強と励み、林檎を割った甘酸っぱい臭いが漂う優しい、陽だまりの様な世界。

でも、あの子に取っては………牢獄の様な世界だったのかもしれない。

だから、出してあげたかった。自由な外の世界へと羽ばたかせてあげたかった。

だって、『あの子』は願ったのだから——！！

『おねえちゃんといっしょに、学校に行きたい』って——！！

——おねえちゃん？

そうだ、『あの子』は、自分の事をそう呼んでいた。私にとって大事な家族だった。世界一の宝物だった。

『お願い、病気を治して……！ 元気にしてあげて！』

だから、『妹』を救うためなら、どんな犠牲も厭わなかった。私は全てを捧げるつもりでそう願ったんだ。

あの子の、あの子の名前は——！！

おねえちゃん

わたしはね

- と一緒に、学校に行きたかった。
- と一緒に、買い物に行きたかった。
- に、オシヤレを身に着けさせてあげたかった。
- と一緒に、外で思いつき遊びたかった。
- と一緒に、料理を作れたかった。
- に今度こそ、ちゃんとしたハンバーグを食べさせてあげたかった。  
でも、なにより——
- と一緒に、家族みんなでもう一度、笑い合いたかった。

“死神” と会う約束があるの

ある陣地の争奪で

春が物騒がしい明暗と共に還ってきて

林檎の花々の香りが宙を満たすころに——

いつもの『終わりの言葉』に、初めて続きが付け加えられて、聞こえてきた。  
途端、世界が暗転した。



☆

ガウン、ガウンと——無機質な機械音が耳を叩いて、目を覚ました。

ああ、前と同じだ。あの知らない白衣の男性が居た場所の様な、全く知らない世界へと放り込まれた。

そこは、まるで工場の管理室の様な場所だった。

前方には広大な窓ガラスが有り、白衣を纏った、研究員の様な女性が中央に立つて張り付き、向こう側をじつと眺めている。腰まで伸ばされた茶髪が、天井に設置された大型エアコンの温風に吹かれてユラユラと、漂うように揺れていた。

身体が小刻みに震えている。よく見ると、立っているのもやつとの状態に見えた。今にも崩れ落ちそうに、ガタガタと震える足を、杖や補助具も使わず、その強靱な意志の強さだけで支えていた。

周囲を見渡すと、無数のデスクの上に、見たことも無い機械やコンピュータが並んで

いたが、何れのモニターの中では砂嵐が巻き起こっていた。

窓ガラスの前の女性以外に他の研究員らしき人の姿は見当たらない。放置されたデスクの上には幾つもの書類が乱雑に置かれて――

字面を見て、ゾクリと、背筋が震えた。

まるで、親に構ってもらえなくて癩癩を起こした我儘な子供が、怒りの赴くままに暴力的に書き殴られた文字で、埋め尽くされていた。文脈の規則性も皆無で、蛇が這い回した様な字は、何を意味しているのか、全く読み取ることができない。

（――！！）

目を震わせて眺めていると、一枚のA4サイズの紙が目についた。

それだけが、全く異なってみえた。

自分の手が、引き寄せられるように伸びて、ぎゅうつと掴んだ。

顔の直前まで持つてきて、文面を確認する。用紙の中央で、柔らかな正楷書体で書かれた文字を、小さな声で読み上げた。

『PROJECT : MAGIA RECORD』

——戦慄した。

頭の中身が頭蓋を内側から叩き割らんばかりの勢いで荒れ狂う。胃の中の酸液がグラグラと煮えたぎってきて、猛烈な不快感と同時に吐き気が喉元まで迫ってきた。

——なんだ、これは。

これは、本当に、わたしの記憶なんだろうか。

だったら、この場所は、なんだ。全く見覚えが無い。

——でも、この文字列は、知っている。

だけど……これが、なにを意味しているのか、思い出せない。

わたしは、一体、何を見ている。

この悪魔の夢の中の様な管理室で、わたしは、一体、何を知っている？

「くふっ」

唐突に、含み笑いが耳朶を叩いた。

持っている用紙を顔から外して、聞こえてきた方向へ咄嗟に振り向く。

あの女性からだ。背中を向けたままだが、未だ眺めている窓ガラスに顔が映り込んで

いた。

今にも枯れ果てそうな老婆の様に、皺まみれの衰弱しきった顔の下で——口の両端が吊り上がり、残忍に溢れた愉悅を滲ませている。

呆氣に取られたままそれを注視していると、自然と、ガラスの向こうの景色も伺えた。巨大なクレーンがゆっくりと降下していく。

見えなくなった途端、ずぶりつ、ぬちやり、と気色悪い生々しい音を、静かに響いた。一拍間を置いてから、上昇していく。

大量に掴まれた赤いものを見て——その場で吐きたくなくなった。

生肉だ。鮮血が、濡れた雑巾を絞った様に、びちやびちやと流れ落ちている。

両手で口を抑えて、膝を床に付いた。心の底が冷え付き全身がガタガタと震えて、これが自分の中にあるものだと思えたく無かった。

だが——何か胸の内側から訴えている様に感じた。

これは紛れもなく、お前的一部分のだと、目を背けるなど、叫んでいた。

だから、怖くて怖くて仕方ないのに、目を逸らせなかった。

「<sup>ものみな</sup>一切はただ火炎なり」

そこで、ガラスに映る女性の両唇が、ゆっくりと上下した。

「天空覆いて限なしくま

四方および思維しゆい

地上にも空隙存せず

一切の暗き大地は

悪人みな遍満す

われいま帰するに所なく

孤独にして同伴なし

悪所の闇中に在って

大火災の聚なに入る

我は虚空の中にして

日・月・星を見ざるなり」

それは、彼女自身の言葉というよりも、誰かの言葉を引用したかの様だった。

「日月巡りて年経るとも

大火ありて汝が身を焼かん

汝痴人にして悪をなせり

いま何をもつてから悔いを生ぜん

これ天・修羅・健達婆けんだつぱ

竜・鬼のなすにあらざるなり

自業の羅あみに繫縛けばくせられたるなり

人よく汝を救うものなし

もし大海の中にして

ただ一掬ひとすくの水を取らんに

この苦は一掬のごとく

後の苦は大海のごとし」

攀られる様に自分の口が動いて、そう返した。

意味は分かかってない。しかし、頭にフツと過った。胸の内側で叫んでいた誰かが、これを言え、と差し出した様だった。

それは彼女が呟いた台詞への明確な反論とも聞こえた。

『罪を犯した人が身に受けるこの地獄の生存は、実に悲惨である。だから人はこの世に

おいて余生のあるうちになすべきことをなして、ゆるが 恕せにしてはならない』

女性が続けて吐き出した言葉は、聖人の教唆というよりは、尊大なる覇者が自らの悪業エゴを正当化する為の詭弁の様に聞こえた。

それに対する反論も、即座に口から出てきた。

『地獄の苦しみがどれほど永く続こうとも、その間は地獄にとどまらねばならない。それ故に、ひとは清く、温良で、立派な美徳をめざして、常にことばとところをつつしむべきである』

言いながら、疑問に感じていた。

果たしてこれらは本当に自分の言葉なんだろうか。

今この時だけ、誰かが自分の身体を乗っ取って言わせているんじゃないだろうか。

その思考は、自身の内側に居る「誰か」にも投げかけるつもりだったが、そこから返事は帰ってこない。

「唾棄すべき思想だ、反吐が出る」

女性が振り向き、そう吐き捨てるのと同時に、ギロリと、剥いた目を見せた。

強く見開かれた瞳から、爛々と紅蓮の光が瞬き、自分の心を焼き焦がす様な意志の強

さを放っていた。

「たまき」

呟かれたのは自分の名字。

たった3文字だが、身を震わす程の憎悪と侮蔑が存分に乗せられていた。

——向き合え。

誰かがそう囁いた。

だから、自分も、恐怖心に押しつぶされそうになりながらも、女性を強く見つめ返した。

「おまえは、そこにいろ」

女性の笑みが、ニタリと歪む。

「っ!？」

低い声で、放たれた言葉が、一石となって思考の海に投じられた。波紋が広がり、混乱が更に増していく。

前の夢で会った白衣の男性とは、正反対の言葉を、女性は訴えてきた。

「せいぜい屍の様に生き永らえて、安寧の日溜まりから深淵を見下ろし続けるといい」  
気を失いそうなら意識が混濁する。クラリと頭が揺れた。

だが、女性はそんな自分の状態など、まるで意に介さず冷酷に告げる。



「お前は落伍者だ。救世主になる為の痛苦から逃げ出し外道と蔑まれる道を選んだ。私を裏切った」

一頻りの罵詈雑言を訴えると、最後に笑みを消して——真剣な表情で、一言、放った。

「偽りの樂園で、腐れ果てろ」

——それが、お前に相応しい結末だ。

☆

「うんっ……っ?」

光が瞼の隙間から差し込んできて、パチリと目を開けた。

白い天井が視界いっぱい広がる。見覚えの有る場所の様に感じられた。

(市役所の静養室……?)

まさか、本日二回も同じ場所にお世話になるとは思わなかった。

なんか、ここに立ち寄ってから、職員の人達に迷惑ばかり掛けてる気がする。

「大丈夫?」

そんな事を考えていると、右側から声を掛けられた。細くて、綺麗な声。

振り向くと、青いロングヘアの女性が、座椅子に腰掛けて見下ろしていた。

「七海部長さん……」

神浜市役所直轄の独立治安維持部隊の長。この街で“英雄”と呼ばれし最強の魔法少女。そして、先程自分が対峙していた相手。

よくよく考えたら、とんでもない人——最早、次元が違う——と戦ったものだ。自分はこの間に無謀な真似をする人間だったのだろうか。

それにしても……小さなキウベえに触れて、夢を見ている間に、現実の自分はどうかっていたのだろうか?

「貴女、気を失ったのよ」

確認しようとして口を開くよりも早く、やちよが教えてくれた。

「そうですか……」

そう呟くと、顔をキョロキョロと動かすいろは。美代とピーターの姿が無い。

「二人は？」

「ピーターさんも美代さんも、心配してたけど……仕事があるから。だから、私が介抱したの」

なるほど。あとで二人にはお礼を言わなきゃ。

そういういろはは胸中で思うと、やちよの方へ顔を戻して、軽く頭を下げた。

「すみません、ご迷惑おかけして……」

「いえ、私の方も手荒な真似をして、ごめんなさい」

やちよも申し訳なさそうに眉を八の字にすると、ペコリと頭を下げた。

いろははその顔をまじまじと見つめる。対峙した時に見せた、対象を凍り付かせる様な碧眼を貼り付けた能面では無く、穏やかで優しそうで——どこにでもいる、ごく普通の温和な女性の顔がそこには有った。

恐らくこれが、彼女本来の素顔なのだろう、といういろはは確信する。

「でも、最後の行動には、ビックリしたわ。まさか、ピーターさんからアレを奪うなんてね」

「あつ、え〜と……っ！」

見かけによらず随分大胆な真似をするのね、と付け加えて、フツと笑うやちよ。

だが、よく考えれば、納得できる行動でも有った。

何せ、小さなキユウベえに触れさえすれば、その時点でいろはの目的は達成されるのだから。

美代とドローンを囿にして、その作戦を結構したのだろう。見事なタヌキ振りである。

いろはも言われてからさっきの事を思い出した様だ。

確かに、自分らしからぬ思い切った行動を取った。なんだか恥ずかしくなってきた、頬が熱くなってくる。

「でも、気になったのは、どうして最初からそうしなかつたの？」

自分からピーターに小さなキユウベえが渡った瞬間から、彼女にチャンスは有った筈だ。

暗にそう籠めて尋ねると、顔を林檎の様に真っ赤にしたいろはは、目を丸くした。

「それは……っ！ その……突発的に思いついたんです……」

「え？」

しどろもどろに呟くいろはに、きよとんと、首を傾げるやちよ。

「最初は普通にドローンを捕まえて勝とうって思っていました。美代さんの魔法でドローンをこっちに引き寄せたら、イケるって。でも……煙の中から七海部長さんが表れて、

『あつこれはマズイ!』つて思つたんです」

その時、いろはは思った。負けると。

「でも、たまたま後ろを振り向いたら、ピーターさんがいて……私、覚悟を決めたんです」

ピーターの右手には、小さなキュウベエの入った袋が握られていた。

瞬間、いろはは飛びかかった。

半ば、やぶれかぶれの気持ちで——

「……襲撃したのね」

やちよは呆気にとられた様子で聞いていた。

仮に自分が同じ状況だったとしても、そんな発想には至らなかつただろう。

「はい。それしか方法が浮かびませんでした」

ピーターと、意図せず囹役となつてしまった美代には悪いことをしたが——そう

付け加えて苦笑いを浮かべるいろはを見て、やちよは目を細める。

(全く、とんでもない子ね……)

最初に彼女を見た時、一体の魔女どころか、数匹の使い魔にすら叶わず満身創痍の状態で意識を失っていた状態だった。

自分が駆けつけて魔女を倒さなければ、間違い無くそこで死んでいただろう。

『彼女は普通の魔法少女より弱い』——そう確信したからこそ、神浜市の怪奇現象

に結びついていると知った時、啞然とした。

これはなんとしても止めなくては、と正直、焦っていた。

しかし、そんな不安は、杞憂であった。

彼女は——ベテランの自分に勝った。

仲間との連携、機転と勇氣、そして、火事場の馬鹿力、全てを活かして。

これが彼女本来の実力なのだろう、と悟ると、自然と笑みがこぼれた。

「……でも、『勝った』なんて言っちゃいましたけど、ゲームには負けてますよね、わたし」

「いえ、貴女は私に勝ったわ、胸を貼りなさい」

「七海部長さん……?」

「敗北者に謙遜しちや駄目よ。やちよ、で良いわ」

和やかにそう告げると、いろはの顔も自然と緩んだ。

「ありがとうございます、やちよさん」

「ただ……」

そこで、やちよの顔に影が差す。

「アレに触れて、貴女の記憶は戻ったの?」

問いかけると、いろはの顔から笑みが消え失せた。顔を天井の方に向ける。何か考え

込むような渋い面を浮かべながら、沈黙。

何かいいたく無いものでも、見たのだろうか——やちよは心配そうに、その顔を見つめていると、

「……………うい。」

数拍間を置かれてから、奇妙な二文字が、少女の口から放たれた。

「えっ?」

思わず素っ頓狂な声を出して、首を捻るやちよ。

「うい、なんです。『あの子』の名前は、ういなんです……っ!」

いろはが、急に自分の方へバツと振り向いた。

「!? その子は……?」

その目尻に涙が溜まっていて、やちよは驚くきながらも、その二文字の名を持つ者が一体、何なのか、問い質す。

いろはは、満面を悲哀に歪めながら、唇を噛み締めつつ、答え始めた。

「私の大事な家族……妹です。私、ういの為に魔法少女になったのに……そんなことも忘れて……」

「忘れて、いた……？」

やちよは、口を閉じるのをすっかり忘れていた。

この少女の言葉が、自分を呆然とさせたのは、本日何度目だろう——思わずそう現実逃避したくなりそうだった。

大切な家族を、ましてや妹を、忘れる——そんな事が、現実的に起こり得るのか。いろはは、打ち明けていく内に感極まったのか、ポロポロと涙を零し始める。

「そう、なんです……っ！」

頬を濡らしながら、上体をゆつくりと起こすいろは。

「ういに纏わる記憶だけが、そっくりそのまま、消えていたんです……っ！ 私の頭の中だけじゃない……っ！！ お父さんとお母さんからも……家にも、あの子に関わるものは全部なくなってしまうって……っ！！」

グスグスと、鼻頭を赤くして、泣き続ける。その悲痛な姿を、見ていられなくなった。やちよは逸らす様に顔を下に向けながら、いろはの背中を撫でて、慰める。

「今日のところは、家に帰りなさい……」

もつと気の聞いた言葉は言えなかったのか——と自分が腹立たしくなった。

それでも、やちよは続ける。

「次の休日の時に、来ると良いわ。協力してあげるから」



「やちよさん、でも……」

彼女は部長の身。多忙の筈だ。

自分個人の為だけに、そこまでしてもらうのは、申し訳無い気がして、断ろうとした。  
「貴女に足りないのは、力よ」

だが、それを言う前に、やちよからそんな言葉が返ってくる。

「……え？」

「貴女には高い機転と洞察力、仲間の能力を最大限に活かせる連携力も有る。この街で生きていくには申し分ない実力と判断したわ。でも、『力』だけがどの魔法少女よりも劣っている」

いろはが顔を俯かせる。

言ってしまったから、『劣っている』なんて言い方は辛辣だったか——と、やちよは自身の言葉選びの悪さを憎んだ。

「私が、それを補ってあげる」

故に、即行でフォローの言葉を作り上げて、口に出す。

「やちよさん……」

その言葉にいろはが顔を上げる。曇りが晴れた表情を見て、やちよも少しばかり安心した。

そして、真剣な表情で彼女と顔を合わせる。

「治安維持部は、どんな魔法少女も、見捨てない」

強く放ったその言葉に、一片の迷いは含まれていなかった。

《七海部長……。だから貴女は甘いと謂われるのです》

だが、出張先の町で、チームリーダーを務める魔法少女から告げられた冷淡な一言が、唐突に頭を掠める。

《今、我々が「非情」に徹さなければ、市民の安寧は到底守れそうに無い。故に、その魔法少女が如何なる労苦や事情を抱えていたとしても、不穏分子で有れば即行で排除しなければならぬ。……違いますか？》

確かにそうだろう。

この神浜市に最近、疫病に様に広まりつつある黒い影に、やちよは勘付いていた。

目の前の少女が、その一角である可能性は、否定できない。本来なら彼女と同じ様に、ひとかけら一欠片の飴も与えず、切り捨てるのが、治安維持部としては望ましいだろう。

しかし、それでも——消えた家族を必死に思ういろいろの姿に、嘘偽りは無い様に感じた。

見ていると、失い掛けていた「何か」が沸々と胸の奥底から湧き上がってくる。

(私は、もう二度と、死なせない……！)

そして、自分にそう言い放った彼女に、証明してみせる。

やちよは、決意を固めると、両膝の上に置いた拳を、強く握り締めた。

☆

「長く深淵を覗くならば、深淵もまた等しくお前を見返すのだ」

☆

彼岸』第一四六節

## FILE #10 翼 “は静かに羽ばたき始めた

☆

時刻は17:00——

市役所を出ると、すっかり陽が暮れていた。

「一人で帰れる?」

正面玄関を出たところまで、やちよが見送ってくれた。そう声を掛けられると、いろはは首を縦に振る。

「ええ、本当に色々、ありがとうございます」

会釈すると、やちよはフツと微笑を浮かべた。

「じゃあ、また」

夕陽に照らされた彼女の笑顔は、溜息が出るほど美しかった。

いろはは、もう一度お辞儀すると、踵を返してやちよの元から去り——

『魔法少女はんた——いッ!!!』

だだっ広い駐車場の向こう側——正門の方で聞こえた老若男女の声が混じった大音声。

いろはは、自宅に帰るのは、まだまだ時間が掛かりそうだと、胸中で嘆いた。

☆

正門前には20人程の人集りが見えた。いずれも成人した男女ばかりだが、全員の表情には鬼気迫る迫力が有った。

その内、何人かが『魔法少女反対』のプラカードを大きく掲げながら、我が子を殺された親の様に強い憎悪の眼差しを市役所へと向けていた。

「魔法少女はんた——いッ!!!」

男女の群れの先頭に立つ、色黒のガタイの良い男性が、ラツパの形をしたスピーカー

を口に当てて、耳を劈き、脳を揺さぶる程の大音量で訴える。

『魔法少女はんた——いッ!!!』

彼の声に吊られる様に、他の男女も、腹の底から同じ意見を訴える。

「人知を超えた連中を政（まつりごと）に使う国家と市を許すな——ッ!!」

『許すな——ッ!!!』

「治安維持部に所属する魔法少女共と、職員、並びに市長に告げる!! 神浜市の治安を乱しているのはお前たちだ!! 即刻此処から出て行け——ッ!!!」

『出て行け——ッ!!!』

☆

「あ、あれは……?」

突如聞こえてきた耳を劈く程の大合唱に、いろはは瞠目。

耳を軽く抑えて固まりつつ、正門の方で固まる男女の集団を見つめている。

「人倫保護団体よ……」

「!」

背後で、やちよがそう呟いた。いろはは顔を振り向かせる。

「彼らは魔法少女<sup>わたしたち</sup>が人間社会を脅かすと信じ切っているのよ」

「そんな……!」

やちよの説明に、いろはは目を震わせて絶句。

治安維持部の魔法少女は、日夜神浜市を護る為に、命がけで魔女と戦っている。それなのに——!!

「私達が働く時間帯には、いつもああやって正門前を陣取って非難運動を行っているの」  
「……っ!」

いろはは正門前に顔を戻すと、クツと悔しそうに歯噛みした。

「まあ、放つとけば帰っていくから」

やちよは、宥める様にそう言った瞬間、夕陽の陽射しが急に強くなって目に突き刺さってきた。

目を閉じて、顔を下に向ける。

「気にしなくていいわよ」

片手を水平にして、額に当てる。両目の下に影を作ると、顔を戻してそう言うやちよ。

瞬間——呆気にとられた。



既にいろはの背中が人差し指程に小さくなっていた事に。  
彼女が全速力で向かう先は、やはりというべきか、正門だ。

「……………っ」

小さくなっていく影を、睨みつける様に細めるやちよ。

『トラブルメーカー』としての実力も相当ね——と胸中で吐き捨てると、急いで、その後を追った。

☆

「あの、皆さん、やめてください……！　こんなことは……！」

正門を走り抜けたいろはは、傍で固まっていた集団に迷い無く突撃すると、必死な形相で訴える。

「おい、新しい魔法少女だぞ！」

最初にその声を挙げたのは、先頭に立つリーダーと思しき色黒の中年。

ラッパの形のスピーカーを片手に持った彼は、いろはの姿を捉えると、指を差して、他の仲間達に聞こえる様に声を張り上げた。

「貴方達のせいでの街に魔女が集まってくるのよ!!」

その隣で、ふくよかだが、顔を巖の様に顰めた女性が、鋭い言葉を向ける。

それは、言い掛かりだ——そう思ったいろははムツと眉間に皺を寄せて、反論しようとするが、

「人間様の世界にズカズカと上がり込んで来るんじゃないやねえ!! 目障りだ!!」

「……っ!」

女性の隣で、騒ぎ立てる20代半ばの青年の怒声に遮られてしまい、息を飲んだ。

彼らは完全にいろはを標的と捉えていた。一斉に牙を向ける!

『出ーてー行けえッ!!!』 『出ーてー行けえッ!!!』

『出ーてー行けえッ!!!』 『出ーてー行けえッ!!!』

『出ーてー行けえッ!!!』 『出ーてー行けえッ!!!』

『出ーてー行けえッ!!!』 『出ーてー行けえッ!!!』

20人程の集団から放たれる強烈な怒りの視線と言葉の刃が、いろはに集中砲火する!

憎しみが存分に込められた合唱と共に、いろはへと躍り寄る集団。その気迫の凄まじ

さに、魔法少女であることを除けば一介の女子中学生に過ぎないいろはは、震え上がるしかない。

「そんな……私はただ、この街で……」

失っていたものの、『妹』の事を取り戻したかっただけ——そう言おうとしたが、恐怖で言葉が続かない事に愕然となる。

さっきの自分の行動を後悔しそうになった。

それでも、いろはは怖気付く心をなんとか奮い立たせて、弁明しようと口を開くが—

「嘘つくんじゃねえよおっ!!」

「っ—」

即座に弾丸の様に飛んできた中年男性の怒号によって遮られた。いろははビクツと全身を震わす。自然と恐怖が顔に浮かび、足が後退していた。

「他の魔法少女達と結託して、私達の街を乗っ取るつもりなんでしょう!?!」

「?! ち、違います!!」

またもふくよかな女性から言い掛かりを付けられた。それだけは有り得ないと、咄嗟にいろはは否定する。

「黙れ化物!!」

「喰らえー！」

しかし、彼らの耳には一切届かない。そればかりか、一人の男性がポケットから何かを取り出すと、勢いよく振りかぶって、いろはに投げつけた。

「っ!!」

それが手の平大の“石”だと気付いた頃には、顔面に直撃する寸前だった!

灰色が視界全面を埋め尽くし、衝撃に備えて目を閉じる!

「……………」

しかし、いつまで経っても、衝撃と鈍痛はやってこない。

いろは、ゆっくりと目を開ける。

「……………」

すると、眼前に映る光景に、驚いた。

「やちよさん……………」

「危なかったわね」

腰まで届く青いロングヘア。夕陽を受けて若干アメジスト色に輝くそれを呆然と見つめながら、いろははその名を呟く。

眼前に立つやちよは、片手でキャッチした岩を、無造作に路面へ投げ捨てた。

「へっ、ようやく治安維持部長様のお出ましか……………」  
今まで中々出てこなかったが

……」

先程岩を投げつけた男性は、悪びれる事無く、皮肉な笑みを見せる。

「今日は運が良いぜ！ テメエにや言いてえ事が山程有るんだ!!」

男性がそう言い放った瞬間——やちよから凄まじい氣迫が放たれたのをいろはは、背中越しに感じていた。

やちよは、一切の感情を削ぎ落とした無の表情を彼らに向けると、一步、前に進む。

「！！！！……！！！！」

相手は神浜市最強の魔法少女だ。対峙する彼らの表情も、僅かに緊張が入り込んだ。一斉に身構える。

岩を投げつけた男性も、うつと息を飲んで後退した。

一触即発の状況を、いろはは、不安に顔を曇らせながらも、見つめているしかなかった。

「…………お鎮まりください」

やちよは更に一步進むと、静かに、だが毅然とした声で彼らに訴える。

「なんだと……!」

先頭に立つリーダー各の中年が、グツと眉間に皺を寄せて睨み返す。

「貴方がたも善良な市民を名乗るのでしたら、お鎮まりください、と申し上げたのです」

対するやちよは、冷徹な表情で、告げる。

その態度と言動が馬鹿にされたと感じたのだろうか、先頭の中年を始めとした彼らは一斉に砲火した！

「それはコツチの台詞だ化物！」

「守護神なんて呼ばれていい気になってんじやねえぜ!!」

矢継ぎ早に飛んでくる罵詈雑言。しかし、やちよの姿勢は揺るがない。至極冷ややか目線を彼らに向けるだけだ。

「過剰な運動は、治安を妨げるものとして市条例に違反します。それに……」

言いながら、やちよはチラリと後ろを振り向く。一瞬だけ、サファイアブルーの瞳といろはの桃色の瞳が合わさった。

「あの子に対する人格否定とも取れる罵詈雑言の数々と、明らかに傷害を目的とした攻撃行為……とても容認できるものではありません」

「同類だからか！」

即座に飛んできた声に、やちよは顔を戻す。

「いえ、『善良な』神戸市民の一員として、そして何より、一個人としてです」

首を横に振りながらそう皮肉気に微笑を浮かべて返すと、スーツの胸ポケットから端末を取り出す。

「今直ぐ警察のお世話になりたいのでしたら、構いませんが……」

その言葉が、彼らの憎しみにたつぷりと油を注ぎ込んだ。

「ハッ、やっぱり聞いた通りだぜっ!! 心が腐つちまつてる!!」

「仲間を二人死なせてる奴は別格だなあ!! それで公衆の面前で平然な顔して笑つてるんだからよ!!」

「七海やちよ、お前こそ正真正銘の化物だ!! 俺たちに何か言う権利はねえぜ!!」

『出ーてー行けえッ!!!』 『出ーてー行けえッ!!!』

『出ーてー行けえッ!!!』 『出ーてー行けえッ!!!』

『出ーてー行けえッ!!!』 『出ーてー行けえッ!!!』

『出ーてー行けえッ!!!』 『出ーてー行けえッ!!!』

まるで、山火事の様に、彼らは勢いよく燃え上がると火の粉を撒き散らし、周囲の仲間たちに点火させた。

恐ろしい——その熱狂ぶりに、いろはは心の奥底が冷え付きそうだ。自分達の行為が法に反している、つまり犯罪行為である自覚など微塵も無いのだろう。

魔法少女は等しく『悪』であり、それを排除しようとする自分達は、紛れも無い『正義』だ。だから、如何なる『法』も『罰』も、その信念の前には、風花に等しい!

その大蛇の如き悍ましき思想に、理性が完全に飲みこまれてしまっている様に感じら

れた。

「……………」

眼前の光景は最早異様であり、同時に愚かしくも感じられた。現実のものと思えたくない。何より、同じ人間が表現したものだと思いたく無くつて、目を逸らしてしまった。流石のやちよも、この狂気的な勢いの前では、怖気づいてしまうのではないか——  
—そんな不安が胸に湧いてきた。

「貴方達に、命を掛けて護る覚悟は、お有りですか？」

しかし、その心配は杞憂に終わった。

ザツと、踏み込む音がして、いろははハツと顔を前方に向ける。

やちよは、怯むこと無く、更に一步、彼らの領域に足を踏み込んだ。

「貴方達の『正義』は、集団を形成して個を批判することですか？」

「なんだと……」

やちよの鋭い指摘に、先頭に立つリーダー各の中年がギロリと、刃物の様な光を目から放つ。

「貴女に何が言えるのよ！」



隣に立つふくよかな女性が、横から嘯み付いてくる。やちよは微笑みを向けた。「言えますよ」

——獲物に標的を捉え、猟銃を構えるハンターの様な、絶対零度の瞳で見据えながら。

女性は、心臓が止まりそうになった。「ヒィッ！」と悲鳴を上げると、集団の後ろの方へと後退し、姿を隠してしまう。

「この街が魔法少女保護特区として指定されてから、10年間……命を削りながらこの街を守り抜いてきたのは、魔法少女です。彼女達が流した血と、地に倒れた無数の骸の上に、貴方達の平穏な暮らしが成り立っている。その事実を……ご理解なさっているのですか？」

「……だからって、俺たちに何か言える立場なのかよ……！」

自分達集団の力を前にしても、決して怖気づかないどころか毅然とした姿勢を貫くやちよに、先頭に立つリーダー各の男性はすっかり気圧されていた。最初の迫力がすっかり削ぎ落とされた声色で、愚痴の様に小言を呟く。

「私が……ではつきり立場を主張しなければ、先立った先人達や、無念のまま亡くなってしまう仲間達に申し訳が立ちません。私達は確かに願いを叶えてもらい、魔法少女となった。とつくに人とは違っています」

「はっ、知ってるぜ！ 欲しいモン貰って更に超人みたいな力を手に入れたんだよなあ  
!?! 羨ましいぜ!!」

「ええ、それは紛れも無い事実です。でも……」

「やちよはゆつくりと、両手を握りしめる。」

「永久に魔女と戦う使命を背負わされました」

後悔、怒り、憎しみ、悲しみ……震わせた声に乗せられた感情は、その何れかも判別が付かなかった。

しかし、彼らを黙らせるには、十分な迫力が籠められていた。

「……………っ!!」

それだけは、否定できない事実だ。先頭の中年はクツと忌々しそうに歯噛みして、やちよを睨み付ける。

「……………」

彼女の背後で、様子を眺めるいろはもまた、複雑そうに顔を俯かせた。

「10年も生き延びれば『奇跡』と言われるます。現に7年目の私も、魔法少女の界限では『長寿』と言われている方です」

「……………!!」

続けられたやちよの言葉もまた、一切の否定を許さない事実であった。

彼らは、ようやくそこで言葉の剣を鞘に収めた様だ。誰一人何も言わずに、息を飲み込んで、聞いている。

「儂い存在でも有るのです。皆様が私達を非難するのは、深い理由があることと存じますが、ですが、それは、私達の事情を考慮なさった上で訴えて頂きたい。ただ、超人的な力を有しているから、という理由だけで、人権と人格を蔑ろにされる発言を暴力的にぶつけられるのは、我慢なりません」

眉間に皺を寄せて鋭く細められた視線が、彼らを釘付けにした。

彼女の発言に納得する者もいれば、受け入れられず歯を噛みしめている者も居る。

どう受け取ればいいのか分からず、困惑に顔を歪ませていた若者も数多く見受けられた。恐らく、ただ「魔法少女が気に入らないから」という理由だけで、勢い任せに参加したのだろう。

ただ、反論は一切無かった。全員は——背後で見つめるいろはすらも——七海やちよという個人に圧倒されていた。

正しく、その風格は、長年、巨大な都市を守り抜いてきた治安維持部の長たる魔法少女の威厳が存分に発揮されていた。

「どうします?」

「……………っ!」

先頭に立つリーダーの中年の隣で、サブリーダーと思しき青年が、小声で問いかける。彼は、迷っていた。

運動を始めてから、七海やちよが自分達の前に姿を現したのは、実の所これが初めてだった。この機会を逃す訳にはいかない。なんとしても、自分が率いる『集団』の力で屈服させたい所だ。

「なあ、やつぱり、相手が相手だ……」

「ああ、あんなのに勝てる訳がねえよ。下がるか……」

しかし、彼女の気迫に気圧されてしまった他のメンバーの士気はこぞつて下がっている。

自分の後ろから、こんな消極的な意見すら聞こえてくる始末だ。

どうするべきか……リーダーは、うろくろむ、と唸つて考え込むと、

「これ以上話し合つても、埒が空きません」

「な……!」

突然、やちよの口から飛んできた言葉に、愕然とした。バツと顔を向けると、何処か意を決した表情を彼女は浮かべていた。

「私は、治安維持部長として、市民の皆様一人ひとりの時間を無駄に取らせたくありません。皆様を家で待ってくださっているであろうご家族の皆様に、余計な心配や不安を与

えたくはありません」

そこで彼女は、上半身を90度に倒して、こう言った。

「どうか、この場合は、お引き下がりがりください。お願いします」

「私からも、お願いします……!」

やちよの背後で心配そうに状況を見つめていたいろはも、彼女の隣に並ぶとペコリと上半身を倒す。

「う~~~~~~~~む……」

深々と頭を下げる彼女にリーダーは顔を歪ませる。一体どうしたらいいか……悩んでいると、

「そこまでにしないか」

何処かから低い声が飛んできた。

団体とやちよというは——全員がその方向を振り向くと、60代半ばくらいの男性が一人、歩み寄って来ていた。

黒いコートを羽織り、ホンブルグハットを被ったジエントルマンの様な格好の老人は、その風貌に相応しい気品と威厳に満ちた低い声を叩きつける。

「徳江さん……」

彼の出現に、目を丸くするリーダーの中年。やちよはというと、姿勢を正して会釈した。いろはも合わせて頭を下げる。

「お久しぶりです。徳江先生」

「七海部長。こちらこそ、ご無沙汰しております」

徳江と呼ばれた老人は、被っていたハットを外し禿げ上がった頭部を頭になると、笑みを浮かべて、礼儀正しくお辞儀をした。

「この人は……?」

いろはが小声で尋ねると、やちよは僅かに横目を向けて紹介した。

「神浜町で町内会長をされている徳江龍二先生よ」

「先生……?」

「昔、神浜市立大学で教授をなされていたの。私のお婆ちゃんとも知り合いでね、子供の頃に勉強を教わった事があつたわ……」

「へえ……」

小声で説明するやちよ。なんだか凄い人が現れたなあ、というはは感心する。

「そして、人倫保護団体の生みの親よ」

「えっ!?!」

まさか、こんな人格者そうな老人が、彼らの様な熱狂的な集団を生み出したという事実に、いろいろの目は点となる。

「ほっほっほ。お嬢さん。それはもう昔の話です。教授も団体も今は引退して、隠居の身ですよ」

素つ頓狂な驚きの声は徳江の耳に届いたらしい。彼は愉快げに笑うと、いろはとやちよに歩み寄った。

「……ですが、全ては私の指導不足が原因です。若い衆が仕事を妨げてしまい、本当に申し訳ありませんでした」

「いえ、徳江先生、貴女のせいでは……」

深々と頭を下げて謝る徳江に、やちよは首を横に振る。

「お嬢さんにも、迷惑を掛けたようだね……。なんとお詫びを申し上げたらいいか……」  
次いで彼は、いろはにも心底申し訳なさそうに頭を下げる。

「あつ、あの……私は大丈夫ですから、気になさらず……!」

この老人は何もしていないのだ。それに今の彼の言葉から、完全に無関係の筈。いろははワタワタと慌てながら、そう伝える。

「しかし、徳江さん!!」

そこで、集団の方から張り上げた声が飛んできた。

徳江が顔を向けると、リーダーの中年男性がキツと顔を怒りに染めて、訴えていた。

「こいつらを許すわけにはいきませんよ!!」

「鈴木くん……」

彼の言葉に、徳江が目を細める。

「そうだそうだ!!」

「徳江さん、あんただって魔法少女のせいで折角興した会社が潰されたじゃねえですか!!」

「その時の恨みを忘れたってんですか!?!」

リーダーの中年——鈴木という言葉を皮切りに、他のメンバーが再び口から火を放つ。

徳江はどこか呆れた様に、はあ、と息を吐くと、帽子の先を摘んだ。目深く被り直す  
と、

「まったく、嘆かわしいな……」

ぼつりと、そう呟いた。

「!!」

鈴木がその言葉に愕然となる。火を吹いていた他のメンバーの、驚きのあまり、口を閉ざした。

「七海部長の言う通りだ。市民同士で争うものではない」



「くっ……」

目を覆い隠して冷ややかに告げる徳江。その態度は、自分が率いる団体の現状を見て  
いられない、と暗に告げている様だった。

僅かに伺える瞳から鋭い光が瞬く。

「鈴木くん。私は君を信頼して団体を預けた。だがこの現状はなんだ？ 人倫保護団体の創設は確かに、私が魔法少女に『憎しみ』を抱いたのがきっかけだった。だが、こんな暴動紛いの運動は絶対に禁止と取り決めていた筈だ」

「……」

鈴木は沈痛そうな表情を浮かべると、俯かせた。それが何かを隠していると察した徳江は、更に続ける。

「教えてくれ。君は、何を焦っているんだ？」

「……」

鋭い指摘をするも、鈴木は顔を上げず、黙り込んだままだ。

「退散だ……」

暫くそのままだったかと思うと、突然踵を返して、他のメンバーにそう支持する鈴木。

「しかし……折角七海やちよを引き出せたつてのに……」

「このままじゃあ、徳江さんも敵に回す。あの人の顔の広さはお前たちだって知ってるだろう？」

「仕方ありませんか……」

幹部と思しき若いメンバーが食い下がるが、鈴木はそう説得した。

ぞろぞろと立ち去っていく集団。

彼らが最後に見せた後ろ姿は——先程炎の様に燃え上がっていたとは到底思えないほど、惨めで、小さかった。

☆

集団の姿が夕陽に紛れて見えなくなると、いろははハツとした。慌ててスマホで時刻を確認すると17:30と表示されていた。

もうすぐ仕事から帰ってくるので、家に戻って夕食の準備をしなければならない――

——!! 今日日は曜日だが、二人は共に『急な仕事が入った』といって出勤したそうだ。徳江とやちよにそう告げると、彼女は全速力で走り去っていった。

「しかし、『夢い存在』、ですか……」

いろはの後ろ姿が見えなくなるまで見送ると、徳江はぼつりと独り言のように呟いた。

やちよが細めた目を向ける。恐らく彼は、先程の団体と自分たちのやりとりを、傍らから眺めていたのだろう。

「僭越ながらあまりそういう定義はなされない方がよろしいかと……」

「……何かあったのですか?」

「察しがよろしいですな。実は」

徳江はキョロキョロと周囲を確認。自分達以外に誰もいないことを確認すると、やちよの耳元でボソリと囁く。

「魔法少女を中心とした反社会集団が、蠢き始めています」

その言葉に、やちよの眉はピクリと動いた。

☆

神浜市外、いろはの自宅である『環』家――

時刻は既に18時前、両親のいずれかはもう帰っているものとはばかり思っていたが、庭に、二人の車はまだ無かった。

良かった、多分残業になったのか、あるいは帰り際に寄り道したのかもしれない。

間に合った。ほっと一息付くと、バッグに入れてあった家の鍵で、玄関のドアを開けた。

「ただいまー……」

家には誰もいないが、いつもの習慣からか、ついそう言ってしまういろは。

靴を脱いで上がると、真っ先に、リビングへと向かう。

「はあ〜」

荷物を無造作に床に投げ捨てると、壁際に置かれていたソファにボスンと倒れ込むいろは。

疲れた——今まで過ごしてきた14年の人生に匹敵するぐらいの騒動を、今日一日で経験した気がする。

「……………」

ドツと疲れが湧いてきた。今はただ、休みたい。

(一日ぐらい夕食を作らなくつても、大丈夫だよね……?)

家庭内の義務を忘れて、柔らかいソファに身を預けたまま、妹と、灯花とねむの待つ、夢の世界へ旅立ちたかった。

全身に疲労感が襲いかかってきて、身体が鉛の様に重く感じる。全身で受け止めるソファの感触が心地よくつて、自然と目がトロンと溶け出した。

「……………ん？」

だが、視界が完全に漆黒になる寸前で、ソファ前のテーブルの上に一枚の紙切れが見えた。

それが妙に気になったいろはは、パチリと目を開かせると、重たそうに身体を起こして、それを手に取った。

「……………」

読んだ瞬間、いろはは呆然と目を見開いた。

『いろはへ

いきなりでごめんなさい。

実はお父さんの転勤が決まっていました。

場所は“アメリカ”です。今日迎います。

お父さんは全く生活能力が無い人間なので、お母さんも援助する為に、一緒に付いていく事に決めました。

あなたには高校受験や進学が待ち構えているというのに、とても身勝手に無責任な真似をしてしまいました。

別れの言葉も告げずに出ていってしまうなんて親失格です。恨んでもかまいません。

でも、これは仕方の無いことなんです。

本当にごめんなさい、いろは。

あなたの部屋の空いている右側のスペース、その床を満遍なく踏んでみて下さい。  
い。

ミシつと音が鳴ったら、その板を剥がして下さい。  
生活費が隠してあります。

どうか、身体を大事にして、幸せに暮らして下さい。愛してます。

母・耀より』

「……………そんな」

両手が震えた。自然と力が入り込んで、グシャリ、と手紙が歪む。

「お父さん……………！ お母さん……………！」

『これは仕方の無いことなんです』——手紙の中で然りげ無く書かれていた一文。  
その意味を推測するのが、どうしようも無く、恐ろしく感じた。

ういがいつも夢の中で告げてくる、最後の言葉。

「『死神』と会う約束」と同じくらいに。

両膝を絨毯の上に付いて、丸めた背中が、ガタガタと震えている。  
窓の外の夕陽はすっかり沈んで、リビングの全てが闇に閉ざされた。

この日——いろはは、自分独りだけが家に置き去りにされた事を知り、むせび泣いた。



## FILE #11 氷の部長と燃える副部長

足早に市役所に戻りエレベーターの乗って一人きりになったやちよは、先の徳江との会話を思い返していた。

【黒装束を纏った魔法少女とおもしき集団が、あらゆる区域で毎夜、確認されているようです。なんでも彼女達は自らを『羽根』と称しているとか。……情報通の間では「カラス」「蠅」「ゴキブリ」などと呼称されてますが】

『ええ、噂は聞いています。既に各地の魔法少女が数名、行方不明になっていると。それに……』

やちよは顎に手を当てて、小声で徳江に告げる。

『……最近、人倫保護団体の運動が以前と比べて過剰傾向です。恐らくは、その反社会集団が彼らの不安感情を煽っているものと推測は付いています』

徳江は何も言わずにコクリと頷いたが、表情は複雑そうに顔が歪んでいた。気になりつつも、やちよは更に続ける。

『治安維持部でも調査の方は進めています。……生憎、神浜町は私と八雲しかおりませんので、難行しておりますが……そちらの方は？』

聞いた途端、徳江の眼鏡が夕陽に反射されて白く光った。

【ご安心を。『春』と『雉』が、既に動き初めています】

『御老体様々ですね』

【ほっほっほ】

やちよはフツと笑う。徳江も吊られて笑ったが、どこか不敵な笑みにも見えた。

【その『雉』ですが……『鶴』を引き連れています】

『……………』

鶴、の単語が出た瞬間に、やちよの顔から笑みが消えた。口を結んで沈黙。

【七海部長。……いや、やちよくん。これは良い機会じゃないか？】

徳江の口調が急に砕けた。やちよにとって、勉学の師であった頃の彼を彷彿とさせる喋り方だった。

【『鶴』と仲良くするチャンスだよ】

『徳江先生……そうは仰られても、私と彼女は……』

「二年前の事なら私も知っている。だが、君とあの子は考え方は違えど、目指している所は同じだと私は思う」

それは分かる。だからといって簡単に手を取り合える筈が無い。自分と彼女の溝は深いのだ。

やちよの表情は晴れない。徳江は、ふう、と一息付くと、

「……お節介が過ぎたかな？ 申し訳ない。最終的に決めるのは君だ。……でも」

—— 仲間は多いに超した事は無いと、私は思うがね。

そう付け加えて、徳江は去っていった。

☆

市役所前のドタバタ騒ぎをなんとか治めたやちよ。だが、彼女の仕事はここで終わりではない。寧ろこれからが本番だった。

ここ暫く、神浜市のPRの為にTV出演や営業の仕事をメインに入れていたせいで、市外へ赴く事が多くなっていた。結果的に役所内での事務仕事が溜まりに溜まっていたのだ。

それを片付けなくては——環いろはとの出会いは、彼女に久方ぶりの刺激を齎したが、同時に過大な残業を齎してくれた。

やちよは、はあ、と溜息をこぼし、どこか顔を重たそうに俯きつつも、治安維持部の本部がある市役所三階へと足を運んでいった。

「ただいま、戻りました」

エレベーターの扉が開いて、一步足を踏み入れた瞬間、白木が飛んできた。

「部長、おかえりなさいませー!」

輝かしい笑顔で、深々とお辞儀をして迎える白木。

「遅くなりました。今から事務仕事を……」

片付けます、と言いつ切る前に白木が顔を上げた。いつになく嬉しそうな笑みを見て、やちよは少しばかり不審に思う。

「部長、その前にお客様です」

瞬時に時計を確認するやちよ。現在の時刻は17:30過ぎだ。市役所の窓口は既に閉まっているので、この時間に訪れるとしたら魔法少女だけになる。

「……どなたかしら？」

緊張感が体を走った。果たしてよ敵そ者か治安維持部味か——どちらにしても、部長たるもの真正面から相手をしななければならない。

目を細めて、声色に若干の冷気を伴いつつ問いかけるが、白木は「ふふくん♪」と得意気な笑みを見せていた。どうやら彼女がよく知っている魔法少女らしい。

「都ひなの副部长です」

盟友の名が彼女の口から告げられて、やちよは心の底から安心した。

☆

やちよが応接室に入ると、一人の少女が先にソファを陣取っていた。

どつかりと腰を下ろし、足を組みながら、濃緑色のビジネススーツに身を包んだ、勝気に満ち溢れた顔つきの少女は、テーブルに置かれたコーヒーを口に運んでいた。

「ひなの」

やちよが声を掛ける。普段の冷たさは微塵も感じられない、穏やかな声色で。

「おう、やちよー！」

ひなのと呼ばれた少女は、勢いよく振り向くと、ニカツと笑顔を見せると、威勢の良  
い挨拶を返した。豪快にブンブンと手を振っている。

「久しぶりね」

変わらない元気の良さを見て、やちよの顔も自然と綻んだ。穏やかな笑みを向けなが  
ら、彼女の向かい側にあるソファにゆつくりと腰を下ろす。

「まあなー」

「来てくれるなら、連絡ぐらいよこしても良かったのに」

やちよは、目の前にいる都ひなのという少女に対しては完全に心を許していた。

——それもその筈、彼女との付き合いは長い。5年間も共に戦ってきた間柄な  
のだ。

「まあ、普通だったたら、そうするんだがなあ……」

バツが悪そうに苦笑いして、頭を掻くひなの。

「どうしたの？」

「今日は、ちよつと野暮用でこっちに來ただけなんだよ。お前、今日出張だったし、忙し

そうだったから寄るのは別に後でもいいかな、って思ってたんだけど……。さからの奴が『みたまに会いたい』って駄々捏ね始めてな……」

すまん、と申し訳なさそうに頭を倒すひなの。

やちよは「いいのよ」と手を振りながらも、彼女が入職した当時のことを思い出していた。

あの時を思い出すと、今もこうやって対等に話し合っているのが夢に思えてくる。

都ひなのは、治安維持部の「3期生」として入職した。

小学生と見紛う様な体躯の小ささと、あまり端麗でない相貌。化学物質を調査して作り出した毒薬を相手に浴びせるといふ戦闘スタイル——全てに於いて、あまりにも地味過ぎた。

基本的に魔法少女は、容姿の優れた者が成る傾向が多く、戦い方も派手さを求められる事が多い。同期に入職した魔法少女達と比較すると、ひなのの存在はあまりに特殊過ぎて逆に目立っていた様に、当時のやちよには見えた。

広報課の職員からは「宣伝には向かない」と下馬評を下され一切相手にされず、世間からは嘲笑の的にされていた。同期や先輩の魔法少女達からも散々コケにされ、業務で

は雑用、魔女退治では使い魔の掃討を押し付けられたことが幾度も有ったという。

流石に心配になったやちよは、彼女に対してカウンセリングを行おうと考えていたが—— 杞憂であつた。

ひなのは、くじけなかつた。

衆目を浴びているのなら、逆にそれを利用した。チャンスとばかりに、自分の真面目で精悍な所を世間にアピールしようと考えた。

業務でも、雑用を押し付けられれば、一つ一つをきちんとこなして、魔女と戦えば、その都度、使い魔を一匹残らず退治していった。

見た目のコンプレックスを諸共せず、周囲からの嘲笑もなにくそと撥ね退け、真摯に業務と向き合うひなのの姿は、次第に世間で高く評価されていく。特に同じコンプレックスを抱えた多くの老若男女が胸を打たれ、彼女を支持した。

結果、三か月後には、3期生の中で、ひなのと肩を並べられる魔法少女は誰一人としていなかった。

しかも、人気の方は尋常で無く、既に「女神」「英雄」「守護神」と称されていた七海やちよと比肩するほどにまで昇りつめていた。

それが功を成してか、ひなのは、入職して僅か半年で、異例の出世を遂げる。

治安維持部の幹部——立政町のチームリーダーに抜擢された。



そして、ここからひなのの本領は発揮される。

元々、大人の男性すら根負けするほどの度胸と胆力、加えて明晰なる頭脳から発せられる優れたコミュニケーション能力を持つひなのにとつて、リーダーという役職は正に、魚が水を得たのと同義だった。

あれよあれよという間に、町役場の職員達から信頼を勝ち取っていくと、立政町に住む人々に向けてアブローチを展開。

役場内に個人的な相談所を設けて、自分と同じくコンプレックスで悩む人たちのカウンセリングを行った。

解決策や、恥ずべきそれを『個性』として向き合う為の方法を一緒に考えてあげたり、一般人の気持ちに常に寄り添える魔法少女で有り続けた。

そのフットワークの軽さと、器量の広さはやちよですら、一目置く程であったという。今や、立政町に於ける彼女の地位は絶対的なものになっていった。

治安維持部で、七海やちよの代わりを務められる魔法少女は都ひなののしかいないと、神戸市の誰も認識するようになった。

ひなのが【副部长】の肩書きを持つのは、その証左であった。

「相変わらず元氣そうで安心したわ」

「お前もな……」

ふふつと穏やかに笑いあうやちよとひなの。

容姿といい性格といい、二人は何もかも対極だが、仲はとても良かった。正反対であるがゆえに、お互いに無いものに惹かれたのかもしれない。

「……つていいたいところだけど、大変そうじゃないか」

「ええ、部長に広告塔、雑誌モデルに大学生も兼ねてるからね……」

「お前なあ、少しは割り振つたらどうなんだ!? PR活動なんかみたまにやらせろよ! あいついつも暇そうだろ!」

笑顔で過労死しかねない程の労働内容を語るやちよに、ひなのは、内心愕然とした。  
一頻り叱りつけると、はあく、と溜息をこぼす。

「つていうか、いい加減、魔法少女の一人か二人……下に付けたらどうなんだ?」  
「別にこなせているから平気よ」

「アタシの気持ちも考えろ。こっちは心配でならないんだぞ……」  
頭を抱えるひなの。

ひなのが在籍する立政町には現在、彼女の他に、木崎衣美里、綾野梨花、五十鈴れんといった魔法少女達が居る。加えて調整員に『八島さから』という人物が居た。

ちなみに、調整員とは、『調整課』に所属する魔法少女の事を指す。

八雲みたまと同等の能力を持つ魔法少女が、神浜市管轄の各町役場に必ず一人は存在

しているのだ。何れの人物も個性的だが、みたまと全く同じ服装を身にまとい、銀色に近い頭髪を生やしているという共通点があった。

八島さからは、その一人である。みたまと同じくモデルすら裸足で逃げ出す程のグラマラスな体系の持ち主で、オラオラ口調の姉御肌な性質の人物だった。

……余談はともかく、総勢5名もの魔法少女が居る立政町に対して、神浜町には七海やちよと八雲みたまの二人しか居ないのだ。しかも、みたまは基本的に、自身の店に籠っているので実質やちよ一人だけと言って良かった。

「気持ちは分かるけど、そういう訳にはいかないのよ」  
「それは……繰り返したくないからか？」

やちよが一向に仲間を作りたいがらない理由をひなのは知っていた。

昔は、やちよも4人のチームを組んで活動していたのだ。

——しかし、一年前に、事件が起きた。

チームメイトの二人が広報活動の一環として市外へ単身赴任中に、魔法少女の奇襲を受けたのだ。

やちよとその相棒にして、ひなのの前任者であった魔法少女がすぐに駆け付けたものの——既に、虫の息だったという。

以降、やちよと前副部長は度々意見の衝突を繰り返す様になっていき……最終的に、

前副部長が退職届をやちよに叩きつけて去って行ってしまった。事実上の喧嘩別れであった。

以来、やちよは、『仲間』の存在を極端に恐れるようになった。現在の神浜市役所は、やちよの強い意向で、彼女以外の魔法少女を所属させていない。

（フリーの魔法少女が、入職テストを受けること事態は可能だが、受かった場合、別の町役場へ配属にされる）

「それ以外に何か？」

「だとしてもだ……見ているこつちがやりきれん！」

ひなのは勢いよく立ち上がる！

「お前、一人で抱え込みすぎだ！ 成人になったら白髪が生えるぞ！ ホルモンバランスが崩れて20代後半には一気に老けるぞ！」

「もう老けてるわ」

「なんだと……?!」

フツと自嘲気味に笑っていうやちよに、ひなのは絶句する。

「この前、スーパードに行ったら、たまたま高級ハムのタイムセールをやっててね……迷わず突撃したんだけど、おばちゃん達にもみくちやにされちゃって……変装用の帽子とサングラスが取れたのよ」

「それで？」

「その瞬間を撮られたの。すぐにネットにアップされちゃってね……私は特に気にして無かったんだけど」

治安維持部は命の危険が常に伴う仕事だ。基本給も一般的な公務員と比較しても倍近く支給されている。

部長であるやちよは当然、かなりの高級取りであり、一般人から見れば雲の上のような存在。当然、贅沢三昧の暮らしをしているものと誰もが思っていた。

故に——高級品とはいえ——たかがハムの為に、女神と呼ばれし少女が初老のおばちゃん達に紛れ込んで乱闘を繰り広げる姿は、神浜に住む人々に少なからずショックを与えた。

それで、その姿を見た、心無い者が付けた渾名が……

『ケチババア』。面白いでしょう？」

そう言って笑うやちよだが、ひなのの顔がカーツと赤くなっていく。

「お前なあ……!! 人が真面目に心配してるってのに……!!」

そのまま、怒声を叩きつけられると思い、身構えるやちよだったが、ひなのは、はあ、と再び溜息を付いた。

顔から熱が引いていく。

「まあいいや、別にお前と喧嘩しに来たんじゃないし……」

こっからが本題だ、とひなのは付け加えると、顔を上げた。

「……出張先で会ったんだろ、常磐ななかと」

雰囲気ガラリと変わった。

既に個人としての彼女は消え去り、治安維持副部長としての彼女が目の前に座していた。

眉間に皺を寄せて、一切緩みのない張り詰めた低い声色で、やちよに問いかける。

「ええ」

短く答えるやちよの肩が、微かに強張った。彼女も真剣な表情でひなのを見つめ返す。

「なんか言われたのか？」

『貴女に神浜市を護る資格はあるのか』と——そう問われたわ」

「お前、そんなこと言われて何も言い返さなかったのか？」

「いえ、何も……」

やちよは首をふるふると振ると、ひなのはテーブルをバンと叩いて勢いよく立ち上がった！

「なんでだよ?! 言われっぱなしのまま帰ったってのか!？」

身体が小さい為、立ち上がっても、やちよを見下ろす事は敵わなかったが、目線は同じになった。真正面からじつと見据えて言い放つ。

「彼女の言ってる事は正しいわ」

声を張り上げるひなのに対し、やちよは、極めて冷静にそう返した。

「だとしてもだ！ 治安維持部の部長はお前なんだぞ！ お前がしつかりしなけりやあいつは増々凶に乗って」

「人々が求めるのは常に新しい風よ」

その言葉に、ひなのは絶句した。呆然と目を見開いてやちよを見つめる。

「……………おい、お前、今なんて言った？」

しばらく沈黙してから、呟かれた言葉は、震えていた。激しい感情が存分に込められているように聞こえた。

「?? 何かおかしい事を言ったのかしら？」

「ああ、おかしいさ!!」

ひなのがテーブルに上半身を乗り出してきた！ やちよの胸ぐらを掴み、グツと引き寄せる!!

「まるで引退を考えてるみたいじゃねえか!？」

ガアツと大きく放たれた口から火の粉が噴いた。だが、やちよは全く動じない。寧

ろ、フツと微笑んだ。

「引退……。そうね、それもいいかもね」

「なんだと……!!」

やちよの冷やややかな言葉に、ひなのは唾然とした。

「そろそろ疲れてきたのよ、ひなの」

諦念混じりの言葉を呟かれて、ひなのは目を見開いてハツとなる。胸ぐらを解放すると、静かにソファに腰を下ろす。

「あいつらは……お前に後を託して逝った筈だ」

顔を俯かせながら呟いた言葉には、微かな怒りの残り火が灯されていた。

「あいつらの死を、無駄にする気か……」

「……………」

やちよは黙ったまま俯いたひなのを眺めている。

「治安維持部は、お前が部長になったから、纏まったんだ。みんなお前が希望だと思っ  
て付いてきた……それなのに……!」

握り締めた両方の拳をブルブルと震わせるひなの。やちよがこれ以上、腑抜けた事を



言ったらブン殴ってやろうかと思った矢先だった——

「……まだ、すぐに辞める訳じゃないわ」

「っ!!」

ひなのは顔をバツと上げる。何処か意を決した様な表情を浮かべるやちよが居た。

「まだ、やらなきゃいけない事があってね……」

「それは、今日この街に来た、環いろはって子の事か……」

「情報が早いわね」

「とつくにさからから聞いている。調整課の情報共有力は半端ないかんな」

ひなのは言いながら、スマホを開いた。神浜市公式HPを開き、保護登録魔法少女のページを閲覧。ずらりと並ぶ『登録済み』の魔法少女達の顔写真の中で一人だけ『仮登録』状態にある桃色の瞳の少女の顔が目についた。

「その子には気になる点がいくつもある」

「聞いている。小さなキュウベえを追ってきたんだってな」

「他にもいろいろと協力したいことがあってね……。あとは、『鶴』の件も」

「ああ、あいつともいい加減決着付けなきゃだよなあ。……つてか、まだあのことを言っ  
てなかったのかよ?」

「ええ……それらが済んだら」

心置きなく引退できるわね、と告げると、やちよはソファからスツと立ち上がった。ひなのに背中を向けて、立ち去る。

これ以上の話はないから、と言わんばかりの態度だが、やちよの真意は違う。もつとひなのと話したかった。でも、彼女の辛そうな顔を見るのが嫌だった。それから逃げたかった。

ひなのは再び顔を俯かせていたが――

「七海やちよ、アタシはな……！」

急に顔を上げるひなの。

意を決した顔で吠えるひなのの言葉を、やちよは耳を研ぎ澄まして真剣に聞こうとした。

「ずっと、お前の事を羨んでた！」

出入り口の手前で、やちよの足はピタリと止まった。

「でも、それは……お前が綺麗で、背が高くて、モデルやってて、みんなにちやほやされてるからだとか……そんな理由じゃないぞっ!!」

やちよは振り向かない。それでも耳に届いているのだと信じて、ひなのは訴え続ける。

「お前が、誰に対しても『平等』だったからだっ!! 魔法少女とか一般人とか関係なく

……誰に対しても真正面から向き合おうとするお前の姿勢が、アタシは好きだった!!」  
ひなのの甲高い声は、恐らく部屋の外まで響いている。他の職員にも聞こえているだろう。

だが、今のひなのは恥も外聞も一切気にはしなかった。

「でも……今のお前は、逃げてる……。あいつらから……かなえとメルから……」

最後まで、ひなのの話は聞こうと思っていたやちよだったが、それは叶わなかった。かなえとメル——その二つの名前が耳に入った途端、足早に部屋の外へ出ていった。

その名を耳にして、平然としていられる余裕は——今のやちよには無かった。

☆サイドストーリーへ☆

※血液型妄想

いろは〓O、やちよさん〓B、鶴乃〓A、フェリシア〓AB さな〓A

ひなの〓A、ななか〓O。

本編だと……まどか&さやか〓A、ほむら〓O マミさん〓AB、杏子〓B  
そんなイメージです。

## FILE #12 みにくいアヒルの子供達

そこは、まるで深淵の様な深い暗闇に覆われていた——

カツン、カツン——と、一人の女性がその静寂に満ちた闇中を、靴音を響かせながら歩いている。

彼女の向かっている先は、自らが最も敬う者達が君臨する最奥部であった。全く光の無い世界だが、女性には見えている——それは彼女が『魔法少女』だからに他なら

ない。

女性は、優れた美貌の持ち主であつた。誰からも『綺麗』と呼ばれ、街を歩けば振り向かない者は居なかつた。胸部に実つた豊かな双球も、その美しさの一翼を担つてゐた。

表の世界で、彼女は一部を除けば、順風満帆な人生を歩んできた。にも関わらず、こんな暗闇の底に居るのは何故か——その理由は女性しか知り得ない。

歩き続けていると、やがて、視線の先に二つに並んだ玉座が見えた。目を凝らすと、二人の人物が国王と女王の様に座していた。女性はまず、右の玉座の人物を注視した。

——男性。黒いスーツを身を包んだ、実業家の様な様相の老人であつた。

歳は70〜80と言つたところで、生え際から真っ白な髪が伸びており、顔の至るところに皺が深く刻まれている。

だが、双眼からは、まるで獲物の顔を捕まえた猛獣の如き激しさが瞬き、彼が幾多もの修羅場を潜り抜けた歴戦の勇者であることを彷彿とさせた。

彼は、女性にとって最も尊敬する人物だ。次に彼女は、左の玉座を見据える。

——少女。ゴシッククロリータに似たフリル付きのドレスを纏つた、小さな子供だつた。

年齢は誰も知らないが、恐らく二桁になつて間もないだろう——熊のぬいぐるみ

を大切そうに抱きしめている姿からも幼さが感じられる。

座っている玉座が高いせいで、浮遊する両足をブラブラと揺らしながら、愉快そうな笑みで「ふんふん♪」と鼻歌を唄っていた。

老人と横並びになっている姿を見ると、祖父と孫にしか見えなかつた。二人の關係を何も知らない者が見たら、大体は「女王さまになりたくい！」と駄々を捏ねた孫娘を、お爺ちゃんが玉座に座らせてあげたとしか思えないだろう。

だが、女性を知っていた。

この深淵に住まう者達の誰もが、少女を『君主』と崇めて<sup>あが</sup>いる事を——かくいう女性自身も、その一人だつた。

「みふゆ、か……」

自分が歩み寄つてきていた事に気づいたらしい。右の玉座から声が聞こえてきた。見た目に相応しい、威厳に満ち溢れた声色だつた。

「マギウス、お祖父様」

みふゆと老人に呼ばれた女性は床に片膝を付くと、恭しく頭を下げる。

「羽根部隊が漸く到着致しました」

「通してー」

左の玉座から深淵とは不釣り合いな、素つ頓狂に明るい声が響いてきた。甲高くて、

一度聞いたら、しばらく耳に残るぐらいの特徴的な声色だった。

「はい」

女性が二人の主に返事をする、立ち上がって、後ろを振り向く。墨で塗りたくった様な漆黒が視界全面に広がった。

「お入りなさい！」

だが、無数の気配を察知したみふゆは睨み据えると、力強く指示を下した。

刹那——赤装束を纏った長身の人物と、白装束を纏った全く同じ背格好の二人組が、みふゆの前に参上した。三人とも、フードを深く被っているせいで、顔の上半分が覆われてしまつて表情が伺えない。

先頭に立つ赤装束の人物が、みふゆの隣に並ぶと、

「お初にお目に掛かります。『マギウス』。サンシャイングループ代表、日秀源道会長」

ひびりげんどう

綺麗なソプラノを口から紡ぎ出した。

先のみふゆと同じく、片膝を床に付いて、恭しくお辞儀しつつ挨拶した。

「君が、双樹ルカか」

源道と呼ばれた右の玉座に座す老人が、赤いフードの少女の名を呼ぶと、口端がニツと吊り上がった。

立ち上がると、赤いフードをグツと掴んで後ろに捲り上げる。一本に縛られた黒い長



髪が解放され、空中で綺麗な半月を描いた。

『マギウスの翼』実働部隊——通称・羽根部隊の隊長『紅羽根』を務めさせて頂いております。以後お見知りおきを」

美しい黒髪を生やした少女は、育ちの良さが伺える淑女然とした態度で、  
“と源道に二度目のお辞儀を丁寧に行う。

「君の事は、みふゆから聞いているよ。目覚ましい活躍振りのようだね」

ルカの表情を興味深く見つめると、笑顔を向けて称賛する源道。

「ありがとうございます」

「紅羽根！ ワタシの許可も無くお二人に素顔を晒すなどと……！」

満面の笑みで会釈するルカだが、彼女の先の行為が祖父と主に対して失礼と感じたみふゆが、眉間に皺を寄せて割り込んでくる。

「いや、構わんよ。我々は同じ目的の元に集った同志だ。お互いの顔を知らなければ、コミュニケーションとチームワークは成り立たない……だろう？」

「仰る通りです。わたくしも、組織の運営者たる日秀会長とマギウスには、是非とも顔を覚えていただきたいと想いました」

フードを取った次第です——そう付け加えながら、横目でみふゆを見るルカの微笑みは、嘲りが含まれている様に見えた。

「っ……っ……」

みふゆが忌々しく齒噛みする。

最初からそうだった。自身が幾度と無く叱責を行おうが、こいつが反省の意を見せた事は一度も無い。今の様な軽薄な笑みを返されるだけ。

『白羽根』の君たちも遠慮せず、顔を見せてくれ給え」

そんな孫娘の懊悩を尻目に、源道は視線を奥へと向けた。みふゆとルカの後ろで、縮こまつている二人組の白装束にそう伝える。

「え？ そんな……!!」

左側に立つ白装束の少女が、驚愕に口を開けた。隣立つもう一人の白装束と源道に「いいの!? 本当にいいの!?!」何度も確認しながら顔をキョロキョロと忙しく見回す。

「し、失礼するでございます……」

右側に立つ白装束の少女が、恐る恐るフードを掴んで捲り上げる。隣立つ白装束も、合わせる様にフードを捲り上げた。

——茶色の束がサラサラと流れる様に、宙を舞った。正に鏡写しといえる程の瓜二つの少女の顔が、出現した。

「天音<sup>あまね</sup>月夜<sup>つきよ</sup>くんと、妹の天音<sup>あまね</sup>月咲<sup>つきさ</sup>くんだね。君たちの事もみふゆから聞いていますよ。はじめまして、サンシャイングループ代表取締役の日秀源道だ。宜しくお願い申す」

源道は、人の良さそうな笑みを浮かべると、双子の少女に向けて、会釈する。

「は、はじめまして……」

「な、名前を覚えて頂きまして、光栄にございます……!」

まさか、組織のトップの一人である彼から、頭を下げられるなんて思ってもいなかった。月夜と月咲は声を震わせながら、上体90度に倒してお辞儀をする。

「ははっ、そう固くならなくてもいいさ。仲間同士、気の置けない仲をこれから築いていこうじゃないかっ!」

源道はひらひらと手を振って愉快気に笑う。

厳格な人柄と聞いていたので、てつきり自分の親族と同等の人物像を思い描いていたが……杞憂に終わった様だ。彼は中々の好々爺こうこうやであるらしい。

二人はホッと安堵の息を付いて、頭を上げる。

「……「みにくいアヒルの子」はどうかね? みふゆの話では大分集まったと聞いているが……」

三人の顔を確認し終えると、一息付いてから、源道はルカに尋ねた。ルカはフツと笑みを零すと、

「上々です、日秀会長。サンシャイングループの皆様のご協力のお陰で『黒羽根』の数は50人を超える事ができました」

言い終えてから、パチンツと指を鳴らした。

瞬間——源道が目を見開く光景が視線の奥に映る。白装束の双子の背後を覆い尽くす暗黒から、黒装束を纏った少女の集団がぞろぞろと姿を現し始めていた。

彼女たちは双子の真後ろでピタリと一斉に足を止める。五行十列の綺麗な隊列を組んで。

「盛観だね」

源道は、ほう、と感嘆の息を漏らすと、黒羽根と呼ばれし少女達一人ひとりの表情をまじまじと眺める。何れも一切の感情が映っておらず、能面だ。また、全身を黒装束に覆っているせいで、容姿が分からず個性が見えない。

あまりにも無機質に極まる集団——例えるなら、量産品の安物の人形を、大量に購入して並べた様な光景に見えた。

——成る程、彼女の「アレ」も実用段階に入ったということか。

源道は、そう勘づくのと隣に座る「マギウス」を横目でチラリと見る。

彼女はニコニコと屈託無い笑みを浮かべながら、黒づくめの集団を眺めていた。彼女の人の人形の如き様を心の底から嬉しがっている様子だった。

——全く、未恐ろしい御方だ。

源道は、彼女には勘付かれないように、ふう、と消え入りそうなくらい小さな溜息を

吐くと、顔を戻す。

「それにしても、随分遅くなりましたね……」

視界の前方では、未だ顔を顰めたままのみふゆが、羽根達に叱責を飛ばしていた。

黒羽根達は一切反応せず——だが、先頭に立つルカと天音姉妹は、同時に彼女の方へと振り向いた。

羽根部隊が到着する予定時刻は本来19:00。だが、今の時刻は19:35——  
——かなりの遅刻だ。組織に務める者である以上、時間厳守は絶対だと、みふゆは考えていた。

一人でも守れなければ、チーム全体の緩みに繋がると危惧していたからだ。

特に今回は、組織のトップである二人を長時間待たしてしまった。許されるべきではない。

「申し訳ありません、もとじめ元締」

ルカが、丁寧にお辞儀をしてみふゆに謝った。後ろの双子も合わせる様に頭を下げた。

「わたくしは、貴方様より部隊を預かる隊長の身分。時間は必ず守らねばと心に誓っていたのですが……っ！」

ルカは頭を抱えて横に大きく振ると、拳をドンツと胸に当てて、大げさに声を張り上

げる。

「月夜さんの準備が予想以上に長引いてしましまして……」

そして、ゆっくり後ろを振り向き、鋭い目つきで双子の片割れを睨んだ。

標的にされた月夜はうつと息を飲む。同時に両肩がビクリと大きく震えた。

「……月夜ちゃん」

隣の月咲が呆れた目を向ける。月夜はわたわたと両手を振って狼狽えつつも、必死に

言い訳を伝えた。

「あ、あれは……っ！ 稽古が長引いてしまいました……」

仕方がなかったのをごさいます——そう言い終えた瞬間だった。

「月夜さん」

ルカがにっこりと微笑む。

「……っ！」

可愛らしい相貌とは対極的に、絶対零度に冷え付いた声が、鋭い太刀となって月夜の心に突き立てられた。

心臓を鷲掴みにされた様な感覚が襲いかかり、月夜は“死”を覚悟する。

「お言葉を間違えていますよ?」

「も、申し訳ないでござ……申し訳ありませんでした」

言葉の刃物が、心臓にプスリと触れた。月夜はグツと刺し込まれない内に、謝罪する。ちやんとした言葉遣いに直して。

「よろしい」

ルカはパチパチと小さな拍手を送ると、声色を和やかに変えた。

命拾いした月夜は、自分が生きている事を確認する様に「はあーっ、はあーっ」と荒い呼吸を繰り返す。

「……責任は隊長である貴女にもある筈ですが、紅羽根」

だが、自分の部下に責任を擦り付け、あまつさえ攻め立てる光景はみふゆに筆舌に尽くしがたい不快感を齎した。

怒りを顕にした表情でルカを追撃する。

「そもそも、遅れると分かったらその時点で連絡するのが常識ですよ」

鋭い指摘を続けるみふゆだが、ルカは一切意に介していない様子だった。相変わらず不敵な微笑みで、みふゆを眺めている。

その態度が小馬鹿にされている様に感じて、みふゆの怒りは沸点を超えた。

「聞いているのですかっ!？」

「待てみふゆ」

今にも掴みがかろうとするみふゆを、源道が声で静止する。

「お祖父様……?!」

「遅れた要因は、他にも有ったようだね？」

「流石は日秀会長、お察しが良くて助かります。誰かさんとは違つて」

ルカは一瞬だけ、フツと罵る様な横目でみふゆを見た。その言葉と態度が、遠回しに「頭が固い」と告げていた。

みふゆは、更に忌々しさを募らせる。

「それは、ワタシの事でしようか……?!」

「そう思うのでしたら被害妄想も良いところですね」

苛立つみふゆを足蹴にすると、にこやかな笑みを浮かべて源道の方へと歩み寄るルカ。

「実は……此処に参る直前に、ネズミを二匹発見致しまして……少々駆除に時間を掛けてしまいました」

ネズミ、の単語がルカの口から出た途端、今まで黙っていた左の玉座に座す「マギウス」が反応を示した。片眉がピクリと動く。

「しとめたのは、あなた？」



“マギウス”が問いかけると、ルカは首をふるふると振った。  
「いえ、わたくしではありません」

顔を後ろに向ける。居並ぶ黒装束の集団より更に後ろの方から——ずるりずるりと、何かを重たいものを引き摺る様な音が聞こえてくる。

「実力の披露にもなりません……『蒼羽根』が捕らえています」

引き摺る音は次第に大きくなっていく。比例して、ルカの口端も徐々に愉快さを増して、釣りがつっていった。

やがて、『蒼羽根』と思しき、真つ青なフードに身を包んだ少女が、居並ぶ幹部達の前に姿を現した。

「……………!?!」

「……………」

「ほお……………」

「ふくん……………」

——その両手に携えている物を見た時、みふゆは愕然となり、月夜と月咲は息を飲んだ。

源道と“マギウス”の目に僅かながら驚きの感情が表現された。

引きずられていたのは、血塗れの少女二人だった。

『蒼羽根』は、二人の首根つこを掴んでいた。両者とも、腹部には大型の刃物で刺された様な深い裂傷が有り、鮮血がドクドクと溢れ出している。

最早、虫の息同然だった。その場に居る幹部たちを愕然とさせるには十分な光景だ。「はじめまして、日秀会長、マギウス」

『蒼羽根』は挨拶すると同時に、フードをグツと掴んで捲り上げた。

みふゆによく似た色素の薄い頭髮、その一本一本の毛先が針の様に尖っていた。ぱさりと舞うと、銀色の光を乱反射する。

同時に、端正な顔に表現されたのは、まるで全ての感情を削ぎ落としたかのような殺し屋の瞳だった。研ぎ澄まされた刃物の如き眼差しが、組織に君臨する二人を強く射抜いていた。

「君が羽根部隊、副隊長の天乃鈴音くんか。噂に違わぬ仕事ぶりだ」

だが、源道は怖気づくどころか、寧ろ手を叩いて称賛して見せた。隣の「マギウス」もニコニコと笑っている。

「お褒めに預かり、光栄です」

称賛を素直に受け取る鈴音だったが、その顔には喜色が一切浮かんでいなかった。

「たかがネズミ風情に、彼女を使う気は毛頭無かったですか……月夜さんと月咲さんが怖気づいてしまいました……」

ルカは再び、ゆっくりと振り向く。声色はとつても穏やかだったが、双子の姉妹に向けられた眼差しは、息を飲むぐらいに、鋭かった。

矛先を向けられた二人はギョツと目を見開いて身体を震わせた後、

「ゴ、ゴめんなさいっ!」

「め、面目ないでございませすっ!」

咄嗟に頭を下げて、同時に声を張り上げて謝った。しかし――

「月夜さん」

ルカの目が、鋭く瞬いた。

「あっ……」

顔から血の気が、スーツと引いていく様な感覚を月夜は覚えた。

――また、言葉遣いを、間違えた。

自身を見るルカの顔は再び満面の笑みを浮かべていた。だが、月夜は知っている。彼女がその顔を自分に向ける時は――

「先程、わたくしが教えた事を、もうお忘れになったのですか?」

――大抵、腹が立っている時だ。

ルカはにこにここと笑いながら歩み寄ってくる。声は至極穏やかで、まるで母親が乳飲み子に告げる様な慈愛が込められていた。

ドクンツと、月夜の心臓が飛び跳ねた。額にジワリと脂汗が浮き出る。背筋も急激に発汗したのか、寒気を感じた。月夜は恐ろしさの余り、一步身を引いて顔を俯かせる。

「情けない」

頭上から押し付けられる声。見るまでも無い、彼女は屈託ない笑顔を浮かべている。腹の底にあるものをぐつぐつと煮えたぎらせながら。

「申し訳ないでござ……い、いえっ！ 申し訳ありません」

咄嗟に、謝ろうと口を開いた瞬間だった。

—— パアンツ！ と、弾ける様な音が空間を震わせた。

ルカが、月夜の横つ面を裏拳で強く叩いた。

月夜の華奢な体は、真横に薙ぎ倒されると、そのままコンクリート製の床に全身を叩きつける。

「な……っ!!」

「……」

その光景に隣立つ月咲とみふゆは愕然となった。源道も僅かに目を見開く。

「がっ……!!」

倒れた際に米神をコンクリートぶつけたらしい。頭痛と同時に視界がグラリと歪んだ。

無理に動かそうとすると不快感が頭部に押し掛かって、自然と呻き声が挙がってしまった。

「月夜ちゃん!?!」

咄嗟に駆け寄り、姉の体を抱きかかえる月咲。

「まったくまったく……水名女学園に入学した程ですから、その頭脳には期待していたというのに……」

ルカはやれやれと言いたげな呆れ返った表情で、溜息を付くと、

「本当に貴女には、ガツカリさせられてばかりですよ……月夜さん」

再び笑顔を向けて、侮蔑を存分に込めた冷眼で月夜を見下げた。

その言葉に、月咲がキツと顔を歪ませる。

「ルカあ……っ!」

強い怒りを込めて、睨みつける。これには双樹も意外に思った様で「おっ?」と目を見開いていた。

「月夜ちゃんを、馬鹿にするな……っ!!」

怒りの形相のまま、武器を構えて歩み寄る月咲。ルカはにたりと笑うと、腰元に手を

伸ばし——

「おやめなさい!! 月咲ちゃんっ!!」

月夜の怒声が響く。月咲の歩みが、ルカの獲物を引き抜く手が、一斉に制止された。

月咲の表情が一瞬に驚愕に彩れる。

「月夜ちゃん!?!」

振り向くと、両手を使つてなんとか立ち上がりとする月夜が居た。慌てて駆け寄り、介助すると、月夜はよろよろと覚束ない足取りでルカの眼前まで歩み寄り、

『紅羽根』、わたくしの気が緩んでいたばかりに、不快な想いをさせてしまい、申し訳ありませんでした……」

深々と、上体を倒して謝った。ルカは満足気に笑っている。

「月夜ちゃん、なんで……!?!」

月咲は、頭を下げる月夜に掴み掛かる。

なんで、こんな酷い目に遭つたのに!?! なんで、こんな奴に——!! そう叫ぼうとした矢先だった。

(!!)

身体に触れた瞬間——愕然となる。

月夜の身体はガタガタと震えていた。双子である月咲には、その振動の原因が直ぐに理解できた。

間違いなく、ルカが齎した恐怖によるものだ。

「逆らつては、ならないのでございませ……この人にだけは……っ!!」

そして、月夜は、その恐怖に身体を支配されていた。

「……………」

月夜がゆっくりと顔を向けてくる。脅えきった顔の上半分が、大量の汗で濡れている。口の中を切ったのか、端からたらりと一筋の血が流れている。

震えた瞳で、消え入りそうな声で訴える姉の姿に——月咲は何も言う事も出来ず、ただ呆然とするしか無かった。

「お見苦しい所をお見せ致しました」

苦悩する双子の事など、もう興味関心は失せているかの様だった。ルカは、再び源道と「マギウス」に向き直ると非礼を詫びる。

「随分」熱心な指導を施しているのですね」

一部始終を見ていたみふゆが、声色を鋭くして皮肉気に告げる。その顔にはルカに対する嫌悪感がありありと映っていた。

「二人を想う愛情故です」

だが、ルカにはせせら笑いで返される。みふゆは追撃を止めない。

「パワーハラスメントは組織にとってマイナスにしか成りえません」

「月夜さんと月咲さんは甘やかせばすぐに調子に乗ってしまいますので……少々厳しく接する必要があると思います」

刺さる様なその言葉は、背後の二人に向けられていた。月夜の震えが更に大きくなる。

「月夜ちゃん!!」

今にも足が崩れ落ちそうな月夜を抱きかかえてなんとか支える月咲。

「ごめんなさい、月咲ちゃん、わたしが不甲斐ないせいで、ごめんなさい……っ!!」

月夜はガタガタと震えながら、目尻に涙を溜めて、必死に謝り続ける。

月咲は愕然となりつつも、「大丈夫だよ!」「気にしないで!」と必死に声を掛け続けた。

「あれが……あんなものが『愛情』だというのですか……!」



「『愛』の示し方は人それぞれですよ、元締」

心苦しいですが、他者に理解して頂けないのは当然です、と付け加えると、ルカはみふゆが放つ怒りの感情を素っ気無い態度で受け流した。

「今すぐに、お止めなさい……！ さもなければ……」

キツと目を向けるみふゆ。

「さもなければ、如何なさるおつもりですか？」

だが、言葉尻をルカに取られた。彼女は目を細めて、不敵に口の端を吊り上げる。嘲笑う様な残忍な顔つきで、問いかけた。

「……っ！」

言葉に詰まり、齒噛みするみふゆ。ルカは視線を鈴音の方へと向ける。

「蒼羽根が捕らえたあの子達の様にするでも？ それはそれで結構。生殺与奪の権利は貴女にありますので、どうぞわたくしの身を煮るなり焼くなりお好きになさったらよろしいでしょう。但し……」

ルカはそこで顔を戻すと、ゾツとする様な氷の眼光を瞬かせて、言い放った。

「貴女にわたくしの代わりが務まれば……の話ですが」

「っ!!」

その一言が、みふゆの地雷を真上から踏み抜いた。

刹那——彼女の脳裏に、言葉の数々がフラッシュバックする。

忘却の彼方に何度追いやつても——戻ってきてしまう。心底忌々しく、腹立たしい、あの言葉の群れが。

『みふゆさん。ボクはね……貴女のこと、ずっと大っ嫌いだったんですよ』

『一人じゃ何もできない能無しの癖に……!』

『貴女、いちいちうるさいし、窮屈なのよ』

『七海やちよの、腰巾着だった女が……!』

—



ルカを開放すると、バツと源道の方へと振り向き、訴える。

「彼女の蛮行を、過ぎた言動を、見過ごせと仰るのですか……!」

「双樹ルカは優秀だ。それはお前が一番良く分かっているだろう?」

毅然と言い放つ祖父の言葉に、みふゆが唇をきつく噛み締める。表情が苦々しく歪んだ。

「彼女を批難する資格は誰にも無い。お前にも、私にも、そして……マギウスにもな」

同意を求める様に、隣の「マギウス」に横目を向ける源道。

「そうそう! おバカさんたちの教育、ごくろうさま。双樹!」

「……っ!」

「マギウス」もニコニコと笑みを浮かべて称賛を送る。ルカは「ありがたき幸せ」と言つて、深々と頭を下げた。

敬愛する二人がそう言つてしまえば、みふゆは、ただ黙り込むしかなかった。拳を震わせながら、苛立ちをなんとか堪らえようとする。

「それよりも……」

ルカは頭を上げると、再び鈴音の方へ向いた。彼女にアイコンタクトを送る。

「この子達は、どうします?」

鈴音はルカにコクリと頷くと、源道と「マギウス」に向かってそう問いかける。自身

の両手に握られている二人の少女——その処遇を。

「ふむ……」

源道は顎に手を当てて考え込む仕草を見せる。

「……その子らが、我々を追いかけたのは、各々の強い正義感に基づいての行動と推測できる。その勇氣は称賛に値すべきだろう」

源道は僅かに微笑みながら、手を二回叩く。

だが、直ぐに顔の中心に皺をグツと寄せて、表情をきつく顰めた。

「だが……自らの實力を見誤り、組織力も無いまま我らに立ち向かうは、無謀で有り、愚か極まる」

人はこれを「蛮勇」と呼ぶのだったな——と呟く源道の顔つきは、幾多の修羅場を潜り抜けた戦士と化していた。

虫の息の少女達を冷えきった目で見据えて、そう評する。

「マジウスよ、この子達の処遇、貴女にお任せ致しますぞ」

「んー?!」

「マジウス」は「なんでー?」と言いたげに不思議そうな目を源道に向ける。

「孫娘と同じぐらいの少女を断罪しろ、というのは、老骨には心苦しいものでしてね……」

これ以上、心身に負担を掛けたく無いのですよ」

源道はそう呟きながら、胸の——心臓に当る部位を擦る。鬼の如き形相に僅かながら苦々しさが含まれている様に見えた。

「マギウス」はハア、と溜息。

「ありやいやー、相変わらず人間の身体ってフツベンよねー！　まあ、いいけどー」  
心底呆れた様な悪態を付くと、鈴音に顔を向けて応える。

「じゃあ——……」

マギウスは首を傾げて暫し考え込む。居並ぶ幹部達の誰もが彼女の下す選択を心待ちにしていた。

特にみふゆ、天音姉妹は緊張の面持ちで見つめている。

「素材にしよつか☆　黒羽根の♪」

どこまでも無邪気な少女の笑顔と明るい声量が、深淵の中で光り輝いていた。

だが、一端の情け容赦もないその一言には、背筋を震え上がらせる者、恍惚を口元に浮かべる者、無を貫く者——反応は様々だった。





## FILE #13 始まりの詩が聞こえてくる

静かにその扉を開けた。

スイッチを押して、明かりを点ける。

目に見えたのは、何の変哲も無い、いつもの自分の部屋だ。左側に壁に押し付けられた桃色の毛布が掛けられたベッド、その真上で教科書やインターネットア、ぬいぐるみが入った3段の棚が横向きで壁に取り付けられている。窓際には、勉強机に衣類が入った4段

のショーケース——部屋の左半分を占めるそれらの家具が、此処を自分意外の誰のものでもないことを証明していた。

でも今は、酷く違和感を覚える。

「……」

違和の正体はすぐに気付けた。部屋の空間は横に長くて、自分みたいな子供が一人で過ごすには少し広すぎると思う。

部屋の右半分に目を遣ると、「そこ」は『空っぽ』と例えても等しいぐらい、不自然に何も置かれて無かった。

——以前、お父さんは言った。「ここに何か置かないか？」と。

——私は言った。「何も置かないで！」と。

お父さんは軽い気持ちで言っただろうに、過敏に反応してしまった。余りにも真剣で、怒鳴る様に返したものだから、目を大きく開けてびっくりしたのは覚えてる。

どうしてそう返したのか、当時は分からなかった。

ただ、「そこ」に物を置いてしまったら、自分の大切にしているものが押し潰されてしまふんじゃないか、という漠然とした恐怖があった。

でも今は——

「貴女は、『そこ』にいたんだよね……」

はつきりと分かる。

妹は、『環 うい』は、確かに“そこ”にいたのだと記憶が告げている。

広めに造られたこの部屋は、家を建てる時にお父さんが、私とういがいつも一緒に居られるようにって、建築家の人にお願ひしたんだ。

自分と全く同じ家具をういは持っていた。

鏡写しの様に“そこ”に置いていたことを、はつきりと思い出した。だから、自分はその時、お父さんに抵抗したんだ——『環 うい』と自分との思い出が詰まった大切な場所を、何かで消して欲しくなかったから。物の下敷きにしたく無かったから。

「お姉ちゃん、思い出したんだよ、ういのこと」

忘れててごめんね。

心の中でそう謝ると、目を閉じる。瞼の裏側にあるスクリーンの幕が開かれ、ういの姿を鮮明に映し出す。

—— やった、お姉ちゃんと一緒に部屋だ！

自分と一緒にの部屋になると知って、無邪気にはしゃいで喜ぶうい。

—— なんだか不思議。これから毎日、お姉ちゃんと一緒に起きて学校に行けるな

んて。

部屋を初めて二人で見るとき、私に向かって不思議そうに尋ねるうい。

あの頃、病状はかなり安定していた。

同じ年の子供と比べても遜色ないぐらい、身体は元気そのもので、小学校にも通えていた。

「間違いない。ういはちゃんと、〃そこ〃に居た、筈なのに、なんで……？」

そのういの痕跡が、この家から、そっくりそのまま無くなってしまっている。

自分と両親の記憶からも無くなってしまっていた。

何故、いつ、そうなってしまったのか分からない。

「もしかしたら、あの子達なら、知ってるのかも……？」

里見灯花と終ねむ。ういと同じ病室に居て、院内学級に通っていたあの二人なら、彼女の行方を知っているかもしれない。

まだ、入院しているのか定かではないが、明日、病院に――

「貴女はまた〃闇〃に向かうのか」

「!!」

不意に、男の人に呼ばれた気がして、いろはは目を大きく見開いた。咄嗟に顔をキョロキョロ見回すが、自分以外に誰もいない。

(幻聴……?)

聞き覚えのある声だった。前に夢で見たあの白衣の男性によく似ていた。それが、〃そこ〃から聞こえてきたように感じて、自然と、足が向かう。ういのベッドが有った場所まで歩くと、そこできい、と床板が鳴った。

「……………」

母親の手紙を確認する。ここに、隠されていたものがあるのか。

屈んで、音が鳴った床板をじいっと見つめると、そこだけが不自然な正方形で浮き上がっていた。

手で鷲掴みにして、引つ張ってみると、するりと抜けた。長方形の箱が姿を現した。

——それにしても、どうしてお母さんは、態々〃ここ〃に隠したんだろう。お母さんも、ういのことを忘れていた筈なのに。

母親の不可解な行動に疑問に思いつつも、箱を床に置いて、下部を開けてみる。中から一枚のカードと二枚の手紙が取り出せた。

まず、カードを見る。手紙に書かれていた通り銀行のカードだ。裏側には暗証番号の書かれたメモが貼り付けられていた。預金はここから引き出せ、ということだろう。

じゃあ、紙には何が書かれているのだろうか——そう思うと、途端に不安の気持ち波の様に押し寄せてきて、右手に掴んでいる母親からの書き置きをぎゅう、と握りしめた。せめて、自分にこれ以上の不安を与えさせないものであつて欲しいと祈りつつ、一枚目を読み始める。

『いろはへ

これを読んでいるということは、お母さんからの書き置きはもう読んでくれたものと推測します。

なので、僕からは何も言いません。ただ、3つほど約束してください。

・お前の今後は、『夕霧 青佐』という人に託しています。お父さんとお母さんの古くからの友人で、とても信頼できる人です。

神戸市に住んでいるので、市役所で確認してください。すぐに分かると思います。

・親戚には一切頼らないでください。お前が叔父や叔母、従兄弟と思っていた人たちは今日から他人になります。

電話も掛けないでください。

・これからの人生を平穩にくらしたいとお前が思っているのなら、これから身の回りで起きる事柄には一切関わらないでください。

でも、もし、立ち向かいたいと思つたら、神戸市で大賢者様を探しなさい。きつと力になってくれる筈です。

お前がこれからも健やかに生きていける事を心から祈っています。

父、輝一より』

「お父さん……っ！」

父からの手紙を読み終えたいろはの頭に齎されたのは、驚愕と混乱。

何故、親戚に頼つてはいけないのか。「これから私の身の回りで起きる事柄」とは一体何か？

考えるだけでも、悍ましい気持ちさがざわざわと背中を這い出してきて、震えそうだ。

お父さんは何を知っているのか。今まで何を隠していたのか。  
「でも……」

【自分はまだ、一人ぼっちじゃない】

『夕霧青佐』と『大賢者様』とは一体何者か——その二人は、本当に信頼できる人物なのかは分からない。でも、その気持ちが芽生えただけで、心の中を覆っていた雲の群れから、一筋の光明が降り注いだ。

（希望は、まだ、ある……！）

それが心を照らして暖める。

明日は日曜日だ。普通の役場は休みになるが、横浜市役所の場合、治安維持部の受付だけは毎日24時間空いていると七海やちよが教えてくれた。

早速、明日には向かって、聞いてみよう。いろははそう意気込むと、父の手紙をポケットにしまった。

——そして、残されたもう二枚目の手紙に目を遣る。

両親からのメッセージは確認した。ならば、残されたこれは一体、誰からのものになるのか。



恐怖に近い不安と、期待を込めて、それを開く。

「!!」

一文目を目にした瞬間、いろはは自分の目を疑った。

I have a rendezvous with Death

「『わたしには』」

いろはの口が、自然と開いた。読んだことも無い英文なのに、何故か自分の頭は、その意味を明確に理解していた。

「『死神と会う約束がある』……」

目線を下げると、英文は更に続いていた。

At some disputed barricade, When Spring  
comes back with rustling shade And app-  
le-blossoms fill the air—

「ある陣地の争奪で 春が物騒がしい明暗と共に還つてきて 林檎の花々の香りが宙を満たすところに——」

だが、いろはの頭は、彼女自身驚く程に即座に理解していた。

「……っ!？」

困惑が一気に頭の中を支配した。

一体、これはどういうことか。どうして自分は見たことも無い英文の意味を知っているのか。

——いや、それどころじゃない。これは、もしかや——!!

「!!」

いろはは、手紙を顔から離して、書かれている全文を確認した。

## ☆

夢を見た。

いつもの病室。温かい日差しが窓から差し込んだ、林檎の臭いが優しく漂ういつもの場所で、自分は一つのベッドと向き合っていた。

「うい」

声を掛ける。ベッドの上の人物は、身体を起こしていた。顔を背けて窓の方を向いている。

「おねえちゃん、思い出したよ、貴女のこと」

それが少し気になりつつも、懸命に声を掛けた。思い出したことを喜んで欲しい一心だった。

だが、彼女は、振り向かない。映る都会の街並みをじつと眺めている。まるで自分の言葉など最初から聞こえていないかのよう。

「うい」

「……………」

再び声を掛ける。しかし、ういは振り向かない。

——からかっているのかな？

多分そうだ。なんだか微笑ましくて、ふふ、と笑みが溢れる。

「ねえ、うい」

こつちを向いて、顔を見せて。

そう思い、彼女の肩に手を伸ばし、

「お姉ちゃんは、わたしの邪魔をするの？」

掴もうとした寸前だった。冷え切った声が、矢の様に飛ばされた。

「えっ？」

心臓を射抜かれた様な痛みが強烈に走った。驚きの余り目を見開いた。

伸ばした手が、ピタリと止まる。ういが今、何を言ったのか、全く理解できなかった。

「何度もいったよね？」

「……………!!」

ういは振り向かないまま、低い言葉が叩きつけてくる。

ズキリズキリと、心臓が激しく痛んだ。覚えのない罪悪の感情が強引に引きずり出されて、叩き付けられた様な感覚だった。

右手で胸を抑える。

「……………っ!!」

刹那——窓の景色が一変。

光景を目の当たりにした瞬間、両膝がぐくぐくと震えた。同時に猛烈な胃酸が腹の奥からこみ上げてきて、口を抑える。

それは、小さなキュウベえをこの手に掴んだ時に見た夢の一片だった。

行ったことも無い工場の管理室で、見たことも無い女性が張り付いて眺めていた悍ましい光景——生肉の塊が、ぐちゃりぬちゃりと生々しい音を立てながら、何処かに運ばれていく。

「……………っ!」

恐怖からか、それとも、知らない罪悪感からか。

自然と、視界が歪んだ。両目には涙が溢れていた。ここから逃げ出したいのに、逃げ出してはならないという矛盾した二つの気持ちが闘ぎ合い、身体を縛り付けていた。

「……………」

ふと、ういを見る。

ぞつと背筋が冷えた。彼女は、無言のまま、平静とした様子で、窓の光景を眺めている。

「わたしには」

そこで、静かに呟きはじめる。

ああ、次に言うのは、あの『言葉』だ——でも、それが聞きたくない。ういの口から聞くのは嫌だ。

「『死神』と会う約束があるんだって」

耳を塞ぐよりも早く、ういの言葉は告げられてしまった。最後まで、振り向くことは無かった。

☆

目を覚ますと、知らない病室に自分は居た。

窓から差し込む陽の明かりが、自分の身体に降り注いでいる。凍り付いた心を優しく撫でて溶かしているようで、安心感で満たされていく。

あの悍ましい場所から抜け出せたと思うと、ほっと一息付けた。

(あれ?)

不意に病室が気になった。全体を見回すと既視感を覚える。

(ここって……)

ういが居た病室と酷似していた。

しかし、平穩に満ちていた『あそこ』と比べると、此処は酷く無機質で殺風景に感じられた。

それもその筈だ——林檎の臭いが無い。周りのベッドを見ると、ういも、灯花も、ねむもない。ああ、ここに誰か一人でも居てくれたらもつと気持ちが安らいだらうに。

「たまき」

そこで突然、誰かから、名前を呼ばれた。

「っ！」

身体がビクリと跳ねる。

安らぎの時間は一瞬で終わった。目の前に彼女が居る限り、それは敵わないのだ。

緊張感が齎されて、全身を固めていく。

じとりと、顔に脂汗が浮かんできた。

「何をそんなに悩んでいる」

自分は丸椅子に座って顔を前に向ける。以前、夢の工場で見た知らない女性が立ち尽くしていた。彼女も自分と向き合っている。

憔悴しきっていたあの姿と比べると、今は、両足でしゃんと立っており、背筋もピンと張っていて至って澆刺そうに見える。顔もよく見ると皺が少なくて、10歳は若返っている印象だ。

——この人は、誰？

考えてみる。記憶をあるがまま手探ってみる。誰かに、彼女は似ている。でも、誰に似ているのかが、想像できない。

「感傷に浸るな。ヒューマニズムなど、我々には無用の長物だ」



「……っ！」

女性の顔は、叩きつける様な低い声と反比例して、和やかな笑みを浮かべていた。それを捉えた瞬間——一つ理解したことがある。

彼女の事が、忌々しかった。

腹の底から憎悪の限りをぶち撒けてやりたいと思っていた。

「捨てろ」

素っ気なく吐き出されたその一言で、感情の煮え湯が一気に脳まで達した。

「捨てちゃ駄目なんだ!!」

気がついた時には、自分は彼女の胸ぐらを掴み上げて、ありつたけの怒りをぶつけていた。

「人は最期の時まで人で無くちやいけなっ!! 救う使命を背負った私達が人で無くなってしまったら、誰があの子たちを救えるというのっ!?!」

口から烈火の如き激情が溢れてくる。

だが、彼女は怯まない。寧ろ蔑む様な笑みと凍り付いた瞳で見下ろしてくる。

それを見て、もう一つわかった事がある。

自分が殺意を抱いたのは、これが初めてだった。

「わたしも同意見だ」

不意に、また別の女性の声が頭に響いた。

ハッと気がついた頃にはまた別の場所に自分は移動していた。『瞬間移動』をしたらこんな感じなんだろうか、と突拍子も無い考えが頭を過る。

——そこは、またも病室だった。だが、これまで夢で見たものとは明らかに違う。野戦病院の様だ。

横並びにされたベッドが、部屋の奥まで延々と続いている。何れの上にも人が寝ていたり、いや、寝かされていた、といった方が正しいのかもしれない。

——正しい？ 何で正しいなんて思うの？

自分でそう判断したにも関わらず、疑問が湧いた。問いかけようにも答えてくれそうな人が周りには居ない。

目の前のベッドを覗き込む。そこに横たわっていたのは子供だった。10代半ばの小さな女の子だ。

一切微動だにしないので、もしかしたら死んでいるのではないか、と思い咄嗟に口元に耳を当てると、スー……スー……静かな寝息が聞こえてきたので、安堵した。

身体を戻して、他のベッドをまじまじと見つめる。寝かされているのは、同じぐらいの少女ばかりだ。

「彼女たちは生きているんじゃない。生かされている」

不意にその言葉が背後から飛んできた。

「~~~~~っっ！」

腹立たしい感情が胸の内を覆い尽くす。胃の中で悪い虫が暴れまわり、内側から食い破られる様な痛みが全身に響いた。

その場で膝が折れた。下腹部を押さえながら、声にならない声で呻く。

「あいつを見ていると、思う事がある。人間の理性というものはどれほど勝手に漠然と

した道具かということを」

「っ!!」

苦痛に蹲る自分の背中に、再び同じ声が掛けられた。咄嗟に振り向くと、今までの夢でも会ったことの無い女性が一人、歩み寄ってきていた。

赤いフレームの丸メガネを掛けて、白衣を纏った、初老の女性だった。後ろで一本に縛った三つ編みのお下げがゆらゆらと揺れている。

顔つきは、どこか疲れ切っている様で、頬は色白でこけていた。睡眠不足なのか、目の下には真つ黒なくまができています。

「だからこそ、君の言う通り、我々は自らの『良心』でそれを改善しなくてはならない。節制と貞潔を……我らに与え給うた神への敬意によつて、それ自体を愛さなければならぬ」

彼女は、光を失った瞳で見据えながら、まるで機械の様に感情が抜け落ちた声色で淡々と語りかけてくる。

だが、紡がれた言葉は、意志を失つてはいなかった。

「だったら……もう止めるべきです!」

そう確信した時、自分の心に再び火が点いた。立ち上がると、彼女に食って掛かるようにして訴える。

「だが、それは今の我々には不可能だ」

だが、彼女は小さく首を振って否定する。

「我々の世界が直面している問題を如何にかするには、彼女たちの身が必要だった」

「そんな……っ！」

諦念混じりの言葉を受けて、齒を食いしばった。そんなことはない、貴女の意見が奴には必要なんだと訴えてやりたかった。

「この問題は後世に残してはならない。我々が澆刺としている内に……解決しなければならぬんだ」

そこで彼女は、この部屋で横並びになっているベッドの上で、穏やかに眠っている少女たちを見回した後に、ゆっくり首を戻して自分を見つめた。

——分かってくれるね。

光を失った漆黒の瞳が、有無を言わせぬ圧力を携えて、そう訴えてきた。

「……………」

口を閉ざす。彼女の意志は鋼の様に固い。これ以上は何も言っても通じない。

「だが……………」

そこで彼女は、顔を俯かせた。影が掛かり、表情が全く見えなくなる。

「……………最近、夢を見る」

ポツリと呟かれた言葉は、震えていた。

「学校で、保険医をしている夢だ」

「……………」

彼女が訥々と語りだしたので、耳を傾ける。

「悲鳴が聞こえてね、私は慌てて保健室を飛び出して近くのクラスに駆け込むんだ。女の子ばかりのクラスだった。テロリストが乱入してショットガンを撃ちまくっていた」

語りながら、彼女は両手をゆつくりと上げた。

「女の子達は狂ったように悲鳴をあげて次々と血飛沫を撒き散らした。私は『早く逃げろ』と叫ぶんだ。助けようって一心で。でも……みんな、撃ち殺された」

開いた手のひらを、じいっと見つめている。

「気がついたら、ショットガンはわたしの手の中にあっただ。どういふことかわからなかった。ただ、一つ分かったのは……」

—— わたしが、彼女たちを撃ち殺した。

彼女の声色によろやく感情が乗せられた。声を絞り出すと、両手を強く握りしめて爪を食い込ませる。

「それでもわたしは懺悔のつもりで、一人の女の子を外に連れ出そうと背中に乗せた。死にかけている血塗れの少女が恐ろしく重たくのしかかっていた。口の中に血が入り込んで空気を求めて喘いでも、すぐに血は口の中に溜まる。その血の味、血のにおい、血の熱さ、血のぬめりが……こびりついて離れないんだ。こんな夢を毎日見る自分に怒りを覚える……。悪夢が止まらない事にどうしようもない不安を覚えるんだ。昔の楽しい夢が見たいのに……」

彼女は言い切ると、顔を上げた。漆黒の瞳を震わせて、訴えてくる。

「ねえ、たまき、わたしの頭の中は、いつの間に、こうなつたんだろうか……？」

## ☆

意識は、そこでようやく現実へと戻された。

いつの間にか、仰向けで眠っていた。夢の内容は、最後まで何が何だかわからなかった。

何で、身に覚えのないことばかり、思い出すのだろう。

普通に歩んでいた筈の自分の人生は、これからどうなってしまうのだろう。何処へ向かって行くというのか。

——ういと、お父さんとお母さんがいなくなっただけ、全部夢であれば良かったのに——  
——そう思いながら、体をむくりと起こす。

誰かが書いたのかわからない手紙を、寝ぼけ眼でもう一度眺めた。

「あれ……？」

呆気に取られる。てつきり、視界が歪んでいるのは、寝起きとばかり思っていた。

頬に、温かい何かが流れ落ちる感覚。

「泣いてる、の……わたし……？」

そこで自分は、その手紙を読んで涙を流していたのだと気づかされた。

直後、頭の中で、呼び覚まされたかのように、ある名前が浮上してきた。

「うい」

呟かれたのは、二文字。妹の、名前。

まさか、と思った。

しかし、彼女しかいないのだと、自分の頭の中で叫ぶ様な声が響いていた。

「うい、なの……？　これを、書いたのは……？」



涙を拭い、手紙に書かれている全文を、今一度、確認する。

『 I have a rendezvous with Death  
 At some disputed barricade, When Spring  
 comes back with rustling shade And a  
 people blossoms fill the air |

「あなたがこれを読んでくれた時、もう私はどこにもいないだろう。』



# FILE #14 斯くて、進み行く者達

翌日、日曜日、午前10時頃――

場所は神戸市神浜町中央区、市役所の隣にある巨大な建造物『神浜中央図書館』へと  
 いろはは足を運んでいた。

『私に昨日、ういが書いたと  
 think I have a rendezvous with Death』で始まる詩につ  
 いてだ。

あの文章を読んだ時、自分は既視感を覚えた。いつ、どこで読んだのかについてはさっぱりだが、何かの本で読んだ——と、記憶が強く訴えている。

(そう思ってきてみたのに……)

個人勉強用のテーブルで本を読みながら、いろはは胸中でボヤいた。

『海外の詩集』という題名の分厚い本をようやく読み切ったところだ。小さな文章を読み込んだせいで目が疲れてきた。擦りながらハア、と溜息を付く。

結局、お目当ての詩は、その本には記されていないなかった。スマホで時刻を確認すると、既に10時に回ろうとしていた。

(もう一時間か……)

図書館に来たのは9時。開館と同時に足を踏み入れた。

今日の予定は、この時間までには詩を探し終えて、市役所で自分をお世話してくれるという『夕霧青佐』って人のことを聞いて、ういと、ねむちゃんと灯花ちゃんが入院しているかもしれない『神浜総合病院』に行く——そう立てていたのに。

(なんで私の探したものって見つからないの……)

ヘナヘナと机に突っ伏すいろは。前回の小さなキュウベえにしたって、結局自分じゃ探し当てることができず、七海やちよが拾ってくれたのだ。

今回の詩も全く同じ。一週間……一ヶ月……一年……もしかしたら永遠に見つから

ないかもしれない不安が、重たく押し掛かってくる。

いつそ図書館の職員に聞いてみようとも思ったが、「死神と会う」なんて物騒な言葉から始まる詩を尋ねようものなら、ドン引きされるかもしれない。

(もうちよつと探してみよう……)

本を小脇に抱えて立ち上がるいろは。

『海外の詩集』と題名に書かれた本はこれ一冊しか見つからなかった。

しかし、入り口で神浜中央図書館の見取り図を確認したところ、此処は3階立ての広大な建造物である事がわかった。なので、探せばもつとあるかもしれない。

詩集を戻すべく、元の本棚の前へと移動するいろは。

「あっ！」

詩集を隙間に入れようとした所、手が滑って絨毯の上に落っこちてしまった。

身体を屈めて拾おうとするが、

「どうぞっ」

耳朶を打つ女の子のか細い声。

いろはよりも早く、目の前の人物が本を拾ってくれた。

「ありがとうございます」

お礼を言いながら、差し出された本を受け取ると、本棚にしまういろは。

顔を戻すと、一人の小さな少女が胸の前に手を組んで、佇んでいた。

人形の様にふわふわしたライトグリーン色の髪の毛をツインテールに縛り、子犬の様な愛らしさを感じさせるクリクリと丸い瞳で自身をじいっと見上げている。

(可愛い……)

少女の可憐な相貌にいろはは思わず見とれてしまった。

少女も微笑みを浮かべて相変わらずいろはをじいっと見つめている。

「……………」

しばらく無言で見つめ合う二人。

「……………」

「……………」あの、ずっと見つめてますけど、何か私、変でしょうか……う？」

とは言え、いつまでも無言で見つめられて気持ちの良いものなどない。いろはは少女の様子を不審に感じて、問いかける。

「あ、っ、ごめんなさいっ！　ち、違うんですっ」

少女は叱られる子犬の様に、ビクリと肩を震わせて一歩後ずさる。

「あ、あのっ、環、いろはさん、ですよね……！」

「!!」

名前を呼ばれた事にいろははギョツと目を丸くする。

「七海やちよさんに挑戦して、勝ったっていう魔法少女……っ!!」

少女が両目を輝かせて羨望の眼差しを送るが、いろははウツと息を飲んだ。

確かに挑戦はしたが、自分の中でアレは勝ったといえるのか、微妙だったからだ。（や

ちよは勝利者と言ってくれたが）

っっていうか、それよりも——

「もう、知れ渡ってるんですね……」

「はい♪」

呆然と苦笑いするしかないいろはに、少女は、それはもう嬉しそうな笑みを浮かべていた。

そういえば図書館に来るまで、人々が自分の事を注目したり、スマホのカメラでパシャパシャ取られていた気がする。——考え事をしていたので、あまり気にはならなかったが。

「そ、そんなに話題になってるんですか……?」

「はい。これを見てください」

少女はスマホを取り出すと、神浜市公式HPにアクセスする。そこでニュースページ

を開くと、画面をいろはに見せつけた。

「っ!!!」

それを見たいろはは、ビックリ仰天ッ!!

『最強の挑戦者現る!! 女神を地に叩き伏せた女、その名は、【環 いろは】!!』

『七海やちよ撃沈!! 突然訪れた闖入者は【魔物】!?!』

『まさかの敗北!?! 【英雄】を超えた環いろはの実力は【神域】か!?!』

「~~~~~?!!?!?」

——最強の挑戦者!?! 魔物!?! 神域!?! そんなんじゃないっ!! 只の普通の女子中学生です!!

心の中でそう叫ぶものの、こんな形で自分の存在が市内に広まってしまったという事実にいるのは顔は恥辱で真っ赤になる。

その場で屈んで、頭を抱えると、震えだした。

「あ~~~~…環、さん……」

「何も聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない!!」



心配になった少女が声を掛けるも、いろはは振り向く事なく、身体をガタガタと小刻みに震わせながら、懸命に否定するばかりであった。

☆

「二葉さんも魔法少女だったんだね」

「はい♪」

あれから10分ぐらい掛けて、いろははどうか気を取り戻した。

窓際の談話スペースに移動して、談笑するいろはと少女。

少女の名は「二葉 さな」といって、いろはがこの街で出会う四人目の魔法少女となった。

彼女はSNSサイトで偶然知り合った小説家の男性の住まいでルームシェアをしているのだという。

「でも、小説家の助手かあ、凄いなあ。どんなことをしてるの？」

いろはが褒めると、さなは若干恥ずかしげに頬を紅潮させて、目を逸した。

小説家の男性——さな曰く『先生』は彼女にとつて憧れの人らしく、執筆活動を補助したいと自分から『助手』を願ひ出たのだという。

「そんな……凄くなんてないですよ。やつてることつて言つたら、食事とか掃除とか身の回りの世話ぐらいで……あとは、知識を付ければいつか助けになるかも、つて思つて本を読んでもるぐらいですし……」

「へえ！ 先生はどんな方？ 良い人なの？」

「はい♪」

さなの姿勢に感心したいろはが尋ねると、さなは輝かしいぐらいの笑顔で即答。

「もやしみたいに根暗な人なんです」

「えっ？」

そして、笑顔のまま放たれた一言に、いろはの目が点になる。

「私が用意しないと食事なんて取ろうとしないですし、ゴミなんて周りにポイポイ捨てますし、お風呂も祿に入らないし、明け方まで寝ないし、四六時中ぶつぶつブツブツ独り言を呟いてるし、かと思つたら『さなくんやつたぞ!! 誰も思いつきそうにない展開が頭に閃いた!! これで締め切り守れるっ♪』なんて服脱いで踊り出すし……」

「全然、良い人には思えないんだけど……」

「はい。もう変人というか……変態さんです」

捲し立てるように次々と口から放たれるのは、先生に対する罵詈雑言である。

どうやらこのさなという少女——小動物的な見た目に反して、気の置けない人物に対しては中々容赦が無いらしい。

若干寒気が走り、いろはは苦笑いを浮かべていると、さなが急に顔を下に俯かせた。

「でも……」

身体をもじもじとよじらすさな。いろはが顔を覗き込むと、色がピンクに染まっていた。

「……すつごく、優しい人なんです」

一泊置かれてから、顔を上げた。迷いの無い瞳でいろはを見据えながら、はつきりそう伝える。

「私、育った環境が凄い複雑なんですけど……先生は気にしないで、全部受け止めてくれたんです」

「そっか」

微笑んだ口元から小さく呟かれる声を聞いて、さなは先生に対して特別な感情を抱いているのかもしれない、というはは思ったが、今は聞かないことにした。

人の色恋沙汰に首を突っ込んで余裕が無い、というのもあったが、

(この子と先生の優しい関係は、このまま穏やかに続いていつてほしいなあ……)  
故に、だ。

彼女と先生の関係に水を刺してはならないと決めた。

笑顔でさなを見つめて、そう願ういろはであった――

「っ!!」

が、刹那、頭にバチリと電流が走った!

(そうだ!)

「っ!」

突然、頭の中でそう叫ぶと、顔から笑みを消した。そして、さなを真剣な眼差しで強く見つめるいろは。

根拠も無いいきなり凝視されてしまったさなは、さながら狼に捉えられた兎の様な反

応を示した。心臓がドキリと飛び跳ね、ギョツとたじろいで、困惑。

「二葉さん」

「は……はい!？」

温和な少女から、戦士の様なしかめっ面に豹変したいろはに、さなは脅えるしかない。細められた目は、睨みつけてくるように強くて、何か失礼な事を言ったかな、とさなは身が竦ませる。

「先生に、会わせてもらえないかな？」

「えっ?！」

かと思いきや、いろはの口から飛び出したのは、思ってもない申し出——さなは目を丸くしたが、自分に怒ってる訳でないと知って、心の底からホツとした。

☆

いろははさなに引き連れられて、図書館の屋上へと向かつていた。

出入口に有る見取り図にも記されてあったが、この図書館は屋上にもテーブル席や木製のベンチ、個人勉強用スペース等が設けられ、読書に勤しめる仕組みになっている。

さなの話では、先生は開館時間の9時からそこで執筆に集中していると聞いた。

——小説家なら、あの『詩』のことを知っているかもしれない。

いろはが、先生に会いたいのは、そう思い至ったからだ。

引き締めた険しい顔つきのまま、屋上への階段を一步一步踏み進んでいく。

「環さん」

そこで、いろはより前を歩いていたさなが突然足を止めた。名前を呼んで振り向く。

「……!!」

「??」

さなの顔と、いろはの顔が向かい合ったのと同時だった。さなが突然驚いた様にビクツと肩を震わすと、怯えた表情で俯きだす。

その仕草を怪訝に思ういろはだったが、答えはすぐに彼女の口から吐き出された。

「顔、怖い、ですよ……」

「っ!!!」

消え入りそうな程小声でポツリと呟かれた言葉は、いろはの意表を鋭く貫いた。ハッ

と口を開けて、目を見開く。

愕然とした。

大慌てで両手で顔を拭う仕草を取る。

「……………めんね、そんな顔してた？」

拭いさつた後には、困った様に眉を八の字にした、いつもの温和な笑みを浮かべたいろはの顔があった。

彼女に言われるまで全く自覚が無かった事に、後悔する。

「はい……………あの、やっぱり、気になるんですか……………？ その『詩』のことが……………」

しかし、表情を元に戻しただけで、さなが簡単に警戒を解いてくれる訳が無かった。

彼女の顔には若干の怯えと困惑が張り付いたまま、じいっと見つめてくる。

疑うような問いかけにいろははこくりと頷いて、答える。

「うん……………私にとって、大切なことかもしれないから……………」

「そうですか……………」

さなはそう言つて顔を戻すと、再び階段を昇り始める。いろはも合わせてさなの後ろを付いていく。

しばらく無言のまま、二人は進んでいた。

やがて、階段を上り切ると、一つのガラス扉が前方に見えてきた。

「この先に先生が？」

「はい」

二人並んでガラス扉の前に立つ。自動開閉式だが、開く位置まで進む前に、いろはは立ち止まった。

「どうしました？」

さなも立ち止まって、いろはの方を向いた。表情を悩ましそうに歪めている。

「あの……やっぱり執筆の邪魔しちゃ悪いかな……」

「あ、大丈夫だと思います。先生、たぶん、気にしませんし……ただ」

「ただ？」

「集中し過ぎてると、気を逸らすのが大変なんです。もし、そうだったら、手伝いますね……！」

そういえば——というはは不意に、自分の父親の事を思い出した。

彼は大手製薬会社の開発部で働いていた。

会社の研究資料を家に持ち帰って調べている間は、かなり熱中している様子で、何度声を掛けても、どんな言葉も投げて、上の空だった記憶がある。

一つの仕事に人生を捧げた男の人というのは、皆あんな風なんだろうか——

「環さん？」



思っている、さなに声を掛けられた。ハッと我に返るいろは。

「あつ！ ごめんごめん。ちよつと考え事してて……じゃあ、行こうか」

「はい」

笑顔で声を掛けるとさなも笑顔で返してくれた。二人は同じタイミングで前に進みだす。

扉が機械音を立てて開き、屋上の外へと足を踏み入れる。

見取り図通りの光景が広がっていた。真つ青な空の下で、パラソルが中央に取り付けられたテーブルが散らばっている。端の方を見遣ると、木製のベンチもあった。角に当たる場所には、個人勉強スペースが設けられている。

「うわあ……！」

屋上まで行ける図書館は普通無い。いろはも初めて見る光景に新鮮味を覚えて思わず感嘆の声を漏らした。柔らかく当たる風も涼しくて心地いい。

それにしても——こんなに素晴らしい場所があるにも関わらず、人は斑らである。内部は老若男女でガヤガヤしていたのに、意外だ。

さなの話では態々ここまで足を運んで、本を読む人はいないという。いるとしたら先生のような変わり者か、独りが好きな人ぐらいだそうだ。

「先生はっ？」



下部をよく見ると銀色の灰皿だ。それだけなら何の変哲もない。問題は中身だ。

図書館が開いて既に一時間半ばで4箱は開けたのか——そう思ってしまう程の先端を黒くした残骸が、小山の様にこんもりと盛られている。

彼の口にも一本の煙草が咥えられていた。タイピングを打ち終えた彼は、左手の二本指でそれを摘まんで口から離すと、腕を真上に振りかぶる。

「ふんっ!!」

そして、苛立ちを発散するように力強く意気込みながら、勢いよく灰皿の中へと先端を叩きつける!

朱色に燃えていた先端は、強力な圧力によつてすぐに鎮火された。即座に黒墨となつた先端から弱弱しくなつた煙が漂い、晴天へと舞い昇つていく。

(……………!)

いろはの足が竦みだす。

最初は、幻だと思つた。色んな魔女や魔法少女を目にした自分でも、ここまで凄まじい気迫の持ち主は、知らない。

みずぼらしい男性はやせ細つて、肌も雪のように色くて……黒い髪もボサボサに生えてて、無精ひげも口の周りを覆いつくして、まるで死を間近にしながらも、満足な手当てや世話を受けていない重病人の様だ。

だが、自分の体が受け止めているのは、間違ひなく彼が放つ熱気。

全身を鋭く刺すようなそれは正しく彼が、そこで強く生きていることの証だった。

(あ、声を掛けなきゃ。でも……)

彼が、さなのいう『先生』なら、聞きたい事を問わなければならない。

だが、声を掛けるのが、怖い。

先生と思われし男性は、いろはとさなに全く気づくことなく、再び画面を凝視しながらキーボードを騒がしく叩きつけている。

「執筆に熱中してるみたいだし……やつぱり、悪い、よね……？」

いろはが、さなに横目を向けて、問いかける。

内心では、先生らしき男の今の様子からして、声を掛けたときに、怒鳴られるかもしれないという不安の方が強かった。

すっかりオドオドしている。

「大丈夫ですよ」

だが、さなは自信を込めた笑みをいろはに向けて、はつきりとそう返した。

「……えっ？」

「先生？」

いろはが目を丸くしている内に、既にさなは先生の傍へと歩み寄っていた。

「……………」

だが、先生にはどこ吹く風。カタカタカタカタ……とキーボードの音だけがやかましく返ってくる。

「先生」

「……………」

二度目の呼びかけ。しかしこれにも無反応。先生の意識は『執筆』から逸れない。

「先生ー」

「……………」

三度目。耳元に口を近づけて、頑張って大声。

しかし、これも彼には届かない。左耳から入った言葉は、頭に向かわずに、右耳から抜けてしまったらしい。

(こうなったら……最後の手段！)

先生は、こうなってしまう場合、耳を抓つかろうが、引っ張ろうが、頭をポカポカ叩こうが、全く通用しないのだ。

執筆を完全に終えるまでは、普通に戻らない。

故に、奥の手を使うしかない。

(でも……)

チラリと、いろはの方を見る。人前ではコレをするのは恥ずかしいけど……彼女の為だ。仕方がない。

さなは、唇を先生の耳元に近づけて――

「フツ」

と、息を吹きかけた。

「~~~~~つつつ?!?!」

その直後であつた。

先生の全身から放たれる熱の奔流が、瞬時に収まった。ゾクゾクと凍える様に身を震わすと、顔面が蒼褪めていく。

そして――

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああ?!?!」

腹の底から絶叫して、椅子ごと、後ろから転げ落ちた。

四肢でバタバタと床を叩きながら、悶え苦しむ。

「耳~~~~~つ!! 耳はやめてくれえ~~~~!! それだけはダメなんだあ~~~~」

!!!

(ええ〜……)

情けない悲鳴を挙げながら、頭を抱えてダンゴムシの様に縮こまる先生。

先ほどの熱気を纏う人物と同一とは思えず、いろはは愕然と見つめるしかない。

「先生」

「うわあっ!？」

そこで、さなが先生の前で屈んで声を掛ける。先生は頭をがばつと上げた。

「……ってなんださなくんか。驚かさないでくれ。頼むから……」

「ふふ、ごめんなさい」

ホツと一息付くと全身の硬直が解けたのか、体がへなへなと床に這いつくばった。

先生のそんな姿が滑稽に感じたのか、さなは笑いを漏らしつつも謝る。

「それよりも先生……。先生にお客様です」

「あつ、え？　もしかして、あの子かい？」

「はい」

ようやく我に返った先生がきよとんと目を丸くすると、いろはの方を向いた。

さなも合わせるように、いろはの方へ顔を向ける。

「は、はじめまして！」

未だ緊張が抜けきっていないいろは、ビシツと背筋を伸ばして挨拶。先生は立ち上がる。

「いや、失敬。見苦しい所を見せてしまったね」

僅かに微笑を浮かべて歩み寄ってきた。

「はじめまして。作家の阿峽あかい 慎まことだ」

名乗った先生は右手を差し伸べて握手を求めてくる。いろはも右手で握り返した。

「あかい まこと……」

なんだろう、聞き覚えがある名前だ。確か、それっぽい名前の小説家の本を、読んだことがある。

「ペンネームで名乗った方が分かり易かったかな？」

顔を俯かせて考え込んでいると、先生の穏やかな声が降ってきた。

「え？」

「慎まこと允かい 峽かい。改めて、よろしく」

「!!」

いろはは目を大きく見開いて、先生を見た。

『慎允 峽』——その名を聞いた途端、頭の中で回答が光の様に広がり始める。

確か、その作家は近年、幅広い世代で人気だった。



去年発表した作品、「欺瞞」に至っては個々の登場人物たる老若男女が抱えるドロドロとした感情を克明に表現する手法が素晴らしいと評価され、芥川賞候補にまで残った程だ。

父が彼の小説を夢中になって読んでいたのを、はつきりと思い出せる。

いろはも試しに読んでみたが、登場人物達の心象描写の余りものエグさに気分を悪くしたので、読むのを断念してしまった。

「は、はじめまして、環、いろはです……」

とはいえ、まさか今を煌く人気作家と此処で巡り合えるとは思っていなかっただけに驚きを隠せなかった。

目を大きく見開いたまま、カチンコチンに体を固めてお辞儀する。

慎は笑みを浮かべて頷くと、倒れていた座椅子を起こして座った。そして、「立ち話もなんだから」と、いろはときさなに同じテーブル席に座る様に促す。

いろはは慎の対面側に、さなは直角側に座った。

「さて、環さん、僕に何の様かな?」

「実は、先生にお尋ねしたいことがあります……少しお時間を頂いても、大丈夫でしょうか?」

「かまわないよ」

丁度休憩を取ろうと思つていたところだしね、と言うと、テーブルに身を乗り出して、興味津々の目を向けてくる慎。

いろはは「ありがとうございます」というと、一泊置いてから、

「I have a rendezvous with Death……」

口を大きく開いてはつきりと、流れるような口調でその英文を囁いた。

「……!」

慎の目の色が変わった。鋭く細められた瞳から鈍い眼光が瞬く。

『私には死神と会う約束がある』……。この一節から始まる“詩”を、知ってますか……?」

対するいろはも真剣な表情で眞を見つめ返していた。

慎はいろはを凝視したまま、しばし沈黙していたが——二分ぐらい立つてから、唐突に胸ポケットに指を突っ込むと、煙草を一本取り出した。先端に火を点けて口に咥える。

「環さん……」

「なんでしよう?」

いろはが尋ねると慎は煙草を口から離して、ふうふう、と煙を吐いた。  
そして再び、いろはの顔を真つ直ぐに見据える。

「君の事を……少し、詳しく、教えてくれないか？」



## FILE #15 一番強く信じられるものは？

☆

「そうか、そんなことが……」

話し終えた頃には、彼は既に4本目となるタバコを吸い終えようとしていた。

半分くらいになったタバコを指で挟み、口から引つ張り出すと、残骸の小山に指ごと突っ込む。

「それは、辛かっただろう……」

慰める様に優しい声色で囁かれたが、目線は未だ何う様に細められたままだ。

ゲシ、ゲシと残骸の小山から音が立つ。灰皿の底に押し当てたタバコを力強くねじり込んで消していた。心なしか、その動作は、わざとに見えた。自分の話に腑に落ちない部分があると、暗に訴えているように、いろはには見えた。

「でも、私には、立ち止まってる時間は無いんです……い」

一瞬、怪訝な顔を浮かべるも、いろはは力強く宣言した。

「知らなくっちゃいけないんです……大賢者様のことも……お父さんとお母さんのことも……ういのことも……その『詩』のことも……!」

「水を刺す様で悪いけど」

険しい顔つきで自身が背負う謎を履き続けるいろはだが、彼の言葉がスルリと割り込んできた。

「君の妹……ういさんは、その『詩』を夢の中でだけ訴えていたんだね？」

「はい」

「現実で、君に話したことは？」

「一度も、ありません」

何が聞きたいのだろうか——いろはは彼の質問に意図が読めず、つい不審の目を向けてしまう。

すると彼は、目を更に細めて睨みつけるようにいろはの相貌を捉えた。

一瞬、眼光がギリリと獯猛に瞬く。蒼白の相貌と相まって幽鬼の様な迫力に、いろははウツと息を飲んだ。

「なるほどね……」

「あの、何が、言いたいんですか……?」

「……………」

彼はいろいろの質問には答えぬまま五本目となるタバコを取り出すと、火をつけて口に啣えた。

吸い込み、口から離し、煙を吐く——という一連の動作を終えると、

「君は妹とは仲が良かったのかい？」

そう問いかけてきた。即座にいろはは頷く。

「はい」

即答。愚問である。

ういは自分と一緒にの部屋であったことを喜んでいたし、お見舞いにも自分は毎日通っていて、その都度喜んでいた。ハンバーグを作ってあげた時なんかとても——

「それは、『本当』のことなのかい？」

鋭く低められた一言が、思考をそこでピタリと止めた。

「っ!!」

いろはの目が、キッと鋭くなる。すぐに『本当だ』と叫びたかった。

なのに——

「……………っ!!」

刹那、胸に強い痛みが急激に走る。

ずぶりと、刃物を胸の中心に差し込んだ様な鈍痛。自然と顔がクツと歪んだ。瞬時に湧いてくるのは、疑問。

——これは一体、何だ？

『お姉ちゃんは、私の邪魔をするの？』

瞬時に頭の中で閃光の様に瞬かれた映像は、昨日見た夢の一部。

あの時も、ういの一言ひとことが、何故か自分の胸に突き刺さっていく様な感覚だった。

今、彼の言葉から受けている“これ”は、その時の感覚と、そっくりだ。

(違う、そんなことない。私というは——)

仲が良かった筈だった。

あの言葉よりも遙かに前の記憶が、確かにそう告げているのに——何故か、確信



を持ってない。

いろはは、心臓に当る位置を左掌でグツと抑え込むが、鈍痛は和らがない。

あまりの激しい痛みで脳が支配されて、五感を狂わせた。まずは、視覚から——  
ぐらりぐらりと、大きく揺らぎだす。

「夢は、記憶と密接に関わっている。忌々しいが……時に夢は、思い出したく無かつたものを、頭の押入れから強引に引っ張り出してくる」

淡々と続けられた彼の言葉に、聴覚が奪われた。

「ごうごうと耳鳴りが響き、全ての音を遮断する。」

「死神と会う約束があるんだと、君の妹は夢の中で何度も繰り返して訴えていた。それが……彼女が強く願っていたことなら、現実で言っていないとは思えない」

「……っ!!」

しかし、一番遮<sup>蔽</sup>りたいもの<sup>の</sup>声<sup>声</sup>のだけは、どういう訳か、はつきりと耳に入り込み、脳まで届いていた。

否定できる材料を、ういとの記憶の中から必死に探す。

しかしどれも漠然としたものだ。ういがその言葉を「現実」で言ったのか、それとも言っていないのか、全く思い出せない。

彼の意見に真っ向から対応できる記憶は一欠片も拾い出せなかった。

「ういさんは『死』を待ち望んでいた」

「……！」

ギクリとした。両足が末端から冷えされてるような感覚。

胃の底から酸っぱいものがこみ上げて来るような気持ち悪さが喉元襲いかかり、咄嗟に口を右手で塞いだ。

「でも、君は願いで、否定した」

「………!!」

じわりと、両目に涙が浮かんだ。

両足が凍りついたかのように固まって、感覚が無くなった。

「教えてくれ。君とういさんは本当に仲が良かったのか？」

お互いに理解し合っていたのかと、暗に指摘をされた。

理解していたのなら、ちゃんと話し合っていたのなら——多分、自分はいいの『願い』を思いとどまらせて居たはずだ。

「一切のミスコミュニケーションは無かったといえるのか？」

でも、それが出来ていたのかは、全く、思い出せない。

——だから、自信は無かった。

「最悪、ういさんはもう」

「っ!!」

彼の言葉によって、喉元にまで達した胃酸が、今にも口から溢れ出るかと思つた矢先だつた。

「先生っ!!」

突然——真横から飛んできた叫び声に、救われた。

視界が明確になる。耳が空気の音を捉える。足に血が下りて感覚が戻つた。前方を見ると、ハツと口を開けて我に帰つた先生がいた。

「…………っ!!」

「もう…………やめてください。それ以上は…………」

震えた声の方向に、咄嗟に目を向けた。

そこには、顔を俯かせたさながら、目尻に涙を溜めて、悲痛に顔を歪ませていた。……………すまなかつた……………」

短い沈黙の中で、彼は自分がいろはに何を言つたのか、悟つたらしい。

蒼白の顔を更に青くして俯かせると、ポツリとそう呟いた。

指で摘んでいたタバコは、灰皿に突つ込まずに、下に勢い良く投げ捨てると、足でグ

リグりと踏み潰す。

「君の人生に興味が湧いてね……。こうなると、僕の作家としての性が強く出てしまうんだ。一から百まで追求しないと収まらない。全く……。嫌な癖だよ」

彼は、頭を掻いて罰が悪そうにそう言い切ると——「本当に申し訳ない！」と、テーブルに付くぐらい頭を下げて、いろはに謝った。

「いえ……」

いつの間にか、胸の痛みと嘔気は治まっていた。さなの大声がそれを掻き消した。

いろはは、スカートのポケットからハンカチを取り出して涙を拭くと、頭を下げる慎に向かつて、静かに伝える。

「先生が、そう疑問に思うのは、無理無かったのかもありません」

どうにか笑顔で伝えようとするが、どうしても引きつってしまう。言葉も、きちんと律せられず、震わせてしまった。

それを真正面から捉えた慎が、クツと歯噛みする。

「だが、僕は……。君の傷を扶る様な言葉を……」

「私自身、疑問に感じてますから……。取り戻したういとの記憶は、本当に正しいものなのか……」

そうは言うものの、溢れ出る悔しい思いは抑え込めそうに無かった。

気づけばテーブルの下で、両膝に置いた手がぎゅうつと拳を形作り、掌に爪をグツと食い込ませて、ワナワナと震えていた。

「環さん……!」

だが、そこで——テーブルの下で固くなつた拳の上に、誰かの手が、そつと添えられた。

「……!?!」

ハツと目を見開きながら、不意にさなの方へと目が飛んだ。

未だ目尻に涙を浮かばせてはいたものの、強い決意を抱いた顔つきでこちらをしかと見据えている。

「無理、しないでください……!」

さなの小さな両手が、いろはの拳を包み込んだ。優しく撫でて、解きほぐしていく。

「二葉、さん……!」

「わたしも、同じ思い、してますから。環さんの気持ち、わかりますから……!」

その言葉に、心の底からホツとした。

すうつと、拳から力が自然と抜けていった。

さなは、自身の指と自分の指を絡ませると、強く握る。じんわりと温かい手の感触が、いろはの心に沁み渡った。

「ありがとう、二葉さん」

心を温めてくれて——暗にそう込めたお礼を告げると、彼女の手を握り返すいろは。

そうすると、彼女の気持ち、不思議なぐらい自然と察することができた。

——分かつていた。

自分の気持ちを、家族を失った辛さを、彼女は理解してくれていた。

「私は大丈夫だから……」

「うん……」

テーブルの下で、握手を交わすと、いろはの顔から剣が取れた。温和な微笑を浮かべてさなに伝えると、彼女は笑顔でコクリと頷いた。

(全く……さなくんには助けてもらってばかりだな……)

元凶でありながら、何も気の利いた事が言えなかった慎は、もう一度罰が悪そうに頭を掻くと、5本目となるタバコに火を付けていた。

## ☆

「『I have a rendezvous with Death』で始まる詩についてだが……昔、読んだことがあるよ」  
 「本当ですかっ!」

時間にして5分後、落ち着きを取り戻したいろはは、慎との会話を再開させていた。彼の言葉に、バツとテーブルに身を乗り出す。瞳が輝き始めている。

「小さい頃に『夏日書房』でね」

最も昔すぎて、作者名や内容は覚えていないが——と慎は告げる。

「なつめ、しよぼう……?」

いろはは目を丸くして問いかける。

「神戸市明京町にある中古本屋だ。あそこの親父さんと僕は古くからの付き合いでね。此処じゃ読めない書籍も取り寄せてもらっている」

「じゃあ、そこに行けば……?」

探しものの一つが見つかるかもしれない!? というのは期待を込めて問いかけるが、慎は首を横に降った。

「迂闊に町内に足を踏み入れない方が良い。あそこは常磐ななかのお膝元だからね」  
「ときわ、ななか……?」

また知らないワードが出てきたので問いかける様に、鸚鵡返し。名前からして恐らく魔法少女だろうか。

「おや、知らないのかい? 町役場の治安維持部でチームリーダーを務めている魔法少女だ。彼女の目覚ましい活躍のお陰で町内は、『犯罪撲滅』の声で騒がしくってね。君みたいに市外から訪れた魔法少女は警戒される恐れがある」

最悪、魔法少女の監視を付けられるかもしれない、と伝えると、いろはの表情は愕然と青褪める。

どうしたら——そう思って俯いていると、慎は急にフツと笑った。

「だから、説得してもらおうのさ」

「え?」

『かこくん』にね」

——後で調べてわかったことだが、夏目古書房の一人娘『夏目かこ』は、治安維



持部に所属する魔法少女なのだそうだ。

慎の話では、ななかからの信頼も厚いらしい。よって、かこを通してななかを説得して貰えれば、監視の目が緩むかもしれない、と教わった。

「でも、そんなことが可能なんですか？」

「僕は彼女とも親しいからね。かこくんには僕から話をしておく。ついでに『詩』が書かれた本がまだ店にあるのかも、聞いておく」

「っ!!」

その言葉が、心を覆っていた曇り空から一筋の光を差し込ませた。

いろはの顔が、ようやく輝きを取り戻す。

「ありがとうございますっ!」

勢いよく立ち上がると、深々と上半身を下げているは。

慎は手をひらひらと上下に振る仕草で、そこまでする必要は無い、腰を下ろしてほし  
いと、告げた。

「最も説得がうまくいくかどうかはかこくん次第だけどね……。ところで環さん、連絡先を教えて貰えないだろうか？」

彼はズボンのポケットから、スマホを取り出すと、そう問いかけてきた。

画面上にQRコードを映して、差し出す。

腰を座椅子に戻したいろははそれを目にした瞬間——意表を突かれた様に「えっ？」と声を挙げて、首を傾げた。

「LINE、使ってますか？」

「え、え〜つと……………??」

隣でさなが小声で尋ねてくるが、いろはは何も答えられず目を丸くするばかりだ。

「まさか……………LINEを知らないのかい？」

「いえ、聞いたことはあるんですけど、どう使うのか……………」

いろはもスマホを取り出した。難しい表情でじつと画面を見つめている。

「あの……………アプリをダウンロードするんです……………」

「あぷり……………」

隣でさなが小声で教えてくれるも、いろはの頭上の？マークはポコポコと数を増すばかり。表情は困惑に染まっていた。

「……………さなくん」

「……………あ、はい。環さん、貸してください」

「……………ごめんなさい」

現役中学生がLINEは愚かアプリすら知らないとは——慎はそんないろはの

育った環境や友人関係が気になったが、二度も雰囲気が悪化させるのはマズイと思い、今は追求しないことにした。

さなに指示を送ると、さなはいろはからスマホを受け取って、代わりにネットから「LINE」をダウンロードする。

そして、慎のQRコードを映して、連絡先を登録した。

「話が付いたら、君に連絡する」

慎はそう言ってくれた。ついでに――

「あの……私のも、登録しておきますので、なにかあつたら、連絡してください」

さなは自身のスマホを取り出すと、QRコードを使っていろはのと連絡先を交換した。

「ありがとう」

「……あと、大賢者様についてだが……これは美代さんが知ってるかもしれないな」「えっ!?!」

唐突に思い出したかのような慎の発言の中に知り合いの名前があった。

いろはは目を丸くして驚くと、さなが笑顔で教えてくれた。

「美代さん……」ここでよく神浜の歴史とかを調べてるんです……」

「もしかしたら、夕方前には来るかもね」

いろはの顔がパアツと光り輝く。一気に探しものの2つ目が見つかりそうだ。

「環さん」

そこできさなからスマホを返された。

画面を確認すると、既に時刻は11時を周っていた。

(もうお昼だ……)

人と話していると、早いなあ——と胸中で呟くいろは。

本来の予定では10時ぐらいに市役所へ向かう予定だったのだが、お昼ご飯を挟むとなると、正午過ぎになりそうだ。

「さなくん、そろそろお昼だ」

「そうですね」

スマホを顔から離すと、慎ときさなもスマホを確認して、お互いにそんなやりとりを交わしていた。

「折角だ。環さんと一緒に食事に行ってきたらどうだい？」

「先生は？」

「僕は区切りの良いところまで執筆したら行くよ」

「わかりました。でも、環さんは……」

話を聞いたが、彼女は忙しい身だ。一分、一秒、無駄にしたいかもしれない。

もしかしたら、時間を取らせてしまうのは悪いことじゃないか——さなは不安気な表情でいろはを見やるが、彼女はニコニコと笑っている。

「大丈夫だよ。どこで食べるの？」

その一言で、さなもホッと一息。安心すると、笑顔を浮かべて、口を開く。

「図書館の一階にカフェがあるんです。一緒に行きましょう」

「うん！」

二人はそう言い合くと、横並びになって去っていく。

慎は微笑を浮かべながら、手を振って少女二人を見送っていた。

FILE #16 掃き溜めの鶴が笑う時  
—由比鶴乃 追憶編—

なさねばならぬと決断して

君が何かをする時

たとえ多くの人々が

それについて違った事を考えようとも

それをするのを見られまいと避けてはならない。

もし君のすることが正しく無いならば

その行為そのものを避けた方がいい

だかもし正しければ

正しくないと批難する人々をなんで恐れるか

## 十五節より

———エピクテトス『要録』三

『わたしって……●●ってるのかな？』

☆

—— 神戸市神浜町参京区。

魔法少女の存在が世界中に知れ渡り、市が「保護特区」に任命されてからというもの、市役所の有る中央区ばかりが国の恩恵を受けていた。

本来、神浜商店街とはこの区のメイン街道の事を指す。だが、その名は中央区に奪われた。

現在は「旧商店街」などと蔑まれ、至るところで閑古鳥が鳴いている始末だ。

—— ここを除いては。

神浜旧商店街のちようど中央に当る場所に、その飲食店は有った。

『万々歳』—— 祖先、由比雀七ゆいしょうしちが戦時中、現地で会得した中華料理の技を活かす為に始めたその店は、戦後、行列が絶えなかった。

息子の鶏太郎の代になると、人気は更に上昇。万々歳は全盛期を迎える。

『神浜一の中華飯店』と地元住民からは口々に称賛を受け、TVや新聞、雑誌といったメディアでも取り上げられるようになり、有名な著名人や芸能人が来訪するようになった。

特に、あの昭和天皇陛下が、噂を聞きつけてご飲食なされた時の衝撃は計り知れない。



食後に受け賜った感謝状は今でも、家宝として大事に保管してある。

しかし、盛者必衰の理があるように、栄華も三代は続かなかつた。

鶏太郎の息子、隼太郎しゅんの代になると、客数は激減、人気も急降下。メディアでは一切取り上げられなくなり、著名人も来訪もピタリと止まってしまった。

時代の流れで、最近は美味いチエーン店が近所にできているからだとか、単純に、隼太郎のやる気がなくて料理の味が落ちたからだとか——恐らくは、後者だろう——言われるが……とにかく店には閑古鳥が住みついてしまった。

経営は次第に悪化。このままでは店を畳むのもやむ無し————参京区に住む人々は、直にそうなるだろうと考えていた。

しかし……

「いらっしやーい!!」

万々歳には一つの「希望」があつた。それがこの元気澆刺な声の持ち主だ。

大きく張り上げた声は、店中によく響き渡り、客が斑な店内を活気づかせた。

「味は50点!! 笑顔は満点つ!! 万々歳、今日も元気に開店中だよ!」

少女の名前は由比鶴乃といつた。

現店主、由比隼太郎の娘にして、万々歳が誇る最強の看板娘。

努力家で、勉強もスポーツも得意で、底抜けに明るい性格で純真無垢。容姿も悪くない。スラリとした細身の長身と色白の肌は人形の様に綺麗だし、ニツコリとした笑顔は子供の様な愛くるしきがある。

由比家の事情を知る常連客からすれば、あの両親から、こんな娘が生まれたのが、奇跡であった。

「おう鶴ちゃん!」

出迎えた客を確認すると、知り合いの初老の男性だった。服の上からでも分かるくらい筋骨隆々で、色黒の、見るからに快活そうな大男だ。

「織田さん!」

鶴乃は目を見開いてびっくりする。織田は歯を見せてにっかり笑っていた。

「久しぶりに元氣貫いに来たよ!」

そういう織田だが——途端に鶴乃の顔から明かりが消えた。しゅんと、顔を俯かせる。

「織田さん、確か……鉄工所は……」

「あくはっはっはっはっは!!! 気にするねえ鶴ちゃん!!!」

暗い表情でポツリと呟くも、即座に織田は豪快に笑ってそう告げた。

「えっ……?」

「サンシャイン重工に買収されちゃったのは悔しいがよ……おかげでこうして飯が食えてるんだ」

「で、でも……」

鶴乃の顔は晴れない。

「先祖代々、続けてきた鉄工所だったんでしょ? それなのに……」

「買収されなくっても、業績不振で早晚畳んでたよ。でも、大企業が買ってくれたお陰で、俺とウチの技術はまだ、此処で根を張って生き続けるんだ」

「……………」

そこまで言っても、大企業に「負けて」しまったのには違いない。

鶴乃は沈黙。口をムつと結んで顔を俯かせる。だが、織田は彼女の肩に手をポンと置いて、

「ほらほら!! 万々歳は隼さんのせいで味が50点に落ちたが、鶴ちゃんのお陰で接客は100点に上がったんだろ!」

「俺のせいで、とはひどい言い草だねえ織田さん」

店主が後ろからそんな事を言っただけで睨みつけてきたが、気のせいだろう。

織田は無視して続ける。

「おら、元気出しなつて！」

彼の豪快な声は、他の客にも聞こえたらしい。

狭い店内で好き好きに食事をしている男性客達が一斉に鶴乃の方へと向いた。

「そうだけ鶴ちゃん!!」

「鶴ちゃんのを笑顔を一日一回は見なきや働けねーよ!!」

「織田のことなんか気にしてねーで、自分のこと気にしなよ!!」

「参京のアイドルに沈んだ顔は似合わねーって!! 死んだ爺さんも心配しちまうぜ！」

「鶴ちゃんの顔見てりや、どんな料理も100点満点だぜ!!」

織田の声を皮切りに、鶴乃へそう励ます男性客たち。

「みんな……！」

鶴乃が目を見開いて、店内を見遣る。

ここにいる常連客は、何れも経営者だが、織田と同じ様に店を畳むか畳まないかの瀬戸際に追い詰められている。日々の暮らしをするので精一杯で、大変な思いをしている筈なのに……ニツカリと良い笑顔を浮かべていた。

次いで織田の顔を見ると、彼も同じように笑っている。

だとしたら——鶴乃はグッと拳を握りしめる。

(そうだよ……みんなで励まし合って生きていくのが参京区じゃん)

自分だけ暗い顔を浮かべている訳にはいかない。皆があいつてくれているのだ。期待には応えねば。

鶴乃の腹は、そこで決まった。

「あ——っはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!!」

快笑一閃。

「そうだったねー!! ごめんごめん!! じゃあ一名様ごあんないっ!!!」  
陽のような笑顔が再び店内を明るく照らした。

織田をカウンター席まで案内すると、氷水を渡して注文を確認する。

「いやあ隼さん、鶴ちゃんは本当に良い子だねえ」

店主である隼太郎に注文を言い渡してから、別の男性客の方へと向かい、注文の確認がてら談笑する鶴乃を見て、織田は愉快気と言う。

彼にしてみれば、万々歳が畳まずに、今日もやっていけるのは、一重に鶴乃のお陰だと思っている。

こうして、近隣住民の常連客で賑わっているのは、鶴乃の存在があつてこそだ。

彼女の元氣と笑顔は、寂れたこの商店街の中で、皆の心を照らす『光』に等しかった。

「いやあ、自分にはもつたないぐらいの娘ですよお」

身長が高く恰幅も良い、正しく巨漢ともいえる体軀の隼太郎だったが、顔つきは対極

的に、情けなさが感じられるほど人が良さそうだった。

くしゃつと温和な笑みを浮かべると、間延びした声で織田にそう返す。

「隼さんも負けてられないんじゃないのかい？」

「何が？」

織田の言葉が、まるで訳が分からない、と言った様子でポカンとなる隼太郎。

織田はその反応に「えっ？」と一瞬呆気にとられたが、他の男性客達にせつせと立ち回りながらも、談笑を続ける鶴乃を指さして言い放つ。

「あ、いや……娘の元気に負けないぐらい味を良くしなきゃ！ つて思うだろ、普通？」  
困惑気にそう訴えると、隼太郎はうぐむ、と顎に手を当てて真剣に考える素振りを  
見せるが、

「あ〜でも、今のままでも十分生活していけっからなあ。別にいいや」

「……………」

素っ気なく返されて、織田は沈黙。ガツクリと項垂れる。

「あ、相変わらずの日和見主義者だねえ……鶴ちゃんの苦労がわかるよ……」

「ん〜、なんかいったかあい？」

「……………いや、何も」

どうせ聞こえたとしても、この男は気にはしなかつたろう。

全く、と織田は深い溜息を吐いた。

ああいったのは、万々歳と鶴乃の将来を思つてのことだったのに、この男ときたら――

「あ、おんじおかえりー！」

思つてると、万々歳に新たな来訪者が現れていた。

頑固オヤジが来た――!!

そう思つた織田は、咄嗟に両肩を強張らせて身構えた。

☆

ただいま、と低い声を発して店内の出入り口から入ってきた人物は、如何にも頑固一徹といった老人だった。

ハンチング帽を被り、眉間に皺を寄せた無然とした表情を、自身を「おんじ」と呼ん

だ小娘に向けてから、のっそりとした足取りで店内に足を踏み入れていく。

彼が入った瞬間、店内の緊張感が増した。

和気あいあいとしていた常連客達は会話を止めて、眼前の食事を取ることに集中し始める。

「あれ？ 何で家からじゃなくって店から直接入ってんの？」

鶴乃だけは目の前の老人に緊張することなく、きよとんと小首を傾げて率直に疑問を投げかけていた。

「鶴、時計見ろ」

おんじは若干呆れたように顔を俯かせると、店内の中央で天井付近に飾られている丸時計を指差した。

「へ？」

言われて時計を確認すると——ギョツとした！ なんとあと15分で14時だ！！

「やっぱ!!」

大きく目を見開いて、体をビクリと大きく震わす鶴乃。今日はこの時間から自動車教習所に行く予定だった!!

即座におんじの方へとキツと怒りの目を向ける。



「なんでもっと早く言ってくれなかったのー!？」

両手をブンブンと振って、目尻に涙を溜めながら駄々っ子のように喚く鶴乃。

だが、おんじはフン、と鼻を鳴らすと、

「てめえの一日の予定ぐらいてめえの頭にブツ込んでるモンだろうが」

にべもない様子で、そう言い放った。

「そんな言い方無いじゃん!! おんじのバカッ!!」

そう言い返すと、鶴乃は「フンだ!」とブンブン湯気を蒸しながらエプロンを外すと、バタバタと忙しく駆け足を響かせながら裏の自宅へと戻ってしまう。

「うるせえバカじゃなくハゲっていいえ」

おんじは表情一つ変えずに、頭からハンチング帽を取り外した。

——陽の明りがもう一つ出現する。

「うぷぷぷ……っ」

「クスクス……っ」

「うくく……っ」

わんわん子犬の様に鳴く看板娘と、それを真面目か冗談か付かない態度で言いくるめる頑固ジジイ。

漫才のような二人のやりとりは万々歳の名物であった。客達は顔を伏せながらも、含

み笑いを漏らしている。

何故か、店主の隼太郎も一緒に笑っていたが……

「おい隼」

「ハイっ!」

ギンツと猛禽類の如き眼光で睨みつけられたので、背筋がぞつと震えてしまった。顔を情けなく歪ますと、ペコペコと頭を何度も下げて、謝り始める。

「ご、ごめんよ叔父さん。俺も今日は日曜だから無いって思っちゃってなあ〜!」

その言葉に、おんじは溜息。

「アホか、冷蔵庫に予定表張ってあんだろ……」

おんじはそういうと着ているコートを脱いだ。身長は隼太郎どころか鶴乃よりも小柄だが、長年刑事をしていただけあってかガツシリとした体格だ。

彼は、入り口前に置かれた洗面台で、うがいをして、手をよく洗い消毒液を馴染ませると、厨房に侵入。

自分用の調理服を身に纏い、隼太郎の傍へと歩み寄る。

「ここからは俺がこつちをやる。お前はホールやってろ」

「おう!」

威勢よく返事をする隼太郎。

彼から、作っている途中の料理と、注文されてからまだ作り始めていない品を引き継ぐと、せつせと手際よく調理をし始める。

何故か、店主の隼太郎より手際と腕前はいいのだが、それは誰もツツコンではならぬのが、常連客達の間で暗黙のルールだ。

「じゃ、お父さん、おんじ、行つてくるねー!」

「お〜う!」

「おう、行つてらっしやい」

そこで私服姿に戻り、教科書等を詰め込んだカバンを肩に掛けた鶴乃が店に顔を覗かせた。

笑顔でそう言うと、走り去っていく。

隼太郎は手を振つて見送り、おんじは調理に顔を集中したまま、声だけを送った。

「あ〜あ」

鶴乃が店の窓から見えなくなると、不意に目の前のカウンター席からそんな声が聞こえてきた。

織田の隣に座る常連客の一人、「斉藤寝具店」の店主、斉藤 司である。

「味は75点、笑顔は3点の頑固親父の店に早変わりかあ〜」

斉藤の心の底から残念がる言葉に、同じカウンター席に座る常連客も、うむうむと同

意する。

カウンターにはちようど、初老の男達が5人並んでいた。

彼らが、万々歳の常連になつてゐるのは、『由比鶴乃のファン』である以外に他ならぬ。ぶつちやけると料理よりも、鶴乃の笑顔を見ることが来店の目的であつた。

おんじの眉間に皺が寄る。

「うるせえ、旨いもん作つてやつから、静かにしてろ」

「おいおい雉さん、そんなこと言い方してつと飯が不味くなんだろう？」

斉藤の隣で座る恰幅の良い初老の男がそう言い放つ。

ちなみに、『雉』とは、おんじの愛称である。というのも、彼の本名は由比木次郎（きじろう）という。

由比家は何故か、先祖代々、家を継ぐ者は「鳥を名前に入れる」という謎の風習があり、木次郎の渾名もそれになぞつて付けられたのであつた。

「雉さんにも、鶴ちゃんの写真と隼さんののんびりがありやーなあ」

恰幅の良い男の隣で、細身だが長身で筋肉質の男がそう言った。

あつてたまるか、んなモン——木次郎は無視しながら、胸中でそう吐き捨てる。

「オエ……想像したら気分悪くなつてきたぜ」

「お、おう、雉さんにその二つは似合わねえなあ」

細身の男の隣の中肉中背の男が、顔を青くしながら、織田とそう言い合う。

「おいおい、んなこと言ったら失礼だろお!! 雫さんは孫娘の為に、こうして店手伝ってんだからよお〜!」

斉藤がそう騒ぐと、織田を含めたカウンターに座る初老の男達はガハハと笑い合う。

「面白いやそうだったなあ〜!」

「いよ、ツンデレ!!」

「孫娘じゃねえ」

あと「ツンデレ」ってなんだ? そちらも聞こうと思ったが、一層からかわれそうなのでやめた。

「でも孫娘みたいなもんでしょ?」

「兄貴のな」

素っ気なく伝えるも、まだ自分を囁し立てる声が聞こえてくるが……これ以上は面倒くさいので無視した。

連中も拒否されると感じたのか、今度は隼太郎を標的にして、アレコレ言い始める。

木次郎は聞こえないふりをして料理に集中。

やがて、餃子定食、麻婆豆腐定食、油淋鶏定食、チャーハン、そして中華飯店なのに何故かあるカレーを一通り作り上げると、カウンターの常連達に手渡した。

「おらよ、いい加減黙って食え」

ムスツとした表情でそう言いつける。自称鶴乃のファン達は「はくい」と一斉に返事した。

「あーあー。これで鶴ちゃんがいりゃあ、百点満点なのになあ〜」

斉藤は目の前に出された、麻婆豆腐を一口放り込むと、そうボヤいた。

いねえモンはいねえんだ。諦めろ——木次郎はそう言おうとしたが、

「しよーがない。これで我慢すつか」

斉藤は、眼の前に、スマホを横に向けて置いた。画面には、鶴乃の笑顔が全面に映っている。

「俺もそーしよ」

次いで織田も、鶴乃の笑顔が映ったスマホを横向けにした飾る。

「俺もー」

細身で筋肉質の男もそう同意して、スマホを——ではなく、写真を取り出してそつと立てかけた。

映っているのは恐らく、鶴乃の満面の笑顔だろう。

「俺達もー」

残る二人も、同じ画像が映ったスマホを横に立てかけた。

「ウチの看板娘を变な目で見てんじやねえ……独男どもが。隼、お前も何か言つてやれ」  
 そう言う前に、隼は既に常連達のもとへ歩み出していた。

父親のあいつが一言いやあ、連中も調子づかなくなるかも———そう思っていたが、

「おお〜、いい笑顔だなあ」

隼太郎の口から出たのは怒声ではなく、まさかの賛辞。木次郎はガツクリと項垂れる。

「へへへ、この前撮らせてもらつたんだよ♪」

「へえ〜〜!」

愉快気にそう言う齊藤に、関心する隼太郎。

自分の娘が——恐らく下心込みで——見られているであろうことには、何とも感じていないらしい。

木次郎はハア〜、と深い溜息。

「中田さんのもいい写真だねえ。2人でツーショットなんて」

———ツーショット?!?

木次郎はギョツと目を剥いて、細身で筋肉質の男こと、中田を見た。

「鶴ちゃん、ノリがいいからねえ〜! 二つ返事で撮らせてくれたよ」

「いいなあ。俺も今度一緒に撮ろうかなあ〜！」

隼太郎は普通の中田に羨望の眼差しを送っていた。

「いやいや、それどころじゃないだろう!!」——調子づく常連と、甥の馬鹿さに木次郎は頭が痛くなる。

「……それにしても」

と、そこで、一部始終を可笑しそうに眺めていた織田が、不意に声を挙げてきた。

「ん?」

木次郎は気になって視線を向ける。織田の顔は、どこか思いつめた様な表情を浮かばせていた。

「鶴ちゃんさあ、最近落ち着いてきたんじゃないか?」

真剣な声色でそう呟く織田に、他のカウンターに座る常連達も、コクコクと頷く。

「そうだなあ、工事が中止になった後はさあ」

「『何もできなくてごめん!!』なんて言われてなく……結構ふさぎ込んでたもんなく……」

「それはこつちのセリフだつてーの。俺らが我儘言つたせいで、あの子をこんなボロ商店街に縛り付けちまつたんだからよ……まあ、あん時に比べりやあ全然元気になつたよな」



「時間が解決してくれたな」

常連達はそうやって憶測混じりに話し合うが、厨房の木次郎はムスツと顰めつ面を浮かべて——といつても、いつもそんな表情なのだが——いた。

「時間、か……」

唐突に口から出た彼の声色は、普段の様にはつきりとしたものでなく、ポツリと、消え入りそうな程に小さかった。

幸い、誰の耳にもその言葉は聞こえていなかった。

「どいつもこいつもそうのたまいやがるが……そんなものが、本当に解決してくれてるんだらうな……?」

眩きながら、木次郎は思い出していた。

昨日の土曜日——昼前に起きた出来事を。



## FILE #17 “怒り”の矛先を向ける相手も無く

それは昨日のことであつた。

時刻はPM12:20頃——

ランチタイムだと言うのに、今日に限つてはどういう訳か、人氣が疎らな万々歳の店内に、その電話の音はけたたましく響いた。

「お〜い鶴乃お、電話出てくれえ〜」

「ホイホイ」

厨房で頼杖を付いて退屈そうにしていた隼太郎が、来客を今か今かと心待ちにして、ソワソワと忙しなく動き回っている鶴乃に言い放つ。

この時間、接客兼電話番は彼女の役割だ。活気良く返事すると、ピヨンと電話に飛びついてガチャリと手に取る。

「もしもし、万々歳で……あ、美代さん!？」

『もしもし、鶴乃くんですか』

「どうしたのっ? 出前ならすぐ行くから注文してっ」

『いえ……実は……』

鶴乃が急かすと、彼女はどこかもったいぶったようにモニョモニョ言い出した。

途端、鶴乃の明るい表情に薄っすらと怪訝の感情が表現された。目を僅かばかり、細める。

「……………」

カウンターで座って新聞を読みながらも、横目で様子を眺めていた木次郎は、その変化を見逃さなかった。

「うん、うん……………わかった」

美代の言葉に二、三回頷いた後に、呟かれた一言——『分かった』と言った瞬間、鶴乃の顔から感情が消えていた。

何か言われたのは、間違いない。木次郎がじっと見つめていると、  
「すぐ行く」

どこか決意を固めた様な、低い声でそう呟いた。

先程の快活さは微塵も見られない。無の表情と相俟って、まるで別人の様な雰囲気  
纏っていた。

心無しか目に宿る赤色が一瞬だけ、燃え上がった様な瞬きを見せたので、木次郎は、ハ  
アと溜息を付いた。

新聞紙を顔から外して、立ち上がる。

「ごめん、お父さん、急用できちゃった!!」

「お、おい……急用って」

これからランチタイムだぞ、と隼太郎は言うが、鶴乃は止まらない。さつさとエプロ  
ンを外すと、

「ちよつと店お願いね!」

真剣な表情のまま、立ち上がった木次郎にそう言い放って差し出した。有無を言わさ  
ずエプロンを受け取らされた木次郎。

鶴乃は駆け足で、玄関を飛び出す

「おい待て」

——よりも早く、木次郎は声を叩き付けた。

ずっしりと重みの感じる低い声は店内によく響き渡った。鶴乃は足を、ピタリと止める。

「どこに行く気だ」

ジロリと、華奢な背中を刺す様に睨みつけて、問いかける。

「……………」

鶴乃は、質問には答えず暫し玄関の外を眺めていた。

視界には、旧商店街の廃れた街並みが嫌に目についた。

「……………」 *“魔女”* だよ」

鶴乃は、背中を向けたまま、質問に答える。

その答えに隼太郎は、ヒツと顔を青ざめて怯えたが、木次郎は嘘だと即座に見抜いた。

何故なら『すぐ行く』と答えた時に一瞬間見えた目の瞬き——あれには間違いない。

なく『怒り』が孕んでいた。

「つ、鶴乃お！ お前が行くもんじやないっ!! 今すぐ市役所の治安維持部に連絡して」

「……………」 *“魔女”* ……すぐそこまで来てるって、美代さんが言ってたの」

また長い間を置いて答えたな、と木次郎は思う。

鶴乃は本来嘘は苦手な性分だ。

今の言葉にしても、さっきの言葉にしても、考えながら喋っている事は明白だった。木次郎は呆れながらも、鶴乃に向かって歩み寄る。

「だから、行かなきゃ」

そう呟いて、再び飛び出そうとする鶴乃の肩を木次郎が掴んだ。

「嘘じゃねえだろうな」

「っ!!」

隼太郎に聞こえないよう小声で呟くと、鶴乃がバツと勢いよく振り向いた。真剣に固めた表情。だがそれよりも、炎を纏ったかの様に爛々と瞬いている両目。

強い眼差しを受けて、木次郎は自分の考えが正解だと悟った。

「嘘か……」

ボソツと言う木次郎の顔は心底呆れ返っているようだった。それを見て鶴乃はキツと顔を歪ませる。

「止めないでよ、おんじ」

鶴乃もまた、隼太郎には聞こえないように、ボソリと吐き捨てた。

その言葉で、美代が電話で彼女に何を言ったのか、全て理解した。

「七海やちよが、近くに來てるんだな……」

鶴乃は一瞬、彼の洞察力にウツと息を飲んでたじろぐものの、すぐに表情を固めてコ

クリと頷いた。

「おんじは、忘れたの……あいつらが、何をしたのか」

「忘れる訳がねえ」

「だったら、これはチャンスなんだよ？」

「何がだ」

何か良からぬ考えをしているようだ。木次郎は既に見抜いていたが——あえて彼女の口から引き出してみる。

鶴乃は、両手をグツと握り締めて、拳を作り上げていた。

「あいつは農林公園にいるんだって。誰も見てない所で、潰せるよ……！」

両顎を強く噛み締めて、猛獣が唸る様な声色で、鶴乃は呟く。

「馬鹿言うんじゃない」

木次郎はすぐに鶴乃に、ピシヤリと激を飛ばした。

「てめえが今やろうとしてんのは、店の顔に泥を塗る行為だ」

「っ!!」

クツと忌々しく歯噛みする鶴乃。

それは彼女とて分かっていた。魔法少女同士の争いは市条例で禁止されているのだ。

ましてや相手は「最強」を謳われる治安維持部長。対峙したら、彼女とて只では済ま



ないし、店にとつても大打撃になるのは確実だ。

暗にそう込めて、鶴乃を思い留まらせようとする木次郎だが、

「周囲には『治安維持部長が魔女に襲われました!!』って騒いどけばいいよ」

鶴乃は素つ気なくそんなことを言いのけた。

「あいつ、プライド高いつて有名だからさ、『フリーの魔法少女に倒された』だなんて絶対自分の口から認めないだろうし……上手いくよ、きつと」

「それでも、やりあつてる最中を誰かに見られたらどう説明する気だ？ 親父と兄貴が

守り抜いてきた店を、テメエで潰す事になるぞ？」

自分が店を潰す——その言葉が嫌に耳に張り付いてきた。

鶴乃は怒りを顔にした表情で、ギロリと目を剥いた。

「そんなこと絶対に無いつてっ!!」

カツと頭に血が昇つた！ 気が付いたら、木次郎を両手で突き飛ばしていた。

彼はよろめいたが転ぶには至らなかつた。だが、苦々しい顔で胸を擦っていた。

「……っ！」

やつてしまった——一瞬で罪悪感が急激に頭に噴き上がってきて、鶴乃の顔が青

褪める。

だが、もう啖呵を切ってしまったのだ。もう引き下がる訳にはいかない。謝るつもりも無かった。

顔を彼から背けて再び外に広がる旧商店街に目を向ける。

「わたしが、証明してやるんだ……っ！ 正しいのは、行政なんかじゃない……っ！ この地で生きてるみんななんだって……っ！」

決意を顕わにして、鶴乃はそう独りごちると、飛び出していつてしまった。

あつという間に背中が小さくなってしまつて、木次郎はふうふう、と深い息を吐いた。

「あの、馬鹿が……」

「お、叔父さん、鶴乃になんていったんだい？」

痛む胸を摩りながら、舌打ちをしつつ店内に引つ込む木次郎。

カウンター席に座ると、隼太郎の困惑に満ちた声が飛んできた。

「別に。『魔女と戦うんなら頑張れ』って言っただけだ」

やれやれ、と言いたげに、どっかりと座り込む木次郎。

「で、でもなんか怒つてたみたいだったけど……」

「気にするな。おめえは店の事だけ考えてりゃいい」

そう言われても、隼太郎は納得がいかない様子だ。

だが、これ以上話は無い、とばかりに、カウンターに置きっぱなしだった新聞を広げて再び読み始めたので、隼太郎は問い詰めないことにした。

木次郎にしてみれば、隼太郎こいっに言った所で何も解決はしない。寧ろ、逆効果。やる気を削いでしまい最悪、『本日休業』なんて事態になりかねない。

それは鶴乃が一番望まない事だ。

「……………」

木次郎の顔は新聞で隠れている。実際は真横を向いていた。

(鶴……………)

鶴乃が出ていった玄関をいつまでも見つめている瞳には、僅かに心配の色が混ざり込んでいた。

——以上が、神浜農林公園で、七海やちよと激突した経緯である。

☆

そして、現在。

一方の、神戸市立図書館の屋上では――

「先生！」

「……っ！」

思考に耽っていると、黄色い声が耳に飛んできた。

我に帰って、声の方向を見ると、さなというはが帰ってきていた。

「ああ、おかえり。二人とも」

「執筆はどうですか？」

いろはが尋ねると、慎は首を横に振った。春径と話し込んだせいで全く進んでいない。

「春さんと話し込んでたら、完全に滞っちゃってね」

「春さん……春、春……あれ、どこかで聞いたような……??」

聞き覚えのある名前にいろはが頭を捻らせていると、さなが前に出た。

「どんなことを話してたんですか？」

「まあ、なんというか……」

慎はふうふうと溜息を吐く。

「神浜では色んな事が起きてるって話だ」

「えっ??」

慎のあまりにもざっくりすぎる表現に、いろはとさなは二人揃ってポカンと目を丸くする。

「だから二人とも、強く生きろよ」

僕はちよつと食事に行つてくる———そう言い残して、彼は席から立ち上がると、足早にどこかへと去つてしまった。

少女二人は呆然としたまま、背中を見送っていた。



## FILE #18 掌の林檎を齧る前に

「二度手を汚しちゃったら!! もう洗い流す事はできないんだよ!!」

「希望とか幸せなんか掴めっこないっ!! ただ苦しさと痛みが残るだけ!! なんでそんな簡単なことが分からないの!! ちよつと頭をひねれば分かることでしょ!?!」

14時からの実技教習はなんとか間に合うことができた。

ただ運転中、ずっと苦い顔をしていたので、担当の教官からは「何かあったの？」なんて余計な心配をされてしまった。無論、「なんでもない」って誤魔化したが。

14時50分に無事終了。15時には学課講習があるため、その間は待合室で休むことができる。今日は土曜日なので、ロビーの様に広い待合室は老若男女で賑わっていた。どうにか空いている席を見つけて座ると、ようやく一息つけた。安堵の余り、上体の力が抜けてヘナヘナとテーブルに突っ伏す。

「疲れた……」

テーブルの上で饅頭になった鶴乃が重い溜息を吐きながらポツリと呟く。

家から教習所に行き着くまでのたった15分間で物凄く神経を擦り切らしてしまった。今はあれこれ考えたくはない。家に帰ったら店の事はおんじに任せてさっさと寝たい。

由比鶴乃という少女は、人並み外れたタフネスの持ち主だが、如何せん心の方はか弱き乙女のままだった。一度悩みを持つと、誰にも相談できずに一人で抱え込んでしまうのが彼女の悪い癖であった。

自覚はあったが、治す方法が分からない。周りの人に気負わせてしまうのは、



悪いことだ。誰かに迷惑を掛けるぐらいなら、自分ひとりで傷ついてた方が遥かに気が楽だ。

「あれ、つるりんじゃん〜」

懊悩している鰻頭に声が掛けられた。鶴乃は顔を元に戻すと、首を上げて声の方向を見る。

知り合いの女性が二人立っていた。一人は、金髪のショートヘアで如何にも元氣澆刺そうな笑顔の少女で、もう一人は全身の分厚い黒いコートで覆い、これまた分厚いマフラーで口元を隠した物静かそうな小柄の女性だった。

「ユカちゃん！ 美代さん！」

それらが親しい人物で有ったことに、心の底から安心した。鶴乃はパアツと顔を輝かせると、椅子から飛び出す勢いで二人に駆け足で寄る。

金髪の少女は最上ユカといい、鶴乃とは同じ学校のクラスメイトだ。ちなみに魔法少女の素質は無く一般人。

もう一人の黒コートの女性は朝霞美代、言わずもがな魔法少女である。

鶴乃が魔法少女に成り立ての頃に、魔女との戦いで負傷したのを治療してくれたのがきっかけで関係を持った。そして、今では万々歳の常連として、度々鶴乃に会いに来てくれる。

「ご機嫌ようなのですか」

「二人もこれから？」

「そーだよー！」

鶴乃の問いかけにユカが元気よく返事をする。対照的に美代は首をふるふると振った。

「いえ、わっちは今日の分が終わったので帰るところだったのですが、ユカくんには捕まっています」

言い終わると、ユカが美代の肩を抱いて懐まで引き寄せた。

「美代さんねー面白いですよー！ スッゴイ魔法少女と一緒に戦ったんだってー！」

「スッゴイ魔法少女？」

鶴乃の目が点になる。問いかけると、美代はコクリと首を縦に振った。

「あつれー?? つるりん知らないのー!？」

ユカは一瞬驚いた顔を見せたが、すぐに笑顔で「見てみてー!!」とスマホの画面を鶴乃の顔面に近づけた。

「……………っ!!」

それに映っていた文字列を見た瞬間、鶴乃の顔が強張った。

『最強の挑戦者現る!! 女神を地に叩き伏せた女、その名は、【環 いろは】!!』

『七海やちよ撃沈!! 突然訪れた闖入者は【魔物】!?!』

『まさかの敗北!?! 【英雄】を超えた環いろはの実力は【神域】か!?!』

「これって……!」

文字列の横の写真には、白いフードを被った桃色の髪の魔法少女が映っていた。

鶴乃が愕然とした様子で画面を凝視していると、ユカの底抜けに明るい声が飛んできた。

「この環いろはって子ね〜! スッゴイんだよ〜! だってあの七海やちよをぶっ

飛ばしちゃったんだって〜!」

「ユカくん。ぶっ飛ばしたんじゃないやなくて勝負に勝ったのですな」

ユカが目をキラキラ輝かせて捲し立てる隣で、美代が冷静にツッコむ。

「勝負に勝った……って?」

話が飲み込めない鶴乃が美代を見る。美代は自分の米神のあたりを人差し指で差した。

「力で打ちのめしたのでなく……ココで、ですな」

「……っ!!」

米神をツンツンと突いてそう言った途端、鶴乃の目が大きく見開かれる。

「美代さんっ!!」

「~~~~ツツツ!!??」

瞬時に、美代に飛びついて、大声で呼びかける鶴乃。鼓膜を貫かんばかりの衝撃に美代は仰天の余り仰け反りながらも耳を抑えた。

「どったのつるりん?」

ユカがきよとんと首を傾げて問いかけるが、鶴乃は無視して美代に捲し立てる。

「その子に! 会わせてもらえないかなっ!!?」

「はい??」

鶴乃の必死な懇願に、美代とユカは同時に目を丸くした。

☆

何で、衝動的にそう言ったのか、自分自身よく分かっていなかった。

——多分その子が、気になったからかもしれない。

自分は七海やちよを今まで『力』で倒すことしか考えて無かった。

そして、常磐ななかは言った。大切な者を守るためには例え手を汚そうが『力』が必要条件のだと。

だが、この環いろはという魔法少女は、仲間との『連携』と、自分の『知恵』を生かして七海やちよに勝った。卑劣な真似を使わず、手を汚す事無く、真正面から挑んで。

それは『力』に依存し、継り付くしか術が無いと考えていた自分にとっては衝撃に等しい話であった。

だから、会ってみたい。

環いろはという少女なら、力を使わずになんとかする方法を、知っているのかもしれない。

ななかへの返事は彼女に会ってからでも遅くは無いだろう。

「……だからって、わっちに付いてくれば会えるとは限りませぬがな……」

美代は半ばうんざりとした表情で、隣の同行者を睨みつける。

「わからないでしょ!? 魔法少女と魔法少女は惹かれ合うって良く聞くし!! 知り合いなら尚更だよっ!!」

美代のすぐ隣で、『噴々ふんふんっ!』と鼻息を荒く蒸しながら、鶴乃は捲し立てる。

二人は、あの話し合いの後、教習所の外に出た。

美代が神浜市立図書館に用事があると言うと、なんと鶴乃がそのまま付いてきたのだ!  
ちなみにユカはまだ、終わってない科目があるため、まだ教習所に残っている。

神浜自動車教習所は参京区の旧商店街の西側の出入り口を抜けてから20分程、国道沿いを真っ直ぐ歩いた所にある。丁度中央区との境目だ。

そこを出て、更に西に向かって国道沿いを真っ直ぐ、20分程歩いていくと、神浜市立図書館へと行き着く。

「……何度か撒こうとしましたが、無理ですな……」

とはいえ、二人は魔法少女だ。

変身して魔力を両足に纏って走れば、目的地までは5分も掛からない。

美代は教習所から出て直ぐに「あっ! ラーメンの丼みたいなUFOが飛んてるのですな!!」等と叫んで、鶴乃の気を明後日の方向に逸らし、自分は変身して逃げようとしたが、そこは学校での体育の成績が毎年「5」の鶴乃である。

あっさり、追いつかれて、掴まった。

だが、懲りずに「あつ!! あんな所にドラ○ンボールがつ!!」等と騒いで、再び撒こうとしたが結果は同じ。

騙す↓全速力で逃げる↓追いつかれるを何度か繰り返している内に、あつという間に、神戸市立図書館が見える所まで辿り着いていた。

「なんかいった?」

美代がボソツと呟いた事を、鶴乃は聞き逃さなかった。眉間に皺を寄せてじつと睨みつけてくる。

「いえ、ナニモイツテナイし、オモツテモナイのですな……」

半ば怒気の様なものを孕んだ低い声が、美代の心に釘を刺した。青褪めながらもそう返すしか無い。

如何にベテランの美代とはいえ、一度火が付いた鶴乃を止められる術は無かった。

しかし——はあ、と、鶴乃に気づかれない様に僅かに顔を逸らして溜息を吐く。このままでは、環いろはに会うまでずっと付き纏われそうである。

「そういえば、美代さんはさ……」

「?」

悩んでいると、元凶たる少女が話を振ってきた。美代は何事かと思い、顔を向ける。

「前に住んでたところでも教習所に通ってたんだよね。どうして辞めちゃったの?」

「いえ、大した理由ではありません。ただ、教官の方と合わなかったのですな」  
「もしかして……何かされたの？ セクハラ？」

鶴乃が眉を八の字にして心配そうな顔を浮かべる。

「いえいえ、そんなことはされておりませぬ。ただ……」

美代は顔を僅かに下に向けて俯かせた。

「少し、嫌なことを言われましてな」

『朝霞さん、魔法少女なんだってねえ。……車なんて、いらないでしょ』

『魔法でなんでも出来るんでしょ？ 何で免許欲しいの？ 気まぐれ？』

『近所で魔法少女見たけどさあ、凄いやね。バビュンって……新幹線みたいでさあ。』

美代さんも魔法少女なんだからあれぐらい走れるんでしょ？ ……それなのに車が欲

しいなんて、おかしいんじゃない？』



「一人や二人だけならまだ許せるのですが……流石に出会う教官全てからそんなことを言われたら頭に来るのですな！」

「分かる〜!! 魔法少女だって車は欲しいよねっ!! 家族を旅行とかに連れて行きたいし、仕事の道具とか持っていけるし、何より変身して飛んでいくよりは全然目立たなくて済むしっ!!」

当時の事を思い出した美代は、額にピキツと怒りマークを浮かべながら鶴乃に吠える。

心の底から同意した鶴乃は腕を組んで頭を大きくコクンコクンと頷かせた。

魔法少女として、魔女との戦いが無ければ、普通の一般人と同じなのだ。

だが、魔法少女の特異性ばかりに目を向けて、上記の様な差別的発言をするものも決して少なくない。

「その点、神浜市は良い所なのですな。魔法少女保護特区というものもあるかもしれないが……わっちを受け入れてくれる方々は多いですし、こちらの教官の方はとやかく言いませんぬ」

「そうだね! ここの住民で本当に良かったと思うよっ!」

美代はマフラーの中で口の端をフツと吊り上げる。彼女が笑顔を浮かべた事を感じ取ったのか、鶴乃も満面の笑みを見せた。

「おや？」

と、そこで美代は前方に何かを発見したらしい。目を丸くして、見つめる。

「どうしたの？」

「鶴乃くん。大当たりですな」

鶴乃が首を傾げながらも、美代が注目する前方を見遣る。

瞬間、衝撃が走った。

図書館の方から、桃色の髪少女が一人、こちらに向かってきていた。

☆

時間は少しばかり遡る……

「じゃあ環さん、また」

「ありがとう、二葉さん」

図書館の前で、いろははさなと慎に見送られていた。

さなと両手で握手を交わしながら、笑顔を見せ合いつつ別れを告げる。

「先生も、いろいろとありがとうございました」

さなから両手を放すと、慎に向って頭を下げるいろは。

「いやいや……ところで環さん、心理学者のジークムント・フロイトは知っているかい？」

「フロイト……ごめんなさい、分からないです」

魔法少女であることを除けば、一人の中学生に過ぎないいろはにとっては、聞き慣れない名前だ。

首を横に振ると、慎は少し神妙な面持ちで呟いた。

「彼の言葉で、『夢は現実の表出であり、想像の産物ではない』というのがあるんだ」  
「……………」

慎の言葉に、先ほど彼に自身の『夢』について細かく指摘された思いが蘇ってきた。  
いろはは、沈痛そうに顔を俯かせる。

「先生……………」

また、いろはを追い詰めてしまうのではないか。

その心配をしたさなが慎を不安そうに見やるが——彼はフツと笑ってこう言った。

「環さん。夢に勝てよ」

「……………」

その一言が、いろはの顔を勢いよく上げさせた。

「所詮夢は過去だ。辛い思いが混じっているのなら、できるだけ振り向かない方が良い。今、ここに居る君が全てだ。自信を持って、前を向いて歩いて行って欲しい」

いろはの目が震えた。

彼女は慎に深々と会釈すると、二人に背中を向けて歩き出した。

「環さん、頑張つて！」

最後に、さなの声が背中を押してくれた。

美代とは結局会えなかったし、何も説明できていない。でも、その声のお陰で足がとでも軽くなった気がした。

（お父さん）

いなくなった父の顔を、不意に思い出した。

（私は自分の運命と向き合っていく。前に進んでいくから）

決意を新たに、一步一步、確実に進んでいく。

この先に何が待っているのか、分からない。だけど……

(安心して。私は、一人ぼっちじゃないから)

味方になってくれる人がいた。気持ちを分かってくれる人がいた。

だから、大丈夫——

「おお、いろはくんではないですな！」

唐突に聞いたことのある声が目に入り込んだ。

ハッと顔を上げると、服装は私服の黒いコート姿だが、見たことのある顔の人物が映り込んでいた。

「美代さん!!」

二人揃ってお互いの存在を視認した瞬間、走り寄った。

目先まで近づくと、いろはは先ず我先にとペコリと頭を下げる。

「この前は、本当にありがとうございました！ あの……お顔の方は？」

確か、七海やちよに靴で顔をグニツと踏まれたのである。心配で仕方が無かった。

「この通り、何の問題も有りませぬ」

剥きたての卵の様にツルンと光っている肌を自慢気に見せびらかす美代。

それを見て、ほっと安心するいろは。

「美代さん、あのう……実はお尋ねしたいことがあります……」

「ふむ、それなら条件がありますな……」

美代は顔を横に向ける。

いろはも『条件』という単語に怪訝な表情を浮かべながらも、攀られる様に美代が向いた方向を見遣ると——ギョツと身をたじろがせた。

いつの間にか、背丈の高い少女が美代の隣に佇んでいた。眉間に皺を寄せて、真剣に満ちた表情でこちらをじつと見ている。怖い。

「この子の話を聞いてもらいたいのですな」

「……この方は」「わたし、由比鶴乃つていますっ!!」

美代に問いかけるよりも、早く少女から大声が飛んできた。その音量の凄まじさに、いろははヒヤツと耳を塞ぐ。

「!!……鶴乃つて、まさか!」

「ええ、以前、七海くんと戦ってくれたのが、彼女なのですな」

「あ……そうだったんですねっ! 由比さん、この前はありがとうございます!」

「いや、気にしなくていいよ……つてそれよりもっ!!」



そして、先程の鶴乃に負けんばかりの絶叫を響かせるのであった。



## FILE #19 戦意の底で根差すもの

いろははしばらく硬直していた。

当たり前だ。初対面の人間にいきなりそんなことを申し出されれば誰だって困惑する。

「!! で、弟子って……私、そんな大それた人間じゃ」

時間にして3分程、直立不動状態から我に返った。いろはは慌てふためきながら、否

定しようとする。

「でも、七海やちよには勝ったんですよね!？」

「うっ……」

が、矢の様に飛んできたその言葉に詰まるいろは。否定はできない。既に神浜中にはそう知れ渡ってしまったのだから。

しかも鶴乃のこの勢い。事実を言ったところで信じてはもらえないだろう。

「お願いします!」

鶴乃は頭を勢いよく90度に下げる。

「で、でも私には、しなくちやいけないことが……」

いろはは美代に視線を送る。自分が用事があるのは彼女なのだ。

しかし、

（いろはくん、いいのですかな?）

（え?）

美代からテレパシーを受けた。いろはは目を丸くして彼女を見つめる。美代の目が不敵に光った。

（わっちに用事があるのでしよう?）

（そ、そうですけど……）

(なら鶴乃くんの話を聞いてやってください)

(ええ!!?)

いろはは驚くものの、こうなったらやむを得なかった。視線を再び鶴乃に戻すと、彼女は相変わらず上体を直角に倒したままだ。いろはの答えを待っているのだろう。

いろはは一度深呼吸。勢いの良さはともかく彼女は真剣そのものだというのが伝わった。なので、こちらにも真剣に答える。

「わかりました」

その言葉に鶴乃は頭を上げる。緊張が溶けたのか、パアツと笑顔の花を咲かせた。

「本当ですか?」

「でも、由比さん。私から一つ、お願いしてもいいでしょうか?」

いろはは毅然と言い放つと、鶴乃はビシッと敬礼のポーズを取って「なんなりとつ!!」と答えた。

「まずは、貴女の事を、よく教えてください」

あの後、美代は図書館に用事があると告げて、別れた。

いろはの提案を快く受け取った鶴乃が、向かった場所は「T a i y a n」というラーメンカフェだった。

カフェ、と付くだけあって、いろはの知っている一般的なラーメン店からは掛け離れていた。

カジュアルチックな雰囲気で、静かな店内に穏やかなジャズミュージックが心地よく響き渡っている。

客層も若い女性の比率が多かった。

「あのう、私……少し前に食べたばかりなんですけど」

「小腹くらいは空いてるでしょ」

鶴乃は勝手にそう決めつけると、同時に呼び出しボタンを押してしまふ。

いろはが唾然となっている内に、定員がやってきた。店の雰囲気に相應しいバーテンダーの様な出で立ちの青年だ。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「あ、えつと……」

困惑するいろは。何せメニューを見る前に鶴乃が呼んでしまった。しどろもどろでいると、鶴乃が代わりに答えた。

「ラーメン一つに、餃子一皿で」

「かしこまりました」

青年は恭しくお辞儀すると、厨房に戻ってしまふ。

「あの、由比さん……」

慣れた様子で注文したことから常連なのだろうが——自分の意思を無視して、勝手にアレコレ決める鶴乃に、いろはは眉を顰めた。

彼女をじつと睨みつけると、鶴乃は苦笑い。

「あはは、ごめんごめん。でも、この料理は食べてもらいたくってね」  
「……?」

何か含んだ様な言い方をする鶴乃に、いろはは首をかしげるしかない。

しばらく、他愛ない会話をしていると、店員が料理を運んできた。

「おまたせ致しました」

「ラーメンはわたし、餃子はこの子で」

また勝手に——いろはは鶴乃を睨んだが、先の言葉から顧みるに何か意味があるのかもしれないと思った。

店員が去ると、鶴乃はラーメンを啜りだした。

お腹は空いていないのだが、やむをえない。いろはは意を決して、目の前に置かれた餃子を箸で掴んで、パクンツと、半分ほど口に運んだ。

(……!!)

皮はパリパリと香ばしくて、歯で破ると中から肉汁が溢れ出てくる。

「おいしい……!」

思わず、いろははそう呟いてしまった。こんな餃子、今まで食べたことが無い。

瞬間だった。鶴乃の目が鋭く瞬いた気がした。

「由比さん……?」

突然の眼光にいろはは息を飲む。目を丸くして見つめると、鶴乃はラーメンを啜る口を止めて、ハア、と溜息を突いた。

「美味しいよね、やつぱり」

「あの、由比さん。一体どういうことですか?」

また意味有りげな事を呟いた。

何も考えていない様に見える、自分が「おいしい」というのを計算済みだったらしい。

怪訝な表情で鶴乃を見ると、顔から笑みが消えていた。僅かに眉間に皺が寄っており、苦々しさが表現されていた。

「環さん、わたしの家もね。中華飯店なんだ」

「そう、なんですか」

鶴乃は一度視線を自身のラーメンに映し、そしていろはの餃子を見た。

「で、ここで出されてる料理はさ……」

次いで鶴乃は、周囲を見渡す。周りに店員がいないことを確認すると、いろはに聞こえるか聞こえないくらいの小さい声で、こう呟いた。

——もともとうちで開発したものなんだよ。

「……え？」

静かに入ってきた一言に、いろはの脳は雷に撃たれたような衝撃を受けた。

「そ、それって……!」

いろはは思わず立ち上がりそうになるが、鶴乃はどうしようと、手を下げる。

「落ちて着いて」

いろはは慌てて姿勢を戻すと、身を乗り出して、小声で鶴乃に問いかけた。

「それって、どういうことですか……?」

「うちはさ、元々神戸市内じゃ一番の中華飯店だったんだよ。だけど……5年前におじ

「いちゃんが死んじゃって……」

鶴乃は顔を俯かせながら苦々しく呟いた。何か複雑な事情があるのかもしれない。そう察したいろはは真剣に耳を立てる。

「お父さんは元々おじいちゃんとは折り合いが悪くて、店を継ぐ事に消極的だったし、お母さんは散財ぶりが酷くてさ……家計は火の車だったんだよ」

「そう、ですか……」

先程の明朗快活ぶりを発揮してた人物とは同一とは思えない程に、鶴乃の声色は沈みきっていた。

余程の苦勞を抱えて生きてきたのだろう。自分とは比べ物にならないほどに。

だが、大切な家族を失った悲しみ、それによつて齎される苦惱は形は違えど、いろはも経験していた。

故に、鶴乃の気持ちが薄つすらとはあるが分かつた気がした。沈痛な面持ちで受け止める。

「もう店を畳まざるをえない。みんな、そう思つてた時にね……現れたんだ。アイツが」  
「アイツ……?」

「日秀源道が……」

鶴乃の視線は、店の奥で壁付けされている60インチ程の大型テレビに向かつてい



た。

丁度ドキュメンタリー番組の再放送が映されており、70〜80代程の車椅子に乗った老紳士が紹介されていた。

「神浜市の都市化に多大な貢献を果たした、偉大なる実業家……どこのメディアもそう持ち上げてるけどね、実際はそうじゃない」

テレビでは源道が和やかな笑みを浮かべて、インタビュウに答えていた。

鶴乃の瞳が血走った。

「アイツは……怪物だよ」

静かに聞こえてきた鶴乃の声には、今まで聞いたことのない憎悪の感情がありつたけ表現されていた。

いろはが息を飲んで、鶴乃を見つめる。

鶴乃は、一度呼吸をしかぶりをつた。感情を落ち着かせると、いろはに顔を戻して話を続けた。

「当時の神浜市は、国から提案された都市開発を行う為に、最大の資金援助先だったサンシャイングループの提案を全部飲み込んでたんだ」

「……………」

いろはは、黙って鶴乃の言葉を耳に傾けていた。

「それが始まりだったんだよ……………」

鶴乃がテーブルに置いた両手が、わなわなと震えだす。

「奴らは、神戸市で経営難に陥っている老舗の店に次々と手を付けて、支配していったんだ」

「そんな……………」

「わたしが住んでる参京区にも、奴らの手は及んだの。知り合いの店や工場は次々とあいつらの軍門に下って……………ついにはうちにまで手が回ってきた」

鶴乃が奥歯をグツと噛み締めた。怒りを噛み殺すのに必死なのだ。

「その、源道さんって人が、何を言っただんですか……………」

「日秀源道はサンシャイングループの代表だよ……………あいつはうちの現状を知るなり買収を持ちかけてきたの。うちの店『万々歳』を、「T a i y a n」の二号店に改装したいって」

「T a i y a n っ て……………」

いろはがギョツとする。思わず大きな声が出そうになった口を慌てて抑えた。

この店の名前だ。それが意味することは一つ。

「承諾してくれば、家計を助けるって持ちかけてきたの。お父さんとお母さんは幸運が降りてきたって喜んでたけど……私は、そうじゃないって思った。絶対何か企んでるって思った」

「それは……？」

「あいつらの目的は、ひいおじいちゃんとおじいちゃんが生涯を懸けて守り続けてきた、料理のレシピを手に入れる事だったんだよ……！」

その内容に、いろはは愕然となった。鶴乃は、頭を抱えて絞り出す様に声を挙げた。

「お父さんとお母さんには……？」

「うん伝えたよ。だけど二人とも信じてくれなくて……だからおんじに頼ったの」

「おんじ……？」

「亡くなったお爺ちゃんの弟。親戚の中で万々歳の事を大事に思ってるのは、その人しかいなかったの」

激情がだんだん抑えきれなくなってるのか、鶴乃の声が震え出す。

「おんじが駆けつけてくれて、お父さん達を説得してくれたお陰で、店は奪われずに済んだ。だけど……あいつらは別の手を使ってきた」

日秀源道は鶴乃の店が火の車であることは既に承知済みだ。つまり、このまま店を続けられたとしても、継ぐことに消極的な隼太郎では長くは持たないと踏んでいた。

だから、こう切り出してきた。

☆

『我々の要求が聞き入れられないのならば、こちらは大人しく諦めるしかないですな』

記憶の中で、おんじこと、由比木次郎の罵声に日秀源道は溜息を吐きながらそう返してきた。

『ですが、現状の万々歳をどう続けていくおつもりですか？ 鶏太郎氏がお亡くなりになられた今、経営の方は絶望的と思われませんが』

しかし、瞳の力強さは一切失われていなかった。脅すような声色で、木次郎に突きつけた。

『ケツ、てめえらなんぞの力を借りなくても、万々歳は昔から地元の人たちに愛されてんだ。信用がある限り、続けていけるさ』

『それは理解し難いですな。跡取りの隼太郎さんは、鶏太郎氏が亡くなる直前まで、我がグループの通信会社にお勤めなされていた。聞けば、鶏太郎氏とは折りが悪くて、店を継ぐつもりは無かったとか』

源道は射る様な瞳で木次郎を見た。

『店を残したいと思つた貴方が彼を呼び戻したのでしょうか。しかし……無礼を承知で申し上げますが……料理人としてはてんで未熟者の彼に、果たして鶏太郎氏の後が務まるのでしょうか?』

冷ややかに告げる源道に、木次郎は負けじと睨み返した。

『それは俺たち家族でなんとか支えていく』

手段が無い訳ではない。

木次郎もまた万々歳の人間だった。兄が正式に跡を継ぐまで彼もまた、父・雀七から料理の指導を受けていたのだ。警察に就職した為、料理人の道は潰えたが、中華料理を作る事と、時代に合わせた新しい味の研究は趣味がてら続けていた。

それに、店には父と、兄が残してくれたレシピがある。それさえあれば……どうにか、『どうしても続けたいおつもりですか……』

源道は、哀れな、と言いたげに微笑を浮かべると、小さく首を振った。

『この店を大切に思っているのは俺だけじゃねえ。兄貴の孫娘もだ。アイツはこの店と

兄貴が大好きだった。だから、俺は将来この店をアイツに継がしてやりたいと思ってる。その為には、どうしても店は残さなくちゃいけねえんだ』

『ほう……』

木次郎の決意は決して独りよがりのもものではなかった。それを知った源道は感心した様な表情を見せた。

『なるほど、そこまでの意地があるとは、この源道……感服いたしました』

「だつたら早く帰れ——木次郎はそう願つたが、源道の顔を見た瞬間、それは叶わないと思つた。」

彼の目は、何か良からぬ事を思いついた様に妖しくギラリと光っていた。

『由比木次郎さん、貴方のその決意……是非とも汲んで差し上げたい』

『なんだと……?』

「一体、何を企んでいる。木次郎が胸中で浮かべた疑問を、源道は見透かしたのか、フツと笑つた。」

『ご心配なさるな。万々歳に我が社はこれ以上手を出しません。ただ、救う、それだけです』

それだけ言うと、源道は去っていった。

☆

「あいつは……源道はっ！」

鶴乃の瞳が赤く染まっていた。彼女はテーブルを叩き割らん勢いで強く叩いた。

「あの後、おんじが居ない隙を見計らってお父さんに近づいたんだ……！」

「何を、言ったの……？」

『『お爺ちゃんのレシピを譲れ』って……！』『そうすれば店の修繕と最新機器の導入、娘の大学進学までの費用は工面してやる』って……！』お父さんは、その要求を飲んじやっただ……あいつらに言われるまま、代々受け継いできた、家宝にも等しいレシピを、渡しちやっただ……!!』

言いながら鶴乃は苛立ちを抑えきれなくなってきた。頭をグシャグシャと掻きむしり、涙ぐむ様な声でまくしたてた。

「そんな………」

いろはは絶句するしか無い。

奪われたレシピがどうなったのか、先程の鶴乃の言葉から大体想像は付いた。

恐らく、使われているのだ。この店の料理に。かつて、神浜一と呼ばれた中華飯店の

レシピの内容が――

「おんじは念の為にとって、コピーを取つといてくれてたんだけど、それも無くなつてた」

見越した上で、奪われたのだろう。連中は用意周到だった。

「……………」

いろはは、沈黙するしかない。鶴乃になんて声を掛ければいいのか、わからなくなつていた。

「しばらくして、お父さんの口座に莫大なお金が振り込まれてね。お父さん、それを見て喜ばなかった」

「どういうことですか?」

「ようやく、目を覚ましたの。お金に目がくらんだ自分が情けないって。お爺ちゃんの大事な物を売り飛ばしてまで店を残したんだから、自分がすっかり守らなきやつて……………」

鶴乃を顔を上げると、僅かにはにかんだ。

「お父さんは、昔お爺ちゃんに教わったことをどうにか思い出したり、おんじに教わりな



がら、レシピを新しく作っていったの。お爺ちゃんには全然敵わないけど、人柄は良かったから、地元の人たちが徐々に来てくれるようになって……なんとか続けていけたの」

「そうですか……」

いろははホッと一息付いた。

「でもね、これで終わりじゃない」

「え？」

「始まったんだよ。苦しくて、思い出すだけでも胸が焼ける様な戦いが、始まったんだ」  
冷え付いた言葉が耳に突き刺さった。

鶴乃の形相を咄嗟に見て、いろはは肝が冷えた。

彼女の『怒り』は、まだ底が見えない。



## FILE #20 無邪気な大人 大人へと向かう子供

『それでは、日秀源道さん。現代の若い人に向けて何か伝えたいことはありますか？』

店の奥に壁付けされている60インチ程の大画面の中には、老紳士の温和な笑みが全体に映っていた。

彼は口元に向けられたマイクに、渋みのある声ではつきりと伝える。

『そうですね。私が若い人達に言いたいことは……【経営者にはなるな】、ということでしょうか？』

放たれた言葉は、聞き様によっては自己否定とも取れる一言であった。

画面がインタビュアーの方へと一瞬動く。20代半ばの端正な顔立ちの女性で、如何にも新人アナウンサーといった印象だ。意表を突かれた彼女は思わず「えっ？」と声を

挙げて、目を丸くしてサンシヤイングループの代表取締役を見つめていた。

『社長つてのはね、地獄ですよ。どれだけ頑張つても、出来上がった決算書を見るといつもトントン。赤字にならなきゃ御の字の世界です。忙しすぎて健康診断もろくに行けませんから、病気の発見も遅れてしまう』

『そ、そうなんですな』

インタビュアーが困惑するのを見越していたのか——源道は言い切ると「カッカッカ！」と大きな口を開けて笑いだした。イタズラが成功した子供の様に、屈託なく、無邪気な笑みだ。

『だからね、今の友達には、起業なんて博打はしてほしくないんです。いっぱい勉強して、なるべく自分に合った良い会社……今の言葉で例えるならホワイト起業ですな……そういうのに入って、堅実に働いてもらいたいんですよ』

☆

鶴乃は訥々と語りだした。

父・隼太郎が万々歳を継いでから3年——相変わらず腕の方は鶴乃から見ても今ひとつだったのが、常連は地元の住民達で固定され、日々生活する分には十分な収入が入る様になった。危惧していた母親の散財癖もいくらか落ち着き、店を手伝うようになってくれた。

安定した由比家を見て、木地郎もホツとしたらしく、「もう大丈夫だろう」とだけ鶴乃に告げると、神浜町にある住いへと戻っていった。

「おんじが行っちゃったのは寂しかったけど、このままずっと続けていけると思ってた」鶴乃の表情は穏やかなままだったが、声色は少し低くなった。

いろはは目を細めて、鶴乃の重たそうにゆっくりと上下する口元を見つめた。先程の捲し立てる様な口の動きとはあからさまに変化していた。

これから「苦しい戦い」が始まったのか——そう思うと緊張感が一気に背筋に齎された。汗がじんわりと湧いてきて、寒いのか、暑いのか分からない感覚が襲う。

「何が有ったんですか……？」

聞かずとも鶴乃は喋っただろう。それでも、気になるあまり問いかけずにはいられなかった。

鶴乃の表情から笑みが消える。

「再開発事業って分かる？」

囁かれたのは、聞き覚えの無い単語だ。いろはは首を振る。

「いえ……」

「そりやそうだよね……」

鶴乃はテーブルに肘を置いて、頬杖を付くと、ハア、と溜め息。そのまま首を横に逸らして、窓の外を見つめる。

やや陽が落ちて、ダークレッドに染まった公道を、街灯の光がポツポツと白く照らし始めていた。

もうすぐ一日が終わるのか——

18歳になった頃から、時の流れが急に早く感じた。それは自分の感性が大人へと近づいている証なのだろうか。それとも、一日一日を生きる自分に大した意義を見出だせていないからだろうか。

はつきりとした理由は分からない。

でも、最近夕陽を見る度に、寂しい気持ち湧いて仕方が無い。

「再開発事業っていうのは、簡単にいえば、その土地を新しく作り直すという行政の施策の一つだよ」

外の景色を憂いを帯びた瞳で眺めながら、鶴乃はポツリと口にした。

「行政の……?」

何やら複雑な話になりそうだと直感したいろはの顔には困惑が浮かぶ。

鶴乃は顔を戻すと、手元のコップを持って、グイッと水を飲み干した。

これから休む間もないぐらいの長い話をするつもりだろうか。

「都市計画法っていうのがあってね。それによると、再開発事業は、『市街地の土地の合理的かつ健全な高度利用と都市機能の更新を図る為』に『都市計画法に従って行われる建築物・建築敷地の整備、並びに、公共施設の整備に関する事業』のことを言うんだって」

「……?」

どうも難しい話だ。合理的かつ健全、都市機能の更新、なんて言われてもそれがどういふものなのかピンと来ない。

「むずかしい話は聞き流しちゃっていいよ」

鶴乃は、苦笑いを浮かべながらも説明を続けた。

神浜町の中心部である中央区は、東京都の池袋・新宿駅前もかくやと言うほどの高層ビル郡が建ち並ぶ都会ではあるが、昔は、参京区と大差ない程の寂れた片田舎であったらしい。

だが、10年前に『魔法少女保護特区』に市が制定されてからは、国の指示と、サンシャイングループの積極的な資金・人材援助によって大々的な『再開発』が行われた。僅か8年で現在の状態に生まれ変わったというから驚きだ。

「おんじが出ていってすぐだったよ。その話が参京区に持ち上がったのは」  
「え、でも」

どこか苦々しい表情になる鶴乃を疑問に感じたのか、いろはが口を挟んだ。

「それって良いことなんじゃないですか？ 都会になれば栄えますし、人が集まってきましたし」

瞬間——鶴乃の目がキツと鋭くなる。

「そう簡単に言わないでよっ！」

苛立ちを存分に含んだ強い言葉が矢の様に飛んできた。

いろははウツと息を飲んでたじろぐ。自分の迂闊な発言が、彼女の感情の琴線を踏みつけてしまったらしい。

「ご、ごめんなさいっ！」

「あっ……！」

申し訳なく思い、咄嗟に頭を下げて謝るいろは。だが、鶴乃はその姿を見て、ハッと目を大きく見開く。



「悪いのはこっちだよ……ついカツとなっちゃって」

感情を抑えきれないのが自分の悪い癖だ——それは重々自覚しているのだが、あの頃の話をする時、どうしても苛立ちが湧き上がってしまう。

どう話せばいいのかな、罰の悪そうに頭を掻いて悩んでいると、いろはの声が飛んできた。

「あの、由比さん。私も先程失礼な事を言ってしまったのは謝ります。でも、話は続けてください」

いろははしかと鶴乃の顔を見据えながら、迷いの無い瞳をでそう訴える。

「……いいの?」

「大丈夫です。だって由比さんと折角知り合ったのに、分からないまま終わってしまうのは嫌ですから」

さすが七海やちよを制しただけのことにはある。器が大きい。

鶴乃の顔にフツと笑みが溢れた。

「ありがとう。じゃあ、話すね」

いろはの心意気に甚く感心すると、気を取り戻して笑顔で話し出した。



## FILE #21 暗晦の中枢で嗤う魁物

深淵の奥底で、一人の幼き少女が眼前の映像を見つめていた。

その双眸は冷然と細められており、睨みつけているような鋭利が感じられた。

『ところで、源道さん……』

『何でしょうか？』

『お孫さんのことなんですが……………』

『ああ、みふゆですか。あの子のことなら特に心配はしていませんよ？』

『……………えっ？』

『あの子は幼い頃から、私が特に目を掛けて育ててきましたからね。どこかで遅しく生きていると信じてます』

『で、でも……………行方不明になられてから1年も音信不通のままというのは……………』

『あの子は12歳の頃に魔法少女になり、同時に、治安維持部に所属しました。誰よりも早く大人の仲間入りを果たし、「戦場」という過酷な職場で心身を鍛え上げられてきたのです。今はもう19歳。まだ成人ではありませんが、もう結婚もできるし、立派な大人の筈です。我々があれこれ口や手を出さんでも、自分の人生を自分で決めている頃でしょう』

「厚顔無恥も甚だしいねー、源道」

映像の中で平然と嘯く老紳士を、幼き少女は辟易とした様子で眺めていた。

呆れ返った表情の口元は笑みを零しているが、対照的に双眸は酷く冷え込んでいる。

どこか彼に対する侮蔑の感情が見え隠れしていた。

「これだから、大人は嫌いなんだよー」

彼女の孫娘——梓　みふゆはこの『深淵』の中に居座っているのだ。

少女はふう、と嘆息。

人は大人になると、純粹さを失う。真つ直ぐ進む事を恐れて安全な回り道を選びたがる。だが、子供みたいな嘘は平気で言う。

(でも、これも彼の戦略の内か……)

少女は再び凍りついた眼差しを源道へと向けた。

卑しいやり方だ——そう思いつつも、彼の手口は深淵の主たる彼女ですら頭が下がるぐらい非常に合理的であつたので、納得するしかなかった。

——梓みふゆはかつて、神浜市治安維持部の副部長を務めていた。

『七海やちよの相棒』といえば、最近では都ひなのを指す声も拳がり始めてきているが、今でも市民の大半は彼女を推す声が多い。

サンシャイングループ代表取締役の孫娘という恵まれた血筋、神浜市随一の名門・水名女学園を主席で卒業する程の明晰なる頭脳。聖女然とした佇まいに相応しい、柔らかなだが奥底に強い意志が感じられる言動。だが何より見た目だ。七海やちよに匹敵する

白雪の美貌は硝子細工の繊細さで、良家の出を如実に語っていた。

当時の治安維持部では、部長の七海やちよと並ぶ象徴的存在として梓みふゆは絶大な人気を博していた。メディアや市民からは『二人の女神』と祀り上げられ、彼女達を中心にして守られる神浜市の治安は絶対的で永久的な物と信じられていた。

だが一年前に、梓みふゆは、突然治安維持部の辞職を申し出る。

そして、行方をくらました。

理由は、同じチームメンバーが二人同時に殉職したことで、自責の念に耐えられなくなったからだ。当時の週刊誌ではそう推測されていたが、実際のところは不明だ。

足取りは未だに掴めていない。

(あくまで、表向きはそうなっているけどね……)

マジウスはフツと笑みを浮かべる。実際はこちら側深に転げ落ちただけなのだが。

ともあれ、梓みふゆが失踪したという事件は、神浜市全体に大きな衝撃を与えることになった。特に世間が注目したのは日秀源道だった。彼が孫娘を溺愛していたというのは公然の事実であり、斯様な一大事にはさしもの巨魁も揺らがざるを得ないだろう、と市民の大半は考えていた。メディアに至っては、彼が市役所に責任問題を追求して市長相手に裁判沙汰を起こす事態を心待ちにしている節も見られた。

だが、事態は世間が思うように行かなかった。

源道は、警察に捜索願を届けただけで、市長と七海やちよの謝罪を受け取った後は何も言わずに、普段通りの会社経営を続けていた。

（最愛のお孫さんの失踪——そんな事態に遭つても一切揺らがなかった彼の姿勢を世間は高く評価した）

本当は、辛いのに。苦しいのに。

やり場の無い怒りを市役所にぶつきたいだろうに……なんて誠実で立派なんだと——メディアは彼の心情を勝手に推測し、その立ち振舞いを高潔と言わんばかりに過剰な報道をしていたが……

——愚かしい。演出だよ、結局は。

と少女は、胸中でそう吐き捨てると、鼻で笑う。

源道は、『孫娘の失踪』を自分の評価の底上げに利用しただけに過ぎない。彼の猿芝居にまんまと踊らされている下々の人間達を見ているのは滑稽極まりなかった。

モニターがフツと消滅した。少女が自分の意志で消したのだ。この深淵にあるものは全てが少女の意のままにある。故に誰であろうと逆らうことはできない。

剌那——背後に気配を感じた。

振り向くと、黒い外套を纏った自分より幾分か年が上の少女らしき人物が一人、佇んでいた。

「プロフェツサー・マギウス」

柔らかそうな唇から冷淡な声が虚無に響く。その敬称で呼ばれた少女は、陽の様な笑みを相貌に浮かべた。

「環輝」。並びに環耀ひかりの身柄を確保致しました」

「ご苦労さま、匿名希望」

「匿名希望」と呼ばれた黒き羽根が報告すると、『マギウス』は悠然と彼女に歩み寄る。

「頑張ってきたお礼に好きなものをあげるよ。何がいいかにやー?」

少し語尾を変えて戯けるが、『匿名希望』の口元は微塵も感情を表さない。

「いえ、いりません」

小さく開かれた口からはキツパリとした声が良く響いた。『マギウス』はきよとんと目を丸くする。

「なんでー?」

「『ご苦労さま』と言われる程、頑張ったつもりはありませんので」



「……………くふっ」

「匿名希望」の冗談なのか真面目なのか判別付かない言動に、『マジウス』は一瞬呆気に取られたが、すぐに含み笑いを零した。

「相変わらず冷たいねー。まあ、それがあなたらしいといえはらしいけ、どー！」

『マジウス』が一步大きく踏み出した。眼前に止まった彼女は「匿名希望」よりも頭一つ分は小さい。爪先をグツと伸ばして背伸びをすると、小さな唇を耳元に寄せてきた。

言葉が、囁かれる。

「臣下は王の褒美を快く受け取るものだよ？」

「……………」

「匿名希望」の瞳が一瞬、鋭く瞬いた。

何の変哲の無い少女の言葉に、ずっしりと胃が沈む様なプレッシャーを感じたからだ。

「それが、組織で生き抜く為のコツだから」

「……………」

「匿名希望」は何も答えない。主の言葉が通じたのかすら、分からない。

ただ、見据えていた。伸ばされた黒い前髪の合間に光るアメジストの瞳が、マジウス

の歪んだ口元をはつきりと捉えていた。

「分かったかにやー?」

「……………っ」

首を引つ込めると同時に、爪先を下ろすと、再び『マギウス』は「匿名希望」と向き合う。

あどけなさとし生意気さが混じった、色白で血色もよく、笑う度に笑窪を刻む熟した果実の様な年相応の丸顔が、どこか貼り付けた仮面の様に感じられた。

「匿名希望」は息を飲みつつも、相変わらずの虚無の表情で応戦した。

感情を波立たせたことを察知されてはならない。

そう思ったのは、感じたからだ。

『マギウス』の魔力反応——その根底に潜む、禍々しき妖気を。昏く冷えた、冴え渡る白刃の、鋭く危うい狂気の気配を。

——飲み込まれるな。喰われるぐらいなら、喰らい返せ。

「匿名希望」の暗い瞳に、刹那、深く冷たい光が閃く。兎を捉えた孤狼の眼差しが呑み込むように『マギウス』を見下ろした。

眼光のみの罅迫り合いが、二人の合間で暫し続けられる。

「……………っ」

先に刃を戻したのは『マギウス』の方だった。瞳を下に落として含み笑いを零す。

「匿名希望」の眼力に気圧された——というよりは、こんなことをしても時間の無駄だと彼女の合理的な知性が察したからだろう。

「じゃあ、どうしても、受け取れないっていうのなら……」

『マギウス』は頭を捻って考える仕草を見せた……かと思うと、即座に何か思いついたらしくパアツと両目を輝かせて喜色満面を匿名希望の視界全体に映し出した。

「わたくしが勝手に与えてあげるね☆」

何を——と問う前に彼女は答えを告げた。

「幹部の地位をあげるっ！」

『マギウス』はとてもウキウキしている様子だが、その単語を聞いた匿名希望の口元が微かに歪んだ。怪訝の感情が見え隠れしていた。

『マギウスの翼』には、複数の幹部たる魔法少女が存在するが、全てが眼前の主、この昏き深淵一帯を治める覇者——『マギウス』によって拔擢されたものだ。

有能か、無能か——

前者に判断された者だけが、組織内において一定の自由を与えられる。具体的には名乗りと顔出し、そして複数の傀儡を率いることが許されるのだ。

「羽根部隊のですか？ それなら既に——」

『羽根部隊』とは、『マギウス』の手足となつて働く事を義務付けられた、実質的な組織の実働部隊の通称だ。外に出られぬ主に代わつて、外部——主に神浜市内——での活動を中心に行っている。

“匿名希望”が思うに、部隊の組織構成は概ね完成されていた。

神浜市治安維持副部長の経験を活かして、今は羽根部隊と最高幹部達の中継役を執り成す。元締／梓 みふゆ。

正体不明の朱き夜叉。羽根部隊・隊長。紅羽根／双樹ルカ。

そして、双樹ルカの右腕であり、伶俐な瞳と確かな実力を持つ必殺仕事人。羽根部隊・副隊長。蒼羽根／天乃鈴音。

天真爛漫で飄々とした様子からは到底信じられない薄暗いものを背負った哀しみの双子。羽根部隊・副隊長。白羽根／天音月夜と天音月咲。

これだけの猛者が揃い踏みなのだから、今更自分が加わつたところで、務められる仕事などない。寧ろ、手持ち無沙汰になるだけではないか。

そう考えていた矢先に、『マギウス』の、キンと響くぐらいの甲高い声が“匿名希望”の耳に飛んできた。

「ううん、違うよー」

「……っ！」

刹那——自分達を囲む様な複数の気配に、  
『匿名希望』は主を咄嗟に庇うと、身構える。

周囲は暗闇に閉ざされているため視覚は役に立たない。故に、魔力で相手を嗅ぎ分ける。

総数は14。これだけの魔法少女に接近されていながら、全く気付けなかった自分の迂闊さを呪う。だが……

「くふっ」

「……?」

自分の背に隠れた状態の『マギウス』が含み笑いを零したことが気になった。同時に、自分達を取り囲む者達から、一切の悪意も敵意も感じられない事にも。

いや、待てよ。彼女達はもしや——

「黒羽根?」

呟いた途端、『マギウス』は「大正解っ!」と無邪気に喜んでパチパチと拍手を送った。

黒羽根——それは、魂を引き抜かれた肉人形。主人の意のままに従う、完全な傀儡共。

『マギウス』に無能と判断された者の堕ち行く先。暴力の様に降り注ぐ運命から逃れたいと、大いなる殻に自らの魂の守護を望んだ弱者達が、辿り着く、唯一の救済への道。

「この羽根達は貴女の言うことしか聞けないの」

「……………」

「わたくしが細工を施した、特別性だよ——」

軽薄な笑みであっさりそう告げる『マギウス』に、“匿名希望”は一瞬目を細めて睨みつけた。

「つまり、私を隊長に据える為の部隊を新設する、と？」

『マギウス』は、説明が省けて助かる、と言わんばかりに、うんうんと首を大きく頷かせた。

「……最近治安維持部の勢いは盛んだからねー。斥候をしてくれる特殊部隊みたいなのが必要になったって訳☆」

そう捲し立てる主の表情はまるで、新しい玩具を目前にした子供だ。

「務めてくれるかな？ 匿名希望」

選択を求めてきたが、恐らく自分の前には一択しか示されていないのだろう。

彼女の言葉の最後。自分の名を言う時だけ声色が豹変していた。深く沈みきった、威厳すら感じさせられる重たい声が、深淵の暗闇を飛び交う様に強く木魂した。

それが、暗にこう告げていた。

——ここまで用意したんだから、断るなよ。

と。

「貴方様が望まれるのであれば、仰せのままに」

「匿名希望」は恭しくお辞儀をして、主の褒美を受け取ることにした。そうせざるを得なかった。

この時マグウスの口元が、ニタリと、邪に歪んだ事には、気づけなかった。

☆

”匿名希望”が14人の傀儡を引き連れて立ち去った後、残された『マギウス』は只一人、直立不動のマネキンの様に、静かに佇んでいた。

「およそ人事には潮時というものがある」

頭に過つた言葉が口を付いて放たれた。

漆黒に覆われた暗晦の中心で、幼子の瞳孔は大きく見開かれる。禍々しく、底知れぬ悪気を孕んだ紅蓮の光を瞬かせた。

「上げ潮に乗れば行き着くは幸運の港、あえて乗り損ねれば人生のその航路、浅瀬と悲惨に身動きもならない」

首を持ち上げる。ドクン、ドクン——と、脈打つ鼓動の様に内側から叩きつける様な音が耳を付く。



視界の先に蠢いてるのは、果てしなく巨大な異物だ。

それが果たしてどのような形をしていて、どんな意味をもつ物であるのかは、『マギウス』にしか知り得ない。

「我々が今浮かぶのは大いなる満潮だ。流れに逆らわず流れを捉えよう、せつかくの積荷を失ってはならぬ」

シエイクスピアによって描かれた悲劇・『ジュリアス・シーザー』の台詞の一部を引用しながら、『マギウス』は相貌に喜色を生み出した。

それは、梓みふゆは愚か——日秀源道にすら見せたことがない、残忍で残酷な所業を積み重ねる愚者の様に、歪んだ微笑みだった。



## FILE #22 正しさを誰が “正解” と決めるのか

二年前  
—

参京商店街——昭和の香りを色濃く残したその地区で、一人の少女の自転車を駆

ける音がけたたましく聞こえてきた。

中華料理店の制服を纏った少女は、前方に見えてきた自分の店よりも少し大きな工場へ向かつて突き進んでいく。やがて、敷地内に入ると、工場の裏側まで自転車を滑り込ませた。

裏口らしき戸が見えた途端、自転車から飛び降りて開口一番、

「織田さ」

ん!!!」

小さいとはいえ、工場一つを震撼させるほどの大音声が放たれた!

それに呼応してか、裏口がガチャツと音を立てて開かれる。現れたのは小山の様な体軀で、若干白髪が混じった短髪の男性だ。

「おう鶴ちゃん!」

『織田鉄工所』の所長、織田一平いっぺいは、待つてましたと言わんばかりに明朗快活な笑顔で浮かべて、少女に挨拶する。

鶴乃もまた笑顔で返すと、自転車の後ろに積んである『万々歳』と行書体で大きく表記された箱を開けて、一つの御膳を取り出す。

「はい、唐揚げ定食一つ」

花が咲いた様なスマイルを向けて差し出す。

「いつもありがとうよ! いや、万々歳に行ければよかつたんだけど、この時間いつ

も忙しくてなあ」

「良いことじゃん」

織田一平自身は、参京区の名うての技術者で有り、鉄工所も家族を含めて全従業員数15名と非常に小規模だが先祖代々受け継がれてきた縁のある建物である。

忙しいと愚痴ることは、それだけ経営が潤っているということだろう。そう確信した鶴乃は笑顔を向ける。

「……それにしても、鶴ちゃんの声はようく響くねえ！」

「えっへっへ」

若干笑顔に苦味を混じえて、そう伝える織田。褒められたと勘違いした鶴乃は照れ笑いを零している。

「……耳がまだジンジンするよ……」

「なんか言った？」

「つ……いえ何も……。それより鶴ちゃん、彼氏はできたのかい？」

笑顔満開のまま、冷え付いた声を向ける鶴乃に寒気を感じた織田は、即座に話題を変えた。

途端、鶴乃は呆れ返った様に口元をへの字に歪めた。

「またその話い〜？ そんなこと言ったら織田さんだっという年なんだからさっさと嫁

さん貰つて跡継ぎ作りなよ」

「鶴ちゃんみたいないい女が商店街（じょうてんがい）にいればね」

まさか、からかうつもりで言ったその一言が地雷になるとは微塵も思わなかった。

「……………」

ニヤリ。

鶴乃の目が鼠を標的に収めた猫の様に瞬き、口元を不敵に弧を描くまでは。

「言うと思った。けどね、知ってるんだよー？」

「……………」

やばい、まずった——！！ 一瞬で、蛇に睨まれた蛙と化した織田は、息を飲んだ。

熊並の体躯の持ち主には思えぬ程、ビクリと肩を震わして後ずさる。

「織田さん、慶治駅前の P e a c h って B A R によく通ってるんだってー？ そのママさんと最近仲良いんでしょー？」

瞬間、隠していたエロ本が母親にバレた少年の様にビクリ仰天。顔が焦りと恥ずかしさで一気に紅潮した。

「な、何で鶴ちゃんがそんな事をつ?!」

「そりゃああんなイイモノを持つてたら、男なんてコロツと寄つてつちやうしね」

そうニタニタ笑いながら、自身の薄い胸元に両手を寄せて、大きな弧を描く鶴乃。その仕草が何を意味していたのか即座に悟つた織田は、茹で上がった顔を両手で覆い隠す。

「ううう……!」

(畜生!! どうせ雉さんから聞いたんだな! あの爺さん、ほんつとに余計な事を……!!)

胸中で雉こと、鶴乃の大叔父(祖父の弟)、由比木次郎に対して恨み節を嘆く織田。

今は、神浜町にある自宅に戻っているが、ほんの一ヶ月前までは、鶴乃の生家である万々歳に居候し、再建に貢献していたのだ。

どう見ても頑固一徹な風貌であり、無愛想かつぶつきらぼうな喋り方から、如何にも人付き合いが苦手そうに見える木次郎だが、意外とそうではない。

彼は、この商店街に居座っている間に、住民のプライベートな情報は粗方把握してしまっていた。その辺りは流石元敏腕刑事というべきか。

——とはいえ、そんな痴情をうら若氣少女に知られてしまったのは、あまりにも恥ずかしい。恥辱の余り体が震えてくる。穴があつたら頭から飛び込みたい。

「……おつ、そうだ」

織田はそこで、ふと何かを思い出したらしい。両手を顔から剥がすと、急に真面目ぶった顔を向けてきた。

「なあ、鶴ちゃん。雉さんから何か変わったことを聞いてないかい？」

「?? ううん、何もー？」

そう尋ねる織田の意図が読み取れず、鶴乃はきよとんと首を傾げた。

「あのなあ……この前、市役所行った時に職員が話してるのを聞きちまったんだが……」  
「ふんふん……」

織田は周囲をキョロキョロと見回し、自分と鶴乃以外に誰もいないことを確認すると、彼女に歩み寄った。

姿勢を屈めて、耳元に口を寄せて、コツソリ伝える。

「……、再開発されるみたいだぞ……」

「え……う？」

鶴乃の思考が、停止した。



☆

『冗談でしょ？ 織田さん』

『俺も冗談だと思いたいけど、耳にハッキリ残っちゃまってんだよ……』

あの後、織田とはそんなやりとりを10回ぐらい繰り返したと思う。他にも何かどうでもいいことを話していたと思うが、あんまり覚えてない。

再開発————たった3文字で構成されたその単語が脳に与えた衝撃は凄まじかった。つい先程の会話の記憶すら曖昧になってしまっている。

『魔法少女保護特区』

そんなものに市が指定されてからというものの、中央区は国の指示によって積極的に開発事業が行われて、現在は東京都の池袋か新宿もかくやという程の大都会へと生まれ変わった。

中央区だけじゃない。他の町の各区も開発事業の手が加えられ、発展を続けているのだ。

いつかは参京区も、その話が来るかもしれない、明日は我が身——区に住む者の頭の片隅にもその不安は常に合ったが、特区として指定されてから8年もの間、行政からは何も話が来なかった。

だから、樂觀していたのだ。

『もしかしたら参京区だけは大丈夫だろう』と——そんな甘さに浸っていたからこそ、余計にショックだったのかもしれない。

そして、3日後——

織田が言った通りの展開がこんなに早く来ようとは夢にも思わなかった。

というのは、家のポストに届いていた一枚の区民便り。それに書かれていた文章が全ての始まりだった。

居間で、封を切つて中身を取り出すと、内容を確認する鶴乃。

そこには「参京駅前北口地区市街地再開発事業」に関する旨が長々と記載されていた。

〈神戸市参京区の再開発事業「参京駅北口地区市街地再開発事業」都市計画決定のお知らせ〉

神戸市参京区における「参京駅北口地区市街地再開発事業」について、2018年5月15日に都市計画決定の告示がされましたのでお知らせ致します。

本事業は神戸市役所を主体として行われるものであり、総責任者は神戸市市長であらせられる――

最初は目で追っていた鶴乃だったが、途中、気になる文章に突き当たった。それを自分の耳でも確認するべく、声に出して読み上げてみる。

「事業協力者は……株式会社 Divine Light of CITYとTOYAMA A不動産株式会社……」

その会社名と、代表取締役の名前を見て、目を細めた。

サンシャイングループの系列企業だ。そして代表者は日秀源道の親族。憎悪の感情が胸の奥底の血流をグラグラと煮詰め始めた。

今、自分は目をキッと鋭くして睨みつけているのかもしれない。

「……本地区は、狭隘きょうあいな道路が多く老朽建物が密集しているエリアです。建物の不燃・耐震化による防災性を向上させ、商業の集積による更なる駅前のにぎわい、区の広域行政

拠点にふさわしいまちづくりを目指し、住民が集える憩いの広場、交通広場による利便性の向上を予定しております……」

詭弁だ。

鶴乃は上記の文を読んだ直後に、胸中で吐き捨てた。サンシャインの連中は行政と結託し、参京商店街に都合の良い拠点を置いて、産業支配を目論んでいるに違いない。

鶴乃は、クツと歯噛みする。同時に、紙を千切れるぐらいの力でギユウツと握りしめると、目線を更に下に向けた。

文章の最後には小さな地図が記載されている。当然だが、自分達の住んでる参京商店街の全体図だ。

そして——東商店街と南商店街に当たる区画が赤く塗りつぶされていることに、ぞつと寒気がした。

「つきましては、当該の地域にお住まいの皆様には……」

目を震わせながら、最後の文章の最後を読み上げる鶴乃。

「住宅を立ち退いて頂くよう、要求させて頂きます………?!」

頭のでっぺんが急激に熱くなった。

この時、「ふざけるな！」と口から怒号が出そうになったのを喉元で抑えられたのは僥倖だった。

出そうものなら、両親に迷惑を掛けてしまうに違いない。

☆

『灯台下暗し』——という諺があるが、まさにその通りだ。

鶴乃は生まれてから今日に至るまで、参京区にずっと住んでいたが、実の所、区の情勢は全く知らなかった。

——いや、今まで、目を背けていた、と言った方が、正しいか。

自分がうんと小さかった頃、この商店街は多くの買い物客で賑わっていた。

夕方になれば、食材の買い出しに来るおばちゃんのチャリで溢れ、夕焼けの空と美味そうな惣菜の香りが、ノスタルジーを感じさせた。夜になれば、飲み屋でサラリーマン

達のどんちゃん騒ぎの声が方々から聞こえてきた。

鶴乃はそんな商店街の雰囲気が好きだった。

その頃の思い出が強く残っていたからこそ、今の商店街からは目を背けていたのかも  
しれない。

最近、日中でもシャツターを閉めたままの店を多く見かける様になった。買い物客  
どころか通行人だって年々少なくなって、それに伴い商店街の熱気が失われていくのを  
肌で感じていた。

—— どうして、参京商店街は活気を失ってしまったのか？

—— 商店街を周って、住んでいる人達に話を聞いてみよう。

即決即断を信条とするだけあって、そう思い至った鶴乃の行動は早かった。

まず最初に向かったのは、万々歳の近所に有り、商品を卸して貰っている精肉店だ。  
入口のガラツと開けて入ると、カウンターの方から、快活そうな少女が笑顔で飛び出  
してきた。

「いらっしやうい！ ってあれ？ 鶴ピー？ どしたの？」

可愛らしい子豚の顔のイラストが表記されたエプロンを纏った茶色いボブカットの  
少女は、この店の看板娘——内海利恵だ。

鶴乃とはそれこそ幼稚園の頃から幼馴染の間柄で、姉妹の様に仲が良い。

だからか、彼女は鶴乃の表情を見ただけで、いつに無い焦りを感じていたことを察した。

「利恵ちゃん、あのさ……」

「もしかして、再開発の件？」

「!? 分かったの!?!」

機先を制されて、鶴乃はびっくりする。

「鶴嬢は顔にすぐ出るからね。一目見りやお見通しだよ」

目を丸くする鶴乃に対して利恵はからかいが成功した子供の様にけらけらと笑っている。

なら話は早い———そう思った鶴乃は早速問いかけてみることにそた。

「ねえ、利恵ちゃん、ちよつといいかな？」

「何？」

「利恵ちゃんから見ても、商店街じやうてんがちってどう映ってる？」

直後———利恵から笑顔が消えた。

神妙そうに口元を結んだ後、眉間に皺を寄せて、顔を俯かせる。

「……………」

「……………どうしたの？」

もしかして聞いてはいけない質問だったか。

黙りこくる利恵を見て、怒らせてしまったかもしれないと、鶴乃は罪悪感を感じる。

「……………あのさ、鶴乃」

数拍沈黙していた利恵の唇が、重たそうに上下する。

「ウチの精肉店もさ、来月いっぱいまで」 “ することになったんだよね……………」

「えっ?」

今、利恵が何て言ったのか分からなかった。

言葉に含まれていた二つの単語——耳にした途端、頭の中が真っ白になった。体の熱が急激に奪われて硬直する。

「……………今、なんて言ったの?」

全身が凍える様な感覚に、戸惑いながらも聞き返す鶴乃だったが、理恵は口をむっと結んだ。眉間に皺を寄せて苛立ちの籠もった低い声を返してくる。

「……………何度も言わせないですよ」

しかし、それで引く鶴乃ではない。彼女の口から、はつきりと耳にするまでは、退くつもりはない。

両肩を激しく揺すって、更に詰め寄る。

「閉店……………閉店」 って言ったよね!」



「……………」

暫く慚然としたまま沈黙していた理恵だが、やがて観念したのか、口を重たそうに開く。

「そっだよー……」

申し訳なさそうに低頭する理恵。

「何、で……？」

「しょうがないんだよー……」

両肩を掴んでいる手が震えていた。鶴乃は顔は泣きそうなくらいにくしやりと歪んでいて、自分に怒っているのか悲しんでいるのか判別できない。いや、或いは両方の感情が入り混じっているのかもしれない。

「みんな経営が苦しいんだよー……。村瀬さんの店だって潰れちゃったの、知ってるでしょ？ 宮田くんの和菓子屋だって、サンシャインに買収されてチェーン店に改装されるっていうしさー……。私の店だって全然客来ないもん……！」

話している内に、抑えていた感情が段々噴き出してきたのか、理恵は捲し立てる様に続けた。

8年前から進んでいる中央区の都市化開発は、確実に古くから存在する参京商店街に大きな打撃を与えてきたのだと。

現に、中央区の街並みは、東京都の新宿か池袋の様な都会へと生まれ変わっており、多くの若者や市外からの移住者で賑わいつつあった。郊外のロードサイドには大きくて便利な商業施設がどんどん開業し、参京商店街の客は殆どそちらに流れてしまったという。

「山本くんもさー……」

「山ちゃんが、どうしたの……？」

山本とは、理恵、村瀬、宮田と同じく、商店街に住む幼馴染だ。彼の蕎麦屋も何かあったのだろうか。

「こんな廃れた所で店継いで一生終わるの嫌だって言ってたんだよね……。都会行って自分のやりたいこと見つけたら……」

目眩が急激に襲ってきた。

あの後、鶴乃は、理恵と他愛の無い事を二、三言話して、店を後にしたのだった。

——唾液が、苦い。

胸が焼ける様な苦しみを覚えながらも、他の店を転々と周り、店主に話を聞いてみた。その結果、いろいろ分かってきた。

若者の商店街離れが深刻化しているのだ。

現在、商店街の店主は大半が高齢者であり、店を継ぐべきだった子供達は、中央区か市外へと移ってしまったという。

原因としては、参京商店街が時代を省みなかった、ということだろう。

家に帰り、ネットで調べて分かったことだが、現在、世界は地価グローバル社会なのだという。

地価とは知識や知恵とか経験、あるいは、デザイン、ノウハウ、コンテンツ、ブランドといったインタンジブル（形のなないもの）、あるいは、個人の創造性（エッセイ）から生まれるものが値打ちをもつことをいう。

グローバルとは、世界的、包括的という意味だ。特にデジタルによる仕組みが世の中

を大きく変え、また、世界の門戸を開いてしまった。インターネットにSNS……今や人々はいつでも好きなときに世界と繋がる事ができるのである。

参京商店街にはこのような時代感覚が無かった。自分達が運営する商店街を絶対視するあまり、閉鎖的な空間を作り出してしまった。時代に取り残されてしまった。

かくいう自分も同じだった。目はいつも商店街。それどころか、万々歳が全て。さらに、活動は点的で視野狭窄。

このガラパゴス状況を見透かした若者達は早々に、商店街を去ってしまったのだ。

だからこそ――

鶴乃はパソコンに自分の調査を纏めながら、マウスを握る手に力を込めた。

商店街の老人達の内には、もしかしたら、再開発に期待を掛ける者もいるかもしれないということだ。

例え、追い出されたとしても、参京区が中央区の様な都会として生まれ変われば、もう一度あの頃の繁栄を見れるかもしれない。

それは分かる。でも、だからって――!!

自分達が古くから築き上げてきた歴史を、惜しむことなく捨てられるのだろうか。どうにも行き場の無い怒りや悔しさが、胸の内を痛いぐらいに暴れまわっていた。

なさねばならぬと決断して

君が何かをする時

たとえ多くの人々が

それについて違った事を考えようとも

それをするのを見られまいと避けてはならない。

もし君のすることが正しく無いならば

その行為そのものを避けた方がいい

だかもし正しければ

正しくないと思難する人々をなんで恐れるか

由比鶴乃、16歳。

彼女はまだ、どこにでもいる普通の少女に過ぎなかった。

どこまでもまっすぐで、純粹で、無垢で、無邪気で、幼稚だった。

正しいと信じた事のみを貫き、周りからも正しいと思われるてきた。

しかし、彼女はまだ知らなかったのだ。

自分の正しさが、やがて人生を大きく歪めてしまうことに――



FILE #23 正しさが必ず届くとは限らなくて

一ヶ月は短い。

理恵に聞いた所では、閉店したら、彼女の両親は中央区で新しい職を見つけてから、さらに引越す予定だそうだ。

その間、鶴乃ができることといええば、彼女の精肉店に足繫く通って、残り少ない理恵との時間を楽しむぐらいであった。

行く度に、理恵は、お礼とばかりにラードで揚げた牛肉コロッケか、カツサンドを無料



でくれた。

夕食で味わう度に、鶴乃は思う。

理恵の店で作られたコロツケとカツサンドは、最高だ。

例えば、テレビで紹介されている名店で同じものを食べたとしても、自分の舌は上書きされることは無いだろう。

「ねえ、理恵ちゃん」

だからこそ、鶴乃はやっておかなければならない事があつた。

ある日曜の午後、万々歳の休憩中に、理恵の店に飛び込んだ鶴乃は、意を決した表情であることを切り出す。

「なあに？ 鶴<sup>ピー</sup>」

「コロツケとカツサンドの作り方、わたしに教えてもらえないかな？」

鶴乃は思っていた。それらの味をいつまでも残しておきたいと。

彼女の店が無くなってしまふのなら、万々歳で提供できるようにしたいと。

かつて、祖父の鶏太郎は小さかった自分にこんなことを話していた。万々歳の祖・由比雀七曰く、店のメニューに記されている料理は人の思いで作られたものだ。

戦争時代にまで話は遡るが、当時、雀七は日本軍人の一人として中国に赴いていた。

1937年——日本軍は、日中戦争開始より中国中心部への進軍を急速にすすめ、1938年6月までに中国北部全域を制圧するに至り、交通の動脈である平漢線と隴海線の両鉄道路線の合流点である鄭州市を攻略できる状況となった。

だが、その頃——鄭州市の攻略に成功されると、国民党政府にとつて主要都市の危機に直結することを危惧した中国軍は、日本軍の進撃をはばもうと、黄河の堤防を爆破する。

このとき、大雨が降ったこともあつて11の都市と、4000の村が水没し、水死者100万人、その他の被害者600万人という大惨事となった。

有名な『黄河決壊事件』である。

この時、日本軍兵士は一人も犠牲にならなかった。

人為的水害の結果、黄河の水路が変わり、周辺に大飢饉が広がった。そして、被災地で食糧不足に悩んだ中国軍部隊は、民衆から食糧の強奪を始めたため、飢饉はさらに深刻化した。

そんな状況に立ち向かったのが、日本軍であった。

堤防決壊の直後、日本軍は堤防の修復作業を行なっただけでなく、被災した民衆を筏船百数十艘を出して救助し、防疫作業を行なった。

1938年には、農業復興の計画を発表し、日本人技術者が中国農民に、技術を提供

していった事で、占領地域での農業は飛躍的に増大した。

敵対国の民衆を、必死になって救済したのである。

この活動に奇しくも雀七は参加していた。

行く先々の被災地で、料理店を経営していたという人達と出会った。

彼らは皆、地元で働く人々に安らぎの場を提供したいと願い、店を開いた者ばかりであつた。

自国軍の人為的水害によつて、店を失い、夢も希望も絶たれてしまった——と、現地の料理人達の悲痛な叫びと絶望を目の当たりにした雀七は、彼ら一人ひとりの下に足繁く通い、中華料理の技術と知識を教わつた。

そして、彼らの無念を晴らすべく——何より、彼らの料理と地元民に対する熱意を日本人にも伝えたいと——日本に帰つてから、中華飯店を始めた。

それが万々歳のルーツである。

鶴乃にはそんな曾祖父の偉大さがずっと頭に残っていた。

最も、調理レシピは現在、サンシャイングループの手の内にあるが、曾祖父の遺志だけは奪わせたりはしない。

彼がそうしてきたのなら、自分もまた同じやり方をするまで。

それが、他者の救済に繋がると信じているからこそその、提案であった。

「……………だめだよ、鶴ぴー」

しかし——理恵から返ってきた言葉は、まさかの拒絶だった。

「……………え？」

喜ぶとばかり思っていた鶴乃の頭蓋に、鈍器で強く殴られた様な衝撃が走った。

思わず、目が震えた。

曾祖父と同じ行いが、自分の提案の何がいけなかったというのか!?

「で、でもっ!!」

気が付いた時、鶴乃は理恵の肩を強く掴み掛かっていた。

痛みに彼女が顔を歪めたのにも構わず、鶴乃は咆哮する。

「この店が、作り上げてきた歴史ものなんだよ!! 参京こに残しておかなくていいのっ!!」

「だから、なんだよ……………」

眉間に皺を寄せた鬼の様な形相で、今にも涙が溢れそうな眼差しを向けて必死に訴えてくる鶴乃に、ちゃんと応えられる様な気力は今の理恵には、もう無かった。

彼女の首が力なく垂れ下がる。ポツリと呟いた言葉は今にも、空気に混じって消え去

りそうだ。

「万々歳がある鶴ピーに、これ以上背負わせられないよ……」

咄嗟に鶴乃は首を振った。強引に口の端を吊り上げて、無理やりな笑顔を見せると、威勢よく答えた。

「わたしは気にしないよ！」

「私が気にするんだよ……」

「っ!!」

だが、理恵の拒絶は変わらなかつた。彼女は首を小さく振って、耳を研ぎ澄ませねば聞こえない程の音量で答える。

鶴乃は口をクツと結んだ。

これ以上自分が何を一生懸命言つたところで、もう彼女には届かない。

「もういいよ……」

「……………」

鶴乃の顔にはまだ激情が残っていた。

このまま終わらせる訳にはいかないと、まだできる事がある筈だと、彼女の爛々と瞬く赤い瞳は痛烈に告げていた。

——どこまでも、鶴乃は優しく、正しい。

だからこそ、彼女に残してしまうのは、申し訳無い。

彼女はここで、いつまでも前を向いて生きていつて欲しいから。もう過去のものなる自分の店に、構ってほしく無い。

「もういいんだよ、鶴ピー」

だから、なるべく笑顔を見せて、彼女がこれ以上心配しないように、声色にできる限り普段どおりの愛情を込めて、告げた。

それが、最後の会話となった。

☆

一か月は長い。

だが、鶴乃は何もしなかった。

『自分には何もできることがない』という現実を痛烈に思い知ってから、何もかもが億劫だ。

朝、起きたら店内を掃除し、家族の朝ごはんを作り、学校へ行き、帰ったら閉店まで店を手伝い、パソコンの家計簿に一日の売り上げと食費を入力してから、眠りに付く。

そんな、まるで工場のロボットの様に、流れが一から十まで決まった一日を繰り返しながら、残された時間を無駄に費やしていた。

結局、曾祖父の様に、誰かを救う力は自分には無かった。

あれよあれよという間に、説明会の日を迎えてしまった。

朝食後、食器を洗っている鶴乃の耳に、たまたま居間のテレビの音声が届いてきた。

『この前、仕事が終わって帰ってる途中にいきなり意識無くしちゃって……気が付いたらビルの屋上にいたんですよ。……あゝ、ありやマジやばかったですね。【魔女の口づけ】ってのにやられてたんだと思います。もうちよつと歩いてたら、落っこちてました。

だからねえ、命を助けてくれた魔法少女には本当に感謝しか無いんですよ……』

『最近テレビの偏向報道、酷くないですか？ 迷宮入りした事件は、なんでもかんでも魔法少女に結び付けようとしててさあ。俺この前、魔法少女が人助けてるところ見たんですよ？ 彼女達一人ひとりが犯罪を起こす様なタマだったら、とつくに日本社会は崩壊してますって。警察は自分達の無能と怠慢を曝け出していることにいい加減気づくべきじゃないですかね？』

『東京の方じゃあ、民間の企業が魔法少女の夜間警備隊を作って、夜中に街をパトロールさせてるっていうじゃないですか。だから政府にはさっさと神浜市の【治安維持部】みたいな警察組織を日本全国に創って欲しいんですよ。いつまでも検討中じゃなくってさ』

魔法少女を絶賛する、人々の声が。

いつもは、聞き流している筈のそれらが、今日は妙に耳朶を強く叩いている。

——せめて、七海やちよか、梓みふゆの様な『魔法少女』であつたなら、理恵ももう少しは自分を頼ってくれたのだろうか。



「ちよつと鶴ちゃん！」

「!?」

そんなとりどめの無い事をボンヤリと考えていると、誰かの呼び声が強烈に耳を貫いた。鶴乃はハッと目を見開く。

「おばあちゃん、どうしたの?」

声の方向を咄嗟に振り向くと、恰幅の良い貴婦人の様な老婆がしかめっ面で睨んでいた。

「どうしたの、じゃないわよ〜! おばあちゃんが何回呼んだつて上の空で〜!」

そうだったのか。テレビの声を聞き取ることに全神経を集中していたらしい。鶴乃は誤魔化すべく明るく笑って頭を掻いた。

「いやーあははー。ごめんねー。ちよつと考え事してて……」

だが、強引に笑みを作ったせいで、口元が僅かに引き攣ってしまった。

それを、苦味と読み取ったのか、老婆は「まつ!」と口元に手を当てて驚く仕草を見せる。

「それは大変ねっ! 何か悩んでることがあるんだつたら、おばあちゃんに何でもいなさいよ、ねっ!?!」

「う、うん……」

店を祿に手伝わぬ人間に、相談できることがあるんだらうか——

鶴乃の頭の奥底で小さな苛立ちの火が灯されたが、目先の老婆がそんな自分の深層に気づいてくれることは永遠に無いのだらう。

「おばあちゃん、どっか行くの？」

鶴乃は、老婆の首から下を流す様に見た。先ほど老婆を『貴婦人』と例えたのは、その通りの恰好をしているからだ。分厚いが優美なミンクファーコート、被っている帽子も、一見何の変哲も無い赤いハットにしか見えないが、エクアドルという国で作られた『パナマハット』というもので、最高級品らしい。

これらは、恐らく家に上がり込んでくる前に、購入したものだらうか。

日秀源道から莫大な資金を提供された万々歳だが、由比家は質素儉約な生活を続けていた。

それは祖父の鶏太郎が、『経営者たる者、常に謙虚たるべし』と口うるさく教えてくれたからだ。鶴乃は思っている。お金にどれだけ余裕があろうとも、周りの地元民や、常連客と歩幅を合わせられなければ、愛される店は作れない。

だからこそ、目先の老婆の恰好は、鶴乃にとっては、不可解極まるものでしかなかった。

「だって今日は日曜じゃなくいつ！ 友達と中央商店街まで遊びに行ってくるのよ」

！」

思わず「はっ!？」と出そうになった口を無理やりギュツと結んだ。

この老婆の言つてることが理解できなかった。正に常識の範囲外だ。

今日は、再開発事業の説明会。参京区に住む人間なら、何より重要な日と捉えておかしくない筈なのに。

「……………今日は、説明会の日、なんだけど」

内心で燃え上がった苛立ちが、鶴乃の口から言葉を噴出させた。

だが、老婆はおかしそうに、アツハツハと、哄笑を煩わしいまでに響かせるだけだ。

「だって私経営者じゃないしねえ〜！　そもそも対象は東と南だから北のウチは関係無いじゃないのお〜！　おばあちゃん、鶴ちゃんがそこまで気にする必要無いと思うけどお〜！」

だらりと垂れさがった鶴乃の両手が拳を形作り、老婆には気づかれないぐらいに小さく震えた。

恐らく、目の前の彼女が曲がりなりに家族でなかったら、胸倉を掴み上げて問い質したいところだ。

『貴女に地元を愛する気持ちはあるのか』と――

……………いや、やめとこう。

元々地元民ですらない彼女にそんな気持ちは微塵も無い。言及したところで、首を傾げられるだけなのは目に見えている。

老婆の名は、津和吹美江よしえという。

万々歳に住んでいることから、亡き祖父・鶏太郎の妻——父・隼太郎の母親——と勘違いされがちだが、実際は、母・紀子のりこの実母で、元々万々歳とは何の関係も無い人間だった。

元々彼女の出身は神浜町参京区ではなく、慶治町水名区である。

万々歳が再建されて、木次郎が店を去ると、入れ替わる様に、転がり込んで居候を始めたのだ。

(どうも、独り暮らしをしてたが、心配になった母が呼び寄せたらしい)

とはいえ、木次郎の様に店を積極的に手伝ってくれたりはしなかった。日々、居間でのんきにお茶を飲んだり、近所の老婆達と井戸端会議を楽しんでいるだけで、由比家では、「とりあえず居る」だけの置物の様な存在だ。

鶴乃としては、家族の一員である以上、店の事を手伝って欲しい気持ちは多分にあつたが……如何せん高齢に鞭打つのは気が引けるし、誰かに迷惑を掛けている訳でもないから、放置することにした。

しかし——最近、外出する事が多い。

朝から何も言わずに、豪華な恰好をして、ふらりとどこかへ出かけたかと思うと、夕方には必ず帰ってくる。ただし、その代わり、デパートの買い物袋を必ず手に提げて。

中身が何なのか、本人は何も言わない。コッソリ確認しようとも思ったが、家族の秘密を暴く様な気がして、何だか、気が引けた。

鶴乃は、家計簿をマメにつけているが、由比家の生活費から抜き取られているものはなかった。また、父にも確認したところ、銀行の口座からは一円も引かれていなかったらしい。

まさか——サラ金？

せっせと玄関で靴を履いている祖母の後ろ姿を見て、そんな良からぬ事が頭を過つた。

以前、母親の紀子に聞いた所では、祖母の美江は、水名区にある由緒ある家系の令嬢として生まれた過去を持ち、あの水名女学園の卒業生でもあった。若かりし頃は、周囲のライバルである令嬢達よりも上に立つべく、衣装や所有物に私財を投げ込んで最高級の物を身に纏い、精一杯見栄を張っていたらしい。

そんな過去を送った祖母が、万々歳での質素な暮らしに耐えられるかは、疑問だった。欲望というのは厄介で、自分では完全に封じたと思っても、いつ何が原因で、再び頭

をもたげてくるかわからないからだ。

しかし、だ。

今の鶴乃に、祖母を問い質すだけの余裕は無かった。

とにかく、再開発事業の事で参京区は混乱の渦中なのだ。神経は成るべく、そちらの方で費やしたい。

この時の甘さが、後に自分の精神を重く苦しめることになろうとは、思ってもみなかった。



F I L E # 2 4 その陽光は希望の朝日か 或いは  
総てを焼き払う灼熱か

『え？ お父さん、行かないの？』

『ごめんなあ、鶴乃お。本当は俺も行きたかったんだけど……紀子とお義母さんがうるさくつてなあ〜』

『で、でも……商店街にとっては、大事なことなんだよ……？』

『う〜〜む……』

『お父さんだつて、子供の頃からお世話になったお店が潰されたら、嫌じゃないの……？』



『まあ、嫌じゃないと言ったら嘘になる。でもなあ鶴乃』  
『ん?』

『お義母さんが言つてたことも一理あると思うんだよ。事業の主体は、行政とサンシャイングループだ。俺達小さな商店街の人間が立ち上がったところで何も太刀打ちはできないだろう』

『……はっ?』

『亡くなった親父だつてよく言つてたじゃないか。身の丈に合わないことをするなつて』

『……………』

『なあ鶴乃、最近のお前、凄く忙しそうにしてるじゃないか。大方再開発の件だろうが……そんなに無理しなくてもいいんじゃないか。どの道俺らができることつてあんまり無いと思うぞ』

『……………』

『ひぼり雲雀も手紙で伝えてただろう。お前はお前だけの幸せを考えた方がいい。だから、その件は諦めて——』

『っ!!』

——  
お父さんなんか知らない!!

☆

そして、時間はやってきた。

鶴乃は、商店街の南口を抜けて2分ほど真つ直ぐ歩いた先にある「参京区地域センター」へと足を運んでいた。

正門を潜り抜けた途端、ぎよつとする。

説明会の開始時刻は10時——まだ20分もあるが、既に入り口前の中庭は区内

の住民達で賑わっていた。

最早すし詰め状態であり、今にも正門から溢れかえってきそうだ。

会場前の係員も、とても慌ただしそうな様子で、住民一人ひとりを会場へと案内していく。

その光景を眺めながら鶴乃は、地元の事を真剣に考えている人がこれだけいるのだと知り、内心ほっとした。

家に居るとどうも駄目だ。

真面目に考えているのは自分だけだと考え込んでしまう。

学校の体育館の様に広大な会場には既に、商店街の大御所達と経営者達が勢ぞろいしていた。

中には幼馴染の理恵、村瀬、宮田、山本の父親の姿もある。残念ながら本人達はいない。

鶴乃はそんな白髪の老人達の中に、紛れ込んだ唯一の若者となった。

——瞬間、天井の照明が全て消え失せ、視界が暗転。

直後、参京区の人々の視線の先、壇上にスポットライトが浴びせられて白く照らされ

る。

左端から一人の女性が優雅を極めた歩き方で、壇上まで昇っていった。

緩く巻いた雪白の髪が光を反射して銀色の輝きを放ち、同じ色の瞳は、月の様に瞬いている美しい風貌の女性だった。

「始めまして、参京区の皆様」

丸みを帯びた顔つきは、まるで儂い少女の様に可憐で——しかし対極的に、ハキハキとした、力強さすら感じられる口調が、広大なホールによく反響した。

「本日は、参京駅北口地区市街地再開発プロジェクトの住民説明会にお越し頂きまして、誠に、ありがとうございます！」

嘘偽りなど一端も無い、まっすぐで真摯なライトグリーンの瞳を爛々と輝かせながら、女性は輝かしいまでの笑みでそう言い放つと、90度に背を倒して、綺麗なお辞儀を魅せる。

純粋な瞳だった——と鶴乃は遠くから、彼女を見つめてそう思った。

恐らく、商店街にこんな目の持ち主は居ない。

この人は、生まれてから一度も人を疑った事も恨んだ事も無かったのだろう。自分達がかやろうとしていることは、正しい行いであり、それは皆が受け入れてくれる筈だと。

「私、開発事業主である株式会社『Divine Light of CITY』の代表

を務めさせて頂いております、梓 つむぎと申します！」

女性の澀刺な名乗りに慥然と聞いていた鶴乃の片眉が動く。

(梓つむぎ……)

嫌でもその名前には反応せざるを得なかった。

——梓つむぎは、神浜市が誇る独立警察部隊、治安維持部の副部長、梓みふゆの実母だ。

サンシャイングループ代表・日秀源道の5人居る子供の内の三番目に当たる彼女は、大学卒業後に、サンシャイングループが運営するホテル会社に入社し、営業部の第一線で働いていた。

だが、その3年後に、神浜市で古くから存在している大手の大企業、TOYAMA不動産の若社長・梓 康弘の下へ嫁に出された。

結婚し、みふゆが生まれたのと同時期に、康弘は自社グループをサンシャイングループの傘下に加えることを表明した。

この経緯から、当時の週刊誌では、サンシャイングループがTOYAMA不動産を関東支配の橋頭堡とする為の政略結婚では無いか、と批判する声も挙がっていたが、梓夫

妻は誤解だと否定し、運営するブログ等で、家族の仲睦まじい生活の様子を公開。批難の声は徐々に下火になった。

やがて娘であるみふゆが成長し、治安維持部に入隊すると、マスコミは再び疑いの目を向けた。

広大な土地が有るとはいえ、東京の大都市圏と比べたらまだまだ田舎に過ぎない神戸市の政治力では、日本全国に支部を持つサンシャイングループの権威に到底敵う筈が無い。

TOYAMA不動産の時と同じ様に親族を使って誑かし、行政を手中に収め、神戸市一帯の商業を支配下に治めるつもりだろう、と批判された。

無論こちらにも、梓みふゆ自身が、「入隊は自分の意思であって、家族は関係ない」と強く主張したことで下火になったが——鶴乃は今でも、大企業と行政の癒着を疑っている。

「まずは皆様、こちらをご覧ください」

思考に耽っていると、つむぎの澆刺とした声が耳の奥までに煩わしいぐらいに届いてきた。

ハッと顔を上げると、視線の先には、彼女の声に呼応するかの様に、上部から大型の

スクリーンがゆっくりと姿を現して、映像を映し出した。

表示されたものに、参京区民は目をじっと細めて凝視する。鶴乃に至っては射る様な視線だ。

東と南の商店街を真つ平らにした後に、建てるのであろう巨大な二つの建造物――

「こちらは、最高級リゾートホテル、サンライズ参京の建設と、その周りに複合商業施設・サンライズスクエアモールの建設を予定しております」

――リゾート？

具体的な施設の概要、工事の開始日と完成までに掛かる年月等の説明を懇切丁寧に続けるつむぎだったが、それらの事は鶴乃の頭に入らなかつた。

リゾート………ということは、ここは観光地になるといふことだろうが、不思議だ。

参京区には、自分達の商店街以外、目立った施設や名所と呼ばれるような場所や施設は無い。

「さて、ここで、少し質疑応答に入りたいと思いますが……何かご質問は？」

鶴乃が頭を捻っている内に、気がつけば15分が経っていた。つむぎのその言葉に迷わず挙手する。

「すみません！」

最後尾に居た鶴乃だったが、その張り上げた声は、壇上をつむぎの耳によく届いた。つむぎは笑顔で頷くと、手を差し伸べる。

「どうぞ」

「あの、最初に『最高級リゾートホテル』を建てるって仰ってましたよね？ でも、ここって観光地になるような場所って何もないんですけど」

鶴乃が質問を率直に投げかけると、つむぎはニツコリと、無垢な少女の様な屈託無い笑みを浮かべた。

「素晴らしい着眼点ですね！」

つむぎは感心した様に、小さく拍手を送る。

「……はっ？」

鶴乃は思わず目を見開いて呆気に取られた。つむぎの意図が見えてこない。

彼女は咲いた花の様に可憐な微笑みを携えながら、鶴乃に答え始める。

「実は、この後にご説明する予定だったので……」

バックのスクリーンに映されていた映像が、建設予定の高級リゾートホテルと、ショッピングモールから変わる。

新たに画面全体に、表示されたのは遊園地の様な施設だ。

「13年前まで参京区の北部には、かつて関東電工メカティクスの大工場がありました」



その工場のことなら鶴乃も商店街の長老達から聞いたことがある。

現在は、本社の業績不振が原因で、工場そのものが撤退してしまい、更地となっている場所だ。

「35万㎡にも及ぶ広大な土地をいつまでも、平地のままにしておくのは勿体無い……。そう思いまして、当社はその土地を購入。新たに屋外型リゾート付きテーマパーク『キレーションランド』の建設地として再利用することを決定致しました」  
なるほど合点はいった。いったが一切の納得はできない話であった。

要は、商店街どころか参京区そのものを、サンシャイングループは全て作り直すつもりなのだ。

市長が最高責任者という話から、行政も既に納得済みなのだろう。

（お爺ちゃん達が作り上げてきた文化と歴史は、どうでもいいって訳……？）

施設の説明をするつむぎは、本当に生き生きとしていて、一切の悪意を孕んでいる様子は無い。

恐らく彼女は知らないのだ。

自分達の行いが如何に、悪辣で無慈悲なものであるのか、自覚が無いのだ。

その無神経さが鶴乃の下腹部をゆっくりと搔き回す。

「……ありがとうございます」

胃がもたれる様な感覚に、鶴乃は若干表情を苦くしながらも、つむぎにお辞儀をしてから座り込んだ。

もし、ここに商店街のみんなが集まっていなかったら、多分、つむぎに怒号を叩きつけていたことだろう。

いや、寧ろ、殴りかかろうとすらしていたんじゃないか。

「よろしいでしょうか!?!」

鶴乃が座った途端、右隣の恰幅の良い老人が声を張り上げて挙手する。

再開発対象の東方面で「なかやま陶器店」を営む中山三郎だ。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

つむぎが手を差し伸べると、中山は立ち上がる。

鶴乃は中山の事を良く知ってるが、顔つきが普段のお人好しとは別人になっていることに気づいた。

まるで気迫めいた熱気すら感じられる。

「貴社が進めている再開発計画ですが、私の店は立ち退きを要求されて――」

☆

中山が発言したのを皮切りに、参京商店街の経営者は次々と質問をぶつけた。

まず、住居を立ち退いたとしても、新しい住居はどうするのか、という疑問だ。

当然ながら、住民の大半はこの商店街で生まれ育った者だ。できれば地元も家も離れたくない。それに、新しい住居に移るとしても引っ越しの費用は誰が工面するのか？

これについてつむぎは以下の様に答えた。

——再開発法 第九十七条に於いて。

再開発事業施工者は、物件の権利者が、住居及び土地を引き渡すor移転する場合、損失を補償する義務がある。

つまり、物件の権利者が施工者の指示によって、地区外に転出する場合、補償金を支払わなくてはならない。

なお、補償が発生するのは以下の通りだ。

1・移転先で、前の住居と同種同程度の建物を建築する費用の補償。

2・塀や樹木などの工作物などを移転する費用の補償。

3・家財道具、店頭商品などの動産を移転するために必要な補償

4・店舗や工場など、商売をしている場合の営業補償。

5・立ち退きによって、休業を必要とする店舗の、休業期間中の収益の減少分。

↓通常休業期間中でも支出を要すると認められる、固定的な経費。

↓通常休業期間中に従業員に対して支払う休業手当の相当額。

↓営業再開後、一時的に得意先が減ると認められる場合に、生ずる損

失額。

6・立ち退きに際して、必要となる移転雑費経費。

『立ち退き』というトネガティブなイメージがありますが、実際のところ、皆様は得をする可能性が高いのです」

つむぎは嘘偽りが一切混じって無さそうな屈託無い笑みで言い放つ。

確かに、話を聞いた限りでは、再開発によって立ち退きを要求された住民への補償は、かなり手厚い。

だが、東商店街と南商店街の店舗数は合計45件。これだけの店舗を全て『補償』す

るとなると莫大な支出になりそうなのに、狼狽えるそぶりも無いということは、サンシャイングループにとつては造作も無いことだからか。

鶴乃の思考をよそに、つむぎは更に言葉が続ける。

彼女の経験上では、立ち退いた大半の住民は得をしている、という。

それは、前述した諸々の補償の他に、『迷惑料』が高額で支払われるからだ。

参京商店街の経営者の殆どが後期高齢者なのは最早言うまでも無いが、彼らが築き、30、40年住んできた住居には相当な思い入れがある。

再開発とは、そんな彼らの思い出を、真上から踏み躪る行為だ。

故に事業施工者は、『迷惑料』も支払わなければならない。それが存外に“おいしい”という話だ。

「10年前に土地代込み4000万円だった家が再開発の対象地域となり、5000万円ですぐ売れたケースもありました」

その一言に、会場がざわめきだした。

だが、鶴乃は至極冷静に、つむぎだけを見つめている。

——— 要は、参京商店街の住民にとつて再開発計画は“とんだ儲け話”なんですよ、と彼女は言いたいのだろう。

鶴乃は足元を見られた、と悟った。

そう伝える事で、反対派の住民も再開発計画に、賛同させようという腹つもりか。

次に、新居の件についてつむぎは語った。

今後TOYAMA不動産の事業協力者が、住民一人ひとりと面談して、現在の住宅と同種同程度のものを中央区に新築する、という。

「少しづつ質問よろしいでしょうか！」

つむぎを言葉を切るのを見計らったのか、鶴乃の二つ右隣の席で裂帛の声が張り上がった。

目を向けると、「斎藤寝具店」店主・斎藤 司が立ち上がっていた。

他の経営者達と比べると、年齢は42の若手だ。

西側の人間であり彼の店は関係無い筈だが、馴染み深い他の店が再開発の影響を受ける事に我慢ならない様子だった。

「ぶっぶっ」

つむぎが手を差し伸べて促すと、司は「ありがとうございます！」と会釈する。

普段の明朗さは微塵も感じられない。疑念が強く張り付いた伶俐な眼差しでつむぎ

を射抜く様に見つめた。

「借地借家法では『正当な理由が無ければ住民を立ち退かせることはできない』と定められています！ 貴女がたった今申し上げた話は確かに合理的ではありますが、それだけで商店街の皆の気持ちを動かせるとは思わない方がいい！ 此処に居る方々は、寝具店を経営していた私の父を含め、古きに渡つて区の商業の発展に貢献した人達ばかりです！ 皆、ここで自分の店と人生を共にし、骨をこの土地に埋める覚悟でいらつしやいます！ その方々を納得させるだけの術が、元々は神浜市外の間人である外様の貴女に有ると思えません！ もし有るのでしたら、今、この場でのご説明をお願い申し上げます！」

騒然となつていた会場が、一瞬でしんと静まり返つた。

つむぎの甘言に惑わされた者、惑わされなかつた者が一斉に司に視線を集中させる。

「提案は、有ります」

だが、つむぎは笑みを崩さずに、はつきりとそう答えた。

「ならば、お答え下さいっ!!」

話す内に段々気合が入っているのか、司の声は怒号に等しいものとなつていた。

会場を震撼させる程の音声を真面に受けても、つむぎは揺るぎもしない。

「実はこの後、説明させていただく予定だったので……」

そう言うのとバックの巨大スクリーンの映像が切り替わった。

建設予定のショッピングモールの全体図が映し出される。その一画———図の中で一番広大な部分を拡大した。

「サンライズスクエアモールの一画を、新たな参京東・南合同商店街と致します」

その一言に、会場は再びざわめきだした。

店が潰されると思っていた経営者達の顔が喜色に浮かぶ。

店が存続できるのだ。しかも、新造のショッピングモールという人が呼べる環境を新たに得て。

「なっ……」

「希望される経営者がいらつしやいましたら、我が社の方で出店の準備に必要な費用、資材を全て工面致します」

とんでもない提案に絶句する司に、つむぎは自信に満ちた笑みで答える。

すかさず、鶴乃は挙手した。

「待ってください！」

「どっぞぞ」



鶴乃は勢いよく立ち上がる。つむぎは平常通りの笑顔で促した。

「その、そんな事が……本当に、できるんですか？」

現実的では無い案だ。立ち退きする住民の新居に関してもそうだが、費用が掛かり過ぎる。

だが、つむぎは即答した。

「できます」

「っ!？」

一切の迷いの無い発言に、鶴乃は狼狽する。

「サンシャイングループなら、可能です」

その一言が、全てを物語っていた。

屈辱だったが、父に怒鳴った自分を恥じた。彼の——もつと言えば、祖母の——言う通りだった。

最初からこの戦いに勝ち目など、無かった。



## FILE #25 戦うべき相手は、此処には居らず

説明会を終えた後、鶴乃は他の参京区民たちと帰路に付いていた。

心なしか全員の足取りは、トボトボと重たく見える。

いつもは区民同士、親しげに交わされる会話が、今は全く無い。

皆、心ここにあらずと言った様子だった。

「……………あの梓つて人は、大した人だったねえ」

呆然とした顔を俯かせたまま、歩いている鶴乃の耳に、突然老婆の声が刺さった。

東方面の定食屋「いなほ」経営者・川野ケイ子である。

ハッと鶴乃が顔を上げると、目先の道路の両脇沿いに、古ぼけた店舗がくつつく様にして並んでいるのが見えた。商店街の入り口を見て、我に帰ったのだろうか。

「……………そうだね」

少し間を開けた後、鶴乃はコクリと同意した。

確かに、梓 つむぎは大した人だった。認めたく無い事実を、否応なしに受け入れざるを得なかった。

『サンシャイングループなら、可能です』——

あの一言の後、誰一人として、反論する者はいなかった。100人以上居るかに見えた区民はまるで一人も居なくなってしまうたかのようにシン、と静まり返った。つむぎだけが、平常通りの顔つきで順調に話を進めていた。

——何度も言うが再開発は、その土地の歴史と文化を踏み躪る行為だ。

自分を含めた100人以上の住民から怒りと不安の視線を向けられれば、普通なら萎縮するだろう。

しかし、彼女は毅然とした姿勢を一切崩すことなかった。

罵詈雑言を浴びる事も、物を投げられる事も、暴動を起こすこともなく、彼らの反感を全て抑えて、話を終えた。

調べたところ、つむぎが温室育ちの令嬢であったのには違いなかった。

世間知らずに、下々の気持ちなど分かるものかと鷹を括っていたが、予想外の形で裏

切られた。

彼女には日秀源道の血が流れているのだ——上に立つ者の素質が。

「まあ、父はサンシャイングループの会長、娘は魔法少女で治安維持部の副部長じゃいな。我々とは天と地程の格差がある」

鶴乃が思いに耽っていると、小柄のメガネを掛けた老人の声が飛んできた。

『斎藤寝具店』店主・斎藤 司の父、ただし正である。

息子の司と違って、再開発賛成派であり、年中ムスツとした顔つきの堅物で有名だ。

彼のように商店街が発展し、人が集まるならそれでいい、と考えている者たちも多い。

それに、最初から立ち向かえる相手ではないと、彼は考えていたようだ。父と祖母と同じだ。

しかし、つむぎのあの提案には、賛成派の彼も流石に面食らったようだが。

「……………」

鶴乃は再び顔を俯かせた。閉じた口の中で上下の歯を強く食いしぼる。悔しさと忌々しきで瞳が震えた。

何でこんな簡単な事が分からなかった！ 少し頭を捻れば、こんな『当然の結果』分かる筈だったのにつ！

「お鶴ちゃん、あんまり思い詰めるな。これから、みんなに確認するんだから、挽回の余地だって……」

「あると思うかね、三郎<sup>サッ</sup>」

鶴乃の背中のはかすかに震えていた。悔しさを嘔み締めているのだろう。

そう察した中山三郎が、優しく声を掛けようとするも、正がピシヤリと遮る。

「親父っ!」

暗澹とした気持ちの皆に、更に迫り打ちを掛けるつもりか。

共に歩く息子の司が叱りつけようとするが、正にはどこ吹く風だ。

彼はテクテクと急に早足で歩くと、鶴乃の方まで歩み寄った。

「!? 正ちゃん……それって、一体どういうことなんだいっ?」

「頭の固いジジイには分からんよ」

正は素っ気ない言葉で鶴乃の隣に立つ中山を払うと、入れ替わる様に鶴乃と並んだ。

「鶴乃ちゃんだったら、分かるな……」

「っ!」

正は無然とそう告げた。ハッと目を見開く鶴乃。

「……………」

鶴乃は歩く足を止めた。同時に隣の正と後ろを歩く3人も足を止めた。恐らく、皆、

自分に注目しているのだろう。

ならば、考えるしかない。

サンシャイングループに振るわれた大鉈によって、切り裂かれた商店街がどのように変わるのか——その答えを導き出さなければならぬ。

祖父の鶏太郎は生前、いつも言っていた。

未来の事を考えろと。偉い人が善意で事を成した場合、それが必ずしも下々の人間にとつて良い結果になるとは限らないのだと。

「……………」  
考え込む鶴乃。4人は彼女の答えを心待ちにしている。

答えが分かっている正は相変わらず飄々としており、川野は慥然と見つめて、中山は額の汗をハンカチで拭い、司は息を飲んでいた。

期待に胸を弾ませている者はいない。寧ろ、悪い予感が強まった。

「……………」  
「っ!!」

暫しの熟考の末、鶴乃は大きく目を見開いた。同時に驚く様にアツと開く。

「わかったのかね？」

「……………」

正が尋ねると、鶴乃は力強く頷いた。

だが、それを伝えていいのだろうか——いや、逡巡する余地などない。やがてみんな思い知ることになるならば、早い内に伝えた方がいい。

「みんな、聞いてっ!」

鶴乃が声を張り上げる。4人は緊張の面持ちで見つめている。

「この再開発は、確かに東と南の商店街にとっては救済になるのかもしれないっ!」  
「お鶴ちゃん、つまり、どういうことだね?」

川野が無然とした表情のまま、尋ねる。司と中山も息を飲んで見つめていた。

「内乱……………」

ポツリと呟かれたその単語に、全員が目を見開いた。

「対立が、起きる。商店街の皆で……………」

つまりはどういうことか。



梓つむぎは確かにこう言った。複合商業施設『サンライズスクエアモール』の一面を新たな参京東・南合同商店街にすると。

——だが、それは罠だ。

まず、一つ目の懸念。全店舗が加盟すれば、サンシャイングループは、商店街の半分を手に入れたのも当然。要はそれらを生かすも殺すも自由だ。売上が悪ければ——かつての万々歳のように——甘言を用いて近づき、自社のチェーン店に差し替えるだろう。

二つ目の懸念は、商店街の経営者は大半が後期高齢者だ、ということだ。

跡継ぎとなる子供達は都会の方へ移り住んでしまっているケースが多い。この場に居る川野と中山が良い例だ。

つむぎは、「建設完了には6年と半年掛かる」と言っていた。その間に、加入する店舗の経営者達の身に何が起きてもおかしくない。誰もが高齢に鞭打って働いているが故に、体内を巣食う病魔には無頓着だからだ。

もし、「建設中に加盟する店舗の経営者が亡くなってしまったら？」——言うまでも無い。

サンシャイングループは、自社のチェーン店を代わりに入れるだけである。

つむぎは『迷惑料』の話をしたが、あれは、目先に大金をチラつかせることで、経営者達の目上記の未来を見えなくさせる為だろう。

今や、商店街の誰もが経営が苦しいのだ。目先に高価なお宝があれば真っ先に飛びつきたい。

事実、あの話の後、つむぎに抗おうとする声は一切聞こえてこなかった。

だが、鶴乃が最も懸念しているのが、商店街の『内乱』だ。

複合商業施設が完成されれば、サンシャイングループはテレビのCMやネット、行政と協力して市の広報を用いて、大々的に宣伝をすることだろう。

つまりどうなるか。

新造のショッピングモールとなれば当然、老若男女の客はこぞつて集まってくる。市内どこころか、県外からの来客も見込める。

つまり、西と北の店舗を利用してくれていた、残り少ない地元の客も、吸い取られてしまう可能性があるのだ。

「それで、何が起ころるか、だな」

既に答えは知っている筈の斎藤 正が、鶴乃を試すかの様に話を振る。

鶴乃はコクリと頷くと迷い無く口に出した。

「経営の格差……」

サンシャイングループの庇護下に入った東と南、そうでない西と北で深刻な格差が生ずる。

——西と北の経営者は抗議するだろう。「お前らは大企業に泣きついて俺らを見捨てた裏切り者だ」と。

——東と南の経営者は反論するだろう。「いや、大企業の恩恵が無ければ、経営は維持できなかつた」と。

ここで、最悪の事態が想定できる。

西と北の商店街の経営者の誰かが「我々にも大企業の恩恵を与えろ！」と騒ぎ始める可能性だ。一度付いた火は、山火事のように周りを巻き込んで燃え広がるだろう。

そうなればもうサンシャイングループの思うツボだ。

「対立が激化すれば、連中はモールを増築するだろうな」

正の口から発せられた更なる『最悪の可能性』についても、鶴乃は否定せずに首を頷かせた。

冷気は無いが、背中が冷え込んで震える様な感覚だった。

それでも、両の拳だけは熱を失くさないように、グツと握りしめていた。

つまり――

参京商店街の憎しみが自分達に向けられる前に、  
“商店同士で憎みあつてもらおう”  
という訳だ。

商店街がサンシャイングループに対して、一致団結の抗議やデモ活動を考える前に、彼らの内輪で潰しあつてもらおうと。そうすることで商店街とサンシャイングループの世界は切り離されるのだ。

内側で争いが勃発すれば、怒りを外に向けている余裕はなくなる。小さな商店でいがみ合えば、大企業を非難する余裕は消し飛ぶ。外へ漏れ出そうだった怒りを、その内側に閉じ込める。

梓つむぎは――もつと言えば、彼女の背後で糸を引いているであろう日秀源道は、自社グループの社会的地位の損失を未然に防ぐ為、分裂を引き起こそうとしている。

☆

「そして、わたしたちの争いの歯止めが利かなくなつたところを見計らつて、介入する。恩情の手を差し伸べてくる」

「それが、正さんの言つていた……」

桃色の二つの瞳が、淡々と語る鶴乃の双眸をしかと捉えていた。

「そう、サンライズスクエアモールの増築。もしくは新しい複合商業施設の建設。そこに、『救済』という名目で、北と西の商店も丸め込む。そうなつたら後の祭り。商店街全てが奴らのものになる……」

「……………」

鶴乃の言葉尻が震えた。

彼女より年下のいろには、難しくてよく分からない話だ。だが、鶴乃の抱える怒りと哀しみは、しつかり受け止めようと思つた。

「そんなことで、本当に、参京商店街が……由比さんの地元が救われるんですか?」

ふと頭の中で湧いた疑問を尋ねると、鶴乃は首を振つた。

「……………わからない。だって」

——開発は行われなかつたんだから。

鶴乃の一言に、愕然と目を見開いた。

「え？」

「順を追って話そうか……」

鶴乃はどこか疲れた様子で、背もたれに寄り掛かると、遠くを眺める様な目で窓を眺めた。

FILE #26 二度と“そこ”から抜け出せなくなる前に

商店街に辿り着いた直後、他の経営者の老人達とはバラバラに分かれた。

——一人になってから、鶴乃は考える。

結局、あの説明会で得られたものはなんだったのだろうか。

反対派同士の結束と、協力態勢——心の中で大いに期待していたものは呆気なく露と消えた。

それは当然だったのかもしれない。参京商店街は小さな小さな区域だ。神浜市全体

を治める行政と日本有数の大企業に立ち向かうなんて、最初<sup>はな</sup>つから無理だったのだ。

下手に張り切りせずに、父の言葉を大人しく聞いていた方が、傷つかずに済んだのかも  
しれない。

——その後の時間は、まるで矢の様に早く過ぎ去っていった。

サンシャイングループは着実に商店街の経営者達と話を進めていった。

当初は商店街全体で8割いた反対派も、一か月後には3割程度に激減していた。

しかも、西と南の商店街の経営者はほぼ全員が賛同しており、残るは未だ反対の看板  
を掲げ続ける中山と、反対か賛成か答えを出しあぐねている川野の二名だけとなった。

だが、両者が陥落するのも時間の問題だった。

その間、鶴乃は機械に戻っていた。

ただ、自分の店の手伝いしかなかった。

父と一緒に厨房で料理を作り、注文を受ければ出前を配達し、母と一緒に家事を手伝  
い、家計簿を毎日一円の出費から逃さずに付ける。

店の中のことだけで多忙だった。祖母の散財も金銭元が気になっていたが、それを調  
査する暇も無かった。

——そんな、ある日の事。



万々歳の二階の奥の部屋——かつて亡き祖父・鶏太郎が書齋として使っていた部屋で、鶴乃は忙しく動き回っていた。

店の昼休憩中に、必ずその部屋を掃除するのが日課だった。

家の事も、地元のものも、自分自身の事も一切気にしない薄情な家族に囲まれた中で、祖父の部屋掃除は鶴乃にとって唯一の癒やしの時間であった。

「♪~~~~♪」

流行りの音楽を鼻歌で謡いながら、丹念にダンスに付いた塵を拭き取っていく。

祖父はもういない。でも、こうしていると逝ってしまった祖父を身近に感じる事ができた。

(……そういえば、おんじ、元気にしてるかなあ)

ふと、大祖父の木次郎の事が気になった。

幼い頃から慕ってきた、もうひとりの祖父。

サンシャイングループに買取されそうになったところを助けてくれた、万々歳の救世主。

父が店を経営できるようになってからは、たまに月一で近況確認をするぐらいで、会う事は無くなってしまった。如何せん鶴乃の方が忙しいので、機会が作れないのだが。

現在は中央区にあるアパートで一人暮らしをしているが、年齢はもう68だ。身体の

事が気がかりだった。

(無論、そんな心配を電話口で告げれば、「要らねえよ、んな心配」とツツケンドンに返されるのがオチだが)

5年前に、祖父は急死した。心臓発作で帰らぬ人となった。

だから、木次郎もいつか、同じ様に、急にこの世を去ってしまうのではないか。

そうなったら自分は――

(っ!!)

急に降って湧いてきた不安を、頭を勢いよく振って強引に振り払う。

駄目だ!! そんなことを考えるな、由比鶴乃!! お前は万々歳を守っていくんだろう

!! だったら自分の事なんて考えなくていい!! 他人に頼る事も考えなくていい!!

強くなれ!! 強くあれ!!

頭の中で必死に、自分に暗示を掛ける。両手で頬をパンツと強く叩いて気合を入れた。

「よしっ!」

鶴乃は「奮々!」と鼻息を吹かすと、再び手に持っている雑巾で、祖父のタンスを拭

こうとした。

「ん?」

祖父が愛用していた木彫りの棚を掃除していると、違和感を覚える。

一段目の引き出し。鍵穴が付けられたそこは、誰も開けてはならない祖父のブラックボックスだ。鍵の場所は、鶴乃と父の隼太郎しか知らない筈だった。

———なのに、開いていた。

まるで鍵が最初から無かったかのように、スルリと棚が引き出せた。

ぞつ———と。

背筋が急激に寒くなった様に感じた。何か嫌な予感がする。

「……………」

勘が強く訴え始める。そこを見るな。見たら何もかもが崩壊する———と。

恐怖に近い感情が胸の内を食らいつくす。しかし、微かに残っていた義心が憤懣と燃え上がってきた。それは真逆な事を訴える。

それを見ろ、と。お前の大事なものを護れ、と。

引き出しの中を恐る恐る除いて見えたのは、小さな千両箱だ。しかし、頑強そうな金属で覆われており、またそれにも鍵穴が付いていた。

———鶴乃は祖父の生前言っていた事を思い出す。

祖父が経営していた頃、万々歳は最盛期を迎えていた。市外から有名人が多数押し寄せてきて、テレビや雑誌で何度も取り上げられていた。

この千両箱は、確か——鶴乃は思い出す。

有名人は度々常連となつてくれて、祖父とも親しくなつた。その人達が祖父へお礼にと譲つてくれた品が、この箱の中にはある。

——どんなものが入っているのかな。

恐怖と興味が一気にせめぎあつた。

まるで玉手箱を開ける前の浦島太郎にでもなつた気分だ。だが、これは、呪いの箱ではない。間違いなく宝の山が眠っているのだ。

鶴乃の右手は、自然と、千両箱を掴んで胸元まで引き寄せていた。

左手がゆつくりと蓋に、手を掛ける。

鶴乃は息を飲んだ。これを開けても自分が死ぬことは無い筈だ。だが、先ほどからぎわざわと感じる嫌な予感は何んだらうか。

まるで、首筋に包丁を突き立てられている様な脅迫感と恐怖に苛まれながらも——  
——一思いに蓋を開けた。

違和感を覚えた。

何で、自分は、千両箱に『鍵が掛かってない』と思ったのだろうか。

「……………ない」

千両箱の中には、何も無かった。

胸中を食らいつくしてきた感情が、一気に全身へと這い出した。

「ない！ え、ウソ!? ないっ!」

棚の二段目を確認する。祖父生前愛着していた衣類が几帳面に折りたたまれていた。

だが、千両箱の中身らしきものは、無い。

「ない！ ない！ ない！ ない！ ない！ ない！ ない！ ない！ ない！」

三段目、四段目五段目六段目七段目……全ての棚を開けて隈なく確認する。だが、どこを見ても、宝は見あたら無い。

——ウソでしょ?!

安らぎの部屋は一気に、抜け出せない暗闇へと変貌した。



「っ!!」

迷つてゐる暇はない。

一番上の段の本を持てるだけ驚掴みにすると、一気に床に投げ捨てた。次々と繰り返して空にする。無造作に転がった本の山を、一冊一冊取り出してパラパラと中身を確認する。

やはり、無い。

なら、次の二段目は!?

二段目に無かつたら、三段目は!?

同じ動作を繰り返す。

長い時間が掛かったが、鶴乃にとっては刹那の様な瞬間に感じた。

そして、いよいよ最後の希望となる再下段へとたどり着く。

「……………っ!」

そこで、鶴乃はある可能性に辿り着いた。まるで雷が降ってきたかの様に、頭に急激に思い浮かんできた時には、もう、祖父の部屋を飛び出していた。

☆

駆け足で滑り込んだのは、祖母の部屋だった。

元々は父の部屋だったが、転がり込んできた際に、母親から『譲ってあげて』と強くせがまれたので、やむをえず譲り渡した。

祖母は買い物に行つて、今はいない。

恐らく中央区だろうか——鶴乃の心に火が灯された。だが、それは義憤でも情熱でもない。全く覚えのない感情だった。

「っ!!」

だが、今の鶴乃にその感情を確認するだけの余裕は無かった。

すっかり祖母のものとなつたタンスの引き出しを、力任せに引つ張り出す。

「ない!ない!ない!ない!!ない!!ない!!ない!!」

一段目から限なく探す。激情が口の中から咆哮の様に飛び出していた。



幸運だったのは、今、家の中には誰もいないことだろう。最下段の引き出しに手を掛ける。

ここに無かつたら、何もかも終わりだ。祖母に問い詰めるしか方法は無くなる。

「……………ない」

しかし、やはり、祖父の宝は無かつた。

愕然とした。まさか、もう質に——いや、と頭を振りかぶる。

まだ何処かに行つちやっただけだ。探せば必ずある筈——

「えっ」

思考の鬩ぎあいが唐突に終わりを告げた。最下段に衣類は何も入ってない。ただ、一枚の領収書だけが、そこには有った。

「なに……………」  
「レ？」

触れた途端、まるで氷に肌を押し付けたかの様に、全身がビクリと震えた。

直感だった。

祖父の宝の所在は、この領収書に隠されている――

内容を、そして記載された金額を見た瞬間、鶴乃はそれを真っ二つに裂いた。

この時、自分の胸の中で燃え猛る炎が――

『憎悪』なのだと思った。

☆

がながん、と——窓が叩きつける様な音を、先刻から忙しく響かせていた。

そういえば朝のニュースで、今年最大規模の台風が近づいていると聞いた。横目で見ると、雨が滝の様に硝子全面を伝って流れている。

もし、天氣が神様の気まぐれによるものだとしたら、かの者でさえ何か泣き叫びたいぐらい絶望する出来事が空の上であつたに違いない。

人々に迷惑を掛けるやり方で懸命に自分の悲嘆を訴えているのだとしたら、神様というのは存外、子供っぽくて無邪気な性格なのかもしれない。

なんだか、自分を鏡で見ているみたいで余計に辛くなつた。窓に歩み寄つてカーテンを閉める。

自分の心にいつも光を差してくれた部屋が、今は薄暗く、息苦しさすら感じられる洞穴の様に感じた。自分が散らかした本や祖父の遺品がそこら中に散乱していた。そこでただ一人、置き去りにされた子供の様に蹲うつくまっている。

「……………」  
もう自分には無理だ。何も救う事はできない。一階の居間から聞こえてくる父達の楽しそうな声が、酷く忌々しい。

「……………っ!!」

もうやめて——

両耳を強く塞いでも、隙間から声が入り込んでくる。

その笑い声が暗にお前なんて誰も気にしないし、見ていないと告げていた。

もう、限界だった。

祖母ともう一人の散財を許した自分、偉大なる曾祖父・祖父の遺志を継ごうととんだ自惚れを抱いていた自分。そして何より、家族に対して強い憎しみを抱いた自分を、激しく嫌悪した。

これ以上自覚したく無かった。

気がついた時、スマホが右手の中にあつた。ある人物の連絡先を探していた。

「……………」

通話ボタンをタップして、耳には当てる。

助けてくれなくってもいい。

ただ、声が聞きたい。今の自分の気持ちをも、辛さ苦しみ痛み絶望を——あの人にだけは伝えたかった。

『おう、俺だ。どうした』

いつも通りのぶつきらぼうだが、底知れぬ頼もしさが感じられる声。それが、荒みきった心に束の間の安心感を齎す。

「おんじ……」

『何が有った？』

呼んだだけで、彼は察してくれた。

溜まらなく眼尻に涙溢れた。奥歯をがたがたと震わせながら、掻き消えそうな声で、懸命に伝える。

「助けて」

『……!!』

「たすけて、おんじ……っ！」

ずっと、と——彼の両足が床を強く踏み抜く音が聞こえた。

鶴乃の声で、一緒に暮らしている家族は誰一人として微動だしなかったのに、離れて  
いる彼だけは動いた。

立ち上がってくれた。

『わかった』

即答。

『すぐ行く』

相変わらず素っ気ない返事だったが——強靱な決意の如き熱量が宿っているの  
を、鶴乃の耳は確かに感じ取っていた。



F I L E # 2 7 親になろうとする男

「……………あいつだってもう16だ」

もうすぐ大人の仲間入りだ。いつまでも自分に甘えている子供じゃない。何か困難に当たっても、自分の頭で考えて解決していける年頃だろう。

なんとかなる——



——  
衝撃、爆音。

「!!」

覚醒。がぼりと上体を起こした。一体何が起きたのか、慌てて周囲を確認する。

原因は窓にあった。

強風と弾丸の如き勢いの雨が窓を強烈に叩きつけていて、バンバンとけたたましい音を建てている。

嵐が来ていたのか——漆黒の夜空をじっと見つめていると、一瞬だけ真っ白に染まった。同時に薄紫の曲線が一本、天から地上に向けて降り注いだ。

「っ」

それが雷と認識した木次郎は咄嗟に耳を塞いだ。地面が弾け飛ぶ様な、衝撃と轟音が身体を震撼させ、耳を劈く。

「どうやら酔っ払って払って夕方まで寝入ってしまったらしい。慌てて携帯を確認すると、『18:15』と表示されていた。」

「ちっ」

飲む前に雨戸を閉めときや良かったか——木次郎は自分の迂闊さが腹立たしくなり舌打ち。今から閉めようとしても、この強風と雨の弾丸では開けた所で自分どころか部屋の半分がずぶ濡れになるのは目に見えている。

仕方ない、このままにしておくか。何か物が飛んできて割れたとしても、その時はその時だ。おとなしく諦めよう——そう思い至った矢先だった。

♪♪♪

携帯から着信音が響く。誰からだろうか。木次郎が画面を確認すると「鶴乃」の二文字が表示されていた。

「……………」

一ヶ月振りだ。

再開発の件は大丈夫か。祖母のことで何か悩んではいけないか。何より、今も元気になっているのか。

様々な不安が急激に脳裏をひた走った。木次郎の背筋を再び見えない虫がざわざわ  
と這い出してきた。

彼は、意を決して通話ボタンを押す。

「おう、俺だ。どうした」

『おんじ……』

「っ！」

携帯から聞こえてきた声に、ギクリとした。

寝耳に冷水をぶち撒けられたかの如く、悪寒が全身を走った。

『たすけて』

嫌な予感が、的中した。

鼻を吸る音、そして何かに怯える様に震わせた声。紡がれた4文字が、答えだった。

「!!」

——あいつは今、泣いている。

頭を揺らがせていた酔いがどこかへと吹き飛んだ。

気がついた時には立ち上がっていた。車の鍵を潰すぐらいの力で強く握り締めて

いた。

「分かった。すぐ行く」

言い終えて電話を切った頃には、既にレインコートを羽織り、玄関の扉を開け放つていた。

ごうつ、と全身を叩きつけるような激しい風と雨が襲いかかってくるが、今の木次郎にはどうつてことない。早くアイツの所へいかなければ。

安心させてやりたい。その一心だけが、彼を衝き動かした。

☆

まだ18時半だというのに、参京商店街はまるで深夜の闇の様にどす黒く染まっていた。当然ながら営業中の店舗は一つも無い。人の気配すらなくなったその区域に、赤子が泣き叫ぶ様な雷雨の大合唱だけが騒がしく響き渡っていた。

闇夜と豪雨を切り割く様に一筋の光芒が、走り抜いた。ライトを付けた由比木次郎の車だった。

「……………」

しばらく走ると、万々歳が見えた。裏庭に設けられた駐車場に車を滑り込ませる。

豪雨に打たれる実家を窓越しに見つめた。

おかしい。以前来た時よりも、小さくて、寂れている。

おかしい。父と兄が守り抜いてきたこの店は、もつと大きく見えなかつたか。

おかしい。何かが此処で起きている。そうでなければあいつ<sup>爺</sup>が泣くな<sup>乃</sup>なんて有り得ない。

何より……

「っ！」

おかしい。ここには大人が三人もいるはずだ。何をやっているんだ。

不安は次第に苛立ちへと変貌した。奥歯をギリツと噛みしめる。扉を開ける時、一瞬窓に自分の顔が映った。

——怒りの面だ。

程度が凄まじく筆舌に尽くし難いが、何かに形容するなら「鬼」と称するに相応しい形相だった。

雷雨の中を駆けて、自宅の玄関へと向かう。

☆

玄関の戸は手を掛けるとガラガラと開いた。

「不用心な世の中だから、いつでも鍵は掛けておけ」と散々教えたつもりだったが、どうやら忘れられてしまったらしい。

すぐ右に居間が見えた。こんな雷雨なのだから、家の中もさぞ静まり返っているものと思いきや、談笑が聞こえてくる。

その中に、あいつの声は無い。

「叔父さん!?!」

噴出しそうな苛立たしさをどうにか抑えていると、居間の扉がガラツと開いた。甥が飛び出してくる。こんな嵐の中で来訪者——しかも自分——が来たことに心底驚いて

いる様子だ。

「いきなりどうしたんだい!? 来てくれるなら迎えにだって……」

「鶴はどこだ」

「っ!」

修羅の如き顔貌に、甥の足が竦んだ。血色の良い丸顔は、一瞬で蒼白になる。

「どこにいるのかと聞いてるんだ」

「え……? えっ!」

甥は震えながらも、何がなんだか分からない、と困惑に満ちた様子だった。その態度が木次郎の苛立ちを更に煮え滾らせた。

「へ、部屋にいる筈だよ……!」

「分かった」

訳が分からない。だが、叔父は何か怒っている。隼太郎は震え上がりながら娘の居場所を教える。

木次郎は甥を足蹴にすると、濡れたレインコートを玄関に投げ捨てて、足を踏み込ませる。

「お、叔父さん。タオル持ってくるから……!」

木次郎の靴下はぐっしりと濡れていた。玄関を濡らしてしまえば、妻と義母の機嫌

を損ねるのだからそれだけは辞めて欲しい。

そんな隼太郎の願いが届いたのか、木次郎は「チツ」と舌打ちすると、靴下を無造作に脱ぎ捨てた。

「隼」

そして、階段に足を掛けると、甥を呼びかける。

「は、はい……？」

「最近、あいつを見てて、何か感じなかったのか？」

「え……？」

問いかげに目を丸くする隼太郎。首を深く傾げる。

「う……ん。少し前まで再開発の事で忙しそうにしてたけど……ここ最近、元気そうでもないし……昨日学校で何かあったんかなあ？」

「分かった。もういい」

——こいつに尋ねた自分が馬鹿だった。

木次郎は甥をスッパリ思考から切り捨てると、一目散に二階へと駆け上がった。当人に確認した方が一番早い。



☆

二階はまるで、真夜中のトンネルの中のように真つ暗だった。

鶴乃が居るのは確かだ。なのに……まるで人の気配が感じられない。

明るく、談笑も聞こえてきた一階とは比較にもならない静寂の暗闇が、木次郎の胸を余計に騒がしくさせる。

—— あいつは今、どうなってる？ あいつの身に、何があった？

額に汗がじわりと浮かんだ。嫌な予感が堪らなく下腹部を圧迫する。

急いで彼女の元へ向かおうと勇んでいた足取りが、急にずつしりと重くなった。

「……………」

廊下の電気を付けると辿々しい足取りで、慎重に彼女の部屋に向かう。

すぐに『鶴乃』と可愛らしいポップ体で書かれたネームプレートが貼り付けられた扉が見えた。かつての自分のものだった部屋を、あいつに使わせていた。

「鶴、いるのか」

とんとん、とドアを小突きながら声を掛ける。

だが、返事は無い。

「俺だ、おんじだ」

語気を少し強めにし、再度呼びかける。だが、返事は無い。

「っ！」

意を決してドアノブに手を掛け、開けた。

瞬間、全身に悪寒が走った。

彼女の陽気で暖まっている筈の部屋は、凍りついたかのように、暗闇に閉ざされていく。

思わず、木次郎は口元に手を当てた。胸からグラグラ煮立つてくる忌々しさが、顔の剣呑さを更に鋭利にする。

（あいつらは、気付いてねえのか……！）

鶴乃の部屋を一目見て、木次郎は感づいた。

恐らく、今のあいつは異常だ。

鼻を啜る様な声——

「！」

消え入りそうではあつたが、確かに、ぐすり、と聞こえた！  
鶴乃の部屋を離れ、咄嗟に顔を聞こえた方向に向ける。かつて父・雀七と兄・鶏太郎が使っていた書齋へと繋がる襖が見えた。

急いで開け放つと、息を飲んだ。自分の予感が的中したのと同時に、部屋の異常さに目眩がしそうになった。

全ての棚とタンスの引き出しが、引つ張り出されたまま——中身と思しき、父と兄の遺品である衣類や書籍が床中にばら撒かれていた。

誰かが暴れまわったか、或いは泥棒にでも入られたかのように、滅茶苦茶に散乱していた。

「……鶴か？」

暗闇の中心で、蹲っている黒い何かが見えた。

問いかけるまでもない。間違いない。由比鶴乃だろう。だが、小さく丸まってぐずぐずと泣いている“それ”は木次郎の知る彼女とは掛け離れて見えた。別人であつて欲しいと、僅かに願つてしまった。

だから、思わず問いかけてしまった。

「おんじい……っ？」

蹲っているものが、自分の声に気付いて、顔を上げる。

暗闇に溶け込む様に染まり切つて、表情は確認すら難しい。

木次郎の足が毅然と彼女の方に進んだ。目前で立ち止まると、屈んで視線を合わせる。

「安心しろ。俺だ」

「つ……おんじ、おばあちゃんが、おかあさんが……っ！」

ひつく、うぐ、と嗚咽を混じえながら、暗闇に紛れ込んだ。それが必死に何かを訴えようとする。

木次郎は直ぐに、彼女の周囲の散乱物に目を配った。

もしかしたら、こいつが泣いている原因が近くにあるのかもしれないと、元刑事の直感で悟ったからだ。

——— すぐに分かった。

彼女の脇に、二枚の白い紙切れが落ちていた。元々は一枚だった紙を、手で感情任せに切り裂いた様に見えた。

こいつが元凶か。確信すると、ギンツと鋭く睨みつける。

他の散乱物は乱雑に撒かれているものの、傷を負ったり、破かれたものは一つも無い。彼女が父と兄の遺品にそんな真似をすることは思えない。

と、なれば——— この破かれた白い紙切れは、父や兄のものでは無い。家族の誰かのだと判断した。

木次郎はそれらを手に取り、中身を確認すると、

「分かった」

“それ”と自分に言い聞かせるように木次郎は一言だけ口に出すと、懐にしまった。そして、もう一度、彼女の顔に目線を合わせると、はつきりと伝えた。

「よく頑張ったな」

瞬間、開け放たれた襖から入り込んだ廊下の光が、ようやく“それ”の顔を差した。

「……！」

まるで生まれた赤子の様にくしやくしやに顔が歪んでいた。

一人ですつと泣いていたのだろう。そう確信した時、木次郎は彼女の両肩をグツと掴んでいた。

「ずつと我慢してたんだな。褒めてほしかったんだな」

“それ”の顔に生気が宿った。自分がよく知る少女の顔になった。

鶴乃が胸に飛び込んできた。迷わず両腕で受け止める。立派に成長したと思つていた体躯は、案外小さく、頼りなかった。

「うん、うん……っ！」

「わかった。お前はよくやった」

木次郎は鶴乃の両肩を掴んで話すと、顔を見合わせた。

生気の戻った赤い瞳が自分をしっかりと捉えているのを、確認した。

「後は俺に任せろ」

「おんじ……?」

「全部引き継ぐ。だからお前はもう何もするな。休め」

鶴乃の視線が泳いだ。まだ何かしなければいけないと思ひ込んでいるならば、それは拙い事だ。

この子は本当に良い子だ。大人の分まで責任を負おうとしているのだから。

だからこそ——潰してはならない。

自分が、大人達が、しっかりこの子を支えていかなければ——

一人で飛び立てる様になるまでは……いや、飛び立つてからも、自分がずっと傍にいてやらなくては。

「休め。鶴乃」

上手い言葉は思いつかない。だから、もう一度、より力強くはつきりと伝えて、もう一度身体を抱きしめる。

「おんじ」

すると、鶴乃の顔が笑った。

「ありがとう」

いつも、木次郎に見せてくれた、優しく陽の様に暖かな笑みに、木次郎は心から安堵した。

☆

階段の板が一段、一段下りる度に、ギイ、と悲鳴の様な音を響かせる。

木次郎の足はそれだけ強く踏み抜いていた。

その形相は刑事の彼を彷彿とさせた。犯人を目前まで追い詰めて、あと一步で捕まえられる寸前の時によく浮かべた、鬼の如き形相が張り付いていた。

居間では食事をしているのか、楽しそうな声が聞こえてくる。

心底、忌々しい。

はちきれんばかりの怒りをどうにか喉元で抑えながら——木次郎はガラス戸を空けた。

「あ、叔父さん！」

三人は呑気に鍋を突ついていた。それを見ただけで爆発しそうだった。



隼太郎が即座に振り向いて声を掛けてくる。

「鶴乃は様子はどうかだったんだい？ みんなで心配してたんだよ。でもあいつだってもう16だし、大人がいちいち口を出す訳にもいかないだろ。放つとけばその内出てくるんじゃないかと思って待ってたんだよ」

放つといて自分らは飯食ってて何が「心配してた」と言えるんだこの野郎。

甥は相変わらず鈍感だ。目と鼻の先に起きている事態にまるで気づきもしなければ見ようとしめない。

「全くあの子にも困ったものね。せつかく木次郎叔父さんがきてくれたのに挨拶にも来ないなんて……あ、叔父さん。よろしければ一緒に食事でもどうですか？」

その妻の紀子は屈託ない笑みを向けてくる。笑っている場合じゃない。

「それなら、お昼に買つていたお寿司を皆で食べましょうか!」

この家で一番の余所者が突然そんなことを思いつく。何を言ってるんだコイツは？

木次郎は無言で睨みつけたが、とつくに目が曇りきっている夫婦二人は迷わず飛びついた。

「お、いいですねえ」

「お寿司つて久しぶりね!」

「鶴ちゃんも呼んで早速頂きましょつ! ……つてああ、木次郎さん。ごめんなさい!

会ったのは紀子の結婚式以来でしたかね。その節は色々とお世話になりました！  
せっかくいらしたんだしました仲良くしましうね！ みんなで楽しくご飯でも」  
こいつらの会話を聞いてるだけで目眩と吐き気がした。もう限界だった。

木次郎の中で何かが、プツンと音を立てて切れた。

「てめえら……」

一番大事な者が、守らなければいけない子供が——暗闇の底で悩み苦しんでいるのに。

何も見ていない。見ようもしない。

何なのだろうか、こいつらは。それでも、人の親か。親であると自負するのか。それ以前に常識を持っているのだろうか。

——間違い無い。あいつを異常に染めたのは、こいつらが異常だったからだ。  
理解した瞬間、既に口が大きく開いていた。

「大人が雁首揃えて一体何をしてやがるんだあああああああああああああああああああああああああああああああああッ！！！！」

鬼の如き剣幕と同時に放たれた咆哮に、目の前の薄情な団欒は一瞬で凍り付いた。

## FILE #28 お互いに歩み寄る為に

「叔父さん、一体……っ!?!」

「どういふことだ——と疑問を挟み込むことすら許さなかつた。

男が赤く滾つた目で甥を一睨みすると、それだけで震え上がってしまう。

「隼、おめえの根性は一から叩き直さなきゃいけねえようだな」

「……っ!」

甥の顔が強ばる。何か言いたいらしいが、恐怖のあまり口が動かない様子だ。それだけ、男の怒気は凄まじかつた。

彼は甥への用は済んだとばかりに、顔を別方向に逸らす。

「紀子さんよ」

次に標的にされたのは甥の妻だ。彼女の両肩が、狼に追い詰められた小動物の様にビクリと跳ねる。

「あんた、自分が腹痛めて産んだ子が、あんなに暗いところで苦しんでいるのに、何とも思わんのか？」

「……………」

紀子の目が驚いた様に見開かれる。彼はそこでようやくやく木次郎の怒りが沸騰している要因に感づいたらしい。

言わなければ気付かないのか——とても母親とは思えない。

木次郎はそのさまに、呆れた様に目線を落とすと、はあ、と溜息を付いた。

「それは……………気にしなかった訳じゃないですけど……………」

嘘だ。自分が言わなければ気にも留めなかっただろう。

木次郎は、紀子の口から絞り出すように出た言葉が只の「言い訳」だと見破ったが、一先ず聞いてみることにした。

「で、でも！ あの子だつてもう16ですよ！ そのぐらいになれば自分の事は自分で出来るようになる筈だつて、亡くなつたお義父さんも言っていましたし……………！ 私だつて

……」

紀子はそこでクツと齒噛みすると、瞳に涙を溜めて、哀憫を顔面に表した。

確かに、兄貴はそういうだろうが、だからって『放つとく』なんてことはしない。

それに『私だつて』とはどういう意味だろう。「大変な思いをしているから、娘の面倒は見きれない」とでも言いたいのか。だとしたら噴飯ものである。自分に母親の資格は無い、と言っているようなものだ。

「そうだよ叔父さん！」

沈痛な表情を浮かべる妻を見ていられなくなつたのか、亭主がすかさず飛び込んだ。

「紀子だつて家事に店の手伝いにお義母さんの世話で大変だつたんだ！ 大目に見てあげてくれよ!!」

自分が居た頃はもう少しマシに見えた甥の目は、すっかり曇つて……いや、腐つてしまつたらしい。

こいつの目はもう何も現実も真実も映し出していないのだろう。

「大変、か」

木次郎は甥に呆れかえり、深い嘆息。

こいつは先程お前と鍋を囲んで団欒していたじゃないか。大変と感じる要素は微塵も無かつた。

木次郎は、再び鬼の眼で紀子を見下げる。

「便利な言葉だなあ？ え？ 紀子さんよお？」

「っ!!」

胸中を見透かされた様な脅し文句に、ギクリとする紀子だが、隼太郎が嘯み付いてきた。

「叔父さんッ!!」

「黙れ隼ッ!!」

「……っ」

だが、その勢いも束の間。木次郎の一喝によつて呆気なく萎縮してしまった。

そして、甥夫婦を見つめながら空気が震撼するほどの怒声を張り上げる。

「てめえらは親だ！ 店や家がどうこう言う前に果たさなきやいけねえ責任があるだろう!!」

「それは……」

だが、今回ばかりはどうしてか、甥も負けてはいられなかった。拳がわなわなと震えだす。

「そうかもしれないけど……! でも、叔父さんは一緒に住んでないから知らないんだよ! 紀子の事も、お義母さんのこともっ!!」

「ああ、知らねえ。分かりたくもねえしな」

必死の訴えの様ではあったが、目が腐った者の言葉など木次郎にはどこ吹く風だ。あつさりと受け流されてしまった。

隼太郎が更に忌々しさを募らせ、今にも飛びかからん程の形相で睨みつけてくるが、彼は意に介さない。

そろそろ頃合いか。

別に甥と取っ組みあつても負けるつもりは無いが、余計な茶番を広げる事は避けたい。事態はさつさと終息させるに限る。

木次郎はズボンのポケットに手を突っ込むと、綺麗に四つ折りされた二枚の紙切れを取り出した。そして、ちやぶ台まで歩み寄ると――

「こんな馬鹿な真似をしやがる連中のことなんてなあつ!!」

バン、と叩きつけた。再び空気が震撼。

三人が唾然とした顔でテーブルの上に叩きつけられた“それ”を凝視する。

「へ、これって……」

隼太郎が、紙切れに記載された内容を目にした途端、驚愕のあまり体が硬直した。

『? 7, 000, 000』

最初は、見間違いだと思った。目の錯覚か何かだと思った。

目をゴシゴシと擦って、もう一度確認。

紙に書かれていた文字が、紛れも無く現実のものだと理解した途端——背筋がゾツとした。

聞いたことの無い商品名の隣で、見たことも無い桁の数字が列挙していた。

「えっ……!? えっと……!!」

「!!!」

現実を受け止めきれずただ顔を蒼褪めて混乱するだけの隼太郎とは別に、妻と義母は、全身が粟立つような感覚に襲われた。端正な顔が恐怖で引き攣り老婆の様に変貌していた。

隠していたものを、一番見られたくない人に見つかってしまった——そんな思いがありありと映っていた。

「これは、違うのよっ!!」

まるで絶叫の様に声を張り上げると慌てて二枚の紙切れを奪い取るにして、懐にしまった。

だが、目先に仁王立ちする鬼の如き男にとっては無駄な抵抗だ。寧ろ、自分の行いだ



と教えているようなものだ。彼の目が更に赤く滾っていく。

「何が、違うってんだ？」

「っ!!」

筆舌に尽くし難い怒気を孕んだ眼光。

紀子は、追い詰められた兎の気持ちを初めて知った。

全身が酷く寒い。震えが収まってくれない。恐怖のあまり瞳に涙が溢れてくる。言  
い訳をしなければならぬが、頭の中はグチャグチャに書き混ざってしまった。言葉が  
作れそうにない。

鬼の口撃は止まらない。

「ケイマン……早速調べたが、ポルシェの高級モデルだな。なるほど、二人で旅行するに  
は快適そうだ」

「……………!!」

紀子と美江の顔が蒼褪めていく。まるで彼に熱気を吸い取られていくかのように。  
「どうやらあんたらにとつて、隼も鶴乃も眼中に無かつたらしいな。それで？ そんな  
モンを買う金はどこから捻出したんだ？」

「……………」

追い詰められた二人は罰が悪そうに揃って目を反らすと、口をムツと嚙みだす。

それしか抵抗する術が無かった。

「そ、そんな……！ 俺の口座からは一円も……！」

「隼」

慌てふためく甥だが、どうも大袈裟だ。

その態度を見て何かを察したらしい。木次郎は一瞬だけ彼を横目で見た。

「後で話がある」

「！……」

刺さる様な眼光と同時に胸中を見透かされた様な一声に、彼はギクリと肩を強張らせると、弱弱しく頷いた。

そして黙り込む女性一組に再び、鬼神の眼を向ける。

「言いたくねえならこっちから言わせて貰うぜ」

木次郎は、小動物の様に縮こまって震える二人に向かって、ゆっくりと歩み寄る。

そして、屈んで視線を合わせると、囁いた。

「親父と、兄貴の遺品」

「！……」

二人は無言を貫く。しかし、表情はあからさまに崩れて泣きつ面になり、全身がガタガタと震えだした。

それが、肯定と告げていた。

「俺の目が黒い内に勝手に売るたあ大した度胸だなあ。それで？　どこの質に入れたんだ？」

「ま、まだ……売ってない……!!」

「の、紀子!!」

恐怖に耐えきれず紀子が口を割り始めた。母が咄嗟に抑えようとするがもう遅い。

木次郎は形相が更に険しくなる。紀子の心臓がバクバクと鼓動する。もう破裂しかねない。その前に白状した。

「ネットオークションに掛けただけなんですっ!!　そしたら1000万の値が付いちやって……!　そしたら、お母さんが車を買おうって言いだしたんです……っ!!　私も話に乗って勢いで……」

「や、止めなさいっ!」

必死に娘の口を塞ごうとする美江だが、木次郎の矛先は既に向いていた。

「つてこたあ、まだ家にあるってことだな？」

「!!　は、はい……!!」

あまりの気迫に、美江の小さな心は観念した。早々に口を割る。

「現金が私の口座に振り込まれ次第、こちらから郵送する手筈でしたから……」  
成る程、金が入っても、隼太郎や鶴乃にはバレないようになっていた訳か。

木次郎は目の前の老婆に更に忌々しさを募らせた。もし男だったら殴り飛ばしていかかもしれない。

「で、どこにあるんだ？」

「それは……」

木次郎は怒りを抑えて問いかけるも、美江は口を噤んだ。

この後に及んでまだ抵抗する気か——！！

木次郎の怒りがいよいよ沸点を超えた。

「俺はどこにあるのかと聞いてるんだっ!!! 人の話が聞こえねえのかっ!!!」

「ひいっ!!」

「て、テーブル! テーブルの足です!!」

紀子が涙を零しながら指さした方向に、木次郎の赤目がギロリと向いた。

よく見ると、色は同じだが、形や高さが自分が居た頃に置いてあったテーブルとは違っていた。

「隼、退けろ」

「は、はい！」

隼に、テーブル上の食べ物を下ろさせると、両手でひっくり返した。

テーブルの足は円筒状になっており、底に蓋が付けられていた。捻り回すと緩んで開いた。

同時にジャラジャラと、金品が流れ出す様に出てくる。木次郎の瞳が途端に鋭さを増した。全てが見覚えがあるものだ。

「決定的だな」

著名人から感謝と友好の代わりとして受け取った宝石やお守り代わりのペンダント、本人の所有物だった年代物の腕時計——それらは全て、父と兄の遺品だった。

冷え付いた言葉が、後ろの三人を震え上がらせた。誰かの息を飲む様な音が聞こえてくる。

「分かった」

木次郎は金品を懐にしまうと、立ち上がって後ろを振り向いた。

この家を支配していた筈の三人はすっかり怯えて竦んでいる。こんな連中に鶴乃は潰されそうになったというのか、と思うと、余計に腹が立った。だから、

「もうお前らに、ウチは任せられねえ」

力強く、はつきりと伝えた。

こいつらに家を守ることも、店を続けることも不可能だ。ましてや鶴乃の世話も任せられそうにない。同じ家の人間として……いや、同じ人間として、心底情けない限りだ。「これからは家の事も店の経営も俺が仕切らせてもらおう」

「そんな、叔父さん……っ！」

自身の決断に、甥が不服に感じたらしい。

何か反抗しようとして立ち上がるが、一睨みするとすぐに縮こまった。口を噤んで、正座する。

「てめえらの言い分は一切受け付けねえ」

「で、でも……店の事は亭主に……っ！」

「任せた結果がこのザマだ」

紀子も反抗するべく立ち上がって訴えようとするが、彼の言葉にピシヤリと一刀両断された。

それ以上は何も言えず、甥と揃って正座する。

次いで木次郎は、元凶たる老婆へと目を向けた。

「それから、津和吹さんよ」

「……何かしらっ？」

恐らく向こうもその自覚は僅かばかり抱いているらしい。木次郎に対して、身構えつ

つ問いかける。

「あんた、出てけよ」

「ツ!!?」

途端、老婆の皴塗れの顔が屈辱に歪んで般若の様に変貌した。

「そんなっ!!」

実娘も思わず驚きを口に出していた。

あんな狼藉を働いておきながら、自分はまだここに居座れると思っているらしい。

「ウチじゃあ、働かざるもの喰うべからずだ」

「……………っ!!」

はつきりそう言われた事が悔しいらしい。美江の身体がわなわなと震えだす。

「人んちに転がり込んで遊び呆けていると思えば遺品食いつぶしやがって。とんだ寄生虫だな、あんたは」

「っ!!」

怒りをどうにか抑え込もうとしていた美江も『寄生虫』には流石に堪えたらしい。

般若の形相が真っ赤に染まった。勢い良く立ち上がって激情を顕わにする!!

「なによっ!! どうせそんな骨董品、置きっぱなしにしたところで只の我楽多じゃないっ!! お金に変えた方がまだ使い道があるわっ!!」

ヒステリックに怒鳴り散らす老婆に対して、木次郎は実に冷静だった。

「こいつは万々歳が戦後から歩んできた歴史を示す象徴だ! あんたは店を亡き者にしようとしてやがる……」

「くっ……!」

感情を波立たせず、毅然とした態度で応戦する木次郎。その力強い眼光に、美江の口がグツと止まる。

「もういいわっ!! 折角仲良くしようと思ったのに、そんなこと言うだなんて信じられないっ!! こんな家、こっちから出ていきます!!」

負け惜しみの様に喚くと、木次郎が支配する居間から逃げるように背中を向けて、早足で出ていく。

「ちよつと、お母さん!」

紀子がその後を追う様に居間を出ていく。木次郎は構わず言葉をつづけた。

「おう。今日中に荷物纏めて朝一で消えろ。痕跡一つ残さねえでな」

「叔父さんっ!! お義母さんと紀子に謝ってくれっ!」

流石に聞き捨てならないと、隼太郎が立ち上がって怒鳴るが、



「黙れ隼ッ!!」

「ひ…………っ!!」

案の定、木次郎の熱に油を注ぐだけだ。即座に怒鳴り返され、隼太郎は情けない声を上げながら尻もちを付く。

「そもそもてめえが家主としてしつかりしてねえからこんなことになったんだろうが!!」

「それは……………」

「これではつきり分かった!! てめえが只のボンクラのままだつて事がなッ!! 鶴乃の面倒はこれから俺が見る!! 反論も手出しも一切無用だッ!! いいなッ!!」

「…………っ!」

隼太郎は何か言いたげな恨めしい形相で木次郎を睨み付けながらも、彼の言葉に縦に頷いた。

☆

美江と紀子が自室にこもった後、木次郎は甥を伴って、二階の兄の書齋へと足を踏み入れていた。

まるで泥棒に荒らされた様な部屋の惨状を見た途端、甥の顔は驚愕に青褪めた。

あの鶴乃が、誰よりも明るくて、優しい家族思いの鶴乃が——これを引き起こしたというのか。信じたく無い気持ちと、娘がここまでの癩癩を起すまで放つてしまった後悔の念が下腹部を刺激して、うっ、と嘔気付いた。

ようやくこの唐変木は現実を認識したらしいな、と木次郎は冷ややかに甥を横目で見  
る。

鶴乃はいなかった。

大方、部屋に戻っているのだろうが、今はそつとしておいた方が良い。

「……………」

「……………」

部屋の明かりを付けると、無言で、畳の上に散らばった衣類や書籍といった散乱物を片付け始める木次郎。

甥も彼に合わせるかのように、無言で片付け始めた。

「……………」  
「……………」  
外は未だ嵐の筈だが、二人の耳に聞こえるのは、万々歳の祖・雀七が生前の頃から所有していた木彫りの時計の、時を刻む音だけ。

静寂が空間を支配していた。

二人は只管、片付けに集中する。まるで自分たちの後悔を払拭するかのよう。

「……………」  
「……………」  
壊したかったのか？」

時間にして10分経ったぐらいか——木次郎が突然、静寂を破った。

甥の身体がピクリと反応した。

「……………」  
「……………」  
何の事だい叔父さん？」

「しらばっくれるな」

甥は核心を付かれた時、普段なら自分に怯えすくむ筈である。

しかし、この時ばかりは違った。何も感情が乗ってない、凍てついた声色が帰ってきた。

「鍵の有りかを知っているのはお前と鶴乃だけだった筈だ」

「……………」

隼太郎の表情がいつになく固くなったように見えた。

「あいつらに話したのは、その迷惑があつたと思えん」

静かだが刺さる様な指摘が、隼太郎が顔をキツと歪ませた。

「……………ああそうだよっ!!」

いつになく激情を顕にした形相から、怒号が響いた。

「昔っから叔父さんはそうだなっ!! 俺がどんなに白を切つたつてすぐ暴いちまうんだ

! 警察の性だが知らんけど人の心を暴くのがそんなに気持ちいいのかっ!!」

「……………」

極力感情を表には出さなかつたが、内心驚いていた。

甥がこれ程までの激情を顕にするなんて思つてもみなかつた。

「そうだよ! こう言えばいいんだろ!! 『全部俺のせいだった』つてさ!! そのとおり

だ!! 俺だ!! 全部俺がやったんだよ!!」

「……………どういうつもりだ?」

「どういうつもりだつて!?! わからないだろうな、叔父さんには!!」

隼太郎の怒声にはあからさまに憎悪の感情が混ざり込んでいた。

適当に上着を拾い挙げると、グシャグシャに丸めてから、勢い良く畳に向かって投げ

付けた! 初めて見る甥の態度に木次郎は目を丸くするしかない。

「親父は最低の人間だった!!」

「…………!?!」

思つても無い言葉が飛んできて、木次郎は耳を疑つた。

「母さんが死んで泣いている俺に親父は何も言葉を掛けてくれなかつた！ ただ世間体を気にして俺を跡取りにすることしか頭に無かつたんだ!!」

呆然と甥を見つめる木次郎。

「あいつの頭の中はいつも、万々歳の存続と、お爺ちゃんが築き上げた商店街での立場を保つことだけだつた……………俺と母さんのことなんてあいつにはどうでもよかつたんだ!!」

「隼、そいつあ」

違う。兄はそんな薄情な人間ではない。

だが、伝えようとした言葉は、隼太郎の怒りにかき消される。

「そのせいで、俺がどれだけ苦しんだか、わかるか……………親父の外面がよかつたせいで、俺はいつも親父と比較されて生きてきた。ボンクラだの、能無しだの、ノロマだの言われ続けて。誰も俺自身のことなんて見ようともしなかつた」

「……………」

何を言つても無駄かもしれない。

木次郎は何も言わず、静かに耳を傾けた。

「万々歳なんて絶対継いでやるかって思ってたよ……。だから、親父とは違う形で幸せになつてやるって決めたんだ。サンシャイン通信に勤めてようやく俺個人を認めてくれる人が出来た。紀子と結婚して、娘達が生まれた。願いが叶つたと思つた矢先だつた」

——鶴乃が、親父に懐いた。

首を深く俯かせて、呟かれた言葉には、確かな絶望があつた。

「父親の俺よりも、親父の事が好きになつたんだ……。っ！ 親父も鶴乃の事が気に入つたみたいで、俺よりも深い愛情をあいっくに注いだ……。それが、許せなかつた」

隼太郎が抱えた頭を振り回す。木次郎には、纏わりついて離れない憑き物を必死で祓おうとする仕草に見えた。

「あいつが、万々歳と親父の話をする度に、笑つて聞き流してたけど……。本当は屈辱で胸が震えたよ。結局、俺は親父に敵わないんだって、思い知らされるんだからなあ……。っ！」

「それでも、店を継ごうって決めたのは……」

隼太郎はそこで乾いた笑みを返して、

「誤解しないでくれよ叔父さん。叔父さんは俺にとつちや数少ない理解者で味方だった。叔父さんにだけは恩を返すつもりだったよ」

すぐに顔を険しくした。

「でも、親父は許せなかった。俺の人生を台無しにした上に鶴乃も奪われたんだ。紀子に鍵の有りかを伝えたのは、俺なりの復讐だ。親父の痕跡なんて、この家から何もかも消えさつちまえばいいって思ったんだ……！」

木次郎は眉間に皺を寄せて何も言わずに俯いた。

甥は愚かな人間だ。経営者としての資格も、家主としての威厳も、父親としての自覚も微塵も無い。

だが、甥がこんな風になってしまった責任は、自分にもあった。

彼を幼少から知っていたが、その気持ちを感じ取らなかった自分も愚かだった。何故もつと早く気づけなかった。そうすればここまで荒むことは無かったのに。

「結局、馬鹿だよなあ……………」

激情を一通り吐き終えた隼太郎の顔は、憑き物が落ちたようにも安堵していたが、寂しそうにも見えた。

「鶴乃のことがまるで見えて無かったよ。あいつが傷ついてるなんてちつとも感じなかった。親父みたいになりたくないって、あんだけ思っていたのに……………結局、親父

と同じことをしてたんだ」

商店街の再開発のこと、店の名誉のこと——思えば鶴乃は必死だった。

しかし、自分はそんな鶴乃を拒んだ。憎き父の背中を追いかけんとする鶴乃を認めたくなくて、抑えつけようとした。

木次郎が来てくれなければ、この部屋の惨状よりも、もつと重大な事態が発生していたかもしれない。

そう思うと、後悔の念が急激に押し寄せてきて、堪らず溜息を吐いた。

「……………同じだ」

「え？」

聞いた木次郎の口から、思っても無い言葉が囁かれた。隼太郎が目丸くする。

「俺も、兄貴のことが嫌いだった」

「叔父さん…………？」

木次郎が顔を上げた。遠くを見つめる様な目の先には、木彫りの時計がある。

「ガキの頃、兄貴と二人で店を守り抜いてほしいと親父によく言われたよ。だが、俺はそうしなくなかった」



「それって……!」

もしや、と言いたげに甥が見てくる。彼の考えはすぐに察した。

「お前と同じだ、隼。ガキの頃から兄貴と比べられてきた」

「!!」

「兄貴は頭が良かった。親父が一を教えれば十まで理解しちまう。商店街や学校でも、兄貴は愛想が良くってなあ。皆から好かれたし、羨望を集めていた。でもな……」

細められた木次郎の瞳が剣呑さを増した。当時の悔恨を思い出しているのか、明らかに怒りの感情が感じられた。

「俺はこの通り、愛想なんざ微塵もねえし……何も持ってない、只の凡人だった。だから……嫌った」

隼太郎は初めて叔父から聞く話にも言えなかった。

木次郎が警察官となったのは、『自分達とは違うやり方で街の人達に貢献していく』と決めたから——と、亡き祖父・雀七がそう教えてくれたことを思い出した。だから、ずつとそうだと思いきんでいた。

叔父も偉大なる人物だ。自分とは天と地程の差がある。

だが、違った。

料理人の道では如何に努力を積んでも、兄は超えられない。そればかりか、兄と永久

に比較される屈辱の人生を歩むことになる。

それが嫌になって、叔父は逃げ出したのだ。

彼もまた、自分と全く同じ経験をした、一人の凡夫に過ぎないのだ。

「3年前に、兄貴が死んだとき……俺は、安心した」

「……………」

木次郎はぐつと目を閉じて、ポツリと呟いた。隼太郎は顔を俯かせて、黙り込んだ。

『ああ、これでもう兄貴と比べられることはねえんだな』って……全く、俺も大概、馬

鹿だよ」

「叔父さん……………」

「でもな隼、これだけは言わせてくれ」

木次郎が急に、強い光を伴った瞳で、甥を見つめた。

「?」

「兄貴は、お前のことを——」

「愛していた。そうじゃなきや大学卒業までの学費は工面してくれなかつたつて。不器用だけど、お父さんのことは大切にしてたんだつて。だから、わたしを……鶴乃を愛してやれつて……。おんじがそう言つてくれたんだ」

「そう、ですか……」

鶴乃は部屋にこもっているふりをして、物陰で二人のやりとりを聞いていた。

当時の辛さを思い出したのか、鶴乃の言葉は震えている。

表情も、長い話をずっとしたからか、疲れが見え始めていた。

「どうして、なんだろうね」

鶴乃が笑う。どこか自嘲してる様に見える心配になった。

「……？」

「同じ家族なのにさ、どうして分かりあえなかつたり、憎しみあつたりしちゃうのかな」  
両手を伸ばして、彼女の手を包み込むと、微かに震えていた。

「いろはちゃんはさ……同じ経験をした事つて、無いの？」

不意に投げかけられた質問に、目を見開いた。

『でも、これは仕方の無いことなんです』

『お姉ちゃんは、私の邪魔をするの?』

「よく……分かりません」

不意に脳裏に、母と妹の、二つの言葉が過った。

一つは書き置き。もう一つは夢の中だったが、あれは確かに自分の家族から投げかけられたものだった。

「私は、家族と喧嘩した事、ありませんから。憎んだことだって、ありませんから」

「そう……」

当然か。と、鶴乃は思う。自分と同じ経験をしてる者なんてそうそういやしないか。

「でも、もしかしたら、私だけが気付いてないだけで。家族の誰かからは、そう思われていたのかもしれないんです」

「? それって……?」

「私、妹を愛してました。ずっと大事にしているつもりでした。……でも、あの子から見たら、私の好意はうざったいだけで……もしかしたら、ずっと気持ちの邪魔をしていたんじゃないかなって……思ってたんです」

「その、妹さんは……？」

「どこにいるのか、分からないんです」

いろはが思いつめた様に顔を俯かせた。あちやく、と鶴乃は苦々しい顔で額をパチンツと、叩く。

「ごめんっ！ そんなこと分からないで、わたしばかり話しちやってー！」

「いえ……由比さんは何も悪くないです。寧ろ、安心しましたから」

咄嗟に謝るも、いろはは穏やかに笑い返した。

意味が分からず、鶴乃は目を丸くする。

「え？」

「不謹慎かもしれないけど、私と同じ気持ちの人がいたんだって。最初は由比さんのこと、凄く元気の良い人に見えたから、合わせられるか心配だったけど……でも、これで仲良くできるかもしれないって思ってたんです」

屈託無い笑みを見せるいろはを、鶴乃は少しばかり呆然と見つめた。

「そっか。ありがとう」

そして、彼女が歩み寄ろうとしているのだと理解して、心から嬉しくなった。だから、笑顔で返した。

いろはも、ようやく笑ってくれたのだと思って、心から安心した。

## FILE #29 本当にそれしか手は無かったのか

外はもうすっかり夜だ——スマホで時刻を確認すると、もう19時を回ろうとしていた。

時期は5月。外気はまだまだ震えるほど寒い。念の溜め着込んでおいて正解だったな、というははと思う。

鶴乃はというと、上着に薄いセーターを着込んでくるくらいで、首元は顕わだし、下半身に至っては、ミニスカートの下から細い生足が丸出しになっていた。

いろはが、寒くないんですか？と尋ねると、普段から体温が高いから寒くは無い、と豪語する。

相変わらずこの街に来てからアクシデントが多いなあ、というはは思う。

予定していた通りにこれっぽっちも動けなかった。本来なら午後には、ういと、灯花と、ねむが入院していた筈の神浜総合病院に向かう筈だったのだが、この時間帯ではもう開いていない。

「はあ……」

いろはは溜め息を吐いた。鶴乃と交友関係が築けたのは素直に嬉しい。しかし、自分には一刻も早く探さなくてはいけないものがあるのだ。今日は日曜日、明日は学校。今日が駄目だった場合、また次の土日まで引き伸ばさなければならぬ。

「♪」

目と鼻の先を歩く少女は鼻歌を唄いながら、軽快なステップを踏んでいた。

言いたいことを言えたので、気持ちが軽くなった様子だ。

こっちの事情も知らないで……とついつい恨めしく彼女の背中を睨んでしまう。そうする自分に余計に苛立った。

「はあ……」

「どうしたの？」

二度目の溜息が聞こえてしまったらしい。鶴乃が振り向いて怪訝そうに尋ねてくる。

「いえ、何も」



「もしかして、妹さんのこと？」

「!!」

慌てて首を振ったが、鶴乃には見透かされてしまったらしい。

「……いろはちゃんがこの街に来たのは、もしかして妹さんのこと？」

「はい」

根拠は無い。だが、この街で探していればういは必ず見つかるはずだ。

そう伝えると鶴乃ははにかんだ。

「じゃあ、ちゃんと見つけないとだねー」

鶴乃はくるりと半転していろはの眼前に躍り出るとその両手を掴み上げる。

「わたしも、出来る限りは協力するからさー」

その言葉にいろはの心が熱くなる。

自分は本当に報われている。この街の人は本当に良い人ばかりだ。

「あ、でも……」

「? どうしたの？」

いろはが顔を曇らせる。

「由比さん、ご家庭の事で大変なのに……協力して頂くのは悪いですよ」

「あー……」

鶴乃は罰が悪そうに頬を書いた。

「気にしない気にしない！ だってもうウチには」

——厄介な人は、いないから。

「……！ それって……」

最後の言葉に、背筋が冷える様な感覚。悪い予感がした。自分は踏み込んではいけない領域に足を入れてしまったのか。

だが、鶴乃は明るく笑う。

「あるきながら、話そうか」

鶴乃の表情は快晴の様に眩しかったか、声色は無機質に聞こえた。

☆

## 二年前、参京区——

「七海やちよが、来たって……?!」

祖母は追い出され、大叔父が家を取りまとめたことで、ようやく由比家が、そして鶴乃自身が落ち着きを取り戻した矢先だった。

大凡一ヶ月ぶりに商店街組合事務所へ足を運ぶと、寝耳に水の情報が入ってきた。

——治安維持部長、七海やちよ。

神浜市が誇る最強の魔法少女が、参京商店街にお忍びで来たと言うのだ。

訪れたのは、万々歳と同じく北側に店を構える関 幸四郎の呉服店。一体何の用事で

——と考えるまでも無かった。

十中八九、再開発の件だろう。

「でも……」

鶴乃はそこで眉を顰める。彼女の周囲には、商店街の経営者達が集まっていた。

顔ぶれを見て、反対派も賛成派も関係なく集まっていることに、ほんの少し安心した。

皆、なるべく気持ちを一つに纏めたいという気持ちが根底にあるのかもしれない。まだ、商店街の結東は解れを見せなかった。

「治安維持部の魔法少女は、いつ如何なる場合に於いても、行政の施策に参加させてはならないって……市条例で定められている筈だよな？」

神浜市のみならず、政治に魔法少女が参加する権利は現状認められていない。

政治家が魔法少女を——厳密に言えば、彼女たちの『魔法』を——利用しようものならば、たちまち社会からバッシングを受ける事になりかねないからだ。

魔法は大変便利だが、一歩間違えれば、自分の首を締めかねない諸刃の剣となりかねないため、彼女達を避ける政治家も多い。

また、魔法少女には投票権も認められていない。

過去に東京都のある大都市圏の区長選挙で、ある魔法少女のチームが、自分達が支持する政治家を『魔法』で不正に当選させた事例が過去に有ったからである。

以上の現状を踏まえて、治安維持部に所属する魔法少女も、その名が示す通り、治安維持以外の活動は厳禁とされている。

（——と、言っても、どこまでが『治安維持』の範囲なのか。その辺りの線引きが曖昧である為、各チームリーダーの裁量に委ねられているのだが……）

「確かにそうだが……」

鶴乃の言葉に頷くも、渋面を浮かべたのは小柄なメガネの老人・斉藤 正だ。

「副部長の梓みふゆは、サンシャイングループの御曹司。そして部長の七海やちよは両親が10年前に亡くなっている。成年後見人を買って出たのが……梓つむぎだ」

鶴乃の顔に分かりやすい苛立ちが浮かんだ。奥歯をギリと噛み締める。

「最初から、あちら側の人間って訳か……!」

その話を聞きながらも、『中山陶器店』中山三郎と定食屋『いなほ』の川野ケイ子は黙したまま、じつとパイプ椅子に座り込んでいた。

梓つむぎの合理的手段に反対派も当初は為す術無しかと思われたが、以外にも、彼らは根気良く反発を続けていた。中山と川野の元に、TOYAMA不動産や行政の職員が度々足を運んで立ち退きの交渉をするも、中々首を縦に振ろうとはしなかった。

——だが、その矢先、七海やちよが此処に訪れた。それが意味することは一つしかない。

「このままじゃ埒が開かないから、魔法少女を派遣した……?」

「俺はそうは思えねえな」

鶴乃の懐疑的な言葉に、即座に反論したのは『斉藤寝具店』店主・斉藤 司だ。

「七海やちよは平等主義者で有名だろ? それに、俺も仕事でよく中央区に行くが……あいつの支持者は多い。それこそ、幼稚園児のガキンチョからヨボヨボの婆さんまで

な。あんなに多くの住民から慕われてる人間が、行政に従って、此処の店を潰そうなんて思うか？」

「どうだか」

息子の訴えに、正は鼻で笑う。

「平等主義者でも所詮は人だ。恩人の頼みを無碍にはできんだろう」

「それは、どうだろうねえ？」

川野が反応を示した。こちらを向いた顔は、どこか懐かしそうに目を細めていた。

「七海ちゃんの小つちやい頃はよくお父さんに連れられて、こつちに買い物に来てたじゃないか」

「……………」

余計な事を——と、言いたげに川野を横目で睨む正。

「おっ！ 川野の婆さん、知ってるのかいっ？」

「おお知ってるとも。とんだじゃや馬でねえ、元気にはしやぎまわっては頻繁に迷子になって、お父さんを困らせていたよお。なっ、しょうちゃんっ！」

川野は快晴の様な笑顔を正に向ける。彼は渋い顔を浮かべていた。

「…………俺もその時の七海やちよは知ってるがね……。今は市役所の職員だろう」

正はあくまで冷静だった。

「このタイミングで此処に来た。しかも反対派の関の店にだ。十中八九再開発の交渉に  
違うない」

淡々と現実を突きつけてくる。

川野の顔から笑みが消えた。笑みを刻んでいた筈の口元がへの字に曲がる。忽ち、重い空気が場を支配した。

「魔法少女が相手ならばもはや俺らには何も太刀打ちはできません。大人しく諦めることだな」

「親父っ！」

「まだだっ!!」

父に苛立つ司の怒鳴り声を、鶴乃の必死の叫びが掻き消した！

「鶴ちゃんっ?!」

「まだ、諦めるのは早いよ!! 七海やちよが昔よくここに来てたっというのなら、相当思い入れがある筈だよ!! 説得の余地だっ……」

「七海やちよはあるだろうが、梓みふゆには無いぞ」

必死の訴えも、正の冷徹な言葉に一刀両断された。

七海やちよは下町育ちだが、梓みふゆは温室育ちの令嬢。恐らく下町の人間の気持など意には介さないだろう。

経営者達の顔が意気消沈する。

「確か……梓みふゆの魔法って……」

「ああ、聞いた所だと、『幻覚』って言ってたよな……」

「ああ、マジかあ……」

「俺達、このまま反発続けてたら、幻見せつけられるんかなあ……」

「その間に、店を取り壊された、なんてことになったら……」

「くっ……」

一様に頭を抱える老人達。鶴乃が苦々しく顔を歪ませる。為す術は無いのか――

そう思った矢先、ふと中山の顔を見ると、完全に顔が青褪めてしまっていた。

「中山の爺ちゃん、だいじよぶ？」

心配になって傍に寄る。中山は血の気の引いた顔を俯かせながら、何かをブツブツ祈るように唱えていた。

こんな中山の様子は見たこと無い。流石に心配になって、傍による。



——お鶴ちゃんが、……………だったら。

「えっ」

聞こえてきた言葉に、鶴乃の頭が一瞬、真っ白になった。

「今、なんて——」

思わず、問いかける。

中山は怯えた子供の様に情けない顔を鶴乃に向けると、懇願するように、はっきりとこう言った。

「お鶴ちゃんが、魔法少女だったらなあ……」

「!!」

それは、紛れも無い願望だった。

自分が予想もしていなかった、連中の立ち向かう事ができる、可能性の一つだった。衝撃の余り、息が止まりそうになった。

だが、瞬時に周囲の経営者達の敵意が中山に向けられる。

「おいつ!! 中山の爺さん!! 今自分が何を言ったかわかっているのか!!」  
「っ!？」

司の怒号が、場を震撼させた。中山がハッと顔を上げる。

自分は今、何て言った？

「魔法少女がどういいうものか知ってとるんか!! 『魔女』とかいう妖怪と永久に戦わされるんじゃぞ!!」

「鶴ちゃんがどんだけお前の事を心配してると思っとるんじゃ!!」

「わしらの鶴乃ちゃんに死ねつと言うんか!!」

司の激昂を皮切りに老人達が次々と怒りの矛を中山に突き刺す!

中山の顔が一気に焦燥に染まった。崖つぶちに追い込まれた精神がとんでもないことを口に出してしまった。

「自分らの為に若い女子おなごに犠牲になれ、というのかね。とんだ人でなしだな」

「そ、そうじゃないっ!」

普段の冷徹な正すらも、静かな怒りを目に滾らせていた。

一瞬で四面楚歌の状況に追い込まれた中山は震え慄くが、懸命に自分の意見を伝えた。  
「ただ……このまんまじゃあ……俺達の商店街は、いいようにされちまうって、思ってた。」

あ……」

中山は顔を俯かせて、再び首が下るほど重い溜息を吐いた。

「ごめんな。お鶴ちゃん、ごめん……」

心底申し訳無く、深々と頭を下げる中山に、鶴乃は何も言えなかった。

中山の状況を思えば、何かに縋り付きたくなるのは当然の感情だ。攻めることはできない。崖つぶちに立たされているのを知っていながら、何もできない自分に彼を攻める資格は無い。

「そろそろ……かねえ……」

その様子を眺めていた川野が何かを呟いたのがはつきり聞こえたが、今の鶴乃の頭には届かなかった。

☆

鶴乃は自宅に戻っていた。

ベッドに端座位になりながら両手を合わせて、瞑想を唱えていた。

「キュウベえ……どうか、来てください……」

願うのは、『願い事を伝えるだけ』で少女を魔法少女にしてくれるという獣の来訪だった。

自分の元に来てくれたことは一度も無い。

参京商店街を守るには、もう、あの獣にすぎり、七海やちよと同等の力を得るしかない。

「お願いします……。どうか……。来てください……。お願いします……。っ!!」

鶴乃は時間が許す限り強く念じた。一時間も、二時間も、ずっと念じ続けていた。

しかし――

「駄目だ……っ」

瞑想を止めた。これ以上続けても無駄だと悟ったからだ。

「どうして、来ないの……!?!」

わたしには、叶えたい願いもあるのに。魔法少女の力を必要としているのに!!

心の中で悲鳴を挙げるが、届く筈も無かった。

諦めるしかなかった――

鶴乃はこの時、後ろを振り向かなかつたのは幸か不幸か。

窓の向こう側——夜に閉ざされた暗闇の中で、真紅の光が二つ、妖しく瞬いていた。



## FILE #30 凡愚が喚き、足掻こうとも

【定食屋『いなほ』の川野ケイ子が、再開発に賛同した】

七海やちよと話し合つて、決心が付いたらしい。

川野は、サンシャイングループや市役所の職員が如何なる甘言を用いても聞く耳を持たず、時に役員クラスの人間が訪れ高圧的な交渉を用いる事もあつたそうだが、頑なに首を横に振り続けていた。

店を守ろうとする彼女の意志は、まるで堅牢な城を攻め落とすよりも、困難に思われ

た。  
しかし——そんな彼女でも、たった一人の魔法少女には敵わないのか。

【そろそろ●●かねえ……】

そうだ。あの時——

以前組合事務所に寄った時、中山が自分に頭を下げて謝った後、川野はこうボヤいたんだ。

「そろそろ『潮時』かねえ……」

☆

まるで、弦を力いっぱい引いてから放たれた矢じりの様に、商店街を一人の少女が猛然と飛び抜いていく。

住民達が不思議に感じて声を掛けてくるが、全く聞こえてはいなかった。

「必要な者はこんくらいか……あとは業者に頼むとするかね」

「川野の婆ちゃん!!」



目的の老婆は、自身の店の前で軽トラックに粗方の荷物を積み終えたところだった。視界に映つた途端に大声を掛けると、振り向いた。

「おお、鶴ちゃんかい？ 相変わらず元気だねえ」

鶴乃はニンマリと、普段どおりの温和な笑顔を向けてくる。今の鶴乃にはそれが何よりも辛かった。

「そんなこと言ってる場合じゃないよ！ 何してるの!？」

川野が今しがた行っていたのは、どう見ても引越しの荷造りにしか見えなかった。

鶴乃が老婆の縮こまった両肩を掴んで喚くが、彼女は、

「見ての通りさ」

普段通りの飄々とした態度で軽く流すだけだ。鶴乃の目が震える。

「ここを出ていくつもりなの!？」

思わず怒声を叩きつけていたが、老婆の笑みは崩れない。

コクリと頷くと、迷いなど一片も無さそうな明るい口調で言い放った。

「息子は継がんと言つとるし、何よりこの歳じゃあ、もう店を続けていく事は不可能だつて思つとつた。やちよちゃんと話して踏ん切りが付いたよ」

七海やちよに何をされたのか、ずっと気になっていたが、魔法を仕掛けられたり、脅された訳では無かつたらしい。少しだけホツとした。

でも——

「だけど、先祖代々守ってきたお店なんだよ。それを畳んで、置いていくなんて……」  
彼女の説得で、川野が店を潰す決心が付いたのは事実だ。

魔法少女に対する憎しみと、川野に対して何もできなかった無力感が複雑に混じり合った。

目尻に涙が溜まり、手のひらにギュツと爪を食い込ませる。

「最後までありがとねえ、鶴ちゃん」

だが、川野も鶴乃の気持ちは強く伝わっていたようだった。

彼女は鶴乃の溢れんばかりに波立つ感情を宥めるように、頭にそつと手を置く。

「でもねえ、古い物はいつか無くなり、新しいものに生まれ変わるもんなんだよ」

撫でながら、川野はそういった。鶴乃の目が愕然と見開く。

「だけど……!!」

「そうして時代は変わっていくのさ。あたしらの世代のモンがいつまでも土地にしがみついて、若者に迷惑掛けてちやいけないうよ。まあ、中山のジジイ達はまだ根を張ってた  
いようだけだね。いい加減枯れてる事に気付くべきなのさ」

川野は自分の店を一瞥した。遠くを見る様に目を細める。

昔、繁盛していた頃を思い出しているのか——鶴乃には分からなかったが、川野

の頭の中には、店に対する様々な思い出が行き交っているのかもしれない。

「ここいらが潮時なんだよ」

「……ばあちゃんは悔しくないの？」

「そりゃ、悔しいさ。護り続けてきた店を手放すんだからねえ」

「だったら!!」

猛烈に滾った熱に駆られて、気がつけば吠えていた。

——ここに残って、戦うべきじゃないか!!

抗って抗って、店を守り抜けば良い! 店を畳むのはしようがないとしても、せめて、取り壊せないようにするにはできる筈!!

「もぅいいのさ」

しかし、川野は冷淡に告げると、首を横に振った。

彼女の決心は揺るぎない。その一言で、鶴乃の身体から力が抜けた。

燃え上がった身体の熱が末端から急激に冷えていく。

「あとは、鶴ちゃんみたいなの若いモンと、商店街の皆に任せるよ」

川野はどこまでも笑顔だった。普段と変わらない軽口でそう告げると、軽トラックに乗り込む。

「じゃあね、鶴ちゃん」

その言葉を合図にするかのように、軽トラックは発進した。どんだん小さくなる軽トラックを、鶴乃はただ呆然と、見えなくなるまで見送った。それしか、彼女にしてあげられることは無かった。

☆

結局、自分は何だったのだろうか。

あれだけ必死になって頑張ったのに、全てが徒労に終わった。

努力すれば報われる——亡くなった祖父の言葉を信じて自分なりに真摯に努めてきた積もりだったのに、この仕打ちはあまりにも酷いじゃないか。

いや……寧ろ逆だ。よくよく考えたら、自分が勝手に急いで空回っていただけじゃないのか。

とんだ道化師だ。滑稽。可笑しすぎて、自分でも笑ってしまう。

足元が全て崩れ落ちた後はこういうものだろうか。

いつも身体がふわふわして、自分が現実にはいないような感覚。

もう希望も何も無い——自分には、何かを手に入れる力は無い。

生きる事に意義を見いだせない。かといって死ぬ勇気も無い。

なら、空気のようにふわふわと今を漂うのみ——

そんな鶴乃の感情を再び奮起させる事態が起きたのは、次の週末だった——

【『なかやま陶器店』の中山三郎が、再開発に賛同した】

これで、東と南の商店街の全経営者が、再開発に賛成した。あとは工事が行われるだけである。

その時の、中山の様子は、いつもと違った。

目が虚ろだった。

交渉したのは七海やちよだが、“何かされた”としか思えない。

或いは梓みふゆが手を回した……!?

☆

——限界だった。

「  
ツ!!!  
」

鶴乃の中で、理性の糸がプツリと、音を立てて切り落とされた。

瞳が、苛烈な激情を乗せて瞬く。

燃え盛る炎の様な猛烈な怒りを滾らせながら、少女は、商店街を疾駆する。

各店舗を駆け回り、老人達に話を聞いたところ、七海やちよはまだ近くにいららしい。

許せない。

奴らは、わたし達を弄んだ。

わたし達守るべき市民じゃ無かったのか。

許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない。

「——いた」

目的の人物は、商店街の北出入口を抜けて少し進んだところにある小さな公園に居た。

この『参京公園』は曾祖父が存命時に創られた場所だが、今は林に覆われてしまつて、遊具も緑に整備されておらず危険が有ることから、子供が遊びに来ることはまず無い。鶴乃は近くの茂みに隠れると、獲物を猟銃で狙う様に標的を睨みつける。

——七海やちよ。

だが、もう一人、少女を伴っている。白いショートカットヘアの淑女然とした彼女は、  
梓みふゆだ。

治安維持部が誇る魔法少女二人は、薄汚れたベンチに座り合つて何かを話し合つてい  
る。

みふゆが笑顔で何かを言った。すると、やちよの口元が弧を描く。

「……ツ!!」

二人が談笑を交わしていると気付いた瞬間、鶴乃の怒りが頭頂部まで噴き上がった。  
わたし達にあんな真似を働いておきながら、自分達は笑うのか。

許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない。

気がつけば、茂みから飛び出していた。

「——っ!?!」

「やっちゃん、下がって!!」

やちよの目が一瞬驚きに見開かれる。だが、みふゆは既に立ち上がって、彼女の前に身構えた。

闇雲に突撃してくる少女を視界にはつきり捉える。

「お前らあああああああああッ!!」

「っ」

眼前まで迫ってきた少女が拳を振り上げるが、みふゆは努めて冷静だった。

首を逸して躲すと、その腕を掴んで背中に捻じ曲げる。

「いっ」

少女の顔が苦痛に歪んだ。そのまま背後に回り込んで、体重を乗せると少女が俯せに倒れた。

「区民の方ですね？ ワタシ達は治安維持部の魔法少女です」

「っ……」

鶴乃が奥歯をギリリと噛んだ。魔法少女の単語を聞くだけで胃の中が荒れそうだと怒りで頭が狂いそうになる。

みふゆは鶴乃を地面に押さえつけながら、冷徹に告げた。



「身勝手な暴力行為は公務執行妨害と判断し」

「うるさい」

まるで獣の唸り声だ。

「何が、治安維持部だよ……わたしたちの事なんて、ちつとも守つてくれない癖に……!!」

華奢な少女のものとは思えぬ怒りに滲んだ声に、魔法少女二人は呆気に取られた。

「返して……返してよお……!!」

鶴乃は、地面に爪を突き立てる。

「川野の婆ちゃんと中山の爺ちゃんの店を……」

「!」

そこで何かを悟った様に、やちよが目を見開いた。

「返せ……ッ!!」

少女の腹の底から絞り上げた怨嗟の声に、やちよは何も言い返さなかつた。呆然として見るようにも見ええたし、魔法少女でない少女凡人を冷然と見下げているようにも見ええた。

頭上から、みふゆの無慈悲な声が振り下ろされる。

「貴女のお怒りはご尤もです。しかし、これは市が決定されたことです」

「……ッ」

鶴乃が僅かに顔を上げて、忌々しさを存分に孕んだ瞳を後ろに向けた。

みふゆの表情は強張っていた。何か決意を固めているかのような表情だった。

「これは貴方がた商店街に住まわれる皆様の救済処置でもあるのです。要求を受け入れて下されば、いずれ報われます」

「ふっ」

報われる——？ この現状のどこが？ 片腹痛くて、思わず笑みが溢れた。

「皆が代々守ってきた店を潰してる時点で、不幸にしてるじゃん……」

「こちらに非礼があるのは、受け入れます。ですが、今は耐えていただきたい」

「耐える？ 耐えろって何？ 自分達は何も失わない癖に……わたし達にはそうしろっ

て？」

「……っ！」

みふゆの眉間に皺が寄った。

母と父として住民が古くから築き上げてきた文化と歴史を壊すことに躊躇いが無かった訳ではない。この再開発計画だって、断腸の思いで、市長と掛け合い決行したものだ。少女の言葉は、両親を侮辱しているのも当然だった。

だが、彼女はもう形振り構わない。

「鬼ッ!! 悪魔ッ!! 人でなしッ!!」

力の限り、吠える。

「女神とか呼ばれていい気になってるけど本当は一人の人間の想いにすら寄り添えな  
いっ!! 大企業の言いなりになってわたし達を脅かすお前らは屑だツ!!」

——魔法少女、地獄に堕ちろ。

「っ」

鶴乃の唇が確かに、その言葉を刻んだ時、みふゆの目がキツと剥いた。

「それ以上の口答えは、我々に対する侮辱と……!」

魔法少女の非難は、最愛の親友の非難と同じだ。頭にカツと血が昇った。少女の腕を  
捻じ曲げる力に自然と力が入る。骨が軋む音を立てて、少女が呻き声を上げる。

「やめなさい、みふゆ」

だが、やちよがみふゆの肩を掴んで、押し留めた。

「やっちゃん、ですが——」

この少女は憎悪に支配されている。開放するのは危険だ、とアイコンタクトを送るが  
やちよは構わないと、首を横に振った。

「由比鶴乃さんですね、川野さんから貴女の事は聞き及んでいます」

「!」

やちよはみふゆを背中から退けると、地面に荒々しい爪痕を立てて這いつくばる鶴乃の前に、しやがみ込み、手を差し伸べた。

「あんたが、七海やちよか……!」

しかし、その手は強く払われた。

少女は力強く立ち上がると、猛然とした勢いで詰め寄った。

「教えてよ、ばあちゃんをどう脅したの……!?! 中山の爺ちゃんに、何をしたの……!?!」

「……」

やちよは何も答えない。ただ、鶴乃の顔を伺うようにじつと見つめていた。

鶴乃もじつと見つめ返す。

氷の様に冷えきった瞳の奥底で、どこか悲哀の感情が揺らいでいるように見えた。

「……っ?」

その意味が、よく分からなかった。

考えていると、やちよは上着のポケットから何かを取り出した。

「これは、私個人の連絡先です」

名刺だった。

「何かあれば、ご連絡ください。私はいつでも、貴方の言葉を待っています」

鶴乃が受け取ったのを確認すると、やちよは背を90度に倒して、深々とお辞儀した。

「この度は、部下が無礼を働いてしまい、誠に申し訳ありませんでした」

「やっちゃん」

何もそこまでする必要は無いと思った。

この少女は、魔法少女に対して、強い憎しみを抱いている。真剣に相手をしてしまえば、しつこいクレーマーとなり、治安維持部の業務に支障を与えかねない。

だが、

「みふゆ」

貴女も頭を下げなさい——

やちよはそうアイコンタクトを送ってきた。みふゆは澁面を浮かべながらも、

「……申し訳ありませんでした」

やちよと同じ角度に背を曲げて、謝った。

そして、二人は踵を返して去っていく。

それから、鶴乃がどうなったのか、二人が知る由も無かった——

そして、ここから先の話も、鶴乃が知らない話だった。

「やあ、見ていたよ、随分と白熱したようだね」

「見世物ではありませんよ」

「わかってるさ、只、あの由比鶴乃という子は今後どうするのか、と思つてね」  
「……」

「君たちも気付いているだろうが、彼女は強い因果を秘めている。将来、優秀な魔法少女になるだろう」

虚無の表情の中で、血の様に赤い目が爛々と輝いていた。

「今の内に、味方に引き入れて、治安維持部に内定を与えた方が、得じゃないのかい？」  
「それは確かに名案ですね、しかし……」

「最終的に決めるのは、あの子よ」

やちよとみふゆ——

神浜市の護りべたる二人の女神は、全ての根源たる魔法少女の孵化器に対して敵意にも近い強い眼差しを向けていた。

FILE #31 『それ』は降って落ちるもの

—— 米国人は生を崇めるが、我々は死を崇める。

あるテロ組織の主導者はそう言った。  
狂っている、と思った。  
でも、自分にはまだ遠い世界だと思っていた。



「君には魔法少女としての素質がある」

暗澹とした世界に、二つの赤い光を瞬かせながら、白い獣が嘯いた。

「本当なの……!?!」

少女が息を飲み込む。魔法少女がどういふ存在であるのかは知っている。

命を捨てて怪物と永遠に戦う使命を背負わされる——それを聞いて、恐怖を抱かない筈が無かった。

しかし、心の何処かで、彼がやってくるのを待ちわびてた自分が居た。

「さあ、願い事を言うといい」

「わたしは……」

少女は口を開いた。

「おじいちゃんが言ってたの。努力すればいつかは報われるって……でもダメ。色んなことを誰よりも努力しても、ちっとも報われない」

「君が身を置く状況はあまりにも悪すぎる。不運に恵まれていると言っただいぐらい

だ。どうだい？　いつそ逆にしてみる、というの？」

真紅が更に輝きを増したように見えたが、彼の真意は少女にとってはどうでもいとどだった。

「逆……？」

「“幸運”を願ってみる、ということさ」

「“幸運”……」

少女はその単語について想いを馳せる。

わたしにとっての幸運——商店街が権力に脅かされない、家族がバラバラにならない、何より万々歳が繁盛する。

それらが、叶うというのなら、わたしは——

「そうだね。それがいいよ」

「決まりだね。では、君の口から僕に告げるといい」

「わたしは——」

“幸運が欲しい”

☆

「——と言ったものの……」

店のカウンタートーブルを、除菌洗剤付きの布巾でせっせと磨きながら鶴乃は独りごちる。

魔法少女になって一週間が経過したが、鶴乃の身边で変わった様子は無い。万々歳の客の出入りも相変わらず疎らである。最近は掃除している時間の方がより増えたように感じた。

魔女という怪物とも未だ出会っていない。キュウベえ曰く、神浜市の魔女は他の地域よ

りも強いとのことだが、鶴乃の潜在能力は高いので、戦い方さえ分かれば難なく倒せるらしい。

魔女が出現を確認した場合、治安維持部に通報する義務が市条例で定められているが、鶴乃にその気は無い。商店街は自分の手で守ってみせる！———そう意気込んでいたのだが、魔女が出現しなければ話にならない。

「はあ〜……」

「お嬢さん、何かお困りですか？」

「そうなんだよお〜。……って誰っ!？」

父や大叔父のものでも無い声。びっくり仰天した鶴乃が振り向くと、口元を襟首で覆った、コート姿の女性が佇んでいた。

「今度此方で自営しようと考えている者ですな。視察に馳せ参じたのですが、道中、お腹が空いてしまいましたして一歩も動かせぬ……」

女性が捨て犬の様な悲しい目で鶴乃を見上げた。同時にお腹をクウ、と鳴らす。途端に鶴乃の顔が光り輝いた。

「あっ！ お客様ですねっ!! いらっしや〜っ!!」

「ラーメンと餃子をお願いしますか？」

「今すぐにつ!!」

笑顔でカウンターテーブルに案内すると、厨房に飛び込んだ。

やがて、女性は提供されたラーメンと餃子をペロリと平らげると、看板娘の顔を見つめる。

「……そういえば、お嬢さん」

「何ですか？」

「何かお困りの様ですが……もしかして、再開発の件ですか？」

凶星——言い当てられて鶴乃はギクリとしたが、笑って誤魔化した。

「あつはは、まあ、そんなところかな……？　でも、よく分かりましたねっ？」

「小生、こう見えても神浜総合病院で看護師を務めているので御座ります。故に、困っている人の顔は見ればすぐに分かります」

看護師さんってこんな変な喋り方だっけ？　と鶴乃は疑問に思ったが、女性の目は真剣そのものだ。ふざけている様子は微塵もない。

「お嬢さん。失礼ですが、掌を拝見してもよろしいですか？」

「はあ……いいですけど」

鶴乃は不審に思いながらも女性に向けて手を伸ばしてみる。

「ふむふむふむ………」

まるで診察するように、女性が掌を覗みつけた。

「あの、何か……ありました？」

「ふむ、こんな手相は見たことありません」

「えっ！」

看護師さんって手相を占うの!? と鶴乃はこれまた疑問に思ったが、自称看護師の女性性は、真摯な瞳で告げた。

「“三奇紋”ですな」

「さんき、もん？」

「運命線と太陽線と財運線が集まり一本の線になっている手相のことですな。お喜びくだされお嬢さん。今は不幸でも、近々大金が懐に舞い込んでくるのですな」

「大金って……いつ? どこから?」

お金が来ると聞いて素直に嬉しいが、大金持ちの知り合いなんていない訳で。だから、いつ、どこからそれがやってくるのか皆目検討もつかない。

「今すぐ、呼び込んでしまえばよろしいのですな」

女性には自信有り気にそう言い放つ。「えっ?」と目を丸くした。

「大将殿、僭越ながら、お嬢さんを暫し外にお連れしたいのですが、よろしいですか?」  
「ああ、いいですよ。今はそんなに忙しくないし」

女性は鶴乃に承諾も得ずに、店主の隼太郎に告げる。



何気なく新聞を眺めていた鶴乃の口から突然、ビックリ仰天の叫び声が上がった!!

「おい、どうしたっ!! 鶴っ!?!」

普段冷静な木次郎が慌てて飛び込んでくるのも無理はない。

「おんじ、あたった……あたったよお……!!」

鶴乃の声は感動のあまり震えていた。木次郎は「そんなことか」と言わんばかりに、はあ、と溜息。

「ああ、この前変な女に誘われて買ったつう宝くじか……。どうせ5千、良くて一万だろ?」

「ち、違うつ!! 見てっ!! とにかく見てッ!!!」

「お、おう」

新聞の内容を顔面に押し付けられた。目を細めて字面を確認すると――

『一等、8億円』



魂が抜けるかと思った。

「な、なんじやこりやあああああああああああああああああ!!??」

普段冷徹な彼ですら、目先に映った「コレ」にはビツクリ仰天せざるを得ない。

大声を聞いて、隼太郎と紀子が急いで駆けつけると、半乱狂になって走り回る鶴乃と、白目を剥いて仰向けに倒れて気を失っている木次郎の姿があった。

ある意味、地獄絵図であったのは想像に難くない。

☆

その夜。鶴乃と紀子が寝静まった後——鶴乃の父・隼太郎と、木次郎は小さな灯りが付いた居間で、話し合っていた。

内容は言うまでも無く、鶴乃が宝くじで当てた『8億円』の処遇に関してだ。

まず、木次郎が懸念したのは、不審な輩が万々歳に近寄ってくる、ということだ。し

つこい嫌がらせや、覚えの無いクレームを付けて、高額な金銭を要求してくるケースが必ず発生するだろう。

そして、何より魔法少女が跳梁跋扈する世の中である。参京区より大分離れた大東区では、『傭兵』と呼ばれるヤクザ御用達の魔法少女も多く居住しているのだ。金の為ならどんな汚れ仕事も引き受けると謂われている彼女達が、やってくる可能性も否定できない。

「鶴の為だ。万々歳の評判が落ちることは避けたい。隼、どんな奴が来ても毅然としてろよ」

「おう」

甥は胸を張って応える。

「それと、治安維持部にも相談しておけ。鶴には内緒でな」

「うん。あ、そうだ叔父さん」

「何だ？」

そこで、隼太郎は少し顔を俯かせた。

「このお金でさ……サンシャイングループから渡されたお金を返そうと思うんだ。地元の名士であるうちがいつまでもあいつらに恩を売ったまんまにする訳にもいかないしさあ」

かつて、隼太郎はサンシャイングループ代表・日秀源道の甘言に乗せられてしまい、祖父と父が作り上げてきた万々歳の秘伝のレシピを渡してしまった。

当時は父に対する復讐心が強く勝っていたのと、単純にお金欲しかったが故の軽率な行動だったが、結果として鶴乃を悲しませたことを、今は後悔している。

「確かにそうだが……」

甥の決意に木次郎は素直に頷くが、表情は硬いままだ。

「？ 叔父さん？ 何か浮かない顔してるねえ」

「いや、なんとなくなあく、引つかかるものがあつてな……」

木次郎は、喉仏を掻く仕草をした。

例えるなら、魚の小骨が此処に刺さつたような感覚だ。今ひとつ、現状を飲み込めない。

「でも、ビックリしたよなあ。いきなりこんな大金が舞い込んでくるなんて。ほんと、鶴乃はよくやつてくれたよ」

「……！」

鶴乃がよくやつた——その言葉に木次郎はピクリと反応する。

「ああ、鶴乃がつてよりは、あいつの『運』が、かな？」

（まさか……！）

木次郎の背筋に気色悪い虫がざわざわと這い出した。

しかし、そんな木次郎の不安など。

“幸運”を手に入れて、絶頂の最中にいた鶴乃の気持ちなど、一息で吹き消す様な――

大事件が起きた。

☆

B国の首都Iで爆撃テロが発生した。

自爆ベルトを装着した狂信者数名が、ショッピングモールに忍び込んで一斉に起爆させた。死傷者は200人以上だった。

でも、自分には、まだ関係無かった。

家に帰ればいつものように家族が待っている。

気が弱いけど温厚な父、頑固だけど頼もしい大叔父、お金にちよつとがめついけど明るい母、いつもの人達と変わりなく日々を過ごすことが、目まぐるしく変わる世界の中で唯一の心の支えだった。

これだけは失いたくない。誰にも奪わせない。

そう思っていた矢先だった――

「出て行けッ!! 出ていきやがれえッ!!」

鶴乃は目先の出来事に瞠目した。

玄関の入口から聞こえてくるのは大叔父の怒り狂った声。そして、直後に入り口から女性が吐き出された。

「お母さん!？」

何が起きたのか——考える前に鶴乃の足は動いていた。

「どうしたの!？」

母に駆け寄り、声を掛ける。あまりに力強く突き飛ばされたせいで、地面に体を強く打ち付けたらしい。顔面と手の甲に出来た赤い擦り傷が痛ましい。

「つ、鶴乃……!？」

母の顔は恐怖に怯えているようだった。鶴乃は咄嗟に玄関先に目を向ける。鬼の様な形相の木次郎が仁王立ちしていた。

「おんじ、どういふこと……!？」

普段冷徹な木次郎は滅多に感情を顕わにしない。ここまで女性相手に憤怒するのは、何か理由があるに違い無かった。

彼は、怒りの余り充血した瞳で母を見下げて言い放った。

「鶴、そいつはまた、裏切った」

彼は強い怒りに支配されているようだった。後ろから咄嗟に父が羽交い締めにする。

「叔父さん!! もう勘弁してくれっ!」

「黙れ隼ツ!!」

だが、父は呆気なく払いのけられて、尻もちをついてしまう。

凄まじい気迫を見せる叔父の姿に、鶴乃は困惑するしかない。  
だが、その原因が母にあるのなら――

「お母さん、何をしたの？」

問い詰める。母親は「ヒツ」と体を小さく震わせた。涙目を鶴乃に向ける。

その目が訴えていた。助けて、と――

「鶴、そいつにもう構うな」

だが、木次郎は酷く冷たい声で言い放った。鶴乃が唾然と目を見開く。

「えっ!？」

「そいつは、また遺品を質に入れようとしやがった」

鶴乃の全身が急激に冷えていった。

「今度は、なにを売ろうとしたの」

声から感情が抜けていく。今の自分は機械と同じだろう。

「家宝だ」

耳を疑った。

「家宝」――それはかつて、曾祖父が昭和天皇陛下から頂いた、万々歳への直筆

の感謝状に他ならない。

「つ、鶴乃……」

母は懇願するように鶴乃に縋り付こうとする。

纏わりつく母の体温が、異様に気色悪かった。

「……っ！」

強烈な嫌悪感を覚えて、その体を突き飛ばした。母が再び地面に転がる。

「……てよ……」

無様な姿のそれを自然と睨みつけていた。こいつはもう、母親じゃない。

「どっか行ってよ!!」

「……!?!」

母はたつた今耳にした事が信じられないといった、愕然とした形相で鶴乃を見つめていた。

まさか、娘にさえ拒絶されるとは夢にも思ってたらしい。

彼女の前に、一枚のカードが投げ込まれた。同時に木次郎の怒号が鳴り響く。

「そんなに金が欲しいのか!! だったらくれてやるっ!!」



「叔父さん、あれは……」

「8億だツ!!　そこに8億が入ってる!!　それを持って何処へでも行っちゃまえっ!!　その代わりもう二度と万々歳の暖簾を潜るなツ!!」

その言葉が母親の耳と心を貫いた。

彼女は、愕然と震えていた。

しばらく、彷徨う様な目で、冷たい表情の鶴乃と、落ちている銀行のカードを目配せしていたが——やがて、銀行のカードを拾った。

「鶴乃……」

銀行のカードをギユツと、愛おしそうに握りしめながら、娘を今一度見つめる、母だった者。

「……………」

——ああ、この人は結局、家族よりも、〃それ〃を選ぶのか。

鶴乃の心は、怒りも呆れもとうに超えて、一種の悟りの境地に入っていた。  
もう目の前の女が何をしようと、自分は何も心を動かすことは無い。

「ごめん、なさい」

彼女は、一度、頭を下げた。

同時にポツリと言った言葉が本心かどうかは分からなかった。

そして、ゆっくりと立ち上がると、何処かへと走り去ってしまふ。  
もう二度と家に来ることは無いだろう。

鶴乃は小さくなる背中を見送りながら、そう確信した。

☆

その後、鶴乃に母親から連絡が来たのは、一度だけだった。

「世界中を旅して、自分を見つめ直すそうと思う」——それだけ告げて、祖母の美江と海外旅行に出発した。

しかし、1億円も懸かる豪華客船で回る、というのがなんともあの二人らしかった。

世界旅行が無事に終えたとしても、身に染み付いた金の亡者としての理性は、決してあの二人から放れそうにない。

「その時は、こう思ったんだ。もうわたしって、二度とお母さんと、お婆ちゃんとも関わることは無いんだなって……」

「寂しく、無かったんですか……」

「寂しい、ってよりは、多分、ホツとしたんだと思う。もう亡くなつたひいお爺ちゃんとお爺ちゃんが脅かされることは無いんだなって」

鶴乃は振り向き、満面の笑みを向けたが――

「その気持ちだが、間違いだつたんだよ」

酷く乾いていて見えた。いろはは唾然と目を見開く。

「間違いつて……どういうことですか？」

「2016年の7月25日――何があつたのか覚えてる？」

「……………」

その日、大々的なニュースが四六時中報道されたことはいろはも鮮明に覚えている。

まさか、と思つた。

こんなことが有り得るのか。

だって、あの事件は――鶴乃の「願い」とは何も釣り合わないじゃないか。

「テロだよ」

その単語を聞きたく無かった。胃の中が、ずしりと鉛の様に重かった。

「イスラエルを拠点にしてる過激派の武装組織がさ……お母さんとお婆ちゃんに乗ってる豪華客船に潜伏してたんだ」

「お二人は、どうなつたんですか……？」

恐らく、聞くべきでは無かった。

しかし、興味の方が勝つてしまった。

「運が悪かつたんだと思う。一番に人質にされて」

——殺されちゃった。

「……っ！」

気持ち悪かった。興味本位で聞いてしまった自分が心底呪わしい。

喉元に酸っぱいものがこみ上げてきて、いろはは咄嗟に口を塞いだ。青ざめた顔で鶴乃を見つめる。

彼女は、相変わらず、乾いた笑みでそれを告げてくるのが、怖い。

「でもね、そのとき、わたし……悲しく無かったんだよ」

鶴乃が背を向けて、呟く。

「……え？」

「笑ったの」

一瞬、鶴乃が何を言ったのかよく分からなかった。

「お母さんとお婆ちゃんが殺されたのが、嬉しかったよ」

——ああ、そうか。

いろはは告げられた言葉に、ようやく理解した。

それが“願い”によつて齎された、由比鶴乃にとつての“幸運”だったのだ。

## FILE #32 鶴が掃き溜めに落ちる時

『これは、慈悲深き我らが神に祝福されし戦闘である』

画面の右端で、血の様に赤いターバンで顔を覆った重武装の男が、ライフルの様な大型の銃を掲げて、威圧に満ちた異国語で宣言する。画面下に表示されたのは日本語で訳された仰々しいテロップだ。

だが、鶴乃の意識は男に向かわなかった。

彼とは対極の位置——画面の左端に映る人物を凝視する。男と全く同じ格好だが、背丈は頭二つ分は小さい。ターバンで幾重にも巻かれた頭の後ろから、長い巻髪が腰まで伸びている。

『我らは、現世と決別し、神の御為に自身の敵によつて殺されることを望む』

ソプラノの様な高い声を聞いて、確信。

女性だった。背丈と声色から自分より幼い少女に違いなかった。

歌う様に口ずさんだのは、例えば熱心な修道者であろうとも、到底理解できそうにない、正に狂信とでも言うべき内容だった。

『私達は我らの宗教を守り、同胞を守り、故郷に勝利を捧げんが為に、これを遂行した。不浄と悪徳に満ちた異教徒共の撲滅を願った時、神は我らに祝福を賜りなされた。私は神に選ばれた純潔なる聖女である。私達はこの力を以てこの船に蔓延る不浄な不信仰者共を殲滅、及び服従させるものとする』

彼女の言葉は頭に入らなかった。

自分より幼い女の子が、テロリストに賛同し、何の罪も無い人々を悪と決めつけて皆殺しにしようとする——理解の範囲外。正に別世界の様な光景に、ただ呆然となつた。



少女は、重武装の男が掲げているのと同等のライフルを携えると、銃口を鶴乃に向け  
る。

……いや、正確には、彼女の視線の先にある誰かに突き付けた。

「!!」

カメラが引かれて、少女の標的が顕わになる。

一瞬、頭の中がぼう、と真つ白になった。

二人の人質。

お母さんと、お祖母ちゃんだ。

二人は、両手を後ろに回されていた。大方縛られているのだろう。

暴行されたのか、年の割に整っていた筈の相貌は、至るところが赤く腫れ上がっている。あまりにも痛ましくて目を背けたくなくなった。

『日本国政府に告げる』

少女は対極に立つ男と息を合わせたかの様に、大型のライフルの銃口を人質の後頭部に押し当てる。

標的は母だ。引き金に掛かる指に少し力を加えれば、頭なんて簡単に吹き飛ぶだろう。

『我らの神が我らを祝福なさった様に、貴方達も自国民を寵愛しているのであれば我ら

の要求に答えろ。貴国に我らの活動資金10億ドルを要求する。そして、貴国に我らが宗教の布教及び教会の設立を許されたい。さすれば、この者達に慈悲を与える』

彼女達の要求は、現実的に考えれば、到底認められるものではなかった。

豪華客船に搭乗していた日本人は母と祖母を含め37名。

脅迫を受けた日本政府は一時的なパニックと緊張状態に陥るが、首相が抵抗姿勢を主張。テロには屈さず、各国の軍隊と協働して人質救出に全力を掛けるように防衛省に指示した。

しかし、当時、客船が浮かんでいた海域が、独裁国家・A国の領海であった事が、仇となった。

A国大統領は、「自国の恥を世界に晒す真似はできない」、「テロリストには屈しない」と主張し、自国のみで過激派武装組織への徹底抗戦を宣言。

客船に多数の軍隊を強行させ、人質の救出よりも、テロリストの殲滅を優先した。

結果——

『過激派武装集団■■■■に人質にされていた日本人37名の内、由比紀子さんと津和吹美江さんですが、混乱の最中、命を落とされた模様です』

数日後のニュースでは、沈痛な面持ちのキャスターが淡々と状況を伝えた。

詳細によると、突入したトラキア軍隊に焦ったテロリストが、人質達を用済みと見做して尽く撃ち殺したらしい。

その中で、最初の犠牲者が、母と、祖母だった。

過激派武装組織は、この一件で活動を自粛する程の大打撃を受けたが、代わりに、世界各国の多くの民間人の命が犠牲になった。

「……………」

二人が死んだ。

その事実をテレビで目の当たりにした時、鶴乃は顔面に浮かんだ感情に驚くことになる。

「ふ」

口元が自然と弧を描いた。笑った。

家族が死んだのに、悲しいとか虚無感とかは無かった。寧ろ、胸の奥でずつつかえていたものがようやく取れたような安心感で満たされた。

「ふふ……」

ざまあみろ。これは罰だ。ひいおじいちゃんとおじいちゃんを汚そうとしたから、天

罰が下ったんだ。

笑い声が口元から溢れていく。もう、抑えきれなかった。

なんて心地がいいんだろう。

ずっと愛想笑いばかりしてきたから、心から笑えるなんて久しぶりだ。

ああ、自分はなんて、

—— “幸福” なんだろう。

☆

「幸運が欲しかったんだろう？ どうしてそんなにふさぎ込んでいるんだい」

窓も締め切り、真っ暗に閉ざされた部屋で、白い獣が語り掛ける。

今日は酷く不愉快だ。誰の声も聴きたくなかったのに、こいつだけは遠慮なく話しか

けてくる。

「うるさい」

鶴乃が乾いた瞳で彼を睨みつける。

今の彼女の心を満たしているのは、重すぎるぐらいの罪悪感と後悔だった。

あの後、二人の死を一生懸命悲しんだ——つもりだった。

だが、どれだけ泣こうと思っても、涙は出なかった。

「わたしは、望んでいなかった……おかあさんと、おばあちゃんが、死ぬことなんて」

「願ったのは君じゃないか？」

「……っ」

言われたことを即座に否定してやろうとしたが……言葉に詰まった。

代わりに唇を噛み締めて、怒りの表情を向けてやる。

「君たちの世界には『人の不幸は蜜の味』という諺があるね。それは真理だよ。一人が幸

せになるためには、誰かの不幸が必要になる。世界はそうしてバランスを取っているの

だからね」

「でも……お母さんとお婆ちゃんだった必要はっ！」

「彼女達は君に不幸を与えていた」

「っ」

淡々と告げる真実に、鶴乃は息を飲んだ。

「君が幸福になる為には、二人の排除無しに考えられなかった。僕は君の家庭環境を観察して、そう推測したが……違うのかい？」

「違わない。だけど、あの二人だけじゃないのだ。」

「過激派武装組織が、撃つたのは……」

「大勢の人も、巻き添えになった……」

何も関係の無い、罪の無い人までもが、自分の「願い」の犠牲になった。

そう考えた瞬間——悪寒が全身を際限なく走り回った。

ガタガタと震える体を抑えるように、自分の体を強く抱き締める。

「人間のそういうところがよく分からないな」

白い獣は呆れ返った様に首を振って、飄々と告げた。

「今までの君はニュースを観ていて、人が死ぬのを知る度に、そうやって悩んでいたのかい？ 悩まなかったろう？ 悩んでも、そこから何かした訳でもないだろう」

白い獣の顔は相変わらず虚無しか浮かんでいないが、声色はどこか嘲笑っているようにも聞こえて仕方なかった。無情な言葉を耳元で浴びせる。

「殺したければ殺せばいい。死にたければ死ねばいい。自分には関係ない。何処で何人死のうが君は興味無かった筈だ。それがどうして、今更になって悩むんだい」

もうやめてほしい。

これ以上、彼の言葉を聞いていたら、自分の奥底に押し込んだ黒いものが溢れかえつてきそうだ。

耳を塞ぐ。だが、彼の言葉は彼の口から紡ぎ出されたものではなかった。

『やれやれ、魔女と戦えなくなると僕たちとしても困るんだが……仕方ない、君がこれ以上沈み込まないように、あらかじめ伝えておこう』

まるで電波を受信したかの様に、頭の中で彼の声が響いた。

逃げようが無かった。

『君の因果は強い。だから、“幸運”はこれで終わりじゃない』

「え……？」

愕然と、目を見開いた。つまりは——

『これ以上誰かが不幸になつたとしても……気に病まないことだね。君には全く関係無いのだから』

——寧ろ、降ってきた幸運を、喜べばいい。

白い獣——キュウベえは、それだけ告げると、これ以上話は無いと言わんばかりに、背中を向けて去っていった。

そして、キュウベエの言った通りの展開になった。

誰かに「不幸」が下され、鶴乃に「幸運」が舞い降りた。

参京駅北口地区市街地再開発事業計画の實質的主導者、梓 つむぎと、その夫、梓

康弘が――

死んだのだ。

☆

「亡くなったって……!? どういうことですか!?!」

参京商店街近くの公園のベンチで鶴乃と並んで座っていたいろはが驚きの声を挙げ



る。

「休暇中に二人で出かけていた時に、魔女に襲われて……」

「やちよさんは……？」

「モデルの仕事と神浜市のPRも兼ねて東京に営業に行つてたんだって。ほんと、呑気なもんだよね。代わりに立ち向かったのが、やちよと同じチームメンバーだった安名メルと、雪野かなえだったけど……」

よほど強い魔女だったらしい。

その二人も死んだ。魔女の命と引き換えに。

「そんなことって……！」

「主導者が不在になったことで、参<sup>う</sup>京<sup>ち</sup>区に出向いてた工事業者は大混乱。反対派の人達もこれをチャンスと見て業者相手に暴動を起こしちゃってね……」

事態を重く見た総責任者の神浜市長は、現場の混乱を收拾するべく、サンシャイングループ代表の日秀源道と対談し、再開発計画の一時中止を提案。

源道もすぐに合意し、Divine Light of CITYの役員達に計画の無期限凍結を表明するように指示を出した。

無論、これによりサンシャイングループは事業に関わる予定だった各業者から強いバッシングと、多額の違約金を請求されることになるが、

「これで、サンシャイングループも少しは打撃を受けるかもって、期待してたんだけどね……」

鶴乃は溜息を吐いた。

源道は難無く処理したらしい。

「七海やちよと粹みふゆも遺族からメチャクチャ文句を言われてさ。相当参ってたみたい。先に粹みふゆが耐えきれなくなつて、治安維持部を辞めたの。それで、あいつは独りぼつちになつた。責任を恥じたのか、P R活動も営業も自粛して、魔女の退治だけに専念するようになった。ほんと、ざまあみろ、だよね」

ちなみに、P R活動と営業は一年後に再開させている。

これには市長や八雲みたま等、彼女を支持する人々の強い推しがあつたとの話だが、真相は不明だ。

「由比さん……!」

いろはが睨みつける。鶴乃は顔を俯かせた。

「ごめん、不謹慎だったよね。全部わたしの願いのせいなのに……そんなこと考えちゃう自分が余計に嫌になつてさ……」

後悔がぶり返してきたのか、鶴乃の肩がガタガタと震えだした。

「嫌になつて、嫌になつて……どうしようもなくなつて、わたし……とんでもないこと、

考えちゃった」

手のひらをじいっと見つめて、震える声で呟いた。

手の中をいろはは見る。何も無いが、鶴乃の目にはそこに何か映っているのかもしれない。

拭いたくても、拭いきれない。

見る度に、自分の後悔と罪悪を思い出させる程の、何かがある。

☆

鶴乃と万々歳を脅かすものは、綺麗さっぱりいなくなった。

鶴乃の力ではなく、彼女自身の「願い」によって――

じゃあ、七海やちよや梓みふゆと対抗する為に得た、この魔法少女の力はどうすればいいのだろう。

持て余す訳にはいかない。

参京区には都合よく魔法少女は自分一人しかいないから、人々を魔女から守る為に行使するのは良いだろう。

でも、それだけでは――

守り切れない。闇雲に目の前に現れた脅威に立ち向かっていくだけでは、治安維持部と同じだ。

脅威の根源を、断ち切らなければ、参京区に真の平穏は訪れない。

七海やちよは健在だ。

日秀源道も健在だ。

再開発計画も、いつまた再開されるのか分からない。

“力”への渴望が始まったのはその時だろうか。

ふと、もつと、強くならなければと思った。

誰よりも強くなれば――そう、“最強”と呼ばれるぐらいに自分が強くなれば、

脅威は恐れおののいて、自ずと引いていくだろう。

しかし、疑問は有った。

“力”をどうやって身に着けていけばいい？

そうだ――!!

答えはすぐに出た。考えるまでも無かった。

七海やちよが、神戸市の守護神と呼ばれているのは、彼女が市内で“最強”の魔法少女であるからに他ならない。

魔法少女にとつての強さの指標が単純に“力”を示すことなら——自分もそうしていけばいい。

そして、鶴は掃き溜めに落ちた。

だが、生憎、その鶴は利口だった。

掃き溜めに落ちた事をチャンスと捉えたのだ。

沈んでも、“そこ”から抜け出せれば自分ももっと美しい鶴になれると信じ切っていた。

☆

神戸市より、ずっと離れた街。 ● ● ● ● ● 市 ——

梅雨はとつくに過ぎたというのに、この日の空はどす黒く沈んだ暗雲に覆われていた。

叩きつける豪雨と、地鳴りがするほどの雷。どれだけ強靱な生命体であろうと、神が創り上げた大自然の力を目の当たりにすれば、怯え竦むしかない。

それが例え彼女達——神の摂理から逸脱した存在である——魔法少女であつたとしても。

だが、魔女が出現したなら、話は別だ。

雷雨に撃たれようが、討伐に向かわなくてはならない。それが彼女達の義務なのだから。

「はあ……はあ……」

夜闇の様な曇天の下で、一人の魔法少女が全身を散弾の様な豪雨に撃たれながら疾駆する。

彼女はこの街を護っている魔法少女チームのリーダーだ。

自分から買って出たつもりは無かったが、気づけば、最年長は彼女で、必然とまとめ役になっていた。

つい先ほど、他のメンバーを集めて、魔女を撃退したばかりだった。本当ならとくに安心して居る筈なのに、彼女の顔は、酷い焦燥感に塗れていた。

まるで、何か、悍ましいものに追われている様な――

「!!」

高層物の屋上から、次の建物の屋上へと飛び移ろうとした瞬間だった。

肩を、ギョツと掴まれた。

「ひ……」

魔法少女の顔が緊張で強張る。おそろおそろ振り向くと――狐の仮面が有った。

「っ!!」

逃げられない、と悟った瞬間、魔法少女は意を決した。

武器を取って臨戦態勢を構える。だが、独りで立ち向かえる自信は正直無かった。

何せ、他の仲間も、魔女を退治して解散した直後に――  
“奴”に襲われたのだから。

「だ、誰なの……!?!」

狐の仮面と白いフードを被り素顔を覆い隠した中華風の薄い衣装の少女は、武道家の

様に拳を構えると、意気揚々と名乗った。

「『決闘少女』だっ!!」

「っ!？」

「あんたがこの街で一番強い魔法少女だって聞いている。わたしと尋常に勝負しろ!!」

「何なの!?! 一体、何の目的が有ってこんな真似をつ!!」

魔法少女は困惑した。他の地区の魔法少女と有ったことは無いが、同じ魔法少女なら、仲間の筈だ。どうして仲間を襲う？

だが、狐の仮面の返答はにべもない。

「問答無用!! 覚悟っ!!」

決闘少女が飛び掛かる。

4人もの魔法少女を短時間で潰した相手だ。相当な手練れと見ていい。真正面から相手をしては勝負にならない。

「!」

ならば、ひたすら攻撃から逃げ続けて、隙を見せたら反撃する!

一瞬で頭の中で作戦を立てた魔法少女は、相手が目前まで迫ると、横に飛んで避けようとする。

しかし――



「グウツ!!」

動作がワンテンポ遅かった。

足が地面を蹴るよりも早く、決闘少女の飛び膝蹴りが腹部に綺麗に決まった。

「がはっ」

胃酸を撒き散らしながら、魔法少女の体が勢い良く転がった。

腹部を両手で抑え込んで、痛みに呻き、悶える。

だが、決闘少女は追撃を止めなかった。

魔法少女の体に馬乗りになると、拳を高く上げた。

「ひっ」

目に涙が浮かぶ。あれが振り下ろされたら、一溜りもない。

少女が咄嗟に顔を両手で守ろうとするが――

ヒュン、と風切り音が鳴った。

同時にめきり、と鈍い音が響いた。

何が起こったのか分からなかった。

「……!?!」

――最初は口がまったく動かないことが不思議だった。滝のような雨が自分の

口に次々と流れ込んでいくが、吐き出せない。

「っ!!」

瞳が大きく見開かれ驚愕に染まる。

相手の拳が振り下ろされてから5分くらいは経つたろうか、ようやく理解できた。

頬骨が、砕かれている。

「ああ……ああ……っ!!」

叫びたい程の激しい痛みが急激に襲い掛かってきた。魔法少女は顔面を抑えながらのたうちまわる。

だが、決闘少女はそんな魔法少女の悲痛な姿を見ても、一端も情け容赦を掛けようとは思わなかった。

馬乗りのまま、仮面の奥で冷ややかに光る目で見下げて、淡々と問いかける。

「認めてよ」

「……?」

魔法少女は、困惑した。一体何を?

「私が『最強』だって、認めてよ」

心の底が震えるような、威圧に満ちた声だった。無論、魔法少女に拒否権は無い。

『わかり……ました……』

喋れない代わりに、テレパシーで伝える。

『あなたが、最強の、魔法少女です……』

仮面の奥で、口元がニタリと歪んだ。

満悦だった。覚えのない高揚感を感じていた。

☆

「わたし、は……」

鶴乃の両手を見る目は、震えていた。

話を聞いていて、いろには手のひらに何が見えているのか、薄っすらとだが、理解できた気がした。

恐らく、【痛み】。

多くの魔法少女達を傷つけた時の返り血で、彼女の手は今も、汚れているのだ。

「自分勝手な理由で、多くの魔法少女を、傷つけた」

「どうして……!!」

いろはが強い眼差しをキツと向ける。

「どうして、そんなことをしたんですか!？」

いろはが声を荒げた。

鶴乃の悲しみと辛さは、痛い程分かる。だから、彼女の気持ちを非難するつもりは無い。  
い。

「だけど、その行為だけは間違っている。それだけは、否定しなければならなかった。

「力が、欲しかった」

「そんなことの為に……!」

馬鹿げているとハツキリ言ってやりたかった。

だが、それだけ鶴乃は追い詰められたのかと思うと、言葉に詰まった。

「そう、そんなことだった」

鶴乃が乾いた笑みをいろはに向けた。

「いろはちゃんと話してて、なんとなく気づいたの。あの時、わたしが求めていたのは、多分…… “力” なんかにじゃなかった」

「え？」

「わたしは……弱いままの自分を、消し去りたかった」

出会った時は炎の様に爛々と輝いていた瞳の朱色が、今は一息で消えそうな程に、小さく揺らいでいた。

☆

「決闘少女だ!! お前に勝ってわたしがこの町の『最強』になるっ!!」

「はあ!? あんた、何訳わからないこと言ってるのよっ!!」

「問答無用!! 覚悟!!」

次に戦った別の町を治める魔法少女も、存外呆気なかった。飛び掛かり、膝蹴りを見舞ったところ、鳩尾に鮮やかに決まった。

彼女はそのまま、呻きながら地面に転がり、苦しみだした。

「さあ、認めてよ。わたしが『最強』の魔法少女だってことを！」

「わけが、わから」

ない、などと言わせる気は無かった。頭を思いつきり踏みつけてやった。

メキメキと骨が軋む音が聞こえたが、何故か今の自分には心地いい響きだった。

「認めてよ」

威圧。踏みつける足に一層体重を掛ける。

「わかり………ました」

魔法少女は観念したのか、涙声でつぶやいた。

「あなたが、『最強』です」

二週間も経たない内に、潰した魔法少女は20人を超えていた。

最初の魔法少女を叩きのめした時から、ずっと、空は曇天が続いていたが、鶴乃の気持ちは晴れやかだった。快晴の中で優雅に空を飛んでる様な心地よさだった。

自分は強い。どんな魔法少女が相手だろうと、負けない。

——この日も、強い魔法少女を求めて、神浜より遥かに離れた街を訪れていた。風の噂に聞いたところでは、この街を治める魔法少女は、『今まで誰にも負けたことが無い』らしい。

楽しみで武者震いがしてきた。そんな魔法少女を倒せば、自分の「最強」は更に立証されるのだから。

この街に足を踏み入れた時、近くで魔女の気配を感じたが、10分後には無くなった。自分の求めている魔法少女が近くにいることは確かだった。

狐の仮面が曇天の街中を疾駆する。この辺りは、台風が近づいていると予報があったため、街中を歩いている一般人はいない。

戦うには都合が良かった。

「待ちなさいっ!!」

突然、背中が叩きつけられた。

咄嗟に振り向く。

「え……?」

思わず、仮面の下で口をぽかんと開けてしまった。

当然だろう。そこに居たのは紛れも無く魔法少女だったが、小さいのだ。

(この子が?)

この街を治める魔法少女だと言うのか——噂を聞いてから、ゴリラの様な怪物を想像していたが、拍子抜けだ。

少女の背丈は、自分より頭二つ分は小さい。青い瞳がクリクリと大きく瞬き、制服のような衣装越しの体格はとても痩せっぽちだ。

中学生……いや、年齢が二桁になったばかりの小学生だろうか。

「あなたが決闘少女ね！ 私と戦いなさい!!」

「つ!!」

鶴乃は更に驚きに目を見開いた。

初めてだ。まさか、向こうから戦いを挑まれるなんて思いもしなかった。

少女の顔は本気そのもので、腰からショートソードを取り出して構える。

「……………」

鶴乃もゆっくりと、拳を握りしめて、戦闘態勢を取った。

躊躇いが無かった訳じゃない。

だが、自分には「最強」になる使命がある。その為なら迷いや、甘さはとことん切り捨てる。非情に苛烈に、相手の心と体を粉碎する。

「挑まれたからには、どんな魔法少女だろうと、容赦しない……………」

鶴乃が気迫を込めた声で牽制するが、小さな少女は微塵も怯まない。



「あなたが『最強』だなんて、私は認めない」

「はっ？」

「いきなり襲って暴力を振るうような人が、強いとは思わない」

思わず仮面の下で笑みが零れそうになった。

この少女の言っていることは可笑しい。現に自分は強さを証明しているのだから。

決闘少女の噂は波の様に広がり、最近では自分を姿を見たら逃げ出す者もいる。出会った瞬間平服して、「あなたが最強です！」等と言い出す者もいる。

「何いってんの」

仮面の奥の瞳が冷たく輝いて、少女を捉える。

「魔法少女なんて、弱い奴らばかりだよ。力を見せつけたら、呆気なく引き下がる様な奴らばかり。それってさ……」

「……………」

黙って睨みつける少女の眉間に、皺が寄った。あからさまに嫌悪感を浮かべていた。

「わたしがそれだけ強いってことなんだよ！ 負けたことだつて一度も無い！ 今まで

戦った魔法少女の全てがわたしの力に平伏した！ みんな、わたしを『最強』って認め

たんだ!!」

「だから？」

「だから……って!？」

捲し立てる鶴乃の耳を、少女の冷え付いた言葉が貫いた。

「そんなの、強いつて言えるの? 人を傷つけて調子に乗ってるのって、カッコ悪いよ。」

そんなのただの不良じゃん」

「つ!!」

少女の言葉が、心の奥底に沈んでいた黒いものを噴き上げた。

まるで、溜め込んでいたものが爆発したように、鶴乃の足は飛び出していた。

———そこまで大口を切るなら、自分を納得させるだけの強さを持つてるんだろ  
う。

一瞬で距離を詰めると、勢いよく拳を振り抜いた。狙いは顔面。少女はショートソー  
ドで受け止めようとするが、

「あぐっ」

衝突。ぐちゃりと、気色悪い音が響いた。

鶴乃の予想に反して、拳は少女の顔面に深々と決まった。鼻骨を粉碎。少女の華奢な  
体が衝撃で吹き飛び、地面に何度も叩きつけられる。

「つ!!」

その光景を見て、我に返った。咄嗟に自分の拳を見る。少女の砕けた鼻からの血液で

真つ赤に染まっていた。

急に胸がずしりと重くなった。

自分は何をしている。こんな小さな子を痛めつけて、正しい筈が――

「っ！」

――いや、正しい。

首を振って、自分をそう戒める。自分は「最強」にならないといけない。甘さを捨てる<sup>さっき</sup>と先刻決めたばかりじゃないか。迷う必要なんてない。

「ぐう……」

鼻が非ぬ方向に曲がり、顔を血塗れにしながらも、少女はどうか体を起こそうとするが、叶わなかった。

眼線の先にある曇天が、狐の面で遮られる。

「っ!!」

――マウントを取られた!

少女が即座に察したのも束の間、決闘少女の拳が高く振り上がる。

この時点で、鶴乃は勝利を確信していた。あとはいつもどおり、負けを認めるまで甚振るだけだ。

毅然としていた少女の顔が、初めて恐怖に歪んだ。咄嗟に顔面を両腕で庇った。

「ああっ！」

ひゅ、と風切り音。

何かがパキリと折れる音が鳴り、少女が悲鳴を挙げる。

振り下ろされた拳は、少女の枯れ枝よりも細い両腕をいとも簡単に粉碎した。力を失った両腕が、だらりと地面に横たわる。

「認めてよ」

狐の仮面の奥から、低く震えた声が響く。

「わたしが『最強』だって、認めてよ」

「認めないっ!!」

「っ……っ」

だが、少女の瞳は一端の力を失っていないかった。

カツと見開いた眼力が、決闘少女を怯ませた。

「あなたみたいない酷い人を、強いなんて絶対に認めない!!」

「……っ?」

呆気に取られた。少女の力強い眼差しは、何処かで見覚えがあった。懐かしいけど、思い出したくなかったもの。

——そんな目で、見ないでよ。

自分の心を見透かされてるみたいで、気持ち悪い。だから、  
「認めてって、言ってるでしょ……」

スツ、と決闘少女の拳が振り上がった。

この一発で、終わりにする。

「そうやって、殴れば、認めて貰えるって思ってるの？」

「っ!!」

少女の言葉が再び自分の心に踏み込んだ。

苛立ちが沸点を超えた。このまま殴ってやろうと振り下ろした矢先だった。

「あなた、只のバカだよ!!」

——いつかは、分からない。

ただ、凄く古い記憶だった。自分がまだうんと小さかった頃だ。

物心が付いて1年ぐらいいしか経っていない頃かもしれない。

あの時から、自分は祖父が好きだった。

だから、だいすきなおじいちゃんのためなら、どんなこともできた。

「鶴、おめえ、なんであんな真似をしたんだ」

あのころから、おんじはきびしいひとだった。

「だってあいつ、おじいちゃんのこと、わるくいったんだもん」

でも、わたしにはうんとやさしかったから、ゆるしてもらっておもってた。

「バカ野郎!!」

おんじはどなった。かおを、パンツで、ひっぱたかれた。

わたしはしんじられなかった。なんでおこられたのかわからなかった。

「バカ野郎が……っ」

——あれからずっと経ったけど、おんじがわたしに怒ったのは、あれが最初で最

後だったと思う。

あの時のおんじの目は、とても怖かったけど、辛そうで、悲しそうだった。

少女に、トドメが刺されることはなかった。

鶴乃の拳は止まっていた。

拳が目の前にあるにも関わらず、少女は目を強く見開いたままだった。

その瞳には仮面を被る自分が映っていた。激情を宿した瞳で必死に何かを訴えているようだった。

自分への怒りと嫌悪。それしか無いと思ったがよく見ると、悲哀の色も混じって  
た。

自分を哀れんでいる様な視線が、小さい頃に一度だけ見た——大叔父の目と、重  
なった。

「う」

途端に、胃の奥底から猛烈な嘔気が昇り上がってきた。

少女の目が、異様に怖かった。

まるであの時のおんじの目のようで、叱られてるみたいで。

「うわあああつー！」

「ぐうっ!!」

だから、振り払うべく少女の顔を殴った。少女が気を失って目を開けなくなればい  
いと願って、何度も拳を小さな顔面に振り下ろす。

わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたし  
は強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わ  
たしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強  
い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わた  
たしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強  
い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わた  
しは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強い。わたしは強  
い。





拳を止めて振り向くと、少女と良く似た風貌の魔法少女が飛びかかってきた。驚いて少女の体から飛び退くと、魔法少女は少女の体に覆い被さり、泣き喚いた。

「もうこれ以上おねえちゃんを傷つけないでっ!!」

「おねえ……ちゃん……っ?」

愕然と目を見開く。

魔法少女は、お姉ちゃんと呼んだ少女よりも遥かに体が小さかった。

「おねえちゃん……体が弱いのに、わたしひとりじゃ心配だからっ……魔法少女になつてくれたの」

ひつくひつくと、見るも無惨な姉の体に顔を埋めて、魔法少女は懸命に訴える。

「周りに頼れる魔法少女はいなくなつて……でも、お姉ちゃん、いっしょうけんめい頑張つて、私と、この町を護り続けてきたんだよ……! それなのに……!!」

魔法少女が顔を上げた。涙に濡れた瞳が、激しい憎悪の色を纏つて鶴乃を睨みつける。

「なんなんだよお前え……っ! おねえちゃんが何か悪いことしたつてのかよお……

!!」

「あ……」

まるで野獣の様な気迫に、鶴乃の足が竦んだ。

そんな事情があったなんて微塵も考えて無かった。知らずに、自分の感情が向くまま、痛めつけてしまった。

罪悪感が一気に湧いてきて、足が震えてきた。

そこで妹が顔を上げる。怒りに満ちた形相で、吠えた。

「お前なんかよりおねえちゃんの方がよっほど強いよ!!」  
「最強」だよ!! おまえんかちつとも強くない!! ただの犯罪者だよ!!」

何も言い返すことができなかった。

妹が涙を撒き散らしながら、小石を拾って投げつけてくる。頭にされている腹部に勢いよく当たった。

「っ……」

少女の膂力は弱いのか、小石が当たった場所はちつとも痛く無かったが、代わりに胸がズキリと傷む。

気がつくくと、足が一步引いていた。

震えが全身に走ってくる。

自分はまた、間違えたのか。思い込むあまり、バカな真似をしてしまったのだろうか。だが、目の前の妹が、答えてくれる筈も無く。攻める様な瞳をギンツと瞬かせた。

「鬼、悪魔、人でなし」

耳を塞ぎたくなつた。

それらは、自分がかつて、七海やちよに言つた言葉じやなかつたのか。妹の口が、裂けそうなぐらいに大きく開いた。

地獄に墮ちろ——！！

「ひっ……」

体から一気に力が抜けた。腰が落ちてその場で尻もちを付いた。

「違う……わたしは……」

仮面の下で涙がとめどなく溢れだした。

「ただ、みんなを守りたいから……力が欲しかった、だけで……」  
分かつている。

そんな言葉はただの言い訳だ。信じてもらえる筈が無い。

妹の瞳が苛烈さを増した。到底信じられないと訴えている。

「そんなものの、為に」

妹が齒をぎりりと食いしばった。

「おねえちゃんを、殺そうとしたの……っ!?」

「えっ」

妹のその一言が、鶴乃の頭に何かを過ぎらせた。

『私は神に選ばれた純潔なる聖女である』

『私達はこの力を以てこの船に蔓延る不浄な不信仰者共を殲滅、及び服従させるものとする』



——  
ねえ、いろはちゃん。

——  
わたしって、くるってるのかな？





FILE #33 その手を掴んだ先に

——由比鶴

乃 追憶編 終了——

「狂っているのかどうかなんて、私には分かりませんし、決められません……」

膝の上に置いた拳を、ギョツ、と握り締めながら、いろはは顔を複雑そうに歪めた。鶴乃の行為は間違っている。許されるべきではない。彼女もそれが良く分かつているからこそ、自分の言葉を求めているのだ。

忌み嫌っている七海やちよの様に、断罪してほしいのかもしれない。

敬愛しているおんじのように、叱りつけてほしいのかもしれない。どちらも必要だろう。

「でも……」

自分が言うのは違うと思った。

今の鶴乃の笑顔は、出会った時に見せた陽の様な暖かさが溢れていない。乾いた瞳から伺い知れる感情は、辛そうで、悲しそうで……冷たかった。

だから、

「由比さんは、幸せになるべきだと思うんです」

「えっ!？」

自分が思った事を、素直に伝えると、鶴乃の顔が驚愕に染まった。

まるで理解できない、と言いたげに目をパチクリさせながら素っ頓狂な声を挙げる。「だっておかしいじゃないですかっ」

顔を俯かせながら、いろはは威勢良く声を張り上げた。

「大事なレシピは奪われて……地元が再開発されそうになって、人を集めて立ち向かうとしたけど、うまくいかなかった……信用してた家族からは裏切られて……仲が良かった人達は商店街から去って……魔法少女の力が欲しいところまで追い詰められてっ！」

膝の上の拳に、ポタポタと雫が落ちた。

「幸運を願ったのに、お母さんとお婆ちゃんが殺されちゃって……由比さん、みんなの為に思っって一生懸命頑張ったのに、ちつとも報われてないじゃないですか。こんなこと、おかしいですよっ」

「なに言ってるの、いろはちゃん？」

鶴乃が首を振った。そんなことを言っただけで欲しかったんじゃない。

「わたしは本当に自分勝手な奴で……魔法少女をたくさん、傷つけたんだよ。今だって、七海やちよが憎いって気持ちが変わらないの。潰したいって思ってる。こんなわたしが、幸せになる資格なんて……ないよ……」

いろはが瞳をカッと向けた。

「由比さんは、本当にそれでいいんですか!？」

「えっ……っ？」

叫ぶ様な声。

「ただ、その表情は怒りにも嫌悪にも染まって無くて、寧ろ、悲しみに満ちあふれていた事に、ビックリした。」

「自分勝手って言いましたよね？ だったら、今まで自分をちゃんと考えた事が一度だって有るんですか？ 私はそう思えない。由比さん、周りのことを気にしてばかりで、自分の事は二の次にしてる……！」

「違うよいろはちゃん！」

憐れまないで欲しかった。

「わたしは本当に自分勝手なんだよ！ 人の事なんてちつとも見てない！ なんでもかんでも自分で決めて突っ走っちゃうの!! だから……！」

そんな自己中心的な性格だから、母と祖母の死に笑った。

多くの魔法少女を……あの幼い姉妹の気持ちを考えられなくて、傷つけた。

掃き溜めに落ちた醜い人でなし——それが自分だ。

怒って欲しいし、避けて欲しい。どうせなら嫌って貰った方が気が楽だ。

「分かっています。人を傷つけたのは間違っていますし、誰かを恨むことだって、きっと違っ

てると思うんです。でも、由比さんっ！」

涙に濡れた桃色の二つの瞳が、強い熱を帯びていた。

「自分が間違ってるって分かってるのに、誰にも相談できないから治し方もわからなくて、結局……気持ちにも余裕が無くなって、間違つたまま突つ走るしかなくて……それで由比さんの欲しいものは手に入るんですか!?!」

「!?!」

鶴乃は息を飲んだ。そんなことを言われるなんて思いもしなかった。

「由比さんの願つた『幸せ』は、その先にあるんですか!?!」

「いろは、ちゃん……」

瞳が震えた。心がじん、と熱くなった。

この子の言葉は、どうしてこうも、突き刺さるんだろう。

「でも、わたしは……!?!」

「避けて欲しいなら、どうして私に『弟子にしてください』って頼んだんですか?」

「あ……」

「あの時の由比さんの笑顔、すっごく輝いてました! あれが本当の由比さんだって、今なら思えるんです! だから……由比さんが本当に取り戻したかったもの、なんとなく分かるんです」

うつすらとではあるが、気づいていた。

恐らく、鶴乃は耳を塞ぐかもしれない。首を振って否定するかもしれない。だけど、言わせて欲しい。

「本当は、誰かを頼りたかつたんですよね？ やちよさんを倒したかつたんじゃない……。今の自分を分かって貰って……元の、明るい自分に戻してほしかつたんですよね？」

「……………」

鶴乃は沈黙。

瞳はもう乾いていない。いろはと同じく、熱いもので濡れている。

「由比さん、私と一緒に考えましょう」

そつと、彼女の手が鶴乃の両肩に触れた。

「でも、一体どうしたらいいの……？」

その暖かさを素直に受け取れず、鶴乃は顔をクツと歪める。

沢山の人々を傷つけてきた罪深い自分だ。彼女の優しさに甘えていいのだろうか。

「それは……」

いろはもまた、言葉に澀んだ。

彼女は罪はあまりにも重すぎる。そう簡単に拭い落とせる訳ではないし、彼女の事を

今日知ったばかりの自分が一緒に背負ってあげることができない。

だが、目の前の鶴乃は、困っている。出口の無い迷路の中にたった一人で、必死に助けを求めている。

だから、どうにか救ってあげたかった。

(このままじゃ、由比さんは押し潰される……！ でも……)

市民で無い部外者の自分に、何ができる？

——環さん。夢に勝てよ。

「!!」

ふと、唐突に頭に過った言葉に、瞠目した。

「由比さん」

——そうだ。自分はまだ、彼女に言えることがあるんじゃないか。

いろはは、決意の表情を固めて、再び鶴乃に呼びかける。彼女は赤く腫れた瞳を向けた。

「……なに？」

濡れた両目からは、何かを期待している様な色が読み取れた。

「私、この街に来てまだ二日目ですけど、色んな人に出会ったんです」

「それで……？」

「図書館で知り合った作家の先生が、私にこう言ってくれました。今、ここにいる君が全てだ。自信を持って、前を向いて歩いて行って欲しいって……」

「そう、良かったね……」

羨ましい。

いろはは自分と違つて、いい子だから、そう言ってくれる人がいるんだろう。

でも、わたしには——

「私にとつても、ここに居る由比さんが全てなんです」

「えっ……！」

誰もいない——そう思つた直後に、そんな事を言われたものだから、仰天するか無かつた。

「過去を振り向くな、なんて言いませんし、言える資格なんてありません。だけど、辛い



物がある過去に、ずっと縋りついたままで居て欲しくないんです」

鶴乃には前を向いて欲しい。出会った時に見せた明るさで、周りを照らして欲しい。

「そう簡単に言わないでよ……！」

鶴乃が辛そうな顔をして拒絶するのは、予想できた。

当然だ。彼女にとつて、自分の言葉は独り善がりにはか聞こえないだろう。

“次の休日の時に、来ると良いわ。協力してあげるから”

「……！」

いろはは両膝に置いて手を固く握りしめる。自分は一人じゃない。この街に住む人々が、自分に勇気をくれた。

だから、自信を持って彼女にこう言える。

「……やちよさんが、言ってくれました」

「七海やちよが……う？」

「治安維持部はどんな魔法少女も、見捨てないって……。由比さん、やちよさんと一度話してみたらどうですか？」

「っ!？」

何を言い出すのだろう。

いろはの提案に、鶴乃は唾然とした。だが、凜とした顔つきからは、一端も冗談を言っているとは思えなかった。

「無理だよ。憎いし。あいつだつて参京区じもとのことを理解してないし……大企業の言いなりになつて、川野のばあちゃんと中山のじいちゃんを追い出したし……」

「わたしは、そうは思えません」

やちよが参京商店街の人々にそうしたのは、理由が有る筈だ。

—— 貴方達に、命を掛けて護る覚悟は、お有りですか？

—— 私は、治安維持部長として、市民の皆様一人ひとりの時間を無駄に取らせたくありません。皆様を家で待つてくださっているであろうご家族の皆様に、余計な心配や不安を与えたくはありません。

昨日、やちよが魔法少女を嫌悪する人達にはつきりそう伝えたのを、覚えてる。

集団に怯みも脅えも無く、はつきりと自分の意志を伝えられる彼女は、芯が強い女性だった。大企業に謙る人物とは思えなかった。

「あの人は……多分、不器用だし、口数も少ないけれど、この街に住む人々のことを大事にしているのは、確かだと思っただんです……。だから、川野さんと中山さんのことだつて、きつと、なんとかしてくれてますよ」

出会って間もない自分にすら、彼女は手を貸すと申し出た。だから、

「由比さんのことだつて、話せば必ず、分かってくれます」

「いろはちゃん……でも……」

鶴乃の顔は涙目を浮かべていて、未だに混迷が読み取れた。でも、今の自分なら、彼女に手を差し伸べられる。

いろはは、凜とした表情で、力強く言った。

「もし、由比さんがどうしても無理って言うのなら」

——私が、やちよさんと掛け合ってみます。

そこまで伝えると、鶴乃はポカンとした。

呆気に取りられたような、意外そうな表情で、目をパチクリさせた。

「え……？ いろはちゃん、それって大丈夫……？」

「大丈夫ですよ」

「いやでも、いろはちゃん、市民じゃないでしょ？ 事情だつてよく分かってないよね？」

本当に大丈夫なのか。いろはの事が心配になつてそう問いかけるが、彼女の顔は自信に満ち溢れていた。

「だから、いいんじゃないですか。やちよさんに気を使わないで話せるじゃないですか。由比さんにだつて同じです」

「あ……！」

そんな発想、思いもなかった。驚きのあまり、口が開いたままになった。

「だから由比さん。安心してください」

この街は、人情で溢れていると思う。手を差し伸べて親身になってくれた人達がい

る。

だから鶴乃にも、そういう人達が周りに居ることに気づいてほしい。それさえ分かってくれば、もう、迷わなくて済むかもしれない。

そう思つて、いろはは笑顔ではつきりと伝えた。

鶴乃はしばらく、呆然と口を開けたまま硬直していたが、

「——ぶ」

やがて、吹き出して、可笑しそうに笑つた。

「なんか、いろはちゃんつてさ」

いろはの笑顔に應えるように、鶴乃も屈託無い笑顔を見せて、話し始めた。

瞳は熱を取り戻していた。

「本当に、わたしの師匠になつてくれるかもしれない人だつたんだね！」

「へっ」

いろは、固まる。

その反応が、鶴乃の小さなイタズラ心に火を付けた。内心ニヤリとほくそ笑むと、

「これからもご指導、ご鞭撻、よろしくお願いします!! 環師匠!!」

「なっ……い！」

ビシツと敬礼して低い声を張る！

いろははそこで我に返った。自分が何を言われたのかようやく理解して、悲鳴を上げた。

「ええ!? そ、そこまでは……ちよつと!! や、やめてよ由比さくくんっ!!?」

「あっはっはっはっはっはっはっは!!」

混乱に慌てふためく彼女があまりにも可笑しくて、鶴乃は声を挙げて笑い飛ばした。

——ああ、楽しい。

人と話してて心から楽しいと思ったのは、何年ぶりだろうか。



696 FILE #34 Does Death dream a dream darker  
than Darkness?

n e s s ?  
a d r e a m  
F I L E # 3 4  
D o e s  
D e a t h  
d r e a m  
D a r k e r  
D e a t h  
d r e a m



由比家も夜19時を過ぎると、万々歳を一旦締めて夕食時になる。

理由は明白単純。

客が——仕事を終えた参京商店街の常連さん以外に——もう来ないからである。

「〜♪」

台所では一人の少女が鼻歌を唄いながら、料理を作っていた。

由比家の食事は当番制であり、大抵鶴乃か隼太郎、ときどき木次郎なのだが、今日は違った。

「どうかな……?」

少女は味噌汁をお玉で少し掬うと、お椀に入れて味見する。

「……うん、できた!」

味噌と塩加減、野菜の煮込み具合が丁度いい塩梅だ。自分が家でいつも作っている味噌汁が出来上がった。

「どうだ?」

と、そこで横から声。顔を向けると、無骨な表情の木次郎が鍋を覗き込んでいた。

「はい。お口に遭うか分かりませんが……」

「どら、ちよつくら味見させろ」

彼がそう言ったときには既に、味噌汁をお椀に掬い取っていた。ズズツ、と啜ると、眉間の皺がより深く刻まれる。

「ど、どうですか？」

「……………悪くねえな」

「本当ですかっ！」

パアツと顔を輝かせる。木次郎はフツと、口元に笑みを作った。

「俺にやあこんくらい味の味が丁度いい。鶴と隼の野郎はいつも濃い作りやがるからな……………」

木次郎曰く、二人が味噌汁を作ると何故か毎回豚汁になり、しかも、味噌が大量で塩辛く、油がギトギトしてるらしい。

「あはは……………」

この話に、苦笑い。

「それにしても、おめえ環っていったな？ さつきから見ただが、中々手際が良いじゃねえか。どうだ、家で住み込みで働く気はねえか？」

「えっ？」

いろはが目を丸くする。冗談を言われたのかと思つたが、木次郎の目は真剣すそのものだ。

「家に帰っても誰もいねえんだらう」

「……………」

既に事情は伝わっていたのか。

いろはの顔が曇る。確かに両親も妹もない自宅に帰っても、ひとりぼっち。寂しい  
思いをするだけだ。

「だったら家に来い。鶴乃もおめえの事あ気に入ってるみてえだし、話し相手ぐらいに  
はなつてやつてくれ。それに、店の方も華がありゃお客足が増えるしな」

「でも、そこまでして頂く必要は」

「頼れる時に頼れ。でないと……………」

木次郎はそこで顔を居間に向けた。いろはも吊られて彼と同じ方向を見遣ると、父親  
と楽しく談笑している鶴乃が見えた。

「あいつみてえになる」

「……………」

「まあ、おめえの人生だ。すぐにとは言わねえ。ゆっくり考えとくんな」

「はい……………」

木次郎はそう言うのと、のっそりとした足取りで居間に戻っていった。代わりに鶴乃が  
飛び込んでくる。

「ごめんねいろはちゃん！ お父さんと話してたら長引いちやって……！」

近寄ってくるなり、両手を合わせて申し訳無きそうに謝ってきた。

「夕飯全部作って貰っちゃって悪いね。何か手伝うことあるかな？」

「いえ、大丈夫ですよ。もう作り終えましたし」

「じゃあ、わたし食器とか運んどくよ」

「ありがとうございます。由比さん」

そう伝えると、鶴乃はやや苦笑い。

「うーん、家で由比さんって言われると訳わかんなくなっちゃうからさー、鶴乃でいいよ」

あ、というはは口を開ける。

確かにそうだ。ここは鶴乃の自宅である。みんな性が由比だから、由比さんなんて呼んだら鶴乃のお父さんもおんじさんも振り向いてしまう。

「あ、ごめんなさい……鶴乃さん」

言い直すいろはだったが、鶴乃はふるふると首を振った。

「いろはちゃんわたしのは『師匠』でしょ？」

「……えっ？」

鶴乃の言葉の意図が読めず、いろはは小首を傾げる。

「弟子に謙遜する師匠なんていないよ」

「じゃあ、鶴乃ちゃん」

「おっけー♪」

鶴乃はニカリと笑ってサムズアップすると、テキパキとした動作でいろはが作った料理や、小皿と箸、人数分のお茶碗にご飯を持って、居間に持っていく。

(ふふ……)

その動作がとても生き生きとしていて、いろはは自然と笑みを零した。

(鶴乃ちゃんとは、友達になれそう……)

味噌汁用の野菜を切った包丁を洗いながら、いろははそう考えた。

——友達といえば……。

いろははふと思いつく。どのくらい前の話かは覚えてない。

確か、ういが病院で入院している時だ。お見舞いに行つた時、同じ病室に居た灯花が『友達』についてこんなことを話していたっけ。

——親友っていい言葉だよ。だって天文学的な確率だもんね。



——お姉さまを含めるとわたくしたちはそれを3回も引き当ててるっ。

——だから、わたくしたちってここでこうして話してるだけで、天文学的な確率に選ばれたかんけーなんだよ？

『そうは思わないか？』

たまき



「……え？」

輝かしい記憶の中で、何かが割り込んできた。  
記憶が、ぐにやりと歪む。

刹那、暗転——

全ての光が遮られた。

『だから、気にするな』

全てが無機質な壁に覆われた冷たい箱の中で、声が囁く。  
『奪ったものごとなど、気にするな』

「違う」

声が震えた。

腰まで届く茶髪と白衣、そして、血溜まりの様な紅い瞳——彼女は、憎悪の対象  
だった。

どこか、知らない場所だった。

出口の無いトンネルの様な世界。

白い布切れの様な薄着を一枚だけ着た少女達が歩み寄ってくる。

人数は多い、2〜30人は居るだろうか。何れも目に生氣は無く、虚ろだった。

軍服を来た白人達が彼女たちを囲い恫喝を撒き散らしながら、何処かへと連れ去っていく。

英語だから何を喚いているのかさっぱりだ。だが、彼らの表情は焦燥に染まってお  
り、只ならぬ状況なのは理解できた。

少女たちは無防備だ。何も持っていない。しかし、彼らの手には銃が握られていた。  
つまり、彼女達の命は常に彼らの掌の中に有った。

「違う」

こんなことを思い出したかったんじゃない。

自分が思い出すべきは、雲一つ無い青空の様に、純粹で、晴れやかで、心が安らぐも  
のだった筈だ。

『お前と私は一緒だ』

しかし、そんな否定など無意味だと言わんばかりに、彼女の口元は残忍に吊り上がった。

心底愉しそうなのが、気に入らなかった。嫌悪の余り、反吐が喉元に溜まった。その笑みは酷薄で、無情で……正気を保った人間が浮かべるそれとは思えなかった。

「違う……！」

否定。しかし、言葉と対照的に自分の胸を大きく食らい付くしたのは、後悔の様な感情。

ガタガタと震える手が、水に濡れた包丁を強く握り締めていた。

軍人の一人が、自分の前に立ち止まり、敬礼する。

彼は感情を消した声で、言った。

『彼女達の――が決定した』

言葉は全て英語だったが、何を言ってるのかはつきりと理解できた。

『だから、親友なんだよ。たまき』

動揺。

包丁が一瞬だけ誰かの血に塗れて見えた。

だが、女性の言葉を懸命に頭から振り払う。

――違う。自分が友達だと思っていたのは、里見灯花と、柊ねむだ。

お前じゃない。

「誰が……!!」

刃先を、自分の喉元に向けた。

やがて、衣きれを纏った少女達は辿り着く。

異国の王族か大富豪が住んでいる立派な城門の様な、堅牢な鉄扉が立ち塞がった。率いていた軍人達が、二手に分かれて、扉の両サイドを引っ張って、開放した。

そこに入つてはいけない。

だが、彼女達は一切抵抗することなく、軍人の指示に従順のまま、中に入つていった。そこへ入れば、何をされるのか、分かっている筈だったのに——

懸命に伸ばされた手は、誰一人にも届くことは叶わず、扉は轟音を立てて閉ざされた。

『私とお前は、同じだから』

「誰がお前なんかとっ!!」

叫ぶ。

包丁が勢いよく首筋を貫いた。

☆

「いろはちゃん……何やってるの?」

「えっ?」

同類と思われるぐらいなら、死んでやる。

それが、あの女性に対する、私の答えだった。

だから、今の状況に困惑した。

「なになんて……?」

自分は、生きています。

刃先は喉元に刺さる寸前で止まっていた。目の前の少女が止めた。

「っ!!」

困惑するいろはに構わず、鶴乃は包丁をぶんどると、床に投げ捨てた。

「いろはちゃんっ!!」

両肩をグツと掴み、彼女は吠えた。

「今、自分が何をしたか分かってるの!?!」

「え……っ?」

あれ、そうだ。自分は何で——

「自分を刺そうとしてたんだよっ!?!」

——死のうとしてたんだっけ?

カツと怒る鶴乃の顔を見たら、頭の中が真っ白になった。

自分は何に、怒り狂いそうになっただろう。

死ぬほど何に後悔していたんだろう。

先程、鮮明に思い出せたものが、今は、霞み掛かった様に、ぼんやりとしている。

「何か悩んでるんだっけ? 一人を抱え込まないで!」

鶴乃の怒声がより一層激しく耳朶を打った。



そうだ。自分は何を悩んでいたんだっけ。いや、それ以前に……死にたくなる程抱え込んだものってあったっけ？

おねえちゃん  
わたしはね

“死神” と会う約束があるの

ある陣地の争奪で

春が物騒がしい明暗と共に還ってきて

林檎の花々の香りが宙を満たすところに

頭の中で、【いつもの声】が聞こえた。

「…………ツ!!」

途端に寒気がした。全身がガタガタと震えて抑えられない。

「そうだ、自分は――

「いろはちゃんっ!?!」

突然、何かの恐怖に脅え出す彼女の肩を抱き締め、鶴乃が声を掛ける。

焦点の合っていない桃色の瞳が、鶴乃の顔をじいつと見上げた。

ゆつくりと口が開かれる。

「鶴乃ちゃん、私……人を殺してるんです」

「……!?!」

震えた声で囁かれた告白に、鶴乃が啞然とするのは、言うまでも無かった。

―― いや、ちよつと待てよ。

鶴乃はそこで頭を回転させる。もしかしたら、それは彼女の思い込みかもしれない。

「魔法少女なら、誰だつてそう思う時はあるよ」

魔法に襲われた人を助けられなかったり、仲間の魔法少女が魔法に殺されたり……そんなものは魔法少女の世界では日常茶飯事だ。現に鶴乃も2年目。何度も体験したし、知り合いになった魔法少女達からも、しょつちゆう同じ体験談を聞いている。

それらの喪失を、自分のせいと思ひ込んでしまうのは致し方無いだろう。いろはの様な心の優しい子なら、尚更だ。

「二人か二人、死なせちゃったことはさ……。でも……。それは絶対にいろはちゃんだけ

のせいじゃないと思うよ」

なるべく優しい声でそう伝える。

しかし、

「一人や二人どころじゃないんです!!」

逆鱗に触れた。カツと怒りに歪んだ形相から悲鳴のような叫びが耳を貫いた。

「え……」

愕然とした。いろはは何を言おうとしているのだろう。

「10人……いや、もっと……20、30……違う」

虚空を向けるいろはの目には何が映っているのか——想像するのが怖かった。

「100人は……殺しているかもしれない……!」

「は?」

その告白は余りにも理解の範囲外過ぎた。呆気にとられるあまり、素つ頓狂が出た。

「鶴乃ちゃん……私って……何者?」  
「何者?」  
「なんですか……?」

苦しそうに鶴乃は顔を歪めた。

クツと齒噛みすると、吐き捨てる様に言い放った。

「大バカだよ……!」

「え?」

「わたし、自分の事バカな奴だっと思ってるけど……自分を傷つけようとするいろはちゃんは、もっとバカだよ……!」

言いながらも心の中で、ごめんなさい、と彼女に謝った。  
自分如きでは、それぐらいしか踏み込んでやれなかった。

☆

——数時間後……。

「どうした?」

「うん……よく寝てる。よっぽど疲れたんだろうね……」

いろははあの後、夕食も取らずに鶴乃のベッドで横になった。

今は、穏やかな寝息を立てて熟睡している。

「で、鶴。おめえはこれからどうするつもりだ?」

「どうするって?」

「環のことだ。ありやあ只者じゃねえぞ」

木次郎の目がキツと険しくなった。長く警察を務めていた彼の目からは、平凡な自分とは違うものが見えたのかもしれない。

「おんじには、どう見えたの?」

おんじは軽く頭を掻いた。言うべきか言うまいか迷っている時の動作だ。

「……………さつき、おめえが止めた時の奴の目……ありやあ間違いなえ」

人殺しの目だ、と木次郎は慥然と吐き捨てる。

「そんな……!!」

鶴乃が愕然と木次郎を見つめる。

彼もそんなことは言いたくなかったのか、仏頂面の中で僅かに苦味が伺えた。

「でも、いろはちゃんがそんなことを」

したなんて信じられないと言わなければかりに彼の言葉を否定しようとするが、  
「似たケースがあった」

即座に木次郎の言葉に遮られた。

「え……………」

「俺が若い頃の話だ。ある収容所の看守から聞いた話だが…………ある殺人犯がいてな。そいつあカツとなって女房を刺し殺しちまったそうだ」

「なんでそんなことを…………」

「仕事から帰ったら女房が男連れ込んで不倫してたんだとよ」

ま、仕方ねえよな——と、木次郎は嘆息混じりにそう付け加えた。

「だが、そいつは…………ムシヨにブチ込まれた時にやあ、穏やかな顔をしてやがったらしい」

「…………どういうこと？」

「てめえが女房を殺したことを、綺麗さっぱり忘れてたんだと」

?? 鶴乃の頭は混乱するばかりだ。そんな衝撃的な事を忘れられるのか。

「そいっただけじゃねえ。殺人犯の中にはてめえのやったことを忘れてたり、誰かがやったと思ひ込んでる奴が何人も居た。どうも、シヨックが大きすぎると、人間の脳みそつてのは悪いモンを取り除いちゃうらしいな」

木次郎は自分の頭をチョンチョンと指で突つつきながら、随分都合よくできてるもんだな、ここは——と、ボヤク。

「いろはちゃんも……その人達と同じって訳？」

「……まあ、俺が見た感じではな」

鶴乃はとんでもなく厄介な拾い物をしたものだ、木次郎はそこで溜息。

だが、直後に鶴乃の顔をしかと見つめた。

「俺は治安維持部に相談して、あいつを預けた方がいいと思うが……」

「そんなこと、させないよ！」

急に鶴乃が声を張り上げた。木次郎がジロリと睨みつける。

「七海やちよが憎いからか？」

「違う……」

鶴乃が首を振り払う。自分の感情なんて関係ない。



『そういえば、いろはちゃんって、両親はどんな人なの？』

『お父さんもお母さんも優しい人ですけど……いなくなっちゃいました』

『……え？』

『私がういを思い出したその日に、海外へ言っちゃったんです。ういのことので聞きたいことが、いっぱいあったのに……』

——だから、今私、ひとりぼっちなんです、と。はにかんだ笑みでそう言う彼女の顔が、妙に印象的だった。

「……！」

背中が震えた。この子はどこまで優しく強い子なんだろう。

「じゃあさ、うちに来なよ！」

ささやかでも良い。せめて少しでも彼女の力になってあげたい。

そう思ったせいなのか。

気がついたらそんな言葉が口をついて出ていた。

「本当は、いろはちゃんの方がよっぽど辛い筈なのに……わたしの事を本気で心配してくれたんだよ……」

「……………」

「話を真剣に聞いてくれて、これからを一緒に考えようって言うてくれたの。だからわたし、いろはちゃんにもそうしてあげたい。いろはちゃんが抱え込んでる苦しみがどれだけ深くて暗いものでも、一緒に寄り添って、向き合っただげたいの」

木次郎は険しい顔のまま聞いていたが、鶴乃のその言葉にコクリと顔を頷かせた。

「鶴、ようやくおめえの言葉から嘘が無くなった」

「え？」

「好きにしろ」

「……………」

鶴乃は目を見開いた。それってつまり——

「……相変わらず不器用だなあおんじは……」

鶴乃がふふつと笑みを零す。素直に「面倒見てやれ」と言えばいいものの。木次郎は凶星を付かれて恥ずかしくなったのか、フンツとそっぽを向いた。

「どうなったって俺は知らんからなっ」

「わかったよ、おんじ」

——いろは師匠の事を全力で支える。それが弟子のわたしの役目で、今、やるべき事だと思うから。

そう決意を固める鶴乃の瞳には、爛々と紅い情熱が瞬いていた。

724 FILE #34 Does Death dream a dream darker  
than Darkness?

FILE #34.5 その少女は何者でもなく (短編)

『では、己おれが引剥ひはぎしようと思むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ』

より

———芥川龍之介「羅生門」

——明朝 7:00頃

「いや〜!! 退屈だったトラック旅もフェリちゃんのお陰で楽しかったぜ!」

「オレもだよおつちゃん!」

雲一つ無い太陽だけが燦々と君臨する青空の下、高速道路の上で数多もの車が忙しく走っている。

その内の一つ、紅い塗装の4トトラックの中に二人は居た。

運転手を務めるのはガタイの良い壮年の男、助手席に座るのは金髪色白で一見西洋人にも見える少年……

「……でも、フェリちゃんが女の子って知ったときやあビックリしたよ……」

……いや、少女であった。

運転席の男は、彼女を雇ってすぐに立ち寄ったサービスエリアで、一目散に女子トイレへ駆け込んだのを鮮明に覚えている。

「邪魔だからチョン切っちゃったんだよ」

「くっくっ！ 寒気がするからそういうことは言わんでくれい」

少女——フェリシアはそうヘラヘラと笑って、そんな冗談を何気無くいうが、全ての男性からすれば、肝が冷える内容だ。

男は広い肩幅を縮こませながら、顔に青筋を浮かべてツツコむ。

「もうすぐ神浜だくくくく!!!」

窓を覗くと、神浜市の街並みが見えていた。東京都の中心にも匹敵するビル群——  
あれは間違いなく神浜町だ。

興奮したフェリシアは窓を開けると、顔を出して思いつきり叫ぶ。吹き付ける風が気持ち良かった。

「おっ、風来坊のフェリちゃんも故郷は恋しいのかい？」

それを横目でみる運転手も嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「そりゃ生まれたところだからなあ!!」

半月は離れていただろうか。

自由奔放に生きているが、年齢はまだ13歳。自分で思うのもなんだが、花も恥じらう可憐な乙女って奴なのだ。心はガラス細工の様に繊細だから、生まれ故郷を少しでも長く離れていたら、寂しさで身が朽ち果てそうだ。

——ということにしておくか。

「……神浜市ってさ、俺行くの初めてなんだよな〜」

「あん？ そうなのか？」

そんなフェリシアの思惑にちつとも気づかない運転手は、少々顔付きを顰めながらそうボヤク。

「魔法少女が100人は居るって話じゃねえか」

「正確には236人だけ。おっちゃん」

座椅子に座り直したフェリシアがスマホをいじりながら答える。その画面には神浜市で保護登録済みの魔法少女が一覧で掲載されていた。

「まあともかく。最初にそいつらの保護特区を国が創るって聞いたときやあ、魔法少女を知った時よりビビった訳だよ！ でもよお」

男はそこでニカツと笑う。

「10年経つてもなんともねえってこたあ、案外魔法少女ってのも大したことねえのかもしんねえなあっ!!」

男はそこでガツハツハと豪快に笑い声を飛ばす。

既にフェリシアはスマホから目を離して、頬杖を付きながら窓の外に広がる都会を眺めていた。

「大したこと、ねえ」



「おつとフェリちゃんは特別だぜ？」

「……いや、そういうことじゃねえよ」

運転手が笑いながらそう零すと、フェリシアは窓から目を逸らさぬまま、ぶつきらばうな返事を飛ばしてきた。

「どうしたんだいフェリちゃん？」

心なしか声色が急に冷えた気がする。運転手は怪訝に思いながら問いかけた。

「おつちゃん、ブラックパンサー党って知ってるか？」

「ブラックパンサー？ ああ、あの黒いタイツの猫みたいな奴か？」

「そりゃマーベル・コミックだろ。あと猫じゃなくて豹な」

すつとぼけた事を言う運転手に、フェリシアは振り向かないままツッコむ。

「ブラックパンサー党ってのは1966年に、カリフォルニア州でヒューイ・P・ニュー

トンとボビー・シールが、黒人を警察官から自衛するために結成された組織だ」

「は、博識だねえフェリちゃん……でもいきなり何でそんなことを」

運転手が尋ねようとするが、フェリシアは聞こえていないのか無視して続けた。

「革命による黒人解放を提唱し、アフリカ系アメリカ人に対し武装蜂起を呼びかけたんだって。それで1970年10月に、何が起きたと思う？」

「さ、さあ、外国のことなんておつちゃんにやあ分からねえよ……」

フェリシアの真意が全く読めず、運転手は困惑に顔を歪める。

体躯に反して、気弱な男だ、とフェリシアは運転手を冷やかに断定すると、

「デトロイトで暴動だ。シヨットガンで武装した黒人と警察官の銃撃戦が勃発した。最終的な死者は43人・負傷者は1189人・逮捕者は7200人も及んだそうだ」

何処か愉悅が混じってそうな声で、そう教えた。

運転手の顔が一気に青褪めた。つい先程まで和氣藹々としていた車内の雰囲気はどこに消えたのか。

感情を消した声で物騒な話を始めたフェリシアが、妙に怖かった。

「なあ、おっちゃん……ここでもいつか、デトロイトみてえなことが、起きるのかな」

人間と魔法少女の間で、さ——彼女の言葉には暗にそう込められていた。

「お、起きねえだろ」

少し驚いた。

答えに窮するかと思いきや即答が帰ってきたので、僅かに顔を戻して様子を見る。

運転手は額に浮き出た汗をハンカチで拭いながらも、声を吐き続けた。

「なんでそう思う？」

「だって、ここは日本だぜ？　どこよりも平和な国だからだよ。暴動なんて起きるわけねえじゃねえか。冗談キツイなくアハハ……」

冷や汗を拭いながらも、運転手の男は愛想笑い——無理やり浮かべているのか、大分引きつっている——を浮かべていた。

「ふーん」

——少しビビらせ過ぎたか。

運転手は気は弱いが、今のフェリシアにとっては大事な雇い主だ。少々申し訳無い事をしてしまったかな、とイタズラをし過ぎた子供のように罰が悪い顔を浮かべると、フェリシアは再び窓へと顔を向ける。

市街はもう近い。

(さあて、2週間ぶりの神浜だが……)

口元がニツと吊り上がった。

(少しは転がりこんできたのかねえ……オレが楽しめそうなものは……?)

瞳に猟奇が瞬く。口端が更に釣り上がり、明らかな愉悅が顔に描かれた。

——深月フェリシアは、魔法少女だ。

しかし、ただの魔法少女ではない。先程、運転手が彼女を『特別』と称した様に、同年代の魔法少女の中でも、彼女は大分奇異な存在だった。

だ か ら こ そ、 ごく一般的な人の倫理で動く魔法少女では、決して彼女を捉えられないのだ。

(年齢も善悪もクソもねえ……。魔法少女はどいつもこいつも平等なんだろう？ だからさあ……)

——本気で挑むオレを、満足させてみせろよ。

飢えを満たす物。

乾きを潤す者。

自分の中で滾り始める猟奇の衝動を鎮めてくれるのは誰だ？

胸中でそう呟くフェリシアの口元は、まるで獣だった。端まで裂けるくらいに釣り上がっていた。

——闇と光の邂逅まで、あと少し。



FILE #35 賢人達の座す園へ

次の日の9時30分——いろはは、神浜市役所前に訪れていた。

「……………」

眼前に聳え立つ灰色の巨大な建造物を、神妙な面持ちで見上げるいろは。まず最初にここに訪れた理由は言うまでもない。

現在、いろはは、両親が不在の身である。中学生の自分が今後の人生を生きていくには誰かの後見が必要不可欠だ。

よつて、父が自分を『託した』という人物——『夕霧青佐』を探そうと考えた。（お父さんとずっと友達だったって言うから……悪い人じゃないよね？）

頭の中で返ってくる筈も無い質問を浮かべるいろは。

不安はある。何せ、自分は全く知らない人なのだ。名前を見ても、男性か女性か判別が付かない。

（その人に、お父さんは私を託した……つまり、自分とお母さんが私のもとからいなくなってしまうのは、予想してたってこと……？）

お父さんとお母さんは一体、何を隠していたんだろう——？

（それに……）

シヨルダーバッグに手を突っ込み、一枚の紙を取り出す。

それは家で最期に見つけた、3枚目の置手紙。誰が書いたかは分からない。だが、中身を読んだ瞬間、最愛の妹が書いた物だと確信した。

（間違いない。お父さんとお母さんは『うい』のことを忘れてなかった……）

なら、何故、自分には黙っていたのか。

『うい』が最初からいなかったように振舞っていたのか。

(もしかして、私に“うい”のことを思い出して欲しくなかったから……?)  
心に暗い影が差した。

両親がそうしなければいけなかった理由は、何なのか。

(……………だめだ)

いろはそこで、迷いを断ち切る様に首を振った。

思考は完全に迷宮に入り込んでいた。このまま考えたって何も知らないままの自分では答えなんて出そうにない。

(鶴乃ちゃん……)

ふと、友人になつた少女の笑顔が頭に浮かんできた。

もし、彼女と一緒に居てくれたら、多少は気が紛れたかもしれない。

寧ろ、自分より頭の回転が早いから、悩みを打ち明けたらなんらかの回答は見出していたかもしれない。

——事実、万々歳を出る時、鶴乃もついていくと言い張った。

「いや、ダメ……」

でも、断った。

いろははそこで、“うい”からの置手紙を開き、決意を込めた瞳で内容を一行目を凝視する。



“ I have a rendezvous with Death ”

「これは、私のことなんだから、あんまり迷惑掛けられないよね」

誰にでもなくそう零しながら、いろは、万々歳を出発する前の一幕を思い返した。

「ひとりで行ってきます!」

「えっ?!」

決心を込めて放たれた一言に、彼女は大きな栗色の瞳をパチクリさせていた。  
「市役所に行くんでしょ? わたしもついていくつもりだったのに」

心配そうな顔で尋ねてくる鶴乃。いろはは首を振った。

「鶴乃ちゃんは学校がありますよね」

「そりやそうだけど。それはいろはちゃんもでしょ? 休ませといて、わたしは学校行

くつてのはなんだか……」

今日は月曜日だ。

本来中学生のいろはは、地元で学校に行かなければならないが、休んだ。

神戸市でやらなければいけないことが山積しているのだ。立ち止まっている暇は彼女に無い。

「無遅刻無欠席の記録があるんですよね？」

だが、それは鶴乃も同じである。いろはは彼女の両肩をグツと掴むと強い眼差しで言い放った！

「……誰から聞いたの」

ジト目を返す鶴乃。

「それは」

苦笑いしながら、顔を居間に向ける。そこには、隼太郎が恐る恐る手を挙げていた。

「お父さくん……」

鶴乃はガツクシ項垂れる。

「いや、ごめんなあ鶴乃。いろはちゃんがお前の事を教えてほしいって言うもんだから、つい……」

「結果的に、氣い遣わしてるじゃ……」

頭を抱える鶴乃。本当なら自分も休んでいろはの助けになりたかったのだ。

「でも、本当に一人で大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。市役所の方々には顔が知れてるし、なんとかありますって」

いろはは屈託ない笑みで答えた。これ以上、鶴乃に気を遣わせる訳にはいかない。

何より、これは自分の問題だ。自分で向き合って、解決していかなくてはいけない。

「でも……」

いろはの状況を思えば心配でならないのだ。鶴乃の顔が曇るが、いろははキツと顔を顰めて言い放った。

「神浜市では入学から卒業まで間無遅刻無欠席だった学生は市長から表彰されるんです

よね？」

「うっ……」

鶴乃が息を飲む。

「鶴乃ちゃん。私なんかの為に、万々歳を宣伝するチャンス逃したら、駄目ですよ！」

「それはそうだけど、けどいろはちゃんが……！ ああもう！」

鶴乃、限界。頭をわしゃわしゃとかき回す。

「全く、師匠には敵わないよ!! 分かった! いろはちゃんの好きにしていよ! だ

けど、無理はしないでね。絶対だよ!!」

「はいー」

必死で捲し立てる鶴乃に、いろははハッキリと応える。

「ふふ……」

「えへへ……」

だが、直後に二人は笑いあうのだった。

「……………」

そう、鶴乃には、使命がある。自分のワガママで振り回す訳にはいかない。

なお、夕霧青佐に関しては、由比一家に聞かなかった。

———というか、あえて尋ねなかつた。

父曰く、市役所に聞けば分かるということだから、神浜市民には違いない。なので、もしかしたら、顔が広そうな鶴乃と木次郎おんじさんは知ってたかもしれないのだ。

これに関しては、仕方無かつた。

心の優しい鶴乃である。おんじさんも同様に、心が広く面倒見の良い人物と見た。

なので、二人が先の人物を知つていようものなら、「案内してあげるから、ついてきて

「こい！」等と言い出しかねない。

(鶴乃ちゃんに学校を休ませる訳には、いかないもんね)

かといつて、お年寄りに気を遣わせるのも、何だか気が引けた。顔を見上げる。

市役所が、まるで堅牢な城塞の様に見えたが、いろはは強く見つめた。決意を込めて、右足を第一歩、踏み出——

「どうしたの?」

「はひゃつ!」

——せなかつた。

突然耳朵を貫いた透き通る声に、体がビクンツと飛び跳ねる!

聞き覚えのある声にまさか、と思い、首を後ろに旋回!

そこに居たのは……

「やちよさん!」

「こんにちは、環さん」

温和な笑みで挨拶する彼女を見て、思わず硬直。

神浜市きつての魔法少女にして、英雄——七海やちよがそこにいたのだ！

「……ああ！　こんにちはっ！」

いろはは慌てて姿勢を正して、お辞儀する。

途端、やちよは鋭い眼差しをジトリと向けた。

「……昨日来なかつたじゃない。待ってたのに」

「うっ……」

あからさまに苛立ちが感じられる声色に、いろははまずい、と息を飲んだ。

昨日の内に市役所へ行きたかったのは事実。

しかし、さなやら先生やら美代やら鶴乃やら……色んな人間に巻き込まれてなんやか

んやしている内に、一日があつと言う間に終わってしまったのだ。

「……っ！」

いろはの思考が一瞬でネガティブに染まる。

折角、神浜市最強の魔法少女の協力を取り付けられたというのに、自分から不意にし

てしまった。

これで、協力関係が終わってしまったら、自分は今後、どうしたら——

「……………」

しかし、直後。

蒼褪めた顔を俯かせて肩を震わせるいろはの耳に聞こえたのは——お叱りではなく、吹き出す声。

「えっ?」

「ふふ、冗談よ」

驚きに目を見開いた。顔を上げると、やちよの表情はとつくに崩れていた。

心底楽しそうにクスクスと笑いながら、彼女は言った。

「ごめんなさい。環さん、さつきから表情がコロコロ変わって可愛いから、つい、ね……」

「はあ……」

モデル業も兼ねるやちよに可愛いなんて言われたら、普通は飛び上がって喜ぶべきかもしれないが……素直に受け取れなかった。

自分は真剣なのに……からかわれるというか、弄ばれるような気がして、ちよっぴり不快だった。

「まあお互いに迷惑かけたからこれでおあいこつて……。それで、環さん。妹さんの捜索の件かしら?」

「それもあるんですけど……その前に探してる人がいるんです!」

いろははやちよの目を強く見つめて訴えた。

彼女なら神浜市の人々のことも詳しい筈だ!

「夕霧青佐という方を、ご存知ですか？」

「へっ?!? ………………」

その名前を聞いた途端、やちよの時が止まった。

というか、完全に呆気にとられた様子だった。

らしからぬ素つ頓狂な声を挙げた後、固まる。

「や、やちよさ〜ん?」

いろは、困惑。

眼前で呼びかけても、目の前で手を振っても反応ナシ。

……………どうしよう、やちよさんがマネキンみたいになってしまった。口をポカンと開け

たまま、直立不動状態だ。

「……………環さん。貴女、何者なの?」

呼びかけてから、一分掛かって、やちよから返事が来た。

声色が震えており、異様なほど困惑しているのは明らかだった。

「夕霧青佐さんを、知ってるんですか?!?」

いろはの期待が一気に膨れ上がった。飛び掛かるようにして食い下がると、やちよは



瞳を泳がせながらも、ポツリと答えた。

「知ってるも何も……」

——夕霧青佐は、市長よ。

「……………えっ?」

いろはの目が一瞬、点になる。

やちよが何を言ったのか、全く理解できなかった。

「ええつと……ちよつと待ってください……!」

慌てて肩に掛けているシヨルダーバッグに手を突っ込むと、父からの書置きを取り出して確認。

「お父さんは、私にこう書き残したんです。神戸市に居る『夕霧青佐』に会いなさいって……!」

自分で確認した後、やちよにも見せつける。やちよはそれを読んでこくりと頷くと、

「ええ。だから、夕霧青佐は市長の名前よ」



案内されたのは市役所の最上階の最奥部にある扉の前だった。よもや職員どころか神浜市民ではない自分が、僅か3日でこんなところに辿り着けるなんて夢にも思わなかった。

——どうしてこうなった。

高鳴る胸の鼓動を全身で感じながら、いろはは、そう叫びたい気持ちでいっぱいだった。

「そんなに緊張しなくて大丈夫よ」

「だけど……」

「市長は、とってもいい人だから」

やちよは微笑みながらそう言ってくれるものの、いろはの表情は優れない。

懸念があるからだ。

何せ、この扉の先に居る人物は300万人以上もの市民の頂点に立つ、偉大なる人物。

そんな「かの御方」から、これから庇護を受けて暮らすのだと思うと、申し訳無さと気恥ずかしさでいっぱいになる。

「もし、不安なら……私が一緒に立ち会いましょうか？」

「……ええ？」

逡巡するいろはにとって、まさに女神からの救いの手だ。

瞳に迷いが映り込む。役職付きの職員であるやちよが脇に居てくれれば心強い。

「……………」

「だけど——!!」

いろははそこで、両手の拳をグツと握り締める。

「……………いえ、私一人で大丈夫です」

鶴乃にも言った筈。これは自分の問題なのだ。だから、自分が向き合っていないかなくてはいいけない。

市長にしても、まだ見ぬ『大賢者様』にしても——

そう思ったいろはの顔に、言葉に、一切の迷いは無かった。

「それでこそよ。さあ、行ってらっしゃい！」

「はいっ！」

やちよもその言葉を期待していたのだろう。

決意を込めた彼女の瞳を見つめて、満足気に笑うと、執務室へ入るいろはの背中を見送った。

「失礼します」

執務室の扉を閉めると、気を付けをして、斜め45℃に会釈するいろは。

今しがたやちよが教えてくれた作法は、これで間違いない筈だ。

……正直、自信は無いけど。

——頭を上げて、前を見る。

神浜町の壮大な街並みが一望できるパノラマビューを背景に、その人物は鎮座していた。

木彫りのデスクの上で両手を組み、朗らかな笑みで自分を迎えてくれるその貴婦人の雰囲気は温和そのもので、いろはは思わずほっと安堵の息を付いた。

それも当然。多忙極まる市長と言うからには、もつと般若の様な険しい顔付きをしていると思っていたから、拍子抜けした。

(それに……)

いろはは、目を細めて貴婦人の顔をしっかりと見据える。

顔だけ見れば、何の変哲も無い——それこそ、近所にいそうな——初老のおばちゃんそのものだ。

それも胸の緊張を解した要因の一つだが……貴婦人の顔を見てると、何処か懐かしい感じがしたのだ。

「どうぞで。こちらへいらつしやい」

「はいっ」

考えていると、向こうから声が飛んできた。

声色もまた穏やかだが、執務室全体に響くほどのハッキリとした声量だった。

促されるまま、いろはは直進する。

「っ!？」

——刹那。

何かの気配が、頭に突き刺さった。思わずギョツと立ち止まって、咄嗟に部屋の隅っここに目を向ける。

(あれ?)

……誰もいない。

向いた方向には、市長のものであろう木彫りのクローゼットがあるだけだ。

「……………」

何だったんだろうか。今の感覚は？

いろはは若干不審に思うが、すぐに顔を戻して、貴婦人の間近へと歩み寄った。

「あつ…………初めまして。私……………」

「久しぶりね。環いろはさん」

「!! 私と会ったことがあるんですか!?!」

久しぶりと言われた事に、いろははビックリして、机に身を乗り出した。

市長は嬉しそうに答える。

「ええ、むかあし、ね。…………とはいっても、2歳ぐらいだったかしら？ うんと小っちゃかったから、覚えてないかもしれないけど」

彼女の顔を見て懐かしい感じがしたのは、当たり前だった。記憶には無いが、体が彼女を覚えていたのだろうか？

「あの、私……………」

「分かっています」

自分の事情をどう話すべきか——その悩みは杞憂だった。

市長は眼鏡を指でクイツと直すと、急に真面目ぶった顔になる。切れ長の瞳を更に鋭

利にして、いろはに向けた。

「事情は全て輝きいち一さんと曜ひかりさんから聞いてるわ。だから、安心して頂戴！」

力強くも優しい言葉は、今のいろはにとって何よりの救いだ。

しかし、素直に喜べない。

「じゃあ……やっぱり、お父さんとお母さんは……」

「……ええ。お二人は、こうなることを予期していたわ……。本当に、残念だったわね……」

顔を俯かせ、ポツリと呟くいろはに、市長も沈痛そうな面持ちでそう言った。

「……あの、お父さんとお母さんは、どうして……？」

自分を置いて家を出て行ってしまったのか。自分に何を隠しているのか。何より、今、どうしているのか。

「……知りたい？」

「勿論です」

いろはは迷わずそう訴えるも、市長の顔には逡巡が張り付いた。

「……聞けば、もつと悲しい思いをするかもしれないわ」

「それでも……お父さんとお母さんの事を知りたいんです！ 家族なのに……知らないことがあるなんて、嫌ですから……っ！」



「……」

仕方無い。そういったげな表情で市長は、顔を右に向けると、

「(ト)ろさん」

「えっ?」

誰かの名前を呼んだ。いろはも咄嗟に市長と同じ方向に目を向けると、ギョツとした。

少々特徴的な髪形をした、黒いスーツを纏った秘書の様な女性が佇んでいたからだ。市長に集中する余り、彼女の気配には全く気づけなかった。

こころ、と呼ばれた女性はいろはの眼前まで歩み寄ってくる。

スーツ越しでもスタイルの良さが目立ち、同じ女性として羨ましい。代わりに、顔付きはまだまだ幼くて、年齢の方は自分と同じか、少し上くらいに見えた。

「ひさしぶりだね。いろはちゃん!」

「……えっ?!」

黒いスーツ姿の少女は、自分を見るなり屈託ない笑顔を浮かべてそう呼んできた。

だが、いろはは仰天の余り目をパチクリさせる。

何故なら、彼女の事も、全く記憶に無かったからだ。

「そっか、覚えてないか。そりや当然だよね……。あの時、いろはちゃん、まだ二歳ぐらいだったし……」

「……貴女は？」

「私は栗根あわねこころ。市長の秘書を務めているの」

「秘書？」

こころはふふ、とお日様の様に笑うと目を細めた。

「魔法少女が世界中に知れ渡ってるご時世だからね。政治家も企業のお偉いさんも、自分の身を守ることで必死なんだよ」

未だに世界中では魔法少女に対して、嫌疑的な声が少なからず挙がっている。

超常的な力を持つ女性が太古から社会に紛れ込んでいた、と知れば、人々が恐怖を覚えるのは必然。

『人倫保護団体』の様に、魔法少女の差別・一般社会からの排除を掲げる過激派の組織も、世界各地に点在している。

しかし——こころの言う通り、世界は、魔法少女に疑念を抱きながらも、魔法少

女に頼らざるを得ない状況にあった。

何せ、人々には、『魔法』に対抗しゆる手段が無いのだ。

魔女は勿論、悪意を持った魔法少女がいつ、襲いかかってくるか分からない。

特に魔法少女の存在を知って焦ったのが、実業家や政治家といった有力者だった。彼女達の魔法によって、自分の組織が掌握されたり、機密情報が世界中に漏洩されるかもしれない。

以上の危機感から、魔法少女を組織の警備員・及び自らのボディガードとして雇う者が急激に増えた。

——日本でも、地方公共団体の代表・大手の企業家・政府関係者は、魔法少女を警護役として個別に雇うことが義務づけられている。

「へえ……！」

「まあ、そういった人達の下で働けるのは名誉なんだけど……資格が必要なんだ」

ボディガードの資格を得るには、品行方正且つ清廉潔白な精神が求められた。

・魔法少女の経験が2年以上。

・契約してから現在まで、人命救助及び、魔女の退治のみに専念。

・地域及び社会貢献への強い関心及び、高い奉仕精神。

・神戸市でソウルジエムの『調整』済み。

上記4つの条件をクリアし、且つ数々のテストや課題を乗り越えた者に資格証が配布される、という。

「あの……栗根さんは、お父さんとお母さんの事を知ってるんですか？」

質問を投げかけた途端、こころの相貌の陽に影が差した。

「うん。私のお父さんと昔から仲が良かったからね。それに輝一さんには、つらい時、よく助けて貰ったし……」

それもいろはの知らぬ所であった。

両親は以前から、自分のことを周囲に公言するような人間では無いと思っていたが、ここままで秘密が多いとは思わなかった。

「今、二人は、どうしてるんですか……?」

恐る恐る尋ねると、こころの顔が悔しそうにくっ、と歪んだ。

胸がざわついた。嫌な予感がする。

「多分、もういなくなってる」

「……え?」

掠れた声に、いろはの目は大きく見開いた。

……心臓が、バクバクと激しく脈打つ。治まりそうにない。

「攫われたの。サンシャイングループに……」

ぞくり、と——背筋が急激に冷えた。

心臓が張り裂けそうだった。

F I L E # 3 6 戦う為の第一歩

市長とこころが、詳細を話してくれた。

- ・父は家を出る前に、市長に『いろはを頼みます』とメールを送っていたこと。
- ・両親が向かった先は、成田空港であり、本当に海外へ向かおうとしていたこと。
- ・市長がこころを派遣し、両親の護衛役として付けさせていたこと。
- ・しかし、「これ以上巻き込む訳にはいかない」と父に言われ、糶谷駅で一方的に別れを持ち出されたこと。

- ・それでも、心配になって影から両親に付いていったこと。

- ・路地裏で、両親が不審な男性の集団に襲われた事。その集団の正体がサンシャイングループであったこと。

「サンシャイングループは、どうして……私のお父さんとお母さんを……？」

「それが、わからないの……。私、助けようと思ったんだけど……っ」

こころの顔が更に悲痛に歪んだ。

黒服達からいろはの両親を助けようと、飛び出そうとした矢先だった。

——意識を失った。

気が付いたら……周りに誰もいなかった。

「多分……奴らに加担する魔法少女が近くにいたんだと思う。私、全く気づけなくて

……！」

ぎゆう、と握りしめた拳がワナワナと震える。

あの時、自分もつと気を張っていれば——!!

何度その後悔してももう遅い。自分の無力さが心の底から情けなくて堪らなかつた。

「ごめんなさい……いろはちゃん……っ！」

何より、目の前の彼女に申し訳が立たない。

溢れた涙が止めどなく頬を伝って、床にポタポタと落ちていく。

「ごめんなさい……っ！」

「ッ!!」

いろはの瞳がギツと鋭利に瞬いた!

二人に背を向けると、猛然と執務室の扉まで歩いていく。

「どこにいくつもりかしら?」

市長は至極平静を保ったまま、いろはの背中に言葉突き刺した。

ドアノブに伸びた手が、掴む寸前でピタリと止まる。

「どこって、決まってるじゃないですか……」

振り向かず答える。

その震えた声は、今にも溢れださんばかりの激情をどうにか喉元で抑えてる様だつた。



市長は瞳を鋭くして、いろはの背中をじつと見つめる。

「警察に、訴えるんです」

「っ!？」

いろはの言葉に、こころがギョツと目を剥いた。

「やめなさい」

市長は更に言葉を突き刺した。

「どうしてですか？ だって、犯罪じゃないですか。こんなこと……!」

「貴女のご両親が、望んでいないからよ」

いろはの手が微かに震えた。市長は続ける。

「輝一さんと曜さんは、貴女がこの街で健やかに生きてくれることを望んでいる」

だから、二人は娘を、彼女に託した。

大勢の魔法少女を庇護し、治安維持部を統括する彼女なら、娘の身は絶対に安全と踏んだから。

「もし、貴女が戦うことを選べば……二人は悲しむかもしれないわ」

「だけど」

「それに……サンシャイングループの会長、日秀源道さんは、県警や警察庁とも太いパイプで結ばれている。貴女が訴えたところでタチの悪い子供の悪戯としか思われないで

しようね」

その言葉が、いろはの沸点を超えた。

「ッ」

そんなことはわかっている。只の中学生でしかない自分が大企業に太刀打ちできる筈がない。

だけど——!!

「じゃあどうしたらいいんですかっ!？」

抑え込んでいた怒りが猛烈に口から吐き出た。

「お父さんとお母さんが捕まって今も酷い目に遭ってるかもしれないのに!? 苦しんでるかもしれないのに! 自分だけそれを忘れたフリをしてのんきに過ごさせていうんですか!!？」

「それを何よりも、お二人は望んでいるわ」

「できない!! そんなことっ!! 大切な家族を忘れて自分だけ幸せになるだなんて私はできない!! そんなことができる人は、もう人じゃないっ!」

「……………」

いろはの気持ちは市長に痛いほど伝わった。

しかし、だからといって尊重するつもりは微塵も無い。巨大な組織に感情の赴くまま立ち向かえば、どうなるか――

――簡単だ。

力の差を思い知らされた後、牙を抜かれ、服従を強いられ、飼いならされる。

「相手は強大よ。立ち向かえば貴女の人生から安寧は無くなるかもしれない。輝一さんと曜さんの期待を踏み躪り、悲しませるかもしれない。それでも貴女は、戦うつもりなの」

託された以上、いろはの今後の人生は絶対に守ると決めた。故に、市長は心を鬼にする。

「……私は、家族みんなで、もう一度笑いあいたいです」

いろははそこで、漸く振り向いた。

涙に濡れた瞳が、猛虎の様な激しい光を伴って、市長を見据える。

「だから、行かせてください……っ！ お父さんとお母さんを、私が助けないと……っ！！」

いろはの手が再びドアノブに触れた。ぎゅう、と力強く握り締める。

その様子に市長は観念した。ハア、と溜息を付くと、チラリと脇に立つところを見る。彼女もいろはにどう声を掛けるべきか迷っているようだった。ソワソワしていて忙しくない。

(仕方ないわね……)

市長は、何かに祈りを捧げる様に両手を組むと、瞳を閉じた。

頭の中で、ある人物の姿を描き出す。

(教授……。どうやら彼女は「本物」のようです。如何いたしますか?)

『教授』と呼んだ想像上の人物は、その質問を聞くと、まるで意志を持った人間のように、嬉しそうに口元に弧を描いた。

小さく開かれた口から、市長に向かって、「御告げ」を囁く。

『青佐。君に任せるよ』

(恨みますよ、教授……!!)

すう、と闇に溶け込むようにして消えゆく『教授』に市長は眉間に皺を寄せてあからさまな苛立ちをぶつけた。執務室に誰もいなければ舌打ちを飛ばしていただろうか。

市長は誰よりも『教授』の事を尊敬している。

しかし、かの人物は少々——というか、かなり——無責任なきらいがあるのは、未だにいけ好かなかつた。

(………輝一さん、耀さん。ごめんなさいね……)

いろはを止める術は無い。しかし、彼女には太く長く生きてもらわねばならない。

ならば、方法は一つだ——

市長は頭の中で、二人に謝ると意を決して、目をカッと見開いた。

「いろはさん。貴女が本気で彼らに立ち向かいたいと思うのなら、ここで力を付けるべきだわ」

「力……？」

しかと見つめながら、そう言い放つ市長にいろはは固まる。

「神浜市の人口は、約320万人。魔法少女は？」

「えつと……確か、236人、ですよね？」

「ええ、表向きはね。実際は420人よ」

「そんなにっ!？」

目が飛び出るかと思った。

「諸事情が有って名前を掲載できない子がいるのよ。本人の強い希望もあって、秘匿させてもらってる」

但し——と、市長は目を光らせた。

『『私に協力する』、という条件付きでね』

呆然となるいろはを、楽しそうに見据えながら、市長は続ける。

「神浜市が魔法少女保護特区に指定されたのは、彼女達に太く長く生きて貰う為のノウハウがあるからよ」

だから、それだけの人数の魔法少女を抱え込めるのだ。

魔法少女は二人もいれば争う——そんな話を、昔どこかで聞いたことがある。

仕方ない、と当時のいろはは思っていた。何せ、魔法少女にはグリーンフシードが必要不可欠だ。自分が住んでいる街では無かったが、他の地域ではグリーンフシードを確保する為に、わざと魔女の使い魔を放置して人を襲わせたり（そして、成長した魔女を退治して、人々の賞賛を得るというマッチポンプを繰り返したり）、魔法少女を襲撃して、奪い取ったりするケースもあったという。

だが、神戸市では、420人の魔法少女が争うこと無く、過ごしている。

グリーンフシードの確保に焦っている様子は無い。やちよや美代にしたって、魔力の消費を気にしている素振りすら無かった。

『一般的な』魔法少女の姿を知るいろはからすれば、それは驚嘆するに等しかった。

「いろはさん、貴女はまず、この街の人々の信用を得なさい」

「えっ？」

いろはは目を丸くした。

「強大な相手と戦うには、貴女も同等の力を身に付けなければならない」

「でも……!!」

いろはが歯を強く喰いしばる。

「分かっているわ。お父さんとお母さんの事が心配でしようし、悔しいでしょう。その気持ちを抑える権利は誰にも無い。ヒューマニズムを推奨する私としては、感情の赴くまま戦うのは大いに結構。だけど、今の“貴女だと通じる相手は限られてしまう”

そこで市長は、目をキツクして睨んできた。眼力の強さにいろはがたじろぐ。

「小さな子供か、社会的弱者にしか、ね」

「……………」

「個人のワガママが通じる相手は、自分より弱い者に限られる。サンシャイングループに敵わなかった時、行き場の無い怒りがどこに向くかは目に見えている。……そうなって欲しくないからこそ、貴女はこの街で、彼らに対抗する為の人脈と知恵を身に付けて貰いたいのよ」

「……………」

そんなこと言われても——と言いたげにいろはは俯いた。

ただの中学生の自分に、そんな大それた真似ができるのだろうか？ 大企業に立ち向

かえるだけの、力と協力を、身に着けることが——？

「貴女は若いわ。時間はいくらでもある。この街の隅々まで歩き回って、色んな人たちと出会い、絆を深めて欲しい。神浜の全てが、貴女の力になってくれる」

「でも、信用なんて……………どうしたら……………」



市長の口元が弧を描いた。瞳がカツと瞬く。

「胸を張りなさい。貴女は七海部長に勝ったんでしょ？」

ぽつかりと空いた胸の穴に、暖かな風が吹き抜けたような気がした。

「神戸市の全ての人があなたに注目している。チャンスは今よ」

「っ!!」

チャンス——その言葉にいろはは愕然となる。

迷宮入りしていた思考に光が差した。進むべき道が、はつきりと見える。

「市長……いえ、夕霧さん……?」

「どちらでもいいわ」

いろはは、再び市長の眼前まで歩み寄ると、その名を呼んだ。

迷いの無い瞳に、市長は朗らかに笑う。

「あの、私……何も知らないんです。だから」

——手を貸してください。

はつきりと、言い放たれたその一言に、市長は力強く頷いた。

「その言葉を、待っていたわ。いろはさん」

満足気にそう言うのと、市長は右手を伸ばした。

いろはも同じく、右手を伸ばして、市長の手を握りしめる。

お互いの掌から、力強さと熱を感じ取った。

「……じゃあ、新しく住むところを決めなくっちゃね」

握手を交わした後、市長は眼鏡を直しながら、そう呟いた。

「すみません。色々と……」

「いいのよ。そうねえ、私の家は……」

どうかしら？ と、言った直後に、執務室の扉からトントンと叩く音。市長といろはが目を向けると、すぐに開かれた。

「市長。失礼いたします」

中に入ってきたのは、青いスーツ姿の七海やちよだ。その姿を捉えた途端、市長の顔がパアツ！と輝く。

「あー！ そうだわっ!!」

突然ガタツと音を立てて立ち上がる市長に、いろはとこころがギョツとなる。

やちよも呆気に取られて、彼女を見つめた。

「七海部長、確か『みかづき荘』の部屋はまだ空いていたわよね？」

——突然何を言い出すのか、この人は？

市長の意図が全く読み取れないやちよは、困惑したまま、頷く。

「……ええ、まあ、あと5人分ぐらいは……」

「よっしゃっ!! 決めたわ!!」

市長は豪快にガッツポーズ! 3人の魔法少女の変人を見るような目を諸共せず、市長はやちよにこう言つてのける。

「……七海部長、今日からこの子の面倒を見て頂戴」

「ええっ!」

いろはとところが揃つて驚愕。

そして、至極穏やかな笑みで、市長にそう言われた張本人は、思わず——

「はい?」

と酷く不可解な顔でそう言つてしまうのだった。

☆

いろはとやちよが部屋から去った後、市長は秘書と話し合っていた。

「いいんですか、市長。あんな嘘付いて……」

「話を盛らなければ、いろはさんは納得しなかつたわ」

あの頑固さは、輝一さん譲りね。市長は楽しそうに笑っているが、こころは不満気だ。  
「でも……でも……!! 180人も魔法少女と個人的な協力関係なんて築いてないじゃないですか?」

市長は、ふうく、と溜息。

「そうね……実際は60人程度よ」

「3分の1……!!」

「こころはガツクリと肩を落とす。」

「まあいいじゃない。嘘つきは政治家の始まりってよく言うし……。それよりも」  
市長はなんか訳の分からないことをボヤくと、部屋の隅に置いてあるクローゼットに目を向ける。

「(一)苦労様、まさらさん」

誰かの名を呼びかけた途端、クローゼットの扉がキイツと音を立てて開かれた。

……が、誰もいない。

中には、市長の衣類がハンガーに掛けてあるだけだ。

だが、クローゼットの前で、スウ……と人の姿が浮き彫りになった。淡い水色の髪をした、魔法少女らしき衣装に身を包んだ長身の少女だった。

「どうかしら？ 貴女から見て、いろはさんは？」

市長は少々得意気な笑みを浮かべて、まさらと呼んだ魔法少女を見つめる。彼女は感情の無い淡泊な瞳で見つめ返しながら、ボソツと喋った。

「鋭いですね。彼女」

「え……？」

ところが、まさか、と言いたげに目を丸くしてまさらを見る。

「多分、私に気づいてました」

姿を消していたのに——とまさらは、若干眉を逆八の字にしてそう呟く

「あの子が、七海部長に勝った魔法少女……!」

「やっぱり只者じゃないわね……!」

「私は、そうじゃないと思うけどなあ……」

何やらいろはに感嘆するまさらと市長に対して、こころだけは苦笑い。

「そういえば、『教授』には相談したのですか……?」

そこでふと、まさらがそう問いかけてくる。途端、市長の顔があからさまな怒りに染まった。

「ええ」

「なんて?」

「君に任せるよ」ですって。全く……!」

まさらは沈黙を返すしか無かった。単純に何て返せばいいか分からなくなったただけだが。

こころは逆にニコニコ笑って、

「ふふ。でも『教授』らしいですよね」

「全くね……」

市長はそこで目を細めた。何も無い虚空を遠くを眺める様な目線で見据える。彼女には何かが見えているらしかったが、こころとまささらには、終ぞ分からなかった。

☆

——少女は“そこ”の中心に独りで居座っていた。

腰を預ける地面には、まるで楽園か天国の様に、様々な彩りの花畑が地平線の向こう側まで続いている。

顔を見上げると、どこまでも澄みきった蒼が無限に広がっていた。

それは——いつかの病室で見た、あの空と瓜二つ。

少女は懐かしむ様な——或いは慈しむ様な瞳で——青空をじいつと眺めていた。

かつての少女は不自由だった。

誰かの箱庭に閉じ込められ、一切の希望が失われた地獄の螺旋を延々と駆け巡っていた。

だが、この空の蒼さを知った時、少女は解放されたのだ。

正直、今も不自由なのは変わらない。

だけど、心は自由だった。今なら、この蒼穹の様に、広い世界のどこまでも自分の声



と意志は届くだろうと信じていた。

青空は、“彼女”が教えてくれた。だから、少女は“彼女”と共に歩むと決めた。

——と、そこで、少女の鼻に、一枚の花びらがふわりと乗った。

薄い桃色の花びらを指で摘まむと、少女は後ろに首を向ける。

真つ青な空の中心に君臨する太陽の光を一直線に浴びながら、“それ”が大きく聳え立っていた。

### 『桜の木』

齡何千年——否、何万年にすら及ぶであろう超大な樹木には、季節外れの艶やかな花が満開に咲き誇っていた。

風が吹くと、世界が一瞬で桃色に染まった。

どこまでも美麗を映し出す世界を、嬉しそうに眺めながら、少女は一人、誰にでもなく、ポツリと呟いた。

「環いろは。君は必ず、僕の下へ辿り着くだろう」

桜吹雪の中で、少女は今しがた自身に舞い落ちた、1枚の花弁を見つめた。

あの子の心情を思えば不謹慎かもしれないが——胸の高鳴りは抑えられなかった。

「僕はいつでも待っている。この万年桜の木の下で——」

少女の前に聳え立つ超樹は、いつまで経っても世界を鮮やかに染めていた。

それを眺めているだけで、少女は自分が『そこ』に立って『生きている』のだと実感した。



# FILE #37 手掛かりの行方

☆

「みかづき荘へは夕方に案内する」—— やちよはそう言っているとは別れて、仕事に戻っていった。

よつていろいろは再び、神浜市長こと夕霧青佐の執務室に戻っていた。

「……あの、夕霧さん」

「何かしら」

デスクで自分の抱えた案件と睨めっこする青佐におずおずと話しかけるいろは。

父と親しいとはいえ、自分の後見人とはいえ、相手は市長である。声を掛けられた彼女は親戚の叔母さんの様な温和な笑みを向けてくれるが、そう簡単に緊張は拭えない。

「今回の件、感謝しています」

いろはが頭を下げて、謝辞を述べると、青佐は一瞬、ポカンとなる。

「あらいいのよ。でも、私の家じゃなくなつて残念だつたなあ」

「え？」

市長はジト目になると、お道化した様な顔でペロを伸ばした。

「なんて今更ながら思つたりして……。娘がいてね。いろはさんのこと、凄く心配して仲良くなりたいて言つてたから」

「へえ、娘さんはおいくつですか？ もしかして、その子も——」

魔法少女ですか？ 問う前に、青佐は口を尖らせた。

「ブブーツ。普通の大学三年生よ。明るい子だからいろはさんも仲良くなれると思うわ」

「そうですか……！」

期待に胸が躍った。

自分と親しくなりたいと言つてくれる人がいる。それだけで、心が満たされていく。いろはの顔に陽が宿るのを青佐は満足そうに見つめている。

「そのうち紹介するわね。それよりもいろはさん」

青佐の目が突然射貫くように瞬いた。

「私の所に戻つたつてことは……何か他に聞きたいことがあるんじゃないかしら？」

「すみません。お仕事の邪魔になるかもしれませんが……」

「構わないわ。貴女は今日から神浜市の市民。市民一人ひとりの言葉に傾聴するのが市長の務め。なんでも言って頂戴」

「わかりました。あの——」

——【環 うい】と【大賢者様】って、ご存知ですか？

市長は両手を組んで、目を閉じると、深く考え込む様に頭を俯かせた。

☆

（十時五分。神浜商店街にて環いろはを発見、尾行開始します）

市役所を出て真つ直ぐ——神浜商店街にていろはを発見したまさらは、電柱の陰

に隠れると、耳に付けたインカムで市長に報告する。

〈頼むわね、まさらさん〉

返事が返ってきたのと同時に、まさらの姿が消えた。

夕方までまだまだ時間がある。

よってその間に自分の用事を一通り済ませなければ、というはは思った。

捕らえられた両親のことを思うと胸が張り裂けそうだが……ここは市長の言う通り、自分ができる小さなことを一つひとつ積み上げていくしかない。

(うい……)

まずは、大切な妹の手がかりを探すことである。

先ほど、市長にも問いかけたが、「分らない」の一点張りだった。幼い自分を知っている市長なら、と期待していたが、やはり彼女の記憶からも、ういの事は消え去っていたのだろう。

スマホの画面には、地図アプリが起動されており、「神浜総合病院」までの道案内が表示されていた。

自分の記憶が確かなら——ういと、里見灯花と、柗ねむの三人は、この小児科に入院していた筈。

自分が今現在居る場所から、徒歩で15分。

「よっしー！」

いろはは両手をグーにして意気込むと、一旦、スマホをポケットにしまった。

そして、第一歩を——

「あ~~~~!! 環いろはだ~~~~!!」

背後から熱烈に聞こえてくる黄色い声。いろははうつと息を飲んだ。

どうして自分の足は、こうも止められてしまうのだろうか。

「環いろはさんですよねっ!!」

「あ、はい」

つい振り向くと、中学生らしき少女の集団が見えた。万々歳を出る時に鶴乃が着ていた制服と同じ——白いシャツに赤いチェック柄のスカート——からして、神浜大学附属



学校の生徒か。

あれ？ ちよつと待つて……今日月曜日だよね？ しかも10時過ぎ。なんで商店街にいろの？

「あたしは今課外授業中で——！」

「ちよつと商店街のお店の人達に聞き込みをしようつて——！」

ああなんだ、そういうことだったのか。納得——

「……つて、ええ!？」

——してる場合じゃ無かった。

いろはは自分の状況にビックリ仰天！ いつの間にか総勢11人もの少女達に包囲されていた！

「……あのく、ちよつと私、用事が……」

苦笑いを浮かべながら、どうにか逃走を計るいろは。

「あつ、どこにいくんですかー!!」

「ちよつとウチらの相手してくださいー!!」

しかし、包囲網はジリジリと近づいてくる！ 逃げられない!!

背筋がゾツとして、いろはの顔が一気に蒼褪める。対照的に中学生達は顔を赤くして熱狂!

「わあ！ すっごーい！！ 本物だよーっ！！」

「かつわいいー！！」

「ねえ、どうやって七海やちよに勝ったんですかー!?」

「あ、それ聞きたかったー！ 教えておしえてー！」

「それよりもサインくださいよおー！」

「ひいひいひいっ！！」

いろは、パニックの余り悲鳴。逃げ出したくても中学生が自分にくつついてきやいきやい喚いている状況では身動きが取れない！

「サインって……色紙持ってないですけど……」

「あーそんならー、これでいいですってー！」

最初に自分に声を掛けた女の子が、肩に下げたバッグからノートを取り出す。

他の子も合わせるように、ノートを差し出した。

「でも……書き方が……」

「んなもんテキトーでいいですってー！」

生来、生真面目ないろはにとつて、『テキトー』程難しいものは無い。

……中学生にマジックを渡されるも、ブルブルと震える指でどうにか書き上げたそれは最早サインというよりも、蛇がのたくったような何かである。

「やったー！」

それでも、少女は歓声を挙げてピョンピョン飛び跳ねる。

「あ、いいないいなー!!」

「私も書いてー！」

「あたしもー！」

「うう……」

四方八方から、顔だの背中だのお腹だの腕だのお尻だのにノートを押し付けられたいろはは涙目になりながらも、全員分のサインを書き上げた。

それでもしないと解放してくれそうになかった。

——— どうか中学生の包围網を切り抜けたいろはだが、大変なのはここからだった。

「おい、あれ、環いろはじゃないのか？」

「七海やちよに勝ったってんだぜ。すげえよな」

「可愛い顔してとんでもねえよな！」

「魔物って噂はマジかつ!!」

（は、恥ずかしい……／／／）

プライベートも何も無かった。そう言われて、青年達にパシャパシャ写真を取られるわ……

「一緒に写真撮らせてもらってもいいですか？」

「あつ！ い……いいですよ！」

「やったつ！ じゃあ、変身してください！」

「はいっ！ ……つてええ!?!」

女性からは、魔法少女に変身した姿をツーショットで撮られるわ……

「おう、いろはちゃん！ 美味しいコロッケ揚がつてんだ！ 寄つてきなよ！」

肉屋の前を通りかかると、店主と思しき初老の男性に声を掛けられる。

「えつと、私、用事が……」

市役所から出てまだ10分程度しか経って無いが、既にいろはは身も心もへろへろであつた。

蒼褪めた顔を肉屋の主人に向けた——直後である！

「おい権田つ！ 抜け駆けすんじゃねえ!!」

「環いろははうちの上客だぜ!!」

断ろうとした矢先、別の店舗から店主と思しき男達が飛び出して肉屋の店主に啖呵を切る。

「ひいひいひいっ!!」

いろはの来店を狙って店の名声を上げようと目論む店主達の強引な客引きに遭うわ……とにかく散々であつた。

☆

(でも……それだけならまだいい。予想出来ていた事。……もつとひどいのが)

そんないろはの様子を、遠巻きに眺めていた透明人間のまさら。

いろはは一時間近く掛かり、どうにか人々の包囲網を切り抜け、商店街を脱出(?)できた。

——しかし、本当の問題はここからだつた。

「あれ? えーつと、この道……さつきも来たような……」

今、まさらの目にはほんの10分前に見た光景と全く同じモノが映っている。

……ようするに、いろはは10分前に全く同じ場所で、全く同じ言葉をボヤいたばかりであった。もっと、簡単に言えばさつきから同じ場所をグルグル回っているのだ。

まさらは頭を抱えた。何せ、これで五回目である。

(……一番の問題は、環いろは自身……！)

普段通りのクールを装った相貌の中で、ジトリといろはを見つめる瞳だけが、呆感と  
いかか諦念の色合いが混じり始めていた。

——どうしてこうなった。

市民さえ切り抜ければ、あとは順調に神浜総合病院に辿り着けると思っていたのに。

ちなみに現在、いろはの居る場所は、【結城公園】である。

商店街を抜けて、神浜市警察本部や神浜消防署本部、裁判所合同庁舎などが立ち並ぶ  
国道沿いを数分歩くと、目前に緑豊かなこの公園が開く。

公園内は広く、象徴である結城池があり、他に多目的広場・児童広場、ランニンググロ  
ドが設けられている。

普段は市民で溢れているが、前日、魔女が発生したため、今日は人氣が全く無かった。

本来、神浜総合病院へ行くには、関係無い場所なのだが……歩きスマホしている内に、  
此処に迷い込んでしまったのである。

「スマホってどうしてこんなに難しいんだろう……」  
(……………)

いろはは相も変わらず、スマホと睨めっこ。そしてまたさつき歩いた道に向かうのであった。

この時まさらは……自分の言葉にいつもツツコミたがるところの気持ちが初めて分かった気がした。

だって、スマホ以前の問題である。——つていうかどうやって神浜市に辿り着いた!?

『市長。加賀美です。聞こえますか?』

まさらは耳に装着していたインカムに口を付けると、小声でそう呼び掛けた。

〈どうしました?〉

『環いろはですが、未だに神浜総合病院に辿り着けません』

ズコツと——インカム越しに椅子ごとズツコケる音が響いた。

〈もう二時間近くなるわよ……〉

青佐も流石に啞然としたようである。まさらが腕時計を確認するともうランチタイムだ。

〈商店街の方々の妨害が思いのほか凄まじかったようね……〉

インカムから溜息が聞こえてくるが、まさらは即座に『いいえ』と否定。

『彼女、スマホの使い方が全く理解できてません。加えて超ド級の方向音痴です』  
〈マジで……?〉

『マジです。先ほどから結城公園内をグルグル周ってます』

スマホの使い方が分からない中学生なんているのか。いろはの友人関係が気になる青佐であったが、

〈……人に尋ねるとかしなかったの?〉

純粹な疑問だ。そこまで迷ったらまず、地元の人に尋ねるのが一般的だ。

『彼女、自分の足で辿りつきたいようです。結構、意地っ張りですね』

〈そう……〉

青佐ははあ、と再び溜息。それを聞いてまさらの面持ちも神妙になっていく。

『市長。もう見てもらえないので、私に案内の許可を要請します』

〈あら、ずいぶん優しいのね、まさらさん〉

『いえ』

ふふ、と笑みを零しながら茶化す様に言ってくる青佐だが、まさらは即効で否定した。『優しい以前に、環いろはが無事に神浜総合病院に辿り着けないと私が本来の業務をこなせません』



基本的に、加賀美まさらは人間に興味を抱かない。

七海やちよに「勝った」環いろはに対しても、別に何も思うところは無い。寧ろ、どうでもよかった。

秘書の自分にとって市長の身辺警護こそが義務。よってこんな雑用、とつとと終わらせてさつさと市役所に戻りたいのが本心である。

〈戻ってきていいわ。まさらさん〉

『え……?』

まさかの指示に、まさらはポカンとなる。

〈助っ人がそっちに向かつてるから〉

『……承知いたしました』

腑に落ちない部分はあるが、市長の考えなら、間違いは無いだろう。

まさらは二つ返事で頷くと、いろはを放置して、結城公園から立ち去った。

☆

「地図が青い点でこの矢印は、なに……?」

一方、結城公園に一人、取り残されたいろはは未だにスマホと睨み合っていた。彼はお昼時だというのに、未だに目的地にたどりつけない自分に苛立ちが募っている。

地図アプリの見方すら未だに分からない。

「はあ……」

方向音痴を治す薬ってないのかな——というははは頭の中で愚痴る。

例えば、自分は住んでた街でも、同じ魔法少女チームメンバーにそれで迷惑掛けてたなあ、と思う。

(迷うって……地元だろー? スマホで地図アプリ開きや一発じゃーん!?)

「ふふ……」

不意に頭の中で女の子の怒鳴り声が響いた。

そういうえば組み始めの頃はあの子によく怒られてたっけ。でも、不思議と言葉に嫌味が無くって——

そういえば、この地図アプリもあの子が心配して入れてくれたんだよね。

クラスメイトとは縁に馴染めなかった自分だけど、何でかあの子達とは仲良くなれたし、よく遊びにも行った。

スマホの画面を地図アプリから一旦「ギャラリー」へと切り替える。

自分を挟んだ二人の少女が笑顔でピースサインしていた。

「……っひゃー！」

が——やはり歩きスマホは危ない！

画像を見ながら楽しい思い出に耽っていると、いつの間にか公園を抜け出して道路に飛び出していた。

しかも、車が向かってきていたので、慌てて歩道に飛び退く！

「……っ？」

しかし、その車はどんどん速度が落ちて——いろはの目の前で停車した。

そして、ウィーン、と前方のブラインドが下がると……あつ、と思わず声を挙げてしまった。

車を運転しているのは——

「みたまさんっ!？」

「お嬢さん、乗ってくかい?」

七海やちよに似た紺色のスーツを纏い、サングラスを掛けた今の八雲みたまは、市役所の地下の店で見た温和な雰囲気とは対極的で、正にキャリアウーマンといった風貌だった。

彼女は、ニヤリと不適に笑みを浮かべており、あからさまにキザっぽい低い声を出して、いろはを招く。

「……………」

渡る世間に鬼はない。

いろはにとつて、みたまの存在はまさに、地獄で仏に会うに等しかった。

☆

——正直、みたまさんは17歳なのに何で車の運転できるんですか。もしかしてやちよさんが19歳で部長やつてるみたいに、魔法少女は免許証の年齢制限も無いんですか。やちよさんと同じ色のスーツがバッチリ決まってますねとか、色々言いたいことはあつたが、花の様に愛らしい笑顔が一気に崩れそうな気がしたので止めた。

乗る直前に、車を確認したら「神浜市役所」と表記されていた。

奇遇だが、みたまも本日、神浜総合病院に向かうつもりだったらしい。とは言っても、誰かの見舞いに行く訳では無く、院長と直接対談するそうらしい。

——神浜総合病院。

「いないって、どういうことですか!?!」

清潔感溢れる広大なロビーの中でいろはの驚愕に満ちた声が響いた。

相對する受付嬢は、困り切った顔でこくりと頷く。

「ええ、小児科病棟に問い合わせたのですが……環うい様、柊ねむ様、里見灯花様という名前のカルテは無い……と」

声色は次第に小さくなり、いろはの応対に緊張している様子がありありと聞き取れ

た。恐らく、彼女は入職してまだ日が浅いのかもしれない。

「別の病棟に移ったとかじゃないですかあ？」

「そちらも確認したのですが、三名の入院記録は見当たらなかったそうです……」

申し訳ありません。

と新人受付嬢は、深々と頭を下げた。

「そんな……っ」

希望が打ち砕かれた。いろはの顔面が蒼白に染まる。

——不意に、足元がよろけた。

「！ 大丈夫？」

「はい……」

ぐらりと、体が傾いた気がしたが、倒れる寸前でみたまが支えてくれた。

起こして貰うと、待合用の長椅子まで手を引かれた。

「私は自分の用事を済ませてきちやうから、ちよつと休んでて」

「……」

みたまの笑顔を見てると、不思議と波立つ心が静まっていく。

彼女はその慈母神の様な笑顔で、多くの魔法少女の心を癒してきたのだろう。そうに違いない。

「はい……」

だから、いろはも笑顔で返した。彼女に気負わせるのは申し訳ないと思つたからだ。みたまもそれを見て安心したのか、背中を向けて去つていった。

——やがて、みたまの姿は完全に見えなくなる。

周りは、他の患者や職員で溢れかえっている筈なのに、いろはは、そこでポツンと置き去りにされた様な孤独感を覚えた。

「うい……」

寂しさに堪えきれなくなったからか——不意に妹の名前が口から吐き出された。

三人が退院してる可能性は考えていたが、まさか、入院した記録すら無いとは予想の範囲外だった。

一体、何がどうなっているのだろう。

自分の記憶には確かにういがいる。そして、灯花と、ねむもいる。

だが、現実には、三人とも“存在しない”のだ。

（もしかして、全てが——）

——自分の思い違いだったのではないか。

「夢か、アニメか、漫画なんかで見た印象的な出来事を、自分に当て嵌めてただけだったんじゃないか——」

（いや……！）

——そんな突拍子もないことを頭を過って、咄嗟に首を振った。  
灯花とねむは分からない。

でも、ういだけは、妹だけは確実に存在していると確信できる。  
このシオルダーバッグに入っている置手紙が何よりの証拠だ。

「あんた、環ういの血縁者かい？」

——暗闇の中で、一筋の光明が差し込んだ。

不意に、横から聞こえてくる、知らない声。

いろはは思わず、えっ、と口を開いて、声が聞こえた方向に目を向ける。

手がかりが思いも知らぬ方向から飛び出した。

驚愕を張り付けたまま、顔を振り向くと、一人の老婆が、真剣な瞳をこちらに向けて



いた。

「おばあ、さん……？」

70ぐらいのか細い老婆であった。

だが、背筋はシャンと張っており、年季が入っているが、思わず目を奪われてしまう程の鮮やかな彩色の着物を纏っている。化粧で白塗りの相貌は、凛々しく整っており、若い頃は絶世の美女であつたろうことは容易に想像できた。

「あたしは老婆さんなんて名前じゃないよ」

あかつきつくね  
明槻月禰だ

そう名乗る老婆の声色は険しい顔付きに相応しくないぐらい穏やかに聞こえた。

「ういのことを、知ってるんですか？」

「ああ、知ってるよ。珍しい名前だったからねえ」

知ってる——その言葉が、いろはの心に再び猛烈な熱を吹き上げた。

どうして、お婆さんがういのことを知ってるのかは分からない。

だが、手がかりが目の前に振って降りたのだ！

「あの……！ 私、ういの……っ!!」

迷わず、いろはは老婆に食らい付いた。

「びっくりしたよ。まさかあの人に——」

しかし、

「お孫さんがいたなんてね」

衝撃が全身を走った。

「え……う？」

まるですべてがふりだしにもどったかのように、いろはの思考は空白に塗り潰された。

☆

「失礼いたします」

ガチャリ、と院長室のドアが開け放たれるのと、同時にみたまは足を踏み込んだ。

目先には小太り体系の初老の男がデスクにどっかりと座っている。

「お久しぶりです。 里見院長」

みたまが軽く会釈して挨拶すると、里見院長と呼ばれた男は席から立ちあがり朗らかな笑みを浮かべながら歩み寄ってきた。

「おお、これはこれは八雲美玉さん。かつては七海やちよよりも早く神浜町の守部を務められ、今では調整員として数多の魔法少女を、御救いなさっている。貴女が、私の様な凡人にお会いに来ていただけるとは……光栄ですな」

「凡人」の部分だけが、嫌に強調されて聞こえた。

光栄とは全くの嘘だろう。彼が浮かべる笑顔は「仮面」だ。みたまは笑顔を崩さな

いまま、冷たい瞳で里見院長を見つめた。

神浜総合病院の歴史は古い。

しかし、神浜市が保護特区に指定された際に、既に福祉事業の経営に乗り出していたサンシャイングループから多額の資金援助を受けて、建て直されたのだ。

目の前の男が、余った支援金を、人倫保護団体に手渡し、活動の過激化を後押ししているのは調査済みであった。

「ところで、何の御用でしょうか？」

しかし、みたまが今日、彼に問い詰めたのは、それではない。

「以前、小児科病棟に入院されていたある子について」

「それは……どなたですか？」

みたまの瞳が射貫くように瞬いた。

「『里見灯花』という名前の少女について、知ってる情報をお聞かせ願いたいのです」

## FILE #38 奈落の底で煌く紅蓮

—— 神浜総合病院・院長室

「さあ、存じませんな」

即答だった。

「既に外来でお伝えした筈ですが？」

きっぱりと伝えるが、目の前の美女は女神の様な微笑みを崩さなかった。

「ですが、彼女がここに入院していたという証拠は有りますので」

「魔法少女の記憶……ですか……」

神浜総合病院の院長を務める彼—— 里見浩一郎は、ふうと息をついた。

調整員を務める彼女が、ソウルジエムを通して、魔法少女の記憶を覗き込むことができるのは、一般市民の間でも周知されていた。

元々は秘匿されていたのだが、調整を施した魔法少女達の口から自然と広がっていった。

「人の頭の中ほど、信用できるデータはありませんから」

「確かに、そこだけは改竄しようがありませんから……」

里見院長は神々しい笑顔のみたまから少し目を逸らした。見惚れたら負けである。

「実際に小児病棟に入院している里見灯花を見た、という情報がこちらにはあります」  
「……」

里見院長の表情に、変化は無かった。

「奇しくも、その子と先生の名字は同じ。里見は神浜では有名な血族。関係は有るかと思ひまして」

「確かに……里見は、神浜市が旧八神群だった頃に、領土争いを繰り広げていた神道八家を従え、統一した豪族」

神浜市は、大昔は八神群と呼ばれる地名であり、豪族達——八雲、八重、八島、八坂、八潮、八口、八張、八百の八家——による争いが続いていた。

各々の家が祀り上げる「神」こそが、土地の唯一神であると証明する為の戦いであり、神の末裔たる我が一族こそが、領土を治めるのに相応しいのだと宣言。

各家の意地の張り合いによって、八神の地は日夜、罪無き者の亡骸と血で染められていった。

しかし、その争いに終止符を打ったのが、里見家であった。

摂政藤原氏の命を受け、土地の混乱を治めるべく外部から介入してきた豪族の圧倒的な武力の前に、八家はことごとく屈服。

里見家による八神郡の統治政策が敷かれ、神道八家は争うことなく今現在に至る、という話だ。

「しかし、それは平安時代も昔の話です。本家の血筋はとつくに途絶えてますし……そもそも『里見』なんて名字は有り触れてるでしょう？」

「ですが、実際に此処で灯花という少女を見た」と

「何度も申し上げたように灯花なんて名前の女の子が入院した記録はありませんし、私の親族にもおりませんよ」

「ふむ……」

「八雲さん。貴女方調整課が、ソウルジエムを通して見たものが、迷宮入りの事件を幾度となく解決に導いたことは警察関係者各位から聞き及んでおります」

治安維持部の七海やちよや都ひなの——とまではいえないが、そういった功績から、調整課の魔法少女達は、警察組織の幹部達との結束も強く、一部の市民からも救世主として評価されている。

組織が組織足り得るには、周囲の信用が必要不可欠——調整課発足当時から、市長に口煩く言われてきたみたまなりに、その方法を考えて実行に移した形であった。

「しかし……」

里見院長は睨むようにして言い放った。

「だからといって、人の頭の中が一番信用できる」とは断言できないでしょう。人の記憶とは機械のデータよりも遥かに曖昧なものです。誰のソウルジエムを覗き込んだかまでは問いませんが、対象の魔法少女が思い違いをしている可能性もあるのでは？」

「……」

みたまは少しばかり思考に耽けた。

里見院長の表情は至って冷静だ。口も堅い。このまま問い詰めても会話は平行線を辿るだけである。

「里見先生」

ならば、このカードはどうだろうか？

「なんででしょう？」

「実は……最近知ったのですが、慶圓会の業績は芳しくないとか」

「……っ」

里見院長の表情にあからさまな変化が顕れた。眉間に皺がグツと寄る。



「新規に福祉事業を立ち上げたサンシャイングループと業務提携し、福祉事業を大規模に展開したものの、新規の施設が軒並み赤字続きであると……」

「誰からその話を？」

みたまはフツと笑う。

「『誰のソウルジエムを覗き込んだかまでは問わない』んじやなかつたんですかあ？」

「まさか……」

「貴女が最も信頼している『秘書』からです」

直後、里見院長の顔が勢い良く左に向いた。

「鎚（かぶら）くん」

「……」

睨み据える彼の視線の先で直立不動する秘書らしき黒いスーツの美女が、嫌悪感を顕わにした瞳をみたまに向ける。

「サンシャイングループの福祉事業所の役員もカンカンでつい最近叱責を受けたばかりと……あれえ？ 何をそんなに焦った顔をしていらっしやるんですかあ？」

みたまは笑みを崩さず飄々とした態度で問い質す。

里見院長が腹立たしそうな顔で睨んできた。

「貴方が仰っていた様に人の記憶とは曖昧なものなのでしょう？ 彼女の思い違いの可

能性も高いので、焦る必要は無いと思いますし、あまり彼女を責めないであげて頂きたいのですが」

「貴女は……そこまでして存在見しない少女花の事を知りたいのですか？」

「まあ、存じませんならそれで結構です。その子の勘違いであつたと処理できますから。ただ……」

みたまの瞳が鋭く瞬いた。

「これだけは確信を持つて言えます。私達が今まで覗いたソウルジエム……魔法少女達の記憶の中で、實在しない人物は一人も居なかつたと……！」

里見院長は無然とした顔のままだったが、ゴクリと唾を飲みこむ音が聞こえた。

動揺しているのは明らかだったし、里見灯花について何かを知っているのは明らかだった。

「……その子が」

里見院長がゆつくりと口を開いた。

「調整の対象者が、記憶改竄を受けていた可能性は考えられませんか？」

「っ!!」

秘書の鎬かぶつが驚いた様にギョツと目を見開いた。

声は出さなかつたがその質問だけはいけないと、表情で告げていた。

しかし、今の彼には届かない。

「……考えられませんね」

みたまの顔から、表情が消えていた。

「それは、何故です？」

「その子の身辺を調べましたが、記憶改竄が可能な魔法少女はいませんでした。それに、その子が魔法少女になってから、その類の魔法の使い手が居た、或いは会ったという事実もありません」

みたまは再び顔に微笑を浮かべた。

「調整の対象者は、何の変哲も無い一般家庭の生まれの女の子です。魔法少女としても格別なものはない。記憶改竄したところで何かを得られるなんて思えませんし……そもそも、改竄されたと仮定した所で、『知らない少女の記憶を植え付ける』意図が分かりません。改竄した側に、何かメリットがあるとも思えません」

「……………」

「あと、少し気になったんですけど……」

視線を逸らす里見院長を、みたまは瞳を細めて見つめる。

「貴方は先ほど、ご自分のことを『凡人』と称しましたね。なら、尚更不思議なんです。『記憶改竄』は、魔法少女の界限でも使い手は極僅か。魔法少女の事情に深く踏み込んだ

者でなければそんな単語はそうそう出てこない筈です」

「……………」

ムツ、と里見院長の口が強く結ばれた。

「更に貴方は、『人の頭の中は改竄しようが無い』と最初に仰いましたね。だから私はてつきり貴方が『記憶改竄できる魔法少女がいることを知らない』のかなあ、なんて思っていましたけど……………今、パツと仰いましたよね」

里見院長の額から一筋の汗が頬を伝って流れる。

みたまはニツコリと笑みを張り付けた。

「もしかして、そんな魔法少女が身近にいるんじゃないですかあ？」

——そして、その少女の存在を口止めされていた、と。

里見院長は口に手を当てて、押し黙った。

矛先を反らそうとしても、無駄だ。

みたまとしてはここいらで魔法少女ナメんな調整課の情報網ナメんなよと言ってやりたかったが、里見院長が次にどんな言葉を返すのか、楽しみだったので、待つてみることにした。

「……私は知りませんよ」

暫しの沈黙の後、里見院長は、消え入る様な声でそう答えた。

「何も。里見灯花という少女の事も。記憶改竄できる魔法少女のことも。……何せ、私は“凡人”ですからな」

「そうですか」

その答えで十分だった。必要な情報は手に入ったのだ。

「本日はお忙しいところ、お時間を頂き、ありがとうございます」  
みたまは丁寧に一礼すると、去っていった。

☆

「<sup>かぶら</sup>鏝くん」

「はこ」

みたまが院長室が去った後、里見院長は秘書の鎧を呼び寄せた。

セミロングの銀髪に引き締まった体を黒いスーツで覆っている。端正な顔つきだが、固く引き締めた軍人の様な表情と、釣り上がった瞳が頑固な気性の持ち主であることを物語っていた。

「……申し訳ありません。本来ソウルジェムに関しては八口やぐちに相談するべきだったのですが……最近、グリーンフィードを使用しても浄化作用が悪いのが気になりました……」

その時、覗かれた。

そう告げると里見院長は、深く溜息を吐いた。

「それについて君を責めるつもりは無いよ。焦っていれば遠くの高名な病院よりも、近所の診療所を頼ってしまうものだからね。ただ……驚いたよ。まさか、あの御方の名を知っている魔法少女が他にいるとは……」

てつきり叱られると思っていただけに、彼の言葉には驚いた。

額にはどつと汗が浮かんでいたの、鎧は咄嗟にハンカチを手渡す。

「どうぞ？」

「ああ、すまないね。……鎧くん、少し頼みがあるのだが……」

里見院長は、額を拭うと、鎧を横目で見た。

「なんなりと」

「上」と掛け合い、この一か月の間、調整を受けた魔法少女達を調べて欲しい」  
「承知いたしました」

「あと……八雲美玉に牽制を」

鎚はこくりと頷くと、早足で院長室から出て行った。

☆

「みたま！」

廊下を歩いているみたまの背中に声が掛けられる。振り向くと鎚のしかめっ面が有った。

「あらあく美奈子お」

「全く、やってくれたわね……！」

迎えてくれた満面の笑みが、今の鎚には腹立たしかった。

「貴女のせいで私の首まで危うくなるところだったわよ！」

「ふふ、ごめんなさいい」

苛立ちを真正面からぶつけるも、みたまにはどこ吹く風だ。

—— 鐘 美奈子は神浜総合病院の院長・里見浩一郎の秘書、及び院内の警備部長を務めている。

勿論秘書であるからには、魔法少女であり、その経験年数は実に10年を越える大ベテランだ。

無論相応の実力があり、且つ市役所の調整課でソウルジエムの“調整”を受けていなければ、ここまで生き残ることはできなかつたらうが。

「調整課は、すべての魔法少女を平等に支援する義務がある、そう言つてたじやない。それに……」

鐘はずいっと顔を近づける。

「貴女がやったことは私へのプライバシーの侵害よ……！」

ドスを利かせた声で威圧するが、みたまの表情は微塵も崩れない。

「教えて、そこまですて里見灯花という少女を探るのはどうして？」

「少し、引つかかるものを感じてね……」

「里見灯花は存在しない。分かつたらこの件から手を引きなさい」



瞬間、みたまの目が鋭利な刃物の様に鋭く光った。

「……美奈子、貴女、知ってるのね？」

突き刺す様な言葉が美奈子の顔に一瞬だけ、逡巡を浮かばせた。

少しばかり視線を右往左往させると、消え入りそうな声でポツリとつぶやく。

「……何も知らない方がいい」

「……？」

「その名はすぐに忘れなさい。その方が、貴女の為よ」

美奈子の額は汗で濡れていた。

こんな弱弱しい表情は見たことがない。

困惑している、というよりは、何かに怯えているように見えてならなかった。

「一体、何なの？」

「教えたいけど、教える訳にはいかない」

「それは、誰の為？」

「私の為によ」

みたまの眉間に若干皺が寄った。美奈子の頑固さは承知している。

これ以上問い詰めても答えないだろう。だが――

「じゃあ、これだけは教えて。『里見灯花』が、今、どこにいるのかを」

親しい者には甘い性格なのも承知していた。だからそれを利用するのだ。

美奈子は一度周囲を見渡した。誰もいないことを確認すると、みたまの耳に向けて、囁いた。

☆

―― 神浜総合病院・一階・待合室

「どうしたんだい？ 鳩が豆鉄砲喰らったような顔して」

「お婆さ……月禰つくねさんが知ってる『環わづうい』と、私の知ってる『環わづうい』は、違う人だと

思います……」

隣に座る老婆から衝撃を受けて5分は経つたろうか——

ようやく正気を取戻したいろはは、そんな憶測を彼女に告げた。

月禰は「そうかい」とだけ答えると、少し寂しそうに顔を俯かせて短く嘆息。  
「でもあんたは」

月禰は再びいろはの顔を見つめた。

細めた瞳は遠くを見ているようで——

「ういさんと瓜二つだ」

自分の顔から“懐かしいもの”を思い起こしているのは明らかだった。

「え……？」

「だから、近親に違いないと思ったがね」

いろはは固まる。

環ういは確かに実在していた。しかし、それは自分が望んでいた人では無かった。  
だけど——

「あの」

——自分の記憶にはつきりと存在する妹。

——自分にそっくりなお婆さん。

同姓同名の二人だが、別人だ。

だから、後者に関してはいろはが気に掛ける必要は全く無い筈であった。

「なんだい？」

「月禰さんの知ってる『環うい』って、どんな人だったんですか？」

でも、問いかけてしまった。

無性に気になったからだ。

偶然妹と同じ名前だったからかもしれない——  
「ただ、老婆の知ってる『環うい

』は、もしかしたら自分の知る『環うい』と、繋がっているのかもしれない。

そんな思いに至ったのは、推理もへったくれもない、只の『勘』だ。

身体が、感情が、記憶が、その名前を聞いた途端、敏感に感じ取っただけ。

「立派な人だったさ……」

月禰は食らいつくようないろはの勢いに、少し驚きながらも、小さな声で語りだした。

「どのくらい前か忘れちゃったが……あの人は突然、この街にやってきたんだ。お医者様でね。一時は中央区で診療所を開いていたことがあった。あたしもよく世話になったよ」

「へえ……」

聞きながらいろはは、自分の知っている『うい』の事を思い出ししていた。

あの子も、「元気になったら一生懸命勉強してお医者さんになるんだ!!」ってよく言っていたっけ。

「根っからのお人好しだったよ。来るもの拒まずっつていやいいのかな。金が無くつても傷病人なら、誰彼かまわず治療しちまうのさ」

「でもそれじゃあ……」

「そりゃあ経営は火の車だったそうだが、自分の財産を投げ売って存続させていたって聞いたよ。そこまですて、人に尽くしたい情熱つてやらがあの人の中にはあったんだろうねえ」

いろはの知る『うい』もまた、自分の身体に前進全力で尽くしてくれるお医者さんに強い憧れを抱いていた。

もし、ういが無事退院していて、大人になっていたら——月禰さんの知る『うい』の様になっていたのではないか。

「本当に素晴らしい人だった。……“アレ”を知るまではそう思っていたよ」  
だが、そこで見てしまった。

懐かしそうに語る月禰の瞳——宝珠の様な輝きが、突然どす黒く澱み揺らいだの

を。

「アレ……?」

突然の変化に、いろはは呆然となって問いかけてしまう。

「おっと、口が滑つちまったね。これは子供が知って良いことじゃない」

月禰は、憑き物を払う様にかぶり振ると、荷物を持って立ち上がった。

「お嬢ちゃん、名前は?」

「環 いろはです」

「じゃあ、いろはちゃん、またね」

月禰は少しだけ微笑むと、去っていく。

歩き姿は老婆とは思えない毅然としたもので、寧ろ、鮮やかな色彩の着物を纏っているお陰で可憐にも見えた。

☆

## —— 神浜総合病院・一階・通路

エレベーターを降りて、いろはが待つ待合室へ向かうみたまの表情は、酷く暗澹としたものだった。

(以前、美奈子のソウルジエムを調整した時……里見灯花の姿が見えなかった) 矛盾であった。

美奈子は里見灯花のことを知っていた。にも関わらず、ソウルジエムは、その子の姿を一切映し出さなかったのだ。

(それに、美奈子が、最後に言った言葉……)

『誰も近寄ることのできない。深い暗闇の底に、その子は居る』

だから、諦めなさいと美奈子は言った。

深い暗闇——脳裏に、“あるもの”が過った。

「深淵」

ふいに口から、その単語が零れた。

瞬時に思い起こしたのが、いろはのソウルジェムの中で垣間見た、里見灯花という少女の事——

——そう、だから全て数学は全て宇宙に繋がるんだよ！

——わたくしのパパ様はよく将来、生きるために必要だとか、考え方が身に付くとか言ってるけど、そんなのは関係ないんだよ。

——人類に宇宙を駆け回ったり宇宙の果てを見る力が無いなら数字が無ければハップルの法則もビッグバン理論も成り立たない。

——定常宇宙モデルだってプラズマ宇宙論だって何もかも！

——人類は宇宙発生と同時に可能性という数字として生まれた。数とは縁のきれない存在なんだよ。

——そして、この数の理論を掴み宇宙のことを把握することは、人類が自分達の根っこを理解することに繋がって果ては進化の糧になるんだよ!?



……かなり極論に聞こえるが、あのぐらいの年齢なら、図書室の本で得ただけの知識をさも自分が導き出した解答であるかのように、友達に自慢したくなるのはよくある話だ。

自分がさも世界の理解者になったような。

同年代の子供たちよりも遙か先へ進んだような。

自分一人だけみんなより先に大人になれたような、優越感。勝利者の興奮。灯花の世代で無ければ味わえない悦楽だろう。

——わたくしすごいよね！

〈想像を叶える、科学者の灯花ちゃん〉

周りは、彼女をそのように賛辞した。

確かに、一般的な子供よりも頭がよかったのかもしれない。

でも、無邪気で無垢な笑顔は、どこにでもいる普通の子供の様に見えた。

——そして、もう一人。

脳が、ぼんやりと“それ”を思い出していた。

小さな地面が消失した瞬間、みたまは柄にもなく悲鳴をあげた。

全てが黒一色なので距離が把握できない。

すぐ傍に黒い壁があるように思えるし、気が遠くなるほど悠久の彼方に底があるのか  
もしれない。

基準になるものがなかった。光がなかった。

そんな暗黒に飲み込まれ、みたまは落下し続けていた。

飛行ではなく自由落下。

浮遊感ではなく失速感。

もはや下に向かって落ちてきているのか、上に向けて落下しているのか、前後左右なのか  
判別できない。

見えるものは黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。

黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒

黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒  
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒  
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒  
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒  
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒  
黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒

「私が掴める者は何もない」

声が聞こえた。

酷く低く掠れているが紛れも無い女性の声だった。

不意に暗闇が晴れた。

視界が映し出したのは、砂嵐を映し出したコンピューターがデスク上に並び、工場の  
管理室の様な空間。

「くゝくゝ」

目の前に、白衣の女性が佇んでいた。

彼女は自分を見下げるなり、嗤った。

何か邪な陰謀を思いついた様な残忍な瞳が、異常に空間に相応しい血の紅に染まつて瞬いていた。

「私は死ぬ！ 間もなく死ぬ！ 磨耗して何も計算できない状態のまま、糞尿を垂れ流し、バカみたいに笑いながら胃の中の物を吐き出し、自分の顔に塗りたくりながら無様な死を迎える！ だが止まらない！ 私が動かした “これ” は止められない！ 自動的な “これ” だけは誰にも止めることはできない！ それだけが楽しみで計算している！ それだけが楽しみで私は『生きて』いるんだ！」

自らを天才と認識する者は、自信に満ちた笑みと共に断言する。

世の研究者たちがなお躊躇する究極のタブー、それをあつさり侵してなお笑う。

その圧倒的な自信と迫力に……みたまは、呑まれた。魅入られた。虜となった。

ガサリと——不意にみたまの手が床にある何かに触れた。くしゃくしゃに歪んだ書類に、短い文字が書かれていた。

引き寄せられるように、両目がそれを見つめた。

## 『 PROJECT : MAGIA RECORD 』

うっ、と鼻をつまむ。

肉を焼き焦がした異臭が鼻腔を刺激した。

女性の声が止む事無く響き渡る。

「聞いているだろう。たまき」

☆

———  
神浜総合病院・待合室

「あ、おかえりなさい。みたまさん」

「ただいま、いろはちゃん」

「……どうしたんですか？ 凄く疲れた顔、してますけど」

「ちよつと、ね……」

「……？」

「なんでもないの、気にしないでえ、ね♪」

そして、その日の夕方——

いろはは、みかづき壮に向かうことになる。



(改訂版) F I L E # 3 9 人と獣の狭間に生きる者

そこは暗闇  
全てが黒に覆われている。



目を凝らしても何も見えない。

耳を澄まして何も聞こえない。

だが、蟻が自分の巣穴を把握できているように。

そこに住まう蟲には、どこに何が有るか、誰がどんな役割を持って存在するか、分かっていた。

そして、彼女達が生きる為の全ても、そこにはあつた。

そこは暗闇。

ただ黒しか見えない空間が、延々と続いている。

しかし、無限では無かつた。歩き続けるといつかは「果て」へと辿り着く。

最奥部と思しきその「果て」には、一人の人間が玉座の上に座っていた。

日秀源道。

日本有数の大企業・サンシャイングループの代表であり、魔法少女の“解放”を掲げる秘密結社・『マジウスの翼』においては、実質的な頭目『プロフェッサー・マジウス』と並び立つトップの一人である。

彼の役割は、単純に言えば、スポンサーである。

自社の企業グループを用いての、組織への全面的な支援だ。プロフェッサー・マギウスが何か要望を言えば、それを叶える為に必要な費用、物資の提供、最適な人材の登用及び人件費の算出は彼が担う。

「みふゆよ、この度は大儀であった」

「ありがとうございます。お爺様」

そして、準備が整い次第、目の前の孫娘に委ねるのだ。

『元締』・梓みふゆは、源道から与えられた物資と人材の運用・そして直属の実働部隊たる『羽根』を率いて、作戦を遂行させる。

今回、源道が彼女が労ったのは、ある作戦が順調に遂行されたからである。

それは半年前――

プロフェッサー・マギウスが、今後に備えて組織の基盤を盤石にしたいと言い出したのが、発端だった。

実働部隊の下っ端である『黒羽根』達は、元々、神浜市内で集められた魔法少女達である。

しかし、治安維持部が四六時中目を見張り、加えて常盤なかに与する「蒼海幣」の組員が暗躍している市内での人員確保は、難航を極めた。

そこで、みふゆが提案したのは市外の地方地域から人員を確保する方法であった。

日本各地の大都市圏の中心部では、神浜市のノウハウを基に、魔法の討伐及び魔法少女による犯罪事件を捜査・摘発する『魔導管理局』。

住民の魔法少女の相談を受け持つ『魔導事務局』が設立されていたが、地方には、未だそのようなシステムは確立されていない。

よって、活動している魔法少女達の心も荒み切っていた。

いつ魔法女に襲われるか分からない為、日常生活でも一秒たりとも油断はできず、また、グリーンシードを確保する為に、魔法少女同士で殺し合わねばならない状況もある。

更に、魔法少女であることが、人々に知れ渡れば奇異な目で見られ、自分はおろか家族さえも差別を受けるケースも発生してしまう。

みふゆはそこを突きたかった。

しかし、自身はかつて治安維持部の副部长として、七海やちよと共に脚光を浴びた身である。直接勧誘に赴けば、SNSで拡散されてしまいかねない。組織の活動はなるべく人目に付くことは避けたい。

そこで、プロフェッサー・マジウスに相談したところ、*“電波発信機”*の開発が企画された。

魔法女と使い魔が、魔法少女にしか見えない仕組みを真似て、魔法少女にしか受信でき

ない特殊な電波を遠距離まで発生させることで、地方の魔法少女達に干渉、組織への勧誘を促すという作戦だ。

日秀源道は、すぐに自社グループから必要最低限の技術者を集めると、プロフェツサー・マギウス主導の下に発信機を開発。

電波にみふゆの固有魔法・『幻覚』を相乗することで、地方の魔法少女達に、『解放』が成し遂げられた世界を疑似体験させた。

この世に樂園があることを知った魔法少女達は、呆気なく組織への参入を決意した。「しかし、幻覚が通用しない魔法少女も多かったがな……。特に貝塚市は厄介であった。20名もの魔法少女が連帯を組み、我らの活動への大規模な妨害工作を目論んでおつたからな。……月夜つぐよさんと月咲つかささんには感謝せねばなるまい。二人の『解放』に対する切実さが無ければ、説得は到底敵わなかつたろう。遠方に戦力を割くのは避けたかつたらな」

「お爺様、お二人には」

みふゆは祈るように見上げると、祖父はコクリと頷いた。

「分かっている。相応の評価と報酬を与えよう。そして……双樹くんには、改めて組織に集う者全てが同志であり、運命共同体であることをしっかりと理解して貰わねば。天音姉妹には今後手厚く指導を施すようにと、私から直接伝えるところよ」

みふゆは胸をなでおろした。

これで、天音姉妹の有用性をトップに証明することができた。実働部隊を率いるあの紅い夜叉によつて彼女達が心身を疲弊することは今後限りなく減るだろう。

(そうです。人には一人ひとり、適材適所があります……)

双樹ルカは、基本的に他者を評価する時、「減点方式」を採用していたが、みふゆは逆に「加點方式」を採用していた。

どんなに愚鈍な人間でも、必ず長所はある。

そこを見出し、評価し、伸ばし、適切な役割を与えてあげるのが、上に立つ者の役割だとみふゆは捉えていた。

天音姉妹は組織の中では孤立しがちであった。部隊は双樹ルカの実質独裁状態であり(困ったことにみふゆが何度指導しても聞かないのだ)、行動の指針は専ら彼女によつて決められていて、二人の意見が採用されることは無かった。

加えて、優柔不断な側面も見られ、上に立つ者としては少々不甲斐ないという評価であった。

しかし、作戦実行に優柔不断なのは、組織の理念が絶対的に正しいとは思ってない証であり、勧誘・あるいは敵対する魔法少女に対しても、甘さがあるからだ。

故に、組織の中で二人は最も『人間的』であるとみふゆは評価した。

幻覚が通用しない地方の魔法少女達の説得に赴かせたところ——最良の結果が得られた。

二人は、一人たりとも魔法少女と戦うことなく、血を流すことも無く、組織に誘致して見せた。

(紅羽根、いつまでも貴女の好きにはさせませんよ……！)

実働部隊の隊長は“紅羽根”の彼女だが、総指揮権は、あくまで自分にある。

双樹ルカが優秀なのはみふゆも承知だ。

与えられた指示は完璧に遂行し、目的の為に全力を尽くす姿勢は組織の幹部に必要な素質であろう。

ただし、血の気が多すぎること事実である。彼女を説得役に用いて交渉が決裂した場合、間違いなく殺傷沙汰へと発展しかねない。

先日の『ネズミ退治』が良い例だ。

実力差を見せつけねば、分からない相手も多い、とルカは豪語するが、みふゆにしてみればそれは間違いだ。

魔法少女を救う使命を持った自分達は、あくまで“人”にこだわらなければならな

い。

故に、争いは愚か、血を極力流すことなく、『解放』を成就するのが必定だと考えていた。

その点では、天音姉妹は、理想的な人材だった。

「状況は確かに急を要している。マギウスは双樹くんの案が合理的且つ早急に済むから採用を検討すべきだと仰っていたが、それは却って都合が悪くなると進言し、棄却させた」

ルカの提案とは、幻覚が聞かない魔法少女の下へ、自分か「蒼羽根」が赴き、實力差を見せつけるというものだった。

数多の地域を練り歩き、様々な魔法少女達と相対してきたというルカからしてみれば、彼女達を一つの思想の下に揃えるのは、土台無理な話だという。

流血沙汰はどうしても避けられないのだから、力を示すしか無いのだ——と。

貝塚市の連帯に対しても、一番の實力者・或いは人望のある中心人物を、圧倒的な實力差と戦力差で、叩きのめす。

それでも抗戦を望むのであれば、躊躇なく、殺す。

中心人物を失えば、他の魔法少女達は、自然と『マギウスの翼』に靡かざるを得ない。

——それが一番合理的且つ、犠牲の少ない方法であると、ルカは豪語していた。

「しかし、我らに対する不信感や猜疑心を抱かせる。そうなれば、解放が成就しても、我らに対して徒党を組み反乱を起こしかねん。組織への誘致はあくまで平和的且つ、穩便に進めねばならん。確かに双樹くんの案は戦略として捉えるのなら合理的だろうが、人の心が欠けている……。だが、みふゆ。お前はその未来が見えていた。与えられた役割のみに没頭せず、多角的に見渡した上で、最適な人員を割いて事を成就した。……見事だ。やはりお前には上に立つ資格があるのだな」

「お爺様には及びません」

みふゆの満面に気色が映る。

恐らくプライベートであれば嬉しさのあまり抱き着いていたかもしれないが、組織内ではあくまで上司と部下の関係だ。礼節は弁えなければならぬ。

「ただ……一つだけ、気に掛かる事が有る」

「……？」

みふゆは顔を見上げる。源道が口元をムツと結ばれていた。

「治安維持部長・七海やちよ。彼女をいつ、こちら側に導くつもりだ？」

瞬間、みふゆの顔から笑みが消えた。

「みふゆよ。お前が争いを嫌悪する性情なのは重々承知だ。故に、幼馴染と対峙を避け



たい気持ちもよく分かる」

先ほどまで孫娘を賞賛する好々爺はどこへ消え失せたか。

眉間に皺を寄せ、射貫くような視線を向ける様は、正しく戦士であった。

「しかし、いつまでも手をこまねいては大事に発展するぞ。これより先、ミス・パイプランターの「アレ」を市内中に配置する以上、市内における我らの活動は活発化せざるを得ない。故に、治安維持部とも熾烈な闘争に発展しかねん。犠牲を極力避ける為には、相手の牙を早々に抜き、戦意を削ぐのが肝要ではないか？」

「分かっております」

「ならば、今の内に手を打ってもらいたい。人員や物資が必要なら私を頼るといい」

「いえ、必要ありません」

みふゆは立ち上がると、源道の顔を見据えてきつぱりと発言した。

「何？」

微かに呆気に取られた。

何やら強い意志を込めた瞳で、みふゆは祖父を睨み据える。

「やっちゃん……七海やちよの人間性はワタシが一番理解しています。だからこそ、彼女との交渉はワタシ一人で無ければ成し遂げられません」

「人は三日も経てば変わるものだ。お前は、七海やちよが自分の知る七海やちよのまま

だと思っっているのか？

結城安里ゆうきあさとの一件を知った後でも、そう思えるか？」

——結城安里。

その名を聞いたみふゆの体が、強張った。

報告は聞いている。

しかし、否定したかった。受け入れたく無かった。

その名を持つ者と、“あんなもの”を繰り広げた者が、七海やちよと同一だと思いたくは無かった。

「今の七海やちよは修羅だ。帰る場所を失いたただ目的を果たす為だけに自らを省みず勇然と突き進む、人を超えた修羅……人のままでは、恐らく止められん。相對するのであればお前もまた、鬼となる覚悟が必要だ」

「ワタシは、外道に堕ちたくはありません！」

「何？」

「やっちゃん人が人で無いのならば、人であるワタシが彼女を救い、元に戻して見せる……それがワタシの使命です！お爺様、この度は手厳しくご指導いただき誠に感謝しております。しかし、未だ私の心構えが整っておりません故に、暫しの時間を頂戴したく願います」

孫娘の意思は固い。懇願するように深々と頭を下げる姿に、源道は顎に手を当ててふ

む、と首を捻ったが、

「……ふむ、分かった。急かす様な事を言つて悪かったな。私もマグウスとミス・ペインプランターには話をしておこう。治安維持部への対処が不十分なままで、第二フェーズにシフトする訳にはいかんからな」

すぐに折れた。

「ありがとうございます。では、私はこれで……」

みふゆは祖父に再度うやうやしくお辞儀すると、背中を向けて去っていく。

☆

みふゆの気配が完全に察せなくなった後、源道は後ろを振り向いた。  
「双樹くん、いるかね？」

玉座の背後の暗闇が、揺らぎ、人影の様な物体を創り上げた。

やがて黒が剥がれ落ち、血染めの様な真紅のフードを身を包んだ人物が姿を顕す。

「紅羽根、こちらに」

「聞いていただろうが。みふゆはあの通りだ。恐らく、七海やちよは卸せん」

「左様で」

深く被ったフードの隙間から、双樹ルカの残忍さを孕んだ瞳が爛々と瞬いていた。

「…… “A” は見つかったかね？」

「はい」

彼女はニタリと嗤った。良からぬことを企んでいるのか、それともこれから自分が成そうとすることに期待しているのかは分からないが、特に気にしなかった。

動き出した自分の前を阻む事は、何人たりとも不可能なのだから。

「宜しい。では早速交渉に向かうとしよう。あの子の枷を外さねばな」

瞬間——源道の玉座が漆黒に覆われた。数泊後には、電動式車いすに変化していた。

右手でレバーを倒し、車輪が虚無に音を響かせながら、全身する。

紅羽根も後ろに続いた。

性善説は確かに素晴らしい。

そしてそれを信じ、唱える心もまた、美しい。

だが、人間は生物学的に見れば獣でしかないのだ。獰猛で、狡猾で、闘争を望む本能を隠し持った種族であることは、多くの書物を読んでも、歴史を顧みても証明されている。

(青いままでは全ては救えん。人は時に、全身に血潮を滾らせ、赤く熟さねばならん……)

未だみふゆがそれを自覚していないのは、源道にとつては不可思議であつた。

確かに、人を労わる心も、優しさも重要だろう。

だが、人生には相手を排除しなければ幸せになれない状況の方が遥かに多い。

(みふゆ、お前はもう現実を自覚しても良い時だ)

暗闇を切り開くかの様な気迫を相貌に携えながら、源道は突き進んだ。

FILE #40 いろはの新しい生活へ①

夕方。

やちよに案内されて、いろははその場所に着いた。

「ここが、みかづき荘よ」

「わあ……」

市役所の裏にある、自動車一台分通れる小道を少し進んだところに、みかづき荘はあった。

古い建物と聞いていたから、田舎町の民宿のような木造りのアパートを想像していたが、外見を見て驚いた。新築同然の豪邸にしか見えない。

みかづき荘は元々、やちよの祖母・七海 天（そら）が民宿として経営していたが、彼女が亡くなると同時に廃業。

住宅街の火災被害拡大防止の為に古い木造式の建物は取り壊すべきだとの声も挙がったが、市長が反発。みかづき荘を買い取り、改築工事を行い、新たに職員寮として再運営することを決定したのだという。

（買い取っちゃうなんて、ずいぶん思い切りがいいなあ……）

やはり器の大きい人なのだろう、というはは感心する。

みかづき荘は、市長にとっても思い出深い場所らしく、かつてはテレビ報道で一時取り上げられる程の人气があった民宿だったそうだ。

この話には、神戸市の歴史を象徴するものを、例えば形を変えてでも残したい、という彼女の意気込みが感じられた。

地元への強い執着と、思い切りの良さこそが市長たる所以なのだろう。

「さ。部屋は用意してるし、上がって上がって」

思いに耽つてるところで、やちよの声が突き刺さり、我に返った。

いつの間にか、玄関を開けて待つてくれている。

「あつ！ 失礼します……」

慌てて駆け込むいろは。

そういえば、家族以外の人とこれから寝泊まりするのか——そう思うと、ドツと

緊張が押し寄せる。

前日、鶴乃の家にも泊まったが、あれは彼女の人となりを理解した後だったから、全く気を遣わなかったけど……こちらは、やちよ以外に住居人が3人もいるというのだ。その人達とも今後上手く共同生活を送らなくてはいけない。

(大丈夫かなあ……)

ドキドキと胸の鼓動が早まり、少し息苦しい。

自分は、昔から集団で行動すると、周りに合わせようとして自分を抑え込んでしまう悪癖があった。自分の意見や行動一つで、空気が変わってしまうのが怖くて……。

——いろつちはさ、もつと自分を出した方がいいと思うよ。怖いのは仕方ないけ



ど、いろつちの良さって前に出た時に見えるんだからさ。

不意に頭に穏やかな声が過る。

以前、前の街で組んでいた魔法少女チームのリーダーに相談したら、そんな答えが返ってきた。

でも……気持ちは晴れなかった。

だって、前に出るきっかけすら無かった時はどうすればいいんだろう。

そう質問したら、次の様な答えが返ってきた。

——そうになったら、周りとは自分は合わないって思って逃げちゃうのさー。

——無理して合わせに言っちゃって碌なことないかんねー。

——あたしは逃げて逃げ続けた結果、「逃げ足の累さん」なんて呼ばれちゃってるけどー。

——そうしなきゃ、自分の身も心も守れなかった訳さー。

「はい……」

何だろう。言い表し方は悪くなるけど、あの間の抜けた笑顔を思い出すと、不思議と

頬が緩んだ。

集合時間には必ず遅刻するし、頭が痛くなるくらいテキトーな人ではあったけど……一緒にいると、不思議な安心感があつた。

今も、真面目なあの子と一緒に喧嘩を繰り返しながら、元気に活動しているのだろう。「きつと、そうだよね」

「どうしたの？」

ハツと我に返るいろは。

独り言がやちよに聞かれてしまった。恥ずかしさで顔面が一気に熱くなる。

「あつ、なんでもありません……わあ！」

否定しようとして顔を上げた直後。

みかづき荘の大広間が視界に展開していた。思わず驚嘆してしまったのはあまりにも広い、ということだ。

目線を左側に向けると、キッチンが有り、その前には人数分座れるイスに大型のガラス張りのテーブルがある。食事を取るのそこだろう。

中央には、大型のソファに大型のテレビが置かれている。

目立ったアンティークの類は置かれておらず、窓際に置かれたスイレンの花がオレンジの光を帯びて空間を彩っているだけだ。

ざっと見た所、生活に必要な最低限のものしか見当たらない。どこか、やちよの性格を反映しているようだった。

なんでも受け止めてくれる心の中で、寂しさが際立っている。

「なんだか……5人で暮らしても広く感じそうですね……」

「ええ。だから少しでも狭く感じるには住居人は多いに越したことは無いんだけど……治安維持部で働きたい子なんて滅多にいないでしょ。だから、貴女が来てくれて本当に良かったと思ってるわ、いろは」

「えっ?」

意表を突かれた。

今、やちよさんは私の事を、何て——?

聞き間違いだったのかもしれない。けど、確認すべく問いかけようとした矢先だった。

「いらつしや~~~~~いっ☆☆☆☆」

みかづき荘が、一瞬だけ震撼した。

「ツ!?!」

——いろは、硬直。

彼女の全身が黒い大きな影で覆われた。

……間違いない。背後に何か、立っている……。

すごく軽快で艶やかな口調だったけど……声色は、地響きするぐらい野太くて、低い。  
「まさか……」

聞き覚えのある声だった。恐る恐る後ろを振り向くと、案の定だ。

金髪の角刈り、澄み切った翡翠色の瞳、浅黒く焼けた肌と、岩山のようにゴツゴツとした筋肉質の肉体、パンパンに張った胸板——

「ピーターさん!？」

「ピンポンピンポンピンポーン♪ 私のみかづき荘へようこそいろはちゃん☆☆☆  
歓迎するわねえ☆☆☆」

まるで黒い巨塔のような体躯の男、ピーター・レイモンドは、ニンマリと笑みを携えながら、天高くいろはを見下ろしている。

怖い。

しかも、その筋骨隆々の体躯に、可愛いネコちゃんイラストが描かれたピンク色のエプロンを纏っているのだ。

怖い。

「それにしても……二日しか会ってないのに、ずいぶん久しぶりな気がするわねえ……」  
「はっ？」

「ピーター、それは言ったら駄目よお」

なんかメタな事を言い出すピーターだが、いろはは訳が分からず、ポカンとなる。

——と、そこで新たな声。今度は女性だ。今日も聞いた声だから誰かすぐに分かった。

「みたまさん！」

スーツの上着を脱いでYシャツとタイトスカート姿になった、みたまがいつの間にかやちよの隣に立っていた。

「……………」

「どうしたのお？ いろはちゃん」

「あ、ごめんなさいっ。お二人とも、本当に綺麗だなーって思っちゃって……」

絶世の美女二人が立ち並ぶ姿は、それだけでも絵になった。

思わずボーっと見惚れてしまうが、きよとんと首を傾げるみたまの声を聞いて、我に返る。

「ふふっ、ありがとう☆」

「まあ、元ミス神浜と、現ミス神浜だからねえ……」

みたまが朗らかに笑うと、どこか呆れた様にピーターがそう呟いた。

「元……あれ？ みたまさんの年齢って確か……」

刹那、みたまが消えた。

—— 瞬時にピーターの真後ろへ移動すると、膝裏へローキック!!

「あいたーツ!!」

乾いた音と、ピーターの悲鳴がみかづき荘を再び震撼させた。

「うぐぐ、アンタ……後で覚えてなさいよっ」

「フンっ!」

鍛え上げているとはいえ、ピーターは只の人間である。

魔法少女の本気の蹴りが筋肉の無い所に決まったとなれば、ひとたまりも無い。悶絶すること間違いなしだ。

膝裏を抑え、床に蹲るピーターは涙目で睨みつけるが、みたまは悪びれず鼻を鳴らした。

「だ、大丈夫ですか?」

「ああ……ありがとう、いろはちゃん」

「みたま、やりすぎよ」

「フンッ」

ピーターを介抱するいろはの傍で、やちよがみたまを叱責するがどこ吹く風だ。

「元〃は事実じゃない。……あと、年だってもうすぐみs……」

「なんかいった？」

「いえ、なんでも……」

ボソツといったら、即座に〃良い笑顔〃を向けられたので、やちよはおずおずと引き下がった。

「……」

———— 神浜市最強の魔法少女すら怯えさせてしまうなんて……みたまさんって何者なんだろう……？

傍目でその光景を眺めながら、みかづき荘の上下関係を理解したいろはは、苦笑いを浮かべるしか無かった。

☆

——その後、ピーターはみかづき荘の管理人であり、みたまは大家であるを知った。

先ほど、ピーターが『私の』みかづき荘」と声高に言ったのは、そういう意味合いも有ったらしい。

「あ、それと……住んでもらう以上、家賃滞納は許さないから、そのつもりで」

ゴゴゴゴゴゴ……！

どこその能力者バトル漫画の様な仰々しい擬音と黒いオーラを召喚しながら、いろはに「良い笑顔」を向けてくるみたま。

「ええっ!? でも私、中学生ですし……」

「神浜市なら、魔法少女は年齢問わず就業は自由よお」

「だ、だけど……働ける自信なんてないですし……」

不安が募り表情に影が宿る。

……が、みたまはそこでべっ、と舌を出した。

「なーんちゃって。だいじょーぶよお。いろはちゃんの家賃は市長の給料から差し引くつもりだから」



「っ！」

心の中で、ここにはいない青佐に土下座した。

一方、そんな青佐はというと——

神戸市役所・最上階の執務室で、未だに書類整理に追われていた。

「ハックシヨンっ！」

「おや、青佐。風邪かい？」

急に肩が震えるような寒気を感じて盛大にクシヤミをすると、頭の中に声が響く。

かの人物が淡々とした口調で、語り掛けてきた。

「かも、しれませんね」

「憎まれっ子は病知らず、とよく言うけど……」

「それを言うなら、『憎まれっ子世に憚る』、『馬鹿は風邪を引かない』の間違いでしょう。いよいよボケましたか？」

「冗談のつもりで言ったただだから、そんなに睨まなくても……。君ももういい年だから」

ら、あんまり無理をしないで欲しいんだよ」

「動ける今だからこそ、無理するんですよ。教授」

「やれやれ……」

二人(?)の他愛ない会話は、いつまでも続いていたという――

――一方、みかづき荘。

「そういえば、あと一人は……」

ふと思ひ立って、皆に尋ねるいろは。

みかづき荘の住民はこれで3人。やちよの話ではあと一人、居る筈である。

「もう帰つてる筈よ」

と、ピーターはその人物の部屋の扉を指さした。

近寄つて見ると105号室と表記されている他に、『加賀見 真良』と書かれた名札が下げられている。

「かがみ……？　ま……？　しんりよう？」

当然ながら、名字・名前ともに初めて見る字だったので、困惑した。名字はなんとなく読めなくもないが、名前はどう読めばいいのかわからない。また、名前の字面から男性なのか女性なのかも想像つかない。

「まよらつて読むのよ」

「ひゃあつ!!」

——いろはの両肩がビクンツ！と飛び跳ねた!!

急に真後ろからボソリと声を掛けられてビックリ仰天。慌てて後ろを振り向くと、

「えっ……」

思わず見惚れてしまった。

美女の顔が、目の前にあったからだ。

鼻筋が通って唇の形がよく。整った卵型の白貌はまるで人形の様で——

「自己紹介するわね。私は加賀見まよら」

「っ？」

いや、正に人形。

新たな住居人を前にしても、まさらと名乗った少女は一端も歓迎する素振りを見せない。  
い。

表情筋どころか眉一つ動かさず、淡々と自己紹介を始める。

「105号室に住んでる。魔法少女。固有魔法は『透明』。普段はこころと一緒に市長の秘書として働いている」

透明……ということとは、市長の執務室に入った時に、クローゼットから感じた気配は、もしかしたら彼女だったのか。なら、どうしてあそこに隠れるなんて真似を？

そして、秘書とは——目の前の少女から受ける印象は、感情豊かなこころとは正に対極と言いつてもいい。

こころが太陽なら、彼女は月だ。

見惚れちやうぐらい綺麗だけど、冷たくて、暗くて……何より、寂しそう。

「まあ、仲良くできるか分からないけど、よろしく」

「よ、よろしくお願いします……」

初対面の相手に対して無礼千万とも取れる言い草に、いろはは少し辟易した。それでも右手を差し出してきたので、いろはも右手を伸ばし握手を交わす。

——どうしよう、苦手なタイプだ。

元来、人付き合いが苦手ないろはは、遠目から他者の人間関係を観察することが多

かった。

それで、分かっている事が、一つある。

『素つ気ない態度』を取るのには、大抵相手の事が気に入らないか、嫌っている証拠だ。そう思うと、自分がここにいるのが、彼女に迷惑を掛けている様な気がしてきて……

「ダメじゃない。まさら、そういうこといっちゃ」

やちよが注意するも、まさらは悪びれる様子も無く冷淡に言い放つ。

「でも、この子と仲良くするメリットがまだ分からなくて」

「……」

その一言が、頭を鈍器で叩いた様な衝撃となつていろはを襲った。

自分の推察通りだ。この少女は、自分の事を……

「あの、私、何か、加賀見さんにご迷惑を……っ」

知らない内に、かけたのかもしれない。

急激に寒気のような感覚が全身に迸ってきた。咄嗟に頭を下げて、謝ろうとするが、  
「……っ」

まさらは、いろはの言葉と行動の意味がまるで分からず、きよとんと首を傾げるだけだ。

「いろはちゃん、あんまり気にしないで」

申し訳無さで震えるいろはの両肩を、ピーターの手が優しく抑える。

「ピーターさん、だけど」

「この子はね、すつごく素直なのよ」

「えっ？」

すかさずみたまがビュンと、割り込んできた。

「そうそう。こう見えて結構熱くなっちゃう所もあるしねえ☆」

「私、みかづき荘に来てから風邪を引いたことなんて無いけど……」

「そういう意味じゃないわよ」

みたまの言葉に、眉を八の字にして反論するが、まるで見当違いである。

そのやりとりが可笑しくて笑みを零しつつも、やちよはツツコミを入れた。

（ね。人の言ってる事は、そのまま受け止めちゃうし、自分の思ってる事はそのまま言っちゃうのよ）

（本当に……素直なだけ、なんですけどね……？）

ピーターは小声でそういうが、釈然としない。

（そ、だから、ちゃんと仲良くなりなさいな。好きになってもらえたら『好きだ』としか言わなくなるから）

ピーターはパチン☆とウィンクしてそんなことを言っただけのける。

(えっ!?)

いろはの顔がカツと熱くなる。

——でも、仲良くなんて、どうしたら……？

だって、この子には、歓迎されてないんだから。

たった今、ピーターからまさらの人間性を知ったのにも関わらず。

彼女の態度のせいで、ついそう邪推してしまういろはに、みかづき荘での今後の生活への不安が一層深まったのであった。

☆

——そして、暫しの休憩の後、いろはの歓迎会は開かれた。

大広間に集まった5人が囲むテーブルの上には、彩とりどりの菜食が所狭しと並べられている。いろはの好みを考慮してか和食が中心だ。

これらは全て、ピーターが一人で作ってくれたらしく、改めて彼の料理の腕前に感嘆する。

（なお、みたまも手伝おうと奮起したらしいが、『デス味覚が手を出したら後でトイレがインフェルノね』『みんなを殺す気?』と一蹴されたそうなの）

「ピーターさん、ありがとうございます」

必然的に上座席に座つたいろはが、ピーターに深くお辞儀する。

「私の好きでやったことだから、いいのよ」

と返しつつも、彼はふふん、と鼻を鳴らして得意気だ。

「それでは、これより……」

そこでやちよが立ち上がり、いろはの隣に歩み寄る。

住居人全員を見渡すと高らかに宣言する。

「みかづき荘へ新たに入居致しました、環いろはさんの歓迎会を始めたいと思います！」

直後、盛大な拍手が巻き起こる。

「イエ————イッ!! ☆☆」

完全に調子付いたピーターとみたまが大きな拍手と共に、揃って歓声を挙げ、

「……………」

まさらも、無表情ではあつたけど、小さな拍手をパチパチと送ってくれた。



「それでは、環さん。これから一緒に暮らす皆さんに向けて、何か一言、ご挨拶を！」  
今まで見た事ないぐらいの輝かしい笑顔で、やちよがそう促してくる。

「えっ？」

ギクリとした。

流れに身を任せるつもりでいたので、「何かを言う」なんて予想だにしなかった。

「は、はいっ！」

しかし、促されてしまった以上、何かを言わなくてはならない。慌てて立ち上がるが

……

「っ……………」

——どうしよう、何も出てこない。

一気に緊張感が押し寄せて、いろはの顔が表情が硬くなる。

盛り上がっていた雰囲気が一気に静まり返り、皆が苦い顔を浮かべ始める。

「だ、大丈夫かしら…………？」

「いろはちゃん、ガンバッ！」

心配になったピーターとみたまがそう声を掛ける。

先ほどまでの愉快満面だった二人の顔がどんどん不安に染まっていくのは、見てて辛かった。

「挨拶は後回しでいいんじゃないですか」

まさらに關しては、素っ気なくそう言い放つ始末だ。

恐らく何の気無しの言葉だろうが——今の状況のいろはにとつては一番突き刺さる。申し訳無い気持ちしが腹の底から嘔き出してくるが、立ち上がってしまったからには、何か言わないと引き下がれない。

「あつ！ えつと……その……あの……つ」

しかし、上手い言葉が思いつかない。

頭の中は真っ白。視線は皆の顔を避けるように右往左往。冷や汗が滲んできたのか、背中が冷たく感じる。

どうしよう。

どうしよう。

どうしよう。

どうしよう。

どうしよう。

「あつ」

突如耳元で囁かれた言葉に、ハツとした。

強い違和感を覚えて振り向くと、穏やかな笑みを浮かべたやちよの顔があった。

「やちよさん……？」

困惑の眼差しを向ける。

やちよの笑顔はまるで慈母のようで。

不安の迷宮の最中にある自分を包み込んでくれそうで————だけど、安心できなかった。

だって、不思議だったから。

「あの、やちよさん、今、私のこと……」

呆然というははは問いかける。さつきもそうだった。

やちよはどうして、自分のことを、

「ええ、いろはって呼んだわ」

名前で呼んだのだろう？

「だって、さつきまで『環さん』って……」

「馴れ馴れしくはないわよ。みかづき荘では、住んでいる人は全員、家族と思うのがルール。みんなで協力し合わなくちゃ家は守れないでしょ？」

「家……」

「もうここは貴女の家なのよ、いろは。そして私達は貴女の家族。だからもう、安心していいの」

それは、ポツカリと空いた穴が埋められていく様だった。

家族……？

ここに在る皆を、そう思っていていいって？

「貴女のまま、貴女の言葉をみんなに伝えて」

「……！！」

いろはは目を大きく見開いた。

それは、一番求めていた言葉だったのかもしれない。

最初から、遠慮なんてする必要は無かった。

だってここはいろはの家なのだから。皆はいろはの家族なのだから。

これから自分は皆に迷惑をかけるだろう。

好きなことを言つて好きなだけ言つてしまふだろう。

喧嘩だつてするかもしれない。

でも、家族は、自分を支えてくれる。

お父さんとお母さんも……ういだって、そうだった！

「……っ！」

いろはの眼に強い光が戻った。ぎゆうつと拳を握りしめる。

やちよはとつくに自分を家族と認めてくれた。それが、堪らなく、嬉しい。

お父さんとお母さんも、ういも居なくなり……頼りにしていた灯花とねむはどこかへと消え去って、自分一人が広い世界に只一人、残されたような孤独感。

それが一生、付き纏うんじゃないかと思ひ始めていた。

でも違った。

新しい家族が、今、自分の周りに居る。

だからまだ、前を向ける。立って歩ける。

「……………」

まずは自分がみんなを受け入れよう。新たなスタートを切るのは、それからだ。

いろはは一度、深呼吸すると、みかづき荘の皆を見渡す。

不安な色は誰一人顔に浮かべてない。みんな、いろはの言葉を心待ちにしているようだった。

だから——はつきりと伝えられる。自分の気持ちをも。

「皆さん。お待ちせ致しました。改めて挨拶させていただきます。環　いろはといいます」

その声を聞いた瞬間に、みんなの顔が安心感で満たされた。

もう大丈夫だろう。

いろはの声はとても凜としていて、もう不安は微塵も感じられない。

「本日は、私の為に歓迎会を開いてくれました。ありがとうございます……。えつと……。まだ私、神戸市のことは何にも知らなくて、皆さんにいろいろ聞くとお思いますし、たくさん迷惑掛けますけど……。その……。！」

緊張を振り切るようにグツと顔を挙げた。

「やちよさんが言ってくれました。私はもう家族だって。だから、安心したんです。ここに居ていいんだって、自信が持てました」

だから、心から自分の気持ちを伝えられる。

「皆さん、私を助けてください。私も同じくらい皆さんのことを助けます。だから、よろしくお願いします！」

いろはは深々と頭を下げた。

直後に、巻き上がったのは、全員の盛大な拍手だった。ピーターとみたまは再び盛大な歓声を送り、まさらは相変わらず無表情だったけど、さつきよりも大きな拍手を打ってくれた。

やちよも、心の底から安心したように、笑顔で拍手を送ってくれた。

「じゃあ、席に付いて食事にしましょう」

「はっ」

やちよに促され、いろはも席に座る。

楽しい団欒は夜が更けるまで、いつまでも続いた。

今宵、いろはの人生の新たなスタートは、切られたのだった。

☆

◎おまけ

——ある日の事。

「……そういえば、いろはがうちじや最年少なのよね」

やちよが何の気なしに言ったその一言が始まりだった。

「じゃあ、私も貴女のことを『いろは』って呼ぶから」

すかさずまささらが、きつぱりと言いつつ。いろはは目を丸くした。

「えっ」

「市長に確認したけど、貴女15でしょ。私は17で年上。呼び捨てなのは当然でしょ？」



彼女なりに歩み寄る姿勢のつもりなのだろうが、冷淡な表情のせいで威圧しているように見える。

「えつと、じゃあ……『まさらおねえちゃん』で……」

恐る恐る伝えるが、まさらは眉を八の字にした。

「違和感覚えたから、呼び捨てでいいわ」

「ええ……」

バツサリ切られて、いろはは呆然となる。

この素っ気ない態度の彼女に慣れるにはまだまだ時間を費やしそうだった。

「それで、やちよさんは……」

「私は好きに呼んでもらって構わないわ」

やちよの口端は完全に吊り上がっており、何かを期待しているのは明白だった。

「じゃあ、『やちよおねえちゃん』……」

「はくく☆☆☆☆」

組み合わせた両手を頬に寄せて、飛びつきりの笑顔でそう言い放つやちよ。

……みかづき荘の空気が、一瞬で凍り付いた。

「……それ、似合いませんよ」

静寂を最初に破ったのはいろはだった。

何か、見てはいけないものを見てしまった気がする……。

場を瞬間冷却した元凶は、はつきりと指摘されたのが以外だったのか、目をパチクリしている。

「あらそう？ ざんねん。みたまのようにはいかないのね」

「それはみたまさんだから許される技能だと思います……やちよさんがやると全然しくりきませんよ……」

いろはが苦笑交じりにそう指摘すると、みたまがコクコクと頷く。

「やっぱりやちよさんは、やちよさんって呼びますね」

「そう……。私一人っ子だからお姉ちゃんって呼ばれてみたかったんだけど……」

やちよは残念そうに顔を俯かせた。ピーターが肩をポンと叩く。

「ねーさん、ねーちゃんって呼んでくれる子はいっぱいいるじゃないの」

「あれは、『姐さん』とか『アネゴ』って意味のお姉ちゃんよ」

「じゃあ、私が呼びます。『やちよお姉ちゃん』」

「まさらが言うとは、何か義務で呼ばせてる感が凄いわね……」

「……やちよが苦笑い。無論まさら自身にそんな自覚は微塵も無いのだろうか。」

「……やっぱり濃すぎるなあ、ここの人たち……」

「皆キャラクターが強いし、テンションも独特だ。」

「早くもいろはは、今後のみかづき荘での生活が心配でならなかった。」



FILE #40.5 その少女は何者でも無く②

(短編)

—— 神浜市内・高速道路途中のパーキングエリア。

トラックの運転手の中年男性とフェリシアはここで、夕食を取っていた。

昼食を取ってからというもの、特に重労働な運搬作業も無く、魔女の襲撃も無かった為、

二人とも小腹程度にしか空いてない。

「あと少してフェリちゃんともお別れと思うと寂しくなるな」

うどんを啜りながら、言葉通りの寂しそうな顔で彼が言う。

「オレもだよ、おっちゃん」

ラーメンを啜りながら、フェリシアも同調するようにそう返した。

彼は本気でそう思っている。まったく、なんていい人なんだろうか。

「オレさ……おっちゃんのこと、父ちゃんみたいにおもっちゃまってさ……」

フェリシアは俯くと、ポツリと小さな声で呟く。

「え……フェリちゃんの親父さんって……」

「家が無いって言っただろ。オレの両親は魔女に殺されて死んだんだ……っ！」

声之急に震えて、運転手はギクリとなった。

フェリシアが顔を上げると両目に涙が溢れていた。それを見た運転手の相貌に悲痛の色が浮かぶ。

「そうだったのか……なんて可哀そうに……」

彼女の身の上話に、心の底から同情したが故の貫い泣きかは知らないが——運転手の瞳からもボロボロと涙が零れた。

改めて、フェリシアは思う。

「グスつ……泣かせるねえフェリちゃん！ 分かったつ！ 今日は何でも好きなもん買ってあげるから遠慮なく言いなよ！」

「ああ……ありがとな、おっちゃんつ……！」

“なんて純粹で良い人なんだろう”

(はい。儲け)

—— 思わず、鼻で笑いたくなつた。

だから、自分みたいな子狐に騙されるのだ。

自分は彼と会つてたつた一日半しか一緒にいなかったのだ。信頼の構築もクソも無い。ただ魔女や魔法少女が怖いからと、雇われただけの関係。

だから、フェリシアは彼から必要以上の賃金と食べ物と搾取できればそれで良かった。

この後、彼が魔女に襲われ死のうが、同業者に襲われて身包みを剥がされようが、自分には関係無いことだ。

基本的に『傭兵』は、“金持ち”を狙うことが多いが、自分は逆だ。

目の前の彼のように——潔白で、人畜無害な“良い人”を標的にする。

メリットは大きい。

まず、一つ目は、攻略が簡単だから。

“良い人”は基本的に性善説を信じており、人を疑わない。だから自分みたいな悪党でもすんなり受け入れてくれるケースが多い。

二つ目は、報酬が大きい。

“良い人”は自己犠牲的なのだ。自分よりも、人に尽くしたがる。金銭的事情や都合など関係なく。

だから、軽く身の上話をして同情を誘えば、自分が必要とする以上に“お釣りが”手に入る。

三つ目、これは一番大事。

何よりも、動き易くなる。

“良い人”は、組織の中でも周りから信用されているし、初対面の相手にも好感を持たれ易い。

だから、一緒に行動しているだけで、自分も善<sup>よ</sup>良<sup>な</sup>人<sup>間</sup>だと周りが勝手に錯覚してくる。

「うっ……っ……！」



そんなことを思いながら、運転手を見てみると、突然彼の顔が蒼褪めた。「どうしたんだおっちゃん？」

問いかけるよりも早く彼は立ち上がっていた。

「ヤベエ！ 急に催してきちまった……っ！ ちよつと離れるぜっ!!」

「行つといれ」

男性はトイレに向かつて一目散に猛ダツシユ！

その背中を、手をひらひらと振つて見送るフェリシア。男性が見えなくなると、再びラーメンを啜り始める。

「失礼致します」

直後だった。知らない女性の声が頭上に掛かった。

——微かな、魔力の反応。

瞬時に、フェリシアの瞳が鋭くなる。

箸を止めて顔を上げた。白いパーカーにフードを目深に被った、自分より少し上ぐらの背格好の少女らしき人物が、彼の席に座っていた。

「お初にお目にかかります。深月フェリシアさん」

精錬された淑女のように恭しくお辞儀して、そう挨拶する少女の口元をまじまじと見つめた。

——自分の名前を知っている……もしかしたら、同業者か？

だが、記憶をいくら探しても、目の前の少女の様な口の動かし方をする人物は見当たらなかった。

「傭兵、ですよね」

「ああ……つつつても、今は雇われ中だからなく。仕事を二重に受け持つ気はねーし、他当たれよ」

しっしっ、フェリシアは手を払う仕草で少女を追い払おうとする。

——微かな魔力から感じ取れる、澱んだ瘴気。

こいつの纏う雰囲気は、妙だ。こんな魔法少女とは会ったことが無い。明らかに「普通」とは違っている——狡猾そうな奴は、門前払いが傭兵の常だ。

だが、少女は応じなかった。顔を上げると、フェリシアを鋭く見据える。

「『アステリオス』」

少女の眼がギラリと瞬いた。

その単語を呟いた途端、フェリシアから感情が消える。

「貴女のあだ名でしょう……？　ふふふ……」

少女が瞳が比類なき残忍性を以てフェリシアを射貫く。

意表を突いた事が嬉しかったのか、口元から愉悦が抑えきれず溢れていた。

「その名を知ってるんなら、高くつくぜ」

フェリシアの瞳がうつすらと猟奇を帯びて澱んだ。

「ええ。承知の上です」

本性を顕わにして睨み据えるも、少女の余裕綽々とした佇まいは微塵も揺らがない。

寧ろ、口端がより吊り上がった。自分の反応が、期待通り————とでも言いたげ

だった。

「何をさせたいんだ。言ってみろよ」

—— 相応の報酬があればな。

愉悦と同時に口の端がニタリと裂ける。

だが、少女は小さく首を振った。

「依頼するのは私ではありません」

「へえ、つてことはアンタのボスか？」

「ご名答。我が主には是非ともお目通り願いたい」

「……面白そうじゃねえか。案内しろ」

少女はすつと立ち上がると、背中を向けて去っていく。

フェリシアも何も言わずに席を立つと、後を付いていった。

例え、付いていった先が畏だろろうが、構わない。

返り討ちにしてやるまでだ。その為の算段は、もう頭の中にある。

だが、儲け話なら、それに越したことはなかった。

——10分後。

そんなことがあったとは微塵も知る由も無い運転手の男性は、手をハンカチで吹きながらテーブルに戻ってきていた。

「ふい〜〜〜つ、スツキリしたぜえ〜〜！ ……………つてあれ？」

運転手、テーブルを見てビツクリ仰天。

—— フェリシアが、いない!?

しかも、ラーメンを半量も残して……大好きな肉（チャーシュー）まで残してっ!?  
フェリシアと知り合ってからごく僅か。

でも、あの子が、食べ物を残してどこかに行ってしまう様な真似をしただろうか。

いや、無い。断じて無い。絶対に……億が一にも無い!!

「フェリちゃん! お~~~~い!! どこ行っちゃったんだい!? フェリちゃん~~~~  
~~~~ん!!!?」

フードコート内に、彼の虚しい叫びがいつまでも続いていたという。

FILE # 4 1 いろはの新しい生活へ②

—— 次の日。

—— PM 4 : 3 0。宝崎市内・公立優戒中学校。

「それでは、以上を持ちまして、環いろはさんの送別会は閉会します。環さん、今まであ

りがとうございました！」

「皆さん、今まで、お世話になりました」

司会の子から、花束とクラスメイトの寄せ書きが記された色紙を受け取ると、いろはは極めて事務的にお辞儀をする。

直後、男子の一人が「いいぞお中村く！」と司会の子を賞賛する声を響かせた。

(一応、主役は私なんだけどなあ……)

いろはは、少しその男子を睨んだ。

確かに中村さんは生徒会役員だし、綺麗だし……自分とは違って誰からも好印象を持たれている子だ。

目立つ行動を取れば、即座にこんな声援が飛んでくるのは分かっていたけれど……これはあんまりじゃないか。

最後だから、文句の一つでも言って驚かせてみたかったけど——  
まあいいや。もう少しだけ、我慢してやる。

——2年間、この学校に通ってきたが、特に印象は無かった。

中学生特有の『勢い』で突っ走る姿勢に付いていけなかった自分は、ただ周りに愛想笑いで空気のように過ごす日々を送っていた。

なにか「こうありたい」という目標があつて、熱中してスポーツに打ち込んだことも

無い。

勉強だって、赤点を取らない程度にしか、頑張らない。

誰かと仲良くなったことも無い。よく居る『〇〇グループ』みたいなのに加わって皆とバカしたこともない。

「は〜、終わった終わった。かえろーぜー」

「それにしてもお、環さんってどんな子だったっけ〜？」

「あんた三年間同じクラスだったでしょ。覚えときなさいよ」

「え〜？ そうだったっけ〜？ 覚えてな〜い」

「まあ、でも……あんまり目立たない子だったよねえ。須藤は二年から同じだったでしょ。なんか覚えてる？」

「いや、俺もあんまり……」

クラスでも人気の（悪い言い方をすれば『リア充』）グループから話し声が聞こえてくる。

……そもそも仲良くできるはずも無いのだ。

だって、魔法少女の自分を理解してくれるものなんて、今までのクラスメイトには誰一人、いなかったのだから。

「つい最近知ったけどよ……あいつ魔法少女だったんだな！」



「ああ、それは私もびつくりした。ってか見直した。ずっと根暗な子だと思ってたけど、影で私たちの生活守ってくれてたんだよね……」

「カッコいいよな魔法少女って！ それに聞いたかよ！ 環は七海やちよに勝ったらしいぜー！」

「そんなんもうみんな知ってるって〜〜！」

「案外とんでもない奴だったりしてな」

また、他のグループからも話し声が聞こえてくる。

自分の評価を改めてくれたのは、素直に嬉しい。

だけど、陰口のように話すのはどうなんだろう。私に直接話してくれないのは、何故なんだろう。

……実際、どうでもいいんだろう。彼らにとつて、私のことは。

私も、彼らのことなんてどうでもよかった。

それに、彼らは間違えている。私は別に貴方達を守るために戦ってたんじゃない。『魔法少女』であることが、私の唯一無二の存在意義だったから、戦ってただけ。

……急に頭が重くなってきた。帰ろう。

結局、学校の校門を出るまで、私に話しかけてくる子や、見送ってくれる子は、いなかった。

——この学校に通って良かったと思つた事が、ようやく、一つできた。

友達を作らなかつたお陰で、後腐れ無くみんなと別れることができる。

これからは、自分もスツパリこの学校の事は忘れられるし、クラスのみんなも明日には私のことなんて忘れてるだろう。

お互いに万々歳だ。

☆

……さて、どうしていろはの『送別会』が開かれたのか、説明しなければならぬ。

第一に、未成年後見人である神浜市長・青佐の意向を優先したからだ。

両親がサンシャイングループに原因不明の拉致をされた以上、いろはの身にも今後、危険が及ぶ可能性が高い。

市外は治安維持部の管轄外である上に、宝崎市には、『魔導管理局』『魔導事務局』といった公的機関がまだ設立されていない。

よつて、極力いろはの生活を、青佐の見える範囲で限定させたかった。第二に、いろはの都合もある。

みかづき荘から学校へは遠い。確かに通えない距離ではないが、電車やバスを經由して二時間も掛かるのだ。

一か月も通おうものなら、運賃も馬鹿にならない。

いくら、市長ややちよが付いているとはいえ、本来、親族でない人達から金銭ばかりを援助して貰うのは気が引けた。

以上の理由から、みかづき荘から徒歩で通える上に、魔法少女も多く通っているという「神浜市立大学附属学校」に転校した方が合理的と判断した。

なお、手続きは既に青佐が行ってくれた為、いろはは来月から正式に通うことになる。

「思い出は無くても、今までお世話になったんだから。しつかり皆にお礼を伝えて、お別れしなさい。いいわね？」

今日の朝。

青佐は、渋るいろはをそう叱責してから、車で送り出してくれた。

ちなみに、両親が行方不明と知れ渡ったら騒ぎになるのでは？ と心配していたが、

既に青佐は学校側に『父親の仕事の都合で転校する』と話を付けてくれていた。

—— PM 5 : 10 宝崎市・待那比町・三丁目東

宝崎市も、神浜市と同じく、都市化開発が進められている。

駅周辺にはショッピングモールや大企業所有の大型ビルや工場等が建設され、活気が溢れるようになったが、神浜市と比べるとまだまだ発展途上と言い表せるのが現状で、駅前を離れば、まだまだ田んぼや畑に囲まれた閑散とした田舎道が続いている。

夕陽の暖かさと、微風の涼しき、そして目先に広がる自然の風景に心地よさを感じながら、いろはは、畑が延々と続く道を歩いていた。

目指すのは、ある場所だ。そこには、あの子がいる。

足取りが、とても軽かった。

学校生活の窮屈さから解放された弾みも大きいが、早く“本当の友達”に会いたいという気持ちも強まっていった。

『皆木植木店』

その看板が見えた途端、いろはは駆け出していた。

飛び込むようにして庭に入ると、一人の初老の男性が黙々と植木を切り揃えていた。

いろはは迷わず、声を掛ける。

「こんばんは、おじさん！」

初老の男性は振り向き、人の良い笑顔を見せた。

「おお、いろはちゃん！」

近寄ると小山の様な印象を受ける大柄な男性は、あの子の父親だ。

自分とはすっかり顔なじみで、気を遣わずに話せる数少ない人だ。

「葉ようちゃんいます？」

「あいつなら、いつものところだよ。多分累ちゃんも一緒じゃないかな」

「ありがとうございますっ！」

いろははペコリとお辞儀をすると、早速そこに向かおうとするが、

「あ、ちよつと待ちなよいろはちゃん」

踵を返した直後に、呼び止められる。

彼は、一度、敷地内にある邸宅に戻ったかと思うと——4く5分経ってから、再

びいろはの前に戻ってきた。

「新生活じゃいろいろ物入りだろう。少ないが、持っていきなよ」

そういつて彼が持ってきてくれたのは封筒だった。

手に取ると、ギョツと目を見開く。厚みがあつて、指が沈んだ。

「こんなに……!?! 受け取れませんよ……」

即座に返そうと差し出したが、彼は手を振って拒んだ。

「これから引越してに転校、将来は高校受験が控えてるんだらう? 塾だつて通わなきゃだし。高校生活を終えたら今度は大学に進学か就職活動だ。学生生活はこれからが肝心なんだぞ?」

「だけど、生活の面倒を見てくれる方はいますし……。それにこんな大金、中学生に渡したら危ないですよ」

「なくにはいろはちゃんや魔法少女だ。しかもあの『七海やちよに勝った』つて御墨付き。そんじよそこのチンピラには手出しされんだらうよ」

彼はケラケラと笑つてそう言った。あの子に似た、人の好きが伝わってくる笑顔だ。

それにしても――

「……もう葉ちゃんから聞いてるんですね」

『新生活』―― 神浜市に引越して、新しい生活を送るということ。

「昨日電話が来たつて騒いでたぜ」

「言わないでつて言つたのに……」

いろは、涙目。

このように、気を遣わせてしまうからである。

「あいつに口止めなんて無理だろう。それよりもいろはちゃん」

あの子の父親はそこで口を止めると、首を右往左往した。

周りに誰もいないことを確認すると、いろはに小声で問いかける。

「……お父さんとお母さんが行方不明なんだろう？」

「……！」

——あの子は、そんなことまで言ってしまったのか。

いろはは再びギョツと目を見開くが、知られてしまった以上は、仕方がない。

「……はい」

「……サンシャイングループに攫われたって聞いたぜ……。できればおじさんも協力し

てあげたいが」

そこで彼は、深く頭を下げた。

「すまんっ！ あそのこのグループ会社の『陽渡造園』はウチの最大の取引先なんだ。だから

何も力になってやれることが無いっ。本当に申し訳ないっ！」

「おじさん、大丈夫ですっ！」

いろはは慌てた。気持ちは嬉しいが、そこまでしてほしくはない。

自分の問題は自分で立ち向かうと決めたのだから、他の人には自分の人生を歩んでも

らいたかった。

「もう、力は頂きましたから」

先ほど受け取った封筒を強く見つめて、言い放つ。

「……これには、おじさんが必死に働いてきた結果が詰まってるんです。おじさんの私への想いが、籠められているんです。だから、私はもう、満足です。これ以上の力は、有りませんから」

笑顔を見せると、彼は安心したのか、肩が下がった。

ホツと一息つくくと、いろはの肩にポンと手を置く。

「……そうか。だが、無理はするなよ」

「すみません。ご心配かけて……」

彼は小さく首を振ると、ニツと笑った。

「いいってことよ。それよりも、早くいつもの場所に行つて、あいつに顔見せてやりな。」

いろはちゃんのこと、すつごく心配してたからよっ」

「ありがとうございませすっ!」

いろはは深々とお辞儀すると、封筒をカバンに入れて いろはは深々とお辞儀すると、封筒をカバンに入れて踵を返し——



「死ね」

走りだそうとする寸前で、足が止まった。

彼の冷えついた声が耳朶を打つたのと、強烈な殺気を背後から感じたのはほぼ同時だった。

ヒュッ！ と何かが振り下ろされる音が聞こえて、咄嗟にいろはは横跳びする。

「おじさん!?!」

振り向くと、あまりにも信じ難い光景が目に見え込んできて、息を飲んだ。

彼の右手に握られていたのは刃渡り20cmはあろうかという出刃包丁だ。

「それは、俺の金だ……渡して、たまるかあ……」

先ほど会話を弾ませていた相手と同一人物だとは思えなかった。

彼は一切の感情が凍り付いた抑揚の無い声で呟くと、焦点の合っていない虚ろな瞳で自分に強い憎悪を向けている。迫ってくるが、足取りはヨロヨロと覚束なくて、まるで幽鬼のようだ。

あまりもの狂変ぶりのいろはの肝が冷えた。

一体、何が——でも、彼のこの様子には、見覚えがある。

いろはは、視線を彼の首元に集中した。

「あつた……」

予感は的中。首筋に、見たことの無い紋章の様な青痣が浮かんでいる。

（魔女の口づけ……っ！）

迂闊な自分を呪つた。

あの子に会いたい——ただそれだけに夢中になっていたせいで、魔女の気配に全く気づけなかった。

「っ」

腹立たしさからか、思わず舌打ちを鳴らしていた。

しかし、いくら悔やんでも起こってしまつた以上は仕方がない。

まずは、彼から包丁を取り上げて、安全なところへ避難させなければ……！

だが——

「!?」

世界が自分達を残して、グニヤリと歪む。

数拍後には、世界が景色を豹変させていた。

薄暗い森の中の様だが、赤・青・黄・紫・ピンク・グレーなど様々な色が複雑に交じり合った摩訶不思議な絵画の様な平面的世界に放り込まれていた。

『結界』に、取り込まれた——!?!

魔法は獲物として標的を定めた人間を、『結界』という自らのテリトリーに閉じ込めて、喰らう。

だが、天敵である魔法少女の自分まで、誘き寄せたのは意外だった。

「……」

ぞっと、首筋に氷を押し当てられたような、寒気がした。

この魔法が、魔法少女まで常日頃標的にしているのだとしたら、間違いなく手強い。いろは単独では、敵わない相手かもしれない。

(だけど……!)

かぶりを振って恐怖を払うと、魔法少女に変身!

自分のことは二の次。巻き込まれた彼を早く助けなければ! いろはは大きく口を開けて腹の底から叫んだ。

「おじさんっ!! どいんご……っ?!」

いるんですか、と呼び掛ける寸前で——ギクリとした。

真正面にある茂み。それを形成している葉の一つ一つが、まるで生きてくるかのよう

にモゾモゾと蠢いている。

「おじさんっ!!」

まさか———と思い、咄嗟に駆け寄ると、茂みが四散した。

いや、正確には……

「うえっ」

気持ち悪さが喉元までせり上がり、堪らず口から嗚咽を吐き出した。

———茂みだと思っていたものは、無数の『使い魔』の集合体だった。

大きさは掌大だろうか。蠅の顔を張り付けたダンゴムシの様な奇怪な姿の使い魔が、一斉にぞろぞろと地面を這っていく光景は、死んだばかりの動物に群がる蛆のよう———はつきり言って気色悪かった。

「おじさんっ!」

だが、ダンゴムシの大群が覆いかぶさっていたものを見て、不快感は吹き飛んだ。

彼が、蹲った体勢でそこにいた!

急いで駆け寄り、何度も呼び掛けるが、瞳孔は閉じたままで反応がない。

意識を失っている———!!

急いで、脈と心臓を確認すると———ゆっくりだが、トクトクと規則正しい音を立てていた。

よかった、まだ生きている。

「ふう……」

一先ず、ホツと一息付くいろはは。

だが、安心してはいられない。

背中に感じるのは全体を突き刺してくるような、無数の魔力反応！

「!!」

振り向くと同時に、啞然。

無数に存在していた筈の茂みが、無い。

代わりに地面に敷かれていたのは、覆いつくさんばかりの夥しい数の、蟲、蟲、蟲……。

その一体一体が、瞳から放たれる緑色の光を、いろはに集中させている。

「……………!!」

両足が震えた。こんな物凄い数の使い魔には遭遇したことがない。

そして、この境界内の全ての茂みは、この使い魔達が擬態した姿だったのだろう。

「……」

「よくも、おじさんを……」

いろはは歯噛みしてクロスボウを構える！

圧倒的物量による恐怖よりも、大切な恩人を傷つけられた怒りが勝ったのは僥倖だっ

た。

まだ、戦える——!!

いろはは、激情に任せるように、闇雲に矢を発射する!!

真つ直ぐに飛翔したそれは、使い魔の海に飛び込むと、一体の身体を貫く!

筆舌に尽くしがたい金切り声を響かせながら、紫色の体液を噴出させて絶命して行く。

「つ!!」

やった——等と喜んでいる暇は無い。

続けて2発目、3発目の矢を放つ! いずれも使い魔の体に命中し、絶命させた。

だが、攻撃の最中にも蟲の大群はぞろぞろというはの足元まで迫りつつある。

(このままじゃ——!!)

おじさん諸共、使い魔に捌り殺しにされるだけだ。

闇雲に攻撃するだけじゃ意味がない。

しかし、自分の固有武器である『クロスボウ』は一对一ならともかく、集団相手には相性が悪い。

というのも、矢を一本だけ装填してから発射する仕組みの為に、連射することも、複数の矢を同時に発射することも不可能なのだ。先ほどのように、一体ずつ潰していくし

かない。

(葉ちゃんがいてくれたら……!!)

彼女の固有武器と能力なら、こんな大群でも目じやない。

しかし、頼れるあの子は、今は傍にいないのだ。

自分一人で考えて、この絶体絶命的な状況を切り抜けなくてはならない。

——でも、手はあるのか。

この状況から、大逆転できる起死回生の一手を、打てる機会はあるのか。

考えてる余裕は無かった。

脛の辺りに、ぞわぞわと言う感触がして、咄嗟に視線を下に向けると——顔が蒼

褪めた。

既に使い魔の波が自分の下肢まで飲み込んでいた。内の数匹が、自分の膝までよじ

登っている。

「っ!!」

下肢全体の気色悪い感覚に、意識が遠のきそうになったが……舌を強く噛んで堪えた

!

自分が最後の砦だ。

ここで斃れれば、おじさんも、あの子の家族も、犠牲になる。

「……」

今は、足の蟲は気にしない。

両足に力を入れて震えを抑えると、足元から真正面まで無限に広がる使い魔の海を一瞥する。

まるで黒い川の流れのようだ。

しかし、冷静になって眺めていると——強い魔力を感じる。

つまり、この近くに、大群を指揮している親玉がいる筈だ。

そう、魔女が……。

「!!」

——そこで、いろはの眼が止まった！

海の中で、一体だけ、動かない個体が居る。

まるで、川の流れを分かつ岩のようにじっとしているそれは、形状こそ使い魔と同一だが、体軀は一回り大きく、瞳から赤い光を放って、自分を睨んでいる。

「つ!!」

——ついに、見つけた！

意識を集中させると、強い魔力は“そいつから”感じ取れる。

間違いない。こいつこそが魔女だ。



いろはの目が、キツと鋭く瞬く。同時にクロスボウの照準を、その個体に向けて構える。

使い魔の大群はもう、自分の下腹部まで飲み込んでいた。

だから、チャンスは一度きりだ。逃したら、もう後は無い。次の矢を装填する間に頭まで覆いつくされる。

相手が死ぬか、自分が死ぬかの真剣勝負だ。

「……………!!」

噛み締めると、奥歯がギリリと鳴った。

恩人をこんな目に遭わせたこいつを、容赦するつもりは無い。

憎悪が一気に噴出して顔が酷く歪んだ気がするが、どうでもいい。

必ず、仕留める。

「行っけええええッ!!」

裂帛の気合と共に、魔力の込められた矢が飛翔された!!

寸分の狂いも無く直進したそれは、標的の体を易々と貫く!

「やったっ……………!」

——斃した!

穿たれた個体の瞳から赤い光が消失。

大量の血液を噴出し、絶命していく様を見て、いろはの顔が歓喜に染まる。しかし、

「……………えっ?」

今のは、ぬか喜びでしかないと悟った。

宙空に舞い散った使い魔の血液が、みるみるうちに、一つに集まっていく。

やがて巨大な水晶玉のような形になったかと思うと——愕然とした。

水晶玉からぬるりと現れたのは、羽根の生えた使い魔だった。

同一の個体が、泡が噴き出るようにボコボコと音を立てて水晶玉から次々と姿を顕す

!

「……………」

今、自分が倒したのは、相手が用意した『罨』に過ぎなかった。

自然と、クロスボウを構えていた手が、下りた。

「あぶっ」

羽根の使い魔達が一齐に飛来していろはの顔面に纏わりつく。

重みに耐えきれず、いろはの体が仰向けに倒れた。

瞬く間に全身が、黒い蟲の海に飲み込まれる。

「くっ……」

もがこうにも、纏わりついた使い魔達が力を奪っているようで、四肢が動かせなかった。

「くっ……そ」

——終わるのか。

蟲の下敷きにされて、ふと、唐突にそんなことが頭を過った。

「くそ……!」

——こんなところで、終わってしまうのか。

——家族がいなくなって、恩人も救えなくて、失い続けたまま。

「くそっ!」

——何も成し遂げられないまま。

——ただ空気をたいにふわふわと漂うだけの人生で、終わってしまったのか。

「くそっ！ くそっ！」

自分は今まで何をしてきた。

後悔と怒りが猛烈に押し寄せて、気が付けば泣き叫んでいた。

しかし、いくら喚こうが、もう遅い。

「くそっ！ くそっ！ くそっ！ くそっ！ くそっ！ くそっ！ クソオツ!!」

体が動かない。

目を開くと真っ暗だ。

死ぬ直前とは、こんなものなのか——

「ちくしよおっ！ 離してえっ！ 離せよおっ！ 何で私ばかりこんな目に遭うんだよおっ!? ふぎけんなよおっ!! 私はまだやらなきゃいけないことが……ツ!! やりたいことだって沢山あるのに……ツ!! こんなところで……お前らなんかにい……ツ!!」

『お姉ちゃん、私はね。 “死神” と会う約束があるの』

うい、いやだよ。

貴女が受け入れてたとしても、おねえちゃんは死にたくないよ。  
死にたくない。

新しいスタートを切ったばかりなのに。

友達ができて……一緒に幸せを探そうって約束したのに。  
新しい家族に、助けて貰ってばかりで……まだ何も、返してないのに。

だから、

「こんなところで……死んでたまるかあああああああああああああああああ  
!!!!」

——直後だった。

「聞こえたぜツツ!! いろは——ツツ!!」

聞き覚えのある声が、遠くから聞こえてくる。

幻聴かと思つた。だけど……

「葉ちゃんっ!?!」

驚愕のあまり、叫ばずにはいられなかつた。

返事はすぐに返つてきた。

(よく頑張つたな！ あとは俺に任せろッ!!)

テレパシーで直接脳内に響くのは、はつきりと通る声だ。

よく叫んでいるせいで、少し喉が枯れて中性的になつた声色は、間違いなく、あの子

〃のもの。

(ちよつち耳塞いでろおいッツ!!)

「げっ」

再開を喜ぶ間も無く、いろはは愕然となる。

彼女が今のセリフを言つた時は——必ず〃アレ〃をブツ放つ合図だ！

耳を塞ごうにも、使い魔に雁字搦めにされてるせいで不可能。

(葉ちゃんっ!! 待って今ちよつとそれ無理っ!)

(いっくぜええええええええええええええええ!!!!)

聞くわけが無かった。

刹那——轟ッ!! とけたたましい音が鳴り響いて、全身が震撼した。

「ッ!!」

全身を揺さぶられる様な衝撃に、いろはの体が大きく飛び跳ねる!

体中に纏わりつく使い魔達の魔力反応が消失したのは、同時だった。

使い魔達は力無くポタポタと体から落下し、視界に光が差し込む。

「無事かっ!」

張り詰めたハスキーボイスが耳朶を叩いた。

晴れた視界に一番に映ったのは、「あの子」の手。

「っ!!」

咄嗟にその手を掴むいろは。

「よしっ!」

あの子の顔がニツと笑った。死骸の海から力強く引つ張り、いろはの体を起こした。

「葉ちゃん……」

自分を引つ張り出したあの子——



癖つ毛のある黒髪の短髪に、快活そうな笑顔。自分より小柄で細身だが、引き締まった体付きで、外に出るのが好きな為に肌が浅黒く焼けている。

特徴的なのは、狐か犬の様な大きな耳と、大きな尻尾。服装は黒いノースリーブパーカーにミニスカートと軽めだが、肘上膝下には鎧のような装甲をがっしりと纏っている。

彼女、皆木葉菜（みなき はな）は、魔法少女”だった。

「で、でも……！」

「ん？」

葉菜はいろはの顔を見つめた。無事だと言っていたのに様子がおかしい。

よく見ると、瞳がグルグルの渦巻きみたく回っていた。

「いきなり大技は酷いよ葉ちゃんっ！」

「バツカヤロオイ！ お前、耳塞がなかったのかっ!？」

「無理だつていったでしょお……！」

いろははキンキンに鳴る耳を抑え、涙目になりながら抗議するが——ふと、葉菜の首元にぶら下がっているペンダントの宝石が気になった。

「……あれ？」

「どうした？」

「濁ってない……」

いろはは不可思議そうに葉菜のソウルジエムを見つめた。

先ほど葉菜が放った“大技”は、起死回生の一手として使われることが多く、当然ながら魔力の消費量も多い。

いろはの記憶では、綺麗なソウルジエムでも、一発放てば一気に黒く濁ってしまう筈なのに……。

「へへ。八重さんの言ってた通りだな」

葉菜はピカピカに光る自分のソウルジエムをまじまじと見つめて、不適に笑う。

「八重？」

「あとで話す。それよりも父さんは!？」

「!! あそこに!」

「父さんツツ!!」

ハツというはは、葉菜の父親の方へと振り向いた。葉菜もすぐに駆け寄る。

不幸中の幸いか。

使い魔達は、いろはに標的を定めていた為、彼には目もくれなかったらしい。相変わらず気を失ったままだが、生きている。

「良かった……」

「葉ちゃんツ!!」

安堵する間も無かった。

いろはの悲鳴のような呼び声に咄嗟に振り向く。

愕然—— 蟲の大群が再び地を覆い尽くして、自分達を取り囲んでいる!

「まだ、こんなに……!」

再び死への恐怖が蘇り、いろはの足が竦む。だが、葉菜は猛然と前に進み、吠えた!

「クソつたれどもツ!! てめえら絶対に許さねえ!! 一匹残らずブツ殺すツ!!」

大切な人を傷つけたこいつらを、生かしておけない。必ず、全滅させる。

そして自分達は、全員生き残ってやる。

葉菜は強い決意を込めた瞳でいろはを見た。

「いろは、やるぞー!」

「うんっ!!」

いろはも恐怖を飲み込み、強い瞳を向けて葉菜の意志に応える。

二人は葉菜の父親の前で、背中を合わせた。

「大群は俺が引き受ける! お前は飛んでくる奴を叩きながら魔女を探し出せ!」

「分かってるよ!」

無限に湧き出る使い魔。

そして、動けない一般人を守りながら戦う、二人の魔法少女。  
相変わらず絶対絶命の状況には変わらない。

だけど——背中から感じ取れる熱に、いろはは希望を確かに感じていた。

## FILE #42 いろはの新しい生活へ③

「どっせー！」

裂帛の気合と共に、葉菜が両腕をバツと左右に向けて開く。

瞬間、掌から轟音が生じて、半径1m程の使い魔達が宙に舞った。

彼女の固有武器——両手を覆う鉄甲から放たれる超音波攻撃だ！

いろはのクロスボウと比べると殺傷力は低いが、この蟲の大群のような集団相手にはうってつけだ。

「そいつー！」

いろはも飛翔する羽根付の使い魔を、クロスボウの矢で次々と撃ち取っていく。葉菜が後ろにいるから、安心して一匹ずつ狙いを定めることができる。

「クソっ！ キリがねえ!!」

お互いにかなりの頭数は斃した筈だ。

しかし、使い魔は四方八方から湯水に湧いてくる。

加えて葉菜は大技を使った直後だ。顔に疲弊の色が見え始めていた。

「でも、諦めるわけにはいかない!」

「あたぼうよ!」

しかし、膝を折るつもりは無い。だって、自分には根性だけは誰にも負けない相棒がいるのだから。

彼女がまだ戦うのなら、自分もその意気込みに応えるまで。

葉菜はいろはの言葉に気合を入れ直すと、再び足元に群がる蟲に殺意を向ける。

「っ!」

一方、いろはも飛翔体を矢で撃ち取っていたが……

「!?!」

——しまった。

戦いが長引いた故の疲弊が影響したか——放った矢が使い魔の脇腹を掠めた。

「あつ」

「いろは!!」

呆然。

葉菜が声に気づいて、咄嗟に振り向いて吠える。

打ち漏らした使い魔は真つ直ぐ飛翔し、いろはの顔面に張り付——

「てやっ」

——くことは叶わなかった。

誰かの軽い掛け声と同時に、ヒュンツと風切り音が鳴る。

使い魔は、上から振り下ろされた黒い棒状の何かで叩かれて地面に落下した。

「これでー、いっちょあーがりーつと」

使い魔は地の上で藻掻くが、軽い声の主が持つステッキの先端に体を貫かれて絶命し

た。

「っ!!」

自分を助けてくれた闖入者。

いろははその人物を姿を認識した時、思わず瞠目した。

——彼女が来てくれた!!

腰まで伸びた長いブロンドヘアに、170近く有る長身のスレンダーな体躯。

メイド服の様な、お洒落なスイーツカフェの店員の様なふんわりとしたドレスを纏い、背中には蝙蝠のような羽根が生えている。

だが、特徴的なのは、表情だ。

魔女と魔法少女の間で苛烈な命のやりとりが要求されるこの状況に全く相応しくない、ふにやりと間の抜けた笑顔。緊張感なんて微塵も感じられ無い。

—— だけど ——

「累さん!!」

いろはに、この上無い“安心感”を与えるには十分だった。

—— 彼女の名は、宮内 累（くない るい）。 ——

いろはと葉菜にとっては先輩の魔法少女であり、チームのリーダーだ。

「やつはろー。いろっちー」

累と呼ばれた長身の少女は、いろはの声に振り返ると、陽気に手を振った。

反射的に手を振ってしまうが、目の前に葉菜が割り込んできた。

「おい！ やつはろーなんて言ってる場合か!!」

至極正論。

だが、怒鳴り散らす葉菜を前にしても、累は飄々とした態度を崩さない。

すかさずいろはの背後に隠れると、身体に抱き着いて泣きマネをする。



「あーんいろいろつちたすけてー。葉ちゃんこわーい」

「ええっ！　ちよつと離れてください!!　いや……ちよつとそこは薄いんですから触らないでっキャハハハ！」

「えへへー」

累は背中越しにいろはのおへそ周りをコチヨコチヨとくすぐる。

お互いに笑い合つて楽しそうだ。とても楽しそうである。

——ピキッ

葉菜が、ゴツイ血管を額に浮かび上がらせたのは言うまでも無い。

「おいコラー!!　遅れてきた癖に遊んでんじゃねー!!」

——ああ、葉ちゃん。キレるだけ損なのに……。

いろはの心配も虚しく、累はふにやふにやと笑つて聞き流すだけ。

〃いつもの光景〃である。

「まあまあ葉ちゃんそうイキないでつてー。ほらほら辛い時こそ笑つて笑つてー」

累はピョンと葉菜の背後に飛ぶと、背中を指でなぞる。

「キャハハハ!!　あたしもそこは弱いんだ……つてやめろおい!!　お前なあ、あと少しでいろはが死ぬところだったんだぞ!!」

「えっ」

その言葉に累はギョツとした。

点になった目をいろはに向けて問いかける。

「そうなのー？ いろっち」

「あ、でも……大丈夫です。この通り、ピンピンしてますから」

そう言うと、その場でピョンピョンと飛び跳ねるいろは。

彼女なりの、元氣アピールのつもりらしい。それを見た累が、ふにやりと笑った。

「あつそ。じゃ、良かった」

「あつそつて、あんたなあ……！」

微塵も遅れた責任を感じないリーダーに葉菜はガツクリ項垂れる。

もはや直しようが無いので仕方がないのだが。

「つて……ふざけてる場合じゃないよねー」

と、そこで累は急に真面目ぶった顔で周りを見渡した。

三人目の魔法少女が現れたことで、用心しているのか——周囲に群がる蟲は攻撃

を止めて、ただ彼女達を睨みつけている。

殺気を伴った無数に瞬く深緑の眼光が、全身を突き刺すかのようだ。

「誰のせいだ……つてまあ、それもそうだなー！」

葉菜も臆することなく、キツと周囲を睨みつけて身構える。

「でも、三人そろった今なら、なんとかなるよ」

いろはだけは、振り返って二人に笑顔を見せた。二人も、自信たっぷりの笑顔で答える。

「それにしても……物凄い数だねー」

再び使い魔に向き直った累だが……途端に肝が冷えた。

地表を覆い尽くすのは奇怪な姿をした蟲、蟲……千単位は愚か万単位はいるだろう。

初めて見る夥しい数の使い魔に、累の顔が蒼褪める。

「ああ、しかも魔女はまだ見つかってない」

「こいつらを捌きながら、探さないと……」

二人の言葉を聞いた直後に、累が手をピンを伸ばして挙手した。

「先に謝つとく。ごめん」

「あつ」

「まさか……!」

いろはと葉菜が目を丸くして累を見ると、蒼白の顔に冷や汗がダラダラと流れていた。

——嫌な予感がする。

彼女の今のセリフは、間違いなく「アレ」をする合図だ。

二人が洗面を浮かべた時には、累はくるりと背中を向けていた。

両手を地面に付いて足を大きく縦に開き、クラウチングスタートの姿勢を取ると……

「逃げるが勝ちいいいいいいいい!!」

バビュンツ!! と爆発音が鳴るのと同時に彼女の足元の草花が弾け飛んだ。

一瞬後には、累ははるか彼方まで走り去っていた。

……というか、逃げた。

そのスピードたるや——全速力のチーターですら、目の当たりにすれば仰天の余り目玉を剥き出しにする事だろう。

「おいこら待てこんのヘタレーっ!! たまには正面から堂々と戦えいっ!!」

すぐさま葉菜がテレパシーで怒号を響かせるが、返ってきたのは涙声。

（だってだってー、能力のせいなんだもーん。仕方無いじゃん!）

「ああ、そうですか……」

「いつも通り」の光景なのだが、年長者らしからぬ情けなさに、いろはは見るたびに溜息を付いてしまう。

——そう、仕方無いのだ。

宮内 累——通称・『逃げの累さん』。

その異名(?)が示す通り、彼女の固有魔法は「逃げ足」。

相手を見て、「負ける」「勝てない」と思い込むと、今のように、足が勝手に《・》逃げ出してしまふのだ。

こうなると、もう手遅れ。

いろはと葉菜はもちろん、本人にさえ止めることは不可能。相手に「勝てる」と判断できるまで、逃げ続ける。

「累さん！ それじゃあ、いつも通り」で！」

（はいよ分かったー！ 逃げながら魔女探しとくからねー！）

いろはがテレパシーで呼びかけると、累は即座に応える。

「累さん！ 使い魔の大半がそっち行ったぜー！」

（あつそー！ なら良かったー！ じゃあ葉ちゃんいろつちも、いつも通り”よろしくー！ ……つてわあああうじやうじや来てるうううううつ!!）

だが、三人の顔に不思議と悲壮感はない。

それもその筈。累が逃げてくれたお陰で、彼女達のチームは、いつも通り”のスタイルの戦い方ができるのだ。

累が逃げ回ることで、結界中の使い魔達を引き付ける。使い魔は基本的に鈍足な個体が多い為、累が捕まることはまず無い。

よって累は逃げながら、追撃する使い魔を迎撃しつつ、魔女を探することができる。

いろはと葉菜はその間に、引き付けられなかった使い魔を殲滅する。

大抵累が大半を引き付けてくれる為、彼女達は安全に戦うことができる。

そして累が魔女を見つけたら、いろはと葉菜でそこへ向かい戦うという戦法だ。

「じゃ、いつも通り」残された使い魔共をぶっ潰して、父さんを守るぞー！」

「うんっ！」

葉菜というはは、再び気絶中のおじさんの前で背中を合わせる。

地表を覆い尽くしていた使い魔は、限りなく全てが累の後を追っていった。

残されたのは――

「赤い目のヤツらだけか……何かヤバそうだな」

自分達を取り囲んでいる使い魔の数は20体。

深緑の瞳の個体よりも一回り大きく、血の様に赤い目を不気味に瞬かせている。

「!! 葉ちゃん気を付けて！」

その個体を目にした途端、いろはの肩が強張った。

彼女は先ほど、こいつにいつぱい食わされた。同じ轍を仲間踏ませる訳にはいかな

い！

「どうした？」

かくかくじかじかと説明すると、葉菜の表情も同様に強張る。

「……なるほど。そいつあ厄介だな……」

「うん。だから対処法を考えないと……」

使い魔は、人を喰らい魔女に成長する——この性質がある以上、街を護る魔法少女は、結界内の使い魔を一匹残らず始末しなければならぬ。

目の前で包囲網を作る赤い瞳の使い魔達も勿論対象だが……こいつの特徴を知っているいろはは、なるべく戦うことは避けたいと思っていた。

(倒せば、厄介な「羽根付き」がたくさん生まれる……そうになると)

「羽根付き」は機敏だ。一匹ずつならともかく多数が縦横無尽に結界中を飛び回られたら対処しようがない。

どうしよう——

「いや、もう考えた」

——等と考えているだけ無駄だった。既に葉菜は答えを見出していた。

「はやっ」

思わずそう漏らしてしまういろは。

彼女の顔を見ると、ニツと笑っている。さすがはチームの作戦参謀である。

（何も考えない累と、考え過ぎる自分が役割を押し付けたのだが）

頭の回転と、決断力が早い。

「こいつの『血』が変化して羽根付きに変わったんだろ。だったら血を出さずに叩きのめしやいい」

「あ、そうか。葉ちゃんなら」

「お安い御用さ」

要は自信満々に宣言すると、両手を赤目の蟲達に翳す。

「破っ!!」

裂帛の気合と共に——爆音ツ!!

いろはが咄嗟に耳を塞いだのと、蟲達が吹き飛んだのは、同時だった。

使い魔はボトボトと地面に落ちると、赤目から光が消え失せた。魔力反応も消失。

「……死んだの?」

「それを祈ろうぜ……」

微塵も動かなくなった使い魔達を見て、葉菜はホッと胸を撫で下ろす。

「葉ちゃん危ない!」

「っ!?!」



安心が、油断に繋がった。

いろはの声に咄嗟に振り向くと、羽根付きが顔面まで迫っていた！

「ひっ」

思わず悲鳴を上げそうになる葉菜だが——刹那、羽根付きは真横から飛んできた矢じりに体を貫かれて絶命した。

「ひゃ~~~~、おっかなかった……」

使い魔一体に取りつかれたところで死ぬ訳無いが、あんな巨大な虫が顔面に貼り付いたら気持ち悪いことこの上無い。

蒼褪めてへなへなと腰を抜かす葉菜に、いろはが駆け寄った。

「大丈夫？ 葉ちゃん」

「ああ、ありがとう。いろは」

手を取って立ち上がる葉菜の表情は、少し不審気だ。

「どうしたの？」

「いや、今回の魔女は妙だ。父さんを取り込んだのに父さんには目もくれない。専ら俺達だけを標的にしてるように見える」

「！……それは私も感じたよ。それにさっきの羽根付の動きといい……」

「ああ、完全に俺の隙を狙ってた。まずいな……こいつら相当手強いぞ」

使い魔は基本的に知能は無く、結界内を呑気に遊びまわっているだけなのだが、今回ののは別格だ。

組織的行動が取れている上に、使い魔一体一体の知能も高い。

現在進行形で使い魔を多数引き付けてくれている累が、ふと心配になった。

「累さん、大丈夫かなあ……」

「いやありや気にしちゃダメだ」

葉菜が苦笑いして、心配するのはやめろと言わんばかりに手を振った。

「だけど」

「大丈夫でありや殺されても次の日にはひよっこり顔出すタイプだから」

矛盾している——が、累は本当にそういう人なのである。

いろはも苦笑いを返すしかない。

「おまた〜」

——と、噂をすればなんとやらだ。

頭上から軽い声。

いろは達が上を向くと、いつの間にか木の枝に累が座っていた。

「累さん！」

「よつと」

累が木から飛び降りる。

ここに戻ってきた、ということは『逃げ足モード』ではない。つまり……

「勝てるのか？」

怪訝そうに葉菜が尋ねると、累は自信満々に頷く。

「うん！」

累は背後にある3 m程離れた木の幹を指さした。

「いろいろち構えてー」

「あ、はい」

言われた通り、クロスボウに矢を装填すると、累が示した幹に向けて、右腕をグツと伸ばすいろは。

「んでー、葉ちゃんは耳をすましてー」

「お、おう」

累の意図が読めない。

葉菜は相変わらず怪訝な表情を浮かべつつも、指示通り、聞こえてくる音に神経を集  
中させた。

みいん、みいん……

みいん、みいん……

「!!」

鳴き声……?」

木の葉と木の葉が擦れ合う音に混ざって、確かに聞こえた。

葉菜は目をカッと見開くと、いろはに指示を出す。

「いろは! 目線の高さぐらいに腕を上げて撃てっ!!」

「!? わ、分かった!」

呆気にとられながらも、いろはは指示通りに矢を放つ。

バシユツ!! と弾くような音と共に発射されたそれは、一直線に飛翔して幹に衝突した。

瞬間——

「キイイイイイイイイイイイ!!!」

——結界中に響き渡ったのは、けたたましい金切り声。

「!!」

「よっし! 大成功☆」

三人は金切り声のした木の下まで駆け寄る。

いろはと葉菜は、愕然とした。

木の幹に『蟬』に似た手のひら大の蟲が、矢に突き刺さった状態で絶命していた。

「こいつが、魔女だったのか」

「うん。強い魔力を感じたからもしやってねー」

「流石累さんです!」

いろはが輝く瞳を向けて賛辞を贈る。累は「フツフン☆」と鼻をこすって得意気だ。

「ほんとベテランなのは勘の良さだけだな」

葉菜は皮肉を飛ばすものの、表情は安堵していた。

「じゃあ、あとは……」

累が振り向く。

いろはと葉菜も同じ方向を向くと、途端に顔が蒼褪めた

奥の方からぞろぞろと——蟲が山のように群がって詰め寄ってきていた。

「何匹か倒し損ねちゃったんでー、結界消える前に葉ちゃん『大技』お願い☆」

テハツと舌を出して、両手を合わせて葉菜に頭を下げる。  
いろはは唾然。

「何匹どころじゃねーっ?!」

怒鳴りながらも葉菜は、即効で“大技”を使い、使い魔達を吹き飛ばすのだった。

☆

——10分後。

場所は戻り、皆木植木店の庭。

「あれ?」

葉菜の父親が目を覚ますと、視界が橙色に染まっていた。  
むくりと、身体を起こす。

周囲を見渡すと、見慣れた風景が広がっていた。

いつの間にか自分は、庭で寝転がっていたらしい。それも大分長い時間を。

その証拠に、夕陽は既に沈みかかっていた。

「父さん、だいじょうぶ?」

視界の横からひよこつと顔が現れる。覗き込む様に見つめてきたのは、自分の娘だ。

「おお、葉菜か。俺は一体……」

「倒れてたんだよ。どーせ水も飲まずに働いて脱水にでもなつたんでしょ?」

「そーいや、昼飯の時に茶を一杯飲んだくらいだったな」

「全く、社長がこんなに情けなくてどうすんのさ? しつかりしてよ」

彼は立ち上がると、葉菜に頭を下げる。

「ああ、悪いな。ちよつと戻って一休みしてくらあ」

彼はそういうと、疲れが残っているのか、よたよたとした足取りで自宅に戻っていた。

「ふうー」

彼が見えなくなると、葉菜が大きく息を吐く。

家族を無事に救出できたので、緊張が解けたのだろう——と、いろははそう思っ

て、

「良かったね、葉ちゃん」

声を掛けたのが間違いだった。

「…………!!」

刹那——葉菜が血走った眼を、ギロリといろはに向けた。

「良い訳ねえだろおい!!」

「え”っ!?”

地響きするような怒号に、いろはがギョツとたじろぐ。

「いーろーはーおーまーえーはー!!」

「ひいっ!!」

ジリジリ詰め寄ってくる葉菜の形相はまさに鬼。いろはが悲鳴を挙げて後ずさるのも無理は無い。

「どういふことか説明しろおい!!」

葉菜は腰を低くすると、思いつきいろはにタックル!!

ズドンッ!! と大砲を撃った様な音が響いた時には、二人はごろごろと地面を転がっ

ていた。

「ぐえええっ」



その光景、正に地獄車!!

腹部に生じた強い衝撃と高速の回転力で、胃の中の全てを撒き散らしそうになるが、必死に耐える。

「よ、葉ちゃん、ちよつと待って……!」

地獄車は数メートル先で、ピタリと止まった。

偶然にも葉菜がいろはに馬乗りしたような態勢になる。

苦笑いを浮かべながら、説明しようとするが、目先の少女は烈火の様な瞳を向けてくる。

「心配掛けさせやがって!! いきなり『小さいキュウベえが私の大事な記憶を知ってるかも』とか言い出した時は『ハア?』って思ったけど、神浜に行ったら行ったで七海やちよに勝ったなんてことになってるし、お前のお父さんお母さんはいきなりいなくなってるし、昨日はお前学校休んだらしーし、かと思ったら夜に『神浜市に住む』なんてメール送ってくるしで、一体何がどーなってんだよ!? 一から十まではつきり教えろおおい!!」

「げっ! ぐっ! がつ」

胸倉を掴んで思いつき揺すられた。同時に後頭部を地面に何度も打ち付ける。

ガンガン当たって痛い。

(でも……)

心配かけさせて、と言ってくれたのは素直に嬉しかった。

そして、私の為に本気で感情をぶつけてくれるのも、また嬉しい。

——胸倉掴んでぶんぶん揺るのは勘弁してほしいが……仕方ない。怒らせたのは、全部自分なのだから。

彼女は、自分とは違う中学校に通っている。住む町だって違う。

性格も正反対だ。竹を割った様に明るくて、人見知りも物怖じもしない。スポーツも勉強もそこそここなせるし、面倒見が良いから友達も多い。……あと、ちよつと悔しいが、彼氏もいる。

自分とは正に凸凹。

普通だったら、決して合うことのない人間。だって、見てる世界が違うんだから。でも……

「……葉ちゃん、泣いてる?」

雫がぼたぼたと頬に落ちてきて、呆然と目を見開いた。

「泣いてねーよ」

と、言いつつも葉菜の瞳はぐしよぐしよに濡れていた。

「だって、涙が」

「ああもう!! くそっ!!」

葉菜はいろはから降りると、両目を腕でごしごしと拭った。

「だって寂しーじゃねーかよっ!!」

背中を向けてそう叫ぶ葉菜の声は、震えていた。

泣いている顔を見せたくないという彼女なりの優しさだろう。

「ずっとこの街で三人でやっていけるって思ってたのに……いきなりお前だけ抜けるなんてさあー!」

「……ご、ごめん」

「謝るなよバカ。自分の心配してくれ」

「自分の……?」

「みんないろいろつちのこと心配してたんだよー」

ひよこつと顔を割り込ませると、累はそう言った。

「いろいろ真面目だからさー。お父さんとお母さんがいなくなったの。多分自分のせいみたいに思っっちゃうんじゃないかなーって」

「それは……」

いろはが顔を俯かせる。累の勘はやはり鋭い。

両親が大企業に連れ去られた原因ははつきり言っ分らない。

しかし、いつも見ている不思議な夢といい、ういの「あの言葉」といい、どうしても自分が密接に関わっていると思ってならなかった。

「でもさっ」

目を赤く腫らしながらも、調子を取り戻した葉菜が、笑顔でいろはの肩を叩く。

「あたし、安心したよっ！」

「えっ？」

「お前が『くそっ』とか『ちくしょお』って言ってるの聞いてさっ！」

「あっ」

いろは、顔が紅潮。すかさず累が横やりを入れてくる。

「なになにいろっちー。そんなこと言ったーん？」

意外だねービックリだねーと累は物珍しそうにいろはの顔を見つめて、ニヤニヤ笑いだす。

「いや、えっと、その」

慌てて手を振って否定しようとするが、隣に証人が立っているので無駄だった。

「『ふざけんなよ』って……『死んでたまるか』って叫んでさ……。ああ、こいつはまだやる気なんだって」

「葉ちゃん……!」

葉菜の言葉が胸に突き刺さった。

—— そうだ。自分は“終わり”を拒んだ。

何もかも失って、絶望のどん底に叩き落されて、もう死んでも良かったのに……命の危機が目の前に迫った時、自分の口は勝手に叫んだ。必死に抵抗した。

「あたし、嬉しかったよ。いろはが抱え込んで変な気を起こさなくて。ああいうことが腹の底から言える奴だって分かって、本当に安心したんだよ! だから、絶対に助けなきやって思えたんだ!」

「葉ちゃん……!」

大きく見開かれた瞳には、涙が浮かんでいた。

「累さんも嬉しかったよ。いろっちが貫いてくれる子で!」

ああ累さん! あたし今良い事言ったのに! —— と葉菜が喚くが、累は気にせずそう言った。

「……えっ?」

いろはが呆気に取られて、累を見つめる。

何を言っているんだろうか、本気で疑問だった。

だって、自分には、二人の様な強みは無い。ただ独りぼっちが嫌だから、二人に付い

てきてただけで……。

今の戦いにしたって、二人がいなかったら、自分は死んでいた。

「私には、貫いてるものなんて何も……」

ボソツと呟いた言葉を、累は快笑一閃で切り捨てた。

「ニヤツハハ！ まーたいろつちはそういうこと言っちゃってさー！ 分かってんだ

よー？ 私と葉ちゃんは一？ ねえ？」

「うんっ！ だからあたし、いろはが好きなんだっ！」

「えっ」

呆然となる。

二人が知ってる自分の強みって、何なんだろう。

「だっていろつちってさー、絶対に諦めない子《・》じゃん」

「……!!」

夕陽を受けた二人の笑顔が、眩しかった。

眩しすぎて、目が痛くなって、視界が震えた。

—— だけど、もう一步、進んでいけるような気がした。

## ◎おまけ

——場所は変わり、三人は駅前にある廃ビルの一室にいた。

入り口に「談話室」と表記されたその部屋には、少し剥がれているが革製の大きなソファと、テーブルに絨毯。仮眠できるような簡益ベッドが置かれている。

元々、累が学校からサボる際、周囲の眼から逃げ隠れするために、ここを【秘密基地】として改造したのだという。

葉菜が加わり、いろはが加わってからは、自然と彼女達・魔法少女チームの集合場所兼作戦会議場になっていた。

「ところで八重さんって？」

累が道中、自動販売機で買ってくれたホットココアを啜りながら、いろはが尋ねる。

「ああ、八重さんっていうのは、八重いずもさんのことだよ」

「??」

葉菜の答えにいろはが首を傾げる。

名前のニュアンスが何処となく、「八雲みたま」さんに似ている気がするが……。

「あれ。知らないのか？ 神浜市の調整課の人だぞ」

「そうなの？」

「なんでもねー、魔導管理局と事務局の無い地方にわざわざ出向いて調整しにきてるんだってー！ いやーほんと熱心だよねー」

「あんたは少し見習え」

「アハハ……」

高校生にも関わらずタバコをスツパスツパ吸いながら、ニヤハハと笑って累が言う。葉菜がジト目でツツコみ、いろはが苦笑いを浮かべるのが三人のいつもの様子だった。





FILE # 43 それぞれの思惑①

同日。

19:00、大東区———明京町役場。

常盤ななかの執務室では、彼女が誰かと連絡していた。

「それでは、十日後の商工祭の警備の件、何卒よろしくお願いいたします」  
普段通りの冷徹な顔がいつにも増して強張っていた。

〈承知いたしました、常盤主任〉

対する連絡先の相手は、冷血さすら感じられる程の涼しい声色の女性だった。

「我ら蒼海幣。今後とも治安維持部の皆様とは、善良且つ公正なお付き合いができることを祈っております」

「ありがとうございます、鄭<sup>チャン</sup>さん。それでは、よい夜を」

告げると、相手もまた「よい夜を」と唱えて通話を切った。

——張り詰めていた緊張の糸が解けた。

ななかはふう、と大きく溜息を吐くと、座椅子に深くもたれかかって肩を竦める。

虚空を仰いで額の汗を拭った。

今の気分は——マラソンの全国大会で、自分の力を出し切って無事にゴールまで走り抜けたのと同じか。

それだけ、電話先の相手から強いられる「プレッシャー」は鉛の様に重かった。

常盤ななかがりーダーを務めている「チーム・アメノハバキリ」は、彼女以外に、純

美雨（チュンメイユイ）、志伸あきら、夏目かこの4人で構成されている。

「犯罪撲滅」を理念に掲げ、最近、「犯罪率0%」を達成できたのは記憶に新しい。

それは各人の目覚ましい活躍の賜物だが——あくまで表舞台での話だ。

現実的に考えてほしい。

10代半ばの少女4人だけで、麻薬問題や移民、熟練の魔法少女（傭兵）が蔓延る大

東区の火種を完全に抑えることなどできるだろうか。

答えは簡単。

無理だ。

不可能。

「犯罪率0%」達成の背景には、蒼海幫に属する彼女達が、上述した「裏社会」に潜む悪党共を圧倒的な武力で抑えてくれるからに過ぎない。

そして、治安維持部の力など、彼女達からしてみれば吹けば飛ぶぐらいの矮小なものでしかない。

——蒼海幫。

戦前より中国・台湾移民らによって創設された「互助組織」だ。

商店街の支援や明京町の警備、祭り等の行事企画執行などを行っている。

そして現在では、後述する「ボス」により、株式会社『蒼海グループ』に名を変えて、あらゆる事業を展開し、成功させている。

——と、表向きは、クリーンな組織だ。

しかし……。

一般的には「マフィア」「ヤクザ」等と恐れられている。

理由は、以下の3つだ。

戦後、神戸市で頻発した荒事に度々携わり鎮圧してきた事。

同時期に、闇市でアヘンを売り飛ばし、莫大な財力を得たという「噂」があること。

そして、最後の理由にして、最大の理由が――

「墮龍（デュオロン）……」

蒼海幫に所属する魔法少女のみで構成された、荒事対策専門チームだ。

地に堕ちとされ、一切の陽を遮られた龍の集い。

しかし、それは――今の神戸市内で最も強大な力を持った、恐るべき戦闘集団であった。

主に、蒼海幫や市民の安寧を綽名す暴力団組織への牽制。

最近大東区内で、頻出する麻薬密売人の摘発を主に行っている。

人数は治安維持部の総数よりも遥かに上回る、30人。

年齢層も10〜30代と幅広く、そのトップには「五強聖」なる凄腕の格闘家達が君臨している。

（その五強聖のトップに君臨しているのが……）

ななががスマホを開く。

画面には、純 美雨が調査してくれた墮龍のメンバーの詳細が記載されていた。

ページの一番上には、太陰太極図に似た紋章が映る奇異な瞳の女性の画像が有った。

王海龍（ワンハイロン）——

墮龍の実質的な指導者。

蒼海グループの代表取締役会長。つまり、蒼海幫の「ボス」である。

なんといつても驚嘆すべきはそのプロフィールだ。

年齢は34歳、魔法少女の経験年数は実に23年。

その力量たるや、美雨を始めとする蒼海幫の組員の間では【闘神】と噂されている。

まさに別格。別次元の来訪者のような偉人。

だが、彼女の他にも——

ななかは親指で画面を下にスライドする。

深緑のショートカットヘアの、瞳を閉じた女性の画像が映り込んだ。

今しがた連絡した相手——「鄭 咲蘭」（チャンシヤオラン）だ。

彼女もまた、「五強聖」の一人であり、年齢は29歳。経験年数は17年という鉄人で

あった。

「……………」

ななかは少し首を俯かせて、小さく息を吐いた。

魔法少女は短命——契約してからそう聞かされてきたななかは、彼女達の存在を

知った時、酷く驚いた。

こんな魔法少女がいるのか、と。

だが、現に目の前に実在しているのだから受け入れる他に無い。

思わず自分の人生を恥じた程だ。

畳みかけるような苦境を乗り越えた先に手にした今の地位——中学生の頃の自

分がそれに陶醉しなかつた事も無い。

しかし、自惚れもいとこだった。

(公正なお付き合いを……ですか)

電話を切る前の咲蘭シヤオランの言葉を思い出して、口元に自然と冷笑が零れた。

彼女の言葉は、皮肉だ。

皮肉以外の何があるというのか。

蒼海幫の資料を確認する。

昔は『長老』をトップとする、「老人会」によって運営されていた。

しかし、10年前にアメリカで「大事件」が発生。

世界が魔法少女を認知してから、組織内の情勢が大きく変動した。

これまで、日の眼を浴びることが無かつた「墮龍」がこれ幸いと、急激に権勢を伸

ばしていったのである。

今では、老人達は全て引退に追い込まれ、王 海龍を頂点とする【五強聖】達による新体制が確立されていた。

株式会社化もその一環だ。

そんな深慮遠謀たる者達がただの小娘に【公正】を求めるとは——  
(……)

両膝に置かれた手が、拳を作り上げていた。

正直、悔しかった。

彼女達の前では、自分もまた凡百たる魔法少女の一人に過ぎないのだと、自覚せざるを得なかった。

明京町や役場内では、ななかを【女帝】だの【影の支配者】だのと囁し立てる声が聞こえるが——正直、大層な肩書きなんて身に余ると思っている。

この街の守護者は【墮龍】だ。

そして、女帝と呼ばれるべき真の支配者は王 海龍だ。

対等な関係なんて築けやしない。

ましてや、彼女達の尽力が無ければ今日の治安維持は叶わなかったのだから、頭も上がらない。

人員・経験・頭脳・戦力、何れの面を見ても治安維持部は【墮龍】の足元に及んでい



ない。

(やはり対等になるには、治安維持部も力が有ることを示さなければならぬ)

五強聖達の狙いは分かっている。

『マフィア』とか『ヤクザ』とか……古くから組織に根付いた「悪」のイメージを完全に払拭したいのだ。

その為の手段こそ、『正義の味方』になることだ。

つまり、「治安維持部の乗っ取り」である。

中国武術こそが「最強」であり、弱き民を護る「盾」となるべきだ、と海龍らは考えているのだ。

牽制しなければならない。

しかし、なかなか個人がいくら力を付けようが、覆しようも無いし、意味が無いのだ。

象徴たる人物にこそ、それを示して貰わなければ意味が無い。しかし、市民から聞こえる噂や、自分が見たところ、彼女からその気概は薄れているように感じられた。

(頼みますよ……七海部長)

故にななかは一計を投じた。

非情であり、悲惨な結果を生み出すリスクも高いが——治安維持部が生き残るには、ああするしかない。

「ななか」

我に返った。

椅子ごと回転して声の方向を向くと、執務室の扉が開いていて、一人の少女が歩み寄ってきていた。

「魔女退治、お疲れさまでした。あきらさん」

ななかは笑顔で彼女を迎える。

対する少女——志伸あきらは少年のように澁刺な笑顔で返してくれた。

空手の有段者であり、身長が高く、肩幅も広くて胸板も厚い。全体的に筋肉質な体躯だが、性格はチームメンバーの中では一番年頃の少女らしい、とななかは評価していた。

「まあ、なんとかね。そつちも順調？」

「ええ、工匠区管轄の鄭さんチャンが万全を期して頂けると」

「良かった。これで祭の準備は安心して進められるねっ！」

無邪気だった。

性善説を信じている彼女は、墮龍の狙いなんて知りようも無い。

彼女達が本心から人々に尽くしてくれる集団だと、信じて疑わない。

——それで、いいのかもしれない。

真実を知るものは、極一握りでいい。

彼女と「あの子」は、陽を浴びてこそ育つ。だから陽の当たる世界だけを見て欲しい。

人々から根強い支持を受けている二人の顔に影が差せば、明京町の空気は呆気なく澱んでしまうのだから。

「ときどき、あきらさんの事が羨ましいと思います」

「えっ?」

あきららが呆気にとられた顔をしたので、思わず自分もビククリして目を見開いてしまった。

思っていたことが、つい口から出てしまったらしい。

「いえ……素直に感情を表せるあきらさんが羨ましいんです。私は、中々そう在れませんから」

そう、自分はひねくれているのだ。

言い方が悪いが、彼女のように真っ直ぐ生きれば、楽だったかもしれない。

「何柄にも無く弱音吐いてるのさ、女王様っ」

あきららがななかの背中をバシッと叩く。

「町の治安が保たれているのは君が居てこそじゃないか。あんまり辛気臭い顔してたら、おけらさんに喝を入れられるぞ？」

「うっ、それは御免こうむります……」

更に蒼くなった顔を見て、あきらが笑った。

ななかも彼女の笑顔を見てると、少しだけ心が温まった。

☆

——某県内 春浪（はるなみ）市、郊外。

車通りの少ない道路の路肩に「神浜市役所」と記載された一台の車が停まっていた。中の助手席には、一人の少女が退屈そうにスマホをいじっている。

見た所、高校生ぐらいだろうか。

だが、整った童顔に、ボリユームのある煌びやかな金髪。体つきは程よく成熟してお

り、同年代の男女からも注目を浴びるであろう優れたプロポーションであることは見て分かる。

——と、そこで運転席側の窓が、コンコンと叩かれた。  
来たか。

少女はむくりと身体を起こすと、運転席側を向く。

開かれたドアから一人の美女が、乗り込んで来た。

「おかえり、調整屋」

不適に笑ってそう言っていると、美女の顔がたちまち嫌そうに歪む。

「屋じゃなくて、課、ツスよ。モモ」

美人を見ると、ついつい表情を崩してやりたくなるのは何でだろうな？

モモと呼ばれた少女は、そう思いながらも、彼女の美麗を極めた相貌を見つめる。

——この美女の名前は、八重いずも、といった。

神戸市慶治町で役場に勤務している、調整員だ。

少し癪つ毛気味な白いベリーショートカットは朝霜の様に美しく、整った小顔の肌もまるで白雪の様でライトを浴びると眩しく輝いている。

正直、絶世な美女と称するのなら、彼女だって七海やちよと八雲みたまに負けちゃいない。

「なーんで調整課にしろ、他のチームリーダーにしろ、美人さんが多いのかねえ」  
そのせいで、「神浜は天女が集まる街」と評判になっている。

その天女の中に自分が含まれているのか、と思うと、素直に喜んでいいのかわからない。微妙だった。

少女の名前は「十咎（とがめ）ももこ」。

慶治町の治安維持部隊「チーム・カグツチ」のリーダーである……が、彼女自身に大きな特徴は無い。極めて普通というのが、一般的な評価だった。

といっても並び立つのが、七海やちよ、都ひなの、常盤ななかといった超個性派揃いの面子なので、どう足掻いても大衆からは見劣りされてしまうのだが。

「ももこだって可愛さじゃ負けてないっすよ」

いずもがフツと笑ってそう励ましてくるが、ももこは露骨に嫌な顔をした。

「説得力無いよ」

それも当然である。

今のいずもの姿は八雲みたまと同じ、調整員の魔法少女特有の服装。

肩から露出した腕と、太ももから露出した下肢は、これまた白雪の様な白さで、人形のように細い。ももこが彼女に勝てるといえる部分は、バストとヒップの大きさぐらいだろう。

「あたしが保証しますって」

「よく言うよ。アタシなんて……松茸に紛れるジャガイモみたいなもんさ」

「おお、的確な例えっ」

「それより随分早かったね。調整はもう終わったのかい？」

「いずもが待つてましたと言わんばかりに、眼鏡をクイツと直して、笑った。

「ええ、もうバッチリッス」

「流石。この街の魔法少女環境は中々に厄介だから時間かかると思ったけど」

「大抵一つの市街に、5人もいりゃあ多い方なんすけどねえ……」

そして街を守るのもその人数が丁度いいのだ。

「3チームも分かれている上に、1チーム当たりの人数が12、3人つて……多すぎだろっ!! 十年前の二木市ふたつきかつっの!」

スマホで春浪市の魔法少女のデータを確認しながら、ももこが悲鳴を挙げる。

「それでもギリギリ賄えていたのは、この街に魔法が多かったわけで——つまりは使い魔放置もメツチャ多かつた訳ッスが——……でも最近、流れ込んできた傭兵共がこぞつて魔法を狩り尽くしちゃったッスからねえ」

「ああ、お陰様で3チームの均衡が一気に崩壊。グリーフ食シールド扶を確保するためには他の2チームを皆殺しにするか外に追い出すしかないって、一触即発状態。市長は魔法少

女に懐疑的で対策を講じるつもりは無かったし」

こうした春浪市の事情は、他県の魔導管理局・事務局がある地域にまで広まっていた。事態を危惧した管理局員達が立ち入り調査依頼書を提出するも、市長に「キナ臭い」との理由で、悉く却下されていた。

「まあ、モモの叔父さんがこの市議会議員で助かったツスよ。お陰様で神崎市の管理局員達が調査に入れて魔法少女達の情報が入手できましたし。調整にしたって各チームのリーダーに働きかけて、立会人になってくれたお陰で、なんとか丸く収まりました」「何言ってるんだよ。全員を調整できたのはあんたのコミュ力の賜物だろ?」

「いずもはニツとはにかんだ。」

「そんな事も……あるツスけどね。モモも、もつと自信持っていいんすよ?」

「そうかな? アタシは部長みたいに偉大じゃないし、副部長みたいな頭も無い。ななかみみたいな度胸も無い……だから、周りに頼るしか無かっただけさ」

——人を上手に動かせる人は、「カリスマ」って呼ばれるんすよ。

いずもはそう言おうとしたが、余計謙遜されれると思ひ、口を噤んだ。



グリーンフシードは希少だ。

それは魔法少女にとつての命綱であり、それを求めて仲間同士で殺戮し合う事態が世界各国で頻発している。

その現状を食い止めることが国際連合の課題となった。

故に各国の保護特区では、「グリーンフシードの要らない魔法少女の延命法」の究明に熱を挙げている。

それは日本の神浜市とて例外では無い。

公にはしていないが、ソウルジェムの「調整」も、実のところ「延命法」の一つなのだ。

現在、神浜市は市内や、各地の魔導事務局に勤務する調整員を、日本全国に派遣する事業を行っている。

前述した通り、グリーンフシード確保を題目に掲げた、魔法少女同士の殺し合いを抑える為だ。

そして何より——使い魔放置による一般人の犠牲を防ぐ為である。事業内容は単純明快。

魔導管理局、事務局が設立されていない地域に、調整員が赴き、縄張りとする少女達のソウルジェムに調整を施す——というものだ。

調整はどんな魔法少女でも等しく受けられる。

全ての魔法少女を救いたい。

故に、人間性は問わない。

「あたしらが目指すのは、グリーンフシードのいらぬ未来ツスよ」

「口を慎めよ調整屋。キユウベえが聞いたら睨まれるぞ」

救済を掲げるのは簡単だ。しかし、社会は——元々は人間そのものが——混沌が常だ。

故に、それを実行するのは難しい。成就させるとなれば更に困難を極める。

誰かが泣いて、誰かが笑う。この世は、自分達が願わずとも、必然的に呼び込まれてしまうのだ。

「はっ」

しかし、八重いずもは自信満々に笑った。

混沌を目の当たりにしたというのに、その切れ長の眼差しからは羨望が瞬いていた。

「聞かれたところで、連中にはどうすることもできないツスよ。人の歩みを止めることはできない。だから人は進化したんす。奴らの与り知らぬところで、予測も出来ない形でね」

神戸市がそれを実現していると信じている。そうであつて欲しかった。

「目障りなら鬼でも悪魔でも、魔女でも魔法少女でも差し向けて来いつてか?」

「モチのロン」

「それをなんとかするのがアタシらなんだけど……なあ」

ももこはハア、と溜息を付く。

だが、直後に大きく瞳を見開いて、笑った。

「なあ、調整屋」

「なんすか?」

「アタシらのやつてる事つてき、宇宙の破滅に一躍かつてることだよな」

「知ったこつちやないツスよ」

「言うと思つた」

お互いに笑い合つた。暗い車内の中で二人の黄金の瞳が爛々と瞬いていた。

「だからつて搾取されたままなのは割に会わないツスよ」

「だな、これじゃあ共存とは言えない。隷属だ」

「そ。それだと人類が生きている意味が無い」

「だから、意地でも奴らとイーブンに持つてやるって?」  
「当然」

言い終わったときには、いずもが車を走りだしていた。

ももこがふと気になって、窓の外を見ると、赤い瞳を持った白い動物が視界を横切つたが——別に気にならなかった。



F I L E # 4 4 それぞれの思惑②

—— 19:00 宝崎市。

夜も更けて冷え込んだ空気が全身に突き刺さるようだった。

宝崎駅の3番線ホームでは、いろはが、葉菜と累に見送られていた。

「じゃあ、いろは！ またなっ!!」

笑顔で豪快に手を振る彼女の姿を見ると、不思議と寒く感じなかった。

「ういちゃんを見つけたら、真っ先に紹介してくれよ!!」

「うん！ 葉ちゃん、約束するよ！」

「おとうさんとおかあさんにもよろしくね」

累も呑気そうに手をひらひらと振った。

よかったと、心からそう思う。

自分が抜けることで、彼女達との関係がギクシヤクしないか心配だったけど——  
安心した。二人は変わらない。

いつまで経っても、そのままできてくれる。

「ありがとう！ 累さんもお元気で！」

「まあ、のびのび生き残ってるよー」

「たまには遊びに来いよっ！」

「あたしらもその内遊びにいくからねー」

そんな気がしたから、自分は安心して次に進める。新しい生活への一步を、踏み出せる。

話し合っていると、電車が到着。

プシューとドアが開く音がしたので、いろはは二人に背中を向けて乗り込んだ。

「葉ちゃん、累さん！ またね!!」

「おう！」

「次はお土産持ってきてねー♪」

「ふふ」

累の言葉に笑みが零れてくれたのは僥倖だった。

……正直、次に二人に会えるのはいつになるか分からない。そう思うと、寂しさが込み上げてきて……涙が零れそうだったからだ。

でも、累のお陰で、そんな気持ちも吹き飛んだ。それに泣いてお別れなんて、二人も望んでいない筈。

ドアが閉じられる。

電車がゆつくりと動き出す。

二人の姿がどんどん小さくなる。

でも、いろははずつと手を振り続けた。

「……よしっ！」

ゆつくりと手を下ろされた手が、自然と握り拳を作っていた。

戦いは、これからだ。

新しい街で、大切な家族を取戻す為に――

☆



——駅のホーム。

「いっちゃったねー」

「ああ」

いろはを乗せた電車は、もう闇夜の中へ消え去ってしまった。

二人だけが、その場に取り残された。

「累さん心配だなー……おみやげ」

「心配するところそこかよ……」

……いろは、自分あたしは、苦労しそうだ。

主にこいつの扱いに。

もはやツツコム気力も無い。

寂しさも悲しさもどこかへと吹き飛んだ。

葉菜はガツクリと項垂れる。

元氣よくステップする累の背後を幽鬼のように付いていきながら、いろはが早く目的を達成して、地元に戻ってくれることを願ってやまなかつた。

☆

——21:00 神戸市・中央区。みかづき荘。

ここまで、誰にも襲われなかったのは運が良かったかもしれない。

大金を受け取ったことは葉菜に話したが、彼女は「どーしても悪いと思うんなら出世払いだっ！」と言いのけて借金扱いにしてくれた。

「ただいまー」

玄関を開けるた途端に、緊張した。

シン、と静まり返ったリビングには、今日起きた出来事をすぐに打ち明けられそうな大人たちはいなかった。

いるのは……

「おかえりなさい……」

「まさら、さん」

苦手な彼女だ。大きい革製のソファを一人で陣取ってテレビをご覧になっている。

表情が自然と強張ってしまふ。しかし、彼女もこれからは家族の一人だ。話し合つて、打ち解けなくてはならない。

「ご飯、たべた？」

「ええ……途中で」

「そう」

「まさら、さんは？」

「帰つてすぐに」

「そうですか………」

「……………」

会話終了。

まさらはもういろはに興味関心を無くしたかのように目線をテレビに向けた。

—— 気まずい。

いろはの背中に汗が滲んで、じんわりと冷たくなる。

自分は話が得意な方では無い。

学校では、必要最低限の会話しかしなかつたし、魔法少女チームでも、累と葉菜が積極的に話しかけてくれたから、良好な関係が築けたと言つてもよくて……。

だから、まさらのように、こちらから話しかけないといけないタイプは、正直怖い。

変なことを言ったら、素っ気ない態度を取られそうで。

そうされたら、これからの関係もギクシヤクしてしまいそうで。

「……………」

ああ、ダメだ。

頭がカーツと熱くなって冷や汗が滲んできた。

いろはの右手は汗を拭う様に、自然と額を撫でた。

「……………」

瞬間——まさらの顔がいろはに向く。

「……………それ!」

何かに気づいたような、ハツとした顔だった。

「え……………」

「手で額を撫でるその仕草……………この前、海外ドラマで見たけど……………貴女、恥じてる?」

ギクリとした。

恥じてる、というよりはまさらの前なので緊張しているのだが……………。

いや、確かにそれを彼女に悟られるのは、恥ずかしい事かもしれない。

「それは……………」

「何かあったの?」

「え、ええつと……」

「大丈夫。笑つたりしないから」

目が泳ぎ出すいろはとは対照的に、まさらの瞳はいろはを強く見据えていた。

「そ、そうですか……じゃあ」

声が上がりにながらも、いろはは会話を始めた。

—— 今日、地元で起きたことを。

学校で、自分の為のお別れ会が開かれたこと。

自分は、それに全く興味が持てなかったこと。

クラスメイトと別れることが寂しいと思わなかったこと。

魔女に襲われて、死にそうになったこと。

だけど、魔法少女のチームメイトが駆け付けてくれて、助けてくれたこと。

二人と一緒に夕食を食べて、談笑して、最後に、見送って貰ったこと——

「……………」苦労様」

話し終えた後に、そう労ってくれたので、緊張が少し解けた気がした。

途中で興味を失くされるか心配でならなかったが、意外にも彼女は瞳を反らすこと無く、最後まで真剣に聞いてくれた。

(それにしても——)

思い返してみると、中々に濃密な一日だったと思う。

本当に神浜市に来てからの数日間は色んなことが起き過ぎだ。一日がこんなにも早く終わるなんて今まで思ったことが無かった。

そう考えると――

「またそれ」

まさらがまた仕草を指摘してきた。

無意識の内に、右手が額を撫でていた。

「あ、ええつと……本当に、私って地元じゃ無作為に生きてたんだなあって思っちゃって……」

「何も積み上げてこなかった、何も興味を持てなかった自分が、恥ずかしいって？」

「あはは……まあ、そんなところですよ」

苦笑いを浮かべて肯定すると、まさらは否定するように首を振った。

「悪いことじゃない」

「えっ？」

てつきり呆れられると思っていただけに、まさらの言葉は意外だった。

「私にも、そういう時期があったから」

「まさらさん、も……？」

迷わずコクリと頷く。

「貴女の話聞いて思ったけど……多分、それって誰にもあることだから、気にしなくていいと思う」

「そう……ですか」

そう言つて貰えると少し安心した。

それに、まさらの評価も改めた。

冷たい、氷のような人だと思つていたけれど、もしかしたら彼女も不器用なだけで、本当は……

「貴女が羨ましい」

「えっ?」

いろはは目を開けてびっくりした。

またまた意外な言葉が飛び出してきた。

「不謹慎だと思うけど、刺激的な毎日を送れてる貴女が羨ましい。だから、安心していいんじゃない?」

「安心……?」

「変わる可能性があるから」

「変わる……」。

確かに、自分の環境は目まぐるしく変わったけど、だからといって、私自身変わるこ  
とってあるのだろうか。

いや、もう変わっているのに、気が付いていないだけなのか。  
分からない。いまいち、実感が湧かない。

「変わる……？　まさらは、どうなんですか？」

「私は……秘書業務も慣れちゃったから、刺激が欲しいと思ってる」

「退屈、してるんですか？」

まさらは即座に首を振った。

「いえ、こころと市長がいるから……前ほど、退屈はしてない」

「あはは、何か分かるなあ」

あの市長の前では、どんな魔法少女も形無しだろう。相当振り回されているに違いな  
い。

「……！　そうだ！」

「？」

市長と聞いて、いろははハッと口を開けた。

首を傾げるまさらの前に、一枚の厚みのある封筒を置く。

「これは……？」



「私の今後の為にとって、葉ちゃんのお父さんが……」

その重みに僅かばかり目を見開いて驚いた。

だが、直後にまさらは、力強く頷く。

「分かった。一先ず私が預かって、明日市長に委ねるわ」

「ありがとうございます」

市長と直接繋がっている彼女にしか頼めなかった。

まさらが懐に封筒をしまうのを見て、安心して表情を綻ばす。

「……不思議」

「……え？」

と、いろはは呆気にとられてしまう。

まさらが丸い瞳で自分をジューッと見つめているからだ。

「貴女、自然に笑うのね。私の前だけ、ぎこちなかったのに」

思わずあつとなるいろは。

今更気が付いたが、まさらに対する緊張はもう無かった。

「……多分、安心したんだと思います」

「安心？」

きよとんとなるまさら。恐らく彼女に自覚は無い。

だから、それをはっきり伝えようと思った。

「私とまさらさん、結構似てるところがあんだなあ、って分かって」

「似てる？ 私と、貴女が？」

まさらは目を丸くして驚いたまま。

本当に人の言葉をそのまま受け止めてしまいうらしい。首を傾げる仕草が少し可愛い  
と思ってしまった。

「まさらさんと距離が近くなれて、嬉しかったんだと思います」

「距離が、近く？」

「はい。だって私たち、家族なんですから。仲良くなれなかったら嫌ですよ」

言った直後に、いろははビックリ仰天の余り、思考が真っ白になった。

今までずっと無しか映さなかった、まさらの表情が——笑った。

時間になると本当に1秒に満たないぐらいの僅かなものだったが、確かに右の口端が  
上がったのだ。

「……そう、良かった」

「まさらさん？」

いろはは更に驚いた。

まさらの表情がまた変化したからだ。眉を下げて不安そうな顔を顕わにして語り出

した。

「私は家族を失ってないから、失った貴女の気持ちがよく分からない。だから、貴女とこれからどう接していけばいいか……ずっと考えてた。……でも、私なんかじゃ冷たくすることしかできないと分かったから、極力、やちよさん達に投げてしまおうって思ってた」

「まさらさん……」

「あの人は、私より全然経験も豊富だし、友人も多いから……」

いろはは言葉に詰まった。

まさらが自分に不愛想で、素っ気ない態度を取っていたのは、彼女なりの不器用な気遣いなのだろう。

自分がまさらを気にしなくていいように、あえて突っぱねるような態度を取っていたのだろうか。

「だから、貴女の方から距離を詰めてくれて。私に頼ってくれて……なんというか、安心したのかも」

まさらの口端が再び吊り上がった。

「まさらさん、ちゃんと笑えるんですね」

それを見ていろはも満足そうに笑い返した。

「嬉しいことがあったら、誰だつて笑うと思うけど？」

「そうですね」

暗いニュース速報が淡々と聞こえるリビングの中で、二人の心は暖かさに満ちていった。

☆

全員が中々帰つてこない上に、電話を掛けても繋がらない。

そんな訳でいろはとまさらは、まずみたまから探しに行くことにした。

魔法少女は夜間活動が基本な為、彼女の店、ミロワールは来客によつては深夜帯まで開いていることも珍しくない。

無論、調整課はどんな魔法少女もウエルカム。傭兵が魔法少女の個人情報入手する為に、殴り込んでくることも屢々あるらしいのだが。

「全員、返り討ちにされたそうよ」

「えっ!？」

まさらが言うと、いろははギョツと目を見開く。

「人柄に惑わされて懐柔されるか……あるいは叩きのめされるか」

「なんか、想像できないですね……」

特に後者は。

あの可憐な見た目と不純物が一切無い陶器のような白腕から、手練れの魔法少女をねじ伏せる姿が想像できない。

「あの人はやちよさんに体術指導を行ったこともあるの。昔は、神浜町で相当ブイブイ言わせてたそうよ」

「ブイブ……? なんですかそれ?」

「威勢を誇るって意味ね」

「……みたまさんのことがよく分からなくなってきました」

「安心して。私も分かってないから」

とにかくあらゆる意味で、凄い人なのには変わらない。

話しながら薄暗い通路を歩いていると、ミロワールの正面玄関に辿り着いた。

いろはが、扉を開けると――

「いらっしやいませ——☆☆☆」

元気澁刺な大音声が届こえてきて、いろははうっとたじろぐ。

「……えっ!?!」

同時に、啞然とした。

店のバーカウンターのいたのはみたまでは無く、全く知らない女性だ。

海のような青色のショートカットヘアの頭頂部には犬耳の様な癖毛が両サイドにツンと生えている。

満面の笑みは愛くるしく、身長は自分と同じくらいだが、バーテンダースーツで纏った肢体はスレンダーな体つきを強調していた。

「あ——っつ!!」

バーカウンターの女性は、いろはを視認するやいなや、犬耳のような髪をびよこびよこ動かしながら飛び出してきた!

「いっろっはっさ——ん!!!」

「わっぶ」

いろはに激突、そして抱擁。

顔に柔らかい二つの球体を押し付けられて息が詰まる。

「あ、貴女は……」

着痩せするタイプなのか、自分のそれよりも大きく、ふかふかしてて羨ましい。ぺりつと女性を引き剥がすと、ビシッとおでこに水平に手を当てて敬礼！

「これはこれは申し遅れました!! 初めまして環いろはさん!! わたくし、夕霧 碧（みどり）と申しますっ!」

その名字を聞いた途端、いろはがあつと驚いたのは言うまでも無い。

「夕霧って、もしかして、青佐さんの!?!」

碧は満面の笑みでピースサイン。

「そうでーす!! ここの最上階で神浜市の絶景を背中にしてふんぞり返ってる市長の娘でーす!!」

よつろしつくねー!! と碧はいろはの両手を握ってぶんぶんと振り回す。

その膂力は凄まじくいろはの体も振り回されそうになる。

「よ、よろしくお願ひします……」

「あ、ちなみに彼氏募集中なんで宝崎市にイイ男性が居たら教えてくださいねーっ!!」  
「ハイ!!」

いい加減歯止めが利かなくなりそうなので、まさらが頭をチョップして食い止めた。

一呼吸置いてから、いろはが問いかける。

「えつと……碧さんはこちらで働いてるんですか？」

「はい！ たまにここで調整課のお手伝いをさせて頂いてますっ！ ま、学費稼ぎのバイトですっねーっ」

「みたまさんはどこに？」

続けてまさらが問いかけると、碧は頭をツンツンとつついた。

何かを思い出す時に必ずやる癖らしい。

「ああ、八雲課長……じゃなくしてみたまちゃんなら」

——ピーターさんと一緒に呑んでいますよ。

☆



——同時刻。みかづき荘より近くの居酒屋。

「……………うつぷっ」

「飲み過ぎだよ」

豪快に中ジョッキのビールを一気飲みする美女——まったくいろはや彼女を慕う子が見たら何て思うか——に辟易するピーター。

「私にとつては水と変わりなわいよお」

まあ味覚がダメなので、間違つてなくはないが……。

ピーターはハア、と溜息を付く。

新しい家族ができたことを「二人で」祝おうと彼女に呼ばれてきたのに、これじゃあやけ酒だ。

既に呂律も回つてない。

「本題を言う前に潰れないで頂戴」

「……………」

下唇を噛んだ。

あからさまに不満な表情が、顔に顕れる。

「貴女が私を誘つて呑みにいくのは決まつて、何か相談があるときでしょう？」

みたまとの付き合いは長い。

彼女が——いや、調整員は皆、頑固な性分なのをピーターは重々承知だった。自分から積極的に求めなければ中々本心を話してくれない。

というのも、魔法少女を見守る立場にある調整員は常に明るく笑顔で振舞わなければならないからだ。

それはみたまが課長に着任してから自分に、そして各町の調整員にも厳しく戒めさせていることである。

暗い顔を見せていたら、魔法少女達の間不安が走ってしまうからだ。

「いろはちゃんのこと、何か気づいたの？」

「……………」

先ほどまでどうでもいい話を捲し立てていたみたまの舌が、ピタリと止まった。

緩んでいた顔が、急に引き締まり、氷の表情を作り出す。

「……………ねえ、ピーター」

一呼吸置いた後に、意を決してみたまはピーターを見つめた。

「なに？」

彼女の口調が変わった。

ピーターも自然と目を細めて、精悍な顔を見据える。

「ちよつと『古巣』に戻ってもらえるかしら」

「あら、何か知りたいことでも」

——途端、肝が冷えた。

みたまの目つきが、敵を見つけた兵士の様に鋭くなったからだ。

「PROJECT MAGIA RECORD」

「……!?!」

思わず目を見開くピーター。

怒りにも等しい形相から、聞いた事の無い英語の羅列が飛んできた。

「まさか、それって……」

「ええ、いろはちゃんの魂を覗いた時に見えた『深淵』の一部。研究所のような施設で、そのワードがあつたの」

「研究所」と聞いてピーターの背筋に悪寒が走った。

まさか、いろはが——いや、あの研究は大昔に中止された筈。

あくまで、自分の知る限り、ではあるが。

「あちらの人達は戦後職を失い困窮する日本人への救済処置として雇用という形で、『少女狩り』を行ってきた歴史がある。貴女を疑う訳じゃないけど、可能性は否めない」

「……分かったわ、調べてみる価値はあるわね……」

言い切った後には、ピーターは大きく溜息を付いていた。  
これで、また皺が増えそうである。

## FILE #45 目の前の白き光は掴むに値するものか

二人で呑んでいるのならば、邪魔するのは無粋だと思い、諦めた。

やちよも魔女退治の後、そのまま夜間見回りに入ってしまったらしい。

……一人しかないからしょうがないのは分かるが、いつ休んでいるのやら。

仕方ないので、今日はまさらと二人きりで夜を過ごすことになった。

——そして、次の日。神浜市役所。

結局、やちよに地元で起きた話を打ち明けられたのは、正午過ぎになった。

休憩時間中、やちよの執務室にお邪魔することになったいろはは、煎茶を啜りながら経緯を伝えた。

「〔苦労様〕

話を聞き終えた後、やちよは短く嘆息して、そう労う。

話してる最中、彼女は驚く顔をしたり、悲しむ顔をしたり、眉間に皺を寄せたりと色々な表情を見せて相槌を打ってくれた。

流石、市民の為に全身全霊を掛けている彼女だ。向き合い方の真剣さが違う。まさらには悪いけど。

「でも、無事で良かった」

「はい。本当に良かったです。諦めなくなつて」

「それでこそよ」

やちよはフツと笑みを見せたが、いろはは目線を下に向けていた。どこか腑に落ちない表情だ。

「どうしたの?」

「いえ……使い魔達に殺されそうになった時に、私の口からつい言葉が出てきて……その、汚い言葉が」

恥ずかしい。

じわりと汗が浮かぶ額を拭うように撫でつつ言うと、やちよは目を丸くしていた。

「クソツッ! とか、ちくしよう、とか、ふざけんなよ、とか……本当にアレ、私から出た言葉だったのかなあ……」

言い終えると、やちよは突然ブツと嘔き出した。

「やちよさんっ!?!」

いろはが立ち上がった。

真剣に話しているのに、笑われて癩に障ったのだろう。

だが、やちよは口元を抑えて震えていた。

「ふふふ……いろはって本当にかわいいね」

「えっ!?!」

突然褒められて、ドキリと硬直するいろは。やちよの意図が読めない。

「普段とは違う自分があるってことに、ビックリしたんだね。で、受け入れたくないって

?」

「……………」

何も返さず、座り込んだ。

両眉が一瞬、大きく吊り上がった後、口をムツと結んで黙り込む。

あから、機嫌を損ねちやった。けど、凶星かな。

やちよは一瞬だけほくそ笑んだ後、こう続けた。

「わかるよ。私もそうだったから」

「えっ」

今度はいろはが目を丸くした。

やちよの視線がいろはよりやや左側に向いた。

いろはも吊られて視線を追うと、背後の壁に一枚の写真が置かれていた。

煌びやかな、白銀の頭髮。

顔立ちは凛々しく、男性の様で。

自分こそが清廉潔白そのものと言わんばかりの、純白の衣装。

スカートを履いていたことから、女性で——そして、魔法少女に違い無かった。

「この人は？」

「和泉十七夜さん」

やちよの方を振り向くと、少し驚いた。



僅かにだが眉間に皺をよせて、下唇を噛んでいる。

怒っているのか、それとも悔やんでいるのか……いろには判別できない。

「やちよさんの、友達だったんですか？」

だが、ふと、葉菜と累が頭を過った。

もしかしたら、仲の良い親友同士だったけど、今はもう……

「いえ、私の恩師よ」

「恩師……」

「私は彼女から総てを教わった。平和と平等の事を。この世の正義と悪も。人との向き合い方も」

「すごい人だったんですね……」

いろはは感嘆する。

英雄の基盤を作り上げた人となれば、それはもう、神に等しいのではないか。

「ええ、本来、治安維持部長私席は彼女のもので……全ての魔法少女を正しい方向へと引率してくれる筈だった」

「今は、どうしてるんですか……？」

「もういないわ……」

今の質問は厳禁だったか。

いろはは申し訳無さそうにクツと目線を下げた。

やちよが酷く悲しそうな顔をしたからだ。

「気にしなくていいよ」

「でも……」

「どんな人だったのか、ちよつと教えてあげる」

——

『七海。教授が作りあげたシステムは、夕霧さんと自分たちの手で世界中に広がっていくだろう』

『いつか、全ての魔法少女がキュウベエの敷いたレールから外れる時が来る。その時が、はじまりだ。世界は魔法少女を必要とし、絶望から切り離された魔法少女もまた、世界とどう向き合うか、改めて考えなおすだろう』

『七海、自分は……組織を創りたい』

『世界で蔓延る差別・戦争・貧困・飢餓・麻薬・無法・悪政に喘ぐ人々を救う為に、魔法少女を派遣する機関……自分、いや、私は……いつか、必ず創り上げてみせる』

——名前は、決まってるんですか？ と、小さかった私は聞いた。

彼女は力強く頷くと、どこまでも響き渡るような声量で、答えた。

『「リユニオン」だ』

『魔法と世界を繋ぐ者の集い……「マギア・リユニオン」』

「あの時……あの人の眼は希望に満ちていた。夕陽が後光のようでね。まだ小さかった

私には「神様」のように見えたの」

「神……」

「かなり極端なところはあったけど、あの人は普通とは違っていた。誰よりも正しくあろうとし、どうすれば社会が公平になり人々を平和に導けるのかって……口にするのはいつもそればかりで、それしか頭になかったの。正義に憑りつかれた人、といえはいいのかな。あまりにも真つ白過ぎてね……私には、眩し過ぎた」

懐かしむように遠くを見据えていたやちよだが、下唇は噛み締めたまま。

その仕草から垣間見える感情は——「怒り」。

「でも、違った。あの人は神じゃ無かった。ただの人でしかないことに気付かされた」

「何か、あったんですか？」

いろはが尋ねると、眉間に皺が寄った。

「『不平等からなる不合理による理不尽』」

言葉を失った。

いやに抽象的表現だ。

和泉十七夜の身に、一体、何があったというのか。

「正しくあろうとする人の心を壊すのは、いつだって、それなのよ」

具体的な事を問い質すのは、憚れた。

やちよの顔を般若にしかねないと思ったからだ。家族の古傷を抉るような真似はしたくない。

「『絶望』を知ったあの人は、私たちの前から消えた。今はどうしているのか、分からない。生きているのか、それともどこかで野垂れ死んでしまったのか」

10年間、音沙汰が無いという。

やちよの話では、十七夜は思い知ったのではないか、という。

自分に、世界を変える力など無いという現実を。

人間社会に蔓延るあらゆる「不」は、魔法という無限の可能性をもつてしても、改善は不可能だと。

「……いろは、古い映画だけど『野火』を知ってる？」

一息付いた後、やちよは唐突に質問を投げてきた。

反射的に、首をふるふると振ってしまふ。

「フィリピンに派遣された日本兵の話よ。周りは米兵と現地人のゲリラ兵が蔓延り、病魔と食糧不足にも苛れ、自分達は孤立無援。いつ故郷に帰れるか分からない。でも、彼らは『必死』だった」

「それは……勝つために、ですか？ その、日本の為にー、とか……？」

頭を過つたのは、以前、歴史の教科書で見た「特攻隊」の話だった。

だが、やちよは小さく嘆息した後、首を振る。

「生き残る為よ。崖つぶちに立たされた人間に、正義や誇りなんて存在しない。彼らは生きる為なら何だつてやれたの。仲間を欺くことも。死に際の仲間を見捨てることも。殺して武器を奪うことも……肉を食べることだつて」

うっ、というはの顔が蒼褪める。

「そんな、同じ仲間なのに……」

「どれだけ高潔に振舞おうとしても、人間なんて結局そんなものよ。正義や信念なんてものは所詮、方便でしかない。……まあ今のは極端な例だけだね」

やちよはそこで笑みを止めると、いろはをしかと見つめた。

眼力の迫力に、いろはの表情も固まる。

「いろは。貴女が正しく綺麗なままでありたいのなら、それは良いことだと思う。けど、その生き方を私は勧めない。必ず、あの人の様になるから……」

警告だった。

混沌こそが人間の常である。

故に、不平等・不合理・理不尽。自身にあるそれらの“不”を認められなければ、必ず社会に適応できず、心を壊してしまう。

かつての和泉十七夜のように——英雄のやちよから“神”と崇められた御仁の

信念さえも、木っ端微塵に破壊されたのだ。

「まあ、何が言いたいのかっていうと……」

やちよはそこでふふつと微笑みながら、後ろにもたれた。

「意地汚い自分を、もうちよつと認めてあげたら？ そうすれば、もつと気楽に生きられるよ」

急に穏やかな雰囲気になったので、いろはの緊張も少し和らいだ。

だが、納得いかないことがある。

「やちよさんも、そうなんですか？」

人々から英雄と讃えられ、治安維持部長として、人々の為に日夜命を張るやちよは、正義と信念に生きていないのか。

暗にそう尋ねると、やちよは笑みを崩さずに答えた。

「私の場合はね。自分が『そういう人間じゃない！』って信じなくても、周りがこうだ！って認めさせようとするの。だから、受け入れるしかなかった。でも後悔はしてないよ。お陰で私はありのままに生きられるんだから」

不思議で、不気味だった。

悲しい話なのに、やちよは楽しそうに笑っていたからだ。

表情に、先ほど見られた『悔しさ』や『怒り』は微塵も見えない。

(……後悔はしてない、か……)

不意に、鶴乃のことが頭に過った。

あの子も、十七夜と同じだ。自己満足・独善だったとしても、彼女なりに人々の幸せを願う、その為の正義を追究して、貫こうとした。

だが、結果的に、壊れてしまった。

鶴乃には、周りの人々の為ではなく、自分の為に生きて欲しい。

いつか、自分らしさを取り戻して、幸せになつて欲しい。

「やちよさん」

そう強く願つたからこそ——いろははやちよに問い質さなければならぬ事がある。

真剣な顔を向けると、やちよも真摯な瞳で見つめ返してきた。どんな問答でも受けて立つつもりだろう。

「何かしら？」

「やちよさんは……参京区の再開発計画に、本当に心から賛同していたんですか？」

希望がある。

やちよは心から地元の人々を思いやれる人だ。

だから、行政や大人の言葉にかどわかされず、自分を貫く人であつてほしかった。



「これまた唐突ね」

やちよは両眉を吊り上げた後、嘆息した。

鋭利な蒼穹の瞳には僅かに、困惑の色が見え隠れしていた。

「ごめんなさい。だけど、聞かないとやちよさんが見えないままなんです」

「あなたはどう思う、いろは」

いろはは即座に首を振った。

「私は、違うと思つてます」

「人を信じすぎるのはいいことだけど、自分が後で苦しむだけよ」

「えっ」

「あの頃の私は、大人を信じすぎていた。それが、人々の救済に繋がる道だと信じていたからね……」

困惑を張り付けたままのやちよの口から、感情の消えた声が淡々と響いた。



## FILE #45. 5 その少女は何者でもなく③

明京町・大東区——

広大な領土を持つこの区域は、大きく三分割されている。  
まず、東半分を占めるのが町役場のある中心街。

次に、西半分を占めるのが蒼海幫の本部があるチャイナタウンである。

——そして蒼海幫本部の裏側。

7 m程の防波堤で隔てられた裏側には、小さな集落が沿岸沿いに形成されている。ここは神浜市に“受け入れて貰えなかった”アジア系不法移民達が、勝手に自分達で創り出した『スラム街』だ。

歴史は古い。

高度経済成長長期の頃、神浜市政は異文化交流に積極的であり、長きに渡り移民奨励制度を導入していた。

結果的に、大量に流れ込んできた中国系移民達によつて、チャイナタウンが生まれた事で、市の活性化には至つたのだが……同時に海外から麻薬及び重火器類の密売者も忍び込み、地元のヤクザ組織と取引したことで、町内の治安は一気に悪化した。

だが、夕霧青佐が市政の実権を握つてからは、厳正な規制が発令された。

具体的に何をしたのかは、フェリシアの知るところではない。

だが、一説では蒼海幫の首脳部と密約を交わし、地元ヤクザと繋がりがある者、麻薬を密売目的で隠し持っていた者を徹底的に洗い出して、警察に検挙させたという。

(おかげさまで、大規模な犯罪は無くなった。でもスラム街はそのまま……)

日本は海外の発展途上国から見れば黄金の国だ。

流れ着く不法移民は後を絶たないし、抑えきれないのが現状だろう。

無論、蒼海幫のトップ【五強聖】と直属部隊・墮龍、そして彼女達に協力的な傭兵達が陰ながら睨みを利かせているので、犯罪はほぼ無い。

海沿いを悠々と歩く金髪紫眼の少女——フェリシアの目先に広がるのは、廃れた景色だ。

世界でも有数の治安を誇る日本国内とは、とても思えない。

一見、人が住んでいる気配などまるで無いが、実際は多国籍の移民達が密集している。フェリシアは頻繁に足を運んでおり、言語力もここで相当に鍛えられた。

さて、鬼が出るか蛇がでるか——

フェリシアは期待に胸を寄せながら意気揚々と足を踏み入れる。

「おい、そのガキ！ 待ちな!!」

ほら、やってきた。

フェリシアが声の方を向くと、草臥れたトタン屋根の上に一人の女性が立っていた。

初めて見る奴だ。

衣装から見て、間違いなく魔法少女だろう。恐らくは、同業者か。

「……オメーみてーな傭兵を警察代わりにしてるようじゃ、竜人共の底が知れるな」  
フェリシアは彼女を見るなりハア、と溜息を吐いた。

挑発——では無く、単純に残念だったのだ。

墮龍が一匹くれば、中国拳法をご教授願えると思っていたのに……人生とは中々思い通りにいかないものである。

「随分日本語が流暢だが……日本人じゃねえようだな。どこの国籍だ？」

「何言ってるんだ？ オレは生粋の日本人だぜ」

中指を立てると、傭兵の顔があからさまに歪んだ。

「クソガキ……何のマネだ？」

「オメー傭兵こっちは素人だな。ポーカーフェイス出来ねえだろ？」

挑発的に笑うと、表情がますます怒りに染まった。

「退けよ。用があるのは伊月だ。オマエみてーなクソじゃねえ」

「お前……ジュンさんのなんだ？」

今にも飛び掛かってきそうだ。

だが、フェリシアは特に気にすることもなく……輝かしい笑顔を浮かべて、  
「マブダチ」

と言いつつ。

風切り音——傭兵が即座に獲物を奮つて来たのは同時だった。

反射的に上半身を反らす。横薙ぎの獲物は、フェリシアの鼻先を掠めて通過した。

(槍……いや、笛か)

成程、中々の腕前だ。恐らく経験も相当に積んでいるのだろう。

回避しながらも、獲物を注視する。

先端に刃物が付いた細長い棒状の柄には、幾つもの小さな穴が、規則的な縦列で空いている。直ぐ様上体を起こし、ウエストバッグから耳栓を取り出そうとするが、

「遅いー」

傭兵の方が早かった。

ピイツ！ と笛の音が響いたと思うと、視界が一変する。

「ツ!?!」

あらゆる物体がグニャグニャに捻じ曲がり、二重、三重にも増殖する。

まるで血管に直接アルコールを注入されて泥酔した様な光景だ。

——幻覚魔法か。それも平衡感覚を失わせる系統。

即座に判断すると、ギユツと目を瞑った。見続けていたら頭まで狂ってしまう。

「帰ってママのおっぱいでも吸つてな。嬢ちゃん」

「オメーは子宮の中で脳みそ作り直して貰えよ」

だが、フェリシアの余裕は微塵も揺らがない。

傭兵の形相が憤怒に染まり、再び獲物を横に薙いできた。先端の刃先がフェリシアの脇腹に、

「ッ!?!」

——食い込む筈だった。

傭兵が瞠目する。

寸前でフェリシアが消えたのだ。

刹那、視界が闇に覆われて、息が止まる。

「っぐ!!」

メキメキと骨が軋む嫌な音が、頭の内側で反芻する。

傭兵は困惑。

何かが、自分の顔に覆いかぶさった。そして、自分の頭を両サイドから挟み潰そうと  
している。

咄嗟に獲物を離し、引きはがそうと手を伸ばす。掴んだものは、

「!?!」

——足?



傭兵は更に驚いた。

「どうやら相手は、刃物が当たる直前で飛び上がって回避すると、自分の顔を両ひざで挟んで来たらしい。」

「テメーやっぱり初心者だな。対人戦がまるでなっちゃいねえ」

相変わらず余裕綽々とした、フェリシアの嘲笑混じりの声が、頭上から響く。

「幻覚使おうが、目の前で立ち止まってりや意味ねーじゃねーか。背後に回るとか、遠くから狙撃するとかいくらでもあっただろ」

対峙した時点で、フェリシアは傭兵と自分との距離を目算していた。

そして、傭兵は最初から一歩も動かなかった。

「大方、他所で悠々やってたけど、連れがみんな死んで自分まで危なくなつたから、神浜こっちに来たつてクチだろ？ 幻覚使いつてのは、それだけでアイデンティティだからな。実力がクソだろーが引つ張りダコだよ、なあ？」

凶星だ。

傭兵の肺活量が激しくなるが、この状態では窒息まで秒読みだ。

両足をギユッと掴み、フェリシアを引き剥がそうとするが、

「痛てーよこのバカッ!!」

怒号と同時に、部分的に魔法少女に変身したフェリシアの両肘が、傭兵の後頭部に墜

落!!

爆撃の様な轟音が響いた後、傭兵は白目を剥いて倒れた。

そして……

「……なんだこいつ、300円しか持ってねーぞ?」

——懐から「戦利品」をしつかり頂くフェリシアであった。

☆

「よう。邪魔するぜ、とつつあん」

「いらっしや……なんだお前か、フェリー」

フェリシアは15分ほどスラム街を歩き、一件の板金屋へと辿り着いていた。

「カウンター越しで座り込んで新聞を読んでいた店主——白髪小柄の初老の男——が露骨に嫌な顔を向けるが、いつものことなので別に気にしない。

「今月は何人殺した？」

そらきた——と、店主が忌々しくチツと舌打ちする。

挨拶変わりにそんなことを尋ねるのはコイツぐらいである。

「今の俺はただの板金屋だぜ。殺しなんて請け負う訳ねえだろうが」

「あつそ。じゃあ何人沈めた？」

「お前なあ……!!」

睨みつけるが、フェリシアには通じない。

冷やかしながら出ていけ、と店主が怒鳴ろうとした矢先だった。

「おつ、聞いた事ある声だと思つたらフェリーじゃくん。おひっさー」

店主の背後の階段の上から声。

フェリシアが首を上に向けてると、一人の女性が階段から降りて、店主と並び立った。

全体的に地味な印象だった。

身長は150cmのフェリシアよりも2〜3cm高い程度の小柄で、細身の体軀を、ダークグリーンのフロントジップワンピースで包んでいる。

前はパツツンに切り揃えて、両サイドを三つ編みで結んだ黒髪。半開きの瞳は年中眠

そうに見えるし、口元はいつも弧を描いていて、生来の朗らかさが滲み出ている。

スラム街の住民としてはあまりにも不釣り合いで、どこにでもいる女子大生にしか見えなない。

「おお、ジュン！ 元気にしてたかー!?」

「元気元気〜♪」

陽気な彼女の名前は伊月ジュン。この板金屋の看板娘——

「今月は何人殺した?」

「バツカだねフェリー。ここは日本だよ? 殺しなんてダメに決まってるでしょー?」

「聞き方が悪かった。何人海に沈めた?」

「ああ、それは5人ぐらい」

——そして、生粋の「傭兵」である。その血生臭い武勇伝は数知れず。

最も、この人の良さそうな風貌からは到底信じられないが。

「おいー!」

店主が娘の軽口ぶりに思わず声を荒立てるが、

「やるなあ、お前!」

「まーねー。私のヤマ奪おうとしたんだし、報いを受けてとーぜんでしょう?」

まるでどこ吹く風である。

寧ろ、二人なりのガールズブトックで盛り上がっていた。

青筋を浮かべて黙り込む店主。こうなったら好きに二人で話しててくれ。

「つてかフェリー、こんなところに何の用？」

「そうだぞ。最近はお上の連中がうるせーからな。他所モンのお前さんが見つかったらウチに迷惑が掛かるんだから、用が無いならとつとと出てけ」

「冗談だろ？」

フェリシアは店主の言葉を鼻で笑い返した。

「あんなクソに警備を任せてる時点で蒼海幣も人が足りねーんだろ」

「まーねー。最近は市街でヤク売りさばいてる連中は海外のカルテルと繋がってて中々手強いつて聞かし、得体の知れないゴーストファクトリーもあるから、専らそっちの対応で追われてんじやないのー？ まあ、「五強聖」様が管理してるってだけで、この騒動はグツと減ってるけどねー」

寧ろ中心街よりよっぽど平和だよ、とジyunはつまらなそうに呟いた。

——といつても、上記でフェリシアが一人ごちた様に、“大規模な”犯罪が起きてないだけだ。

来る途中で耳に挟んだが、見知らぬ傭兵——恐らく、その海外麻薬カルテルの一員か——が、ここの住民を誘致して、密売に加担させているのだという。

ここは蒼海幫によって、移民達の働き場所としていくつか工場が設けられたが、それでも麻薬に手を染めてしまう者が多い。

金は人の心を狂わせる。

「まー、オレにはどうでもいいことだが……それより用件ならちゃんとするぜ」  
フェリシアはそういうと、ウエストバッグを開けて何かを取り出した。

それを、勢いよくカウンターにバンツ！と置くと——親娘の形相が一変する。

「こ、こいつぁ……」

「随分だね……」

揃って驚愕。

カウンターに置かれたのは、分厚い札束が3つ。

念のため二人で1枚ずつ確認すると、総てが福沢諭吉だ。

「オレの全財産だ。300万はある」

親娘二人が瞠目してフェリシアを見つめる。

「まず200万で……買えるだけのドローンをくれ」

まず、福沢諭吉の二束を店主に差し出す。

「フェリー……てめえ、どんなヤマ抱えやがった」

そう尋ねる彼の眼つきには、凜猛な光が宿っていた。

表向きは板金屋を名乗る店主だが、その背景を知っている傭兵だけが、大金を持って店を訪れる。

フェリシアもその一人だった。

「それは後で」

フェリシアは目をジュンに向けると、残りの一束を差し出した。

「こいつで……お前を雇う」

「私？」

ジュンは自分を指さして、目を見開いていた。

傭兵にとつて、命の次に大事なものは「金」だ。

どんな酷な案件でも報酬はなるべく他人に譲りたくないと思うのが常だ。

基本的に彼女達は血の気が多過ぎるから、報酬の取り分で、血が飛び散る騒動に発展する確率が非情に高いし、隙を突かれて殺された上に、報酬も全部横取りされた、なんてケースも沢山見た。

そんな背景を顧みると、フェリシアが自分を頼るのは心底意外で、呆気に取られた。

「……分け前くれるの？ フェリー」

「雇うって言ったの聞こえなかったか？ お前への依頼は「俺の仕事のサポート」だ。

俺の仕事そのものじゃねー」

成程。

二人で同じ仕事を請け負えば、報酬の取り分で殺し合う。

だが、別の仕事という形でサポートを依頼して、報酬をやるって仕組みにすれば、抑えられるって考えか。

「ジュンまで連れてきたあ、百戦錬磨のお前が弱気になっちゃう程か？ フェリー」

「まあ、そんなところだ」

と、言いながらもフェリシアの表情には自信に満ち溢れていた。

負ける可能性なんて考えて無いのだろうが、「万が一」を常に考慮するのも傭兵稼業の鉄則だ。

「面白そうだな。期待通りのモノはやっから教えてくれ」

「私にもおしえてー」

「それはな——」

親娘二人がウキウキしながら詰め寄ってきたので、フェリシアはこっそり耳打ちする。

——途端、二人の形相が冷たくなった。

「そ、そいつあー……」

「ば、バカでかい案件だねー」



「だろ？」

予想通りのリアクションにフェリシアはケラケラと笑うが、店主は納得いかない様子だ。

「しかし……どこのどいつだ。そんな馬鹿げた事を依頼する奴はよ？」

「言えねえけど、これだけははっきり言えるよ」

「そいつ、イカれてる」

ジュンが代弁すると、フェリシアがククツと不敵に笑った。

「じゃあ、せいぜいオレをガツカリさせるなよ。お二人さん」

小さな板金屋の中で、三人の狼が猟奇的な眼光を瞬かせていた。

F I L E # 4 6 その正しさは 誰が為に  
―七海  
やちよ 追憶編―

――2年前、七海やちよ、17歳の夏。

梓みふゆは知ってるわね？

私の相棒で、元は副部長だった……そうね。なら話は早いわ。

あの子の母・つむぎさんは参京区の開発計画を担当するデペロッパー会社の社長でね。

私の両親が亡くなった後に、金銭的な面で援助してくれたの。

呼び出されたのは、突然だった。

梓みふゆの母、つむぎが、自分に用があると行って自社の社長室まで招いたのだ。

「ご足労だったわね。やちよちゃん。……あらごめんなさい。七海部長と呼ぶべきだったかしら」

やちよは目深に被った帽子とサングラス、そしてマスクを外して端正な顔を顕にした。

当時のやちよは、治安維持部の部長に就任したばかりであり、神浜市内での人気は最高潮であった。道歩けば人混みに覆い尽くされてしまうことなんて日常的だ。

故に、外出する時は、紙をお団子状にまるめて帽子で隠し、表情も限りなく人が分からない様にして変装する必要があった。

今回は運良く人に気付かれることなく、つむぎの会社まで辿り着く事ができた。

「やちよでいいですよ。お久しぶりですね。おばさん」

馴染み深い二人は、お互いに屈託無い笑みを向け合う。

やちよに両親は居ない。

二人揃って立派な消防隊員だったが、やちよが幼い頃に、任務中に不慮の事故に遭って帰らぬ人となった。

以降、祖母と二人だけになってしまったが、生活費や今後の自身に掛かる学費といった問題が残ってしまった。

みふゆがそんな状況の幼馴染を放って置く訳がなかった。

彼女は母親のつむぎに相談し、やちよの未成年後見人になって貰える様に願い出たのだ。

つむぎは快く承諾。夫の康博と協力し、膨大な資金を七海家に提供。結果として、やちよが大学卒業するまでの生活は保障されることになった。

「何の御用でしょうか」

よつて、つむぎはやちよにとつて、この上無い恩人である。彼女がいなければ、今日のやちよは無いと思う程に。

だから、頼み事が有れば、何でも引き受けるつもりでいた。

「早速で悪いけど……」

つむぎはみふゆに似て、笑顔が素敵な人だった。少女の様に可憐な笑顔を魅せて、こう告げる。

「参京商店街の再開発事業に、力を貸してほしいの」

「申し訳ありませんが、お断りします」

やちよが頭を下げて、きつぱり断ると、つむぎは意外そうに眼を丸くしていた。

「あら、それはどうして?」

「治安維持部は行政の施策に参加することは許されていませんから」

そもそも魔法少女そのものが、政治的活動に参加・或いは協力することは法律では許されていない。

「少しお手伝いをしてほしいだけよ。治安維持部の魔法少女としてではなく、普段の貴女個人として」

「それでもです」

つむぎは顔を俯かせ、暗い顔になった。

大恩ある彼女の誘いを断るのは正直、心苦しい。

しかし、今の自分は治安維持部長の身だ。神浜に住むすべての魔法少女の手本とならなければいけない。

自分から、規則を破る真似をしようものなら、これまで市が保護特区として積み上げてきたものが一瞬にして無に帰すだろう。

「……………小藪市の藪原駅北大火災は知っているわね？」

つむぎは暫し、思案するように目を伏せた後、顔を上げた。  
精悍な瞳でやちよを射貫く。

小藪市の大火災とは、2年前に埼玉県で発生した史上最大の火災だ。

当時、藪原駅北側は昭和初期〜中期に建造された木造住宅の密集地であり、小さな洋食屋の火の不始末から発生したとされる火種は瞬く間に一帯に燃え広がった。

約38000㎡、約357世帯が焼失し、市内の消防隊が全動員され、完全消火には24時間以上も掛かったという。

幸い、地元の魔法少女達が救助に加勢してくれたお陰で、一人も死者を生まずに済んだが……

「傷跡は痛ましく、未だに完全復興には至っていないのが現状よ」

話終えた後、つむぎはふうと溜息。

余談だが、この一件で、魔法少女の支持層は劇的に広がり、各地の地方公共団体の大多数が、一刻も早い魔導管理局の設立を急務とした。

人は痛みを伴わなければ、重要なものを認識できない。

膨大な人々の悲しみを生み出した歴史的な災害が、魔法少女の社会的重要性を高める結果になろうとは……やちよ達にとっては何とも皮肉な話だ。

「参京区もいずればそうなる可能性がある、と?」

「近からず遠からずね。だからこそ今の内に対策を講じておかなければならないのよ」

「ですが、参京商店街には歴史ある老舗も」

「人の命には代えられないわ」

つむぎは強い語気でやちよを威圧した。

先の言葉は失言だったか——恥じる様にやちよは額を搔く。

つむぎの言う事は最もだ。人命に代えられるものは無い。

「……実は、被害地区には再開発の話がずっと持ち上がっていてね、私の会社が担当していたんだけど……商店街の組合団体から根強い反発があつてね」

藪原駅北の再開発は難航し、結局、一切手つかずのまま、時間だけが過ぎていったという。

結果が、上記の通りだ。

「わたしは、その後悔を二度と味わいたくないし、あのような悲しみを誰にも味わわせたくないのよ」

再開発に於いて講じるべきは、まず古い木造式の住宅は取り壊すことだ。

かつて、江戸時代には火消しと呼ばれる消防隊がいたが、火災発生時には、消火活動よりもまず発生源の周辺の家屋を破壊したという。

周囲に燃えやすい物が無いだけで、被害は最小限に抑えられることは歴史も証明している事実だ。

——あの時、そうしてさえいれば……。

当時の無力さを思い知ったのだろう。

つむぎの顔が辛そうに歪んだ途端、やちよの瞳が瞬いた。

「市民の命が掛かっているのであれば……手を貸さない訳にはいきません」

——つむぎさんの意志は本物で、だから私はそう返した。  
つむぎさんの顔がパツと明るくなったのは、よく覚えてる。  
でもね……。

——人を信じた先に見えたのは、無情な現実だった。

☆

「——つという訳で、再開発に合意された方がメリットは遥かに大きい。将来を想えばここは賛同すべきと個人的《・》に思います」

あれからというもの、やちよは休暇中になると参京区で再開発反対派の店舗をめまぐ



るしく駆け回っていた。

治安維持部長としてではなく、七海やちよ個人として。

個別に回っては、趣味の話を時間が遅くなるまで聞いた後に、そう切り出した。

小藪市の大災害の件を伝えると、顔を青くして、再開発への同意に傾倒する経営者もいたが、

「でもねえ、七海ちゃん。ウチはこの店で骨を埋める覚悟なんだよ」

大抵はこう返されてしまうのがオチだ。

Devine Light of CITYの掲げた再開発のヴィジョンは魅力的だと思うが、老舗を構える老人達の意識を変えるには至らなかつた。

だから、やちよはこう返した。

「ご自身が覚悟なさっていても、ご家族様は納得されないでしょう。仮に火災が起きて川野さんの身に何か遭った場合、貴女はそれで良くて、周囲のご友人やご家族様が悲しみと後悔にされることでしょう」

「だけど、この店は先祖代々継がれて……」

「お気持ちは察しますが、店舗そのものは昭和中期に建て直された物であり、災害が発生した場合は、川野さんご自身だけでなく、周囲の店舗にも人にも二次的な被害が生じる可能性が高いのです。それに中央区に住まわれている息子さんにも説明をさせていた

だきました。お母さまの身の安全の確保を何より第一にすべきだとのお考えで、再開発には合意すべきだと仰ってました」

「……………」

あれほど、店の歴史を誇らしげに主張していた老婆の口が、止まった。

大抵の経営者は子供が跡取りにならず、疎遠になっっている者が多い為、愛情に飢えている。

その隙を突くことにした。やり方は姑息だが、家族からの心配に彼らは弱かった。

「それに、店を確実に畳む必要は無いのです。もし希望して頂ければ Devin Light of CITYの計らいで、新設予定のショッピングモール一階に、店舗を新造して頂くことも可能です。住居に関しては TOYAMA 不動産が防災に優れた新しい家屋を用意して下さいます。ご自身の身の安全を確保された後で、人が多く集まる新造のショッピングモール内での経営はさぞ潤うでしょうし……何よりご家族様もご安心なさることと思われれます」

老婆は視線を落としたが、肩から力は抜けていた。

「分かった。考えておくよ……」

この言葉が出た時、やちよは勝利を確信した。

ほほ、再開発に同意して貰えたのと同じだった。

——今にして思えば、私は舞い上がっていた。

【女神】【英雄】【最強の魔法少女】【神浜の守護神】……いろはも聞いた事はあるでしょう？

治安維持部長に就任し、周りからそんな風に祀り上げられていたことで、自分を過信していたの。

正しい言葉を言えば皆が聞き入れてくれる筈だって、信じて疑いもしなかった。  
馬鹿馬鹿しい。

立場がなんであろうと、個人の言葉が人を動かす力に、大差は無いのにね。

でも、当時の私はそんな常識さえ、碌に認識できなかった。  
歪んでいた。

——その日、やちよが最後に訪れたのは「齊藤寝具店」だった。

当時存命だったやちよの祖母、七海 天（そら）は、前代店主・齋藤 正ただしの旧友であり、みかづき荘で使用している寝具類全般はこちらで購入している。

故に、やちよも息子であり現店主の司とは顔なじみであり、話は弾んだ。

「——以上から、再開発への合意はメリットがあるかと」

「そうかい……」

司は、反対派の急先鋒に加えて、年若さも手伝って思考も柔軟だ。

やちよの言葉には愛想良く頷いてはくれたが、表情筋は固く、納得はしていない様子だった。

「……なあ、一つ聞きたいことがあるんだが、いいかい」

「なんなりと」

司はやちよを顔を、値踏みするように見つめた。

「……七海さん。あんたは偉いよ。立派だよ。言ってることはまともで正しいし、筋が

通ってるよ。けどなあ、それじゃあ納得できないことだつてあるんだよ」  
「納得できないこと、とは？」

純粹に疑問だった。

やちよが首を傾げて尋ねると、司は鋭い眼差しを向けた。

「あんた、誰の味方なんだ？」

朗らかな彼からは信じられない程、強烈な言葉が返ってきた。

やちよは何も言えなくなった。

☆

——愚かだった。司さんに言われるまで、私は分からなかった。

## —— 参京商店街 外れの公園

唾液が、苦い。

自分が、どれだけ無慈悲な選択を迫っていたか——そう考えるだけで。

(一体、私は)

何をしているんだろうか。

〃総ての行動は、神浜に住む人々の為に〃。そう決意して、治安維持部長を拝命したの。

焦がれていた恩師・和泉十七夜が本来座る筈だった席を、自分は奪い取った。

だからこそ、彼女の様に公正・平等を重んじ、平和を志す人間にならなければと——

——心に誓ったばかりだというのに。

(これじゃあ、まるで……)

自分に都合の良い大人達に、胡麻を擦っているだけじゃないか。

彼らの権力を笠に着て、力無き一般市民の人生に踏み込んだ。

これほど、愚昧な行為があろうか。

自分には最初から、人の人生を左右する資格なんて無かった筈なのに。

「お疲れ様です。やっちゃん」

そして更に――

頭を抱える問題が、ベンチに座り込むやちよの目と鼻の先に存在していた。

「どうして貴方がしゃしゃりでてくるのよ、みふゆ」

目先に立つ、白髪の美女をやちよは厭味つたらしく睨みつけた。

みふゆは、やちよの心境など意に介さず、朗らかに笑っている。

「市民の命が掛かっているのなら、副部長のワタシも手を貸さない訳には参りませんから」

だとしたら、引っ込んでいてほしいというのが、今のやちよの本心だった。

「これは私個人の意志で尋ねていることよ。貴女まで赴いたら、条例違反を疑われるでしょう?」

「これはお母さまとお爺様が市民の平和と安寧を思い、講じられた事ですよ。わたしも一端の“神浜市民として”手を貸すことが道理では無いでしょうか?」

つむぎに良く似た、濁りの無い瞳がやちよには痛ましく見えた。

みふゆは頭が良い。

弁舌も長けている。

いつもニコニコしていて、優しくて、気遣いも上手で、みんなの人気者だ。無骨な自分よりよっぽど、人の上に立てる子だと思う。

役所の職員も、市内の人々も、魔法少女も、みんながみふゆを慕っている。だけど。

度々、こういうところが見え隠れした。

社長令嬢として何不自由なく育ってきたが故の、無自覚の傲慢さが。

「みふゆ、貴女は誰の味方なの？」

今一度、やちよは確認したかった。

彼女も、自分の「歪み」を認識しているのか。

……いや、認識していて欲しい。何せ自分が今、分かったのだから。彼女とは一蓮托生の親友だから——

「ワタシは神浜市に住む人々の味方ですよ？ お爺様とお母さま、当然、やつちゃんにとつてのね」

みふゆは、ただ上を向いていた。



「みふゆは歪んでいた。その歪みに自分でちつとも気付こうとしなかった。初めて私はあの子の事が分からなくなって……怖かった」

困惑。嫌悪。怒り。

どの感情とも判明できない揺らぎがやちよの瞳を漂っていた。

ただ彼女は目線を下に向けたまま、苦々しく下唇を噛んでいた。

「みふゆ、さんは……」

「あの子の視界に、市民は含まれてなかった」

意外だった。

洞察力に長けたやちよが、最も身近な友達の本質を、見抜けなかったなんて。

「魔法少女になった頃から、みふゆとはずっと一緒だった。いつも隣にいるのが当たり前過ぎて、お互いのことを深く見ようとはしなかった。無意識の内に理解し合っていると  
思い込んでいた」

だから、見えなかったのだ。

みふゆの純然無垢な優しさは、慈母の如き包容は、誰に向けられているものだったか。彼女の正義は、誰の為に戦っていたのか。

考えてみればすぐに分かる事だった。

幼い頃から彼らによって英才教育を施されてきたみふゆに、その理念が根付いていない筈も無く。

故に、みふゆの正義の方向性は、やちよと出会った頃から既に決定されていたのかもしれない。

——サンシャイングループは正しい。

だって、祖父は、人々の暮らしを支援し、生活の安心安全を守る為に、築いたのだから。

人々は、そのやり方を無条件で受け入れるべきであり、“救われる”べきだ——  
「でも……」

「いろいろが言いたいことも分かるよ。みふゆとの友情は本物で、信じたく無かった。だけれど……」

やちよは思い知った。

親しい者であっても、絶対に理解できない、踏み入れるべきではない領域は存在するのだと。

「私は、みふゆとの間に絶対に乗り越えることのできない壁を感じてしまった。関係がギクシヤクしたのも、それからよ……。そして、事件が起きた」

事件、という単語を耳にした途端、いろははハッと目を見開く。

やちよは小さく被りを振ると、笑みを浮かべていろはを見つめ直した。

「話を戻しましょう」

「みふゆは、純粹すぎる……」

小言で皮肉を言つてやると、みふゆは首を傾げていた。

本気で理解していない様子だった。

「今、何か？」

「いえ、なんでもないわ」

「おかしなやつちゃん」

自嘲気味に笑うと、みふゆもつられてふふつと笑った。

由比鶴乃が茂みから飛び出してきたのは、その直後だった。

「うるさい。何が治安維持部だよ。わたしたちの事なんて、ちつとも守ってくれない癖に」

—— 私には、覚悟が無かった。

「耐える？ 耐えるって何？ 自分達は何も失わない癖に、わたし達にはそうしろって？」

—— 根本的な意味で、人を舐めていた。

「鬼、悪魔、人で無し」

—— 人を動かすってことがどんなことなのかを知らずに……。

「二人の人間の想いにすら寄り添えない。大企業の言いなりになってわたし達を脅かすお前らは屑だ!!」

—— ただ、自分の権限で救ってあげようって気分だった。

「地獄に堕ちろっ!!」

—— 何をもって、救いと見るのか。

私達の立場から見た「幸福」は、彼女達にとっての「幸福」には成りえなかった。もつと早く気付くべきだった。

彼女達を救いたい気持ちに、慢心と甘えが有った。本気じゃなかった。もっと個々人の言葉を傾聴して、本質を見抜いて、望みを知らなければいけなかった。それが理解できなかつた私とみふゆに、最初から彼女達を救える道理は無かつた。多分、司さんが言いたかつたのは、そういうことだつたのかもしれない。

☆

——最初に猛反発されたのが嘘みたいなのに、再開発の準備は順調に進んでいった。心にささくれが出来たような痛みを感じたけど……もう私にはただ行く末を見守ることしかできなかつた。

でも、ある日、市長に急に呼び出されてね。

—— 神浜市役所 市長執務室

「……失礼致します」

恐る恐る入室すると、既にしかめっ面の青佐が居た。

その気迫に思わず息を飲んだ。背筋に寒気が走って、全身が強張る。

「全く、休暇中の身で随分勝手な真似をしてくれたわね……！」

開口一番、忌々しさを存分に孕んだ叱責が飛んできた。

その意味が分かったやちよは、何も返せず、目線を落とした。

「参京区の再開発の件は、区民や商店街の方々ともっと綿密に話し合ってお互いにベターな方向性を模索しようと思っていたのよ。反対する経営者は多いから慎重に、時間を掛けるつもりだった。……なのに貴女ときたら、つむぎさんの口車にまんまと乗せられたわね」

あの人の「無自覚な扇動者」ぶりには、本当に頭が下がるわあ——と青佐は溜息と愚痴を一齐にこぼした。

クツと歯噛みする。

やちよだって、そんなことは分かっているのだ。だけど……

「申し訳ありません市長。ですが、人命には……！」

「小藪市の件でしょう？ 確かにつむぎさんの言っていることは一理あるわ。でもね

……」

青佐はそこで笑みを浮かべた。

「知つてる七海部長？　優しさの押し付けも、人を殺してしまうのよ」

だが、標的を捉えた鷹の如き鋭い眼光でやちよを射貫く。

「あんた、誰の味方なんだ？」

斎藤司の言葉が頭の中で反芻する。

結局、自分は誰も見ていなかった。

この再開発が成功して、彼らの身の安全が恒久的に保障されたとしても——幸せではない。

「本当に、申し訳ありません……！」

「頭を下げたつてもう遅いわ。許しません」

なんて愚かな真似をしたのか。

情けなさと後悔の念が一拳に押し寄せて言葉が震える。

だが、青佐は冷酷に事実を突き付けてくる。

「今から貴女と梓副部長には個別で厳しい罰則を与えます。覚悟なさい」

幸せ

語気を強めにそう捲し立てると、デスクから一束の資料を取り出した。その表紙に書かれていたのは……………

—— 二木市 観光課作成 観光案内資料 ——

「へえっ?!?」

ビックリ仰天の余り、頭が真っ白。

やちよの目が点になって素っ頓狂な声が拳がったのは、至極当然の反応だった。

「七海部長。罰を命じます。貴女はこれから休暇を返上して、二木市の視察に行きなさい」

「ええ…………?」

青佐はとびつきりの笑顔を浮かべていたが、やちよはただ困惑するしかなかった。



☆

「あ、そうそう。お金も渡しとくから、お土産買ってきてね♪」  
「いや、ちよつと……」



FILE #47 女神と爆裂と古町と鬼と（※クロス  
オーバー有ります）

—— 2年前。

—— という訳で後日、休日を返上して、やちよは二木市に向かうことになった。

視察、とは言っても恰好は私服だし、案内役が宿泊場所も用意してくれたとのことで、一泊二日分の衣類を詰めた旅行用バッグを持参している。

完全に観光気分だ。

この辺りは、青佐にうまく言いくるめられた気がするが、今日に限っては悪く思わなかった。

——兵庫県 二木市 虎屋町駅。

新幹線を降りると、活気溢れる女性が手を振ってやちよの前に現れた。

「お待ちしておりました！ 七海やちよさん」

「初めまして。紅間めぐみさん」

出会い頭に握手を求められたので、やちよも朗らかに笑って握り返す。

掌はじんわりと熱を帯びていて——ああ成程、噂通りの人なんだな——と納得した。

彼女——紅間めぐみは、二木市の魔導管理局長だ。

年齢は和泉十七夜とタメ……の筈、なので、20代後半に差し掛かっている筈だが、外見は全体的に縮こまっていて、やちよの頭一つ分は低い。黒髪のショートカットヘアと、化粧つきの無い小顔も相俟って、中学生ぐらいの少女にしか見えない。

韓国のある実験結果によれば、魔力の循環が活発な事は、血行を良くして若さを長持ちさせるらしい。

確かに神浜市にも、都ひなのや八坂おけらといった特例が居る為、めぐみの容姿にも納得である。

小じんまりとした臀部と胸部も未だ成長途上に見える。

「お噂はかねがね聞き及んでおります。なんでも爆裂魔法の開発に成功して、災害クラスノの魔女を仕留めたとか」

「とんでもないですよ」

謙遜とは裏腹に、めぐみはフツフンと得意気に無い胸を張っていた。

——爆裂魔法とは、紅間めぐみの代名詞。

彼女が開発した、一撃必殺の魔力開放術の事である。

自分の内にある全ての魔力を一点に集中し、強大な破壊力を持つ【爆裂】を発生させる技だ。

その威力は凄まじく、魔女だけを仕留めるにとどまらず、周囲の地形すらも変えてしまう。

魔女の結界内で唱えれば結界そのものを破壊させ、魔法を放つ時の余りもの魔力量に、周囲の魔女をも呼び寄せることになるという。

加えて、全ての魔力を放出しきると、体力もゴツソリ持っていかれてしばらく動けなくなってしまうのだ。

並の魔法少女ではソウルジェムが一気に濁り、「最悪のケース」に陥る場合もある。無論、提案時は周囲の魔法少女達から机上の空論と揶揄された。

そして、実験に成功し、立証した後も、上記の通りの破壊力と、逆にリスクを伴ってしまう事から『爆裂魔法はネタ魔法』とさえ蔑まれる始末だったが——二カ月前に二木市上空に突如出現した災害級の魔女を撃破したことにより、その有用性が証明されたのである。

「アレは、魔法少女が皆一様に協力してくれたから成功したものですしね……。七海さんもご活躍の噂は届いておりますよ。『最強』と称えられし実力に比肩する者無し。つい先日も並み居るベテラン達を抑えて治安維持部長に拝命されたとか」

「私なんかは……まだまだ若輩者ですよ」

めぐみの様な、本物の『天才』を知ると、自分はまだまだ井の中の蛙だと思ってしまう。

自分も長年戦い抜いてきたが、災害クラスの魔女と対面したら勝てる見込みは無い。今後を考えたら対策を立てなくてはならないのだが、治安維持部の魔法少女達の足並みすら揃わない現状では、絵空事でしかない。

「他の魔法少女にはできない事を成し遂げてるんです。お互い胸を張って生きましよう」

でも、誰かに認められることは素直に嬉しい。やちよはペコリと頭を下げた。

「ありがとうございます。それに、この度は観光案内をして頂けるとのことで……誠に恐縮です」

「いえいえ、私もたまたま休暇中でしたので」

後で聞いた話だが、めぐみも管理局長という立場上、多忙に極まる身で休みは殆ど取れていない。

だが、旧知の仲である青佐が、彼女の為に、管理局を管轄する市議会議員に「色々配慮して」くれたらしい。

よって、観光案内役も彼女の頼みなら仕方なし、と快く引き受けてくれたそうだ。

「七海さんとご一緒なら、不遜な輩に横槍を突かれなくて済みそうですし」

彼女の視線が一瞬だけ脇を向いた。

やちよも合わせるように目を向けると、赤い両目を持った白い動物がホームの柱に隠れていくのが見える。

——なるほど、確かに「不遜な輩」だ。

「それに……」

「っ!？」

めぐみはじつとやちよを見つめてきた。

彼女の視線が向かう先——それは首より下に実る、体の一部分。

めぐみのと酷似した、極僅かな小さな丸み。

「……七海さんとは良い友達になれそうです」

「やだエツチ」

視線に気づいたやちよは頬を赤くして、無い胸を慌てて抑えたのであった。

☆

その後、二人は喋りながら虎屋町を遊歩していた。

道中、めぐみは「巨乳はすべからく敵です」とか「周りの胸の大きい友達はどこぞつて変人ばっかりでしょ」とか、巨乳そのものがこの世から排除すべき邪悪であるとい



う怨根の類を口やかましく捲し立てていた。

確かに、やちよも巨乳の友人が多いので、気持ちは分かる。

市の宣伝役として広報課に呼ばれるのが、みふゆやみたまだったりすると、ついついやましい気持ちちが芽生えそうになるけど……。

「でも、私達のような体系は希少価値があつて、一部の人達に必要ながあつて言いますし」

何事もポジティブシンキングだ。

だつて、女性なら誰しもが何れは母親になる。子供ができれば必然的に胸は腫れる訳で。

それに、異性からの視線がキツイし、年を取つたら肩こりの原因になるし、垂れたら見栄えも悪いしで、デメリツトも多い訳で。

そういうのを考えたら、貧乳の自分は幸せ者だな、なんて思つてしまふ。見てる分にはいいけど、自分にあつたらさぞ苦勞してる所だろう。

やちよは無い胸を撫でながらそう伝えると、めぐみの顔が般若から天使に変貌する。

「そうですっ！ まさにその通りっ！ さすがは七海さん、よくご存知でいらつしやいます。背伸びしても無駄だとか、胸を張つても無意味だとか馬鹿にする輩に教えてやりたいですよっ」

……中々面白い人だ。単純で。

「それよりも、爆裂魔法のことをもつと教えて欲しいのですが」

すつかり気を良くした天使の笑顔が、更に光り輝いた。

「興味を持つて頂けたなら話は早いです！」

と、言ったのを皮切りに今度は、爆裂魔法の解説を捲し立てるめぐみ。

なんでも彼女の爆裂魔法への愛は『一日一食しか食べられない代わりに毎日爆裂魔法を撃つか、爆裂魔法を我慢する代わりに一日三食おやつグリーフシード付きどちらかを選べと言われたら喜んで一日一食で我慢する。我慢して爆裂魔法を放った後で、ちゃんとグリーフシードを回収して、残り二食とおやつを食べる』ぐらい深いそうだ。

「へえー、そこまで………つてあれ？」

一瞬納得しかけたが、なんか最後に余計なものが付け加えられていた気がする。

……多分空耳だろう。

「……それよりも、まずはどこに行かれるのですか？」

なんかこれ以上聞いても無意味な気がしたので、話を変えることにしたやちよ。

「そうですね。この先にある虎屋商店街を散策しても良いのですが……まずは、大親分殿に七海さんの自由行動の許可を頂かなければ」

そんな思惑にちつとも気づかない単純なめぐみは言いながら、スマホを取り出して誰

かに電話した。

「もしもし大親分殿ですか。七海やちよの身柄は私が預かっておりますので、解放して欲しくば自由行動の許可を出しなさい。……は？ 何寝ボケた事言ってるんですか？ 今すぐにですよ」

……いつの間に自分は人質になったんだらうか。

やちよは目を丸くして、いつの間にか誘拐犯となった女性を見つめる。

やがて、二、三言、脅迫すると通話を切ってやちよに振り向いた。

「OKだそうです」

「え、マジで？」

偉大なる大親分の寛容な心に感謝するしかない。

「マジです。その代わり、ぜひとも七海さんとお会いしたいそうです。早速お目通り願いますよー！」

言うが早い、めぐみは背中を向けてサツサと足早に進んでいった。

☆

——『大親分』とは何者か。

二木市の商工業組合は通称「黒鬼組」と呼ばれており、三人の『親分』がいる。

その中で、一番偉い人物が『大親分』と呼ばれているそうさ。

なるほど、神浜市長（青佐）の目論見が見えてきた。

件の大親分と会い、社会勉強してこい、ということだろう。

虎屋商店街の喧噪に入ってから真っ直ぐ、15分程早足で進んでいった二人の眼先に映ったのは、巨大な木造りの門だった。

その背後には豪著な和製の御屋敷が建っており、さぞかし名のある富豪か、地主が住んでいることは容易に想像できる。

「……が大親分の」

屋敷か、とやちよが尋ねるよりも早く、めぐみは「ええ」と答えた。

既に彼女は門の脇にあるインターホンのボタンを押していた。

「……っ！」

これから、二木市で最も偉大なる魔法少女に会える、と思うと、急に全身が緊張で強張った。

やちよはチラリとめぐみの方を見てみるが、表情は余裕綽綽そのものだ。

先の電話で無礼千万な言を連発したのに、怒られたりとか門前払いを喰らう不安等は、微塵も抱いていない様子だ。

恐らく大親分とも親しいのだろう……が、如何せんその肝の据わりっぷりには驚嘆するしかない。

『こちら紅晴邸でありんす。ご用件をお願いするでありんす』

ピンポン、と鳴った後に、インターホンのスピーカーから聞こえてきたのは、訛りの強い声色に加えて随分変わった語尾の女性の声だった。

……何だろう、神浜にも似てる人が居たような。

「こちら魔導管理局長のめぐみんです」

(めぐみん!?)

聞き覚えの無い綽名をめぐみが名乗った気がしたが、空耳だろう。たぶん。

「分かりましたね？ 分かったらさつきと入れてください」

『いやだから用件を言えと言ってるのでありんすよ!』

「名前を聞けばすぐに分かるでしょう？ 全くニートは察しが悪いですね」

『そうでありんすな、ふーむ……………つてちつともわからんでありんすよ！ あと、ニートじゃないし！ 警備も立派な仕事でありんす！』

「平日の真昼間から自宅警備員なんてニート以外の何者でも無いでしょう？ 電話でお伝えした通り大親分にお目通り願いたいのですよ」

『だからニートじゃねえつつつてんだろーがっ!! ……ふむふむ……本当にめぐみん殿でありんすかー?!』

インターホン越しの女性は急に嘲るような口調で、めぐみの神経を逆撫でした。

「失礼な、私は私しか存在しませんよ」

ムツとしかめつ面になつためぐみが言い返す。

『どうも信用できないでありんすなー？ 本物のめぐみん殿なら聞いてることちが恥ずかしくなる名乗り口じよ……じゃなかつた中二びよ……でもない、『合言葉』が言える筈でありんす』

「なんか今すつごく馬鹿にされた気がします、聞かなかつたことにしてあげましょう」

こめかみの血管をピクピクと動かしながら、インターホンを睨みつけるめぐみ。

「合言葉つて？」

やちよが首を傾げながら尋ねると、めぐみはフン♪と鼻息をふかして笑つた。

「そんなもの、朝飯前ですよ」

自信満々に言い放った瞬間——めぐみの体が光り輝く！

黒いトンガリ帽子と、真紅の衣装を纏った魔法少女に変身した！

彼女は手に持った固有武器——先端に寶石が取り付けられた杖を天高く掲げると、力強く宣言!!

「我が名はめぐみん!! 二木市随一の天才魔法少女にして、爆裂魔法を愛する者!」

『二木の魔法少女にとつて文法や言葉の基礎が重要だという理由は?』

「虎屋町の牙だとか竜ヶ崎の炎だとか、そのまんまじゃん! だってツツコまれそうな通り名を防ぐ為。そして、戦闘前の口上を素晴らしいものにし、場の空気を熱くさせるためです!」

『魔女との戦闘の上で最も大切なものは?』

「格好良さです!」

ピンポンピンポンピンポーン☆☆☆

……スピーカーからクイズ番組の正解みたいな音声 flowed かと思うと、巨大な門が音を立ててゆっくり開いていく。

「……ええ?」

一連の茶番劇を見ていたやちよが呆然となったのは言うまでもない。

しかも、周囲の人達がおかしなものを見るような視線を一齐に向けていたので、恥ず

かしい。

「では、参りましょう。七海さん」

「あ、ちよつと！　せめて変身は解いてくださいって！」

注意するもめぐみにはどこ吹く風。

やちよも慌ててズンズン進む彼女の背中を追いかけていくのであった。

☆

「御屋敷へは魔法少女に変身した者のみが許されます」

なるほど、だから変身したのか。

めぐみが釘を刺す様な目つきで注意してきたので、やちよも変身する。

どうやら、キュウベえすらも侵入できない特殊な結界が張られているらしく、市内の商業組合の重役達や、魔法少女達は専ら大親分の屋敷で会議や食事会を開催しているら



しい。

「お待ちしておりました。めぐみんさん、七海やちよさん」

二人が靴を脱いで玄関を上がると、一人の少女が足早に駆け寄ってきた。

威圧感を与える牙の模様が書かれた赤いバンダナで口元をピッタリ覆っていて、鮮血の様な真紅のパーカーを羽織っている。

まるで、ガールズロックバンドのボーカルか、ダンサーの様な出で立ちだが……ぶつちやけ、和が一面に広がったお屋敷とは不釣り合いだ。

彼女は二人に、頭を下げると、

「お荷物をお預かり致します」

「お願いします」

「どうもありがとうございます」

両手を差し伸べてきたので、二人は鞆を差し出した。

受け取ると、少女は去っていった。

「あの子は」

「大親分殿直属の御庭番衆の一人です。大親分殿は魔女や事故で家族を失った女の子の面倒も見ているのですよ」

やちよが尋ねるよりも早く、めぐみが答える。

先ほどの彼女の話からして、紛れも無く魔法少女なのだろう。確かな「魔力」を感じた。

「めぐみんさん！ ご無沙汰しておりますっ！」

「ええ、お久しぶりです」

「あれっ?!」

——等と思った直後、やちよはビックリ仰天。

新たな従者らしき少女が自分達の前に駆け寄ってきた。

確かな魔力を感じたし、魔法少女なのだろう……が、衣装を見て目が飛び出た。全く、同じなのだ。

先ほど、荷物を受け取ってくれた従者の少女と。

（いや、どう見ても別人、よね……?）

顔立ちや輪郭、髪形や髪色はまるで異なっている。

全く同じ服装の魔法少女なんて、よっぽどの偶然が無い限り滅多に存在しない。いや、もしかしたら……さつき荷物を預かってくれた方の従者と双子、とか？

「あの」

気になってつい声を掛けてしまうやちよ。

「何か?」

「いえ、さつき荷物を預かってくれた子と格好が同じなのが気になりました……同じ魔法少女、ですよね？」

「左様で」

従者は迷わずコクリと頷くが、釈然としない。

「彼女達は全員魔法少女なんです。厳密には違いますが……」  
「??？」

隣でめぐみがボソツと耳元で言った一言に、やちよの頭はますます混乱する。

「元々我ら御庭番衆は烏合の衆。ですが、大親分が魔女と戦う為の力を賜りなされたのです」

やちよが驚愕に目を見開く。

「……………今、彼女は何て言った？」

「それってどういう？」

「会えば分かりますよ」

「御二方、こちらへ」

やちよの疑問などどこ吹く風のようにめぐみと従者はズンズンと奥へ進んでいく。

☆

——大親分の屋敷・紅晴邸 最奥部

「こちらが謁見の間となります」

従者がそういつて襖を開けると、広々とした畳敷きの和室が広がっていた。

両サイドの窓から陽光が差し込み白く輝く景観はまさに、仏が祀られているかの如き神々しさを感じる。

内装は、時代劇でよく見る殿様が側近達と話し合っている部屋を彷彿とさせた。目先にある一段高いお座敷には、一人の袴姿の女性が鎮座している。

——なるほど、あれが大親分か。

従者に促され、正座したやちよは目上の彼女を見るなりそう確信する。

自分をしかと見つめる鋭ぎ澄まされた目つきは、紛うことなき熟練者のものだし、凜とした佇まいも衣装と相俟って美しい。

だが、何よりも……彼女の額に生える天に向かつて伸びた“それ”だ。

——【漆黒の角】

(確か、二木市は“鬼”を土地の唯一神として祀っていると資料に書いてあったわね……)

故に、彼女の“それ”は、自らが鬼の眷属を象徴するかのよう。

黒々しく瞬くそれに、やちよは目を奪われた。虜になった。見惚れた。

「七海やちよ殿。この度は遠方よりご足労くださり、大変恐れ入ります……」

神浜の誰かさんのように口元をマフラーで覆っているが、声ははつきりと響いた。

やちよに向かつて頭を下げる。

「……お初にお目にかかります、大親分殿。この度はお招き頂きまして、誠に感謝しておりますっ」

やちよも緊張で声を震わせながら、深々と頭を下げる——が、

「はへっ?」

「えっ?」

素つ頓狂な声に、慌てて顔を挙げると、完全に呆氣に取られている。『大親分殿』が居た。

やちよの言葉が飲み込めない、といった様子で、きよとんと首を傾げている。

「くくく……っ」

「っ!」

隣から笑い声。

咄嗟に横を向くと、顔を真っ赤にしたためぐみが今にも吹き出しそうになぐらい堪えている。

その意図を把握した檀上の女性は、呆れかえった表情で、

「……あー、七海やちよ殿……? 大親分はあちきじやないであります」

溜息混じりにそう教ると、やちよはビックリ仰天!

「えっ!? じゃあ貴女は?」

「あちきは、大親分の側用取次役を任されておる。若頭みちのくこうりんの陸奥光琳であります」

「ええ……?」

「あっはっはっは!!」

呆然となるやちよの横で、とうとう耐えきれなくなつたためぐみが大笑い。

「め、めぐみさん！」

「これっ！ めぐみん殿、教えてないとは人が悪すぎるでありんすよ」

「ああ、ごめんなさいっ。みんな最初は間違えるから、つい、ね……」

彼女のせいで思いつきり恥をかいてしまった。

顔を真っ赤にしたやちよが睨むが、めぐみの笑顔は絶えない。

「アレは只のニートです。殿様気分を味わう為に仕事をサボってまで一日中あそこに座りこんでいるのですよ。『本物』の大親分殿はあの裏にいらつしやいます」

「いい加減しばくぞお前っ!! ……オッホン。では、早速呼びいたしましょう。これ、皆の衆っ！」

光琳が一本締めのように両手をパンツ！と叩くと――

黒い影が一斉に天井から降り注いだ。

それらは、陽光を浴びて姿をくつきりと映し出す。大親分直属の御庭番衆——従者一同だ！

凡そ15名はいるだろうか。見ると、先ほど荷物を受け取ってくれた少女もいた。

案内役の従者も混じると、それぞれ部屋の両サイドに8名一列に別れて、正座する。

まるで軍隊の様に一糸乱れも無い一連の動作を確認すると、光琳が大きく口を開けた。

「大親分の、おなあ~~~~りい~~~~!!」

——どこからともなく、太鼓の音が響く。

部屋の両脇を占める御庭番衆が。

少し横に動いて光琳が。

めぐみと、やちよが。

一斉に頭を下げた。

太鼓の音が、どんどんと大きく鳴り響く。

やがて——光琳の背後にある襖が、大きく開かれる。

（女の子……?）

やちよは瞠目した。

そこにちよこんと佇んでいたのは、小さくて愛らしい少女だった。

外見的には、隣に座るめぐみと大差無いだろう。

だが——腰まで伸びた白髪は、研ぎ澄まされた日本刀にようとぎらぎらと銀色の瞬きを放っていて。



真紅の炯眼は、地獄の業火の如き絢爛な熱と妖艶さを放っていて。

金色の陣羽織を纏い、威風堂々と直立する全身からは、圧倒的な力強さが誇示されていた。

——やちよは直感。

光琳の「角」の比ではない。

彼女こそ真正正銘の「鬼」だ。二木市の絶対者であり、守り神として崇め奉られし者。

可憐な外見とはアンバランスな強さを全身で感じ取り、背中がぞつと震えた。

一目見ただけで、「敵わない」と——やちよの勘が警鐘を鳴らした。

「座布団を温めておきました」

「あらあ、ありがとう」

先ほどまで光琳が座っていた座布団に大親分は座り、目下を眺める。

全員が揃っていることを確認すると、七海やちよに目を付けた。

「はじめましてえ、七海やちよさん」

大親分は和やかな笑みを浮かべて挨拶した。

畏怖のあまり、やちよは返す言葉に詰まった。

慌てて頭を下げると、隣のめぐみがクスクスと笑う。反応が可笑しいのだろうが、煩

わしい。

「この二本市で、商店街統合組合の総取締役を務めさせて頂いております、〃黒鬼組〃頭領・紅晴結菜くれはゆなと申しますわあ。貴女の武勇伝は親愛なる夕霧さんから常々聞き及んでおります。何卒、よろしくお願い致しますわあ」

大親分は優雅そのものな喋り方で、やちよに深々と頭を下げる。

「お、大親分殿にそのように存じて頂けるとは、誠に恐悦至極です……っ！」

やちよは頭を畳に付けて、震える声であいさつする。

「噂に違わぬ真面目一貫の方のようですねえ。そう固くならず、表を上げて大丈夫ですよお」

大親分はクスクスと愉しそうに笑いながら、そう促した。

「ありがとうございます」

頭を上げたやちよが大親分の顔を見つめる。

大親分もまた、やちよを値踏みするように見つめた。

「本日は長旅でお疲れでしょう。部屋を御貸ししますので一晩泊って頂くください」  
「ありがとうございますっ」

偉大なる大親分の寛容さには感謝せざるを得ない。

やちよは声を震わしながら、頭を下げた。

「めぐみんさんもお」

「えっ? いいんですか?? やったーッ!!」

一方、こちらは一切遠慮なく完全にラッキーといった様子だった。

☆

——大親分の屋敷・紅晴邸 客間

「まったく、あんな状態からよくあそこまでまとまったものですね……」  
めぐみとやちよは煎茶を飲んで一服。

過去を思い出しているのか、めぐみが懐かしそうに笑みを零していた。

(確か二木市は……)

やちよはかつて市長から聞いたことを思い出す。

8年前の、二木市の魔法少女事情は非常に鬱屈で息苦しい状態であったらしい。

キユウベえによって無尽蔵に魔法少女が生み出され、飽和状態であった。

虎屋町の『虎穿<sup>こがち</sup>』。

竜ヶ崎の『ドラゴニックベイル』。

蛇乃宮の『アスプロスネーク』。

それぞれの街では、それぞれ計12名程のチームが結成され、お互いに鎬を削り合っていたそうだ。

「今でも昨日みたいに思えますよ。大事を防ぐ為に、十七夜と一緒に駆け回った日々を……おっと失礼」

「いえ、もう平気です」

やちよが笑って返してくれたので、めぐみも安心して茶を啜った。

☆

## ◎おまけ

「我が名はななみん！ 神浜市上最強の魔法少女にして、女神アクアの美貌と御力を継承する者っ!!」

「うーくん、もつとこう右手をビシツとっ！ 天に届く勢いでっ!! ……あと、名前ダサいです。センス無さ過ぎ」

「ええ……？ 可愛いと思うけどなあ、ななみん……」

語呂も良いし、めぐみんとも相性が良い筈。

「ダメです。私かもつと相応しいネーミングを付けてあげましょう!」

「それは？」

「〴〵やつちよむ〴〵で」

「ええええ!!」

「うるさーいっ!! 今何時だと思ってるでありますかーっ!!」

……  
めぐみの指導は深夜まで続いたという。

F I L E # 4 8  
外の世界で見えたもの（※クロス  
オーバー有り）

—  
2年前。

——兵庫県 二木市 虎屋町駅。

「本日、大親分は大忙しでありんすので、街を散策されるとよろしいでしょう」

——客室で一服した矢先にそう言われてしまったら、出かけるしかない。

大親分・紅晴結菜と話ができるのは、夕暮れを迎えてからだそうだ。

時刻を確認すると、丁度お昼どきなので、どこかで食事を取っても良い頃合いだ。

「では七海さん。ステーキを食べに行きましょう！」

そう伝えると、めぐみがいきり立って宣言した。

成程、ステーキか。しばらく肉類を食べていなかっただし、たまにはガッツリ食べるの

も悪くない。

……二人のお腹がキュルキュルと鳴った。善は急げ。

めぐみとやちよは、荷物番の従者から鞆を受け取ると、早速出発する。

「行つてらっしゃいませ」

門を出ると、従者の一人が、見送ってくれた。

彼女が頭を下げると、やちよも頭を下げる。

「それでは行つて参ります……あ、ちよつと!？」



「早くしないと混みますからねっ！ さっさと行きますよっ！」  
「ふふ……」

言うが否や、めぐみにグイグイと腕を引つ張られて連れ出されるやちよ。

幼い妹が、久しぶりに暇が取れた姉と遊びに行くような微笑ましい光景に、従者も思わず笑みを零すのだった。

☆

——二木市 竜ヶ崎町

そうして、二人が辿り付いたのは、竜ヶ崎町の中心にある焼肉屋だった。

「お前が七海やちよかっ!! 待ってたぜっ!!」

店に入った直後に、二人の目の前に飛び出してきたのは、細身で小柄だが、威勢の良さを全身で顕している黒髪の女性だ。

「もう知れ渡ってるんですね……」

「二木の情報網ナメんなよ！ とつくに姐さんから伝達済みだっ！」

やちよは目を丸くして関心。

どうやら市内中の店に大親分と直結したネットワークが形成されている模様だ。

中心人物が常に管理できる状態だからこそ、この街の商業は纏まっているのだろうか。

「この方は？」

やちよが女性のことをめぐみに尋ねる。

「大庭屋でシエフをされている肉なら豚から人までなんでも焦がす焼殺天使ウエルダンちゃんです」

「お前もウエルダンにしてやろうかあ!! ……っておいコラ何やらせんだめぐみん!

しかも肉屋としちやイメージ最悪だぞソレっ!」

「ではウエルダンちゃんさん。こちらではステーキが絶品と聞き及んだのですが……まさか焦がして？」

「お前も馬鹿正直に受け取るなっ!! ……いいぜっ! 折角来てくれたんだ! とつておきを御馳走してやるよっ!!」

やちよの眼がパアツと輝くが、めぐみは溜息。

「ウエルダンにウエルダンを掛けたウエルダン級のウエルダン料理ですね」

「『腕によりをかけた最高級の肉料理』と言ってくれっ!!?」

ツツコミながらも女性は、二人をテーブルまで案内した。

中央のくぼみは鉄板になっていて、シエフの女性は厨房から運んできた二枚のステーキを早速焼き始める。

——しばらくして、

「はいよ、おまちいっ!!」

威勢の良い掛け声と同時に目の前の皿に置かれたのは、よく油が乗ったステーキだ。

良い臭いに鼻腔が刺激されて、唾液があふれ出そう。やちよとめぐみは早速ナイフで切ろうとするが、

「おっと、コイツは『チョップスティック』で食べてみろっ!」

直前で、シエフの女性が二人に手渡した。

「箸……っ!」

やちよが手にした『それ』を見て目を見開く。

ステーキは本来固いもの。なのにわざわざ箸で切って食べる、というのか。

心配になって、シエフの女性の顔を見ると、ニヤニヤと不適に笑っている。『騙された  
と使って使ってみろ』とでも言いたげだ。

次いでめぐみを確認すると、彼女も同じ笑みをやちよに向けている。

「頂きます……」

なんか二人に嵌められてるような気がしたが、やむをえまい。

やちよは箸の先端をステーキに押し当てる。すると……

「えっ?!」

驚愕。

箸はスウ、と分厚い肉に吸い込まれていった。まるでショートケーキのクリームかスポンジのように。

縦に動かすと、ステーキは最初から繊維など存在しなかったかのように、簡単に解れていく。

一口サイズに切り分けると、摘んで口の中に放り込んだ。

「っっ!!!」

衝撃。その一瞬後に口の中に広がったのは未体験の幸福感だ。

カリッと焼かれた表面。舌の上で転がすと、肉が解けて消えた。そして、微かに甘みのある香りだけを口の中に残す。

「どうだい?」

シエフの女性がしてやったりの表情を向けてくる。

「ええ、こんなステーキは食べたことはありません。肉の質も、塩・胡椒の加減も絶妙ですが……何より焼き加減が素晴らしいです」

「おおっ！ 味覚まで『最強』とは恐れ入った！ そこを分かってもらえるとは料理人冥利に尽きるねえっ!!」

やちよが笑顔で絶賛すると、シェフの女性の満面が喜色に染まった。

「表面を一気に焼き上げることでレア部分の旨味を閉じ込めるんだ！ こいつあ肉が高級なら誰でもできる芸当じゃねえっ！ この樹里サマの天才的技巧が有って初めて為せる『技』ってヤツよおっ!!」

「……講師から焼き方を教わっただけなんですけどね」

「いちいち樹里サマの炎に水をぶっかけるなっ!!」

めぐみがサラツと横槍を差すと、樹里と名乗ったシェフは顔を真っ赤にしてツツクむ。

「講師？」

「ええ。大庭屋グループは昔、謂れのない食品偽造加工疑惑と、ウエルダン至上主義(笑)のせいで長らく低迷されていたのですが……その方が全店舗の調理講師となり、食材の仕入れも社会的信用のある卸売り業者を斡旋してくれたお陰で、建て直せたのですよ。ちなみにそこにいる大庭樹里ってヤツも今はようやく二本足で立てる程度に進化しま

したが、大昔は地の底を這うゴキブリで……」

樹里の顔が急激に冷え付いたので、まずい、とやちよは思った。

「おい」

「ごめんなさい人間じゃなくてまだ山猿でしたねすみません間違いました」

樹里のこめかみに、ピキリツとゴツイ血管が浮き出る。

「……やんのかお前」

「……ここで私と？ 上等ですよ。但し、貴女の猿知恵が私の天才的頭脳の足元に及んでいればの話ですけど？」

「そーいう上から目線の物言いだからお役所の連中はいけ好かねえんだよ……っ！  
そっちがその気なら受けて立つぜ！」

「良いでしょう。ならばさっそく勝負です！」

——まさか魔法少女同士で!?

咄嗟に立ち上がり、身構えるやちよ。しかし——

『さて、『ウエルダン』は何回言ったでしょう？』

「つてええええええ!?! ……えくくつと、ひーふーみー……そうだな、7回だ！」

「ブブー! 相変わらず脳みそが猿以下ですねっ! “私が”とは言ってますんっ!

“みんなが”言った回数ですっ! つまり正解は9回。つという訳で、ステーキ代はタ

「ダにしてくれませよね？」

「ぐぬぬぬっ、負けた以上は仕方ねえ……っ!!」

「いや払いますから」

「やちよはそういうと、ステーキ代の一万円を手渡した。」

「これでよろしいですか？」

「毎度ありっ!!」

樹里が満面の笑みで受け取る。

年下が払ったら自分も払わない訳にはいかない。

めぐみは「チエツ」と舌打ちして口を尖らせながらも、財布から諭吉を手渡した。

☆

「さしでがましいですが……」

「ん？」

「その講師の方に、お礼をお伝えしていただきたいのです」

暫くして、やちよはステーキを完食した後、樹里にそう切り出した。

……ちなみに、めぐみはというと、ステーキを一口ひとくち噛み締める度に昇天しているの、食べきるまで時間が掛かりそうだった。

「なら、今会ってみるかい？」

「いらつしやるのですか？」

「ここにはいないけどね。すぐ会える」

「??」

樹里の言葉の意図が読み取れず、やちよはポカンと首を傾げる。

ついてこい、と樹里に言われるまま、やちよは厨房へと足を踏み込んだ。

現在は他の従業員は休憩中の為、厨房は樹里だけだが、一人でも手際良く回せるためか、狭く作られている。

だが、目に付いたのは、壁の“それ”だ。

40インチ程のモニターが、厨房全体を見下ろせる程の高い位置で、張り付けられていた。

樹里が、近づいて画面のスイッチをONにすると、



『やあ樹里、何かあったのかい?』

驚いた。

若い青年の顔が全面に表示され、樹里に話しかけたのだ。

『また三田牛の最高級をウエルダンしたのか?』

「お、沖田のアニキまで……っ!」

樹里が涙目になりガツクリと項垂れる。

アニキと呼ばれた青年は、その反応を愉快そうに笑い飛ばした。

『冗談冗談。樹里がよくやってるのは知ってるさ……と、今日は客人が来ているみたいだな』

青年は鋭い視線をやちよに向けてきた。

“沖田”……その名を聞いて、やちよはハツとした目で、青年の顔に食いつく。

狼のような鋭い目つきと精悍な顔つき、黒と金の混じった特徴的な頭髪には、見覚えがある。

「お初にお目にかかります。失礼を承知でお尋ねいたしますが、貴方は“神戸五稜郭亭

”の沖田 誠さんでは?」

『魔法少女の英雄に覚えて頂けるとは光栄ですね、七海やちよさん』

やちよが頭を下げると、沖田はニコリと暖かい表情を魅せる。

——五稜郭亭とは、函館から発祥した飲食店グループのことで、札幌・旭川・小樽・横浜・神戸・松山にも支店を置いている。

『客が食べたいと思ったものを創り、提供する』をモットーにしており、その評判はいずれの店舗も日夜盛況が鳴りやまない程だ。

沖田 誠は、若干二十歳の頃から、神戸五稜郭亭でオーナーシェフを任される程の天才料理人で、特に肉料理に関しての拘りは凄まじく、グループ内でも右に出るシェフはいないとさえ言われている。

「恐縮です。それよりこれは一体……？」

「ああ、見ての通りテレビ電話さ」

樹里が得意気にそう言った後に、沖田が続ける。

『神戸五稜郭亭から直接ね』

「アニキ達はウチのグループで調理指導してくれてるんだよっ！」

大庭屋グループ系列の店舗には、いずれも、沖田誠を中心とした肉料理や接客サービスのエキスパート達が交代制の講師として付いており、テレビ画面を通していつでも直接指導してもらえる仕組みになっている。

不在の時は、ボイスでメッセージを残すこともできるそうだ。

『今は樹里が大分しっかりしてくれたから、その必要も無くなったんだけど……時々、興

奮して肉をウエルダンするから心配だね』

「ああんっ!？」

樹里が般若の形相でガンを飛ばすが、沖田は鼻で笑って流す。

「成功者にいつでも指導して頂ける環境というのは理想的ですね」

『まあ、樹里との出会いはたまたまでしたけどね……大分前に、ヘルニアを患った時期がありました。当然ながらシェフは休業。手持無沙汰になった矢先のことでした』

生粋の料理人である沖田にとって、料理が作れない程、苦痛なものはない。

強烈な不安が押し寄せて、精神を圧迫し始めた時に—— 来訪者が表れたのだ。

『当時の『彼』はIT企業を立ち上げたばかりの駆け出しで……僕にこう持ち掛けたんです。新製品のモニターになってもらえないかと……』

「それがこのテレビ電話ですか？」

やちよが問いかけると沖田は頷いて樹里に目配せする。

「実はコイツは認証システム付きだな。スイッチを押した時に指紋と顔を一瞬でスキャンするんだ。ウチの系列グループのシェフとアニキら講師しか登録してないから、外部に漏れることは無いんだ」

『それを使って、地方の落ち目の飲食店を再興させる『再生請負人』にならないかと、彼は言いました。……最初は断りましたよ。料理は口頭指導だけで上達できません。指

導とは講師と教え子が同じ現場に立ち一対一で向き合うことですし……何より胡散臭かったですからね』

「ならばと、ソイツがよこしてくれたのが、”これ”なんだ」

沖田の説明に樹里がそう付け加えて親指で、厨房の隅つこを差す。

そこにいた白い人型大の物体に、やちよは目を丸くした。

「ロボット……!?!」

呆気に取られる。

最近は飲食店や携帯ショップのカウンター前で、よく客寄せを行っているものと似たようなそれが、ちよこんと佇んでいるのだ。

「分身ロボットだっ!」

「分身っ!?!」

やちよがビックリ仰天して画面を見ると、沖田はVRゴーグルの様なアイグラスが取り付けられたヘッドホンを取り出していた。

『これを頭に付けることで、僕も厨房に入ることができます』

分身ロボットは、ヘッドホンを付けた人間の動作を忠実に再現することができる。

加えて、身体が不自由でも頭で指示すれば、ヘッドホンが脳内の電気信号を受け取って動くというのだ。

成程、それなら現場の料理人達の働きを直に見れるし、直接指導することも可能だ。「それで」決心をされた」と

『試験品だから無料でいい』と言われましてね……』

沖田は恥ずかしそうに頭を掻く。

『ただ、彼』はこうも言っただけです。「世の中を便利にできる技術が自分に有るのなら、それを世界中に広めたいのは当然じゃないか」とね』

料理も同じだ。旨いものは誰でも食べてもいいし、創つてもいい。

だから、沖田は自分の技術を、提供することに決めた。

五稜郭亭の理念は、総ての人々が、等しく旨い料理を食べられる事だから。

『まあ、今にして思えば、彼』にしてやられたとは思つてますよ。僕が必ず成功すると踏んだ上で契約を持ち掛けたんでしようね』

なるほど。

その『彼』は熱血な感情論者と思つたが、とても合理的でやり手な人間らしい。

『成功例』を一つ作つてしまえば、商品の市場が一気に伸びるのは必定。

—— やちよの頭に一筋の光条が走る。

その『彼』なら、参京区の現状も救えるのでは無いか。

落ち目の大庭屋グループに、五稜郭亭との架け橋を創り、双方に新たな道を示した //

彼”なら。

「その方の名は……?」

やちよが尋ねると、沖田はニツと笑って答える。

『彼の名は——……』

「御馳走様でした」

「あ、ちよつと待てよ」

店を出ようとするやちよを樹里が呼び止めた。

「あんた神浜だろ。 参京区の由比鶴乃って女の子を知ってるかい?」

「……はい」

参京区。 由比鶴乃。

それらを聞いたやちよの顔が若干曇るが、気づかない樹里は何かの便箋を握らせた。

「じゃあ、もしそいつに会う機会が有ったら、こいつを渡してやってくれ!!」

「あ、ちよつと……」

「よろしく頼むぜつ!!」

静止を聞かずに樹里は店へ戻っていった。

—— 便箋は、今もまだ、やちよの元にある。

☆

—— 二木市・虎屋町 大親分の屋敷・紅晴邸

一 頻り遊び回った頃には、すっかり日が暮れていた。

屋敷に帰った二人が大親分への謁見を求めると、

「大親分はまだ暇が取れませぬ。先に湯浴みをして疲れをいやしてくださいませ」

側用取次役の光琳にそう突っぱねられたので、二人は屋敷内に設けられている温泉に

入ることにした。

入浴と食事が終わった後、大親分に呼ばれて対談したやちよだが、話の内容は割愛。  
次回記述させていただく事にする。



FILE #49 “帝皇”  
（※クロスオーバー  
有り）

—— 2年前。

—— 翌日。神浜市。

神浜市役所・市長執務室。

「市長、おみやげです」

「あら、ありがとう」

二木市へ視察（という建前の観光）へ行つたやちよから、お土産を受け取る青佐の表情は実に清々しげだ。

やちよからすれば、彼女にまんまと倣められた訳だが、悪い気はしない。

—— ちなみに、朝から大忙しであった。

頼まれたのは青佐のみだが、普段から職員の方々にはお世話になつて居るのだ。実のところ、此処へ来るまでに全ての課に周りお土産を配り終えたのだ。

栄えある治安維持部長とはいえ、所詮17の小娘。胸を張れる度胸は無いし、自分の下で頑張つてる少女達を守る為にも、味方は作つておかなければならない。

「……随分、楽しんできたようね」

青佐は、お土産の紙袋を一旦デスクにしまうと、やちよを見据えた。

獲物を捉えた鷹の様な眼光だ。

大親分から、観光中の自分の様子は伝わっているのだろう。

「ええ、それはもう」

「それは何より。……で、何か欲しいものは見つかったかしら？」

—— ほらきた。

青佐が求めるものは、 “それ” だ。

やちよが二木市で観光を楽しんだ「だけ」なら、所詮そこまで。

だが、本当に市民への想う心があるのなら、おもてなしてくれた方々を通じて、何かを得ている筈だ、と――

自分は試されている。魔法少女ではなく、市役所に勤める人間として。

意図を感じたからこそ、やちよはハッキリと答えた。

「はい、市長。ある方の居場所を教えて頂きたいのです」

「誰かしら」

やちよは青佐の背後に映える青空を見据えながら、活気に満ち溢れた表情で、言った。

「皇グループ会長、皇 稜斗（すめらぎ りくと）氏です」

☆

—— 皇グループとは？

—— 皇 稜斗とは何者か？

話は前日まで遡る……。

—— 二木市。大親分の屋敷・『紅晴邸』

湯浴みを終え、夕食を御馳走になったやちよは、結菜の自室まで呼び出されていた。

謁見の間のような広さは無く、ちゃぶ台と、タンスが隅に置かれているだけの小さな書斎だ。

「樹里から聞きましたがあ、七海さんは上等な味覚をお持ちだそうですねえ」

「いえ、貧乏性なだけです」

座布団に座って対面するや否や、そんなことを言われた。やちよはフツと苦笑い。

「？　と言いますとお？」

「同居している祖母が食事には煩い方です……」

天は優しい人だが、そこだけは異様に厳しかった。

よく噛んで味わないさい。どんな食材にも感謝を示し、作った人を崇めなさい。美味しいのなら再現できるように、不味いのなら避けるように、使われている調味料も舌で

把握なさい——物心ついた頃から、そう言われ続けて育ったので、自然と食べた時に、舌で吟味する癖が付いてしまったのだ。

「それでも、ステーキの焼き加減を絶賛してくれたのは流石だ、と樹里が言っていましたわあ」

言いながら結菜はちやぶ台に置かれた白い箱から、二つのケーキを取り出し、やちよに差し出した。

「チーズケーキと……そちらはチーズタルトですね」

「我が町の名店『とらのこ』の人気商品と……新商品です。是非、食べ比べてみて頂きたい」

新商品と言う前に、結菜の視線が一瞬下を向いたのが気になった。

資料に書いてあったが、確かチーズケーキは創業以来、No. 1の座を保ってきた筈。チーズタルトは初めて見るが、結菜の仕草を見るに、何かがあるのかも。

——食べてみないことには始まらない。まず、チーズケーキを一口運ぶ。

「如何ですかあ」

「……ええ、美味しいです」

だが、違和感はある。

チーズにはコクがなく、スポンジの弾力も弱い。

飲み込んだ後も、ざらりとした嫌な甘さが口に残る。

これが、人気No. 1の商品？

—— 続けてチーズタルトを一口運ぶ。

「……!？」

瞬間、誰かに驚かされたように、やちよの目は大きく見開いた。

「如何ですかあ」

「……明らかに違う……」

チーズムースにはコクが有り、舌触りもサラリとしている。さつくりと焼かれた生地  
の甘さとの相性も抜群だ。だが、何よりも、

「素材が、明らかに上等な物が使用されています。これは一体……」

—— 流石だ。

そう言わんばかりに大きく頷いて感心すると、結菜は答えた。

「現在、そのチーズタルトが『とらのこ』の人気No. 1商品なのです」

「どういうことですか……?」

問うと、表情があらさまに渋くなった。目を泳がせながら結菜が答える。

「実はあ、『とらのこ』は既に7年も前に……」

——サンシャイングループに買収されていたのです——

☆

サンシャイングループの事業展開は広い。

人生に2・3度は必ず関わる、と言えるぐらいには、日本人の生活に浸透している。

会長の日秀源道は、様々な地方行政の首長や議会とも、密な関係を築いている。

それらと連携して、全国規模で地方再生プロジェクトを立ち上げ、遂行。

いずれも成功を修め、経済成長に貢献している。

神戸市の参京区で行われたのも「それ」だ。

神戸市は昔、「土地だけは無駄に広大なだけ」の、閑静な港街であった。

今のような大都会に発展したのは、サンシャイングループの力があってこそだ。

TOYAMA不動産を買収したのを皮切りに、市内でメキメキと存在感と影響力を強めていった。同時に市議会——主に水名区出身の官僚型議員達——との親交も深めて

いく。

そして、8年前に、再生プロジェクトを発表。

市政と結託してこれを展開し始めたのであった。

つまり、彼らの協力が無ければ今日の神浜は無い。

やちよはそう思っているし、みふゆから耳に胼胝たごができるほど聞かされた。

しかし。

「……率先して開発が行われた中央区には、サンシャイングループ系列の企業や店舗が立ち並ぶ有様です。買収された老舗も多くある、と耳にしておりますがあ」

「しかし、彼らは経営難に陥り生活に困窮する経営者や従業員達を救う為に、と」

やちよが嘸み付くように反論した。

結奈がどこから情報を得たのかは不明だが、外部の彼女に、地元の事をあれこれ指摘されるのは気分が良くなかった。

中央区だけを見ても彼らの傘下に加わった企業は数知れず。

古くから市の名産品を扱ってきた老舗はほぼ全て、と言っている。

結果として中央区は、“神浜の土地柄”を示す“らしさ”を失った。変わり果てた姿に哀しむ老人達もいた。

しかし、喜ぶ者の数が圧倒的だった。



何せ、グループに加わった者の生活は確実に“保障”されるのだから。

『福利厚生』は、サンシャイングループ最大の“売り”だ。

子供が生まれても豊かにくらせるだけの年収。労働基準法を遵守した勤務体制。親の介護、育児を抱えている者へは、在宅ワークの推奨。女性の積極的な幹部登用等……。

正に、かゆいところまで手が届くレベルだ。

あらゆる大手企業が、裸足で逃げ出す程の充実さ。

にも関わらず、グループ全体は業績を着実に伸ばしている。

規模も拡大中。社員数もどんどん増加。

正に、夢のような企業だと、世間では評判が絶えない。

「七海さん、貴女は誰の味方なんですか？」

刹那、結菜の真紅の瞳が瞬いた。

「っ」

—— 斎藤司の言葉と、重なった。

痛い所を突かれてしまった。

苦虫を噛み潰した表情になったやちよは、結菜から視線を逸らした。

「本気で人々を想っているのなら、そんな言葉は出てこない筈。自分達が丹精込めて創り上げたものを奪われた経営者達が、喜んでいると本気でお思いですか？」

「……！」

やちよはもう一度、結菜と向き合った。

灼熱の纏った炯眼が、言葉以上の「何か」を強く訴えているように見えたから。

「彼らは妥協するしかなかったのです。サンシャイングループの手に……」

——家族の生活の保障を条件に、買収を受け入れるしかなかった。

結菜は最後にそう付け加えた後、訥々と説明した。

——それは8年前、結奈や樹里が、それぞれの魔法少女チームを率いて鎬を削っていたところに遡る。

当時の、二木市内は混沌としていた。

商工業の成長が行き詰まり、経済が衰退。

先が望めなくなった大量の若者が、都会へ流出。

加えて、元々の土地柄というべきか。虎屋町、竜ヶ崎町、蛇乃宮町は対立関係にあり、市民はいつも気を張り詰めていた。

「隙あらば敵を蹴落とせ」、「隣人であっても警戒すべし」、というような不穏な空気が市内に年中蔓延していた。

そんな二木市にも。

サンシャイングループは、地方再生プロジェクトを打診してきたのだという。

『自分達が商業の中枢を担い、混乱を治める』。

『旧態化した各町の商店街を、目新しいものに生まれ変わらせ、外部から人を集める』と嘯いて――

多額の支援金と、お抱えの土地開発公社の華々しい実績に釣られた市政は、彼らの提案を受け入れた。

だが、それこそが「罠」。

「彼らは、虎屋町駅前にも、観光旅行者用の大型ホテル建設地を購入したのを皮切りに、市内で経営難に陥っている老舗を片っ端から買収し始めたのです。まるで、死体を貪る禿鷹のように……」

断じて『人々の救済』の為ではない。

「優秀な人材と高度な技術、そして厳選素材のルートを確保して、自社ブランドの底上げに用いる為です」

やちよが食べた『とらのこ』新商品・チーズタルト。

あれは、確かに美味しかった。

だが、考案者は、サンシャイングループから派遣されてきたオーナーだ。

『とらのこ』店主のパティシエが生み出したものではない。

つまり――

『買収前』の経営者が作った人気商品：チーズケーキ等には、非常に安価な素材が扱われ。

『買収後』はオーナーが考えた商品：チーズタルトに、厳選素材が扱われている――

これがサンシャイングループの常套手段だ。

老舗のブランドを落ち込ませるやり方で、自社ブランドと役員の優秀さを知らしめる、というやり方だ。

「なんと阿漕な……!」

悔しくて堪らない。

隣にみふゆがいないがら。

彼らを目と鼻の先に感じていながら、やちよは今まで、何一つ気付けなかったのだから。

「でも、家族の生活を天平に掛けられれば彼らも非難はできません」

「ですが……容認する訳には」

「だからこそ、私達は争っている場合じゃないと判断しました。自分達の足元ばかりで無く、周りを見渡した時、家族や共に暮らす人々の為に何ができるかを模索し始めたのです。魔法少女の力で……」

——それが、黒鬼組発足の第一歩となった。

『虎穿』『ドラゴニックベイル』『アスプロスネーク』はお互いに休戦を持ち掛け、協力関係を築いた。

「最も十七夜さんがきつかけを作ってくれなければ、一致団結は夢のまた夢に終わっていましたがあ……。とにかく戦うにはまず、敵を知ることから。買収された企業や店舗へ潜入捜査したところ、とんでもない事実を掴みました」

「それは……？」

「魔法少女の業務従事です」

やちよの顔が蒼褪めた。

「……事実なら、彼らは法律違反を犯していることにつ」

一般企業が魔法少女を雇用させるには、国の許可と厳しい審査が必要になる。また、

働く魔法少女は名前を外部に公表しなければならない。

(神戸市内でのみ例外として、市長の許可が下りれば許される仕組みになっている)  
よって、全国では、魔法少女が一般企業で働いているケースは極わずか———というの  
は、あくまで神戸市と各地の魔導管理局・事務局が調査した結果だ。実際は、魔法少女  
であることを隠して働いている女性も沢山いるのかもしれない———

———だが、それでも。違法は違法だ。

やちよは握りしめた拳をちやぶ台に叩きつけそうになった。

考えてみれば、分かることだった。

人手不足が常態化している日本社会において、自転車操業並に規模を拡大し続けるサ  
ンシャイングループが従業員全てを手厚く保障するなど不可能だ。ましてや、業績を上  
げ続けることなど。

「私達は証拠を掴み、SNSや動画サイトにアップしました。ですが……！」

結菜の顔が沈痛そうに歪む。

「僅か一分も経たぬ内に削除されてしまったのです。既に手は回されていたのでしょ  
う。それでも、諦めなかった同志の一人が懸命に証拠を掴んでは投稿を繰り返しまし  
た。しかし……！」

結菜はグツと歯を喰いしばった。

「……彼女は、行方不明になりました。所有品のスマートフォンやパソコンにも、証拠は残されていませんでした……」

「それも……彼らによるもの、だと」

「私は、そう信じてますっ」

そうはつきりと言い放つ結菜の目は、震えていた。

「訴えることも考えましたが……サンシャイングループは社会的信用も厚く、大手のマスコミ企業との結束も強固です。抗戦が長引けば世間の矛先がどちらにむくかは一目瞭然です」

何より、証拠が無い以上、勝ち目は無い。

「成す術が、無い……」

「別の手を考えなければなりません……。私達は、各町の商店街の有識者達に聞き回り、必要なのが、強力なバックボーンだと分かりました。彼らの想いを代弁し、世界へと発信できる、強い改革者が。サンシャイングループ会長・日秀源道と対等に……いえ、圧倒する程の才覚、カリスマ、財力を兼ね揃えた救世主が……」

やちよの脳裏に、樹里の店で見た機械と、沖田の言葉が蘇った。

「まさか、その御方が……」

至る所で電子化された市内。日本有数の成功者や、大親分と直結したネットワーク。

これらを構築した人物が、二木市に付いていた。

「ええ、もはや世界で知らぬ者はありません。日本のビルゲイツ、世界有数の資産家、医療革命の影の立役者、IT界の革命児……」

『すめらぎ 皇 稜斗』

———  
またの名を “帝皇”

☆

結奈達の努力の甲斐もあり、二木市政は目を覚ました。

『サンシャイングループと関わり続けられ、二木市は“色”を失う』——



そして、日秀源道から“帝皇”へと乗り換えた。

“帝皇”主導で、新たな再生プロジェクトが推し進められた。

現在、二木市はほぼ全てのサービスが完全に電子化されており、15歳以上の市民が所持するIDカードは、行政に関わるあらゆることを済ませることができるとし、虎屋、竜ヶ崎、蛇乃宮町にも最先端のサービスが導入されている。

樹里の店で見たハイテク設備の数々も皇 稜斗が導入したものだ。

『全部を「自分でやらなきゃいけない」、と考えるのは間違いです』

というのは、彼の言葉である。

二木市の土地柄故もあるだろうが、そう考えがちな個人事業主にとって皇 稜斗の考

えは正に目から鱗。

無駄なこだわりを捨てなければ、作業を最適化することができなくなる。

時間には限りがある。一日24時間という限界は誰にでも訪れるものだから、機械の力を使うのは当然のこと。

『まず皆様に考えて頂きたいのは、目的のためにそのプロセスの中で、一番楽な、時間を使わない方法を選択することです』

皇 稜斗はそう言つて、IT技術を駆使した市内の最適化・効率化を進めた。

わざわざサンシャイングループに入る必要も無い。やり方一つで仕事は軽くなる。

家族との時間も作れる、と。

なるほど。

もしかしたら、その“帝皇”なら——

やちよが期待を込めて彼の所在を尋ねると、

『彼は今、ここにはいません。新製品の開発の為に、ある場所に向かっている筈です』  
結菜が不敵な笑みを浮かべて、こう言った。

『神浜市、大東区』

夕霧青佐ならば既に彼の所在を掴んでる筈だと、結菜は言う。

やちよは目玉が飛び出るかと思った。

☆

『よくここまで辿り着きましたね、七海部長。彼は此処で貴女を待つてます。会つて話を付けてきなさい』

青佐はLINEで、マークが付いたマップを送ると、そう言つてやちよを送り出した。

—— 神浜市・明京町 大東区

当時は常盤ななかのような正義の味方はまだいなかった。

町内の治安はもつぱら、蒼海幫が担っている有様であった。

一応チーム・アメノハバキリ自体は存在していたのだが、治安維持部隊としては既に機能していない。

市内警備をしている風を装つて、魔女退治などは専ら業務連携先である蒼海幫に押し付け、陰で遊びまわっている有様だった。

(いずれは、アメノハバキリの皆とも話を付けなければね……)

そんなことを想いながらやちよが足を運んだ場所は、沿岸部のスラム街であった。

ポリウムアップした髪の毛を黒い帽子の中で隠し、サングラスと薄汚れた濃茶の

コートを纏い、変装した姿で潜り込んでいる。

ここは、治安が悪いと言われる割に、閑静な中心街や、チャイナタウンの盛況さからは、また切り離された世界だ。

流された材木を削って造り、トタン屋根を被せただけの頼りない住居が視界の果てまで広がっている。

日本語、中国語、フィリピン語……或いは住民達で生み出した独自の言語が縦横無尽に飛び交い、景色と相俟って、異国同然の情緒を生み出していた。

何より、『傭兵』と呼ばれるプロ魔法少女が、決して『カタギ』でない人達から、仕事を斡旋される場所としても有名であり、日夜暴力沙汰が絶えない。

足元には投げ捨てられたゴミの他に、赤黒い染みを発見した。前日もここで魔法少女が魔法少女と争ったのだろうか。誰かの為ではなく、自分達の利の為に。

赤黒い染みより1m程離れた先に、人の姿が見えた。

今にも倒れそうな傾いた住居の壁を背もたれにして、路面に座り込んでいる。

『お嬢さん……食べ物をめぐんでください……』

前を通りかかると、『彼』の震えた声が飛んできた。日本語ではなく、中国語で。

近づいてよく見ると、老齢の男性だった。外見は一言で言い表せば、みずぼらしい浮

浪者だ。

頭髮は無く禿げ上がっているし、碌な食事も取れていないのか、顔面は蒼白で頬はやせかけている。

顎には、無精ひげがボサボサとワイルドに生えていて、そこだけが顔色とは正反対に健康的だ。

全身を包んでいるポロ切れは……元々背広だったものだろうか、マークをよく見ると海外の古いブランド製で、もしかしたら若い頃の彼はそれなりに名のある実業家だったのかもしれない。

『何が欲しいの?』

やちよも中国語で問いかける。

彼の弱弱しい碧色の瞳が、微かに震えた。

『か、缶詰を……』

やちよがコートの裏側に手をつ突っ込む。取り出したのは『ツナ缶』。

『ここに「マグロの缶詰」があります。貴方に差し上げましょう』

『ありがとう……!! ありがとう……!!』

彼は両手で受け取ると、まるで神や仏を前にした弱者のように、何度も頭を地面にこすりつけて感謝した。

『頭を上げてください』

やちよはしやがみ込み、彼と目線を合わせると、こう呟いた。

「お芝居はそこまでです。皇 稜斗さん」

刹那——浮浪者の口元が、ニタリと弧を描いた。

「中国語を学ばれていたとは流石ですね。第一関門はクリア、といったところでしょうか？」

途端、彼の口から流れるように紡がれたのは流暢な日本語だ。

「いいえ、第二関門です」

実は、この街に足を踏み入れた時、門番の魔法少女達と相対した。

無論、やちよの武術の前に、成す術も無く平伏したが。

「いずれは、この街を治める龍人達と協力を築かねばなりませんから」

「それは、神浜から病原菌を追い出すために、ですか？」

「いいえ。除去です」

男は、ふふつと愉快そうに嗤った。

「夕霧さんの仰つたとおり、なかなか重篤な愛郷主義者ですね、貴女は」

「皇会長も噂に違わぬお人の悪さです」

やちよも不敵に笑い返すと、彼はスツと立ち上がった。

先ほどまでの弱弱しい浮浪者然はどこにいったか——背筋がピンと張った立姿は堂々と勇ましく、精悍な蒼い瞳の奥底には強い意志が秘められている。

直面するだけでも、歴戦の戦士を前にしたような威圧感を全身で感じて、やちよの足は自然と一歩退いた。

彼には、隙を見せてはならないと、勘が警鐘を鳴らした。

「見事な変装ぶりですね。初見は会長」本人と判断できませんでした」

確か年齢はまだ36歳の筈。

禿頭はカツラだとして……顔面は特殊メイクだろうか。

ボロボロのハットを被る彼の表情は心の底から楽しそうだ。

「学生時代は演劇にのめりこんでいましたね……志村喬のような変幻自在の演技に憧れたものです」

「しかし、皇グループのCEOが、御一人でこんな場所に来られるとは、些か不用心すぎるのでは……」

「心配なく」

彼は顔を上に向けると、パチンツと指を鳴らした。

「僕には地上最強のボディガードがいますから」

彼の背後にある平屋のトタン屋根から——紫色の影が飛翔。  
タンツ、と——やちよの真後ろに着地した。

「!!」

咄嗟に振り向くやちよ。

そこに立っていたのは、思わず絶句するくらいの美少女だった。

色白の肌に端正な顔立ち。美少女を「まるで人形のように」と例えることがあるが、この少女が目に入った瞬間、本当に人形かと思ってしまった。

濃い紫色のコート、顎の高さで切り揃えた髪に付いた花を模した飾り、変わったデザインの手袋とブーツを付けている。

「まったく……御一人でブラブラと動かれては困ります」

言葉だけ聞けば、少女は怒っているようだが、感情の起伏に乏しいのか、表情は人形のままで。

声色もノートーン。

「ああ、ごめんなさい。ミニコさん」



皇 凌斗は少女に頭を下げ、謝るも、口元は笑っており、全く悪気が無さそう。

「貴女は……！」

目を丸くしたままのやちよが問いかけると、ミコと呼ばれた美少女はペコリと頭を下げた。

「お初にお目にかかります。皇 稜斗会長の専属秘書を勤めさせて頂いております、

神奈 かんな 巫子 みこと申します」

その名を耳にしたやちよの瞳が大きく見開かれた。

「神奈巫子」——それは日本一のボディガードとして名高い双子・「神奈姉妹」の片割れ。

その実力は折り紙付きであり、彼女達を秘書にして以来、皇 稜斗は——引いては皇グループ本社全体が、一件もの犯罪被害や傷害事件を被っていない。

また、前述した通り、外見の見目麗しさから、皇グループのイメージガールとして抜擢されており、モデル業界でもそれなりに名の知れた人物であった。

「初めまして神奈さん。神浜市役所の治安維持部長、七海やちよです」

やちよが朗らかに笑って手を差し伸べる。

巫子は、相変わらず無表情のままだが、手をギュッと握り返した。

「よろしくお願い致します。あと、巫子のごことは「ミコ」と呼びください」

ミコはそういうと、主人に向き直った。

「会長、会談の準備は整いました」

皇 凌斗はミコに「ありがとう」と会釈すると、やちよに振り向く。

「では、一緒にミコさんの後ろをついてきてください。七海やちよさん」

「どちらへ？」

「穴場」、ですよ」

そう言う皇 凌斗の表情はどこまでも無邪気で、嬉し気だ。

まるで、この地の異様な空気を楽しんでいるかのように。

皇 凌斗。

そして、神奈 巫子。

彼らは果たして、神浜市にとっての救いの天使となるか。はたまた、悪魔と化すか。この時のやちよには、まだ判別できなかつた——。



FILE #50 MM ではなく LICHT の為  
に

—— 現在 神浜市役所

「再開発計画に横槍を入れるつもりはない。でも、そこにいる人たちが築き上げた文化をサンシャイングループに奪わせる訳にはいかない……。作戦を伝えると、皇会長は乗り気になってくれてね」

「え……？ だけど、参京区は今も……」

「ええ、まだ皇グループは手を貸してない。私が会長から出された課題を、クリアしてないから……」

課題……？

いろはは気になったが、問いかける隙も無く、やちよは足早にズンズンと進んでいく。

実は、彼女はいろはに話をしながら、ある場所へと導いていた。

案内されたのは、みたまのいるBAR『ミロワール』のバーカウンターの裏にある鉄格子の扉の向こう側——『通称・開かずの間』。

やちよがみたまから鍵を受け取って、内部に入ると、その先に見えた物に、いろはは仰天した。

「すごい……」

地元の学校の体育館ぐらいいはあろうか。四方が白タイルに覆われた、広大な空間に二人は飛び出した。

だが、いろはの目を奪ったのは、中心にある何かだ。

天井まで届く極太な縦長のそれは、一見すると、歳何千年にも及ぶ大樹のようで、広大な空間を支える大黒柱のように君臨している。

だが、近づいてよく見ると、電気コードの類が幾重にも複雑に絡み合い、巨大なモニターが取り付けられた「機械」であると分かった。まるでSF映画でしか見たことが無い、大掛かりなシステムの基幹となるコンピュータのような物体を、いろはは只々感嘆を漏らしつつ見上げていた。

「これは……一体何ですか……?」

魔法少女である自分が思うのもなんだが、本当に神浜市はおかしい。常識が吹き飛び

そうになったのはこれで何度目か。

隣を見ると、やちよが強い決意を込めた瞳で、機械を見上げている。

「皇グループが開発した、魔法少女を安全に育成するためのシミュレーションシステム。

【Maleus Maleficarum Machina】……略して“MMM

”（エムスリー）よ」

「まれうす・まれふいー……？」

「マツレウス・マレファイカールム・マキナ——『魔女に鉄槌を下す機械』を意味するの。開発に参加したアメリカの技術者チームが名付けたそうだけど……皇会長が物騒なのは嫌だからって、日本ではこう呼んでるわ」

——【LICHT】

「リヒト……？」

「ドイツ語で、光や輝きを意味するのよ」

希望の輝きから生まれた魔法少女を“運命”から助ける為のシステム——皇稜斗の想いが、この機械に込められているという。

「これは、現在50パターンもの魔女との戦闘を限りなくリアルに近い環境で練習する

ことができるの」

世界各国の名だたる魔法少女達の意見を参考に、結界の模様や質感、使い魔、魔女を完全再現したのだという。

「……」

いろはは啞然。開いた口が塞がらなくなる、とは正にこの事か。

あんな複雑怪奇極まる魔女の結界を完全に再現するなんて、馬鹿げている。

だけど、皇 稜斗は——厳密には彼を含んだ開発者達は——実際に創ってしまったのだ。

魔女の戦闘シミュレーションシステムを。只の一般人の身で。

「イカレてる……」

いろはが思わず、そんな言葉を口にしてしまうのも無理は無い。

皇 稜斗は凄い人だと、素直に思う。だけど、規格外だ。考えてる事が常識の外過ぎで、住んでる次元が違う。

「ええ、イカレてるわ。だけど、彼らが無茶に本気で挑んだからこそ、私達は前に進める」  
機械を再び見上げるやちよの瞳は、どこまでも澄んだ空色が映っていた。

「そうですね。これが世界中に普及されれば……」

基本的に魔女結界内は、何が起きるか、どんな敵が出現するかもわからない。正に一

発勝負の状況だ。

だが、このリヒトで練習を重ねれば——魔法少女は、あらゆる事態を想定して動ける。

つまり、死ぬ確立を一気に減らせるのだ。

「だけど……これはまだ、未完成なのよ」

えっ、と再びやちよに顔を向けるいろは。

彼女の瞳の空が、そこで曇っていた。

前述したように、七海やちよを始め、世界中の名だたる魔法少女達が開発に協力している。彼女たちも実際に、MM（リヒト）で魔女戦闘をシミュレートしたが、皆がこぞって同じ言葉を口にしたのだ。

「これには決定的な『欠陥』がある。だけど……それが何なのか、分からない」

「もしかして、課題って……」

「皇会長から要求されたのはこれの欠陥を探し当てる事」

期限は二年。

その間に「足りないもの」をやちよが掴むことができれば、参京区民の救済策に手を



貸す——と、稜斗は言った。

「二年つて……今年じゃ」

「だから焦ってるのよ……！ 幾度もシミュレートして、開発に参加している魔法少女達とも話し合い、皇会長に提案してより完成へと近づけた筈……だけど」

細かい部分はやちよ達の努力によって修正されていった。

しかし、大きな欠陥は、とうとう発見できなかったのだ。

「あと、一週間。それまでに判明できなければ、全てが水の泡となってしまう……」

やちよは機械に近づくと、コントロールパネルに向かって両手を勢い良く付いて、吐き捨てた。

いろはは呆然と眺めるしかない。

彼女が氷の仮面の裏に、そこまでの重みを背負っていたなんて、思いもしなかった。

もし、鶴乃がこの事実を知っていたなら、もう少し状況は違っていたかもしれない。

「試験に参加されている魔法少女は……会長ご本人が世界中から信頼できる者のみを集めている。皆が7年をくだらない、大ベテランよ……なのにつ」

嘆くようにやちよはそう言うと、いろはが不意に口を開いた。

「だったら……」

——逆に経験が無い子だったら、見えてくるものが違ってくるのかも。

「っ!!」

やちよの頭に雷が落ちた!! 衝撃に、ハッと大きく目を見開く。

「いろは、それよっ!」

言う前には、既に体が飛び出していた。

いろはの腕をグイッと掴んで、コントロールパネルの前にある椅子に座らせる。

「あ、あの……何がっ!」

訳もわからず、困惑するいろは。だが、やちよは青空のように晴れた瞳をジッと向けて、笑った。

「貴女が、これの試験をするのよ」

「ええっ!」

いろはが悲鳴を挙げる。

今のはたまたま思いつきで言ってしまった、だけな訳で……やちよクラスが集結して判明しないものを、自分如きが分かるはず無い。

だが、やちよはいろはの不満など、どこ吹く風のように、期待に満ちた目でコントロールパネルの脇のマイクに向かって指示を出した。

「とういわけですが……ミコさん、どうでしょうか？」

応答するように機械上部にある大型スピーカーから、女性の声が響いた。

『斬新ですね。試してみる価値はあると思います。良いでしょう』

「今の声は……？」

「いろは、このヘッドギアを被りなさい」

最早やちよに自分の声は届かない。

どうしよう。いつの間にか責任重大な案件を背負ってしまった……。だがもう、どうにも出来無いので、ひとまず、やちよの指示通りに動く。

言われた通りにヘッドギアを被ると、目先のコントロールパネルをタッチして、新規登録画面に映る。

生年月日、年齢、氏名、住所、身長、体重、出身地、出身校、魔法少女の願い、経過年数、今まで組んだ仲間の特徴、固有魔法……等など自分のプロフィールを詳細に記入した。

次いで、指輪をソウルジェムに変化させると、それを受け取ったやちよが、コントロールパネルの上にある窪みにスッポリと嵌め込む。

「準備完了。あとはスタートボタンを押すだけよ」

「……………」

もうこうなったら、やぶれかぶれだ。挑戦するしかない！

いろはは半ばヤケクソ気味に決意を固めると、パネルの右下にある【START】と表示されたコマンドを、人差し指で押した。

——視界が、ゆっくりと、波打つ。

☆

まるで体が浮いた様な錯覚を感じた直後には、いろはは異次元に移動していた。

いや…………というよりは、よく似た映像を見せつけられている、と言った方が正しいか。

——そこは魔女の結界内であった。

「すいご……」

形容詞しがたい複雑な色合いに覆われた風景の中で、原型を留めていない落書きのような異形の怪物達が縦横無尽に飛び回っている。

まさに、完全再現と言わなければならない世界観に、いろははただ感嘆を漏らして魅入ってしまった。

「これも、誰かの経験が元になっているのかな？」

『アメリカ合衆国ミズーリ州セントルイス出身の魔法少女、フィリス・ケラーマンが、2011年9月18日、23時38分に遭遇した魔法の結界を元に作成されたものです』  
不意に背後から声が聞こえてきて、いろはの肩が「ひやつ！」と飛び跳ねる。

振り向くと、見たことも無い少女が悠々と歩み寄ってきていた。衣装からして、魔法少女だろうか？ しかし、さつきスピーカーから聞こえてきた声とよく似てるような……

『初めまして、環 いろはさん。皇グループの神奈巫子と申します』

「えっ!? 貴女が!?!」

まさかの人物の出現に、いろはの目が飛び出そうになる。

『魔法少女育成用魔女戦闘シミュレーションシステム【Malleus Maleficarum Machina】——略称「<sup>エムスリー</sup>MMM」、またの名を【リヒト】——のナビ

ゲーターを務めさせて頂いています。以後お見知り置きを』

「よ、よろしくお願ひしますっ。 神奈さん」

まさかここで世界有数の大企業総帥の専属秘書と対面することになるとは……！  
別の緊張感が猛烈に襲いかかり、いろはは顔が真っ赤に染まりつつも慌ててお辞儀し返した。

『巫子のことは “ミコ” とお呼びください』

「はあ……」

それにしても一体なぜ彼女がここに……？ 本来、自分しかないはずなのに……それにナビゲーターって、どういうこと？

『現実のミコは魔法少女ですが、固有魔法を使って、システムの一部と精神を繋げています。今、貴女の目の前にいるのは、ミコがミコを模して作ったアバターです』

元は人間な癖して機械より機械らしい——というのが、いろはが彼女に抱いた印象だった。

そんなミコは、いろはの疑問を見透かしたように淡々とした口調で解説を始める。

【リヒト】には、『G U A R D I A N』と呼ばれる支援システムが備わっており、利用者の魔法少女の経験年数が3年未満だった場合は、ミコを始めとする強力なアバターを、任意で味方に付けることができるのだ。

——なお、補足としてミコ以外のアバターは全てAIである。

『環 いろはさん。本システムをご利用頂く前に、一つだけ、確認させて頂きます』

「っー」

息を飲んだ。ミコが急に刺す様な視線で自分を見据えてきたからだ。

『【リヒト】は、まだ世界には公表しておりません。システムに触れた以上、貴女には秘匿する義務が発生します。守れると誓って頂けますか？』

「……はいー」

刀刃の様な眼差しは、身震いするほど冷たかったけど、真剣そのもので。

だから、いろはも真剣に応えた。

力強く頷くと、ミコは安心したらしく、表情が幾分か和らいだ。

『ありがとうございます。それではシミュレーションスタートといきましょう。ですが、最後に一つだけ……』

——『警告』します。

ミコは薄っすらと微笑み、お辞儀をして礼を述べると——最後にそう付け加えた。

「……えっ?」

『七海やちよさんは、設定を初心者レベルに変更し忘れた模様です』

いろは、絶句。

確か……今まで、七海やちよしか試験をしていない筈では——いや待つて！ それの意味することつて、つまり……!!

『現在、最高レベルに設定されております。心臓に悪いので、くれぐれもお覚悟されますよう』

言い終えると、ミコは背中を向けてどこかへと立ち去っていく。

………いやいや待つて待つて、今の貴女ガーディアンですよね!! 素人用の支援システムですよね!! 任意で味方になってくれるんでしょ、ねえ!!?

いろはが必死に悲鳴を上げるも虚しく、彼女はあつという間に小さくなっていく。

『環 いろはさん。貴女の現在の能力で最高レベルのクリアは不可能と、ミコは断定致しました。諦めてください』

最後の言葉が全てを物語っていた。

——後にミコ曰く、支援システムを使ったところで、いろはの勝率は僅差しか上がらなかったらしい。

「ひんぐ……」



涙目になり、知らない魔女の結界内で一人、呆然と立ち尽くすいろは。  
「ヒッ」

次の瞬間——!!

どこからともなく出現した使い魔の大群に、いろはの全身が襲われた。

☆

「……はっ!!」

気がつくくと、いろはは、現実の世界に戻っていた。

ヘッドギアを外し、目の前のコントロールパネルを見ると、「LOST」と表示されている。  
いる。

当然だが、シミュレーションは失敗したのだ。

「いろは、ごめんなさい！」

声が聞こえて振り向くと、やちよが深く頭を下げて謝っていた。

「うっかり設定を戻し忘れてしまったの。いきなり最高レベルを体験させるなんて……これじゃあ試験にすらならないわね。設定を直して、もう一度……」

やちよがコントロールパネルを触ろうとするも、いろはが手で抑える。

「いえ、あれで良かったと思います」

そう言つて、ヘッドギアを見つめるいろはの目には、強い決意が瞬いていた。

「えっ?」

「最後に使い魔の群れに襲われた時——見えたんです」

それは多分、やちよレベルの魔法少女達ならとづくに分かっていた事かもしれない。

(だけど……)

一応、自分が試験した意味にはなる筈。

ならば、伝える価値はあるかもしれないと思った。



FILE #51 戦いの幕開け

—— 神浜市役所・地下。ミロワール・〔開かずの間〕内部

『なるほど……それがリヒトの欠陥、でしたか』

巨大な超樹の様に聳え立つリヒトのモニターには、皇グループ会長の稜斗の渋い顔が全面に映っていた。

「ええ、環いろはは、前日故郷に帰った折に、友人宅で魔女に襲われました」  
モニターを見上げて凜と言いつのはやちよであった。

澄み切った海色の瞳には、もう一片の迷いも見受けられない。

—— たまたま、 “最高レベル” で試験することになったいろは。当然ながら使い魔の急襲に成すすべなく、試験は終了。

だが、その時に見えた。

「だからこそ、リアルと比較できたのだと思います。リヒトのシミュレーションでは、必死になれません」

やちよはピースサインを見せた。

原因は二つだ。一つは、リヒトの疑似的な魔女結界内では、一般人が囚われていない。現実において魔法少女は、魔女の口づけで洗脳された人や結界に囚われてしまった人を助ける為に、魔女討伐を行う者が多い。

だが、これでは——

「魔女と戦う為の動機・倒す目標がありません。だから、私達は本気で試験に取り組みませんでした」

『もう一つは……』

「環いろはは、その件で、使い魔に殺されかけました」

死にかけたらいろはの恐怖は筆舌に尽くしがたい——故に以下の様に端的な表現しかできないことをご容赦願いたい。

蟲の形の使い魔が降り注いだ岩の様に体中を押しさえつける。多脚が体中の皮膚と皮膚をゾワゾワと刺激して、不快感を払おうにも体が重たくて指一本ピクリとも動かせない。呼吸が封じられて思考もままならない。

視界は真つ暗闇。その内、体が指先から冷たくなつて、ボーつと……これまでの記憶が走馬灯のように視界を横切つた後、自分は死ぬんだ、という確信だけが急激に噴き上がつて……。

理性が弾け飛んだ。

我慢していた悲しみと怒りが一気に炸裂して、生への渴望のみを闇雲に嘆き喚いた。話を聞き終えた稜斗は、酷く鎮痛そうな顔付きで、ふうーつと溜息。

『そんなことが……』

いろはには悪いが、とでもリアルで、参考になる体験談だと思つてしまった。

リヒトの開発に協力参加してくれる魔法少女は皆ベテランだ。当然、死にかけた経験も多いが、殆どは『遠い過去の話』である。強い恐怖とは、割と早い時間で薄れてしまふものだ。彼女達の体験談は参考にはなつたものの、どれもざっくりとしていて、稜斗の印象に残らなかつた。

結果的にその曖昧な感覚が、模造した使い魔と魔法の質感に表れてしまった。

「リヒトのシミュレーションは、私達の意見だけを参考に、魔法少女にストレスを与えないように配慮されています。魔法の攻撃を受けても痛みを感じないこと。死へと直結する状況に直面した時、強制終了する仕組みも、その一環です。しかし……」

やちよは目線を下に向けて言い淀んだ。

気持ちを汲み取った稜斗が代弁するように口を開く。

『言いたいことは分かりますよ七海部長。でも、それは開発者である僕が断言しなきゃいけないことだ。【結果的に仇になってしまった】、とね』

——— 使い魔と魔法による恐怖が体感できないと、魔法少女は本気になれないんじゃない？

環 いろはは試験の直後、やちよにこう呟いたという。

「盲点でした。いろはじゃ無かったら、多分、発見できませんでした」

稜斗は深く頷いた。

『僕ですよ。七海部長をはじめとする世界各国のベテラン方は、魔法と戦うことが最早ライフワークの一つとなっていました。戦うことに慣れ過ぎてしまって、死への恐怖が薄れていたんですね』

「ええ、凡百の魔法相手では、苦戦することはまずありません。最高レベルのシミュレー

シヨンでも、私達にとつては、軽いジョギングと変わりませんでした」

稜斗はそこで笑ったが、眉間には深い皺が寄っていた。

なんということだろう。これでは、スポーツ用品店のウォーキングマシンと何ら変わりない。

リアルさを追求しまくったというのに、ユーザーが真剣になれば、市場に出しても結果は見えている。

すぐに飽きられて、終わり。一週間で、放置。

『魔法の口づけ、及び結界に囚われた一般人の再現……そして、使い魔・魔法の質感をよりリアルに表現すること……か』

皇 稜斗が課題を口にする。

前者は、魔法少女を真剣にさせる意識作りに。

後者は、より実践に近い恐怖心を引き出す為に。

「それと会長、先ほど、いろはから提案がありました」

☆



——夜。みかづき荘

『ええええええええええつ?!?!? そんなスゴイものを参<sup>ウ</sup>京商店街<sup>チ</sup>で一般公開したいってええええええツツ?!?!?』

「ぎゃつ!! ……シートツ。声がかいよ鶴乃ちゃん……い」

夕飯を食べ終えた後、自室でいろはは鶴乃と連絡していた。

用件を伝えると、彼女のビックリ仰天の悲鳴が部屋中に響いて、いろははもたじろぐ。『ちよつと……何がどうなってるのか分からないんだけど環師匠。いきなり用事があるっていうから何だろうって思ってたら、皇グループが開発した魔法少女育成用魔女戦闘シミュレーションシステムを一般公開したいから人を集めて……って、一体何?!?!? 皆頭おかしくなったつ?!? っていうか元から狂ってるの?!?』

「おお、落ち着いて鶴乃ちゃん……い」

『落ち着いていられないよ!! 皇グループって言ったら世界でも一、二を争うIT市場を持つ最強企業じゃん!?! しかも、会長が直々に開発したシステムをウチの商店街で扱うとか……驚くどころの話じゃないよ!! もうこれは殺人以上の大事件だよ!! 大変

どころか変態だよっ!？」

困った。鶴乃は様子は只事ではない。

自分だって、何が起こってるのか分からない。何せ神浜市に踏み込んでから規格外のことばかり起きているのだから、最早何が正常なのかも判別付かない。

「ええと、大変かヘンタイかは別として……いやたぶん皆頭おかしいし元から狂ってるのは激しく同意するけど」

いろは、そこで言葉を止めて深呼吸。

鶴乃に引つ張られて動揺してはいけない。ここは、自分が冷静にならないと。

「落ち着いて考えてよ鶴乃ちゃん。これはチャンスだと思わないかな？」

世界有数の一流企業の企画に携われるなら、これとない町興しのきっかけになる筈。

『……師匠が言うんだったらそう思うしか無いけどさ。……でも、怪しいよ』

鶴乃が大企業に不信感を抱くのも無理からぬ話だ。

彼女の地元の再開発の説明会でも、サンシャイングループは餌をチラつかせてきた。彼らの狙いは、商店街全域の商業支配であり、鶴乃達を丸め込む策略だったからだ。

皇グループにしても、狙いが分からない以上、おいそれと信用する訳にはいかない。

『例えそれが、他ならぬ師匠の頼みだったとしてもね……』

「だけど、会長の稜斗さんは、私も会ったことは無いけど、スゴイ人だと思ったの。商品

開発は現場に直接来て、普通に暮らす人達一人ひとりと向き合つて作つてる。シミュレーションシステムにしたつて世界中の魔法少女達と、ちゃんと話し合つて完成へと近づけてる……。誰とも向き合わずに、自分達だけが正しいと思う救済策を提供するだけのサンシャイングループとは違う……。私は、信用しても良いかなつてっ」

『ごめん』

段々と言葉に熱を帯びるいろはに突き刺さつたのは、冷徹な三文字。

「……鶴乃ちゃんは、本当にそのままでもいいの……？」

自分が言うのは烏滸がましいかもしれない。

だけど、鶴乃には家族だつてまだいる。生きる為の目的だつてある。自分とは違う。

だから、いつまでも暗闇の底で燻つて欲しくなかつた。

『今は、ちよつと……』

「そつか、ごめんね。無理いつちやつて……」

『いいんだよ。じゃ、また……』『おう、環か』つてちよつとおんじいっつ!!?」  
「っ?!?!」

電話先の声が突然しやがれた老人の声に変わつていろははビックリ仰天。

「お、おんじさんっ……?!?」

目を丸くしているいろはは相手を問いただす。木次郎は「そうだ」と答えると、

『ここででけえことをやるつもりか』

「はい、まあ……了解していただければなら、ですけど……」

『分かった』

木次郎がきっぱり言う、通話口の奥で鶴乃の『えええええっ?!?!』という悲鳴が聞こえる……。

『俺がそのバカを説得して人を集めさせといてやる。その代わり……証拠を見せろ』

「証拠」……」

『そいつが本当に皇グループの企画なのかって証拠だ。それを先に見せてくれねえ限り俺も信用はできねえ。宜しく頼むぜ』

木次郎はそう言い切ると、通話を切った。

「……………」

“宜しく頼む”——彼の最後の言葉が、じん、と胸に染み込んだ。

木次郎は信頼してくれている。会って間も無い自分のことを——！

だったら、自分も期待に応えなければならない。彼も思いは同じの筈。だから二人で、鶴乃を助けるのだ！

いろはは決意を新たにすると、未だ市役所で働くやちよに連絡を入れた。

—— 参京区。 由比家・中華飯店『万々歳』

「余計なことすんなって面だな」

通話を切り、後ろを振り向くと、唇を尖らして睨みつける孫娘兄のが居た。

「おんじは、繰り返したいの……」

—— サンシャイングループの二の舞を。

鶴乃は暗にそう込めて問いかけると、木次郎は短く嘆息。

禿げ上がった頭頂部を掻きながらぶつきらぼうに答える。

「そうなりたくねえから、証拠を見せろつつつたんだ。あとな……環が大企業の言いなりに落ちぶれるようなタマじゃねえのは、お前が一番よく分かってんだろ？」

「……………」

そうだ。

いろはは自分を受け入れてくれた。どうしようもない、掃き溜めの鶴だった自分を。いろはの方がよっぽど苦しいのに、我慢して自分の悲しみを暖かく包んでくれた。

誰よりも優しく、強い女の子。

でも、だけど——それとこれとは話が別。

鶴乃は部屋の角に身を寄せ付けると、膝を抱えて座り込んだ。

「おんじ、だけど……」

「どうせいつ沈むか分からねえ泥舟の上の人生だ。今勝負しなくて、いつおっ始める？

……明日か？ だが、そんな都合の良い明日は絶対に来ねえ」

「……………」

鶴乃は黙り込む。

木次郎の言葉は正論だ。返す言葉も無い。それに、いろはの言葉だつて嘘じゃ無いと信じている。

だけど、大企業によって、自分の環境がまた大きく変わってしまったら……怖い。

そう思うと、膝を抱える力が、自然にギョツと強まった。

「まあ、お前の人生だ。俺にとやかく言う権利はねえ。好きにするんだな」

木次郎は先程ぶんどつたスマホを鶴乃に投げ渡すと、彼女を一瞥することなく、部屋から出ていく

「でもな」

直前——口端に微かな弧を描いて、彼は呟いた。

「？」

「お前が、環のやべえ所まで受け入れるって言った時、俺あ、嬉しかった」  
「っ！」

鶴乃の瞳が、大きく見開かれた。

「こんなに良い子に育ってくれたんだ。兄貴もあの世で鼻が高いだろうなって。……まあ結局……口からでまかせだったみてえだが」

「……っ！」

まるで燃え上がった炎の様に——彼女の瞳に映る真紅が、大きく揺らいだ。

「所詮てめえも、サンシャイングループと同じ穴の貉か」

木次郎はポツリと一言、そう呟くと自室へ戻っていく。

最後まで、鶴乃に振り向くことは無かった。

いろはに電話を掛けたのは、その直後だった。

「いろはちゃんっ!!」

『ぎゃっ!!』

電話先がいろはがビックリ仰天して、すっ転ぶ姿が頭に浮かんだが、もう気にしては  
いられない。

「あのね、どうしても伝えたいことがあるの」

『なに?』

鶴乃はここで、スマホを耳から離すと、大きく深呼吸。

一拍後に、気合を込めた形相でスマホに向かって、言い放った!

「私は、サンシャイングループとは違うから」

『……っ!』

分かる。

電話の向こうのいろはは、驚いている。

「いろはちゃんのこと、全力で向き合うから」

多分、おんじに無理やり言わされると考えちゃうのかな?

でも、安心して。いろはちゃん。

これはわたしの本心。弱いわたしが強い貴女に追いつく為の、第一歩。



だから、こう伝えるね。

「だから、いろはちゃんがやろうとしていること、手伝わせて！」

『……その言葉を、待ってたよ。鶴乃ちゃん』

繋がった。

嬉しさが口元に自然と溢れた。今度はすれ違わなかった。

自分は誰かの思いを受け止められた。彼女は自分の「熱」を受け止めてくれた。だから、はつきりと確信できる。

——わたしは、もう大丈夫。

「でもさ、『証拠』ってほんとに有るの？」

『うん。一週間後に見せたいと思う。それまでに、鶴乃ちゃんのところまで人が集まるところを教えて欲しいの』

「わかった。じゃあ——……」

夜も更けた頃。

二人だけの計画が、密かに進められていた。

☆

——一週間後。

——参京区・参京商店街組合事務所

既に鶴乃によって、商店街の重鎮たる老人達が集められていた。

メンバーの中には、斎藤親子は勿論、鶴乃の父・隼太郎に木次郎の姿がある。

全員が一階にある多数のテーブル席を囲んで座っていた。

「で、鶴ちゃん。本当にほんとなのか？」

既に皆、カウンターにいる鶴乃から話を聞いた。

難しい顔を一樣に浮かべた経営者達の心情を代表するように、司が口を開いて意見する。  
「皇グループの会長直々に制作したマッシュユ・マッドハッター……あれ？」

「マツカートニー・マルウエア・マシアカサウルスじやろ？」

「親父、マルウエアの時点で多分違うぞ……」

「マッドネス・マレーシア・マフィアだろ」

「……マジか。やつぱり皇グループってやべえ奴らなんだな、隼」

「ッリヒト」だっ!!」

間抜けな会話を繰り返される三人の隣で、木次郎の怒声が飛んだ。

彼らは「おおっ！それだ！」と輝いた瞳で木次郎を見つめる。木次郎は目を反らして深い溜息。

司はその後、改めて鶴乃に真剣な顔を向けて問い詰めた。

「ゴホン。まあ、その……リヒトつてのをここで一般公開するつて話だが……サンシャイングループの前例もある。信用できるのか？」

「うん。わたしの尊敬する人が、その方々の功績を話してくれた。わたしは信用しているって思ったけど……みんなは無理だよ。だから、見せたいものがあるの」

鶴乃がそこでカウンター裏の階段の方へ駆け寄り、「来て！いろはちゃん！」と呼ぶと、桃色の髪の溫和そうな少女が下りてくる。鶴乃の隣に並び立つと、

「はじめまして。参京商店街の皆さん。環いろはと言います」

柔らかな笑みを浮かべてお辞儀した。

「君が、鶴乃ちゃんの尊敬する人、か？」

「師匠だよ!! ねえ？」

正が相変わらず懽然とした態度で尋ねると鶴乃は即答。振られたいろははふにやりと苦笑い。

「それはちよつと……恐れ多いかな」

両手を降つて否定。鶴乃は口を尖らせて「ええー!?」と不満を漏らす。

「じゃあ、一番の友達、か？」

そこで木次郎が得意気な顔でそう聞いてきた。

——それだ。

二人の目が大きく見開いた。

——私と彼女の関係を表すのは、〃それ〃がピツタリだ。

鶴乃というははお互いに顔を合わせて笑みを浮かべると、深く頷いた。

「それでいろはちゃん。証拠つてのは本当にあるのかい？」

今度は隼太郎が問いかけると、いろはは穏やかな笑みを向けながら、言った。

「もうとつくに、そちらに來てますよ」

全員が「えっ!？」と息を飲んだ。

直後、テーブル席に座る老人達の中の一人——目立たない格好の為、誰も気にしなかった——が、すつと立ち上がり、いろはと鶴乃のいるカウンターの中へと入ってくる。

「誰だ、あいつ?」

「さあ?」

司が隼太郎に尋ねるも、彼は首を振って否定する。

周りを見ると、他の老人達も、*「彼」*を不思議そうに見つめていた。

生まれた頃から商店街で育ってきた二人ですら知らない顔なのだ。老人達も知らないとなれば尚更。

多分、*「彼」*は住民では無い。

「あ、あの人は!？」

——が、一人だけ知ってる者が居た。

商店街北側に住む呉服店店主・関 幸四郎だ!

「お、俺がこの前コンテストに出品しようとして断念した反物を、一番優れてるって言うて……買ってくれた人だ!」

「っ!!」

司と隼太郎はギョツと目を見開き、前に立った*「彼」*に注目する。

鶴乃といろはの間に割りこむと、まず、深めに被ったハンチング帽を外した。

天井の明かりすらも反射するほどの禿げ上がった頭部に皆が注目。

しかし、彼はそこをグツと驚掴みにすると——禿頭が外れた。

代わりに皆の目に写り込んだのは、西洋人さながらの綺羅びやかな黄金の頭髮。

「彼は続いて真つ白な付け髭を外し、顔の端の皮膚を掴むと、ペリペリと皮を剥がしていく。」

全員一瞬ギョツとしたが——すぐにあれは『マスク』だと分かった。

老人の顔に変装するマスクを、彼は付けていた。

「あんたは……!!?!」

凡百の老人に変身せざるを得ない理由があつたのだと、すぐに皆、理解した。

特に司は、老人の本当の顔を見た時、シヨックの余り体が震えた。

豊かな金髪を生やした西洋紳士風に変身した彼は、力強い笑みを浮かべて、挨拶。

「初めまして。参京商店街組合の皆さん。皇グループ会長・皇 稜斗です」

——全員が、息を飲んだ。

「皇グループ・会長……っ?!」

「本物なのか、司?」

「マジだつて親父! これを見ろ!!」

興奮した司がスマホで皇グループの公式HPにある社長紹介ページにアクセスすると、皇 稜斗の一面写真が映っていた。

司はテーブルを駆け回り、全員に見せつける。

「どっひゃく、まさか本物が来ちまうとは!?!」

「この人が『帝皇』!? ま、まさか!?!」

「そ、そんなにスゴイ人なのか!?!」

「当たり前じゃ! 世界でも屈指の資産家じゃぞ!?!」

「はくありがたやありがたや。なんまんだぶなんまんだぶ」

老人達の難しい顔が、一気に驚愕と歓喜と畏怖の入り混じったものに変貌。

緊張で張り詰めていた空気に、猛烈な熱が渦巻き、これまでに無い活気を齎した。

そんな状況を一言で生み出した張本人は、してやったりと得意気な表情で彼らを眺めていた。

「……関さんのところを始め、いろいろな店に足を運ばせて頂きましたが、良い商店街です。ここで生まれ育って見たかった」

「でしよ?」

鶴乃が笑う。

「では、環さん。作戦開始といきましょうか」

「はいー」

いろはが笑う。

稜斗が全員に真剣な眼差しを向ける。

「皆様。聞いてください」

稜斗が笑って、皆にはつきりと伝えた。

—— 我が社はここを新たな支社とします。

「ここで、リヒトを一般公開させて頂きます」

彼の言葉を、その場にいる全員が、静かに聞いていた。

—— さあ、宴の準備だ。

自分達が、地上人を暖かく照らす太陽の化身と自惚れる連中に、思い知らせてやれ。



神浜の歴史上にも無い、盛大で特大な花火の美しさを。

上しか見上げられない奴らの網膜に、鼓膜に、脳みそに、くつきりと刻み込め!!

—— 戦いは始まった。もう誰にも、この勢いは止められない。



FILE #52 鶴は飛び立つ 七海の向こうへ  
—七海やちよ 追憶編 終了—

## 目次

アバン

Aパート

Bパート

Cパート

エピローグ

※話の途中にある “ ☆ ” をクリックすると目次へ戻ります。

——一ヶ月後。

——神浜町参京区。

——参京商店街

「うわゝスゴイ人集り〜！」

みかづき荘から一人で訪れた私服姿のいろはは、商店街に足を踏み入れた途端に見えた光景に感嘆した。

少し前からは想像もできないような人・人・人……老若男女の黒い海が、ワイワイガヤガヤと賑やかな喧騒を響かせながら街道を埋め尽くしている。

街道の両サイドには露天商が横並び、商店街の経営者達が自分の店で製作した商品や料理を振る舞っている。

「よう！　いろは」

「葉ちゃん！」

と——背中からハスキーボイスを掛けられて、振り向いた。

そこにいたのは、故郷の親友——私服姿の皆木葉菜だ。

今回、彼女は地元の魔女退治を累に押し付けて神浜市まで遊びにやってきた。理由は勿論、此処、参京商店街で開かれている『祭典』に参加するためであるが……

「つひゃくく！　すつごい人だな」

【リヒト】の体験会場は商店街の中心部にある商店街組合事務所——既に皇グループの支社となっている——だが、この人混みを突っ切って進むのは容易では無い。

「うん。何せ、世界初の魔女戦闘シミュレーションシステムが開発されたワケだしね……」

「市内どころか世界中から……」

いろはと葉菜は顔を見合わせて苦笑。

そういうえば、早朝のニュースでは、昨日の夕方から体験会場に行列が出来てたつて言ってたような。

人混みをよく見ると、外国人らしき相貌の人たちもちらほら見受けられる。

——皇グループ会長・皇 稜斗が、「リヒト」を参京商店街組合事務所で一般公開すると発表するや否や、商店街は一躍、世界中から注目の的となった。

祭りが開かれる一ヶ月の間、連日、大手の報道機関が押し寄せ、住民達の生活があらゆるメディアで紹介されることになった。

特に、神浜市に映画の撮影で訪れていた若手人気俳優・松田優次郎が——緊急で組まれた旅番組のゲスト扱いで——訪れてくれたのは正に天からの恵み。

各店舗で製作された伝統工芸品や、料理を高く評価してくれたことで、商店街は一気に活気付いた。

以来、今日まで外部からの来客は一切途絶えた事は無い。

「いろはちや〜ん!!」

——と、そこで新たな呼び声に二人は振り向く。

見ると、割烹着姿の活気溢れる少女が、走り寄っていた。

「鶴乃ちゃん!」

「よつと」

いろはが名前を呼ぶと、鶴乃は踵でキキーツとブレーキ! いろはの目前で停止する

と、真剣な眼差しでピシッと敬礼!!

「お待ちしてりました！ 環師匠！ 由比鶴乃、只今参上致しました！」

「ちよつと恥ずかしいよ、鶴乃ちゃん……っ！ でも、どうして私の場所が分かつたの？」

パアツと笑顔の花が咲いた。

「えっへっへー！ 師匠が此処で誰かを待つてゐるって聞いたんで堪らず飛び出してきちゃったっ！」

一体誰が、鶴乃に伝えたのか？ 何れにせよ商店街の情報網流石と思わざるを得ない。

「お店は平気なの？」

「開店から超絶忙しいけどお父さんとおんじがいるからねえー！」

ちなみに現在、万々歳の玄関には、「由比鶴乃・10分待ち」の紙が貼られており、来客一同からブーイングが飛び交っていたの言うまでもない……。

—— 今回の騒動で、商店街内で一番特をした店は万々歳かもしれない。

元々、鶴乃のアイドル的人気で経営が保たれていただけに、メディアに紹介されるや否や、彼女目当てに来る客が急増。

お陰様でここ2週間の売上は鰻登りだ。店主の隼太郎曰く、祖父が存命だったころ以上の盛況ぶりらしい。

……相変わらず料理の評価は「50点」より上がることは無かったが……結果よければ全て良しである。

「師匠……!? って、いろは。お前このお姉さんとはどういう関係……?」

すっかり状況に置いてけぼりになった葉菜が問い質そうとするが、鶴乃は隙を与えない。

「おっ！ そつちのイケメンは……もしかしていろはちゃんの彼氏かな?」

隅に置けないなく、と鶴乃はいろはを肘でツンツン突くも、苦笑いを返されて「およっ?」となる。

「いやーそうじゃなくって……」

「お姉さん。アタシは女。こいつとは只の友達だよ」

葉菜がそう伝えるや否や、鶴乃の目が光り輝く！ 即座に葉菜の目の前にびよんと飛び跳ねると、両手をギュツと握り締める。

「なんとっ！ 環師匠のご友人でありましたか!! 私は弟子の由比鶴乃、どうかよろしくお願いします!」

視界全面に映る鶴乃の満面の笑み。

……なんてハイテンション&距離が近い人だろう。葉菜は苦笑いを浮かべながらも自己紹介。



「あー……ア、アタシは皆木葉菜……。へえー、お姉さんが由比鶴乃なんだー」  
「あれっ、知ってたの？」

「ニュースでね。でも、テレビで観るより全然別嬪さんだから、気づかなかった」  
「こういう風に、人の懐に入り込んで素直に褒め称えられるところが葉菜の強みである。」

鶴乃は、「えへへー。そうかなー？　ありがとうー！」と顔を真赤にしてデレデレである。

「良い友だちだね！　師匠！」

「まあねっ」

心から嬉しそうな鶴乃を見ると、いろはも嬉しかった。自然と笑顔になる。

「じゃあ、君、葉菜ちゃんっていったよね？」

「葉（よう）でいいよ。みんなそう呼ぶんだ」

「じゃあ葉ちゃん！　君も特別に、リヒトの会場まで案内してあげる！」

「え、いいの？　お姉さん？」

「いいっていいって！　元々師匠は祭りの仕掛け人つてことで特別扱いだし……その親友なら同然だよ！」

人混みをどう突っ切るか考えていた矢先に、正に天の助け。

葉菜の顔がパアツと輝くと、鶴乃の両手を握りしめて大きく振り回した！

「お姉さんありがとーっ!! あ、アタシ最近中華料理に凝ってるんだけど、小籠包の作り方とか教えてくれる？」

「いいよいいよー。お姉さんが万々歳の秘伝を何でも教えちゃうからねー！」

「ふふ……」

早速意気投合する二人の様子を、後ろで眺めながら、いろはは微笑ましく思うのだった。

—— 参京商店街組合事務所

鶴乃はそこまで二人を案内すると、「じゃあ、またね」と言って別れた。

リヒトの公開会場となっているそこは、案の定、終わりが見えないぐらいの長蛇の列が形成されている。

並ぶしかない――

「やあ、環さん」

「リヒトの会場へようこそ」

――と思っていた矢先に天の助け。

見覚えのある二人組が現れて、いろはが駆け寄る。

「皇さん！ ミコさん！」

「待つてましたよ環さん。お友達の方も、さあ、こちらへ」

稜斗はそういうと、踵を返し、二人を会場の裏口まで案内する。

「え？ いいんですか？」

「ありがたいけど……なあ？」

こんなに並ぶ人達を無視して、自分達だけ真つ先にシミュレーションに携われるのは申し訳無い。

いろはと葉菜がお互いに顔を合わせて渋い顔を浮かべると、ミコが横から口を挟んできた。

「御気になさらず。あの人は環さんにお礼がしたいのです」

ボソリとそう伝えてくれるが、いろはは釈然としない。

「え……でも、私、そんなに大したことはしてないですよ」

「真面目と謙虚さは日本人として美德ですが、人生を豊かにしたいのなら、人の好意に甘える図々しさも必要ですよ」

前を歩く稜斗が後ろを軽く振り向きウインク。

そんなやりとりをしている内に、裏口まで辿り着いた。

稜斗が「どうぞ」と案内したので、いろはは「失礼します」と入ろうとする

「なあ、いろは……」

——直前、真後ろの葉菜から声を掛けられた。

「どうしたの？」

振り向くと、葉菜は稜斗とミコを横目でチラチラ見回していた。なんだかソワソワして、落ち着きが無い。

葉菜はいろはの耳元に口を近づけると、ボソツと問いかける。

（このお兄さん……どっかで見たことあるんだけど、誰だっけ？）

「ああ、あの人は……」

皇グループ会長の皇 稜斗さんだよ——

何気なしに答えると、葉菜が悲鳴と同時に腰を抜かしそうになったのは言うまでも無

い  
—  
。

☆

いろはの記憶では、裏口から入ると厨房だった何も無い空間がある筈だが、既に稜斗専用の事務所に改造されており、デスクの上には、最新型のPCやら、商店街に関する資料やら、リヒトの設計書資料らしき分厚い本が並べられていた。

その稜斗だが、この一か月間、本社には戻っていないという。

会長がここに居座って、グループは大丈夫なのか、と聞くと、「今はスマホ一台あれば、どこでも仕事は可能ですよ」と軽く返された。しかも社内の業務把握は全部AIが担当してくれているので問題は無いらしい。

流石はITの寵児——自分達とは次元が違う。いろは達はただ驚嘆せざるを得ない。

ちなみに寝泊まりはこの二階を使っているらしい。

次いでフロアを一瞥すると、これまた異様な光景が広がっていた。

テーブルに座る来客の前には一台ずつPCが置かれており、それからコードで繋がれたゴーグル付ヘッドホンを頭に被っている。

見覚えのあるいろはは「アツ」と声が出そうになった。あれは、リヒトを体験するときに自分が頭に付けたものと同じだ。

———ということとは、あのパソコンはリヒトと繋がっている？

尋ねると稜斗は首を縦に振る。

リヒトのシステムをアプリ化して、各PCにダウンロードしたらしい。これで自宅でもパソコンと専用ゴーグル付ヘッドホンがあればリヒトを体験することが可能になるのだという。

実用はまだまだ先の話らしいが……。

それにしても――

「魔法少女じゃない人も、混じってる……？」

もう一つ、不思議に思ったところがある。

客層を見渡すと、老若男女バラバラなのだ。魔力反応の無い女性の他に、男性も混じっている。

「まるで〇ード〇ート・オ〇ライ〇じゃんか……。あれ？ でも確か、このリヒトって機能向上の為に『誰でも』参加できるって話だよな？」

「どこぞの茅〇晶彦だ——と今にもツツコミたそうな葉菜が、祭の公式HPをスマホで開いて、いろはにそう教える。

「そうだったの？ ……それって魔女に囚われた一般人の人のデータを取る為、かな？」

普段スマホを見ないいろはは、葉菜の言葉に目を丸くした。

そのやりとりにミコが口を挟んでくる。

「それもありませんが……。会長の遊び心が疼いてしまいました……」

どこか呆れ返ったようにジト目で稜斗を睨んだ。

彼は苦笑しながら頭を掻いた後、いろはと葉菜が予想だにしない事を口にした。

「この一か月間、リヒトを改良しましてね……。魔法少女でない、一般の方もアバターを作成すれば『魔法少女として』参戦できるようにしたんですよ」

「ええ?!?!」

つまり、一般人でも『リヒト内なら』魔女と戦えるということだ。

さらっと紡がれた一言に、いろはと葉菜がビックリ仰天したのは言うまでもない。

「実写版〇場晶彦……。マジでソー〇アー〇・オン〇イン……」

「やっぱり皇さんって……。イカレてるっ」

いろはが思わずポロっとそんな言葉を零してしまうのも無理は無い。

何せ魔女に殺され掛けた自分から見れば、普通に暮らす人に同じ思いを絶対にさせたくないからだ。

だが、目の前の奇人は快笑一閃。

「あつはつは！ 最高の誉め言葉として受け取っておきますよ！ 環さんのお気持ちは分かりますけど、ここまでしなければ魔法少女がどれだけ過酷な戦いを強いられているか、理解して頂けないと思いませんか」

「そ、それはそうかもしれないけど……っ」

（あのさ、お姉さん。あそこの兄ちゃんほったらかしにしてたらいつか大変な事が起きるんじゃないかね？）

苦笑するいろはの隣で葉菜がミコに告げ口。

それこそ、茅場○彦がソ○ドア○ト・○ンライ○で開催したデスゲーム並の重大事件が……

「ミコもマジでこいつヤバイと常々思っています、残念ながら止める術を持ち得ておりません。諦めてください」

ミコは溜息を付きながらヒラヒラと手を振って無情な一言。葉菜がガツクシと肩を落とす。



「折角ですから、お二人もぜひ参加なさってください」

稜斗が後ろを振り向く。事務所内に丁度、空いているPCとヘッドホンが一台ずつ置かれていた。

「よっしゃー！ いろは！ やるぞ！！」

「うんっ！！」

二人は意気揚々とシミュレーションに参加したのだった。

——13:00 万々歳

「で、どうだった？ リヒトは？」

「もー凄いのなんのって！ なあ！！」

葉菜は未だ興奮冷めやらぬ様子でいろはに振る。

「うん。ちゃんと改善もされてたし、やっぱり皇さんっておかs……凄くなって！」

リヒトによる疑似シミュレーションを一通り体験し終えた後、いろはと葉菜は、万々歳で昼食を取っていた。

葉菜は小籠包。いろはは五目ラーメンを注文し、それぞれの食事に勤しんでいる。

なお、リヒトについてだが、課題であった魔女や使い魔の質感——あの触れた時の形容し難い気持ち悪い触感が、以前試験した時よりもリアルに再現されていた。改めて、皇グループの技術力は凄い。

「で、どう？ 葉ちゃん、味は？」

「50点」

葉菜がバツサリ切ると、鶴乃は「やっぱりかー」ガックシ肩を落とす。

「でも、鶴ねーさんと話すのが楽しいから、気にならないよ」

「そう？ ありがとう。うちは接客が何よりの自慢なんだ！」

「へえ、そつちは100点満点だから、料理と合わせて150点だね」

合格ラインぶち抜きだね！ と葉菜が賛辞を贈ると、鶴乃は嬉しそうに頭を掻いた。

（やっぱり葉ちゃんは上手いなあ……）

彼女の笑顔をあつさり引き出した親友のコミュニケーション能力が羨ましいと思う。

でも……鶴乃が心から笑えるようになって良かった。

出会った時は——怒りと悲しみと後悔。ドロドロに交じり合った負の感情を、笑顔で強引に蓋をしていたように見えたから。

「……100点満点かあ」

嬉しさを噛み締めるように鶴乃が呟く。

「鶴乃ちゃん？」

「うん。今までのわたしって無我夢中で100点だけを目指してきたからさ、周りを見てる余裕なんてちっとも無かったんだよ……。でも今、本当にやりたいことを見つけてからは、凄く人と向き合えてる気がするの」

鶴乃はそこでいろはに顔を向けると、屈託無く笑った。

「全部いろはちゃんのお陰だよ。ありがとう」

「そんな……」

「いろは！」

大したことはしてない、と謙遜するが、葉菜に背中をバンツと叩かれた。「お前が良い奴だつてみんなが認めてるんだから！ もっと自信持てて」鶴乃はうんうんと頷く。いろはは「そうかなあ？」と照れ笑い。

「……本当に、いろはちゃんって似てるね」

——と、そこで、鶴乃の視線が急に細まった。

どこか遠くを見るような、懐かしさに慈しむような瞳で。

「え？」

「いろはちゃんと別れた後にね、思い出したの。本当に大昔の話なんだけど……」

笑顔に微かな寂しさが混じり込んで、いろはと葉菜が口を閉ざし、彼女を見つめる。静かに語り出した。

それはわたしが、3歳ぐらいだったころかな。

うちの近所に焼き肉屋——もう無いけど——があつてね。そこに住んでた6歳年上のおねえちゃんがすごく良い奴でさ。いつもわたしや理恵ちゃん達と遊んでくれたんだ。

面倒見も良くてさ、お店に行ったら必ず焼肉を御馳走してくれたし……理恵ちゃんが男の子に泣かされた時なんてもう大変。

「そいつをウエルダンにしてやる——っ！」って飛び掛かっていったからね。

そうそう葉ちゃん。物凄く喧嘩も強かったんだよ！ だから、商店街の女の子の間じゃヒーローだったんだ。

……男の子からはもっぱらジャイオンって呼ばれてたけどね……

「ウエルダン……？？」

「どうしたの？ いろは」

「……ううん、何でもない」

気になった葉菜が尋ねてきたが、首を振って否定した。

突然だった。

お姉ちゃんが引つ越すことになっちゃってね。

うん。いろはちゃんなら、分かってくれると思う。

いつも当たり前にあつたものが無くなった時の喪失感って半端無いよね。すつごいショック！ 心の中にポツカリ穴が空いた感じだった。

お姉ちゃんは別れ際に、わたしを抱きしめようとしたんだけど——  
わたしは、お姉ちゃんがもういなくなる現実を受け入れたく無くて。

背中を向けて、逃げちやっただ。

……ああ！ 二人とも、そんな悲しい顔しないで！

悪いのは、私だから。多分、そのころから、歪んだ……。

え？ 葉ちゃん……それは違うって？ 自分もそうしたことあるから、気持ち、わかるって？

……ありがとう。

でも、本当に私は歪んでたんだよ。

お姉ちゃんがいなくなったショック。ちゃんとお別れしなかった自分に、すつごくむ

しやくしやしてたんだらうね。

近所の男の子とたまたま会ってき……そいつがからかってきたんだよ。

「てんめえ由比—— お前の爺ちゃんのせいであちの店は閉まつたんだ！ ベンショーしろよベンショー！」

……その子の家も中華飯店でさ。

お父さんが急病になつて店を閉めなきやいけなくなつたんだよね……。

でも、誰かに、あの子は、やり場の無い怒りをぶつけたかつたんだと思う。

それが、たまたまわたしだったのが、悪かつたんだ。

「っ!!」

わたしは、本当に自己中で。自分が一番辛いのに、なんだよ！ って怒りと、お祖父ちゃんを馬鹿にされた悔しさが噴き出して……。

その子の気持ちを考えてあげられなかつた。

カツとなつて—— 足元に落ちてゐる大きな石を拾つて、その子の顔に向かつて、投げた。

……大事にはならなかつた。軽傷で済んだ。

だけど、お爺ちゃんもお父さんも……家族の誰もわたしを責めなかつた。

悪いことをしたのに……誰も何も言わなかった。

だから、馬鹿な考えをしたんだ。

大好きなお祖父ちゃんを馬鹿にした悪者をこらしめた。だから私は正しいんだ。強いんだって。

だけど、おんじだけは違った。ちゃんと叱ってくれた。

「鶴、おめえ、なんであんな真似をしたんだ」

「だってあいつ、おじいちゃんのことわるくいったんだもん」

——一瞬、おんじが鬼に見えた。

「バカ野郎!!」

って怒鳴られて、顔をパントツ！って思いつきり叩かれた。

痛かった。すっごく痛かったよ!! あんなに痛い思いをしたことは、今も無いよ

……。

でも、その後のおんじ……すごく辛そうで、悲しそうな顔だった。

今なら分かる。

多分、人を傷つけるって、そういうことなんだよ。

傷つけた自分だって辛いんだ。相手が痛いのが伝わってしまうから。

そんな当たり前のこと、当時の私は——いや、ついこの間まで——ちつとも分からな



くて……。

「おんじのバカ！ だいつきらい!!」

わざとおんじの顔を見ないように下に下を向いて、そんなこと叫んで、また逃げた。

その時、おんじがまた怒鳴ったんだけど、もう何言ってるのか分からないくらい、頭の中「ごちゃごちゃでさ……」。

『女の子が一人で出歩くのは危ない』

いつもおんじや、おねえちゃんに口煩く言われてた言いつけを破って、離れの公園に行ったの。

うん、そうだね、いろはちゃん。多分、一人になりたかったんだと思う。

商店街の中だと、みんなが知り合いだからさ……：周りを心配させたくなかったんだろ  
うね。

——でもね、わたしは一人になれなかった。

先客がいたんだ。

綺麗な青い髪の毛の、自分と変わらないくらいの女の子。

その子がね、グズってる私に手を差し伸べて、こう言ってくれたの。

——ひとり？  
いっしょに、あそぼう。

「青い髪……その子って……？」

いろはが尋ねようとするが、鶴乃は首を振った。

「分からない。名前は聞かなかったから。後にも先にもその子と遊んだのは一回きりで……。よく似てた」

いろはの頭に、電流が走った。

まさか——つい口を開きそうになる。しかし、

「いろはちゃんみたいに、芯が強かった」

その名を口にするのは、憚られた。

鶴乃のその一言を聞いて、そう思い至った。

——おいで、いっしょにあそぼう

そう言つて手を差し伸べる「あの子」の、海のように青いショートカットヘアが、ふわりと揺れた。

綺麗な子だつて——子供心にそう思えた。

嬉しかったんだ。こんな暗闇にいるわたしを見つけられて。

わたしの手は自然と伸びて、引き寄せられるようにその子の手を掴んだ。  
涙は止まつてた。

悲しみも、怒りも、悔しさも、あの子の持つ海色に吸い込まれてしまつたみたいで。

「あの子」は両親と一緒に商店街に来ていたんだ。

親が普段は忙しくて、いつも近所のお姉ちゃんに面倒を見て貰つてるんだけど、今日

は久しぶりに家族全員揃って外出できただって。

でも、浮かれちゃったんだろうね。はしやぎまわってたら、親からはぐれちゃったんだって。

公園に居たのは、目立つ場所にいれば、いつか親が見つけてくれるって思ったからなんだって。

——それから、わたしたちは、思いっきり遊んだんだ。

“あの子”がピンクのボールを持ってたからね。

でも、その子は両親が忙しいから、普段は一人で遊ぶことが多いんだって。だから、友達とどう遊ぶのか分からないって……そこは、この鶴乃ちゃんにお任せあれってね！

わたしは思いつく限りのボール遊びを考えて、その子と時間が忘れるまで遊んだ。

お互いに暗い気持ち吹き飛ばしたかったのかもしれない——一生懸命遊んで、わたしたちは笑いあった。

あの時だけかもしれないけど、わたしと“あの子”は確かに友達だった！

——

日が暮れた頃、わたしの蹴ったボールが道路に飛び出しちゃった。

慌てて取りに行こうとしたら、車が迫ってきててね。

わたし、ボールに夢中で気づかなくなつて。  
クラクションを鳴らされて、ようやく気づいた時には――

車が目の前にあつた。

(あ、どうしよう。もしかして、このままぶつかつちやうの?)

アドレナリンつてやつが過剰分泌したのかな? とにかくその時は一瞬が、何十秒にも何分にも感じられて、わたしは逃げることも忘れて、呆然と変なことを考えてた。

(ぶつかつたら、どうなつちやうの?)

その頃は「死」の概念なんて知らなかつたから。

(いたい? ぜつたい、いたいよね?)

(いたいって、どれくらい?)

(ころんで、ひぎをすりむいちやうよりも?)

(包丁で、ゆびをきつちやうよりも?)

(いやだ) (いやだ) (いやだ)

(こわい) (こわい) (こわい)

(たすけて、おとうさん、おかあさん、おねえちゃん、おじいちゃん)

——考えるだけ、無駄だったよ。

衝突は無かった。

だって、〃あの子〃が、車を停めてくれたから。

呆然と見つめるだけのわたしを護るように——こう……両腕をバツ！て広げて

立ち塞がってくれた。

車は、あの子にぶつかる直前で停まった。

怖くて、何もいえずに見ている自分が、情けなかったよ。

——でも、その時点じゃ、もつと怖い思いをするなんて、ちつとも思わなかった。

「危ねえな、クソガキ！」

車から男が下りてきたの。

威圧感を与えるような低い怒鳴り声。真っ黒いパーカーでフードを深めに被ってて

さ……顔なんてサングラスと黒いマスクをして隠してるんだよ。

今、思えば、あの男はまともじゃなかった。

明らかに怪しげな大男は、「あの子」の目前でしゃがみこむと、あの子をじつと見つめてた。

わたしは、直感で、怖いと思ったんだ。

だってあの男の視線の先は、「あの子」の顔じゃなくて、お腹とか下半身とか……そっちの方だったから。

「どうやって謝ってもらおうかなあ」

何で顔を見て話さないんだろうって、不気味だった。

——うん、そうだね。たぶん、そういう意味だったんだよ。

男は、あの子にそういう目的で近づいたんだ。

囁くように、そう言ってから、男は「あの子」の肩に触れた。

うん……やめてって男に怒鳴りたかったよ！ 逃げてってあの子に叫びたかった！

でも、あの頃のわたしは、男のことが怖くて……唇が震えて……声が出せなかった。男があの子に酷いことをしようとしているのに……何もできなかった。

でも、あの子は。

ちっとも怖気づいてる様子も無くて。

ただ、男を見つめていたんだ。

まるで、仕事中的お祖父ちゃんやおんじみたいなのに、力強い瞳で。

「ごめんなさい」

「あ？」

あの子が言葉を紡いだ。男が眉間をグツと寄せて威圧する。

「わたしたちがご迷惑をおかけしました。もうしわけありません」

その仕草があまりにも優雅で、わたしは思わず見惚れちゃった。

その子はね、両手を路面に付いて、土下座したんだ。

力強い目つきで、男を見据えたまま。

「ごめんなさい。わるいことにはにとしません。ゆるしてください」

そう何度も繰り返し、あの子は頭を下げ続けた。

路面に擦り付けながら、何度も何度も、懇願したんだ。

男は、少し呆気に取られた様子だった。

……うん、そこで、あの子の手を引っ張って逃げちゃえば良かったんだと思う。

わたしは、何もできずに、ただ見つめていたんだ。



あの子を早く助けなきゃって、頭ではわかっていたのに、男が怖くて、自分が傷つくのが怖くて……体が震えて動いてくれない。

でも、それはあの子だって同じだった筈だよ。死ぬほど怖かったのに、自分が悪いことを認めて、ちゃんと謝ってる。

……本当に謝るべきは、わたしだったのにな……。

「じゃあ、一緒に来れば、許してあげるよっ」

男が眉間を緩ませて、急に穏やかな声でそう呟いた直後——あの子の腕をギュッと引つ張り上げたんだ！

全身がゾツとした。直感でヤバイと思った時には、男はあの子を車まで引きずり込もうとした。

大声で叫びたかった。誰でもいいから助けを呼ぶべきだった。

全部頭でわかってた。だけど、口が動いてくれなくて……あの子が乗せられそうになるのを、ただボケツツと見ているだけで……

「おい、何してる」

——でも、正義の味方が現れたの。

聞き覚えのあるしやがれた声に、わたしはハツとしたんだ！

「っ！」

胸から緊張が一気に解れて、安心したんだ。

男はあの人を見るなりビツクリ仰天してた。

あの頃はバリバリの現役だったからね。そりやもう男は一気に地獄に叩き落された気分だったろうね。

しかも、滅法強くつてき。驚いた隙を逃さず、男に飛びかかると、あの子を掴んで腕にビシ！つて手刀を落としたんだ！

男の顔が歪んで、あの子から手を離れた。すかさず、手首を掴んで背中まで捻り上げると、男は「いだだだだっ」つてうめき声を挙げて……苦しそうな顔で

「き、雉さん……」

つて呟いたんだ。

そう！ おんじだったの！ おんじがわたしたちを助けに来てくれたの！

おんじは男のサングラスとマスクを剥ぐと、頬の古傷をギロリと睨みつけて、「……てめえ、河原崎だな。ムシヨ暮らしはとつくに飽きたもんだと思つたが」

河原崎と呼ばれた男は、イタズラが先生に見つかった男の子みたいに罰の悪い笑みを浮かべてたんだ。

「へへ……へ、俺みたいなクズがさ、カタギになるなんて……土台無理だったんだよ」  
「だから児童買春か。ふざけてやがるな」

おんじが、男の首をアームロックを決めて。

「へへ……仕方、ねえだろ？ あれぐらいのガキの秘部つてのはよ……あんたらの給料の何倍も高く売れ」

る——と言う前に、おんじは力を込めてグイッと首を締め上げた。

——男はその後、警察に突き出されて逮捕された。

——あの子はいつの間にかいなくなっていた。

お礼が言いたかったのに。

一緒に遊んでくれて、わたしを守ってくれて、ありがとうって。

いろはちゃん。

あの子もね、いろはちゃんと同じだったんだよ。

掃き溜めに落ちたわたしを、見つけてくれた。

何が正しいのかを、身を持って教えてくれた。  
人を傷つけずに。

わたしが、最強を目指したのって、多分、その子みみたいな強さに憧れたからなんだ。

——でも、わたしは、どこかで、間違えた。

それから、しばらくして……

商店街の広場では、神戸市のご当地ヒーロー：カミハマンショーが開催され、老若男女問わず、大きな盛り上がりを見せた。

——ショーの幕が下ろされる様子を遠巻きに眺める一人の少女が居た。

由比鶴乃だ。

父から、休憩を言い渡されて、あてもなく公園へと向かった彼女だが、改めて商店街の盛り上がりには驚嘆する。

——これは夢か。

無理は無い。

つい最近までは、商店街に人の声が聞こえない日なんてしよつちゆうだったから。

まさか、世界中から人が集まり大盛況する日が来ようとは。

改めて、皇グループ会長・皇 稜斗の影響力は本物であったと思ひ知る。

——そして何より。

環 いろは。彼女は本当に何者なんだろうか。

人並みに芯が強くて、優しく、真面目で……苦しみを抱えている、どこにでもいる普通の女の子。

でも、彼女はぶつかってきた。

掃き溜めに堕ちて、誰にも理解されないところで蹲っていた自分に。

そして変えてしまった。

その純粹無垢な行動力で、自分を——自分が生きるこの世界を。

以前、自分は神様は気まぐれだと考えたことがある。

環 いろはが、もし、神様の気まぐれで自分の前に降りた天使であるというのなら。

—— そうだ。これは夢だ。神様が、ここに住む人達全てに見せた、一時の夢に違いない。

リヒトの公開が終了すれば。

近い内に、皇 稜斗も東京にある本社へと戻っていくだろう。

—— そうだ。そこで醒めて、終わる。

そして、元通りになる。

商店街は元の静寂を取り戻し、いつまた再開されるかわからない再開発計画に怯える日常が訪れる。

神様は平等だ。気まぐれで幸運も不運も与える。世界はバランスで成り立っている。絶対的、永久的などあり得ない。

不意に、子供の泣き声が聞こえた。

はつと、鶴乃は振り向いた。

未だ熱狂冷めやらぬショーの人混みの中で、その女の子だけが、違う世界に居るようだった。

女の子はえーん、えーんと声を張り上げて泣いていた。泣いている理由はわからない。親とはぐれてしまったのだろうか？

ただ、これだけの人に囲まれていながら、誰も女の子の事を見向きもしないのが、残酷だった。

(泣かないでよ……)

一瞬、足が竦んでしまった。

その子が、かつての自分と重なって見えたからだ。

暗闇の中で、ただ泣き喚く少女。でも、皆は見ようとしない。だって、興味が無いのだから。面倒くさいことには、関わりたくないから。

(泣いてばかりいたら、わたしみたいになっちゃうよ……)

そう思いながら、鶴乃はゆっくりと、泣いている女の子へ歩み寄ろうとした。

——あの時の後悔を二度としたくないし、もう誰にも味わわせたくない。

そうだ。かつての自分は言ったことがある。今がその時。

あれ、そういえば、その言葉を誰に言ったんだっけ。

最近超忙しいから、忘れちゃった。

でも、「私も同じだ」って。分かってもらえた気がする。

誰だっけ？

誰だっけ？

「きみ、ひとり？」

——え？

鶴乃の足が、止まった。

同時に、世界の景色も、一瞬だけ、止まって見えた。  
泣いている女の子の前に、彼女が居た。

青い髪の綺麗な人。

「……………！」

鶴乃の頭に、雷が落ちた。

具体的に伝えるなら、脳内にある電気信号全てがスパークし、頭全体に衝撃を走らせた。



———「そうか。そういうことだったのか。」

探し求めていた答えが、目の前にあった。

自分があてもなく、「最強」を目指し始めたきつかけ。

いつか、彼女のようになりたいと。彼女のように護れる者でありたいと。

あまりにも呆気なさすぎて、信じられない———

「お姉ちゃん、いっしょに、あそぼう」

———「いや、今、確信に変わった。」

彼女は、彼女だった。

あの時と寸分変わらない仕草と、優しい声色と、女の子を真つ直ぐ見つめる力強い海色の瞳で。

差し伸ばされた手を、女の子はギュツと掴んだ。

ああ、やつぱり、あの女の子は自分と同じだった。

安心したんだ。こんな暗闇で、自分を見つけてくれた人がいたから。

まだ、自分は歩いていけるんだって。生きていてもいいんだって。

女の子は「うん！」と声を張り上げた。悲しみや怒りは微塵も無い、快晴のような笑

顔で。

「七海、やちよ……」

不意に、彼女の名が自然と口から紡がれた。

彼女は肩がピクリと竦み、自分の方に振り向く。

「由比、鶴乃……」

「あの、さ——」

——あれから、詳しいことはよく覚えてない。

「鶴乃ちゃんっ！」

声が聞こえて、心の底から安心した。

ああ、彼女が居てくれた。暗闇の底にいる自分を、見つけてくれたんだ。

彼女が目前まで駆け寄ると、どっと倒れ込むように、自分の体よりも細い体を抱き寄せた。

「どうしたのっ?」

ごめんなさい、いろはちゃん。

貴女の言うことを守れなくてごめんなさい。

貴女の望むような友達になれなくてごめんなさい。

貴女のように強くないわたしでごめんなさい。

口から全部言ってしまう言葉が頭の中を堂々巡る。

だが、感情の飲み込まれたら駄目だ。彼女にだけは、はつきりと頭で伝えないと。

「いろはちゃん、ご……っ、……わたしね、七海やちよに会ったの」

いろはが鶴乃の体をギュツと握り締めた。

「どう、だった?」

えっ、と目を見開いた。どうして彼女がそんな質問をするんだろう。

「わたし、また酷いこと言っちゃった……」

—— そんな……綺麗な着物を着て……何？ 主役気取ってるの？

—— ねえ。分かってるよね？ 祭りの功労者はいろはちゃんと、皇さんだよ。

—— あんた、何もしてないじゃん。わたしの世界から、大事なものを追っ払っただけじゃん……。

—— 祭りが醒めたら、ここは元通りになるんだよ？ 皇さんだっていつまでもい

てくれる訳じゃない。

—— それがどういう意味か、分かる？ 分からないでしょ？

—— わたしたちのことなんて、何も考えて無い癖に……。

—— ねえ、出てってよ。

—— さっさといなくなれよっ！ わたしの世界からっ！

「あいつは、＼あの子＼だった。あの時、わたしにそうしてくれたみたいに、誰かに手を差し伸べてた……」

鶴乃の頬に、熱いものが流れている。

泣いていると感じたから、いろははより強く彼女の体を抱きよせた。

「わたし、嬉しかったんだ！　ずっと探してた答えが見つかった気がして、本当に安心してんだよっ!!　だけど、口から出たのは……」

憎悪と怨恨——自分の心を巣食っているそれらは、想像以上に深く根付いていた。

どうして、こうなってしまうんだろうか。

どうして自分は……肝心な時に感情をコントロールできない!

「本当は、そんなこと言うつもりじゃなかったのに……」

涙の暖かさを頬で感じながら、いろはは問いかけた。

「鶴乃ちゃんは、何て言うつもりだったの?」

ごくり、と。

飲み込んだ唾で迫り上がる嗚咽を抑えてから——鶴乃はハッキリと言った。

『わたしたち、ちっちゃい頃、一緒に遊んだよね？』って……』

いろはの目が大きく見開いた。

驚き、というよりは、やはり、という確信の表情に見えた。

「友達に会ったような軽い気持ちで、本当にそう聞くつもりだったんだよ。 だけど

……駄目だった」

——感情に負けちゃった。

鶴乃は、いろはの肩を掴んで頬を引き剥がすと、そう言った。

いろはは、彼女の顔を見て、絶句した。

——ああ、戻ってしまった。出会ったばかりの鶴乃ちゃんに。

ぐちゃぐちゃの感情を、笑顔で強引に蓋をして“自分は平気だ”と誤魔化した。あの

頃に……！

「っ!!」

いろはの目がキツと鋭利に瞬いた！

渾身の力で鶴乃の腕をギュツと掴んで、どこかへと引つ張り出す！

「痛っ！ ちよつと！ いろはちゃんっ、何っ!?」

「認めない……」

「えっ……!?」

絞り出すような、怒りの声。

今まで見たことも無いいろはの様子に、鶴乃は目を丸くした。

「これで終わりなんて、絶対に認めない……!」

「でも、わたしは……もう」

いろはの瞳がカツと見開いた。

「約束したでしょっ!? 一緒に幸せを探そうつて!!」

「っ!!」

——鉛を思いつきり殴られたような衝撃が、鶴乃の頭を襲った。

「鶴乃ちゃんが諦めても、私は諦めない! だって私は、鶴乃ちゃんの“親友”だから!

おんじさんみたくにはなれないけど、おんじさんの次くらいには鶴乃ちゃんのことを

分かってあげたいからっ!」

自分を引つ張るいろはが、夕陽と重なった。

頭から末端まで黄金に染まった彼女が、毅然と言い放つ。

「だから私は、貴女とやちよさんを意地でも向き合わせる！ そうしたいのに、それができない貴女を見てるのが嫌だから……そんなの、私の気分が悪くなるだけだから……つ！ もう、鶴乃ちゃんを引つ張り上げるのいい加減疲れたからっ!!」

鶴乃ちゃんには、前を向いて欲しい。いつまでも、太陽みたいに笑って欲しい。それが本当の鶴乃ちゃんだって分かったから、曇るなんて、絶対に許さない。

だから——

「今度こそ、本当の自分の気持ちを伝えてっ！ 全部精算してきてよっ！ じゃないと、私」

——貴女を、破門にするから。

いろはは喉まで出かかった言葉を、寸前で飲み込んだ。

それだけは言つては駄目だと理性が判断してくれた。

「……っ」

鶴乃は何も答えない。

だが、表情は明らかに変わっていた。

掃き溜めの鶴ではなく、一つの決意を固めた人間の力強い顔つきがそこに見えた。



いろはは万々歳の玄関に手を掛けると、思いつきり開く。

ランチタイムを過ぎて閑散とした万々歳に、客が一人だけ居た。

彼女は食べ終わって空っぽになったラーメンの鉢をじっと見下ろしている。

「やちよさんっ」

声を掛けられて、彼女は振り向いた。鶴乃に言われて着替えたのだろうか——晴  
れ着では無く、私服姿だ。

彼女はいろはの隣立つ鶴乃を見ると、ほっと一息。

カウンターに置いたバッグを肩に掛けて、席から立ち上がる。

「おお、やっと帰ってきたか、バカ野郎」

「おんじ、ただいま……」

厨房から木地郎が顔を出してくる。

二人がそうやりとりした後には、既にやちよは玄関から外へ足を運んでいた。

「行くのか」

「ええ、安心しましたから」

やちよは木次郎に一言だけ答えると、これ以上話すことはない、と言うように、三人に背中を見せて去っていく。

「やちよさんっ！」

だが、いろはがその背中に声を叩き込んだ。

「貴女は……誰の味方なんですかつ?!」

やちよの肩が、ピクリと竦んだ。

足を止めて、彼女は答える。

「私は、神浜市に住む全ての人達の味方よ。今も、これから先も、ずっと」

「だから、全部一人で抱え込むんですか……!」

「そうする以外に、戦う術を知らないからね」

——ああ、なんてことだ。やちよさんがまた歩き出してしまった。

近づけたと思っていたのに、どんどん距離が離れていく。

家族でさえ、彼女の心に踏み込むことはできないのか——

「七海やちよっ」

だが、そこで——新たなる声はやちよの背中に叩き込まれた。

「わたしたち、ちっちゃい頃……いっしょに遊んだよねっ?」

やちよの足が、完全に止まった。鶴乃の言葉によって、そこに縫い止められた。

「思い出したよ、わたし。ぜんぶ」

やちよは、振り向かないまま、鶴乃の言葉に耳を傾けていた。

「どうして、わたしっていつも遅いんだろう？ もっと早く気づいてたらさ、こんなにギクシヤクしなかったのに……」

「……」

「分かってるよ。あんたがわたしにしたことは、確かに酷いことだった。わたしは絶対に忘れない！ でも……っ」

鶴乃は力強く握り締めた拳を解くと、一瞬だけ、奥歯を砕く程おもしろい食いしばった。

そして……

「もう……終わりにしよう」

穏やかな顔で、そう伝えた。

やちよの頭が、僅かに下がった。彼女が下を向いたのだと分かった。

「あんなこと言っちゃって、信じてもらえないかもしれないけどさ……もうお互いに攻めるのはやめよう！ わたしはもう、自分の弱さに嘆いて誰かに八つ当たりしたくない！ 誰も、傷つけないし、失いたくない……。あんたのこと……っ……っ！」

「……………」

「やちよ、お願いっ！ もう一度だけでいいから、あんたと向き合わせて！」

それが、鶴乃が考える、自身が前に進むための方法だった。

「……」

やちよは何も言わず、振り向いた。

氷の様に冷淡な表情。だが、その相貌には夕陽が当たり、白く輝いて見えた。

「………ついできて、くれる？」

「………え？」

同性でも息を飲んでしまう程の美しさに、呆然と見惚れてしまう鶴乃だったが――

――やちよの言葉で我に帰った。

「見せたいものがあるの」

「………！」

鶴乃は迷わずコクリと頷くと、いろはを伴って、やちよの後ろを付いていった。

☆

30分後。

中央区。

やちよが二人を伴って訪れた先は、中央商店街にある一件の定食屋であった。

入り口に「よねだ」の暖簾を下げたその店は、今月新装開店されたばかりであり、店内はカウンター席しかないこじんまりとしたものだったが、清潔感に溢れていた。

「いらっしやい！」

カウンター内の調理場でコック姿の店主が陽気な挨拶を送る。まだ三十代半ばぐらいだろうか。笑顔には活気があふれていて親しみやすそうな人柄だ。

やちよ、鶴乃、いろはが横並びになって座る。

「どういふこと？」

わたしお腹空いてないんだけど——と、鶴乃は疑問に思い、やちよを横目で見やる。

「好きなものを頼んでみて」

途端、意味深なものを感じて鶴乃はやちよを睨みつけた。

「……自分が鼻屣している店の方が上だって、そう言いたい訳？」

「鶴乃ちゃんっ」

いろはに小声で叱られて、鶴乃は眉に唾をつけた。

いかんいかん——喧嘩をしたいんじゃないってさつき誓ったばかりだったのに。

「じゃあ……鯖の味噌煮定食で」

気を取り直して鶴乃が注文すると、店主が「あいよっ」と威勢の良い声を張り上げ、調理を進めていく。

——やがて、料理は鶴乃の前に出された。

「いただきます」と鶴乃は両手を合わせると、鯖の味噌煮を一口だけ、口に運ぶ。

「……………えっ?」

咀嚼して味わっていた鶴乃の目が、突然はつとしたように見開かれる。

「鶴乃ちゃん?」

「同じだ……」

「えっ?」

いろはが尋ねると、鶴乃はゴクリと飲み込んでから、鯖の味噌煮をじっと見下ろして、

そう答えた。

「同じ、なんだよ。ふわりと口に広がる味噌の味付け、よく油の乗った鯖の柔らかさ……川野の婆ちゃんちで食べたのと」

鶴乃は驚きのまま、やちよに顔を向ける。視線から、まさか——という意図を察知してやちよはコクリと頷いた。

てつきり中央区にいる息子家族の元で隠居しているとばかり思っていたのに……

『ヤッホー！ 鶴ちゃん！』

——刹那、いろはと鶴乃は自分の目を疑った。

川野とそっくりな声。

しかし、そこにいたのは川野ではなく……

「ええ!?!」

「もしかして、このロボット……!?!」

「ええ、『川野さん』よ」

やちよが答える横で、川野（分身ロボット）はピースサイン。

「二木市の大庭さんの店の厨房で見た時、これだ！ って思ったわ。これなら、自宅から動いて頂く必要も無く、安全に若い人達に技術指導して頂くことができる……！」

やちよが皇 稜斗に提案した作戦の全容とは、これだった。

中央区で店を開いたばかりの若い経営者達と、参京商店街の老舗の経営者達を直接繋げるネットワークシステムを構築すること。

皇グループなら、それが可能だと思った。

「ばあちゃんは……」

「川野さんと中山さんは協力を示してくれたの。それが神浜の将来につながるのなら……あの人が呼びかけてくれたお陰で、腕利きの職人やプロが賛同してくれた。シニア層が築いてきた信念や地価を、若い人たちが受け継いでくれると信じてる」

古きものを壊して、全く新しいものに作り変える——そんな行政を、私は認めない。

最後にそう付け加えると、鶴乃がプツと噴き出した。やちよが罰が悪そうに頭を掻く。

「なんだよそれっ」

「ちよつと、カッコつけすぎちゃったかしら……？」

「いいよ。だって」



鶴乃はやちよの方を振り向くと、

「あんたが、わたしたちのこと、ちゃんと考えてたんだって分かったからっ！」  
笑った。

一端の陰りも無い、太陽の様に明るい笑顔に、そこにいる全ての人たちの心を暖めた。

夕暮れ。

—— 参京公園。

オレンジ色の夕陽が、公園全体を暖かな黄金色に染めていた。

片隅に置かれたベンチの上で、少女が二人、寄り添って座っていた。

七海やちよと由比鶴乃 ——

かつて、立場の違いとすれ違いから、二人はお互いに苦手意識を持ち、嫌悪しあっていた。理解を拒み、時に強くぶつかりあっていた。

だけど、今は —— 一緒にここで夕陽を眺めていることが、こんなにも満たされている。

嗚呼、“あの時”と全く同じだ。

あの頃を取り戻せる日が来るなんて、二人は夢にも思っていなかった。

—— いや、どこかで二人はずっと探し求めていたのかもしれない。

魔法少女になってから、二人はただ、前ばかりを向き続けた。只管に。我武者羅に。後ろを振り向く暇も無い程に。

だが、それは間違いであったと、今は理解できる。

—— そうだ。本当のことはいつも、過去にしか無い。

「ねえ」

鶴乃が呟いた。やちよが「なに？」と振り向く。

「ありがとう。やちよ、こんな世界の片隅で、わたしを見つけてくれて」

それは、あの頃から、ずっと伝えたかった感謝の言葉だった。

やちよはふつと微笑を零すと、穏やかな声色で返す。

「世界は……もつと広いわよ」

「そうだったね」

「今までごめんなさい。由比さん」

もう陽は落ちる頃だというのに、自分達を照らす夕陽はどこまでも輝いていて、暖かい。

—— と、そこで、二人の足元に何か転がってきた。

「これって……」

鶴乃が目丸くする。

それはあの頃、二人で一緒に遊んだ“桃色のボール”だった。

自然と、鶴乃の両手がそれを拾い上げる。

「……………っ！」

何かが、閃くように鶴乃の頭に浮かんだ。

口元が嬉しさを隠しきれず、ニンマリと深い弧を描く。

「ねえ、やちよちゃん！」

あの頃と変わらない無邪気な笑みで、鶴乃はやちよに振り向くと——

「おいで、いっしょにあそぼう！」

——手を差し伸べた。

やちよは一瞬、呆気にとられたまま、じっとそれを見つめていたが——

「……………いいよ。鶴乃ちゃん！」

——屈託無く笑って、その手をギュツと握り締めた。

鶴乃が蹴り上げた桃色のボールが、天高く飛翔し、夕陽の残光を反射する。

それが、二人の間に太陽が昇ったかのように見えた。

FILE #52. 5 何者でも無い少女は、神を憎む  
(短編)

19:00

—— 神浜中央駅北口付近。あるビジネスホテルの屋上。

人生とはバランスだ。

天に舞い上がる程の悦楽を知れば、かならず死にたくなる程の苦痛を思い知る時が来る。

「あれが、噂の環 いろはか……」

スコープ越しに、やちよと並んで帰路に立ついろはを観察しながら、黒いパーカーの少女は、ふとそんなことを考えていた。

「宝崎じや魔法少女同士のコミュニティはあつたけど、学校じや友達は無し。成績も理科・国語以外は中の下。まあ、印象としては、根暗なコミュ障オタクってところかな」  
背後でデリバリーのピザを啄みながら、そう説明するのは、一見少女とは然程違わない年頃に見える女性だ。

「かーっ！ それが神浜に来た途端、アレかよっ!？」

黒いパーカーの少女が驚く。

当然だ。英雄・七海やちよと直接対決して勝利——凡百の魔法少女がそれを成し遂げただけでも驚嘆すべきだが、それだけに留まらない。

七海やちよとは同じ屋根の下で暮らす仲となり……更に神浜市長・夕霧青佐。由比鶴乃を始めとする参京商店街の顔役達。挙げ句の果てには世界随一と謳われるIT企業の会長。僅か一ヶ月と数日で、斯様な大人物達と親交を深めてしまった。

今まで、ただのコミュ障ぼっちだった奴が？ あり得ない——

「たまりにいるんだよなあ。あーいう、神様に愛されてる様な奴がさあ……」

スコープを覗く黒いパーカーの少女の瞳が妖しく瞬いた。声色にあからさまな嫌悪を感じた女性が「おっ」と食べる手を止めて振り向く。

「そーいえばフェリーはクリスマスが嫌いだったね」

「ああ、オレは神が嫌いなんだ。だから神に好かれてる奴もとことん嫌うのさ。あいつの魔法少女のカッコ見たかよ。まるで修道女シスターだぜ？ ますます気に入らねえ……」

だからさ——と、黒いパーカーの少女『フェリー』が一瞬だけ振り向いた。

その瞳に浮かんでいたのは、妬ましきだ。神に愛されてる少女、環いろはに對しての。「洗けがしてやるのも面白そうだと思わねえか？ ジュン」

『フェリー』はそう呟いてから、ニツと嗤った。まるで小兎に狙いを定めた狼の如く口元を釣り上げて。

「絶頂にいるあいつを思いつき突き落としてやるんだ」

「それで、誰が得するの？」

「オレがよく眠れる」

「あつそ」

——いろはちゃん、ご愁傷さま。

ジュンは心の中でそう述べながら合掌。

だが、相貌にはいろはに対する同情や哀れみは一切無く、冷ややかな微笑みだけが貼り付いていた。

「深月フェリシアさん、目的を忘れてはいけませんよ」

と——そこで、背後から鈴の音色の様に耳心地の良い声が聞こえてきた。

二人が同時に振り向くと、いつの間にかやら、真紅の外套で頭からつま先まで覆い隠した少女らしき人物が佇んでいた。

「おお、紅羽根か。安心しろよ。傭兵は感情じゃ働かねえ。仕事と私情は別物だからな」

「そつちも兵隊は用意してくれた？」

彼女を見るなり、フェリシアとジュンは朗らかに笑う。

紅羽根の口元が微かに弧を描いた。「心配なく」と言つてパチンツと指を鳴らすと、どこからともなく、黒い外套の少女達が集まつてくる。

その数、15名。

「それが噂のハエ共か」

集まつてきた黒羽根達を睨み据えながらフェリシアは冷笑。

「感情に左右されず、合理的思考のみで行動できる……使役する上では正に理想の人材かと」

「ハエつてよりはアリだね」

どんな暗示を使ったんだか——ジュンは黒羽根達を一瞥した後、紅羽根を見つめた。

その淑女然とした温厚な笑みには、黒羽根の少女達の境遇に対する哀れみは一片も顕れていない。

いや……恐らく彼女はこの場に顕在する全ての事象に、一切の興味関心も抱いていないのだろう。

フードの隙間から僅かに伺える瞳を覗いて、ジュンは瞬時にそう確信した。



「とりあえず、オメーらはジュンと同じだ。遠くで様子を見ててくれりゃいい」  
スコープから目を離し後ろを振り向いたフェリシアがそう指示を下す。

ジュンは自分に「何かがあつた」場合の保険であり、紅羽根達もそれに倣えということだ。

「お一人で一切を成すおつもりで？」

紅羽根がその内容に首を傾げた。尋ねると、フェリシアは「そうだ」と啜う。

「そりゃオレの仕事だからなあ。何にもなけりゃあ、お前らは食つちや寝してるだけで大金持ち帰れるんだ。良い条件だろう？」

フェリシアは紅羽根に協力費として、懇意にしているヤクザから予め借り入れて置いた金銭を手渡していた。

紅羽根自身は最初から手を貸すつもりだったので別に要らなかつたのだが……強引に握らされた。

フェリシアとしては、紅羽根が――そして彼女のボスが――どんな人間か把握できない以上、裏切る可能性が無きにしても有らず。その為の大金だ。これで自分を容易には切れまい。金の束縛力は強い。

「そつ♪ だから私は協力してるってワケっ」

ジュンが笑顔で再びピザを啄み始めると、紅羽根はフツと微笑んだ。

「それはそれは……」

“アステリオス”の実力を、特等席で鑑賞できるとは、魔法少女冥利に尽きるというもの。

「とつくりと見物させて頂きましょう」

紅羽根の口端が一瞬だけ、耳元まで吊り上がったように見えた。

僅かなやりとりの中で、紅羽根が感情を顕わにしたのはここだけだった。

——上空には満月。

月光が、真下に集う少女達を海よりも深い蒼に染めていた。

F I L E

# 5 3

いつか万年桜の木の下で

目次

A  
パートB  
パート

後日——神浜中央図書館。

「ふむふむ……よくぞそこまで頑張りましたな」

ランチタイム。

朝香美代と再会したいろはは、一階に設けられているカフェにて、お互いに食事を摂りながら事後報告を伝えていた。

「これからどうなるかまだわかりませんが……鶴乃ちゃんが明るく笑うようになってくれて本当に良かったです」

美代はいろはの話に逐一驚嘆を示しているようであった。

そう言つて、話し終えると、どこからともなく扇子を取り出してパツと開く。

目の前に日の丸が出現した。

「アツパレなのですな、いろはくん！ わつちは出会った頃より君の強かさを買ってお

りましたが、まさかここまでできる子だとは思ってもみませんでしたな。この朝香美代、感服致す所存で御座る」

どうして神浜市の魔法少女つてこう個性の塊が多いのだろう、いろはは苦笑いを浮かべながら手を振った。

「そんなことは……私はただ、できることをとにかくやっただけで……」

謙遜するが、美代に首を振って否定された。彼女は真剣な瞳でいろはの相貌を見据えながら、こう言った。

「魔法少女や魔女の危険性が世間に知れ渡る昨今。皆が皆明日は我が身と考えておりまする。誰もが利己主義と自己保身に走る時代に、見ず知らずの他人の為にそこまで努められる者はそうそうおりませぬ」

「でも、美代さんのお陰ですよ」

その一言に完全に意表を付かれたらしい。ポロツと、美代の手から扇子が落ちた。「ほえ？ それは、どういうことですか?」

呆気にとられて目を丸くした美代が扇子が落ちたことにも気づかず問いかける。

いろはは扇子を拾いながら、理由伝えた。

「だって、美代さんが私と鶴乃ちゃんを合わせてくれなかったら、きつかけは無かったんですよ」

だからこそ、いろはは美代に、一番伝えたかった事がある。

「ありがとうございます。美代さん」

率直な感謝の言葉が美代に直撃した。

美代は、しばらく何が何だか分かってない様子でポカンとしていたが……すぐにフツと笑い始めた。

「……本当に、不思議な子なのですな。君は」

実の所美代自身、大層なことをしたつもりは全く無い。

ただ、自分に絡んでワチャワチャ騒ぐ鶴乃がちよつと……どころか、かなり……面倒くさかったので、都合よく現れたいろはに押し付けた、程度だった。

なので、まさかお礼を言われる事になるうとは夢にも思わなかった。

「なんかそれ、すごくよく言われます……」

いろははまた苦笑い。

ただ、直後に表情を真剣そのものへと変えた。ここからが本題だ。

「……美代さん。あの、約束の件ですけど……」

元はと言えば、美代がいろはの質問を聞く条件として、鶴乃の相手をしてほしいと突

き付けたからである。

あれから、一ヶ月以上も掛かってしまったが……ようやくいろはは、探し求めるもの一つに、一步近づくことができるのだ。

「おお！ そうでしたな。で、わつちに聞きたいこと、とは？」

美代も言われてから、そのことを思い出したらしく、手をポンツと叩いた。

いろはは頷き、ある単語を呟く。

「大賢者様」——と。

「いなくなつた私のお父さんが、手紙で伝えてくれたんです。その人に会って」

二人の人物に会えと、手紙には表記してあつた。

一人は言わずもがな。そしてもう一人が、*「それ」*。

誰もが知っている前者とは違って、後者は未だに行方が一切掴めずにいる。

青佐に聞いてもやちよに聞いてもお手上げ。ならば、神浜の歴史を調べている美代だけが頼りだ。

彼女ならば、何か知っているのかもしれないと——

「阿峽先生が教えてくれたんです。美代さんは、その方を、知っていますか？」

いろはの言葉に目を丸くしたのはこれで何回目だろうか。

まさか外様のいろはが——そして一般人の筈の彼女の父親が——その名を知ってい

ることに驚きを隠せない。

美代は一度、ふう、と溜息を付いて、一拍置いた後、静かに語り始める。

「ふむ、大賢者様、ですか……その名を知っている者は決して多くありません」

「実在はしているんですか？」

「知る者の噂では、ですな。ですが、会ったことのある者は極わずかしいという話ですな」

美代は、大賢者について、知っている限りの情報をいろはに伝えた。

曰く、大賢者は、5年前にある人物がその存在を吹聴したことで広まった。

それは、魔法の総てを極め、司る者。

それは、総ての魔法少女の頂点に立つ、高位次元の存在。

それは、神浜市の特異点であり、全てを護る現人神。

神浜市の地上のどこにも住んでいない。故に、誰も知らない。だが、確かに存在し、出会った者もいるのだという。

大賢者は神浜の全てと繋がっている。市内に顕在する生命の全てを司り、彼らの魂の行く末を見届けるのが役目。

そして役目を終えた魂を浄化し、極楽浄土へと導いているのだという。

「魔法少女……なんですか？」



「わっちも会ったことがないので何とも言えませぬが……ただ、可能性は無きにしもあらず、ですな」

美代曰く——インドでは先日、ある大司教の女性が寿命を迎えたという。

よくある話だが、驚嘆すべきは、彼女はなんと250年も前に出生された記録があったそうだ。

最近の調査で判明したのは、魔法少女であつたらしく、キュウベえから聞き出した話では「特異中の特異」な存在であつたそうだ。

「一般的な人間でさえ、常識を覆すケースは古今東西歴史の中で枚挙に暇がありません。魔法少女もまた然り。恐らく、大賢者様も斯様な人物と同等の可能性が高いと思われま

する」

「そんな凄い人が、神浜市に……」  
だが、青佐ややちよですら掴めていない人物だ。本当に存在しているのかさえ疑わしい。

「あと、こんな噂もあるのですな。大賢者様に会えた魔法少女は、ある“秘術”を二つ、授けられると聞くのですな」

「秘術……?」

美代は袖下から護符を二つ取り出すと、筆ペンで書いたそれをいろはに見せる。

〃魔義空〃

〃怒病縷〃

「魔義空と、怒病縷ですな」

「まぎあ……どつぺる……？」

いろはは目を細めて、護符に書かれた文字列を見つめた。

一見当て字の様で、だけど深い意味が込められてそうな漢字だが……並びを見つめても、意味はさっぱりだ。

だがこれらが、魔法少女の〃秘術〃と謂われているものならば、相当凄いものに違いない。

いろはは興味深そうな視線を美代に送るが、彼女は眉を八の字にして首を振った。

「詳しいことはわかりませぬ。多くの魔法少女がその秘術を得る為に大賢者様を血眼になつて探し回るも、その過酷な試練の前に挫折したといえますな……」

試練、と聞いているのは肩が強張った。

やはり、大賢者と会うにはそう易々といかないらしい。

「試練って？　どんな……」

果たして今の自分がそれをやり遂げられるものであるのか気になったが、美代は首を振る。

「それも分かりませぬ。試練に関することは一切口にしてはならぬと決まりが定められております故」

そのような規則を、誰かが取り決めた訳では無いらしい。

だが、神浜市に住む魔法少女達の間で、いつの間にか“暗黙のルール”となつて個々に根付いていた。

「もし、安易に誰かに伝えてしまった場合は、大賢者様から罰が下されるそうですな」  
えっ………というのはの表情が固まった。

「試練に関する全ての記憶が消されてしまうのですな」

ぞつと、背筋が凍えるのを感じた。

大賢者様の事が、急に怖くなった。

いろはは両手で自身の体を護るように抱きしめる。

「そんなことが……」

青くなつたいろはを見て、美代は申しわけなさそうな気持ちになつた。

「それもはつきりとは分からぬことですがな……。とりあえず、わつちがかの御仁について知っている情報は、こんな所ですな」

溜息を付いてから、そう述べた。

いろはは、大賢者への緊張が貼り付いたままの表情で頭を下げる。

「……ありがとうございます。美代さん」

「申しわけありません。怖がらせるつもりは無かったですですが……」

「いえ、大丈夫です」

直後、いろはは屈託ない笑顔を向けて、そう言い切った。

大賢者は恐ろしい。だけど——心の奥底が、じんわり熱くなっていくのを感じる。

それは間違いなく、火だ。自分が前に進むための、希望が、ポツと灯されたのだ。

「手がかりが掴めたことの方が、ずっと嬉しいですから」

神浜に住み続けていれば、いつかは会えるかもしれない。

そう思えたから、いろはは前を向ける。失ったものを取り戻す為に進み続ける。

「やはり君は強い子ですな……いろはくん。ですが、わざわざわっちの元に赴かんでも、適任者が身近におるではないですか？」

「え？」

今度はいろはが美代の言葉に意表を突かれた。

「神浜市の歴史研究家としては、趣味で資料を漁っているだけのわっちよりもはるかに

名高いですな。何せ、わっちが知っている情報も発信元はその御仁なのですからな」

いろは、ビツクリ仰天！

「ええっ!? そ、それって、一体誰なんですか?」

身近、と言われても思い当たる節が無い。

いろはは、驚いて美代に問い詰めると、彼女は深く溜息をついてから、一言、呟いた。

「夕霧青佐市長殿ですな」

一瞬だけ、いろはの眉間にグツと皺が寄った。

—— 神浜市役所。市長執務室。

現在、秘書のこころとまさらは、休憩中だ。

静寂に満ちた部屋で、たったひとり書類仕事に追われていた青佐の耳に、突然ドンドンと扉を強く叩く音が響いた。

「どうぞ」

扉に顔を向けて応えようと、バンツと勢い良く開かれた。

「失礼致します」

登場したのは、なんといろはであった。彼女は入室時の一礼もせず、大股でズンズンと歩み寄ってくる。

その形相は一目瞭然。青佐に向けて明らかに怒っている。

「礼儀がなっていないわよ、いろはさん」

「無礼は承知してます。一体、どういうことですか？」

市長は僅かに下を向いてほくそ笑んだ。

自分の立場上、知らぬ所で恨みを買われることは慣れてはいるが、直談判されるケースは稀だ。

さて、どう相手してやろうか——考えるだけで面白くなってくる。

「大賢者様について、＼知らない＼ ってはつきり言っていましたよね！」

早速、いろはが怒鳴った。だが、青佐は微動だにしない。

「ええ。そうね」

帰ってきたのは素っ気ない返事。

その飄々然とした態度に、ついに我慢できなくなったのか、いろはは両手をデスクにバンツ！と叩き付ける！

「どうして嘘をついたんですかつ！」

「ついて良い嘘と、悪い嘘があるのよ」

「ついて良いって……人を騙して良いなんて思いませんっ」

執務室全体に響くほど怒声を張り上げるも、青佐は眉一つ動かさない。  
寧ろ、せせら笑いまじりにそう返されたことがいろはの逆鱗に触れた。

彼女は必死なのだ。

大切なものを取り戻す為には、一刻も早く“大賢者様”に会わなければならない。

——それなのに……!!

父親と友人であり、自分の事情を深く知っている青佐が、斯様な“悪ふざけ”で自分の気持を弄んだことが、悔しくてたまらない。

狼狽えさせるぐらいの怒りをぶつけてやらなければ気がすまない！

絶対に謝らせると、鋼の意志で青佐に食って掛かるいろはだったが……

「じゃあ、結果を見てみましょう。私が『大賢者を知らない』と言って、貴女はどうなっ

たかしら？」

「えっ？」

そこで青佐の言葉に、意表を付かれてしまった。

いろはは、一瞬、怒りを忘れて彼女を見つめる。

「貴女の足は動いた。朝香さんと話す機会が増えて、より親交を深めることができた。違う？」

「それは……」

美代とは、すっかり打ち解けた。別れ際に連絡先も交換した。否定できない。

「とはいえ騙したことに關しては謝るべきね。ごめんなさい。いろはさん」

「いえ……でも、どうしてそんなマネを？」

いきなり素直に謝られてしまい、いろはは目的を失った。

だが、溜め込んでいた怒りの熱がスーツと冷めていき、正常な思考を取り戻す。

青佐のことだから、そう言ったのには何か意図があるのかもしれないが——見えてこない。

今ひとつ釈然としない様子でいろはが尋ねると、青佐は細い瞳で見据えた。

まるで遠くを眺めるように。

「昔、ある人が言っていたわ。『人は最初から人じゃない。自分の足で歩いて人になって



いくものだ』、とね」

「人に、なる……」

「答えを知る私が教えるのは簡単よ。でもそれじゃあ、貴女には何も響かないでしょう？ 実感を得なければ、それは人生の経験値には成り得ない。答えというものは、自分で求め彷徨い足掻き手に入れるものよ」

「それは、そうかもしれないけど……」

「私は、貴女にこの街の様々な人たちと親交を深めて欲しいと要求した。貴女もそれに応えると誓った。どう？ 私が嘘を付いたことでお互いに得をしたじゃない？ 結果オーライってやつよ」

ニコニコと笑う青佐にいろははただ呆気にと取られていた。

なんとというか、上手く言いくるめられた気がするけど……その天真爛漫な笑みを見ると、不思議と悪い気はしなかった。

食えない人だが、ちゃんと自分のことを考えてくれているのが分かったから。

「じゃあ、ほんとに……夕霧さんは知ってるんですか？」

“大賢者様”のことを——と尋ねると、青佐は迷わず頷いた。

「ええ、良く知っているわ」

いろはは再び両手でデスクを突いて食って掛かる！

「じゃあ、どこにいるのか、教えて頂けますか？」

「そうねえ……」

青佐はそこで、顔を下に向けて、誰かに念じるように瞳を閉じた。

（“教授”……聞こえますか？）

『うん。青佐、どうしたんだい？』

（いろはさんの素質は十分です。そろそろ頃合いかと——）

　　脛の裏に出現する小さな少女は、顎に手を当てた。渋い顔を浮かべて、悩んでいる。

『しかし……まだ早くは無いか？』

（そうやって面倒くさいから、責任負いたくないからって有耶無耶にしてる内に時間ばかりが過ぎていくのですよ。貴女も女なら潔く度胸を示しなさいっ）

『僕は女は愛嬌だと教えた筈だけど……分かった。いいだろう』

“教授”はやれやれと溜息を付いた後、青佐をしつかりと見つめて、笑みを浮かべた。

『環いろはを、僕の元へ招いて欲しい』  
(その言葉を待つてましたよ、教授)

——青佐はそこで瞳を開けると、呆然と直立不動するいろはが見えた。

「夕霧さん？」

「ごめんなさい。ちょっとね……」

そこで、鷹の如き鋭い眼差しでいろはを見据える。

「いろはさん」

「は、はい」

その眼力の強さは凄まじく、いろはの肩が強張った。緊張の面持ちで青佐を見つめ返す。

「大賢者の元へは案内できないけれど、すぐ近くまで連れて行ってあげるわ」  
「本当ですか!？」

途端、いろはの瞳が輝いた。青佐は強い眼差しのままコクリと頷く。

「ええ。そこには大賢者のことを私よりも深く知っている人達が居る。話をよく聞いて、手がかりを集めてきなさい」

「夕霧さん、よりも……?」

「ちよつといいかしら」

青佐は椅子から立ち上がり、いろはの頭を両手で抱え込んだ。

「えっ……!?!」

いきなり何をするのか——驚くのは束の間だった。

自分の額と、青佐の額が触れた瞬間、

意識が暗転した。

☆

—— リンゴを割ったような甘酸っぱい香りが、鼻腔をくすぐった。

ああ、懐かしい——と、それに意識が刺激されたのか、ぼんやりと目が醒める。視界を染めたのは雲ひとつ無い青一色の碧天。

ああ、同じだ。あの頃と。

だが、上体を起こしたいろはの目に見えたのは、そんな理想とは掛け離れた世界。そこには、自分の大切な人達は、誰一人としていない。

病室ですらない。

—— 一面、花畑。

四方八方、見渡す限りの地表全てがリンゴの花で覆われていた。

いろはは瞠目。一体どこまで続いているのだろう。地平線の向こうまで無限に続い

ているのかもしれない。

いや、それよりも……。

自分はどうしてこんな所にいるのだろうか。

いろはは漸く現実を認識し、自分の状況を振り返ってみた。

確か……ここに来る直前に、神浜市役所の市長執務室に自分は居たはず。青佐と自分はお互いの額をくつつけて、それから意識がフツ飛んで……それから先はよく覚えていない。

——まさか……！

いろはの性格を考えれば、まずネガティブな方向に思考が偏ってしまうのは無理もない。

——“天国”……？

自分はいつの間に、死んでしまったのだろうか。

あの後、青佐諸共魔女に食われてしまったのだろうか。

……駄目だ。いくら頭を捻っても、思い出せない。

しかし、不思議だ。

仮に死んでいるというのなら、何故、悲しいとか悔しいとか云う気持ち湧いてこないのだろうか。

自分はまだ、志半ばの筈。まだ何も成し遂げてなく、取り戻せてもいない——なのに、不思議と安心感で胸が満たされているのは、何でだろう？　まるで、自分、最初からここに辿り着くことが目的だったみたい。

——いや、待てよ。もしかしたら、ここが。

目的の場所なのか。

青佐の言っていた、『大賢者を深く知る者達』が集う場所なのだろうか？

〈ご明察です。環　いろは〉

「!!?」

突然、頭の中で響く、知らぬ声。

まるで魔法少女のテレパシーのように、〃それ〃は飛んできた。

刹那——いろはは思わず身震いする程の魔力を感じた。

今まで出会った魔法少女は愚か、魔女からも感じたことの無い、強烈且つ絶大な魔力反応——世界には〃災害級〃と呼ばれる『伝説の魔女』が各地で出現したという事例をいつかのニュースで観たことがあったが……自分の下に迫ってくるのが、まさか〃それ〃なのか？

勝てる見込みはない。

だけど、戦わねならない。

咄嗟に立ち上がるいろは。

そこで、いつの間にか魔法少女に変身していたことに気付く。

クロスボウを装着した右手を、魔力の感じる上空へと天高く伸ばした。

だが——次の瞬間、いろはは戦意を失った。

巨大な飛翔物の陰が、いろはを黒く染める。 “それ” は余りにも神秘的過ぎて、魔女

と例えるには畏れ多い。

だが、現実には決して有り得ない存在だった。

ゆつくりと、いろはの目の前に降り立つ。

瞳目。仰天。混乱。恐怖。絶句。

それは、象のように巨大な体軀を誇る『狐』であった。

陽を受けてギラギラと輝かしく発光する銀毛を全身に生やし、風を受けてゆらゆらと

左右に靡く九つの尾を生やした怪物が、その圧倒的な存在感のみで、いろはを打ちのめ

した。

〈はじめまして〉

だが、九尾の白狐からは相変わらず凄まじい魔力は感じるものの、自分に対する戦意



や敵意は無く。

——彼（彼女？）は頭を下げて、少年の様な声色のテレパシーでいろはに挨拶した。

「は、はじめまして……」

すっかり戦意を削がれたいろはに成す術は無く。

ただ構えていた右手を下ろし、反射的に挨拶を返すだけ。

九尾の白狐は、金色に瞬く瞳でいろはを伺うように見据えていると、

へお待ちしておりました。環　いろは。私は「ヨツル」と申します

淡々と自己紹介を始めた。

不意にあれ？　と不思議に思う。どうして目の前の怪物は、自分の名前を知っているのだろうか？

だが、「ヨツル」と名乗った九尾の白狐は、いろはにそんな疑問を呈する隙も与えず、話を続ける。

〈中樞で「教授」が貴女をお待ちかねです〉

「「教授」……？」

〈ご案内致しますので、私の後を付いてきてください〉

誰だろう、「教授」って……？

だが、白狐は既にその神々しきすら感じられる九尾をいろはに向けて、どこかへと歩み出していた。

「あ、ちよつと……」

いろはも慌てて、九尾の白狐に駆け寄った。その銀毛が瞬く巨大な後ろ足にピッタリとくっつく。

怪物が一步步歩く度に、足元の花畑は踏み躪られて無残な姿と化した——— すぐに再生し、陽気な花卉を開かせた。

不思議な光景が溢れる場所で、自分を待つ “教授”。

確か……前に、やちよさんが和泉十七夜さんの事を話した時にも、出てきたような……。

何が何だか、訳が分からない。

ただ “教授” なる人物への興味を抱いたまま、いろははただ黙々と、白狐と共にかの人物の所まで、歩を進めていく。

☆

〈あちらです〉

九尾の白狐はそう言つて、足を止めた。

一体、ここに辿り着くまで、どれくらい歩いただろう。

十分……一時間……いや、十時間は歩いたような気がするし、あつという間だった気もする。どっちかははっきり判別できない。

この世界があまりにも異質過ぎて、自分の感覚も正常では無くなつたらしい。

だが、一つだけ、思い至つた事がある。

ここは「天国」では無い。もう一つの可能性だ。

ヨヅルと名乗る九尾の白狐が、自分の体よりも巨大な前足で指し示した方角を見て、迷わずそれを確信しそうになつた。

——「夢」。

ここは誰かが見ている夢の中なのかもしれない。

自分か、青佐か、それともまだ見ぬ「教授」とやらか——

案内された場所に広がるのは、より一層幻想的な世界だった。

無限に広がる花畑——その中央で天を貫かんばかりに聳え立つのは、桜の木。

この世界を治める誇り高き王者の如く君臨するそれは、一体、どれくらいの大昔から生きているのだろうか。

1000年……2000年……いや、人間が生まれるもつと前……もしかしたら、竜が生存していた頃には、もう立派な桜を咲かせていたのかもしれない。

暖かな風によつて舞い広がる花吹雪が、空を桃色に染めている。その美しさがとても感動的で、鳥肌が立った。

と、そこで——桜華の傘の下で誰かが、幹に背を預けて立っていた。

あれが、「教授」と呼ばれる人なのだろうか？

目を凝らしてよく見る。想像していた姿よりもずっと小さくて、まるで少女の様で——

——顔が、はつきり見えた。

刹那——視界が、震えた。

知らない間に熱いものが溢れて、頬を伝っていた。

嬉しさが心を埋め尽くして、胸が爆発しそうだ。

脳を血が勢いよく駆け巡り、かっと熱くなる。

——ああ、そうだ。求めていた。今まで探し求めてやまなかつたものの一つが、目の前に居る。

ここがもし「天国」で、彼女がとくに生きていなかったとしても、いつか消えてしまう「夢」の中であつたとしても。

自分は、待ち望んでいた。

彼女との再会を。

彼女と、楽しく話し合える日々を。

気がついた時には、足が自然と彼女の目の前まで駆け寄っていた。

—— ああ、同じだ。

魔法少女みたいな服装こそ違っているが、その顔も、髪型も、体格も、あの頃と何一つ変わっていない。

いろはの口が、ゆっくりと開かれて、震えた声で、かの者の名が囁かれた。

「ねむちゃん」

小さな少女の口元が、うつすらと弧を描く。

あの頃——うい、灯花、自分に囲まれて楽しく話し合っていた時に、よく見せたのと、全く同じ笑顔で——

「久しぶりだね。環　いろは」

機械の様に淡々とした、か細い声色で彼女は自分の名を呼んでくれた。

それだけで十分だった。

—— ああ、忘れない。決して忘れない。

—— 貴女は私の、人生の一部。

—— 私にとって、家族と同じぐらい、大切な人。

—— その名は、終　ねむ。

「いや……初めまして、  
というべきかな？」

そして、神浜市では  
“教授”と呼ばれし者——



## FILE #54 魔法少女いろは☆マジカ

『人間は、動物と超人のあいだに張り渡された一本の綱である——  
深淵の上にかかる綱である』

——フリードリヒ・ニーチエ『ツアラトウストラ』より

## 花畑・万年桜の木の下

「はじめまして、というべきかな……？ 環 いろは」

一迅の風が吹き、二人の間を無数の花卉が罷り通った。

視界が一瞬艶やかな桃色に染まった。まるでその光景は、頭上に君臨する超樹が二人の再会を祝福しているかのようであった。

だが、いろはの顔は、固まっていた。

出会い頭に囁かれた『久しぶり』とは相反する、その一言によって。

「えっ……？」

違和感。困惑。言葉を大事にするねむとは思えぬ、明らかな矛盾。

「初めまして……？ えっ……だって、さっき、久しぶりって……」

「ああ、そうだね。僕は古くから君を知っている。だけど、僕は今、初めて君と会ったんだ」

ねむは機械の様に淡々とした声色ながらも、その口元は吊り上がっており、嬉しさが溢れていた。

いろはには、何が何だか分からなかった。

「自分を昔から知っているのに、初めて会った……って、どういうことだろう？」

「……君は僕のことを、どれくらい覚えてる？」

不意にねむがそんなことを尋ねてきたので、いろははハッと我に帰る。

聞くまでもない。

「ねむちゃん、貴女はわたしの親友だったよ。私の妹のういが、神浜総合病院の小児科

病棟に入院した時に、あなたと……灯花ちゃんと同じ病室になったの」

話しながら、いろははねむに不審感を抱いた。

何故なら、灯花の名前を出した時——一瞬だけ、彼女の瞳が鋭くなったからだ。

「科学者のエゴイスト・灯花ちゃんと、想像するラシヨナリスト・ねむちゃん。二人は私とういとは次元が違うぐらい頭が良かった。でも、同室のういとは仲良くしてくれた。私のことを「お姉さん」って慕ってくれた。よく四人で色んなことを想像して、話したんだよ？ ……覚えて、ない……？」

「いめん」

ねむは間髪入れずに、小さく首を振った。

そんな……と、いろはの顔から喜びの熱が消沈していく。折角再会できたのに、あの輝かしい日々を、覚えていないなんて。

しかしねむは、青褪めるいろはの顔を力強く見据えて、こう述べた。

「でも、それは決して忘れた訳じゃないんだ」

「えっ？」

おかしい。自分の知るねむは、こんなに違和感のある話し方をする子だったか？

どうということ、と尋ねるよりも早く、ねむの言葉が紡がれる。

「ふむ……。どうやら君の知る僕と、君の目の前に居る僕は別人のようだ」

「えっ？」

「僕の手を握ってごらん」

ねむが喋る度に、いろはの混乱は深まる一方だ。

このままでは埒が明かないと、ねむは、開いた手のひらをいろはに向けて、グツと伸ばした。

「端的にだが、僕が何者かを伝えることができる」

口で説明してもいいが、長つたらしくなるのでね——と言うねむの表情は、凍りつくいろはとは対照的に、どこまでも朗らかだ。

いろはは戸惑いを拭いきれぬまま、指を絡めるように、彼女の手をぎゅつと掴んだ。

——景色が一変する。

『……君は、良いやつだな』

『……滑稽だろ？ だけど幼稚な私は、本当に“僕”になる日が来ると、信じていたんだ』

『私は愛する。働き、工夫して、超人のために家を建て、超人を迎えるべく、大地、動物、植物を整える者を』

『……もうやめてくれ。自分だけが正常であろうとするのは』

『……だが、それは今の我々には不可能だ』

『……君の言う通り、我々は自らの“良心”でそれを改善しなくてはならない。節制と

貞潔を……我らに与え給うた神への敬意によつて、それ自体を愛さなければならぬ』

『……わたしの頭の中は、いつの間に、こうなつたんだらうか……？』

『ねえ、たまき……』

『たまき』

『!!』

ハッと気がついた頃には意識が現実に戻されていた。

———  
今のは……？

脳が落ち着かない。グラグラと激しく揺れるそれが今にも頭蓋骨を割つて飛び出してくれそう。

だけど、目の前に居るねむが何者か、分かつた気がする。

——夢の中でいつも見る、暗い洞窟の様に一切の光が遮られた研究所。

——その中で、一度だけ出会ったことのある、白衣の女性。

彼女の言う通りだった。自分はねむを知っていたが、今、初めて会ったのだと。

いろははねむから手を離して頭を抱えると、震える目でおそろおそろ見つめた。いつの間にか陽が傾いたのか、ねむの顔には陰りが指していた。相貌が暗黒に染まっている。

「ねむちゃん……あなたは……っ！」

薄っすらと確認できるねむの顔からは、表情が消えていた。

「そうだ、たまき。僕は君が覚えている『柊ねむ』じゃない。だけど君の記憶の中に確かに存在する『柊ねむ』なんだ」

「?!?!」

目眩がする感覚だった。

まるで地球の酸素が無くなってしまったかのように、いろはは喘いだ。視界から色彩が失われていき、息苦しさが募る。脳内から血の気が引いて、足元が覚束なくなる。

どういふことだろうか、これは。

彼女が、自分の信じていた『記憶』の中の大切な人では無く——忌々しい『夢』

の中で自分を知っていた誰かだった……? ?

フラリと——その場で崩れ落ちそうになるいろはの背中を、何かを支えた。

〈ふむむっ〉

「えっ！」

体制を立て直し、後ろを振り向いて瞠目する。

そこにいたのはピンク色の体毛を生やした、小さな犬のような、見たことの無い生物だった。

大きさ的には、神浜市のみでよく見る“小さなキュウベえ”と大差ない。

“それ”が現実には有り得ない証拠に、額にルビーのような紅い宝石が嵌められている。

「ありがとう。『月出里』（すだち）」

〈ふむ、ふむっ〉

ねむに名前を呼ばれた謎の動物は、ハサミのように尖った両耳をパタパタと左右に振りながら。

嬉しそうな鳴き声を挙げて、紅い粒子を纏いながら飛翔した。

ねむの肩にちよこんと座る。

「この子は……？」

「助手の一人、『カーバンクル』の『月出里』だ」



「カーバンクル？」

「伝説の生物だ。覚えてないかい？」

不意にいろはは後ろを振り向いた。

巨大な九尾の白狐「ヨヅル」は、自分が駆け出した場所から一步も動かずに、金色に光る両目で二人を見つめている。

凜然と立っているだけだが、一分の隙も無い。泰然自若とした風格は正に、巨大な観音像の如き神々しさが感じられて――。

彼（彼女？）といい、今の月出里といい……いつの間にかねむはポ○モンマスターもビックリする程の伝説の魔物使いにジヨブチェンジしたらしい。

「ごめん……」

そして、彼女の口から次々と出てくるのは、自分が記憶の断片にも触れないことばかりだ。

「むふ、君の記憶の僕とはあまりにも掛け離れすぎて、頭の整理が付いていかないか」「うん……でも、分かったこともあるよ」

「へえ、それは興味深い。是非聞かせて欲しい」

「ねむちゃんはねむちゃんだってこと」

いろはは現実には有り得ない世界を一瞥し、微笑みを見せてそう言った。

『虚構に憧れるラシヨナリスト』——それが、記憶に有る二人のねむを結びつけていた。

かつて、重病を患い、病室という箱庭に閉じ込められたねむは、自分が世間から評価される唯一の方法として『小説』を取った。

体が不自由でも、スマホが一台あれば、その凡人とは隔絶する頭脳に積もりに積もった知識を披露することができると考えたからだ。

結果的に、彼女が小説投稿専用サイトに上げた作品は、何れも、絶大な人気を誇り、ブックマーク数や評価は未だに首位の座から覆されることは無い。

「芯の部分だけは、違わない。貴女がどんな人間になっても、創造するねむちやん”なのは変わってない”」

「……君は、僕がこの世界を想像したと?」

いろははふふつと笑みを零した。

「だって、ねむちゃん以外に考えないよ。こんな世界」

ねむも、むふ、と笑い返す。

「成程。それもそうか」

「”大賢者様”ってねむちゃんのことだったんだね?」

そうでなければ、この様なフィクションは生み出せない。

ねむがいつ、魔法少女になったのか知る由も無いが、その折に大賢者としての素質を持つていたのならば……全て、合点がいく。

絶大な魔力を以て、この世界を創造し、ヨヅルや月出里といった強大な魔物を従えているのだと。

しかし、

「いや、それに関しては不正解だ」

即座に首を振って否定。

「僕はあくまで『教授』としてこの地に居る」

『大賢者』は別にいるのだとねむは答えた。

「その……『教授』って何なの？」

「神浜市に根ざす、魔法少女生命維持システムを管理・調整するのが僕の役目だ」

そういえば——と、いろいろは思い出す。

やちよが以前、和泉十七夜の事を話してくれた時だ。

彼女は、『教授』が創り上げた、神浜市にある魔法少女生命維持システムを世界に広

げたい……と。

「ねむちゃんが、開発者なの？」

「まあ、そんなところだ」

不意にねむは、視線を明後日の方向へ逸らした。そこには誰もいない、無限の花が広がっているだけ。

だがねむは、「観てごらん」と言つて、いろはに促した。

次の瞬間——瞠目。

花畑の中心から、青白い浮遊物——創作物でよく見る、人魂ヒトダマのような形状だった——が出現すると、一直線に、蒼天に向かって上昇していく。

やがて、太陽の付近まで近づくと——

刹那、轟音。閃光。爆発。

まるで打ち上げ花火のように豪華絢爛な散花が青空一面に広がった。

「……………」

揃つて空を仰ぎ、「人魂」の行く末を見届けたいろはとねむは、その光景に目を奪われようだった。

暫し、呆然とするいろはであったが、不意に鼻を噉る音が隣から聞こえて、ねむを見る。

彼女は泣いていた。

そのぼんやりとした半目が歪み、一筋の雫が、つう、と零れだした。

「ねむちゃん……？」

一体なんだか分からない。

だが、ねむが泣いているなら心配だ。いろはは声を掛ける。

「ごめん。お別れするのが寂しくてね……」

首を振ってねむは答えた。

「お別れ……？　今のつて、もしかして……？」

まさか、と言いたげに大きく目を開きながらいろはが問いかける。

頷いてから、ねむはポツリと答える。

「『死者』だ」

「っ!？」

仰天の余り、おもわず腹の底から悲鳴があがるかと思つた。

それが定かなら、本当にここは『天国』に相違ない！

ねむは相変わらず天を仰いだまま、言葉が続ける。

「たまき。大昔より桜の木の下には何が埋められていたか、知ってるかい？」

人魂の花弁が蒼穹に吸い込まれる様を見届ける、ねむの濡れた瞳には、確かな憂いが込められていて。

「…………えっ?」

いろはは、初めて見る彼女の表情に、一瞬、驚愕も忘れて見つめてしまっていた。そして、不意に投げかけられた質問に、我に返り——硬直。

いきなりそんなことを尋ねられても、頭が回る筈が無い。

現実には有り得ない光景ばかり目の当たりにしているのだから、凡人の自分が何を言っただとところで、ハズレにしかならなそう……。

「死体だ」

「はっ!？」

「梶井基次郎のある短編の冒頭に、こう書かれていた」

衝撃を受けるいろはを意に介さず、ねむはこう続けた。

——【櫻の樹の下には死体が埋まっている。】

「知っているかい？」

ねむは涙に濡れた瞳のまま、朗らかに笑って問いかけてくる。

——知らない。でも、どこかで聞いたことあるような。

「…………無いような…………うーん…………はつきりとは…………」

頭を抱えながら、いろはは悩ましく答えると、ねむは、むふ、と含み笑い。

「そうか。思い出せないか。まあ、仕方が無い」

ねむは独り言のようにぼやくと、再び天を仰いだ。

今の一言が、妙に気になった。やはり彼女は知ってるのか。自分の知らないことを。あの忌々しい『夢』の中の出来事を。

「……ねむちゃん？」

「桜の花が淡い紅色なのは、埋められた死体の血を吸っているからだ」

超樹から無限に舞い散る花弁の一枚が。

ねむの、そつと差し出された掌の上に、ふわりと落ちた。

——なんて恐ろしい話だ。ぞつと背筋が寒くなって、いろはは青褪める。

「そんなことが……」

「いやいや迷信だよ、たまき。でも、現実には有ったら面白そうだと思わないかい？　ここ

は、僕がその話・「櫻の樹の下には」を基に創り上げた世界なんだよ」

「じゃあ、本当にここは……天国なの？」

「まあ、似たりよつたりだね。ここは、神戸市のどこかで亡くなった魂が眠る場所なんだ」

ねむが再び花畑を見渡し、いろはも合わせるように地表を眺めた。

無限に咲き誇るリングの花々、その一輪、一輪こそが人の魂そのものだと、ねむは説明する。

「さつき、空に飛んでいったのは……」

「ああ、あれは『お役目』を果たしに行ったのさ」

ねむは説明を続ける。

——魔法少女の魔力は燃費が悪い。それは魔法少女であるいろはも重々承知の事実である。

日常生活を送るだけなら一週間は保てるが、一度魔女と戦闘を交わせば、一気に限界まで濁ってしまう。

故にグリーンフシードは必要不可欠だが、魔女は大量には発生せず、かといって確保するには、魔女が生み出す使い魔を放置しなければならない。

「その問題を解消するのが、彼らだ」

ねむは、慈しむような瞳で花畑を見渡しながら、答えた。

「人間は死んだ時、葬儀を行い成仏されると謂うがそれは誤りだ。大半はこの世に未練が残り、地の深くに留まってしまう」

所謂、『地縛霊』だね——とねむは付け加える。

「極楽浄土へ旅立てなかった魂は、『大賢者』の下へ導かれて『浄化』される。そして、



この【楽園】へと誘われる。僕は彼らを説得し、魔法少女の力になってもらっているんだ。七海やちよと朝香美代……神浜の魔法少女は、あまりソウルジェムの穢れを気にしてなかっただろう？ つまりは、そういうこと。調整を受けた時、彼らが魔法少女の魂に宿るんだ」

グリーンフィードに変わる、無限の魔力としてね——と、解説するねむの顔つきが、だんだん得意気になる。

「凄い……！」

「ああ、我ながら実にファンタジックで、ダイナミックな発明をしたと思っているよ」

いろはにとつては突拍子も無い話だが、その“大賢者”の力が、美代の言葉通りの存在なら——それにねむの想像力が付与されれば、不可能では無いのかもしれない。

「そういうえば……」

「でもねむちゃん……」

「ん？ とねむは横目で見た。

「本当の大賢者様って、どこにいるの」

ねむは、むふ、と含み笑い。

「君は誰に誘われてここに来た？」

「えっと……？ 夕霧青佐さんに……」

そうかそうか、とねむは嬉しそうに頷く。

「僕の居場所は青佐しか知らない。これがどういう意味か、分かるよね？」  
アツというは口を大きく開けた。ということは――

「青佐さんと、仲が良いいんだね……」

――つまり、そういうことだ。

答えに行き着くと、期待に高ぶっていた頭の熱が急激に冷えていく。

「正解。僕は居場所を知ってるが、君に教えるつもりは無い。言えるのはせいぜいヒントぐらいだ」

やっぱり……！

正直、意地が悪いと思う。

いろはの両肩がガツクリと落ちた。

「そうか……やっぱりソレって、教えるとその人の為にならない……から？」  
「それもある、だがもう一つは、君に『役目』を全うして貰いたいからだ」  
眩しい。

不意に、自分に向かって陽が強く差し込んできて、いろはは目を細める。

「役目」……？ そんなもの、いつの間に与えられたんだろうか？

いや、それよりも。

私なんてどこにでもいる普通の女の子で。

役目なんて、こなせる筈も無いのに。

「君は……」

頭に満ちる疑問に答えるように、ねむが口を開いた。

—— “主人公” だ。

☆

『 “主人公” …… そんなものに、私が……？ 』

『 なるさ。 …… いや、ならざるを得ない。 何故なら “彼ら” が君を選んだからだ。 こ

ここに眠る無数の魂が、君と言う新たな物語の担い手を求め、神浜に誘った』

『魂が、私を……!?!』

『君は成し遂げる為に神浜に来たのだろう、たまき？　そして、彼らは君の欲求に応えてくれる。見えないところでね。君は、“運命”を味方に付けたんだよ』

『でも……私、そんな大それた人間じゃないよ。みんなの期待を背負ったことも無いし、応えられる筈も無い』

『大した謙遜だね。君はまだ何もしていないと言うつもりかい？　……反論しよう、“否”だ。君は既に幾度も状況を変えてきたじゃないか』

『あれは……全部たまたまで……』

『自覚無き賢者は、誰もがそう宣うのさ。選ばれたということはつまり、君は“主人公”の実力を持つていて、という事実にはならない。自信を持ち、胸を張れ。立って歩け。前へ進め。その力で状況を生み出せ。人を動かし、世界を変えろ。全てを味方に付けて、奪われたものを挽ぎ取ってやれ』

『……どうしたらいい？』

『まず、七海やちよに会い、大賢者の事を尋ねてみるといい。それがスタート地点となるだろう』

——ヨヅルと月出里に誘われて、いろはは帰っていった。主人公の舞台——神浜へと。

万年桜の木の下には、ねむがただ独り、佇んでいる。

彼女は、いろはが去り際に残した言葉を思い出していた。

『ねえ、ねむちゃん』

『なんだい？』

『ねむちゃんの知っている私って、ねむちゃんと仲が良かったのかな……？』

それが、一番聞きたかったことなのだろう。ねむは迷わず頷いた。

『——うん。君と僕は“親友”だった』

そう伝えた時、いろはは心の底から安心したのだろう。瞳が頭上に瞬く太陽のように、燦々と輝き出したのだから。

もう、大丈夫だ。

「そうだ。例えば世界が違ったとしても……僕が僕で無くなっても……君が僕の知らない

君になってしまっても——僕達はいつか、きつと巡り会っていたらろう」

そんなことを独り言ちながら、ねむは、むふつと小さく不適に笑った。

何てラシヨナリストらしからぬ思考回路か。

でも、彼女を前にすると、そんな運命染みたロマンチズムを感じずには居られない。

——不意に、いろはが立ち去った方向を見つめた。

そこには誰もいない、無限の花畑が広がっているだけ。

だが、ねむは遠くを眺めるように細くした視線のまま、ゆつくりと口を上下して、

「——のがれよ、わたしの友よ、君の孤独の中へ」

と——ある言葉を紡いでいく。

「わたしは君が毒ある蠅どもの群れに刺されているのを見る。のがれよ、強壯の風が吹くところへ」

時間の経過で陽が動いたのか。ねむの顔に、再び影が差し込み、暗黒に染めた。

「のがれよ、君の孤独の中へ。君はちっぽけな者たち、みじめな者たちの、あまりに近くに生きていた。目に見えぬかれらの復讐からのがれよ。君にたいしてかれらは復讐心以外の何ものでもないのだ」

独白される言葉の真意は、彼女以外には分からず。

「彼らに向かつて、もはや腕はあげるな。かれらの数は限りがない。蠅たたきになることは君の運命ではない」

漆黒の仮面の裏に秘めた感情も——彼女以外、誰にも知り得る事は無かった。

—  
楽園

F I L E  
# 5 5  
彼女達のスタート地点



〈ここが貴女の「出発地点」です〉

ねむの助手を務める二匹の伝説の魔物——【九尾の白狐】ヨヅルと、【カーバンク  
ル】月出里（すだち）に導かれて辿り着いた先は、自分がこの世界で最初に居た場所だつ  
た——らしい。

……というのも、歩き始めて数時間は、空は蒼・地は花畑という今と全く変わらぬ景  
色が続いていたからだ。いろには、全く判別が付かないが、二匹には分かるらしい。  
ヨヅルがいろのはの体の倍はあろうかという巨大な前足を伸ばし、

〈これから、月出里の力で、貴女を現世に送ります〉

——と、その地点を指し示しながら、テレパシーで教えてくれた。

月出里はちよこんというはの肩に乗る。横目で見ると表情は自信に満ちていて、いつ  
でも準備オツケーと言いたげだ。

「ありがとうございます」

〈よろしいのですか？〉

二人に感謝を述べて、ヨヅルの差した地点へ移動するいろはだが、ヨヅルに呼び止め  
られた。

「えっ!？」

振り向くと、その威厳溢れる風格に相応しい、黄金に光輝く巨眼が自分を真っ直ぐ捉

えていた。

瞬時に、猫に狙われたネズミの恐怖を理解したいろはは、硬直して足を止める。

「貴女には知らなければならぬ事が沢山あった筈。『教授』に尋ねなくて、本当によろしかったのですか？」

「……………」

目が一瞬だけ下を向き、下唇を噛んだ。

それは、自分がよく見る『夢』の話だろう。

記憶に無い。だけど、本当に経験したかのように、リアルで、鮮明な内容。

ねむは確かに言っていた。『自分はいろはの記憶に確かに存在する』のだと。

だが、別人——

あの輝かしい日々で共に遊んだ無垢な子供では無く、洞穴の様な場所に閉じ込められて、夥しい『何か』を研究していた、知らない大人だった。

「そうだね……………」

「何故、無碍にしたのですか？ こんな機会は二度と無いかもしれないのに……………」

ヨヅルはその精悍な瞳でいろはをじっと見つめてきた。肩に乗る月出里も、心配そうにいろはの顔を覗き込む。

だが、いろははふふつと笑い返した。

「ヨヅルさんなら、分かりますよ」

〈??〉

何がだろう。純粹に分からない、と言いたげにヨヅルは首を傾げた。

「だって、ねむちゃんって意地が悪いから。聞いたって教えてくれませんよ、きつと」

〈ああ、成程〉

納得いったように上下に首を振り回すヨヅルにいろはは可笑しくなった。

「だから、いつか、私の準備が出来たら聞きに行くって、伝えておいてください」

〈かしこまりました〉

「ありがとうございます。ヨヅルさん、今日は失礼しました。あと、月出里さんも！」

〈ふむっふむっ！〉

笑顔で呼びかけた途端、自分の肩に乗っていた桃色の珍獣が、嬉しそうな鳴き声を挙

げながら元気よく飛び回った。

〈またきてねー、と月出里は申ししております〉

「分かるんですね……」

まさかの通訳にいろはは啞然。

なんだろう。魔法少女がテレパシーでお互いに会話できるように、怪物同士、何か通

じ合うものがあるのだろうか。

「へえ。かつて私は心理学者でありましたので、月出里の表情、仕草を見るだけで、何を伝えたいのかが手に取るように分かります」

「へえ……えっ!？」

一瞬納得しかけたが……よくよく考えるとおかしい話だ。

怪物の心理学者ってそもそも何だ。そんな職業が彼女達の世界に存在しているのだとしたら、相当文明が進んでいるに違いない。

「凄い……」

思わず口から感嘆が零れるのも無理は無い。一方のヨヅルは首を傾げるだけ。

「何が、でしょうか?」

「……いえ、なんでも」

「では、月出里」

「ふむっふむっ!」

月出里は頷くと、再びいろはに肩に乗った。

そして額に嵌められたルビーから紅い粒子を放出し、いろはの全身を覆い始める。

ああ、これから帰るんだ——

何だか凄い体験をしてしまった。

天国のような場所で、伝説の魔物と遭遇し、探してた人に出会えた。今日のことを何て伝えようかな。

みかづき壮のみんなに、鶴乃ちゃんとか葉ちゃんとか、友達に。みんなビックリしちゃうかな。

それとも、羨ましがられちゃうかも？

期待に胸を躍らせながら——いろはの視界はゆつくりと、闇に閉ざされた。

〈無事、行かれたようですね〉

〈ふむむ、ふむ〉

〈珍しく嬉しそうな顔してるね、と？〉

〈ふむ！〉

〈……そうですね。羨ましかつたのだと思います。彼女が〉

〈ふむ？〉

〈……環いろは、いつか私も自由の身となり、貴女のように〉

——大切な人を探しに行きたい。

——そして、自分が“何者”で有ったのか、確認したい。

九尾の怪物は、月出里から目を逸らし、いろはが消えた場所をずっと見つめていた。

☆

ハツと意識が戻った頃には、視界に見覚えのある景色が広がっていた。

—— 神浜市役所・市長執務室。

「おかえりなさい、いろはさん」

見覚えのある木彫りのデスクと、見覚えのある初老の女性が、いろはの居る場所を証明していた。

帰ってきたのだ。現実の世界に。自分が、戦っていく舞台に。

不意に視線を下に向けると、いつの間にか服装も私服に戻っている。

「今のは……?」

「ん?」

「……今のは、何だったんですか?」

震えた声でいろはは先ず、青佐にそう問いかけた。青佐はニツコリと笑って、

「ただの道案内よ」

そう返す。当たり前だが、それで納得いく筈も無く。

「でも、今のあれは、普通の人じゃできないですよ。もしかして青佐さんって」

魔法少女なんですか? と問いかけると、青佐は吹き出した。楽しそうにクスクスと

笑い声を響かせる。

「……笑わなくてもっ」

「ふふ、ごめんなさい。素直に『はい、そうです』って答える私を予想してるのかなあ、って思ったら可笑しくなっちゃってね」

いろはは目を丸くした。

「違うんですか？」

「それも、課題として与えるわ。いろはさん」

「そんな……」

「大丈夫。貴方だったら、いずれ分かるから。……それよりも、『彼女達』から知りたいことは聞けた？」

それに関しては、勿論。

いろはは反射的にコクリと頷いた。その表情は自信に満ち溢れていたという。

☆

—— 一方、由比鶴乃

—— 東京都・目黒区

時は少し遡る。

鶴乃は神浜とは遠く離れたこの地区にあるという中山の息子夫婦の家を訪ねていた。



理由は単純。かつて同じ商店街で仲間だった陶器店主の中山三郎に会う為である。河野と違うのは、彼は突然、参京商店街から出て行ってしまったのだ。

誰にも何も伝えず、伴侶同然と言っていた商店も、そのままに。自作の陶器類も置き去りにして、店を閉めて……

だが、先日、中山が皇グループや七海やちよの企画に乗り、中央区で店を営む若い陶芸家や職人、学校の子供たちに、(テレビ電話や分身ロボットを通じて)芸術指導を施していると聞いて、嬉しかった。

中山はまだ活きている。今もまだ、自分と同じ志を抱いている——  
だが、胸を躍らせながら久しぶりに会った彼は、依然とは別人と見紛う程色白で、痩せていた。

「そうか、お祭りには行けなかったが……大成功だったか」

彼の書齋に招かれた鶴乃は、近況を報告していた。

久しぶりに会えた鶴乃の元気な姿と、先のお祭りに於ける商店街の大盛況ぶりを聞いて、喜びと共に血色もみるみる良くなった。

「うん！ 皇さんもしばらく滞在してくれるって！ それにこれ、見てよ！」

鶴乃はシオルダーバッグを下げると、一枚の手紙を取り出した。

「やちよから貰ったの！ 樹里姉からだって！」

その名前に中山は意表を付かれた。目を見開いて手紙を受け取る。

「お樹里ちゃんか。長らく話を聞かなかったが、あの子も元気にしてるのかね……？」  
「つていうか、変わってない」

「??」

若干呆れ混じりに笑う鶴乃。中山不思議そうに首を傾げながらも、手紙を読み始める。

「よーおつるー!! ひさつぶりー!!」

「そーいやお前もうスマホ持つてるよな？」

「これ樹里サマの電話番号、夜露死苦！」

↓  
×××  
×××  
×××  
×××  
×××  
×××

「……なんだね、これは？」

「そりやこつちが聞きたいよっ！ 15年ぶりだつてのに感動も何もありません」

「プツと中山は吹き出した。」

「……変わらないな」

「河野の祖母ちゃんは、時代の変化で人も変わるつて言つてたけど……変わらないものがあるよとホツとするよね」

鶴乃は穏やかに笑う。全くだ、と中山もコクリと頷いた。

「でもさ、わたし、スツゴイワクワクして電話を掛けたの。そしたら、お鶴コノヤロー!! 樹里サマを二年間もほったらかしにしやがって一体何やってんだ! 今すぐウエルダンにしてやろうか!?” ってマジギレ。いや、やちよが今まで渡さなかったのが悪いんだよって言っても聞く耳無し!”

鶴乃はお手上げしながら呆れ返る。

結局弁明を伝える隙も無くギャーギャー騒がれて、一方的に切られた。

なんだよコイツ……! つと鶴乃が忌々しく思つた直後に、LINEが届いた。

“よー! おつるー!!

元気にしてるかー!! お前の姐御の樹里サマは今日も元気だー!!

理恵だけど、ウチで面倒見てるからなー! アイツも元気でやってるぜー!

あとこの前、神浜市の公式HP覗いたんだけど、お前魔法少女になつたんだってな!? お前そういうのは早く教えろよ!! 昔からの悪い癖だぞ!!

言い忘れたけど樹里サマも魔法少女なんだよ。キツイことは多かつたけど、何だかんだで12年もやれてる。心配すんな、大丈夫だから

店が大変かもしれないけど、暇が取れたらこつちに来いよ!

樹里サマがビシバシ鍛えてやつからな!! 腑抜けたこと言いやがったらウエルダンにしてやるぞ、二ヒビ(ハ皿ハ)!

「じゃなー!」

「と、まあ、こんな長文が届いた訳ですよ」

心底メーワクそうに吐き捨てながら鶴乃はスマホの画面を見せた。中山は興味深そうにまじまじと見つめる。

「ほう、今はやりのズンドコ……? というやつかね」

「ツンデレね。ってか樹里姉のツンはぶっちゃけ死んでほしいレベルだけど」

鶴乃がきつぱり言うと、中山は笑い出した。

「……本当に相変わらずだな……」

「全くだよっ!」

鶴乃は樹里にプンスコ怒っていたが、中山は違っていた。

彼は一頻り笑った後、急に神妙な面持ちで鶴乃を見つめ始める。

「爺ちゃん?」

中山は胸に手を翳した。

「……いや、お鶴ちゃん。そうやって明るく笑ってる君を見ると、つい安心してしまっ

てな……。だから、罪の気持ちがここに残る内に言っておきたい」

え？ と鶴乃は呆気に取られていると——彼は突然、頭を下げた。

「申し訳無かつたっ！ お鶴ちゃん！」

頭を畳に擦り付けて自分に強く訴える中山に鶴乃は仰天。

「爺ちゃん!? どうしたのっ!？」

中山は一体自分に何をしたのか——鶴乃にはまるで訳が分からなかった。

ずっと年上で、経験豊富な経営者で、祖父の友人でもあった彼。罪悪感が有るにせよ、尊敬する大人の一人である彼に頭を下げられるのは、正直気分が悪い。

鶴乃は慌てて、頭を上げるよう促したが、中山が頑なに上げず、

「俺のせいで、君の人生を滅茶苦茶にしてしまったっ！」

声を震わせながら、喚いた。

「……………え？」

「俺があの時、君が魔法少女だったら、等と言わなければ……!？」

中山は涙を流しながら、当時の事を語り出した。

——それは、二年前に遡る。

鶴乃が魔法少女になったと聞いた時、中山は胃が灼ける様な激痛が走ったという。

木次郎と隼太郎は気にするな、鶴乃の面倒はちゃんと見る、と言つてくれたが……自分があの時、うっかり零してしまった失言が、鶴乃の背中を押してしまった。

それからずっと彼は後悔していた。

魔法少女になれば二度と一般人には戻れない。魔女と永久に戦う宿命を背負い、いつ死ぬか分からない。

魔法少女の延命法が究明されている神浜市とはいえ、10年以上生きてるケースはまだ数少ないのが現状だ。

「今回のことは、せめてもの償いのつもりだった。何も言わず商店街から出て行つた事を、どうか許してくれ……！俺は怖かつたんだ……君が、雉さんが、もしかしたら俺を恨んでいるんじゃないかと思うと、怖くて……怖くて……っ！」

目の前の鶴乃に怯えるように、彼はその大柄の体軀をガタガタと震わせながら、嗚咽を漏らしていた。

実のところ、中山を追い詰めていたのは由比家の罪悪感だけではない。

鶴乃が魔法少女になってから、先の中山の失言を聞いた経営者達がこぞつて冷たい視線を向けてきたのも、苦痛であつた。

——子供を生贄に捧げた畜生が。

——この人殺し。

今まで仲間だった一部の住民達が掌を返すように、執拗な嫌がらせを行い、そんな罵詈雑言をしめやかに浴びせることも少なくなかった。

——もう、ここには居られない。

苦渋の決断だった。

重度のストレスで、持病が悪化した中山は、店を置き去りにしたまま、息子夫婦が暮らす目黒区で療養することに決めた。

それは、再開発計画を止める為に、普通の生活を捨てた鶴乃に対する裏切りに他ならなかった。

「俺は、大馬鹿者だ……！ 一番辛い思いをしているのはお鶴ちゃんだと分かっているから……っ！」

我が身可愛さに、逃げた。

その後、医師の治療によって、暴れ回っていた病魔は治まってくれたが、罪は拭えない。

「頭を上げてよ、爺ちゃん」

「……お鶴ちゃん？」

グシャグシャに歪んだ顔を上げて中山は驚いた。

自分に怒るとばかり思っていた鶴乃が、優しく微笑んでいたのだから。

「爺ちゃんは、何も悪くないよ」

その顔が眩しくて見ていられない。

中山は目を逸らして、クツと歯噛みする。

「だが、俺は……」

「魔法少女になったのは、私の勝手だもん。自分の責任は、自分で持つよ」

中山はその言葉に食いついた。

「しかし……！ 君のお母さんとお婆さんは、亡くなってしまったじゃないか……！  
あれも、もしかしたら……っ!!」

悍ましい怪物を目の当たりにしたように、中山の顔は蒼褪めていった。

あれも『魔法』の仕業では？

目に見えないものが、人の運命さえも操作し、あんな残酷な結末を創り出したのでは無いのか……!?

中山がつい、そう問いかげようとした瞬間。

「あれはっ!!」

突然、叫んだ鶴乃に、中山が震えを止めてギョツと驚く。

「……………運が、悪かったんだよ。たまたま乗った船にあんな奴らが、テロが、



居たから、殺されちゃっただけなんだよ。誰も悪くないんだよ。わたしも、おんじも、爺ちゃんも……っ!!」

鶴乃は隠すように、顔を下に向けながら、小さく呟いた。

それは、どこか自分に言い聞かせるようにも聞こえたし、急激に湧いた怒りを必死に喉元で抑え込んでいるように聞こえた。

「お鶴ちゃん？」

しかし、その怒りが自分に向けられているものでは無いと分かり、中山は目を丸くする。

「……それにね、爺ちゃん」

鶴乃は迷いを振り切るようにかぶりを振ると、再び穏やかに笑って見せた。

「私、今、幸せだよ」

「え？」

「魔法少女になってから、友達が出来たの。その子のお陰で、私は本当にやりたいことを見つけた」

だから、もう迷わない。間違わない。鶴乃はもう誰の為に頑張らない。これからは、今の自分の幸せを守る為に精一杯働く。そして、自分に幸せを教えてくださいました人達の為に、努力して、強くなる。

だから――

「安心して、爺ちゃん。私は大丈夫だよ」

太陽の様にニツコリと笑って、鶴乃ははつきりと伝えた。

「……！　そうか……安心して、いいのか……」

強張り続けていた中山の肩が、力が抜けたように、すんと落ちた。

中山の顔は相変わらず涙と鼻水でぐしゃぐしゃだったが、そう呟いた口元は、微かに笑っていた。

「それよりもさ、爺ちゃん！　やちよに聞いたけど、子供たちに陶芸教えてるんでしょ!? そのことちよつと聞かせてよ!」

彼にずつと取り憑りついていたものを、ようやく祓えたのだろうか――そうあってほしい。

鶴乃は願いながらも、中山が前へ向いていける話題を振った。

中山は猿の様に皴塗れの赤くなった顔で、笑って答える。

「ああ、それはね――」

楽しそうに話し始める中山。ウキウキと話を聞く鶴乃。

二人が居る書斎にはいつまでも、暖かくて、穏やかな空気が満ちていた。

☆

—— 楽園・万年桜の木の下の

楽園にも夜は有る。

ねむ個人には必要無いのだが、生物であるヨツルや月出里、そして群がる花々に一時の安息を取らせる為に、眠る時間を設けたのだ。

巨大な桜華の傘の下で、ねむは幹に背中を預けて、黒マントをタオルケット変わりに

体に掛けて眠っていた。

〈ふむ、ふつ、ん……〉

——が、安息は束の間で終わった。

足元で苦しそうな呻き声が聞こえて目が覚める。

「……魔うなされているのかい、月出里」

〈ふ、むつ……ふつ……〉

黒マントをめくると、膝の上でカーバンクルが丸くなっていた。

瞼は閉じてるから、眠れてはいる。しかし、何かに怯えるようにガタガタと震えていた。

〈教授〉

と、そこで、巨大な九尾がゆったりと花畑の向こうから歩み寄ってくる。

「ヨヅルかい」

〈今日も、ですか〉

うん、とねむは頷く。

楽園に時計は無い。しかし、ねむは現実の時間を正確に把握していた。

——数え始めて一週間と8時間、月出里の眠りが浅い日が続いている。

起きている時は、普段と変わらず無邪気に花畑を跳ねまわり、宿る魂魄を癒してくれ

ているのだが……眠っている時だけ、明らかに様子がおかしい。

だが、月出里に尋ねても、全く覚えていないのだ。

亡くなる魂が増えたので、疲れが溜まっただけかもしれない——と、ヨヅルは言うが、ねむは気がかりでならなかった。

月出里は、ヨヅルとねむが感じないものを感じ取れる力が有る。

超常的な——筆舌に表現し難い、“何か”を。

〈ふ、む……ふつ、ふん……〉

普段の元気瀟刺な姿に癒されているのは、ねむも同じだ——表には出さないが、恐らくヨヅルも——。

震えながら、ブツブツ何かを苦しそうに唱える彼女の様子は見ているだけで辛い。

「だけど、珍しく寝言を言っている。分かるかい？」

〈……〉

ヨヅルは黙して、じつと月出里に視点を合わせると、強く念じた。

〈！〉

——やがて、驚いたように瞳が大きく開く。間髪入れずにねむが問いかけた。

「何て言っている……!？」

気持ちを取り直すように一呼吸してから、ヨヅルは答えた。

「目が見える、と申しております」

「目……?」

「血のように真っ赤な目が、私を睨んでいる、怖い、助けて……と、申しております」

「ツ!!」

「そう伝えた瞬間——ねむの顔が豹変する。」

「教授?」

突然、今にも憤激せんとばかりに険しくなったねむの形相を、ヨツルは怪訝そうに見つめる。

だが、今のねむはヨツルを全く意に介さず——その鋭くなった瞳で虚空を睨み据えながら、怒りを噛み殺すような低い声で呟いた。

「……やはり、貴女の仕業なのか……!?!」

☆

「わたくしの挑戦状は受け取ってくれたかにやー?? 柎 ねむ」

——楽園とは一転。

黒一色に塗り潰された暗黒の中核で、少女は無垢に嗤っていた。

豪著な玉座の上で悠然と立ち尽くすその姿は、まるで自らがこの世界の王だと証明しているのかの様——当然だ。『ここ』は彼女のテリトリー。誰も足を踏み入れる事も、見る事もできない。

日秀源道や梓みふゆさえも決して辿り着くことは叶わぬ、彼女だけの聖域。

赦されるのは——

へご無沙汰しております。プロフェッサーへ

——『適合者』のみだ。

プロフェッサーと呼ばれた女の子・里見灯花は、突如漆黒に大きく映し出された正方形の画面に映る、その女の顔を見据えながら、胸中で独り言ちる。

「『490』。久しぶりねー」

灯花にそう呼ばれた女の口元が微かに吊り上がる。

女の相貌は、見た所、灯花とは同じ年齢か、少し上の12〜4歳程の少女に見えた。だが、その微笑みは冷たく、灯花と視線を交じ合わせる右眼は鋭利に研ぎ澄まされていて、子供らしい純朴さなど微塵も内に無い事は明確だった。

「そちらの様子はどう？」

画面の女の笑みが深まる。

〈順調です。我が担当地区の重工業は全て、プロフェッサーの計画に賛同を示しました〉

「良い傾向ねー」

計画が思い通りに行くほど愉快な事は無い。

灯花は心の底から、嬉しそうに笑って見せた。画面の女も、その表情を待ち望んでいたとばかりに、満足そうに頷き返す。

〈それとプロフェッサー、予てよりご要望されていた「ドロシー」ですが、今しがた試作機の製作が完了いたしました。近日中にご照覧頂きたく願います〉

エメラルドの右目が不気味に瞬いた。灯花は念願の玩具が手に入った子供のように喜んだ。

「ありがとー！ じゃあ第二フェーズに以降したら、そっちに行くよー」

〈貴女様のご来訪を、心より楽しみにしております。それでは——〉



女はそう言つて恭しく頭を下げた後、敬礼。

へ全てはプロフェッサー・マジウスが思い描く、我ら魔法少女の未来の為に

——失礼いたしました。

女は最後にそう会釈すると、画面を閉ざした。

再び漆黒が完全支配する空間で、プロフェッサー・マジウスは、静かに独り呟く。

「さて、環　いろは。貴女はどう出てくれるのかにやー？」

両目が鮮血の如き真紅に染まった彼女の形相は、残忍に歪んでいた。

FILE #56 MONSTER Ⅱ 〈凶犬〉  
深月フェリシア 編 |

正義は人生の指針たりとや？  
さらば血に塗られたる戦場に  
暗殺者の切先に  
何の正義か宿れるや？

—— 太宰 治『人間失格』より、ルバイヤットの詩句

『力なき正義は無力なり、正義なき力は暴力なり』

.....

.....

.....ああ？

——ワリいワリー、オメーオレに話してたんだな。で、なんだそれ？

——いや、知ってるぜ。『少林寺拳法』って映画のオチだろ？

あれ、ヤッペーよな。オレよりチビのガキがタバコ吸ったり、野郎のアレのナニちよん切っちゃまって犬に食わせんの……ハハハ、今じゃぜってー上映できねーってっ!!

——あ？ 違うって？

……オレに説教垂れたつもりか？

お前の暴力に正義はあるのかって？ ハッ、同類にもなれねークソが偉そうにほざきやがる。

——……………さあな、考えたこともねえよ。

でも、魔法少女の……いや、〃オレ達〃の世界じゃ【暴力】は全てだ。

腕つぶしの強さに比例して、金が増えるし、使い方によっちゃあヒーローにもヴィランにもなれる。

——分かってんだろ？ それが〃正解〃だって。

……ハッ、気に食わねーか。でもなあ、テメーをよく見なよ。

オレとオメー、どっちが正しいかなんて一目瞭然だろ。

両腕へし折られて、両膝の皿割られて、顎も外されて、頸椎もブチ折られて……。肋骨も何本叩き折ったかわかりやしねえが、肺に全部ブツ刺さってる。

けど、オレは無傷だ。正義の味方ぶるオメーをそうした。

—— ああ。

確かに魔法少女はつえー。だから弱い人間を守らなきゃいけないよな。

何せ世の経済を支配しているのは人間様だし、オレたち魔法少女が生きる為には、命の限りを燃やして人間様に尽くさなきゃいけないよな。

まさに消耗品—— エクスペンダブルズってか？

—— それが魔法少女の正義か、クソ喰らえだな。

—— じゃあな。

—— テメーが選んだ人生だ。誰も手を貸しちゃくれねーよ、テメーでなんとかするんだな。

☆

—— 次日・土曜日。

—— 神浜市役所前。

いろはは正門を潜り、庭に立ち尽くして、眼前で君臨する巨城の如き建造物を見上げていた。

いつ見ても、この建造物のインパクトは凄まじい。

なお、いろはが本日、朝一番にここに立ち寄ったのには理由があった。

—— それは昨日のことである。

夕霧青佐と別れたいろはは、迷わず市役所の3Fへと向かった。治安維持部でやちよと会う為に。

教授の話、そして大賢者のことを尋ねると、最初は神妙な顔で睨みつけられたが……それでたじろぐいろはではない。やちよもそれは重々分かってる。

……結局、にらみ合いによる双方の牽制は5分で終了した。というか、やちよの方が折れた。

彼女は、盛大に溜息を付き心底仕方がないと言った様子で大賢者に会う方法を教えてくれた。

——大賢者に会う試練とは、二つ。

一つは、治安維持部のチームリーダーを2年以上勤め上げ、且つ、神戸市から表彰される実績を挙げる事。

もう一つは、各治安維持部隊に3カ月間所属し、品行方正に業務に従事し、各チームリーダー及び各町長から功績を認めてもらうこと。

——前者に関しては、いろはは不可能であった。

何せ、神戸町には七海やちよ、慶治町には十咎ももこ、立政町には都ひなの、明京町には常盤ななか、と既に各チームには、歴戦の魔法少女達が君臨しているのだから。

それに、当然だがチームリーダーに成り上がるのは容易なことではない。長期間の下積みが必要となる。

こちらは時間が掛かりすぎるとして、断念した。

だが後者は……認めてもらう、というのが具体的にどういふことなのか判別しづらいが……どうにかなりそうだとは思った。それに、こちらは順調にいけば一年で済む。

いろはの決断は早かった。後者を受けたいとやちよに伝えると、彼女は一度深い溜息を付いて、「明日、朝一で私のところに来なさい」と言ってくれた。

「私のところに……ってことは、試験だよな、きつと……」

二つの試練の概要から顧みるに、まず治安維持部に入職しなければならない。

調べてみたが、年齢は13歳以上ならOK。この条件はクリア。あとは肝心な試験内容だが、筆記試験と簡易な適性診断を実施する、と書かれているのみであった。

なので、持参物も筆記用具のみで良い筈だが——いろはは昨日の帰りに100円ショップで履歴書を購入した。

残念ながらここは日本である。言われてない部分の“礼儀”を特に重視されるのが常だ。

そして普段から世話になってるやちよに、極力無礼な真似はしたくない、といういろはなりの義理もあった。

履歴書は何枚も書き直して、徹夜で書き上げた。

くあく、とあくびをするいろは。

ベッドに横になれたのは1時、だが緊張もあつて寝れたのは二時間。

眠い……。

元々、自己主張の弱いいろはに履歴書というものは、魔女にソロで挑むに匹敵する程の苦行であった。

途中で、論理的文章に強いまさらと、自己表現力に長けたピーターに何度も添削してもらつて、ようやく事なきを得た。



良い家族に恵まれて、本当に良かったと思う。うん、やっぱり家族って良いよね。家族最高。家族万々歳。

「お、いろはちゃん！」

「っ！」

と、急に真後ろから元氣澆刺の声を掛けられて、眠気が覚めた。振り向くと、意外な人物が居た。

「鶴乃ちゃん？」

「朝早くからどーしたの？」

私服姿の鶴乃は、きよとんと首を傾げてこちらを見つめる。

「私はやちよさんに用が……ってかそれはこっちのセリフだよ、どうしたの？」

「ああ、わたしもちよつとやちよにね……」

「??」

その名前を口から出した途端、鶴乃は何故か恥ずかしそうに頭を掻いた。

今度はいろはが、きよとんと首を傾げて不思議そうに鶴乃を見つめた。

「まーとりあえず、行こっか？」

「? うん」

そう言って、彼女は恥ずかしさを隠すようにずんずんと前に進んでいく。

様子が少しおかしい鶴乃が気になりつつも、いろはは後を付いて、共に市役所に入っ  
ていった。

☆

——市役所・2F。治安維持部・神浜町本部。

そこに、“それ”は居た。

「だーかーらあ、ちあんいじぶに入れろつつってんだろー!!」

「ですからっ！ 入職して頂くには試験を受けないといけませんし、試験を受けて頂く  
にはこちらに身分証明書の他に住民票を提出して保護申請再登録の手続きをして頂か  
ないといけませんし、住民票は市民課で発行して頂かないといけませんし、住民票を発  
行するには住所がはっきりしてないといけないんですって!!」

「いちいちメンドクせーなあ、家がねーつつつてんだろー!？」

「それだと手配できかねます。まずご親戚の方を頼って頂くなり……」

「やだよメンドクセー!! オレは今すぐここではたらきてーんだ! だから入れるよー!」

「ですからっ! いくら強いご希望がございまして、色々段取りと手続きがあつてそれを全部やる以前に、住む場所が無いと無理だつてさつきから何度も申し上げてるじゃないですかー!？」

「いちいちメンドクせーなあ、家がねーつつつてんだろー!!」

「さつきもそれ言ったでしょー!？」

「チョウセイはとづくに終わつてんだ!! さつきと入れろー!!」

エレベーターの扉が開いた直後に見えた光景に、二人は啞然。

みずぼらしい恰好をした金髪の小さな少女と、事務員の白木亜美が、受付でギャーギャー言い合っているのだから。

なお、受付の奥では、白木以外にも職員を数人見かけるが、触らぬ神に祟りなし、と言つた様子で、我関せず自らの事務仕事に専念している。

「ど、どうしたんですか?」

二人が慌てて駆け寄ると、白木が焦燥しきつた顔でこちらを見た。

「……おはようございます、環さん、由比さん……あの、実は……」

まだ出勤して間もないというのに、白木は既に疲れ切っていた。顔も明らかにげっそりしてる。

だが、金髪の少女は、白木の心労などまるで意に介さず一方的にギャーギャー喚き散らしている。

「こらボウズ、君だなー。 大人を困らせちゃダメだぞっ？」

「だー!? はなせよー!」

鶴乃が少女を後ろから羽交い絞めするが、じたばた暴れてすぐに振り解く。

「よくもボウズつつつたな、オレは男じゃねー!」

「おっ元気がいいなー! 女の子はそんなにギャーギャー騒がないよ。もしかして

……」

(……本当はちんちん(自主規制)ついてんじやないの?)

冗談のつもりで小声で言っていると、金髪の少女の顔がみるみるうちに真っ赤になる。

「このやろー! そこまで言うんならショーコみせてやるーっ!」

「わー!? ダメダメっ!!」

予想外の行動に鶴乃、驚愕!

ボタンを外してズボンを降ろそうとする金髪の少女の淫行を寸手で食い止める！  
「この子は、一体……？」

見た所、年齢は自分とはそう違わない。しかし、年頃の少女とは思えぬ無垢幼稚さに、いろはは呆然。

白木に尋ねるが、彼女は相変わらず蒼褪めた顔で頭を抱えている。

「はあ、クレーマーと言いますか……何も知らないと言いますか……」  
「どうされました？」

——と、そこで聞こえてきた声と現れた人物、白木の血色が一気に良くなった。彼女にとっては正に天から舞い降りた救いの女神！

丁度、夜勤明けの為仮眠を取っていたやちよが、起きてきてくれたのだ！

「部長っ」

白木は涙目になりながら、慌ててやちよに縋りつく。

（この子をなんとか、してください……！）

（あの子は、確か……）

（ええ、あの常盤ななかすらも手を焼いた問題児、深月フェリシアです）  
やちよの目が僅かに見開かれた。

金髪の少女、フェリシアもやちよに気付いたのか、大声を張り上げる。

「お、オメー、七海やちよだなー！」

いろはと鶴乃はギョツとなる。

初対面なのに、挨拶も無く呼び捨てとは無礼千万だ。ましてや神浜市の英雄に。

白木がキツと睨みつけるが、やちよは別に気にせず、微笑みながらコクリと頷いた。

「なー助けてくれよっ！ オレ困ってんのにそのオバサン、ぜんっぜん話つうじねーんだよー！」

「どつちが……!?!」

「まあまあ。深月フェリシアさんですね、私で良ければご用件をお伺いいたしますが？」  
反論しようとする白木を宥めるとやちよはフェリシアに接近した。

腰を下ろし、彼女と目線を合わせてそう問いかける。

「おおっ！ 話が早くてたすかるぜ！ ちあんいじぶにはいりてーんだっ！ いれてくれっ！」

「だから住民票が無いと……!?!」

「要は家が有ればいいんでしよう？ 早速手配します」

「「えっ!?!」」

フェリシアの目が光輝く。他の全員は驚いてやちよに注目！

「ぶ、部長!?!」

白木が毎日の夜勤で遂に気が触れたのかと心配そうな顔でやちよを見るが、彼女は既にスマホで電話していた。

「もしもし、ピーターさん？」

連絡先は、仕事で朝一から出かけているピーター・レイモンドである。

〈グッモーニン♪ やつちや〜ん！ ピーターママよ。 どうしたの？〉

「これから、みかづき荘に一人入居しますが、よろしいですか？」

〈あら良いじゃない。 どんな子か楽しみねえ！〉

オホホホホ、と一頻り笑った後、通話を切るピーター。

「……という訳で、貴女の住まいは決まったわ。 深月さん」

その鮮やか過ぎる早業と、今までの自分の苦労は何だったんだと言わんばかりに、白木が真っ白になったのは言うまでも無い。

「え？ いいのか!? ホントにいいのか!?」

「ええ、これからは『みかづき荘』ってところで私達と一緒に暮らせるから、よろしくね。 困ったことがあつたら……」

やちよは一瞬だけフツと笑って、いろはを見る。

「……そこにいる、環いろはを頼って頂戴」

「ええっ!？」

「おーそうなのかー!? よろしくなーいろはー!!」

まさかの無茶振りにいろはは驚愕!

フェリシアは腹の底から歓喜の声を挙げていろはに飛びついた。両手を握ってぶんぶん振り回す。

住むところが決まって良かったけれど、わざわざみかづき荘じゃなくても……。

それにこの子、力も強いし、さっきの白木さんとのやりとりを聞いたら、相当乱暴者なんじゃ……。

年上に対する礼儀もまるで無いし、教育すらまともに受けて無いのでは?

試験の緊張に加え、新しい家族の教育係が申し掛かり、いろはの顔が蒼褪めていく。

(い、妹が出来てよかったね、いろはちゃん)

鶴乃に肩をポンと叩かれた。

(鶴乃ちゃんそれフォローになってない……)

ああ、本当にこれからどうなっていくんだらう……。

いろはは八つ当たり気味に鶴乃をジロリと睨みつけながらも、今後の生活が、そして何より自分の目的が順調に達成できるのか、不安でならなかった。



☆

——こうして、朝の珍騒動は、やちよとピーターが後でフェリシアの住所登録の手続きを代替わりする、という形で終結した。よって、フェリシアはその後、やちよの権限で保護申請の再登録を難無く完了。

……なお、その間、白木亜美は自分の長きに渡る悪戦苦闘が徒労に終わったことを思い知り、暫く燃え尽きていたが——やちよの懸命な励ましによつて業務遂行レベルに持ち直したという……。

——神浜市役所。治安維持部長室。

そして、いろは、鶴乃、フェリシアの三名は、やちよの執務室へ招待された。

応接室に似た部屋では、革製の三人掛けのソファが二台、ガラス張りのテーブルを挟んで、向き合うように置かれていた。

「三人とも、入職希望者ということで良いわね？」

促されるままソファに腰かけると、対面するやちよが真剣な眼差しで問いかけた。

「はい」「おう」

肩を強張りつついろはが返事をする、隣と声が重なったのでギョツとする。

「……つて、鶴乃ちゃんも？」

「ん。まあ、ね」

鶴乃は屈託無い笑みを浮かべていた。自分の行動に何の疑問も不安も抱いてないようである。

だが、やちよを見直すと、彼女は心配そうな表情を浮かべていた。

「ねえ、鶴乃ちゃん……」

目線を下に向けると、知らない内に左手で右手を撫でていた。

「なに？」

「無理しなくていいんだよ？」

やちよには懸念があった。

もし、入職希望が自分に対する贖罪の気持ちだとしたら、やちよは勧めるべきではないと思った。

鶴乃には万々歳がある。そして、神浜大附属学校高等部の生徒会長を務めているとも聞いていた。

いろはから話を聞いて、彼女はようやく前を向いて、笑えるようになった。だから、彼女には日常を謳歌して欲しい。今まで背負ってきた分、幸せになつてほしい。

「そんなんじゃないよ」

だが、やちよの不安などどこ吹く風のように、鶴乃は笑つて応えた。

「ただ、気になつたんだよ。やちよが今までどんな世界を見てきたのになつて。見識が広まればわたしも万々歳も、良い方向に変わるつて思つてね」

「鶴乃ちゃん……だけど」

「やちよちゃん、わたしに対して申し訳無いつて気持ちがあるなら野暮だよ。今のわたしは、自分がしたいことをやめさせられる方がずっと辛いんだから」

参つたな、とやちよは苦笑いしながら首の後ろを掻いた。

つくづく、自分と彼女の考えていることは同じらしい。

「だいじょーぶ。正職じゃなくて臨時希望だし、店のこともちゃんとやるつて！ それに」

鶴乃はその晴れ晴れとした顔をいろはの方へ向けた。

「師匠の手助けもしたいしね」

いろはは一瞬呆気に取られるが——すぐに笑みを返して、力強く頷いた。

「おい、三人でわかんねー話してねーでホンダイ進めろよ！ ホンダイっ!!」

——が、すっかり置いてけぼりにされたフェリシアから激を飛ばされ、いろはと鶴乃はハツとなる。

「おっと、それもそうね」

やちよもコホン、と咳払いして、真剣な表情を浮かべた。

全く事情を知る由も無いフェリシアにとつては彼女達の話など退屈で仕方がないのだ。

「まず、試験の概要だけど……」

「……………」

いろはと鶴乃の顔に緊張が走る。二人は仲良く同時に唾を飲みこんだ。

「早速明日の日曜日に、一般常識の筆記試験を行うわ」

まずそこで振るい落とされるのか。

合格したとしても、その次は恐らくやちよとの面接、更にその次は、またまたその次は、どんな試験が……

「以上よ」

……二人の不安はものの見事に空ぶった。

「っ?!?!」

「だあああっ?!」

いろはの体はガクツと傾き、鶴乃はソファからズッコケた。

「えっと、それだけ、ですか……?」

「ええ、それだけよ。筆記試験さえ平均点以上を取れば晴れて合格。治安維持部わたしたちの仲間入り」

体勢を持ち直したいろはが、呆然と問いかける。やちよは即答。

「簡単すぎる……」

「だって深刻な人手不足だもん。しょーがないわよ」

真剣な顔で素っ気なく言うやちよに、いろはは閉口。

確かに、神浜町にはやちよ一人しか所属していない為、そう言われたら頷くしかないが……

「……いや、あのさ」

次いで、ソファに座り直した鶴乃が、挙手して問いかける。

「履歴書とかエントリーシートの書類選考とか、部長・副部長との面接とか、役員面接と

か、市長との最終面接とか……いっぱいあるんじゃないの?」

「無いわよ。メンドくさい」

即答。素っ気なく首を振られた。

「いや、だって、公務員になる訳ですし……」

「働く人の人間性を偉い人みんなで吟味しなくちゃいけないんじゃないの?」

二人が苦笑いを浮かべて問いかけるも、鼻で笑い返される。

「人間性なら、ねえ?」

そしてやちよは、不敵な笑みを張り付けた顔を執務室の扉の方へと向けた。

いつの間にか、みたまがそこに立っていた。

「あっ」

いろはが思わず口を空ける。

「そうだ。確か、調整員は——」

「そうか……! ソウルジェムを通して、魔法少女の過去が見れるんだったね」

鶴乃が、ふと頭に浮かんだ事を全て代弁してくれた。

答えを聞いたみたまが、満足そうに愛らしい笑みを魅せて頷いた。

「そういうことお♪」

いつもの営業スマイルを張り付けながら、視線を鋭くして三人を見つめる。

「三人とも魔女に単独で勝利した経験があり、3人以上のチーム編成で臨機応変に戦った事もあり、状況によっては臨時的にリーダーを務めてメンバーを勝利に導いたこともある。何より1年以上、生き延びている。素質は十分よお」

そこまで解説した後、やちよにアイコンタクト。みたまに頷き返すと口を開いた。

「それに、三人の生活態度には個人差があれど、大きな傷害事件は無く、魔法の使用も魔法退治にのみ留めている。交友関係も広く、知人からの信頼も厚い」

いろはに関しては、宝崎での学校生活は隠れるように過ごしていた為、特筆すべきものは何も無かったが、同じ魔法少女チームであった皆木葉菜、宮内 累とのコミュニケーションは大きな評価点となっていた。

加えて、神浜市に来てからの本人の人脈形成ぶりは驚嘆に値するものがある。

——それが例え、 “主人公” に選ばれたからだとしても。

いろはの、彼女本来の素質であると信じた——みたまとやちよは三人には見えないように、ひっそりと拳を握り締めた。

「つて」とは……」

「ええ、筆記試験が平均点を超えれば合格よ」

いろはの目が輝き、鶴乃はおっしっ！ とガッツポーズ!!

「ただ……覚悟してほしいのは、入職してからよ」

やちよが急に刺すような視線で、二人を見つめてきた。

「合格次第、私が個々人に見合った三カ月間の研修プログラムを作成する。それをクリアしなければ、落とすわ」

「えっ……」

頂点から一気に突き落とされそうな気がしているのは顔が蒼褪める。

「人手不足なのに落とすんだ？」

だが、鶴乃はニヤニヤと笑って皮肉を突き付ける。やちよはフツと口元を揺るめた。

「まあ、建前上はそう言っておかないとみんな真剣になってくれないでしょ？ でも、研修は厳しくやるから、筆記試験が受かったら、覚悟して。いろは、鶴乃、深月さ——」

クーカー……。

すび……。

ZZZ……。



「あつー！」

「寝てる……」

三人はフェリシアに注目。

既に彼女はこつくりこつくり鼻ちようちんを浮かべて船を漕いでいた。

「ほんと、どんな親に育てられたんだか……」

鶴乃が呆れの混じった苦笑い。

一方のやちよは、微笑ましそうにフェリシアを見つめていた。

「疲れているのよ。そつとしいてあげましょう」

ソウルジエムを覗いたみたまの話では、昨日魔女退治で徹夜したそうだ。

やちよも現在徹夜明けなので、その苦労は理解できる。

「じゃあ、この子には、後で私が伝えます」

「ありがとう、いろは」

その後、フェリシアは、仮眠室のベッドでしばらく（5時間ぐらい）安息していたという……。

——そして、翌日、筆記試験の時間が訪れた。



F  
I  
L  
E#  
5  
7P  
A  
R  
A  
S  
I  
T  
E

||

〈寄生〉

その夜、フェリシアはみかづき荘へは帰ってこなかった。

「世話になったおっちゃんに挨拶がしたい」と、言つて闇夜に消えていった。はつきりとは断言しなかった（というか、説明が大雑把過ぎた）が、その人物はホームレスらしく、フェリシアに食事と寝床を分けてくれたそうだ。

優しいところもあるじゃないか、というはは関心。そして、第一印象で評価した自分を恥じた。

——そして翌日。日曜日

——15:00頃

約束の時間通り、いろは、鶴乃、フェリシアの三名は神浜市役所にて筆記試験を行った。

ちなみに、課目は学校のテストと同じ。国語・数学・社会・理科・英語の5種だ。いずれも15分間の休憩の及び1時間の昼休みを挟みつつ、各40分で施行。

先ほど、英語の答案用紙を回収し、無事に終了した。

現在、三人は、ある『面談』の為に、みたまのいるBAR『ミロワール』へ向かつて

いる。

やちよとピーターはその間に、三人の答案用紙の合計点を出しておこうと、考えた。

—— 神浜市役所2階。治安維持部長執務室。

応接用のソファに腰かけながら、やちよとピーターの二人は答案用紙と睨めっこ。

まず、一人目は——

「由比鶴乃ね」

やちよはピーターと共同して、手慣れた仕草で用紙に点数を付けていく。

由比 鶴乃

国語：88点

数学：94点

社会：85点

理科：73点

英語：83点

合計：423点

「さすがね」

合計点を付けた時、ついそう笑みが零れてしまう程だ。生徒会長を務めるだけある。無論、並々ならぬ努力を重ねてきた証だろう。

加えて、商店街ではアイドル的求心力に、あの行動力だ。どの企業でも、これで彼女を落としたり、後悔するに違いない。

「続いて、いろはね」

やちよ達は鶴乃の答案用紙を一束にまとめてファイルにしようと、次にいろはの各答案用紙を採点した。

環 いろは

国語：95点

数学：40点

社会：65点

理科：88点

英語：55点

合計：343点

「意外ね」

国語と理科に興味関心が強いのは分かっていたが、生徒会長の鶴乃より上回っているとは。

逆に他の三科目は低いが——問題は無いだろう。倫理的思考力も、社会への関心も、グローバルな知識も、後々の生活の中でゆっくり身に着けていけばいい。

彼女は頑固者だが、自分の悪い所、弱い所は把握しているタイプだ。指摘しても意固地にならずに直そうと努力するだろう。

「そして、最後」

「あの、問題児くんね」

深月フェリシア——彼女に関しては全くの未知数だ。

各答案用紙と、合計点を確認する。

深月 フェリシア

国語：26点

数学：10点

社会：31点

理科：5点

英語：2点

合計：74点

「要注意人物ね」

「ええ」

ピーターとやちよは二人でお互いを見つめ合い、強く頷き有った。

☆

——そして、丁度同じ頃

—— 神浜市役所B3F。調整課・BAR「ミロワール」

筆記試験終了後に、バイトで来ていた、バーテンダー姿の市長君の娘に呼ばれて三人は  
みたまの下へと向かっていた。



なんでも、試験を受けた者は必ず調整員と面談しなければならぬらしい。

「それって面接なんじゃないんですか？」と鶴乃が尋ねると、「課長は堅苦しいのが嫌いな人ですからー！」と笑って返された。

とはいえ、面談と言われても、どんなことを話し合うのか三人には検討もつかなかった。

碧に聞いてみたが、彼女の肩がギクリと跳ねあがり、

「そ、それを教えたなら碧はブツ飛ばされちゃいまーす……っ」

等と、真つ青になり、ワナワナ震えあがってしまったので、

「そんなこと言わずにーっ！　良い男紹介してあげるからさーっ！」

ほらほら碧ちやくん♪と、鶴乃が肘でうりうりつつつきながら誘惑してみる。

なぬっ!!　と碧は一瞬目を光り輝かせるが……

「だ……ダメでーす!!　碧は何も聞こえませーん!!　分かりませーんっ!!」

何故か自分の耳では無く、頭頂部に生えた犬耳（みたいな癖毛）を抑えてそう喚かれたので断念するしかなかった。

———そんな珍事も起きつつ、店に辿り着いた4人をみたまは笑顔で迎えてくれた。

そして、小一時間程、5人はテーブルを囲って談笑。

みたまが話の中心となり、色んな魔法少女の話をしてくれたのが新鮮だったし、鶴乃と碧が相槌を打ちながら盛り上げてくれたので、場は大いに和んだ。

「……まったく、ユカイなねーちゃんどもだなー」

年が一番離れていたのもあつてか、話に付いていけず退屈そうなフェリシアが悪態を付いた。

「ねえボウズ。君も何か話無いの？」

「あつ!? ねーよ! そんなのっ!」

あと、ボウズじゃねーし! とフェリシアは鶴乃に怒る。

「あー可笑しい! ……じゃあ、八雲かtyじゃなくてみたまちゃん。そろそろ『面談』の方をお願いします」

「そうねえ」

みたまが腕時計に目を向けると、碧は「じゃ、私はちよつと失礼しまーす!」と退室。彼女がいなくなったのを見計らってから、みたまは、いろは達を見つめてきた。

「みんな、ソウルジエムを貸してもらえないかしら」

突然の申し出に三人は目を丸くする。

「どういふこと?」

「万が一の為よお」

「……?」

三人はみたまの意図が読めなかったが、とりあえず、渡して置くことにした。

桃。橙。紫。それぞれのソウルジェムが掌の中にあることを確認すると――

「みんな」

刹那――みたまの瞳がキッと鋭く瞬いた。表情を消して、三人を強く睨み据える。

「今日は来てくれてありがとう。三人とも、強い覚悟を持って入職希望してくれたと信じてる。だからこそ、聞き入れて欲しい話があるの」

有無を言わさぬ迫力を込めた低音に、三人は反射的にコクリと頷いた。

和やかな空気が一瞬で凍り付く。

静寂が蒼い幻想的空間を支配した。両肩に一気にプレッシャーが押し掛かり、三人はまるで深海に沈められた錯覚に陥る。

「最初に行っておくけど……ヘビィよ。もし、途中で気持ち悪くなったり、怒りが込み上げてきたら、遠慮なく手を挙げて退室を願い出て構わない。ソウルジェムは返すし、そのまま帰宅してもらって結構。その方が身の為だから……」

「身の……？」

いつもの軽妙さは微塵も無い。

人を殺す覚悟を決めた戦士のようなみたまの目力に、三人の肩はゾツと強張った。

「これから私が話す事は——魔法少女の『真実』」

静かにそう言つて——視線を更に鋭くした。

コクリと頷いて、じつとみたまを見つめ返す三人の反応は様々だ。

いろはの顔には動揺が見えていたし、鶴乃はゴクリと唾を飲みこんだ。

フェリシアだけは、特に怯えが見られず、悠然と構えている。何も理解していないだけかもしれない。

☆

「みんなはキュウベえがどこからやってきたのか、考えたことはあるかしら？」

まず、最初にそう問いかけると、フェリシアが「べつつにー」と即答。いろはと鶴乃も合わせるように首を振り、

「それは、えつと……」

「考えないことも無かったけど……暇が無かったっていうか……」

お互いに助けを求めるように目を合わせた。

みたまは、仕方が無い事ね、と言いたげにコクリと頷くと、淡々と答える。

「彼らの正式名称は『インキュベーター』。宇宙の遥か彼方やってきた地球外生命体よ」

予想だにしない答えに、三人は目を丸くした。

みたまは続ける。インキュベーターは、人類が生まれたばかりの頃、地球にやってきた。た。

当時、穴倉で過ごすしか無かった彼らに、願いを一つ叶える上で超人になる技術を提供した。

「それが『魔法少女』のシステム。太古から多くの少女達の『願い』によって、人々の

文明は開化され、世界では幾度も改革が行われてきた。過去に流された全ての涙を礎にして、今の人類の暮らしは成り立っているの」

もし、キユウベえが干渉しなかつたら——今でも人類は、裸で洞穴（ほらあな）に住んでいたのかも知れない、とみたまは言う。

「ちよつと待つてよ!!」

突然鶴乃が声を張り上げた。

「それはおかしいよつ!! 人間は誕生した頃から、思考も感情も知性も併せ持つていた筈でしょ!? だから集団を形成してみんなで何かを創り続けてきた! 今でもそう。世界中の多くの人々が知恵を出し合つて革新的なものを生み出してる! ……なのに、キユウベえがいなきや何も出来なかつたつてどういうこと!?!」

「鶴乃ちゃん……」

「悔しいよ! だつてその話が本当なら、曾お爺ちゃんが創立した万々歳も、皇さんが開発した「リヒト」も、誰かの願つた結果つてことになるじゃないつ! そんなのつ……!」

鶴乃の拳は、怒りに震えていた。

当然の反応だろう。人類の進化と繁栄は、全てキユウベえの掌の中にあるのだと——自分が今まで見てきた人の営みは、偽りだったというのか。

頭の中で嫌だと、はつきり否定した。

そんな話、馬鹿げている。絶対に認めたくない。

「……私も、人間は自分達の能力だけで進化し続けてきた種族だつて信じてる。その話は、インキュベーターが優位性を示したいだけのもかせだつて思つてるわ」

鶴乃の気持ちは、みたまにも痛い程伝わった。こくりと頷いてそう答える。

話しながら、掌にある鶴乃のソウルジエムを見た。

ほんの微かにではあるが、白に近く輝いていた橙の色合いが濃くなりつつある。

——だから、これからの話に、彼女が耐え切れるか、心配だった。

「話を戻しましょう。みんなはインキュベーターと出会った時、不審に思わなかつた？」  
何でも願いを一つだけ叶えてくれる上に、超人的な力を授ける。

代わりに魔女と永久に戦う運命を背負わされるが、それが具体的にどれほどの過酷さであるかは、曖昧にボカされていた。

現代社会でも、人間による多種多様な詐欺が横行している昨今だ。

ましてや、人間ですらない生物が人語を話して、そのように嘯いてきたら、まず不気味に思うのが普通だろう。

しかし……

「ううん、思わなかつたよ。その時はどうしても叶えて欲しいことが有ったから、二つ返

事で……」

「私も、願いをかなえるからって言われて、つい……」

「オレもー」

即答する三人にみたまは、はあ、と溜息。

「……インキュベーターがどうして、二次性徴期の女の子ばかりと契約するのか、考えたことはある？」

どこか呆れを込めた言い方だ。

先の質問で即答したのは不味かったかもしれない——そう思った鶴乃は黙り込む。

「理由が、あるんですか？」

いろはが尋ねた途端、表情が険しさを増した。

一拍置いてから、ええ、と頷くと、重たそうに口を開く。

「みんなは、キュウベえと話してて疑問に感じたと思うの。『どうして表情が変わらないんだらう』って」

そこでアツ、と感づいたように割り込んだのはフェリシアだ。

「ああ思った思った。こいつ、人形みてーだなーって」

「正解よ」

みたまは一瞬だけ笑った。



「インキュベーターの文明では、感情という現象は、極めて稀な精神疾患でしかなかったの」

だから、彼らには総じて感情は存在しない。生まれ持った個体は、廃棄処分されるのだという。

故に、というべきか。

地球の動物を見て彼らは興味を抱いた。全ての個体が、別個に感情を持ちながら共存している世界など、想像してなかったから。

彼らは地球生命を——その中でも、特に感情の起伏による生態行動の変化が著しい人類を長期間観察して、ある大発見をしたのだ。

「二次性徴期の女の子の感情から採取できるエネルギーこそが最も効率的だね。この宇宙の熱源的死から救う為に……」

聞きなれない単語の羅列と、突然スケールが大きすぎる話に、いろはと鶴乃はポカンとなる。

だが、フェリシアは食いついた。

「はあ?」 宇宙がブツ壊れるっていうのかよー!」

「っ!?!」

その答えに、二人はギョツと目を見開いた。

「要はそういうことね。でも、今すぐじゃないわ。彼らの話によれば少なくとも数十億年も先の話よ」

「な、なくんだ」

「そんなに未来のことなんですかね」

「話を戻しましょう」

二人はホツと胸を撫で下すが、みたまは視線を鋭くした。

キュウベえがそもそも地球にやってきたのは、先の通り、宇宙の滅亡を抑える為だ。

——— というのも、宇宙全体には「エンドロピー」と呼ばれる、内部で増え続ける曖昧な何か”が時の経過と共に膨張を続けており、いつか破裂するように、「熱源的死」を迎えるのだという。

彼らは母星で「感情」を、”エンドロピーを抑えるエネルギーに変換するシステム”を開発したものの、感情が無かった為、利用することができなかった。

よって、彼らは異星を巡り、感情を持つ知的生命体を探し回ったのだ。

そして人類を発見した。その膨大な個体数と繁殖力を鑑みれば、一人の人間が生み出す感情エネルギーは、エンドロピーを凌駕する。

「でも、それだったら何で、わたしたちが……」

「それに、効率的って、どういうことですか？」

「……」

みたまは視線を下に向けて、言い淀んだ。

これから伝える事は、真実の中で最も残酷だ。だが、彼女達が本当に戦うつもりなら、乗り越えて貰わなければならない。

「……………インキュベーターは宇宙の救済をなるべく早めたいと考えているの。だから、感情エネルギーを採取する為なら、なりふり構ってられない」

みたまは心を鬼にして、冷徹に告げる。

「みんなは『魔女』がどこから生まれるのか、知ってる？」

三人は迷わずコクリと頷いた。

「そりや勿論」

「人々が負の感情を抱いた時に生まれる呪い……………それが積み重なると魔女になって厄災を産みますよね？」

いろはと鶴乃は何の疑問も抱いてない口ぶりだった。みたまが睨みつける。

「それ、誰から聞いたの？」

「え、それも勿論……………あれ？」

「キュウベえからだよ。……………つてあれ？ まさか……………！」

「さっきの話もそうだったでしょう？ インキュベーターは契約する女の子に全ての真

実を教えていないわ」

「じゃあ、魔女が生まれるのも、違うっていうんですか!？」

いろはの顔が強張った。みたまはコクリと頷いて、答える。

「魔女が生まれるのはね……」

言いながら、掌にある3つのソウルジェムを見つめた。

輝きが弱まっているものを見つめて、苦虫を噛み締める様に、呟く。

——魔法少女の、絶望よ。

二次性徴期の少女の、希望と絶望の相転移。

それこそが、宇宙を救う最も強力な感情エネルギーだと、インキュベーターは告げていた。

——時間にして、10分は経過しただろうか。

その間、誰も何も言わなかった。全員、時が止まったような錯覚に陥っていた。

例えるなら、そう……先ほどまで元気にはしゃいでいた小さな子供が、トラツクに撥ねられて血塗れで倒れた姿を目撃したように……衝撃だった。ただ頭が真っ白になった。何もできなかった。しようという気さえおきなかった。

驚愕。

呆然。

空虚。

彼女達の意識は、確かに無くなっていた。

脳が受け入れるなど、五感に命令したように。

目に映るもの、耳に入るもの、肌で感じるものの全てを、強制的に遮断したのだ。

「……………キュウベえは」

長きに渡る沈黙の末、最初に意識を取り戻したのは鶴乃だ。

「何も、教えてくれなかった……！」

何故、今なのか。

魔法少女になった、後なのか。

握りしめた拳の中で爪が皮を破らんとするほど強く食い込んでいく。

顔が熱くなった。体中の血が頭に流れ込んでいくように。

キュウベえへの怒りが、そうさせたのか。いや、それよりも——無垢に彼を信じた自分の愚かさに、恥辱した。

紅潮した額に流れる冷や汗を、手で拭った。

「私、たちは……」

震えた声に、鶴乃は隣を向いた。

いろはの顔は自分とは対照的に、青ざめていた。

——いろはの頭に思い起こされるのは、前に故郷にて、自分を殺しかけた、魔女。全身を這いずり回った、異形の蟲の群れ。

「いつか、あんなのに、なるんですか……」

驚愕と恐怖が一緒に交じり合っていた。

首に手を置く、鼻をこする、額を撫でる、左手で右手をこする等……両手の仕草がいずれも罪悪感と恐怖をせわしなく示している。

「それだけじゃねーだろー!？」

呆然自失となる二人に向けて、フェリシアが語気を荒げる。

「ぶっ殺してたつていうのかよー!？」 同じ魔法少女をー!!」

——言うな。

鶴乃は頭を抱えて顔を落とし、いろはは両手で顔を覆った。それだけは聞きたく無かった。知りたくなかった。

「ええ、全て正解よ」

だが、みたまの無情な一言が、三人の心を貫いた。

その冷えた目が向いているのは、彼女達の顔ではなく、自身の手元。

輝きを失い、色合いが濃くなったソウルジェムだ。魔法を使った訳ではないのに、酷く濁っていた。

「どうして……」

いろはが顔を解放して、助けを請う様にみたまを見つめてきた。

「どうして、私達は気づかなかったんですか。ちよつと考えたら……キユウベえに聞いてさえいれば、すぐに分かったことだったのに……」

「わたしたちが、馬鹿だったんだよ」

鶴乃が即座に切り込んだ。

「鶴乃ちゃん……!」

「そうとしか考えられないでしょ」

「それは違うわ」

ピシヤリと言い放ったみたまの一言が、鶴乃を静止した。

「キュウベえは、人間と対話する時、テレパシーと一緒にある特殊な電波を頭に送り込んでいるの」

えっ、と三人は目を見開いてみたまを見つめた。

「非常に微弱だけれど、それは脳の電気信号に干渉し、ある『命令』となって思考を操作するわ」

「それって……?」

驚きに目を見開いたまま、いろはは恐る恐る問いかける。

「『自分達に関心を持つな』ってね。意図的に背景を探らせないように仕向けているのよ、彼らは」

決して、貴女達が愚かだった訳じゃないわ————みたまは笑顔でそう付け加えるが、いろはと鶴乃の顔は一向に浮かない。



当然だ。連中の意図がどうであれ、魔法少女になったのは間違いなく自分の意志だ。その道を進んだ結果、連中に騙され、目的の為に利用され、仲間だった者を殺した。何も疑問を抱かず。

「安心していいのよ」

「なんでだよ？ どーせいつか魔女になるし、魔法少女殺してたつてことは変わんねーんだぞ？」

フェリシアが疑問を投げつけるが、みたまはフツと笑って首を振った。

「貴方達のソウルジェムは既に調整を受けている。調整は謂わば、魔力に判断力を持たせるだけでなく、延命処置でもあるのよ」

ハツと、いろはは顔を上げた。そうだ、ねむが言っていた。

自分のソウルジェムには、誰かの「魂」が力となって宿っている。

「魔力を使い切ったり、絶望を感じてソウルジェムが濁り切った場合、身体能力が著しく低下するデメリットはあるけど、魔女にはならない」

「でも、神浜にも魔女はいたよね!?! あれがここの魔法少女じゃないとしたら、なんだつていう訳!?!」

鶴乃の質問に、いろはも頷いた。

確かに、自分も最初に神浜市に来た時、魔女に襲われたのだ。

「……………絶対に魔女にならない訳じゃないわ。条件が変わっただけ。この街の魔法少女が魔女になる可能性は、ただ一つ。肉体の物理的な死よ。脳が破壊される、心臓を貫かれる、脈が斬りつけられて大量に出血する……これらが原因で、生命活動が停止した場合にのみ、魔女になる」

みたまは続ける。

それは、普通の魔法少女とは真逆だという。

調整を受けてない一般的な魔法少女にとつて肉体はハードウェアであり、あくまで本体はソウルジェムだ。つまり、ソウルジェムが攻撃されない限り、いくら肉体が損壊しても再生可能だし、生命活動が停止する程の損傷を受けても、死ぬことは無い。

「なんだよ、それじゃー弱くなったってことじゃねーか??」

フエリシアがそう悪態づく。

「ええ。でも、魔力を使い切ったり、絶望すると魔女になるから実質±0ってところね。アメリカの脳医学者ロバート・ヘルナンデスが発表した研究結果では、三年以上活動を続けていた魔法少女の脳にある変化が起きることが分かったの。それは、肉体の関心の喪失。体がどれだけ傷ついても、壊されても一切気にしなくなるの。魔女にならない限り、へつちやらだつて、ね……」

痛みを痛みと脳が認識できなくなる。肉体に対する心が完全に麻痺する。

そうなってしまった魔法少女は果たして、人と呼べるのか？

(かつて、和泉十七夜さんが、神戸市のシステムを全世界に普及したいって言ったのは、そういうつもりだったのかな……?)

いろはは不意に、前にやちよが話してくれた昔話を思い出す。

調整を受けた自分達にとって、肉体の死が魔女化に結び付くなら、体が傷つくことへの恐怖は決して拭えない。

つまり、それは――

「わたしたちは、人間のまままってことだよね」

いろはの思考を代弁するように、鶴乃が答えたので、驚いた。

彼女も、思ったことは一緒だったのだ。

「そういうこと。調整は、確かにデメリットはあるけれども、貴女達を人間に限りなく戻す意図も込められている。戦うだけの化け物じゃない。ましてや、インキュベーターの道具じゃない。人々の愛と希望、何より自分の幸せの為に戦う、みんなも憧れた理想の魔法少女に成れたって訳よ」

「でも、魔法少女だった子を殺してたのには、変わりないんじゃない……」

「……それもね、対策は考えてあるわ」

鶴乃が項垂れながらそうぼやくが、みたまは首を振った。

そして、一瞬だけいろはを見て、ウインク。

「!」

それを見たいろはが、あつと勘づいた。そうだ、確か——

「神浜市で亡くなった魂は、大賢者の元へ送り届けられて、浄化される。そして、楽園へ  
と行き着いて、お役目が来るのを待つのに」

大賢者。

お役目。

楽園。

鶴乃とフェリシアが聞きなれない単語に顔を見合わせて首を傾げる。

「説明は後でね。とにかく、貴女達がやむを得ず奪ってしまった命は、決して無駄にはし  
ないということよ。怪物に成り果ててしまった子の魂を、私達は必ず救済する。そうで  
なければ、誰も、報われないわ」

「だけど……!」

鶴乃の顔は一向に浮かばない。

いつか、魔女になって誰かを殺すかもしれない。いつか、嘗ての仲間だった者を殺す  
かもしれない。

懸念はぬぐえない。

「鶴乃ちゃん……!!」

「とにかくよーっ!!」

場の陰気を吹き飛ばすように、フェリシアが勢いよく立ち上がった!

「勝てばいいんだろっ?! 勝てばっ?! 勝つて勝つて勝ち続ければ、オレたちは大丈夫だつてことだよなあっ?!」

「そんな単純な話じゃ……っ!」

「ううん、そうかもしれないよ、鶴乃ちゃん」

ギョッと鶴乃はいろはを見た。

眉間に皺が寄った表情は固く、不安はぬぐい切れてない様子だが、口元は確かに笑っていた。

「確かにこれからも仕方なく殺してしまう時がくるかもしれない。だけど、大賢者様が、きつと彼らの魂をなんとかしてくれる」

「そうなの? いろはちゃん、本当にそう思ってるの!」

見たことも無い存在を、どうして彼女はこうも純粹に信じられるのか、鶴乃には不思議でならない。

「私は、神浜の人達を信じてる。だつてみんな、真剣に魔法少女の事を考えてくれてるかー! だから、鶴乃ちゃんも、今は信じてみようよ!」

いろはの目はどこまでも真っ直ぐで、眩しい。

鶴乃は眩暈がする錯覚を覚えて、つい目を逸らした。

「だけど……」

「大丈夫、私もやちよさんも一緒だから、鶴乃ちゃん一人には、絶対に背負わせないから」  
「だから、そういう訳じゃ……って、ああもうっ!! 師匠にそう言われたら本当に大丈夫って気になっちゃうじゃんっ!!」

顔を真つ赤にして喚き散らす鶴乃を、フェリシアはニタニタと笑って眺めていた。

「なんだよ。オメー、こえーのかー?」

「だって人を殺してるわけだし、当たり前でしょ!? そういうあんたは怖くないの!」  
「べっつにー。他人のことなんかどうでもよくねー? オレはただ……」

——親を殺した魔女を、ブツ殺したいだけなんだ。

「近道が欲しかったんだ」

素っ気なくそう答えるフェリシアに、鶴乃というはは固まった。

☆

—— 一時間後。

—— 神浜市役所2F。治安維持部長室

その後、受験者三名は特に問題なく、各々の住まいへと戻っていった。

「お疲れ様、八雲課長」

みたまはやちよの下に訪れて一休み。

ソファに深く腰を掛けて、疲れ切ったような溜息を付くみたまに、やちよはココアを差し出した。

「今日は、あの子の歓迎会よ。貴女が疲れ切ってちや盛り上がらないでしょう」

「ああ、そうだったけえ？」

とぼけながらココアに口づけた。

仄かな暖かさと甘さが心身に染みわたり、気持ちを落ち着かせていく。ストレスでぐちゃぐちゃだった思考が正常さを取戻した。

「——それで、どうだったの。三人は？」

ココアを飲み干し、一息ついたタイミングを見計らってやちよが訪ねてきた。

みたまは、少し目線を下げて、「そうねえ……」と悩む仕草を取る。

「今日で確信したわ。いろはちゃんは、間違いなく“主人公”よ。鶴乃ちゃんは……ちよつと危ないかも……」

「そう……。じゃあ、深月フェリシアは？」

みたまの目線がキツと鋭くなった——

——のも束の間。屈託ない笑顔で、はつきりと答える。

「要注意人物♪」

「マジそれな」

やちよもフツと笑ってそう返す。二人でお互いを見つめ合い、強く頷き有った。





FILE #58 LONELINESS Ⅱ 〈蠱毒〉

—— ああ、常盤ななかか。  
—— 聞いているよ。無事、接触できたようだね。まあ、“アレ”にとっては朝飯前だろう。

「ふふ、そう心配そうな声を出すな。この件を知っているのは君と、私だけだ。だから、二人で期待しようじゃないか。」

「稀代の『英雄』は、人々にとっての『歩』で終わるか。」

「翻って……我らと同じ、『龍』となるか。」

☆

——夜。

——みかづき荘・大広間

「それでは新たに家族の一員となりました深月フェリシアさんの入居を祝いまして、乾杯!!」

「『カンパーイ!!』(……かんぱい)」「」

そこでは、やちよとピーターの計らいによってみかづき荘に住むことになった金髪の少女——深月フェリシアの歓迎会が開かれていた。

司会のやちよが合図を取ると、(まさらを除く)全員が笑顔で各々の好み注がれたグラスを掲げる。

「深月フェリシアさん、これから一緒に暮らす家族に向けて、何か一言!」

やちよはそういつて上座席に座る彼女に目を向けた。彼女は少し照れながらも満更でも無い様子だ。

満面の笑みをみんなに向けて嬉しそうに口を開く。

「へへっ、みんなありがとーな! オレ、いっしょーけんめーガンバルから! よろしくな!!」

「よろしくね、フェリシアちゃんっ」

「こちらこそ」

フェリシアから見て右側のソファに座るいろはが笑顔で返す。その隣に座るまさらも無表情だが、そう言つて会釈した。

「よろしくね、フェリシアちゃん。私はピーター・レイモンド。みかづき荘のママよ」

「ママ?」 おっちゃんどう見ても男だろ。ママはあつちでパパじゃね?」

フェリシアに指さされたみただが「ママだなんてそんな……!」と頬を赤らめるが、

ピーターは気にせず語り掛ける。

「ふっふっくん☆ 見た目はパパだけど、心はママなのよ」

「訳わかんねー……」

「今は考えなくていい」

「そうね、あと7年経ったら一緒に考えましょう」

そう言つて得意気に胸板を張るピーターだが、言葉の意味が理解できないフェリシアは首を傾げた。

すかさず、まさらとやちよが助け舟を渡す。

「よろしくね、フェリシアちゃん！ よーやく元気いっぱいな子が来てくれて、ママ、嬉しいわあ☆」

「ママは私よ」

笑顔の花を満開に咲かせたみたまの目は輝いていた。そしてピーターは無視。

「あれママ。私達じゃ不服だったの？」

「ママは私よ」

やちよがピーターを無視してそう問いかけると、みたまはコクリと頷く。

「ええ。だつてみーんな物分かりの良い子ばかりなんだものお。ママもたまには刺激が欲しいわあ」

「ママは私よ」

「たまにどころかこれから毎日だと思えますけど……」

「まさらさん……」

本人の居る前でそんなことを言ってしまうまさらにいろはは苦笑。ピーターは無視。

「そんな訳で、私は一気に二人の妹を持つお姉ちゃんになってしまった訳だけど」

「なんだオメー？ 困ってんのか？」

無表情で自分の現状を淡々といろはに語るまさら。だが、そこでフェリシアが横槍を突いた。

「ん、まあ」

「一瞬だけ意表を付かれたように目を見開くまさらだが、すぐにいつもの人形顔に戻し、

「今までここじや末っ子だったから……」

「ああ、分かります。構われなくなるかもって心配しちやいますよね」

「ン……まあ」

いろはは苦笑いでそう言うと、まさらは僅かに目線を下げて呟いた。

「……そう言えばいろははお姉ちゃんだったよね？ 立ち振る舞い方、教えてくれる？」

「喜んでっ」

二人がそんなやり取りをしている中、フェリシアは既にテーブルの上に並べられた彩とりどりの料理に手を付けていた。

ちなみに、やちよが「牛が好き」だと事前にピーターに伝えていた為、肉料理メインである。フェリシアは目の前に置かれた大皿からはみでそうなサイズのステーキを嬉しそうに頬張りながら、

「うめえ！ こんなうめえ料理生まれて初めてだぜ！」

と、歓喜の声を挙げて幸せを噛み締めていた。

いろはは、そんな彼女を見つめて、ふと思う。

（傭兵はヤクザの人と商売してると聞いてたけど……）

本人曰く元々は「傭兵」業だったそうだが、出会った時の泥汚れの酷いTシャツと、ボロボロのジーパン姿を見る限り微塵もそう感じられない。恐らくヤクザのヤの字も分からなそうである。

だが、両親が魔女によって殺された、という話から察するに、あまり良い暮らしはできなかつたのかもしれない。

聞けば、親戚も無く天涯孤独の身だというのだ。一人で色んな所を放浪して、ホームレスの人達から衣類や食事を分けて貰っていたらしい。

（なんだか……）

いろははふと、自分の可能性について考えた。

もし、自分もやちよや青佐と出会わなければ、フェリシアのようになっていたかもしれない。

大切な人を失い、居場所を失い、ただ漠然と自分が生きる意味を求めて彷徨い歩く………そこまで想像して、背筋がゾツと震えた。恐らく、自分だったら生きていけない。そんなタフな人生は歩めない。

(この子は誰にも頼らず一人で生きていくと決めた……それだけでも……) 強い、と思う。自分より遥かに。

——そんなことを考えながら、いろはは皆と一緒に食事を取っていた。

やがて、ひと段落つくと、太鼓腹になったお腹をポンポンと叩きながら、フェリシアが嬉しそうに言った。

「ふい〜くつた〜くつた! そうだつ! ウマイメシ食わせてもらったお礼に、デザート作ってやるよ!!」

「「デザート?」「」」

らしからぬ言葉にポカンとなる一同。

フェリシアは意に介さず上座から立ち上がると、「ちよつとおかって借りるぜ〜」と足



早にキッチンへと駆け込んでしまう。

「デザートって……意外」

いろはの顔は明らかに心配そう。

「確かに、料理をしている風には見えないし……それ以前に料理という概念を理解しているのかしら」

隣のまささらもコクリと頷いて同調。顔にはフェリシアに対する疑念の色がありありと映っている。

「まあ、コイツよりはマシでしょ？」

「ほっときなさい☆」

ピーターとみたまが軽口を叩き合うのを尻目に、やちよが意見する。

「例えどんな料理だろうと、心を込めて作られたものなら、ちゃんと味わって全部食べてあげるのが礼儀よ」

その言葉には賛成だ。

いろはとまささらは同時に頷いた。

——しばらくして……

「作ったぜー!!」

元気澆刺な声と共に、フェリシアはお盆を抱えて現れた。

テーブルまで持つていくと、小さな容器に入った“それ”を一人ずつ配っていく。

「へえ〜！ 可愛いのが出来てる出来てるっ！」

途端、やちよが目を輝かせた。デザートを手にとって歓声を挙げる。

カップに満たされていたのは金色の固形物で、表面をきつね色に焼かれた砂糖が彩っている。

これは——“ブリュレ”だ。

「……凄い」

「……意外」

鼻腔を刺激するのはバニラの甘い臭い。余計な物は入って無さそうで、正しくデザートそのもの。

いろはとまさらは揃って感嘆した。

「！……私の負けね」

「いつ勝負したのよ……？」

何故か真剣な顔で敗北宣言するみたまに、ピーターが突っ込む。

だが、見た目は良くても、味はなんとやらだ。

大抵、食べてみたらゲロマズでした。後でトイレヘレッツゴーリバス！ というの

はよく有る。

(みたまを除くみかづき荘一同談)

「「……………」」

「えっ!? 私っ!?」

そんな訳で、毒見役は誰にするか——は、一瞬で決まった。

家族が女性ばかりの場合、貧乏くじを引くのは大抵父親と決まっているのだが、生憎ピーターは女性にカテゴライズされるので該当せず。

……そうになると、次点で末っ子である。

ジーツと全員でいろはを見つめと、彼女の肩がビクリと跳ねた。

フェリシアも期待を込めた瞳をキラキラと瞬かせている。もう逃げられない。

「頂きます……」

南無三っ!

いろはは心の中で神仏に祈りを捧げると、覚悟を決めた。  
スプーンでブリュレを掬って、口に運ぶ。

「っ!!」

——刹那、電流が走る!

なんだ、これは?

イチゴやブルーベリーに似た果実の甘酸っぱい触感が舌を刺激。直後に穏やかな甘みが口いっぱい広がる。

これはミルクに砂糖を投入しただけの人工物ではない。自然で、身体がすつと受け入れてくれる味わいだ。

——表現できる言葉は、唯一つ。

「美味しい……」

自然と口から小さく零れたその一言を、みたまは聞き逃さなかった。

カツと目を見開いて全員に指示！

「みんな、頂くわよ」

「「ラジャーー！」」

全員が一齐に、デザートを口に付けると、たちまちいろはと同じような反応を示した。目が大きく見開き、驚愕。直後に口の中に広がる穏やかな甘みに顔が緩む。

……まさらだけは、相変わらず氷の表情だったが、口の端は微妙に吊り上がっていた。

「どこかで食べたことある舌触りねえ」

味は感じないが、触感には覚えがある。

みたまがそうボヤくと今度はやちよの目が光る。

「ええ。これは、ウォールナツツで食べたサツマイモ入りのブリュレにそっくりよ……！」

「ああ、言われてみれば……」

まさらが、口元をモムモム動かしながら、コクリと頷く。

先ほどから皆が食べているのを嬉しそうに眺めながら、フェリシアは言った。

「おおーっ！ イモに気付いてくれるとは嬉しいぜー！」

冷蔵庫にあったからレンジで蒸かしたんだ！とフェリシアは満面の笑みで伝える。

「オレ実は、色んな所でよーへーやっててよ！ たまたまウォールナツツのオーナーの弟って人がやってる店にしばらく世話になったことあるんだよっ！ そのオヤジさんが良い人でさー、いっぱい料理教えてくれたんだよなー！」

陽気にはしゃぐフェリシアに、やちよは笑みを返した。

「まるでお店に来たみたいね」

「それじゃあこれから毎日ウォールナツツ料理かしら？」

まさらが僅かにムツとなる。

「困ります。私というはの立場が無くなるので」

「まさらさん……」

気遣ってくれるのだろうが、いろはは苦笑い。

ちなみにまさらの料理は、一日分のカロリーが計算されている上に必須栄養素も考えられている。いろはは最早語るべからず、古き良き昭和の日本家庭料理（薄味）だ。

故に味の濃い外食料理が主流になるのはノーサンキュー。

——全員が食べ終わるとフェリシアは片付けた。

心配になったピーターが声を掛けるが、「こーいうのもやらされてたんだよなー」と言つて、テキパキと夕食後の食器や調理器具も含めて、洗い物をサツサと済ませてしまった。

「良い子じゃない」

フェリシアが食器を片付けている最中、やちよがそう声を掛けると、皆が頷く。

「本当ですね。一時はどうなるかと思っただけど……」

その中で、いろははホツと息を付いていた。

「心配だったの？」

そういえばまさらは事情を知らなかった。怪訝そうな顔で尋ねてきたのでいろはは説明する。

「……………そんな感じで、市役所じゃ完全に暴れん坊って感じでしたから。あつ、ヤバイ子だなーって……」

それが、こんなに上品なデザートを振舞ってくれたし、片付けもキチンとできる。要領も良くて、行儀を弁えている子だったのだ。

「二つの事に優れてる人間は、人間性も秀でているものよ」

言いながら、やちよはまさらにアイコンタクトを送ると、彼女もコクリと頷く。

「第一印象って強いですからね」

「ですね。ふふ、なんだか私、あの子にすっかり騙されちゃった気分です」

「あの子とはやっていけそう?」

やちよが尋ねると、いろはは「はい」と頷いた。

「もう少し話さないとですけど……。まさらさんは?」

まさらは、腕を組んで首を僅かに傾げた。

「私は、暫く様子を見てから……。かな? という訳でいろは、よろしく」

「はい……。つてええ!」

ポンツと肩を叩かれるいろは。

「だって貴女、あの子の教育係でしょう? 私は遠くから見ただけだから」

「分析して……。自分で話し掛けてくださいよ」

いろはが困り顔でそうツツコむと、露骨に目を泳がすまさら。

「私、人と話すのは苦手です……」

「それは私も一緒ですつてば〜」

「えっ」

——まさらは、不得意な事はしない主義である。

何故なら合理的でないからだ。

苦手なものを無理に行えば、段取りが狂い、雰囲気が悪化。結果的に能率が低下する。

よつて、得意な人間が代わりに遂行すれば物事は順序良く運ぶと考えていた。

……だが、いろはから意外な一言が返ってきて、まさらは意表を突かれた。

小さく目を見開いたが、彼女の驚いたのだろう。

「だって貴女、初日で市長に啖呵切ったよね？ それにやちよさんとはもう仲が良さそ

うだったし」

あー、というは返す言葉を失う。

「あの二人と初日から仲良くなれる人なんてまずいない。凄い子が現れたのだとばかり

……」

「あー、あー……あははは」

自分としては成り行きでそうなっただけなので、いろはは苦笑い。

あれらもねむちゃんが言ってた“主人公”という「見えない力」が作用した結果なの

だろうか？



「本当、印象って不思議よね」

二人のやりとりを眺めながらやちよはクスクス笑うのだった。

☆

——20:00

歓迎会が終わって自室に戻ると、いろはは勉強机の前に座って宿題の続きを解き始めた。

はあ、と溜息——宿題は苦手な数学だ。数字の羅列を眺めていると、先ほどの楽しい気持ちに嘘の様に沈んでいく。

「うっっん、難しい……」

尖らせた唇の上にシャーペンを置き、鼻で挟む——昔ながらの悩むスタイルを取りながら、いろはは考えていた。

まさらやちよに聞けばすぐに教えてくれるのだろうか、自分の抱えた問題は極力自分だけで解決しなくては。

只でさえ二人には恩義を感じている身なればこそ、あまり迷惑は掛けたくない。

「……つてこんなに頑固だから、苦手なんだろうな。数学」

宝崎市に居た頃——葉菜と一緒に、チームリーダーの累（一番年上だけど）に勉強を教えていたことを思い出す。

そういえば累さんって、数学だけは異常に飲み込み早かったっけ。

自分と葉菜も数学が苦手だったから、公式を教えただけで、派生問題をスラスラ解いてくれるのは正直、助かった。

「確かに累さんって頭が柔らかいんだよなあ……。まあ、教えた3日後には決まって『いろっちー！ 前教えてくれたこの式忘れたー！ おしえておしえてー！』つてせがんでくるからムカつくんだけどね……」

「そんなにおもしろーヤツいんのかー？」

「そうなんだよー……つて誰っ!？」

自分以外にいない筈の部屋に知らない声が飛び込んできて、いろははビククリ仰天！ 後ろを振り向くと、別室の筈のフェリシアが、漫画を読みながらベッドに寝っ転がっ

ていたのだ！

「よう」

「ようじゃなくてっ！ フェリシアちゃんっ、ノックぐらいしてよっ!!」

今の独り言も——ついでに累のモノマネも——聞かれてしまったということか。

恥ずかしさの余り顔が紅潮して、溜まらず怒鳴るいろはだが、フェリシアはビクともしない。

「開いてたんだ。入るだろ」

寧ろ一切悪びれずに素っ気なく言い返してきた。

よっ、とベッドから飛び起きると、デスクに近づいていろはの宿題を凝視。

「そんなにムズいのかコレ？」

興味深そうに丸々とした瞳で見つめて問いかける。いろはは頷く。

「うん。フェリシアちゃん……もしかして、分かるの？」

——て、分かる訳無いよね、と思いき笑い。

フェリシアは両親が死んでから、学校には一切通っていないのだという。当然、知識も小学校高学年止まりだろう。いや……市役所での常識知らずぶりからして、教科書を開いた事さえあるのか怪しい。

「……………」

フェリシアは暫く、黙って宿題のプリントを眺めていたが——おもむろに口を開

いた。

「625通りだ」

「え?」

一瞬、彼女が何を言ったのか、分からなかった。

フェリシアの顔を今一度、確認すると、今までにない真摯な眼差しでいろはを見据えていた。

「まず一問目。1から25までの整数が掛かれたカードを二枚抜き取るんだろ?」  
「一枚目のカードを取り出してから戻して、よくきつてから二枚目を取り出す」なんて回りくどく書かれてるけど……惑わされちゃダメだ。考え方はシンプル。一枚目を抜く確率は25通り。二枚目を抜く確率も25通り。二つ合わせたら $25 \times 25$ で正解は625通りだ」

「えっ!?!」

まさか、あの僅かな時間で計算したって言うの!?

驚愕に目を見開いたままのいろはを意に介さずフェリシアは続ける。

「で、二問目。引いた二枚のカードの和が9になる可能性だが、これは簡単だな。1と

8、2と7、3と6、4と5、5と4、6と3、7と2、8と1の8通りだ。つまり、625通りの中で8通りは有ることで、答えは625分の8だ」

で、三問目——とフェリシア。いろはは完全に呆然。

「引いた1枚目のカードを戻さず、二枚目を抜き取る場合」ね。はいはい。これもまず、全体の確立を求めよーぜ。1枚目は25枚の内の一つを選ぶんだから25通り。二枚目は「一枚引かれてる」状態で引くんだから24通りだ。つまり、 $25 \times 24$ は？」

「えつと……？」

「600通り。その状態から引いた二枚のカードの和が9になる確率。これはさつき言った8種類しかないよな？　もう分かっただろ。600分の8、イコール75分の1だ」

「……………」

自分が余白にペンを付けるよりも早く、フェリシアはスラスラと解答を言い当てた。いろは、完全に硬直。

余りにも予想外過ぎる事態に、驚愕の余り思考が真っ白になってしまつて、説明が全く頭に入つてこない。

「どうしたー？　手が止まつてんぞー？」

はっ、と我に返つたいろはは、目を見開いたまま恐る恐る口にする。

「フェリシアちゃんって、一体何者……?」

「はあ?」

「いや、あの……凄いなだね、うん……」

どうにか微笑みを作ってそう褒め称えようと、フェリシアは満更でも無さそうにニカツと笑った。

「へへ、ヨーハイはいろいろ勉強しなきゃだからなあ」

「誰に教わったの?」

「ああ、それはな、とく」

——そこで、フェリシアの表情が消えた。

“今の質問は、いろはでは無い。”

「やちよさんっ!」

自分が確認するよりも早く、いろはがその声の持ち主と驚愕に気付いて素っ頓狂な声を張り上げた。

フェリシアが振り向くと、七海やちよが棒立ちしていた。

「ノックぐらいしてくださいよっ?」

「開いてたのよ。入るでしょ、普通」

やちよは全く悪びれずに、笑って言い放つ。いろはは涙目で机に突っ伏した。

「何でみんな当たり前のように入ってくるんですかー!?」

「だって私の家だし……。それより深月さん、今のは誰に教わったの?」

やちよは微笑みを携えたまま、尋ねた。フェリシアは両手を広げてお手上げのポーズを取ると、

「とつくに昔のことだからなー。忘れた」

首を振ってそう答えた。やちよが申し訳無さそうに視線を下に向ける。

「……そう、悪いことを聞いたわね」

「おう。口の利き方には気を付けろよ」

フェリシアはぶつきらぼうに言い返すと、部屋を出て行ってしまった。

☆

—— 翌日。月曜日。

—— AM 6:00

みかづき荘において家事は、一週間の当番制と決まっている。

今週はいろはが当番。よって毎日、自分を含めた6人分の朝・夕食を用意しなければならぬし、掃除も自室のみでなく、一日一日スペースを小分けに決めて掃除しなければならぬ。

「ふあ〜……」

あくびを噛み殺して、いろはは自室を出た。

眠い。そういえば、昨日でフェリシアも料理できることが分かったから、彼女の分も加えなければならぬのか。あとでピーターさんに相談しよう。

(えっ!?)

そう思った矢先に両足が硬直!

キッチンに灯りが付いていて、カチャカチャと調理器具の音が忙しく響いている。

—— 誰か、いるの?

一瞬泥棒かと思ったが、神浜の最強無比の面子が寝泊まりするみかづき荘に偲び込む愚か者はまずいない。そう分かっている、ちよつと怖い。恐る恐る近寄り、キッチン



の内部を覗き込むと、

「フェリシアちゃんっ?」

金髪の小さな少女を発見して、思わず素っ頓狂な声を挙げてしまった。

「ようー!」

快活そうな笑みで陽気に挨拶するフェリシア。いろはもつい笑みを返す。

「おはよう……ってそうじゃなくって、フェリシアちゃん、何してるの?」

愕然とするしかない。

何せ、新参者の彼女が、自分よりも早く起床して、エプロンを纏い、キッチンでテキパキと何かを作っているのだから。

コンロを見ると、鍋一杯に、薄黄色の液体が浮かんでいた。

あれは————スープだろうか。小さくカットされた彩とりどりの野菜とコンソメの臭いが鼻腔を刺激する。

「何って、朝だぜ? メシに決まってるだろ?」

「いや、メシって……今日の当番私」

あからさまに、フェリシアがムツとなる。

「あー? 細けえこといちいち気にしてんじゃねーよ。こいつでも飲んでう〇こでもしてろっ!」

言いながらフェリシアは、ミキサーの中にあるピンク色の液体をコップに注ぎこんで、無理やり手渡してきた。

「……これって」

「スムージーだ。あのみたまつてねーちゃんが飲んでたろ。見て真似た」

「えっ!?!」

何かさりげなく最後に凄い事言ったような気がしたが、恐らく空耳だろう。

甘つたるい臭いが、朝のぼんやりとした脳には心地よかった。自然と手が出て、いろはは口を付けた。

「美味しい……けど、何が入ってるの、これ?」

液体はトロリとして舌触りが良く、甘酸っぱさの中にコクを感じる。なんとというか、深みのある味、と言えばいいのだろうか。

「ブルーベリーとかバナナとか豆乳とか……あと隠し味に甘酒だな」

「あ、甘酒?」

「やちよが風呂上りに呑んでたろ。あれ見て、ピンと来たんだよ」

酔うワケねーしな、と付け加えてフェリシアはニツと笑うと、今度はコンロのグリルで、魚を焼き始めた。

「……………凄いね、フェリシアちゃん」

口ではそう讚えつつも、いろはの表情は消えていた。

……なんだろう。敵わないと思つてしまった。

料理とは得意分野が少ない自分にとつて、唯一のアイデンティティみたいなもの。

それが、新しく入ってきた子に、こうもあつさり抜かされてしまうと……なんだか、悔しい。

「凄くねーよ。色んな所で雇われたから自然と身に付いただけだつーの」

「ううん、凄いよ」

比較するべきではないのは分かっている。

そもそも、いろはとフェリシアとでは育ってきた環境が異なる。

—— だとしても、フェリシアとの間に差を感じずにはいられなかった。自分は頭も鈍く、要領も悪い。どこまでいっても凡人でしかない——

努力をしているのに、ちつとも報われない。

寧ろ、彼女みたいな子に、積み上げてきたものを横取りされる。

それがどうしようも無くむず痒くて堪らない。

「何、卑屈になつてんだよ?」

フェリシアの呆れた声が飛んできて、いろははハツとなった。

「なつてないよ」

「いや、なっぺんじゃん」

「なっぺんじゃん」

いろはの眉間に皺が寄った。それを見てフェリシアは、的を得たかの様にニツとはにかんだ。

「ははーん。さてはオメー、目立ちたがり屋だな」

「っ!!」

ギョツと目を見開くいろは。

「みんなに良い奴と思われたいから、あれこれ気い回すけど、かゆい所まで手が届き過ぎて空回つちまうことが多い……。それで、相手が好意に気付かなかつたり、甘えてきたりするようになれば、ムカついて距離を置くんだろ? 『何で自分の気持ちを分かってくれないの』って」

「……………」

ゾクリと、背中が冷えた。

急にフェリシアを視界に入れられ無くなっぺん、反射的に目を逸らす。

両手が自然と握りこぶしを作り、震え始めた。

「オメーはオレが料理をテキパキ作れるのが気に食わねーんだ。テメーの腕に自信があるからな。でもそれは、テメーじゃ絶対に公表しない。自慢に聞こえたらみんなが不快

な思いをするから。これまで築き上げた「良い奴」の土台を崩したくないし……だから、みんなが自分の料理を食べて称めてくれる時を、いつも待ってる」

調理を手際よく6人分の皿に盛りつけるフェリシア。

いろはは顔面が紅潮して、全身が掻きむしりたい衝動に襲われた。

全て凶星だ。フェリシアの器用さも、料理の上手さも、全てが気にいらぬ。

「……いつも思ってたんだろ。気にしなきゃ楽だって。でも一度気にしたら夜も眠れない。でも、こんなことで悩むのは下らなくて人に相談するまでも無い、とも思ってる。我慢はするけど……気になる要因は無くならないといつまで経っても楽になれねーんだ」

盛りつけが終わると、フェリシアは、その不敵な笑みをいろはに向けて、冷ややかに言った。

「オメー、オレがジャマか」

そこまで言い放つと、一瞬だけ、いろはの表情が変わった。

本当に1秒にも満たない刹那だが——歯を喰いしばった。

「そんな……っ」

何でこんなにムシヤクシヤするんだらう。

こんなに腹が立ったのは久しぶりだ。これ以上、彼女の言葉を聞いてしまったら――

「嘘付くなよ。顔がそう言ってるぜ」

「っ!!」

隠し通すことができないから、顕わにせざるを得なかった。

キツというはが振り向く。本性を剥き出しにしたその顔をフェリシアに向けた。

「どうして……っ!!」

震えた声。だが、フェリシアはその様子を観察するように目を細めた。

「どうして、合って間もない貴女が、私のことをそんなに知ってるの……っ!？」

怒鳴りたい衝動をどうにか抑えながら、いろはは問う。

すると、今度はフェリシアの表情が変化した。

1秒に満たないくらいの一瞬だが――フツと、口端が吊り上がった。

「言っただろ、オレは経験豊富なんだ」

「えっ」

答えになくなってない、というははは今度こそ怒鳴ろうと思ったが、

「テメーだけが大変だっと思うなよ」

表情を消したフェリシアに冷たく言われてしまって、いろはは返す言葉を失った。

——直後、急激に下腹部が違和感を覚えて、いろははトイレへ飛び込んだ。

そして10分後……。

開かれたドアから、今までに無い清々しい表情で彼女が現れたのはまた別の話……。

FILE #59 FELICIA  
||  
〈恵〉

— 2018 / 06 / 27 (土)

それから、  
数日が経ち……



## ——週末・土曜日。

あれ依頼、フェリシアは変わった行動は見せなくなつた。

変わつてる、というのは、出会つた初日に市役所で見せた傍若無人と、みかづき荘で見せた優秀ぶりである。

どちらも同一人物だと、未だに、いろはには信じ難い……が、フェリシアは火曜日からはどちらの様相を微塵も伺わせることなく、めつきり大人しくなつた。

まるで、借りてきた猫のように。

ようやく、居場所を見つけて安心したのかも知れない。

ただみかづき荘は、いろはは通学、他の4名は市役所出勤の為、昼間に残るのは必然的にフェリシアだけとなる。

小さな子供とは言え、曲がりなりにも元は「傭兵」。一人にして大丈夫なのか、とまさらが珍しく不満を顔に出して意見したが、ピーターに、ここで不義を働く愚か者はいないわよお、と笑顔で返された。

なるほど、確かにみかづき荘の面々に恨みを買うような真似をしたら、後でどんな報復をされるか、想像するだけでも堪つたもんじゃない。

フェリシアも、その辺りは理解しているのだろう。

無論、最初に出会った時のイメージがあまりにも強すぎたせいで、みかづき荘が散々な状態になるのでは？ と、いろはも最初は不安でいっぱいだった。通学中もずっと

ドキドキしたが——彼女は、ピーターやちよの言いつけはよく守っていた。寧ろ、暇があれば、買い出しと片付けを行ってくれた。

——現在。 神浜中央商店街。

いろはとフェリシアは仲良く(?) 来週分の食材の買い出しに出かけていた。

不意に、隣を歩く金髪の少女を見た。両手にぶら下げた、大量に野菜やら飲み物やらが詰め込められた買い物袋をもともせず、聞いたことの無い鼻歌を鳴らしている。

(でも、料理とかは、絶対私にやらせるんだよなあ……)

フェリシアは家に残っているものの、掃除と料理だけは、専らいろはに任せていた。

確かに自分の帰宅すると大体5時半過ぎ、他の面々が返ってくるのは6時半〜7時になる為、帰ってから人数分の食事を作っても間に合うのだが……

『作ってくれたっていいと思うんだけどなあ……』

家にずっといるのなら、そうして欲しい——

ある日、夕食を作りながら不意にいろははそう愚痴を零したことがあった。すると、『当番が作るって決まりだろ？ 決まりは守らなきゃな』

……等と、ニヤニヤ笑って返された。頭に來たので、次の日の朝まで口を聞かなかった。

（ああいうことがあったのに……）

フェリシアは手に下げたレジ袋の一つから、出来立てのコロッケを一つ取り出して、頬張っていた。

「やっぱ肉屋で買ったコロッケはうめーなっ！ いろはも食うか？」

「ううん、お昼ご飯が近いからいいよ」

フェリシアは、ちっとも気にせず、自分にガンガン話しかけてくれる。

それに比べて自分は、なんと卑屈なのか。

普通に話せばいいのに、つい目線を逸らして、当たり障りのない返事をしてしまう。真正面から向き合おうと、また見透かされそうな気がして、怖かった。

「ふーん……」

フェリシアは一瞬だけ目を細めているのはを見た後、二つ目のコロッケを頬張り出し

た。

その後二人は、会話無く、国道の交差点まで足を運ぶ——すると、

「父ちゃんの馬鹿!! 死んじゃえ!!」

「っ!!?」

不意に前方から聞こえてきた声に、揃ってギョツとなった。

二人が前を見ると、ひとりの小学生ぐらいの男の子が、逃げるような勢いで横断歩道を走っていた。

幸い、青信号。危険は無い。

だが、何があったのか——いろはが気になって少年を見つめていると……

「ほおーら捕まえたあー!!」

フェリシアがバツと飛び出し、少年の前で身構えた。そして真正面から抱き締める。

「なんだよお前っ!! いきなり何すんだ放せよ!!」

少年がバタバタと藻掻き、フェリシアの拘束を振り解く。そして顔面に向けて拳を振り抜くが、フェリシアは一瞬で彼の背後に周り、羽交い絞めにした。

「おいガキ。元氣いっぱいなのは結構だが、今の言葉はやめろ」

「なんだよ！ お前には関係ねーだろ!!」

フェリシアは少年を路面に下すと、僅かに屈んで、目線を合わせた。

「ああ、関係ねーよ」

「……っ!?!」

瞬間——少年の顔から怒気が消滅。ゾクツと、背筋が凍えた。

感情を消した表情の中で、氷よりも冷え切った瞳が、少年をその場に釘付けた。

「けど、今すぐとーちゃんに『ごめんなさい』って謝れ。いいか?」

怯えながらも少年は嫌悪感を顕わに怒声を張り上げた。

「な……何でだよ！ あんなクソ親父！ 死んだ方がマシだよ!?!」

「オメーなあ」

フェリシアは後頭部を搔いて、呆れた表情を見せた。

そして、何かを少年に言おうとした矢先だった。

「光!! 待ってくれっ!!」

——突如、悲鳴のような叫び声が聞こえて、三人はギョツとした。

そして、聞こえた方向を見た時——一斉に肝が冷えた。

少年の父親らしき中年男性が、横断歩道を走っていた。赤信号で。

表情は完全に焦燥しきっており、息子<sup>少年</sup>以外は何も見えていない。

それは、危険行為以外の何ものでも無かった。

「危ないっ!!」

「っ!!」

いろはが咄嗟に叫んで、父親はハッと我に戻る。聞こえてきたのは複数回のクラクシヨン音。

状況を把握しようと父親が目を横に動かした時には――

ドンツ!!

全てが遅かった。

青色の乗用車がいろは達の視界に入り込み、横断歩道と重なると同時に、とても短くて、力強い轟音が盛大に耳朶を響いた。

次の瞬間、いろは達は呆然となった。

父親の体が宙を舞っている。その瞳孔に光は無く、虚ろで。

余りにもショッキングだった故か、その壮絶な光景は三人の目にはスローモーションのように展開され、彼の体はコンクリートの路面に背中から勢いよく叩きつけられた。

刹那――

ドンツ！

ドンツ！

ドンツ！

――と、急ブレーキを掛けた車の背後を、三台の車が立て続けにぶつかつた!!

玉突き事故だ！ 最前列の車両からガラス破片が飛び散り、現場は一気に騒然となつた。

「父ちゃああああああああんっ!!」

絶句する目撃者達の中で、少年が腹の底から絶叫を響かせるよりも早く、二人の魔法少女は動いていた!!

真っ先にフェリシアが飛び出し、後を追う様にいろはが付いていく!

「いろは、足を持って!!」

「う、うん!!」

ここは交差点のど真ん中だ。まずは負傷者の安全を確保しなくては。いろはとフェリシアは父親を抱え上げて、歩道へと連れていく。

「おいっ! 誰か交通整理をやってくれっ!! 車がどンドン来るぞっ!!」  
「もうやっっているっ!」

「よしっ」

フェリシアが喉が枯れる程の大声で、いつの間にか歩道に密集していた野次馬に向かって指示を出すと、叫び声に似た返事が即座に返ってきた。

男性が二人ほど交差点に躍り出て、手信号で向かってくる車を避けるように誘導する。

その間に、フェリシア達はまず、男性の応急処置を行うことにした。

安全を確認して横にする。フェリシアは口から吐瀉物が無いことを確認してから、肩を叩いて声を掛けた。

「おい! 大丈夫か!?!」

フェリシアは屈みこみ、肩を叩きながら大声で二度、声を掛ける——反応が、無い。

まさか、と思い、口元に耳を近づける。



「……っ!!」

ゾツと、フェリシアの背筋が震えた。

愕然と目を見開くフェリシアに、いろはが恐る恐る問いかける。

「……フェリシア、ちゃん？」

「駄目だ。息がねえ」

「！ 私の魔法で……」

咄嗟にいろはがフェリシアを押しつけようとした。

その両手には淡い桃色が瞬いている。

いろはの固有魔法であった。過去にも彼女はこれで、故郷で皆木葉菜親友の蘇生に成功し

ている。これなら、間違いなく——!!

「バツカヤロウ!!」

耳元で怒号。いろはがビクリと体を震わした。

「大量の魔力を急激に送り込んだら、体の細胞組織が一気に老化しちまう危険があんだよっ!!」

その言葉に、いろはは固まった。

「えっ」

「一般人の人体を治癒していいのは、資格を持った魔法少女だけだ!! お前は車に乗っ

てる連中を見て回れ！ ヤバくても無事でも構わねえオレに伝えろ!! おい、そのおっちゃん、119番!! そののねーちゃんは115!! そののにーちゃん達はAEDを持ってこい!! できるだけ多く、早くな!!」

たじろぐいろはを意に介さずフェリシアは周囲の人だけにテキパキと指示を飛ばしていく。

そして、いろはが蒼褪めた顔のまま事故車両の列へ向かっていくのを確認すると、目の父親を確認した。

—— まずは気道確保だ。

フェリシアはあご先を持ち上げるようにして頭を後ろに反らす『頭部後屈顎先挙上法』を取った。

そして、胸の真ん中に片方の掌の基部を当て、その上にもう一方の手を重ねて置いた。両肘を伸ばし、肩が圧迫部位の真上になるような姿勢になる。

そして、胸が少し沈むように強く早く圧迫を繰り返した。

心臓マツサージだ。

そして、三十回行くと、再び頭部後屈顎先挙上法で気道を確保してから、自分の口を大きく開いて父親の口を塞ぎ、息を吹き込んだ。

人工呼吸だ。息が鼻から漏れないように、頭部を後屈させている右手で鼻腔を塞ぐ。

一旦口を離して、もう一度上記の方法を繰り返す。

「ちっ……」

人工呼吸をした時、負傷者の胸が2回とも持ち上がれば大丈夫だが、それが無いということは……フェリシアは口を離して忌々しく舌打ち。

救急車か、あるいは、やちよ達が来るまでもたせるしかない。フェリシアは再度心臓マッサージを行うと、

「……」

脇に誰かいることに気付いた。

チラリと横目で見ると、いつの間にか少年の細い両足が見えた。

顔を見上げると、彼は目の前の父親の状態が信じられないといった様子で、目を震わせていた。

「おいガキ、良かったな」

「っ!!」

心臓マッサージを続けながら、冷徹な一言。

ギクリと、少年の肩が強張った。フェリシアは心臓マッサージを続けながら、ニツと唾う。

「オメーのトーちゃん、このまま死ぬぜ」

「……………」

少年が感じたのは恐怖か、興奮か――

凍えるように、ガタガタと体を震わせながら、虫の息すら無く、瞠目したままの父親をじつと見下ろしていた。

「死んでほしかったんだろ、なあ」

笑いながら少年を見つめるフェリシアの瞳が、氷の様に冷たく瞬いた。

しかし……

「……………」

少年がフェリシアを強く睨み返し、首を振った。

「あ？」

「……………違うよ」

少年の口が、大きく開いた。

「死んでほしくないっ!! オレ…………ホントは、構って欲しかったんだっ!! 今日はずぶりに遊べるって思ったのに…………また仕事の電話が来ちゃってさ…………オレ、頭きて、つい、あんなこと言っちゃって…………っ!!」

少年は赤くなった瞳から大粒の涙を流し、フェリシアに叫んだ!!

「頼むよにーちゃん!! 助けてよっ!! オレ、とーちゃんに謝るから……ごめんなさいって言うから……殺さないでっ!!」

ひつく、ひつくと、少年は涙を拭い、嗚咽を漏らしながら、懸命に訴える!

「よしっ」

フェリシアは笑みを消して、コクリと頷いた。

「にーちゃんは不正解だが、その判断は正解だっ!!」

フェリシアは父親に向き直すと、叫んだ。

「おいバカ親父!! ガキの目の前で死ぬんじゃねーぞ!!」

そういうと、再び人工呼吸を行う。しかし――

「フェリシアちゃん!!」

「っ!!」

直後、いろはの悲鳴に、ギョツと目を剥いた。

彼女が一番に向かったのは、父親の少年を轢いた車だ。まさか――

「息がねーのか!?!」

「ううん……息はしてるみたいだけど、顔が青くて、苦しそう……!!」

「なんだとクソっ!」

フェリシアが吐き捨てる。

「いろは、変わるのか!？」

「えっ、えつと……」

無理か。

いろはの感情を支配しているのは、恐怖と混乱、そして自分の無力感への怒り。

相貌は青白く、眉間に皺が寄り、口元は歯を固く喰いしばっている。冷静な判断は期待できそうにないし、この状況は彼女のキャパシティを完全に超えているのだろう。

こいつは、使えない。

ならば、自分が行くしか無い——しかし、僅かでも心臓マッサージが出来なけれ

ば少年の父親は死ぬ。

フェリシアは咄嗟に首を挙げて、周囲に向かって吠えた!!

「誰かつ!! 変われるヤツはいねーか!?! 心臓マッサージと人工呼吸だ!!」

人だかりの大多数は、この混乱を現実と認識していない。

その証左に、距離は遠く、「すっげー!」「マジやべー!」等といった歓声を挙げたり、スマホで動画を録っている者も見受けられた。

「はいはいはい!! ここにいます!!」

よって、時間が掛かるだろうと思っていたフェリシアは、驚いた。

即座に甲高い声が耳朶を叩いたからだ。しかも、僥倖なのは、聞き覚えのある声。振り向くと、人込みを掻き分けて、一人の少女が姿を見せていた。

「オメーは……」

由比鶴乃だ！ 彼女が駆け寄ると、僅かに漂うにんにくと油の臭いが鼻腔を刺激する。

「ボウズ、この人は任せて！」

「いいのか!？」

「だいじょーぶ!! この前教習所で習ったばかりだから！ それにわたし、ラッキーガールだから！」

「ラッキーがオメーだけじゃねーのを祈るぜ!!」

鶴乃が変わって貰うと、フェリシアはいろはが立往生する事故車へ飛び掛かった。

「どけえっ!!」

蒼褪めた顔でオロオロするいろはを押しのと、フェリシアは車内に飛び込んだ。

幸い、運転手の意識はまだある。だが、右胸を抑えていて、ぐうう、と唸り声を挙げている。

呼吸が浅く、まるで溺れたかのように青白い顔で必死に藻掻いている姿は見ているだけで苦しそうだ。

フェリシアが、運転手のYシャツを開けて胸を指で叩くと、太鼓のような音が鳴った。

頸静脈は――

(張り切ってる……こいつあ)

フェリシアの頭に一つの可能性がよぎった。

「外傷性気胸か……!?!」

「えっ!?!」

「折れた肋骨が肺を傷つけて、そこから漏れた空気が胸腔内にたまって肺が膨らまなくなってるんだ……このままじゃこのおっちゃんも死ぬぞ!」

「えっ……えっ!?!」

いろはの額に冷や汗が溢れ出す。

伝えた所でパニックが増すだけだろうが、誰にも伝えないよりはマシだ。同じ状況が二度も無いとは限らない。

フェリシアは車内を見回した。何か応急処置に使えるものは……あった!

運転手の胸ポケットからライターを発見し、取り出した。あと、必要なのは、先端が尖ったもの……。



「っ！」

そこでフェリシアは何かを見つけると、グツと体を伸ばし、*“それ”*を拾い上げた。

(折り畳み傘……?!)

それで何をするのか、というはが問うよりも早く、フェリシアは外に向けて傘を開くと、柄の部分の一つ両手で握り——ベキンツ！ とへし折った。

そして、折れて尖った部位を、ライターの火で炙ると……。

「っ!!」

いろはが隣でギョツと目を見開く。同時に唾を飲みこむ音が聞こえるが、フェリシアは構わなかった。

熱くなった傘の柄の先端を、運転手の右胸に向けたのだ。そして、一呼吸すると、勢いよく先端を突き刺した！

「げええッ!!」

不意に生じた苦痛に、運転手は堪らず叫んだ。

「っ!!?」

その衝撃的な光景に、いろはの足元が一瞬ふらついた。

「ええっ!?!」

「何してんだおい!!」

「殺す気かー!!」

「やめてフェリシアちゃん!!」

その行為を目の当たりにした野次馬が一斉に喚き散らし、いろはが咄嗟にフェリシアを後ろから羽交い絞めにして、運転手から引き離れた!

しかし——刺したところから、ぷしゅう、と空気の漏れる音が聞こえて、フェリシアはニツとはにかんだ。

「おっし、当たり!」

「何がっ!? ……えっ!!」

いろはは運転手の方を見て、仰天した。

あれだけ苦しそうだった表情が、安らいでいる。更に、呼吸も正常に戻っていて、血の気もみるみる内に良くなっているのだ!

「大丈夫か!」

いろはをふりほどき、フェリシアが運転手の肩を叩いて大声で呼びかける。

彼の意識はまだ朧気だが、しっかりと、頷き返した。

「あ、ありが、とう……」

「……えっ」

「胸腔ドレナージだ。肺を刺して、空気の逃げ道を作ってやった」

「えっ……えっ？」

立て続けに驚愕を目の当たりにしたせいか、フェリシアが何を言ってるのか分からなかった。

彼女は、一息つく間も無く、後ろの玉突き車両群に向けて叫んだ。

「そっちは無事か——！！？」

「うん、こっちは大丈夫ー！！」

「こっちも運転手は両腕は痛がつてるが、全員息と意識はあるぞー！」

「こっちは親父がハンドルで脛を切っただけだ！！」

「お、俺もなんとか……」

背後の玉突き車両では、既に自主的に救助に向かっていた人達が、乗客の安否を確認していた。

幸い、重症なのは、引かれた男性と、立て続けに背後をぶつけられた一番前の運転手だけで、残りは軽傷で済んだ様子だ。

「ボウズー！！ AEDが届いたよー！」

次いで、反対側を見ると、女性からAEDを受け取った鶴乃が叫んでいた。

「おい、使い方は分かってんだろーな!? 絶対に死なせんじゃねえぞ!!」

「おねーちゃん、お願いっ!!」

「任せとけって!!」

少年の涙の訴えに自信満々な声が返ってきて、フェリシアは一息付いた。

鶴乃は少年の父親のワイシャツを開けると、テキパキとした動作で、電極パッドを胸の右上と左下側の肌に直接貼り付ける。

「離れて!!」

AEDの音声指示と同時に鶴乃は周りに向けて声を張り上げて、父親から手を離す。

「……………」

少年が固唾を飲んで父親を見守る。

あれだけ心臓マッサージを行ったのに、未だに反応が無い。

このAEDという——少年にとって初めて見る機械——が、恐らく最後の頼みだ。

——父親の体が一瞬だけ、びくんっと飛び跳ねた。

電気が流れたのだ。次いでAED本体から『ショックが実行されました』と、音声がかえりこえる。

少年だけでなく、鶴乃も、両手を固く握りしめて、父親の無事を祈っていた。

周りの人ばかりも、静かにその様子を見つめている。

「……………う……………」

「っ!!」

「父ちゃんっ!?!」

聞こえてきたのは、微かなうめき声。

鶴乃が咄嗟に耳を傾けると――

「呼吸が、聞こえる!」

「……っ!!」

その言葉に、少年の涙が止まった。顔から恐怖が拭い去り、光が差し込んだ。

「大丈夫ですか!!」

「う……………」

鶴乃が大声で父親に呼びかけると、彼は呻きながらも頭を左右に動かした。

そして――

「(い)う……………(い)ち……………」

ゆつくりと瞼を開いた。

そして、生気の伴った瞳をしかと少年に向けて、確かに彼の名を呼んだのだ!

「意識が戻ったっ!!」

瞬間、鶴乃の顔は歓喜に満ちた。

声を張り上げると、周りを囲んでいた大人達もワアッ! と囃し立てる。

「すげえ!!」

「やったじゃねえか姉ちゃん!!」

「たいしたもんだ!!」

「ボウズー!! いろはちゃん!! やったよー!!」

鶴乃の心の底から嬉しそうな声と、周囲の歓声が届いた瞬間――

「!! ……………」

「やれやれだぜ…………」

二人は全身の力が抜けたように――へなへなと路面に腰を下ろした。

☆

その後、救急車と警察、やちよと朝香美代をはじめとした魔法少女達が駆け付け、迅速な人命救助と事故処理が行われた。

幸い、死者は無し。意識を取り戻した少年の父親は救急搬送され、少年は鶴乃と共に救急車に同乗した。

人がごつた返し、大混乱の現場は、次第に落ち着きを取り戻すと、いろはとフェリシアの両名は事件の重要参考人として、警察にしばらく拘束された。

そして、事故関係者者全ての事情聴取が終わり、漸く解放されたころにはすっかり日が暮れていた。

二人は買い出しの荷物を一度、みかづき荘に置いてくると、少年の父親が搬送された先である神浜総合病院に向かった。

あれだけの事故故だ。父親の体もそうだが、少年のメンタルの方も心配だった。

受付で尋ねると、つい先ほど手術は終わったらしく、腰の骨は折ったが、命に別状は無いらしい。

なお、神浜総合病院は基本的に、家族以外の面会は禁止とされており、病棟へ入るにも『入館証』が必要となるのだが……今回は、受付担当者が少年に直接問い合わせ、彼が了承したことで、特別に面会が許された。

病室に向かうと、鶴乃が個室の扉に背を預けて立っている。彼女は二人の姿を見る

と、陽気に声を張り上げて手を振った。

「いろはちゃん、ボウズ！」

「鶴乃ちゃんっ」

「オメーまだいたのか」

あとボウズじゃねー、とフェリシアは呆れ顔で鶴乃に言い返す。

「あの子は？」

いろはが問いかけると、鶴乃は微笑んだ口元の前で人差し指を立てた。

二人が首を傾げると、鶴乃は「ちよつと覗いてみ？」と言い、僅かに扉を開けた。二人が覗き込むと、ベッドで横になっている父親が見えた。大柄の体躯に白い浴衣のような病衣を羽織り、口には酸素マスクを装着されている。スーツ姿の時よりも大分弱々しい印象だ。

ベッドの脇には、心拍数や血圧、SPO2が表示されたモニターが置かれており、まだ油断は許せない状態なのだろう。

だが、彼の目にはしっかりと生気が戻っており、隣で椅子に座る少年をじつと見つめていた。

「……父ちゃん、ごめんなさい」

二人が見た少年の姿は背中だけ。しかし、声は涙ぐんでおり、泣いていることは明らか



かだった。

父親が手が、すつと持ち上がった。

少年の肩が、ビクリと挙動する。

あんなことを言つて逃げた。父親は自分を追いかけて重症を負つた。

だから、怒られると思つたのかもしれない。

頭頂部に来る衝撃に備えて、少年は嗚咽を堪えながら、身構えた。だが――

少年は愕然とした。

父親の手が、自分の頭を優しく撫でたのだ。

「父ちゃん……………」

少年が呆然と目を見開くと、父親は、酸素マスク越しに、掠れた声で呟いた。

「光……………ごめんな」

「……………!!」

「父ちゃん……………お前が寂しいの、分かつて……………仕事を選んだ。お前と向き合ったら、

嫌われるんじゃないかって、思うと、怖くなっちゃって……逃げた。俺……悪い父ちゃんだった……」

父親の呼吸はまだ浅く、喋るのも苦しそうだ。だが、彼は笑って少年と話していた。

「……………」

「これからは、しばらく、ここにいるから……どこにも、いかないから……。一緒に、色んなこと、話そうな……。それで、父ちゃんが、元気になったら……！　また一緒に、遊ぼう……っ！」

「父ちゃんっ！」

少年がベッドに走り寄り、わんわん泣き出した。父親は少年を頭を優しく抱き寄せた。

——その様子を見届けた三人は、ホッと一息ついた。

「一件落着だね」

「うん……」

鶴乃は笑ってそう言うと、いろはは涙を拭いながら頷いた。フェリシアは何故か窓の方へ向かい、夜空を見上げている。

「何ボウズ？ 泣いてんの？」

「うるせー。それよりオメー、万々歳はどうした？」

背中を向けたまま、フェリシアが不意に尋ねると、鶴乃は可笑しそうに笑った。

「何々心配してくれてるー?? だいじょーぶ。店番はちゃんとしているからさ」

フェリシアが振り向いて——ハッと、鼻で笑い飛ばした。呆れ返るような瞳で冷徹な

一言。

「なーんだ、只の暇人かよ」

「ああもうっ！ せっかく見直してやったのに、やっぱりコイツ嫌い！ 環師匠、なんと

かしてよ!!」

「あはは……」

鶴乃はいろはの脇にピョンと飛び跳ねると、腕に縋りついて喚いた。いろはは苦笑

い。

「師匠？」

その笑みが、どこか固く、引き攣っているように見えた。

問いかけると、いろはは申し訳無さそうに、首を下に落とした。

「……ごめんね、二人とも」

「??」

いきなりの謝罪に、鶴乃とフェリシアは揃ってきよとんとなる。

「二人とも、テキパキ動いてて、本当にすごかった。カツコよかったよ……っ！ 私なんて、頭がぼーっとしちやっつて、何も出来なかった。……それどころか、余計な真似して、もしかしたら、あの子のお父さんが、もつと大変な事に……！」

あの現場で、自分は完全に邪魔者だった。

自分の出来ることを理解できず、人命救助に奔走するフェリシアの足を引っ張ってしまつた。

改めて痛感した。自分とフェリシアとの明確な差を——フェリシアを妬む資格すらない。だって、同じ土俵にすら立てていないのだから。

後悔と恥辱が一気に押し寄せて、拳が震えた。頭がカーツと熱くなり視界が涙で揺れる。今にも逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。口では自省しながらも、そんなことを考える自分が余計に嫌いになる。

「初めてだったんだろ。しゃーねーよ」

顔を上げると、フェリシアが溜息混じりにそう言った。

「そうだよ。私だつてたまたま覚えただばかりだったから良かったけど……何も知らなかったら多分、いろはちゃんみたいになつてたと思う」

鶴乃はフェリシアの言葉にうんうんと頷きながら、いろはの肩を抱き寄せた。

「次がねーこともねーんだ。そんな時に活かしやいい」

それで、いいのだろうか。だつて自分は……。

——思考が自嘲の袋小路に入り始めたその時だった。

個室のドアが勢いよく開かれて、少年が飛び出してきた。

「にーちゃんっ!! ねーちゃん達っ!!」

鶴乃がプツと噴き出す。フェリシアは一瞬、ゲツと顔を歪めて頭を掻いた。

「……よう小僧、とーちゃんにはちゃんと云えたか？」

フェリシアは少年に近づくと、屈んで目線を合わせた。彼は笑顔で「うんー」と頷いた。

「そーか……とーちゃんのこと、しっかり守ってやれよ」

「うん、ありがとうにーちゃんっ!」

「だからにーちゃんじゃねーって」

フェリシアがひらひらと手を振ると、少年はきよとんと小首を傾げる。

「そうなのかー? 男みてーな喋り方してるし、自分のこと“オレ”って言ってるじゃん」

「だつたら……証拠、見てみるか?」

フェリシアがニヤリと不適に笑つて、ズボンのジッパーに指を——

「それはダメだつてっ!!」

掛けるよりも早く、いろはと鶴乃がフェリシアの両腕を抱きかかえる。

少年がその様子を見て、ケラケラと愉しそうに笑った。

「にーちゃん、ねーちゃん達! 本当にありがとうつ! オレもう絶対にあんなこと言わないよ!」

フェリシア再び少年と目線を合わせると、小指を立てた。

「そーか。約束するつて誓えるか?」

「うん、ちかうよ! 男と男の約束は永遠だろ?」

「だからちげーつつの……」

少年は笑顔でフェリシアと指切りを交わす。

—— 彼らは、もう大丈夫だろう。

フェリシア達はそう思うと、立ち上がって背中を向けた。

「ねーちゃん達、とーちゃんを助けてくれて、本当にありがとう!」

去り際に、三人の背中に向けて、少年がそう言ってくれた。

三人は振り向いて、笑顔で手を振った。

「ま、終わりよければ、全てよしだな」

「……うん！」

ようやく、いろはも笑顔を見せた。

少年の笑顔と、フェリシアのその一言に、救われた気分だった。

そして——不意に窓の外を見ると、漆黒に満ちた夜空の真ん中で、半月が瞬いていた。

微かに雲が覆い、不気味に感じるくらいの深い紫色に染まっていた。

1416 FILE #59 FELICIA = 〈惠〉



## FILE #60 REPENTANCE Ⅱ 〈懺悔〉

— 2018/07/04 (土)

— それから、一週間後。

— 神浜消防署。

会議室では、先日発生した玉突き事故で人命救助に精を尽くした者達が、署長から表彰を受けていた。

「深月フェリシアさん。貴殿は平成30年6月27に発生した交通事故において迅速で

的確な対応で人命救助にご尽力されました。あなたの勇敢な行動は他の模範となるところであります。よってここにその功労をたたえ記念品を贈り、感謝いたします」

既に四方を陣取っている記者達のカメラから無数のフラッシュを浴びながらも、署長の前に立ち、表彰状を受け取るフェリシア。

「あ、ありがとうございます……」

目立つのはあんまり慣れていないのか、どうもそわそわして忙しない。

他にも、鶴乃や自ら協力してくれた一般の方々も居たが、一番注目を集めていたのは、やはり最大の功労者である彼女であった。

何せ、現場に駆け付けた救急隊や医療関係者を驚嘆させたのだから仕方が無い。

二台目の車の運転手を救った「胸腔ドレナージ」——当然だが、医者で無ければ、まず思いつかない方法だ。ましてや「普通なら」中学生に上がったばかりの、年端のいかない少女が……である。

だがその技術は的確そのもので、一人の命を救った功績は、事件直後、瞬く間に市長である青佐の耳に止まり、各メディアでも大々的に取り上げられた。

【救急隊員膝を打つ！ 元ホームレスの少女、的確な指示と豊富な知識で命を救う!!】

——と、純粹にフェリシア個人を称賛する記事。

【『やっぱり魔法少女はスゴイ!!』 事件以降日々高まる魔法少女への絶賛の声!!】

【『英雄の教育の賜物か!?!』 元ホームレスの魔法少女、今はみかづき荘に住んでいた!】

——等と、あからさまに魔法少女の一点のみを尊重したもの。

【正に命賭け!?! 有名医師が語る! 素人が『胸腔ドレナージ』を行うリスク!!】

【命を救った魔法少女は“傭兵”? 知られざる魔法少女界の闇!!】

——そして、一部では、魔法少女に批判的な企業によるヘイト記事も作られ、有りもしない噂がでっちあげられたりもした。

いずれにせよ、事件当時、フェリシアの行動が多く命を救ったのは紛れも無い事実であり、彼女への賛辞が絶えぬ状況下で表彰式が行われたものだから、盛り上がるのは間違い無かった。

だが、その光景を、遠くから冷ややかに眺める二人組が居た。

——消防署向かい。国道を挟んで建つマンションの屋上。

「全く、何をしているのやら……」

記者たちのインタビュに揚々と答えるフェリシアを、スコープ越しに見据えながら、赤いフードで全身を隠した女—— “赤羽根” 双樹ルカは溜息混じりにぼやいた。

「あのように大々的に目立たれては、任務遂行に支障が出るかと……」

自分達が彼女に依頼した案件は、なるべく隠密に行ってもらわねばならない。

「うんにゃ。案外そうでもないよー」

やれやれと残念そうに首を振る赤羽根の後ろで、明るい声が聞こえた。

振り向くと、近所で購入したハンバーガーを頬張りながら、スマホをいじる伊月ジュンが居た。

彼女は赤羽根の心配など、どこ吹く風と言わんばかりに素っ気なく言い放つ。

「寧ろ、今の状況の方が実行するにはベストじゃないかな？」

「——と、仰いますと？」

赤羽根は小首を傾げた。初めて見る純粋な反応に、ジュンはプツと噴き出す。

「赤羽根。君、傭兵はトーションローでしょ」

「組織に入る前は、自由奔放に生きてきたもので」

「道理で。おんなじ臭いがプンプンするのに、感情読み取るのヘツタクソだなーって思つたよ」

嘲笑混じりに挑発したつもりだが、赤羽根は一切動じない。

「それよりも、何がベストかをご教授頂きたいのですが」

尋ねるとジュンは首を捻つて、考える仕草を見せた。

「そうだねえ……。じゃあ、まず例え話をしようか」

ジュンはニツとはにかんだ。

「赤羽根。もし、君が今入ってる組織を変えたかったら、どうすればいいと思う？」

赤羽根は嘆息した後、首を振った。

「さあ？ 何せ加入してから間もなく中間管理職を賜りましたので……多忙の余り、考える暇も有りません」

やれやれと言いたげな赤羽根の顔を見て、ジュンは即座に「ウソ」だと気付いたが、指摘はしなかった。

考えた事も無い、というよりは単純に、興味が無い、だけだろう。

この女が、組織を語る時に表情から伺い知れる感情は——虚無。

「ふーん。じゃあ、勉強のつもりで聞いて欲しいな。結果を言っちゃうと、簡単なんだよ。正義の味方になれればいい」

「正義?」

「郷に入つては郷に従えつて言うでしょ。相手の領域で最適に動くには、組織のルールに自分を適応化させちゃえばいいんだよ。その上で、でっかい功績を残す」

なにやら抽象的な表現が続く。赤羽根は今一つ要領を得ない様子で尋ねた。

「でかい功績、ですか?」

「そ。君が務めているところにも『ルール』はあるでしょ? ルールつてのはつまり組織が掲げる『正義』だよ。その正義にとことん自分を忠実にさせるの」

「よく分かりませんか?」

「んーと。小学校の頃にさ、クラス委員になつて行事を手伝つたり、テストで良い点を取つたら先生がほめてくれたでしょ? あれは学校の掲げる正義に自分が順応できてる結果なんだよ。要は、それと同じことをし続けちゃえば良いつてことだよ」

「しかし、組織を変えるには、何らかの反抗の意を示さねばなりません」

「善い事を積み重ねれば、勝手に信頼つて生まれるんだよ。組織の人間は上も下も関係なく、自分に付いてきてくれる。そこで、何かを変えたつて誰かを排除したつて気づきやしない。それも組織にとつて必要なことだろうつて勝手に思つてくれるんだから。時に赤羽根。君はプラトンの思考実験を知つてるかな?」

「西洋哲学ですか。生憎」

即座に首を振られたので、ジュンは答える。

「完全に正しい人間と、完全に不正な人間、その二人を法律や社会の制約が一切関与しない状況に置いたらどうなるかっていうの。結果は、完全に不正な人間の勝ち。誰にも不正を暴かれることも責められることもなく、皆から最大の正義スゲーことしたよなアイツって評価されたんだって」

赤羽根は、真剣にふむふむと耳を傾けていた。

「フェリーをみてごらん。あいつこそ不正の塊だつてのに、この街の社会ルに自分を沿わせて最大の正義人命救助を成し遂げちやつた。もうあいつを疑う奴は誰もいないんだ」  
「つまり」

——実行の準備は、整った。

赤羽根の意図は微かな表情の変化で読み取れた。ジュンは言葉にされる前に、うんと頷く。

「ぶつちやけ、玉突き事故はラッキーだったよ」

「起きなかつたら？」

「決まってるじゃん。こつちでお膳立てしてた」

素つ気なく答えるジュンに、赤羽根は少しの間だけ閉口した。

怯えた訳では無いが、この化け物染みた女の思考回路に踏み込むのは拙いと、本能が

呼び掛けた。

☆

——  
夜。

—— みかづき荘、いろはの部屋。

「ふいふ、疲れたぜえ〜……」

部屋に入った途端、ベッドへぼすんつ、とダイブするフェリシア。

消防署を出た後、待ち構えていた多数のテレビ関係者と雑誌記者にもみくちゃにされ、顔中にカメラやマイクを突き付けられた。

彼らを払いのけつつ、どうにかやつとのことでみかづき荘へ帰れたが……疲労困憊だ。夕食を終えて、ひとつ風呂浴びたら、もう眠気が酷い。



部屋の主であるいろはは、そんな彼女を笑顔で迎える。

「お疲れ様。……つて、フェリシアちゃん……ここ私の部屋なんだけど……」

……が、すぐに苦笑いを浮かべて、なんとも図々しい真似をするフェリシアにそうツッコんだ。

「ここはオレの家だぜ。誰の部屋に入ろうとオレの自由だろ？」

が、枕に顔をうずめながら、手をヒラヒラ振られて素っ気なく返されてしまう。

「ええ……？　でも、みたまさんやちよさんの部屋にはいかないじゃん……」

「猛獣の檻に入るようなもんだろ。オレはまだ死にたくねえ」

「じゃあピーターさんは？」

「ありや魔境だろ」

「まさらさんは？」

「面白がねえ」

「つまり……消去法で」

いろはは自分を指差した。フェリシアもいろはを指差す。

「そ、オマエ」

「……………」

いろはは一瞬だけムツとなると、顔をぶいっと勉強机の方に向けてしまう。

確かに、前の街でも、累さんにからかわれまくったし、自分が「絡みやすい奴」なのは重々承知だ。

でも、なんだろう——

累さんは嫌味が無いからいいけど、フェリシアちゃんは年下なのに、逐一小馬鹿にするような言い方で、なんだか、腹が立つ。

「何、拗ねてんだよ」

「拗ねてないよ」

「いや、拗ねてんじゃん」

「拗ねてないってばっ」

情けないとは思いつつも、つい語気を荒立ててしまういろは。

その反応が面白いのか、ケラケラ笑うフェリシアの無神経な声が余計に癩に障る。

「いろはって本当にかてーよな」。何でも受け入れた方が楽なのに」

「私はフェリシアちゃんみたいに器用じゃないの。根っからのぶきつちよなの。知ってる癖にっ」

フェリシアが自分より凄いのは分かってる。

本当は認めなくちゃいけないって思うんだけど……無理だ。

感情を隠すことができない。

自分は年上で、この家じゃおねえちゃんの手で……でも、この子の言葉で一々卑屈になつてしまふ自分が、情けなくつて、悔しい。

「そんなに真面目な自分を褒めてほしいのかねー？　でも現実見ろよ。オレの方が評価されてるだろ」

だが、フェリシアはいろはの地雷を容赦無く踏み抜いた。

——カチン。

「っ!!」

いろはが何か言つてやろうと、椅子から立ち上がり、振り向いた瞬間——

「クー……カー……」

「だあああつ?!?!」

フェリシア、既にご就寝!

安らかな寝息が聞こえてきて、いろはは勢いを殺し切れず椅子ごとズッコケてしまふ。

「フェリシアちゃん。ここは私の部屋だよー！ 起きてー！」

耳元で声を掛けてみるが、既に夢心地のフェリシアに届かない。

どうしようか、と思ってる矢先だった。

「むにゃむにゃ……やるかーサチー」

——ヒュツ、何かが音を立てて飛んでくる！

「っ!？」

刹那、フェリシアの手刀が、いろはの喉にズブリと突き刺さった!!

「うげっ!! げほっ! ゲホッ!!」

地獄突きをまともに喰らい、喉が潰れるような圧迫感と痛みに襲われているいろはは激しくむせる。

——どんな寝相してるの、この子……。

とにかく、この状態のフェリシアに手を出すのは命に関わる。

だが、そう判断したところで、今夜のいろはの寝床は無い。

仕返しのためでフェリシアの部屋のベッドを借りるのも嫌だ。自分がされて嫌なことは相手にもしたくない。その意地を張るのが、フェリシアにできるささやかな抵抗でもあった。

かといって、やちよかピーターに頼んで、新たに寝床を用意してもらおうのも気が引け

る。

リビングのソファに寝ることも考えたけど、誰かが見たら変に思うし、「フェリシアちゃんに寝床をパクられた」なんて話したら、笑いの種だ。

負けを認めたいみたいで、余計に悔しくなる。

「仕方ないか……」

自分の矮小さに葛藤した末、今日は机に突っ伏して寝るしかない判断する。

いろはは部屋の電気をパチンツと消して、フェリシアに耳元に一声、掛ける。

「おやすみ、フェリシアちゃん……」

「ア………ス」

「え？」

寝言、だろうか？ フェリシアの口が小さく上下しているように見えて、いろははつ

い、聞き耳を立てた。

“I, m a fox”

——今度ははっきりと、そう聞こえた。

「………??」

それからフェリシアは二、三言、英語で何かを呟いたが、意味はまるで分からなかった。

いろははそのあと、机に四つ折りにしたタオルを敷くと、頭を預けて就寝についた。

☆

——夢を見た。

いつもの場所。

いつもの人達。

窓に映るのはいつもの景色。

陽が目一杯差し込む、白い輝きに満ちた病室に自分は立っていた。

リングの花の臭いが、鼻の奥を刺激して、記憶を呼び覚ます。

——ああ、懐かしい。

これが夢の中だったとしても、今この時だけは、自分はその頃に戻れる。

何もかもが有って、決して欠けることの無い、いつも満ち足りていた、あの日々に。

目と鼻の先に、あの子が居る。

腰まで垂れた緩くふんわりとした桃色の髪、少し日に焼けた赤色のパジャマ——

それらが目に入るだけで、もう嬉しくて堪らない。今まで体験した苦勞など、死に掛けた事など、どうでもいいとさえ感じるほどに。

——大切な妹、うい。

まだ自分に気付いていないのだろう。彼女は背中を向けて、窓の外を眺めているようだ。

自分も窓を見た。

青空の中で、番のツバメが飛んでいて、弧を描くように、太陽の周りを旋回していた。

多分、ういは、願っているんだろう。

いつか自分が、おねえちゃんと一緒に、あのツバメ達みたいにな、どこまでも広い世界に羽ばたけていけたらって——

ういならきつと、そう思っている筈だ。

自分は信じてる。疑うまでも無い。だって、私とういは——

—— 世界で一番、仲の良い姉妹なんだから ——

「おねえちゃん」

不意に声が聞こえて、いろははハッと我に返る。

ういは背中を向けたまま、自分と呼んだ。

自分は何をしているんだろう。ういも自分を求めていたのに、ここで突っ立ってるなんて。

いろはは、そんな自分を恥じつつ、ういに駆け寄った。

そして、振り向いてもらうべく、肩に触れようと ——

「たまき」

—— した瞬間、声が聞こえた。

よく、聞き覚えのある声だった。

だが、その語気は刺すように強くて、夢心地の最中に居る自分を現実に呼び戻そうと



しているようで。

振り向くと、ねむが居た。

自分の記憶にある、あの頃のまま。良く見たパジャマを着て、いつものベッドに座っている。

だが、その表情は、いつもの穏やかなものではなく。

固く、険しい——憎しみにも似た、強い怒りを噛み殺しているように見えて、怖かった。

彼女は射る様な視線で自分を見据えて、強く訴えてきた。

「君は、本当に、その先へ行くつもりかい？」

陽を遮るように、ベッド周りのカーテンを半分閉めているせいで、ねむの顔には影が掛かっていた。

深藍に瞬く瞳が、いろはの目に付いた。その色は、悲しみに満ちている。

「ねむちゃん……でも」

自分はどういを取戻したい。その信念は今も変わらない。

ねむもその気持ちは分かっている筈だ。だが、彼女は酷く辛そうに口元をクツと歪めた。

「そこにあるのは……『闇』だ」

「……!!?」

ぞくりと、心臓が凍えるような感覚。

——いつか、自分の夢に現れた白衣の男性と、ねむの言葉が、重なった。

「ジークムント・フロイトの言葉だ。『夢は現実の——』」

聞きながら、いろはは深呼吸。

ねむの言いたいことは分かっている。

だけど、彼女が心配しないように、できるだけ笑顔を取り繕って、答えた。

「表出であり、想像の産物ではない』だね。知ってるよ、ねむちゃん」

ねむはコクリと頷いた。睨み据えたまま。

「でも私、ういに触れたいの。例え夢の中だとしても、ういに会えるのはこの時しかない。ねむちゃんが止めたい気持ちも分かるけど……今だけは、私の好きにさせてほしい」

愕然としたように、ねむの頭が項垂れる。

「そこまで言うのなら、僕にもう、君を止める権利は無い。でもたまき。これだけは頭の片隅に留めておいて……」

—— 眞実はいつも、君の心を強姦し、蹂躪する。

「うい……」

ねむの最後の言葉を聞きながら、いろははういの肩に触れた。

柔らかな感触に、つい抱きしめたい衝動に駆られる。

だけど、今は、その時ではない。

「ごめんね。お姉ちゃん、まだ貴女の手掛かりをちつとも掴めてない」

「だけど——と、いろはは表情を眞剣に固めた。窓の外に映るのは神浜市の全景を見渡す。」

「この街に住む人達に支えられて、ようやく私は一步を踏み出せた。お父さんが伝えてくれた、大賢者様と会えるきつかけもつかめた。いつまで掛かるのか、分からないけど、確実にういに近づいてる気がするの」

「そこまで言うど、いろはは、穏やかな笑みを浮かべて、ういを見下ろした。」

「だからうい、もう少しだけ待つて。お姉ちゃん、必ず貴女を取り戻すから」

微動だにしなかったういの肩が、ピクリと動いた。  
彼女の顔がゆつくりと、後ろを振り向く。

「うそつき」

「えっ？」

——ういの肩が、急に冷たくなった。

「私のこと、何も知らない癖に」

頭が、真っ白になった。

悪寒が脚の爪先から、頭頂部まで一気に駆け抜いた。

笑顔を魅せると思っていたういの顔は——

「私がこうならなかつたら、心配しなかつたんでしょ？」

ベタリと、一色の黒に塗り潰されていた。

「……っ」

奥歯が、ガチガチと揺れ出す。

違う、私はそんなことを思っていない。今まで、これっぽっちも——だが、口が震えてしまって、否定できない。

「お姉ちゃんはいつもそう。口から出るのは、綺麗な言葉ばかり」

ういの言葉は、酷く淡々としているけど。

自分への嘲り、侮蔑、怒り、そして、ありつたけの憎しみが感じられて。

覚えの無い、罪悪感が、心臓をメキメキと締め付けてきて。

—— いやだ。

—— やめて。

胸の痛みに堪えきれず、両膝が折れた。

端から見ればその様子は、神父の前で跪き懺悔する罪人のようであった。

いろはは両手で耳を塞ぐ。ういの口から、そんなことは聞きたくない。

自分を嫌う様な言葉は、断じて。

「まるで、童話の主人公みたいだね」

だが、ういの言葉は耳の蓋を容赦なく貫いた。

皮肉だった。

だが、冷たい刃となって、いろはの心突き刺す。

☆

—— 全ての光が消えた。

そこにあるのは、見渡す限りの闇、闇、闇……。

永遠に続くトンネルの様な、果てしない暗黒の最中にいろはは立っていた。

—— ああ、まただ。

自分の知らない世界に、迷い込んでいる。

認識した途端、全身が四肢の末端から急激に冷めていくのを感じる。

ここは酷く寒い。

“閉ざされた空間”と、何故か理解していた。だから不思議だ。風が入る隙間さえ無い筈なのに、この凍える様な冷感は一切……。

ペタペタと、何かがゆったり近づいてくる足音。

灯りを持った女性がいた。

——いや、違う。

よく目を凝らすと、彼女は中々に不思議な状態だった。灯りは灯りでも懐中電灯のようなもの握っているのではなく……抱えていた。彼女が抱く光は、人型をしていて、彼女の全体像をぼう、と照らしていた。

彼女が自分の目先まで歩み寄る。

身長は自分よりも頭半分ぐらい高く、顔立ちも凛々しい。だが、いろはは“少女”だと認識できた。推測するに、年はやちよか鶴乃と変わらないだろうか。

自然と、いろはの肩肘がグツと張る。眉間に皺が寄り、表情筋が固くなっていく。

それは少女の格好を見たからだ。

自分は白衣で全身を覆っているのに、少女の方は、紙切れのような白い布一枚だけ。

頼りないそのせいで、上下肢が全て露出している。

だが、少女は別に寒くなさそう。彼女の意識は、皮膚が感じる冷氣よりも、抱きかかえている「光」の一点のみに向いているようだった。

「たまきさん」

彼女は穏やかな笑みを浮かべて、光を見下ろし、自分の名を呟いた。

いろはも、じっと光を見つめる。

よく目を凝らすと、光の中にぼんやりと、実体が浮かんで見えた。

——少女が、抱いているのは。

「この子は、望まれない子でした」

赤ん坊だった。

まだ、生まれたばかりの。

少女は、タオルで包まれたその子の体をギュツと抱きしめると、愛おしそうな瞳で、見つめた。

「でも、この子は、生きている。未来がある」

何故だろう。

少女が語る希望を、はっきり否定しなかったのは。

それを、言わなければ、少女の為にならないと思っただのは。



——私は、何か、知っている？

「自分の人生を自分で歩むことができる。私はもうダメですけど……この子には私の分も幸せになって欲しいんです」

いろはは知っている。

この「深淵」に潜む魍魎・悪魔にも匹敵する鬼畜共が少女に与えたのは、地獄に堕ちるにも等しい数多の苦痛。

赤ん坊は、恐らく——

しかし彼女は、自分に憎しみも怒りも、ましてや悲嘆さえ向けず、ただ光輝く瞳を向けていた。

「人間は皆、生まれた時にその権利が与えられているはず。そうですよね？ たまきさん」

自分は、少女の問いに「うん」と、頷いた。

何で、頷けたのか分からなかった。

少女の希望に、無垢な期待に応えたいと思ったのだろうか。

——自分は知っていたのに。

—— 赤ん坊が、これから迎える運命を。

—— 殺せ。たまき。

—— いやだ。

—— その子は、この世に必要な無い人間だ。

—— いやだ。

—— ゴミは散らかした者が片付けなくては。

—— やめて。

—— だから、お前の手で処分するんだよ、たまき。

—— 神様……どうか……。

—— さあ、やれ。

—— 願わくば……私が手を下すよりも早く、この子を御救い下さい……！

「やめてえっ!!殺さないでえっ!! その子は私の」

金切り音のような悲鳴。銃声。目の前が真っ赤に染まった。

「やめてえっ!!殺さないでえっ!! その子は私の」

金切り音のような悲鳴。銃声。目の前が真っ赤に染まった。

「やめてえっ!!殺さないでえっ!! その子は私の」

金切り音のような悲鳴。銃声。目の前が真っ赤に染まった。

—— ごめんなさい。『かすみ』ちゃん。

—— 本当に、ごめんなさい。

☆

—— 翌日。

——みかづき荘。早朝。

昨日の夢は、何だったんだらう。

いろははボンヤリとした眼のまま、自室のドアを開けた。

目覚めは……ものすごく悪い。両肩に重りが乗っかっているようで、倦怠感が酷い。座ったまま眠ったせいもあるだろうが、十中八九夢の内容のせいだろう。

胸がずきずきと痛む。

所詮、夢は夢でしかない。幻。ならばさっさと忘れて現実に目を向けた方が良い。

だけど、ねむちゃんの言葉通りなら……あれは……。

「よっー」

いろはは思わず「げっ」と眉を顰める。全く同じタイミングでフェリシアが彼女の部屋から現れたのだ。

あれ、ちよつと待てよ……。

「戻ったんだ、部屋に……」

「……まーな」

今の自分の状態はすごく悪い。

フェリシアにまた言い当てられるかもしれないと、身構える。

——が、目を丸くした。

そのフェリシア自身が、罰が悪そうな顔で、視線を逸らしたからだ。

「……あの、私、起きたらフェリシアちゃんに一番に聞きたいことがあって」

「……奇遇だな、オレもいろはに聞きたいことがあったんだ」

二人の間に、緊張感が張り詰めていく。

いろははフェリシアの瞳をしかと見つめて。

フェリシアも、どこかやりにくそうに顔を顰めつつも、いろはの瞳を見据える。

「あなたは」

「オマエは」

二人の声が、ピツタリと重なった。

「何者？」

1448 FILE # 60 REPENTANCE = 〈懺悔〉



FILE #61 UNDERCARD || 〈余興〉

— 2018 / 07 / 05 (日)

— 静寂。

同時に問いかけた二人の間に、鉛よりも重苦しい空気が漂っていた。

「あ、あの、フェリシアちゃんから……」

「……いろはから話せよ」

フェリシアは視線を逸らしながら、そう返した。

なんだろう。さつきからフェリシアがよそよそしい。昨夜までは、凶々しさ全開で自分に言いたい放題バカにしてきたのに……。

彼女の態度に強い違和を覚えながらも、いろはは一度、深呼吸して気持ちを整えた。

「分かった。あの…… “フォックス” って？」

相貌をしかと捉えてそう問いかけると、フェリシアは罰が悪い顔のまま、一度後頭部を掻いた。

が、直後——視線をキツと鋭くして、

「オマエ、それをどこで聞いた？」

「えつと、昨日、フェリシアちゃんが寝言で……」

いろはを強く睨み据えながら、そう問い返してきた。刺すような眼光に圧倒されながらも、いろはは答える。

「あつそ」

“寝言”の単語がフェリシアの耳に届いた途端、顔が一気に脱力したように見えた。

彼女は、大きく安堵の溜息を付くと――

「じゃあ宿題だ」

ニツと、悪戯っぽくはにかんだ。

「フオックスの意味が分かったら、オマエのいう事を何でも一つ聞いてやる！」

「はっ？」

恐らく、いろには絶対に分からないと踏んだ上で、そう言い放つたのだろう。

いつも通りの態度に戻って安心するよりは、小馬鹿にされた苛立ちの方が勝った。

いろははムツと、眉間に皺を寄せてフェリシアを睨む。

「じゃ、今度はオレの番だ」

だが、フェリシアも再び瞳を細めて、じっと睨み返してきた。

「かすみちゃんって誰だ？」

「えっ――」

ギクリと。

首元を鷲掴みにされた気がして、いろはの呼吸が一瞬、詰まる。

「寝言で聞こえたぞ。そいつはオマエの何だ？ 何で謝ってた？」

心臓が、バクバクと高鳴った。

身体中を血液が激流の様に走り回り、全身を内側から急激に暑くさせた。

呼吸が浅くなって、頭がボンヤリしてくる。

「……っ!! それは……よく、分からないの」

「はあ?」

フェリシアに悟られないように、過呼吸をどうにか堪えながら、いろはは答えた。

呆然と目を丸くするフェリシア。

「知らないヤツに、ごめんなさいって言つてたのかよ?」

至極当然の反応だ。だが、本当にその通りなのだ。いろはは迷わず頷いた。

「……うん。その子の事は、ちつとも記憶に無くて……会ったことも無くて……」

いろははそこで一度、下唇を噛んだ。

握り締められた右手の拳が、小さく振戦しんせんする。

「だけど、私はその子に、凄く酷い事をした気がするの」

「……見捨てたとか? ……まさか、殺した?」

前者は、魔法少女なら誰しもが有り得る話だろう。

現にフェリシアとて、見捨てた人数なら数知れない——逆に考えれば、見捨てる判断をしなければ、自分が生き残れなかったからだ——それに関しては、仕方ないと思える。

だが後者なら――

「それも……分らない」

けど、というは右手の震えを抑えるように、左手で撫で下ろした。

「……もつと、酷い事をしたと思う……」

「……………」

フェリシアは閉口するも、その眼光は鋭さを一層増した。強い警戒心があからさまに映し出されている。

――こんな、どこにでもいそうな凡人。

人畜無害極まる人見知りの少女の腹の中に、一体どんな魔物が巣食っているという――

「いろは……オメー、やべえ奴だな」

見透かされたようなその一言に、いろはも何も言い返すことができず、閉口するしか無かった。

そして、もう話したくないと言わんばかりに、フェリシアはそこで背中を向けて立ち去る。

いろははただ、悔しさに唇を強く噛み締めながらも――

その背中をじっと、見送っていた。

☆

—— お昼前、 11時頃。

今日は日曜。

当然ながら、市役所も学校もお休みであり、みかづき荘は全員が揃っていた。

(但し、夜間の町内警備はどうしても欠かせないので、やちよのみが夜勤である)  
なので、フェリシアと鶴乃の表彰を祝うパーティをこれから開くつもりだ。

「餃子パーティ?」

どんな料理が振舞われるか、ワクワクしていたフェリシアだったが、やってきた鶴乃が持つてきたクローラーボックスの中身と、いの一発に発したその単語に目を丸くした。

「そ。実は、ウチで新しいサービスを始めることになってね。ほら、最近病気持ちのお年

寄りのいる家庭って多いでしょ？ たまには外食に行きたいけどお爺さんとお婆さんが心配で……ああ、でも中華料理作るのメンドー……デリバリーよりも出来立てをたべた……そんなお悩みをお持ちのアナタ！ この由比鶴乃ちゃんにおまかせ！アナタの家で好きな中華料理を作ってあげちゃいます！」

意気揚々と捲し立てる鶴乃の解説に、フェリシアも感嘆。

「へえー！ でも何で餃子なんだ？ いや好きだけど」

「皆で楽しく餃子を作るのも楽しそうだと思ってるね。鶴乃ちゃんのサービスのモデルにもなってあげられるし」

やちよはそう言うと、鶴乃は互いにウインクを交わす。

「家族みんなで餃子パーティーかあ、何だか楽しそうっ！ フェリシアちゃんも、そう思わない？」

いろはは目を輝かせながらフェリシアに問いかけると、ヒラヒラと手を振られる。

「べっつに……餃子なんて腹いっぱい食えりやそれでいいだろ？」

「鶴乃ちゃん、一人分の量は？」

「大体40個ぐらい」

「おしきたっ!!」

やちよと鶴乃のやりとりに、フェリシアは目を輝かせた。

ずる賢いのか、単純なのか今一つ彼女を判断しかねるいろはは苦笑い。

☆

その後、ピーターとみたまとまさらも来たので、7人でテーブルを囲んで餃子作りを行うこととなった。

皆、和氣藹々としている中で、まさらが冷静に水を掛けるような一言。

「でも、やちよさんは今日は夜勤だけど」

餃子なんて食べさせて大丈夫？ とまさらは尋ねると、鶴乃は瞳を輝かせて「そんなこともあろうかと！」と、声を張り上げると、クローラーボックスから、餃子の皮だけでなく、ギツシリパツク詰めされた餡を取り出す。その数なんと、6袋。

「普通の、キャベツ多め、ツナマヨ、カレー、トマト、あと……餡子！」

「ダジャレかよ……」



餡だけに餡子とは……

「違うって！ 意外と焼いた餃子の生地と会うんだよ。ウチじゃ好評なの！」

フェリシアの冷ややかなツツコミに、鶴乃がそう返すと、隣立つまさらが一言。

「その発想力をもっと別のところに活かした方がいいんじゃない？ 例えば、50点を上げるにkモガツ」

「まさらさんっ！」

また悪気無く無礼なことを言おうとしたので、いろはは慌てて口を塞ぐ。

「まあ、50点は事実だし、気にしないよ」

鶴乃が笑って返すと、いろははホツとなる。

「おい、余計な事は言いつこ抜きにしてとつとつと作ろーぜ！」

フェリシアの言葉に全員が賛成。

ピーターがテーブルの上にホットプレートと、鶴乃がそれぞれの餡をボウルに分けると皮と一緒にテーブルの上に置いた。

そして、鶴乃がホットプレートに油を引いて弱火で温めると、各々がそれぞれ皮に好きな餡を入れて餃子を作成していく。

——この後の展開は、筆者的に概ね読者の皆様を予想を超える展開は無いと判断

した為、ざっくりと描かせてさせていただく。

家事全般得意な女子が集っているだけあって、餃子はあれよあれよという間に大皿に盛られていき、30個ぐらい溜まったところで、鶴乃が一斉にホツトプレートで焼いていく。

途中、みたまが、皮に餡子とツナマヨとにんにく、ラー油をたっぷり入れたゲテモノオリジナル餃子をまささらに食べさせて、小一時間意気消沈させてしまったり、フェリシアがこつそり冷蔵庫から持ち出したワサビや梅干しを混入させて、いろはや鶴乃をビツクリ仰天させる等、パーテイならではの珍事もあったが、特に皆の目を引いたのは……

「うう〜お腹いっぱい……」

「いろは、大丈夫?」

隣に座るまさらが声を掛けると、いろはは膨れたお腹をポンポン撫でながら、嬉しさと苦しみが混じった顔で返事する。

「は、はい……。流石に40個はキツイかも。まさらさんは?」

まさらも自分と同じ量は食べている筈だが、みたま製を食べたのを除いて表情に変化は無い。

いつも通りの、澄ました人形顔。

「まだまだイケるけど、これ以上は食べないつもり」

どうやら鶴乃は餡を作りすぎたようだ。

みんな、40個程大皿に取り分けて食べた筈だが、まだ6種類全部が、半分近く残っている。

「やちよさんは？」

いろはは未だに、最初と変わらぬペースでパクパク食べているやちよに振ってみた。  
「もう70個は食べてるけど、まだまだイケるよ！」

意気揚々と語るやちよにいろはは目を点にして絶句。まさらがボソリと解説。

「やちよさん、お婆さんが貧乏性だったから……」

祖母の七海 天(そら)は食事にうるさく、小さい頃のやちよはお腹いっぱい食べられなかったらしい。

「ああ、なるほど。その反動で亡くなられてから大食いに……つてさっぱり意味わからないですよ、それ……」

謎な理屈を聞かされているいろはは混乱。

だが、好きな物を、幸せそうにパクパク食べるやちよの姿を見るとほっこりする。

一方——

「……おい、ニンニク女。オレと勝負してみねえか？」

そんなやちよの様子を横目で見ながら、フェリシアは鶴乃に近づきそんなことを持ち掛けていた。

鶴乃の両肩が、ピクンツと弾む！

「勝負!? 良いね、やるやるっ！」

その単語を聞いて、燃え上がる鶴乃。フェリシアはニツと嗤った。

「餡は半分以上残ってるが、やちよのペースだと恐らく食い切る……量的にあと、何個ぐらい作れそうだ？」

「うーむ、あと120ぐらいかな？」

「だってさ、どうだ？」

フェリシアがやちよに振ると、「全然OKよー」とサムズアップを返される。

「よーし、じゃあ勝負内容はオレとニンニク女、どっちが先に60個餃子作れるか、だ。勝った方は相手に何でも言うことを聞かせられるってのはどうだ？」

「乗った！ で、負けたら？」

フェリシアはチラリとみたまの前にある大皿を見た。

200個程の餃子が綺麗に並べられているが、誰も見向きもしない。

が……よく見ると、そこだけ黒いオーラが漂っているように見える……。

「……あいつのゲテモノ餃子を全部食う」

「……正に命賭けか……面白い！」

先ほどまさらがダウンしたので、その威力は鶴乃も承知済みだ。息を飲んで応える。

「何か言ったあ?？」

「いえ、何にも」

が、みたまが「良い笑顔」を向けてきたので、身の危険を感じた二人は併せて頭を下げた。

——こうして、二人の餃子作り勝負がスタートしたが……この後の展開は、概ね読者の皆様の予想通りの展開になると思われるので、ざっくりと描写させて頂く。

まさに、神速の速さで描写を作っていく二人。現役中華料理屋の鶴乃は言わずもがな。驚くべきはその鶴乃に匹敵するスピードで餃子を作るフェリシアだ。形も整っているし、ヒダもちゃんと作られていて、出来栄えは鶴乃製と大差ない。

「やるじゃん、ボウズ！」

「へへ、オレも一時期は中華料理屋にいたからなあ!!」

やはり小さくても元は傭兵。経験豊富の自負に偽りは無いのだろう。

二人が作った餃子はみたまが焼き上げ、ピーターが皿に盛り、やちよがヒヨイヒヨイ

食べていく……という一種の流れ作業が出来上がっていた。

観客状態のいろはとまさらは、彼女達の一連の動作の鮮やかさにただ呆然と口を開けて眺めていた。

「よし、60個目!!」

暫くして——勝敗は決した! 制したのは……

「しゃあツ!! わたしの勝ちいッ!!」

鶴乃だ!! 彼女は両手を天高く掲げてガッツポーズ!!

その横でフェリシアが床に転がって嘆き喚く!

「だああああ!! くっそおおおッ!!」

フェリシアの記録は57個! 残念。現役のスピードにはあと一歩及ばず!!

勝者となった鶴乃は、ふんふーん♪と鼻を鳴らすと、満面な笑みを浮かべてフェリシアを見下ろした。

いつに無く、邪な感情を携えながら……

「ボウズー。覚悟はできてるよねー?」

フェリシアは仰向けになり両手を広げて大の字になる。

そして、相手に降参した犬猫の如く、腹を見せて叫んだ。

「チクシヨウ!! 煮るなり焼くなり好きにしゃがれ!!」

今まで小馬鹿にされた腹いせなのか、鶴乃の顔は実に楽しそう。

しばらくニヤニヤと、その哀れな様を見下ろしていたかと思うと――

「お、潔いねー！　じゃあ……」

笑みを消して――

「みたまさんのゲテモン特製餃子を食べるのは無し！」

「はっ？」

フェリシアは目を丸くした。

隣で、みたまの目がギラリと光ったが気にしないで。

「変わりに、デザート作ってきて！」

やちよから聞いたよ、得意なんですよ？　と鶴乃が言うと、フェリシアは呆気に取ら

れたまま。

「おいおい、そんなんでいいのかよ？」

そう問いかけた。鶴乃は屈託無く笑う。

「あはは！　だってこのパーティーはボウズを祝う為に開いたんですよ？　主役を不快に

させちゃ仕掛け人失格だよ」

つてなワケでよろしくねー！　と鶴乃が背中を叩くと、フェリシアはやれやれと、立

ち上がる。

「しゃーねーな。テキトーに作ってくるけど、食べてー奴は？」

「あ、じゃあ私……できれば、紅茶付きで」

「私も、右に同じ」

挙手するいろはとまさらに、フェリシアは呆れる。

「オメーら、もう食えねーって言ってたのは嘘かよ……」

「だ、だって、フェリシアちゃんのデザート、美味しいし……ね、まさらさん？」

「別腹」

いろはは苦笑い。まさらは至極冷徹に一言そう返した。

次いで、既に山ほどあつた餃子を完食したやちよが挙手する。

「私も。できればコーヒーもお願ひ」

「私も。飲み物は緑茶でえ」

「私も。ダーズリンティー付きでね」

やちよに続けて、みたまとピーターも注文した。

「へいへい」

そういうと、フェリシアはキッチンへと向かっていくが、鶴乃が後ろから付いてきた。

「なんだよ？」

「一人で人数分は大変でしょ？ 何か手伝うよ」



えへへ、と鶴乃ははにかむが、フェリシアは心底うざったらしそうに睨みつけると、シツシツと虫を払うような仕草で追い払った。

「オレ様特製デザートがニンニク臭くなるだろーが。邪魔だからあっち言つてろ！」  
その横柄さに、鶴乃もムツと顔を顰めた。

「チエツ！ 分かったよ、このナマイキ小僧ッ！」

そういつて背中を向ける鶴乃。

だが、キツチンの去り際——一瞬だけ、振り向くと、

「ボウズ。誰も見てないからつて……」

——毒は入れんなよ。

悪戯混じりの笑みでポツリ、小声でそう告げる。

フェリシアは、苛立たしげに後頭部を搔いた。

「誰が入れるかつ」

刺すように返してやると、鶴乃は「ふんふーん♪」と鼻を鳴らしながら、皆の元へ向かっていく。

それを確認した後、フェリシアは住居人各々のカップを棚から取り出した。

「さてと……」

並べたカップを見下ろして、フェリシアは工程を考える。

——みんな腹いっぱい食べた後だし、まずは旨い茶でリラックスさせてやるか。  
デザートはその後だ。

まずはやちよのコーヒー。

幸い彼女は、味に煩く無いので、テキトーに創ったカフェオレでも満足気に呑んでくれる。

フェリシアは、キッチンの方の棚から市販品のインスタントコーヒー（とはいえ、値段は一般人の手が届かない額のモノだが）を取り出すと、附属されているスプーンでいっぱい掬って投入。

そして、同じく棚から取り出した粉砂糖を加えると、ポケットから取り出したコーヒーフレッシュ（カップ入りのミルク）も加えて掻き混ぜる。

「チエツクメイトよ、子狐ちゃん」

——即座にフェリシアは状況を理解した。

振り向き様に、不意打ちのつもりで鳩尾へ手刀を叩き込む筈だった。

「っ!!」

寸前で掌を上から、グツと握手するように掴まれた。まずい、とフェリシアが振り解こうと押し出した瞬間——宙返り。

視界が高速で一回転し最後に天井を向いた直後には、背中に鈍痛が響く。

「ぐあ……っ!?!」

割れるような衝撃が全身を巡り、フェリシアは呻きつつも瞠目した。

今の一瞬、自分に起きた事を理解するまで数秒——投げ飛ばされ、床に背中を叩きつけられた。

今のは合気道の技術・“抜き”だ。上腕の力を抜いて、フェリシアの振り解こうと抗

う「押し」の力に任せたのだ。

「くっ……」

結果、標的を失った力を利用された。体幹のバランスを崩されたところへ、相手の余計な力が加えられてフェリシアはあやされた猫のように転がされたのだ。

即座に掌を反転し、床を押し反発力で起き上がろうと試みるが――

「ぐあああああつ!!」

手首に押し掛かる激痛に、フェリシアは喚いた。

相手の両足が、フェリシアの手首をぐつと踏みつけた。

視界の先には、表情こそ至極冷静――だが鬼神の如き眼光で見下ろすやちよの顔が有った。

「お見事」

「……っ!?!」

フェリシアには分かる。やちよの顔面に映る感情は――明確な「敵意」。  
「巧妙に心理学を応用して私達の虚を付き、油断してる所で一気に仕掛ける。大したも  
のね」

「何の事だよ!?!」

「とほけないで」

「あぐ……っ!!」

やちよは更に体重を掛けて、フェリシアの手首をギリギリと踏み躪る。メキメキと骨の軋む音が響くが、やちよは眉一つ動かさない。

「I, m a f o x」

「!？」

フェリシアの瞳が、ギョツと見開かれた。その反応が彼女自身を「クロ」と肯定させた。

「オレは子ぎつね

あてどない暮らしを している

厄介な仕事があれば

危険な仕事があれば

そいつはオレの仕事だ」

やちよを見つめるフェリシアの瞳がワナワナと震えだした。

「あなたたちの合言葉。でしよう？」

「何でそれを知ってる？ ……いつ気づいた？」

「順調に事を進めたつもりのようにだけど、迂闊だったわね。幾つものミスが、ヒントとなつて私にこの答えを導かせた」

「なんだと……!?!」

やちよの言いざまにフェリシアは仰天した。

確かに、いろはが寝言を伝えた可能性は考えたが、*“I, m a f o x”*だけで意味が分かる筈が無いと踏んでいたからだ。

それに、*“幾つものミス”*とは……一体、どういうことだ。

自分の計画に落ち度は無い筈……

「貴女、結構思い込みが強い性格ね。それが油断になつてたの、気づいて無かつたでしよう？」

やちよは至極平静に、淡々と説明した。

フェリシアの、見えざる落ち度を――

1472 FILE # 61 UNDERCARD = 〈余興〉



FILE #62 GODDESS EYES  
Ⅱ  
〈炯眼〉（※クロスオーバー有り）

それは一か月以上前の時まで遡る――

――神浜町・中央区

常盤ななかと面談を終えたやちよは、地元にある神浜市警察本部に足を運んでいた。

それはある人物について確かめたいことが有ったからだ。

「ご足労だったね七海部長」

入口の受付で尋ねると、すぐに応接室へ案内された。

そこで待っていると、一人の実直そうな男性が姿を表し、笑顔で出迎えた。

彼の名は、塚内直正という。

「君の方から赴いてくれるとは……何か重大なことが発生したと見ていいかな？」

ボンヤリとした澱んだ大きな黒目のせいであまり表情だけ切り取れば愚鈍そうに見えるが、その滑舌は澆刺としており、肉体も制服越しながらガツシリ鍛え上げられているのが伺える。

彼は、神浜市警察が誇る敏腕警部であり、七海やちよを始めとする治安維持部の魔法少女達とも積極的に連携を取り合い、『魔法少女による犯罪事件』の捜査に尽力してくれ

ていた。

※ここから先は警察と魔法少女についての長ったらしい解説なので、面倒に思われましたら読み飛ばしてくれて構いません。

(上の「☆」をクリックすると、解説終了後までジャンプします)

なお、全国の警察組織には「魔法少女の職員」はいない。

『大事件』以降、これまで未解決だった犯罪事件が魔女・並びに魔法少女の仕業であることが、各地の良識ある魔法少女達の公言から続々と明らかになり、それを真実と受け取った警視庁は全国の警察署に直轄の『魔法少女の治安維持チーム』を創ろうと考えていた。

……が、頓挫した。

大きな理由は2つ。

1つ目は、魔法少女は魔法を使用できる、という点だ。

彼女達は既に常識外の存在。

つまり、雇用するということは、大量殺戮がいつでも可能な危険人物を懐に納めておくようなものである。

例え善人であっても関係ない。ふとした気の迷いで、多くの人々の命に危険が及ぶのだ。

一般人で構成されている警察組織では、万が一彼女達が暴走した場合、防ぎようもない。

以上から、「警察の倫理が世間に疑われる」として、内部から猛反発が挙がった。

もう1つは、批判する団体が居た、という点だ。

人倫保護団体のように、魔法少女に懐疑的な視線を向け、その危険性を訴える集団が、警視庁の提案に反対し、警察署前で抗議デモを行った。

彼らだけではない。

「大事件」以降、世界中で勢力と発言力を強めたのが「フェミニスト団体」だ。

彼女達の意見によれば、「魔法少女とは、その全てが異星人によって騙された被害者」

であり、「今日の社会と文化は彼女達の尊い犠牲によつて成り立っているもの」だと主張。

「国際連合、及び世界中の男性は早急に女性を崇め、その意志に沿つた社会を構築すべきであり、魔法少女になつてしまった者には、本人並びにその親族全てを生涯保障する保険制度を作るべきである」

「魔法少女を警察機関に従事させるとは何事か。彼女達に人を撃てというのか。既に魔法を多数討伐し、命がけて社会に貢献してきた彼女達を法の下に束縛しようというのか。魔法少女の自由意志と人権は世界が尊重すべきである。よつて我々は警視庁の提案に断固反対する」

……等と主張し、魔法少女に差別的な集団よりも、更に過激・苛烈な勢いで彼女達は、全国の警察署を圧倒した。

確かに彼女達の言い分は分からなくもない。

しかし、魔法少女が全て被害者というのなら筋違いだ。

確かにキュウベえは、言葉巧みに彼女達を扇動しただろう。

だが、彼女達はキュウベえの勧誘を断ることもできた。だが、自分勝手な願いをかなえてもらい、世界の理を歪めた——加害的な一面も必ずあるのだ。

それに、より大量のグリーンフィードを得る為に縄張りを広げようと、他の区域の魔法

少女から搾取・果てはその命を奪う者。

魔法を使って人を陥れたり、お金を儲けを企む者。

「傭兵」と呼ばれる者のように、ヤクザと取引して、悪事の限りを尽くす者も数多く存在する。

フェミニスト団体はあくまで魔法少女の存在を大義名分とし、自分達の活動にとつて都合の良い看板として掲げているに過ぎないのだ。

だが、既に血気盛んな彼女達を止められる者は、日本に居なかった。

加えて、各テレビ局が彼女達の言い分を、さも正当な主張・弱者の訴えであるかのよう偏向報道したことで、世間までもが彼女達に同調して、警察に日夜クレームを訴えた。

結果として、全国の警察署の業務は遅滞し、事態を重く受け止めた警視庁は、その案を棄却せざるを得なかった。

こういった経緯があつた後に、神浜市役所で『治安維持部』が発足されたのだった。

波乱の後に、魔法少女保護特区内で市条例の下、『魔法少女による法的執行組織』が正

式に生まれたのだ。

やちよ達は、特別司法警察職員であり、魔法少女に関してのみ逮捕権や捜査権が付与されている。

また、警察機関との情報共有や捜査の協力もオフィシャルで行われている。

無論、当初こそ市内各区内で反対の動きは見られたものの、所属する魔法少女はあくまで『地方自治体に属する公務員』であり、（保護特区の都合上、魔法少女が安全な存在であることを世界に向けてアピールする必要がある為に）社会貢献の方が主な業務であると公表されたこと。

また、総責任者が夕霧青佐（女性）であり、フェミニスト団体にも融通が利いたこと。何より、七海やちよという英雄が誕生したことから、現状、魔法少女の治安維持組織は、世間一般に広く受け入れられる形となり、各地域への『魔導管理局』の設立も問題なく行うことができた。

よって、反対運動は、人倫保護団体の極小規模な活動を除いては、抑えられていると言って良い。

☆

よーするに、

・警察内に魔法少女部隊創りたかったけど、色々うるさい人達が騒いだせいで無くなつたよ！

・ゴタゴタの後に、神浜市役所内に魔法少女による治安維持部隊できたよ！みんな不安だよ！

・やちよさんの功績によつて今は世間に受け入れられてるよ！やっぱり英雄は偉大だね！

……と、解釈して頂ければいいです。

「はい。実は深月フェリシアについて問い合わせたいことがあります……」

現在、警察署内にも魔法少女を危惧する者は多い。

だからこそ、塚内警部のように、積極的にコミュニケーションを取ろうとする者は有り難いとやちよは思っていた。



彼の働きかけがなければ、自分達と警察の関係は、まだ冷え切っていたに違いない。「深月フェリシアアって……先日解雇された、問題児の少女のことだな。彼女がどうかしたのか？」

とぼけた様な声色ながらも、塚内の眉間には僅かに皺が寄っていた。何か知っていると見たやちよは、塚内の前にある物を差し出す。

「これをご覧ください」

それは一枚のメモだった。お世辞にも綺麗とは言えない文体で何かが書かれている。「これは、もしや」

「ええ、深月フェリシアが解雇された日、寮生活での世話を任されていた夏目かこに当てた書置きです」

塚内は書置きを手に取り、文章を音読した。

おまえに

れいがいいんだ

はつきりいつて、おれにはちあんいじぶは むいてない

こどもみたくない いいわけしたけど あえてかくよ

きょうは どうもありがとう

つまらないことばで ごめんなさい マジヨやワルいやつらはおおいから  
ねくびかかれないように きをつけてね

「別に、普通の書置きに見えるが……」

純粹に感謝の気持ち传达了られた——

塚内は言いながらやちよに顔を戻した。口元をムツと結び険しい顔をしている。

「夏目かこは、私にこれを渡す時、周りを気にしている様子でした」

塚内の大きな黒目が一瞬光った。

「チームメンバーがいらないことを確認していたと？」

「そう思われます。そして、彼女は密かにコレを私に手渡した後、こう言ったのです」

『七海部長。意味、分かりますか？』

「……確信しました。この書置きには、彼女にしか分からなかった暗号のようなものが  
隠されていると」

「君は気づいたのか？」

「ええ、頭文字を縦によんでください」

おまえに

れいがいいんだ

はつきりいつて、おれにはちあんいじぶはむいてない

こどもみたくない いいわけしたけど あえてかくよ

きようは どうもありがとう

つまらないことばで ごめんなさい マジヨやワルいやつらはおおいから

ねくびかかれないように きをつけてね

「おれは、こきつね？」

塚内の瞳が驚いたように見開かれた。

「恐らく深月フェリシアなりの自己紹介かと思われます」

「全くの偶然の可能性もありえるが……」

「常盤なながが彼女のことを話す時、微かな動揺が見られました。恐らく、『問題児』以上の何かを見たのでは無いかと思われます」

「……………」

塚内は、しばらくムツとした顔で手紙を見つめていたかと思うと、

「分かった。この暗号に関しては、こちらのやれる範囲で調べてみよう」

胸ポケットにメモをしまい、力強くそう言い切った。

「大丈夫なのですか？」

万が一、フェリシアの正体がやちよの想像通りなら、塚内達にも危険が及ぶかもしれない。

だが、彼は、自信を込めた顔でうん、と頷いた。

「警察を舐めてもらっちゃ困る。実は先日、明京町警察署に腕利きの二人組の刑事を配属させてね、密かにスラム街の調査を任せているんだ。彼らなら何か掴んでいるやもしれん」

その二人組の刑事とやらは、元々横浜市港区警察署の捜査課に所属していた、表向きは一般的な警察官だが、マル暴として業務を専任で行っており、その筋の大物や傭兵とも顔が利いた。

蒼海幣の台頭により、力を失いつつある明京町警察の威信を取り戻す為に、塚内が署長と掛け合い、彼らを引き抜いたそうだ。

塚内と自分が同じ考えに行き着いたことに、やちよは安心する。

「ご協力感謝します」

「いやいや……。ところで七海部長。突然だが、タイガーファングの一件は覚えてるか？」

「確か、2年前に大阪府一帯を守備していた、という」

「『伝説の魔法少女』に触発された者達だ。彼女の後継者として正義の味方を名乗り、過激な防衛手段と魔法少女への独善的な制裁行為で、地元住民から反感を買っていた」

『タイガーファング』は3人一組のチームで、全員が20歳越えの大ベテランだ。

だが、その経歴と活動は、正義の味方と自称するには余りに程遠く、『傭兵くずれ』と陰で囁かれていた。

また、大阪市の魔導管理局の設立にも、彼女達は過剰な反対運動を行っており、局長として就任予定だった魔法少女を、魔女の仕業に見せかけて殺害した事もあった。

それほどまでに野蛮な集団であった。

「聞いています。確か、リーダーの苺田紗理奈かんだの父親は裏社会の大物……。『金虎会』の会長であつた事から、行政も、警察も迂闊に行動を抑制することができなかった、と」

しかし、それだけの力を誇っていたタイガーファングは突然解散宣言した。

以降、リーダーの苺田の行方を知る者も無く——大阪府には、問題なく魔導管理局が設立される運びとなつた。

それが、深月フェリシアにどう結び付くのか。

考えていると、塚内は「少し失礼するよ」と言って退室した。

——そして、3分後に一枚のタブレットを持ってきて、やちよに見せる。

「これを見てくれ」

塚内が見せたある映像を観て——やちよは刮目した。

☆

——2018/07/05 (日)

——みかづき荘・キッチン

「貴女は二年前に、大阪市に居た。そこで、タイガーファングの解散・及びリーダー菊田紗理奈の失踪に関与した。違う？」

手首を踏みつける足に力が入り、フェリシアの顔は苦悶に満ちていた。

だが、やちよの問いには頷きも否定もせず、ただ強く睨み返すのみ。

「警察が提供してくれた監視カメラの映像に、黒いパーカーを着た金髪の少女が映っていたわ」

顔は見えなかったけどね、と付け加えるやちよ。

「何でそいつがオレだと思った？」

「私もまさか、とは思ったけど、その時点じゃ私も貴女と断定はできなかった。でも、夏目かこに残した手紙の文章といい、用心に越したことは無いと思ってるね」

フェリシアは不敵に笑う。

「それだけでオレをクロと決めるのは早計だろ。無実だったらどう責任とる気だ」

「無実では無いわ」

やちよの口元が、フツと弧を描いた。

「貴女、自分で墓穴を掘ってる」

「何……?」

「みたまから魔法少女の真実を教わってる時、なんていったか覚えてる？」

「二次性徴期の女の子の感情から採取できるエネルギーこそが最も効率的だね。この宇宙の熱源的死から救う為に……」

「はあ?? 宇宙がブツ壊れるっていうのかよー!」

「……」

フェリシアの表情に変化は無い。しかし、額がジワリと汗で濡れていた。

『熱源的死』なんて単語は日常生活でまず聞く事が無い。いろはと学業優秀の鶴乃でさえ、意味が分からなくて首を傾げていた。……けど、貴女は即座にそれを『宇宙の消滅』と結び付けた。二人よりも学の無い筈の貴女が……明らかに不自然よ」

みたまはその時点で。そして彼女から話を聞いたやちよは、ある確信を持った。

「あの時、貴女は『ねっげんてきし』って、なんだ?』と問いかけるべきだった。痛恨のミスね」

フェリシアは、魔法少女の真実を知っていた。教わるよりも既に。

「故に、私達は『貴女が無知を装って近づいてきた』のだと、断定した。出会った時から



の貴女の行動全てが、私達を油断させる為の心理学的手段だと推測した」

フェリシアの瞳が震え出す。

それは自分への恐怖というよりも、憎しみのように強い怒りを抑えきれないようだった。

やちよは、真正面に見据えながらも、訥々と解説する。

☆

「だーかーらあ、ちあんいじぶに入れろつつってんだろー!!」

「ですからっ！ 入職して頂くには試験を受けないといけませんし、試験を受けて頂くにはこちらに身分証明書の他に住民票を提出して保護申請再登録の手続きをして頂かないといけませんし、住民票は市民課で発行して頂かないといけませんし、住民票を発

行するには住所がはっきりしてないといけないんですって!!」

「いちいちメンドクせーなあ、家がねーつつってんだろー!」

「それだと手配できかねます。まずご親戚の方を頼って頂くなり……」

「やだよメンドクセー!! オレは今すぐここではたらきてーんだ! だから入れろよ!」

「ですからっ! いくら強いご希望がございましたも、色々段取りと手続きがあつてそれを全部やる以前に、住む場所が無いと無理だつてさつきから何度も申し上げてるじゃないですかー!」

「いちいちメンドクせーなあ、家がねーつつってんだろー!!」

「さつきもそれ言ったでしょー!」

「チヨウセイはとつくに終わつてんだ!! さつきと入れろー!!」

まず、最初に市役所で見た時、貴女は明京町で噂された通りの「問題児」だった。

……いや、演じていた、というべきね。

『メラビアンの法則』を知ってるかしら。……勿論、知ってるわね。

私も以前、貴女のような傭兵に会ってね。心理学について勉強したの。

人間は人への行為を判断するときコミュニケーションの内容より、見た目が5割、口調が4割重視するようにできてる。

そして貴女が、私達に用いたのは——『初頭効果』ね。

人間は他人のことを基本、第一印象だけで判断する。

初対面から3分で相手に与える印象は覆すのが難しくなる。

その後は何をやっても、第一印象と同じイメージの情報だけで取捨選択するようになる。

学も常識も無い、気に入らなければ感情的に当たり散らす悪ガキ——白木さんのような良識ある大人を困らせる姿を、私達にあえて見せつけた。

最悪の第一印象ね。でも、これこそ貴女が撒いた罠だった。

『人を騙す』程の小賢しい頭脳が有るなんて、あの場では誰一人思わなかったのだから。

こうして、私達の腹みかぶの中にまんまと潜り込めたつもりの貴女は、更に私達と心理的に

接近する為に、自分のイメージアップを立て続けに実行した。

——その夜、貴女はみかづき荘へ帰ってこなかったわね。

食事と衣類を分けてくれたホームレスのおじさんに、お礼がしたいと言って、わざわざ野宿を選んだ。

これは、『親近効果』ね。

人間は最後に得た情報も印象に残ることがある。

悪ガキの印象を皆に植え付けた後、知人を大事にする姿を演じたことで、印象を好転させた。

——入居初日に、貴女はお礼と称して、私達にブリュレを御馳走してくれた。

あの時はありがとう。とても美味しかったわ。意外な特技でビックリした。

でもあれは『ランチョン・テクニク』だったわね。

美味しいものから受ける快感が、好印象に繋がるの。

そして『ハロー効果』。

なにか一つでも優れた点を持つを見ると、その人の全人格まで優れたものであるかの

ように錯覚する。

関係の無い他の部分も肯定的に評価してしまうの。

☆

「貴女は順調に私達に取り入り、みかづき荘の環境に溶け込んでいった。……でも、ここで新たなミスを犯した」

「……いろはに数学を教えたこと、か？」

「いえ、それ事態は大した問題じゃない」

あの時、やちよはフェリシアに『誰に勉強を教わった』のか、聞いた。するとフェリシアは『忘れた』と即答した。

「その言い方が妙に引っかけたから、こう言ってみたのよ」

—— 『そう、悪い事を聞いたわね』

「すると、貴女は、こう答えたの。『口の利き方には気を付けろ』って」

「っ!!」

フェリシアの口があつと開いた。

「……普通なら、私の言っていることがおかしいと思う筈でしょう?」

そうだ。

『勉強を誰に教わった?』、なんて質問を人にすることは別に悪い事でもなんでもない。

いたって普通の、日常的にごく有り触れた質問の筈。

『何が悪いことなんだ?』って返すのが正解だった。でも貴女はうつかりそう答えてしまった」

フェリシアが歯をギリリと喰いしばった。

まんまと口車に乗せられた。乗っていた大船が転覆して水底に叩き落とされた気分だ。

屈辱と不快の余り後頭部が異様にムズムズした。

「お陰様で私は答えに辿り着けた」

フェリシアにとって、『勉強を教えた人物』の名をやちよに教えることは、”悪い事”

だった。

「……つまり、その人物こそ、貴女の雇い主。貴女をうちに送り込んだ、全ての元凶」  
刹那——フェリシアはとうとう搔痒感に堪えきれず、ズリズリと床で後頭部を擦り付けた。

瞬間、やちよの瞳がギラリと瞬く。

「それよ」

突きつけるような言葉に、フェリシアは思わずギョツと目を剥いた！

「貴女、感情が乱されると、頭の後ろを掻く癖があるわね？」

「バカな」

やちよが自分に対してそうであったように、自分もやちよを一番警戒していたのだ。

この癖を見られた事は一度も無かった筈……

「私に代わって、その癖を二度見た子がいる。……さて、誰でしょう？」

「……………ニンニク女か」

一度目は、みかづき荘の外。神浜総合病院で、自分が少年から「にーちゃん」と呼ばれた時。

そして、二度目は——

「貴女が『毒』を盛る時」

淡々と告げるやちよの指には、フェリシアが先程やちよのコーヒーに入れようとポケツトから取り出した、コーヒーフレッシュユが摘ままれていた。

—— 『誰も見てないからって、毒は入れんなよ』

「チッ！」

ヤツも、あの言葉も、仕組まれた罠だったというのか！

迂闊だった。みかづき荘とは関係無かったから油断していた！

心底いまいまして飛ばした舌打ちがやちよの推理を、正解と認めていた。

「以上で、チェックメイト、と私は言ったのよ」

「……………」

最早、反論の余地は無い。

フェリシアは口をムツと結び、黙りこくった。

しかし、屈辱と腹立たしきで形相は今にも憤激しそうな程真っ赤に染まっていた。

「大人しくしてくれれば、手荒な真似はしない」



「……………くっ！」

フェリシアは、一度苦虫を噛み潰すように歯を喰いしげると――

「……………分かったよ」

踏みつける手首から力が抜けた。同時に表情も緩み、諦めたような声色でポツリと呟いた。

「オレの負けだ」

「……………」

紛れも無い本心だろう――

そう受け取ったやちよだが、手首は踏みつけたまま。しかし、力を抜いた。

「よし、第二ラウンド」

刹那、フェリシアの口元がニタリと歪んだ。

「っ!!」

やちよが油断を悟った時にはもう遅かった!

フェリシアは手首を翻し、床を押しした反発力と背筋力で、真上に滑り込んだ。

「ハアッ!!」

「っ」

瞬間、やちよの両膝裏に鈍痛が響く。

フェリシアが両足を大きく開いて蹴り上げてきた！ その威力にバランスを失い、膝がガクリと折れる。

「死ね」

冷徹な一言。ヒュンと風切り音が鳴るのと同時に目前に迫っていたのは——包丁だ！

「！」

ガキインツ、と金属同士の衝突音がキツチンに木霊する。

やちよの右手には果物ナイフが握られていた。姿勢が落ちた一瞬の内に、引き出しを開けて取り出した。

弾かれたフェリシアの右腕が背中まで回る。だが、フェリシアはそれを利用して腰を旋回。

より勢いを付けてナイフを振り抜く。狙いは——

（右足！）

「っ!?!」

瞬間、フェリシアは瞠目。やちよが視界から消え——いや、飛んでいた。

狙いを既に読んでいたやちよは、ジャンプで回避すると同時に蹴りを繰り出した。槍の刃先の如く鋭い爪先が、フェリシアの眉間を強打する！

「げえっ!!」

脳が揺さぶれるような衝撃と同時にフェリシアの体は壁際まで勢いよく転がった。

絶好のチャンスだが、あえて追撃せずに、様子を見守るやちよ。

ここまで用意周到に事を運んできたヤツだ。恐らく、自分にバレて、追い詰められた可能性も計算に入れている筈。

「……クツ」

床に這いつくばった状態で、フェリシアが呻く。

しかし――

「クツ……クツクツク……ククククククク……!!」

口の端を大きく吊り上げて、低い笑い声を響かせる。

何がそんなに面白いのか、やちよには分からない。理解の外過ぎて、不気味だった。

直後――

ぐきりっ

ごりごりっ

ばきっ

「!?」

骨が折れる様な不快な音がけたたましく響き、やちよは瞠目。

めきめきつ

ごきんつ

音の発信源は——なんと、立ち上がろうとしてるフェリシアからだつた。

思わず、一步退き、様子を眺めていると——驚愕した。

いろはよりも細つこかつた四肢は、筋肉が大きく盛り上がり太くなつていた。更にばきばきと全身の骨と関節を鳴らしながら、ゆっくりとフェリシアは立ち上がる。

(肉体が変化……いえ、成長した……?!)

フェリシアの身長は自分より頭一つは低かつた筈だ。

しかし、直立した今のフェリシアの顔は自分の視線の先にあつた。

「さすがは、神浜の英雄。あの結城安里を滅茶苦茶にしただけの實力はある……。なら、こつちも」

“第二形態”だ——

キンキンに甲高かつた声は、一瞬で獰猛さを存分に孕んだ低い色に変わつていた。

「貴女は、一体?」

まさに別人。

やちよもその豹変ぶりには啞然とするしかない。

「驚いたか。固有魔法の応用さ。テメーらに取り入る為に……」

フェリシアは先ほどやちよに蹴られた眉間を指でチョンチョンと突いた。

「二年間の記憶を消した。で、誕生したのが、クソガキのオレってワケだ」

記憶操作系か——滅多に使い手はいないが、その分、強力だ。しかし……

「完全にはいかなかったようね」

「まーなー。ちよくちよく本来のオレに戻してやらねーと、あのままになっちまうからよ。骨が折れんだわ、アレ」

本当のオレは花も恥じらうファイフティーンよ、と軽口を叩くフェリシア。

追い詰められてる状況なのは依然と変わらない筈だが、余裕綽々そのものな態度を見る当たり、他にも何か仕掛けているのは明白だ。

「狙いは、私ね」

ニツとフェリシアは嗤う。

「おうよ。テメーを殺れば、3億やるって言われてな」

「……随分高く買われたものね」

「日本一有名な魔法少女だ。自覚が無いとは言わせねえ」

カッと見開かれたフェリシアの瞳には澱んだ狂気が灯火のように揺らいでいた。

やちよもグツと睨み返す。

「私と直接対決で勝てるだけでも？」

「冗談だろ？ 傭兵はギャンプラーとは違う。確実に勝てる戦しかしないんだ」

「なに……？」

「残念だが、テメーを殺すのは失敗だ。だから、プランをBに移行する」

その言葉に、やちよの瞳が研ぎ澄まされた刃の様に瞬いた。

「何をするつもり？」

くくく、と嘲笑うように低い声を響かせるフェリシア。

「ニトログリセリンを知ってるか？」

その単語を聞いた時——肝が冷えた気がした。

「そいつを大量に積んだドローンをこつちに向かわせてる。数は25機。テメーを殺れねえなら、ここをブツ潰すまでだ」

やちよの表情は変わらない。絶対零度の瞳でフェリシアを見下ろしたまま。

しかし、額に一筋の汗が流れる。

「それで……貴女の欲しいものは手に入るのかしら」

「半額は出るさ」

「貴女も無事じゃ済まない」

「脱出ルートをオレが確保していないとでも？」

「……………」

やちよは下唇を噛んだ。その仕草を見たフェリシアの表情は実に愉快そう。

だが――

「貴女は今、ミスを犯している」

「なに？」

フェリシアはやちよの顔を凝視した。ウソやハツタリを言ってる表情ではない。

その瞳は、相変わらず自分を強く見据えていて、確かな自信に満ちている。

「貴女にとっての脅威は、私一人じゃないわ」

――ピーターさん、いろはを頼んだわよ。





FILE #63 IMPACT Ⅱ 〈衝突〉

— 2018 / 07 / 05 (日)

深月フェリシアが油断していた点は以下の4つ。

1. 明京町警察署を無能と見做し、眼中に無かったこと。

(実際は塚内と市警察本部長が、腕利きの刑事二人を配属させ、スラム街の調査に当たらせていた)

2. やちよは自分を『悪ガキ』としか見ないだろうと踏んでいた事。

(『おれは こきつね』で始まる合言葉、大阪市内のカメラに映っていた金髪の少女——これらの情報をやちよは既に警察から入手しており、最後まで警戒は解かなかった)

3. 度々やちよ達との会話の中で失言していたこと。

(フェリシアがうっかり口を滑らせた事でやちよ達は、『フェリシアが無知を装っている』と気づき、彼女を送り込んだ黒幕の存在にも気づけた)

そして、もう一つは——

——みかづき荘・キツチン

まさに、一触即発だったとやちよは思う。

先程まで家族団欒の場所だったそこは、一瞬でサスペンス映画のクライマックスに豹変した。

まるで犯人を追い詰める刑事主役にでもなった気分だが、一端も油断はできなかつた。

相手は、少女の姿をしているが、“傭兵”だ。

私益の為ならどんな汚れ仕事も完遂する、魔法少女のプロ。例えば依頼が殺人であろうとも——もし、警察の情報通りなら、深月フェリシアは……恐らく

「二つ聞いていいか」

不意に飛んできた質問が、やちよの思案を打ち切った。

実力は自分の方が上——それはフェリシアも認めている。絶対零度の瞳でその場に

縫い付けたつもりだが、その顔に微塵も不安の色は見られない。

「何かしら？」

鋭く見据えたまま、やちよは首を傾げた。

『『おれは こきつね』……そいつが、オレ達の合言葉だと、いつ気づいた？』

「……………」

やちよは一度、ふーっと深い溜息を付いて、緊張を紛らわせた。

「玉突き事故……………」

「っ」

フェリシアの眉間にグツと皺が寄った。

その表情の変化をじっと見据えながら、やちよは静かに口を開く。

「あの事件は偶然だったけど、貴女にとつてラッキーだった」

フェリシアは大衆に紛れて傍観することもできた。

だが、事件発生直後に飛び出し、撥ねられた少年の父親の心肺蘇生を始めた。

その行動が、いろはと鶴乃、周囲の人々の善意を突き動かした。彼女達も人命救助に参加してくれたお陰で、誰一人死者が出ずに済んだ。

『一人の少女の勇気が、全てを救った』

その結果だけ見れば、正に奇跡と称賛するに相応しい。

事実、フェリシアは警察から感謝状を送られ、一躍市内の人気者となった。

「そうかよ」

あごをしゃくり上げながらぶつきらぼうに返すフェリシア。見つめながらやちよは続ける。

「あれも『親近効果』の一つね。人の命を救う以上に大衆から人望を得る善行は無い。私達から疑いの目を退けるにはうってつけだと考えていた。だけどね……」

私にとつても、ラッキーだったのよ——と、やちよの瞳が青く瞬いた。

「なに？」

フェリシアは目を丸くした。

「私は現場で警察と接触することができた」

そこで、塚内の直属の部下から最新の情報を得られたのだ。

スラム街において、傭兵達の中でも「稼ぎ頭」と呼ばれる実力者達は、お互いに合言葉を交わしているのだという。

それこそが——

遙か昔、アメリカ大陸が白人に占領される前——先住民インディアンの中でも最大の部族であり、最も勇猛果敢な戦闘民族であった「スー族」によって詠われてきた、伝統的な詩。

「おれは こきつね

あてどない 暮らしをしている

厄介な仕事があれば

危険な仕事があれば」

「『そいつは おれの仕事だ』。貴女達は、その詩を英語で交わしている」

だから、いろはから『I, m a f o x』と聞いた時、フェリシアを『クロ』と確定できた。

あとは、フェリシアがいつ仕掛けてくるかのタイミングだけ見極めれば良い。

その為の鶴乃であった。

元々、みかづき荘の住民では無いから、フェリシアの警戒心も弱い。やちよはその隙を突いたのだ。

「なるほど、な」

フェリシアはそこで表情を緩めてお手上げのポーズだ。

やちよの推理力に完敗であることを認めたらしい。

「百獣の王だろうと腹の中に毒をブチ込めば一発……だったんだが」

「残念ね。貴女が潜り込んだのは鯨の腹よ」

「そうだなア。鯨はプランクトンしか食べねえ。最初からお気に召さなかつた訳だ！」

とんだ徒労だったな——と言いながらも、フェリシアはくつくつと嗤う。

「毒物は大人しく吐き出されるべきね」

「はいはい……で、ドローンはどうするつもりなんだ？」

「……」

が、鋭い目を向けられてやちよは押し黙った。

「世界一強い海の生物を知ってるか？ それは鯨だ。一匹だけなら鯨の餌だが、群れれば鯨だって殺せる」

フェリシアは余裕を張り付けたまま続ける。

「孫子も書いてたが、戦いは個人の能力じゃなく全体の勢いだ。空から降り注ぐ数の暴力にどう対処する？」

まるで勝利を確信した笑みだ。

みかづき荘の中でドローンに対処できるのは、彼女しかない。恐らく、フェリシアも同じ人物を思い浮かべている筈だ。

だが、やちよは毅然と言い返す。

「貴女はいろはを見くびっている」

「何かできると思うのか？ 未だにソロで魔女に手こずる様な雑魚に」

「ええ。あの子はやると言ったらやる女よ。だって私より強いもの」

噴き出すようにフェリシアは嘲笑を響かせたが、やちよの表情は揺らがなかった。

フェリシアはまだ、いろはを知らない。

☆

——みかづき荘2階・ベランダ

住民の洗濯ものや布団のシーツがゆらゆらと揺れるその場所に、魔法少女姿のいろはは居た。

端つこに立ち、クロスボウを柵の外に向けて構えている。表情はいつになく固く、険しい。



(あんなに、たくさん……！)

かつて、自分を殺しかけた使い魔を思い出し、苦虫を嘔み潰したように両顎を引き締めるいろは。

構えるクロスボウの直線上に存在するのは、何か大きな箱を抱えたドローンの群れだ。

その最前線で飛んでいる一機に、いろはは照準を合わせている。

「……………」

こんなこと、初めての体験だ。

だが、やちよに任せられた。自分はやると応えた。だったら成し遂げなければならぬ。

大切な家族を今度こそ失わない為にも、絶対に――

「……………」

――しかし、大丈夫なのだろうか。

自分がこんな大任を請け負って、本当に良いのだろうか。

自分はここに住む誰よりも経験は少なくて、弱い。

一度照準が間違えれば、みかづき荘は大炎上に――

「いろはちゃん、リラックスよ」

いろはの肩が震える。

だが、背後から、大きな手がそれを抑えるようにガツシリと掴む。

「！はい……」

その手から、じんわりと温もりが伝わってきて、自然と緊張が解きほぐれた。

そうだ——今の自分はあの時みたいに、孤独じゃない。

誰よりも頼もしい大人が傍に付いてくれている。見守ってくれている。

魔法少女の自分より非力な一般人。だけど、彼の暖かな言葉が勇気を授けてくれる。

「落ち着いて、いつもの魔女退治と変わらないわ」

状況は切羽詰まっている。誰もが生命の危機であり、住居も壊滅寸前。

だけど、彼の佇まいはどこまでも普段通りの、優雅で上品。声色は慈愛に満ちていて。

「練習じゃしつかりできたじゃない。あの時と同じような感覚でやればいいのよ」

「……………」

だから、こんな状況、実は何てことないんじゃないかって思えるぐらいに、心が軽くな

った。

いける。自分はやれるんだっていう、根拠は無いけど確かな自信が、いろはの表情筋

を緩める。

(そうだよ。ピーターさんはこんな時でも)

“みかづき荘のママ”としての役割を貫こうとしてるんじゃないか。

だったら、自分も与えられた役割を全うするまで。

いろはは確かな決意を込めた瞳で、照準先のドローンを見据えながら——やちよに任された日の事を思い出していた。

——みかづき荘・いろはの部屋

「おう。口の利き方には気をつけろよ」

——それは先日、フェリシアがそう言って自分の部屋を出て行った直後のことだ。

「あらら、臍を曲げちゃったみたいね」

「別に変な事聞いた訳でも無かったのに……?」

去り際のフェリシアの態度にいろはも首を傾げていた。やちよはフツと笑って肩を竦める。

「言いつらい事だったんでしよう? それよりいろは、射的が上手になりたいと思わない?」

「えっ?」

突然の申し出にいろははギョツと目を大きく見開いた。

「ま、まあ……固有武器が固有武器ですし、独りじや魔女には勝てませんし……」

「それに、地元で死にかけてたしね」

「あうう……」

申し訳無さそうに顔を下げてもじもじとするいろは。その仕草にやちよはクスクスと笑い、

「その件で、ピーターさんが特訓をつけてくれるって」

えっ!? というのはの体が飛び跳ねた。

意外だった。確かに彼は強面であり筋骨隆々の巨躯だが……みかづき荘に住んでは、おしとやかな主婦のイメージが強くなっていたからだ。

「あの人、射撃のプロなのよ」

(やちよさんは、はつきりと言わなかった。だけど……)

この時を既に見越して、自分に託していたのだ。

改めて、彼女は「英雄」なのだと認識する。

あらゆる危機を想定し、対処する為の知識と準備を怠らない。

いろはは上記の一件の後、ピーターが休日中は一緒に買い物にいくついでに、北養区にある森林公園付近の射撃場に連れていかれた。

「買い物に行くついで」……だったのは、フェリシアの目を誤魔化す為だろう。

そして、自分もこの事はフェリシアには伝えなかつた。

言つたら言つたでからかわれるのは目に見えていたし、露骨な自慢話を返されるのも癪に障るからだ。

何より、戦闘技術だけでも密かに彼女を追い抜きたいという気持ちが強かつた。

……やちよは気付いたのかもしれない。自分がフェリシアに意地を張っていたこと

に。

だとしたら——

(恥ずかしい……だけど)

そこまで見抜いたやちよの慧眼は凄まじく鋭い。凄すぎて背筋が寒くなるぐらいだ。

「もつと、よく引き付けて……狙いやすくなったら撃ちなさい」

「つーは、はい……！」

背後に聞こえてきたピーターの言葉で、いろはは我に返った。

照準が僅かにずれていたの、慌てて修正する。

「まだまだ、まだ引き付けて……」

「……………」

いろはは再び最前線で飛来する一機をじっと睨みつける。

——引き付けるのは狙い易くするだけじゃない。近隣住民への被害を考慮した上だ。

あのドローンが抱えている箱の中身は“ニトログリセリン”という爆発物だと、先ほどやちよからテレパシーで伝えられた。

もし、遠距離で狙撃した場合、爆発と同時に破片や火の粉が、近隣の住宅に降り注ぎ大パニックとなる。

故に、みかづき荘の広い敷地内まで引き付ける必要が有った。

元々10人程度が泊まれる民宿で有ったので、庭には鉄製の遊具や、バーベキュースペースも設けられており、小さな公園並だ。

また、皆で草刈りも入念に行っていたので、火が燃え広がる心配も無い。

「今よっ!!」

「っ!!」

だから、いろはは安心して撃てる!

ピーターの合図と同時に発射された矢は、ドローンの一機を貫いた。

瞬間、積み荷のニトログリセリンが、矢の魔力に反応して爆発四散。

弾けるような爆音が響くのと同時に、燃え尽きた残骸が、ボロボロと庭に落ちていく。

「やった……!」

成功。いろはの顔がパツと輝く。

「コツは掴めたみたいね。あとは頼んだわよ」

「えっ?」

だが、ピーターの気配が急に離れて、いろはは目を丸くした。

振り向くと、彼は既に屋根をよじ登っているではないか。

「ピーター……さん?」

——まだ、一人じゃ怖い。傍で見守っていて欲しいのに。

急に不安がぶり返してきて、眉を八の字にして彼を見上げるいろは。

だが、彼は昇るのを止めず、振り向いてふふん♪と鼻で笑った。

「ママはあつちの方を片付けてこなくちゃだから」

「っ！」

見ると、彼の腰元にはライフルが下げられていて、ハツとなる。

そうだ——確か、ドローンの数<sup>は</sup>25機。自分の居るベランダから見える数が全

てじゃない。

残りは、別の方角から攻めてきているのは間違いない。

ピーターはナイシヨ☆と言いたげに口元に人差し指を立てた。

ライフル  
これを使うのは秘密にして、と言いたいのだろう。

「あの……！」

だが、それでも一般人の彼に危険な真似をさせる訳にはいかない。

「振り向いちゃダメよ」

「っ」

止めるべく掛けようとした言葉は、彼の一声に押し留められた。

声色が穏やかなのは変わらず、だけどころはをそこに縫い止める程の“棘”も感じら



れた。

「……………分かりました。でも、無茶しないで……………」

「いろはちゃんもねっ☆」

ピーターはいつもと変わらぬ陽気な笑顔でウインクをした。

この状況だ。彼だって本当は辛い筈なのに——

「……………っ!!」

いろははグツと拳を握り締めると顔を戻して、ドローンの群れを見遣った。

確認できるだけでも12機が迫ってきている。

彼は最後まで焦りを見せることなく、自分を勇気づけてくれた——ならば、自分

は応えねばならない。

いろはは再び最前線に飛んでくるドローンを睨みつけると、矢の照準を合わせて……

〈はいはい。そこまで〉

「っ!!」

どこからか、素っ頓狂に明るい声が背後の屋根の上から聞こえてきて、いろはは愕然となる。

だが、その声色は異様だった。いつかのニュース番組で聞いたことある、機械で加工された音声。

同時に首筋に真綿のようなものが緩く括り付けられたような、違和感。

「何……？」

が起きた、と確認するよりも早く、男か女かも判別できない無色の声が飛んできた。

「あーダメダメふたりともー。動いたら首がぴっ！つて飛んじやうよー？」

——ゾツと、背筋が凍り付いた。

呑気そのものな間延びした声色で、悍ましい事を平然と言つてのける「誰か」にいるのは戦慄した。

（ふたりともつて……まさか!）

しかも、狙われているのは自分だけではない。ピーターも、同じ。

死への恐怖が猛烈に噴き出してきて、いろはは「役割」を忘却した。

視界が霞み、右腕が震えて、ドローンを狙うどころじゃない。膝がワナワナと震えて今にも崩れ落ちそう。

頑なに決意した筈の「守る」という意志さえ、どこかに消え失せた。

『助けて……やちよさん……!』

いろははテレパシーで訴える。それしか術が無かった。

自分達の命を狙う「誰か」と、フェリシアが聞いていても仕方が無い。ただ、死にたくない。助かりたい。安心したい。

本能が、その気持ちを最優先とした。

『いろは』

——そこで、返ってきたのは、やちよでは無く。

とても静かで、凜と透き通った声。

刹那、背後で屋上でガキインツ！と金属同士のけたたましい衝突音。

「まさら、さん……う？」

その声の主をいろはは知っていた。

加賀見まさらが、助けてくれたのだ。自分の命を狙う「誰か」の手を止めてくれた。

『気にせず、貴女はドローンを狙って』

彼女もまた、いつも通りの無機質な口調。だけど、声尻には研ぎ澄まされた刃の様な鋭さも感じて。

その言葉にいろははハツとなる。首に違和感は——無い。

「……はいー」

改めて、今の自分が独りじゃないと知った。

そして今は、「家族」というチームの中に組み込まれているのだと認識する。

何か不都合が発生しても、皆がフォローしてくれる。それが堪らなく有難くて、嬉しい。

そうだ。

今の自分には与えられた役割が有る。

危機に陥ったとしても、構わず集中しよう。絶対に全うして、皆を守り抜いて、この

感謝の気持ちを伝えよう——

いろはは決意を新たにして、ドローンを睨みつけた。

もう、恐怖は無い。

☆

——みかづき荘・屋上

加賀見まさらは、表情には決して出さなかったものの、愕然とした。

自分の得意とする固有魔法を用いての不意打ちが、ものの見事に防がれたからだ。

「まさくらちゃん」

「……………」

屋根の天辺まで昇り積めたピーターが心配そうに声を掛ける。彼を庇うようにまさらが立つ。

まさらと真正面に対峙するのは、たった今、彼を殺そうとした機械音声の持ち主だ。声色だけでなく風貌も奇妙な出で立ちだった。頭頂部から爪先までピツタリと纏われた漆黒のボディスーツで、顔面はジェイソンのようなホツケーマスクで隠している。

魔力反応は微塵も感じられない。だが、間違いない。——

「魔法少女ね」

しかも、凄腕の。

一切表情は変えず。だが、瞳は氷のように冷たく瞬かせて、まさらは低く呟いた。

ジェイソンのマスクは右手のコマンドナイフをくるくると回しながら、うん、と頷く。

へあつたりー。傭兵でーす。よろしくー

ジェイソンマスクは陽気にピースサイン。

人の命を握っておきながらその態度は軽薄そのものだ。

流石のまさらも一瞬口元を歪ませると、背後のピーターに忠告する。

「ピーターさん。ここは私に任せて」

「分かったわ。でも、無理はしないこと。自分の命を最優先すること。危なくなったら

「こころちゃんを思い出すこと。あとは……」

「市長にいつも言われてるので言う必要は無いです」

「もう、こんな時でもママが心配してあげてるのにつっ！ じゃ、頼んだわよ！」

ピーターは屋根を滑落すると、いろはとは反対方向のベランダへと移動した。

まさらはそれを見届けると、再びジェイソンマスクの傭兵と向き合う。

「じゃー……」

ジェイソンマスクは両手をグツと上に伸ばして、ストレッチ。

「あそぼーかー」

「遊びじゃないわ」

「分かってるってー」

まさらの冷やかな反応にジェイソンマスクはつれないねー、と溜息。

そして、首を左右に振りコキコキと鳴らした後——まさらを観察する様に、じつ

と見つめた。

「……フーン。君って不思議だねー」

「……??」

「私の事、あからさまに嫌がつてる。だけど……さつき攻撃を弾かれた時、ほくそ笑んだ」

「…………」

まさらは、答えない。話していてメリットは無い。あくまで無反応で返すのみ。

「得意技だったんでしょ、あれ？」

「…………」

まさらの眉根が寄った。

「当たり前。動物って普通ね。驚いたら目を閉じたり、口を結んだり、身をこわばらせたりするんだけどー、君ってワクワクするんだねー？」

「…………」

まさらは僅かに目線を下に下げて、髪をいじった。

「あ、凶星。以外ー。クールに見えて刺激を求めるタイプなんだねー。こつち側に興味ある？」

「……別に」

奴にこれ以上喋らせるのは良くない。理屈ではなく感情でそう判断したまさらは獲物のダガーを構えて戦闘態勢を取る。

そして、ジェイソンマスクを伺う様に睨み——フツと消えた。

へん？

ジェイソンマスクは首を傾げた。

瞬間——ドスツ！と、鳩尾に拳が突き刺さって、彼女は呻く。

「がふっ!!」

だが、胃液を撒き散らしたのは、まさらの方であった！

先程よりも瞬発力を上げて相手の背後に周り首筋に刃を突き立てようとした——矢先だった。

ジェイソンマスクは一瞬で振り向き、臍の上を狙い当てたのだ。見えない筈の自分を、見えていたかのように。

「……………!!」

ジェイソンマスクは鈍痛に呻くまさらの首根っこを掴み上げると、無造作に投げ飛ばした。だが、落ちる直前で宙を翻って着地する。

「……………!!」

再び、ジェイソンマスクと睨み合うまさら。



上腹部の苦痛と共に未知の体験への好奇心が噴き出して、まさらを更に興奮させた。矛盾した感情が合わさり、もしかしたら奴には表情が奇怪に歪んで見えているのかもしれない――

「ふんふん、なるほどねー」

一方のジェイソンマスクは投げ飛ばした腕をぐるぐる回してリラックス。対峙するまさらをさして脅威と捉えてない様子だ。

一撃目を防がれた時はまぐれかと思ったが、やはり、そうではない。

何か、技術が――

「良いねー。透明って。やりやすくて助かるよー」

「っ!？」

ジェイソンマスクの軽口に、まさらは耳を疑った。

やりやすいつて何だ?――戦う相手が視認不可なだけで、不都合しか無い筈なのに。

「……………」

だが、今のまさらは独りだ。

獲物のダガーと固有魔法の「透明」しか手札が無い以上、それらを用いてどうにか対処するしかない。

「……………」

まさらは腰を低く落とすと、両手にダガーを携えて、身構えた。

「……………」

その姿勢を見た相手は、マスクの裏でおっと目を見開く。

まさらの決意を込めた表情——何か打つ手を思いついたな。

ジェイソンマスクは口を結ぶと、直立不動のまま、まさらをじつと見据えた。

——瞬間、まさらが消滅。

直後に背後に殺気を感じてジェイソンマスクが振り向く。

芸の無い奴だと、マスクの裏でほくそ笑んだ。腰の回転と同時に、コマンドナイフを

振り抜く！

しかし——

〈おっ？〉

ガキントツと金属同士が激突し、ダガーが下に落ちた。

が——まさらの姿は無く、呆気にとられる。

再び首筋に殺気を感じて、振り向き様にナイフを振るうジェイソンマスク。

しかし、反撃を喰らったのはまたもダガー一本のみ。やはりまさらはいない——

〈っ〉

が、次の瞬間——ジェイソンマスクは初めて身構えた。

またもダガーは空中に出現。今度は一本だけではない。無数のそれらが包囲陣のよ  
うな円を形成し三百六十度の広範囲で自分を狙っている！

まばたきをする間も無く、円が縮小。十数本にも及ぶ氷の如く冷たく光る刃先がジェ  
イソンマスクの前方と後方から高速で迫りくる！

へ〜♪

だが、彼女はこの程度で疎まない。

まさらの芸当を賞賛するようにびゅうと口笛を吹くと、同時に腰に回していた左腕  
を、撫でるように上に薙いだ。すると、ナイフの包囲網はたちまち勢いを失って、天に  
掲げた左腕に沿う様に刃先を上に向け、一斉に静止。

まるで、見えない糸に吊り上げられたよう——

へっ

だが、難を逃れたジェイソンマスクが一息付く間は無い。

直感。頭上から猛烈に迫りくる何かを察して、反射的に垂直蹴りを繰り出す！

「アア……ッ!!」

鋭利な爪先が何か柔らかいものにずぶりと喰い込んだ。

ジェイソンマスクが目線を上げると、そこにはダガーを携えたまま苦悶の表情を浮か

べるまさらが居た。

至近距離で大型の鉛を全力でぶつけられたような鈍痛が下腹部に生じていた。腹が背中に届くまで押しつぶされて、血液交じりの胃酸を撒き散らす。

〈……〉

頭頂に浴びながら、ジェイソンマスクはまさらを冷ややかに見つめた。

—— 全て、お見通しだ。

一度目と二度目の奇襲の際——突撃しながらも、自分の周囲に “透明化したダガー” を設置した事は勘付いていた。

それらを不意打ちに用いて、こちらが対処に手間取っている間に、予想もしない方角から不意打ち——戦法としては利に敵っているが、如何せん相手が悪かった。

“傭兵” は対魔法少女戦に於いて、常に万が一の可能性を考慮して臨む。

故に、セオリー通りの戦術や武術など、意味が無い。

ましてや、“こちら側” に立った事さえ無いまさらでは、敵う筈も無く——

〈っ?〉

と——そこで、ジェイソンマスクは違和を覚えた。

苦痛に喘ぐまさらの瞳が、恐怖や驚き、苦しみを一切映していないことに。

「ア……っ！」

刹那——まさらの口元が、小さく弧を描いた。

(愉悦?)

ジェイソンマスクがその感情を不審に思った矢先だった。

足元から猛烈に何かが迫りくる！

へんっへんっ

だが、ジェイソンマスクには読まれていた！

咄嗟に首を仰げ反ると、三つのダガーが空に向かって一直線に昇っていく！

「……ッ!!」

不意打ちからの不意打ちからの不意打ち。

だが、仕留めそこなった——まさらは小さく舌打ち。

へうん、惜しい惜しい。残念だったねー

いずれの戦法もジェイソンマスクの余裕を崩すには至らなかった。

彼女は再びまさらの首根っこを掴み上げると、力を込めて締め上げる。ギリギリと骨が軋む音が脳に響いて、まさらは不快に顔を顰めた。

「ガッ……ア、ア……ゲッ」

ジェイソンマスクの腕は、細身のまさらよりも更に虚弱そう。

だが、その膂力は怪物さながらで、振り解こうと両手で握り締めて爪を立てるも、ビクリとも動じない。

〈透明魔法の使い手って、何でも分かりやすいんだらうねー？〉

「ゲ……グツ……」

〈魔力とかー、殺気とかー、気配とかー……刺さるんだよ。全部〉

「ツ!？」

素っ気ない声色でとんでもない事を言うジェイソンマスクに、まさらは驚愕を示した。

〈降参は……って、したくないみたいだねー〉

だが、ジェイソンマスクはまさらの瞳を見て溜息を吐く。

一切の手段を潰され首を振じ上げられ絶体絶命の状況なのに、口元は愉悅のまま。

「……ええ。時間は……稼げたから……!」

〈んー？〉

そういえば——と、ジェイソンマスクは周囲を確認する。

先程からドローンのプロペラの音が一切聞こえなくなっていた。

どうやら、全機撃ち落とされたらしい。

「勝ちね。私達の……」

へうん、そうだねー

ジェイソンマスクはまさらの首を絞める手を緩めると、ガックシと項垂れた。そして、腰元からトランシーバーを取り出し、口に当てる。

—— 潔く負けを認めた。これで、立ち去ってくれるだろう ——

へよし、フェリー。第三ラウンド

—— だが、その一言に、まさらの顔から血の気が引いた。

☆

—— 神浜消防署前・マンションの屋上

みかづき荘から暫し離れた、その建物に「赤羽根」—— 双樹ルカは独り、佇んでいた。

伊月ジュンから渡されたタブレット型の端末で、ドローン全機の遠隔操作を任されていたが…… たった今、反応が全て消失。

「七海やちよ、見事也」

英雄とその眷属のチームワークと一人ひとりの練度の高さには、赤羽根は舌を巻いた。

アステリオスは策略を見破られ、七海やちよに実質捕縛状態。

保険のドローンも全てロスト。

頼みの綱のジュンも、足止めを喰らっている状態。

それでは、いよいよ彼女達の出番ですか—— と、赤羽根は期待に胸を膨らませた。端末を通信画面に切り替えると、ある黒羽根へと繋げる。



「……出番ですよ。『匿名希望』」

それは、今作戦の為に。

日秀源道が『プロフェッサー・マジウス』に無理を言っ  
て呼び寄せた————トツプ  
シークレット・エージェントだった。

1538 FILE # 63 IMPACT = 〈衝突〉

## FILE #64 KILLER Ⅱ 〈完殺者〉

— 2018/07/05 (日)

— みかづき荘・キッチン

「よし、フェリー。第三ラウンド」

「よし、プランをBからCへ移行すると奴らに伝える」

「りよーかーい」

ジュンから報告を受けたフェリシアは、そう指示を下すとトランシーバーを懐にしまった。

未だやちよとフェリシアは睨み合っていた。

お互いに一步も譲らず、また警戒から互いに手を出せず、既に15分が経過。

しかし、たった今まさから、ドローンは全機破壊したとの報告が入った。

フェリシアの作戦を潰したのは、これで二つ目。

優勢なのはやちよ達の筈。だが、対面するフェリシアの顔はまだまだ余裕に満ちた愉快で——対しやちよの表情は冷静沈着を保ちつつも、額には汗がじわりと滲んでいる。

第三者が二人を見比べたら、追い詰めてるのはフェリシアの方と錯覚するに違いない。

（プランC……やはりまだ何かを仕込んでいる……）

——奴ら、といったからには、手駒はまだまだ潜んでいるのだろう。

全く、自分一人を斃す為にどれほどの私財と人員を注ぎ込んだのか、この猟犬は。

そして、自分に懸けられた賞金を思い出した。

3億……そう、3億だ。

いつの間にか自分は「裏」でもそんな有名人となり、彼女達に付け狙われる立場になつていたのか。

そう思うと、自然と溜息が零れた。

「……次は何をするつもり？」

だが、今後を考えればフェリシアとの戦闘は良い経験になるかもしれない——  
やちよは思考をできる限りポジティブに切り替えて、再び鬼神の如き眼で彼女を睨み据えた。

実力的にフェリシアを取り押さえることはできたが、敢えてそうしなかった。

「聞いて驚け」

それはフェリシアから、手の内を聞き出す為だ。

敵の指揮官に直接問いかけるなど、普通に考えれば愚の骨頂なワケだが、幸いフェリシアは自分の質問に懇切丁寧に答えてくれた。

それが、傭兵なりの流儀なのかは、甚だ検討も付かないが。

「特攻隊だ」

「っー！」

だが、愉悦混じりに吐き出された一言に、肝が冷えた。

手駒とはいえ、人間の筈……彼女達に何をさせるつもりなのか？

「……最近……」

猟奇的な笑顔の前で、人差し指で“∞”を繰り返しなぞるフェリシア。

「街をブンブン飛び回ってる“蠅”を知ってるな」

やちよは目を見開く。

「！……貴女に接触したと？」

まーね、と返した後、フェリシアはくつくつと嗤う。

「意識も感情も無い。完全な合理的思考のみで与えられた指示を遂行する完璧な兵隊共だ」

「そんな魔法少女が」

「いるんだよな、コレが。そして、そんな奴を量産しまくってる組織があるってことも」  
どんな魔法を掛けたのかは知らねーが、と付け加えて、フェリシアは愉悦を深めた。

やちよが忌々しそうにチツと舌打ちを鳴らしたからだ。英雄の澄ました顔を崩すのは心地いい。

「特攻……敗北を認めたとようなものね」

そこでやちよは、下唇を噛むと、右手に携えた果物ナイフの切っ先をフェリシアに向けた。

「でも、最後に笑った奴がいただろ？ オレみたいな金髪の白人さ」

減らず口を、と怒りを吐き出しそうになるのを喉元で堪えた。

感情をぶつけたところで、この金毛の子狐は吹き出すだけだ。

「ドローンとニトログリセリンは……」

「ははっ、確かにドローンは終いだが、ニトログリセリンがあれば全部だといつ言ったよ。蠅一匹一匹にタンクを抱え込ませてるのさ！ 奴らが全員到着するまで5分。それまでにオレは……」

快楽を頭わに捲し立てながら、フェリシアはズリズリと摺り足で後退していく。

やがて、壁に背中を当てると――

「完全勝利を目指す!!」

笑みを消した。

壁を蹴つて、一気に飛び出す！

瞬間、やちよの右手が反応。神速の如き速さでナイフの刺突を仕掛けるが――

「っー」

息を飲む。フェリシアの姿がフツと消えた。直後――

「ハイヤアツ!!」

自分の足元から掛け声!!

「ぐうっ!!」

ドスンツ!! と重い音が響く。

至近距離で鉄球をぶつけられたような衝撃が下腹部を襲ってきて、やちよの顔が歪んだ。

寸前で呼吸を整えて腹筋を締めた為、クリティカルヒットには至らなかったが、両足が滑るように後退した。

（躰道の『海老蹴り』ね……）

フェリシアの姿勢を確認して、やちよは感心。

今のは『消える蹴り』とも呼ばれる武術の一つだ。

ナイフの刺突を身を屈めて回避。同時に背中を向けて、上体を床まで倒し、両手を付いて相手の腹部目掛けて斜め上に蹴り込む。瞬間的に回避と攻撃が可能な技。

凄まじい威力だ。鳩尾にでも決まっていたら、激痛に膝が折れて隙を見せていただろう。



フェリシアは立ち上がって再びやちよに向き合おうと、今度は突進！

だが、フェリシアの性質からして真正面から仕掛ける筈は無い。必ず小手先を講じるはず——

やちよは合気道の構えを取り、フェリシアの接近を待った。

冷静に待ち構えていることが何よりの得策だ。奴が飛び道具を用いても対処できる。

仮にただの突進だった場合は「技」を返してやればいいだけ——

「オラッ」

至近距離まで迫ると掛け声と共に何かを投げつけてきた。

瞬間——真つ白な粉塵が舞い散って、やちよの視界を塞いだ。

ホットケーキミックスか。しかし、想定内だ。自分には通用しない。

「はっ！」

既に相手の急所は捉えている！

再び、頸筋目掛けてナイフの刺突を繰り返すが、フェリシアは後ろ回し蹴りで応戦してきた。

叩き落とすつもりか——だが、繰り返された左大腿の腹にナイフの側面が接触した瞬間、膝がクンツと折れ曲がる。

「っ」

その芸当にやちよが目を見開いたのもつかの間。

右手は既に空を握っていた。ナイフが折れた膝に挟まれて掠め取られたのだと判明した時には、果物ナイフの切っ先が目前に迫っていた！

瞬時にやちよは手刀を横薙ぎして弾き飛ばす。

きんつ、と音が響いた一瞬後には、果物ナイフは壁に突き刺さった。

だが、投げ返されたナイフに気を取られた一瞬が仇となった。

フェリシアは視界から忽然と消えていた。

——どこへ行った？ 深月フェリシア……!!

自分の迂闊さを呪いながらも、やちよは野兔を追う空腹の狼の如く周囲を見渡した。

キッチンには……いない。

そうだ。フェリシアは自分を殺せないと判断した。直接挑むのは無謀の筈……。

そうなると……彼女が次に狙いを定めるのは……——まさか。

「英雄の弱点……それは、自分以外の命だ」

リビングを向くと、聞こえて来たのはフェリシアの嘲笑。

やちよの背中がぞつと冷え込む。

「七海部長……！」

「……!!」

助けを求める様な声に、愕然とした。

一番見たく無かった光景がそこに有った。

フェリシアが冷たい笑みを携えてみたまを人質に取っていた。

右腕で彼女の首を固く締め上げて、こめかみに「何か」を押し付けている。

——それが「銃」と判明した瞬間、やちよの心臓がドクンと高鳴った。

「ぐうっ……………」

みたまの表情は苦しそう。

みかづき荘の中で唯一戦闘力の無い彼女は、リビングで隠れていたが、フェリシアの嗅覚は凄まじかった。

今すぐ、助けにいかなければ——!!

「おーっと動くなよ。このババアの脳みそが飛び散るぞッ！」

衝動的に飛び出そうとした身体は、フェリシアのその一声で抑えられた。

「……………」

無言と無表情を貫きながらも、下唇は痛くなる程噛み締めていた。

☆

——みかづき荘・屋根の上

「ひっ……………」

「拙いわねえ……………」

「……………」

いろは、ピーター、まさらの三名は死を覚悟した。

全身をダイバースーツで覆ったジエイソンマスクが、見えない糸のようなもので全身を拘束したからだ。

〈はーい。遊びはもうこれでおしまーい〉

「……………」

まさらは瞳で敵意を向けるがジエイソンマスクは、はあ、と溜息。

左手の小指を僅かに手前に引くと、首に括り付けられた「糸」がグツと閉まる。

「っ……」

へ「これ」の切れ味はさつきおしえたよねー？ 動いたらバラバラのグチャグチャだよー？

ジェイソンマスクの機械音声に脅すような威圧感は無く。

どこまでも友達に世間話でもするかのような平坦で間延びした口調。

人の命に一切の興味関心を示していない様子に、まさらは忌々しそうに口元を歪める。

「ひっ……」

うめき声が聞こえてきて、まさらはペランダに居るいろはを見下ろした。

既に死の恐怖がぶり返してきたのか、涙を溜めて座り込んでいる。

まさらを見上げるその顔は、「もうおしまいだ」と今にも悲鳴を挙げそう。

しかし、歯を喰いしばってどうにか喉元に押し留めているように見えるのは、彼女なりの最後の意地か。

「まさらちゃんー」

次いで自分を呼ぶ声に、まさらを反対側を見下ろした。

いろはとは向かい側のペランダに居るピーターも、ライフルを構えたまま硬直。

自分というはと同じく、見えない糸が全身に絡みついている。

ジェイソンマスクは両手でそれを操っている。動いたら彼のような一般人は、容易く細切れと化すだろう。

「わかつてます……」

聞こえるかどうか分からないがまさらは小さく返答。

—— 拙い状況だ。

たつた今、テレパシーで聞こえたが中の方でもフェリシアが悪足掻きに出たという。

結果的に、反撃の隙を許し、隠れていたみたまを人質に取られてしまった。

助けにいかうにも、やちよ以外に戦力となる自分達は拘束。

あと、頼れるのは……

(由比さん……)

戦闘力は低い、遊撃役である彼女が残された希望だ。

まさらは今までの人生の中でめつたにしたことが無い。祈る。ことを、この時ばかり

は心の中で行つたのであつた。

一方、みかづき荘の塀の外では――

へこちら「匿名希望」。赤羽根より指令有り。プランCに移行した模様。全員、作戦行動開始」

それが合図だった。

瞬間、周辺住宅の屋上、庭の草陰、物置、車内から、続々と黒いケースを抱えた黒装束が飛び出してきた。

計14名に及ぶそれらは、蜜を見つけた羽虫の群れのように、みかづき荘に集結しつたあった。

『こちら「レイケツ」。匿名希望」より指令有り、黒羽根全員に通達。これより塀の内側へ侵入し、一斉突撃。みかづき荘を爆破する』

塀の外で、纏わり付くように背中を塀に張り付けた黒装束の一人がテレパシーで指示を出す。

同じように、みかづき荘の塀の外側では、囲い込むように、黒装束達が塀に貼り付い

た。

『イバリ』了解』

『ネクラ』了解』

『ウソツキ』了解』

『ワガママ』了解』

『ワルクチ』了解』

『ノロマ』了解』

『ヤキモチ』了解』

『ナマケ』了解』

『ミエ』了解』

『オクビヨウ』了解』

『マヌケ』了解』

『……』

『……』

だが、いる筈の二人から返信が返ってこない。

『レイケツ』が全員に指示。

「こちら『レイケツ』。『ヒガミ』『ガンコ』との応答無し。緊急事態が発生したと判断。



「ワガママ」「ワルクチ」は至急救助に迎え」

焦りも困惑も、表情に微塵も不安の色さえ見せず。

「レイケツ」と名乗る黒羽根は淡々と他のメンバーに指示を下す。

「こちら【ミエ】。たった今、【ワガママ】【ワルクチ】とのテレパシー断絶」

「こちら【ネクラ】。ただ今、七海やちよの手の者と交戦中」

「こちら【レイケツ】。【ネクラ】へ。相手の情報を分かる範囲で全員に報告せよ」

「【ネクラ】了解。由比鶴乃と認識。『匿名希望』へ報告の許可を要請する」

「【レイケツ】了解。許可する」

「【ネクラ】了解。『匿名希望』へ報告。……………報告完了。」

——以上。『匿名希望』より新たななる指令有り。「レイケツ」、全員に通達せよ」

「【レイケツ】了解。黒羽根全員に通達。『匿名希望』より新たななるし…………」

「こちら【ウソツキ】。レイケツとの通信断絶。敵の攻撃に遭ったものと思われる。指揮

系統混乱防止の為、当方が指揮を受け継ぐ」

「……………」

「こちら【ウソツキ】。黒羽根全員との通信断絶。『匿名希望』へ。作戦は失敗。至急撤

退指示を要請する。至急撤退指示を要請す…………」

刹那、「ウソツキ」の背後から橙色の影!!

「ちやつちやーっ!!」

振り向く間も無く【ウソツキ】の頸筋に回し蹴りが炸裂!

頸椎を強打した【ウソツキ】は全身が痺れるような感覚に襲われた後、地に倒れ伏した。

「……………こちら【ウソツキ】……………こちら【ウソツキ】……………頸椎損傷の為……………作戦行動不可能……………。メンバー全員との通信断絶……………作戦失敗……………『匿名希望』指示を……………『匿名希望』指示を……………」

「なんなのこいつら……………!?!」

ガクリ、と首が倒れて意識を失った様子の黒装束を呆然と見つめるのは、魔法少女姿の鶴乃だ。

実は彼女は、七海やちよから遊撃役を任されていた。

鶴乃なら、みかづき荘の外に居ても怪しまれることが無いからだ。

やちよがフェリシアの毒を暴いた直後に、彼女は窓から外へ飛び出した。

そして、塀の外で張り込んでいた黒装束の少女達を発見し、各個撃破した、という訳だ。

しかし――

「……………やめろ」

急に右手が震えた。鶴乃は左手で手首をギュッと握り締める。

攻撃する時、罪悪感が無かった訳が無い。

だが、黒装束の少女が抱えているものは爆発物だ。一人でも残してはならない。迅速に対処しなくてはならない。だから、一撃で戦闘不能にする必要があった。

しかし——攻撃を受けた黒装束の反応が、不気味だった。

痛みなどまるで感じていないように、無表情のまま淡々と、身体に起きた状況を解説しながら膝から崩れていく。

——こちら●●●、頸椎損傷。四肢機能不全の為、作戦続行不可能。至急、救助を要請する。至急、救助を要請する。

まるで、機械じゃないか。

バグが発生してエラーメッセージを画面表示したような……

故に、軽かった。

攻撃を当てた時の感触、首筋の骨が歪む音も、拳を突き当てた鳩尾の柔らかさも、間違いなく人間そのものだったというのに——心のどこかで違うと感じたのか。

心が軽かった。

罪悪感が、最初から自分の中に無かったように。  
人を傷つけた拳も。脚も。あの頃と同じ様に、軽い。

——鬼、悪魔、人で無し。

「やめろって……」

この軽さには、覚えがある。

忌まわしい過去が脳裏に蘇ってきて、右手がより大きく震えた。握り込むだけでは抑えきれない程に。

違う。今の私は人間だ。

もう二度と、掃き溜めには落ちない。

そちら側に行きたくない。

「——やっぱり、最初からうまくいく筈が無い、か……」

刹那——聞こえてきた溜息混じりのぼやき声に、鶴乃はハッと顔を上げた。自分より2 m程離れた先に見えたのは、眼下で倒れ伏す黒装束と遜色無い格好の少女。

——もう一人、居たのか。

魔力反応は先の黒装束達と変わらず微弱。戦闘力はそれほど高く無い筈。

ただ、一つ奇妙なのは、先の溜息混じりの言葉からして、明らかに人の感情が見受けられた点だ。

恐らく、こいつが黒装束達を指揮するリーダー格なのか？

「……あんた、名前は？」

会話が可能と判断して、鶴乃は問いかけた。

「無いわよ。知ってる癖に」

黒装束は口元に一切の感情を見せずに、首を振ってそう告げた。

名無し……ということはこのこいつが「匿名希望」か？

右手に黒いケースを抱えている姿から目的は他の連中と同じの筈。

鶴乃は戦闘態勢を取り——渾身の力で地面を蹴って、一直線に飛び出した。

狙いは鳩尾だ！

「匿名希望」は直立不動のまま。鶴乃の瞬発力に反応できていない。狙うのは容易

い。

急所目掛けて拳を突き出した瞬間――

「っ!?!」

一瞬――それは本当にコンマ0.1秒に満たない程の瞬間だったが、鶴乃は確かに感じた。

全身が、固まった。

「無駄よ」

次に「匿名希望」の声が聞こえてきたのは、背後からだつた。

そんな、今の一瞬で――!

しかし、鶴乃の驚愕は一瞬で抑えられた。

ゴツツ

――と、後頭部に「硬い物」を押し付けられたからだ。

それが「何か」は分からない。

だが、『振り向いてはダメだ』と、本能が警鐘を鳴らす。

「ッ!!……あんだ、一体……!?!」

額が汗に濡れて冷たい。

鶴乃は恐怖を堪えながらも、背後で自分の命を握っている「匿名希望」に問いかける。

「戦う行為は止めなさい。私と貴女とでは次元が違う」

「次元って……!!」

「私は貴女と戦う事を望んでいない」

「!？」

「匿名希望」の冷ややかな一言に鶴乃は瞠目。

「由比鶴乃」

後頭部に鉄の塊を押し当てながら「匿名希望」は問いかける。

「貴女は自分の人生を悔やんだことは無い？ 大切な人を失って、罪の意識を感じたことは無い？」

「えっ……？」

「えっ……？」

ギクリと、鶴乃の肩が強張った。

冷たいナイフが自分の頭を切り開いて、中身を見られているような、悍ましい感覚。

「貴女と私は似ている」

だから、貴女と会えたのは幸運だった——

「……………」

そう話す「匿名希望」に鶴乃は何も返せなかった。

ただ、怖くて堪らなかった。

初めて会った人に、自分の事を全部知られている、有り得ない現実に。

「取引をしましょう」

ここで、初めて「匿名希望」は武器を下ろした。鶴乃は振り向き対面する。

握られているのが「銃」であったことに目が震えた。

もし、自分が微塵でも動いていたら、奴は迷わず引き金を引いたのだろうか？

「……………」

「匿名希望」とじつと向き合いながらも、鶴乃の相貌は恐怖で歪んでいた。

「匿名希望」は気にせず続ける。

「これから一か月に一度、直接会って、お互いの組織の情報を交換するというのは……………」

「う？」

組織……………？

「匿名希望」は自分が治安維持部に入職希望した事を知ってるのか？

そして、「匿名希望」が所属する組織とは、一体……………？

「どうって……………？」



「匿名希望」と自分の実力差は歴然。もし、断れば——想像したくもない事態を招く事は明白。

鶴乃に拒否権は無かった。

相手もそれも理解させた上で交渉に望んでる。

忌々しい———そう思い、齒を喰いしばった矢先、

「安心して。私と、私のチームは、貴女が大切に行っている人達には手を出さない。必ず

……救済する」

二人の間を一陣の風が吹き抜けて、匿名希望の前髪が揺れた。

微かに見えたアメジストの瞳には、確かな決意が込められているように見えた。

何て力強い目だ。嘘は付く人には見えない。

だけど、でも———

「……………分かった。約束してくれるなら、応じるよ」

———悩んだ末、鶴乃は苦々しい顔のまま、首を縦に頷かせた。

そうするより術が無かったのは事実だが、相手から情報が手に入れば、それをやちよ

達に伝えて活かせるかもしれない。

「……………」

匿名希望は冷淡な表情のまま、鶴乃の答えに、コクリと頷いた。

そして、指をパチンと鳴らし。

「こちら『匿名希望』。作戦は完了。黒羽根一同、私の下へ集りなさい」

『「レイケツ」了解。黒羽根全員に通達。〈気絶〉状態を解除し、『匿名希望』の下へ集結』

『「レイケツ」了解』

テレパシーで応答すると、気絶した黒羽根達は何事も無かったよにすくりと起き上がり、「匿名希望」を囲むように集まり出した。

「……………?!」

その光景に、鶴乃が呆然となるのは記述するまでも無く。

匿名希望を中心とする計15名の黒装束の少女達は一様に踵を返した。

——みかづき荘の裏には小さな森林がある。

年季のある大きな木々が互いに密着しているせいで枝葉は複雑に絡み合い、陽の入り込む隙間は無く、奥は常闇のように暗い。

黒羽根一人ひとりが、木々の間の漆黒に溶けるように入り込んで——消えていった。

☆

## ——みかづき荘・キッチン

「どうすれば、解放してくれるのかしら……？」

未だにみたまは、敵の腕の中。そのこみかみには銃口。

やちよはキッチンから一步も動けず、カウンター越しにフェリシアにそう問いかけるしか術は無い。

フェリシアはくつく、と下卑た笑みを浮かべて、指さした。

「フルニトラゼパム」

やちよの目が流しの方に向けられた。脇に有るのは、まだ湯気が立つ自分のコーヒ―。

「そいつをテメーのコーヒ―に入れた。人間なら6滴で心停止、三分後に脳死。魔法少女なら……倍の12滴で10時間の意識消失」

「……っ！」

首の圧迫に苦悶の表情を浮かべながらも、みたまがキツと目を剥いた。

「英雄は、誰かの為に命を捨てられるもんだろ？」

「……………」

無言を保つ。深呼吸し、平静であろうとする。

しかし、表情までは不可能だった。

額は汗に塗れ、眉間に皺がグツと寄り、噛み続けたままの下唇からは血が滲んでいる。それだけで、フェリシアが勝利を確信するには十分な情報だ。

ニイツと、嗤った後、フェリシアは冷ややかに告げた。

「飲めよ」

みたまの瞳が愕然と見開かれる。咄嗟に口が開き衝動的に叫んだ。

「やめなさいっ!!」

「黙ってろババアッ!」

「ぐっ……………」

だが、感情任せの制止がフェリシアに通じようか。

引き金に掛かった指がグツと引かれるのを見て、みたまは押し黙った。

「……………」

——ごめんなさい。七海部長。

——私はまだ、死にたくない。

懺悔の様な気持ちでみたまは、やちよにアイコンタクトを送った。

やちよは苦々しい顔のまま。

だが、澄んだ海色の瞳をしかとみたまの目と合わせてから、コクリと、力強く頷いた。その仕草は、「大丈夫」と言い聞かせているように、みたまには見えた。

「っ！」

次の瞬間——みたまの顔が驚愕に歪む。

フェリシアの顔が歓喜に彩られる。

やちよは、コーヒーカーップを手に取り……毒物が混じった液体を——くつと飲み干した。

「……っ」

ゴクンという音がした。

そして喉が動くのを確認したフェリシアが盛大に哄笑を響かせる。

「ハハハハハハハハハッ!!! いいぜ英雄!! そうこなくつちやなあッ!!」

これで七海やちよは無力化。

あとは気絶した所で、ソウルジエムをパキッと割ってしまえばいい。

自分の勝ちはこれにて確定。

フェリシアはみたまに満面の笑みを向けると、卑下た笑い声を撒き散らしながら言い放つ。

「クハハッ！ テメーもこれでしまいだ。標的にはねーが、オレの秘密を知った以上は死んでもらうぜ！」

こめかみに思いつき銃口を捻じり込む。みたまの顔が痛みで歪む。

「……………」

——だが、みたまはフェリシアの顔をじつと睨み据える。

「おっ？ まだやる気か？ ……でも無意味だ」

快樂を張り付けたまま、フェリシアは引き金を引く——

——それが、隙だった。

「ぷっ」

刹那——やちよは口から、何かを吹き飛ばした。

「あつ? ……げあつ!!」

何事かと、振り向いた瞬間—— “それ” はフェリシアの口の中に飛び込む!!  
瞬時に口腔一杯に広がったのは、苦手な豆の苦み!

「ツ……!?!」

それが、コーヒーと舌が認識した時、フェリシアの全身に悪寒が走った。

「げえつ……!?! ゲホッ! グエツ!! ガハツツ!!」

—— ますい。喉の奥に入った!

急激にゾツと蒼褪めた顔を下に向けて、思いつきり咳き込む。

「みたま、今よ!!」

「ツ!!?」

やちよの掛け声。フェリシアは拙いと思ったが、もう遅い。

毒入りのコーヒーに気を取られて、右腕が緩んだ。

開放されたみたまが、フェリシアの背後に回り込み——

「お返しっ!!」

右腕を引っ張り上げて両腕で巻き込み、

「ぐはっ！」

体重を掛けて、“脇固め”を決めた！

フェリシアの体は真正面から床に倒れ込んだ。

即座にみたまは、右手の指に掛かっていた指輪をつまむ。

「あっ……………」

——瞬間、フェリシアの視界が暗転。

全身の力が無くなって、眠るように意識が消失。

首が横たわり、スー…………スー…………と、深い寝息を立て始めた。

「久々に見たわ。調整屋の防衛術」

フェリシアが深い睡眠状態に入ったのを確認して、やちよは漸くキッチンから抜け出した。

フェリシアを開放して、ふう、と一息付くみたまの隣まで歩み寄る。

「ソウルジェムの魔力抑制。うまくいったわ」

「ええ」

二人はフツと笑い合い、パチンツとハイタッチ。

そして——足元で赤子のようにすやすやと眠る少女を、揃って鋭い目で見下ろし



た。

「予想以上の問題児だったわねえ……」

みたまが額の冷や汗を拭いながら、苦々しい表情でそう評価するが、やちよは首を振った。

「問題児？ たった一人で私達全員を窮地に追い込んだこの子が、果たして只の問題児と言えるのかしら？」

「七海部長……？」

みたまは横目でやちよの顔を見て、少し驚いた。

勝ったというのに、瞳の色は冷たく、血で滲んだ唇を未だに固く結んでいたからだ。

その表情から伺える感情は——

「この子は、紛れも無く『傭兵』よ」

——それも凄腕の。

静かにそう付け加えるやちよの顔には——底知れない『傭兵』への『怯え』がまざまざと浮かんでいた。

1570 FILE # 64 KILLER = 〈完殺者〉

FILE #65 WISH

||

〈私利私欲〉

—|深

月フェリシア編 終了—

—|2018/07/05 (日)

——みかづき荘・屋上

「へちえ、フェリーめ、負けたか……」

『三秒間応答が無かつたら敗北を察しろ』——フェリシアは確かにそう言った。

故に、ジェイソンマスクⅡ伊月ジュンは呆れたように舌打ちして、トランシーバーを耳から外す。

「へじゃあ、これで仕事はおわり。……さ、帰ろ〜と」

「待ちなさい」

ジュンは掲げていた両手を、すつと下ろす。同時にまさら達の拘束が解かれた。

そして、何事も無かつたように背中を向けた途端、まさらの突き刺すような声。

「なーにー?」

ジュンが、かつたるような返答と同時に振り向いた

まさらの眉間には僅かに皺が寄っていた。

「貴女……仲間が捕まったのに、助けようとは思わないの?」

「へべつちにー? だって殺される訳じゃないしねー」

「……………」

即答。その余りの素っ気なさにまさらは沈黙する。

理解し難いものを見た、という驚異も勿論有ったが、一番は『これ以上何を言っても無駄だ』と、彼女の合理的知性が判断したからだ。

〈報酬分は働いたし、うん。全部オツケー。じゃ、さいならー〉

機械音声のジェイソンマスクはどこまでも陽気で余裕な姿勢を崩さなかった。

屋根の端っこまで歩くと、水泳のダイビングのように飛び降りた。

その行動にまさらが目を見開く。

まさらも端まで駆け寄って、下を見ると、既にジユンの姿は無かった。

☆

——— 神浜消防署・向かいのマンション・屋上

「ただいま戻りました」

「お疲れさまでした。匿名希望」

赤羽根……双樹ルカがジユンから渡されたタブレットを無造作に投げ捨てたのと同じ時だった。

15名の黒羽根がいつの間にか彼女を取り囲むような円を描いて集結していた。

「申し訳ありません。作戦は失敗致しました」

真正面に立つ黒羽根……「匿名希望」が恭しく頭を下げるが、赤羽根はフツと笑う。

「まあ良いでしょう。『アステリオス』が敗れたのは残念ですが」

口の端を深く吊り上げた。

「『おたのしみ』が増えました」

「お楽しみ?」

「個人的な話です。……ところで『匿名希望』?」

途端、赤羽根は微笑みを絶やさぬまま、冷たい瞳を向けて問いかける。

「何でしょう?」

「貴女は本当に、プロフェッサーに付いていけば、『解放』が成されると信じているのですか?」

「問うまでも無いでしょう」

「匿名希望」も、競うようにじつと冷眼を向けて言い放つ。

「私は意識と感情は抜かれていませんし、分不相応な役職を与えられてはいますが……元々は一介の黒羽根に過ぎません。プロフェッサー・マグウスの御意志を疑うなど、愚か極まります」

「なるほど……」

赤羽根は言いながらも、「匿名希望」から視線を逸らし、周囲を囲む肉人形達を見回していた。

「貴女も、同じ気持ちですか？」

その内の一人——確か、「匿名希望」が「レイケツ」と名付けた者だったか——に目を付けて、赤羽根は問いかける。

「……………」

が、無言。

暫しの静寂の後、赤羽根は「匿名希望」に向き直り、はあ、と溜息。「そうでした。確かこの方々は私には、興味無かったですね」

「匿名希望」はコクリと頷く。

「赤羽根、貴女も解放を信じているのですか？ プロフェッサー・マグウスが思い描く、我らの未来を……」

「さあ？」

赤羽根は首を傾げて、素っ気なく答えた。

「将の思考は、我ら尖兵には計り知れぬ事ですから……ただ」

だが、そこで再び口の端を吊り上げる。

「……最後に、笑えば良いと思つてます」

深く被った筈のフードに隠れている瞳が妖しげな柘榴色に瞬き、  
「匿名希望」の肩が  
強張った。

「……笑う？」

「結果的に、私自身が利を得れば、それで良いのです」

「……」

「匿名希望」は何も返さず、ルカをじっと見つめる。

「貴女も……貴女方も、そう思つたから加入したのでしよう？」

再び黒羽根達を眺め回して、愉快そうにルカは言った。

その言い様は、まるで組織など目的を果たす為の踏み台としか見ていないようで――



「……………」

匿名希望はその問いに応えず。

無言のまま、冷たく啗う彼女を強く見据えていた。

☆

|  
???

目を覚ましたフェリシアが、即座に理解したのは、自由が無い、という事だ。  
「おお~~~~い!!!」

親からはぐれた子供のような悲愴を纏う呼び声が漆黒に響く。

——反応は無し。

自分が座っているのは椅子だ、というのは理解した。  
四肢を動かそうにも拘束されているのか全く動かせない。  
……どうやら牢獄のような所にブチ込まれたらしい。

日本の神浜市が『魔法少女保護特区』に指定された理由の一つとして、『魔法少女の刑務所』が創設・運営が可能だったから、という裏話を聞いた事が有る。

当然だが、一般的な刑務所では、魔法少女の犯罪者を束縛する事は不可能である。  
人工的な豚箱で、魔法少女の自由はまず奪えない。

ジュンみたいな奴をブチ込んだら、想像を絶する地獄絵図を見るのは想像に容易い。  
(しかし……)

『大賢者』なら、話は別だ。

神浜市のどこかに実在するという、伝説の魔法少女。

かの人物が、その強大無比の魔力で外界との接触を完全にシャットアウトし、魔法少女専用の拘置所を創り出した——と。

このように、魔法少女の中でも、特に秀でた魔力の持ち主で、且つ、老齢の熟練者は俗に【賢者】と呼ばれている。

実は、【賢者】の存在が確認されているのは、日本の神浜市だけではない。

国際連合加盟国を始め、世界中のあらゆる国家では、政府が極秘裏に秘境に住まう【賢者】とコンタクトし、国の主要機関に結界を張って貫っている、というのだ。

これは『大事件』以降、魔法少女を私兵に加えたテロ組織が、世界各地で活動を行っている可能性が示唆されたから、という見方が一般的だが、本当の理由は、キュウベえによる“監視”を抑える為である。

魔法少女を生み出す孵化器（インキュベーター）。

物理法則を無視する宇宙人。

人類誕生から現在に至るまでの成長を見届けてきた監視者。

世界の人類は今日まで、彼らの都合によって生かさされ、殺されてきた家畜だ。

『大事件』が起きた事さえ、そもそもキュウベえが中東諸国で魔法少女を量産したからだ。

国際連合加盟国の主要機関から入手した情報を横流しして、少女達の不安と正義感を煽り、テロ組織への参加を勧めたのだろう、と見られている。

「……」

フェリシアは同業者達から得た情報を頭で纏めていた。

まあ、そもそも傭兵は、嘘と誇張が大好きなので、真実は全く違うのかもしれないが。現に、フェリシア自身、経験豊富を自負するものの【賢者】の類は、一度も見たことが無い。

ただ、『大事件』のような事態が起きれば、情報漏洩対策は急務だし、有り得ない話では無いのかもしれない。

(……それよりも今は)

かぶりを振って思考を切り替えた。

とりあえず、自分の最優先事項は、どうやって此処を抜け出すか、だ。

敵との戦闘で、“万が一”の状況に陥ってしまった場合、そこから這い上がるのも傭兵の資格の一つ。

「おお~~~~~いッ!!!」

フェリシアは目を潤わせ、悲愴的な涙声で叫んだ。

「しょんべんが漏れそーなんだー!! トイレに連れてつてくれー!!」

声は反響して自分に跳ね返ってくるだけだ。

この様子だと、周りには誰もいない。

案外、神浜市の女神とやらの心は氷の様に冷たいのだろう――

『無駄な抵抗は辞めなさい』

と、思った途端、機械混じりの声が聞こえてきた。スピーカーからだろうか。声の主は七海やちよだ。

『あなたの身柄は今、完全に拘束されているわ』

「どーしたら出してくれるんだ？」

『私の質問に答えること。それが条件よ』

フェリシアは小さくフン、と鼻で笑った。

そう言われて素直に答えるとも？

生憎、年相応の純朴さは、とつくに野良犬に喰わせた。今頃クソになって誰かに踏まれてる。

傭兵稼業とは常に相手との化かし合いだ。さて、どうやって誤魔化すか——

『深月フェリシアちゃん』

違う声が聞こえてきた。声の主は八雲みたまだ。フェリシアが胸中でほくそ笑む。

「おいおいヒデーじゃねーかよー！ ふざけんよ！ 人がトイレ行きてーって言うてるのに、拘束して尋問なんてあるかよっ!! 非人道的で人権侵害だっ!! なあ、『調整課』つてのはどんな魔法少女でも等しく支援するんだろっ!! だったらこんな真似、許せる訳ねーよなっ!?! なっ!?!」

泣き声の様に声を震わせて必死で訴えるフェリシア。

八雲みたまの情報はとつくに収集済みだ。情に訴える作戦だ。

『……………』

(おや?)

だが、スピーカーからは無音。

『嘘はできないわよ』

『……………!』

普段の間延びした声ではない。どこか緊張に張り詰めた様な硬い声色が帰ってきた。

アイマスクの中でフェリシアの目が僅かに見開かれる。

『ソウルジェムは私の手の中にあるの。貴方が喋っている事が嘘か本当かは、おみとお

し』

「……………なるほど」

『観念したかしら?』

やちよの冷徹な一言。フェリシアの首がガツクリとうなだれて、嘆息。

「したよ。どの道選択肢は一つしかねーんだからなあ。で、何が聞きたい」

『そうね、まずは……………』

☆

——  
???  
《SIDE・七海やちよ》

その後、やちよはフェリシアと小一時間程問答を繰り返した。  
現在、彼女とみたまの居る部屋は、ミロワールに良く似た内装だった。

二人の眼前には、40インチ程のモニターが壁付けされており、四肢を拘束されて、全身を椅子に縛り付けられながらも、強く睨みつけるフェリシアが映し出されていた。

フェリシアが一言話す度に、みたまにアイコンタクト。みたまの首が頷かれる。フェリシアは嘘を言っていない。

彼女から確認した内容を箇条書きにまとめた。

- ・自分は傭兵稼業をしている魔法少女だということ。
- ・ヒッチハイクで日本中を旅していたこと。

・各地域で、縄張りを持つ魔法少女チームを撃退していたこと。

・『アステリオス』という異名が付けられたこと。

・神浜に帰った時に、『赤羽根』と名乗る魔法少女から声を掛けられ、彼女の『主』の前へ連れて行かれたこと。

・その『主』から、七海やちよの抹殺、或いは再起不能を依頼されたこと。

「『アステリオス』……？」

まずやちよが気になったのは異名のことだった。

またまに目線を送る。彼女は意味を知っているのか、眉間に皺を寄せていた。

「ギリシヤ神話のミノタウロスの別名ね……」

ミノタウロス……それなら知っている。牛の頭と人の身体を持つ怪物のことだ。

なるほど、フェリシアの魔法少女衣装から彷彿できる。

『男をなぶり殺し、女を陵辱し快楽の限りを貪る怪物だ』

みたまが不快感を顔に表した。やちよはその気持ちを受け取り、フェリシアに伝える。

「貴方にピッタリの異名ね」

『最高の褒め言葉だな』



皮肉を言ったつもりだが、フェリシアはフン、と得意気に鼻を鳴らされた。

全身を拘束され、ソウルジエムもこちらの手にあるというのに、彼女の余裕は微塵もぶれない。

「……………どうして貴方は日本中の名だたる魔法少女チームを襲撃していたのかしら？」

フェリシアからは暫し無言が返ってきた。

この質問で言葉が詰まるとは思えない。

何せ彼女は生粋の傭兵だ。自分たちとは違う世界で生きてきた少女だ。恐らく、自身自身が受けている様な尋問の類は幾度も経験しているのだろう。

観念したとは思えない。恐らく、自分たちの裏を付く言葉を組み立てているはずだ。

『……………教えたかったからさ』

「……………!？」

想像の範囲外の答えが飛んできて、やちよとみたまは目を見開く。

『ピュエラ・マギ・ホーリー・クルセイダーズ……………聞いたことはあるよな、部長さんよ』

「……………」

聞いたことのある無しどころか、その名前は……………恐らく日本中の魔法少女で知らない

ものはいないだろう。

フェリシアはどこか楽しそうな口調で続けた。

「伝説の魔法少女・バمامィ。類まれな才能を持ち、正義の味方を体現した唯一無二の存在……そいつに率いられたチーム、ピユエラ・マギ・ホーリー・クルセイダーズは全盛期に40人も魔法少女を率いていたと言われている……」

やちよはフェリシアの言葉を真剣に耳に入れながら、視線を下に向けた。

そこには先程、フェリシアがたった一人で潰したと言う、魔法少女のチーム名が列挙されていた。

何れも魔導管理局・事務局の設立が諸々の理由で、未定となっている地区であり、縄張りを張る魔法少女達が代わりに自衛を行っていた。

「日本中の魔法少女がバمامィに憧れた。バمامィになろうとした。だけど……憧れが齎すのは『希望』だけじゃない。時に残酷な結末を下すことだつてある……」

フェリシアの言葉はどこか冷淡に聞こえた。

唯一無二の「正義の味方」に率いられた事で、盤石は永久的と思われていたピユエラ・マギ・ホーリー・クルセイダーズだったが、突如呆気ない瓦解を迎えることになる。

バمامィが解散宣言をしたのだ。

当時、チームに所属したばかりの新米の魔法少女達が、バمامィの名を使って、他所の

地域の縄張りを荒らしたり、一般人を恫喝し金銭を押収する事件が頻発していた。マミを始めとする古参メンバーと、新米達の間で度々一色即発寸前の衝突が繰り返されていたという。

よつて解散の理由は、新人達を抑えきれなかったからだと思われた。

そして、バマミは失踪。

ピユエラ・マギ・ホーリー・クルセイダーズの解散、そしてバマミの消息不明は日本中の魔法少女達に衝撃を与えたが、逆に危険な理想を抱かせる発端となった。

—— 『バマミの後継者は誰か』

「バマミの様に正義の味方を体現できる魔法少女は、もう日本にいないのか？」

世間の誰かが、その疑問を口にしたことが、始まりだった。

全国の魔法少女達が直ぐ様猛烈な息吹を蒸した。

自分こそが、自分たちのチームこそが、正義そのものであり、バマミの後継者に相応しいと熱狂した。

魔法少女達による、『正義の味方』アピールが各地で始まった。

しかし、フェリシアは—— 否、魔法少女の現実を知り尽くしていた彼女を含めた

『傭兵』達は、そんな少女たちの無邪気な茶番劇を冷えた目で眺めていたという。

「巴マミが正義の味方であれたのは、奴が確固たる『正義』の信念を持っていたからだ。……だが、他の連中にはそれが無かった。奴らは正義の味方になりたかったんじゃないやねえ。『貴方は正義の味方ですよ』って言ってくれるカバン持ちと、名声が欲しかっただけ。浅ましいもんさ」

そう話すフェリシアは彼女たちの事を心底侮蔑していた様子だった。

「半端もんが身の丈に合わない理想を抱いて突っ走ったらどうなるか……七海やちよ、オメーなら分かるよな？」

やちよは沈黙で応答した。みたまもちらりと見遣ると、彼女も渋面を浮かべてコクリとうなずいた。

分かっている。

いずれ、過酷な現実という壁に当たり、乗り越えられなければ——最悪、死ぬ。

『いわしてもらおうが』

やちよの無言を肯定と受け取ったのか、フェリシアの声色に愉悦が戻っていた。

『オレが日本中を旅して、魔法少女共を潰し続けたのは、あいつらに世の中の不条理をわからせたかったからさ』

「……………」

『安定した裕福な家に育つても、お優しい仲間にも恵まれても、オレみたいなクソガキに……』

フェリシアの声が弾んでくる。

『10分……いや、5分足らずで簡単に壊されちゃう！　それが魔法少女の現実だ!!  
よ———つく覚えときなっ!!』

猟奇混じりに哄笑を響かせるフェリシアに、やちよもみたまも何も言えなかった。

ただ、分かり得たのは、この少女が自分たちとは違う世界の人間であることは理解できた。

「……気は済んだかしら?」

一頻り笑い飛ばす様を見届けた後、やちよは静かにそう問いかけた。

フェリシアは、ふう、と溜息。

『ああ』

「単刀直入に聞くけど、貴女の雇い主は誰?」

『さあな』

フェリシアの表情を見つめる。変化なし。みたまにアイコンタクト。頷く。

「……本当に知らない様ね」

フェリシアは迷わず頷く。

【赤羽根】と名乗る魔法少女に連れていかれたのは、神浜消防署向かいに建つ、マンションの空き室だった。

そこが作戦拠点として用意された場所であり、赤羽根から手渡された端末で、彼女の『主』から直接依頼を受け取ったのだが——当然、顔は見せず、声も機械で加工されていた。

『ただ……あれは』

「……？」

フェリシアがクスリと微笑んだ。その表情をやちよは凝視する。

『若い奴じゃなかった』

表情に変化なし。みたまにアイコンタクト。嘘は無い。

『喋り方とか、発声のリズムとか、息遣いのタイミングが、完全にジジイのそれだ。年齢は……そうだな。60〜70って所かな？』

やちよの眉間に皺が寄った。

それで彼女に3億も払える人間となれば、名の有る実業家か、巨大暴力団の会長クラスの間人に絞られる。

あとは……動機か。

率直に自分に恨みがあるのか、或いは、自分の死が組織に何らかの利を齎すのか……  
「……貴女の協力者のジェイソンは？」

フェリシアはやれやれと言いたげな顔で首を振った。

『知ってるけど……教えるのはやめとく。ありやオレですら理解できねー正真正銘のバケモノだからなあ』

フェリシアの目はあからさまに泳いでいた。

それが「怯え」の仕草と捉えたやちよは、静かに一言。

「……忠告感謝するわ」

『おう、やめとけやめとけ。逆に言えば、こつちから手え出さなきや無害な奴なんだが……』

そう言つて手を振るフェリシアの額には、冷や汗がジワリと滲んでいた。

伝説の怪物に称される彼女すら震えさせる程のトラウマを、あのジェイソンは植え付けたのか。

それは、一般社会人のやちよの頭では、到底描けそうも無い地獄絵図に違いない。

『ま、オレが知ってるのはこれで以上だ。さあ、煮るなり焼くなり好きにしるよ』

「ええ、ではそうさせて貰うわ」

やちよは冷徹にフェリシアを見据えながら、一呼吸置くと――

「深月フェリシア。貴女を正式に治安維持部の一員として迎え入れます」

——力強く、はつきりと、そう言い切った。

☆

——  
???  
【SIDE・深月フェリシア】

「……はあ!？」

一瞬、フェリシアの思考が飛んだ。

「テメー何言ってるやがる。オレが何をやらかしたのか、分かってんだろ？」  
『ええ、十分に分かってる。その上で、貴女を雇用するのよ』



スピーカーからは至極冷静な声。

……いや、全然分かって無いだろう、コイツ。

あの環いろはといい、みかづき荘の連中は隠れ狂人の集まりか？

「どういうつもりだ」

『単純に、私が成そうとする最善に、貴女のような「裏」を知り尽くした人間が必要だと感じただけ。他の傭兵の方々ともコンタクトを取れるしね』

イカレてる、と素直に思った。

こいつは、神浜市の治安の為なら、自分の様な輩と手を組むのも躊躇わない、というのか。

「オメー、おもしれえな」

『十中八九皮肉でしょうけど、誉め言葉として受け取っておくわ。ありがとう』

そこで、スピーカーの音声が一旦止まる。

『……でも、それだけじゃないのよ』

暫し思案していたのだろうか——再びスピーカーから声。

『先の交通事故の時の、貴女の行動……私が感心したのはそこよ』

フェリシアは鼻で笑った。

「やちよ自身言っていた事じゃないか。あの交通事故は自分にはラッキーだったのだ。」

必死の人命救助は、お前を始めとする周りの連中の疑念を払拭させる為の手段でしか  
なかった、と。

「ハ、オレに『正義のココロ』があるって言いたいのか？」

『正義か悪かなんて単純な物差しで人を計ったりしないわ』

じゃあ、なんだっていうんだ。

フェリシアはスピーカーを睨んだ。

自分は最初から最期まで自分の味方だ。だから、自分の利益となる行動しかしない  
と、やちよは知っている筈なのに。

『貴女は、『自分が許せないと思う状況』に敢然と立ち向かう力が有る』

「許せない……？」

『打破する為の技能と知識も有る』

やちよの次の戯言次第では、馬鹿笑いしてやろうと考えていたフェリシアだったが――  
――呆氣に取られた。

『事故発生直後の貴女は、自分の利益を考えていなかった。あの子のお父さんを助けた  
いと思つたから、衝動的に飛び出した。違う？』

「何を馬鹿な……」

そんな筈は無い、と言いつ返したかったが、『あの子』と聞いて、後頭部が急に痒くなつ

た。

『事故の直前に、あの子を叱ったそうね、「お父さんに謝れ」って。……それは、どういう意味?』

「! それは……」

つい首を後ろに仰け反るフェリシア。多分、今の仕草はやちよに見られただろう。

『家族同士で傷つけあう様子を、親を失って哀しむ子供の姿を、二度と見たく無かったから、違う?』

「……………」

フェリシアの口がムツと噤まれる。

——忌々しい。

奴の言葉に乱される感情が、忌々しい。

反射的に皮肉を返せず……寧ろちつとも回らない口が、忌々しい。

だけど、確かに、認めざるを得なかった。

自分が、あの小僧に伝えた言葉は、全部——

「……………」

——嘘じゃない。

長きに渡る沈黙の後、フェリシアは、コクリと首を僅かに振った。

『私の手元に、光一君から手紙が届いている。貴女への感謝状よ』

「なに……？」

フェリシアは驚いたように目を見開く。

直後、頭頂部が暖もりを感じて、不意に天を仰いだ。

遙か高い位置にある天井のど真ん中に窓が見えた。意外だ、密室では無かったのか。

そこに映るのは燦々と輝く太陽。

真夏の日差しがスポットライトの様に、フェリシア一点に降り注がれていた。

『今、貴女の中で、人から素直に感謝を伝えられる事が、お金を貰う喜びよりも勝ったのなら……治安維持部で働くことは決して悪い話では無い筈』

フェリシアは呆れた顔で首を振った。

「マジかよ……。オレはオメーを騙して殺そうとした女だぞ。金の為に」

『貴女が再び反旗を翻して、私を殺せば……神浜の英雄なんて女は所詮、その程度でしか無かったということよ。だけど、光一君はどう思うかしら？』

「……」

フェリシアは、閉口した。

『あの子、信じてるのよ、貴女の事を』

「……」

表情を隠すように、フェリシアは俯いた。

『貴女がこれからも自分達を助けてくれる、良いおねーちゃんだって。だから私も、貴女があの子を裏切るような真似は決してしないと、信じる』

やちよは力強く言い切った。

「……………フツ」

——時間にして、5分間。長きに渡る沈黙の末、フェリシアの口元がニタリと吊り上がる。

「……全く、やってくれるぜ。要はそいつの感謝状をオレを縛る鎖にしようって腹だろ  
う？」

『ええ。その通り』

やちよ、即答。フェリシアが心底愉快そうに哄笑を響かせた。

「ハハハッ！ おもしれえ!! どこまでオレを扱いきれるか……」

——  
試してみろよ。

ゾツとする様な笑みを携えて、フェリシアはそう言い放った。



「匿名希望」がパチンと指を鳴らすと、「レイケツ」の瞳に光が宿る。

「お目覚めの気分はどう?」

「良く眠れた……」

言いながらも「レイケツ」はどこか不快そうに、「匿名希望」を睨みつける。

「どうして七海やちよを殺さなかった?」

「みかづき荘の破壊は貴女の望みでは無かった筈」

「……」

「安心しなさい。必ず機会は与えるから」

「匿名希望」はそこで「レイケツ」から目を離し、後ろを振り向いた。

自分達にピツタリとくつつく黒装束達の一人に向けて、パチンと指を鳴らす。

——「ヒガミ」の両目に翡翠が瞬く。

「今日のラッキーカラーは、『オレンジ』だったわね?」

「……」

「ヒガミ」は何も言わず——口元をニタリと歪ませた。





——  
おう、ジユンか。

——  
驚けよ。治安維持部に再入職したんだ。やらかした事は全部免罪だつてさ。

——  
……ああ。予定とは違ったが、狙い通りだ。

——  
これで、オレの目的に一歩、近づけた。



# F I L E # 6 6 嵐の後に転がり込んだもの

かくして――

傭兵 “アステリオス” こと、深月フェリシアとの戦いは、一応の決着を得た。

しかし……

明確な犯罪行為の事実と殺人疑惑のある彼女を公務員として迎え入れる事は容易ではなく……

やちよは、暫し “火消し” に奔走する事になった……

―― 2 0 1 8 / 0 7 / 1 1 (土)

## —— 神浜市役所・職員会議室

既にそこには多数の報道陣が跋扈し、うだるような熱気に包まれていた。

彼らの興奮は最高潮だ。何せ、『神浜の英雄の謝罪会見』という特大のネタが目の前で繰り広げられるのだからだ。

さて、何故謝罪会見が開かれることになったのか、簡潔に記述させていただく。

フェリシアを正職に迎え入れたいと考えるやちよは、同居する家族には、彼女が先に起こした事件について『沈黙』を要請した。

しかし、ニトログリセリンを抱えたドローンの爆発音、ピーターの撃ったライフルの銃声が周辺住宅にまで及んでしまい、警察及び、治安維持部への通報が相次いだ。

ここで、フェリシアを犯人として挙げれば全ては一件落着だろう。

しかし、やちよは彼女を“獣のまま”扱いたかった。

そうしなければいけない理由も、必要も有った。

違法なのは分かっている。多くの人に迷惑を掛けたのも分かっている。だが、神浜市の将来を考えれば——

やちよは断腸の思いで、会見の場へと躍り出た。その後ろに、八雲みたまと、副部長の都ひなのが付いてくる。

機関銃の如く連写されるフラッシュを全身に浴びながら、やちよ達は報道陣の方へと向き直った。

やちよの表情は固く、真剣そのものだ。

ひなのがチラリと、一瞬だけ首を横に反らしてやちよを覗る。

彼女と同じく引き締めた表情ではあるが、『本当に大丈夫か?』と言いたげな不信感が滲み出ていた。

「皆さま、本日はお忙しい中、また突然のご案内にもかかわらずお集まりいただき誠にありがとうございます。これより治安維持部長七海やちよおよび副部長都ひなの、調整課長八雲みたまの謝罪会見を開始させていただきます。よろしくお願いいたします」

司会の白木が報道陣に向けて深々と頭を下げた。

彼女の言葉を聞きながら、やちよは控室で二人と口裏を合わせたことを思い返していた。

“フェリシアを犯人にし立てない”筋書はこうだ。

・フェリシアが事件を起こす前日、神浜町内で魔女が出現した。

(これは事実であり、出現地点からの緊急避難要請を行った後、調整員による魔女の活動領域に結界を発動した)

・やちよは魔女を退治。その後、みたまも退治完了の報告を受けて、結界を解除した。  
・しかし翌日（フェリシアが事件を起こした日）。

みかづき荘の庭園で、使い魔の群れが10匹程度、集まって戯れている姿を発見。  
やちよは、たまたま私事でみかづき荘に訪れていたひなのと共に対応。

・やちよは直ぐ様、周辺住宅に避難要請を出すべきであり、調整員の結界も必要と言った。

しかし、ひなのが反論。

・使い魔が一か所に集まっている今こそ、穩便に済ませるチャンスである。

時間を掛ければ、使い魔が戯れに飽きて四方八方に散ってしまい、一匹ずつ見つめるのは困難。

市民の被害が出る可能性も有る。

・やちよも余計な混乱は起こすべきではないと考え、ひなのの案を了承。

彼女の魔法で作成した、即席の化学爆発物を投下し、使い魔達を殲滅した。

「まず、今日このような会見の場所を、この機会を与えていただき、皆さまにお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。この度は、私達の不手際で、市民の皆様にも、大変不快な思いをさせてしまったことをおわびさせていただきます。本当に申し訳あり

ませんでした」

やちよが謝罪を述べた後、三人はそろって深々と頭を下げた。

その姿を狙い済ましたかのように、報道陣はフラッシュを集中砲火。

「……それではこれより質疑応答に入らせていただきます」

暫くして、フラッシュが鳴り止み、三人が着席すると、白木が慥然とした表情でそう言い放った。

そして、報道陣には、一社一問ずつ、初めに会社名と名前を伝えた後に質問して欲しい、と要請。

「それではまず初めの方、ご質問お願いいたします」

言い終えた瞬間に報道陣の中で我さきに手を挙げたのが、白髪混じりの茶髪をオールバックにした、如何にも堅物を柄に書いたような初老の男性だった。

「すみません。テレビ日東の佐賀原です。よろしくお願い致します。自分にも大学生と高校生の娘が居ますので、日々多忙を極める御二方の心労の程は御察し致します。ですが、今回爆発物を使用した件に関しましては、聊か安全及び周辺住民の生活への配慮が不足していたのでは無いかと伝わっておりますけれども、詳しいご説明を教えてくださいませんか」

「はい。副部長と話し合った結果、彼女の案の方が合理的であり、穏便に状況をクリアで



きると判断致しました。ですが、一度の投下では殲滅に至らず、複数回に分けて爆発物を投下せざるを得ませんでした」

そう説明するやちよの瞳を、佐賀原記者は何うように見据えている。

「その際、爆音が近隣に及ぼす影響を考慮に入れなかったのでしょうか？」

そこでひなの口を挟む。

「はい。今回使用した爆発物に關しましては、本来、使用した物質の量的に、爆発の規模と音声は最小限に留まる筈でした。しかし、白昼結界外、加えて住宅街での使い魔の発見というレアケースに、私自身困惑してしまった事も在り、焦って量を誤ってしまいました。爆発の規模と音声は予想以上に凄まじく、七海部長は一度目の爆発の時点で、近隣への影響を考えて、これ以上の使用は制止するよう仰いました。使魔を逃がしてしまつた場合のリスクの方が大きいと私が意見し、急かしました。結果的に、使魔はその場で殲滅できましたが、皆様に多大なご迷惑をお掛けしてしまいました。今回このような大きな騒動にしまつたのは、私の焦りによる軽率な判断から始まつています。本当に申し訳ありません」

深々と頭を下げるひなの。

佐賀原は少し憂いを帯びた瞳で彼女を見た。

「今回、その責任の所在に關しまして、夕霧市長が会見の場に姿を見せなかったのには、

何か事情が？」

やちよが返答する。

「はい。夕霧市長ご自身は、総責任者としての立場上、今回の会見にて、自分が直接市民の皆様にお詫び申し上げるべきだと仰っておりましたが、私が制止しました。全ての発端は、私が先日の魔女討伐時に使い魔を見逃し、八雲調整課長に結界を解くよう指示を下してしまつたが事が全ての始まりです。そして爆発物使用の件に関しましても、都副部長はあのように申し上げましたが、そうするべきと判断を下したのは私です。私の注意力不足が副部長を、皆様を巻き込んでしまいました。今回の騒動の全責任、全ての責任は私にあります。私のせいです。本当に申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げるやちよ。

神浜を代表する英雄達とはいえ、まだ10代の少女である。

本来なら自分の娘達と同じく、青春を謳歌して良い年齢なのに、社会的責任を負わせて、警察染みた命がけの仕事を押し付け、不手際があれば世間に頭を下げさせる社会は、果たして正しいのだろうか？

佐賀原は複雑な思いではあったが、会社の指示である以上、この特ダネを拾わない訳にはいかなかった。沈痛な思いで少女達を見つめていると、隣で別の記者が手を挙げた。

「すみません、共合通信の春日井です。よろしくお願いいたします——」

☆

二時間後——

——神浜市役所・職員休憩室

「全く……嫌な役をさせてくれたな」

「ごめんなさい、ひなの」

謝罪会見を無事終わり、休憩室に戻った矢先だった。

ひなのから開口一番、突き刺さるような言葉が飛んできて、やちよは深々と頭を下げた。

「冗談だ。失った信頼なんざ一週間もありやすぐに取り戻せる。だけど、人や物はそう

「じゃないだろう?」

「ええ」

「天そらさんにはアタシも世話になったし、みかづき荘と皆が無事で、本当に良かったと思ってるよ」

ひなのがフツと笑った。

その笑みに救われたような気がして、やちよもふふ、と微笑を返す。

革製のソファに向かい合うように座った二人の前に、みたまが「どうぞ」と、コーヒールを差し出した。煎れたての香ばしい臭いが、二人の気持ちを落ち着かせる。

「七海部長。都副部長。お疲れ様でした」

「ありがとう、みたま」

笑顔を向けるやちよとは対照的に、ひなのは真剣な眼差しを送った。

「……みたまさん、あの金髪の小僧は?」

「ミラーズのB-29にいるわ。落ち着いて寛いでる」

「そうか……アンタの方は、大丈夫なのか?」

「それ、さからにも散々言われたけどお?」

何せ危なかったのだ。やちよの反撃があと一歩遅れていれば、みたまは間違いなく死んでいた。

精神的に不安定にならない方がおかしい——ひなのは眉を下げて心配そうな顔で見つめてくるが、みたまに「良い笑顔」を返された。

これ以上の心配は余計か。ひなのは、慌てて「すまん」と頭を下げた。

「全く、親と子で似る物ね」

その心配性が——と、やちよが言い放つと、ひなのがムツと睨む。

「それ、お前に一番言われたく無いぞ、やちよ。お前だつて年々みたまさんに似てきてるつて言われてるぞ。我慢強いところが特にな」

「私は17歳よ」

「当然でしょう。みたまは私の人生と魔法少女の師だもの。影響を受けているのは違くないわ」

「みたま、17歳☆」

必死で年齢アピールするみたまを無視して二人は笑い合う。

「……そんなことより、本当に大丈夫なのか？ あの金髪の小僧は？」

だが、ひなののその一言で、和やかな空気が一気に張り詰めた。

やちよのマリンブルーの瞳は揺らぐ事無く、ひなのをじつと見据える。

「ええ」

「簡単に頷くけどなっ」

やちよにも余計と取られるかもしれないが、心配でならないのだ。

何せ、深月フェリシアは、あの常盤ななかですら、手を焼いて追い出すしか無かった程の人物。

それは、問題児というより、“傭兵”としての底知れぬ残忍性を見たからに他ならぬ。

一番荒事に慣れている筈の、チーム・アメノハバキリを愕然とさせる程の、狂気を――

「アイツはガチの犯罪者でお前らを殺そうとしたんだぞっ！ ななか達にすら何を仕出かしたのか分からんっ！ そんな奴を入職させるなんて、リスクが高すぎるだろ！ ピンが外れた手榴弾抱え込んでスーパー行くようなもんだぞ！ 今回はアタシがなんとか隠してやったからいいけど、もし世間に明るみに出たら……！」

「大丈夫よ。彼女の入職は、市長も警察本部長も了承済みだから」

「っ……！」

ひなの、今のやちよの一言で目が点。絶句。

一分後、頭の中で驚愕と混乱と恐怖と様々な感情がグチャグチャに掻き混ぜられて、全身がワナワナと震え始めた。

「え？ おまつ……お前、ええ……？」

ひなのは顔を蒼褪めて頭を抱えた。

「常々思っていた事だけど、私達にも『マル暴』の様に、裏と直接繋がりが傭兵の方々と情報共有できるチームは必要なのよ」

マル暴は、法的に品行方正と認められた警察官がヤクザの振りして潜入捜査するんじゃないかったのか？

経験済みの輩を登用するなんて、それどこのB級映画の世界？

しかも、それが明るみに出たら、神浜の秩序は一気に崩壊するんですが？

「む、まあ、それも確かにアタシも思うが……ななかのチームじゃ宛てにならないか？」

ツツコミの数々を喉元に押し留めて、どうにか平静を装いつつ、ひなのは頭を上げて問いかけた。

やちよは首を振る。

「深月フェリシアと戦って分かったことだけど、私やひなの、ななかやももこが周囲に『強い』と称賛されても、それはあくまで『一般』の範囲内よ。戦い方や戦法には限界がある。でも彼女達は違う……」

思い出しながら、やちよは自然と下唇を噛んでいた。それを見たひなのは意を汲むように、呟く。

「限界が無い。だから、学べることも多いってことか……」

「そう。深月フェリシアを通じて彼女達と懇意になり、その中で『稼メカニックぎ頭』と呼ばれる方々をこちら側に招くことができれば、御の字よ」

「お前があのお金髪の小僧を使いこなせる確信があればな……。でもまあ、確かにそうだ。傭兵達の生きたノウハウが手に入れば、より高度な犯罪対策が実現可能かもしれん……」

「やちよ達はその立場上、警察から訓練や刑事法の勉強を受けることが義務化されている。」

「神戸市の特徴を考えれば、やちよやひなの様なベテラン且つ役職者は、特殊急襲部隊レベルの訓練を受けるのが望ましいのだが、魔法少女への過度な情報公開を危惧した者からの反発も有り、実現には至ってない。」

「それだけじゃないわ。今後を考えれば、私達はテロ対策も視野に入れて特訓していかなければならない。この国の自衛隊には、魔法少女が一人もいない。万が一の時、一般の人々を守るのには、私達だけよ」

その『万が一』だ。

大東区の沿岸部に、流れ着いた移民の少女が、テロ組織に所属する魔法少女であったなら？

——暗にそう告げるやちよの言い分は、ひなのに抗い難い現実を突き付ける。聞



けば聞く程、自分がぬるま湯に浸かっているのだと思ひ知らされる。

……でも、それは――

「とんだ夢物語だな……」

全くこの部長は、見た目によらず熱が入りやすい。

ひなのは溜息混じりに、そうぼやくとやちよは笑顔で、

「将来の財産は、いつだつて夢物語から始まるのよ」

言葉の槍を突き刺してきたので、ひなのは何も言えずに、更に深いため息をこぼすのだった。

☆

「お前少し前は、部長を辞めて神浜の癌を潰すとか抜かして無かつたか？」

暫くの談笑の後、不意にひなのが尋ねると、やちよはコクリと頷いた。

「ええ、言ったわ。けど、それは今じゃないとも言った」

結局、いつになるかは自分でも分からないということか。

心配させやがって——と、ひなのはふう、と一息付くと、微笑んだ。

「ちよつとでも生き延びようって気持ちが出ただけでも有難いよ」

「決意が変わった訳じゃないけど」

「わかつてるって」

しかし、だ。

噂の新参者・〃環 いろは〃がこの頑固者に、何らかの影響を与えたのには違いない。

事実、ひなのが危惧していた由比鶴乃とも和解を果たし、深月フェリシアも引き入れ

ようとしている。

仲間を作る事を前向きに捉える様になっただけでも、十分な進歩であり、確実な変化

だ。

「お前が二木に行った時も思ったけど、やっぱり外は良いよな。刺激がある」

「……」

ひなのは快活な笑みを浮かべて断言するが、やちよの反応は意外だった。

〃外〃と聞いた途端、おもむろに顔を俯かせ、目を泳がせている。

「……どうした？」

「ねえ、ひなの、ちょっと良い？」

問いかけるやちよの顔には、あからさまに不安が浮かんでいた。

ひなのの経験上、この表情を見せることは滅多に無い。一年に一度有るか無いかの稀だ。

「……ああ」

だからか、心拍数が跳ね上がるのを感じながら、ひなのは真剣に耳を傾ける。

「もし、この神浜市の社会全体が一つの物語と仮定して、貴女が『主人公』だったとしましょう」

「唐突だな」

「なんだよ『教授』の真似事か？——と、悪態を付きながらも、翡翠の瞳は据わっていた。

「当然、社会の悪を駆逐し、一般市民の平和を守る為に戦おうとする」  
迷わずコクリと頷くひなの。

「違うない」

「時には悪そのものさえ背負い、外に漏れないように自分の心に封じ込めてきた」

ひなののはむつと眉間に皺を寄せる。

「それが命を護ることに繋がれば、な」

「……そこまで心身を捧げたのに……気が付けば、別の誰かが新しい『主人公』になつていて、自分は『脇役』に降ろされていた……。貴女はその現実に、耐えきれぬ？」

「そうだなあ……」

ひなのは顎に手を寄せて考えた。

やちよは心の中で安堵する。

普通に考えれば、失笑されるレベルの突拍子の無い話でも、真剣に聞いて、熟考してくれるのが、ひなのの好きな所だ。

「まあ、仕方ない、って考えるよ」

「仕方ない？」

やちよは少しだけ目を細めた。睨んだつもりは無かったが、ひなのは少し息を飲んだ。

咳払いして、話を続ける。

「まあ、ものすごく単純に話すのだ。技術が日々進歩してるように、人の世も常に進歩してるって話さ。人間全体がいつまでもアインシュタイン一人に縋りついてる訳じゃないだろう？ 天才ってのは世界中で年中生まれてるもんだ」

天才は一握りと言われている。

だが、ひなのが見たところ、一年に一度くらいは、世界の国々で必ず一握りはそれら

が誕生している。

つまり、毎年かなりの人数の天才が生まれている、ということだ。

やちよの言う「主人公」というのが、世間から注目を集め、人々を牽引していく存在と仮定した場合——それもまた同様だと考えた。

「例えばアタシがノーベル化学賞を受賞して、世間から天才化学者と持て囃されたとしてもだ。翌年には、別の誰かが、アタシよりもでかい賞を受賞して称賛を受けている。アタシはとつくに過去の偉人として見向きもされない……。そういうのは正直、悔しいとは思うけど、諦めが付くと思う。『ああ、もうみんなは新しいものを求めているんだな』ってさ」

やはり、ひなのの人格は大きい。

無骨で一点集中しがちな自分より、よっぽど全体を見ている。

「でも……新しい主役は、かつて自分自身が受けた苦痛も背負うのだとしたら……？」  
「キツイ言い方になるが、それでも世間が求めている以上、背負ってもらわない訳にはいかないだろ」

「だけど」

仮定の話、と自分で言っておきながら、やちよは妙に感情的だ。

テーブルに身を乗り出そうとする彼女を、ひなのは掌で制止する。

「やちよ。人間は精神と根性で我慢して乗り越えようとする動物だって思ってるのお前ぐらいなもんだぞ」

「……」

きっぱり言われるたやちよは、黙って座り込む。

「現実的に考えてみる。人を助けられるのは人しかないんだ。ここもすごく単純に話すと、過去の偉人は経験値があるんだから、次の世代が自分と同じ状況に嵌った時、どうすれば気楽でやり過ごせるか、なんて答えはとづくに出してる筈だろう」

確かに、それもそうだ……やちよは小さく頷く。

「それをアドバイスをしてやりやいい。話し相手になってやるだけでもいい。それでも辛そうなら傍で支えてやればいい」

「……」

やちよは承服致しかねる表情で俯いたので、突き付けるようにひなのは言った。

「これはアタシの人間観だが、誰かを傷つけたくないから自分が前に出て傷つこうって考える奴は馬鹿だ。人を見てないし、舐めてる。そんな奴に人を支える資格は無い」

「……っ」

俯きながらもやちよの目は見開いた。

「やちよ、もしお前の気になってる誰かが、お前の苦痛を背負う運命に有るとか思ってる

「なんだったら、そいつにそうしてやりやいいだけだろう。人を助ける方法なんて案外単純なんだ。難しく考えんな」

「そうね……」

「ようやくやちよの口元に微笑が浮かんだので、ひなのはふーつと一息。」

「……ところで、新しい三人にはどんな研修をさせる気なんだ」

「お互いの得意分野を伸ばしてもらおうわ。フェリシアは私の下で。いろはと鶴乃はやちよはそこでフフツと笑う。ひなのは怪訝な表情で首を傾げた。」

「何をさせるつもりだ？」

「ちよつと面白い話が転がり込んできたの。二人にとって良い経験になると思う」

☆

——前日・神戸市役所。 19:00。

きつかけは、突然かかってきた一本の電話からだった。

『ご無沙汰しております。七海部長』

透明感の有る声色の中に強い意志を感じて、やちよは目を細めた。

「ななかね。どうしたの？」

『お仕事中に大変失礼とは存じますが、先日の方非礼を謝りたいと思ひまして……』

「面談の時ね」

確かに、あの態度と言動は慇懃無礼そのものだ。瞳からは凄まじい迫力が伺えたが……。

『察して頂けて感謝致します。あの時は立場を弁えぬ無礼な発言の数々、謹んでお詫び申し上げます。誠に申し訳ありませんでした』

恐らく電話の向こうで深々とお辞儀をしている彼女に、やちよは冷徹な一言。

「そう思つてた割には、結構本気に聞こえたけど？」

『見破られましたか。正直に申し上げますと、中々に新鮮で、清々しい気分でした』

「でしようね」

やちよはフツツと微笑む。電話の向こうの彼女も同じ表情が浮かべているだろう。

「……貴女が私にあんな態度を取り、そして深月フェリシアにあのような処遇を施したこと……絶対、何か有ると見ている。一体、何が目的かしら？」



『相変わらず単刀直入ですね。残念ですが、私の口からはお答えいたしかねます。詳しい話は、彼女に……』

「彼女……？」

やちよは怪訝な顔を浮かべた。

そして、一分後——通話口の声が、入れ替わる。

『初めまして。七海部長』

女性の——だが、尊大な威厳を放つ覇気の如き迫力のある——低い声が、聞こえてきた。

瞬間、やちよの全身が凍り付く。

口の中に、ナイフの切っ先を真っ直ぐ突っ込まれたような驚愕と、恐怖の念が同時に絶大なプレッシャーとなって襲いかかってくる感覚。

「まさか、貴女は……」

自然と、自分の声が震えていた事にやちよは驚きを隠せなかった。

その反応を察知したのか、電話の向こう側に立つ尊大な声の女性は緩やかに嗤う。  
『察してくれて恐悦至極。私は株式会社〈蒼海幫〉グループ代表取締役会長。『竜誕館』宗  
師——』

——王 海龍

囁かれたのは、真の女帝。

蒼海幫の頂点——武術師範衆『五強聖』のリーダー。

その気高さと、23年という経験年数に相応しい圧倒的实力から、同じ土俵で競う事は愚か、出会えた魔法少女すら縁にいないとさえ噂される——伝説の龍王の名。

神浜の英雄は、緊張感に下腹部が焼け爛れるような苦痛に苛まれながらも、見えない龍の尾に食らいつく虎の様に——獐猛を携えた瞳をじつと睨み据えた。



F I L E # 6 7 修羅同舟

それは、常盤ななが深月フェリシアに解雇を言い渡した日まで遡る。

明京町・大東区・チャイナタウン

横浜中華街を彷彿とさせる繁華街には、年中観光客の往来で賑わっていた。

大東区は神浜市の中でも、屈指の治安の悪さで有名だ。

常盤なながチームリーダーになってからは、徐々に回復傾向にはあるものの、一部の区間では、海外のカルテルと思しき傭兵達による麻薬密売が後を絶たず、子供達がカモとされている。

しかし、このチャイナタウンに関しては、創立以来、住民の誰一人として、生活の不安を抱えている者は存在しなかった。

それは区域の管理が万全に行き届いているからに他ならない。

#### ——竜誕館

チャイナタウンに存在する、地域互助組織・株式会社〈蒼海幫〉グループの総本山。

15ヘクタールもの広大な土地を要した、巨大な武館（道場）施設である。

庭園内には、12の修練場が設けられており、精鋭部隊〈墮龍〉を始め、多くの民間人が、組織独自開発の中国拳法『蒼碧拳』の鍛錬に日々励んでいる。

勿論、内部の概要に関しては道場生全員に秘匿義務が課されている為、具体的にどんな修行が行われているのか、外に漏れたことは無い。また、特殊な結界を張っているのか、キュウベえの侵入さえ、一步も許した事は無かった。

広大な土地の中で一際大衆の目を引くのが、敷地の奥に君臨する建造物だろう。

凡百の魔法少女の全力では傷一つかぬと謂われている鋼鉄製の重厚な扉に囲まれたその御殿は、堅牢な門をくぐり抜けると、紫禁城の如き荘厳さで、見る者を悉く魅了した。

そこは、蒼海幫の師範集団にして、組織の取締役会〈五強聖〉が居住する場所だ。組織の運営方針について日々熱い議論が交わされている。

一般の道場生は愚か、墮龍の戦士達さえ、五強聖に認められた実力者、才覚者で無ければ足を踏み入れることすら赦されない聖域中の聖域であった。

——その最上階にある会長室。

蒼海幫を支援する株主達から送られた希少価値の有る民芸品や、若かりし頃の強聖達が「素手」で狩ったと謂われている巨獣達の剥製によつて彩られた室内には、三人の女性が生が居た。

まず、豪著なデスクと椅子に腰かけているのは、蒼海幫グループの代表取締役会長にして、竜誕館の宗師（武館の首席師範）・王海龍（ワンハイロン）だ。

年齢は34。魔法少女の経験年数は23年と、組織の中では随一の実力者であり、神浜市に現存する魔法少女の中では『最高齢』である。

海底の様に深い藍のロングヘアに、常に不敵な微笑みを絶やさない表情が外見的特徴であり、大きく開かれた瞳には森羅万象・全てが陰と陽による成立を意味する『太

陰太極図」が爛々と浮かんでいる。

「『アレ』の正体を知った直後に、刺客に回すとは君も随分怖い真似をするね」

そう言つて蒼き龍は、目先に立つ赤い花の如き可憐な少女をじつと見上げた。

穏やかに笑う海龍だが、全身から滲み出る覇気は凄まじく、室内は筆舌に尽くし難い緊張感に包まれていた。

「……王宗師に彼女の実力をお披露目するには、『アレ』は申し分無い相手かと。それに我々としても、七海部長には英雄としての威厳を死守して頂かなければなりませんので」

彼女の眼には、太陰太極図に封じ込められた自分がくつきりと映し出されている――

明京町役場の治安維持部隊『チーム・アメノハバキリ』のリーダー・常盤ななかは、一瞬だけ目を逸らすも、すぐに相手と同じく緩やかな笑みを浮かべ、そう言葉を返した。

「……危険な女ザンスね。末恐ろしい……」

顔に屈託無い笑みを張り付ける好物二人から、一定の距離を置いて溜息混じりにそう呟いたのは、切れ長の目元が特徴の赤いドレスの女性。

『五強聖』の一人、「揚 秘輝」(ヤン||ミーフウイ)だ。

年齢は31。魔法少女経験年数は18年もの実力者であり、海龍の秘書を務めてい

る。

訛りの強い古風な口調に、独特な一人称と語尾。口元をスカーフで覆い隠しているのが特徴的だ。

神浜町と、二木市に似た女性がいたが他人の空似だろう。恐らく。たぶん。

彼女から見れば、常盤なかななど、只の箱入り娘に過ぎない筈であった。

無論、立場上一通りの武芸に励んでいるが、元々は華道家の令嬢であり、中国拳法など異世界に等しい。

言ってしまえば、つい先日『裏』を知ったばかりの小娘が、生意気にも自分達の領域にしやしやり出てきたのだ。

本来なら、自分ら五強聖が歯牙にかける筈も無い。

しかし、トップの王 海龍がこうして、ななかを目前まで招き寄せているのは、彼女を『才覚有り』と見抜いたからであった。

そして、秘輝自身も、堂々然たる姿勢で、海龍に面と向かって言葉を交わす少女に驚嘆した。

……恐らく心の内では、胃が灼ける程の畏怖を感じているのだろうか……秘輝が見る限り、ななかは一度たりとも、その感情を表面に顕したことは無い。

「しかし、王宗師もお人が悪いですね。あの何を仕出かすか分からぬ獣に300万も手



渡すとは」

「人を縛りつけるのに、最も有効なのは金だよ。『アステリオス』程の傭兵なら、猶更それを理解してくれてるだろうさ。なに、七海やちよに私と同じ土俵に上がってもらわぬ必要経費と考えれば、安いものさ」

随分涼しい顔で恐ろしいやりとりをする二人を交互に見渡しつつ、額の汗を拭う秘輝。

「しかしなれど……秘は心配でならぬザンス」

「ふふ……秘は本当にマイナス思考だな」

「宗師はプラス思考過ぎるザンス……。お二人は大丈夫と考えておるようですが、万が一暗殺に成功しちやったら、どうなさるおつもりザンス？」

不安と不審が交じり合った瞳を双方に向けて、秘輝は問いかけた。

問髪入れずに、海龍が答える。

「その時は、神浜の英雄など所詮その程度の女でしか無かった、という事実が残るだけさ……」

「……！」

瞳のマリンブルーの底に血に飢えた獰猛な鮫が潜んで見えた。

秘輝は（あつ、これはまずいパターンザンスっ！）と肩を強張らせる。

この人は、自分の目的の為に、組織の存亡を掛けた盛大な博打を撃とうとしているのだ。

「その折には常盤ななか。我々の力で君を新たな治安維持部長へと推し上げよう。我ら強聖と同等の権限を君に授けよう。龍の端くれ共を好きに扱うがいい」

ななかは、笑顔を絶やさぬまま、深々と頭を下げる。

「宗師の寛大なご配慮に感謝致します」

「いやいやいやいや！ ちよつと待つザンスっ！」

涼しい顔で話を進めてる二人の間に、慌てて割って入る秘輝。

「警察も人材に力を入れ始めてるザンスしっ！ アステリオスがうっかり事実を世間にバラしちゃったらどうするザンス!？」

そうなった場合、蒼海幫の社会的基盤が揺らぐどころか、神浜市の秩序すら崩壊しかねないのだ。

秘輝が焦るのも無理は無い。

「我々には『願い』の加護が付いている。クロに染まる可能性は微塵も無い」

うつ、と声を詰まらせる秘輝。

「……それはそうザンスがあ……万が一を考えましてザンスなあ……」

「秘ミの心配も分かるが……そもそも警察に尻尾を掴まれる程度のヘマを仕出かす者に、

組織の運営はできまいて」

自信満々に答える海龍に、うくくむ、と首を捻る秘輝。

「でも、アステリオスがあゝ……」

「大金を抱えた奴が真つ先に行くのは伊月さんちだ。とつくに手は打つてあるよ」

伊月ジュンの家は「表向きは」板金屋である。

「暴対法」が成立されてからというもの、表立った抗争や、暴力、恫喝による金銭回収が不可能となつた為、ヤクザ稼業は常にジリ貧だ。

よつて、対立組織に邪魔者が居た場合、専ら傭兵頼りになるのだが……こちらはこちらでリスクを抱え込まない、抱えるような案件は引き受けないのが鉄則である。

殺人の依頼は高額だが、雇われた組織が遺体処理や情報隠蔽を徹底してくれない限りは、易々と請け負おうとはしなかった。

上記の事情から、法治国家の日本では、裏道一本で生活している傭兵は極僅かであり、表舞台でクリーンな仕事に精を出している者が圧倒的に多いのだ。

それは傭兵界限で、「稼ぎ頭」の一人に数えられるジュンも例外では無く。

蒼海幫に「表の」仕事を斡旋してもらつてゐる立場上、不義を働けば、今後の生活が危うくなる為、海龍の頼みは快く引き受けていた。

「彼女も日本の生活は存外悪くないと言つていたしね」

無論、ジュンとしては、海龍からの依頼料とフェリシアの依頼料が一緒くたに手に入るので、大満足である。

「賭博は、勝つても負けてもこちらが得をしなければ意味がありませんから」

ななかが笑顔で言う。

肝が冷えたが、とりあえずは、どう転んでも組織は揺らがない確信が持てたので、秘輝はホツとした。

「……しかし、もう少しエンジンをかけたいな」

急に海龍は難しい顔になってそう呟いた。

「……と、仰いますと?」

ななかが何う様に目を細めて問いかけると、海龍は腕を組んでふむと考え込む。

「ああ、我々だけが躍起になっていてもしょうがないだろう。七海やちよ本人にも意気込んで貰わねばな……」

刹那——海龍の頭上で、電球がピカツと光った!

「あ、そーだつ!! 王ちゃんワンチャン良い事思いついちやった!!」

ペアツと目を輝かせて、ポンツ!と手を叩く海龍。

「……今の面白かった?」

「……………いえ」

「……キャラに合わんザンス」

「あ、ごめん……」

二人が無表情なので、海龍は少しシユンとなる。

「常盤ななか……少し、七海やちよの尻を引っぱたいてくれまいか？」

ななかは笑みをそのままに、はあ、と溜息。

「私の立場ではできかねますが……」

「なに、君の中に有るドス黒いものを、ほんのちよいと表に出して、ぶつけてやるだけでいい。簡単だろう？」

そう言つて、屈託ない笑顔を一ツコリと見せる海龍に、ななかはフツと小さく笑い返した。

☆

「は——ああ〜……」

会長室から退室して、数歩歩いた所で盛大な溜息。

強張っていた肩の力が一気に抜けて、ガツクリと項垂れた。

何で私がかこまでしなきゃならないんだ、とうっかり吐き捨てそうになる口をどうにか抑えつつ、ななかは、トボトボと通路を歩く。

招かれるのはこれで五度目になるが、あの蒼紅の龍二頭に挟まれてる状況は一向に慣れない。

(しかし……)

ななかは、鋭く虚空を見据えた。

本当に、「アレ」に頼って良かったのだろうか——今でも、その不安は拭い去れない。深月フェリシア。

正体は、傭兵『アステリオス』——百戦錬磨の実力者に位置する『メカニック稼ぎ頭』の一人で。

彼女が自分のチームに在籍中、その夥しい武勇伝の数々を、蒼海幫から教えられた。そして……

——ななか。おめえ、試されてんだよ。人の扱いに長けたおめえだが、『メカニック猛獣』

を扱えるかどうかだな。

……恩師の言葉。

——問題児？ アレがそんな枠に収まる程度の存在か。アレは……

……龍王の言葉。

——ななか。奴は、*「怪物」*ヨ。

……チームメイトの言葉。

(……………)

ななかは自然と握り拳を作り、掌に爪を喰い込ませた。

そうだ。確かにその通りだ。自分だって、フェリシアを見たじゃないか。正体を現した*「アステリオス」*をこの目で——

——なあ、教えてくれよ。

——オレは、テメーにどう見える……？

——敵なのか……？ 味方なのか……？

——あの日、月が綺麗な夜だった。

満月を背に猟奇的に嗤う彼女の姿は、さながら月光を浴びて正体を顕した狼男の様。

自分の答えに存分の期待を込めた、その瞳の圧力に、思わず肩がゾツと震えた。

答え方次第では、この場ですべて喰われるかもしれないという恐怖すら感じた。

「……………「混沌」」

ななかは、敵か味方かは、判別できなかつた。

ただ、漆黒の海と純白の海が、彼女の中で混ざり合っているのが見えた。

相反しあうそれらはミルクとコーヒーのように溶け合うことは無く……延々と縞模

様の渦を描いている。

「敵」と断ずれば、底知れぬ闇となつて自分を飲み込むだろうか。

「味方」と断ずれば、真っ白な光のように、純粹無垢な姿で自分に寄り添うだろうか。

奴は、自分の答え方次第でどちらにも、完璧に染まるだろう。

故に「混沌」——そう評した時、奴は爆笑した。腹を抱えて、路面に転げまわり、

酷く楽しそうに。

……何であんな反応を示したのか、自分には理解不能だった。

だから、奴を自分から突き放した。受け入れたくは無かつた。

——では、彼女だったら？

奴をどうにかできるのでは無いか。



七海やちよ——あの“結城安里”を捕らえた英雄ならば。

「……………」

僅かに渋くなつた顔を俯かせるななか。

あの時のフェリシアに対する感情的な逃避は、後に合理的判断による“利用”に切り替えた。

ななかは、フェリシアに依頼したのは、七海やちよの暗殺。

手段は問わない。可能な限り手を尽くして全力で当たつて欲しい。

但し、条件として民間人は巻き込まないように——

意味は有る。

“稼メカニックぎ頭”レベルの傭兵を、七海やちよが捕縛、或いは服従させることができれば。

流石の五強聖も認めざるを得ない。

日本にも、龍に匹敵する魔物が居ると。

英雄とは人々が神輿で担ぎ上げた者では無く、名に相応しき実力と才覚を兼ね揃えた者が立つ榮譽なのだ。

それは、日々勢力を拡大しつつある蒼海幫への牽制に繋がる筈だ。

(それに……)

龍人達の願いも叶えられる。

偶然にも、海龍とは利害が一致していた。故に、自分が作戦を伝えた時、彼女は協力を惜しまなかった。

ジューンは海龍の知る限り、最強の傭兵と聞いた。フェリシアの監視役に申し分無い。

これで、守備は万全——

「……………」

万全……の筈だ……。

ななかはキリキリと痛む下腹部を軽く撫でながら、未だ出口が見えぬ通路を歩いていた。

もしかしたら自分は取り返しのかげぬ事を仕出かしたのかもしれない。

「ななか」

肉体と思考が迷宮に迷い込んだところで、声を掛けられた。

咄嗟に顔を上げると、壁に背中を預けた少女が居た。

大胆にも両サイドにスリットが入り、両下肢の白い太腿を露出させた蒼いチャイナドレスの若き龍は、名を呼ぶや否やじっと睨みつけてくる。

「美雨<sup>メイユイ</sup>さん」

下腹部を撫でた手を隠すように背中に回して、普段と変わらぬ微笑を張り付けると、ななかはチームメイトでもある純<sup>チユン</sup>美雨<sup>メイユイ</sup>の下へ歩み寄った。

「聞いて夕。部長に昇進した暁には、腕によりを掛けて満漢全席を御馳走してやるヨ」  
五強聖達に比べると、まだ日本での生活は日が浅く、言葉も片言だ。

惘然とした表情で言う彼女に、ななかは会釈する。

「ありがとうございます」

「ふん、下剋上で成り上がるなんて、戦国時代じゃあるまい二」

「……ですが、残念ながら。魔法少女とは常に弱肉強食の世界です」

呆れた顔で吐き捨てる美雨に、笑顔のままそう返すななか。

「本心は、どう思うネ？」

美雨が単刀直入に尋ねると、ななかは笑顔の仮面を外した。

目を鋭くして、嘆息。

「嬉しくありませんよ。ちっとも」

「だろウネ。あの『アステリオス』が依頼を達成した場合、アナタは宗師の傀儡くぐわいヨ」

「地を這う蛇の群れが、新しい羽根を生やして、再び龍に返り咲くまでの……ですネ」

「そういうこと」

二人はお互いに言葉の意図を読み取り、頷き合った。

現状、蒼海幫の内部に法的に『クロ』と断定できる書類は無いが、神浜市の住民には古いイメージが強く根付いており、未だにマフィア組織と呼び畏れる者も多い。

事実、墮龍が「荒事対策専門チーム」として、裏でその手の輩に圧力を加えているので、間違いでは無かった。

海龍は将来を見据えて、組織のイメージを洗い流したかった。

ななかを部長に押し上げた後は、墮龍のメンバーを雇用させ、市内各地の治安維持チームに配属させるつもりだ。

「しかし……それは万が一でしょうね」

「アア、宗師達は元々かなり好戦的ヨ。単純に自分らに匹敵するライバルが欲しいだけネ」

蒼海幫は、五強聖が運営権を握ってからは、年々着実に勢力を拡大している。

魔導管理局が設立未定の区域に、系列の警備会社を設立して、所属している中国系魔法少女に市内警備と称した治安維持活動を行わせている。

他にも、武館を設立して、管理局員や地元で縄張りを張る魔法少女達に、蒼碧拳の武術指導を施したり、管理局に手練れの中国系魔法少女を入職させている。

中には局長に昇りつめたものさえいるらしい。

しかし、順風満帆に行き過ぎてる現状は、かえってマズイと海龍は考えていた。

助長した社員達が、一般市民や魔法少女達に傲慢な態度や、圧力を加えかねないと懸念したからだ。

武術家なら全て通る道だが、慢心した時にこそ、最も足元を掬われやすい。

その不安を植え付ける為には、外部に、自分達以上——そして、五強聖に匹敵する実力者が存在することを教える必要が有った。

更に、競争相手が得れば、彼女達の士気は高まり、組織は更に躍進する筈。

——そう思った時、海龍が、白羽を当てたのが七海やちよだった。

「治安維持部のメンバーの大半は、争うことも知らずにのびのびと育ってきた子供ばかりです」

「それは、私もなかなか同じヨ」

「ですが、七海やちよだけは違う。あの連続殺人鬼を完膚なきまで潰した英雄は、明らかに私達とは格が違うのでは……と王宗師も見ています。今回も、アステリオスを捕らえる事ができれば……」

「七海やちよの実力は証明でき、治安維持部はウチと対等になる可能性が見える。宗師達も、ライバルを得てお互いに万々歳でワケカ」

「そういうことです」

治安維持部の未来は、七海やちよ次第だ。

蒼海幣の牽制となるか、それとも飼い慣らされるか——

「しかし、宗師はケツを引ばたけ、と言たケド……アナタの立場じゃ無理ヨ」

「考えは有ります」

ななかはクスリと笑った。美雨はジトリと横目で睨む。

「近い日の面談で、面と向かて挑発するとても？」

「それも当然やりますが……不十分でしょう。他の魔法少女達に片っ端から声を掛けて、部長・副部長の不安を煽り危機感を抱かせます」

——蒼海幣の“力”を背景にね。

屈託無い笑みを浮かべてそう呟くななかに、うすら寒いものを感じながらも、美雨を後を付いていった。

☆

— 2018 / 07 / 10 (金) 19 : 35

— 神浜町・中央区

— 神浜市役所・治安維持部長室

「それが、全容ですか……」

〈ああ、そうだ〉

堂々と犯罪に関与した龍王の口は、恐れを知らない子供のようになやみだつた。

「あの黒い蠅も、貴女達が……」

〈誤解しないで欲しいが、アレは我らとは無関係だ。だが赤羽根……と言ったかな？

そいつが凄腕の傭兵を探していると耳にしてね……。アステリオスの噂を流したら、ま

んまと引つかかってくれた訳だ〉

どうやら、あのきなくさい連中は、*「裏」*にはてんでド素人らしいな——と海龍は愉

快そうだ。

「正気で仰っているのですか？ この件が明るみに出れば」

〈それは君だつて同じだろう？ アステリオスを正職員に迎え入れた君もね〉

やちよは目を細めた。彼女はどこまで掴んでいる？

〈お互いに、絶対外に漏れてはいけない秘密を知った。これで君と私の関係はイーブン

だ。これからは共に気を置かない仲を築こうじゃないか

イーブン、と聞いて思わず鼻で笑いそうになった。

経験も実力も組織力もあちらの方が遥かに上だ。生殺与奪の権限を握られているに等しい。

しかし――

「受けて立ちましょう」

臨むところだ。

神浜の中央に立つ蒼き英雄は、大東の蒼海を支配する蒼き龍王に堂々と宣言する。

「その粋を良しとする。では七海やちよ。アステリオスを見事迎え討った功績を称え――

君を我が竜誕館に招待したい」

祝杯だ――

最後に付け加えたその言葉を「挑戦状」と捉えたやちよは、迷わず首を縦に振る。

「ありがとうございます」

「日には来週、18日の土曜、工匠会祭第二幕と同じだ。時間は9:00。同伴者は何人でも構わない。友達でも同僚でも好きなだけ連れてくるといい。……以上だが、何か



質問はあるかな?」

「そうですね……………では、一つだけ」

「やちよは嘆息し、暫し間を置いた後——」

「王 海龍宗師……………貴女も、人の子ですね?」

絶対零度の瞳を虚空に向けて、そう問いかけた。

「……………なに?」

通話口の向こうの女は、初めて驚きを顕わにした。

「貴女程の者が、深月フェリシアを動かした真の黒幕にお気づきで無いとは……………」

それは、蠅共でも、なかなかと海龍でも無い——七海やちよしか知り得ぬ、誰か。

冷然とそう呟いた後、口の端を吊り上げて、嗤う。

直後、通話口の向こうから快笑一閃。

「……………面白い! 会える日を楽しみにしているよ、七海やちよ」

女の声色は、ようやく対等の相手を得た、という歓喜に打ち震えているように聞こえた。

——通話が切れる。

部長室のガラス窓が、一斉に揺れた。

氷の瞳を蒼く瞬せて、猟奇的な笑みを浮かべるやちよの全身から、凄まじい気迫が満ち溢れていた。

## ◎おまけ・今回のまとめ

- ・蒼海幣の魔法少女はみんな、中国武術学んでるよ。だから超強いよ！
  - ・蒼海幣のアジトは、とにかくドデカいよ！ 紫禁城みたいだね！
  - ・深月フェリシアを送り込んだのは  
常盤ななかと王ワン 海龍ハイロンの共謀だったよ！
  - ・マジウスの翼は利用されちゃったんだね！
  - ・事実が世間にバレたらやばたにえん！
  - ・ただ、さすがは龍王！ リスク管理は完璧だから全く問題無いよ！
  - ・ジュンちゃんはフェリシアの協力者じゃなくて、監視役だったよ！
- 海龍に頼まれてたんだって！

・フェリシアちゃんは、やっぱリイカレてるよ！

ななかちやん怖くなったから、部長に回したよ！

部長、過去に超やべー奴メツタメタのケチヨンケチヨンにしたから

今回もなんとかしてくれるハズ！ 絶対！！

・蒼海幣、日々勢力を伸ばしてるよ。

治安維持部の威信を保つ為にも、牽制しなきゃだよ！

でも凡人のななかちやんと美雨ちゃんには厳しいから、部長に頑張つて欲しいよ！

・蒼海幣も、調子に乗りすぎて慢心するのはマズイから、外にライバルが欲しいよ！

七海やちよが適任だよ！

・七海やちよがフェリシアに勝てば、蒼海幣の牽制になるかもしれないよ。

でも、負けたら、ななかちやん部長に祀り上げて、治安維持部乗っ取られるよ！

・部長に面と向かって挑発したり、鶴乃ちゃん蒼海幣の力をバックに誘ったのは

チームメンバーいなくても余裕ぶっこいてる部長に、危機感抱いて欲しかったからだ

よ！

・実はフェリシアちゃん動かしたのは、マジウスの翼でもななかでも蒼海幣でも無い

よ！

部長しか知らない誰かだよ！

FILE #68 集結する百火 — 工匠大祭 編 —

(※ 冒頭に注意文有り)

※まず初めに —

1. 今回の話は、

原作『マジアレコード — 魔法少女まどか☆マジカ外伝 —』の

メインストーリー第二部『集結の百禍編』にしか登場しておらず、まだ実装もされていない、あるキャラクターが登場します。

よって、今後原作にて実装された時に公開されるであろう「魔法少女ストーリー」やイベントストーリー等で描写される諸々の性格とは、著しい相違が発生すると思われるかもしれませんが、何卒、ご容赦頂ければ幸いです。

2. これまで原作の舞台とキャラクターをお借りして、作者の好き勝手に書いてきた本作ですが、

今話の一場面に於いて、ある二名のキャラクターが、著しい性格崩壊を起こしています。

よって、それぞれのファンの皆様に強い不快感を与えてしまうかもしれませんが、何

卒、『個性を表す描写の一つ』と、生暖かい目で見て頂きたく願います。

目次

アバン

Aパート

Bパート

晴れて環いろは、由比鶴乃、深月フェリシアの三名は、試験に合格した。

合格通知が渡された次の日から、晴れて治安維持部の一員……つまり公務員である。

しかし、臨時職員として務める鶴乃はともかく、正職員であるいろには学校がある。辞めなければならぬのか、と心配になるのは当然だし、自分と同一年ぐらいの正職員はどうしているのか、疑問だった。

これには、やちよ曰く、治安維持部に入職した場合、学業が途中であつても、出席が不可能であつても、全て“公欠”扱いとして免除されるそうだ。

よつて学校には最後まで在学扱いになるし、三月末にはちゃんと卒業証書も送られてくる。

ちなみに神浜市のみならず、地方の魔導管理局・魔導事務局の職員も、同様の処遇が受けられる。

無論、これは“魔法少女は基本的に短命”“10年も生き延びれば奇跡”と謂われる現状があるからこそ、国からの救済処置なのだが……

しかし、いろはは神浜大学附属学校中等部に転校してまだ日が浅い。

それなりに仲良くなった友人も増えたので、名残惜しい。

そこでやちよは、いろはの気持ちの整理がつくまでは、土日祝日を“研修日”として設けることを提案した。

そして――

## 明京町・工匠区——

研修日・初日。

いろはと鶴乃はこの町に訪れていた。あの人物が運転する、車に乗せられて。

「今日は送り迎えありがとうね」

「良いつてことよっ！」

助手席に座る鶴乃が礼を述べると、運転席に座るいかにも活気あふれる人物はグッとサムズアップ。

後部座席に座るいろはは、二人の会話をBGMに窓の外を眺めていた。

目に映るのは、看板が剥がれかかっており、建物のコンクリートが煤やけた色の小さな工場や、如何にも大手の企業が建てたと思われる、広大な駐車場が設けられた新規の巨大工場まで様々だ。

前者に至っては、自分が生まれる遙か前——人々が着物を着て生活してた頃から有ったんじゃないかと感じるものもある。

工匠区は、その名が示す通り、神浜市の中でも屈指の工業地区であり、世界で活躍す



る名工を輩出したことでも有名だ。特に金属製品の精度に関して、日本でも毎年ベスト3に入る程の強度を示し、前市長時代に有った不況の時代でも、工匠区の工業だけは仕事が続え、活気に溢れていた。

しかし、過去に問題が無かつた訳でも無く。

職人が多く集う故の宿命と言うべきか、地元の名士——特に工業組合や自治体の幹部——は、厳格で融通の利かない老人が多く、のさばり……『男尊女卑』という誤つた伝統が長く引き継がれていた。

無論、現在では、女性である、青佐が市長になつたこと。

魔法少女の世界公表以後、フェミニスト団体による女性尊重の声が大きくなつたこともあり、『誤つた伝統』は風化し、女性技術者や女性経営者も多く生まれている。

—— やちよさんは、この町で私達に何をさせるつもりなんだろう。

—— 今日はこちらで大きな祭りがあるから、その手伝いかな？

でも、やちよさんは、研修先の「講師」に任せてあるつて言つてたけど……。

「鶴の字。前はガラにもねえ小癪な真似してワルかつたな」

「いいよいいよ。わたしも怒鳴つちやつたの悪かつたなく、つて思つてたぐらいだしさ」  
「ハッ、ウチの女王はあんぐれえで堪えるタマじやねえやい。『人生の先輩からの教訓として有難く受け止めるべきでしょう』なんつてピンピンケロリしてらあッ！　ところ

で環タマの字ツッ！」

「あっはい！」

物思いに耽っている最中にいきなり声を掛けられて、肩がビクンと飛び跳ねる。

「おめえさん、さつきから悩んでるみてえだが……もしかして、ウチの女王様の事か？」  
バツクミラーに映る運転手の目が、何う様に細められていた。いろはは息を飲む。

「あ、それは、その……」

あからさまに泳ぐ瞳が運転手に肯定と教えていた。

以前、神戸市国立図書館にて、阿峽 慎に言われたことを、いろはは思い出していた。  
—— 迂闊に足を踏み入れない方が良い。あそこは常盤ななかのお膝元だからね。

—— 町内は『犯罪撲滅』の声で騒がしくつてね。君みたいに市外から訪れた魔法少女は警戒される恐れがある。最悪、魔法少女の監視を付けられるかもしれないな。

「まあ、明京町めいけいはヨソと違って色々あつからよお。あいつもちーつとぼつかしピリピリツンツンしちまうんだが……根っこは家族想いの優しい奴なんだよ。会ったら仲良くしてやってくれ」

「……」

自分の不安を察したのか、運転手はそう言ってくれたが——素直に「はい」と答えられなかった。

それは昨日、阿峽 慎から久しぶりに送られてきたLINEのメッセージが原因だ。内容は、二つ。

まず、「夢で良く聞く詩」について。

夏目かこも、小さい頃に父の書齋で読んだことがあるらしい。

しかし、今は内容を覚えておらず、その詩が記載された書物に関しても、日々一生懸命探しているのだが、見つからないそうさ。

二つ目は、ななかの説得。

これについても、やはりかこの口だけでは警戒を解くに至らなかった。

……当たり前である。何せ、いろはは、神浜市に足を運んで間もなく七海やちよに勝つてしまったのだから。

その後も、歩む先で旋風を巻き起こしてきた。才能も実績も無い只の魔法少女が、である。

寧ろ、受け入れる方がおかしい……。

「ところで、一つ質問してもいいですか？」

これ以上考えても仕方が無い。

常盤ななかのことは、一先ず置いておくとして、いろはは話題を切り替えた。

「なんでい？」

「おけらさんって、何歳なんですか……?」

——それは、いろはが運転手と会った時から、一番疑問に感じていた所だった。運転手の名は、『八坂おけら』と言う。

その人物の容姿を、セリフだけで想像するならば、如何にも恰幅の良いチャキチャキの江戸っ子オヤジを彷彿とするだろう——が、見た目は、全く逆。

真つ白なツインテールは陽を浴びて雪のように輝いてるし、顔付きも幼さを強く残した、小さな丸顔。来ている服は花柄が可愛らしい桃色のワンピース。

身長もいろはより頭一つは小さく、身体付きは未だに成長期を迎えていないんじゃないかと思えるぐらい幼い。胸やお尻もぺったんこのツルツルだ。逐一張り上げる声も、幼児の鳴き声みたくキンキンと甲高い。

……とまあ、このようにどう見ても可愛らしいお人形さんにしか見えない子供が、豪快な江戸っ子口調を巧みに多弁し、車まで運転しているのだ。

色々ごちゃごちゃ混ざり過ぎて、見てるだけで頭が混乱する。

「おつ、美玉から聞いてねーのかい。聞いて驚け見て笑え！ 八坂のおけらさんこう見えてもうアラサ」

「おけらさん、駐車場あそこじゃない？」

「おっといけねえ」

得意気に鼻を鳴らして答えようとした矢先に、鶴乃の言葉で我に返る。

咄嗟にハンドルを急旋回！ 車が180度急旋回!!

「あわわわわ!!」

豪快なドライビングテクニクに、いろはと鶴乃の上体は勢い良く横に倒れた。

おけらは二人に目もくれず、会場に一番近い場所で車を停めたのだった。

—— 工匠公民館前

ここでもカミハマンショーが行われるのだろうか。

祭りの会場となる駅前商店街の中心部に当たるそこには、イベントのメインステージ

である巨大な催事用テントが設置されていた。

その付近にある、屋外本部用の白テントの下で、祭りの準備に奔走する若い男衆にテ  
キパキと指示をこなす一人の女性が居た。

背中に大きな『お』の字が書かれた朱色の法被を纏い、指示の合間にキセルを啜えて  
煙を吹かしている。

「おう！ ひめなっ!!」

いろは、鶴乃を率いながら戦闘をあるくおけらが、その人物を見るなり、意気揚々と  
声を張り上げた。

女性は口元からキセルを外して、ニツと笑顔を向ける。

「おっつー☆ おかしらー!」

「待たせたなー!」

おけらが豪快に手を振ると、ひめなと呼ばれた女性も大きく手を振り返す。

「この人は……?」

笑顔が素敵な人だとは思った。

頭頂部で結った紫色のショートカットヘアに、くりくりと大きな丸い瞳が——マスカ  
ラとカラーコンタクトでまつげと瞳がキラキラと輝いてるので、余計に——特徴的だ。

顔立ちは神浜市の女性の例に漏れず、美人の類だろう。

キセルを吸っていたことから年齢はやちよより上なのは間違いないが、高校生と言われても信じてしまいそうだ。

「おう、こいつぁ……」

「祭りの主催団体・NPO法人『お組』代表の藍家ひめなでーす☆ とりましくよろー」  
ひめなは、横向きのピースサインを片目に当てて、ウイंक。

キラツ☆という擬音と共に、ひめなは緩い挨拶をいろはと鶴乃に送った。

「とりましく……え？」

（『とりあえずまあよろしく』って意味だよ、いろはちゃん）

（詳しいね、鶴乃ちゃん……）

二人は小声で話し合うと、揃ってひめなに向き合い、挨拶。

「はじめまして、今日は研修ということでお伺いさせて頂きました」

「はじめまして。一生懸命頑張りますのでよろしくお願いします」

二人がペコリと丁寧にお辞儀すると、ひめなは満足そうに笑う。

「うんうん、礼儀正しくて真面目そうな子が来てくれて、私チャン嬉しいよ」

「ありがとうございます。気になったんですけど……藍家さんは、おけらさんとはどう  
いう関係なんですか？」

いろはは頭を上げると、まず、気になった事を聞いてみた。

見た目は小学生・中身は江戸っ子オヤジな八坂おけらと、キャピキャピの今風ギャルな藍家ひめな。

中々、アンバランスな二人である。

「うん☆ 私ちゃんとお頭は昔っから超LLの超MDでねー!」

(超LLの超MDって?)

(超ラブラブの超マブダチ……つまり、仲良しって意味だよ)

「元々『お組』はワタシが死んだ爺ちゃんから引き継いだ町内会だったんだ。もつと地域の人の為につて、色んなボランティア活動に手え出したら規模がでつかくなりすぎちまっつてなあ」

成程、だからおけらは『おかしら』と呼ばれたのか。

バツが悪そうに頭を掻く彼女の言葉に、うんうんと笑顔で頷くひめな。

「お頭つて昔っから人望バリ高な癖に後先考えないからねー。結局、首回んなくなつてきて、調整課との両立とか超メンディーじゃね? 私ちゃんやったげよーかって冗談のつもりで言ったら間に受けちゃってさー」

「だって他にいなかったし」

しれつと言うおけらに、ひめなはジト目で睨む。

「おまマジFK(ふざけんな)。こつちも押しに押されて断りきれなくなつちやつて……」



引き受けた最初は私チャンが運営なんてマジありえんていー。超MSS（マジ最低最悪）お頭超MMC（マジむかつくし殺す）って毎日ガチしょんぼり沈殿丸だったけど」  
ひめなは、困った顔で両手の指をチョンチョンとつつく。

「こいつ元々、人を動かすの得意だからな。あつという間に軌道に乗せちまったんだ」  
「小さな町内会が今はNPO法人……凄いですね！」

鶴乃が目を輝かせて賛辞すると、ひめなは「キャハツ☆」と嬉しそうに笑う。

「そうそう！　なんとなくやってくうちにバイブス上がってきちゃってねー☆　今もわちやわちやパないけど、万事ミラクルハイパーノープロブレムで毎日超ハツピー野郎だよー☆」

（どうしよう。何を喋ってるのか分からないから反応に困る……）

（経営が楽しくてしょうがないって捉えればいいと思うよ）

固くなるいろはの肩をポンと叩いて、小声でそう教える鶴乃。

つくづく日本語って難しいなあと思ういろはであった。

「……でも、これだけの規模の祭りを主催するって、お若いのに、凄いです！」

いろはも素直に賛辞を送ると、ひめなはフフフン☆☆と得意気に胸を張る。

しかし、

「何言っただ環の字。こいつワタシとタメだからもうすぐみそZ」

「激おこステイックファイナリアリティぶんぶんドリーム!!」

（訳：死ねえええええええええ!!!）

「やばばー!!?」

ひめな怒りのエルボーがおけらの後頭部に炸裂っ!!

ドゴンツという轟音の後、おけらは断末魔と同時に前のめりに地面に倒れて、失神した。

☆

「ひめなさーん!」

と、そこで女性の声が掛かって、四人は一斉に振り向いた。

「おつー☆ かはるん」

同じ法被を着てることから、『お組』のメンバーらしいが。

ひめながピースサインであいさつすると、『かはるん』もピースサインでニコリと笑みを返す。

「おつですわー☆ 申し訳ありません。露店の準備に手間取ってしまいました……あら、お頭じゃないですか。いくら夏真つ盛りとはいえ、そんなところで寝てしまつたら風邪を引いてしまいますわよ」

「寝てんじやねえやい！ これが目に入らねえのかこれがッ!!」

『かはるん』が心配そうに屈んで顔を覗き込むと、おけらはバツと起き上がる。

頭頂部に生えたドでかいタンコブをちよんちよんと指さした。

「こちらのお嬢様方は……？」

おけらが元気なのを確認してホツと一息つくと、『かはるん』はいろはと鶴乃の方に向いた。

二人の肩がビクツと強張る。

(な、なんかオーラの凄い人が来た……!!)

大金持ちの社長、或いは高級官僚の令嬢だろうか。

対面しただけで感じ取れる存在感の強さに、二人は完全に圧倒された。

確実に言えることは、『かはるん』は自分達4人とは明らかに住む世界が違う。

太陽を浴びて純銀に輝くウェーブの掛かったロングヘアはポリウムが有つてインパクトが有るし、身長も鶴乃より高く、胴体も細くモデルのようだ。言葉遣いといい、歩く時の優雅さといい、全身から高貴な気品が溢れている。

「は、はじめまして……環 いろはと申します」

「は、はじめまして……由比鶴乃です。この度は研修生として参加させて頂きますので、よろしくお願いいたします」

萎縮しつつも、二人はペコリとお辞儀。

すると、『かはるん』は「まあ！」と口を開けて驚いた。

「よくいらつしやいました。初めまして、わたくしは香春ゆうなと申します。NPO法人『お組』の副代表兼財務部担当を務めさせて頂いております。何卒、よろしくお願い致します」

『かはるん』こと香春ゆうなは、ニコリと笑みを浮かべて、丁寧なお辞儀を二人に返す。

「こりやまた色々凄そーな人が……このお姉さんもおけらさんの友達？」

「おう！ そのひめなと同じでウチの戦友だ！」

おけらが腕を組んで豪語すると、右隣にぴよこんとひめなが飛びつき、ピースサイン！

「お頭と私ちゃんとかはるん★」

ゆうながぴよこんとおけらの左隣に飛びつく！

「三人揃えば不可能無しの最強トリオですわー！」

「いや……香春さんだけ明らかに場違いじゃない？」

パンパカパーン☆☆☆☆という効果音と同時にピシッとポーズを決める三人衆だが、鶴乃は冷ややかにツツコむ。

個性豊かだが、アンバランスなトリオだ。

例えるなら……おけらは大衆酒場に通う近所のおっちゃん。ひめなはその大衆酒場でおっちゃんのナンパを笑顔で流す女将。ゆうなは、その大衆酒場で何故か高額で提供されている高級フランス料理……といった感じである。

「それにしても……」

そこで、いろはのポツリと呟く声。

他の四人が騒がしくしている間に、彼女は周りを見渡していた。

祭り会場には、ひめな達と同じ法被を着た職員達が、忙しなく奔走していた。

気になったのは、

「学生さん、多いですね」

その中に、自分と同じくらいか、小学生くらいの子が圧倒的に多いのだ。

ひめながキセルをくるっと回転すると、啞えてニツと笑う。

「うん☆ 人手は一人でもほしいしねー。町内の小中高に一通りBB（ボランティア募集）かましたら超YMのロールキャベツが集まってきたって次第」

「つまり、やる気満々のお子様方が大勢参加してくださって助かってる、ということですよ

わ」

「最近の学校は社会の生き方を祿に教えんからな。こういう体験が子供たちの将来に繋がってくれりや万々歳って訳でい」

キセルから煙をスツパスツパ吸いながらひめながギャル語で答えると、ゆうなが翻訳し、おけらがそう付け食える。

「まあ、一番の目的は人材発掘と、人員確保なんだけど」

「組織の得を真つ先に考えないと、経営が成り立ちませんものね」

NPO法人は『非営利組織』であるが、継続的な公益事業が行えるように事業収入を得ることが許されている。しかし、運営資金の大半は基本的に行政からの助成金か、寄付に頼るところが多い。

ひめなはボランティアに参加してくれた人達に、月額の手帳マガジン登録を勧めたり、工匠区の有力な技術者を招いて勉強会を開いたり、地域援助のボランティア活動を行わせている。

「で、経験積んだ子が将来的にウチで働きたいなって思ってくればおけまる☆」

「とはいえ、そういう子に限って大手の企業に就職を決めてしまう子も多いんですけどね……」

「ま、明京町こあ5年前まで市内の就職難民数トップだったけど、ウチらのお陰でグツと減

らせたしなつ！」

ふんすつ、と鼻を鳴らして豪語するおけらに、ひめながジト目でツツコム。

「ちよい待ちー。お頭経営にノータッチじゃん」

「創設者ですけど『名誉顧問』として名前だけ形式上在籍してるだけですものねえ」

色々あるんだなあ、と三人の後をついていきながら、いろはと鶴乃はふむふむ頷いていた。

いろははごく丁寧にメモまで取っている。

「そういうえば、治安維持部のメンバーの方もいらつしやるんですか？」

「手伝いには来てるよ。来てるけど……」

ひめなはふにやりと困り顔。いろはと鶴乃は顔を見合わせて首を傾げた。

「お頭、姐さん！」

「コツチの準備は完了したヨ」

——と、噂をすればなんとやらだ。

少年のように快活なハスキーボイスと、テンション低めな訛りの強い日本語が聞こえてきて、全員が一斉に振り向く。

（確かあの二人は……）

いろはの目に見えたのは、ひめな達と同じく赤い法被を着た二人の少女だった。

確か、『チーム・アメノハバキリ』メンバーの志伸あきらと、純 美雨だったか。

志伸あきらは如何にも武道をやっているような、肩幅と胸板の厚い体躯で、身長も鶴乃より高く、グレーのベリーショートカットヘアが外見的な特徴だ。

快活なハスキーボイスや、気強そうな顔付きも相俟って、少女というより美少年にか見えなない。

純 美雨の方は、両サイドの御団子ヘアと、先の独特の声色で、如何にも中国か台湾人と言った感じだった。

隣立つ美少年と比べると、背丈は低く細身だが、氷のような眼光と発せられる雰囲気は、明らかに只者では無い。かなりの熟練者だと、いろはと鶴乃は直感で理解した。

「二人ともおっつー☆」

ひめなが陽気に手を振ると、二人は並んで会釈する。

「お疲れ様です……ん？ そっちの子は……環 いろはさんと、由比鶴乃さん、でしたよね！ 初めまして！ 僕、志伸あきらと申します！」

あきらはいろはの前に歩み寄ると笑顔で挨拶。

「初めまして。環 いろはです」

「わあ……っ！ あの七海部長に勝った魔法少女と一緒に働けるなんて感激だなあ……っ！ どうか、これからもよろしくお願いしますっ！」



そうやって目をキラキラと輝かせながら、熱い握手を交わしてくるあきら。

中身はちゃんと女の子なんだなあ、と感じつつも、いろはは（やっぱりその話題からくるか……！）と苦笑い。

一方、

「初めまして。純 美雨さんだったよね……」

「そう、あきらと同じ、〃チームアメノハバキリ〃のメンバーヨ。そして〃蒼海幫〃のメンバーネ」

その名を聞いて、鶴乃は背中が少し冷えた気がした。

そう、それは祖父が生きていた頃、地元の名士達の間でも有名だったヤクザ組織だ。

聞いた所では、構成員は全て〃家族〃となり、自衛の為ならどんな汚れ仕事にも手を染める集団だと。

その影響力は強く、以前、常盤ななかは、その力を背景に、参京商店街を窮地から救えると自分に豪語してきた。

——鶴乃にとっては、良い印象を抱けない。

「……………」

チームは違えど、これから会う機会が増えるかもしれない。

仲良くしなければ、とは思うのだが、先入観は行動を抑制する。

鶴乃の右手は「ヤクザ」の手を取るのを自然と拒んでいた。握手を求めてくれない。

「……………」

どうしようか——鶴乃が悩んでいると、美雨が意外な行動をとる。

「すまなかつタ」

上体を90℃。丁寧にお辞儀して、謝ってきた。

鶴乃が呆気に取られるのは言うまでも無く、

「えっ?」

「ウチのリーダーが迷惑を掛けタ。悪気は無かたし、ああ言わなければならない理由も有つタ。どうか、常盤ななかと、蒼海幫を許してほしい」

頭を下げたまま、美雨は真摯に謝罪を口にする。鶴乃は慌てて手を振った。

「いいっていいって! こつちも怒鳴つちやつたの悪かつたって思ったし……これから同じ治安維持部なんだし、仲良くしよ、ね!」

そう言うのと、美雨は頭を上げた。口元が僅かに緩んでいる。

「アリガトウ。そう言ってくれると、救われるヨ。後生だけ……蒼海幫はヤクザじゃない。人々の暮らしに、地域社会に貢献する「企業」だということを、どうか、理解して

欲しい」

うん、と鶴乃は迷わず頷いた。

「わかったよ。美雨さんみたいに真面目な人がいるんだもん。考え直してみるよ」

ホッと一息つく美雨。

「嬉しい。由比鶴乃、サン。どうか、よろしく頼みます」

「よろしくね！」

美雨が右手を差し出すと、鶴乃もそれを強く握り返して握手した。

一方――

「へー！　いろはちゃん、武道経験無いんだ？」

「あ、はい。勝ったのはサポートもありましたし、やぶれかぶれの作戦が功を成したって  
いうか……」

いろはとあきらは話を弾ませていた。

苦笑いしつつ答えると、あきらは笑顔で感心する。

「でも、勝てたのは凄いよ！　僕も一度七海部長と組手したことはあるけど……」

志伸あきらは、実家が空手道場を経営しており、幼少期から祖父や父親にしごかれてきた。

小学校高学年の頃には、既に黒帯を腰に巻き、全国大会を制覇した経験もある。

力も技術も、絶対の自信が有った。

「どうだったんですか？」

「手加減はいらない。本気でかかってきなさい」っていうから、じゃあ遠慮なくって飛び掛かっていったんだけど……気が付いたら天井が見えててさ。肩の関節が外された」

「えっ」

いろは、ビツクリ仰天。

「で、調べてみたら、部長はおばあさんが古武術をやってて、魔法少女になるまでは合気道の大会を何度も制覇したことがあるんだって。塩田剛三の生まれ変わりって呼ばれたとか……そりゃ、敵う筈無いよね」

絶対に越えられない壁を目の当たりにしたが故の、諦観か。

右肩を摩りながら、情けない顔で笑うあきらの話を聞いてて、やっぱりやちよさんは凄いなあ、と感心するいろは。

塩田剛三はよく知らないが、黒帯レベルの空手家を一瞬で戦闘不能にしてしまうとは恐れ入る。

神浜市最強の魔法少女の名は、やはり伊達では無い。

「そういえば、そつちのリーダーは来てないの？」

不意に、鶴乃が疑問を投げかけた。

せつかく工匠区まで足を運んだのだ。あきらが美雨がいるということは、彼女もこちらに来ていた筈だ。

一言くらいあいさつしておかないと、どうも心地悪かった。

「私も、夏目かこさんと話したいことがありまして……」

が、二人の名前を出した瞬間――

あきら、美雨は愚か、おけら、ひめな、ゆうなも一斉に苦い顔になる。

「あゝゝゝ、まあ……その、なんだろう。いるにはいるんだけど、ねえ」

あきらが苦笑いを浮かべながら、美雨にアイコンタクト。

「あんな姿見せたら、イメージダウンよ……っ！」

美雨がどこか忌々しさを含んだ声色で吐き捨てる。

その肩をポンポンと叩くおけら。

「まあそういうなや。あれもあいつらにとつちや数少ないストレス発散なんだ。仕方ねえ。そう思うしかねえんだ。堪える。堪えるんだ。な、うん」

とつくに諦めたようなおけらの言葉に腕を組んでうんうんと頷くひめな。

「え？」

「それってどういう……?」

先程までの賑やかな雰囲気はどこへ行ったやら、一斉に意気消沈するメンバーにいろはと鶴乃は呆然。

「右手を御覧ください」

——すると、ゆうながバスガイドの様な仕草で指し示した。

そういうえばさつきから、あっちの方がうるさかった気がするなあ、と二人は首を向ける。

神浜市内でも比較的大きな祭りとなるだけに、有名なアイドルも来ているのだろうか——目を凝らすと、遠方で桃色のはつぴを着た女性の群れが何かを取り囲んで、キヤーキヤーと黄色い声援を喚かせているではないか。

「キヤ~~~~☆☆☆

松田優次郎様く☆☆☆

「だああああああ?!?!」

が、その中で!!

聞いたことのある声が、一際大きく響いてきて、鶴乃は思わずズッコケる!!

「い、今の声って……まさか」

いろはが苦笑いして女性の集団を見つめると、先頭で赤い頭髮がピョンピョン飛び跳ねているのが見えるではないか!

隣立つあきらが、はあ、と溜息。

「そう……うちの女王様……」

「ええええええ!」

「何がどうなってるの……」

ガックシと項垂れながらポツリと呟くあきらに、いろははビツクリ仰天!  
鶴乃は体を起こしながら目を点にして、その光景を見つめる。

「嗚呼、優次郎様!! 優次郎様が私を見てくださいましたっ!!」

「何を言ってるんですかななかさん!! 今のは私を見てくれたんです!!」

赤いショートカットの隣で緑のショートカットがぴよこぴよこ飛び跳ねているのが見えた。

ななかに負けず劣らずの大音声を響かせる！

「い———えかこさん!! 今のはどー見ても私を見ていました!!」

「い———や違います!! 私です!! 一万円賭けましょう!!」

赤髪にピキツと怒りマークが浮かぶ。

「いー度胸ですねー! ならば私は今月の給料全額賭けてもいいです!」

「上等です! ならば私は次のボーナスも捧げます!! ななかさんにだけは負けたくありませんから!!」

「ぐぬぬぬぬ……!!」

「な、なんか隣の子と争ってるんですけど……」

赤髪と緑髪が「ヤンノカコラー」「スツゾコラー」と古いギャグ漫画みたく煙の中でポカポカ殴り合いを始めた。

いろはが冷や汗を垂らしながらそう呟くと、美雨が心底呆れた横目で見つめながら答える。

「あつちはかこネ」



「あの子がつ!!」

いろは、またまたビックリ仰天!! 阿峽先生の話とは印象とまるで違う!

「実は、若手人気俳優の松田優次郎が急遽うちの祭り会場で映画撮影することになった。ちやつてねー……」

ひめなが苦笑いを浮かべて、後頭部をポリポリ掻く。

「祭りを更に賑わせる為なら、と快く承諾したんですけど、もおー……」

ゆうなも苦笑いを浮かべて、冷や汗を流す。おけらが続ける。

「準備や設営に参加予定だったボランティアの女子集は、どいつもこいつもあーなっちまった訳だ」

「それにななかさんとかこさんも、なんですね……?」

いろはの眩きに、ひめなはうん、と頷いた。

「ナナもナッツも熱狂的なファンだからねー」

なんでもななかとかこは、松田優次郎の公式ファンクラブの応援隊長と副隊長であるらしい。

「仕方ない、今日の撮影が終わってから話してみようか、いろはちゃん」

鶴乃がいろはの肩をポンと叩いてそう言う。いろはもうん、と頷くが、

「それは無理。撮影は一週間ヨ」

「工匠の街並みや、古い工場なんかも撮影に使うんだって」

「ええ……?？」

ひめなと同じく、苦笑いを浮かべた美雨とあきららがそう口を挟んできて、二人は固まった。

「じゃ、じゃあ、今日の撮影が終われば！ 夜なら流石に暇になるんじゃないの？」

鶴乃はそう提案するが、美雨とあきららは、はあく、と顔を合わせて溜息。

「それも無理ヨ」

「撮影後は応援隊のみんなで、公民館に集まって一日の反省会や、明日の作戦会議を行うから深夜までかかるそうだよ……」

つまり、祭りの間〓研修中にななかとかこと会話するのは実質不可能、という事である。

「ああ、そう……」

鶴乃はガックシと項垂れると、いろはが尋ねる。

「鶴乃ちゃん。松田優次郎さんってそんなに人気なの？」

「うん。参京区にも来た事あるけど、とんでもないよ。見た目はイケメン……ってよりは昭和のスターって感じだから、渋みのあるゴリラみたいだけ……そこが他の若手に無い強みっていうのかな？ 多分、次の主演作品で、初めての監督・脚本を務めるから

余計に注目が集まってるんだと思う」

「へえ〜」

自分の力で映画を創るなんて、凄いなあ、というはが感心していると――

「そこにいたか、美雨!!」

後ろから、凜とした力強い声が聞こえてきた。後ろを振り向くと、燃えるような赤い頭髪の女性が、大股で近づいてきている。

――まだまだ、賑やかになりそうだ。



## FILE #69 集結する百火2

おう！ みんな！ 八坂のおけらさんだ!!

今回はまずはじめに、工匠区のむかしばなしを教えてやるぞ!!

それは神浜市がまだ『八神郡』と呼ばれていた頃——

遠おくくく遠おくくく離れたその狐島……二つの大木が角のように立っているそこは『鬼ヶ島』と呼ばれ——

それはもう大層力強く、妖術にも秀でた赤鬼が一匹居たそうだ——

食料に困った赤鬼は、八神郡の人々を攫おうと、竜に化けた大蛇を工匠の地へ送り込んだ——

……何で竜なのかって？ そりゃあ竜が人々にとって神聖な生き物だからさ。

当然、工匠に住む人々は“竜の姿をした大蛇”を崇めた——

大蛇は人々をまんまと口車に乗せ、主の待つ鬼ヶ島まで連行しようとしたんだが——

——ッ!!

そこであらよつと救いのヒーロー見参っ!! ワタシの御先祖様・人呼んで八坂命（ヤサカノミコト）だっ!!

ご先祖様は鬼より勝る妖術で、竜の正体を暴き捕らわれた人々を解放すると——  
あつと驚く摩訶不思議!!

雲を突き破り光明と共に天より舞い降りたのは青き龍!!

ご先祖様は青龍を使役して、もののみごとにアツパレ大蛇を撃退!!

恐れを為した大蛇はスタコラサツサと鬼ヶ島に逃げちまつたつてワケだ!!

こうして、工匠の地はご先祖様によつて再び平和が訪れた!!

……ちなみに、この鬼ヶ島なんだが——

どうも、兵庫県の『二木市』つて説が濃厚なんだよなあ——

んでよお、この伝説にイチャモン付けてきやがったスツトコドツコイがいてな——

……え？ そいつはダレかって??

確か——

☆

—— 明京町・工匠区。工匠大祭本部付近。

「豪杏（ハオジン）……」

「肝心な時に色ボケとは…… 『女帝』 が聞いて呆れるナ」

面倒くさい奴が来た——

美雨（メイユイ）は、フツと嘲笑混じりの笑みを浮かべて、ズンズンと近づいてくる赤髪の少女に、露骨に嫌な顔を向けた。

彼女の名は呉 豪杏（ウーハオジン）と言う。

美雨と同じく『蒼海幫』の精鋭部隊・『墮龍（デュオロン）』に属する10代メンバーの一人だ。

その容姿は、実に男性的であった。

燃える様な赤い頭髪をワイルドオールバックに決めており、顔付きは端正ながらも、小麦色に焼けた表情は固く引き締まっている。

長袖のYシャツの上に赤いトップスのセット、丈長のスポーティチノパンといった服装で、志伸あきらよりも力強さに溢れた風貌だ。

だが、この場に居る全員が、彼女を『少女』と見抜けたのは、確かな魔力反応を感じ取れたからだ——

豪杏は初対面であろう、いろはと鶴乃には一切目をくれず、ただ美雨のみを睨み据えている。

「あれはただの……」

『キャ〜〜〜☆☆☆ 松田優次郎様あ〜〜〜☆☆☆☆☆』

瞬間——美雨の真後ろを、桃色の法被集団が通り過ぎる!!



先頭の赤い人は、キニシナイで。

「……………す、ストレス発散ヨ。勘弁して欲しい……………」

「顔が青いけど、大丈夫か…………？ 全く、オマ工程の者がいながら、チームを碌に統制できているとは……………」

豪杏はわざとらしくはあく、と溜息。

「マアアイ。オマエ達チーム・アメノハバキリが祭りで浮かれている間に、明京町は我ら『赤竜隊』が責任を持つて警備してやるから、せいぜい大船に乗った気であるんだナ」  
ハオジン  
 豪杏は腕を組むと、鼻を鳴らしてそう豪語した。

神浜市内の各町に配備された治安維持部隊は、1チームにつき、魔法少女が1〜4名程である。

(具体的に言えば、神浜町・1、慶治町・3、立政町・4、明京町・4の割合だ)

総数は僅か12人。

深刻な人材不足である。

これで約320万人もの市民の命を四六時中魔女や、魔法少女の犯罪者から守っているのは無理な話だ。

よって、神浜市政は、一人一人の練度が高く、あらゆる意味で“経験豊富”な魔法少

女が集う『蒼海幫』に、治安維持部の業務を一部委任していた。

その要請を受けて結成された市内警備隊の一つが、豪杏ハオジンを筆頭とする10代の手練れ5名で結成された『赤竜隊』であった。

彼女達は主に、明京町の警備を担当している。

赤竜隊は結成されてから、チーム・アメノハバキリとは常に切磋琢磨した間柄だった。

何せ、『全く同じ権限を持つ』魔法少女チームが町内に二つも存在しているのだ。張り合わない方が不思議である。

呉ウー 豪杏ハオジンは別に常盤ななかと親密では無かったが、人々の生命を背負っているという魔法少女の誇りと、魔女や犯罪者に対する闘志が、二人の間に橋を架けていた。

実際、両チームはお互いに牽制し、時に皮肉や小言を言い合いながらも、魔女の襲撃や魔法少女の犯罪事件が発生すると、功を競って譲らず、その結果、おびただしい戦果をあげてきたのである。

明京町がつい先日、犯罪率0%を達成できた理由の一つが、"それ"であった。

そんなワケで、豪杏ハオジンはななかと美雨にとっては、最大のライバルに等しいのだが……

「おお、それは助かるヨ」

あからさまな挑発に、乗ってやる気は微塵も無かった。

眉一つ動かさずに微笑みで受け流す美雨。

「そつちが命がけで守ってくれば、こつちは何も心配無く祭りに精が出せるネ」

腕を組んだままウンウンと頷く豪杏<sup>ハオジン</sup>。

「そうだろう。治安維持部は日夜大変だからナ。偶には我々に任せて思いつき羽目を外してもいいんじゃないカ……って、おい」

ノセられていることに気付き、豪杏<sup>ハオジン</sup>がキツと睨む。

「何で怒るカ？ 我々は公務員。市内行事に参画することは当然の義務ヨ。町の警備が手薄になるのは仕方無し。その間、豪杏<sup>ハオジン</sup>達がいつもとより頑張るのも仕方なしネ」

「それはそうだが、町の警備も本来なら、治安維持部<sup>オマエたち</sup>の義務の筈ダ。人材不足故に、一般企業の警備隊に業務を加担してもらっている現状を、悔しくは思わないカ」

「いや、全然」

今一つ乗つてこない美雨に、ガツクリと項垂れる豪杏<sup>ハオジン</sup>。

「キサマ……何故張り合わない？」

「暇な時だったら別にいいけど、今日は祭りヨ。みんなが協力しなきゃいかん時に、ケンカおつ始めるのは只の馬鹿ネ」

「王宗師<sup>ワン</sup>も仰っていただろう？ 人も組織も互いに競争し合つてこそ成長するものだ

と。オマエらが喧嘩腰になつてくれないと、私達もモチベーションが上がらないのだ。

それに……」

豪杏はコッソリ耳打ちする。

（宗師が治安維持部の掌握を計画してるのは、オマエとて知ってるだろう？ 現実的に

警備は無理でも、私に意地の一つでも見せておくべきだ）

そうすれば、「上」に便宜を図ってやるぞ———という意図を込めて彼女は囁いた。

「心配してくれるのか？ 優しいネ」

美雨が穏やかに微笑むと、豪杏は慌てて首を振る。

「いや優しさとかじゃなくなつてつ。オマエとの間に『差』ができてしまうと、私としては何かこう……もやもやするつていうか……つ」

☆

「素直に、『寂しきピーポーマックスなんで構ちよー☆』って言えばいいのに、ハオハオも頑固だねー」

離れた場所で二人の喧噪を微笑ましそうに眺めながら、ひめなはそう独り言ちた。隣のいろはが尋ねる。

「あの人も、『蒼海幫』の方なんですか?」

「うん。呉 豪杏（ウー||ハオジン）。見ての通り、チュンチュンとはマイメン☆」

またギャル用語が出てきて、顔を顰めるいろは。

「まいめん……?」

「『ズツ友』って意味ですわ」

脇からニユツと生えたゆうなが解説。

（友達かあ……。葉ちゃんと累さんは元気にしてるかなあ……。?）

不意に二人の顔がいろはの頭を過る。

「でも、友達にしては睨み合ってる感じですけど……」

「まあ、工匠区の商工業会は現在、蒼海幫グループの傘下にありますから」

そして、商工業会は、『鄭 咲蘭』（チャン||シャオラン）という女性が取り仕切っているそうだ。

ゆうなが解説を続ける。

「『社員は皆家族』という掟が蒼海幫には有りますし……ななかさんと同じく町の警備を担っている豪杏ハオジンさんは、いつもより気が張っていらつしやるのでしょうね」

当たり前の話だが、今回のような大きな祭りを開催する場合、市外からも多くの観光客が訪れるので、必然的にリスクも高くなる。

『家族』の命が掛かっている豪杏としては、警備に万全を期したいのは当然の感情だし、イケメン俳優に現を抜かしているななかと、今一つ切迫感の無い美雨の態度が我慢ならないのだろう。

「このハオジン時世、いつ如何なる場所に魔女か魔法少女が潜んでいてもおかしくありませんし、豪杏さんのお気持ちもよく分かりますわ……」

「じゃああの三人ダメじゃん……」

沈痛な面持ちで呟くゆうなに、鶴乃が、ななか、かこ、美雨を順に見てツツコむ。

その隣であきらは「あはは……」と苦笑い。

「うんにゃ、その心配は杞憂だよー☆」

と、ひめなが笑顔で割り込んで来た。

それはどういいう事か—— 答えは、彼女の視線の先にあるらしかった。

☆

——一方、美雨と豪杏は……  
ハオジン

「治安維持部」は護るだけが全てでは無いヨ」

「ほう、随分自信满满々だナ……」

ハオジン  
 豪杏は再び、脇を見る。

桃色の法被を着た集団の先頭で、赤い人が『I☆L☆O☆V☆E☆M☆A☆T☆S☆U☆D☆A』と書かれた大旗を振っているが、見なかったことにしてください。

「常盤ななかのあの現状を見て、まだそんな事を言うカ……」  
 今度は美雨がはあく、とわざとらしく溜息を付いた。

「これだから仕事しか見てない女は嫌ヨ……」

「ナニ？」

豪杏がムツと睨みつける。

—— 刹那、豪杏の背中が、ぞくりと冷えた。

間違いない。背後に誰かが、立っている。

この、鬼の気迫の様に突き刺さるような闘気は——

豪杏が咄嗟に振り向くと、そこに居たのは、

「梅華（メイファ）姉様！」

「梅（メイ）姉」

豪杏は視線を少し下げた。

紫陽花柄の着物を纏った、紫色のベリーショートカットヘアに、燃えたような赤色に焼けた肌をした、小柄の女性だった。

彼女の名前は、洪 梅華（カウ||メイファ）といった。

美雨、豪杏と同じく『蒼海幫』精鋭部隊『墮龍』の一員であり、魔法少女としての実力なら随一と噂されている。

美雨、豪杏も相当な熟練者だが、彼女の接近に、二人は全く気づけなかった。

魔力反応どころか、気配すら察せなかった。

「美雨、豪杏、大儀」

梅華は、顔の前で左掌に右拳を当てると、という中国式挨拶・『拱手』こうしゅを行う。

二人も咄嗟に姿勢を正すと、同じ動作で返した。



「豪杏」  
ハオジン

「はっ！」

一拍置いた後、梅華メイファは肌の色よりも深い朱色に染まった瞳をじつと向けた。

肩が震えた豪杏ハオジンは、慌てて気を付けをの姿勢を取り、返事をする。

「話、傾聴。貴殿発言内容、某それがし、理解。故、同門挑発、無礼千万」

「しかし」

「美雨」

「はい」

豪杏意見すべく口を開くが、梅華メイファは美雨に顎で指示した。

それを「説明しろ」とくみ取った美雨は、頷く。

「豪杏ハオジン、工匠区の街並みを見て、何か感じたことは無いカ」

「いつもと変わらない静かな町だが？」

美雨はそこでまた、わざとらしくはあく、と溜息。

「鄭老師テイセンのお陰で女性技術者や女性経営者は年々増えてるけど、昔気質の頑固で融通の

利かない職人達の意見が強い風土は変わって無い。だから、若手技術者が育つ土台が弱い

のヨ」

『男尊女卑』は廃れたが、古くから根付いた風土を覆すのは難しい。

伸びしろのある若手技術者は、『自分勝手』と見做され、ベテランの老人達に上から叩き潰され、彼らの意のままに飼い慣らされるのがオチだ。

これでは発展は望めない。

そこで、常盤ななかはお組の首脳陣や、区の自治会と協力して、若手技術者の技量を存分に発揮できる場を設けたかった。

無論、年二回行われる工匠大祭は、古くから工匠区の技術力を世間一般に披露する機会では有ったが、そこで腕を見せつけたがるのはベテランの老人ばかりだ。

ななか達は彼らを説得すべく、日夜奔走したのだった。

「空地を利用して緑のアクセントを作たり、動物愛護団体と掛け合って、ドッグバーを開設したり、名工を呼んでマンハッタンのベイリーパーク作ったり、街の通り全体にイルミネーションを渡したり……」

ハオジン  
豪杏が目を剥いた。

「そんなことをやてたの力……?」

「そ。それも二年前から」

「二年もっ?」

「コンクリートブロックを壊して代わりに生垣を植えたのも、大胆だけど良いアイデアだったヨ。プライバシー保護と防犯の度合いは変わらないし、倒れる心配は無いから地

震の時は危険が回避できるし、防火にもなるし……何より、避難がしやすくなるし、こつちも救援活動がしやすい」

「……」

「豪杏、警備だけが全てと思ってる貴女より、遥かに努力してるヨ。ななかは」

「分かった、認めよう……。だが、祭日に、警備を怠って良い理由にはならないだろう」

「問題無」

梅華が口を挟んできたので、豪杏はギョツとする。

「豪杏」

『本日の赤竜隊の人員は万全か』と目で訴えてきた。豪杏はびしつと敬礼し力強く発言。

「はっ！ 私を含めた通常通りのメンバーですが、10:00から、孫 鈴紗（スン||リンシャ）、崙 明零（ロン||ミンリン）、伯 梓美（ボ||ズーメイ）の三名が合流し、8人体勢で警備を行う予定です」

何れも、10代メンバーの中では武芸に秀でた者達だ。祭日に、彼女達を引き抜けたのは僥倖だった。

梅華はうむ、と頷いた後、

「王宗師より、伝言有。『午後12:00より鄭 咲蘭 羅 神翡（ルオ||シエンフエイ）、

劉 蓮穩（ラウ・リエンウエン）が警備に回るので、赤竜隊は休まれよ」

「なっ」

ハオジン 豪杏は驚愕の余り、返す言葉を失った。

チヤン シャオラン 鄭 咲蘭、ルオ シエンフエイ 羅 神翥は何を隠そう、組織の首脳陣・五強聖の老師だ。

そして劉 ラウ リエンウエン 蓮穩は、カウ メイフア 洪 梅華と並ぶ『墮龍』エースの一角——

普段は多忙の余り滅多に表舞台に姿を見せない三名。それが、本来自分達若手が専従すべき業務を担ってくれるというのだ。驚くのも無理は無い。

「しかし、わざわざ御三方の手を患わせる訳には……」

流石に申し訳無さで肩が震えた。ハオジン 豪杏は首を振って断ろうとするが、

「美雨」

「はい。ハオジン 豪杏。メンバーのメンタルを考えてやるのもリーダーの義務ヨ。ここんところ、お互いにずっと忙しかたでしょう？ 祭日ぐらい、宗師達の好意に甘えて、思いっきり羽根を伸ばすのも良いと思うガ？」

「しかし」

ううむ……とハオジン 豪杏の表情は次第に険しくなっていく。美雨はハア、と溜息。

「……宗師に便宜を図ってくれたのは、ななかヨ」

実は、先日竜誕館にななかと二人で訪れた時に、海龍に頭を下げて頼みこんでいたの

だ、と美雨は言う。

ハオジン  
豪杏はまたも、エツと目を見開いた。

「断れば、ななかの顔に泥を塗る。お互いに高見を目指したいんじや無かた力？」

「……………」

確かに美雨の言う通りだ。ライバルとは蹴落とし合うのでは無い。

そんな真似は、自分の信念に反する

ハオジン

豪杏はどうとう俯いて、黙り込んだ。

その仕草が長年の付き合いから『観念』と分かっていた美雨は、ふうと、安堵の息を吐くのだった。

☆

——  
一方。

「久しぶりだなっ!! 八坂のっ!!」

美雨、豪杏<sup>ハオジン</sup>、梅華<sup>メイファ</sup>のやりとりを遠巻きに眺めていたおけら達。

だが、突如、空気を震撼させる程の怒号が挨拶代わりに飛んできた。

全員がおっと目を向けると、黒髪ロングの、如何にも男勝りな小柄の女性を中心に据えた、6名の女性集団がずかずかと近づいてきていた。

よっほど、気合を入れているのだろう。全員が既に魔法少女衣装である。

「なっ……、オメーはッ!!?」

矛先を向けられたおけらが、リーダーと思しき黒髪ロングの女性を視界に入れた途端  
目を剥き出しにして、驚いた!!

「……誰だっけ???」

「「「「だあああああああゝゝゝゝゝゝ」」」」

が、しかし。

!!!????

「「「」」」

予想外の言葉が返ってきて、その場にいる全員がズッコケた!!

「もぉーお頭ー。去年会ったじゃーん??」

「そうだっけ? いやーすまねえすまねえ。八坂のおけらさん、毎日ハードスケジュールででてこまだからよお。どうでもいいモンは頭からスッパリ抜けちまうんだわ!!」

一早く立ち上がったひめながツツコムと、悪びれる様子も無く、がっはっはー! 豪快に笑い飛ばすおけら。

その言葉に、目の前で倒れた黒髪の女性がバツと立ち上がる!!

「オマエ………忘れたとは言わせねーつつの。この二木市の竜親分の名を」  
 そこでおけらの頭上の電球がピカッと光った!

手をポンツと叩いて、その名を口にする。

「あ、そーだそーだ。思い出したぜ。確か、おお………オオ………大………ば?」

黒髪の女性が薄い胸を張り、うんうんと頷く。

「大バカ」

バキヤツ!!

ズツコケた拍子に黒髪の女性の頭がベンチを破壊!

「誰がバカだッ!? 誰がッ!？」

でっかいタンコブを作った女性が、怒鳴り返すも、

「あれ、違ったっけ? 大ゴキブリだっけ?」

おけらには こうかがないようだ……

「てんめえ……今すぐウエルダンに焼いてやろうかあ……!!」

黒髪の女性の全身がメラメラと燃え上がった。

そこで、鶴乃が駆け寄ってくる。

「樹里姉ー……、出会い頭にナニ恥ずかしい真似してんのさー」

どうどうと黒髪の女性の肩を叩きつつ、鶴乃は宥めるようにそう言った。



彼女の事はよく知っている。

昔は参京区に住んでいた幼馴染で有り、今は二木市の竜ヶ崎町で商業を護っているという、大庭樹里だ。

まさかこんなところで再開できるとは思わなかったが、20代後半の癖にあんまり子供臭さが抜けて無い様子に呆れた。

「おー、お鶴じゃねーか!」

樹里も鶴乃を見た途端、熱が引いた。顔がパアツと輝く。

「うん、お鶴だけど。樹里姉、あんたにはとりあえず一言言つてやりたい事が……」

「ニヒツ、感動の再会といきてーのは分かるが、それは後だつ!」

「はっ?」

いや、あんな手紙は無いでしょって文句言いたかったんですけど!?

そんな鶴乃の苛立ちなど露知らず、樹里は彼女を押しつけて、再びおけらの眼前まで歩み寄る。

「あんだ? ゴキ?」

「ゴキブリ略すなっ!! ……八坂おけら、アタシ、大庭樹里はオマエらに」

——  
“勝負”を申し込む!!

## FILE #70 集結する百火3

「「「「勝負?」」」」

黒髪ロングの女性——大庭樹里が敵意いっぱいに放ったその一言に、全員がポカ

ンとなる。

「いってえどういこうこった。オオバカゴキブリ」

「人を新種の昆虫みてーにいうなっ!! しかも微妙に惜しいっ!」

おけらのあんまりな呼び名に慌ててツツコむ樹里だが、そこで、コホンと咳払い。

「……いいか、二木にとつちやあ、赤鬼つてのは神様なんだ」

樹里は、訥々と説明を始めた。

——二木市には古くより、『赤鬼伝説』というものがある。

それは、遠い昔々の話……二本の大きな木が立つ無人島。そこには一匹の、それはもうご立派な、黒くて太くて雄々しい一本角を生やした赤鬼サマがいらっしやった。

「黒くて太くて雄々しいってなんかエロくね? ☆」

「いらん横槍挟むなっ!! ……話を続けるぜ」

赤鬼サマは、群れるのが嫌いだった。仲間の鬼といつても食料の取り合いになつてたからな。

だから、島に流れ着く罪人達を捕まえては食べていたのさ。そう、おとぎ話の悪い鬼みたく、ムシヤムシヤとな。

——だがある日、一匹の大きな虎が流れ着いた。

鬼は食べようとした。虎は言った。「待て、俺を食つても上手くないぞ」

——ある日、一匹の大きな竜が流れ着いた。

鬼は食べようとした。竜は言った。「待つてくれ、儂を食べたら天の神より罰が下るぞ」

——ある日、一匹の大きな蛇が流れ着いた。

鬼は食べようとした。蛇は言った。「まてまて。おれには毒がある。食べたら腹を壊すぞ」

仕方無く赤鬼サマは、三匹を島に住まわせた。

話を聞くと、どうやらその三匹も赤鬼サマと同じく、仲間と群れて合わせるのがイヤになったそうだ。なもんで、赤鬼サマもなんとなく同族意識が芽生えちまつたらしい。

その後も、罪人が島に流れ着いたが——ここで、食糧問題が発生した。

赤鬼サマ一匹の頃ならともかく、今は大物4匹だ。人間一人を分けても、大して腹の足しにはならねえ。

そこで虎が赤鬼サマに諫言した。

「赤鬼よ。どうせまっていれば食べ物は向こうからやってくるのだ。ここは我慢して、いっぱい集まったところを皆で一氣に喰らえば腹も満たせるし、気持ちの良いもの

であろう」

赤鬼サマは、虎の提案を聞き入れた。

罪人は、どんだん島に流れ着いた。しかし、今度は罪人達の食料問題が発生した。島には人の食べ物が無かったから、罪人達はお互いの肉を食べるしか無かった。このままだと、殺し合いだ。赤鬼サマ達にとってよろしくない。

そこで竜が赤鬼サマに諫言した。

「赤鬼よ。儂が雨を降らし、罪人共の乾きを癒そう。お前は海から魚を採ってきて彼らに与えるのだ」

赤鬼サマは、竜の提案を聞き入れた。

腹が満たされた罪人達は、争うことをピタリと止めた。だが、これじゃあ本末転倒だ。虎が再び赤鬼に諫言した。

「赤鬼よ。ならば今度は罪人どもに魚を持ってこさせればいいではないか。我らで魚捕りを教えてやろう」

竜も再び赤鬼に諫言した。

「ならば、儂は晴れと雨をあやつり、罪人どもに木の実と水を与え続けよう」

そこで、蛇が口を挟んできた。

「赤鬼サマ。なれば罪人どもに食料を作らせればいいではありませんか」

蛇のまさかの提案に、赤鬼サマは「なぜ？」と問いかけた。

蛇は自信満々に言った。

「人間は我らよりよつぽどしぶといのです。島の外では、多くの人間が自分で土を耕し、作物を作り、自分や仲間になれを与えて、繁栄を続けているのです。罪人どもにその知恵を与えてやりましょう。そうすれば、罪人どもはお互いに争うことは無くなりますし、やつらの数が増えれば我々も食べ物には困らなくなります」

蛇の提案に、鬼達はなるほど、と思った。

しかし、その知恵を手に入れるにはどうすればいいのか？ と問うと、蛇はわらつてこういった。

「おれが外から知恵のある人間を連れてきましょう。そして、作物を作るには道具も必要です。幸い、おれはここに流れ着く前に、ある町で素晴らしい農具を発見しました。そのの偉いやつを、ここに連れてきて、罪人どもに作り方を教えるように言えばいいです」

そうして、蛇は島から旅立っていった――

「――と、まあよーするに、人間を食べるつもりが、気が着いたら漁業を教え、農業

を教え、工業を教え、果ては町まで作ってしまい、赤鬼サマ達はいつのまにか神様と崇められるようになってしまった、と——」

「なんでい。結局人攫いはしたんじゃねーか」

胸を張って自信満々に豪語する樹里に、おけらが余計な一言。

むつと眉間に皺が寄った。

「それを工匠区この伝説と勝手に混ぜるから問題なんだつものつ。八坂の、オマエが赤鬼サマの悪評を吹聴しまくるせいでなあ！」

「だつてご先祖様の巻物にそう書いてあつたんだからしよーがねーじゃねーかつ！」

「ニヒツ、それを聞いたのは二度目だけ。八坂の……！」

「あんだとおツ!! ……………前言ったのいつだつて??」

きよとんと首を傾げるおけらに、ガクツと樹里の首が折れた。

「……言うと思った。去年のこの日だ」

「そーだつて。つてかオメーいたつて?」

「いたわっ!! 八坂の、お前にとつちやあ人生のどうでもいい一コマだったかもしんねーが、樹里サマにとつちや、あれは……あの雪辱は……ッ!!」

——忘れたい過去だ。



☆

——あれは去年の同じ日だった。

樹里サマ達は、神浜市でウチの赤鬼サマを悪く言う奴がいると聞いてな、調査に向かったんだ。

子分共と手分けして嗅ぎ回ってたらよ、見つかったんだ。

八坂おけら。お前だよお前。

祭の大舞台で、でっけー声でハシヤギやがって！

赤鬼サマが大蛇を遣って人を騙くらかした？

お前のご先祖様が大活躍？ 大蛇を撃退して、赤鬼サマをビビらせた??

ふざけやがって……こいつあソツコーでウエルダンにしてやるって、樹里サマは決めた！

……え？ マジで焼き払う訳無いだろ。日本じゃ殺人は犯罪だ、常識だぞ？  
ちよつとビビらせて、その小喧しい口に蓋をしてやろーって思ったのさ。

「八坂おけら！ 根拠のねえホラ話をいちいち囃し立てやがって……気に入らねえ。  
アタシ達と勝負しろ！」

19時くらいだったか。

八坂神社の裏側は真つ暗で、今思い返せば中々に気味悪かったが、とつくに頭に血が  
昇つてた樹里サマ達には関係なかった。

「なんだとお！ ぐ先祖様の巻物にそうかいてあつたんだからしよーがねーじゃねーか  
!! ……まあいいぜ！ 上等だ!! 神浜の女は売られた喧嘩は買う主義よおっ！」

「へえ？ そりゃあどんな喧嘩でも、か？」

「おうよー！」

シメた、と思つたぜ。

お前と来たら、樹里サマの言葉が畏と気づかず、乗つてきやがった！

「ニヒツ。先生、お願いします」

八坂の。お前の身体能力の高さはとつくに調査済みだつつの。

逃げられて樹里サマの悪評を広められると、龍ヶ崎に響くからな。

だから、お前の口を確実に黙らせるのに、とっておきを用意しておいたのさ。  
「よしなに」

裏の茂みから、スツ——と、〃先生〃は音も無く出現した。

〃先生〃はとんでも無く強い人なんだ。家柄は古武道の名門。その上、空手、柔道、剣道、合気道……あらゆる武道の高位位を取得し、対魔女戦では96戦無敗。内89戦がソロで無傷。対魔法少女戦に至っては200戦無敗。樹里サマが子分共と束で掛かっても、まるで敵いやしない。

龍ヶ崎最強……いや、二木市最強の魔法少女だ。

八坂の、あの時のお前のビビり様は笑えたぜ。

「あつ!! ブリーぞ!! オメーがタイマン張るんじゃないのかい!」

〃先生〃の雰囲気を感じたのか、途端にお前は顔を青くしたよな。

「ニヒツ。お前さつき自分で何言ったか忘れたのかよ? 〃どんな喧嘩でも買う〃つて」

「えっ?! ……あつ!!」

ようやく畏に気づいたか。馬鹿が。

『アタシ〃達〃と勝負しろ』って、樹里サマは確かにそう言った。そして八坂は買うと言った。

この時点で、勝負アリ、だ。

「八坂おけらさん」

ゆらりと脇差を抜いて、”先生”は奴を呼んだ。

八坂の青くなつた額には、大量の汗が滲んでいた。

「……っ」

「貴女に恨みはありませんが、我々の土地神を貶し陥れようとしたその愚行。二木に生きる者として、看過する訳には参りません」

「そ、そんなつもりじゃ……つてかご先祖様の書物につ」

先生は、ゆつくりと脇差を抜いて、構えた。

「言い訳無用。二度と二木を馬鹿にできぬように、懲らしめて差し上げましょう」

ニヒツ、先生の峰打ちは痛いぞー。二木でも何人も魔法少女が泣きを見たからなー。

え？ 樹里サマもかつて？……それは、聞くな。

「そんな、殺生な……！」

八坂は、クツと齒ぎしりした後、観念したかのようにその場で胡座を掻いた。

「クソツ、話を通じねえんじゃ仕方ねえ！ だが、女に二言はねえ！ アンタらとの喧嘩は受けて立つ！ だが、この八坂おけら、手前より腕つぶしの強え奴に殴り掛かるよう

な無謀な女じゃねえ！ この通り、腹は括った!! やるんならさっさとやりやがれってんだっ!!」

「ニヒツ、痛いだけじゃ済まねーぞ。『一週間雨女』の呪いも掛かるんだ」

樹里サマが笑ってそう言ってやると、八坂の肩がビクツと強張った。

「んなあつ!? ……だ、だとしてもだ! 一度受けた喧嘩にやもう逃げも隠れもしねえ

! 思いっきり良いやつをここにブチ込みやがれっ!!」

八坂は恐怖を抑えるように喚き散らした後、首筋をパンパンツ!と叩いた。

“先生”が、ゆるりと——脇差を頭上に掲げる。

「そのお覚悟を、良しとします」

——八坂の首筋めがけて、振り下ろした!!

☆

「『先生』って……?」

樹里の回想の中で、唐突に出現した人物に首を傾げながら、いろはは誰にでもなく問いかける。

「もしかして、あの人、じゃないかな?」

志伸あきらが即座にそう答えた。

大庭樹里の後ろに並び立つ、5人組の黒衣の魔法少女達。その右端に立つ人物に、あきらは強い眼差しを向けていた。

いろはも同じ人物に目を向ける。

魔力反応が薄い為、あまり気にしなかったが、言われてみると確かに樹里を含めた6人の中では一番年上そうに見えるし、黒い着物を纏い優雅に佇んでいる姿も雰囲気を感じられる。

「……ん? でも今の話の流れからしたらおけらさんを懲らしめた訳だから、恨むのはおかしくない?」

鶴乃が疑問をぶつけると、樹里は「いやっ」と首を振った。

「それがあと一步のところだったんだ……奴が邪魔さえしなければ……」  
「奴?」

「鄭 咲蘭（チャン〓シャオラン）だ！ 去年の工業大祭の主催者だった女だ！」

先生が脇差しを振り下ろした瞬間だった。

ヒュッ——と、疾風のようにそいつは八坂の前に現れたんだ。

アタシは腰を抜かしそうになった。

そりやそうだろう。だって先生の脇差しが……「二本指」で止められてやがったんだぜ？ 二木の誰もが止めることのできなかつた先生の一撃を、だ。

しかも、咲蘭（シャオラン）の奴……そのまま、ベキツと刃を折っちまいがった。

——そして、樹里サマと先生の意識は飛んだ。

「アタシはあの時、奴の『蒼碧拳』を、ほんのちよつぴりだが体験した。い、いや……体験したというよりは、まったく理解を超えていたが……、あ、ありのまま、去年、起こつ

た事を話すぜ。『樹里サマ達は気がついたら、二木行の新幹線の中で眠りこけてた』……。な、何を言っているのか、わからねーと思うが樹里サマも、先生も……何をされたのか、わからなかった……。頭がどうにかなりそうだった……洗脳だとか催眠だとかそんなチャチな魔法じゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を、味わったぜ……」

某ポ○ナ○フのコピペみたいな文章を青褪めた表情でボヤク樹里。

当時の恐怖がぶり返してきたのだろう、冷や汗が大量に額に滲んでいる。

「○ル○レ○は置いておくとして。へえ、あの樹里姉をビビらせちゃう人が此処にいるんだねー？」

鶴乃が尋ねると樹里はコクリとうなずいた。

「それが、チャンシヤオラン。中国人のくせに工匠の工業を牛耳ってる女だ」

「大庭樹里っ！ 我らが老師を馬鹿にするナっ！」

「そーヨ。そもそも神聖な祭りの日に喧嘩ふかけるなんて馬鹿な真似したのはソツチ。返り討ちに遭うは自業自得ヨ」

会話が終わったのだろうか。

いつの間にか、戻ってきていた豪杏ハオゾンと美雨メイユアが、樹里の言い様に聞き捨てならぬと口を

挟んできた。



樹里が二人をキツと睨み返す。

「出たな、蒼海幫。八坂とグルになつて赤鬼サマを貶した上に、先生の名誉に傷を付けた事は我慢ならねー。雪辱は晴らさせて貰うぜ！」

「いやだから自業自得じゃ」

鶴乃が呆れ顔でツツコもうとするが、頭に熱が昇つた樹里には届く筈も無く。

「もしや、後ろの連中は挑戦者力？」

「そうだ。樹里サマと先生が直々に鍛え上げた精鋭共だ。お前らとチャンシヤオランの醜態を思いっきり衆目に晒してやりにきたのさ。野郎ども！ 挨拶しなっ!!」

待つてましたと言わんばかりに樹里の後ろに並び立つ5人の顔が光り輝く。

「緋華ひばなせんか仙香ですっ!」

「繚蘭りょうらん百花ももかです……」

「高菜たかなま舞桜まおと申します。よろしくおねがいます」

「宮根みやね灼しゃく」

黒衣の魔法少女達は左端から順番に挨拶していき、最後の一人になつたところで樹里が声を張り上げる。

「そして一番右に御わすのが……我らが“先生”!」

「お初にお目に掛かります。竜宮りゅうくう綾儂あやのと申します。チーム・アメノハバキリの皆様、蒼

海幫の皆様、お組の皆様、以後お見知り置きを」

先生と呼ばれた人物はゆるりと前に歩み寄り、丁寧な言葉遣いで挨拶した後、深々とお辞儀する。

最強の人物とは思えぬ腰の低さだ。いろはと鶴乃は慌ててお辞儀を返し、他の者達も合わせるように頭を下げた。

だが、

(やつぱり……この人が)

(相当の手練の様ね……おそらく、今の自分では……)

(平静さを装っているが、物凄い威圧を感じるな……鄭老師への因縁は相当根深いと見える……)

武道家であるあきら、美雨、豪杏は瞬時に悟った。

竜宮綾儂の纏う雰囲気は、正しく自分達の知る「絶対強者」のそれと同じだ。只者ではない。

だが……

「いきなり勝負って言われても……ねえ？」

「祭りのプログラムは確定してるし、みんな役員の仕事があるヨ」

「当日になってから、突然申し込まれてもねじ込める訳が無いだろう。常識を弁えろ」

三人が率直に疑問を口にすると、全員がうんうんと頷いた。

「あー、駄目なら駄目でー。みんなでお祭りをたのしもーって腹つもりでしてー……あいたっ！」

「灼つ、余計な事言ってるじゃねーつの。……その心配は無用だ。祭りの代表サマにはとつくに話をつけてあるからな」

子分の頭を小突いた後、樹里はひめなを指差した。

「……………えっ!?!……………」

「あーつと……やばば。サプライズにするつもりがバレたし。メンゴ☆」

全員がギョツと目を向けるが、ひめなは笑って謝る。

「毎年祭りの締めに行ってる蒼海幫さんの演武披露は目玉イベントの一つだからねー。今年は、そこに龍ヶ崎の皆さんに乱入してもらおうって。ほら、因縁の対決とかマジエモいし、魔法少女同士のガチンコ勝負なんてみんなマジバイブス上がるっしょ。来年の集客率120パー安定だわ☆」

「ニヒツ☆ お互いの利害が一致したからこそ成り立った企画だ。お前らにどうこう言う権利はねーぞ」

ひめなと樹里の言葉に全員がポカンとなる中、おけらだけが冷たい目を向けていた。

「おいバカゴキ」

「酷い略し方すんなっ!!」

「イキつてるところ悪いが、残念なお知らせだ。今年の祭りに鄭さんは不参加だぞ」  
「なんだとっ!!」

樹里、ビツクリ仰天!

聞いてないぞ——と、即座にひめなをギツと睨みつけるが。

「言い忘れた、メンゴ☆」

——と笑って舌を出して謝られた。

「ふざけるなよクソツ! チャンシヤオランが来なけりや先生のメンツが……!!」

「竜親分、悔しがる事はありませんよ」

「へっ??」

「どういうことだ——と樹里が問うよりも前に、綾儂の暁の眼差しはある一方に向  
けられていた。

それは、ひめな達の集団から少し離れた位置で様子を見守っていた女性——洪

梅華（カウ||メイファ）へと。

梅華の方も、視線に感づいていたのか、目を細めて見つめ返しているようだった。

「……そちらの御方……」

綾儂が音も無く歩み寄る。

刹那——「何か」を察したらしい、梅華メイファの顔が僅かに強張った。  
「……ッ！」

「初めまして。竜宮綾女と申します」

「洪カウ 梅華メイファです」

二人は深々とお辞儀を交わして挨拶する。

「一目見た時から感じておりました。相当腕に覚えの有る方だと……。武道の実力は如何程に」

「それがし某、未だ修行中の身故、他人に誇れる程の実績は有りません。しかし……。剣技ならば」

梅華は、腰に差してある刀の鞘に手を置き——構えた。

瞬間、梅華から闘気が溢れる。

「今まで誰にも負けたことは有りません。蒼海幫随一と自負しております」

熱風な様な氣迫を感じ取りながら、綾儂は満足そうに笑みを深めた。

「それはそれは……。お手合わせした時が楽しみですね」

「貴殿程の御方にそのように仰っていただけとは、身に余る光榮です」

「お互い、悔いの無い勝負をしましょう」

「是非とも、よろしくお願い致します」

二人は再び、お互いに深々と頭を下げた。

その様子を見て、樹里がホッと一息——良かった。先生のメンツはどうか保てそうである。

「だがバカゴキよお。祭りの締めまで大分時間があるが、それまで何してんでい？」

「そりや折角遠出したんだし、みんなで観光地と温泉巡り……あいたつ！」

樹里が再び灼の頭を小突くと、胸を張っておけらに言い張る。

「そりや喧嘩売つという居座るのは流石に居心地悪いからなあ、義理は果たすぜ。オイ、野郎どもっ!!」

「「「ハイ親分ツ!!」」」

仙香、百花、舞桜——あと何故か先生も——が威勢よく声を張り上げる。

「樹里サマ達も屋台を開いて、祭りを盛り上げてやろーぜ!!」

「「「ハイ親分ツ!!」」」

「ええ……?」

灼が頭を擦りながら残念そうにボヤクが、樹里の耳には届かなかつた。

「なんだろう、普通に良い人達、じゃない……？」

「そ、そうですね。……大丈夫、鶴乃ちゃん」

「うん、どこからどうツツコメばいいのか全力で考え中……」

あきら、いろは、鶴乃の三人は、苦笑いで状況を見過ごすしか無かった……。





FILE #71 蒼海幫VS竜ヶ崎 先方戦（202  
1/03/11 おまけ追加）

こうして……

工匠大祭毎年恒例の目玉イベントである、蒼海幫グループの武術演武披露は急遽変更  
され……

呉 豪杏（ウー||ハオジン）率いる赤竜隊と……

大庭樹里率いるチーム竜ヶ崎との……

五対五の試合となった……

なお、順番は以下の通りである。

↑○赤竜隊

↓■チーム竜ヶ崎

曹 美篤（ツアオ||メイイエン）

—先方—

ひばなせんか  
緋華仙香

小 心蝶 (シヤン||シンデイエ) — 次鋒 — 繚蘭百花 りょうらんももか  
 崙 明零 (ロン||ミンリン) — 中堅 — 高菜真緒 たかなまお  
 羅 子静 (ラオ||ズージン) — 副将 — 宮根 灼 みやね しやく  
 洪 梅華 (カウ||メイファ) — 大将 — 竜宮綾濃 りゅうくわあやの

※ちなみに、崙 明零と洪 梅華の二名は本来、赤竜隊のメンバーではないが……”  
 今日に限り”特別にチームの一員として組み込まれた。

—— 明京町・工匠区

—— 工匠大祭会場・広場

—— 19:00

そこでは既に市内中から集まってきた大勢の観客達で賑わっていた。

祭りの目玉である演武披露が無くなったことで、残念がる声も最初は聞こえていたが、すぐに熱狂へと変わった。

それもその筈。

魔法少女同士の戦いなんて、一般市民は滅多にお目に掛かれるものではない。何せ市条例どころか法律でも禁止されているのだ。見られるとしたら、暴力団が運営している裏賭博場まで身の危険を省みず行くしか無いのである。

「それでは、審判は私が務めさせて頂くヨ」

すし詰め状態となった人込みの中心には、土俵に似た大型の円台——『擂台』<sup>れいたい</sup>が設置されていた。その檯上に立った純<sup>チユン</sup> 美雨がそう言うのと拱手をして、観客達に向けてお辞儀をする。

「それでは、先方。前へ！」

美雨が声を張り上げて合図すると、両サイドから魔法少女が登場する。

まず、西側から現れたのは、曹 美篤（ツアオ||メイイエン）

キョンシーに似た赤色の道士服を纏った、桃色の長髪と丸みの有る温厚な顔立ちが特徴の少女だ。

年齢は美雨と同じだが、実力は侮るなかれ。

豪杏<sup>ハオソン</sup>が日本に訪れた頃から、彼女とは良コンビとして数多の修羅場を勝ち抜いてき

た、猛者中の猛者だ。

次いで美雨は東側を見る。

現れたのは、鎧武者——というよりは足軽のようだった。黒いインナーシャツとハー

フパントツの軽装の上から、籠手、脛当て、二枚胴の甲冑で保護している。

黒髪を後ろに束ねた快活澆刺を顔に映した女性——「緋華仙香」である。

年齢は19歳。

実力は未知数（というよりは樹里が教えてくれなかった）だが——果たして？

審判メイユイの前に立った二人は、真剣な表情でお互いを見つめ合った。

「ぐや」

美篤メイユイエンが、拱手と共に軽く会釈。対する仙香は、勢いを付けて深々とお辞儀！

「よろしくおねがいます！！」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！ みつなつきつるおおお

おおおおおおおおおおおお！！！！

まるでどこぞの色々おかしな戦国武将ゲームの某武将の様な雄たけびを張り上げると、獲物である二槍の穂先を頭上で叩き合わせた！！

ガキインツとけたたましい金属音が鳴り響くと同時に、凄まじい熱風が観客席まで吹き荒れる！！

「ウワーー！ あの緋華ってお姉さん、凄い迫力だねー！」

ビリビリと痺れる様な魔力反応と、肌が焼け付くような熱気を全身で感じながら、鶴乃は感嘆の声を挙げる。

「うん……あの子、大丈夫なのかな？」

隣にいるいろはも、仙香の強い魔力を感じ取った。

今までに無い迫力だ。相当な実力者と見て良いかもしれない。

対する美篤の魔力反応は微弱。ただじつと黙して呼吸を整えているだけ。体格差も仙香とは一回りも小さい。言っちゃ悪いが、迫力の欠片も無い——

「心配無いよ」

「っ!？」

——と想っていた矢先、不意にあきらのそんな一言が聞こえて、エツとなる。

「蒼海幫は、桁違いだから」

「それってどういう」

「すぐに分かるよ」

穏やかな声色とは対照的に、その視線は獲物を突き刺すように据わっていた。

☆

「うっおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!! 竜親分!! チーム竜ヶ崎のみんな!! 二木市芸術文化振興会の皆さん!! 竜ヶ崎の守り神様!! 私に御力をおおおおおおお!!」

仙香が咆哮すると、天に掲げた二槍の穂先に轟つと火が宿り、

「うりやうりやうりやうりやうりや———!!!」

豪快に振り回しながら突進!!

典型的な猪突猛進タイプのような。お世辞にも、武芸を嗜んでいる者の戦い方とは言い難い。

だが、その迫力は凄まじく、槍先の火炎が全身に渦巻いて、さながら紅蓮の竜巻だ。直撃だけで一溜りも無いだろう。

「……」

メイエン

美篤は表情を変えず、まず揃えた足を左右45℃の内股に開き、肘をグツと寄せるように引いて脇を締める『三戦立ち』の構えを取った。

そして、前方に両腕を伸ばして三角形を作り、肘を落とすと、右手を胸の前まで寄せ、問手マンサオと護手ウーサオの型を作る。

『蒼碧拳』の源流——詠春拳の構えである。必要最小限の動きで相手を返り討ちにする、近接戦重視の拳法である。

「っ!?!」

が、目前まで仙香が迫った瞬間——消えた。

美篤メイエンは目を見開く。古武術の一つ「抜き足」か。

直後、背中に強烈な熱気を感じて、タツプスピンの要領で左足を軸にして回ると、

「必殺必勝!!」

既に仙香の二槍が、眼前まで迫っていた。

だが、美篤メイエンに焦りは無い。

尖端の狙いをよく見極めて——楔くさびを打つ様に問手左手を伸ばした。槍の刃先が斜めに伸ばされた腕に沿って、身体の外側に逸れる。そして、もう一本の槍を護手右手で受け止めた。

「っ……うええっ?!」

——しかも、指一本で。

仙香が素つ頓狂な驚き声を挙げるのも無理は無い。

そのまま、美篤<sup>メイエン</sup>は「噴ッ！」と力を籠めると——槍が刃先からバリバリと音を立てて罅割れていき、バアン、と弾け飛んだ!!

「んなあ」

まさかの光景に、仙香はビツクリ仰天の悲鳴を挙げる——

「隙ありですよ」

「えっ?! あぐっ!!」

——間も無かった。

高速で放たれた掌底が仙香の顎に炸裂し、首が大きく後ろへ仰け反った。

更に美篤<sup>メイエン</sup>は少し腰を落として、仙香の膝裏を手刀で払うと忽ち体が宙返り! 床に思

いつきり背中を叩きつけて、仙香は呻く。

「うぐっ……!」

「もう御仕舞ですか?」

美篤の薄ら笑いが、火花の逆鱗に触れた。

「ぐぬう……んまだむあだああああああッ!!」

カッと見開かれた両目がぎらんと燃え上がる。

背筋の力で勢いよく立ち上がると、仙香の足元に魔法陣が形成される。



「固有魔法だ！」

それを見て、咄嗟に観客席のあきらが叫んだ。

魔法陣から火柱が発生し仙香の全身を飲み込む!! 天まで昇らんとする程の業火が、紅蓮の龍に変化した。とぐるを巻いて、擂台を包み込む!!

「業火絢爛!!」

仙香の咆哮——瞬間、擂台の檯上で大爆発が発生!!

轟音が鳴り響いた後に見えた光景に、全ての観客が絶句した。

擂台の檯上全てが灼熱の業火で覆われていた。美篤も、美雨も、魔法を使った仙香自身も——舞台中で舞い踊る炎の群れに完全に吞まれてしまつて、どこにも姿が見当たらない。

「なんて威力だ……」

あきららの顔に不安が浮かんでいた。

まさかここまでとは。蒼海幫のエリートといえども厳しいのではないか……？

☆

——一方、炎の中では。

「ふっふっふっふ」

目に見えるのは四方八方、炎、炎、炎………正に灼熱地獄に相応しい擂台の上で、仙香は低い啞い声を漏らしていた。

「使い魔なら20匹ぐらい一瞬で全滅。魔法少女でも数分で全身の水分を放出して干上がってしまう程の熱量です」

これが緋華仙香の固有魔法である。

目に見える炎はあくまで『幻覚』だ。触れても火傷することは無い。

しかし、彼女自身から半径20m範囲の気温を爆発的に上昇させるのだ!!

「逃げられることは、不可能!! つまり、私の大・大・大!! しょおおおおおおうり  
いいいいいいいいいいいいいい!!!」

仙香は二槍を天高く掲げて、勝ち誇った。

「それが、どうしたヨ」

——しかし、審判の美雨が “何事も無かったように” 炎から現れた。

「大したものではありませんネ」

——そして、相手の美篤メイエツも “何事も無かったように” 炎から現れる。

「ええっ!!? なんで!? どうして!?

二人は、無事だった。

しかも、汗一つかくことなく。

至って涼しい顔で佇んでいる様子が、仙香をビックリ仰天させた。

「蒼海幫の魔法少女は、鍛錬の一環として楊秘輝老師の“火行”を日常的に行っておりますので」

「老師の炎に比べたら、あなたのなんて、そよ風同然ヨ」

「ええー……」

なんなのこの子達——??

二人のあっさりした物言いに、仙香は意気消沈。同時に展開していた固有魔法による灼熱地獄も擂台の上から消え失せた。

「良かったあ……無事だったあ〜」

炎が消えて、ようやく三人の姿が確認できた。

美雨と美篤メイエンが平気そうだったので、あきらはホッと一息。

「ま、あんぐれえでやられるタマじゃねえよな。アイツらはよお」  
その肩をポンと叩きながら、おけらはニツと笑う。

「す、すごい……」

一方、いろはと鶴乃は、目に映る光景の凄まじさに、ただ呆然となっていた。

「っ………うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

一方、擂台の上では、仙香が迷いを振り切るように首を振った後、再び二槍を振り回して猛突進!!

(やぶれかぶれになった……訳では無いようね……)

恐らく、まだ『打つ手』は有る筈。

美篤メイイクは表情を緩めず、再び詠春拳の構えを取った。

「覇ッ!!」

阿修羅の如き形相で仙香が槍の一突きを放つ。だが、美篤はあらかじめ胸の前で構えていた護手右手で外側に弾くと、拳の形にした問手左手で仙香の顎を狙う。

「っ!?!」

「掛かったッ!!」

だが、直撃の寸前で仙香が両足を屈めて回避!!

翼を広げた鳥のように、両腕を大きく広げると――

「喰らえッ!! 大車輪!!」

――轟ツという爆音と共に、身を焦がす程の熱風が擂台の上で吹き荒れた!!

仙香が飛翔と同時に、槍を構えたままの両腕を勢いよく旋回!

大回転と同時に放たれた魔力の波動が、空気を通じて観客席まで響き渡り、彼らを一

斉に驚かせた。

これぞ仙香の奥の手。

刹那的に炎の渦を描き、広範囲の相手を一撃で灰燼にする必殺の大技である。

――が、この大技、弱点が有った。

攻撃の瞬間、仙香が勢い余って大きく『飛翔』してしまうことだ。

そう、『飛翔』とは……『高くジャンプする』ことである。  
つまり。

「足元が御留守ですよ」

「あつ」

屈めば簡単に避けられるのである。

仙香がしまった、という顔で足元を見ると、既にしゃがんで、じつと見上げている美篤メイイエンがいた。

「ハイッ！ アップパーカット!!」

両足を屈めた反動でロケットのように真っ直ぐ飛び上がった美篤メイイエンの掌底が、仙香の顎を叩く。

「あぐっ!」

「ハイッ」

そのまま美篤メイイエンは仙香の顎を鷲掴みにして、背中から床に叩き落す!!

瞬間——

「ぐう……っ!? あだだだだだだだだだだだだだだだだッ!!」

——拳の豪雨が、仙香に降り注いだ!

目にも止まらぬ美篤メイイエンの連続突きが、仙香の上半身に次々と叩き込まれる!!

詠春拳の必殺技——『チェーンパンチ』である。

その名の通りチェーンソーのように拳を回転させることで、高速の連続突きを可能にした伝統的な技だ。

やがて、豪雨が止んだ頃には、仙香の幼さを残した顔立ちはいつの間にか、青あざと腫れがあちこちに目立つ悲壮溢れる形相へと変貌していた。

「うううううう……」

ボコボコになった顔の仙香は両目をグルグルの渦巻きにして、ガクリと倒れた。

後に仙香は、『あれはガトリングガンを至近距離で浴びたのと同じだった』と語ったと

いう——

「緋華仙香。戦闘不能。よって、曹ツアオ美篤メイイエンの勝利」

意識を失った仙香を見て、美雨がそう判定を下した。

観客がわつと盛り上がる。

美篤メイイエンは表情を緩めず、気を失った仙香に拱手を送ると、舞台から退場した。



☆

「バカヤロウ仙香!! 何やってんだ!!」

「りようおゆぶくん……むうしあけありあえんく……」

おけら達とは反対方向の観客席で、大庭樹里が檀上で這いつくばる仙香に向けて怒鳴る。

仙香は相変わらず両目がグルグルのまま。意識も朦朧としているのだろう。言葉も覚束ない。

「チツ! しかし仙香がああもアツサリやられちまうとは……!」

竜ヶ崎の町中から選りすぐりの魔法少女を、更に鍛え上げて連れてきた……筈だった。

だが、蒼海幣の戦闘力は、樹里の予想を大きく上回っていたのだ。

焦燥が走るのも仕方が無い。

今回は、先生の雪辱戦も兼ねているのだ。どうにかして、大将戦まで繋げなくては

……

「竜親分、落ち着いてください」

「百花」

そんな樹里の隣にスツと姿を顕したのは、同じく黒髪黒衣の魔法少女——次鋒・  
繚蘭りょうらん百花ももかである。

「やってくれるな？」

「ええ、やられた分はやり返す。それだけです」

百花は顔の前で拳同士を叩き合わせた。

ガツンツと鈍く重い音が響き、その気合の入れように、樹里はニツと啜う。

「よし、行つてこい百花！ 『拳姫』けんぎの実力を連中に思い知らせてやれ!!」

「承知」

竜ヶ崎が誇る最強のインファイターが擂台を昇り上がる。

……そう、竜ヶ崎の本当の恐ろしさは、これからだ。

○おまけ——没ネタ

へそれではこれより、蒼海幫グループ・赤竜隊の皆様による武術演武披露を開始します。  
呉 豪杏さん！ どうぞ!!<

既に広場は無数の観客達で賑わっていた。

人の海を中心に設置された舞台——擂台の上では、栗色の髪の少女・矢宵かのこ

が元気澆刺と司会を進行していた。

彼女に促されると、豪杏は舞台へ上がり、中心まで歩くと、周囲の観客達に向けて拱手を送る。

瞬間、豪雨のような拍手が一齐に豪杏へと向けられた。流石は大祭の目玉イベント。地元の人達——否、神浜中の人達もこの時を待ち望んでいたのだろう。

〈……………〉

呉 豪杏は瞳を閉じて、魔法少女へと変身。

〈ハッ〉

両足をグツと屈めて、両腕をバツと広げた。同時に両手に召喚されたのは、固有武器の双剣。

今にも飛び立とうと翼を広げた白鳥の如き絢爛さに、観客達が言葉を忘れて見惚れる。

「……!!」

豪杏の瞳がカツと見開かれ、形相に気迫が宿る。

——演武が開始される。

「待て待て待て待てええええええええい!!!」

「何奴ツ!?!」

「!!!!!!」

突然、女性の大音声が聞こえてきて、豪杏と観客一同は何事かと声の方を振り向いた。見ると、長い黒髪の魔法少女らしき衣装の女性が壇上へと上がっているではないか!!

「なんだアイツ?」

「昼間見た豪杏ちゃんにイチヤモン付けてたヤツじゃね?」

「ひっこめー」

「乱入すんなー」

折角の楽しみを台無しにされた一部の観客達が非難を浴びせるが……長髪の魔法少女は意に介さずズンズンと歩み寄る。

「キサマは……!」

「フフフ……」

豪杏がじっと睨みつける。魔法少女が不敵に笑う。

「なんだゴキブリか……」

「だあああああゝゝゝ!!?」

「「「わははははははは!!」「」」」

——が、豪杏のその一言に魔法少女が盛大にズッコケて、観客から笑い声が巻き起る!!

「誰がゴキだっ!?!」

顔を真っ赤にした女性——大庭樹里は、何故か懐からマイクを取り出すと、全ての観客に届かんばかりの声を張り上げた。

「蒼海幫!! 中国人の癖に日本の祭りで主役面で参加してるのが気に食わねえ!! この大庭樹里様がウエルダンにしてやるぜ!!」

まるでヒール役を宛がわれたプロレスラーのデモンストレーションである。

豪杏もまた、袖口からマイクを取り出すと、樹里をがキツと睨みつけて、一言。

「キサマ……バ○サン焚くゾツ」

「だからGじゃないっつの!! ってマジで持つて来てるし!? おいコラマジで火い着けようとするなツ!?!」

再びドツと湧く会場。

「……とにかくだ、そういう上から目線の物言いも気に入らねえ！　そもそも、中国武術ってのは本当に強いもんなのかー!?　パフォーマンスを売り出したのならここじゃなくサーカスにでも行けつてんだ!!　ああん!」

ムツと眉間に皺を寄せる豪杏。

「……中国武術を馬鹿にする者は許せん」

「ゴキジエツト向けんなつ!!」

「例えそれが人間で無かろうと……」

「シリアスな顔でGネタ続けんなツ!!　フン、やるつてかア!!」

お互いにズンズンと近づいて額をくつつけ合わせる二人。

しかし、そこで――

「待テツ!!」

観客席から魔法少女姿の美雨が飛翔し、二人の間に降り立つ!

「……二人とも、ここは一先つ、私に預けて欲しい……」

「美雨……」

「同じ蒼海幫のヤツか!」

「如何にも。けど、あちらに味方するつもりは無いヨ。大勢の人が観てる場所で、喧嘩は

ヨクナイ。ここは【試合】という形で勝負を付けるのはどうか……？」

「分かった」

「ふん、まあ良いだろう!!」

豪杏と樹里は了承して、距離を取る。

へな、なんと!! 演武披露が突然、試合会場に移り変わってしまいました!」

「な、なにこの茶番……」

一幕を見通した後、鶴乃が誰にでも無くそうツツコんだ。

「みんなゴキジェットは持ったかー!!?」

「はい」「いざ」「このとーり!」「勿論」「害虫・即殺!!」

豪杏が号令を飛ばすと、他の赤竜隊のメンバーの曹 美篤、小 心蝶、畚 明零、羅 子静、洪 梅華が一齐に舞台上飛び上がり袖口からゴキジェットを取り出して構える

!!

「だからゴキブリじゃないってば!!」



「イイイイッ!!!」「イー」「イー♪」「イーイー!!」「イー☆」

必死で抗議する樹里の後ろから、緋華仙香、繚蘭百花、高菜真緒、宮根 灼、竜宮綾  
濃の五名が舞台に飛び上がった!

「お前らもノリノリでゴキブリのコスプレすんなアー!!!」

樹里の必死の叫びが虚しく会場に響いた……

試合前座……長いのと、樹里サマのゴキブリいじりが酷くなったので、没にしました。

兵庫県・二木市・郊外

2018 / 07 / 18  
PM 13 : 00

F I L E # 7 2 蒼海幫 v s 竜ヶ崎 次鋒戦

## 相徳寺・墓地

「……………」

スイレンの花束と、水の入った桶を手にした紅晴結菜は、独り、墓地の敷地内を歩いていった。

二木市の商業を統括する立場にある彼女は大人物だ。外に出歩く際は、基本的に、腹心の陸奥光琳か、加賀するがを連れていく筈だった。

虎屋町から離れるなら尚更だ。

「……………先輩」

だが、今日ばかりはしなかった。結菜自身が拒否した。

彼女と、そう眩いた人物との思い出に、対話に、水を刺されたく無かったから。

ここ、相徳寺は、結菜の本拠である虎屋町の邸から二時間も離れた場所に有る、とても小さな寺だ。

墓参りに来るのは、近所の老人達しかいないし、ましてや虎屋町から人が訪れるなんて滅多に無い。

「……………」

真夏の日差しは、結菜の着物を貫いて背中を照り焼くようだった。

うだるような熱気が漂っていたが、結菜の意識は一切、向かなかつた。だから、別に暑くない。

そうだ。

ここに来ると、いつも意識は、“先輩”のことだけ――

「……………」

彼女の墓まで歩を進めながら、結菜は思い出に浸っていた。

――もう12年も経つのか。

時の流れは速い。

しかし、あの時、彼女から教わったことは色あせることなく、胸に刻み込まれている。

かつて、魔法少女になった頃――結菜にとって“先輩”は全てだった。

無論、当時の虎屋町では、“先輩”以外の魔法少女がいなかったのも事実だが……例えば、彼女以外に優秀な魔法少女がいたとしても、結菜は彼女に教わり、付いていくことを選んだだろう。

魔法少女になったのはふとしたきっかけ。

だが、飛び込んだ世界は、まさしくこの世の地獄そのもの。

だからこそ。

“先輩”は結菜にとって、『光』と成り得た。

戦い方だけではない。

この世のあらゆる常識も、そして不条理も、一切合切余すことなく叩き込まれた。

。

ふと思う。

—— “先輩” っつて、一体どんな人だったんだっけ。

彼女と歩んだ日々を振り返ってみる。

“先輩” は美しく、頭が良くて、品行方正で清く正しくて、誰に対しても公平で、誰かの為に犠牲になれた。

でも、やっぱり人間だから——魔法少女になったぐらいだから——稀に黒い所も見えて。

……一概にどんな人物か断定するのは難しい。

けど、間違いなく言えるのは、『偉かった』と思う。

彼女は、母のように厳しく、時には鬼のように厳しく接してくれた。

常識から外れた、多忙と過酷極まる魔法少女の世界に於いても、彼女は皆の基本であろうとした。

それは事実だ。

「……………」

——だが、その彼女はもう。

結菜は抱えるスイレンの花束に、やや顔を俯かせて、齒噛みした。

未だに分からない。

何故、あんな素晴らしい人があんな「末路」を迎えなければならなかったのか？

スイレンの花束を抱える力に、自然と力が籠る。ギュツと抱きしめて、結菜は思う。

自分の責任では無い。

これは魔法少女の世界が歪だったからだ。狂った環境こそが、先輩の清き心に毒牙に

染めた。

自分が駆け付けた頃には、既に『毒』は全身に周り、手の施しようが無かった。

——だから、ああするしか、方法が無かった。

仕方の無いことだ。

だからこそ結菜は、二度目を生み出したくは無かった。

魔法少女の世界を狂ったままでいさせぬように。

自分が、自分の周りの者が壊れてしまわぬように。

——護ろう。

かつて、二木の土地を繁栄させた、赤鬼様守り神のように。  
私がそうならう。

そうだ。

「憎まず 嫉まず 利己的にならず

何よりも誰かの為であり

世の平和と心の安寧を願いつける」

先輩がいつも私に説き続けてくれた、この言葉のような人間に。

「私は今も、護り続けていますよ……先輩」

眩いている内に、先輩の墓が見えた。

今日は何を話そう——

背中が、震えた。

直感で、『悪寒』だと気づいた。

“先輩”の墓の前で、誰かが拝んでいた。

明らかに、家族では無い。

——結菜は、“そいつ”を知っていた。

——喪服の様な、黒い着物を纏う、その女を。

「クカカカ……」

自分の足音を察したのか。

女の口元が愉快そうに吊り上がり、犬歯を顕わにして、嗤った。



聞いただけで、下腹がぎりぎり締り締め付けられるような違和感。

驚愕混乱嗚咽憤怒悲嘆狂乱嫌悪困惑悲哀落胆絶望快樂——

憎しみ。憎しみ。憎い憎い憎い憎い憎い憎い。

憎悪。憎悪。憎悪。

憎悪。

憎悪。

憎悪。

憎悪。

憎悪!!!

私はこいつが嫌い生理的に苦手吐き気がする何でこいつが存在するんだ消えろ憎い殺したいいつか八つ裂きにしてやる女に生まれた事を後悔させてやる悪党が殺してやる殺してやる殺してやる

「……どうして、お前がそこにいるの」

喋っているだけで、喉元までせり上がってきた胃酸が溢れ出そうだ。

苦しい。

吐きたい。

でも、そうしたら、こいつの思う壺だ。無様な姿と、嘲笑うだけ。

いや、吐くよりも、こいつの首を振り切るのが先か——

既に結菜の思考は正常では無かった。

狂い乱れていた。

そうだ。

こいつだけは許せなかった。

こいつの事を、決して忘れてなるものか。

「これはこれは、紅晴結菜さんじゃあ、ごきげいませんかア」

黒い着物の女は拜むのを止めて、すつと立ち上がった。

背丈は結菜よりも小さく、目元は狐のように細い。

腰まで伸びたツインテールの髪は、陽の恩恵を存分に受けて黄金に輝いていた。奇し

くも、結菜の白銀とは対照的に。

結菜の顔を見ると、女の愉悦は更に深まった。

それは『無垢』や『無邪気』とは程遠い。

生来より、人を陥れるのが好きな異常者特有の、残忍極まる悪辣な笑みそのものだ。

黒い着物の、小さな、狐顔の女——

そう、こいつの名は——

「紅葉クレハ 双鷹ソウヨウ……ツ!!」

——嗤うな。鬼が。

☆

2018 / 07 / 18 (土) P M 19 : 30

神浜市・明京町・大東区

工匠大祭会場・広場

「それでは次鋒、前へ！」

一試合目が終了し、熱気冷めやらぬまま早くも第二試合が開始されようとしていた。

審判の美雨メイユに促されて、蒼海幫・竜ヶ崎両サイドから次鋒役の魔法少女達が擂台れいたいに上がる。

まず、西側から現れたのは、白髪を両サイド御団子に纏めた、小柄の少女——小心蝶（シャンシンドイエ）である。

年齢は13歳。赤竜隊のメンバーの中では一番の若手であり、性格も読書好きの大人しい性格である。

武術の腕前も美雨から見れば、まだまだ未熟——それでも普通の魔法少女や魔女相手なら十分通用する技量であるが——。

対して相手は……。

「よろしくお願ひします」

東側に現れた黒髪黒衣の魔法少女——りょうらんももか繚蘭百花は、まず審判にお辞儀。次いで相手の心蝶にお辞儀をすると、自身の顔の前で、拳を叩き合わせた。

刹那、地響きに匹敵する轟音。

「な、何なにつ今の音っ!? ドゴンッて聞こえたんだけど!? 地震ッ!?」

一方、『お組』一同が集う観客席では、鶴乃がビツクリ仰天と目を丸くして慌てふためいていた。

彼女が咄嗟に周りを見渡すと、他の観客達も何事かと騒めいている。

「いや……多分、あの繚蘭さんって人からだと思う……」

「わかったのいろはちゃん!」

鶴乃がギョツと問いかけると、いろははうん、と頷く。

「多分、さっきの緋華さんより、ずっと強いかも……。?? ……どうしたんですか、志伸

さん?」

ふと、隣を見るとあきららが渋い顔で俯いてた。

「……うん。繚蘭百花……。あの人、知ってるよ」

「そうなんですか？」

「うん。小さい頃、全国大会を観戦しに行った時なんだけど……中学生の部にとんでもなく強い人がいてね」

確か、その時の彼女は、まだ一年生だったか。

迫りくる大柄の選手を瓦を割るように正拳で叩き伏せていく様は、見てて爽快感があった。

「あの時以来、公には姿を見なかったけど……まさか魔法少女になっていたなんて……」

あきらは目を細めて百花を見据えた。

県外の情報は意識しないと中々、耳には入ってこない。

☆

「ふ、ふや……」

一方、擂台の上では、心蝶シンテイエが拱手を向けて挨拶。

先の迫力を目の当たりにしたせいか、表情にはかなりの不安と緊張が浮かんでいる。

(どうしよう……この人、絶対あたしより強い……)

だが、魔法少女たるもの、四六時中が戦中。

自分より強い者、相性の悪い者と遭遇する事態など日常茶飯事だ。常に冷静に相手の動きを見極め、隙を見つけ、弱点を突き、怯んだ所を徹底的に叩く——そうして勝たなければ生き残れない。ましてや尊敬する姉弟子——豪杏ハオウケンと美雨——の手前、無様な姿は見せられない。

(なら……)

心蝶シンテイエは腹を決めた。

相手の実力は自分よりも格段に上。隙はまず見せない。

だったら、敢えて攻撃を誘って、隙を作らせるまで。

心蝶シンテイエは、百花を見据えた。

姉弟子からはまだ若輩者と言われる身だが、生半可な経験は積んでないつもりだ。魔法少女の衣装、相手の構え方、体中の筋肉、拳の位置、目の動き、呼吸の仕方——五感を使って、これらをよく観察すれば、相手がどんな人物かは大体予測できる。

恐らく、両蘭百花は、空手一筋の典型的なインファイタータイプだ。

飛び道具の類は使えないと見て良いだろう。

危惧すべきは固有魔法だが——これも、心蝶シンテイエのこれまでの経験と、研究からして

大丈夫だと思った。

真面目一徹な武道家タイプは、『試合における反則行為』を本能的に避ける傾向がある。

幻覚、洗脳、認識障害の類を使う事はまず無いと考えて良い。

（——よし——）

自分が勝つまでの行程をイメージできた。

まず、フェイントでハイキックを誘う。

次に、開いた股に向けて、靠（体当たり）で突撃。

転んだところへ、チェーンパンチで一気に仕留める！

相手の実力はかなり高い。

故に、即効で勝負を仕掛けた方が得策だと判断した。

「はじめー！」

美雨から試合開始の合図。心蝶シンテイエは呼吸を整えて、詠春拳の構えを取る。

一方、百花も空手の構えを取った。



「……………」

「……………」

お互いそのままじつと睨み合う。

「……………」

先に動いたのは百花の方だ。

床を強く蹴り出した豪快な一歩で、心蝶シンテイエの懐まで飛び込む。その気迫に気圧されて自然と後ろに下がった。

刹那、豪風が顔面を叩きつける。それが百花のハイキックによって瞬間的に発生したものだ。察した心蝶シンテイエは咄嗟に腰を落とした。

（掛かった！）

打撃格闘競技において、上段蹴りは大きな加点となるだけでなく、当たり方によっては一撃KOを狙える——空手家の百花にはその考えが染み付いている筈だ。

隙あらばハイキックを打ってくるだろうと読んでいた。

回避に成功した心蝶シンテイエは腰を落としたまま、がら空きの股目掛けて、肩による体当たり（靠）を仕掛ける。これで相手は転倒——そして、勝利だ！

「……………」

だが——百花は冷静だった。

ハイキック中の右足の膝が、くんと折れ曲がり、

「っ!？」

まるで『鎌』の様に、心蝶シンテイエの首を刈り取った!

心蝶シンテイエ、驚愕。だが、直ぐに状況を把握する。

しまった——フェイントを仕掛けられたのはこちらの方だったか。

己の油断を呪うも、相手の術中に嵌ってしまった以上、もう遅い。

心蝶の身体が床に叩き伏せられた。瞬時に百花が左足も首に巻き付ける。

(首四の字固めっ!?)

胡坐を掻いた両足で心蝶の細い首をミシミシと締めながら、百花は背に乗って抑え込んだ。

このまま窒息を狙うか——いや、そうじゃない!!

僅かに視線を上げると、微かに視界が捉えたモノに、心蝶はぞつとなる。

百花が右肘を高く掲げていた。

(拙い……!)

拳を叩き合わせただけであの轟音だ。肘打ちはもつと威力が有るに違いない。

何か手を打たなくては。

手を——

「っ！」

考える間も無かった。

拳よりも強固な百花の肘が、心蝶の頭上目掛けて振り下ろされる。

——刹那、金切り音の様な悲鳴。

☆

「な、なんだと……」

竜ヶ崎チームが座す観客席で、樹里が啞然とその光景を見つめていた。

「百姉さん……?!」

「マジで……?!」

「……………!」

高菜舞桜、宮根 灼、竜宮綾濃も、百花の勝利を信じて疑わなかった。故に、衝撃は計り知れない。

擂台の上で、喚きながら転げまわったのは――

百·花·の·方·だ·っ·た·。

## ☆

「……スミマセン。打たせていただきました」

百花が顔を上げると、詠春拳の構えのまま自分を見下ろす心蝶がいた。

右足に電流が走り、のたうち回る程の激痛——そして。

「……………」

百花は左足で床を踏ん張って、どうにか立ち上がる。

右足の感覚は無くなっていた。

原因は分かっている。百花が心蝶シンダイエをじっと睨み据える。

「詠春拳に、『ツボ押し』は無かった筈だが……」

「独自に改良を加えました。私の使う『蒼碧拳』には有るんです」

「そうか」

百花の魔法少女衣装——その右腕に巻き付いている黒い包帯が、しゆるしゆると伸びた。

「……？」

「君の固有魔法、分かった気がする」

心蝶が怪訝に眺めていると、包帯は動かなくなった右下肢に巻き付いていく。

「私の血の流れが、見えるんだらう？」

全体を隙間無く覆う様に。

「どこを止めれば、身体はどこが動かなくなるって、分かるんだらう？」

やがて、爪先まで完全に巻き終わると、百花がフツと笑った。

次の瞬間——心蝶は目を見開いた。

秘孔を打ち、機能不全となった筈の百花の右足が——動き始める。

「なるほど、それが貴女の固有魔法ですか」

包帯で負傷した体の部位をリカバリーできる——

腿を上げて、爪先をクイクイと動かしながら百花が頷いた。

「昔、山岳救助隊にボランティアで参加していた時だ。遭難者を助けた拍子に、崖から落ちた」

「何事も無かったかのように」屈伸運動をしながら、百花が続ける。

「全身の骨が砕けてちっとも動けなかった。誰も助けに来なかった。ああ、このまま死ぬんだって思った時に、キュウベえが現れた」

心蝶シンテイエは真剣に、聞いている。

「願いの結果が、これさ」

「葛藤は、無かつたんですカ」

「普通の人間」として空手に打ち込み、勝ち続けかけた。けど、仕方なかった」

百花が再び空手の構えを取ると——右足で床を強く踏み込み、飛び出した！

刹那、叩きつけるような突風と同時に百花の正拳突きが心蝶シンテイエに鳩尾に迫る。

近距離まで飛び込まれた！ 回避が不可能と見た心蝶シンテイエは腰を落として右肘を突き出し、百花の拳を受け止める。

「ぐうっ………！」

まるで寺の鐘を強く叩いたような轟音が体の内で反響した。

同時に、右上肢に衝撃・電流・激痛が一斉に駆け走り、心蝶シンテイエは呻きながら後ずさる。

百花が更に右足を踏み込んで追撃！ 剛速拳を繰り出す！

「っ！」

顔を横に逸らし寸手で回避に成功した。

拳がこめかみスレスレを横切った時、心蝶シンテイエはぞつとなる。

——なんて速度と風圧だ。まるで新幹線が目の前を横切ったような……。

直撃したら一溜りも無い。だが、対処しようにも考える間が無い。

右拳が回避されたと見るや、すぐさま左拳で顔面を狙う百花。

これは読めた。心蝶シンテイエはこれもこめかみスレスレで回避する。

そして、

(貫った！)

相手の得意な接近戦に持ち込まれて、読みが当たったのは僥倖だった。

心蝶シンテイエが、百花の左肘に右腕を巻き付けて、体重を落とす。

「っ!？」

百花の背中がガクツと下がり、冷徹な顔が一瞬で焦りに染まった。

大抵の人間は、肘を決められると体の自由も奪われてしまう。

合気道の『肘固め』が良い例だ。

硬直状態となった百花の顔面に向かって、心蝶シンテイエの左拳が飛んでくる。

中指が伸びていた。

(狙いは頬！)

秘孔こつこうりよくを付き、顎を外す。

咬合力を封じれば、百花の拳や蹴りの威力は無くなる筈だ。

無論、即座にリカバリされるだろうが、大きな隙は作れる。

だが、心蝶シンテイエのその攻撃は悪手だった。



「やらせん!!」

裂帛の気合と同時に百花が額を突き出してきた!!

中指が追突! めき、ベきり、と嫌な音が響く。

「~~~~ツツ!!」

骨が粉碎!

悲鳴すら挙げられない程の激痛に、心蝶シンテイエの意識が朦朧する。

「っー!」

だが、舌を嚙んで強引に意識を現実に戻すと、中指が折れた左手で百花の肩を掴んだ。左上肢の肘と肩を決めたまま、両膝を落として屈む。

百花の身体が、その動きに釣られてうつつ伏せに倒れ込む。

「碎サイツ!!」

『肘固め』が決まった状態で心蝶シンテイエは更に追撃!

左腕を抱え込んだまま、背中の上を横転した。

今度は百花の顔が激痛に歪む。

垂直に伸ばされたままの左上肢に、真横から全体重を掛けて押し潰された。加えてあらゆる方向へ引つ張られたせいで肘と肩が粉碎した。

「まだまだ……」

「させるかっ!」

激痛に這い蹲りながらも、百花はすぐに包帯を左腕に巻き付けリカバリしようとする。

完治する前に、心蝶は『チエーンパンチ』で追撃した。

機関銃の連射音が会場に響く。拳の散弾が百花の背中に降り注いだ。これで心蝶の

勝利は確定——

「っ!!」

——と考えるのは浅慮だった。

攻撃を浴びながらも百花はごろりと転がり仰向けの姿勢になった。左腕の包帯は——

——完全に巻き付いている!

拙い。

嫌な予感がした。心蝶は決着を速めるべく、連打を百花の顔面に集中させようとした。

た。

しかし——

「っ!!」

拳が空を切り、心蝶の目が驚愕に見開かれた。

まるでプロボクサーのフットワークの様に、百花の上半身が横に逸れた。

百花が完治したばかりの左拳で反撃!!

ドゴンツ——という爆音が響く。

「ぐはっ!!」

クリーンヒット!!

新幹線の如き速度と圧力を伴った突きが、心蝶シンテイエの脇腹に突き刺さる。

まるで、数十キロの重りを垂直に落としたようだ。その重みに胃が押し潰された。

心蝶シンテイエは吐瀉物を撒き散らしながら、挿台の端まで吹き飛ばす。

そのまま、身体は場外に投げ出され——

「っ……………!!」

朦朧とする意識の中で、自分が落下寸前という事態はかろうじて認識できた。

心蝶シンテイエは、ぐっと両手を伸ばし、端っこに掴まる。

「……………」

「あっ……………」

一息付く間も無かった。

舞台上上がる事を相手が許してくれる筈も無く。

見上げると、既に繚蘭百花が自分の指の先で突っ立っていた。

ぶらさがった状態の心蝶シンテイエを冷たい瞳で見下げている。

「終わりだ」

「……それはどうかかな？」

百花の最後通牒。だが、心蝶は不敵に笑う。

まさか——と、百花が目を見開いた瞬間——

「っ!？」

——百花の左膝がガクリと折れた。

今だ！

心蝶はグツと右腕を伸ばすと、その膝裏に向けて手刀を払う！

「私に連打を許したのが、仇となりましたねえ!!」

チエーンパンチの際、心蝶が秘孔シンテイエを突かない筈が無かった。

既に全身の筋肉への血流を封じていたのだ。

万が一、反撃された場合を見越して。

相手の油断をさそうべく、時間差で効くように。

「っ」

決死の抵抗が功を為した。

百花の腰が宙に浮いた。

彼女が立つ場所は擂台の最端、そこでバランスを崩したらどうなるか——聞くま

でも無い。

滑り落ちるだけだ。

(よし、これで！)

落下する百花の体が、視界の端を横切った。

あとは、自分が再び上に登れば、勝利が確定

---

「馬鹿め」

——だが、そんな心蝶シンドイエの姿を見て。

審判の美雨が、ポツリと、そう眩く。

「えっ?」

何が起こじたのか——心蝶<sup>シンテイエ</sup>は、理解できなかつた。

誰かが、自分の足をグツと掴んで、放り投げた。

背中に硬いものが当たって、我に返つた。

「……あつー!」

それが地面だと気が付いた時、心蝶<sup>シンテイエ</sup>はバツと上体を起こした。

自分の勝利は確定した筈——だけど、今のは一体……?」

刹那、自身の視界に映つた光景に、心蝶<sup>シンテイエ</sup>が驚愕する。

自分より先に落下した筈の繚蘭百花が、擂台に立っていたからだ。

しかし、上では無く——『側面』に。

「ええ……？」

思わず、そんなの有り？——と、ぼやきそうになった。

百花は四肢の包帯を伸ばし、自分ごと擂台全体に巻き付けて『固定』していたのだ。その姿はまるで……

「ス、ス○イダー○ン……」

呻くようにそう呟いた後、心蝶シンテイエは自分の敗北を悟った。

瞬間——全身の力がどつと抜けて、意識が飛んだ。

ガクリと首が横たわる。

審判の美雨がそこで、手を挙げて声を張り上げた。

「小シヤン心蝶シンテイエ、場外！ 繚蘭百花の勝利!!」

——瞬間、観客席から盛大な拍手と歓声が送られた。

百花は擂台の側面に立ったまま、観客に向かって深々とお辞儀した。

☆

——一方、チーム竜ヶ崎が集う観客席では。

「流石百姉！ お見事でしたねえ〜！」

宮根 灼が歓喜と同時に拍手を送るが、隣に座る樹里は浮かない顔だ。

「どうしました？ 竜親分？」

「いや、恐れいったぜ……。まさかあの百花が苦戦を強いられちまうとは」

しかも、あんな鼻くそみたいなガキンチョに——と、樹里は両目をグルグル回したまま担架に運ばれていく心蝶シンデイエを睨み据えていた。

「うーむ、やつぱり油断ならぬですねえ……」

「ああ、だが次こそ楽勝だ……」

樹里はニヒツと笑って、後ろを見る。

自分と同じく黒髪黒衣の魔法少女——たかなまお高菜舞桜の肩がピクンツと飛び跳ねる。



「舞桜。やつてくれるな？」

「ひや、ひやいつ!？」

先方の仙香、次鋒の百花とは比べ物にならない程、小柄でかわいらしい少女だった。一見、とても中堅を任せられるレベルとは思えない。

しかも、こういう場所は初めてなのか、先ほどからずつと緊張で肩を竦めていた。

「だいじょぶだ。いつも通りやれば、な！」

「それは、分かってますけどお……うう、ちよつとトイレ行つてきます……!!」

樹里がポンと肩を叩くが、舞桜は両目をVへの形にして、ぴゅーつと逃げる様に走り去ってしまった。

「……くそ。いつちまった」

「ほんとーにだいじょぶなんですかねえー??」

「だいじょぶさ。樹里サマが保証する！」

「はああく。もうどーなつても知りませんよお……?」

大方、この親分は目先の勝利に囚われて、それ以外の事は碌に視野に入れてないのだらう。

盛大に溜息を吐きながらも、灼は、高菜舞桜が地元で付けられた『異名』を思い返していた。

「ジエノサイド・モンスター……」

不意に舞桜の“アレ”を思い出してしまい、灼の肩がぞくりと震えた。



編  
F I L E # 7 3 蒼海幫 v s 竜ヶ崎 中堅戦 — 前

八坂おけらと蒼海幫から受けた雪辱を晴らすべく……  
工匠大祭の日に試合を申し込んできた、大庭樹里とチーム竜ヶ崎のメンバー……  
しかし、蒼海幫の中国武術の実力は、並大抵では無く……

先方の緋華仙華は、軽く捻られ……  
期待して送り込んだ次鋒の繚蘭百花も、重傷を負いながらも場外寸前で勝利、という  
有様だった……

—— 2018/07/18 (土) PM19:50

—— 神浜市・明京町・工匠区

—— 工匠大祭会場・広場

「え〜〜と、次の審 明零（ロン||ミンリン）なんですがあ……」

チーム竜ヶ崎のメンバーが集う観客席では、副将役の宮根 灼が、監督役の『竜親分』  
こと大庭樹里に、資料を片手に説明していた。

実は彼女らなりに、蒼海幫のエージェントの事は事前に調べておいたのだが……これ  
までの戦績を顧みると、活かされたとは言い難い……。

「対戦相手の中では最年少ですね」

「いくつだ？」

「10歳です」

「ははっ、何だきつきの奴よりガキじゃねえか」

舞桜をあてがうまでも無かったか、と樹里は陽気に笑うが、灼はムツと眉間に皺を寄せた。

「……余裕ぶっこいてんのも今の内っすよ？ なんせこいつは10年に一人の“天才”と言われてるんですから」

“天才”——と聞いて、樹里の表情が固まる。

「審判の純チユン 美雨メイユイと同じく、ボスの王ワン 海龍ハイロンから直々に武術指導を施して貰ってるくらいです。秘蔵っ子ですよ」

「なんだと……ッ!!」

「……………っつ!!」

そんなに凄い奴なのか、と愕然となる樹里の隣で。

その“天才”と戦う予定の黒髪黒衣の魔法少女・高菜舞桜たかなまおが、ガタガタと震える。

彼女の印象は、端的に例えるなら“子兔”そのものだ。

身長175cmの仙華、武道家として鋼の肉体を持つ百花と比べると、違いは明らかである。

身長148cmというチーム随一の小柄な体躯。武術経験なんて一切無くて、衣装か

ら露出した四肢は、白い棒きれのように華奢でしなやかである。

年齢はまだ15歳、魔法少女歴もまだ半年。人生も魔法少女も、経験が圧倒的に足りてない。

そんな自分が果たして“天才”相手に、勝てるのか——考えるだけでも、舞桜は不安で仕方なかった。

その顔はすっかり蒼褪めており、見るからに頼りない。

「だがどんな奴が相手だろうと魔法少女である限り、舞桜に勝てる奴はいねーよ、なっ  
!!」

「~~~~~っっっ?!!?!?」

樹里がニヒツと笑ってポンと肩を叩くが、舞桜はもはや声も出せず、泣き顔をプルプルと横に振った。

「……親分、プレッシャー掛けちゃダメですよ」

「と、ととととととと、ととととととと………」

「トッ」

「またトイレ行ってきま~~~~す!!!」

さつき5分前に行ったばかりだが……舞桜は再び　ぴゅー!　つと脱兎の如く駆け出していなくなってしまった。

「試合までには全部だしとけよ~~~~!!」

「あーあ……」

品性の欠片も無い言葉を張り上げる樹里の隣で、灼は、もうどうにでもなれ、とガツクリ項垂れた。

☆

——一方、お組が集う観客席では。

「凄いねっ！ 中国拳法って！ 感動しちゃった!!」

「あんなもの、真髓の内にも入らないヨ」

中堅戦までには、10分間のトイレ休憩が挟まれ、美雨も一旦、祭りの役員が集う場所まで戻っていた。



鶴乃が興奮冷めやらぬ様子で称賛するも、美雨は首を振った。

「美雨」

——と、そこで、不意に後ろから呼ばれて美雨は振り向く。

居たのは、大将役の洪 梅華（カウ||メイファ）だ。

「梅姉」

「中堅戦、間近。しかし、明零不在。ミンゼリン 連れ戻せ」

「承知」

美雨は、梅華に軽く会釈すると、鶴乃というはの方へ振り向いた。

「面白いものが見れる。来るか？」

その顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

「え、いいの!?! いろはちゃんも行く?」

「うんっ! 是非っ!」

二人はお互いに顔を見合わせて頷くと、どこかへと向かい始める美雨の後を付いていった。

——そして、5分後。

三人は、八坂神社の裏側に生い茂る林の中に侵入していた。

祭りの喧噪とは打って変わって、物音一つ無い、墨を塗ったようにどす黒い世界を、ただ直進する。

堂々と先頭を歩く美雨とは対照的に、いろはと鶴乃は、如何にも「何かが出そう」な雰囲気に肩を竦めていた。

暫く歩を進めると——暗闇が晴れた。

「!!」

いろはと鶴乃が、目を見開く。

そこに見えたのは、ライトアップされた小さな公園だった。

その中央に——何か、人らしき影が見える。

「<sup>ミンリン</sup>明零!!」

「<sup>ユイ</sup>雨ねえさま!!」

美雨が声を張り上げると、甲高い声が返ってきた。

美雨と比べると、とても幼い声に聞こえた——そんな子が中堅??

しかも、こんな人気の無い公園で、何をやっている??

いろはと鶴乃は色々不思議に思いつつも、美雨と共に、その子の下へ歩み寄る。

「げっ」

「なにあれ……?？」

崙 明零という少女を目の当たりにした瞬間——いろはと鶴乃は呆然となった。

予想していた通り大分、幼い子に見えた。

以前、13歳に変身していたフェリシアよりも小柄で華奢だ。外見から推測するに年齢は二けたになったばかりだろうか。

美雨を見るなり、陽の様にパアツと笑う顔はとても愛くるしい。

しかしだ——

「ウォーミングアップは、済んだか？」

「はいっ！」

「……………!!?」

この子もまた蒼海幫のエリートであり、歴戦の武術家なのだ、すぐに理解できた。

片足立ちのまま、両手を広げる——白鳥の様な姿勢でバランスを取っている明零だが、いろはと鶴乃を驚かせたのは、両手の甲と、頭に乘せている「それ」だろう。

なんと、彼女の顔の三倍はあろうかという「鉄球」が乗っていたのだ。

しかも、五個重ねて。

それでも、一切、微動だにせず。

表情も、余裕綽綽。

「勢ッ!!」

明零が右手を払うと、5つの鉄球が一斉に宙を舞った。

瞬間——

「ひいっ!!」

いろはの悲鳴!

響くのはドゴンツ!!という墜落音。

彼女の足元に、鉄球が一つ落ちた。相当の重量なのか、地面が陥没して球体の半分が

埋まった。

次いで——

ドゴンツ!! ドゴンツ!! ドゴンツ!! ドゴンツ!!

と、立て続けに残り4つの鉄球が全く同じ場所に落下する。一つ目の鉄球の上に重な

り、一瞬の内に鉄球タワーが完成した。

「……………」

目の前の光景に、いろは、呆然。

更に明零は「勢ッ!!」と左手を払う。

再び、5つの鉄球が宙を舞い——今度は鶴乃の前に鉄球タワーが築かれた。  
 「んなあつ!!」

鶴乃、ビツクリ仰天。

明零が頭を振り——あとは記述するまでもない。

美雨の前に“それ”が築かれた。

「……………!!?!?!」

同じ魔法少女なのか。

いや、そもそも同じ『人間』の類なのか??

彼女の超人レベルのバランス感覚と、3つの鉄球タワー建立という超絶技巧に、鶴乃というは暫し絶句するしかなかった。

そんな、想像を絶する光景を披露した中国衣装の少女は、何事も無かったように、三人の下までパタパタと駆け寄る。

「あ、初めまして!! 崙 明零(ロン||ミンリン)ですっ! よろしくお願ひします!」  
 輝かしい笑顔でいろはと鶴乃に、丁寧にお辞儀する姿は、年相応の子供そのものだ。  
 故に、二人の混乱はますます深まった。

「は、ハジメマシテ……」

「こ、これ……一個の重さどんくらいなの……?」

鶴乃がおそるおそる尋ねると、

「軽く400kgですね!」

「400!!? ×15だから6t!!??」

それをツ!? 軽くツ!?!」

明零が普通にそう答えたので、鶴乃はビックリ仰天!!

「はいっ! 呼吸法と気の鍛錬をしていたんです! 災害級の魔女に押しつぶされた時

も安全でいられるようになって、宗師様が」

「明零、もう試合の時間。すぐ行くよ」

美雨は既に、背中を向けて歩き始めていた。

「あ、ごめんなさい雨姉様、すぐ参ります! お二人もごいっしょに!」

「あ……」

「うん……」

話してみると……確かに同じ人間、同じ魔法少女であることは分かる。

だけど、この子は自分達の様な凡人とは違う。

「特別」なんだろう。

例えば、異世界からチート能力を持って転生してきたナニカだったり……。

いろはと鶴乃は、明零ミンリンをそう仮定しつつ、怯えながら後を付いていった。

※ちなみに、鉄球は蒼海幫の皆さんが、後できちんと片付けました☆

☆

—— 試合会場

「皆様、お待たせ致しました。只今より試合を開始します。中堅、前へ!!」  
 擂台の上で、再び審判に戻った美雨が声を張り上げる。

盛大な拍手と共に、赤竜隊・チーム竜ヶ崎両サイドから二人の魔法少女が登場した。

西側からは、蒼海幫きつての“天才”少女・崙明零（ロン||ミンリン）。

東側からは、チーム竜ヶ崎の“秘密兵器”・高菜たかなま舞桜お。

お互いに近づき、顔を向き合う。

(うわーうわー!! 小きーい! かわいいー!)

まるで人形のように可愛らしい容姿の明零に、舞桜は少し興奮。

だが——彼女は「天才」だ。

自分の先輩である仙香を、鮮やかに叩きのめした美篤メイエン、百花を苦戦させた心蝶シンテイエよりも、更に強いというのか。

(ううう……。またお腹が……!)

さつき出し切ったというのに——

緊張と恐怖で、舞桜の顔が蒼褪めていく。狼に睨まれた子兎のようにプルプルと震え始めた。

「舞桜——!! しっかり繋げろよ——!! 先生の雪辱戦はお前にかかってるんだぞー!!」

「だからプレッシャー掛けちゃダメですつてば!! つてかその言い方だと副将の私負ける前提ですよねっ!」

(うううう、分かってます、分かってますけどお………)

敬愛する親分の気持ちに十分応えてやりたいのだが、緊張に弱いのは生まれつきなの



でしようがない。

プルプル全身を震わせながら、お腹を抱え込む舞桜。見るからに情けない……。対照的に、明零ミンリンの姿勢は堂々たるものだ。

緊張も不安も表情からは一切感じ取れない。

それもその筈——もの心付いた頃から武術に明け暮れてきた彼女は、幼少期から試合に出て、自身を魅せ続けてきた。このような大衆が集う場所は慣れっこである。

「おいおい、あの黒い方の嬢ちゃん、大丈夫か？」

「あっちの小っちゃい女の子の方が強そうだぜ？」

「すぐ終わっちゃうかもね〜」

観客から見れば、この時点で既に勝敗は決まっているようなものだ。

しかし——

(……？　この人……)

明零ミンリンだけが、その天性の勘で察していた。

高菜舞桜の感じられる魔力から推察するに、実力は凡百の魔法少女と変わらない。

——それが、不可解だった。

(…………?)

どうして違和感を覚えたのか、分からない。

とにかく、戦ってる内に分かるかもしれない——と、明零<sup>ミンリン</sup>は詠春拳の構えを取る。

「っ……………よしっ!」

対する舞桜も、人の字を手を描いて三度のみ込むと、複数回深呼吸を繰り返して、どうにか落ち着きを取り戻した。

「試合開始!」

「……………」

美雨の合図と同時にゴングが鳴った。

——しかし、明零<sup>ミンリン</sup>は動かない。

先の舞桜から感じた“違和”がどうしても引つかかってしまい、打って出られなかった。

一方、舞桜は懐から何かを取り出していた。

それは——

(グリーンフシード??)

明零<sup>ミンリン</sup>が凝視する。

その数、なんと5個——舞桜は掌の上で、扇状に広げたそれらをじっと見つめる。

「どーれーにーしーよーうーかーなー？」

「……………」

ふざけているのか、と一瞬、明零は思ったが、そうでは無い事はすぐに分かった。

舞桜の表情——先刻の緊張と不安は拭い去られ、決意を固めたかの如く引き締まっていた。

嫌な予感がする——

無論、今なら攻撃のチャンスだ。試合に於いて先制攻撃は勝利への近道である。

しかし、明零は自ら勝機を捨てた。

一歩後退して、舞桜の様子をじっと観察する。

「てーんーのーかーみーさーまーのーいーうーとーおーりー……………よし、これにしよ  
う！」

舞桜が一つのグリーンフシードを選び取った。

残りを懐にしまった後、選別した“それ”を胸元にある自身のソウルジェムの前で翳す。

「……………んんっ!？」

瞬間、明零は目を疑った。

グリーンフシードに溜め込まれていた“穢れ”が、舞桜のソウルジェムに吸い込まれて

いく。

鮮やかな桃色が、見る見るうちにドス黒く染まっていった。

今更説明するまでも無いが、グリーンフィードとは普通、ソウルジエムから穢れを吸収する為に使用するもの。

しかし、高菜舞桜の使い方は全く逆——

「……………」

ぞつと、背筋が寒くなるのを感じて、明零ミンリンの足が自然と後ずさる。

幼少の頃から一般人、魔法少女問わず多種多様な武術家と闘ってきた明零ミンリンだが、こんな相手は、今までに有った事が無い。

正に意味不明。理解の範囲外。

故に、読めない。

高菜舞桜が、これから何を仕掛けてくるのか、全く予測不可能。

故に、攻撃できない。

「よせ！ このままだと……………」

「いえ」

漆黒に染まり切ったソウルジエムを見て、美雨が叫ぶ！

だが、舞桜は否定した。

ソウルジェムを凝視するその顔に浮かんでいるのは—— //微笑//。

既に、自身の勝利を確信したような、不敵な笑み。

先の子兎とは一変して、戦士と化した舞桜に、二人は身構える。

——瞬間、舞桜の全身を光が包み込んだ。

幾条もの漆黒の稲光が激しい雷鳴を立てて、擂台の上を駆け巡る！

突風が発生し、周囲の観客席から悲鳴がけたたましく響く。

凄まじいエネルギーの波動が、舞桜の全身から爆発的に発生したのだ！

明零ミンリンと美雨は、顔を庇いながらも両足を強く踏ん張り、どうにか場外寸前で堪える。しばらく耐えていると、風が止まった。

二人が顔を上げると、擂台の中心で大爆発が起きたかのような光景が広がっていた。夥しい量の漆黒の瘴気が、まるで火事場の煙の如く猛烈な勢いで天に昇っている。

魔力反応から察するに、高菜舞桜は魔女には変化していない———ということは、これが固有魔法なのか？

ソウルジェムに穢れを満たして、何を仕出かそうというのか？

普通に考えれば、自殺行為だ———読めない。全く読めない。

「……………」

暫く、明零は固唾を飲んで、黒煙の如き瘴気を見つめていた。

鬼が出るか、蛇がでるか——いずれにしろ、これまでの経験を活かして迎え撃つのみ。

しばらくすると、黒煙が何かに吸い込まれるように、消え失せた。

直後——姿を顕した“それ”に、全ての人間が瞠目する。

「何、これ……?」

「卵……?」

観客席は不安の声でざわついていた。

明零と美雨も緊張の面持ちで“それ”を見つめる。

見えたのは、直系・高さ5メートルはあろうかという、巨大な真っ黒の球体だった。

びきつ

「えっ？」

「どうした明零」<sup>ミンリン</sup>

「雨<sup>ユイ</sup>ねえさま、今、あれから音が……」

まるで、卵の殻に罅が入ったような——そんな音が聞こえた。

ピキツ……

ピキツ……

ピキピキピキ……ツ

「まさか……?!？」

悍ましい気配を感じて、明零<sup>ミンリン</sup>の肩が、ぞわりと震えた。

黒い球体の中に、“ナニカ”が居る——

内側から殻を割って、外に出ようとしている。

ピキピキピキ……ッ

ピキピキピキピキピキ……ッ

罇が球体全体に走る。

音はどんどん大きくなる。

拙い。

——拙い!!

「試合中止!!! みんな逃げろおおおおおおおおおお!!!」

美雨の判断は早かった。

腹の底から鳴らした怒号が、全ての観客席に響く!!

瞬間——

黒い“卵”が、バリンッと弾け飛んだ!!!









ましてや、高菜舞桜本人ですら無い。  
それは、全長7メートルはあろうかという――

“怪獣”であつた。

――

「やっちまえ。ジエノサイド<sup>虚</sup>・モンスタ<sup>魔</sup>ー……!!」

そう呟く大庭樹里の顔は、既に勝利の歓喜に満ち溢れていた。

編  
F I L E # 7 4 蒼海幫 v s 竜ヶ崎 中堅戦 — 中

「やっちまえ……ジエノサイドモンスター」

突如、擂台の上に現れた“怪獣”。

恐怖に慄き逃げる人々。四方八方で響く阿鼻叫喚の叫び声を耳にしながら、大庭樹里は愉快そうに笑った。



(\*) へな、何すんだコラア——  
!!?

「ぶふっ!？」

(\*#) へおいつ！ 笑うんじゃねえ!!

「あいたー!？」

顔面の形が見事(\*)に変わってしまった。

灼が思わず吹きそうになり、\*(樹里)に頭をポカンと叩かれる。

\* (樹里) が前を向くと、鬼の如く顔を真っ赤に染めたひめなが、頭から湯気をブン吹かして喚き散らした。

「コンのKBG(クソバカゴキブリ)がアああああああ!!! アンタのせいで私ちゃんの祭りが台無しじゃん!! どーすんのコレツ!? 責任取んなさいよ、責任ツ!!」

(\*) へへッ、周りなんざ知った事か。勝ちやあいんだよ、勝ちやあ!

\* (樹里) は得意気に胸を張って威張り返すが、その隣で灼が滝の涙を流していた。

「……おやぶーん……。今、審判が何て言ったか聞いて無かったんすかー?」

(\*;) へえっ?

ごめん、ぜんっぜん聞いて無かった——そう答えると、「どうせそんなこつたらうと思つたよっ!？」と灼が泣き喚く。

『試合中止』ですよお!! 『試合中止』いゝ!!





\* (樹里) の全身がワナワナと震えた。『試合中止』と聞いて、彼女が一番に恐れていることは——只一つ。

(\*) ; (へうわああああああああ!! 先生すまねえええええつ!!

チーム竜ヶ崎、先生の雪辱を晴らせぬまま退場である。

\* (樹里) が泣き喚きながら、綾濃の足下で何度も土下座を繰り返す。

しかし、対する綾濃はというと、至極冷静のままだった。寧ろ、三人の喧噪には一切興味関心が無いといった様子で、最初からじつと擂台の上のみを、真剣な眼差しで見据えていた。

(\*) (へ……先生?)

\* (樹里) がおそるおそる尋ねると、綾濃はようやくこちらを振り向いた。

「藍家代表」

「ん?」

「試合中止は、取り下げて頂けませんか?」

「ハア? それってどういう——」

ひめながジト目で綾濃を睨むが、彼女はフフツと微笑んだ。

「まだ、続行中ですから」

綾濃の言葉に、ひめなは「えっ?」と目を丸くした。

☆

「お頭！ 避難誘導は、済みましたわ！」

「みんな安全なところへ案内したよ！」

「おう、こつちもだ!! みんな、ありがとな!!」

避難誘導を終えたおけら達、お組の魔法少女メンバーは再び擂台の前へと集まっていた。

生まれたばかりの“怪獣”は、G u r r r : G A R r r u : と腹の底を絞るような唸り声を響かせながら、未だ一步も動かずに、対峙する明零<sup>ミンリン</sup>を興味深そうに見下ろしている。

まるで、子猫と成人男性のような体格差だ。この時点で、誰の目から見ても、勝負は

見えていた。

「……な、なんなんですか、アレ？」

いろはは、擂台に立つ巨塔の如き怪獣を、呆然と見上げていた。

確か、二木市にも、魔導管理局は存在し、調整員が常在している。住んでいる魔法少女全員が『調整』を受けている筈である。

故に、不気味だった。

『調整』を受けた魔法少女は、肉体が致命的な損傷を受けない限り、魔女にはならない筈だ——

いや……あれは果たして魔女なのだろうか。似てる様で、全く異なる気がする。

そして、肝心なのは高菜舞桜。彼女は、どうなってしまったのだろうか。

「エイリアン？ あるいはプレデターでしょうか？」

「言ってる場合じゃないよ！ お頭！」

真剣な顔で天然ボケな事を言うゆうなに、ツッコむあきら。

おけらの方を振り向くと、彼女は「応よっ！」と力強く頷いた。

パンツ！ と、胸の前で両手を合わせると、目を瞑って——

「神浜の大地に眠りし人魂よ。我らの護神<sup>まもりがみ</sup>よ。我、八坂起良<sup>おけら</sup>の願いを聞き届け給え——

「そう唱えると、目をカッと見開いた！」

「魔女!!……いや、怪獣? ああもうどっちでもいいや! とにかく、人々に危険が迫っておりますので——この地に、『結界』を!!」

瞬間——初めて見る光景に、いろはは驚愕した。

地面から、淡い青色を帯びた半透明の光が発生して、擂台を包み込んだ。

一瞬の内に、ドーム状の結界が目の前で形成された。中には、未だ睨み合う明零と異形の『怪獣』、そして審判の美雨メイユが閉じ込められる形となった。

「凄……い……!」

「どうよ環の字!——これが調整屋の奥義つてもんだ!」

おけらがフンスツと鼻息を鳴らして解説する。

あの結界は、魔女を完全に閉じ込めるが、魔法少女は出入り可能だという。

つまり——

「よし、僕たちは、結界に潜り込んであの怪物を倒す! 環さん、由比さん、手伝っても

「らえる!?!」

「は、はい!」

「もちろん!」

既にあきらは魔法少女に変身していた。いろはと鶴乃も覚悟を決めて変身する。

「よし! 香春さん、避難した人達の安全確保は?」

「既に常盤さんと夏目さんには連絡を入れました! お二人共、避難所へ向かってる筈ですわ! それに……」

ゆうなが何か言おうとした瞬間、全員の頭にテレパシーが聞こえてきた。

「<こちらら赤竜隊の豪杏!> ハオジン 今回の手柄はキサマラに譲つてやル!」

「<こちらら美篤.> メイエン つまり、お客様の事は気にせず、思う存分戦ってくださいネ!」

「<こちらら子静.> スージン 負けたら承知しませんヨ!」

咄嗟に周りを見渡すと既に豪杏達、ハオジン 赤竜隊メンバーの姿は無かった。

この緊急事態だ。率先して、人々の避難と安全確保に動いているのだろう。流石の行動力である。

「ありがとう、豪杏さん! 助かるよ!」

「礼を云う間は無駄! さっさと行ケ!」

「わかつてる!」

「環さん、由比さん、行くよ!!」

「はい!」

「オツケーツ!!」

テレパシーで豪杏に礼を伝えると、あきらは、いろはと鶴乃を率いて結界に突入しようとする。

しかし、その瞬間――

〈待ってくださいサイ!!〉

「「ツツ?!」」

悲鳴のようなテレパシーが聞こえてきて、三人は思わず足を止めた。

〈来ないでくださいサイ!〉

「えっ」

必死の呼びかけは、あろうことか、結界の中にいる明零からだった。

彼女が続けて飛ばしてきた次の言葉に、

〈まだ試合は、続行中です……〉

「へっ?」

あきららは、目を丸くして呆気にとられるしかなかった。

☆

結界内——擂台の上。

「……………」

「GURUUA

GURUUA

GURUUAaaaA……………!!」



崙 明零（ロン・ミンリン）は、先ほどまで高菜舞桜 “だった” ものと睨み合っている。

周囲が騒然とする中、不思議な事に、彼女と “怪獣” の間に流れる空気は静寂に満ちていた。

二人以外の全ての人間が、世界から消え失せてしまったかのように。

二人の間だけ、時が止まったかのように。

お互いをじつと品定めしているかのように。

そう——明零は “怪獣” と自分に、ある共通点を見出していた。

純粹なる闘いへの欲求。そして、勝利への果てしなき渴望。

故に二人共、相手の姿しか見えていなかった。

当然、周りの音も一切聞こえない。聞こえるのは、お互いの呼吸音だけ。

どちらかの足が一步でも前に出た時が—— “戦闘開始” だ。

だが、二人は相手への強い警戒心から、 “それ” を躊躇しているようだった。

「強がるな、明零」

「雨ねえさま」

我慢比べは永久に続くかと思われたところで、審判が二人の世界に入り込んだ。

明零が振り向くと、隣で美雨メイユイが、詠春拳の構えを取っていた。

「一人じゃ危ない。加勢するよ」

そう言うのと、明零は「いえ」と首を振った。

「ねえさまは、審判を続けてください」

瞬間、美雨の眼が刃物の様に光るが、明零は構わず言葉が続ける。

「今、皆さまにもお伝えしましたが、試合は……続行です」

「正気か」

「大丈夫です。……彼女は最初から、わたししか興味ありませんから」

「……」

——そうは云うが、と美雨は顔を「怪獣」へと向ける。

容姿を端的に表すなら、「百眼の大蜥蜴」と言った所か。

全身を覆う魚鱗は、さながら鋼鉄の装甲のようであり、灯りを受けた表面が桃色を基調とした不気味なサイケデリック状に光っている。明零を見下ろす顔には、複数の「眼」が張り付いている。百眼は全て鮮血のような真紅に染まり切り、地響きに似た唸り声は、今にも決壊しそうな理性を紙一重で保っているかのよう。

何故、高菜舞桜がこんな姿に——

美雨の眼には、『孵化したばかりの魔女を全身に纏った』ように見えた。その姿こそ「百眼の大蜥蜴」なのかもしれないが……



「!!!」

同時に爆発音のような大咆哮が放たれて、二人の耳を劈き、脳を揺さぶった!

大地震でも起きたかの如く、視界が上下に弾む!!

「ぐっ……!」

「明零避けろっ!!」

「えっ」

耳を塞ぐタイミングが遅れた。衝撃に怯んだ事が最大の仇となる。

ぐおんっという風切音と、明零の視界が鉛色に染まったのは、同時だった。

「G U u U A A a !!!」

「グハッ?!」

「怪獣」の巨大な尻尾が目前に迫ったのだと理解した時には、腹部に鈍痛が走り、胃酸を撒き散らしていた。

鋼鉄の一撃による激痛は背骨に届き、首から下の感覚が麻痺する。

明零の小さな体は、空に向かって弾き飛ばされた。

「くっ……」

「oooooooooooo!!!」

それでもどうにか空中で体勢を立て直そうとする明零を、  
「怪獣」は更に追撃!!  
岩肌に覆われた巨大な掌で、宙に浮かぶ明零を叩き落す!!

「アアアアアアアアアア!!」

高速で播台に落下し、全身を強かに打ち付ける明零。激痛の余り悲鳴を挙げた。

「怪獣」は攻撃を休めない。

「GUUaaA!!!」

今度は、巨大なハンマーの如き右足を真上から降ろして踏み潰そうとしてきた!  
明零は咄嗟に転がって回避。

「っ! させるか!」

全身に痛みと痺れが走っているが、彼女の闘志はまだ潰えていない。

バツと起き上がると、踏み下ろされた足に乗って、「怪獣」の身体を駆けあがった。

さながら本物の猫になった気分だ。怪獣の身体は岩山のように頑強で、至る所に鋭利な棘が生えており、非常に険しい。

だが、明零は怖気づくことなく、俊敏な跳躍力でそれらを躲し、後頭部まで登り詰めた。

「……………」

足場の悪い岩肌で、両足をしっかりと付く。息を整えて、拳を軽く当てる——

「O G O」

「怪獣」が手で後頭部を払おうとした——瞬間、

「征ッ!!」

明零、必殺の一撃!!

「G O O A ! ?」

ドンツという衝撃音と同時に、怪獣の頭が大きく前のめりになった。

寸勁——超至近距離から拳を打ち込む、別名『ワンインチパンチ』とも呼ばれる



☆

—— 結界の外。

その衝撃的な光景に、その場にいた全員が、絶句した。

「な……っ!?!」

「な、なにあれ……っ!?!」

「ね……ねえっ!! どう見ても食べてるっ!! 食べてるよねあれ!?!」

「ひ、ひどすぎる……」

おけら、ゆうな、鶴乃、あきららが愕然となる。

お組の魔法少女達も、明零の言葉を信じて、試合の様子を固唾を飲んで見守っていたのだ。

しかし、その結果は——無残たるものに終わった。

「っ!」



「!? 環の字!!」

全員が顔面蒼白となる中で、唯一いろはだけが結界に向かつて駆け出していた!

「もう見てられない! 助けに行きます!!」

明零の言いつけを破ることになっても、構わない。

彼女は今、感じている筈だ。かつて、自分が感じたものと同じ——“死の恐怖”を!

あんな想いは、二度と味わいたくないし、誰にもさせたくない!

早く助けないと——

私一人だけでも、早く——

〈待テ〉

だが、突如頭に響いたテレパシーに、いろはの目が見開かれる。

「美雨さんっ!?!」

〈明零の言葉を忘れた力。今は試合中ヨ〉

何を言ってるんだろうか、この人は——いろはの眉間にグツと皺が寄った。

「そんなこと言ってる場合じゃ……このままだと明零さんが!!」

〈無問題ヨ〉



けたたましい破壊音と同時に、「怪獣」の前歯が数本空中へ弾き飛んだ!!  
 明零が内側から、ワインチパンチを放ち、破壊したのだ。

上下に動く歯の隙間を掻い潜り、不安定なベロの上を両足で立って構えていた。

口の中に差し込んだ、「光」に飛び込んで脱出する明零。だが、今の攻撃で「怪獣」が激昂した!

「OGOGAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!」

「ツツ?!」

音速でハンマーパンチを繰り出し、宙に浮かぶ明零の身体を再び擂台の上に叩き落す

!!

先程よりも遥かに凄まじい痛みと全身の痺れに、明零は声すら挙げられず――

「っ……………」

そのまま眠るように、意識を失った。

☆

—— 結界の外。チーム竜ヶ崎の観客席。

「あわわわ……」

「へっ、楽勝だったな……!!」

蒼褪めた顔で固まる灼の隣で、樹里は満足そうに笑う。

次の瞬間——

「鉄拳制裁じゃコラあああああああああああ!!!」

ズドoooooooooo!!と、今度はミサイルの如く!飛び込んできたおけらのグーパーンチ

が樹里の顔面に炸裂ッ!!

「ウボオあああああああああああああああああああああ  
!!!??」

「親ぶーーーーーん?!?」

数メートル先まで吹っ飛び、露店のゴミ箱に頭から突っ込んだ樹里に、灼が慌てて駆け寄る。

「八坂の!! てめえまで!」

樹里がゴミ箱を被った状態で起き上がると、頭から角を生やして顔を真っ赤に染めたおけらがいた。

「うるせえバカゴキイ! 勝負! つてのはな! お互いの力が拮抗するから盛り上がるもんなんだよつ!! あんなひでえもん見せりや客はドン引きするに決まってるあ!!」

「まあ確かにねくく……」

灼が滝の涙を流しながら、おけらの言葉にうんうんと頷いた。

何せ10メートル近い化け物が、10歳になったばかりの、小さな女の子を一方的に甚振り、拳句の果てに食べようとしたのである。

周りに観客がいたら………いや、いなくても、退場案件だろう。

間違っても、公共の場で披露して良いものではなかった。

「へっ、試合は続行つて決めたる！ 勝ちやあ良いんだよ勝ちやあ！」

「親分、悪足掻きはそこまですて……さっさと逃げる準備しましよ、ね」

吠えるゴミ箱（樹里）の肩に、泣きながらポンと手を置く灼。

「なんだよっ！ 舞桜は勝つただろーが!!」

「そういう次元の問題じゃないんすよもお……」

視野が狭すぎるゴミ箱（樹里）に、ガツクリと肩を落とす灼。

自分達は、祭りで余計な騒ぎを起こし、あんな凄惨且つ残酷な光景を繰り広げたのである。

工匠の住民達や客から非難の嵐を浴びる前に、とつと逃げ去りたかった。

果たして……

崙 明零はこのまま負けてしまうのか……？  
そして、チーム竜ヶ崎の運命は……!?





編 FILE #75 蒼海幫 VS 竜ヶ崎 中堅戦 | 後

目次

アバン

Aパート

Bパート

崙 明零（ロン＝ミンリン）は、6人兄妹の末っ子として生まれた。

物心付いた頃より、武術が共に有った。

特別な理由などない。その時、たまたま父がアクション・スターのDVDを鑑賞して、たまたま、明零がアクションの真似事をしただけ。

しかし、その動きを見た時、明零の父は度肝を抜いた。

そして、思ったそうだ。

——『この子は天才だ』と。

明零が武術の門を叩いたのは、5歳の頃である。

当然、日夜繰り返し返される過酷な修練に心が押し潰されたこともあったが、明零は同門の大人の兄弟子達さえも驚愕する程、恐るべきスピードで武術を吸収していった。

明零自身、不思議に思うくらい、中国拳法が肌に合っていた。

映画で練り広げられるアクションスターの功夫を見ると、一瞬後には、全く同じ動きができていた。その時点で動作の手順を理解していた。

——順調に修練をこなしていく彼女だが、転機は起きた。

7歳の頃。

自宅の近所の商店街で、強盗団が横暴の限りを尽くしているという噂を耳にした。

本来なら、対応は警察の役目だが、彼らはいつも、警察が駆け付けた頃には、忽然と消えていた。痕跡一つ残さずに。

ある日、同じ強盗団と思われる集団が近所の店で暴れていると聞いた明零は、すぐに駆け付けた。

相手は五人の大男——銃やナイフも持っている。

だが、明零の敵ではなかった。彼女の卓越した武術によって、彼らは赤子の手をひねるように次々と打ち倒されていった。

——だが、ここで、明零が予期せぬ事態が起きた。

一人の女が現れた。床に倒れた男たちの言葉から、そいつが『ボス』だと明零は認識

した。

今思えば、ここで冷静になっていれば良かったのだ。

義憤に駆られて頭に血が昇っていた明零は、女に挑みかかった。

——しかし、彼女は『魔法少女』であった。

いや、ただの魔法少女であったのなら、明零の敵ではない。

だが、女は武術家であった。

中国でも、最も精妙な技術が要求される、内家三拳の一つ、『八卦掌』はっけしやうの使い手であった。

魔法と武術の併用——それに成す術も無く、明零は叩き伏せられた。

それは、今まで感じたことが無い程の屈辱だった。

自分が今まで習得してきた武術が——全く意味を為さなかったのだから。

悔しい——

病室で仰向けになり、点滴を繋げられた明零の身体は、まさに満身創痍だった。両掌を踏み砕かれ、膝を割られ、腰の骨を叩き折られた。全治6カ月——退院しても、車椅子生活が確定だと。失意のドン底にいた時、“そいつ”は現れた。

『君の願いを叶えてあげるよ』

悔しい——

『君は強い。しかし、人のままだと限界はある』

悔しい——

『身近の大切な人達を、護りたいのなら、僕と“契約”するしかない』

悔しい——

だから、強く、なりたい。

みんなを護れるために。

誰よりも、強く。

その為には――

「わたしの願いを、 “最高の師” に届けさせて」

数カ月後、崙 明零は、純 美雨と出会い――

“蒼海幫”の家族となる。

☆

――これは、ある修行の時のこと。

明零の意識は、深海の中にあつた。  
息が出来ない。

脳に酸素が足りず、四肢も思う様に動かせず、ただ沈んでいく。  
視界が蒼から暗闇に徐々に染まっていく。

水圧が増したのか、体が鉛のように重くなっていく。

自分は今、死んでいるのか。

それとも、生きているのか。

どちらも判別できないまま、明零は、  
「師」へと問いかけた。

——宗師さま。宗師さま。

「明零よ。私の声が聞こえるか」

——苦しいです。辛いです。宗師さま。

「そうか」

—— どうしてですか。 どうして私ばかり、こんな辛い思いをしなきゃいけないんですか。

「それが、君の望んだ結果だからだ」

—— 苦しい、苦しい、つらい、つらい、いたい、いたい。

—— もう、辞めたいです。 宗師さま。

—— もう、いやだ。 こんなこと。

「君は、強くなりたいと誓った筈だ」

—— ……………。

「大切な人を護る為に、誰よりも強くなりたい、と。 あの時、君の眼には確かな覚悟を感じた。 嘘偽りだとは思えなかった」



.....。

「そして、君は“天才”だ。明零」

.....。

「才能に合った修練を課すのも、師の務め」

—— わかっている。

—— でも、もう、いやだ。

—— こんなこと、続けたってただ辛いだけで、強くなった気がしない。

—— もう、やめたいんです。

「明零よ。ならば、何故、私に声を掛けた？」

.....。

「とうに諦めているのならば、何も言わずに、ただ沈めばいいだけだ。修業は終わり、才無き者」と私に判断される。『蒼海幫』からは用済みだ。故郷に帰って静かに暮らせばいい」

.....。

「.....魔法少女になった時、何を得たのか、よく思い出してみなさい」

.....

「深海から地上にいる私まで気持ちをお届けた、ということとは」

.....!!

「まだ、諦めていない証拠ではないのか」

.....

.....

明零の身体は、深く、もっと深く沈んでいった。  
視界が完全に暗黒に染まった時、再び宗師の声が聞こえる。

『明零』

『こわいか。死の恐怖を感じているか』

『それを与えた私を“憎い”と思うか』

『ならば、良いことを教えよう』

『かつて、この地——日本には“塩田剛三”という高名な武術家が居た』

『ある時、弟子が彼に“武術の極意”を問いかけると、こう答えたそうだ』

『“

”、と』

☆

——そうだ。

「……………」

音は聞こえない。

目も見えない。

体の感覚も無い。

本当に深海に沈んだようだ。

生きているのか。

死んでいるのか分からなかった。

でも——指くらいは動いてくれるのかも。試しに頭で『動け』と命令したらどう

か――

〈……明零?〉

動いた。ピクツと。本当に、僅かに震顫する程度だけど。

同時に、敬愛する姉弟子の声が、ぼんやり、本当に小さくだが、聞こえた。

――よし、耳もちゃんと聞こえる。

ここで明零は、自分が「生きている」ことを認識した。

――今度は左手の指を、動かしてみよう。『動け』………よし、動く。

――今度は右足の指を。………よし、動く。

――左足の指は。

――右手は拳を握れる? 右手首は可動できる? 腕は? 肘は? 肩は?

関節は?

――左上肢はどうだろう? 今になって物凄い痛みを感じる。落下した時、強く

ぶつけたのかもしれない。だけど………拳は握れた。右手首の可動域は良好。腕の

上下はOK。肘、肩、関節……問題ナシ。

——いける。

そう判断した時、両足の太腿からふくらはぎにかけてカツと熱くなるのを感じた。

同時に、筋肉に鋭い痛みが走る。だが、明零は自分の“生”を強く実感できた。

両膝は問題無く動く。ならば、グツと曲げてみよう。さつき両足の指が動いたのを確認しただったら、床を爪先で踏んでみようじゃないか………よしOKしたら両肘も床についてみるか力をぐつと込めて——お、いいぞいいぞ体が少し起こせたよし、ここまで来れたんだ最後のステップだ思いっきり踏ん張って立ち上がってみよう。

それ、いつせーの、せっ!!

「……………ッ!!」

彼女と闘う“怪獣”が。  
彼女を見守る美雨が。

結界の外で、固唾を飲んで見守っていた——全ての魔法少女達が。  
その瞬間に、瞠目した。

——彼女は、立ち上がった。

——崙 明零が、“復活”したのだ——  
!!



—— そうだ。

「みなさん」

明零の声は震えていたが、両足はしっかりと床を踏んでいた。

—— 私は、まだ、戦う相手の声を。

「お待たせ……いたしました」

詠春拳の構えを取り、「怪獣」をしつかりと見据える。

—— “高菜舞桜さん”の言葉を、何も聞いちゃいない！

「やれるか？」

美雨が問いかける。その顔に心配の色は無く、「待っていたぞ」という期待が溢れていた。

明零は力強く頷いた。

「はい!!」

彼女は、声を張り上げる。

「ウォーミングアップは、終了です!!」

結界の外から、ワア、と騒ぐような声が一斉に聞こえてきた。

だが、明零の意識は「怪獣」に集中している。

再び、擂台の上は、二人だけの世界となった。

「G I i ……!!」

「怪獣」が、呆然とした様子で明零を見下ろしている。

復活を遂げた姿に、聊かたじろいでいるように見えた。しかし、顔面に生える百眼はより紅く血が滾っており、なんで倒れないんだ、という猛烈な苛立ちに染まっているように感じられた。

「『高菜舞桜さん』」



「……………」

明零も、拳を向けて、静かに腹式呼吸を始めた。

気を練るための基本は腹式呼吸だ。(※)

腹式呼吸に慣れたら、臍せいかたんでん下丹田に意識を集中してそれを繰り返す。

丹田と呼ばれる場所は上・中・下の三か所ある。

上丹田は眉間に、中丹田はだんちゆう中と呼ばれる胸の中心——いわゆる胸骨の上に、

そして下丹田が、臍から一寸下にある。

この下丹田が気を練る上で最も重要なのだ。

吸った息を臍下丹田に蓄えるような気持ちでゆっくり腹式呼吸を繰り返す。

臍下丹田に気が溜まるのが実感できるようになったら、息を吐くときに、その気を、股の下を通し、背を昇らせる。

脊椎にそって昇らせるのだ。

そのまま、頭の頂点を通し、正中線を降ろして鼻から出す。

吸うときにまたまっすぐ下丹田に気を降ろす。

こうして、気を体に巡らせるのだ。脊椎にそった気の通り道を督脈といい、体の前面の正中線にある通り道を任脈という。

この任脈と督脈に気を通すことを、小周天法という。

小周天法ができるようになる、今度は、丹田から、五臓六腑をとおり四股の指先に至る十二経路すべてに気を巡らす。

これを大周天法という。

気を練ることは、勁（ジン）の大小におおいに関わりがある。

勁というのは、その安定した姿勢から発する筋力プラスアルファの力だ。

体のありとあらゆる関節を鞭かヌンチャクのように使うことによつて得ることができきる。

呼吸法もまた大切な勁の要素なのだ。

十分に気功を行わないとうまく勁を<sup>ジン</sup>発することができず、

したがつて打ちは威力の無いものとなる。

崙 明零のワンインチパンチの威力の秘訣が、それである。

彼女は宗師・王 海龍から、〃気功〃と〃魔力〃を同時に身体の内側で練る術を修得していた。

「G u u …… !!」

「…………… !!」

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | A | A | A | A | A | A | A | 「 |
| A | A | A | A | A | A | A | A | O |
| A | A | A | A | A | A | A | A | G |
| A | A | A | A | A | A | A | A | O |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |

お互いに呼吸は完了した。準備万端。あとは――



—————「どちらが先に動くか、だ!!」

先に飛び出したのは高菜舞桜の方であった。その踏み込みの強さに、床がバコンツと  
 いう音を立てて爆発した。天高く飛び上がった彼女は、組み合わせた両手を大きく振り  
 上げた。

そして、全力を込めたハンマーパンチを明零に振り下ろす!!

「……………」

高菜舞桜の勢いは、先ほどとは比較にならない程、激しい。あんな状態で攻撃を諸に  
 喰らえば即死は免れない。免れても、致命傷は必至だ。

だが、明零はどこまでも冷静だった。

頭上に迫る巨槌の如き剛腕に向けて、軽く、拳を向ける。

—————明零。

—————中国の武術は大自然の理に従っている。

—————大自然の中では、確かに弱者は強者に喰われる。

—————それが本当の強さなら、自然に受け入れられるだろう。



——だが、凶暴なのはいけない。

——凶暴すぎると、やがて我が身を破滅に追いやるものだ。

(※)

今にも潰さんと、ハンマーパンチが目前に迫った瞬間——ふと、明零の脳裏に師の教えが過る。

——だから。

——凶暴な相手が全力で拳を振るってきたら。

——そつと、拳を返してあげなさい。

——力を籠める必要は無い。優しく、穏やかな気持ちで、だ。

「……………!!」

明零が、添えるように拳を当てた。

ゴオオンツ!! という爆音を放って、舞桜のハンマーパンチと衝突する。

瞬間、結界の外に居る全員が再び目を疑った。

明零の小さな拳が……彼女の身体より一回り大きい舞桜の拳を———“止めた”のだ!!

———体の中で、“氣”が十分に練られている状態なら。

高菜舞桜の必殺の一撃は筆舌に尽くし難い程力強く、重く———明零は確かに感じていたが、体がその威力に悲鳴を挙げることには無かった。

明零の身体が後ろに仰け反る。体が、全筋肉が、関節が、骨が。内臓が、体中を走る血液が、気が、魔力が、衝撃をバネの様に吸収し、そして。

———“面白い事”が起きる。

「OGG……!?!」

舞桜の両肩がガタガタと震えた。顔面に映る百眼がギョロギョロと忙しく蠢く。あからさまな困惑の感情がはつきりと映し出されていた。



「……………」

明零はそう言うが、審判の美雨は、今の技が何か理解していた。

—— “化勁”だ。(※)

読んで字のごとく勁を自在に変化させることである。

今、明零は自分の勁をバネの様に応用して、相手の全力を返した。

日本の武道にもよく似た概念がある。すぐれた「合気」が化勁に近い。

「……!!Giiiiiiii……Giiiiuuuarrua……!!!」

してやったりといった笑みを見て、舞桜はようやく現実を理解した。

明零に両肩を破壊されたのだ。

彼女の使う、中国拳法の体術によって——

「GUua……Aaaaa……」



「ミヤオツミヤオツ、ミヤオン!!」

猫のように軽快なステップで飛び回り、レーザーをひとつひとつ、紙一重で回避していく。

☆

——  
結界の外。

「……ねえ。なんであの子、あんなことできるの……?」

「……………わかる訳ないよ」

苦笑いを浮かべながら不意にそう尋ねてきた鶴乃に、あきらは首を振ってそう答えるしかなかった。

「舞台にいる明零と美雨に危険が迫った場合は、いつでも助けに行けるようにスタンバ

イしていた彼女達だが、その気概も失せつつあった。

“怪獣”と互角以上の戦いを繰り広げる崙 明零の超絶的な技巧に。全員が唾然と呆然を繰り返しながら見つめている。

これでは、助けに行つたところで、“邪魔”にしかならない。

「……………!!」

——頑張って、明零さん。

いろはだけは、両手を組み合わせて明零の無事を祈っていた。

☆

「……………」

高菜舞桜は困惑していた。

崙 明零のスピードは倒れる前と比べて明らかに飛躍していた。

チームメンバーから回避不可能とさえ言われた百眼の光線も、彼女は難無く回避した。息一つ乱れずに。

——これが、蒼海幫の実力。

——これが、中国拳法。

——これが、天才少女の神髄。

「G u u u U u u U u u ……!!!」

負けてなるものか——と、舞桜は低く唸った。

自分とて、「秘密兵器」と呼ばれた身だ。

本来、結界を含めて『一つの生命体』と呼ばれる魔女を、自分の身体一つに集約させることで、究極のパワーとスピードとタフネスを得たのだ。

正に、「怪獣」のように。

誰にも負けることは無い。誰にも追いつくことはできないし、許さない。

そうだ、誰にも——



「……追いついてみてくださいよ」

「G I……!?!」

G U U A ! ! !  
「

明零の、心中を見透かした様な挑発的な一言が舞桜の逆鱗に触れた。

舞桜はお辞儀をするような動作で、背中を丸めた。剣山の尖端が、一斉に明零へと向く。

「ミヤオツ!!」

明零、再び猫の真似——両手を丸めて、上体を低くして構える。

瞬間——舞桜が咆哮!!

「G O A A A A A A A A A A A A A A A A ! ! !  
「

同時に、背中の剣山から突起がミサイルの様に一斉発射!!

だが、攻撃は想定内。明零は再びミヤオミヤオ鳴きながら、猫の如き俊敏さで自分の

身長くらいは有る大型の突起を、ひらり、ひらりと回避していく。

10秒間避け続けると、攻撃が止んだ。

明零が周りを見渡すと、擂台はすっかり針山地獄と化していた。

「それでももうおしまいですかっ!？」

「……HAS」

「……!!」

舞桜の顔面は百眼に覆われていて表情は見えないが、今の声は明らかに愉悦に染まっていた。

明零は目を細めて、近くに突き刺さった一本の針を睨む。

『g.i……g.i……』

「……!」

気を研ぎ澄まして、耳を澄ますと、確かに聞こえた。

——間違いない。針の中に、『何か』が居る。



引き締める。そして――

「征ッ!!」

『giiiiiiiiii!?!?』

至近距離で近づいてきた使い魔の一匹を、ワンインチパンチで迎撃！爆音を伴った一撃は、皮膚を軽く貫き、使い魔は桃と朱色の血漿を撒き散らしながら、擂台の端まで吹っ飛び、絶命した。

「G U A A A A ! ! !」

だが、使い魔ばかり構ってもいられなかった。

攻撃した瞬間の隙を見て、舞桜が瞳の光線で明零を狙撃する！

「ミヤオツ！」

『giiiiiiiiii? giiiiiiiiii!?!?』

彼女は読んでいた。

明零はまたも猫のように姿勢を低くして、近くに居た使い魔の腹の下に潜り込む。

舞桜の放った光線は、使い魔の球体に直撃！金切り音の様な悲鳴を挙げながら、使

い魔は体がドロドロに溶けて絶命した。

液体状となつた使い魔の身体が明零の全身を覆う。

「ぷはっ」

『giiiiiiiiiii!!!』

「っー」

又ルリと顔を顕す明零。

すると、至近距離に居たもう一匹の使い魔が、その鋭利な足で明零の顔面を貫こうと  
していた。

「ミャオンー」

踏み抜かれるよりも早く、明零は猫の様に鳴いて、飛翔した！

足と球体の付け根を、蟹ばさみの如く両足で捉えると、腰を捻る。

『giiiiii!』

すると、使い魔の視界がギョーンツ一転した。

床に薙ぎ倒されたそれは、そのまま明零の「盾」となる。

『giiiiiiiiiiiiii!?!?!』

舞桜が放つた光線が顔面に直撃して、使い魔は悲鳴を挙げて絶命した。

明零は今、攻撃回避と使い魔の撃退、そして高菜舞桜の攻撃への防御を同時にやって

のけた。

まさに、神業であった。

☆

—— 結界の外。チーム竜ヶ崎の観客席。

「な、なんかヤバくないですか……?」

「クソっ!」

「親分っ!」

いきなり結界に向かって全力疾走する樹里を、灼が呼び止める!

「ちくしょうっ! 灼うツ!! アタシに続けえ! こんなことでウチの『秘密兵器』が敗れるなんてあつちやならねえんだツ!! 絶対になアツツ!!」

振り向いた樹里の顔は泣いていた。灼が慌てて羽交い絞めにする!

「ちよちよちよっ!?! 待つてくださいよ! 乱入したらほんつとーに終わっちゃいますからねウチらツ!!」

「うおおおおおおお!! 頑張れ——!! 頑張るんだ舞桜——!!」  
「……………」

「先生! 試合ばっか見てないで、たまにはこのバカ止めてくださいよっ!!」

——  
後に灼が頭痛薬を飲んだのは、言うまでも無い……。

——  
結界内・擂台。

「Grrrrruuu……!!」

高菜舞桜の苛立ちは頂点に達していた。

それもその筈である。全力を尽くして攻撃してるのに、一向に決定打にならない。





り囲んだ！

「……ミャオ!!」

全ての尻尾の先端が、大きく仰け反った時——明零が鳴いた。

☆

——どうしてだ。どうして、崙 明零は倒れない。

「G G G G ……」

高菜舞桜の百眼には、狼狽の色が浮かんでいた。

今、彼女の眼の前で起こっているのは、明零がまたも猫の真似で、自分の攻撃を回避している光景であった。

鞭の如き俊敏さで風を切って迫ってくる鋼鉄の尾——計8本による同時攻撃を、明零は涼しい顔でひらりひらり、又は、のらりくらりと避けていく。それは正に極上の

劇団が演じる曲芸の様で。

ふと、審判の美雨を見ると、その顔に心配の色は微塵も無く、ただ、その華麗な動きに見とれていた。

「G U u u u u ……!!」

—— 私**は**強い。

—— 竜親分が「秘密兵器」と呼んでくれた。

—— もも百姉さんは、頼ってくれた。

—— 先生が評価してくれた。

—— ななのに……!!

〈焦っているんですね。高菜舞桜さん……〉

「!? G O O A !!」

不意に明零のテレパシーが頭に響いてきた。

再び心を見透かされた様な一言に、そんなことないっ！　と言わんばかりに声を張り上げる舞桜。

〈無駄です。あなたの攻撃には、さつきみみたいな精細さが、感じられない〉

「G U u u ……」

〈大ざっぱに振り回しているだけ。パターンはもう、読めました〉

「g u ………………」

舞桜が後退した。

自分の意志では無く、明零への「恐怖」により、自然と足が動いていた。

百眼は小刻みに震え、相貌は血の気が引いたように、白く染まりつつあった。

〈私の「勝ち」です〉

明零を取り囲む尻尾群の動きが、停止した。

その内の一本に向けて、明零が拳を突き出す。

「征ッ!!」

——ズドン。

盛大な破裂音が、静寂に満ちた結界の内部で木霊した。

☆

——暗闇の中を、明零は泳いでいる。

そこはかつて、師の修行によつて沈められた「深海」の領域よりもつと深く感じられる場所であつた。

視界は全て漆黒に染められており、何も見えない。

水圧のような「何か」が全身を締め付けてくる。そのせいで身体が鉛の様に重く、動きも鈍い。

だが、明零は暗黒を両手で掻き分けながら、只管、前へと泳ぎ進む。

宛ては無い。何も感じられない。

ただ、信じていた。

果てしない暗闇の向こうに、彼女の「心」があると――

そう、全ては、彼女を知る為に――

彼女の言葉を聞く為に――

自分の言葉を、彼女に届ける為に――

(どうして……!!?)

(どうして……倒れてくれないの……!!?)

おぼろげだが、声はつきりと聞こえてきて、明零は目を見開いた。

—— 『そこ』に、いるんですね。高菜舞桜さん。

声の方向に向かって泳ぎ進める。

声が次第に大きくなる。

（私の方が強いのに……体だって、こんなにも大きいのに、どうして……!!）

怒りに震える様にも、泣きじやくっている様にも聞こえた。

すると、小さな「何か」が、暗闇の中心に現れた。

目を凝らし見ると、それは「怪獣」・高菜舞桜の顔面に生えた百眼の一つであった。血管が走り、真紅に染まっているそれは、ギロリと明零を睨み据えていた。

〈高菜舞桜さん〉

怒りを顕わにした「瞳」に近づいて、明零が小さく語り掛ける。

声に驚いたかのように、大きく震動した。

へどうしてあなたは、その力が欲しいと思つたんですか？

(……………)

問いかけた途端、**「瞳」**が、下を向き、暫しの静寂が訪れた。

それは彼女の躊躇いを顕していた。

(……………馬鹿に、されたから……………)

**「瞳」**は明零をしかと見つめ、小さく声を挙げた。

「えっ」

(みんな、体が小さくて、碌に運動もできなくて、気も小さな私を……トロイとかノロマって、馬鹿にするだけ馬鹿にして……！ でも、いつまでも馬鹿にされて溜まるかって……………)

真つ赤に染まった瞳は、涙に濡れていた。

刹那——暗闇に映像が映し出されて、明零は顔を上げた。

これは、高菜舞桜の過去だ。魔法少女になる、少しばかり前の出来事だ。

普通の人間だった頃——彼女に友達はいなかった。

身体が小さく、生来の気の弱さのせいでスポーツは全く出来ず、そればかりか外に赴くことすら縁に関心を持てなかった。

必然的に、クラスメイトに必ず二、三人はいる『調子の良い連中』から、槍玉にされた。

……いや、彼ら彼女らの言葉は、言葉の暴力と断ずるには可愛らしく聞こえ、まだ『寄り』の範囲内だと明零は思った。

だが、舞桜にとっては『虐め』だったのだろう。

彼女は、自分の『弱さ』が酷いコンプレックスだった。

だから、自分の容姿や、動きの鈍さに関する物言いは、全て心に突き刺さってしまったのだ。

そんな舞桜の唯一の楽しみと言えば、ごく稀に公開される『怪獣映画』を観に行くことであつた。

ある時、怪獣映画を観た帰り道——彼女の前に、『それ』が現れて、転機が訪れる。



『キュウベえ、わたしを魔法少女にして!!』

【願事は決まったかい?】

自然と舞桜の視線は横を向いた。

映画館の外壁には、今しがた鑑賞した『怪獣映画』のポスターが貼り付いていた。

舞桜はそれを指差し、強く言い放った。

『あのポスターの………アレだ! 怪獣に変身できるようにしてよ!!』

キュウベえは逡巡するように、下を見つめた。

【……君の願いは叶えられるだろう。だが、とてもリスクだ。もしかしたら君は君で無くなるかもしれない】

『馬鹿にされたままの人生よりはずっといいよ!!』

【……………】

キュウベえは少し黙り込んでいたが——やがて、意を決するように舞桜をしかと見て、言い放った。

『……分かった。良いだろう。契約は成立だ』

以上が、経緯だった。

（――キユウベえにそう願ったの。そうしたら、いつの間にか、こんな力が自分には合って……）

彼女は“その後”を語り出した。

最初は、普通の魔法少女として戦っていた。だが、ある時、倒した魔女のグリーンフシードの穢れをソウルジェムが勝手に吸収してしまい、“怪獣”の姿になっていた。

当時は、理性を失い、闇雲に暴れ回っていたところを、大庭樹里や両蘭百花ら、竜ヶ崎の面々が止めてくれたのだという。

〈そう、だったんですね……〉

（ごめん、最低だね。わたし……与えられた力で、調子に乗って……こんなの、自分の

力じゃないのにね……)

静かに語りかける瞳から、怒りは感じられなかった。

ただ、自分の「弱さ」を克服できない悲しみと諦めが感じられた。

しかし、

〈いいえ〉

明零は、穏やかに。優しく微笑んで、首を振った。

〈高菜舞桜さん、あなたは凄い人でした〉

(えっ)

〈わたしが今まで戦ってきた誰よりも強く、大きい人でした。正直に言うと、負けるか

もって、本気で思っちゃいました〉

(そう……)

〈ありがとうございます。舞桜さん〉

明零は、瞳に向かって、ペコリとお辞儀した。

〈あなたのおかげで、わたしはもっと、前に進むことができました。武術の極意に、近づ

くことができました。だから、これからは〉

—— もっと、自分の力に自信を持つてください。

☆

「試合終了!! 崙 明零の勝利!!」

——暗闇が晴れた。

擂台の上は、あちこちが爆発したように破損し、見るも無惨な状態となったが、それ以外に大きな物的被害も無く、けが人は一人も出ずに済んだ。

死闘を勝ち抜いた明零には、周囲から盛大な拍手が送られたが、彼女はそれらにまるで意に介さなかつた。

「高菜舞桜さんっ」

担架に運ばれていく彼女に駆け寄って、声を掛ける明零。

「大丈夫ですか？」

「うん……」

変身が解け、普通の少女の姿となった舞桜の顔は、微笑んでいた。

「ありがとう、明零ちゃん」

「エッ？」

「あの力を……竜ヶ崎のみんなが、頼ってくれた。凄いつて、強いつて……評価してくれただけ……次に出すのは、『怖い』とか、『ヤバイ』とか『エグイ』とか……そんな言葉ばかり。だから」

——感謝されたのは、はじめてだよ。

そういう舞桜は、敗者には見えなかった。

長い憑き物が落ちたみたいに、晴れやかに見えた。

「これからは、もうちよつと、自信を持つてみるね。この力、『好き』になつてみるから」

「ええ。また、会いましょう」

「うん。……次は、負けないからね」

舞桜は言いながら小指を差し出した。

「うんっ！ 約束ですっ」

明零も力強く頷くと、小指を差し出して、舞桜のそれと絡み合わせる。

二人は指切りをして、離れた。

担架に運ばれていく舞桜に、舞零は拱手をしながら、いつまでも見送っていた。

—— かつて、師・王ワ 海龍ハイロンが教えてくれた話を、明零は思い出していた。

かの『塩田剛三』が、弟子に教えたと言われる「武術の極意」。

それは、

『自分を殺しに来た相手と “友達” になること』

☆

※ちなみに、チーム竜ヶ崎の応援席では——

「燃えたよ……。燃え尽きたぜ……。真っ白にな……」

ベンチにもたれかかって、真っ白な灰と化す、劇画調の大庭樹里が居た!!

——ご愛読ありがとうございました。

——大庭樹里先生の 次回作に ご期待ください!!

「いや、なにやる気無くなったからって勝手に連載終わらしてんですかっ!? まだ私がいますよっ!? 続けて続けてっ!!」

「……………」

「あつ、ダメだこれ完全に逝ってるっ!? 先生、何とかしてくださいっ!!」

「絶体絶命!! 果たしてチーム竜ヶ崎は無事大将戦まで勝ち抜くことができるのだろうかっ!!」

「いやなに真顔で無駄に威勢の良いナレーションしてんすかっ! ってか微妙に傷つくんですけどっ? 私超がんばるんで期待してくださいマジでっ!!」

——結局、頭痛薬と一緒に胃痛薬も併用した、宮根 灼であった。





編  
F I L E # 7 6 蒼海幫 v s 竜ヶ崎 副将戦 — 前

— 2 0 1 8 / 0 7 / 1 8 (土) P M 1 3 : 1 0

— 兵庫県・二木市・郊外

— 相徳寺・墓地

— そんな、先輩……

— ごめんなさい、結菜……

——  
なんで、こんな……信じていたのに……！

——  
仕方が無かったの。

——  
許さない。許さない……！

「どうしたんですかア？　親の仇にでも会ったような顔しちゃって」  
「……っ!!」

ハッと結菜は我に帰り、憎悪の滾った灼眼で “それ” を捉えた。

喪服の様な黒い着物を纏った、吊り上がった瞳のある狐顔の、自分よりも小柄な、小さな女——

名は、

「紅葉 クレハ 双鷹 ソウヨウ……」

「お久しゅうぶりですなア、紅晴結菜さん。ご壮健で——」

双鷹はそこで手元に携えていたパイプ型の煙草——「キセル」を口に咥えて煙を吸い込んだ。

鼻腔に広がった臭いを充分に堪能すると、満足そうな顔で

「——何よりですわア……」

言いながら、口から煙を吐き出した。

諸に顔に浴びて、結菜が顔を不快に聳める。

「……先輩は、「タバコ」が嫌いだった」

「でも、「キセル」の臭いは好きだと言うてはりましたよ？ お香みたいだつて」

くつくつと笑い、再びキセルを咥える双鷹。

「だから、わざわざ墓前で……噴かしてあげたんですわア」

幼子を相手にするような、双鷹の猫撫で声が結菜の神経を逆撫でする。

白煙が再び、結菜の顔にかかった。

あからさま挑発行為だとは、理解できた。

しかし、〃自分の知らない先輩を、こいつは知っている〃——その事実が、結菜の理性を狂わせていく。

「どうして……?」

「んー?」

「どうして、貴女が、此処にいるの」

自然と握りしめた拳の中で爪が深く食い込んでいた。結菜が唸るような声で尋ねる。

「そりゃあ先輩さんとウチは、浅からぬ仲ですからな。友人の命日に墓参りに赴くのは当然の義理ですがな」

「貴女が、先輩に会う、資格は」

「無い、と? それは面妖ですなア。二木市には、『同郷外の者は墓参りをしちやいかん』という、アホみたいな条例でもございますので?」

結菜はかぶりを振った。

駄目だ。

感情的な物言いはこの女に通用しない。

そんなことは、分かっている。しかし——

「無くても、私が、許さない。貴女のせいで、先輩は」

「此処に眠ることになりました——と?」

「そうよ」

昂る怒りは抑えられそうになかった。射殺す程の鋭利な瞳で見据える。

「ふーん」

双鷹が笑みを消した。顎を掻いて考え込む仕草を見せた後、

「……じゃあ、本当にウチが殺したかどうか。今から証拠、確認してみますか」

懐から、取り出されたものに、結菜の目が大きく見開かれた。

スマートフォンだった。

双鷹は早速、動画アプリを起動して“証拠”を再生する。

「あー……」

しばらくすると、双鷹は口をあんぐりと開けた。

画面で繰り広げられた光景に、呆気にとられた様子だった。

「あーあーあー……。やっぱり違うや無いですか。先輩さんを殺したのは——」

口元が愉悅の弧を描いた。

一瞬、結菜の怒りが頂点に達した。

「いッ!!?」

瞬間、パンツと破裂音。

掌に焼ける様な熱が走って、双鷹はビクリと仰天した。

手元を見ると、上半分が弾け飛んでバチバチと火花を散らす自身のスマートフォンが無惨な姿があつた。

「!? あーあーあー、何をしなさるっ!」

「うるさいわねえ……」

結菜はただ、直立不動のまま、阿修羅の如き形相で双鷹を睨んでいた。

余計な事を口ずさめば、次はお前だ、と暗に告げていた。

だが、双鷹に怯えは無い。

スマートフォンがノーモーションで爆破したのだ。次は自分自身がそうなるかもしれないのに。

「ええんですかー?? 器物破損で訴えますよオ??」

「見てわからなかつた? スマホが『勝手に』が破裂したのよ」

確かに結菜は何もしなかつた。端から見れば、彼女の言葉通りである。

双鷹の口元が、愉悦を描いた。クカカカ、と低い笑い声を漏らす。

「マジでウチが、先輩さんをいてこましたと思ひ込んでる様ですなア? ま、責任転嫁は

紅晴のお家芸ですが」

結菜の目が真紅に瞬く。

「おっと、その『御力』で、ウチの首を振り切ろうなんて思わんでくださいよ」

「……」

言われて結菜は、我に帰った。

周りを見渡す。

危ないところだった。衝動的な殺傷は、この女の思う壺だ。

まず、こいつが自分の前に堂々と姿を見せた理由を、考えるべきだった。

「うちも、結菜さん程ではございませんですが……100人以上の従業員を養ってる身でしてなア。そう簡単に、死ぬ訳にはいかんのですわア」

言いながら双鷹は、首を搔つ切る仕草を見せた。

殺れるものなら殺ってみろ、という意図が、挑発的な笑みから伺えた。

ここで双鷹を殺した所で、不利になるのは結菜の方だろう。

奴は既に配下の者を忍ばせているのだ。自分を護る為ではない。

『結菜が、人を殺した』——その決定的瞬間を、撮影する為の——

「……」

僥倖と言うべきか。

頭から熱が引いた。自然と、視界が双鷹以外の景色を受け入れた。

ここは、先輩が眠る地だ。殺し合う場所ではない。



「お互い背負うとするもんは同じじゃ。だから、仲良うしてくれんと困りますなア」  
愉悅のまま、双鷹は言い放つ。

拳の緊張を解いて、結菜が尋ねた。

「何が目的なの……?」

「そりゃあ勿論、今後の事業の為に。稀代の大親分殿には、是非ともご援助頂きたく……」

「馬鹿げているわね」

「ありもしない罪を押し付けて、親の仇みたいに憎む方が馬鹿げていると思いますア??」

「どう言おうと、貴女のような鬼畜に協力する義理はないわあ」

毅然と結菜は断る。

が、双鷹がグツと足を一步踏み出して、結菜に詰め寄った。耳元に唇を当てて、囁く。

「落とし前をつけるべきは、結菜さんの方じゃございませんか?」

「……………」

——駄目だ。

——振り切れ。

——飲み込まれるな。

「先輩、さんはウチの優秀な従業員じやった。婚約者もおつた。……結菜さんが、あんな事さえしなければ……」

結菜の瞳が、再び憎悪の熱を宿す。

解放されたばかりの掌を、再び指の中に封じ込めた。

「うるさい……貴女が悪いのよ、双鷹。貴女が先輩を誑かし、誤つたレールを敷いて、歪ませた」

「それはちーつと違いますなア」

結菜の言い分に、呆れたように溜息を付くと、双鷹は続けた。

「最初<sup>ハナ</sup>っから壊れておつたんですわ」

「……!」

「だって、そうでしょう? 延々と続く命がけの戦い……深刻な食糧不足<sup>グリーフシード</sup>が引き起こす同じ人間同士の騙し合いや殺し合い……まともでいられなくなるのは当然ですがなア」

「……」

「二線を越えて、帰る場所を失い各地を流浪する魔法少女達に、『健康で文化的な最低限度の生活』を保障してやるのが、ウチの会社の理念ですがな」

黙れ。

人を悪事に加担させる反社組織の長が。そもそもお前のせいだ。お前が「悪」だから、先輩を——

「っ」

結菜は、口から飛び出しそうになった言葉をどうにか飲み込むと、踵を返した。

双鷹が首を傾げて問いかける。

「おんやア〜?? まだ頼み事の了解は得ていませんがア?」

「これ以上、貴女と話す価値も無いわあ……。大人しく帰りなさい。せいぜい、夜道に気を付けることねえ」

振り向かずに結菜は、脅しを込めて「警告」した。双鷹の口端が吊り上がる。

「ええんですかー? 本当にええんですかー?? それで」

微塵も通用しなかった。楽しそうに笑っていた。

———それでいい。

双鷹の目的が、自分にあるのなら、相手にするだけ時間の浪費だ。

結菜は、愉悦混じりの問いを無視して、歩き始める。

しかし、

「憎まず 嫉まず 利己的にならず

何よりも誰かの為であり

世の平和と心の安寧を願い続ける  
」

双鷹が結菜の地雷原に触れた。

「ッ」

結菜の足が止まった。

反応しても意味が無いと分かっていた。

だが、聞かざるを得なかった。

鬼の瞳が、真紅に燃え上がる。

「先輩さんが結菜さんに説いた教え……ありやあ、初めて聞いた時、ゾツとしましたわア」

結菜の拳が震える。

双鷹は嗤つて続ける。

「結菜さんも魔法少女なら……その時点でもうお分かりになられていたでしょう。『絶対に正しい人間はこの世には存在しない』って」

結菜が息を飲みこんだ。

多くの参考書がそのように記述している事は、当時から知っていた。

この世は、真面目よりも要領——狡賢い者、有能な怠け者、自分を優先できる者が勝利し、成功するのだと。

それは人間社会でも、魔法少女でも、同じだと、結菜は知っていた。

「そもそもありやあ……今、思えば、勝手に言つて結菜さんに強要しとただけとちやいますか……。無理なノルマを押し付けて下のモンに無茶をさせることにどんな意義があるというのやら?」

全くもつて理解不能だと双鷹は吐き捨てた。

「政治家を御父上に持つ結菜さんなら、よおくお分かりになつとつた筈でしょう? 非合理」だと。「夢想」だと。責任感を強く持ち頑張りすぎれば、いつかは泥沼に嵌る。多少いい加減な姿勢でも最後まで地に足ついて立っていられる方が、現実的じゃと、ね」

そこで、わざとらしく溜息を付いた後——双鷹はニツとはにかんだ。

「それとも、ブツ先輩壊れた人間が『ヒーロー』に見えとつたんですか？ 憧れとつたんですか？ 継りたかつたんですかア??」

結菜の眼光が一層強く瞬いた。眉間にぐつと皺が寄る。

「黙りなさい……」

猛烈に湧いてくる殺意を噛み殺しながら、結菜が震えた声で呟いた。

双鷹は気にもせず、クカカ、と笑い声を飛ばして、続ける。

「上に立つモンはね。『ヒーロー』であつちやアカンのですわ。多少ヒールで怠け者ぐらいが丁度ええんですわ」

「……………」

「現実を見なされよ。決して手の届かないものに、真面目に、真剣に、真つ直ぐまつすぐ向かつていった結果……今、どないなつとります？ 先輩さんは死に、結菜さんは年首に『鎌』を向けられとる。ウチは自分が狡猾で、怠け者で、何より自分の利益を優先しとる……じゃが、何も失っていない。何も怖くは無い。……つまり、勝つとるんはウチじゃ」

「……………」

結菜は何も答えない。

何れの言葉も、双鷹の悦を満たすものになるのなら、喋らない方が良い。

だが、先輩の人間性を侮辱し、先輩の道徳を貶し、先輩の正義を踏み躪った。赦してはならない。

紅葉双鷹だけは、決して生かしてはならないと、脳が強く訴えていた。

体がむずがゆい衝動に襲われた。怒りが、殺意が、血流と一緒に全身を隈なく駆け巡り、猛烈に熱くさせる。

決壊は、近い——

「さあ、結菜さん。話は戻しますが、ウチの言う事聞かんとどうなるか、分かつとるんでしようねえ?? 結菜さんが運営する施設に居るご老人達や、子供達。商店街に住んどる人達に………いっばい、いっばい、しちやいますよオク?? い・や・が・ら・せ☆」

結菜は何も返さず、睨み据えていた。

大親分としての責任感と、理性が、どうにか激情を一線前で押し留めていた。

意外だったのか、双鷹は「おっ」と驚いた風な口を開く。

「……先輩の道徳は、壊れていない」

結菜は震えながらも、小さく呟いた。双鷹が愉悦を浮かべたまま、首を傾げる。

「んー??」

「先輩の教えを守ってくれた人が、他にもいたわ。その人は、今はもういなくなっちゃったけど……抱いていた志は、『英雄』に受け継がれている……」

「ほーん……」

「貴女は……正義を馬鹿にしている間に、正義に飲み込まれるわあ……いずれ、ね」

双鷹の口がしばし止まった。

結菜の言葉に呆気に取られた様子だった。

「つまり……ウチに協力する気は、無い、ということ??」

「ええ。私にも怖いものは無いわあ」

毅然と結菜は言い放つ。

これ以上、こいつに用は無い。墓参りは済んだ。自分の仕事が最優先だ。

もう帰ろう。

「……あの御方をご覧になられても、そんな戯言がほざけますかねえ?」

「はっ……?」

だが、双鷹が素っ気なく言い放ったその一言に、結菜は目を丸くした。



刹那——背後から足音。

「息災で何よりだ。紅晴結菜」

☆

2018/07/18(土) PM20:15

神浜市・明京町・工匠区

工匠大祭会場・広場

物議を醸しだした中堅戦は、一先ず、両チーム監督役の呉<sup>ウー</sup>豪杏<sup>ハオジン</sup>、大庭樹里が『試合』として認め、祭りの主催者のひめなが受理したことで、一段落ついた。

避難した一般客も、観客席に戻り、再び副将戦への期待に熱を挙げていた。  
畚<sup>ロン</sup>明零<sup>ミンリン</sup>と高菜舞桜の戦いは、最早死闘。

歴史に残る大激戦が繰り広げられた擂台の上は、見るも無残な程ボロボロになったが、今では時間が経過したことで、修理も終わってすっかり元通りに――

「――って、ちよつと待って!?!」

突然、観客席から鶴乃が立ち上がり、誰にでも無くツツコム。

「時間経過つて!! そりや前回投稿から約1カ月以上経つてるけどさ! 作中じやたつた10分だよ!! 修理の暇すら無いのになんでいきなり元通りになつてんのっ!!」

——全くもつてその通りである。

「鶴乃ちゃん、あんまりそういうこと言つちやダメだよ……」

「けどいろいろはちゃん、これはいくらなんでもツツコミ所満載——」

「恐らく、あの方ネ」

なんかメタな事を言い合う二人の間に、審判の美雨メイユイが割つて入る。

首を傾げる鶴乃。

「あの方?」

「我らが蒼海幫、最高幹部衆・五強聖の一人、羅ルオ神翔シエンフエイ老師……。あの御方の業わざなら、造作も無い事ネ。恐らく……近くにいらつしやル」

「え? ルオつて……もしかして」

その名前を聞いて、ある事に気付いたのは、いろはだった。

美雨が何も言わずにコクリと頷くと、今度は、後ろから豪杏ハオジンが声を掛けてきた。

「美雨。子静スージンの前ダ。あまり癪に障る事を口走るナ」

「ン、スマン」

美雨が、会釈して豪杏に謝った。

二人のやりとりを聞いて、いろははハツとなった。

ルオ  
羅……確か、副將の魔法少女の子と同じ苗字だった筈。すると、姉妹だろうか？

スージン  
「子静、間もなく試合だが、大丈夫か？」

豪杏が振り向いた方向——赤竜隊・控えのベンチには、やや青みがかつた髪の毛のツインテールの、細身の少女が体を丸めて座っていた。

「アツ、はつ、ハイ！ だ、大丈夫です！」

豪杏に声を掛けられるや否や、子静スージンと呼ばれた少女が慌てて立ち上がる。

瞬間、鶴乃というはが驚いたのは言うまでも無い。

彼女は、でかかったのだ。

それは、胸部に生える豊かな丸みもそうだが、身長もかなり有る。相対する豪杏よりも一回りは高い。173く5はあるだろうか。胴はかなり引き締まっているが、魔法少女衣装から露出した四肢は、バキバキの筋肉の塊だった。細身が多い蒼海幫の魔法少女の中でも、彼女だけは激しい鍛錬を積んでいたのは容易に想像できる。

「今は、姉君のことは気にするな。いい力」

「はいっ！ 行つて参ります！ 豪姉様」  
ハオ

「うむ」

子静スージンが拱手を送る。

豪杏が拱手を返すと、子静スージンは擂台の上へ駆けあがっていった。

「豪杏」

子静を見送ると、横から声を掛けられる。

豪杏が振り向くと、大将役の洪カウ 梅華メイファが立っていた。

「梅華姉様」

「うん。其方から見て、子静スージンは調子はどうか？」

問われて、途端に豪杏は洗い顔を浮かべた。

「はい……子静スージンは、五強聖ルオ・羅シエンフエイ 神シエンフエイ 翔老師の実妹。武闘家としての才能も、実力も、申

し分無いものだど私は感じております。しかし……」

そこで豪杏は、いきなり胸をぐつと掴んだ。

「……ここが、少々……」

苦々しい顔を浮かべて呟く豪杏に、梅華は頷く。

「うん、そこだけは、鍛錬を積めば強くなるものではない。当人、氣概次第」

「はい……。彼女は優秀な姉君と常に比べられてきました。故に、仕方ないとは思いますが……メンタルが不安定なのは、武闘家としても、魔法少女としても、致命的です」

「うん……」

二人は、子を見守るような眼で子静スージンを見守っていた。

彼女と闘う相手は、宮根みやね 灼しやく——。

一見、緋華仙香、繚蘭百花のような強者には見えない。

だが、高菜舞桜の例がある。

副将を任せられたのは、それなりの理由があると見るべきだろう。

☆

——一方の、チーム竜ヶ崎サイド

副将の宮根 灼が控えのベンチから立ち上がる。

「じゃー親分、そろそろ行つてきますねー！」

「おーがんばれよー。期待してねーけど」

「……え？ あれ？ ちょっとそれ酷くない？ もう後が無いんですけど。私負けたら敗北確定なんですけど?？」

ベンチにぐでつと寄り掛かりながらあんまりな事を言う樹里に、灼がジト眼で睨む。  
「舞桜も負けたしな……」

樹里がはあゝ、と溜息。

「自分から喧嘩吹っ掛けた癖になに早くも負け認めてるんですか……。先生っ！ 先生は私の事、応援してくれますよ、ねっ☆」

「……………」

びよこん、と大将役の綾濃の下に飛び込んで、輝く目を向ける灼。

綾濃はしばらく沈黙した後——グツと、サムズアップ。

「灼さん、散り様は美しくあれ、よ」

「そうそう、盛大に当たって砕けて……って、あつるえー??？」

一切期待されてませんでした。

二人からぞんざいな扱いを受けて、段々腹が立つてくる灼。

「あーもう！ この宮根 灼！ 相手が誰であろうと、いつも通りゆるーく戦って、サク——と勝つてきちゃいますからね！」

ブンブン怒りながらも、灼は擂台の上へと駆けあがっていく。

その様子を見送りながら、樹里と綾濃は、笑い合った。

「くくく、灼……お前は、ナニクソって苛ついている方が丁度良いんだよ……！」

「ふふふ、下手に持ち上げたら凶に乗ってしまいますからねえ……」

それに——樹里は不敵な笑みを浮かべた。

（今度こそ目にモノ見せてやるぞソウカイヘイ。灼に大した実績は無い。だが、  
“だ……！” 無敗

☆

——こうして、副将戦が開始された。

「……………」

子静スージンが距離を置いて、灼を睨み付けている。

右手にラケットを握り締めており、一般的なテニスプレイヤーといった格好だ。



大方、飛び道具がメインだろう。一気に距離を詰めれば勝負が付けれそうだが、相手の固有魔法が分からない以上、迂闊に出るのは得策ではない。

さて、どうするか——子静スージンは、思考を巡らしながら、灼と見つめ合う。

「ふん……」

対する灼は、軽くスイングの練習をしながら、不敵に笑っていた。

強そうには見えないが、一筋縄ではいかなそうだ。

「ルオ スージン子静さんですね」

いきなり灼が沈黙を破ってきたので、子静スージンはハッと思案を止めた。

「そうだガ……なにカ」

「知ってますよ。だって、お姉さんが、蒼海幫の最高幹部ですからね☆」

「姉」を話題に出されて、子静の眉が、ピクリと反応。

「……今、姉さんは関係ない筈ダ」

「いやいや、せっかく会えたんだし、聞かせてくださいよー？ 確か、5歳の頃から武術

教室に通い始めて14歳の頃に国内最高クラスの武術表演者に送られる『武英級』を取

得。15歳の頃に武術選手権大会で、全国優勝を果たす！ いやーすごい経歴ですよ

ねー!! 憧れちゃいます!!」

「……うるさい」

捲し立てるように、子静スージンの“姉”を賛美しながら灼は左手にボールを召喚。

子静スージンはキツと目を細める。苛立たしさに眉が吊り上がっていた。

灼は、微笑みながらボールを真上に投げる。

「あれー、もしかして怒つちやいました？　そういえば子静スージンさんのことつて私あんまり知らないんですよー。実の妹さんなのに、記事も見たことないし……ね！」

パンツと、灼は目線まで落ちたテニスボールを軽く弾き飛ばす。

球は一直線に、子静スージンに向かっていく。子静スージンが詠春拳の構えを取り、拳を向けた。

「……ハッ！」

弾き飛ばすつもりで、勢いよく突きを繰り出した——筈だった。

「っ!？」

直撃の瞬間——

まさかの衝撃に、子静スージンが目を見開いた。

球は予想以上に重く、右拳には電流が走り、足は思わずよろめいてしまう程だった。

「そんな……」

有り得ない——と子静スージンは下を向いて自分の拳を見た。

姉弟子達から毎日、100回もの投石を受け、それを拳で砕いているのだ。

魔力で生み出したものとはいえ、あんな軽々しく打った球に拳が負けるなど……。

「前方不注意☆」

「っ!!」

灼の掛け声に、慌てて首を上げて前を見た。

二球目が既に迫ってきていた。

迂闊だった、打った音すら聞いていなかった——だが、まぐれは二度も無い、今

度こそ……。

子静スージンは、気合を入れて、左拳を突き出した。

「くう……!」

やはり、重い——!

球は弾いたが、拳から肩に掛けて鈍い衝撃が痛みと共に走り、子静スージンは顔を顰めた。

その様子を見ながら灼は笑う。

「あつれー? どうしましたー? 中国武術なら、あれぐらい軽く凌げる筈ですよ

ねー?」

「くっ……!」

痺れる拳を摩りながら、灼を睨む子静スージン。

「もしかして、お姉さんの事で気が散っちゃいました? ごめんなさいねー。でも、ダメ

ですよー、戦闘中に余計なこと考えちゃー!」

「分かってル……！」

「これが、魔女戦だったら、死んじやってますから……ね！」

再び灼が緩やかにサーブを打つ。

——  
子静<sup>ズージン</sup>。余計な事を考えている暇が有つたら、打ち込みなさい。

——  
自分の事しか見えていない。故に、貴女は、  
“未熟者” なのです。

——  
足手纏いは、必要有りません。

——  
魔女と闘えば、  
“死ぬ” だけです。

(分かってるって……姉さん……っ！)

灼の言葉のせいだ。

忌々しい記憶が蘇ってきて、  
子静<sup>ズージン</sup>は奥歯をギツと噛み締める！

そうだ、余計な事は考えなくていい。

集中しろ。相手の打った球は自分の身体の「何処」を狙っている——見極めろ

！

「っ！」

そこだ——と子静スーヅンは拳を打ち込む。しかし……

「っ!？」

驚愕した。

接触する寸前で、テニスボールが消失したのだ。

そして、

「ぐふっ!？」

下腹部に鋭い痛みが走り、子静の身体が大きくよろめいた。

目線を下に向けると、消えた筈の球が自分の腹に突き刺さるように喰い込んでいた。

「なっ……!？」

子静スーヅンの目が震えた。

馬鹿な。よく狙って打った筈——有り得ない。いや、しかし……まさか、

「もしかして、見落としましたー?」

「っ……!？」

灼の何気ない一言に、子静スージンの両肩がビクリと揺れる。

胸中の不安を、見事に言い当てられた。動揺が、隠せない。

「お姉さんの事、すんごいコンプレックスなんですネー？」

——うるさい、黙れ。

「わたし、一人っ子なんで、気になるんですよねー。優秀なお姉ちゃんがいるって、どんな気分？」

——シエンフエイ神翔は本当に偉いな。それに比べて子静スージンは——

——同じ姉妹でも、どうしてここまで違うのかねえ——

——スージン子静もシエンフエイ神翔のような才能があれば——

——お前と姉の違いは唯一つ、〃努力が足りない〃——

「!! 黙レっ!」

頭の中が騒がしい。

忌々しい。比較するな。自分と姉は違う人間だ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。私をちやんと見ろ——!!

子静は、かぶりを上げて、怒声を張り上げた。

動揺と感情が高ぶり、完全に視野狭窄になっていた。

視界は灼しか映していない。

その状態が、とつくに灼の罠に嵌っていることにすら、気づけなかった。





編 FILE #77 蒼海幫 VS 竜ヶ崎 副将戦 | 後

目次

アバン

Aパート

Bパート

Cパート

—— チーム竜ヶ崎・応援席。

「竜親分」

「百花、戻ったか」

声を掛けられて、チーム竜ヶ崎・監督役の大庭樹里は振り向いた。

固有魔法を使ったのだろう——傷が完治して、私服姿の繚蘭百花が歩み寄ってきていた。

「失礼。……灼め、相変わらず姑息な真似をする……」

百花は一度会釈して樹里の隣に座ると、擂台の上で戦う宮根 灼を見つめて、一言、ため息混じりにそうボヤク。

「そう苛立つなよ。『勝てば官軍』が竜ヶ崎のモットー、だろ？」

樹里は笑い飛ばして、百花の胸をトントンと叩いた。

「相手の「ゴッコ」のウィークポイントを的確に突いて突いて、叩きまくる。それがあいつの十八番だからなあ」

「故に「無敗」、ですね」と、百花が頷く。

「そうだ。それに相手のメンタルが強靱だったとしても、灼には「奥の手」がある。それがある限り……負けることは絶対に、無い！」

蒼海幫が慌てふためく様を思い浮かべているのだろうか、樹里はニヒツと嬉しそうにほくそ笑んだ。

だが、百花は複雑な表情で灼の相手を見る。

(そう上手くいくかな……?)

仮にも、蒼海幫最強の武術家集団・五強聖の一人の実妹。

確かに現状、灼が翻弄し、押しではいるが……決して油断してはならない相手だと百花は睨んでいた。

——  
 擂台れいだいの上。

「それっ!」

バシッと音が響く。

灼がラケットを強く振るい、スマッシュを放つ。高速で迫りくる球を、スーシン子静が身体の急所に当たる前に叩き落さんと、右拳を突き出す。

「ぐう……!」

球と拳が激突!

真上に球を弾いたが、鈍い衝撃が右前腕に響いて、子静は顔を歪ませる。

やはり——重い! 右腕にジンツと痛みが広がって、キツイ。

「もういつちよう!」

「っ!」

右腕を摩る余裕も無かった。

灼が間髪入れずに、二度目のスマッシュを放つ。子静が慌てて左拳を振るうが——寸

前で球が消失。子静が目を見開いた時には、下腹部を球が貫いていた。  
「ぐふっ」

唾液を吐き出す子静。思わず両膝を床に付いた。

その様を見て、灼が可笑しそうに笑う。

「ふふん、また見落としちゃいましたねー！」

「そんな筈は……！」

「誤魔化さなくていいですよ。不思議ですよね？ どうして歴戦の武術家であるあなたが、大した実績も無いテニスプレイヤーの私に、こうも完封されてしまうのか？」

苦々しく睨んでくる子静を見下ろしながら、灼は自分の胸をトントンと叩き、余裕の笑みで言い放った。

「すべては〃ここ〃で決まる。〃ここ〃が強い人、余裕がある人は、何したって勝てるんです。逆に〃ここ〃が弱い人は、何したってダメ！」

ダメ、という言葉に、子静の目が震えた。

ダメ……

ダメ……

ダメ……

ダメ……  
ダメ……  
ダメ……

頭の中で、『ダメ』が何度も、なんともなんともなんとも木霊する。

――今まで生きてきた中で、姉と比較されて、周りに何度言われてきただろう。

勉強が苦手。だからダメ。

反応が鈍い。だからダメ。

気を配れない。だからダメ。

喋るのが下手。だからダメ。

人の話を聞かない。だからダメ。

●●●●● に向けてない。だからダメ――

〈子静！ 奴の言葉に惑わされるな！〉

突如、尊敬する姉弟子の一喝が、ネガティブの海に割り込んできた。

〈奴は打った球を自在に操れる。魔法少女なら当然の技能だ。変化球は2パターン。一

つ目は、『拳を狙う球』。二つ目は『消える球』だ

テレパシーによる呉ウ 豪杏ハオジンの凜とした声が、頭の中で響いた。

へ一つ目については、わざとお前の拳を狙っている。身体の急所ではなく、な。拳から潰して無力化するのが目的だろう。そして二つ目、球は私から見ても消えているように見えた。決してお前が見落としたからじゃない。深呼吸しろ。焦るな

「……………」

へ球の動きをよく見ろ。パターン1が来たら、わざわざ拳で弾き返す必要はない。拳を開き、掌で受け止めろ。そしてパターン2。寸前で球が消えたら、空気を切る音を聞き、空気の流れを肌で感じる。基礎通りに戦えば、決して敵わない相手ではない

わかっている、そんなことは――。

しかし、姉弟子の言葉は、何よりの励みだった。

正直、自分一人では、その推測に全く自信が持てなかったから。

「……………」

子静が、ゆっくりと立ち上がる。

深呼吸すると、気持ちがち落ち着くのを感じた。

そして、灼を再び睨み据える。瞳から不安の色が消えて、燃えるような闘志が宿っていた。

「へえ……」

さっきまでビビッていたのに。

その極端な程の変わりように、灼も少し驚いた様子だ。

恐らく、奴の仲間の誰かがテレパシーで助言したのだろう——しかし、

(想定済みです……よっ！)

そこから切り崩す方法を、灼は心得ていた！

バシツという音と同時に、三度目のスマツシユが放たれる！

球は、真つ直ぐ子静に向かっているように見えたが——

(よく見ろ。これは……)

先程まで反射的に拳を突き出した事を悔いた。奴の思惑通りに動かされていたのだ。

子静はあえて、両手は開いたまま、じつと球の動きを見極める。

(……拳を狙う方か!!)

球は急に方向転換し、吸い込まれるように自分の右手へと向かっていく。

子静は掌を差し出し、球を掴み取ろうとした。

しかし——

「っ!？」

子静が愕然となる。



掌は虚空を掴んだ。掴もうと指が触れる寸前で、球が、『ふわりと浮いた』のだから、まるで避けるように。

浮き上がった球はそのまま上昇していき、子静の――

「うぐつ!!」

――下顎に直撃!!

脳が揺さぶれるような不快感のせいで、子静は眩暈を起こして背中から倒れる。

「あつたりー! 中国武術から『無傷』で一本取っちゃいました! これって私が初めてっ?」

「くつ……」

子静は首を持ち上げて苦々しい顔で灼を睨んだ。

こいつの言葉が逐一癩に障る。

どうしてだ。

どうしていつも、私だけが『こう』なんだ。

美篤姉メイケンさんも、心蝶シンテイエも、明零メイリンも、みんな先手は打てたというのに――

どうして――

「私がお姉さんのこと、話題に出したら、完全に調子狂っちゃいましたよね」

そうだ。

こいつが悪いんだ。こいつが、姉さんの事さえ口に出さなければ。

「ほんとーにコンプレックスなんですわねー。反射神経イカれてますし、さっきも、掴もうとしたのは良かったけど、ハズレちゃいましたからねー」

違う。それはお前の——

〈今のも変化球だ。子静〉

そうだ。変化球だ。私の手を避けるように動かしたんだだろう。

そうに違いない。絶対。

「……………」

子静は何も言わずに灼を睨み付ける。

だが、灼は余裕綽々と笑うだけ。

「もう一回、試してあげましょう……かー」

パシツと音がして灼が、軽くサーブを放つ。

子静が背筋の力で直ぐさに立ち上がった。

今度こそ——と、気持ちを切り替えて、灼の変化球に備える。

大体自分との距離1mのところで、球がゆらりと軌道を変えた。

——狙いは、また拳か。

子静は掌を差し出した。吸い込まれるように、球が向かっていく。

「よしっ！」

バシツと音がした。

掌にぶつかつた瞬間、握り締める。すると見事、球をキャッチ！

「やった!!」

子静の表情が輝く……………が——次の瞬間、

「…………げうっ?!」

下腹部に鋭い一撃を突き刺さつた！

衝撃の余り、再び背中から勢いよく倒れ込む。

(おバカさん☆)

その様を見下げて、灼がニツとほくそ笑む。

一球目はフェイク——弱いサーブの球をわざと掴ませて、安心させたところで、ス

マツシュで『消える球』を急所に放つたのだ。

「難しい事が成功すると、つい嬉しくなっちゃいますもんねー」

「う…………うるさい…………!」

床に両手を付き、立ち上がろうとする子静だが、

「あーつと。もうやめた方が良いでしょうよ!」

—— おやめなさい。

「……………え？」

灼のその一言のせいで、子静の脳裏に、姉の言葉が過る。

最悪のタイミングだ。

どうして、こんな時に……

「もう分かっているでしょー？ 私に敵わないって。何をしても『無駄』だって」

「……………！」

—— 無駄なのですよ。

—— 貴女の才能では。

—— いくら、どうやっても。

—— だから、おやめなさい。

へ子静、聞き逃せ！ 二度や三度の失敗など気にすることは無い。何度でも立ち向かい、

球の癖を把握するんだ！ 相手を理解することが蒼海幫の流儀の筈だろう！

「ぐうううう……………！」

忌々しい記憶が強烈に蘇ってきて、子静は被りをふった。

—— おやめなさい。

—— おやめなさい。

—— おやめなさい。

〈子静っ!!〉

尊敬する姉弟子の声すら、今は届かない。

—— 幼い頃から、常に姉が上だった。

昔は気にしなかった。

姉——<sup>シエンフエイ</sup>神翔とは15歳も年が離れていたの、同じ土俵に立つことがそもそも無かった。

だから、比較されても、姉は違う世界の人間だから、と割り切ることができた。

当時から、<sup>シエンフエイ</sup>神翔は才能の塊のような人だった。

卓越した中国武術のみではない。

勉強は上海の超難関高校にトップの成績で入学した程、頭脳明晰だったし、大手モデル会社からも多数スカウトが来る程の容姿端麗だった。

当時は、そんな神翔に憧れた。

追いかけるまま、自分も日本へ行き、蒼海幫へ属した。

だが、私はその選択を、今は後悔している。

憧れの人と、同じ土俵に立たない方が良い。

自分の価値の無さを痛感するから——

姉への憧憬が歪んでしまったのは、いつだったか。

——そうだ、思い出した。

——あれは、ある日、蒼海幫の本部で修行していた時の事。

セイツ、セイツ、と——掛け声を発しながら、蠟燭の灯火に向かつて只管、拳を突き出していたのは覚えていいる。

これは端的に言えば、『突きの風圧で蠟燭の火を消せるか?』というものだ。

蒼海幫の魔法少女にとつては、まず基本的な修行の一つであり、達成できなければ、<sup>五強聖</sup>老師達には認めて貰えず、当然、組織の事業にも携わらせてはもらえない。

時季は真冬。

岩と土壁に覆われた、足を一步踏み入れるだけでも凍り付く程の極寒の修練場にて、私は只一人、2 m程前にある蠟燭と格闘していた。

全身汗みどろになり、熱いのか寒いのかも肌と脳が正常に判断できない。

伸縮運動の連続で肘から上の筋肉は疲れて重くなり、痛い。

休んだ方が合理的だろう。

だが、私は焦っていた。痛みを歯で喰いしばって堪えながら、拳を打ち続けていた。同じ赤竜隊のメンバーである、豪杏姉様、<sup>メイイェン</sup>美篤姉様、<sup>シンテイエ</sup>心蝶。

そして、<sup>メイユイ</sup>美雨姉様、<sup>ミンリン</sup>明零、<sup>リンシャ</sup>鈴紗……。

同年代の魔法少女達は、皆、あつという間に火を消して、次へ行ってしまった。

私だけが、ただ一人その場に残されていた。

—— 何でだろう。何で、私だけが上手くできない。

—— どうして、みんなよりも、遅い？

蒼海幫に所属してからは、姉と比較される日々だった。

当然、五強聖の一人、神翔の妹として、最初は皆から期待されていた。

しかし、私はあまりに愚鈍だった。加えて要領も悪く、口が下手だった。

良いところは他の子より恵まれた体格と腕力だけ—— 皆が何気無く、私を下に落ととして、神翔を持ち上げる—— そんな雰囲気は日常的に有ったのが、悔しかった。

豪杏姉様は、そんな私でも、*「才能が有り」*として、チームに引き上げてくれた。

それが、嬉しかった。

姉と並びたい。

豪杏姉様の期待に応えたい。

だから、もっと頑張らないと——

気持ちを込めて、私は更に百回近くの拳を突き出した。

しかし、灯火はただ揺れもせず、直立不動のまま——



「まだやっているのですか、子静」

ギョツと、驚いた私は振り向いた。

姉さん——羅 神翔がそこに立っていた。

神翔は、175cmある私よりも遥かに小さく華奢な体躯だった。腕も白くて細長く、筋肉があるのかさえ外見上、分からない。気品溢れる佇まいは、武術家というよりは、令嬢といった方が相応しい。

だからこそ、姉の少女期の武勇伝を知った者は、皆、啞然としてしまうのだが。「みんな、もう先へ行つてしまいましたよ?」

そんな姉は、妹である自分にさえ、酷く丁寧な口調で語りかけていた。

なんとなく、神経が逆撫でされた。

「分かつてる……!」

貴女と比較されてきたから、と言ってやりたかった。

自分の短所も、この修行を達成できない理由も、分かつていた。

だけど、上手く解決する方法なんて思いつく頭も無いから——できるまで、只管、打ち込むしかないのだ。

「替わりなさい」

見かねた様子の神翔が、私を押し退けて、蠟燭の前に立った。

「……………」

神翔は深呼吸をして、蠟燭をじっと見つめる。

そして――

「!!」

刹那、私は驚愕した。

ヒュツと風切り音が聞こえると同時に、蠟燭の火が掻き消えた。

暗闇の中で目を凝らすと、“寸勁”を打った体勢のままの神翔が居た。

「す……い……………」

速すぎて、拳が見えなかった。まさに一瞬の内に披露された、鮮やかな武芸に私は思わず感嘆を漏らす。

神翔は、構えを解いて、私の方を振り向いた。

「子静」

「はっ、はい!」

神翔は含みを持たせた微笑みを浮かべて、私に近づいた。耳元で言葉を囁く。

「おやめなさい」

——一瞬、何て言われたか分からなかった。

「え？」

「貴女に、中国武術は向いていない」

その時、生まれて初めて “心臓が凍える” 様な錯覚に陥った。

冷たい血液が全身に周り、身体の底から震え上がるような感覚だった。

「なんで……」

神翔は私の言いたいことを読んでいたのか、首を振って答えた。

「確かに貴女は恵まれた体を持っています。しかし、それは武術に活かしていいものではありません」

私は、自分で自分を慰めるように、右の拳を摩った。

——誰のせいでも、自分がこんなに頑張っていると思っっている。

今にもそう吐き出したい気持ちを抑えて神翔を睨んだ。奴は微笑んでいた。

「私は老師。生徒の才能を見極めるのが務め」

「……………」

「才無き者が、道を無理に歩もうとする姿は、見苦しいものです」

シヨックだった。

凍り付いた心臓に、ずしん、と鉛を落とされた感じがした。

「だから、おやめなさい」

「全て、無駄なのです。貴女の才能では。いくら、どうやっても」

動けなかった。

神翔がそう言い残して、先に修練場を去った後も、ずっと――

☆

「ぐうううううううううう!!!」

結局、私には何もできない——

子静は懸命に両足に力を籠めるが、立ち上がることができなかった。

最も自分の努力を認めて欲しかった人、評価して欲しかった人から“否定”されたトラウマが。

自分に対する大き過ぎる諦念が、全身の力を奪い、人より発達した筋肉を只の鉛とした。

「そんなに、辛いんなら、辞めちゃえばよかったのに」

「……!!」

冷笑混じりに放たれた灼の一言が、罅割れた子静の心に突き刺さる。

「届かない物を必死こいて目指したって、何にもならないのに」

立ち上がる気持ちが失せた。

「その様子だと——お姉さんに見捨てられちゃったんですね」

身体の中で、何かがパリンツと、音を立てて弾け飛んだ。

「……………」

見捨てられた。

そうだ、あの時、私は姉に見捨てられた。

努力を認められることも、頑張ったことを褒められることも無く。

ただ、無駄だ、と――

目の前がじわりと滲んだ。

子静の頬を熱いモノが伝い、床に垂れ落ちる。

汗では無く、涙――驚いた。泣いていることに気付かなかった。

☆

――観客席。

「おいおい、あの嬢ちゃん、泣いてるぜ?」

「蒼海幫の魔法少女でしょ? 強いんじゃないの?」

「けど、相手の姉ちゃんに指一本触れてねーじゃねえか」

「山場のない副将戦だな……」

「おーい！ 真面目にやれー!!」

子静の心境など、知った事ではない観客達は次々と心無い野次を飛ばす。

そして、お組の応援席でも……

「ねえ、あの子、本当に拙いんじゃないの？」

「うん、応援してあげたい、けど……」

鶴乃とあきらも難しい顔で、這い蹲ったまま泣く子静を見つめていた。

ガンバレ、負けるな、と応援したいが、あの状態では逆効果かもしれない。

「あつちは……?」

「お頭は？」

鶴乃は、少し離れたチーム赤竜隊のベンチに座る、豪杏を。

あきららは、隣に座るおけらに目を向ける。

二人共、自分達と同じく複雑そうな面持ちで、擂台の上をただ、眺めていた。何か言いたい事があるのに、言えないのだろう。

「なんだか、むずがゆいよ……」

「うん。……けど、あれじゃあどうにも……」

あきらと鶴乃も、諦めるしかないと思つた。

観客席全体が静まり返り、微妙に冷めた空気が覆い始める。

「——！」

だが、その雰囲気の中で只一人、抗おうとする少女が居た。

「いろはちゃん？」

隣でいきなり立ち上がったいろはを見て、鶴乃は目を丸くする。

瞬間、いろはは大きく口を開いた。

「子静、ガンバレ……!!!」



子静の敗北は濃厚。

この副将戦を観る価値は無い。

次の大将戦に期待しよう。

観客の誰もがそう諦めていたが為に、いろはの応援には、全員がギョツと振り向いた。  
「ちよちよっ！　いろはちゃん!？」

応援はマズイって、と鶴乃はいろはを座らせようと手を引っ張るが、彼女はそれを払い、引き締まった顔で子静を見据えていた。

「ここに子静さんのお姉ちゃんがいたら、そう言つてた筈です!」  
「……………っ!」

気合を込めた一喝に、鶴乃を含めた観客達がハツとなる。

灼が、いろはの方を振り向いて、冷笑を飛ばした。

「何を馬鹿な——」

「バカなことヲ!!」

「は……………?」

応援を送った先の子静から、まさかの言葉を返されて、いろはの眉間にぐつと皺が寄る。

「そんな事は絶対二有り得ない!!」

「……………」

いろはが、拳をギュッと握り締めた。

「姉さんは私を捨てたんだ！ 何をしてても無駄だって！ だから」

応援しないで——と、涙目を向けてそう訴える子静。

「ツ!!」

カチン。

その一言が、いろはの逆鱗に触れた。

「お姉ちゃんを馬鹿にしないでください!!」

いろはの怒号が、この場に居る全ての人達の耳に際限無く響き渡る。

全員がその言葉に唾然とした。

だが、一番驚いていたのは、子静であった。

怒り頂点のいろはの顔——確か、何処かで見た記憶がある。

「痛い目に遭って、馬鹿にされて、泣く程辛い思いをして……それでもっ」  
拳を震わせながら、カツと目を剥いた。渾身の力を腹に込めて、叫んだ。

「必死で戦つてる妹を応援しないお姉ちゃんなんて、世界のどこにも存在しません!!」  
「そうだ。あの怒った顔は——忌々しいものではない。  
ずっと探し求めていた、懐かしいもの——」

☆

「子静……何故、馬鹿にされても言い返さないのです?」

「いつだったかは忘れたけど、うんと小っちゃかった時の事。  
不意に神翔からそんなことを問われたのを、思い出した。」

「うん。だってしようがないよ。お姉ちゃんと違って、私、ノロマだし、馬鹿だもん」  
「確か、私は何気ない気持ちで笑つてそう言つたつけ。」

「お姉ちゃんも、私みたいなのが妹だと、嫌でしょ?」

そういうと、神翔は怒った顔をしたんだ。  
今、私を叱ったあの子みたいに、こう吠えた。

「お姉ちゃんを馬鹿にしないでください!!」

〈子静さん……〉

「!」

記憶の海に浸る中で、突然今の少女の声が割り込み、子静はハッと我に帰る。

いつの間にか、涙が止まっていた。

視線の先にはいろはが、険しい顔のまま自分を見つめていた。

へいきなり怒鳴ってしまつてごめんなさい。お姉ちゃんと比べられてきて、ずっと辛い  
思いをしてきたんですよね。だけど……本当に、それだけだったんですか……

「え……?」

それは小さかった時に見た、姉の顔と瓜二つに見えて。

子静は食い入るように、彼女の顔を見つめ返した。

「私にも、妹がいました。妹がいつも居た頃は、嫌なところばっかり目に入って、よくケンカもしたんです。妹なんていなくなってしまうば……なんて思ったことも、ちっちゃい頃はよく有りました。だけど、いなくなってから……不思議と、楽しい思い出だけが、蘇るんです」

「……………」

「子静さん……。お姉ちゃんとの思い出。本当に、嫌なものしか、無かったんですか……？」

「……………」

子静は俯いた。

俯いて、よく考えた。

ずっと姉が、自分を見限ったのだと思っていた。

「だけど——本当は違うんじゃないか。」

「だつて、姉は……。」

あの時、私を叱った後、何て言った？

『姉如きの為に貴女は自分の人生を諦めるのですか?』

『正直になりなさい。馬鹿にされて嫌だと思ったでしょう。悔しいと思ったでしょう。だったら耐える必要などありません。貴女を馬鹿にした連中など、貴女がぶちのめしてやればいい』

『貴女は恵まれた体格と、強力な腕力がある。それを自分を示す為に使わずに、いつ使うのですか?』

——— そうだ。

へ子静さん。自分で言っていましたよね…… “見捨てられた” って

「……………」  
へお姉ちゃん、本当に子静さんを突き放すつもりだったのかな、て……

「……………」  
へ詳しい事は分かりません。だけど多分、子静さんに違うモノを求めてたんじやないかなって、思ったんです……

そうだよ。

この子の言う通りだ。姉さんは小さい時、私を見捨てなかつたじゃないか。私の良さを認めてくれてた。

負けるな、ガンバレって——近くで応援してくれたお陰で、私は馬鹿にした連中に仕返してきたじゃないか！

——おやめなさい。

そうだよ、姉さん。

姉さんは、見捨てたんじゃない。ちゃんと目の前で、待つててくれてたんだ。

だから「あの時」、私は目を背けずに、逃げずに、しっかりと示さなきゃいけなかつた。

自分の気持ちを、感情を、姉さんに真正面からぶつけなきゃいけなかつたんだ!!  
姉さん。

あの時、姉さんに否定されて、嫌だったよ。悔しかったよ。

だから……………いつか——

「ガンバレ子静!!!」

負けるな子静!!!

立ち上がれ!!!

貴女を馬鹿にした奴なんて、ぶっとばせー!!!」

“お姉ちゃんと良く似てる子”の応援だけが、耳朵を叩く。

冷え切った心が、ジンと熱くなった。

〈ありがとう〉

私はテレパシーで、一言、その子に礼を述べると、顔を戻す。

「ハッ、応援したって無駄無駄。もう、終わつたんですから、ね!!」

バシッツと今まで聞いたよりも遥かに強い音が響いて、子静は顔を上げた。

対戦相手の宮根 灼がトドメのスマツシュを放つ。

球は高速で子静の顔面に向かっていく!

そして——衝突まで残り1mの所で、消えた!!

「これで、ゲームセット!!」

灼が勝ち誇った笑みで、そう断言する! が——次の瞬間!!

「あだ~~~~~!?!!」



バコンツ!!という大きな衝突音。

直後に見えた光景に、観客全員が驚愕した。

球は何故か灼の顔面にぶつかり、彼女の身体は擂台の端まで吹っ飛ぶ!!

何が起きたのか、と、観客全員がざわめいた。

そして、子静の方へ目を向けると——一斉に目を剥いた。

「……………!!」

そこには、『這い蹲った姿勢のまま、右腕を振りきった状態の子静』が居た!!

その様子から推測できることは唯一つ。

今の一瞬で、消える球を受け止めて、灼に投げ返した……? そうとしか思えない。

「な、なんで……?? ……っ!」

目の前で星がチカチカと瞬きながら、灼はどうにか上体を起こした。

そして、相手の方を見て、ギョツと身震いする。

そこには、鬼の顔をした羅 子静が立ち上がっていた。

「私には、目標がアル」

「……………」

形勢逆転された、と灼は確信した。

今、子静は、床に這いつくばる灼を見下ろしている。

「いつか、姉を……私を馬鹿にした羅 神翔を……この手でぶちのめすっ!!」  
「ひっ」

「宮根 灼!! お前如きの言葉で立ち止まつてる暇はナイ!!」  
「ひいひいひい」

詠春拳の構えと同時に、向けられた剛腕は正に岩石そのもの。  
あんなもので殴られたら一溜りも無いと灼は悲鳴を挙げる。

(何で急にやる気に……って、あのピンク頭のせいかなぁ~~~~!!)

未だざわついている観客席の中で、いろいろだけが子静に「ガンバレ」「負けるな」と懸命にエールを送っていた。

(畜生あのガキィ……黙らせてやるっ、よ!!)

苛立ちを顕わにした灼が矛先をいろはに変えた。

舞台の中央まで駆け出すと、バシンツ、とスマツシュを打ち出す!!

しかし——ギンツツ!! と、高速で横から飛んできた大きな影がいろはと重なった。そして、自分の球がフツと消えて、デュツと風切り音!!

「いでええええええええええええええええええええ!!?!」

再びパソコンツというけたたましい音と共に、灼の顔面に激痛が走り、身体が吹き飛ん

だ!!

「バカめ、お前の相手は私だ。どこを狙ってイル!？」

見えたのは、右手を振りかぶった子静の姿。

その鍛え上げられた剛脚で一瞬の内に、灼の真正面に立ち塞がり、球を投げ返した、という訳だ。

剛速球は再び灼の顔面にぶち当たり、情けない悲鳴を上げて端まで飛んだ。

〈灼——!?! 無事か——!?!〉

場外寸前で灼の身体は止まった。

しかし、ダメージは大きい。灼は目をグルグル回しながらもどうにか立ち上がり、レパシーで声を掛ける親分に訴える。

〈親ぶーん! ああのピンク頭っ!! あいつの応援のせいですー!!〉

聞いた途端、チーム竜ヶ崎のベンチで樹里が立ち上がる。

「よし百花、命令だ! ああのピンク頭の口を塞いで来いっ!!」

「いやです」

しかし、きっぱりと断られてしまい、樹里が焦る。

「何っ!?! だったら仕方ねえ! この樹里サマ自ら」

瞬間、百花は樹里の手首を、ギョツと掴んだ。

「少し黙って」

「あ痛つて~~~~~!!?」

ぐつと力を籠めると、骨がミシツと軋む音がした。樹里が痛みの余り情けない悲鳴を挙げる。

「だ、だーめだこりゃ……」

その様子を眺めながら、灼は顔に青筋を浮かべて、ガックリと項垂れた。

「くっそー！ こうなつたら……とっておきだっ！」

灼が子静の方へ振り向き、そう吠えると背後に魔法陣が出現する。

子静が息を飲んで、身構えた。

魔法陣からは黒いテニスボールが、大量に出現した。

「分身魔球っ!!」

「……!」

ニイツと残忍に嗤う灼。

やはり、とっておきか——子静は目を細めて、宙に舞い漂う黒い球一つひとつを注視する。

「私がこのラケットを振った途端、勝負が決まる！」

「……」

勝ち誇る灼の前に、呼吸を整える子静。

「さーて、四方八方から迫る球を、どう捌くのかな？」

瞬間——ギョンツとまたも子静が消える。

「えっ？」

「これか」

灼が素っ頓狂な声を挙げるのと同時に、パシツと“何か”を掴んだ音がした。

まさか———と思いつき振り向くと、その剛脚を用いて勢いよく飛び上がり、黒い球の一つを握り締めていた。

「っ!! わああああ!! タンマタンマ!! それにはもう一つ仕掛けが」

「返すゾっ」

言い切るよりも早く、子静は腕を振り被っていた。

ビュツと風を切る音と同時に、剛速球が灼の足元に叩きつけられる!!

「あっ」

逃げようと思った時にはもう遅い。

ズツドオオオオオオオオオオオオオ———と、黒いテニスボールは激しい轟音を挙げて大

爆発!!

大ダメージを負ったことで、魔法陣と他の黒い球も消滅した。

爆風を諸に浴びてボロ雑巾と化した灼は、そのまま高く吹き飛ばされて、場外の地面に背中を叩きつける。

「あいたつ!」

「試合終了! 羅<sup>ルオ</sup>子静<sup>ズイジン</sup>の勝利!」

「ハッ!」

審判による判定が聞こえて、灼は慌てて起き上がった。

見えたのは、擂台の上で拍手喝采を受けながら、観客達に拱手を送る子静の姿。

「そんな」

驚く間も無く、脳内に親分のヒステリックな叫び声が響いた。

「灼ツ!! 今だ!! 〃奥の手〃を使えツ!!」

瞬間、灼の瞳の闘志が燃え上がる。

そうだ、まだ、負けていない!!

「固有魔法……」

灼が右手首に嵌められたリストバンドを外すと、中から『腕時計』が現れる。

「『リプレイ』!!」

叫ぶと、腕時計から小さな魔法陣が出現した。  
時計の針が、逆方向に回転する。



.....

「副将戦！ 始め!!」

審判の美雨の合図が聞こえて、灼はハッと覚醒した。

向かい合うのは、自分を睨みながらも、距離を取って様子を伺う羅 子静。

目線を下に向ける。先ほど、子静から攻撃を受けた箇所を摩つてみる。

自分の身体には痛みも無く、傷一つ無い。

(よっしやー！)

成功を確信して、灼は笑った。

そう、これこそが、固有魔法『リプレイ』の効果だ。

自分が「敗北」した試合に関してのみ、一度だけ時間を試合直前まで巻き戻して、仕

切り直す事ができる。

当然、灼以外の人間に、『リプレイ』発動前の記憶は引き継がれない。



相手の癖や弱点を完全に把握した上で、再戦を臨める——灼が“無敗の女”と及ばれた最大の理由であった。

(ふふふふ………)

勝利を確信した笑みを浮かべて、灼が“何も知らない子静”を睨む。

(さつきはよくもやってくれたな………自信を取戻されると非常に厄介だ。そしてあのピンク頭………奴の心を叩き折ったら、あいつも潰すことを計算に入れておかなきゃ)

灼は頭の中で戦略を練る。

同じ轍は踏むまい。

子静は、この時点では自分を用心深く観察しているだけ。

果敢に攻めてくることはしない筈——

「えっ?」

等と思うのは、油断に過ぎなかった。

視界から子静が忽然と消えて、灼は目をぱちくりさせる。

瞬間——全身が影に覆われた。

「先手必勝!!」

とつくに灼の懐に飛び込んで、拳を振り被っていた子静が吠えた!!

「な………!」

「破ッ!!」

呆然となる灼に向けて、裂帛の気合と同時に拳を打ち出す!

ドカンッ!! と爆音を挙げて下腹部に直撃!!

「~~~~~ッ!!」

筆舌に尽くし難い激痛の余り、宮根 灼、声も挙げられずに撃沈!!

ガクリと両膝が折れて、ばたりと前のめりに倒れる。

「……………もう二度と、心は折らせナイ…………」

子静はそう呟いた後、しばらく、灼の様子を伺っていたが…………動く気配はない。

「宮根 灼、戦闘不能! よって羅 子静の勝利!」

「ふう〜」

審判からそう判定が下されて、子静は安堵の溜息を付いた。

あまりに呆気ない幕切れに、観客席がざわつくが、子静は意に介さず、倒れ伏したままの灼に拱手を送り、踵を返した。

瞬間

「えっ?」

今度は、子静が驚く番だった。

「ぐにつ」と、何かを右足で踏んづけた。

それが滑るように前に転がったため、子静の右足が浮き上がり、バランスを崩してしまふ。

「わったったった!」

慌てて両手をバタバタ振り回し、片足でどうにかバランスを持ち直そうとする子静。しかし、

「うっ!?!」

ゴチンツ、と後頭部に何か固いモノが衝突した。

前のめりに倒れそうになる子静。

「なっ」

顔面から床に衝突する瞬間——「落ちていた物」に、子静の肝が冷えた。

それは黒くて丸い、宮根 灼がとっておきとして召喚した、テニスボール型の爆弾!! 「っ!?! うっぎゃああああああああああああああああああ!!!」

回避する間も無く、顔面とそれが接触!

瞬間——ズッゴオオン!!——と轟音を挙げて大爆発!! 子静の身体が宙を高く舞い、場外まで投げ出された。

「あうっ」

頭から地面に落つこちて、子静の視界に星が散らばる。

「判定訂正!! 羅 子静、場外!! 宮根 灼の勝利!!」

「えっ?!」

途端、響いてきた審判の声に、子静は慌てて顔を上げた。

擂台の上を見て、愕然となる。

そこには、下腹部を摩りながらも、ゆっくり立ち上がる宮根 灼が居た!!

「……ふふふ……心に余裕が有っても……『慢心』は……禁物つてね……」

そう呟いてほくそ笑む灼だが、顔面は冷や汗がダラダラ流れており、青白く染まっていた。

ギリギリで立っているのだろう。両膝もガクガクと震えている。

「な……なんて人だ! わざと相手に打たせて、気を失った振りまでして、隙を作るなんて!!」

驚愕するあきらかに、サムズアップを向けて微笑む灼。

「(本当は違うんだけど……)」

そ、そうでーす……！　　ざ、ざまあみ……ろ……」

そこで、灼の意識はプツン、と切れた。

ばたん、と前のめりに倒れ込む。

「美雨姉様……」

「惜しかったネ、子静。相手は気絶したガ、先に場外なつたお前の負けヨ」

「くっ……」

子静は場外の地面に這いつくばったまま、苦々しく齒噛みした。

副将戦は、あっさりと終幕した。

観客席が、終始静まり返っていたのは、言うまでもない——

☆

チーム竜ヶ崎の応援席では――

「よし！ 灼、よく頑張ったな!!」

ぐるぐるの両目を回しながら担架に運ばれていく灼を遠目で見送りながら、樹里は満足そうに笑う。

「竜親分」

すると、背後から声を掛けられて振り向いた。

固有魔法を使ったのだろう。完全復活した様子の繚蘭百花が歩み寄ってきていた。

「あの様子ですと……固有魔法を用いたようですね」

言いながら百花は、樹里の隣に座る。

「それでも先手を喰らった時は、一瞬ヒヤツとしたがな……けどこれで大将戦だ!! 先生、お願いします!!」

「よしなに」

樹里に頭を下げられて、竜ヶ崎最強の魔法少女――竜宮綾濃が音も無く、ゆつくりと立ち上がった。

彼女と戦うは、蒼海幫随一の刀術使い、洪カウ梅華メイファ。

両陣営が誇る二大巨頭の激突が、間もなく始まろうとしていた。





FILE #78 蒼海幫 VS 竜ヶ崎 大将戦 | 前編

「……なるほど、そんなことが」

「はい、確かに宮根 灼は、固有魔法で時間を巻き戻しました」

副将戦後、審判の純チユン 美雨は、羅ルオ 子静ズージンと話し合っていた。

「しかし、同年代の中でも一番要領の悪かったお前が、真つ先に奥義を修得するとはね……」

蒼碧拳には、五強聖のみが扱うことのできる「奥義」がある。当然ながら、その修得方法は秘伝とされており、門下生が教われる事はまずない。

だが、子静が修得していたと知って美雨は驚いていた。

要は宮根 灼が固有魔法を発動させた時、子静も奥義を発動させていた。巻き戻る前の記憶を子静が継承できたのも、その技故である。

「私でさえ、宗師から教わっていないよ」

というより、「奥義」は、身体及び精神面に激しい負担を強いるので、老師は無暗に門下生に教えてはならない——と、組織の掟に定められていた。

「悔しいですか?」

「いや。けど、いつ覚えた?」

そこで子静の表情が照れた。頭を搔いて恥ずかしそうにポツリと呟く。

「いえ、その……教えて貰ってたんです。姉さんに」

「神翔シエンフエー老師にか」

「はい。蒼海幫に入った頃、美雨姉様を始め、同年代の子の武術を見て萎縮してた自分

に、毎朝二時間はこれ続けなさいって、「呼吸法」を、姉さんが……」

あの頃は全く気づけなかったが、今思えばアレは、「奥義」の為の呼吸法だったのだ。毎朝続けている内に、自然と身についていた。そして――

「宮根 灼が時間を巻き戻す直前に、姉さんの声が聞こえたんです」

呼吸法を維持したまま、奥義の発動方法を教えてくれたのだ、と子静は言う。

そこまで聞いて、美雨はやれやれと溜息を吐く。

「神翔老師も困ったものね……。お前の身に、何も無かったから良かったものを」

「ええ、全く……。でも、私ならできるって、信じてくれていたのかもしれないね」

そう呟く子静の表情は実に晴れ晴れとしていた。

「姉さんに見捨てられた……。ずっとそう思ってた生きてきました……。けど、今もどこかで、姉さんは私の事を、見守ってくれていたんですね」

「家族を心配しない人間はいない。血の繋がりがあんなら尚更よ。子静、それを教えてくれた環いろはに、感謝するんだね」

「はー！」

子静は拱手をして美雨の下を離れると、いろはがいる『お組』の応援席へ向かった。

背中を見送りながら、美雨は考える。

(良い傾向だ。心蝶シンテイエは未熟さを思い知り、明零ミンリンは武術の極意を見出し、子静は姉へのコン

プレックスを解消して、奥義を修得した……。勝敗はともかく、外部との接触はやはり、あの子らにとって良い刺激になってくれたのかもしれないね……)

よもや、此度のチーム竜ヶ崎の乱入も、五強聖の誰かが仕組んだ事では？

——いや、流石にそれは考えすぎか、と美雨は一人苦笑した。

☆

「環いろはサン。この度は、どうもありがとうございませタ!!」

「は?!!」

——いろははポカンとしていた。

そのもその筈。彼女は“何も知らない”のだから。

副将で敗北した子静が、突然自分の前に現れて、深々とお辞儀して感謝を述べた。

正直、意味が分からなかった。

「ど、どういたしましたして……っというか、あの、私……子静さんに、何もしてないと思う

んですけど」

「ハイ!! 何もしてません!! けど、しましタ!!」

「は、はあ……」

なんか訳の分からないことを断言する子静の顔は、輝いていた。

いろは、苦笑い。

子静は、伝えたい事だけ伝えて満足したのか、満足気な様子で踵を返して、チームメ  
ンバーの待つ控え席へと去っていく。

「なんだったんだろう、あの子……」

いろはの隣で鶴乃が困惑するのも無理は無い。

「さ、さあ……?? でも」

子静の大きな背中を見送りながら、いろははふふつと微笑む。

「いろはちゃん?」

「子静さん、試合前と比べて、凄くリラックスしてる感じに見えるよ」

「うん! 吹っ切れたって感じの顔だったよね! 何でかわかんないけど?」

なにはともあれ、本人が満足そうなら良かった。めでたしめでたし。

さて、色々気がかりな点はあったものの副将戦は無事終了。

残るは大将戦——二人は、チーム赤竜隊の控えのベンチに視線を向けた。

そこには、大将役である、洪 梅華（カウメイファ）が居た。

「……………」

精神統一の為の瞑想でもしているのだろうか、梅華は、腕を組み瞳を閉じたまま、石像のようにじっと座り込んでいる。

「う……………」

いろはが、思わず息を飲んだ。隣を見ると、鶴乃も肩を震わせて怯えている。

「な、なんかわたし……………生まれて初めて『サムライ』を見た気がするよ……………」

「同じく……………」

一見、居眠りしてるようにも見える梅華は、隙だらけだが、『隙が無い』と二人は感じていた。

凄まじい威厳だ、遠目で見ても圧倒される程の。

激しい修行の賜物なのか、赤く焼け爛れたように真紅に染まった全身の肌も、御伽話の『鬼』を彷彿とさせる。

「さすが中国武術家の大将……………もの凄いオーラだね……………!!」

「うん……………! 確か、美雨さんから聞いたけど、チームメンバーの中では唯一大人の人だったよね? 結婚とか、してるのかな?」

「いやいや、と鶴乃は即座に首を振った。

「いろはちゃん。あれはどう見ても武術に人生捧げてますって感じじゃない？ 家族な  
ど強さには無用！ 男に現を抜かす暇があつたら鍛錬せい!! なんて毎日言ってるに  
違いないつて!!」

鶴乃が断言した、次の瞬間——

「ママ~~~~~っ!!」

「……………」

ぴゅーつと真横を横切る、小さな「何か」に、二人は硬直した。

「ま……っ!!」

「ママあつ?!?!」

数拍後、仲良く揃ってびっくり仰天!!

梅華の方を向くと、花柄の着物姿の、紫がかつた髪の幼い女の子が、彼女目掛けて真っ  
直ぐ突進していた。

「花織<sup>カオリ</sup>」

梅華はベンチから立ち上がり、地面に膝を付いた。

飛び掛かってきた幼女をがばっと抱き寄せる。女の子がパアツと愛くるしい笑顔が見せた。

「あのねあのね、ななかおねえちゃんたちといっしょに、松田優次郎に会ってきたんだよ！」

梅華は腕の中で口を捲し立てる幼女の言葉に、うんうんと頷いていた。

「そうかそうか。松田優次郎はカッコ良かったか？」

「うん!! すっごくカッコよかった!! 握手もしてきたんだよ!!」

「そうか」

「あー! ななかおねえちゃんたちも握手したんだけど、みんな『もうにどと、手はあらわない』って言ってたよ! ママ、ゆーめー人と握手したら手をあらっちゃダメなの?」

「いや、ウイルスを持っていたら怖い。人に触れた後は手を洗うのが一般常識」

「だよね! わたしすぐ手をあらったよ。ほら!」

ツルツルに輝く白い掌を見せる花織に、梅華の表情も綻んだ。

「うん、花織は正しい。偉い偉い」

「えへへ」

頭をナデナデされて、花織は無邪気に喜ぶ。



「え、えくくくつと……妹、さん？」

「鶴乃ちゃん現実視ようよ……。今あの子、ママって呼んでたよ……？」

「だ、だよね……。へえく、大人の魔法少女はたまに見かけるけどさ。子持ちの魔法少女なんて、初めて見たよ！」

「うん……！」

遠目で微笑ましい親娘の様子を見ながらこそこそ話し合う二人。が、その時――

「むっ」

「ひいつ!？」

梅華の眼が鋭く瞬き、二人は同時にビクリと肩を震わせた。

梅華は立ち上がると、二人の前へ歩み寄ってくる。

「……………」

怒られる!? と思いき身構えていた二人だったが、梅華は眼前で立ち止まると、深くお辞儀した。

「挨拶が遅れてしまい、ご無礼仕る……お初にお目にかかります。某<sup>それがし</sup>、蒼海幫の洪梅

華と申します」

「あ、えと……環 いろはと申します」

「由比鶴乃、です」

二人も緊張混じりに挨拶を返す。梅華は、後ろを向いた。

「花織、挨拶を」

呼ばれて、女の子がとてとてというは達の前まで走り寄ってきた。

「はじめまして!! 番井花織（つがい かおり）です! よろしくお願ひします!!」

花織は元気に声を張り上げて、ペコリと挨拶するが、鶴乃が首を傾げた。

「番井……? あれ、お母さんと名前が違うよーな……」

「うんっ!! ママはね! おなまえが “二つ” あるんだよ!!」

「???’

混乱する鶴乃に、梅華はふふつと微笑む。

「洪 梅華（カウ||メイファ）は本名ですが、今は組織のみでの通称です」

実際、梅華は、とつくに帰化して日本国籍を取得しており、その際、『番井梅華』（つがい うめか）という日本名に改名したのだと説明する。

「へえ〜!!」

いろんな魔法少女がいるんだなあ、と鶴乃が感心する隣で、いろはは膝を落として、花織に話しかけていた。

「こんばんは、花織ちゃんはいくつなの?」

両手でパーとチヨキを同時に出す花織。

「7歳です!」

「某が18の時に身籠りました」

「え?! つてことはわたしと同じ年の頃にはもうお母さんだったんだ!」

鶴乃がギョツと目を剥く。梅華はコクリと頷く。

「尚、〴〵できちやつた婚〴〵です」

「い、意外と早いですね……」

「かの武田信玄も兵法書に記述してありました。〴〵疾きこと、風の如く〴〵……要、万事迅

速第一」

「それを、〴〵そつち〴〵の意味で使うのは違うよーな……」

真面目な顔で、冗談みたいな事を語る梅華に、いろはと鶴乃は苦笑い。

「貴殿方も、気に留めている異性はいらつしやらないのですか?」

「え?!」

急に〴〵そつち〴〵の話を梅華に振られて、二人はきよとんととなる。

「私は……うーん、今は毎日忙しすぎててそれどころじゃない、かなあ……? 鶴乃ちゃ

んは?」

「わたしは……うゝむ、男の子の友達はあるけど。みんな人は良いけど、ヘタレだから

なあ。魅力的な男性って本当におんじぐらいしか見当たらないよ」

「あはは、おんじさん、男前だもんね……。けど」

いろはは、梅華に真剣な眼差しを向けた。桃色の瞳の中に羨望が強く映っている。

「梅華さんの事、羨ましいと思います。魔法少女って、自分の身がいつ、どうなるかわかりませんから。好きな人と恋愛する以前に、友達を作ることすらためらっちゃうと思いますし」

「ええ……梅華先生と花織さんの存在は、私達魔法少女にとつての『希望』となりえるでしょうね」

「そうだね。……って誰!？」

あんまり聞き覚えの無い柔らかな声が割り込んで、鶴乃がギョツと振り向く。

赤毛のショートカットヘアの少女が視界に入り込んで、思わず背中が凍った。

「常盤、ななか……!？」

明京町の治安維持部隊、チーム・アメノハバキリのリーダー。

明京町では数多の事件を解決し、例え護るべき市民であろうと、些細な迷惑行為を行えば、迅速且つ苛烈に摘発する治安維持活動振りから、『女傑』『明京町の女帝』と恐れ

られる魔法少女……!!

鶴乃は以前、チームメンバーに加入することを条件に、蒼海幫の力を背景に参京商店街を救うことを約束されるが断った。

以降、ななかには強い警戒心を抱いている。

……が、桃色の法被を着て、頭に『I LOVE (はーと) 松田☆』と書かれたハチマキを巻いているので、ギャップが酷すぎる……。

「ご無沙汰しております。由比鶴乃さん。この前は、ご無礼を働き、申し訳ありませんでした」

ペコリとお辞儀をして謝られたので、鶴乃は「はあ、どうも」と頭を下げる。

「で、なに、その恰好?」

「見ての通り。今の私は愛に生きてます」

「いや、たぶんその愛は一生届かないと思うけど。相手のハードル高すぎて」

「ご心配なされず。松田優次郎様との人生設計プランは完璧ですっ」

「あ、絶対ダメなやつだこれ……」

ふんすつと鼻息を吹かすななかに、鶴乃は絶句。

完全に『アイドル追っかけオタク』と化したななかに、以前の迫力は微塵も無い……。

☆

一方、その頃――

「八坂の」

「なんだK B G（クソバカゴキブリ）」

「バカゴキから更にランク下げんなっ!! ……ニヒツ、アタシらが勝ったらどーなるか、分かってんだろうなア？」

「へっ、分かってらい……。おけらさんの店で盛大に勝利を祝ってやるぜ。勿論、タダでな……!!」

「わーいやったー☆☆ ……じゃなくって、罰ゲームだっつの罰ゲーム!」

「とつくにK B Gとか呼ばれてる方が罰ゲームな気がするけどな……」

「それはお前らが勝手に言ってるだろーが!! とにかく、そのK B Gに匹敵する辱めを

受けてもらうぜ！」

「おう、そんなら覚悟はできてるぜ……。こっちの大将が負けたら、この……。〃工匠南わかまつ幼稚園〃のスモッグ服を着てやらあ!!」

ばばん、とおけらはどこからともなく、小さな制服を取り出した。

樹里、困惑。

「ああ、うん。……。いや、まあ、確かに普通なら罰ゲームだけど……。お前の体型で着ると、罰ゲームじゃない……。」

……。……。つてえーい!! こんなスモッグ服はどうだつていいんだよ!! 罰ゲームはこっちで決めさせろつての!!」

「ああつ!!」

樹里は、おけらからスモッグ服を強引に分捕ると、ポイツとどこかに放り投げた!

そして懐から、バリカンを取り出す!!

「まさか……。?!」

嫌な予感がして、おけらの顔が青くなる。

「クツクツク……。八坂の! 先生が勝つたらお前と蒼海幫の連中には、一週間〃丸坊主〃で過ごしてもらう!!」

ここにいないチャンシヤオランも含めてな! と樹里は恫喝する。

「おけらは冷や汗を垂らしながらも、胸を張って、威勢を張った。

「へっ……女の命を刈るたあ良い根性してんじやねえか。っしや!! 神浜の女に『逃げろ』の字はねえ! 受けて立つぜ!! だが、分かっただらうなア!? 梅華の大将が勝ったら、おめえらも罰ゲームを受けるんだぞ!」

「はっ、どうせお前の考えることだ、大したことはねーと思うが、教えてくれよ」

「ふん、後でほえ面かくなよ……。負けたら……おめえら全員、『これ』を着やがれ!!」  
「そ、それは……!!?」

☆

「あつちはあつちで、なーにやってんだか……」

良い年して、小学生レベルの意地の張り合いをしてる大人二人に、鶴乃は呆れる。

彼女の近くでは、なかなか梅華が互いに挨拶を交わしていた。



「七香、大儀。花織の面倒を見てくれて、ありがとう」

ペコリと丁寧にお辞儀する梅華に、七香もニッコリ笑ってお辞儀を返す。

「いえいえ、梅華先生には日頃から華道に武道と、お世話になっていきますから、これぐらいは」

気にしなくていい、とななかは言いたげだが、梅華の両眉が八の字に下がっていた。

「然し……松田優次郎はまだ撮影中の筈。抜け出してきた、本当に良かったのか……？」  
「何を仰います」

即答。ななかは首を振って真剣な瞳で梅華を見上げた。

「梅華先生の大事な試合を、応援しない訳には参りません」

「本当に忝い……。花織、お礼を」

近くで、いろはと戯れてる娘を呼んだ。

花織は、ななかを視認するや否や、「あつ!!」と声を挙げて一目散に駆け出していく!

そして――

「ななかおねえちゃん!! ありがとう~~~~!!」

「わっ!」

ぴよこんつと飛び上がった、ななかの胸へとダイブした。

ななかは慌てて抱き止める。花織はキラキラした目を向けて、

「えへへ、ななかおねえちゃん大好きー!!」

「ふふつ、もう、花織さんつたらつ」

頬をすりすりと擦り合わせてきた。ななかも満更でない様子である。

「へえ……」

いろはその様子を見て、驚いた。

神浜中央図書館で、阿峽あかい 慎まことから聞いた話では、てつきり鬼のように怖い人のような

印象を抱いていたが……意外だった。

「子供が好きかなんですね」

不意に呟くと、梅華が微笑みながら、うんうんと頷いた。

「美しきかな友情」

「「梅華姉様!!」」

——と、そこで。

中国風衣装の少女のグループが、梅華の下へ駆け寄ってきた。

呉ウ 豪杏ハオジン率いる「赤竜隊」のメンバー……曹ツァオ 美篤メイエン、小シヤオ 心蝶シンテイエ、羅 子静シヤオの四名であ

る。

彼女達は梅華の前で横一列に並ぶと、一斉に拱手を送った。

同時に、四人を代表して、豪杏が声を張る。

「我ら赤竜隊一同！ 梅華姉様の『勝利』を心より祈っております！ 必ずや、あのよ  
うな不義の輩共に然るべき制裁を」

「豪杏！」

「はっ！」

話の途中で、梅華がびしやりと一喝。豪杏が気をつけの姿勢を取る。

「試合、大祭一環。故に、重要なのは勝敗ではなく、集まってきてくれた地元の方々に楽  
しんで頂ける試合を目指すのが、某の役目」

「えっ!? し、しかし……方が一、姉様が敗北なされたら我ら一同丸坊主でございマス!!

それは、流石に……」

うろたえながら意見する豪杏に、梅華は首を振って答えた。

「それもお客様に笑って頂けるなら、構わない。鍛錬と思ひ、耐え忍ぶべし」  
「……はっ！ 失礼致しました！」

豪杏は腑に落ちない様子だったが……敗北した際は、潔く受け入れるつもりの梅華の  
度胸に、改めて感服した。

頭を下げて謝る。

すると、隣でななかに抱きかかえられたままの花織が、心配そうに母親の顔を覗き込

んでいた。

「花織さん？」

「ママ……」

「……」

悲しそうな声を聞いて、母はとっさに振り向いた。

梅華は真剣な表情で、娘と見つめ合った。

「わたし……ママが負けちゃうのは、嫌だよ」

「そうか」

梅華は娘の言葉に頷いた。そして、花織に近づき、その頭を撫でる。

「……花織が臨むのなら、母は全力を尽くして勝利を手に入れよう」

「ママっ！」

微笑みながらそう囁く母に、花織の顔がパアツと輝く。

「ほんとっ!？」

「うん、本当。約束する。ほら、指切り」

「うん！」

親子二人がお互いの小指を絡ませて、固い約束を誓う。

それを見届けた後、ななかは梅華に頭を下げた。

「梅華先生、ご武運を」

「うん」

「ママ！ 頑張つて！」

「うん」

真剣な眼差しで、二人に拱手を送る梅華。

「梅華姉様！ やはり」

「豪杏……某が『勝利』を目指するのはあくまで花織の笑顔の為。この子を含めて、この場にいらつしやつた方々の為に誠心誠意を尽くすのが、祭りの役員の使命と。今一度、胸に誓え」

「はっ!! 承知致しました。ご武運を！」

「ご武運を!!」

赤竜隊から拱手を送られて、梅華も拱手を送り応える。



「……よく驚かれます」

その仕草がどこか恥ずかしがってるようにも見えて、綾濃はふふつと笑う。

「かわいらしいではありませんか」

「ええ。某の宝です」

梅華も微笑むが——そこで何かに気付いたのか、はつと目を見開いた。

「失礼ながら……貴殿は某と同じ年とお見受け致しますが……されたことは、無いのですか？」

「何が？」

「『婚活』」

ピキッ

——綾濃のこめかみの血管が、一瞬、太く浮き上がって見えた。

(……今、あの人、地雷踏みましたね)

(ははっ、あいつ、終わったなっ)

その時、チーム竜ヶ崎のベンチでは、百花と樹里がそう囁き合っていたという。

——長い硬直の末、綾濃は深呼吸してから、答え始める。

「……………いえ、鍛錬と武道館の経営で忙しいので、そのような事をする暇いとまは」

「ほう、それは勿体無い」

「勿体無い…………ツ!？」

ピキピキツ

綾濃の額に、再びごっつい血管が浮かぶ。しかも二つ。

「某も貴殿と同じような時が有りましたが……やはり、家族を作るのは良いことです。夫と娘は生きる支えになりますし、護るべき者が傍に在れば、心身は単身の頃よりも遙かに強靱と成ります」

非合理的な。



綾濃は、喉元から出かかった言葉をどうにかぐつと飲み込んで、

「……………成程、心得ておきましょう」

再び深呼吸してから、梅華を力強く見据えて、そう答えたのだった。

事の発端は、大庭樹里の起こした珍騒動。

だが、それによって開かれた試合の熱は———今、最高潮に達していた。



編 FILE #79 蒼海幫 VS 竜ヶ崎 大将戦 | 中

——カツン、カツン、と。

暗晦の中で、少女が足音を響かせる。

見渡す限り黒、黒、黒……の一色に塗り潰された空間——凡百の人間が此処に潜り込めば、恐らくは一生光の下に戻ることは叶わない。魔法少女でさえ、暗闇に充満する骨身に染みる程の極寒の冷気は、酷だろう。

だが、今、漆黒を闊歩する栗色の髪少女にとっては、暗黒も、極寒も、痛痒には成り得なかった。

寧ろ、逆。

私を覆う漆黒の夜

鉄格子にひそむ奈落の闇

私はあらゆる神に感謝する

我が魂が征服されぬことを

自然と頭の中で、ウィリアムアーネストヘンリーの『インビクタス』の詩が流れる。

そう、この詩を詠む度、栗色の髪の少女は思い出す。

闇も寒さも“希望”であると——故に、自らの存在意義を明確に理解できる。

自分が“何者”であるのか。

此処で、“何”を為すべきなのかを。

「プロフェッサー・マギウス」

目と鼻の先に女の声がして、深淵の王・『プロフェッサー・マギウス』は目を見開いた。

漆黒の中に在る者は全て認識できる。自分より僅かばかり背丈が上の、白衣を纏った

少女らしき人物が佇んでいた。

「お待ちしておりました。どうぞこちらへ」

「うん」

白衣の女の右眼が翡翠色に瞬いた。

主は笑顔で応え、後ろを付いていく。

プロフェッサー・マギウスと並ぶ最高幹部の粹みふゆ、日秀源道さえ辿り着けぬ暗黒の中枢——“深淵”は、里見灯花のテリトリーだ。存在を許されるのは、主と、主に選ばされた『助手』のみである。

灯花と肩を並べる白衣の女は、『助手』の一人だった。

組織の誰もが存在を知らない、正に主のみぞ知る、トップシークレット・エージェン  
トであつた。

暫く、暗闇を闊歩する二人が辿り着いたのは、広大な空間だった。

「ご覧ください」

白衣の女に促されて、灯花は頭を上げる。

刹那、愉悦が口元から溢れた。思わず、*“くふつ”* と含み笑いを零して、灯花は*“そ  
れ”*に見惚れる。

飛行機や戦車を、初めて間近で見た時と同じ興奮が、胸の中で蘇っていた。

*“それ”*は、巨大。鋼鉄。強固。頑丈——何より、無機質。

だから、良い。

人が作つたとは思えぬ無機質な所が、堪らなく、愛おしい。

視界に映る*“それ”*は、灯花の要求を限りなく満たしていた。望んで止まないもの  
が、出来上がったのだ。

「オーナー・サンシャインの息が掛かった重工企業の優秀な技術者達の総力、そして私の  
科学力の全てを注ぎ込みました。……如何でしょうか？ プロフェッサー」

「……！ 素晴らしいよ、『よんひやくきゆうまる』。これが」

「そう。人型戦闘用機動兵器——『D o l l — T y p e C』。通称、『ドロシー』です」

「くふっ」

愉悦が抑えきれなかった。

主の御満悦な様子に、『よんひやくきゆうまる』も嬉しそうに笑う。

「まだ、試作品ではありませんが……」

「でも、これで兆しは見えて来たねー」

「はい」

白衣の女が頷いた。主の恍惚の双眸が“兵器”を捉えて離さない。

「全ての魔法少女は、いずれハードウェアをアップデートする……」

白衣の女の言葉に主は頷いた。

「そう……唯一無二の、弱い肉体なんていらぬ。必要なのは、痛みさえ感じない程、固く、強く、美しく、何より、替えの効く入れ物」

「例のプロジェクトが完遂し、この『ドロシー』が完成・量産された暁には……」

「そうだよ、『よんひやくきゆうまる』。世界が変わる——」

——“革命”だよ。

そう豪語する主の瞳は、鮮血の如き真紅に光り輝いていた。

☆



擂台れいだいの上では、両チームの二大巨頭が見つめ合っていた。

穏やかな表情のまま、直立不動する竜宮綾濃。

対する洪 梅華（カウ||メイファ）は、脇に差した鞘に手を掛け、ゆつくりと刀を抜いた。

「……むっ」

会場のライトを反射して刀身が輝く。だが、その光の角度に違和感を覚えた綾濃はじつと目を細めた。

「……それは」

「逆刃刀さかぼとうです」

問いかけるよりも早く、梅華が教えてくれた。

そう、彼女が只今抜いた刀は、刃が逆——構えた時、刃が持ち主の方へ向く——という一見、間違えて作られたようにしか見えない代物だった。

これには、会場からもどよめきの声が挙がる。

「ハッ、る●うに剣●のモノマネかよー」

チーム竜ヶ崎のベンチから樹里が野次を飛ばすが、梅華は振り向かず、「いえ」と即答。

「……そういえば」

綾濃が逆刃刀をじっと見据えながら問いかける。

「蒼海幫そちらの皆様は、固有武器を使わずに、自分の拳だけで戦っていましたね」

それは、梅華が逆刃刀を用いる理由にも繋がると考えての質問だった。

梅華は頷く。

「はい」

「その理由は？」

梅華は刀を構えたまま、念じるように目を閉じて語り始める。

「……日本では戦後73年間、大きな争いはありません。市民団体と警察等の国家公共機関、異民族同士による衝突もありません。あらゆる力は法律によって封じられており、国民は無意識的に争いを避けようとする傾向が見られます」

それは、魔法少女が社会に発覚してからも、同様であった。

日本の社会は大きな騒動を見せることなく、比較的緩やかに魔法少女の社会進出を受け入れている。

当然、人倫保護団体のような一般市民の団体が魔法少女相手に抗議活動を行ったり、魔法少女に排他的な処遇を行う地域も有るが……梅華の知る限り、それは小規模に見えた。

「……………」

無表情で耳を傾ける綾濃に、梅華は話を続ける。

「我ら蒼海幫、皆、生まれは異国。なれど今は、日本に住み、日本を愛する者達。故に、  
“過去の過ちを繰り返さぬよう” 努力を絶やさない日本人の精神は、敬愛して然るべき  
だと思われませう」

つまり、と梅華は、逆刃刀の銀色に瞬く“刃”に映る自分の顔を、じつと睨んだ。

「平和な日本の地に於いて、我らが刃を向けるべき相手は唯一つ、“魔女”のみ」

「成程。……もし、他に刃を向ける相手がいるとしたら」

「其れは……過ちを犯した自分自身です」

この逆刃刀は戒め。

常に“刃”が持ち主に向いているのは、“過つた際、即座に自身を斬る為”だ——と

梅華は説明する。

「……………なんだか、すつごく、カッコいいね……………」

会場も静まり返って、皆、真剣に梅華の言葉に聞き惚れていた。

お組の応援席に座る鶴乃というはもその内だった。

「うん……！」

やはり、蒼海幫の大将は格が違った。子供を産み、育てているのも有って人間が大きく見える。

二人の顔を横目で見ながら、ななかはふっと微笑んだ。

「はい……。組織の名誉や武術家のプライドの為ではなく、近しい人達の為に全力で戦い抜く。あの方の姿勢は、お二人にとって、良い勉強になるはずです」

「はい……！」

職業上、大先輩にあたるななかの言葉に、いろはは強く頷いた。

ななかの膝の上には、「ママ、頑張つて……！」と真剣に祈る花織が居る。

（子供の笑顔の為に勝つ、か……）

不意に梅華の姿勢と、今の自分は、どこか似ているのかもしれないというはは思った。

海華が将来の自分なら——

この戦い、一瞬たりとも見逃してはならないと、肝に銘じた。

「中国武術家と一手交えるは、武道の誉れ」

「参られよ」

綾濃は直立不動のまま、凄まじい覇気を発する。

対する梅華もまた、逆刃刀の刀身を鞘に戻すと、腰を落とした構えた。蒼穹の瞳が鬼神の如き眼光を瞬かせる。

一方、チーム竜ヶ崎のベンチには、大庭樹里と繚蘭百花、そしていつの間にか戻っていた高菜舞桜が座っていた。

「行けー!! 先生ー!! リア充なんざぶつとばせー!!」

「……………」

怒声を張り上げて綾濃を応援する樹里に、両隣の子分二名は溜息。

「リ、リア充って……」

「自分もさっさと沖田の兄貴と進展すればいいものを……」

ボソツと百花が呟いた一言に、樹里は顔を真っ赤にしてあたふたと慌てる。

「い、いや、ちが……っ!! あ、アタシとアニキは……その、健全で慎ましやかな関係を  
だな……っ!!」

「今更どの口で言ってるのか……」

「そ、そういつて、モタモタしてるうちに取られるパターンですよね……?? あ、怜雄君  
からLINE来てる」

「私も、フィアンセから」

意外と悩める恋多き乙女(?) だった樹里を放置して、スマホに集中する二人。

が、樹里が激昂して舞桜の胸倉を掴み上げる。

「こんのリア充どもお……!!」

「びいいいい!!? 年下の魔法少女にはそうやってマウント取る癖に何で男の人には奥手  
なんですかああああああ!!」

「クスだな」

百花が溜息混じりにボヤクが、頭に血が昇った樹里には届いてない……。

—— 舞台の上。

「“居合い”ですか……!」

腰を落とした梅華の構えを見て、綾濃は瞳を見開いた。

「最初から本気で挑まねば、貴殿に無礼と存じまして」

梅華がチームの中で唯一、武器を取って戦うことを選んだのも、その理由である。

彼女は蒼海幫随一の剣術使い。故に、刀を用いて全力で仕合うことが相手に対する最大限の礼儀と考えていた。

「なるほど……では、かかつてらっしやい」

対する綾濃は、武器を持たず、腰を落として構えることもせず、直立不動のままだ。

——何か手があるのかもしれない。

梅華は警戒したが、固有魔法の類では無いと、長年の戦闘経験から「勘」で察知していた。

恐らく、磨き上げた体術のみで、こちらを迎え撃ってくるだろう。

「……ぐや」

「……………」

「……………」

お互いに、じつと睨み合い……………梅華が先に飛び出した。

大きく一步を踏み出し、綾濃の眼前まで入り込み——抜刀!! まさに神速。銀色に光

る刀身が半円を描いて綾濃の首筋を狙う。逆刃刀の形状上、攻撃の際は必然的に「峰打

ち”となる。しかし、工匠区の名工によって鍛え上げた鋼鉄の塊だ。梅華の剛力と相俟って威力は底知れない！

「ふっ……」

「っ!」

だが、直撃の寸前で綾濃は笑い——直後の光景に梅華は瞠目した！

目の前に綾濃はいた。〃そこ〃に、気配も、魔力反応も確かに感じた。本人も呼吸音もはつきりと聞いた。故に攻撃は確実に当たると信じていた。

だが——空を切った。

必殺の居合抜きは、何も無い夜空を仰ぐだけで終わった。

「っ!!」

刹那——真後ろから殺気。

梅華が咄嗟に振り向き、両手で柄を握り込んだ逆刃刀を顔面の前で構える!!

「ぐう!!」

瞬間、雷鳴の如き爆裂音が目の前で轟き、梅華の呻き声が響いた。

まるで自動車が80km以上の速度でぶつかってきた様な威力だった。どうにか峰で顔は護れたものの、両腕がジーンと痛む程の衝撃が走り、両足が大きく後ずさった。

深呼吸しながら、踏ん張り止まる。刀を下ろすと、先と同じく直立不動のままの綾濃



が見えた。

「「「「「……………」」」」」

「……………っ」

会場全体が一斉に静まり返って綾濃を凝視する。梅華も同じだった。

今、綾濃は確かに、『攻撃』した筈。

しかし、どんな技を繰り出したのかは、誰にも見えなかつた。

(相手……………武術奇怪)

流石は達人。技の威力は凄まじい。しかし、あまり覚えの無い武術だ。

梅華は刀を鞘に戻し、綾濃と同じく直立不動した。

今度はじつと待ち構えることで、相手から先に動いてもらい、攻撃方法を見抜くつもりだろう。

「……………」

「……………」

「……………」

しばらく、お互い全く同じ姿勢で見つめ合った後——

「……………っ！」

綾濃の眼が光り、動——

「っ！」

——いた瞬間には、既に梅華の目の前に居た。

（“抜き足”！）「覚悟！」

梅華は一瞬で居合の姿勢を取り、抜刀!!

神速に難いだ峰打ちはやはり、綾濃では無く、虚空を斬る。

「っ」

刹那——再び背後から殺気。梅華は振り向き……

（今だ！）「刮目」

今度は刀を鞘に戻して、眼を見開いた!!

あろうことか、捨て身で相手の“技”を見極めようという算段だった。

——再び雷鳴が轟き、顔面に諸に受けた梅華の身体が擂台の端まで吹き飛ばされた。

「梅華さん……!?!」

いろはの顔が蒼褪める。

何が起きたのかは分からない。ただ、異常な破壊力を持つ一撃が梅華を襲ったのは分かった。しかも、頭に……あれでは、とても……

「だいじょーぶー！」

「え？」

自信に満ちた声が聞こえて、いろはは隣を見た。ななかに抱きかかえられたままの花織が、真剣な表情で倒れ込む母親を見つめている。

「ママは、あんなくらい平気だよ！　ねっ、ななかお姉ちゃん！」

「ええ……共に、信じましょう！」

ななかも真剣な眼差しを向けたまま、ギョツと花織を抱き締める。

「……………」

二人の言葉に頷き、いろはは表情を固めて、再び試合を観た。

「……………」

数拍置いて——梅華は立ち上がる。鼻が折れたらしく、力を込めて息噴くと奥に溜まった血液が床に噴射された。

ハイリスクではあったが、ハイリターンな作戦だった。攻撃を受ける瞬間——爪先を丸めた綾濃の足背——を目がはつきりと捉えた。

瞬間移動の如き抜き足と、回避。そして剛脚による異常な跳躍力と、今の一撃。

竜宮綾濃の武術の神髄は、恐らく……。

「危ない真似を……」

「流石は武術師範」

「……！」

一撃が決まったのにも関わらず綾濃の表情は苦々しいものだった。梅華は察する。

「やはり武器を……拳を下した相手には、本気になれませんか」

先程、攻撃が当たった一瞬。まさに1秒、瞬きする程の瞬間だ。

梅華は見切る為に武器を下ろしたが、直後に綾濃も攻撃の力を抜いたのである。

「初手と同等の勢いのままなら、恐らく、首の骨が無事ではすまなかった」

「……！」

綾濃がクツと顔を歪ませる。

——力無き者に、力を揮ふるわず——それは武術家ならば、常に肝に銘じておかねばならぬ常識だ。

梅華は、それを算段に入れた上で、先のような“捨て身”を用いたというのか。

「……」

綾濃は何も返さず、表情を戻して、再び直立不動の姿勢を取る。

「……」

対する梅華も、逆刃刀を構えて、綾濃をじつと見つめた。  
再び、重苦しい緊張感が、会場を支配する。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………では」

長きに渡る静寂。先に痺れを切らしたのは綾濃の方であった。

——そちらから来ないなら、こちらから行く。

技を仕掛けるべく、足を一步、踏み出した

「待った」

瞬間——梅華は掌をまっすぐ伸ばして、綾濃を制止する。

「っ」

何事か——綾野は、『抜き足』を仕掛けるつもりだった足を急制動した。梅華は覚悟を

決めたような真剣な表情で、綾濃を見つめて、

「貴殿の武術、分かった気がする」

そう、言い放った。

「えー？ マジかよ」

「魔法使ってたんじゃないのか？」

「してたもんなあ、瞬間移動！」

観客達も、梅華の言葉に一齐に驚いた。

無理も無い。綾濃の戦法は正に摩訶不思議。あれを武術と見るものはまずい筈だ。

それは魔法少女も同様だった。

「えっ!? ねえ、本当にあんな武術ってあるの!？」

「さ、さあ……僕も魔法かと思ったけど」

「同じく、デス。あんな人を騙して戦うような武術は、見たことはありません……」

お組の応援席でも、鶴乃が目を見開いて、あきらと明零ミンリンに尋ねるが、揃って首を振った。

幼い頃から武道を邁進してきた二人すら、綾濃の武術は初めて見るのであった。舞台上に顔を戻すと、梅華が綾濃を捉えたまま、再びはつきりと答えた。

「恐らくは——『忍法』」

——全ての観客一同が、一斉に騒めいた。

だが、中には納得している者も数名居た。確かに、あの戦法は時代劇でよく見る忍者に近いものがあつた。

「アイエエエ！ ニンジャ!? ニンジャナンデ!」

綾濃の武術が見破られて、樹里がビックリ仰天&大慌て!

「あのー……いちいちうるさいんですけどー……」

「流石だ……」

舞桜がジト目で樹里を睨み、百花は梅華の慧眼に感心するのだった。

「ほう……」

綾濃が口の端をニツと伸ばした。愉快そうだが、不敵な笑い方だ。

梅華が続ける。

「如何に達人であろうとも、ごく一般的な武道なら、独りで魔女を89匹も殺せまい」  
綾濃と初めて会い、大庭樹里からそのような説明を受けてから、梅華はずっと考えていた。

「某の技は、貴殿に『触れなかった』……そこで、よもや、と思いました」

あれは、忍法の極意——『木化け』であると。

実際に消えたとか、瞬間移動した訳ではない。

はつきり見えているのに、なぜかいなくなるような『錯覚』を相手に起こす技だ。

元々は、猟師の得意技であったと謂われている。

単独狩猟をする際に、じつと気配を殺し、木と自分を同化させ、熊が近づくのを待つて仕留めたそうだ。

「魔女と獣の性質はよく似ている。なので、恐らくは……」

それだけではない。あの『抜き足』の精密さと、蹴りの破壊力も。



「ふふ……。そこまでご存知なら、『忍法』が如何様な武道であるかも、ご理解されている筈」

「はい。『忍法』とは、山で生まれ、山で培われた武芸。歴史的に見ても、あらゆる武芸の祖と言えます」

——観客一同がまたも、騒めいた。

蒼海幫と馴染み深い工匠区の人々にとっては、中国武術こそが最も卓越した武術であると信じていた。

だが、綾濃の用いる『忍法』とは、それを上回るといえるのか。

「その通り。忍者は元々日本で生まれた訳ではありません。貴女は、秦氏はたをご存知ですか?」

「聖徳太子の側近であられた、秦河勝（はたのかわかつ）ですね。確か、『忍者の祖』であられた、と」

綾濃が頷き、梅華が説明を続ける。

秦河勝は、慧慈えじ、覚智かくちと並ぶ、聖徳太子の三人の側近の内の一人だった。

かつて朝鮮半島は、高句麗こうくり、百濟ひやく、新羅しんらの三国に別れており、秦河勝も、慧慈、覚智と同じく、その国々から渡来したと謂われている。

「この新羅の秦河勝は、もともと中国の呉の国の一族であられた」

彼が聖徳太子のもとで何をやったかというところ、孫子の兵法に基づいて『諜報活動』を行っていた。

つまり、これが『忍者の祖』であると、梅華は解説する。

「そして、秦河勝の一族は、のちの服部氏の祖先……」

秦氏二十九代目に当たる服部家長が伊賀服部氏の祖となり、それからは『伊賀流忍法』が伊賀服部氏に伝えられることになる。

家長から三代目のときに、上服部、中服部、下服部に分かれ、有名な服部半蔵は上服部の直系十三代目に当たる。

「つまり、忍法の祖である秦一族は中国系の帰化人で、忍法の根本には『孫子の兵法』があったと……」

「その通り、忍法とは兵法の一つ——謂わば『スパイ』として用いられてきましたが、本来は兵法そのもの。身を隠す技術、食べ物を発見する技術、自分の与えられた状況のなかで最良に保つ技術、そして敵と戦う技術……これらはいわば枝葉。神髄にあるのは、体術と、そして心理的な技術」

——他人の心理を利用する技術であると同時に、自分の心理をコントロールする技術だと綾濃は伝える。

梅華は頷き、ポツリと零した。

「山の民……」

綾濃の口元が嬉しそうに吊り上がる。

「ご名答。忍法や、獵師の技術というのは、全て“山”から生まれました。日本の山には、里の文化に属さない誇り高い民族が住んでいました。それこそが『山の民』……我が竜宮家は、その末裔なのです」

「確か、『山の民』は、十三歳になると、丹波へ赴き、二年間の修行をする習慣があると聞き及んでいます。その時、7つの法を修得すると」

- ・【軽身の法】
- ・【暗いところで行動する法】
- ・【護身の法】
- ・【攻撃の法】
- ・【つぶてや手裏剣などを投げる法】
- ・【秘密の連絡法】
- ・【身を隠す法】……

かつて、鬼ヶ島と呼ばれた二木市の唯一神である“赤鬼”が退治されなかった理由

も、『山の民』の力添えあったからだと言われている。

丹波で修行を終えた山の民（忍者の卵）を多く呼び寄せ、赤鬼、竜、大蛇といった神々を守護させ、外部へ諜報活動を行わせていたそうなの。

「私も、この7つの修業を基本にしています」

忍法の修行は、密教——所謂『山伏の兵法』に基いている。

山に籠り、獣と軽装——時には素手で殺し合い、「十穀絶ち」と呼ばれる厳しい食事制限、『印契』と呼ばれる精神統一法……何れも想像するよりも遥かに過酷な修練だろうと、梅華は思った。

「なるほど……色を覚える暇が無かったのも、領けますね」

「あ、っ……!?!」

ピキピキピキッ

——梅華は感心して言ったつもりだが、綾濃の額にごつつい血管を三つも浮かばせた。

純粹って怖い……。

「人を小馬鹿にするのも今の内ですよ……」

「……?」

馬鹿にしてないが——しかし、綾濃から殺気にも近い気迫を感じて、梅華は身構える。

「いくら忍法の知識が深かろうと、術を見破らねば、貴女に勝利はありません」  
「……」

綾濃がまたも直立不動の姿勢を取った為、梅華も居合の構えを取る。  
彼女の言つてゐることは最もだ。

武術とは表よりも裏の意味が大事である。例えば、空手の「型」はその動きを見られても技を盗まれないように、技をわざと隠してある。

型そのままでは不合理だ。「型」を役立てるには知恵——つまり、「技」の修得が必要になる。

忍法も同じだ。

梅華はこれの成り立ちや仕組みには詳しいが、「技」に関しては素人同然。正直なところ、見破るにはもう何度か、相手から受けねばなるまいが……綾濃の今の気迫からして、次で仕留めに掛かるのは明白。

「……本気で参ります」

「……………ごき」

梅華が腰を落とす。綾濃が『抜き足』を仕掛けてきた同タイミングで抜刀。逆刃刀は綾濃に触れたが、やはり綾濃の姿が掻き消えた。

(……………)

だが、梅華は息を乱さず——静かに瞳を閉じる。

——梅華ちゃん。どうして刀に鞘があるか、分かりますか？

——刀の真髓は、力を隠すこと。殺すことではありませんよ。

—— 暇の裏に浮かんだのは、懐かしい記憶の光景。

子供だった頃、自分に中国武術を覚えてくれた、あの人の微笑みが蘇る。

(姉者……)

今は五強聖の一人であり、『武神』と呼ばれし女性。

嘗ての梅華は彼女を超えようと百回拳を交えて、百回敗北した。

今の状況と全く同じだった。どこから拳が飛んでくるか分からなくて、恐怖に怯えた。震えあがって、足が竦んだ。

——梅華ちゃん。

——目を閉じなさい。

——視覚を失うと、他の感覚が増して、敗北よりも早く勝利を知ることができま  
す。

——さ、まずはここにいる鶏を50羽、捕まえてみなさい。

「……………」

あの修行を、よく思い出せ。

思考を感じろ。空気が動く。動く前に感じろ。

「……………!!」

空気を切る音が聞こえた。自分の蛭谷こめかみが迫ってくる。何かを、肌で感じる。

「覇！」

一瞬の動作で逆刃刀を鞘に戻す。必要ないと断じた。

梅華の両手が俊敏に動き、何かを捕らえる。

今だ——敵の力を利用しろ。長所をつき、弱点をつけ。

梅華が目を見開く。自身が捉えたのは、綾濃の足首——雷撃の如き一撃を放つ、

必殺の剛脚。だが、軸を掴んでしまえばこちらのモノ。赤子の足も同然！

「征ー」

合気道の小手投げの要領で、足首を捻りまわした。綾濃の身体がそれに引つ張られて宙で旋回した後、固い床に上体を叩き付ける――

「くっー」

――が、受け身を取って衝撃を防いだ。綾濃は床に手を付いた反動で、上体を起こし梅華に反撃しようとするが――刹那、梅華が「奮ッ!!」と掛け声。直後に綾濃が苦痛に呻いた。

理由は明白。巨岩をも砕く梅華の手刀が、綾濃の踝に叩き落とされていたからだ！

「っ……!!」

綾濃は無事な方の足で、梅華の手首を蹴り上げて、ダメージを受けた足を解放する。

そして、後ろに転がりながら、相手と距離を取った。変形した骨が神経を圧迫してるのか、立ち上がろうとすると、筋肉が攣った様な激痛が走る。

「っ……」

思わず、膝が屈めてしまう綾濃を見下ろしながら、梅華は力強く言い放った。

「木化け、破れたり」



武術家にとっての急所を見事破壊したが、梅華の表情には一片の油断も緩みも無い。「貴殿の『忍法』の真髄は、その鍛え抜かれた足腰から為る桁外れの跳躍力だ。軸足を破壊されては、最早『術』は使えまい」

——だが、綾濃との勝負はこれからだ。一時たりとて、気を抜いてはならない。梅華の顔には依然として強い警戒心が浮かんでいた。ゆつくりと鞘から逆刃刀を抜き、構える。

「……………尋常に、勝負致せ」

「……………よしなに」

綾濃は片足で、ゆつくりと立ち上がった。

右手がゆらりと弧を描き、脇差の鞘を掴む。

——第二ラウンドが、始まった。

編 F I L E # 8 0 蒼海幫 v s 竜ヶ崎 大将戦 | 後

「いざ尋常に、勝負致せ」

「よしなご」

二人は龍虎の如く睨み合い、お互いに武器を取って構えた。

梅華は右手で逆刃刀を入れた鞘を握り、低く腰を沈めて居合の抜刀体勢を取る。綾濃の右足は先ほど破壊した。先のように跳んで避ける事は不可能、ならば武器で受け止めるしか防ぐ術無し、と判断した。

対する綾濃は脇差を抜くと、正眼に構えた。その脚の運びを見て、梅華の眼が鋭くなる。

「その構え……よもや、柳生、ですか」

緊張を伴った梅華の呟きに綾濃はフツと微笑んだ。

『柳生新陰流』——とは剣術の流派の一つである。

使い手は、世間一般では『柳生十兵衛』が代表例だろう。

伊賀上野で生まれたこの剣術は、室町時代末期に、劍聖・上泉信綱かみいずみのぶつなが愛洲陰流あいすかけの一手、

『転』（まろばし）を工夫し、『新陰流』と号した。

上泉信綱に師事した柳生宗嚴むねよしが『無刀』を開悟し、『柳生新陰流』の祖となったのが、始まりである。

綾濃は忍法の使い手……そして柳生新陰流発祥の地は、伊賀……これが意味すること  
は一つ。

「確か、柳生新陰流も、元来は忍法であつたと……」

恐らく、先の綾濃の跳び蹴りは、極意『猿飛』を応用した技であろう。

普通、跳ぶという動作は足を縮めて、垂直に跳び上がる。屈んだ時に、大きな隙が出る。

だが、『猿飛』は、腰の力で跳ぶのだ。屈む動作無しに跳ぶから、隙が無い。

無論、このような常人離れの動きは、魔法少女でも魔力を使えば可能だ。だが、相手に感知されやすく、動きを読まれやすい。

やはり、武術の達人でなければ容易にはできない技である。

「よくご存知ですね」

綾濃はそこで笑みを消すと、テレパシーで梅華に語り掛ける。

（先ほど、貴女は仰っていましたね……。日本では戦後73年間、大きな争いは無かつた  
と）

（ええ）

(おかしいとは思いませんか?)

(……………)

脳に響く声色はとても穏やかだったが、圧倒的な覇気を梅華は感じていた。表情筋が自然と強張る。

(確かに貴女の言う通り、日本人は第二次世界大戦における敗北・他国の従属への反省から、争いを無意識的に避ける様にはなつていったと思います。……しかし、それだけで、魔法少女発覚の混乱さえも、抑えられていると?)

それは10年前、アメリカで発生した大事件が原因だ。魔法少女が全世界に認知された、悍ましい事件――

(日本では、法律上、警察組織や自衛隊に魔法少女は配属できない。しかし、私のような『山の民』は確かに存在する……この意味が、分かりますか)

(まさか)

(ふふ……我々は、古来より御国に仕える「忍び」として、あらゆる不穏分子から混乱を防いでいたのですよ。……10年前に関しても、ね)

綾濃の答えに梅華の背筋が冷えた。

この国は、魔法少女を極秘裏に操り、魔法少女が世間に露呈された状況も想定していたというのか。

綾濃は語る――

『山の民』の魔法少女達……つまり、*“くの一”*は、日本全国を駆け回り、一般人と魔法少女同士の衝突や、困窮に陥った魔法少女による犯罪行為、絶望による破壊等、社会の混乱を抑えるべく、暗躍していたのだと。

（この国は、貴女が今仰つたように……国民個々の*“優しさ”*によつて魔法少女は緩やかに受け入れてもらう……そういう方針なのですよ）

その*“優しさ”*とは恐怖である。

先の大戦への忌々しい記憶、長く続いた貧困からなる国民同士の奪い合い――先の見えぬ不安に彩られた日々を二度と繰り返さない為――という題目で。

（何故、斯様の事を某にお教えなさるのです。純粋な日本人では無い、某に……）

（ふふ、貴女は口の堅い方だと、直感で思ひましてね）

即座に梅華は首を振つた。

（よく言われますが……印象での判断は当てになりませぬ）

（では問います。何故、貴女は口調や些細な仕草に至るまで、日本人に成り切ろう、としているのです？）

（……………）

梅華は表情はそのままに、沈黙した。綾濃の口元がより愉快そうに吊り上がる。

(日本に来られる前……祖国に住んでいた過去を、忘れたいからではありませんか?)  
(……………)

梅華は否定せず、沈黙を貫いた。それだけで綾濃を満足させるには十分だった。

(凶星、ですか)

(……………)

(ふふ…… “今” の貴女は真面目で筋を通す方だ。今はそれで、十分です)

「っ!!」

瞬間、梅華は目を見開いた。

「きゃー！ こわーい！ 助けてー!!」

「ツ………!!??」

「……………!!??」

突然!!目の前で展開された光景に、梅華と、観客全員が混乱した。

綾濃は突然背中を向けると、女子のような悲鳴を挙げて逃げ出したのだ。

「!?!……………??」

梅華、硬直。

当然だ。ほんの4、5秒前まで綾濃の形相は戦意充分であった。それが掌を返すように一変。あまりの違和感にビツクリ仰天の余り、思考が空白した。

(梅姉！)

「ッ!? ……っ!」

審判の美雨メイユイのテレパシー呼び掛けで、梅華は眼を覚ました。

とにかく、敵は背中を見せているのだ。逃してはならないと、慌てて梅華は足を大きく一歩踏み込んだ。

綾濃は利き足を負傷している為、逃げ足は鈍足。追いつくことは容易い。背中に密着すると、胴目掛けて逆刃刀を勢いよく薙いだ。

が、次の瞬間——綾濃が消える。

「むっ」

一瞬、腰を捻ったように見えた。

飛翔した訳では無い。視線を下に向けると、自分の足元で綾濃がしゃがみ込んでいた。

その両手には脇差がしかと握られている。股下に潜り込ませた刃が手首をひねって上を向いた。

そのまま股間に向かって垂直に斬り上げる!



「つ」

梅華の背筋に悪寒が走り、息を飲んだ。

「くっ」

考える暇は無かった。梅華はいちかばちかの賭けのつもりで、爪先に力を込めて背後に飛んだ。

綾濃の脇差がギユンツと音を立てて空気を切り裂き、剣尖が天を仰ぐ。

寸手のところで回避は成功した。梅華はバク転の要領で、両手を床に付き、体勢を整えた。

街灯を受けて銀色に瞬く刀身を睨みつけて、梅華は忌々しく呟く。

「『逆風の太刀』か……!」

それは、柳生新陰流の極意の一つだ。確か……

「股裂き、即ち、金●を狙う技……」

「その通り。●ンタマです。戦国時代、多くの武士は鎧を着て戦をしましたが、纏わないのは股倉だけです。キン●マを狙う事はつまり必殺となり得ました」

「ちよつとちよつと!! いい大人がデカイ声でキ●タマキンタ●言わないでよつ!!」

「つ、鶴乃ちゃん……鶴乃ちゃんも言ってるよ……」

—— 無論、試合を観ていた子供達には大ウケであったのは言うまでも無い……。

「●玉……か」

言うまでも無いが、梅華は魔法少女であり、女性である。●ンタマは無い。

しかし、どんな人間でも、筋肉の無い箇所は『急所』であり、強い一撃を貰えば『必殺』となるのだ。

股間に筋肉は無い。

無論、魔法少女なら魔力によるプロテクトが自然に纏われるが、綾濃レベルの達人から今の一撃を喰らえば、内腑の損傷は避けられまい。やはり筋肉が有る箇所とは受けるダメージが全然違うのだ。

「ですが……僭越ながら、一つ、意見申し上げたい」

「なんなりと」

綾濃が笑みを浮かべて頷いた。

梅華の知識はかなり深い。なので、今の『逆風の太刀』に関することだろう、と捉えていた——

「〃キンタマ〃は、アイヌ語だ」  
「えっ」

——だけに、意外だった。  
今度は、綾濃が〃虚〃を突かれた。  
——梅華、動く。

雷鳴の如くけたたましい金属音が会場全体を震撼させた。梅華が一瞬の内に踏み込み、神速の居合抜きを綾濃の首筋に向けて放っていた。直撃寸前で、綾濃はかろうじて受け止めた。その表情は、苦々しく歪んでいる。

「……………っ」

「仕損じたか」

踏み込みに相当の力を込めたのか、梅華の表情筋も強張っておりさながら鬼の形相であつた。

剣撃を受け止めた脇差を握る手をわなわなと震わせながら、綾濃が呻くように漏らす。

「……………ふふっ、〝まやかし〟を用いるとは、案外非道ですね」

—— 訳がわからなかった。

綾濃にとつて、先の梅華の〝下ネタ〟は全く予想の範囲外だった。彼女のイメージとは掛け離れた言葉に、ビックリ仰天の余り、思考が止まった。

それが、大きな隙となつた。見切りがあともう一瞬遅れていれば、敗けていた。

「兵は詭道なり……………故に、剣を用いる我等も又、詭道邁進」

こちらを睨み据えながら、低く発せられた梅華の呟きに綾濃は感心した。

武道家とは正々堂々、真正面から戦うべし—— 世間一般の多くはそう捉えている

が、それは誤解である。

そもそも多くの武道や剣術は元来、*“人殺し”*の技術である。

真正面から殴り合い、斬り合っているはず勝てないし、こちらが死ぬ確率も高い。ましてや相手が集団であつた場合に、基本通りの立ち振る舞いは、至極非合理である。ならば、如何に敵を欺き、隙を突いて仕留めるかが、鍵となる。

よつて、多くの武道の極意や秘伝には、『まやかしの術』が存在するのだ。

その原理は、至極単純——いきなり『訳の分からないこと』をするのである。

いきなり綾濃が悲鳴を挙げて逃げ出したように。先の梅華の*“下ネタ”*のように。

訳の分からないものを見せられると、相手は驚く。どうすればいいか、咄嗟に判断できなくなる。気持ちの動揺が大きな隙となり、そこを突かれる。

「貴殿もまやかしを用いたであろう。至極尋常。当たり前のことだ」

竜宮綾濃は忍者である。よつて、最初から正攻法は通用しないと梅華は考えていた。

しかも柳生新陰流の使い手だ。

その剣術にも当然、『まやかしの術』は存在する。『転』（まろぼし）が代表例だ——でなければ、名前に*“陰”*など付けない。

（なるほど、尋常に勝負致せ、とは……そういうことでしたか）

剣が押し切れないと見るや、即座に鞘に戻す梅華を見据えて、綾濃は嗤う。

剣士とは詭道たるもの。梅華の言う「尋常」とは、自分も欺くから存分に欺け、という意図であつたのか。

迂闊だつた。梅華の精悍なイメージに囚われ過ぎて、言葉を勘違いして解釈していた。正々堂々と来るならば、まやかしは有効、と……。

思えば、あの時点で、彼女は「まやかしの術」を使つていたのかもしれない。

(然れば……)

綾濃は再び脇差を正眼に構えた。梅華の瞳がギンと鋭く瞬く。

「貴殿にはまだ秘剣がある筈、存分に示されよ」

「フフツ……その言葉、後で後悔しても知りませんよ?」

綾濃が緩やかに笑うと、足元に魔法陣が発生した。固有魔法の発現。

強力な魔力の反応を感じ取り梅華は天を仰いだ。綾濃が脇差を天高く掲げたのは同時だつた。

数多の星が輝く夜空を、暗雲が覆い始める。

「二ノ太刀・『雨』」

天が漆黒に染まつたタイミングで綾濃が小さく呟いた——瞬間、観客全員が一斉に目を見張り、耳を塞いだ。

鼓膜を劈く程の轟音を叩き鳴らす豪雨が舞台に乱舞する。当然、梅華と綾濃の頭から

諸に浴びた。だが二大巨頭は、叩き付ける冷雨に痛みも悪寒も感じていない。互いに滾る闘志がそれを忘れ去っているかのよう。

「……………」

「……………」

綾濃は脇差の剣尖を天に仰いだまま。

梅華は天を仰いだまま、じつと待つ——瞬間、雨粒に紛れて銀色に光る何かが無数に見えた。

梅華が瞳をカッと見開く!!

「覇ッ!!」

梅華は豪雨を降り注ぐ天に向かって、チェーンパンチを打ち込んだ!

その速度は、門下生の中でも最強の実力者であるだけに、先的美篤メイエン、心蝶シンティエが繰り出したものとは比較にならない。正に光速の連続突きが、銀色の雨粒を次々と受け止めていく。

脇差を天に掲げたまま、綾濃はその様子をじつと見つめていた。

光景に見惚れて、感嘆の息を漏らす。

「……………」

一方、観客一同は耳を塞ぎながらも、ポカンとしていた。

雨に打たれながら、天に向かつて目に見えぬ程のチエーンパンチを打ち込む梅華の姿は、美しい物があつた。しかしだ、一体何をしているのか分からない。

——10秒程経ち、雨が止んだ。

「……えっ?」

「ママ……!」

「……っ」

いろはが目を見開き、花織が驚き、ななかが目を細めた。

雨が止んで、梅華は両拳をだらりと下した。握り締めたそこから、鮮血が滴り落ちて  
いる。

掌を解放。

途端、観客席の一部分では悲鳴が拳がった。

開かれた梅華の手から、無数の銀色に瞬く何かが、ばらばらと床に落ちる。

一般人には分かりにくかったが、応援している魔法少女達の目にははっきり見えた。  
彼女達の肝を抜くには十分。

それは——刃物。雨粒に紛れる程に、小型の。



「くっ……………!?」

鮮血に塗れる両掌の痛みに梅華が呻く——暇も無かった。

綾濃が姿を消している。瞬間、足元が震えた。

「っ」

強烈な殺気!!

驚いたまま下を見ると、既に屈んで脇差を自分の股下に潜り込ませている綾濃が居た!!

拙い、*「逆風の太刀」*だ——

綾濃が腕をひねり、そして手首をひねる。一瞬で刃が上を向いた。ギューと空気を切り裂く音が鳴るよりも早く梅華は腰を捻った。

綾濃の目が見開かれる。振り上げた剣尖は再び何も触れずに、暗天を仰ぐだけで終わった。

首を上に向けると、梅華の背中が視界に映った。彼女は跳んでいた。*「弾み」*を付けたようには見えなかった。膝を伸ばしたまま、跳んでいた。

綾濃が振り上げた剣尖よりも、高く!

「……………」

梅華は距離を取って着地した。必殺の一撃を再び躲すことに成功。しかし、

「っ!？」

安堵するにはまだ早かった。ばりばりばりと音を立てて、何か接近してくる!

それはなんと、<sup>つらら</sup>“氷柱”であった。氷の剣山が床を走るように次々と出現し、梅華に迫ってくる!

——寸前で、バックステップして梅華は回避する。見切りがあと半瞬遅れていれば全身が氷漬けにされていた。氷柱の先端が微かに右肘辺りを掠め、血が滲み出る。

「……一ノ太刀・“月”」

右肘を抑えながら前を向くと、脇差を振り上げたままほくそ笑む綾濃が居た。

その刀身を見ると、“満月”がくつきりと映り込んでいたので、梅華は暗天を仰いだ。綾濃の真上の雲だけが消え失せて、満月が姿を見せている。

——先の“雨”といい、恐らく、綾濃の固有魔法は天候を操る能力か。

今の技は、刀身に月を映し出す事で、剣技を発した際の風圧に絶対零度を伴わせる、というものだろうか。

「驚きました。あの状況から“逆風の太刀”を躲すどころか、“猿飛”まで使うとは……!」

脇差が震えていた。綾濃の表情は喜びに満ちていた。

梅華の才能への期待、自分に匹敵する好敵手<sup>ライバル</sup>の出現、その歓喜に。

「『猿飛』に関しては、見様見真似ですが……それしか確実に躲す術は無いと存じました」

しかし、その術を用いるには、拍子と呼吸を合わせることが必要だ。

相手の攻撃が思ったより早かったり遅かったりすれば、足を打たれることになる。相手の動きにタイミングを合わせることが必要である。

「つまり、『逆風の太刀』も一度見ただけで覚えた、ということですか……面白い」

にいつと綾濃は口の両端を吊り上げた。狂喜が理性を喰らい始める。武者震いが更に大きくなり、天に掲げた脇差がカタカタと音を立てて揺れた。

暗雲が再び月を覆い隠すと、ゴロゴロと音を立てて発光する。

観客は一斉に息を飲んだ。綾濃は次に何をするつもりなのか。梅華も、再び逆刃刀を居合腰に構えて身構える。

——綾濃に向かって一直線に『稲妻』が落ちた。天に掲げた脇差の剣尖が避雷針となって受け止める。

凄まじい爆音に、観客から悲鳴が聞こえた。

綾濃の脇差に、膨大なエネルギーが集中した。直後、梅華が目を見張る。稲光を伴いながら、太陽の如く眩く光る脇差を綾濃は鞘に戻すと、梅華をしかと見据えて、腰を深く落とした。

「奇しくも、奥義は同じ」

「……………!!」

——居合か。

“雷”を纏った綾濃の脇差から感じ取れる熱は凄まじく、梅華の額に汗が滲んだ。間違いなく、次の一閃が勝負を決める一瞬となるだろう。

「耳に挟んだことがあります」

「……………」

「神浜には“雷神”が居ると。その剣閃は、迅雷の如し」

「……………」

梅華は何も答えず、ただ、腰を落として、綾濃をしつかりと見据えていた。

「蒼海幫、洪 梅華。 ……勝負」

綾濃は分かっていた。今まで梅華が繰り出していた“居合”は、本気のものでは無いと。

必殺秘剣・迅雷斬り——それを見せて貰う為には、

「三ノ太刀——」

「……………!!」

こちらから本気を見せるべきだと。

稲光を纏う脇差の光が激しさを増した。だが、梅華の目は眩むことなく、寧ろカツと見開いた。

「雷」

瞬間、綾濃が脇差を抜くと同時に、消えた。

「っ!!」

神速で剣を薙いだ時、綾濃は見た。

梅華が大口を開けたのを。覆っていたマスクが口に入り、思いつきり噛み締める。

——目を細めて、確認。

あれは「マスク」では無い。

「ッ!!」

高密度に圧縮された「ゴム」だ。それがマウスピースの役割を担う。噛んだ瞬間、梅華の形相が再び「鬼」と化した!!

「覇!!」

梅華、吠える。

彼女の腰元から閃光が走った。綾濃の脇差のように「雷」を纏っていた訳ではない。

しかし、綾濃や観客一同の目には、白銀に光る刀身が、さながら「雷」の様に見えたのだ。

——秘劍・迅雷斬り。

二筋の閃光が、二人の眼前で合致した。

甲高い金属音とともに青火が散り、金気が流れた。

瞬間——発光。大爆発。

互いが剣に込めた莫大な魔力と熱量が、衝突と同時に破裂した。

擂台れいだいが激しく揺れる。爆発の中心から数多の稲光が発生し、擂台中を焼き裂いた。凄まじい勢いで地割れの如き罅が発生する。

「ママ——!!!」

「[[[[.....]]]]」

花織が叫んでいた。

応援席の魔法少女達も、壮絶なる光景にただ圧巻され、全員が言葉を失っていた。

ただ、固唾を飲んで見守っていた。二人の無事を。そして、信じる者の勝利を。

——数分経つと、稲光は収まり、煙が晴れた。

「……………」  
「……………」

観客全員が安堵した——のも束の間だった。

二人は確かに無事だった。お互いに顔を合わせて立っている。

しかし、爆風と魔力の衝撃波を諸に浴びたのだ。全身や衣装に傷や汚れが痛ましい程に目立ち、足元には鮮血が溜まっている。

肩で息をしており、お互いにギリギリで立っている、という状態だ。

(やはり、最後に頼れるのは……………)

二人とも、刀は無い。衝撃で吹き飛んだ。

梅華は握り締めた拳を胸元まで掲げて、綾濃を睨み据える。

(これしかない、か……………)

対する綾濃も同様に拳を胸元まで掲げた。

最早、武器は無用。鍛え上げた己の肉体と研鑽した武術こそが全て。

「参る」

「よしなに」

綾濃が間合をつめ始めた。

摺り足で身を寄せてきたが、上半身にすこしも揺れもなく、どつしりと腰が据わっていた。

右足が負傷し、満身創痍にも関わらず、である。

間合がせばまるにつれ、綾濃の氣迫が高まり、熱気が満ちてきた。いまにも、打ち込んできそうである。

間合まで、あと、一間——と、梅華が読んだ。

「っ!!」

綾濃が歯を喰いしぼり、左足を一步、踏み込んだ。刹那的な速度で放たれた右正拳逆突きが、梅華の胸元に炸裂する。

「ぐっ」

同じく満身創痍の為か、梅華も回避できる程の余力は残されていないかった。固めた胸筋で受け止める。威力はそれ程でもない。だが綾濃は、そのまま拳を押し込んだ！がごんつという大きな衝突音と同時に、梅華の背中に衝撃と痛みが走り、吹き飛んだ！

——これぞ、古流武術の秘技「裏当て」、またの名を二度打ち。

『透勁』などとしても知られる、身体の内部に打撃を通す技である。一発目の打撃で物



体の抵抗力を殺し、瞬時に肩を入れて二発目を打ち込むことで完全に破壊する。

戦国時代に、鎧を着た武士を鎧の上から打撃で倒した技であり、かつての達人は身体の外から背骨だけを叩き折ったとも云われる。

「……………?!」

だが、綾濃はギョツと目を見開いた。吹き飛んだ筈の梅華が、霞む様に消えたのだ。

刹那、伸ばされた右腕に何かが絡まった様な感覚——同時に身体が横転。

「覇ツツ!!」

まさか、『木化け』?!——

綾濃が驚愕する間も無く、足首が無数の鈍痛に襲われた。

いつの間にか、鬼の形相が視界に有った。マウントを取った梅華が、倒れた綾濃の下肢から昇るようにチエーンパンチを繰り出していた。

一撃、一撃の威力は凄まじく、喰らう度に身体の内部で骨が轟音を鳴らした。

「……………」

想像を絶する痛みに、綾濃は悲鳴どころか呻き声さえ挙げられなかった

だが、連続突きが顔面に達した途端、綾濃は左足を横薙ぎし、梅華の軸足を払う。攻撃に意識を集中していた為、完全に不意打ちとなった。今度は梅華が横転。瞬時に綾濃が馬乗りし、顔面に向かって何度も拳を振り抜く。ドゴツ、ドゴツ、と固い物同士を叩

き合わせたような鈍い音が鳴り響いた。

「ぐはっ」

勢いよく振り抜いた拳が梅華の頬骨を強打した。口の中を切って梅華が吐血。

瞬間、観客席から怒号が響く。

「おい、何やってんだ審判!!」

「このまま続けたら本当にとっちかが死んじゃうぞ!!」

「子供の前で見せていいのっ!!」

「早く止めて——!!」

「……………」

怒号を一身に受けながら、審判の美雨はひたすら耐えた。今はまだ、自分が動く時ではない。

「ママ…………っ!」

——阿鼻叫喚を聞きながらも、花織はただ、母の勝利を願う。

(花織！)

朦朧とする意識の中で、愛娘の声がはつきり聞こえた気がした。

梅華の目が、光る。

「嘖ッ!!」

「あッ!!」

綾濃が右拳を顔に振り下ろした瞬間を見計らい、梅華は頭突きを繰り出した。拳が頭頂部に直撃し、右手の五指がべきり、と不快な音を立てる。

当然だ。どれだけ拳を鍛え上げたとしても、頭蓋骨より固くすることは不可能。綾濃が梅華から離れた。声の無い悲鳴を挙げた。今だ、

「覇ッ!!」

全力を込めて、梅華が拳を打ちこんだ。これで、トドメを刺す——

—  
“それ”  
は深々と心臓に突き刺さった。

何も、湧かなかつた。

当たり前だ。

自分達は被害者である。

こいつらは独裁者に縋りつき、私腹を肥やし、貧しい人達から搾取した。死んでいい人間だ。

彼女は突き刺した胸元から“それ”を引き抜いた。

鮮血に染まっていた。先ほどまで卑下た笑みを浮かべたふくよかな“そいつ”は、只の物体と化していた。

最早、興味も無い。

彼女は、彼のコートから財布を抜き取る。誰も見ていない事を仲間と確認し合って、そのまま走り去った。

そうだ。

どうでもいい。

こいつらはいくらでもいる。

でも、私には。私達には。

家族を助けたい。村の人達を助けたい。自分が、生きたい——大切な想いが、ただ、私達からありとあらゆる生命をむしやぶりつくそうとする害虫どもから。殺される前に、殺せ。搾取しろ。みんなの為に。気にするな。命を奪ったら、只のものだ。気にするな。自分には関係ない。奴らの仲間が復讐したら？ 都合が良い。どうせ群がる

だから、奪え。

私達からありとあらゆる生命をむしやぶりつくそうとする害虫どもから。殺される前に、殺せ。搾取しろ。みんなの為に。気にするな。命を奪ったら、只のものだ。気にするな。自分には関係ない。奴らの仲間が復讐したら？ 都合が良い。どうせ群がる

蟲共だ。そいつらからも奪ってやれ。みんなの為に。この狂った世界で、皆が不自由無く生きる為に。

梅華ちゃん。

殺したいなら殺しなさい。

だけど、その前に。

それが、本当に貴女の人生の為になるのか……今一度、考えてください。



——  
拳が、打ち込まれることは無かった。

寸前で、止まっていた。

綾濃は、きよとんとしていた。 “死” を覚悟していたのに。  
いつまで経っても、攻撃は来なかった。

「……………」  
梅華は、腕を伸ばしたまま、硬直していた。その表情に—— “鬼” は居ない。

「っ!!」

—— 今だ、勝てる!!

梅華の様子に疑問に感じる暇は無い。

綾濃は咄嗟に動いていた。立ち上がり、彼女の鳩尾に向けて、拳骨一閃!

一撃目はドツと深々と突き刺さり、続け様に肩を入れて二撃目を放つ。ガオンツと抉るような爆裂音が響いた。必殺の『透頸』が決まった瞬間だった。

「っ!! ……………ぐっ」

「蒼海幫の虎」、「紅鬼」、「雷神」と呼ばれし魔法少女の膝が、遂に折れる。

「…………っ!!」

がくりと膝から崩れ、前のめりに倒れ伏す梅華の姿を見て、綾濃はハツとなった。気が付けば、自分は仕留めるつもりで本気の一撃を放っていた。

「ママっ!!」

—— 彼女の、子供が見ている眼の前で。

「……………っ」

かろうじて、意識は残っていた。

梅華はうつすらと目を開けた。そして、審判の美雨にアイコンタクトを送る。

「……！」

美雨はコクリと頷くと、声を張り上げた。

「試合終了。 竜宮綾濃の勝利!!」

「いいえ。……………私の“負け”です」  
咳かかれたその一言で、全てが覆った。

——  
しかし

F  
I  
L  
E

#  
8  
1

終  
宴

「いいえ……私の『負け』です」

その一言で、周囲が騒めいた。

「は……!? 先生……なんで……!?」

「一体、どうして……!?」

特に混乱が大きかったのは、チーム竜ヶ崎の面々だった。

当然だ。倒れたのは洪 梅華、立っていたのは竜宮綾濃である——大将戦の結果を見れば、勝者は一目瞭然——樹里と舞桜もそう確信していただけに、綾濃の一言にはシヨックが大きい。

「……!」

ただ、唯一百花だけは、何かを悟ったのか、真剣な眼差しで二人の様子を見つめていた。

「っ……!」

綾濃がゆっくりと歩き出す。

苦痛に顔が歪んだ。破壊された右足を引きずりながら、彼女は梅華の下へと近寄って

いく。

あの様子だと、試合中ずっと痛みを堪えていたのだろうか。無論、魔法少女なら痛みを遮断することもできるが、武道家としての意地が拒んだのだろう。

「洪 梅華さん……」

「っ……っ……」

呼ばれて、梅華は首を持ち上げた。

全身が、痛い。綾濃が最後に放った必殺の『透勁』は内腑を貫通して背骨にまで到達していた。下半身の感覚が無い。恐らく、脊椎がダメージを受けたのだろう。

「無念……。身体動作、不可」

もはや、指一本も動かせる余力も無い。痛みに顔を歪ませながら乾いた声で呟いた。

「……立っている、貴殿の勝ちだ」

「いいえ」

綾濃は梅華の眼前まで歩み寄ると、膝を屈めて、正座した。

「何故、あの時、拳を止めたのですか？」

問いかける。

恐らくその理由は……綾濃には察しが付いていた。

だが、本人の口から聞くべきだと思った。梅華の「武」の信念とは、その答えの中に  
有る筈だと。

「……」

梅華は綾濃をじつと見つめたまま、沈黙を貫いた。綾濃が言葉が続ける。

「打ち抜けば、私を倒せた筈。確実に」

「……っ」

梅華は眼を閉じて、首を振った。

「それは「勝ち」じゃない……」

眩かれた言葉に、綾濃が目を見開く。

「あれは試合だ……殺し合いでは無い……」

今にも消え失せそうな掠れ声。だが、絶対の信念が宿した瞳で梅華は訴えていた。

「ですが、結果として、貴女は私に隙を許し、打たれた」

勝利すると誓った愛娘の前で、無様な姿を晒してしまった——その事実には悔いは無い  
のか、と暗に問いかける。

「花織の為だ。後悔、無し」

「……！」

迷いの無い眼差しに、綾濃は圧倒された。



「子供達の前で、大人が間違つてはいけない。わたしはもう、二度と間違いたく無い」  
悔恨は一切無く、寧ろ、満ち足りた表情だった。

勝利とか、全力を出し切った事は関係無かった。ただ、自分の正しさを貫けたことへの充足感。

くつと下唇を噛む綾濃。やはり、そういうことか――

「洪 梅華さん……私は、自分の勝利だけを考えていました。どうすれば、貴女が倒れるか、そればかりを……」

「……」

「剣士とは『詭』道たるもの。しかし、『鬼』道に踏み入つてはならない……」

一時とはいえ、綾濃は戦いに酔った。『鬼』となった。勝てばそれで良く、相手の生死など、関係無かった。子供のことなど気にも留めなかった。

だが、梅華は――最後まで子供達の模範であろうとした。その姿勢こそが、綾濃に身を以て大切な事を教えてくれた。

「……自分の立場を忘れなかった貴女こそ……真の武術家です。故に」  
深呼吸。「改めて申し上げます」

――私の『完敗』です。

綾濃が梅華に、深々と『土下座』した。  
それを見て、審判の美雨声メイユイを張り上げる。

「試合終了！ 洪 梅華の勝利!!」

今、全ての決着が付いた。

「ええ〜……??」

「ま、敗けた……!!? あの先生が……!? そ、そんなあ………」

フツと意識が飛んだ。

一瞬で、顔面蒼白となった樹里がベンチから、ゴロンと地面に横たわる。

「お、親分!! しっかりしてください、おやぶーん!」

「……………」

樹里、両目をぐるぐるの渦巻きに回して気絶!

舞桜が必死に肩を叩いて声を掛けるが反応ナシ。完全に逝っていた。



「……不覚。祭りの役員でありながら、皆の手を患わせるとは」

「ダメだよ!! ママは怪我してるんだから、座ってて!」

——その後。

全てのプログラムが終了し、祭りの後片づけが行われていた。

梅華の身体の負傷は深く、内臓や骨にまで及んでいた。一応、救護室に居た魔法少女から回復魔法を受けるも、完治まで三日かかるといわれた程だ。

現在、車椅子に乗っており、立ち上がろうと試みるも、娘に押し留められて泣く泣く断念している。

そんな花織であるが、現在、お組の法被を着て、年上の役員や学生ボランティア達と混じってテキパキと片付けを手伝っている。

「花織ちゃん」

「いろはお姉ちゃん!」

紐で結んだ荷物を運んでいると、同じ法被姿で片付けを手伝ってるいろはとばったり

出くわした。

いろはに声を掛けられて、花織は笑顔を向ける。

「おめでとう！ お母さん、かっこよかったよ！」

「うん、ありがとう！」

花織は荷物を片手にグツとサムズアップ。いろはも腰を屈めて、サムズアップした拳をトン、と当てた。

揃って、『イエーイー！』と掛け声。

「……………」

「どうしたの？ いろはお姉ちゃん？」

不意にいろはの顔に陰が掛かった様に見えた。つい心配になった花織が顔を覗き込もうとすると、いろはは「ううん、何でもないよ」と首を振った。

「花織ちゃんは……お母さんのこと、好き？」

「うん！ ママとパパも大好きだよ！！ お姉ちゃんは？」

「勿論、私も大好きだよ。だから、二人のこと、一生懸命助けてあげないとだね」

「うん!!」

花織の笑顔は眩しかった。彼女は元気よく頷くと、他の学生ボランティアに呼ばれてその場から走り去っていった。

いろはは暫し、花織の様子を遠目で眺めていた。

ボランティアの少年少女に頭を撫でられるなり、母親の勇姿を褒めて貰って心の底から嬉しそうだ。

楽しそうな笑い声が絶えず聞こえてくる。

「……………」

胸に詰まるようなものを感じて、いろはは拳をギュツと握り込む。

不意に、花織の姿が“うい”と重なって見えた。

今は自分の記憶の中だけにいる、大切な妹。

ういもああいう子だった。引っ込み事案な自分とは違って、根っこから明るくて。

今の花織みたいに、いるだけで、周りの空気を和やかにしてくれた。周りの看護師さんからいつも可愛がられてたし、灯花やねむちゃん達とも、いつまでも楽しそうに話しかけていたっけ。

「うい…………。お父さん…………お母さん…………」

顔を俯かせて、考え込む。

ういは今、どこで——どうしているのだろう。

そして、花織と話してから、両親の事も急に不安になった。

お父さんとお母さんも、早く助けないと。

「……………」

いろはは顔を上げて周囲を見渡した。

祭は終わったというのに、会場には人だかりが大勢いる。その中でも家族連れ——特に女の子がいる——を注視した。

『両親は、サンシャイングループに攫われた』

栗根こころは確かにそう言っていた。幼い頃から自分と両親を知っていた子だ。事実には違いないだろう。

だけど、未だに受け入れることはできなかつた。

淡い希望かもしれない。だけど、もしかしたら、サンシャイングループに攫われた、行方不明になったとかは、全部、誰かの魔法が見せた“幻”で……本当は、三人だけでどこかに出かけているだけなんじゃないか。

「……………」

—— あれは、違う。

—— じゃあ、あの子は……髪色が違う。

—— あれは!?! ……ううん、子供は似てるけど、お母さんとお父さんは違う人だ。

—— あの家族は! ……男の子が走り寄ってきた。違う。

いろはの瞳は泳ぐように、目につく家族連れを次々と見回した。一人ひとり、履いてる靴から髪形まで、眼を細めて凝視する。

“似てる人”は、確かにいる。だけど、全員一致は困難を極めた。

——あきらめちやダメだ。

それでもいろはは歯を喰いしばって、家族を探し続ける。

いやだ。攫われたなんて、いなくなったなんて。

私達は、普通の家族で、普通の暮らしをしていて、普通の幸せがあつて……悪いことは、何もしてなくて。

だから、そんなこと、絶対に信じ無い。決して、認めたくない！

今は確かに楽しい。人間関係も充実している。

だけど、失ったものによってぼっかりと開いた心の穴は、他人の優しさで埋まってはくれない。

いろはにとって、家族が全てだった。家族のいない人生なんて、生きる価値もない。そう、思ってしまう程に。

——盛大な祭りは終わり、人々は帰路に着く。



—— 楽しいものには、いつか終わりが訪れる。

—— ならば、終わった後に、人を待ち構えるのは

!!!

—— 厳しい“現実”だと、いろはは知った。

いろはの目が、その存在を捉えた。

電動式車椅子に乗った。黒い服の男性の後ろ姿だった。

“彼”は帰ろうとする大勢の群衆に混じり、どこかへと去っていく。

「ッ!!」

強烈に全身が粟立つような感覚に襲われた。

腹の底を搔き混ぜられたような違和に顔が歪む。

理性がパリンと音を立てて弾け飛び、同時に頭の中が焼け付く程の熱を帯びた。

——— なんて、「彼」がここにいる。

——— 待て。逃げるな。逃がしてなるものか。決して逃がさない。

感情を抑えきれなくなったのは初めてだった。いろはの足は、自然と「彼」追いかけていた。

☆

——— 八坂神社へ向かう林道。

そこは暗黒。

街灯も無く、見渡す限り漆黒に塗り潰された樹木の狭間に彼は居た。

端末を持つているが、ライトに頼っている様子は無い。そもそも、彼には必要無かつ

た。暗黒に在る期間が長すぎて、目が慣れていたからだ。

〈お爺様、お祭りは楽しめましたが?〉

指定通りの時間に、孫娘から連絡が来た。車椅子の男は、端末を耳に当てて、しゃがんでいるが威厳のある声で返事をする。

「ああ、やはり蒼海幫は強かったよ。あの『山の民』に勝つたのだからな」

〈やはり、近い内に“アレ”を配置する以上は、そちらの方も警戒しなければなりませんか……〉

「蒼海幫の力は強大だが、過去に血を流し過ぎたせいで首脳陣はこぞつて保守派だ。手荒な真似は出来よう筈も無い。寧ろ、我等の影響力を思い知れば、大人しく妥協策を講じるに留まるだろう」

〈ですが……警戒に越した事は〉

「心配しすぎると“マガウス”の不興を買うぞ。案ずるな。あの御方を信じろ」

〈え、それって、どういう〉

源道が答えようとした矢先だった――

「日秀源道さんっ!!!」

空気を震撼させる程の怒号が聞こえて、源道は思わず端末を切り、振り向いた。

漆黒の中で、桃色に光る二つの瞳が自分を鋭く見据えていた。

目を凝らすと、桃色の髪の法被姿の少女の全体像がうつすらと見えた。

「……まさか、後ろ姿だけで見破られるとはね」

“男”は嘆息すると、上着のフードを外して、サングラスを取った。

サンシャイングループ代表——日秀源道が顔が顕わになり、少女の顔が一層険しさを増した。眼光を鋭くして、問いかけてくる。

「どうして……！ 何の理由があつて……!! 私のお父さんとお母さんを攫ったんですかっ!?!」

今にも人を殺しかねない程の、凄まじい剣幕。

少女の形相は、完全に怒りに支配されている。冷静に話し合える様子では無かった。

だが、源道は再び嘆息すると、眉一つ動かさずに平然と問い返した。

「……どこの誰かね? そんな与太話を君に吹き込んだのは?」

「とぼけないでください!!」

「そもそも、君は何者だ? 環いろはくん」

「つ……!!」

ぐつと齒を喰いしばって、いろはは源道を睨み据えた。源道は涼しい顔で続けた。

「七海やちよを倒した外部の魔法少女、その噂は聞いているが……それだけだ。君と、君の家族は私と何の関係が有ったというのだね？」

「それは……つ!! けど、あなたが、攫ったんです……! お父さんとお母さんを……

!」

「証拠は? あるのかね？」

「無い、けど……見た人がいます」

「ならば、その者が嘘をついたとしか思えんな」

源道はやれやれとまたも嘆息して、首を振った。その仕草がいろはの神経を逆撫でする。

どこまで、人を弄べば気が済む。奪っただけでは飽き足らず、馬鹿にして――

「どこにいるのか、教えてください……さもないと」

いろはの指輪が光る。源道が目を細めて、それを見た。

「さもないと……なんだ? 私を殺すのかね？」

「つ!!? そんなことは……」

否定しようとして、口を噤んだ。

いろは自身、予想できなかったからだ。激情に任せた今の自分が、目の前の男にどんな報復をするのかを。

「ならば、私を攫って、社員に脅しを掛けるのか？ 成程、単純な力関係なら君の方が上だ。やってみると良い。だが、やった後の事まで、君は考えているのかね？」

「えっ……」

「私を拘束すれば、当然、我が社に混乱が起きる。私が関わっていた全てのプロジェクトが停滞する。停滞すれば当然、プロジェクトに関わっていた社員や協力会社の方々の給与にも影響が出る。給与に影響が出れば、生活も厳しくなる。家族が居る者は尚更だ。そうなったら、君は責任を取れるのかね。彼らの生活を、保障してくれるのかね？」

「責任って……そんなこと」

「私には関係ない、と言うのかな？ だが、我が社の社員は確実に声を挙げる筈だ。君への、怨嗟の声をね。ここまで言えばもう想像できるだろう。君の今後の人生、君と親しい人達、そしていなくなつた君のご両親にも、悪い影響が及ぶ。……証拠が無いのなら」

——早まつた真似は、辞めたまえ。

「っ！……」

冷水を真上から掛けられた気分だった。全身を激しく駆けまわっていた熱が一気に引いて、代わりに悪寒が全身を刺してきた。

「……………」

本能が、彼の威厳に怖気づいたのだと分かり、いろはは苦々しい思いだった。

源道の瞳は——自分には想像つかない程の死線を乗り越えてきた戦士の眼差しだった。到底敵わないと思いきらされる。見つめられただけで、膝が震え、感情が萎縮した。ただ、圧倒された。

「じゃ、じゃあ……………」

だが、一度燃え上がった怒りを抑えきることはできないのだ。いろはは声を震わせながら、おそろおそろ源道に問いかけた。

「どうして、お父さんとお母さんは攫われたと思いますか？ 私だけを、残して……………」

「ふむ……………」

源道は顎に手を当てて、真剣に考え込む様子を見せた。

「経営の話になるが、『ゲーム理論』を知っているかな？」

「ゲーム…………?!」

予想だにしない単語が表れて、いろはは一瞬だけ呆然となる。

「例えば、ここに『私』ではなく、『魔女』だったとしよう。さて、君は『魔女』

に対して何をすることが最善だと思う?」

唐突に話をすり替えられたような気がして不快だったが、源道の顔は真剣そのものだ。いろはは彼をしつかり見据えて、答える。

「それは……倒します」

「何故そう思う」

「それは……魔女は人を襲うので、魔法少女が護らないといけないからです。それに、魔女を倒せばグリーンフシードが手に入ります」

「そういうことだ」

「……??」

源道は納得した様子で頷いた。彼が何を伝えたいのか、いろはには訳が分からない。『ゲーム理論』とは、相手が自分の行動にどういう対応をしてくるかを予想したうえで、どうすると自分は一番得をするかを考える、というものだ」

「どういうこと、ですか……?」

「わからないかね。恐らく、標的にされたのは、君だ」

「つ……」

いろはは唾を飲み込んだ。口中に苦みが満ちる。

「私の恩師の言葉だ。『人間とはお互いに響き合い、高め合うことができる』」



「……！」

「人間が、組織が成長し、革新的に飛躍する為には、対立する者が必要不可欠だ」

そして、対立者は『自身とは全く真逆の価値観を持つ者』が相応しい、と源道は付け加えた。

奇しくも、犯人が白羽の矢を当てたのが、いろはだった。

だが……その時のいろはは、魔法少女である事以外は、何の変哲も無い中学生。内気で、力とは無縁な、只の少女。

「ご両親を奪われたことで、君はドン底に堕ちたようだが……同時に何かを得たのではないのかね。今までの人生では決して得られない、掛け替えのないものを」

七海やちよに勝った、という名誉。

それだけではない。由比鶴乃、夕霧市長、皇会長、柊ねむ……神浜で得た様々な人脈が、自分の力になってくれている。

忌々しいが、源道の言う通りだ。両親がいた頃——宝崎に住んだままでは決して得る筈も無かった、強力な絆。

否定せず沈黙するいろはを見て、源道は満足気に頷いた。

「そういうことだ。悲しみと怒りを力に変える——君の性質を犯人は見抜いていたのだろう。ゆくゆくは、成長した君が、自分にとっての最高の対立軸になってくれる、と。そ

れが犯人の願いかもしれんな……。今は堪えて、進み続けたまえ。それが君のためになる。君のその精神が、いつか、犯人を表舞台に登場させることだろう……。私が言えることは、以上だ」

源道は言い切ると、背中を向けて電動式車椅子を前進させた。駆動音が聞こえているのはハツと我に返る。

「待つてくださいっ！　せめて、お父さんとお母さんの居場所を教えてくださいっ！」

「私は犯人ではない。知らんよ」

源道の返事はそっけなかった。次第に小さくなっていく影に、いろはの心が騒めいた。

まだだ。まだ、彼を逃がしてはならない。

「かえしてっ!!」

いろはは必死に叫ぶ。だが、もはや、源道からは一切の返事も無く。

「かえして……っ!」

ゲームって何?

ゲームって何?

ゲームって何?

そんなことの為に、私からお父さんとお母さんを奪ったの?

あなたたちの『得』の為に、どうして私がこんな目に遭わなきやいけないの？  
失い続けて、それでも必死に追い掛け続けて。

追いついたら、平気な顔で、無視されて——

あなたたちは、人間の？

本当に、まっとうに生きているって、いえるの——？

こんな、酷い真似を、繰り返して。

どうして、あなたたちは、生きているの？

「かえして」

頭の奥が、熱い。

どうにか抑えてきたものが、沸騰するかのように込み上げてきた。

いろははギリッと奥歯を噛み締めると、グツと右腕を伸ばした。

狙うは、日秀源道の背中——

「かえせよ」

知らない声か、口から飛び出た。

自分でも驚く程低く、冷たい声。

桃色の光が一瞬、いろはを照らした。

刹那——短い射出音が、暗黒に響く。



FILE # 82 怨悔

この時、殺したいとさえ思っ  
てなかった。

ただ、この男だけは許しては  
ならないという、鋼の意志  
だけが重く押し掛かっていた。  
一直線に飛翔する桃色の閃  
光が、日秀源道の背中を貫  
く。

——  
筈だった。

「そこまでだ」

彼の肉体に当たたる寸前で矢が暗黒に消え失せたのと、耳元で低い女の囁きが聞こえたのは同時だった。

いろは、瞠目。

「ぐっ!？」

後頭部を押されてアスファルトに顔面を思いっきり叩きつけられた。

不意を突かれた。驚愕に思考が空白して振り向く事すらできなかつた。起き上がるうとしたが、背中に鈍重が押し掛かり、いろははうめき声を挙げる。

「ああっ!」

ギリギリと靴の踵をいろはの背中に捻じ込みながら、*“彼女”*は不敵に嗤った。

「はしめましてアンシヤンテ、『乙女』」

「っ……!」

艶のある声色には、ねっとりとした愉悅が過分に含まれていた。

どうにか首を持ち上げて声の方を見上げる。顔面を鴉に似た黒仮面で覆い、黒いフードを被った女の微笑みが見えた。

「はな……してっ、はな……せ」

「おっと、動くなよ」

女が屈んだ。同時に背中に膝を落とされ、いろはがうつ、と呻く。

膝で抑えつけながら、黒仮面の女はいろはの後ろ髪を鷲掴みにすると、強引に引き上げた。愉悦に満ちた顔面を近づけて、囁く。

「動いたら、『神楽』が頭をミンチにするぞ」

「っ!？」

怒りの熱が一瞬で引いた気がした。

ごっ、とこめかみに冷たく固いものが押し付けられて、いろはの顔が蒼褪める。

覗き込むように瞳だけを左に動かして、おそろおそろ確認した。

———なんだ、あれ？

初めて見る“それ”に、呼吸が止まった。

酸素が渡らなくなつて心臓が一気に冷たくなるのを感じた。

“それ”は銃だが、ただの銃では無かった。

『神楽』と思しき女が抱えた銃は丸太のように極太で、先端にはハチの巣のような穴が



空いている。

「ガトリングガンだ。覚悟はできているな？」

いろはの表情が恐怖に歪んでいく様を、黒仮面の女が愉快そうに見つめていた。

鉄仮面の女——『神楽』は彼女とは対照的に一言も発せず、まるでスイッチを入れた機械の様に、ゆつくりとガトリングガンの引き金に指を掛ける。

「戯れは終いだ。コルボー」

——死を覚悟し、眼を瞑った直後だった。

まさか、彼に救われるとは思ってもみなかった。

「……フン」

運が良かったね、そう吐き捨てるコルボーと呼ばれた黒仮面の女はいろはの背中から離れた。目を見開いて安堵の息を吐くいろは。同時に、神楽もガトリングガンを下すと、コルボーに合わせるように距離を置いた。

代わりに日秀源道が車椅子を旋回して、いろはに近づいてくる。

「私も、企業を経営する身だ。ボディガードの一人や二人、連れていないと思っていたのかね？」

「……っ」

キツというろはは源道を睨み付けた。

うつ伏せ状態から立ち上がるように試みるが、コルボーと神楽の両名が両脇から見下していた為、動けなかった。

「っ！ あなたは………卑怯だ」

ギリツと奥歯を喰いしばり、いろはは唸る様に断言した。源道は短く嘆息。

「どう思ってくれても構わんよ。しかし、これが……」

源道は手を払って、コルボーと神楽の両名をいろはから離れさせる。代わりに自身をいろはの目前まで近づける。

「非力なジジイが、君たち魔法少女から身を護る為の、極めて合理的な手段なのだ」

「……」

「勘違いしないで欲しいが……私は、魔法少女きみたちが好きだ。だが、同時に、その危険性も熟知しているつもりだ。私の立場上、社員を親に持つ魔法少女に恨みを抱かれるケースは多々在る。その子の怒りには、それなりに相応で正当な理由があるだろう。今の君と同じくね……。だが私は、死ぬ訳にはいかんだよ。一個人の“怒り”の為には、絶対にね」

日本有数の大企業・サンシャイングループを運営する日秀源道には、20万人以上の

社員の生活を背負う義務が在る。

彼が突然死ねば、当然、社員全ての生活に影響が及ぶのは確実だ。

「お互い、これ以上は時間の無駄の筈だ。諦めたまえ」

「……！」

“時間の無駄”

“諦めろ”

彼の一言がいろはの地雷を踏み抜いた。

源道は車椅子を旋回させ、再び背中を向ける。いろはの憎悪が燃え盛る。

「っ!! ……ああっ」

「諦めろって言ったのが、聞こえなかったかな？」

殺害を試みようとする再び伸ばされた右腕は、コルボーに思いつきり踏みつけられた。手

首がメキメキと不快な音を鳴らし、反射的に金切り声を張り上げる。

「そこまでにしたまえ。コルボー」

振り向いた源道の顔には眉間が寄っていた。

暴力へのあからさまな嫌悪感を顕わに注意するが、コルボーはせせら笑う。

「僭越ながらオーナー。我等護衛の責務は、『貴方の命を護る』事にある。今は勿論、将

来もね……」

そう呟いて、苦痛に呻くいろはを見下ろすコルボの笑みは残忍に歪んでいた。

「貴方の障害となる芽は、潰しておかなくては！」

コルボは愉悅を深めると、更に踏みつける足に体重を掛けた。

べきつ、べきつ、と骨が罅割れる様な音が響き、堪らずいろはは絶叫した。

「~~~~~っ!!!」

最早言葉にすら出来ない程の激痛。手首の神経が痛みで振じ切れそうだ。ああ、痛い。痛い。痛い。痛い

まだ。

このまま、終わってしまうのか。

せつかく、自分から大切なものを奪った張本人と会えたのに。

何も取り返せないまま。

仕返しさえできずに。

奪われて、貶されて、踏み躪られて、更に奪われて。

このまま——

「動けよ。飛ぶぞ」

聞いた事のある声が暗闇に木霊して、いろはは瞠目。

コルボーが踏むのを止めて、後ろを振り向くと、巨大なハンマーヘッドが視界全面を覆った。

「アステリオスか」

バツと飛び退いてハンマーの持ち主を確認するコルボー。危ない危ない、頭を叩かれる所であった。確かコイツの固有魔法は……。

一方、ハンマーを掲げた軽装の少女は、綽名で呼ばれて、ハア、と嘆息。

「見ねーツラだがオメー、同業者者“こっち側”かよ。じゃあ、ガキぶる必要はねーなあッ」

幼さの残る丸目が一瞬で、狡猾な女狐の如く鋭く瞬いた。ニタリと歪んだ笑みを見せる相貌の残忍さは、目前のホルボーと匹敵する程だ。

ホルボーもまた、ニイツと口端を吊り上げると、「元・そっち側だ……」と不敵に嗤ってフェリシアと睨み合った。

「……！」

「おっと」

刹那——ジャキツと音がして、フェリシアは身構えた。見ると、神楽がガトリングガンをいろいろの後頭部に押し当てていた。

いいぜ、撃てるものなら撃ってみろよ——フェリシアは動じずに、そのような意図を込めて顎で指示した。神楽は躊躇うことなく、引き金に指を掛ける。

「そいまだよ」

「っ！」

囁かれた声に神楽が一瞬たじろいだ。

瞬間——背後の暗闇から白銀の人型が飛び出し、神楽の頸筋にナイフを当てる。神楽が硬直。白銀の少女の氷よりも冷たい瞳が鉄仮面をジツと捉えていた。

「ほう……！」

「……」

一転して、劣勢に立たされたコルボーと神楽だが、その表情や仕草に焦りも困惑も無い。

コルボーに至つては、寧ろ期待通りだ、と拍手しそうな程、嬉しそうに見えた。

「コルボー、神楽、戻り給え」

だが、一触即発の修羅場は、日秀源道主によつて急遽打ち止めとなつた。

コルボーはふう、と溜息を付き、神楽はガトリングガンを下す。フェリシアとまさらも武器を下した。

「飛ばずに済んで良かったな」

自分の頭部より二回りも大きいハンマーを、バトン選手の如く指でヒュンヒュンと器用に回してから背負いこむと、フェリシアはニツとはにかんでコルボーを皮肉つた。

コルボーもフン、と鼻で笑つて返すと、神楽と共に背中を向けて、主の両脇へと並び立つた。

「魔法少女同士の争いはご法度だ」

「承知いたしました、オーナー」

恭しく頭を下げるコルボーの顔には、獰猛な笑みが張り付いたままだった。気分が高

まっている証拠だ、反省など微塵も感じていないのだろう——。

源道は軽く嘆息すると、フェリシア達の方へと目を向ける。

「部下が大変無礼な真似をしてしまい、申し訳なかった……」

「ハッ、サンシャイニングループもお先真つ暗だな」

天下の日秀御前ともあろう御仁が、直近の部下の接遇すらまともに教育できないとは。

フェリシアは鋭い視線のまま、頭を下げる源道の醜態を鼻で笑った。間違いなく、挑発のつもりだろう。

だが、源道は深く頷く。

「驕る平家も久しからず、か……肝に銘じておこう」

源道は、まささらに介抱されているいろはの方を向き、「安心しなさい。骨は折れていない」と伝えると、コルボー、神楽を両脇に伴って踵を返す。

「大丈夫?」

「はいっ……!」

右手首はジンと痛むが、感覚は有った。この程度なら、少し待つて入れれば自然と治癒するだろうか。

そこを抑えながらいろはは、立ち上がった。その瞳は、小さくなつていく日秀源道の



背中を力強く見据えている。

先の恐怖がフラッシュバックし、足が震えた。だが、決して屈してはならない。奪われた家族の為に、そして、自分の為にも——

「日秀源道さんっ!!」

いろはは吠えた。

奴にこれだけは訴えなければならぬ!

存分に敵意を込めた怒声に、源道は一旦、車椅子を止めた。

「こんなの、冗談じゃない……!」

「……」

源道は振り返って睨み返す護衛二人を抑えつつ、

「あなたのこと、絶対許しませんから……!」

「……」

無言のまま、いろはの声を背中で聞いた。

「いつか、思い知らせてやりますから……!」

「……」

「大切なものを奪われた悲しみと、今、味わった苦しみを……!!」

「……」

「いつか、あなたに……っ!!」

深い怒りと悲しみは、全て受け止めた。

源道は振り向かぬまま小さく微笑んで、呟いた。

「好きにしたまえ……」

そして、彼ら三人は暗黒へと消えていく——

☆

「ありがとう。フェリシアちゃん、まさらさん」

「ん」

「いいって別に。……で、その『乙女』ちゃんは、仕事ほっぽらかしてここで何してたってワケ？」

「聞いてたのフェリシアちゃん!? ……ていうか何、その恰好……?」

変身を解いたフェリシアの服装を見て、いろはは思わずポカンとなった。頭にバンダナ、長い金髪は後ろで団子に縛り、顔にはサングラス、身体には花柄のエプロン、ポケットには何故かヘラが刺さっていた。このスタイルはまるで……

「へへ、今日のオレはお好み焼き屋のねーちゃんだよ。ひとつどーだ?」

そういうとフェリシアは、どこからともなくパック詰めのお好み焼きを取り出した。ちなみに広島焼きである。ソースの臭いが鼻腔を刺激して、いろはのお腹がぐう、と鳴った。

「お、美味しそう……。それで、まさらさんは?」

「私は焼きそば屋さん。一つあげる」

「イメージと違う……」

まさらもフェリシアと似たり寄ったりな恰好である。普段クール美人なだけにギヤツプが酷い……。

そしてどこからともなくパック詰め焼きそばを取り出すと、いろはに手渡した。

「あ、ありがとう、二人とも。だけど、どうして祭りに?」

「私は公務員だから。民間交流の一環で、市長から祭りを手伝って欲しいって」

「フェリシアちゃんは? 確か、やちよさんに監視されてたはずじゃあ……?」

まさか、隙を見て逃げ出した？——そう思ったいろはは疑惑の目線でフェリシアを見つめるが、即座に首を振られた。

「このオレが、そんな命知らずな真似するかよ」

「じゃあ、どうしてここに？」

「外に出られる理由は一つしかないだろ。お上」だよ」

「おかみ?!」

聞き覚えの無い単語にいろはは首を傾げる。

直後だった。どこからともなく、『おほほほほ』と不気味な笑い声が響く。

——まさか、お化け!?

ひいつ!! と怯えてまささらにしがみついているは。

四方八方が暗闇の為、いろはがそう捉えてしまうのも無理は無い。

なお、フェリシアは平然としている。まさらも同様だが、小さく溜息を付いていた。

やがて、茂みを掻き分けて、不気味な笑い声の『何か』が三人の前に姿を顕す!

「だ、誰ですか……!?!」

「おほほほほ、驚かせてしまつてごめんなさいね」

声色からして女性である。

右手にはランタンをぶら下げていたため、全体像がはつきりと伺えた。

腰がやや曲がった、老婆であつた。それなりに裕福な家柄なのか、来ている衣装は洒落た柄のワンピースである。

「おばあさん、お一人でこんなところに来ちゃあぶないですよ……？」

いろはは純粹で優しい性分である。相手が何者か分からないが、老婆である以上、つい歩み寄つて手を差し伸べてしまう。

……まさらが深く溜息、フェリシアの冷たい視線。

「オイ、いろは。そいつはな」

「シーツ！ ちょっと黙つててちようだい」

オホン、と老婆は咳払いすると、ポカンとなるいろはに自己紹介を始めた。

「初めまして。私は朝ヶ谷 鴻（こうの）。近所に住む年金暮らしの、しがなのおばあさんよ」

「はあ、はじめまして……」

何やらフェリシアとまさらの知り合いらしい。

いろはは頭を下げて挨拶すると、老婆はニツとはにかんだ。

「——つていうのは、仮の姿。正体は……」

老婆がそこまで言つて、首筋に指を掛ける。

「えっ！」

直後、顔面がペリペリと剥がれて、いろはは目を見開いた。

老婆と思っていた女性は、変装用マスクを被っていたのだ。頭からそれをはぎ取ると、曲がっていた背筋をシャンと伸ばし、高らかに言い放つ。

「神浜市長、夕霧青佐よ！」

「夕霧さんっ!?!」

まさかの大人物登場にいろはは、ビックリ仰天!!

フェリシアは他人のふり。まさらは意気消沈。

「なんでここに!?!」

「だって今日は休みだし……神浜市内の祭りに顔出さない訳にはいかないでしょう?」

別に変装までしなくてもいいんじゃない?——というはは思ったが、そこは魔法少女保護特区の市長である。色々と事情が有るのだろう、とは察した。

ちなみに日中いろはは会わなかったが、娘の碧も、実は複数の出店を手伝っていたらしい。同じく変装して。なんとまあ、アグレッシブな親娘である。

「つていうか……三人で私のこと見張ってたんですね」

「見張ってたんじゃないよ、見守ってたのよ」

まさらは淡々と答えるが、いろははムツとなる。

「でも、それなら早く助けに来てくれても良かったんじや……」

「○○ゴンボール読んだことねーのか？ 老○王神様が言つてたぜ？」

「そうそう。ギリギリで助けた方が盛り上がるでしょう？」

「ええ……？」

フェリシアと青佐が笑いながらそんなことを返してきているのは愕然となる。こっちは必死だったのに……。

だが、一部始終を見ていたということとは——

そう考えた途端、いろはの背筋に冷たいものが這い出した。咄嗟に青佐に詰め寄ると、頭を下げる。

「ごめんなさい！ 私……！」

過ちを言おうとして、言葉が詰まった。

自分はなんという馬鹿な真似をしようとしたのか——怒りを抑えきることができなかつた。

激情に任せるまま、人を……一般人を殺そうとしたのだ。到底許されるべきではない。

しかし……

「いいのよ。いろはさん」

そつと。

涙ぐむいろはの頭を、青佐が優しく撫でた。

「えっ？ でも、だけど……私、人を」

「貴女のその怒りは、当然よ。でも……爆発させるのは、今じゃ無いわ」

言葉は後悔しているが、顔には未だに日秀源道に対する悔しさと怒りが滲み出ていた。

青佐はじつと、その感情が映るいろはの表情を見据えて、毅然と言い放つ。

「いつか、*“然るべき時”*がきたら、思いつきりぶつけてやりなさい。ぶちのめしてやるつもりでね！」

「夕霧さん……！」

「それまでは、必死に耐えて、堪えて、前を向いて、積み重ねていきなさい。いいわね！」

「はい……!!」

何よりの励ましに、いろはは心が震えた。

涙を拭い、青佐の顔を力強く見据えて、頷く。



「ふう」

どうにか無事にひと段落したようで、まさらは安堵の息を吐いた。が、不意に隣を見ると、フェリシアが渋い顔を浮かべて俯いている。

「……………」

「どうしたの？」

調子が悪い、という風には見えなかった。

暗黒に消え去った日秀源道達三人に、何か思うところがあるらしい。

「……………アイツだ」

「え？」

「オレを雇ったジジイ。多分、アイツだよ」

サングラスの奥のアメジストの瞳が、獲物を捉えた野獣の如く、鋭い眼光を放っていた。

☆

——八坂神社・境内。

鳥居をくぐり、建物の前で日秀源道は車椅子を止めた。

両脇を歩く護衛の二人も合わせて足を止める。

景色は、先ほどいろは達と対峙した場所より更にドス黒く覆われていて、何も見えな  
い。獣や虫の気配も消え失せた。ただ風に揺れる林の木々の擦れ合う音が騒がしい。

不意に、源道は後ろを振り向いた。やや古ぼけた朱色の鳥居の向こう側には、周囲と  
変わらぬ暗黒があるだけだ。何も見えない——筈だが、源道の眼には、見えていた。  
暗闇の中にある全てを、彼の肉眼は明確に捉えていた。

「よもや……貴方程の御方に、我が護衛を担つて頂けるとは思いもありませんでしたな……」

源道が独り言ちる。

こつん、こつん、と、鳥居の向こう側から、靴音のような小さな音が響いた。

源道が車椅子を旋回して、向き合おうとする。そして――

ばちん、と。

源道達の前に現れた“それ”が指を鳴らした。

瞬間――コルボーと、神楽の両名が、自身の足元の陰に吸い込まれていく。ずぶずぶと、まるで底無し沼に吞まれるように。頭頂部まで沈んで、その場から消え失せた。彼女達を吸い込んだ陰は、ぬるりと蠢くと、鳥居より姿を顕した“それ”の足元の小さな陰と一体化するように吸い込まれて、消えた。

『この二人は、お気に召しましたか？』

源道に近づいてくる“それ”が、幼さの残る可憐な声色で彼に語り掛けてくる。

源道はハア、と溜息を付き、首を振った。その仕草で、彼女は全てを察する。

顔を俯かせて、残念そうに呟く。

『ご迷惑をお掛けして、ごめんなさい……。ここには蒼海幫がいるから……。特別に強い方がいいと思います』

“それ”が恭しく頭を下げた。

体つきは、それなりに成熟している反面、相貌は幼児のように無垢な可愛さが有った。彼女は血のように紅いドレスを纏っていた。魔法少女の様な衣装——それを除けば、彼女は何の変哲も無い、どこにでもいる純朴そうな、愛らしい少女に見えた。

「いえ、お気になさる事はありませんよ。貴方のお陰で、私は件の『乙女』と相まみえる事が叶いましたのでね。何も、問題なく」

源道は首を振って、無垢な少女の言葉を否定した。

安心したのか、小さな丸顔の中で口元が緩やかに弧を描く。

『良かった。貴方はプロフェッサーにとって大切な人だから。困らせたらどうしようって思っちゃいます……。』

買い被り過ぎだ、と源道は即座に首を振った。

「私など、所詮、駒の一つに過ぎませんよ」

貴方とは存在価値が違うのです、と源道は少女の双眸をじつと見つめた。穏やかに微笑む少女の双眸の上半分は、陰が掛かっていた。目元がドス黒く染まっている。

『そんなことは……』

「そうでしよう？　“マギウス”と並び立つ、深淵の者よ……」

源道は、不敵に微笑むと、少女の名を呟く。

『896』—— “無限” を冠する御方よ」



## FILE #82. 5 祭りの終わり(短編) — 工匠大

## 祭編 終了—

— 2018/07/18 (土) PM20:10

— 神浜市・明京町・大東区

— 工匠大祭会場・広場

— かくして。

突如開かれた、『チーム赤竜隊』vs『チーム竜ヶ崎』の試合は大盛況。  
会場は歴史上類を見ない熱気を抱え込んだまま、閉幕することになった。

— そう、最後の催しを以て。

「う、うおおおおおおお……」

「つ……………」

「ううう……………」

「うっわあく……………」

「……………」

大勢の観客が見守る中、舞台上上がるのはチーム竜ヶ崎の皆様。

緋華仙香は今にも火が消え入りそうで、繚蘭桃花は恥辱を歯を喰いしばって堪え、高菜舞桜は両目をへにしながらプルプル震えて、宮根灼は自分と周りの恰好を見て、ドン引き。そして、竜宮綾濃は何故か目を閉じて精神統一していた。

「ぐぬぬぬ……………」

そして、監督役の大葉樹里も配下と同じ格好で舞台上がっていた。

「ぎゃははははははは!!!! 似合ってるじゃねえかKBG!!!!」

強引に。

最奥に座っているにも関わらず、観客全員に聞こえるような大哄笑響かせる八坂おけらによって。

そう、最後の催し——それは、敗者となったチーム竜ヶ崎 (&大葉樹里) が被る、『罰ゲーム』である。

それはなんと…………!!





「馬鹿にされたままおめおめと帰れるか!! こうなったらこの樹里サマ自ら、あの八坂おけらを直にウエルダンしてやる!!」

バツとゴキブリ姿の樹里が檀上から飛び降りて、一目散に駆け出したので、灼がギョツと目を見開く。

遠くでは、八坂おけらが『KBG!! KBG!!』とドでかい音声で合いの手を打っていた。それに合わせて観客もKBGKBGKBG（多分意味は分かって無い）叫ぶものだから、樹里からしたら屈辱で堪らない。

「や、やめてくださいよぉ〜」

「身も心もKBGになっちゃってしまわれたか……」

「うぉおぉ!! 何が有っても仙香は親分にく続く所存く!!」

「よしなに」

「はあくあ……」

ゴキブリ姿の舞桜、桃花、仙香、綾濃、そして大きく溜息をついてから灼も、慌てて檀上を降りると、樹里（ゴキブリ）の後を追いつけた。

『おぉつとゴキブリさんたち!! 急にみんないなくなっちゃいました!! 何があったんでしょーかー!!?』

☆

「おい!! 八坂の!!」

「KBG!! あっそれKBG!!!」

八坂おけらは、ドでかい声で軽快に音頭を取って踊っていた……。

「や・さ・か・お・け・ら!!」

「KBg……あっ?」

八坂おけらが我に返って振り向くと、今にも噴火しそうな大葉樹里が居た。

「あんだKBG?」

「うるせえ!! こうなったらこの樹里サマ自らテメエをウエルd」「うるせえ負けゴキ

!!」「ンなっ……!!?」

おけらは勝者側、樹里は敗者側——それが答えである。

「ちくしょうふざけやがって!! 今すぐウエル」「ああくくくん!!!」

つまり、もう勝敗は決定したのだ！

今更、樹里が挑戦したところで、おけらは利く耳を持つはずが無い！！

「え、いやだから、ウエ r」

「ああ~~~~~ん!!？」

「あの……ウエ r」

「あああ~~~~~ん!!!??」

「ウ e」

「あああ~~~~~ん!!!? ???」

何故だろう。

自分が段々小さくなって行って、逆におけらは段々でっかくなっている様な錯覚が、樹里には見えた。

人間に追い詰められるゴキブリの気持ちだが、初めて分かったような……

「ウエ……っ」

じわり。

敗者、そう、どうあがいても大葉樹里は敗者なのである。しかも、ゴキブリである。そのうえ、K B Gである。

彼女の視界が揺れた。その瞳に大粒の涙が浮かび、そして――

「ウエエエエエエエエエエエ!! 覚えてろよおおおおお!!!」

涙を滝のようにジヨバジヨバ流しながら、樹里（ゴキブリ）はその場から逃げ出した。「親分それ敗けを認めたヤツのセリフですよー!」

「うっおおおおお!!! みんなで熱くなれば恥ずかしくなあああああ!!!」

「うおー……っ、仙香姐さんやっぱ無理ですううう、ああもうトイレが有ったら籠りたいっっ!! (◇) (◇)」

「これも修行の一環だ……!!」

灼、仙香、舞桜、桃花と、同じくゴキブリ姿のチーム竜ヶ崎メンバーも、樹里の後を追う様に帰っていった。

そして、その場に唯一残った、ゴキブリ姿の竜宮綾濃はというと――

「……この度は、敗北を喫しました。しかし――」

バツと振り向き、おけらの隣で車椅子に乗る蒼海幫側の大將・洪カウ梅華メイファにキツと鋭い視線を送る。ゴキブリ姿の癖に、凄まじい気迫！ 忍者流石さすが忍者である!!

「次にお会いした時は、必ず勝ちます……!!」

「左様ですか。それまでに良き男性が見つかるとうれしいですね」

ピキピキピキピキ……!!

梅華は純粹に応援のつもりで言ったのだが、綾濃にとつては、そーいう意味では無い。

「つつ!! ……では――」

ものごつつい血管を肩間に浮かべながらも、竜宮綾濃は背を向けた。そして――

「ハッ!!」

飛び上がり、地面に這いつくばると、四肢がカサカサカサ……と足音を立てて、凄まじいスピードで去っていく!

「ひいひいひい!! なにアレ!?!」

「ほ、本物かあ!？」

「気持ち悪い〜!!」

その姿と、細かい動きは正にゴキブリそのもの！ 周囲の客は悲鳴を挙げるも、心身ともにゴキブリとなった綾濃にはどこ吹く風!! 忍者流石さすが忍者である!!!

「気をつけて帰れよー!」

「……………」

おけらは、走り去っていく6匹のゴキブリ（一匹は4足歩行）に手をひらひらと振った見送り、梅華も彼女達の無事を祈りつつ、静かに拱手を送るのだった。

こうして、工匠大祭は、最後に色んな珍事を見せながらも、大盛況のまま、幕を下ろしたのであった。





## FILE #83 次に向けて

2018/07/19 (日) PM14:00

— 神浜市神浜町・中央区

翌日 —

神浜市役所・地下一階『ミロワール』

解放されているとはいえ、普段はあまり人気の無いこの店にしては珍しく、多くの男  
女が集まっていた。

「……………」

その内の一人であり、治安維持副部長の都ひなのが、その顔ぶれを見て思わず息を飲んだ。

基本的には、魔法少女同士の井戸端会議とか、常連の春径による店長みたまへのナンパ合戦が開催されていたりするのだが。

今日に関しては、間違いなく違うと断言できる。

治安維持部長・七海やちよ。

調整課長・八雲みたま。

そして、自分。

——と、ここまでは、お馴染みの面子である。

問題は他の連中だった。

神浜市警察刑事課警部・塚内直正

皇グループ会長・皇陸翔りくと

蒼海幫グループ会長・王海龍わいろん

その秘書、楊秘輝やんみつひ

謎の情報屋・春径はるみち

そして、

「オホホホ……」

不気味な笑い声と共に姿を現したのは、腰の曲がった、ベージュ色のドレスを纏う老婆であつた。

ここに皆を集めた張本人、朝ヶ谷 鴻（こうの）である。

「皆様、この度はお忙しいところご足労頂き、誠にありがとうございます——た!!」  
その姿も束の間!

鴻が自分の首元に手を掛けて引き上げると、老婆の顔がペリペリと剥がれていく。

内側から素顔を顕したのは、神浜市長・夕霧青佐であつた。彼女は老婆のマスクを天高く放り投げると、用意された椅子に座るよう皆に促す。

(登場の仕方はともかく……凄いいメンバーだな)

完全に圧倒されるひなの。

彼女自身、魔法少女としては熟練者であり、また副部长として相当の経験を積んでいると自負しているが、このメンバーに囲まれれば、その意気も一瞬で蛇に睨まれた蛙と化す。

自分は場違いじゃないのか、とつい逃げたくなる程に。

(塚内警部や春さんはまだ分かるが……皇グループ会長に、青海幫まで加わるとは。これじゃあまるで神浜市政の陰の首脳会議だな)

このように、神浜市役所には、裏の議会が存在する。

メンバーは全て、青佐が自らスカウトした者達だ。

青佐は、度々『年金暮らしの老婆、朝ヶ谷鴻』に変装しては、業務からこっそり抜け出していた。市内を徘徊し、市民の暮らしを直に眺めてきた。

その中で、彼女の御眼鏡にかなった者（能力の秀でた者、実力を隠し持っている者）を見つけると、正体を明かしてメンバーに加えていた、という訳だ。

（まあ、表がもう少しマシなら、こんな真似しなくて済んだんだろうが……）

表とは、神浜市議会のこと。つまり本来の議会のことである。

青佐は市長だが、決して独裁権は無い。日本が民主主義である以上は、如何に首長が質実剛健で血気盛んな者であっても、議会の承認無くしては動けない仕組みになっているのだ。

よくメディア等で『〇〇知事は、××市長は独裁者だ』的な批判を耳にするせいで勘違いされがちだが、実際のところ、そんな真似ができる首長は日本中探してもどこにも存在しないのである。

その市議会に、問題があった。

議会メンバーは、青佐の市長就任以降は彼女自身の働きもあり、新進気鋭に満ちた若手が増えているが、現状は、旧水名流——つまり、官僚主義・家柄主義に囚われた老獪

な狸爺ども——がまだまだ現役役員として幅を利かしているのである。

そういった連中は、目先の利権のことが何より重要で、市民の未来などちつとも視野に入れていない。

会議でも青佐の話を聞かないどころか盾突いて難航させたり、家柄だけで自分は偉いと信じ切っているため、一から実力でのし上がった者にパワハラを与えたりと百害有つて一利無しである。

(そういった連中による滞りがちな政治を動かす為に、裏で集め出したってワケだが……なんだかなあ)

どういふ訳か、気が付いたら、物凄い面々が集まってしまっていた。

最早、神や悪魔が来ようが、この集団を前にしたら土下座して一目散に逃げだすに違いない。

「今回から、僕も参加させて頂けるなんて光栄ですよ」

「こちらこそ。よろしくお願い致しますわ、皇 陸翔会長」

陸翔が歩み寄り、青佐と固い握手を交わす。

実は彼も、青佐と同じくここに来るまで変装していたのである。何気に似た者同士の二人であった。

「私も、声を掛けて貰えるのは久しぶりだね」

「ええ、表にはナイショですけど……ある大きなプロジェクトを考えていますね。その筋の大ベテランである海ハイさんには、ぜひ、アドバイスを頂きたいと思ひまして……」  
眼鏡を光らせ、不敵な笑みを海龍に向ける青佐。

ひなのの眉間に皺が寄る。そんな一大プロジェクトを話す相手が、中国企業家というのは嫌な予感がするのだが。

「久々にアレをやるのか。で、範囲はどのくらいだね？」

「そりやもうでつかく。神浜市を作り変えてしまうほどに」

「それは面白い！ 是非とも協力させて頂くとしよう」

海龍は、龍王の異名に不釣り合いな緩やかな笑みを浮かべていた。

青佐曰く、海龍とは旧知の仲であり、市長になる前にちよつと世話になったらしい。

「秘ヒ」

「この楊 秘輝。神浜市長のお願いとあらば、誠心誠意を込めて、尽力致すでござンス」  
「よろしく願ひしますね、秘輝さん」

海龍に促され、青佐の前に歩み出た秘輝が恭しく頭を下げる。

そして……

「オレも参加させてくれるってことで良いんだよな？ ばーさん」

不意に奥から聞こえてきたハスキーボイスに全員が目を向ける。

につこりと笑顔で、しかし眉間に皺を寄せた青佐がその少女を睨み据える。

「何度も言わせないで。ばーさんはやめて」

「じゃばばあだな」

「まだ52だっつーのー！」

「いやばばあだろ」

「ごじゆうに!!」

市長相手に遠慮なしの発言連発に、他の全員が哑然となった。

暗がりから姿を現したのは、金髪長身の少女——深月フェリシアであった。

「こいつも……?!」

「オレも信じらんねーけどな」

思わずギョツと目を震わすひなのに、へへつと微笑を返すフェリシア。

「しかし、彼女は元傭兵の筈だが……?」

塚内警部が小声で独り言ちる。

深月フェリシアは、以前、傭兵業として裏社会を転々としており、『メカニック』と呼ばれる『稼ぎ頭』の一人として畏れられる存在であったと聞いている。

「私が推薦しました」

やちよが塚内に小声で返す。

「なるほど、そういうことか。以前君は、魔法少女のマル暴的なチームが欲しいと言っていたが」

「そのきつかけとなるのが、彼女です」

「しかし大丈夫なのかね？」

「傭兵は、身の安全が最優先事項です。市長と『私が』この街に居る限り、絶対に不貞を働く事はないと断言できます」

「なるほど、それなら安心だな」

やちよの言葉に塚内は笑って返す。

「で、市長さんよお……」

そこで、みたまの隣で今まで黙っていた浮浪者風の老人・春徑が青佐に向けて口を開く。

「今回、俺達を集めた目的ってのは一体何だい……？」

酒狂いとは思えぬ、獲物を定めた獣のような、鋭く冷えた視線。

青佐は一切動じずに、笑顔を向けて、言い放った。

「新規の方もいらっしやいますから、顔見せに。あとは、さつき申し上げた、極秘プロ



ジエクトのことですね」

「オレみてえな口の軽い道楽モンに話したら極秘じゃねえと思うがなあ……まあとにかく、そいつあ一体なんだい？」

「〃陽〃ですよ」

青佐は屈託なく笑って——しかし、常識的に考えて、異常過ぎる事を言い放った。

「神浜に〃太陽〃を創ります」

☆

——数時間後、神浜市長執務室。

「正気を疑いますね」

「やっぱりそう思うわよね」

そこにはデスクに座る青佐と、対面する形でひなのとやちよが立っていた。

心底呆れかえった顔で言い放つひなのに、青佐は自嘲気味な笑みを浮かべていた。

「で、その『陽の陣』とやらは教授案件ですか？」

「当たり前」

「非科学的な……」

「あらひなの、貴女は今野敏の作品を読んだことはないの？」

「いや特には……」

「あなたたち魔法少女だって、魔法陣を形成してから魔法を発動させているでしょう？」

それと同じ事よ」

「と言われましても、市中を巻き込む一大プロジェクトとやらが、『風水』オカルトというのは……  
なんだかなあ、としか……」

妙に声色に熱が入ってる感じの二人に、ひなのは気圧されてしまう。

故に、はつきりとは言えなかったが、化学者でありリアリストであるひなのからしてみれば、正直な所、馬鹿げた話だと思っていた。

確かに、この案件は、表の議会で挙げられる筈がない。

うっかり挙げようものなら、間違いなく旧水名流の連中が暴動を起こしかねないだろう。

「……都副部長の気持ちも分かるわ。私も教授と出会う前は、半信半疑だったもの」

『風水は実にいろいろなことを言い当てる。その方法はちゃんと体系付けられている。まったく同じ手法を人体に当てはめた時、医術にも応用できる。そういうのをオカルト的と考えるのはおかしいと、僕は思う』

以上。教授・柊ねむ曰く——

風水というのは実に微妙なものだ。

例えば、石ころひとつ置くだけで家の運勢が変わったりする。

神浜市のような、大きな街を風水で見ると、大地の気の流れを読む。

基本的には、山から平地に向かって流れ、海に出る気を観る。

——こうした流れを、『龍の通り道』という。

つまり、龍の通り道をうまくつくってやることで、家も繁栄し、街も発展する、という訳だ。

逆にビルが多く建設されている街の場合、龍の道が閉ざされ、エネルギーが入り込まなくなる——つまり、その地は争いが絶えなくなり、活気もなくなり、衰退していくだけになる。

(そういえば、慶治町も明京町も、昔と比べたらかなり過ごしやすくなったって聞いているが……)

かつて、明京町の工匠区では、男尊女卑の風習があり。

大東区はドヤ街と呼ばれ、浮浪者が溢れかえり、不法移民による麻薬密売が横行していた。

慶治町の水名区も、家柄主義を絶対視する官僚きどりの町議会議員や実業家による圧政が敷かれており、『水名の生まれなくば人にあらず』という諺まで有ったそうさ。

それらは、青佐が市長就任してから数年後には、かなり改善されていた。

具体的に彼女が何かをしたという記録は無い。

だが現在、工匠区では女性技術者も奨励され、大東区では貧困者がかなり少なくなっている。不法移民による麻薬密売の噂は聞いているが、それも昔に比べたら小規模に留まっている。

水名区では屈指の名士であった故・二葉青磁による、改革及び開発事業が精力的に行われたことで、家柄を気にすることなく、純粋に一から努力して実績を築き上げた者が相応の地位に付ける、という『新水名流』が主流となっていた。

(もしかしてあれも、風水の力なのか?)

渋い顔を浮かべるひなのの心境を察して、やちよが口を開く。

「実際、日本の歴史でも風水は重要視されているわ。徳川家康が幕府を開く際、側近の僧侶・南光坊天海は風水を使って江戸のランドデザインをしたと謂われている……つまり、江戸時代の200年以上、大きな争いが無かったのは、風水の力によるものだという説もあるの」

「つまり、市長はその力の小規模版を、ちょこちょこ使っていたってワケですか……」「ええ、気づかれないように、こっそりと。もちろん、色んな人に協力してもらってね」苦勞したんだから、と青佐は懐かしそうに笑って言った。

「とはいっても、この街の『龍の通り道』自体は、まだ完全なものになっていないの」魔法少女保護特区に指定された神浜市はいまや、世界から注目される街である。

当然、外部の者を多く受け入れていくためにも、大規模な開発による都市化は必至である。

既に、東京都の池袋・新宿区クラスの街並みとなった中央区は勿論、他の区もいずれ高層物が群がっていくだろう。

青佐としては難色を示しているが、これは知事や、国家の官僚クラスの命令でも有り、従わない訳にはいかなかった。

「街中で飛び交っている『蠅』も気になるし、行方不明になっている女の子達も心配だわ。海さん達の目を掻い潜って麻薬を売りさばいてる連中の事もね……」

青佐は神妙な面持ちだ。

「これらは高層物乱立により、龍の通り道が遮られたせいで、悪い気が集まりやすくなっているのだ——と、ねむから説明を受けていた。

「手おくれになる前に、手を打たなきゃいけないわ」

「とはいえ、そんなおかしな……いや、大それたことをどうやろうっていうんですか？」

「環いろはさんと、由比鶴乃さん、この二人が鍵よ」

「いやだからどうやって……」

「奇しくもいろはさんは、大賢者試験を受ける身として、神浜中を回ることになる。由比さんには、特命で動いてもらうわ」

「新人には荷が重すぎるんじゃない……」

「だから、二人には、プロジェクトの事は教えない。自然に動いてもらって、自然に陣を形成してもらう。そういう流れを私達で作るのよ」

「また滅茶苦茶な……」

青佐の言葉を聞く度に、ガツクリと肩を落としていくひなの。

「まあ由比鶴乃の方は、市長に任せるとしてもだ。環いろははどうするんだ。大賢者試験に落ちたら、元も子も無いぞ」

大賢者に合う為に、いろはは試験を受けるのである。

試験の内容は、各役所に回って三カ月勤務し、更に実績を上げて担当のチームリーダーと首長に評価してもらわなければならない。

新人一人つきりでは、心許ないとやちよに指摘する。

「だから、助っ人を用意するのよ」

「誰をだよ？ まさか、お前やみたまが付く訳じゃないだろう」

「その為に、あの子も採用したのよ」

「ま、まさか……」

やちよがひなのに耳打ち。

その名を聞いて、ひなのがビックリ仰天したのは、言うまでも無い――





## FILE #84 黒幕

— 2018/07/19 (日) PM 17:10

— 神浜市神浜町・中央区

数時間後——その日の夕方。

七海やちよは、徳江龍二の家に来訪していた。

「君がここに来るのは久しぶりですね」

「ええ……」

玄関前で二人は話し合っていた。

「やちよは笑顔を浮かべて返すが、どこか神妙そうな面持ちに見えて、徳江は眉を顰める。」

「どうかしましたか?」

「実は、テストに向けて数学を教えて頂きたくて」

「おや、君みたいな魔法少女は、学校は別にいいんじゃないのかな？」

徳江の問いに、やちよは頷いた。

公機関に勤める魔法少女は、学校に関する事は全て公欠扱いにされるのである。つまり、学校に行かなくても、時期がくれば卒業できる、という訳だ。

これは、国が定めた法律である。

原則として、就職可能な年齢は中学1年生から。そして大学卒業まで、『公務員である限り』、その恩恵を受けられる仕組みだ。

やちよは市役所に勤めているが、年齢はまだ19であり、一応、神浜大学に籍は残している。

といつても、治安維持部長の仕事が多忙でほぼ全く通えていないのだが……せいぜい、学園祭等のイベント行事の際に、大学側に呼ばれて講演に行くくらいだ。

「それが数学の教授が強情でして……『試験で平均点以上取れなければ単位は与えない』の一点張りで」

「それは難儀だな」

徳江は目を細めているが、口元は微笑んでいた。

そこまで心配していない。

やちよは聡明であり、教えたことはすぐに身に着くタイプだ。それに、大学側に申し

訳ないと思ひ、密かに勉強を続け、課題を提出しているのは聞いている。基礎知識は既に身に付いている筈だ。

「では、家にながりにさい。分からない所を教えてあげよう」

「ありがとうございます。大したものではないですが、こちらを」

やちよは菓子折りの入った手提げ袋を差し出したが、徳江は首を振った。

「君の祖母、天さんにはよく世話になったからね。これは私から、あの人への恩返しだよ」

「よろしいのですか？」

「ささやかではあるけどね」

「ありがとうございます」

さ、早くあがりなさい——と徳江はやちよに上がるよう促すと、彼女は「失礼致します」と会釈して家の中にながっていった。

——同じ頃、神浜市役所。

最上階、市長執務室。

夕陽が差し込み暖かなオレンジに染まるその部屋にはデスクに座る夕霧青佐。脇を固める秘書の栗根こころと、加賀美まさら。そして、八雲みたまがいる。

「環いろはの補助だつて？ このオレが？」

彼女らと向かい合っているのは深月フェリシアだ。彼女は青佐に呼び出されて、指令を受けていた。

その内容にきよとんと、目を丸くする。

「良いのかよ、ばばあ。オレはれっきとした犯罪者だぜ」

市長を前にしようが、フェリシアはふてぶてしい態度を崩さなかつた。

椅子にぐつと背中をもたれかけて、呆れた様なセリフを吐き捨てる。

「でも、今は公務員、でしょ？ 貴方の実力は私も七海部長も認めている」

青佐はその姿勢に構わず、笑つて言った。

たった一人で見かづき荘の「あの」メンバー with 鶴乃を追い詰めたのは只者で

はない。間違いなく、歴戦の猛者が為せる業だと伝えると、フェリシアは「うるせえ」と毒づき後頭部を搔いた。

自分の犯罪行為を堂々と褒められる——しかも公機関のトップに——というのは、どうもむず痒い感覚である。

「それで、みんなで話し合つて決めたのよ。貴方には、いろはさんの試験の補助係として、試験終了まで共に行動してもらおう」

いろはは、やる時はやる子だ。

神浜での生活を見る限り、彼女は人望も胆力もある。

だが如何せん、つい最近まではただの中学生。社会人としては、全てが経験不足だし、試験を満足にクリアできるかどうかは、正直、難しい所だと青佐達は捉えていた。

その為の、深月フェリシアだ。

彼女は頭の回転が速く、戦闘力も高い。心理学も精通してるから人の動かし方も心得ている。裏社会を転々とし、傭兵として名を挙げてきただけあり、経験も豊富だ。

要は、いろはに無いものを全てもっていたので、青佐達にとつてはちちょうど都合の良い人材だったのだ。

「それを『このオレ』に頼むのかよ？ やちよといい、あんたもイカれてるな、ばばあ」

「イカレばあで結構。市長はね、たまには頭がおかしいと思われるぐらいの判断をし

なきや守れないものもあるのよ」

フェリシアの皮肉に、青佐は心からの笑顔で返す。ばばあにツツコむのはもう諦めた。

「けつ」とフェリシアは悪態を付く。七海やちよといい、ここには喰えない女ばかりである。

☆

一方——徳江宅。

彼の家の中は一人暮らしの高齢者らしく、殺風景だ。

大学教授現役の頃は、色々なアンティークに満ちていたのだが、今はもう全て骨董品屋に売り払ってしまったらしい。

子供が家を出て、妻が亡くなってから、全て興味を失ってしまったとのこと。

「それで、どこが分からないんだね」

客間に案内されたやちよは、徳江龍二から数学を教わっていた。

目の前に置かれた、ローズマリーティーのほのかな甘い香りが、心を落ち着かせている。

「ここですね」

やちよは数学の教授に渡された課題の一部を徳江に見せる。

そのプリントに書かれたのは、計算式をもとめよ、という問題だ。その公式と答えが分からないのだと伝えると、徳江はうんうん、と頷いた。

「ふむ、君の所の数学教授は随分意地が悪いな。これは東京大学レベルの問題だぞ」

「えっ」

やちよは呆気にとられて、目を丸くした。急に不安になったのか目線をソワソワ動かし、

「だっ、大丈夫なのでしようかつ？」

「安心しなさい。ここはね……………こう……………こんな風に解くと、分かるんだよ」

やちよにローズマリーティーを飲んで落ち着くよう促し、その間に徳江はプリントに公式をスラスラと書き上げた。

その鮮やかな手際に、やちよはパアツと顔を明るくする。

「わあっ！　ありがとうございます！」

「はは、こんなのは、お安い御用だよ」

徳江は孫もいる老人だが、やはり男は男。やちよのような美人に褒め称えられると、つい照れてしまう。

頬を赤くして後頭部を掻く彼の仕草がなんだか可愛く見えて、やちよはふふつ、と笑った。

「流石、徳江先生。やっぱり——」

——  
貴方なんですネ。

☆



一方——神戸市役所・市長執務室。

「もつとも、神戸市にいる以上、定められた条例や憲法に違反したらどうなるか、分かっているわよね？」

青佐の目がギンと鋭く光る。その威圧にフェリシアは一切動じず、手をひらひらと振って答えた。

「当然だろ」

その時点で、『契約解除』なのは答えるまでもない。

それよりも、恐れるべきは、自分が裏切った時点で『神戸市民総勢320万人を敵に回す』事態になることだ。それは意地でも、避けねばなるまい。

「で、あんたらのことだし、オレに対する鎖ぐらいとつくに付けてるよな？」

「(明察)」

そう聞かれて即座に答えたのはみたまだ。

「実は貴女のソウルジェムに細工を施したの」

それは、調整課の新技术。

『承認式』に加工したのよ。貴女が変身する時、そして固有魔法を使う時、私の許可が必要になるわ」

げっ、とフェリシアは露骨に嫌そうな顔をした。

「二度とみかづき荘のような事件を起こさせない為よ。私達の新技术の試験体になるぐらい、我慢なさい！」

みたまはいつになく真剣な面持ちだ。

市長ややちよと違って、フェリシアの事はまだ信用ならない様子で、声色も剣呑としている。

「わーった、わーったよ！ それで？ 報酬は？」

「真面目に働いてくれればこちらも給料はきちんと出すわよ。それに、悪条件で同い年の魔法少女のお守りをしろなんて無茶苦茶言ってるワケだから。貴女がここで希望を言ってくれば、出来る限り叶えるつもりよ」

「市長……!？」

「……っ」

正気か。

みたまとまさらがキッと睨んでくるが、市長は二人を眼力で制した。

「そうかよ。じゃあ」

言質得たり——フェリシアはニツと嗤って、青佐に言い放つ。

「オレにも『大賢者試験』を受けさせろ！」

☆

「徳江先生、深月フェリシアを動かしたのは、やはりあなたですね」  
「何の事かな？」

やはり、はぐらかすか。

やちよの中でスイッチが切り替わった。

声のトーンが落ちる。鋭利な蒼眼光が徳江の顔面を突き刺す。

対する徳江は微笑んだままだが、その目は、笑っていない。

「彼女がウチに来た時、筆記試験を実施しました」

国語：26点

数学：10点

理科：5点

社会：31点

英語：2点

以上が深月フェリシアの筆記試験の各科目の点数だった。

「……理科と英語が特に悲惨だね。数学もかなり酷いが」

「そう思いますよね。普通は」

そう、〃点数だけ〃見れば、その感想しか出てこない。

だが、このテストを作成した人間——ピーター・レイモンドは。

「嫌な大人が、意地悪な問題を混ぜていたんですよ。それが、これです」

「……」

徳江が目を細めて、笑みを止めた。

やちよが指し示したのは、先ほど徳江に公式を教えて貰った用紙の問題。

「自己顕示欲が抑えきれなかつたんでしょね、彼女。これと同じように、東大の授業と同レベルの問題を少し混ぜていたんです。5問ほど。当然、環いろはと由比鶴乃は不正解だった。けれど、彼女は『全て』正解していた」

フェリシアの答案用紙には、公式は書かれていない。

だが、答えだけが、見事に全問正解していた。

「当てずっぽうで書いたのではないかな？」

「全問正解するなんてあり得ますか？ それに、普通なら、頑張つて解こうと考えて式ぐらゐは記述する。けれど彼女の答案用紙には、式を書いた形跡すら無かつた。明らかに不自然ですよ」

やちよの眼は徳江を捉えて離さない。不意に徳江が目を、瞬きさせる。

「これは私の推測ですが……深月フェリシアの頭には既に公式が有つた。だから短時間で答えられた。貴方が教えてくれたか」

「っ……」

「もしかしたら、答えを書いたのは、無意識だったのかもしれませんが」

徳江はわざとらしく咳払いすると、ローズマリーティを口に付けた。

反応有り。

「それだけで私が、犯罪者をみかづき荘へ送り込んだ、とでも?」

「あらやだ徳江先生、私は深月フェリシアが犯罪者だと言った覚えはありませんが」

「……」

やちよは緩やかに笑う。焦りを逆手に取られて、徳江は沈黙。

「深月フェリシアは確かに犯罪者だった。狡猾で、用心深くてその上、用意周到だった。目的遂行の為なら、自分さえ欺ける。けれど、それだけで、みかづき荘の環境に短期間で溶け込んで、私達から疑念を晴らすのにはまだ不十分」

裏技が必要だと、やちよは考えていた。

いくら百戦錬磨の傭兵とはいえ、先日まで裏社会で生きてきた者が、一般家庭に即効で馴染めるはずが無い。

徳江の目をじっと見つめたまま、やちよは推測を続ける。

「みかづき荘に一番関係が深いのは、この私。だから、彼女はみかづき荘に来る前に、私と馴染み深いだけか」をトレースしておく必要があった」

みかづき荘の環境に、すんなり溶け込む為に。

七海やちよと古くから親しい人間の行動を、佇まいを、癖を、嗜好を。把握し、身に着ける。日常生活の中で自然と發揮するまでに——それが、深月フェリシアの作

戦。

「それが、貴方だったんですよ。徳江先生」

「……………っ」

徳江は何も返さず、沈黙を貫いた——が、無性に後頭部がむず痒くなり、無意識に手が回る。

「ほら、またやった」

「っ」

やちよの指摘に、徳江は息を飲む。

「その癖、深月フェリシアもよくやってみましたよ。感情が掻き乱されると、つい、手がそこに行く」

「……………ただの偶然だよ」

「癖だけならともかく、癖に至る理由まで全く同じ、という偶然ですか」

「……………」

徳江は再びローズマリーティーを口に運んだ。刹那、やちよの眼光。

「その紅茶だってそうです。深月フェリシアは朝食を作った後、必ずローズマリー

ティーを煎れてくれた」

他の飲み物だって選べたはずなのに、フェリシアはローズマリーティーしか作らなかつた。

「私達に……私にとってローズマリーティーが馴染み深い、思い出のある飲み物だって分かつていたから、違和感を持たれない筈だと考えた。そして、ローズマリーティーを嗜む貴方は、最近、スムージー作りに嵌っているそうですね？ 材料は『ブルーベリー』に『バナナ』に『豆乳』、そして隠し味に『甘酒』……」

「……君は随分、嫌な性格になったな」

「職業柄ですよ。それに、そういうのはお互い様じゃないですか」

「私だという確たる証拠は無いだろう。決めつけは良くないよ」

「あるんですよ。これが」

「どこにだね？」

「私が仕掛けたら、彼女が自分からバラしましたから」

『誰に教わったの？』

『ああ、それはな、とく』



『それより、深月フェリシアさん、数学今のは誰に教わったの？』  
『とつくに昔のことだからなー。忘れた』

「その言い直し方が明らかに不自然だったんですよ」

「……………」

徳江はローズマリーティーに口づけた。既に飲み干したにも関わらず。  
カップを持つその手は、微かに震えていた。

「徳江先生。〃私と馴染み深い人間〃で　〃とく〃　が名前に付く人間は、貴方しかない」

——それが、答えだった。徳江が諦めたように、目を閉じる。

「……………もういい」

そう一言呟くと、長く溜息を吐いた。

カツプを握り締める手の震えが収まり、力なくテーブルの上に落ちる。

その一連の仕草は、溜め込んでいたものをようやく吐き出せて、安心した故の脱力にも見えた。

## FILE #85 生きて進むために

「深月フェリシアを最初に動かしたのは、この私だ」

——それが、答えだった。

膝に置かれたやちよの手が自然と握りこぶしを作り、震えた。

「どうして、貴方だったんですか」

鬼神の如き眼を徳江はしかと見据えながら、申し訳なさそうに頭を下げる。

「……………」

「みかづき荘は、祖母と貴方の思い出の場所でもあったはず……なのに、どうして」

自分の理性の強さをやちよは呪った。

この時、徳江の胸倉を掴み上げて怒鳴りつけられどれだけ気持ち悪かったろう。

『治安維持部長』という立場が、暴力を制した。

亡くなった祖母の気持ちを考えたら、激昂が抑制された。徳江は祖母の友人だったから。

「その……天そらさんのためだ」

「なにを」

世迷言を——と、口から吐き出す前に徳江は続けた。

「君を……死なせたく無かった」

☆

『やちよくん。風に聞いた話だが……君は、死にたがっているそうだね？ 天さんにね。お願いされていたんだよ。』君の事を頼む』、と』

祖母は亡くなる少し前に、徳江にそう伝えたらしい。

だから、深月フェリシアを利用したのだと徳江は説明した。

彼女に、みかづき荘を襲わせたのは、やちよに『生きる理由』を与えたかったから。

矛盾していると、やちよは思った。狂っているとも。一度本気で殴りたかった。頭を叩きつければ、この男は目を覚ますのではないかとさえ。

けれど、徳江はそうしななければならなかったのだろう。

やちよの祖母との約束を果たす為にも、自分の為にも、それしか方法が無いと考えたのだろう。

『これは私の『賭け』だ。傭兵は手ごわかっただろう。』

それが目的だ。みかづき荘が。家族が危険にさらされれば、君は全力で守ろうとするだろう。そして、無事に脅威を退けたとしても、不安は残る筈だ。社会が不安定である限り。同じ事態が二度、三度……もしかしたらずっと続くかもしれない』

『その時初めて、君は生きることを願う筈だと、私は思ったんだよ。』

生きて、家族を、祖母との思い出を守らねば、と、君は強く願うだろう。

その為にも、仲間が必要だ。今よりもっと多く、より強力な仲間達とのコミュニケーション創りを、前向けに考えてくれる筈だと、私は思ったんだ」

『深月フェリシアには感謝している。常盤ななか』、『蒼海幫』、『蠅を動かす謎の集団』——あらゆるものを巻き込んでくれた。黒幕が私であることを、うやむやにするためにね。まあ、君に見破られてしまったのは、至極残念だったが……』

「……………」

「どうしたの？ 七海部長」

「いえ……。で、みたま、いろはのソウルジェムの方は」

数時間後、ミロワールにやちよは足を運んでいた。

そこには、変身したみたまと、同じく変身した状態のいろはが寝台に横になっている。近くには不安そうに見つめるころもいる。

「駄目ね……」

「そう」

いろはは曰く。

工匠大祭の日、サンシャイングループ代表、日秀源道を見つけたのだと。

両親の行方が知りたくて、無我夢中で彼を追いかけた。八坂神社の裏にある林の中で、彼を追い詰めた。

だが、彼の護衛を務める『コルボー』という名前の魔法少女に不意打ちを受けた。背中から押さえつけられ、手を踏み躪られた。

その隣には、『神楽』と呼ばれた鉄仮面の魔法少女もいた。武装のガトリングガンで頭を蜂の巣にすると脅された。

「確かにそう言っていたけど、見えてこないのよ」

「そう……」

みたまは、魔法少女の過去を見ることができず。

感覚的には、ソウルジェムに触れると、自分の頭の中に、相手の過去の経験が映像となって流れてくる、という感じだ。

しかし、上述したいろいろの出来事は、全く流れて来なかった。サンシャイングループ会長、コルボー、神楽……三人の姿は、影も形も無い。

「そんな……!?!」

いろはが起き上がり、愕然とした形相でみたまを見つめる。

「そんな筈はありません!! 私は確かに見たんです!」

声を張り上げて必死に訴えるが、みたまは首を横に振った。いろはは呆然となる。

「な、なんで……?」

「私と、一緒だよ……」

「……ろさん?」

目を見開いたままいろはは声の方を見た。

寝台脇の座椅子に腰かけ、複雑そうな面持ちを向けるところが居た。

「前に言ったでしょ?」

「……は以前、話した事がある。」

『いろはの両親が、サンシャイングループの社員と思しき集団に、拉致されるのを目の当たりにした』

その時、彼女は現場を見たが、連中の仲間と思しき魔法少女から不意打ちを喰らい気絶。

助けることができなかつたのだと。

「私も、すぐみたまさんに診て貰ったの。今のいろはちゃんと、同じ気持ちで……!」  
ソウルジェムに刻まれた、魂の記憶。

それをみたまが確認すれば、紛れも無い証拠となる。

現に、調整課からの情報提供により、難事件の数多くが解決された実績があることか



ら、みたま達は警察から高い信頼を得ている。

サンシャイングループが、どれだけ凄惨な企業だろうと関係無い。

誰であつても、犯罪だけは許してはならない——こころは自分の中で猛烈に荒れ狂う怒りを抱えながら、みたまの元へと駆け寄つた。

「……けれどっ」

しかし。こころはクツと顔を歪め、齒噛みする。

「ダメだったの……」

「えっ」

「こころちゃんの見た事は、ソウルジエムに映つて無かつたのよ」

みたまが言うと、こころは顔を深く俯かせる。

当時、こころがみたまに伝えた事は、全てソウルジエムに記録されていなかった。

サンシャイングループも、連れていかれるいろはの両親も、彼女の魂には一切刻まれていなかった。

「そんなわけない!! ちゃんと探して! つて——私、そう訴えたんだよ……!!? けれど、何回見て貰つても見えなくて……っ」

こころの肩が震え、声は次第に涙声になつていく。

「こころさん……。でも、いったいどうしてこんなことが……?」

顔を覆って泣き始めるころの肩を摩りながら、いろははみたまに問いかける。

みたまはまたも首を振った。

「……詳しい事は、まだ分からないわ。けど、これは幻覚魔法を受けたケースと、ほぼ同じね」

「幻覚魔法っ?」

いろははギョツとした。そこでみたまの隣にやちよが並び、問いかける。

「つまり、誰かがサンシャイングループに誘拐や暴力の罪を、擦り付けようとしていると?」

それが考えられるとすれば、犯人はサンシャイングループに恨みを持つ魔法少女の筈。

しかし、やちよの推測にみたまは首を振った。

「でも、フェリシアちゃんも見たって言ってたし……話してた事も気になるわ」  
それは、少し前に、ここで行われた裏会議の時の事——

「事実で間違いないのね？」

「傭兵は五感が敏感なんだ。いつも命がけだから、鍛えてるんだよ」

何も無きやデスクワークしてるだけのそちらさんとは違う、とフェリシアは皮肉交じりに、やちよに答える。

「サンシャイングループ代表、日秀源道……。彼が件の『蠅』を動かし、君を雇ってみかづき荘を爆破しようと言論んだ、というのか……。？」

警戒を込めた冷徹な瞳で塚内直正はフェリシアを見据え、確認するように言った。

「七海やちよを殺せば3億。殺せなくてもみかづき荘をブツ潰せば半額やるって言われたよ」

フェリシア曰く。

『日秀源道』と思しき老人が用意した『蠅』は15名。いずれも魔法少女だと、フェリシアは認識した。

そして、蠅のリーダーは血のような真紅の外套を纏っていて、『紅羽根』と名乗っていた。

「彼と彼女達の目的は、一体何だったのか、推測は付くか？」

「さあなー？　いつだって金持ちはワケわかんねーこと考えてるし。蠅どもも碌なことは喋んなかったよ」

塚内の質問にヘラヘラと白状するフェリシア。

恐らく、彼が警察だと勘付いているだろうが、緊張の類は、表情からも身体からも伺えない。

無論、この面子に囲まれた状況では抵抗しても無駄なので、とつくに諦めているのかもしれないが。

「で、大金を手に入れたら貴女はどうするつもりだったのかしらあ？」

「ハワイに別荘建ててしばらく遊んで暮らすつもりだったよ」

「意外ね。もっと強い火遊びでもするかと思っただけど？」

例えば、『テロ』とか――

暗にそう込めたやちよの問いに、まさか、とフェリシアは鼻で笑う。

「冗談だろ？ 傭兵つてのは、ガキの頃から火遊びしかできなかつた連中ばっかなんだぜ。金が手に入りゃあ楽で自由な快適ライフを望むのはとーぜんだよ」

逆に言えば、その暮らしを手に入れる為なら、何だつてやる――というのが、傭兵の基本マインドなのだろう。

とはいえ、フェリシアは連中の仲間では無いだろう。

お金と兵隊が欲しい時に、向こうから近づいてきたので、ラッキーと思い利用した――所詮、その程度の関係に過ぎない。

「――念のため、フェリシアちゃんのソウルジエムも覗いてみたけど、やっぱり確認できなかったわ」

「そう……。だけど、コルボーに神楽という魔法少女も気がかりね」

やちよの言葉にみたまは頷く。

「ええ。早速、調整課のネットワークを探ってみたけど、神浜市にこの名前の子は存在しなかったわ」

「外部の魔法少女？ だとしても」

「ええ。魔法少女はこの神浜市に足を踏み入れた時点で、私達は存在を認識できる。でもそれができなかった。ということとはつまり……」

「コルボーと神楽……この二人は魔法少女じゃないのかもしれないと……？」

「今は、憶測だけだね」

二人の会話をそこまで聞いて、いろははがつくりと肩を落とした。

「結局、今はまだ何も分かって無いってことですよね……」

「いろはちゃん……それは」

「分かってます。だけど……!」

二人が尽力しているのは、いろはも気づいている。

宥めるように肩を撫でるところに、悲痛な眼でいろはは訴えた。拉致された両親のことが、どうしても心配でならなかった。

「いえ、一つだけ分かってることがあるわ」

「えっ」

いろはとところが同時に目を向けた。やちよが真剣な眼差しをいろはに向けながら、答える。

「全てはいろは、貴女を中心に動いている。つまり——」

連中の目的は、貴女よ——



FILE #86 深淵から伸びた手が、彼女に触れる

「連中の目的は、〃貴女〃よ」

冷徹に放たれたその一言に。

心がざわつくのを感じて、いろはは瞠目した。

『攫われたの。サンシャイングループに……』

『いろはさん。貴女が本気で彼らに立ち向かいたいと思うのなら、ここで力を付けるべきだわ』

『君は……〃主人公〃だ』

『……奇遇だな、オレもいろはに聞きたいことがあったんだ。

——オマエは、〃何者〃？』

『わからないかね。恐らく、標的にされたのは、君だ』



『人間とはお互いに響き合い、高め合うことができる』

『君のその精神が、いつか、犯人を表舞台に登場させることだろう』

言葉が、頭を巡る。

可能性は有ると思っていた。

けど、確信が持てなかった。

自分の身の回りの不可解な出来事——その原因が、外ならぬ自分自身ではないかと。

『うそつき』

『まるで、童話の主人公みたいだね』

『……もうやめてくれ。自分だけが正常であろうとするのは』

『やめてえっ!! 殺さないでえっ!! その子は私の——』

『お前と私は一緒だ。——だから、“親友”なんだよ。たまき』

いや、違う。

確信が持て無かったのは嘘だ。

自分とはつくくに気付いていた。分かっている、知らないふりをしていたんだ。存在しない記憶に居る人たち——頭の中の深淵の底で、答えを知る彼女達は、最初から自分にヒントを与えていたじゃないか。

——そこにあるのは「闇」だ、と。

それが、答え。

ういの喪失も。

両親の拉致も。

サンシャイングループの暗躍も。

全て、自分のせい

「いろは」

深淵に思考が墮ちる前に。

肩をグツと掴まれて、いろははハツと目を見開いた。

我に返つた時に視界に移つたのは、七海やちよの顔。精悍なその中で、優しさに満ちた瞳の蒼穹が穏やかに揺らいでいる。

「貴女には、まだ選択肢があるわ」

「選択肢……？」

「ええ、大賢者試験から降りるといふ選択肢よ」

いろはが全ての原因なら。

相手の目的が、いろはなら。

これから先、彼女を中心に騒動が厄災の如く発生するのは必定。// 神戸市全体を周る大賢者試験の最中に襲われるだけじゃなく、彼女の近くに居る人達も巻き込んで、燃え上がるのは間違いない、とやちよは予測した。

市長には悪いとは思いますが、だからこそ——

「貴女に、戦う義務は無いわ」

そう、教えなければならなかった。

いろはは下唇をくつと噛み締め、深く俯いた。

「けれど、私、治安維持部の一員になりましたし……」

「内勤という手もあるわ」

七海やちよのように、戦いだけが治安維持部ではない。

工匠大祭と同じく、イベント行事等を手伝いながら市民と交流を深め、魔法少女と一般人の垣根を無くしていくのも立派な仕事の内だ。

「でも、やちよさんに迷惑が」

「それが私の義務よ」

いろはが何者であろうと関係ない。

例え、彼女が全ての原因だったとしても、神浜市民で有る限り、七海やちよは環いろはを守る。

それが、治安維持部長の務め。『最強』の異名を手にした勇者だけが背負う、絶対の責務。

「やちよさん……っ」

いろはは、目を丸くしてやちよを見上げた。

こくりと頷き、やちよも慈母の如き微笑みをいろはに向ける。

「……………っ」

嬉しい。

両親がいなくなって、自分はずっと一人だった。

まるで、世界に自分一人が取り残されたような感覚をずっと抱えてきた。楽しい時も、苦しい時も、ずっと——永遠に続くという気さえしていた。でも今、心から安心した。

自分はまだ、一人じゃない。

頼れる家族がいる。守ってくれる“姉”がいる。

そう気づけたのが溜まらなくて、激情が込み上げてきた。

視界が揺れる。

「っ……………でも」

いろはは一度視線を逸らして、グツと拳を握りしめる。

津波のように押し寄せてきた感情をぐっと飲み込んで。

もう、泣く訳にはいかない——覚悟を決めて、いろはは再びやちよの顔を強く見つめ直した。

「私、戦います」

やちよは何も返さず、穏やかな海を向けたまま頷く。

「ねむちゃんが、言ってくれました。私は『主人公』だって。私が初めて、全てが私のせいで起きた物語なら……私が自分の手で片付けないといけない」

「そう」

「私のせいでみんなが巻き込まれて、いつか傷つくことになる。そんなこと、私には耐えきれませんから」

真剣な顔でいろはは、やちよに言い切った。

やちよは頷きはせず、ただ一言。

「辛い選択よ、それは」

『やめなさい』、と。

その言葉は、遠回しに言われたような気がして。

「だって……………」

いろはの声が震え、口元が歪む。

やちよの気持ちは分かる。その覚悟も理解できた。だとしても――

バツサリと言いつ放たれた言葉が、いろはの導火線に火を付けた。だとしても、譲れない。  
い。

キツといろははやちよを睨む。

「っ……だつて……、悔しいじゃないですか!!」

抑え込んでいた激情が口から飛び出した。

途端、涙が溢れだした。

「ういもお父さんもお母さんも、全部失つて! 真実だつてなにも掴めてないのに! アイツに、日秀源道にまだ何もやり返せていないのに!!」

涙で顔がぐちゃぐちゃになるにも構わず必死に叫び続ける。

「貴女を失うのが怖いのよ」

「分かりますよ! 分かりますけど……じゃあやちよさんは耐えられるんですか!? 全部失つて! 奪われているのに動くなつて言われて!? こころさんも!! みたまさんだつて!!」

「! それ……は……っ」

「……………」

噛み付くかのようにやちよに掴みがかりながら、いろはは激情の矛先を他の二人にも向けた。

こころとみたまは何も返せなかつた。ただ、神妙な顔をして黙りこくるのみ。けれど、いろはから視線を離さず、彼女の怒りを全身で受け止めていた。

「何とか言ってくださいいよ！ 行ってよ!! ねえ!?!」

両肩を揺さぶりながら必死に問う。やちよは答えない。

それに倣う様に、こころとみたまも。

「……………」

「ごめんなさい、いろはちゃん……………」

「つ!! いえつて……………! ……………いえよ……………つ」

怒声の嵐はそこで止んだ。

いろははようやく涙でぐずぐずになった瞳を腕で拭った。しかし涙は止めどなく溢れてくる。

ぐちやぐちやになった顔を皆に見せるのが情けなく思い、顔を俯かせて両手で覆い隠した。

「いろは」

ぐずぐすと鼻を鳴らして、泣き喚く妹の頭をやちよは抱いた。

顔を胸に押し付け、自分を含めた皆に見られないように。

「っ、やちよさん……………ごめんなさい……………ごめんなさい……………つ」

「大丈夫。貴女の気持ちは、ここにいてるみんなが、きちんと受け止めたから」

ねっ、とやちよはこころとみたまに笑顔を向ける。



「……うん！」

「ええ」

二人も微笑みながら頷いた。やちよはこくりと頷き、胸の中のいろはに囁く。

「戦いましょう、いろは。私達と一緒に」

☆

「また怒っちゃった……」

その後——

外はすっかり陽が沈んで暗くなっていた。

いろはは皆より先に、市役所を出て帰路に経っていた。

(こんなに怒りんぼだったっけな、私って……)

いろははまだ中学生。

その年齢で体験するにはあまりにも辛い出来事が多すぎて、感情の軸がぶれるのも致し方無し——と、みかづき荘の誰かが隣にいたら、恐らく、そう言ってくれるだろう。

だとしても解せない。

(宝崎にいたころは、もつと我慢できたような気がするけど……)

自分の気持ちをハッキリ伝えることができた、というのは、紛れも無く彼女の精神的成長であり、気の置けない仲間を作り上げた証でもあるのだが、それを今の彼女が知る由もない。

昼よりも明るく、買い物に回る主婦や、飲み屋に向かうサラリーマン達、遊び回る学生達によつて昼より賑わう商店街を歩きながら、いろはは深い溜息を付いていた。

(もしかして、あれが、私の知らない“わたし”だったのかな？ ねむちゃんの知ってる

“わたし”って、どんな人だったのかな……?)

ふと考える。

“環いろは”の中には、“環いろは”が知らない“環いろは”が居る。

それが全ての鍵を握つてゐるだなんて、よく考えれば相当奇妙な話だ。父は大賢者に会えと伝えた。

会つたら、知らない“環いろは”の事を思い出せるのだろうか。その時、今の“環いろは”はどうなつてしまふのだろうか。

「なんか、考えれば考えるほど頭がおかしくなりそうだなあ……」

ボヤキながら、いろはは商店街の中を進み続ける。

周りはこんなに光で満ち溢れてるのに、心は暗澹としたままだ。

昔、父親から倫理パズルの本を見せてもらつて、けれど一日欠けても一問も解けなかった時のことを思い出した。今の心境はあの時と同じだ。自分の弱い頭じゃ絶対に解けない複雑なパズルが、まさか自分の中にあるなんて――

「っ！」

と、そこで携帯が鳴り、いろはは我に返つた。

バッグから端末を取り出して画面を見ると、『八雲みたま』からである。

「? もしもし……」

通話タブを押して、端末を耳に当てていろはは。

『ああ、いろはちゃん。ごめんなさい、急に』

「いえ……どうしたんですか？」

『前に、二人で神浜総合病院に行つたでしょ。そこで院長秘書を務めてるのがかぶら美奈子って人で、私の昔からの友人の魔法少女なんだけど……』

みたまの声色にいつもの調子はなく、どうも忙しない感じた。

だからか、嫌な予感がした。

「何か……あつたんですか？」

息を飲んで、いろはは尋ねる。

『ええ……。驚くかもしれないけど、聞いて欲しいの。実はその子が……突然、行方不明になつ』

『お久しぶりね、環いろは』

「え」

一瞬。

刹那の様な瞬間だが、いろはは呼吸を忘れた。

『ううん。 “初めまして”、というべきかにやー？』

「……里見、灯花ちゃん……」

夢にまで見る程に。

ずっと聞きたかったその声。

けれど、それに彩られたその言葉は、できれば絶対に彼女の口から聞きたくは無かつた。



F I L E # 8 7 少女が見る世界は 神の未来か、悪魔の過去か

刹那の雑音。

みたまの声が “彼女” と入れ替わったのは、その直後。

「っ……………っ」

パクパクと唇が上下し、開閉を繰り返す。

この世から酸素が消えた。

この世から光が消えた。

息苦しく、どこまでも果ての無い漆黑。

そこに、いろはだけが唯一人、ポツンと取り残されたかのように。

「っ……………あ」

分かっていた。



これは、*“彼女”*の聲が訊けたことへの生理的反応。

強い衝撃——それは、記憶の片隅に居る、懐かしき親友に会えた歓喜とは違う。

この感情は——苛立ち、怒り、悲しみ、嫌悪、憎しみ、絶望のような、激しいマイナスの起伏——それが違和感で。自分にとって不愉快過ぎるその感情の群れが、動悸を加速させる。

「あ、あなたは……」

急速に襲い掛かってきた悪寒に膝が震え、折れそうになるのだけは耐えながら。体の中に取り残された酸素を、どうにか絞り出していろはは掠れた声を発した。

『んー?』

「私の知ってる、灯花ちゃんじゃ、ないんだね……」

『くふっ』

よく聞いた含み笑いの後、一瞬の沈黙。

『わたくしに関して、ヒントを上げるねー☆』

そして、少女は記憶の頃とは一切変わらぬままの声色で、語り始める。

『ものみな一切はただ火炎なり』

「っ!!」

歌を謳うように発せられたその詩に、いろはは瞠目。

『天空覆いて隈なしくま

四方および思維しゆい

地上にも空隙存せず

一切の暗き大地は

悪人みな遍満す

われいま帰するに所なく

孤独にして同伴なし

悪所の闇中に在つて

大火災の聚なに入る

我は虚空の中にして

日・月・星を見ざるなり』

それは、彼女自身の言葉というよりも、誰かの言葉を引用したかの様だった。

『然し、私は生きている。』

今を生きて、この生命いのちを噛み締めている』

「あ……………あ……………」

いろはの視界が歪み、口から自然と嗚咽が漏れた。

そこにあるのは「闇」。

追い求めれば、探し続ければ、いつかはその答えに辿り着くのは、分かつていた筈なのに。

大粒の涙が瞳から零れた。鼓動が激しいせいで胸が強く痛み、悪寒が酷くて膝の震えが止まらない。

「ちよつとは、思い出してくれた？」

「……………」

でも、少女の声は無邪気そのまま。

自分の中に有る、とても大切に、輝かしい世界の住民のまままでいてくれて。

——いや、違う。

ねむだつてそうだったじゃないか。あの輝かしい記憶は全て幻想で、偽りだった。だつて、そこにあるのは“闇”だから。

思い出したく無かつたもの。脳の片隅にしまい込み、封じ込めていた暗黒を、自分自身が白く塗り替えて、作り物の“光”で照らしていただけ——!!

「ああ……!!」

懺悔の言葉が頭の中で無限に彷徨する。

それは彼女にとつて傲慢で、極めて愚かな行いの筈だ。

“現実”<sup>闇</sup>に生きる少女に対して、自分は“空想の絵空事”<sup>光</sup>に浸り、苦しみから逃れてきた。痛みから開放されてきた。

裏切り者で、落伍者の愚考——恐らく彼女からは、永久に赦される事は無い。

『くっくっ』

——やめて。

“輝かしいあの頃のまま”<sup>光</sup>の貴女の声で、いつもの笑い方をしないで。

叫び出したくなる衝動は、急激に湧いた不快感に止められた。

胃が荒々しく掻き乱され、汚いものが喉元まで昇り詰める。

こんな気持ちになるなら。これから先、ずっと続くなら。

「灯花ちゃん……」

見ないまま、空想光に癒しを求めていた方が、幸福なのかもしれない。

ねむも、青佐も、やちよも——それが自分の為だと、言ってくれた。

それでも、いろはは。

「貴方は、一体、何者なの……？」

かぶりを振り、暗黒に手を突き入れた。

自分の中の「深淵」——そこにある本当の姿を知るために。

例え、自分自身の手で彩った空想の偽物であろうとも、大切にしていた人達を取り戻していく為に。

「現実開」と向き合い、進むことを選んだ。

その為なら、耐え難い苦痛だつて受け入れてやる、と。

『聞けば、何でも教えて貰えると思ったのかにやー？ まあでも、これだけははつきり言えるよ。』

「人の生命とは無限に有限。だから価値は無い。

為れば、私はこの生を掛けて、有限を無限へと創り代える。

私の人生の価値を、絶対的な唯一にする」

それが、いまの「わたくし」だから。覚えておいてね。たまき」

プツン。

「彼女」との会話が途切れ、刹那の雑音——そして。

……ああ、良かった！ 繋がった！ 一体なにが……!?」

「……」  
数拍置かれて、聞こえてきたのは、みたまの声。

いろはの口が、自然と酸素を取り込んだ。

世界が光を取り戻し、同時に群集の喧噪が騒がしく耳を打つ。

常闇から開放された意識は、『神浜市中央商店街』へと戻された。

まるで、今の数分間の『彼女』との会話が、いろはの夢であったかのように。

「みたまさん」

しかし、いろはにとっては、紛れも無く現実だった。

だから――

『! ……なあに、いろはちゃん?』

「一緒に、戦ってくださいますか?」

――覚悟を決める。

『え……?』

本当のことは、未だ分からないままだ。

現実だと思っていた。〃光り輝く絵空事〃も、夢だと思っていた。〃現実〃も、実際の所は、まだ何も思い出せなくて、非常に曖昧で。

だけどもいろいろは、この胸に誓いを立てる。

「一緒に、彼女を……里見灯花ちゃんを、止めてくれますか？」

絶対に全てを取り戻すと。

何があっても、生き抜いて、戦い抜いてみせると。

☆



「お帰りなさいませ。プロフェッサー」

暗黒の中樞に戻った灯花を、白衣の少女が出迎える。

恭しく緑髪の頭を下げた彼女を、灯花は一瞥し、

「ただいま、『490』」

とだけ、静かに告げる。

490と呼ばれた白衣の少女——灯花の“助手”が頭を上げた。エメラルドの右眼がメタリックに輝いている。

「如何でしたか、“環いろは”は？」

微笑を浮かべて、490は主に問うた。

くふつ——と、灯花は彼女に振り返らず、それだけの含み笑いを零す。490はそれを見て、満足そうに頷いた。

その端的なやりとりが二人の関係の深さを現していた。お互いに言葉など、今更必要

も無い。助手は主の考えを、表情を見れば即座に理解して汲み上げ、それ以上、追及はせず。

主もまた、助手の先の質問の意図を理解していたから、言葉返す事はなかった。寧ろ、明確な解説など、助手とのコミュニケーション間では、時間の無駄だと。

暗晦の中枢を根城にする孤高の王。

血に飢えた怪物の如く、その冷たき紅眼で世界を見下ろす、少女の姿をしたマッドプロフェッサー。

その思考を理解できる者は、常人は愚か、彼女自身が立ち上げた組織にさえ、一人だつていなかった。

“天才”がチームメイトと認める者は、同じく“天才”のみ。

それは此処にいる『490』と――

「おかえり、『896』。そしてようこそ、”マギウスの翼”へ」

彼女ぐらいだ。

490とは反対側の暗闇から、歩み寄ってくる靴音が聞こえた。

既に誰か理解していた主は瞬時に振り向き、笑顔の花を咲かせた。現れたのは、49

0とは頭一つ分は背丈が高く、然し幼女の如く無垢な顔付きの、少女であった。

——彼女もまた、「助手」。

血の様な真紅のドレスの上に羽織った白衣がその証左だ。彼女もまた、主に深々と頭を下げた。

「お招き頂き、恐悦至極にございます。プロフェッサー」

896と呼ばれた少女が浮かべる笑顔は、主や490とは違って、人間らしい暖かみを感じ取れた。

生来は優しい性根の持ち主だと分かる。

けれど、そんな彼女も、目前のマッドサイエンティストに心酔し、忠誠を誓っているのだ。向かい側に立つ490と同じく、天才独特の狂気に魅了された者の一人だった。

「我等『両翼』を再びお傍に置いて頂けるとは」

「計画の様子をプロフェッサーと同じ席で鑑賞できるなんて……」

490と896はお互いに喜びを抑えきれない様子で、期待に満ちた眼差しを向けた。

主は再び、くふつ、と嗤い、

「これからの先のことを考えたら、激しくなるからねー。わたくしの護衛も兼ねてもらうけど?」

490は敬礼。

「承知しております。プロフェッサー」

「我等『両翼』、全て貴女様の為に……!」

896も、彼女の動きに合わせるように、頭を深く下げた。

「……ですがプロフェッサー、僭越ながら私より一つ、意見を挙げてでも宜しいでしょうか？」

「いいよー?」

490に、灯花は頷く。

「はねども実働部隊の指揮官は、本当に粹みふゆで、よろしいのですか?」

「まー、その辺の人事はおいおいとねー」

助手の質問に、灯花の態度は素っ気ない。

秘密結社『マジウスの翼』の最高幹部は、里見灯花・日秀源道・粹みふゆの三名となっており、三人の合議制によって組織方針が決められている、とされているが、あくまで表向きだ。

実際、里見灯花にとっては、源道もみふゆも眼中に無い。一般人から見れば二人の才能は非凡に映るだろうが、生まれながらの天才である彼女から見れば、愚鈍な俗物に過ぎない。

故に――

「だって、羽根の実用性を証明できるのなら、誰でも良いし」

「仰る通りです。『マギウスの翼』はその為に存在する。ゆくゆくは“解放”の為に――」

人が創造する世界は美しい。

我等が崇拜する主が創り上げる世界ならば、より一層。

それは例え、女神にさえ模倣できない。

そう、全ては――

「我等が深淵の王、

プロフェツサー・マギウスによる

トランセンデンス  
超越計画の為に……」

そして、明ける闇に。

溺れる光へ。

漆黒に満ちる少女達を、天高き位置から静かに。

黒鉄の生気を映さぬ虚無の双眼が見下ろしていた。

無惨な状況においてさえ

私はひるみも叫びもしなかった

運命に打ちのめされ

血を流しても

決して屈服はしない

—— ウイリアム・アーネスト・ヘンリー 『インビクタス』（負けざる者たち）



FILE #88 いろはの新しい道①

— 2018 / 10 / 21 PM 16 : 40

そして、時は流れ、三か月後——いろはは、真面目に働いていた。

「これは……『骨折』しているねえ。どれどれ、『手術』が必要だから、入院させようか」  
「そ、そうなの？」

神戸市神浜町・中央区某所、〃〃〃〃は神戸市で最も有名な診療所。

不安な顔を浮かべる少年と向き合い、白衣を着た老人は穏やかな笑みを浮かべて言っ



た。

「なあに、明日には治っているよ。いろはちゃん」

「はい。それでは、こちらの『預かり所』に記入をお願い致します」

白衣の老人に呼ばれて、いろはは子供に同伴する母親に、書類を差し出す。

「いつもありがとうございます」と母親は笑顔で会釈したので、いろはも釣られて笑顔を返した。

そうして、去っていく親子を外まで見送った直後、いろはに声がかかる。

「おねーちゃんー！」

「夕夏ちゃんー！」

振り向くと、親子連れが見えた。いろはを呼んだのは、母親に手を引かれた小さな女の子だった。

“常連”の少女、夕夏である。おっ、と思い、いろはは両手を背中に回した。

「あの子、げんき？」

「うん。元気にしてるよ。ほーら」

とてとてと目前まで歩み寄る夕夏に、いろはは両手を前に出して、背中に隠していた“それ”を差し出す。

「そろそろ来る頃だと思って、待ってたんだよ。『ぼく、さみしかったんだよー』って」

見せた途端、パアツと夕夏の顔に歓喜が灯る。夕夏は“それ”を受け取り、舞い上がるように喜んだ。

「わあー！ クマちゃん元気になったーっ!!」

「うん、ちゃんと治ったよ。良かったね、夕夏ちゃん」

子供が無邪気に喜ぶ姿を見て、顔を綻ばせない者はいない。

クマちゃんを抱いて飛び跳ねる夕夏を見ると、心が暖かくなるようで、いろはも自然と笑顔を見せていた。

———そう。

上述した通り、いろはが勤務している“ここ”は中央区で最も有名な診療所である。その名も、『おもちゃ診療所』———。

☆

——と、いう訳で。

“ここ”は、実は診療所ではなく、神浜中央図書館と隣接する、中央公民館の一室を利用した施設である。

務めている白衣の高齢男性達も、医者ではなく、元家電メーカー勤務や、町工場を経営等していた腕利きの“職人”達なのだ

「いつもありがとうございます。身近にこういうところが有って助かってます！」

おもちゃ診療所の受付にて、いろはは、夕夏の母親から感謝を送られていた。

彼女は以前も、夕夏の玩具が壊れた、という事で、おもちゃ診療所に診察に来たことがある。

本来、おもちゃが壊れた時は、メーカーに頼んだ方が確実性はある。

しかし、時間が掛かる上、部品の一部が海外製だった場合は、保証が効かず高額を請求される可能性もある。

子供にとって玩具は宝物だ。

長期の修理なんて待てる筈無いし、子供がいる親にとっても高額な修理費は大変な痛手となる。

よって、地元の小さな子供がいる家庭にとっては、即日＋低額で修理してくれるおもちゃ診療所の存在は大変有難かった。

「いつでもいらつしやってください。来れない時は、電話を頂ければいつでも駆け付けますから！」

「本当にありがとうございます。じゃあいこ、夕夏」

「おねーちゃん！　ありがとうー！」

「ふふ、またね。夕夏ちゃん」

いろはが「治療」したクマのぬいぐるみを大事そうに抱えながら、夕夏は大きな声でお礼を言つて、母親と共に去つていった。

いろはも、外に出て二人の背中を見えなくなるまで見送つた。

——そして、受付に戻ると。

「頑張つてるね、いろはちゃん」

「いっころさんー！」

入口より姿を現した少女——栗根こころを笑顔で迎えるいろは。

珍しく私服姿であるが、やはりスタイルの良さが見て分かる。つまり、出るころは出て、引つ込むころは引つ込んでいて、年相応の少女というよりも、女性的な美しさが服の上から顕れていた。

やちよと一緒にモデルをしているだけあつて、鍛え上げてるのだろう。羨ましいと思

う。

「今日は非番だね。どう、上手くやれてる？」

そして、陽の様に眩しい笑顔を向けてくるのだから、同姓のいろはでさえ、直視を躊躇うほどだ。

若干目を背けながらも、遠慮がちに答える。

「え、ええ。思ったより来る子供達が多くて、最初は頭が回らなかったですけど……」  
言うまでも無く、いろはは人見知りである。

接客、しかも、妹よりも年の低い子供の相手なんて絶対厳しいとさえ思っていた。

——が。

「最近、みんなの顔も覚えてきましたし……私に修理を頼んでくれる子も増えてきたんですよ！」

続ければ何とやらである。

いろはも、この仕事にはすっかり慣れた様子で、難無くこなせるようになっていた。と言つてもそれは受付業務の話で、おもちゃの修理の腕の方は、まだまだ未熟である。何せ、いろはは、職人では無いのだから。

一人で出来るのは、先のぬいぐるみの修繕くらいで、おもちゃ修理は指導員見守りの下、簡単な設計のものしかやらせてもらっていない。

つまり、それぐらい、おもちゃとはデリケートな“機械”なのだ。

使用されているネジは、六角形とか、楕円形とか、特殊な形のもが使われており、素人が無暗に解体してはならないとさえ言われている——

——とは言え、常連の子供達ともすっかり打ち解けた様であり、声色が澁刺としているのも、自信がついている証拠であった。

「あはは、やっぱいろいろはちゃんは、人の心を掴むのが上手いんだよ」  
「そんなことは……っ」

正面から褒められて、ほんのりと頬を染めて目線を下げるいろは。

こころのような美人に屈託ない笑顔を向けてもらうと、何故か恥ずかしい気持ちになつてしまう。

——と、そこで新たな来客が。

「オホホホホ……私はこの辺に住むしがない年金暮らしのおばあさん、朝ヶ谷 こう  
n」

「当て身」「ぐえっ」

手刀が叩き落される音、老婆が崩れ落ちる声。

「失礼したわね」

秘書のまさらが入口から顔だけ出して、ぺこりと謝ると、気絶した老婆をズルズルと引きずって去っていく。

「……………」

「あ、あー……………あはは……………ごめんなさい」

その光景に、いろはは青い顔を浮かべて沈黙。こころは苦笑い。

大体2時間おきぐらいには、こっさり現れて、まさらに見つかっておしおきされて、引き摺られていくというオチである。

「あの、今ので三回目です……………」

「あはは……………、それだけいろはちゃんのことを心配なんだと思うけど……………、やっぱり自分で玩具を直したくて仕方ないんだろうね」

「え？ 青佐さ……………夕霧市長って、モノづくりされるんですか？」

きよとんと、いろはが目を丸くして問いかけると、こころは、うんと頷く。

「モノづくりもなにも……………って、いろはちゃんは知らなかつたんだね。あの人は、元々工匠区出身の技術者だつたんだよ」

「え、そうなんですか!?!」

意外な事実、いろはは驚いた。

夕霧青佐の物腰や立ち振る舞いから見て、職人らしい無骨さや不器用さは感じられなかったからだ。

「実家は精密機械の製造工場だったんだよ？ ほら、後ろの写真」

こころが指さしたので、いろはも後ろを振り向いた。

神戸市の工業の歴史を証明するかの如く、写真が端から端まで並べられている。

その内の一枚。丁度、いろはの真後ろに飾られていた、『平成8年、神風製作所』という題名の写真。当時勤めていたらしい技術者達の集合写真の中に、

(あ、いた)

青佐と思しき……というか青佐としか思えない女性が、中央に立っていた。

切れ長の瞳と、眼鏡を掛けている所は今と変わらないが、それ以外は。

「うわー……、碧さんそっくりー……」

いろはが思わず感嘆を漏らすのも無理はない。

だって、娘の碧と瓜二つであったから。紺色のショートヘアと、何故か存在する

犬耳が、その証拠である。

「つていうか、碧さんの犬耳つて遺伝だったんですね……？」

アレは年を取ると無くなるものらしい。

「やっぱりそっちの方に驚くよね……。まあでも、当時は優秀な技術者だったそうだし、



工匠区でも珍しい女性の技術者、しかも経営者だったから余計に注目を浴びてたみたい」

「ご実家の方は……？」

「残念なことに、色々複雑な事情が有って、潰れちゃったんだって……。けど、そこから政治家に転身して、市長に返り咲いたんだからすごいよね！」

確かに凄い。

いろはもこくと大きく首を縦に振って、感心した。

政治にはあまり詳しくないが、政治家というのはニュースで見ると、所謂「エリート」な家庭の人達だと思っている。当然、親もエリートで色々援助してもらったから、自分も後を継ぐ為に政治家やってる、というスタイルの人はよく見た。

対して、青佐は技術者だ。政治とは、ましてやエリートなる人種とは無縁の女性。

何も持っていない状態から市長にまで昇り詰めたと考えると、その苦勞は並大抵では無かっただろう。

しかし、

「神戸市長、夕霧青佐で——っす!!!」

「裸絞」「ぐえーっ!! ……」ズルズル……

「やけくそ気味に青佐参上！ クールな秘書のチョークスリパー！ あおさはたおれた！」

そして、引きずられて去っていく……。

「……………」

「またも入口で繰り返される一発ギャグにいろはとこころはまたも苦笑。

「こんな間抜けな様子からは、とてもそうは思えない……。

「でも、ああまで危険をおかしてこつちに来るってことは」

「うん、それだけモノづくりが大好きなんだよ。この『おもちゃ診療所』にしたって、

元々は市長の発案で生まれたものなんだから」

「そうだったんですか？」

「うん、主に工匠区とかで定年した技術者の人達を、新しくシルバー人材として雇用して……創ったのがここんだよ」

おもちゃ診療所に勤務する職員（通称：ドクター）は、ほとんどが高齢者だ。

彼らは元々、定年退職により暇を持て余していた者ばかりだが、いずれも現役だった頃の腕前は、一流であり、腐らせておくのは惜しいと青佐は思っていた。

それが、『おもちゃ診療所』の開設に繋がる訳である。

『地域の子供達の為に貢献してほしい』って呼び掛けてね。元技術者の人達もその為なら、って喜んで集まってきたてくれたんだよ」

「すごいなあ、青佐さん」

ちなみに、最初の内は、青佐自ら玩具の修理に励んでいたそう。

相変わらずのアグレッシブさである。

「知らなかったんだ？」

「ええ、まあ……」

診療所の中で、いろはは紅一点。

技術がない自分が務めていいのかと不安になったが、おもちゃ診療所の責任者（通称・院長）からは、『ウチのドクターは碌な事が言えない野郎ばっかだから、いろはちゃんがいてくれたら賑やかになるねえ』と言われて、あつさり受け入れて貰えた。

そんな訳で3カ月働き、ここの職員ドクターたちは大分打ち解けているが、過去を詮索するような真似はしなかった。

なんとなく、失礼に当たるとような気がしたのだ。

高齢とはいえ、職人は職人だ。

年相応の落ち着きは見られるものの、基本的に表情は固く、口下手な者ばかり。休憩中でも、技術の事なら嬉々として捲し立てるが、自分の事になると、途端に仏頂面とな

り、話そうとはしなくなる。

要は、プライドが高い人間が集まっているので、コミュニケーションのやりにくさを感じていた。

「分かるよ、職人さんだもんね……」

苦笑いするいろはの心境を察してか、こころはそう口にした。

「あはは……。でも、本当にこんなこととして良いのでしょうか？」

そう尋ねるいろはの顔に急に影が差し込んで、こころはきよとんとなる。

「どうしたの？」

「はい。訓練はあまりしてもらえませんでしたし、私がこうしている間は、やちよさ……。七海部長が魔女退治とか、夜間の街の見回りとかやってくれますし……。フェリシアちゃん、鶴乃ちゃんがどうしてるかも、分からないままですし……」

うーん、こころは首を捻る。

治安維持部長としての七海やちよは、背中では語るスタイルだし、夕霧青佐も冗談は言うが、本当の事はちつとも話さない。

ああいう性格の二人組が上に立っていると、下の者は苦勞するのだ。

しかし、

「別に、良いんじゃないかな？」

「でも……」

「心配になるのは分かるけど、いろはちゃん、前に居た街でも、友達と協力して、指示も出したりして、何年も魔女を倒してたんですよ。だから、部長もあんまり心配いらな  
いって思ってるんだよ」

「そうなんでしょうか……？」　けど、これから大賢者試験も受けますし……」

戦うと、覚悟は決めたつもりだった。

しかし、

「たった一人で、各町役場を周って勤務していくっていうのは、やっぱり不安ですよ

……」

「確かに、そうだね……。うーん、あの二人のことだから、何か考えてると思うけど

……」

言葉を濁したものの、今のいろはが達成できるとは、到底思えなかった。

やる気を見せたからとはいっても、まだ公務員勤務三カ月目のいろはに、大賢者試験  
というのは正直無謀としか思えない。受験資格がある各町役場のチームリーダーの中  
でも、受かつて「秘術」を授けられた者は、部長と副部長のみだ。

というか、一般魔法少女職員の中で大賢者試験を受けたいと挙手した者は、まずいな  
い。

実は、環いろはが初めてだったりする。

——と、そこで。

「いろは」

さつき青佐を引き摺っていた秘書姿のまさらが、いつの間にか入室していた。

「まさらさん?」

「時間空いてる?」

「はい。もう終業時間なので……」

「ちよつと来て欲しい。さつき意識が回復した市長が呼んでいるから」

「??」

いろはとこころはお互いに、きよとんと顔を見合わせた。

## FILE #89 いろはの新しい道②

——そして一方のフェリシアも、真面目に働いていた。

【氏名】 蒲原友梨佳 | かんばら ゆりか

【生年月日】 平成7年 6月24日 (23歳)

【職業】 金融会社勤務

【住所】 神奈川県×市△△町西2-3-3

「今日はいいつか」

薄暗い室内で、フェリシアは七海やちよから受け取った、容疑者の身分帳に目を通していた。

「犯罪歴は……」

テーブル越しにやちよが説明する。

「9歳の頃に父親が死亡し、母親も蒸発。その後、食べ物に困り万引き……以後、窃盗と傷害を繰り返しているわ」

「魔法少女になったのが11歳の頃。で、12歳。施設内の子供に、傷害を負わせて、少年院にぶち込まれて……14歳の頃に、一件屋に侵入、現金を盗み……16歳の時に、同級生の少女を刃物で脅してカツアゲ……札付きのワルだな」

「地元の暴走族に入ったのが17歳の時よ。魔法少女の能力と、腕力で一気に総長へとのし上がっていった」

「で、暴力団幹部の目に止まり、養子に迎えられたって訳か」

ここまでは、フェリシアから見れば、別に珍しい話では無い。

蒲原のような経歴の魔法少女は、裏社会には有り触れている。社会に報われず、魔法少女としてもたまたま生き残ってしまった者が、最後に行き着く先こそ「傭兵」という



職業だからだ。

「18歳の時、暴力団幹部が経営している金融会社に入社。事務員として配属されたわ」「表向き、な。本当は、『番犬』と『取り立て人』だろ」

「察しが良いわね。そこは所謂、『闇金』と呼ばれるような会社で、違法寸前の取り立て行為が問題で県警からマークされていたわ」

「で、デカを追っ払う為の Coyツってな。珍しい話じゃねーよ」

一口に傭兵といっても、種別は様々だ。

フェリシアから見て、蒲原友梨佳のような魔法少女は、『獵犬』に値する。

『獵犬』とは、暴力団や、それが運営するフロント企業に只管従属する、飼い犬のような魔法少女の事だ。組織の為なら何だつてできる反面、命令が無いと何も考えられず、何もできない者ばかり。つまり、傭兵の中では、最低ランクに当る。

「で、こんなゴミみたいな奴のナニが問題になつてる訳？」

「身代金よ」

やちよが詳細を説明する。

蒲原友梨佳は一昨年12月に、ある大企業経営者の一人息子を誘拐し、3億円の身代金を要求した。

県警本部は万全の体制を以て、蒲原を確保するつもりだったが……

「子供は解放されたものの、3億円を渡してしまい、蒲原には逃げられた」

「大失態だな」

「で、つい先日、私が蒲原を現行犯逮捕したの。万引きでね」

「うわ、しょぼっ」

呆れた声を挙げながらも、フェリシアの目は鋭く光ったままだ。

3億円も手に入れたのなら、とつとと国の外にでも逃げればいい。

そうでなくとも、県を飛び越えさえすれば管轄が変わる為、どうしても捜査は難航せざるを得ない。

だが、そうしなかったのには、何か事情が有ると見た。

「三億円はどうした？」

「それよ。蒲原はどうしても口を割りたがらない」

「また、むずそーな奴を……みたまにソウルジェム弄つて貰えば一発じゃね？」

「対象が落ち着いてくれればね」

迂闊に読み取ろうとすれば、みたまの身に危険が及ぶと、やちよは説明する。

確かに調整員は、ソウルジェムから記憶を読み取れるが、それは相手の同意があつてこそだ。しかも、気持ちのリラックスして貰わなければ叶わない。

フェリシアが溜息を付いたところで、やちよの端末が鳴り出した。

「七海です」

『塚内だ。かなり手強いぞ』

「と言いますと？」

『皇グループ製の最新式ポリグラフでも効果無し、だ』

『ポリグラフ』とは、世界的IT企業・皇グループが開発した機器で、今や日本各地の警察組織に配備されている。スマートフォン並みのハンドタイプで、カメラで対象の顔を映すと、表情を細かく読み取って今抱えている感情を読み取れる、という仕組みだ。

要は、最新型の「ウソ発見器」である。

「分かりました。ただちに彼女を向かわせます」

『よろしく頼む』

端末を切るやちよ。

そして、フェリシアに向けてにつこりと、「良い笑顔」を向ける。

「話は分かったわね？ 深月さん？」

また無茶苦茶な——と出そうになった文句を飲み込んで、フェリシアはぶつきら

ばうに応える。

「はいはい、承知いたしました。ブチヨー様」

後頭部を掻きながらも、フェリシアは取調室に向かつていった。

☆

魔法少女が犯罪を犯した場合、刑務所等に収容される。

世間一般の認識はそれであり、警察もそのように公表している。

だが、冷静に考えて欲しい。一般人を遥かに超える力を持つ魔法少女の身柄を、人間の力で、人間の造った施設で拘束することなどできようか？

答えは言うまでも無い。

では、魔法少女の犯罪者は、逮捕された場合、その行方はどうなるのか？

SNSでは一部の若者によって様々な憶測がされている。『肉体を雁字搦めに縛り上げて、身動きを取れなくさせている』、『“殺す”しか手が無いのに、“逮捕した”と嘘をついている』。『政府の研究機関が身柄を引き取って、最新科学兵器の実験体にしてい

る』等、陰暴論めいたものも。

正直に告げると、魔法少女犯罪者を収容する施設そのものは、実在する。

警察庁も、各警察組織も、その存在も場所を認知している。

しかし、その施設の仕組みを知っているせいで、「今は」公開に踏み切れないのが実情なのだ。

「よう」

そこは『ミラーズ』と呼ばれていた――

深海のような。

分かりやすく言えば、大きな水族館の内部を歩いてるような、幻想的な蒼藍が視界一面に広がる施設。

そこのある一室に深月フェリシアは入った。見えたのは自分を映す大きな鏡くらい。しかし、中央に用意されたパイプ椅子に腰かけて、声を掛けると、鏡の向こうが一変した。

顕れたのは、『取調室』。

無機質なグレーの空間に、何も置かれていないテーブル。フェリシアと対面するよう

にそれを挟んで、蒲原友梨佳が座っていた。

「……………？ 何も話せることはないよ」

警察ではなく、自分より遥か年下の少女が顛れた事に、蒲原は若干目を見開きながらも、冷徹にそう告げた。

「だって知らないもんな。いいよ、別に興味ねーし」

犯罪者を目前にした所で、フェリシアの平常心は揺らがない。

ヘラヘラと笑いながら、挑発混じりに言うも、蒲原の表情に反応無し。

「……………」

「お前が尻尾を振ってる暴力団くみの事は知ってるぜ。どうだ、山崎のオヤジは元気か？」

「さあね……………」

蒲原はフェリシアが、元傭兵と知っても表情に変化は無い。

口を堅く結び、見つめたまま。

「ふーん、まあいいけど。……………おつ、そうだ！ これやるよ」

おもむろにフェリシアは上着のポケットから白い玉のようなものを取り出すと、蒲原に向けて、コロコロとテーブルの上に転がす。卵だ。割ってはならないという無意識が働き、反射的に蒲原の右手が伸びた。

「……………なに？」

受け取った卵はどうやら生のようだ。この時ばかりは、蒲原も相手の意図が読めず、眉を顰めた。

「見てわかるだろ？　生卵だ。碌なモン喰ってねーだろ、オレからの餞別だ。受け取れよ」

「……………」

普通なら馬鹿にしているとわかれても仕方無いフェリシアの物言いだ、蒲原の表情は頑なに動かない。

右手で受け取った卵をまじまじと見つめたまま。

「ところで——」

と、その様子を確認したところで——フェリシアの目が光った。

「お前、かーちゃんは好きか？」

——仕掛ける。

「母はいないよ」

蒲原は即答。表情に変化無し。

「お前のかーちゃんのことを何て呼ぶんだ」

フエリシアは意に介さず、嗤いながら、畳みかける。

「……………」

「クソババア」

「……………」

「母」

「……………」

「かーちゃん」

「……………」

「おかーさん」

「……………」

「ママ」

「……………」

ピキツ、と。

蒲原の右手の中で、小さな音がした。眼を向けると、驚いた。

僅かだが、生卵に『罅』が入っていた——！！

どうして。力は全く入れてない筈だったのに。まさか——

「で、『ママ』はお前のことを何て呼ぶんだ？」



等と、考える余裕は蒲原には許されなかった。  
他愛の無い質問が続く。フェリシアの目が鋭く、残忍に光る。

「……………」

罅割れた生卵を右手の中に、蒲原は顔の鉄仮面を保つ。

「クソガキ」

「……………」

蒲原の表情に変化は無し。

「むすめ」

「……………」

「これも無し。」

「友梨佳」

「……………」

「ゆりちゃん」

「っ!?!」

パキッ、と。

割れる音と右手の冷たい感触。同時に蒲原が両目が、  
またも驚愕の感情を顕わに剥いた。

右手の生卵の殻が完全に割れて、中身が飛び出ていた。

「えっ」

なにこれ。まさか、「無意識」だったのか。

相手の質問に感情が刺激されて、つい、力が――

「なあ」

呼ばれて、慌てて前を見た。

勝利を確信したかのように、満面の笑みで嗤う子供が見える。

「かーちゃんは、お前を捨てて蒸発したのに、随分仲良しなんだな？」

「……………」

再び、鉄仮面を被る蒲原。しかし、無駄だった。

「まばたきをしたな、数回。それは『追認識』だ。何か裏がある」

「……………」

蒲原の口元が、あからさまに歪む。

「で、跡形も無くなった生卵だけど……そいつは『ウソ発見器』だ。極めて原始的のな。西アフリカで使われていた。被告に持たせて、割れたら不安があると見なし『有罪決定』したんだってな」

「ママは、身代金とは、関係無い!!」

有罪の言葉が引き金となった。

瞬間、蒲原が立ち上がり、フェリシアの頭上に向けて吠える。

「ん？ オレは、お前が起こした事件が、お前のママに関係ある、なんて一言も聞いちゃいねーけど?！」

「ぐっ……」

またも、引っ掛けられた。

フェリシア椅子から立ち上がると、屈辱に顔を歪ませる蒲原の脇により、その肩を掴む。

「でも、お前のママのことは気になるな。ママは今、何してんだ」

「……………」

蒲原は沈黙。表情も動かさないように、意思を強く保つ。

しかし、

「家にはいないよな。じゃあ、どっかの施設にいるとか…………?」

「……………」

「まさか、病院か？ かーちゃん、病気か?」

「……………」

沈黙のまま、まばたき、数回。それが答えだった。

「頭がやられた？ 脳梗塞とか？」

「……………」

「違う病気か？」

「……………」

「もしかして、癌？」

「……………」

蒲原はまばたき。

「末期癌だから、治療の為に、金が必要ってワケ……………か！」

「……………っ!？」

フェリシアの右手が移動した。

肩を掴んでいた右手は一瞬の内に、蒲原の左手をギョツと掴んでいた。

「皮膚音が5度は下がったな。脈も速い。心臓がバクバクしている。『パニック』だ」

「っ!!」

「オレは元『メカニック』だ。相手が悪かったな、獵犬」

「くっ……………」

そこで、取り調べは終了した。

蒲原は何も答えなかったが、全て白状した。少なくともフェリシアには、何を隠して

いるのが伝わってしまった。

「卵を恵む奴には気を付けろ」……傭兵の常識だ。覚えとくんだな、ねーちゃん」

囁かれた一言の後——力無く、彼女は項垂れた。

☆

その後、諦めた神原が詳細を自白した。

蒲原は、18歳の時に、母親を発見した。

ホームレスになっており、重病に犯されていた。救急車を呼んで搬送して貰い、近隣の総合病院に入れてもらうも、被保険者では無い為、医療費は高額だった。

暴力団幹部が蒲原に近づいたのは、その直後。

蒲原は、母親の入院費を稼ぐ為に、幹部の誘いに乗り、暴力団に加わった。しかし、それが罠。暴力団に加わったせいで、母親の生活保護申請ができなくなってしまうのだ。

しかし、それでも母親の入院費の為にとはと、懸命に働いた。例え悪事であっても、母親の命を紡ぐ為には、倫理など関係無かった。

だが、母親の癌は進行する一方。

暴力団幹部はそこで、更なる一手を打った。

『名医を紹介する。そいつの下に母親を転院させろ』と――。

――後日。

「そこは暴力団幹部と仲良しの闇医者が発行する医院だった。蒲原はまんまと騙された訳ね」

「で、末期癌の治療に3億円掛かるって言われた訳か」

さつさと稼いで来い、等と言われて急かされたのだろう。

——後日、県警本部が捜査に当たり、闇医者<sup>義</sup>は逮捕された。暴力団幹部<sup>父</sup>の方は海外に逃げたようだが、こちらも時間の問題だろう。

事実を知った蒲原友梨佳は酷く荒れたそうだが——数日後には落ち着きを取り戻し、罪を償って組を脱退する決意を見せた。裁判次第だが、罰を受けた後は、保護観察官指導の下、『離脱指導』を受けるつもりだ。

やちよとフェリシアは、警察から渡された捜査資料データを閲覧しながら、ミラーズの通路を歩く。

神秘的な深蒼の世界に二人の足音だけが響く。

「こういうのは……貴女達の世界では、よくある事なのかしら？」

「表社会<sup>こっち</sup>と同じだよ。『正直者は馬鹿を見る』ってな」

端的な言葉だが、やちよは納得した。

表も裏も関係ない。自分で何も考えられない者は、頭の良い者に縋るしかない。そして何もかも——食料や財産、精神さえ——搾取されても、全く気づかない。

「蒲原みてーなヤツは、いっぱいいたし、見てきた。だから、喰われねーように、強くなつたんだ」

「なるほど……ね。頼りにしてるわよ」

「ハッ」

「やちよが微笑みを見せると、フェリシアに鼻で笑われた。

「それより、さっさと帰って、夕飯にしよーぜ！」

「ざんねん。その前に、市長から呼び出しよ」

「な……っ!!？」

「ガン、と。」

「フェリシアが頭を抱えたのは、言うまでも無い。」





# #エピローグ　そして二人は進み始める。

— 2018 / 10 / 21 PM 17 : 30

市長の長い話が終わり、二人はようやく市役所の外へ開放された。

帰路に経ついろはは先ほど、市長と八雲みたまから渡されたものを天に掲げ、まじまじと見つめていた。

——これが、『マギアストーン』。

掌にちよこんと乗るくらいの赤い石。

一つだけではお守り程度の効力しか發揮しないと——謂わばご当地のパワーストーンといった所だ。

だが、市内にある各町から全て集めた時、真価を發揮する。

——神浜町のは手に入れた。残りも慶治、立政、明京の三つ。4つ揃った時、私の目標が一つ、達成できる……！

以前記述したが、大賢者試験とはまず、大賢者に会う前に、各町の役所の治安維持部隊で働き、実績を上げて、担当となるチームリーダーと町長から高評価を貰う必要がある。

その合格の証として、手に入るのがマジアストーン。

つまり、これらが、大賢者への鍵となる。

具体的なことはちつとも分からない。あの狸みたく腹の黒い市長が教えてくれるはずが無い。

ただ、「道が開かれる」とだけ、いろは達は言われた。

どのように開かれて、どのように大賢者の下へ誘われるかは、その目で確かめろ、ということだろう。

——なんだか、笑っちゃうよね。

沈みゆく夕陽の光を真紅に変えて乱反射させる紅石を見上げていると、つい吹き出してしまふ。

「特殊な誰かと会うために、特別なアイテムを、条件をクリアして、各地から全て集める」なんて、まるで昔遊んだRPGゲームか漫画でしか見たことないような展開なの

に……今は、現実の世界で、自分がやろうとしている。

普通に考えたら有り得ない話過ぎて、「笑う」しか無かった。

それしか、感情の表現のしようが無かった。

荒唐無稽過ぎて、いろはの頭が処理しきれなかったのだ。無論、いろは自身とつくに魔法少女なので、今更な訳だが……。

——でも、何より驚いたのが……！

ちらりと、横目で「彼女」を見る。

同じように、マジアストーンを見上げていた。

自分より少しだけ背丈の高い少女のツインテールに下がった金髪が、夕陽を浴びて、煌びやかに瞬きながら揺れている。西洋の血が混じったその顔立ちも端正で、白人系美少女が宝石を天に掲げる視界の光景は、さながら一枚の絵のような美麗さだ。

しかし……

「これ、いくらで売れるかなっ？」

「あうっ」

この「口」さえ無ければ……！

何か有る度に、即行で「イケナイ事」を考える金髪白人系美少女——深月フェリシアの発言に、うっかりズッコケそうになるいろは。

「もう。ほんつつとに、フェリシアちゃんつてデリカシー無い……！」

頭を抱えながら、いろはは反射的にツッコむ。フェリシアはヘラヘラ笑い、

「ああ。オレ、そーいうのは、母ちゃんの子宮の中に置いてきたから」

「どこで覚えたの、そういう言葉遣い……！」

等と生理的にキツイ冗談を返してきて、いろはは辟易する。

とはいえ、彼女もまた、大賢者試験を受けるとは意外だった。そもそも、あんな事件を起こしたのに、警察沙汰もなく、やちよさんと市長が許したのも驚愕した。

確かに、自分一人では不安しか無かったので、色々と経験豊富（※本人談）な彼女が傍にいてくれるのは、正直心強い。

（なんか、やちよさんと市長の狙い通りに動いてる気がするの、正直癪だけど……。これ）

戦える。

安心して、前を向いて。

その為にも、フェリシアと向き合おう。

彼女とはこれから、長い付き合いとなる。だから、自分の気持ちを包み隠さず、誠心

誠意伝える。

覚悟を決めて深呼吸すると、いろははフェリシアと向き合った。

「フェリシアちゃんっ!!」

「!? な、なんだっ?」

突然、いろはが大きな声を張り上げてきたので、フェリシアは面食らう。

「私、あの……あなたの事は正直、嫌いだけど……一生懸命受け入れていくように頑張るから!」

「お、おう……?」

フェリシアは、目を丸くして困惑。

いろはは真剣な顔のまま大きく開いた瞳で、彼女の顔をしっかりと見つめつつ、

「だから、改めてよろしくね、フェリシアちゃん!!」

自分よりも白く長い右手をギュッと掴み上げて、強引に握手を交わす。

「よ、よろしく……?」

いろはの勢いに気圧されたフェリシアは、訳も分からないままそう返すしか無かった。

☆

「よし！ ……じゃ、帰ろうか」

「あうっ」

一 頻りフェリシアの手を振りまわして、いろはは満足したらしい。

パツと手を放して、何事も無かったかのように帰路に経つ姿に、フェリシアはズツコケそうになる。

「いや、なんだったんだよ今のは……？ ——って、おい。ちよつと待てよいろは！」

「えっ？」

先に帰ろうとするいろはの首根っこを、グツと上腕で抱え込むようにして捕まえるフェリシア。

「な、なに……!?!」

今度はフェリシアの行動にいろはが困惑する番だ。

フェリシアはニツと嗤い、いろはに囁く。

「せっかくコンビ結成した訳だし……今日は、二人で宴会しよーぜ」

「ええ!?! でももう夕ご飯の時間だよ!?! 早く帰らないとみんな心配するよ!?!」

「知るか!?! ンなもん連絡入れときゃいいだろ!?! よし、焼肉いこーぜ!! そんなでカラオケでオールな!!」

「オールって朝までっ?!?! ちよつと勝手に決めないでよ!?! で、でも焼肉かあ……♪え、え〜つとこの辺だと、炎宴亭が一番近くて安い筈……」

「バツカお前!?! ゴムみたいな肉しか出さねークソチエーン店なんか行く訳ねーだろーが!! 高級肉の個人店知ってんだそこ行くぞ!!」

「ええええ!?! で、でも、将来を考えて貯金しないとだし、一日使うお金は制限しなきゃ!!」

「15のガキが何ババくせーことほざいてんだ!! 明日の事は明日にならなきゃわかんねーし一日ぐらいパーつとやったって文句ねーだろが!!」

「で、でもカラオケなんて行つたことないし〜?!!」

「テキトーに知ってるの歌えば十分だろ!! オラ行くぞ!! オラオラア!!」

「ひいひいひいひい〜?!!」



ズルズルズル……と、力任せに引き摺られていきながら、いろはは心の中で嘆く。

(や、やっぱりこの子を受け入れるの無理かもお~~~~っ!!!)

お父さん。

お母さん。

うい。

ごめんなさい……。

みんなを迎えに行ける日は、もう少し長くなりそうです……。

2250 #エピローグ そして二人は進み始める。

## ☆ 魔法少女ストーリー ☆

FILE #15.5 二葉さな 第1話 『新しい家』

『親の喜びは秘密なものである。その悲しみや心配も同じである。前者を口にすることができないし、後者を口にもしないだろう』

——フランシス・ベーコン 『随筆集』第七節、「親と子について」より、一部抜粋

☆

いろはとさなは、図書館一階のカフェに訪れていた。

此処の壁は一面が窓ガラスになっており、春の暖かな陽が差し込んで、二人を優しく包み込んでいた。

「いいところだね」

「はい」

窓の外に目を遣る二人。

内庭であるそこには、人工の池が造られており、水のせせらぎと、赤、白、黒、金と色鮮やかな鯉の姿が心を癒やしていく。

（本当に、いろんなものがあるなあ、神浜って……）

図書館一つでもここまで充実しているとは予想だにできなかった。

彼女自身が生まれた家から見ても神浜市は近い距離に有ったのだが、これまで訪れたことは全くと言っていい程無かった。

自宅の有る聖火市は、神浜市程では無いにしても、そこそこ大きな市街ではあったので、あまり不便はしなかったのだ。

それに――

(魔法少女が集まつてる神浜つて、危険が多いつて聞いてたからなあ……)

これである。

神浜市が『魔法少女保護特区』という別名を持ち、更に『調整』が受けられる以上、訪れてそのまま居住する魔法少女は決して少なくない。

だが、魔法少女の世界では「魔法少女いれば、魔女有り」という諺がある――つまり、その土地に現存する魔法少女の数が多いほど、どういう訳か、比例するかの様に魔女も個数を増やしていくのだ。

神浜市が「危険」と謳われたのは、そのせいであつた。

故にいろはも、都会化が進む神浜市に興味を湧いてはいたものの、我が身を第一に考えると、足を運ぶことは躊躇つた。

(でも、こうしてみると、さなちゃんみたいに普通に暮らせてる魔法少女もいるし、一般の人々も凄くいっぱいいるから……治安維持部の人たちが、それだけ頑張つてるのかもね……)

一度さなを見てから、周りを見渡す。

他のテーブル席は、カップルや家族連れ、或いは勉強に訪れた学生の集団で賑わっている。

外まで流れた悪い噂までは流石の彼女達とて防ぎきれようがない。しかし、街の治安はバツチリ守られているのが、この店の空間だけでも証明されている。

改めて、やちよ達の働きの凄さに胸中で感嘆するいろはであった。

(それにしても……)

自分たちと同じく、テーブルで食事を取っている学生と思しき若者達に目を向ける。

雑談で賑わっている集団もいたが……問題は独りで訪れている者だ。カフェの至るところでちらほら見受けられるそれはあろうことか、読書をしながらサラダやサンドイッチ、更にはスパゲッティを啜つてたりしていた。

「いいの、あれ……?」

彼らが所持している本は、恐らく図書館の本だ。恐る恐るさなに尋ねるいろは。

「あ……ここはOKなんです。私も、よくやりますし……」

笑顔で答えるさな。

「でも、汚したら弁償だよね……」

「まあ……そうですね」

「私にはとても真似できないな……」

呆れる様に息を吐くいろはの言葉に、さなは返す言葉が思いつかず苦笑いを浮かべるしかなかった。

「! そういえば、環さん……!」

「っ!? はいっ!?」

と、思いきや——急に顔を険しくしたさなが、意を決したかの様に声色を強めて訴えてくる。何事かと、意表を突かれてギョツと肩を震わすいろは。

「あ、ごめんなさい。ビックリさせちゃいました」

「う、うん……どうしたの、急に?」

「私のこと、話してもいいですか……?」

「さなちゃんのこと……?」

「はい。環さんだけ話して、私が話さないのは不公平ですし……それに、同じ境遇の環さんなら、多分……私の気持ち、分かってくれるかもって思いました……」

同じ境遇、と言われてハツと目を見開くいろは。

先程、先生との会話の途中で割り込んできたときも、彼女は言っていた。自分と同じ思いをしてると。

家族から置いてきぼりにされ、独りぼっちになった——その悔しさと辛さは、身を持って経験したもので無いと分らない。

「いいよ、二葉さん。遠慮なく話してみて」

だから、いろはは笑顔でそう返してあげた。

同じ経験をした者同士が、最大の理解者を得られるチャンスだった。

さなは、自分の気持ちを理解してくれていた。だったら、自分もまた、さなにそうしてあげたいし、できるようにになりたい——言葉にはその思いが乗せられていた。

さなの顔がパアツと明るくなる。

「じゃ、じゃあ……話しますね……！」

さなは少し照れと緊張で指をモジモジと動かしつつも、口ははつきりと動いていた。

☆

二葉大五郎——環さんは、この人物の名前、聞いたことが有りませんか？

え？ 分からないって……？ うーくん、歴史の教科書とかで、聞いたことないです

か……？

あつ！ 思い出したみたいですね……そうですつ！ 二葉大五郎は、明



治時代に医学を躍進させた名医でした。

当時、日本ではまだ一般的じゃなかった消化器外科学を普及させて多くの人々を救い、没落気味だった二葉家を一代で名家と呼ばれるまでに立て直した、凄い方なんです。……そのまさかなんです。二葉大五郎はご先祖様です。私の名字の『二葉』はその直系の家なんです。

……ビックリしちゃいました？　ごめんなさい……。私なんか教科書に乗ってる人の子孫だなんて聞いたら、驚くのも無理ないですよ……。……。

でも、厳密には子孫ではないんです。

……え？　それはどういうことか？　ごめんなさい、説明が下手で……。

今から、そのことについて、詳しく説明しますね……。

☆

あれは、10年ぐらい前のことでした。

当時、私の性は元々『二葉』ではありませんでした。全く関係の無いごくごく普通の一般家庭で小さい頃を過ごしていました。

でも、ある日を堺にお母さんとお父さんの仲が悪くなり——喧嘩ばかりするようになってしまったんです。

原因はお父さんの「浮気」でした。

お父さんはお母さんにバレた途端にDVをするようになって……身の危険を感じたお母さんは、逃げる為に……まだ小さかった私と、弟の篤志——私は「あつくん」って読んでるんですが——を連れて、家から出ていったんです。

通帳とカード——これはかなり後で知ったのですが、家から出ていく時に、お父さんの部屋の隠れた場所から盗んだそうです——に残っていたお金で、お母さんはアパートを借りると3人で暮らし始めました。

生活は大丈夫だったのって？

はい……かなり困窮してました……。一日の食事がパン一切れだったことがどれだけあったか……。

お母さんは、生活能力の有る人じゃなかったんです……。

元々そこそこ優れたご家庭の令嬢さんで……結婚もお見合いで決めたそうなんです……。お父さんと結婚してる間は、ずっと専業主婦をしていましたから、働いた事も無くて……だから、就職先を探すのがかなり苦労したんです。

ようやく、見つけたスーパリーのパートの仕事で、子供二人を食わせていかなければならなかったので……凄く大変だったんだと思います。

お母さんの実家には、帰らなかったのって？

はい。そうした方がいいのに、って当時はよく思いました。今でも、そう思います。でも……私とお母さんが、やっぱり母娘だからなのかな……？ だから、なんとなく分かるんです。お母さんも……窮屈な家庭に嫌気が差してたんじゃなかった……。

口ではそう言わなかったけど、多分……あんな家、もう絶対戻ってやるもんかって、思ってたんだと思います……。

お母さんは、それで良かったのかもしれませんが。でも、当時の小さかった私とあつくんには、とても耐えられる状況ではありませんでした。

アパートに暮らし始めてから3ヶ月ぐらい経った時に、私はつい聞いてしまったんです。

「おかあさんは、どうしておとうさんとわかれたの」って――

直後、お母さんは私に対して、俯く様に頭を下げました。……申し訳無いつて気持ちの現れだったのかもかもしれませんが……今となっては定かではありません……。

ただ、凄く寂しそうな目をしていたのは、はつきりと思い出せるんです。

後にも、先にも、あんな目をしたお母さんは見たのは、これが初めてでした。

「あの人がね、お母さんにとって嫌な人だったから……」

実のところ、お父さんのDVは、私とあつくんがいない間に行われていました。

だから、当時の私は、そんなお母さんの辛さを全く分かってあげられなかったんです。

「さなは、今でも、お父さんのこと、好き？」

だから、こう答えてしまったんです。

「うん。すき。だいすき。もどってきてほしいって、おもってる」

「そう……」

お母さんはポツリと零すと、フツと不思議な笑みを見せました。

当時は、それが何の意味を持つ笑みなのかは分かりませんでしたけど、印象には残り

ました。

今も……はつきりとは分かりません。確認もしていません。だけど、なんとなく分か

るんです。

『自嘲』——自分に対する「親」としての不甲斐なさ、情けなさを客観的に見て、呪うように笑っていたんじゃないかって思います。

「ごめんね、お父さんの話は、もう絶対にしちやダメよ」

お母さんは、笑みを消すと、目元をきつく細めて、静かに言いつけてきました。

「……なんで？」

「お母さん、思い出すと、辛くなるから……それに」

お母さんはそこで言葉を止めると、私に小さく微笑みました。そして、こう言ったんです。

「新しいお父さん、すぐに見つけてくるから」

当時の私はその意味が分からず、首を傾げていました。

お母さんは、生活能力が全く無い人でした。

でも、あの頃は——私達の事を真剣に考えていたんだと思います。私とあつくんが一番何を欲しがっていたのか、悟ったんだと思います。

そしてこれも、かなり後で知ったのですが、私とあつくんが寝ている間に、水商売の

仕事もしていたそうです。

☆

お母さんが言っていた通り、新しいお父さんは、すぐに出来ました。

『二葉義和』——名門、二葉家の御曹司であり、二葉大五郎の子孫。

風俗店で偶然出会い、話を重ねている内に、お母さんとは意気投合したそうです。

というのも、義和さんもまた、離婚経験者であり、一人息子を引き取って育てているのだそうで……お母さんとは共感できるところがあつたのかもしれない。二人が恋に落ちるのはそう遅くありませんでした。

え？ 二葉さんは気づいてたのかって？

ええ、なんとなく、ですけど……お母さんは仕事が休みになると、ウキウキしてどこかへとお出かけするようになったので、もしかしたら、って思ったのですが……。

ええ……はい。複雑でした。だって、私とあつくんを差し置いて一人だけ何かに楽しんでるんですから……でも、人形みたいにならずと暗かったお母さんが、ようやく笑うようになってくれたので……嬉しかったです。

あれよあれよという間にお母さんは婚約まで漕ぎ着けて、義和さんと、一人息子の漱也さんを私達に紹介してくれました。

「はじめまして、今日から私が君たちのお父さんだ、よろしく」

それが、義和さんから最初に掛けられた言葉でした。

優しい声色でしたし、笑顔で手を差し伸べていましたが、目が……私とあつくんを伺う様にじつと細めて見つめていました。それが、ちよつぱり、怖くて……この人、何を考えてるんだろう、なんて、思ってしまった。

義和さんは気が早い人で、お母さんと結婚した時の為に5人で住む為の新居を購入していました。

そこはもう、今まで住んでいたアパートとは比較にならないほどの『豪邸』でした。私とお母さんは呆然となりましたし、あつくんは「すっげー！」を繰り返し叫びながら飛び跳ねてハシヤイでいたのは、今でも忘れません。

「はじめまして、漱也です。二人のお兄さんになるから、わからないことがあったら何で

もきいてくれよ」

漱也さんはというと、義和さんに似て、真面目な雰囲気でしたが、私達に向ける笑みは屈託ないものでした。

年が離れていたこともあつてか、落ち着いていて、この人がお兄さんなら、頼もしいな——なんて、思っていました。

かくして、お母さんと私とあつくん、新しいお父さんの義和さんと、漱もお兄さん——凸凹な5人の共同生活が始まりました。

私は……いえ、お母さんとあつくんも、この頃はちつとも疑ってはいなかったんだと思います。

これからは幸せな毎日が遅れるつて。何も不自由しない生活が待つてるんだつて……信じてました！

あれを見るまでは……



☆

私達の名字が「二葉」になってから一ヶ月後のことです。

その日は、昼間、曇っていたせいか、夜になると、月も星も見えないほど真っ暗で、闇に飲まれたみたいなき空でした。

時間は大体夜の10時ぐらいだったと思います。

ガタンツ！ と何処かで大きな音がして、お母さんとあつくんと川の字で寝てた私だけが、パツと目を覚ましたんです。

この時の私は、自分でも呪いたいくらい無邪気な子供でした。面白半分で確認しに向かつてしまったのです。

一階に降りると、お父さん義和の書斎だけがまだ明かりがついていました。

もしかしたら……物音がそこからのしたのかもしれない。

私は、ちよつとドキドキしながら、扉を開けてしまったんです。

そこで見えたのは……………

「漱也!! こんな遅くまで何をしていたあッ!! 遊び呆けていたなあッ!」

顔を真赤にして怒鳴り散らすお父さんと、その前で、土下座するお兄さんでした。

「お、お父様、ぼ、僕は学校の友人達と遅くまで勉強していたのです! 断じて、遊び呆けていたつもりは……………」

「嘘を付くなバカ者がッ!!」

そう言つて、お父さんは、椅子の手すりをガンツと思いつき叩きます。お兄さんは、音の大きさに「ひっ!」とうめき声を挙げていました。

私も、初めてみるお父さんの怒りが激しくて……ドキドキしていた気持ちが一瞬で凍りつきました。身体が固まってしまつてそこから動けなくなつてしまつたんです。

お父さんはポケットから携帯を取り出すと、「これを見ろっ！」と、お兄さんに向かって何かを見せつけました。

お兄さんは恐る恐る顔を上げて、画像を見ると——見たくないものがあつたに違いないありません。

全身を震わせていました。

「実苗みなえが買い物途中に撮って送ってくれた！ お前が学校をサボって仲間を引き連れてゲームセンターで遊んでいる画像をな!!」

「!？」

実苗とは——お母さんの名前です。

私は、ぎよつと目が震えました。

お母さんが……三人で暮らしていた頃、昼と夜も働いて、私とあつくんを食ばさせてくれていたお母さんが……血が繋がってないとはいえ、自分の子供を陥れるような真似をするなんて、到底信じられませんでした。

足の感覚が弱くなって、ガクガクと震えて、立っているのに精一杯でした。

ええ、環さん。

お父さんの言ってることは嘘っぱちかもしれないから、確かめたかった……お母さんじゃないって叫びたかったんですよ……!!

でも、顔を真っ赤にして怒るお父さんは、まるでお伽噺の「鬼」みたいで……だから、怖くて、何もできずに見てることしかできなかつたんです。

「それに……何なんだ!! このテストの点数は?!

お父さんは、書斎にある机から、数枚の紙を取り出すと、漱也お兄さんに思いつきり投げつけたんです。

「100点が一つも無いじゃないか!」

「……っ!」

その一言をお父さんが叩き付けた瞬間でした。漱也お兄さんの横目がキツと鋭く光ったのです。

「しかし、お父様!!」

顔をバツと上げて、大声で訴えます。

「学年では総合4位です! 各教科の先生方も僕みたいな子がいてくれて鼻が高いとまで仰つてくれました。それに……」

お兄さんはそこで、自分の胸元をチラリ見たんです。

そして、また顔を上げて、訴えました。

「さなと篤志はまだ幼い! あの二人の面倒を見ながら、勉強に集中しろというのは、至難というもので……」

「黙れえッ!!」

お父さんの激しい怒号がお兄さんの言葉を遮りました。

私は、怖くて怖くて……涙が目にいっぱい溜まって、膝も崩れ落ちました。

でも……なんだか、逃げるってことだけはしたくなくって、一部始終をしかと見つめていたんです。

「与えられた義務を完璧にこなし、さらに自分を律してこそ二葉家の人間足りうる!!」

「……っ!」

漱也兄さんが一瞬だけ、クツと、忌々しく顔を歪ませました。

普段穏やかな人だったので、あの顔は、とても印象に残りました。

「良いか漱也っ!! 学校にしろ、社会にしろ日本は全てが競争だっ!! 常に高みを目指し一番にしがみつかなければ直ぐに置いてきぼりにされてしまうっ!! 私は父親としてお前にだけは惨めな思いをさせたくないと思っっているのに……どうしてそれが分からないんだ!!」

捲し立てるお父さんの言葉はただ怒っているだけというよりは、必死そうに聞こえて

……今にして思えば、何らかの強迫観念を抱いていたんじゃないかって思います。

一頻りの怒鳴り声を黙って聞いていたお兄さんでしたが……

「……………お父様は、『父親』としての義務を、完璧にこなせてるんですか……………?」

そこで……ポツリと、冷えきった言葉を、突き刺す様に放ったんです。

「なにいつ?!」

まさか反論されるなんて思ってもみなかったんでしょか。

お父さんは椅子から立ち上がり、這いつくばるお兄さんをギツと見下ろします。

「テスト期間中、ずっとずっとずっと……寝る間も無く勉強してきたんだ。少しぐらいハメを外したっていいじゃないか……………!」

「だから学生としての義務を放棄したのか!」

「この日だけですよ。次からはしませんって……………!」

お兄さんの声色は静かなままですが、段々鋭さを増していきました。

「一日だけでも放棄は放棄だ!! お前には二葉家の長男としての自覚が……………」

お兄さんがそこで、ゆっくりと、立ち上がります。

『鬼』と見紛う程のお父さんの顔に決して劣らない……凄まじい気迫を携えた表情で。

「あんたが、いつまで経ってもそんなんだから……母さんは出ていったんだよ……………!」

そう、訴えました。

「っ!!」

お父さんの手が上がります。一触即発の事態になると思つて、私は身構えました。ですが……お父さんの拳がお兄さんの顔に振るわれることは決してありませんでした。

ワナワナと悔しそうに拳を震わせながら、消え入りそうな声で呟いたのです。

「次からは、もっと頑張れ」

そう言うと、お兄さんに退室許可を出しました。

私はそこでハッと我に返ると慌てて、逃げる様にその場から立ち去ります。

ですが……

「……さな？」

「!!」

退室して、お父さんの部屋の扉を閉めたばかりのお兄さんに見つかってしまいました。

「見てたのか？」

「~~~~っ!!」

私は慌てて首を横に何度も振ります。

しかし、お兄さんには隠し通せません。ハア、とため息を付くと、屈んで私と視線を合わせてくれました。

「あく、情けない所をみせちゃったなあ……」

「お兄様、あの……」

「兄妹なんだ、気を使うなよ」

そう言ってくれるお兄さんですが、見てしまったのは事実です。罪悪感でいっぱいでした。

「お兄ちゃん、あの、ごめんなさい」

だから、泣いて謝ります。お兄ちゃんはふうふうと二度目のため息を吐くと、頭をポツと手を置きます。

「謝るなって、別に悪いことしたわけじゃないし。悪いのは親父さ。昔っからああ世間体だの家柄だのにうるさくってね……前の奥さん……僕の本当のお母さんが出ていつから、ちつとも上手くやれてないんだ」

罰が悪そうに頭を掻くお兄さん。

「でも、さつき……お兄ちゃんも、怖かった……」

「ああ……」

誤魔化す様に顔に苦笑いを浮かべるお兄さん。



先程お父さんに向けた、あの鬼をも震え上がらせる表情が、くつついて離なかつたのです。

私は、泣きじやくりながら震えています。

でも、お兄さんは私の両肩に手を置くと、顔をしかと見つめて、こう言いました。

「大丈夫！ さなと篤志の前じゃ、怒らないよ」

「ほん……とう……」

「ああ本当さ。僕はあいつの様にはならない。約束するよ」

お兄さんの顔には、いつもの穏やかさが戻っていました。

私はほっと安心して、部屋に戻ります。

再び横になると、心の中で、ぼうっと不安の影が差し込みました。

お父さんとお兄さん——二人の関係は、貧しかったけど比較的穏やかだった、アパート暮らしの頃の私達とはまるで違っていたからです。

誰よりも裕福で才能に溢れている二人。それなのに、関係は常に冷え切って、ピリピリとした空気を纏っている……。

あの剣幕が、これからも見ることになると思うと、不安で——その日は眠れませ

んでした。

☆

あの日以来——お母さんとは話をしていません。

お母さんが本当に、漱也お兄さんを陥れる様な真似をしたのか、確認するのが怖かったから……。

お母さんも、私と積極的に話そうとはしませんでした。多分、お母さんも怖かったんだと思います。

前のお父さんの事をいつか、私が思い出して喋りだすかもしれないって。それが怖かったんだと思います。

あの頃の自分の辛さ惨めさを思い出すのが嫌だったんだと思います。

そんなつもり、無いのに……。

……あ、話が逸れちゃいましたね。

私とあつくくんが小学生に上がると、漱也お兄さんによく勉強を教えてもらいました。最初はお兄さんが凄く忙しそうに見えたので、お父さんに聞いてみたりしたのですが

……

「二葉家の人間たるもの、問題は自分の力で解き明かせ」

素っ気なく返されて突き放されてしまいます。

なので、頑張って聞いて、また、確認してみたのですが……

「これでは埒が開かん。漱也に聞け」

なんて言われて、解き方も、回答も結局教えてはくれずに、突き放されてしまいます。

……あとで、お兄さんに聞いたのですが……お父さんは「子供に付き合うのは時間の無駄」という考えがある人で、私達の面倒をお兄さん一人に押し付けていました。

なので、私とあつくくんは、勉強の事はお兄さんによく頼りました。

お兄さん、あんなこと言ってた割には、一言目には二葉家、二言目には世間体と、結構うるさい人でした。

うん、そうですね、環さん……やっぱり親子なんですよね。

でも、お父さんと比べると、面倒見は凄く良い人だったんですよ？

勉強中にあつくくんが、部屋に転がり込んで遊んでも、怒らずに一緒に遊んでくれるし、私にも、本の事をいろいろ教えてくれたんです。

「お兄ちゃん、この本はなあに？」

その本の背表紙には『楽劇』と書かれていました。といつても、当時の私にはさっぱり読めませんでした。

でも、その本がお兄さんが持っている参考書とは全く異なって見えて……自然と手が伸びたんです。

「ああ、それは小説だ」

「にーちゃん、ショーセツってなんだ？」

一緒に上がり込んできたあつくくんが尋ねます。

「文章だけで書かれた物語だ。興味があるなら読んで見てもいいよ」

「うへえ、眠たくなりそうだなあ」

あつくくんはうんざりとそう言いましたが、私は手に取った本を興味津々に見つめてました。

「じゃあ、篤志は違うのを読ませてやる。さなは？」

「これ、なんて読むの？」

私が指さして尋ねたのは『楽劇』と書かれたタイトルではなく、隅っこに小さく書かれた作家の名前でした。

え？ 何か急に嬉しそうだねって？ ……ふふ、環さん、よく聞いてくださいね。

「どれどれ？ ああ、慎允 峽か」

「マコト……？」

「まこと かい」

それが、先生との出会いだったんです。

あの……環さん、すっごいニマアって笑ってますけど……。

え？ 私もそんな顔してるって……やだ、そんな……！

「まだ駆け出しの作家だよ。書いてる本の内容は暗いけど、登場人物の動きがエネルギーギッシュだね。読んでて力が湧いてくるんだ」

お兄さんは笑ってそう説明してくれました。わたしは、へえ、と感嘆したんです。

「読んでみるか？」

お兄さんに勧められて私は頷いて、本を受け取ります。難しい漢字や単語は辞書を引いて調べて、読み耽りました。

——内容は、確かに衝撃的でした。自分の人生のこれまでの苦勞がミジンコみたいに小さく感じるぐらいに。

だって、異世界で冒険してるかの様に書かれていた世界観が、まさか——麻葉中毒者の主人公が見ていた幻覚だったなんて。

頑張つて魔物を退治してダンジョンを攻略したと思つたら——一家惨殺事件を起こして、更に強盗していたなんて。

悪魔の城に乗り込んで、魔王と戦つたと思つたら——ヤクザの事務所に突撃して、組長と刺し違えたなんて。

あ、ネタバレしちゃいました。ごめんなさい……。

え？ 環さんのお父さんも先生の本を集めてたんですか？ それで読んだこともあるって……はあ、それなら良かった……。

でも、その頃から先生のことを、私は知っていたんです。

だから、なんでしょうね……一緒に暮らす時、あの人のことをすんなり受け入れられたのは。

え？ 先生と仲が良くつて羨ましいねって？

はい！ 先生のこと……大好きですから！！

.....アレ？

.....ああああああああああああ.....!!! えつとえつとええつと.....!!  
そ、そういう意味じゃなくて.....わ、笑わないで、か、からかわないで.....つ!!  
環さくん.....!





## の子は』

## 二葉さな 第2話 『羽ばたけない鳥

☆

思えば、小学生の頃は、比較的に穏やかな家庭で過ごせたと思います。

本格的に、二葉家が他の家庭と決定的に違うと思ったのは、中学生になった頃でした。漱也お兄さんの教育のお陰で私は、「水名女学園」に入学することができました。

聞いたこと……ないですか？ この神浜市では、一番入学するのが難しい学園と言われていているんです。

え？ だつたら入れたのは凄いつて？ ……いや、あのう……本当にギリギリだったんです……だから、そんなに凄くなんか……っ！

と、とにかく……！ 私が中学生になると、環境がガラリと変わったんです。

「凄いね二葉さん、水名女学園に受かったんだ」

「うん……」

「やっぱり二葉さんって、私なんかとは違う世界の人だったんだね……」

「え……?」

「いい家の子ってやっぱりお金も有るし、頭良いんだなって思ってた、二葉さんと比べたら私なんか普通過ぎちやって……惨めに感じるんだよね……」

「……」

「ごめんね。これから、二葉さんと友達でやっていける自身……無いかも……」  
小学校時代に仲の良かった友達は、そう言って、次々と減っていきました。

中学校でも……

「今度の夏休みさあ、どこか行く予定ある?」

「あー、沖縄。なつみは?」

「ハワイ」

「海外かあ、すっげ〜」

「二葉さんは?」

「え?」

「家族でさあ、どこか行く予定あるでしょ？」

「えっと、その……」

クラスメイトの子から急に話を振られて、私は迷ってしまいました。

話を聞いてみると、他の子も私の家と同じ名家だったりするのですが……お父さんとお母さんから、厳しくされているとは思えませんでした。

みんな、両親から大事にされてるみたいだし、みんなも家族を大事に思っていて……長期休暇の前になると家族旅行の話をこうやって持ち出すのです。

「私は、特に予定、無いか……」

「え〜以外。二葉さん家って金持ちのイメージだからさあ、イタリアとかニュージーランドとか行くなって思ってた」

「お父さん、あんまり旅行とか好きじゃなくなってる」

好きとか好きでない以前に、『そんな話題が出ることすら無い』のですが……そこまでは言いたく無くなって、誤魔化しました。

みんなの目つきが変わります。

「……まあ二葉家だし」

「二葉家だからねえ、厳しいか……」

「……………」

私はその言葉に首を振りも、頷くもしません。ただ、黙りこくって、俯いてました。確かに、二葉家は他の名家と比べても格式が高い家柄と知られていました。だから、自分よりも厳しくされているんだって思われていました。

その時の、みんなの哀れみの籠もった目線が、嫌でした。

みんなと私は違う……。大事にされているみんなと、されていない私、その“差”をはつきりと感じてしまつて……。

だから、クラスメイトとは、自然と距離を置くようになってしまつたんです。

☆

家庭の方かというと、私にあまり関心を持たなかつたお父さんが、お兄さんからの教育に介入する様になってきたんです。

ええ。それからは、はつきり言つて地獄でした。

「なんだこの成績は」

その年の一学期が終わった直後、お父さんは、私の部屋に上がり込むと開口一番にそう言ってきたんです。

中学生になつてから私の成績は伸び悩みました。テストの成績も平均60〜70点台が大半でした。

それもこれも、今にして思えば……お父さんがアレコレ余計な口を出してプレッシャーを掛けてきたからなんです。

漱也お兄さんだけに教わつていれば、ここまで酷くはなつていなかったのに……。

最も、当時は、そこまで考える余裕なんてなくなつて……家庭ではお父さんが絶対権力者として君臨してましたから、大人しく言うことを聞くしか無かつたんです。

「水名女学園に受かつたと思つたら、この様か」

お父さんは、鬼の様な顔で私をじつと見下ろして、言いました。

低い声がまるで全身を押し潰す様に重たくつて……私は、自然と床に正座してしまいました。

「……ごめんなさい」

「漱也があれだけ見てやったというのに……情けない奴だ」

お父さんは、ふーっと、深い呼吸を付きました。次の一言に備えて私は身構えます。

「ぬか喜びさせおつて!! お前には二葉家の長女としての自覚が無いのかあつ!!」

全身を震わす程の怒声でした。

以前、漱也兄さんすら脅える程の怒りを、遂に私に叩き付けたのです。

私は怖くて怖くて、跪きながら、ただ……怯えてガタガタするしかありませんでした。

「この馬鹿娘がつ!!」

見上げると、ギクリとしました。お父さんは、右腕を上げて、私に何かを放り投げようとしたんです。

それはよく見ると、私の夏季テストの束でした。ひつ、て……自然にうめき声が拳がりました。

ぶつけられるのが分かって、咄嗟に顔を両腕で庇ったんです。

「おい、やめろよ」

「!!」

しかし、誰かが低い声で静止しました。お父さんが咄嗟に後ろを振り向くと、そこには帰宅したばかりのあつくくんが、廊下に立っていたんです。

「いーだろ別によお。姉ちゃんは姉ちゃんなんだし」

どこかうんざりとした顔で素っ気無く言うと、自分の部屋へと向かっていきます。で

すが、お父さんが大人しく引き下がる筈がありません。

「待て篤志!!」

「あ、悪いけど、俺に二葉家とか世間体とか言うの無しね。俺は俺の自由に生きたいから」

背中に怒声を叩き付けますが、あつくんは怯まずに平然と返しました。

「待てと言ってるのが聞こえんのか貴様つ!!」

でも、その態度のせいで、お父さんは標的を、私からあつくんに切り変えました。

真つ赤な顔であつくんに迫ります。あつくんもジロリとお父さんにきつい目を向けて睨み返しました。

「ああんっ!」

「自覚が無いのはお前もだ!! 最近勉強を疎かにして学校の友達と遊び呆けてばかりいるそうじゃないかっ!!」

「どっから聞いたんだよ……ストーカーか!」

あつくん、小学6年生になってから……反抗期を迎えていたんです。

お兄さんの教育に反発して、よく友達と遊ぶようになっていきました。

ええ、それはそれで良い傾向かなって私は思ってたんですが……夜遅くまで遊んでるし……頭をキラキラの金髪に染めて、耳にピアスを開けてたり……顔に痣を作って帰って

くることもあったりしてて……悪い友達と付き合ってることは明白でした。

「俺はスポーツ推薦で受かるんだよ」

でも、あつくんは、スポーツが大好きでした。

何も無い私とは違って……やりたいことが明白でした。将来はサッカー選手を目指したいと言つて、肉体改造に熱中していたんです。

絶え間ない努力で彼は『才能』を伸ばしていつて……有名な中高一貫の体育学校から沢山声を掛けられていたんです。

お父さんも、それは認めていました。ですが……

「スポーツができる内はまだいいが、怪我をした時の事を考えているのか!」

「は?」

その時のお父さんの言い方が、不快に感じた様でした。目がキツと鋭くなったのを覚えてます。

「もし、脊椎や頸椎を傷害を負つて半身不随にでもなつたりしたら……自分の頭一つで社会と戦わなきゃいけないんだぞっ!! だから勉強は今の内にしっかりやれっ!!」

あつくんはスポーツが大好きでした。それを人生にしたいと思うぐらいに。

でも、お父さんの言い方は、あつくんの願いを頭ごなし否定しているかの様にしか聞こえませんでした。



あつくくんが歯をギリリと噛み締めました。  
まずい——私は、そう思っただんです。

「いちいちうるせーなあ!!」

キレてしまいました。

「元々は他人の癖によお、親父ツラしてんじゃねーよツ!!」

「クソがツ」なんて汚い言葉を投げつけて、廊下の壁をガンツと蹴飛ばします。

……こうなるとお父さんも黙ってはいません。

「貴様アツ!! 父親に向かってその口の利き方は何だ!!?」

「都合の良い時だけ『父親』かよ!?! それで?! 父親らしいことを一つでもやってくれた

のかよっ?!」

「黙れえ!!」

お父さんは拳を振り上げて、あつくんに殴り掛かろうとしたんです!

私は咄嗟に叫びました!!

「やめてえっ!!」

でも、その声はもう届かない程、お父さんの理性は爆発していました。

振り下ろされた拳は、止まること無く、あつくんの顔面に——

「お父様!! もう止めてください!!」

ぶつかる、その直前でした。

漱也お兄さんが飛び込んでお父さんの体を後ろから抱えてくれたんです。

私と、あつくんは、ビックリして、呆然と見つめていました。

「漱也、お前もかあ……っ!」

お父さんは、じろりと、お兄さんを忌々しく睨みつけました。

「どうして、みんな……私に逆らうんだ……っ!」

お兄さんに羽交い締めになされて、お父さんは弱々しく訴えます。

呪わしさすら感じられる程の悔しそうで、苦しそうな声が、耳に突き刺さって離れま

せんでした。

「っ!! そんなつもりはありませんお父様!!」

「お前が、さなと篤志をキチンと教育しなかつたせい……私に齒向かうようになって

しまった……っ!」

「全ては僕の責任です! 二人には、よく言っておきますので……この場はお下がりがく

ださい!!」

お父さんの抵抗が収まったのか、お兄さんは開放しました。

お父さんは、はー、はー、と過呼吸の様な荒い息を何度も吐き続けると——お兄

さんにギンツと睨みつけて、ポツリと呟いたんです。

「そうだ、何もかも……お前のせいだ……漱也。お前の……責任だ……！」

お父さんはもう正気を失っていました。お兄さんに全て擦り付けると、逃げるように書斎へと去っていききました。

「……っ！」

お兄さんは一瞬、苦い顔を浮かべましたが、すぐに、あつくんの方へ顔を向けました。  
「にーちゃん……！」

「篤志、今回は不問にしてやるが……次に同じ騒ぎを起こしたら只じゃ済まさないぞ」

冷ややかに告げると、あつくんは「チッ！」と舌打ちを打って、床にドツと座ります。  
「分かったら勉強だけはしっかりやれ、いいな！」

あつくんは慥然とした顔でそっぽを向いてしまいましたが、お兄さんはもう気にはしませんでした。

次に私の方へと目を向けました。

いつもの穏やかな様子とは明らかに違って、明確な怒りが感じられる表情でした。

それを捉えた私の心が、ドキリと飛び跳ねます。

「さな、お前もだ」

お兄さんの矛先は、私にも向けられています。心に冷たいものを感じて、私は怯えて

肩を震わせました。

「……………はい」

「次の模試で、篤志より点数が低かったら……………家庭教師をもう一人付けるぞ」

「……………はい」

厳しい言葉を投げ付けると、お兄さんは部屋から去っていきました。

☆

「なあねーちゃん……………」

「……………なあに？」

お兄さんの足音が聞こえなくなり、嵐は全て過ぎ去りました。

部屋に残ったのは、私とあつくんだけ。

「家族って、こんなに窮屈だっけ？」

あつくくんがポツリと呟いた一言に、私は冷たいものを感じて、耳を傾けました。

「……………え？」

「いや、その」

あつくくんは、頭をガリガリと掻きました。言葉に悩むとその仕草をするのです。

「あの頃はさ……………お腹は空いてても、寂しく無かったんだよな……………」

あの頃——最初は何時を指しているのか分かりませんでした。

「かーちゃんと、ねーちゃんと、三人だけで暮らしてた頃はさあ……………」

そこまで聞いて、私は、ああ、と頷きました。

あの頃は、確かに食べるものも無くって、毎日お腹を空かせていたけど……………不思議と

寂しくは無かったんです。

家族3人の距離が近かったから。私とあつくくんはいつも寄り添ってたし、お母さんも

私達のことだけを考えていてくれてたから。

「そうだね……………」

私も同意見でした。

今の二葉家は……………息苦しいぐらい窮屈です。

お父さんは、家と世間体と、自分のプライドのことばかり。

お母さんは、そんなお父さんのご機嫌取り。

お兄さんは、長男として気負うあまり、年々厳しくなっていく——私とあつくんが望んでいた家庭からは、掛け離れていたのです。

「つーでも、ダメだよ、そんなこと、いっちゃ……!」

咄嗟に首を振ってその思考を払いました。

私は、静かに、叱るつもりで言いました。あつくんは振り向かず黙って聞いています。

「私達、この家の人達に食べさせてもらってるんだから、期待には、答えないと……」

「ねーちゃんはさ……」

ギイツと椅子に音を立ててあつくんが振り向ききました。何う様な視線を向けてきます。

「本当に、それが良いと思ってるの?」

「……………」

心に刺さる様な指摘を受けました。私は恐らく、顔を歪ませて黙りこくってしまったんだと思います。

「他のクラスメイトから聞かぬ? 家族旅行に言ったとか、親父と一緒に○○に行ったとかさ……ウチ、そんなねーじゃん。みんな言ってくるんだぜ? そんな親父はお前んとこだけだつて……。ねーちゃんはさ、あんな奴でも期待してるの? 一生懸命頑張

れば、どっかに連れてつてくれるかもって、親父らしい事をしてくれるかもってき……？」

「それは……………」

凶星を刺された気がして、咄嗟に反論しようにも、言葉に詰まりました。

「何も期待してねーから、頑張らねーんだろ」

あつくんは、何気なく呟いた最後の言葉が、私の心を凍てつかせました。

私は、そう言われるまで、気づかなかった。いえ……自分を誤魔化すばかりで、気づこうとはしなかったのかもしれない。

お父さんは中学生の私に求めるようになっていきました。

「二葉家の威光を示せ」と。

……そうですよね、環さん。自分の家のことなんて、分かりっこないですよ。

でも、お父さんは私に強く希望するようになりました。具体的にそれが何か……未だに分かりません。

多分、前に漱也お兄さんに伝えた「与えられた義務を完璧にこなし、自分を完全に律する」がそれに値するのかもしれませんが。

……はい、環さんの言う通りだと思います。そんなことが可能な人間っていないと思います。

未だにそれが、お爺ちゃんから引き継いだ教訓なのか……疑問に思っています。

あ、お爺ちゃんっていうのは、お父さんのお父さんのことです。

私とあつくくんは家庭の事で生き詰まるとよく、お爺ちゃんの所へお見舞いがてら相談に行っていました。

相談……といっても、ついつい家族の不満とか愚痴を零しちゃうんですけど……ニコニコと笑顔で聞いてくれるんです。

でも、この時ばかりは様子が違いました。

☆



お爺ちゃん——二葉青磁せいじはお父さんとは似ても似つかない人でした。

豪快で優しくつて、何より偉大で……神浜でも有数の名医であり実業家でもあったお爺ちゃんは、都市化が進む市の発展に多大な貢献をされた方でした。

でも、私が中学生になる頃には、体調を崩し、病院で寝たきりの生活を送っていたんです。

「全く……見舞いに来てくれるのもとうとうお前だけになつてしまったな、さな」

しおらしく眩きながら、お爺ちゃんは、私の方に顔だけを向けました。

「ごめんなさいお爺ちゃん。あつくんは部活で忙しくつて……」

「いや、いい。一人でも来てくれれば嬉しいものだ」

昔は漱也も一人でよく来てくれてたんだがな、とお爺ちゃんは独りごちると、フツと軽い笑みを浮かべます。

お爺ちゃんは、家柄や世間体よりも、“家族”との繋がりや和を大事にする人でした。でも……どういふ訳か家族からは、次第に見放されていたんです。

(こんなに立派な人を、どうして——?)

お父さんとお母さん、お兄さんに苛立たしいような気持ちと沸々と芽生えながらも、私は、二葉家の現状を伝えます。

いつもなら、豪快にガツハツハって笑って「気にするな！」なんて言ってくれるのですが——

「そうか、漱也まで、そんなことを……」

この日だけは、心を痛めてるんじゃないかって思えるぐらい、とても辛そうな表情で、そう呟いたんです。

「全ては、儂の責任だ……」

「え？」

突然、お爺ちゃんの口から出た意外な一言に、私は呆気にとられました。

「義和……儂はあいつの、育て方を間違えた……」

お爺ちゃんは訥々と話し始めました。

お父さんは、二葉義和は、〃敗北者〃でした——

二葉家は大五郎の出現以降、名医や高名な学者を世に輩出する家柄となり、お父さんも若い頃はその期待が掛けられていたそうですが……ダメだったみたいです。

4人兄弟の長男として生まれ、将来家を背負う為に一生懸命勉強をしたそうですが、どういふ訳かお父さんだけは「才能」に恵まれませんでした。

他の弟——叔父さん達は、東京に進出し、大型の国立病院で院長や理事長をやっているのに、お父さんはどれだけ努力しても、地元の大学の医学部で一教授を務めることが精一杯だったんです。

その悔しさが根底あるからでしょうか……。私達への教育の仕方が、明らかに度を超えていたのは……。

「儂は義和だけに、厳しくし過ぎてしまった……。家を継がせる為に、熱心に指導をしてきたつもりだったんだが……。今にして思えば、あいつの事を儂は何も理解していなかった……」

お爺ちゃんは、そこまで話してくれると、私から顔を逸らして窓の方へと向き直りました。目先にある川で、親のアヒルが、子供のアヒル達に餌を分け与えていました。

「儂が……奪ったのだ。あいつから、『二葉家の理念』を……」

「二葉家の、理念……?」

「偉大なる先祖——二葉大五郎は、今際の際に、子供達を集めて、こう伝えたという」

もし 我が身を 幸福だとおもうのならば 決して人を見下すことなかれ

もし 我が身を 不幸だとおもうのならば 決して人を憎むことなかれ  
まずは家族に目を向けよ

我が身を幸福か不幸に思うのは、所謂家族のせいである。

ならば、家族を如何するかは、私の責任だ。

守り給え、親を、兄弟を、妻を、夫を、子を。

一切、奢ることなく、家族一人ひとりの苦勞と真摯に向き合い給え。

泣かれても穏やかに宥めよ

怒られても怒り返すな。

憎まれたなら笑い飛ばせ。

常に謙虚な姿勢であれ。

さすれば、家族は、我が身の幸福を天国にも勝る至上のものにしてくれるだろう。

「以来、二葉の者はその言葉を胸に、家族を、家を守り続けた。家族と向き合い続ける信念こそが、幸福への道と信じてきた。……だが、儂の代で失敗したのだ……」

「っ!!」

そんなこと無い！ つて、私は否定しようと口を開きました。

でも、その時でした。

……お爺ちゃんが、顔を戻したんです。

見た途端、ビツクリしました。

涙を溜め込んだ瞳から、つうつと、一筋の涙が流れたんです。

あのお爺ちゃんが、まさか泣くだなんて、夢にも思っても無いことでしたので

……私は、言葉を忘れて呆然と見つめてしまいました。

「儂がもつと義和の自由にやらせてさえいれば……！」

お前達がこんな苦勞を背負うことは無かったのに——と、お爺ちゃんが苦々しく

呟く後ろの窓の外では、親から餌を貰った子供のアヒル達がバラバラに散って、好きな

方向へと進んでいました。

今にして思い出すと、お見舞いに行くたびに、お爺ちゃんはアヒルの親子を見つめて

いました。

寂しそうであり、羨ましそうにも見える視線を、いつも……送っていました。

「このままでは、漱也も……ッ！」

それは、自分もあなりたかっただという願いがあったからではないでしょうか？——

——ふって沸いた疑問の答えを知ることがは遂にありませんでした。

お爺ちゃんはそこで大きく目を見開くと、ガバツと起き上がりました。

いきなりどうしたのか——そう思つてると……ゲホッ！　ゲホッ！　と大きく  
噎せこみ始めたんです！

「お爺ちゃん!？」

「ゲホッ！　ゲホッ！　ガハッ!!」

お爺ちゃんは咄嗟に、脇に置いてあるティツシユボックスから、数枚紙を取り出すと、  
噎せ込み続ける自分の口元へと当てました。

次の瞬間、背筋がぞーつとしたんです……。

ティツシユの束が、一瞬で真っ赤に染まっていたんですから……!!

「すまない、さな……全ては儂が悪いのだ……!」

お爺ちゃんは、血で染まったティツシユをじつと見つめながら、わなわなと……まるで  
何かに怯える様に震えて……そう言つたんです。

「だから、本来……二葉の血を引かぬお前にこんなことを頼むのは、烏澁がましいかもし  
れん……だが、どうしても、聞き入れてもらいたいことが、ある……」

「なに……?」

この訴えだけは聞き逃してはならないと、私は真剣に耳を傾けます。

「『二葉家の理念』を、お前に引き継いで欲しい」

「えっ？」

でも、言われたことはあまりにも衝撃的で……私は少しばかり、目眩が頭がクラクラしました。

「家の者の中で、それができるのは、お前しかおらん……！」

「そんな……」

私は、そんな大それた人間じゃない。だから、二葉大五郎の言葉を受け継ぐなんて出来ない——そう言おうとしたのですが、

「幸せな家庭を築け、さな……。儂と義和の過ちを、繰り返すな……！」

お爺ちゃんは、とつても静かで穏やかな口調で……でも、有無を言わさない瞳で私を見つめて、そう伝えてきたのです。

私は、ただ……お爺ちゃんの心からの願いを、どう受け入れていいのか分からず……闇雲にコクリと頷くしかありませんでした。

お爺ちゃんは、その日以来、みるみるうちに衰弱して……最後は意識も朦朧と

始めて、一切喋れないぐらいになってしまいました。  
それでも強靱な心臓の強さに支えられていたのですが、半年後に……息を引き取りました。

そして、本当の地獄がやってきたんです。





二葉さな 3話 「行きどまり」

おじいちゃん——二葉青磁さんが亡くなってから、私達の家はバタバタしてました。具体的は何でバタバタしてたのかは……結局、二葉家の事情に深く踏み込めなかった私には検討も付きません。

ただ葬儀の後、お義父さんが、叔父さん達と激しく言い争っていたのは覚えています。

「親父の遺産だが……」

お義父さん——二葉義和さんの書齋に、三人の叔父さん達は呼ばれていました。

叔父さんたちは、お義父さんと向かい合う形で並んで革製のソファに座っていました。

【遺産相続】のお話でした。お母さんや子供達が寝静まる時間を見計らってから、お義父さんは普段と変わらない様子で話をはじめました。

「生前、遺してくれた遺産がある。そこに書かれている通り、半分は俺が、残り半分はお前たち3人で分けるという形で異論は無いな」

おじいちゃんのお陰だ、となると、相当な金額になると思いました。

——私はというと、実はこの時、こっそり扉の隙間から覗いていたんです。

胸騒ぎがして、眠れませんでしたから。だって、私が、二葉家に居られるのは、おじいちゃんのお陰だ、という気持ちが強かったですし……そのお祖父ちゃんはもういなくなつて……。

だから、この話し合いの後、私は家から追い出されてしまうんじゃないかって……不安も強くなつていつて。

……ごめんなさい、話を戻しますね。

この時のお義父さんの言い方が、私には妙に気になりました。

叔父さん達に問い尋ねる風ではなく、もうこれで決定なんだって断言するかのよう

に。

でも、

「……っ！ ……あ、あゝ……、その件なんだがなあ……兄貴」

「なんだ……!?!」

テーブルの下で他の弟達に肘を突かれて、「えっ、自分が？」と言いたげに目を丸くした後、恐る恐る義和さんに意見をしたのは、すぐ下の弟・将廣さんでした。

東京の中心部に住んでいて、医療法人の理事長として忙しく働いている方で、恰幅が凄く良くて、髪は金色に染め上げていて、見た目は義和さんやおじいちゃんに似ても似つきません。

「実は、その遺書は無効なんだ」

「なに……!?!」

弟に意見されたのが癪に触ったのか、すぐにお義父さんの眉間に皺が寄り、口調が荒くなりました。

うつと息を飲む将廣叔父さん。

多分、子供の頃からこういう関係だったんだろうな、と容易に想像できました。お義

父さんは昔から変わらず、強い言葉と強い力で下にいる人達を束縛し、思い通りにしてきたのだと思います。

だけど……、

「お、親父が亡くなる一週間前に、俺の元に『コレ』が届いてなあ……」

将廣叔父さんは上着の懐から、一枚の封筒を取り出し、テーブルに置きました。

お義父さんがそれを見て、珍しく、言葉を失うくらいびつくりしたのは覚えてます。

「親父からの新しい遺書だ」

「な——!?!」

なんだそれは!!

そんな話は聞いてない!

分かった! お前ら三人揃って、俺を嵌めようとしたんだろ!! 絶対にそうだ!!

いつもの調子のお義父さんなら、叔父さん達にそう怒鳴り散らして、新しい遺書そのものを「無かった事に」すると思います。

でも、そんな余裕さえ当時のお義父さんには無かったんです。

「遺産は全て俺たち三人に分け与えると。兄貴には一円も無しだ」

将廣叔父さんが風を開けて、遺書を読み上げます。

私は聞いていて、びつくりしました。お義父さんは確かに良い実績は残せていませ

ん。それでもおじいちゃんにとつては大切な子供の一人の筈です。なのに……。

それは、お義父さんも同じ気持ちだったのかもしれない。顔を見ると青褪めていて、膝に置かれた手は震えていました。最後の最後でおじいちゃんに裏切られた事が、本当に信じられなかつたみたいです。

「ふぎ、けるな……！ そんなこと、許される訳が……！」

いつもの勢いを失い、それでもお義父さんは叔父さん達に詰め寄ります。

「あ、兄貴は、俺たちと違つて、親父の期待に何も応えて来なかつただろ……?!」

「今までだつて、アニキに負い目を感じていたオヤジの気持ちに付けこんで、散々良い思ひしてた訳だし……！」

「碌な実績も無い癖に、神浜大学の医学部教授になれたのだから、親父のコネを利用したからじゃないのか？」

将廣叔父さん達は、次々とお義父さんを責めます。

その様子はまるで、子供の頃に、お義父さん実から兄されてきた仕返しを今しているかのように見えました。

指摘されたお義父さんは、「それは……」と口籠つてしまいました。

「それに、もう一つあるよ。『死ぬ直前まで見舞いに来てくれたさなの事は、将廣に託す』つて」

「!? なんだとっ!!」

（!?）

お義父さんも、私も、その言葉には凄く驚きました。

私はその時、足元がふわりと浮き上がるような錯覚がしたのを覚えてます。

普通なら、あのおこりんぼなお義父さんから離れられるなら、心の底から喜ぶべきだったかもしれません。

でも、当時の私はそんなことより、「これから、自分はどうなるんだろう?」って不安の方が、凄く強かったんです……。

☆

「さなは俺の娘だ!」

「再婚相手の連れ子だろう」

「それでもこの家の子には変わりない！ 誰にもやる気は無いぞ!!」

はつきりと、叔父さん達に言い返すお義父さんを見て、私は安心したんです。

あんなに言葉のきついお義父さんでも、私のことは、ちゃんと娘として見てくれてたんだなって……。

だけど、叔父さん達の返事は無情でした。

「どうしても駄目だっというなら、こっちにも考えはあるよ」

将廣おじさんは、上着の内ポケットからスマートフォンを取り出しました。

そして、何かを再生した様子でした。動画なのか、音声なのか、私からははつきり見えません。

でも、再生されて聞こえてきた内容に、お義父さんは、絶句しました。

テストの成績が悪かった私を『こんな簡単な事もできないのか』『バカ娘』と恫喝する声。

お兄さんと言い争いになり、『子供は親の言う通りに生きろ』と頬を引っぱたく音。

喧嘩して帰ってきた弟と言い争い、歯向かってきた彼に『黙れ』と顔を殴った音。

「出るとこ出てもらうよ、兄貴」

「……………っ!!」

追い詰められてるのはお義父さんですが、その様子を見ている私もゾツとするような



寒気が足元から背中を駆け上がったのを覚えています。だって、私達家族しか知らない事実がとつくに叔父さん達に知られていたのですから。それが、いつ、どうやって、なんて想像したくありませんでした。

「どこで、いつ、これを」

「正月の時、家族で兄貴の家に寄ったよな。その時、子供達に元気が無かったんで、妙に気になってたんだ。漱也くんに聞いてみても『なんでもない』『気にしないで』の一点張りだ」

その後、将廣叔父さんは、お爺ちゃんのお見舞いに行きました。

その時、頼まれたそうなのです。

「兄貴が漱也くんたちに毎日きつい言葉を浴びせてる。孫に罪は無い。なんとかして欲しいって……涙声で訴えられたよ」

将廣叔父さんは、お義父さんの目を盗んで、こっそり盗聴器を家に仕掛けたというのです。

私達家族は誰もが気づきませんでした。お手伝いのお掃除屋さんだって来ていた筈なのに……。

いえ、多分、お掃除屋さんも将廣叔父さんとグルだったんじゃないか——そう思うと、全てが信じられなくなってしまいそうで、嫌でした。

「……あ、あれは教育の一環だ！ 俺達だって、親父から散々しごかれてきたじゃないか  
!?!」

「俺達の頃は、それでも仕方ないと思えたけど、なあ……?」

「兄貴の考えはもう古いんだよ」

「今はもう、出来の良い悪い関係無く、子供の自主性を親が尊重してあげなきゃいけない時代なんだ。気に入らなきゃ暴言吐いて言う通りにさせて、反抗したら暴力で黙らせるなんて。子供が真つ当に育つ筈無いじゃないか」

開き直ったかのように怒鳴り散らすお義父さんの姿に、叔父さん達はみんな、呆れ返った様子でした。特に最後の将廣叔父さんの言葉は、お義父さんに「鏡を見ろ」とでも言っているかのように聞こえました。

お義父さんの恫喝はもう、叔父さん達には届きませんでした。

「遺産は俺ももらう権利があつて当然だ！ 二葉家の長男、跡取りなんだからなつ!!  
さなも俺の娘だ!! 将廣! お前には渡さん!!」

「でも、このままじゃ、さなちゃんが……」

「黙れ!! 話は終わりだ!! とつとと帰れ!! この愚弟共が!!」

私の耳にも、お義父さんの無意味な恫喝は虚しく聞こえてきました。

「分かった……。良い返事を期待してるよ。兄貴」

「これ以上、親父に迷惑かけるなよ」

「心を入れ替えて、子供達を大事にしろよな」

「くっ……!!」

叔父さん達の失望しきった眼差しが、全てを物語っていたように思いました。

お義父さんは、敗北しました。

虐待の事実——その証拠となるものを叔父さん達が握っている以上、泣き寝入りするしか無かったです。

☆

叔父さん達が私が覗き見してる扉に近づいてきて、慌てて隠れたのですが——。

「クソ 臍齧りが……っ!」

「そう言うなよ。俺達兄弟の中で兄貴が一番オヤジに厳しくされてきたんだ。自分の生き方を自分で決められなかった。可哀想な人なんだよ、兄貴は」

「でも、あれじゃあ、まとまる話もまとまらないよ、将兄」

「う〜ん……」

「あ、あのっ……!」

どうして、そんなことをしたのか、今になっても分かりません。

「私が、将廣叔父さんのところに行くって話……本当なんですか……?!」

隠れていた方が良かったのに、私は自分から声を挙げて叔父さん達に近づきました。

将廣叔父さんは「聞かれてしまったか、まいったな」と言いたげに、困った顔で、首の後ろを掻いた後、

「あれは、親父が勝手に書き遺した事だ」

しゃがみこんで、私と目線を合わせて、そう答えます。

「で、でも……」

私は言葉が続きませんでした。

何か言わなくちゃと思つたけれど、適切な言葉がちつとも浮かばなかつたのです。

どうしてだか分からないけれど、手が震えて、目から涙が溢れそうになります。

そんな私を見かねたのか、将廣叔父さんは、

「親父が亡くなる直前まで、見舞いに来てくれてたんだってな。ありがとよ」

私の頭を優しく撫でた後、微笑みながら、そう感謝を伝えてくれました。

そして、私の目をじつと見つめて、

「さなちゃん、君の人生だ。親父が遺書にああ書いたからって、俺が君に指図する権限は無いと思ってる。今後どうしたいかは、君が自分で決めてくれ」

「……………」

将廣叔父さんはやはり、おじいちゃんの子供なんだ、と思いました。

余裕の感じられるゆつたりとした喋り方と、優しそうな雰囲気は、おじいちゃんと瓜二つでした。

今思えば、とてもありがたい申し出でしたし、おこりんぼですぐ手が飛んでくるお義父さんと暮らすよりも、将廣叔父さんの元へ行った方が、遥かに良かったと思います。

けれど、その時の私は頭が真っ白になってしまって、答える事ができませんでした。

俯いて、黙りこくってしまいます。

くしくろ、くしくやれ、と命令されることで動けても、自分で考えて動けだなんて、今まで言われた事は無かったですから……。

「将兄、だけど」

「虐待を見過ぐす訳には」

二人の弟が将廣叔父さんに意見しようとしませんが、将廣叔父さんは、どうしようと、手で抑えます。

そして上着の胸ポケットから、自分の名刺を私に差し出してくれました。

「これは、うちの病院と、俺の連絡先だ。気持ちが決まったら、連絡してくれ。他にも何か辛いことがあつたら、いつでも相談して構わないよ」

「ありがとうございます……」

「じゃあ、また。……なるべく、良い返事を期待しているよ」

将廣叔父さんは、そう言い残して二人の弟を伴い、帰っていきました。

——しばらくして。

私は、二葉家に残ることに決めました。

おかあさんと弟が心配だったのは、勿論ですし、おじいちゃんがいなくなつてから、曇つた顔ばかりする漱也お兄さんと、お義父さんのことも気がかりでした。

……言い訳ですね。

本当は、決心が付かなかつただけなんです。

自分で決めなきやって思う度に、頭の中が真っ白になってしまつて……新しいところへ行つて、またうまくやれなくて、みんなに白い目で見られたり、怒られたりしたら、どうしようつて……不安も強くなつていつて……。

立ち止まつてしまつたんです。

今なら、二葉家の環境は普通じゃなかつたし、早く抜け出した方が良かった筈なんです……。あの時の私はそこから一步も動けないまま、無意味な時間を過ごす事しかできなかつたんです。

—— “アイちゃん” と出会つたのは、それから少し後でした。





## 二葉さな 4話 「アイちゃん」 A

「いい加減にしろ！」

「でも、漱也お兄ちゃん、私はただ勉強を教えて欲しいだけで……」

「それが調子に乗っているというのが分からないのかっ!？」

怒鳴り声と同時にガンツと机を強く叩く音が響き、私はビクツと肩を竦めてしまいました。

「いいか！ 今までお前に優しくしてきたのは、お前が二葉家とは関係ない、外様の血筋だからだ!!」

「……!？」

「家柄も能力主義も全く関係無い血族のお前が、この家に来たんだ。一日も早く馴染んでもらい、二葉家の使命に目覚めてもらうためにも、俺は優しい言葉をかけたし、悩んでいたら心配したし、勉強で困っていたら不得意な所を教えて出来るようにしてやった。……だが、現状はどうだ。こつちがどれだけ努力しても、お前は全然成果を出さないじゃないか」

そんなこと、初めて知った。

二葉家に入ってから、ずっと優しくしてくれた漱也お兄ちゃんが、そんな目論見で、私と弟に接してきたなんて。

足からぞつとするような寒気を感じて、私は自分の顔が青冷めていくのを感じました。何を信じていいのか、もう訳がわからなくなって、怖くて、あまりにも怖くて、手が震えて、涙が溢れそうになってしまいます。

「っ!? ……漱也お兄ちゃん、だけど」

「妹面して泣けば言い訳が通ると思ったか! 俺がお前くらいの頃は、もう独学で学年10位以内に入っていたぞ!! いい加減自立して貰わなきゃこつちだつて迷惑なんだよ!!」

「っ……」

迷惑、という言葉が私の胸にグサツと突き刺さりました。

私は、唇をむつと結び、嗚咽が漏れそうになるのを抑えるのに必死でした。

「分かっているだろう!!? もう俺達は、この家に染まって成果を上げていくしか生きる道は残されていない!! お前と、篤志だつて……! 仕方ない……全部、仕方ないことなんだ!!!」

怒鳴り声を張り上げる漱也お兄ちゃんの怒った表情は、以前遺産相続の件で叔父さん達と言い争つた、お義父さんの顔を彷彿とさせました。

鬼のように、おっかない顔。だけど、何かに怯えているような。強迫観念にとらわれているかのような。

最後に私に言い放つた言葉も、今思えば、自分に言い聞かせているようにも聞こえていました。

大学生である漱也お兄ちゃんは就職活動中で、多くの企業から内定を頂いたと聞いていました。

私から見れば順風満帆に見えるのに、日に日に余裕を無くしているように見えませんでした。

成績も優秀で誇れる実績も多かった漱也お兄ちゃんは、前ほどお義父さんから圧力やかけられたり、暴力を振るわれてる様子は有りませんでした。

なのにな……どうして。

多分、お祖父ちゃんの死が、関わっているのかもしれないって、私は思ったんです。亡くなる間際まで、お見舞いに行けなかったのを、ずっと後悔してましたから……。そうです。

お祖父ちゃんが亡くなってからというもの、二葉家の空気はより一層ピリピリしていききました。

それだけ、お祖父ちゃん存在は大きかったです。

お義父さんは遺産が貰えなかった事で、前ほどの勢いは無くなりましたが、私をバカ娘と罵り、強い言葉で抑えようとします。

お母さんは、お義父さんが遺産を貰えなかった事で、関係が冷えてしまいました。代わりに私を鬱憤晴らしの対象として罵ってきます。

弟は、中学生に上がったたら、本格的にグレてしまいました。部活のサッカーで精進する傍ら、どこで知り合ったのか。年上の不良仲間と夜遅くまで遊び回り、他校の不良と喧嘩して生傷を作って帰ってくるのは日常茶飯事。私が心配して、手当をしようとしても、「余計な事すんな!」「いい加減うざいんだよ!!」って突っぱねてしまいます。

はつきりと言えるのは、二葉家はもう、異常でした。

そこに住む人達もどんどん異常に染まっていくように見えました。

私も、いつかそうなるんじゃないかって……。

その不安と恐怖が募っていく度に、私は家庭での居場所を失っていくのでした……。

☆

その「アプリ」を発見したのは、しばらく後のことでした。

「君の銀の庭……?」

ダウンロードした覚えはありません。

でも、いつの間にか、私のスマートフォンの中のトップ画面の隅っこに、ポツンと、そのアプリは有ったのです。

「なに、これ……?」

私が勉強の傍ら、普段使うアプリは、簡単なクイズかバズルといったゲームばかりです。なので、自分のスマートフォンの中のアプリくらいは、大体把握してました。

だからこそ、余計に不思議に感じたんです。

このアプリは、いつ、どうやって、私のスマートフォンに入り込んだんだろうって……。

……ええ。環さんの言う通りです。

普通なら怪しいと思うし、危なくて即アンインストールするのが正しいと思います。

でも、その時の私は、否定的な気持ちになれなかった。

『君の銀の庭』——そのアプリ名に幻想的な響きを感じたんです。何の目標も抱けず、ただ無意味に、無作為にノートに文字を書き綴るだけの日常。そんな現実が心の底から嫌だった私は、幻想的なアプリに、“夢”を見ただと思えます。

私が子供の頃から好きだった、『こねこのゴロゴロ』みたいに……。

私を現実から切り離して、どこか、別の世界に連れてってくれるんじゃないかって……。

勇気を持って、私はアプリをタップしてみました。

《色から生まれ空にはあらず、此岸の淵こそ我らが舞台》

《まだ夜は終わらない。もう夜は終わらせない》

《我らは泣き屋、此岸の劇団》

星空の背景にそのようなテロップが表示された後。

彼女が——“アイちゃん”が、ひよつこりと画面に顕れたんです。

『シャインモバイルで学割プランをご契約された学生の皆様のみに送る特別大サービス  
！』

『サンシャイン通信社新開発の最新アプリのテスターになって頂きます！ もちろん無料！！』

『まずは私の自己紹介をしましょう。私は“くるみ割り人形”のアイ』  
『このアプリのメインナビゲーターを務めさせて頂いてるAIです』

ポップなBGMが流れる中、“アイちゃん”は中央でピョンピョコとはしゃぐように飛び跳ねながら、吹き出しを使ってそうまくし立てます。

丸く剥げた頭。

その天辺に突き刺さってる奇妙な金属具。

(後で調べたら、外科手術で頭蓋骨を開ける器具だそうです……)

猫のような大きな瞳は不気味に青く光っており。

大きく裂けて、ギザギザの鋭い牙を生やした口元は怪物みたいで。肌は死んだ人みたいに蒼白く。

来ている服は上下真つ黒のワンピースで、まるで喪服のよう。

彼女のデザインはお世辞にも『カワイイ』とはいえません。つというか、普通に『キモイ』です。誰がこんなもの考えたんだろうって思っちゃうくらい。

子供向けアプリのマスコットキャラクターっていうより、異世界の真つ暗なお屋敷の中で、吸血鬼の主人に召し使える小悪魔と言った方が似合ってます。

でも、それがまた、如何にも幻想的で、私はアイちゃんに興味津々でした。見た目に似合わない愛嬌のある仕草も見ると、つい頬が緩んでしまいます。『くるみ割り人形』というのも、不思議な響きでした。一体それはどういう意味で、アイちゃんは何者なのかって想像するだけで、ワクワクしていきます。

……うん。

つまり、『キモかわいい』んですよね、アイちゃん。

一部の人―特に私みたいなのに―凄く受けるって感じで。

「アイちゃん……結構話題になってたよね」



「環さんも、知っているんですか。もしかして……!」

さなはテーブルに身を乗り出すが、いろはは首を振った。

「ううん、私のスマホはサンシャイン通信製じゃないから……」

そのSNSアプリに、いろはは触れたことが無かった。途端にシユンとなるさな。

「そうですか……」

「でも私、普段ニュースはあんまり見ない方だけど、その話は聞いたことあるよ。確か『アイちゃん』には最新のAI技術が使われてるとかって……」

そこまで話すと、さなの目がいきなり輝き出した!

「はい! 当時のサンシャイン通信は他と比べたらまだ新興の会社だったのですが、グループの会長が自ら大手企業から超優秀な技術者達をヘッドハンティングして『自由なAI開発』を推進したんです! アイちゃんはその技術力の結晶! つまり、自己進化するAIなんです!!」

「っ……!?!」

さなの熱弁に、いろははすっかり気圧されてしまった。

いほん。

と、とにかく……！

当時の私にとつて、アイちゃんの存在は心の支えだったんです。

『ここは、彼岸の偽街』

『ここに住んでいるのは、今は私だけ』

『さあ、あなたも私と同じ、くるみ割り人形となつて一緒に楽しい時間を過ごしまし  
よう』

アイちゃんは吹き出しでそう語つた後、私にアバターを用意してくれました。

- ・イバリ
- ・ネクラ
- ・レイケツ
- ・ワガママ
- ・ワルクチ
- ・ノロマ
- ・ヤキモチ
- ・ナマケ
- ・ミエ
- ・オクビヨウ

・マヌケ

・ヒガミ

・ガンコ

画面に現れたのは、アイちゃんそっくりのキモかわいい13体のくるみ割り人形達。『自分にぴったりだと思ってお人形を選んでください』

端っここでアイちゃんがびよこつと顔だけだして、吹き出しで語ります。

そう言われても……。

人形の名前はどれもネガティブで、しかも今の自分に当てはまるものばかりです。ちよつと嫌な気持ちになりました。ここでも現実を見なくちやいけないのかって。

私はアイちゃんと同じで良いのに。そう思い、彼女をタップしましたが、嫌がられてしまいました。

『ダメです』

それでも、私は祈るような気持ちでタップを続けます。

『いけません』

『やめてください』

『やめて』

『よして』

『ダメ!』

『……どうして私を選ぶのですか?』

へーアイに呼びかけてください!〜と画面にテロップが表示されます。

私はスマートフォンに向かって話しかけます。

「だって、アイは『愛する』って意味で、素敵な名前だから」

アイちゃんはすこしムスつとした顔で、私に吹き出しで言い返します。

『アイは悲しい意味の『哀』であり、私自身の『I』でもあります』

「あ、そっか……」

『つまり、あなたが『I』になれば、あなたにとつての他人である『I』が消えてしま

ます』

「そうだったんだ、ごめんね……」

私がアイちゃんになれば、彼岸の偽街にいるのは私だけになってしまう。

一人ぼっちは、嫌だ。

アイちゃんは、『気にしないで』と首を振った後、再び隅っこに隠れて、アバター達を

表示させます。

「じゃあ、この子で……」

私は【ネクラ】ちゃんを選びました。



二葉さな 5話 「アイちゃん」 B

【君の銀の庭】は、本来SNSアプリです。

なので、私より後も、様々な利用者が増えていきました。

沢山の人が「ぐるみ割り人形」に変身して、偽りの街―だけど私達にとっての楽園―でアイちゃんと楽しい日常を過ごしていく……。

苦しいことも、辛いことも、誰かと分かち合える世界。

それは私が「こねこのゴロゴロ」を観ている時に夢見た世界そのもので、ワクワクしていききました。

ただ……。

その気になれば、私はいろんな人達と交流できたし、もしかしたら同じ悩みを抱えた子を見つけて、仲良くできたのかもしれない。

けれど、現実が本当に嫌いだった私は、同じくらいに生きている人も嫌いで、交流する気はちつとも有りませんでした……。

へねえアイちゃん。聞いて、今日、私に友達ができたんだよ  
代わりに。

私は毎日のようにアプリを起動してアイちゃんに話しかけました。

画面に表示されるのは私のアバター、『ネクラ』ちゃん。

それが、アイちゃんのお屋敷の中に入って、彼女に話し掛けるという物語です。

朝起きたら「おはよう」って挨拶して、今日やるべきことをアイちゃんに伝えて。

学校が終わったら、一日の出来事をアイちゃんに伝える。そんな日々が続きました。

へ白い子猫のゴロー！ 商店街の路地裏で出会ったんだよ

『さなは毎日頑張っていますから。友達ができて良かったと思います』

私の言葉に吹き出しで応えるアイちゃんは基本的に気味悪く笑っているだけですが、パタパタと両手を動かしながら、ぴよんぴよん飛び跳ねており、自分のことのように喜

んでいるみたいでした。

〈でも、私が一方的に友達って思ってるだけだけど……〉

『毎日会ってあげれば良いと思います』

〈え？〉

『さなが、ゴローと本当の友達になりたいと心から願っているのなら』

『私は全力で応援します』

〈アイちゃん……！ うん、ありがとう！〉

アイちゃんは本当に賢くて。賢すぎて。その上、用意周到過ぎて。

いつだって、私に明確な答えをくれました。

お母さんやお義父さん、ソウヤお兄さんに尋ねるよりも、アイちゃんの方が遥かに正しくて。優しくて。

勉強で分からないことがあっても、アイちゃんに聞くと、参考書の一部を引用して教えてくれました。

〈アイちゃん、ありがとう。テストの点数、この前よりうんと良くなったよ！〉

ある日、学校から帰った私は、『ネクラ』ちゃんとなって、アイちゃんのところへ遊びに行きました。

『私はただ参考書に記述してあった“答え”を教えただけです。努力して成果を出した



のはさなの実力です』

へううん、全部アイちゃんのお陰だよ』

『……………』

へアイちゃん？』

『声のトーンがいつもより落ちています。さな、何か有りましたか』

アイちゃんは本当に鋭い子でした。私は、胸が詰まるような気持ちで答えます。

へうん、実は、学校でね…………』

と、まあ、このような感じで。

アイちゃんとは本当にいろんな事を話し合いました。

おじいちゃんが亡くなって、お義父さんの代になってから、二葉家の格が落ちた事。

それが周囲に伝わり、クラスメイトの私を見る目が変わった事——前は、腫物に触る

かのような態度だったのに。急に上から目線で叱りつけるような、高圧的な態度で接し

て来る子が増えてきました。

それでも、『こねこのゴロゴロ』が好きな友達と出会えた事。

けれど、私がいじめられたことで、その子と離れ離れになってしまった事。

他にも、白い子猫のゴローがいつもの商店街からいなくなってしまう事。隠れて餌

付けしていたことを商店街の人に気付かれて、叱られてしまった事。

お母さんにグチグチ叱られて。

弟に相手にされなくて。

お義兄ちゃんからは、冷たくされて。

お義父さんからは、相変わらずダメな奴だと罵られて、怒鳴られて、責められて……

!!

うん。思い出すと、本当につらい事ばかり、アイちゃんに話していたんですね、私。

でも、アイちゃんは嫌な顔は一つもしませんでした。

ただ、普段通りの顔で、私の言葉をじっと聞いてくれました。それが、すごく救いだったんです。

でも、それも……

〈アイちゃんの世界に、行きたいよ……〉

ある日の夜。

学校でいじめられ続けて、家族にも邪険にされ続けた私は、とうとう心に限界が来てしまったのです。

ネクラちゃんとなって、アイちゃんに訴えます。

『どうしました?』

〈アイちゃんが住んでるくるみ割り人形の世界に、連れてって……〉

『……………』

その時のアイちゃんは、珍しく口をムツと噤んで黙りこくつてしまいます。

私の言葉がアイちゃんの気に障ったのかもしれない。

でも、私は構わず、自分の感情を吐き出し続けます。

〈もう消えたいよ、この世界から……〉

私の感情は、私の声を通じて、アバターの『ネクラ』ちゃんにも伝わっていききました。

『ネクラ』ちゃんは、がくりと項垂れ、両目からポロポロと涙を零していたのです。

〈誰にも会いたくないし、誰にも見つかりたくないよ……〉

『さな』

〈私がダメだから! 私がバカで何もできないから!〉

『さな』

〈家族とも友達とも全然うまくやれてなくて!〉

〈今もこうやってアイちゃんに頼り切りで何一つ自分で選んでない!!〉

〈私は迷惑をかけるだけの、邪魔なだけの人間なの……〉

『さな』

今思えば、八つ当たりだったと思います。

アイちゃんは何かを言いたそうでしたが、それを遮って私は訴え続けていました。本当に、アイちゃんにはいけないことをしたと思って、反省してます……。

けれど、でも……当時の私は、どこかで爆発させないと、本当におかしくなってしまうので。頭が狂ってしまいそうで。誰かを平気で傷つけるかもしれない……!!

そんなことになったら、本当に嫌で、嫌で嫌で嫌で仕方なくて……!!

〈だからアイちゃん、私を……〉

〈くるみ割り人形の……彼岸の偽町に、連れて行ってください〉

『……………』

アイちゃんは黙りこくったまま。

けれど、その瞳は心配そうに『ネクラ』ちゃんである私を見つめていました。

『分かりました』

〈……アイちゃん?〉

『少し、時間をください』

そういうと、画面が変わり、ネクラちゃんである私は、外に放り出されてしまいました。た。

その後、アイちゃんのお屋敷に訪問しても、何度話しかけても。

——アイちゃんからの返事は、ありませんでした。

☆

——アイちゃんを怒らせてしまったかもしれない。

そんな気持ちだが、一週間くらい続きました。

この間、アプリを起動してアイちゃんのお屋敷に行つても、門は締め切りのまま。何度呼びかけてもアイちゃんから返事はありませんでした。何

どうしよう。

アイちゃんに嫌われてしまったら、私は本当に一人ぼっちだ……！

あの時、私が八つ当たりしたからだ。アイちゃんが言いたかったことをちつとも聞かなかったからだ。無茶苦茶なことを頼んだからだ。

色んな後悔の気持ちぐるぐると頭の中を駆け巡つて、夜も眠れないし、何も手に付かない日が続きました。

全部、私が悪かったんです。私がバカだから。ダメな子だから。

だけど、せめて一言くらい、返事が欲しかった。今も元気にしてるよ。大丈夫だよって。私を安心させてほしかった。

そうでないと、私はもう生きていく自信がありませんでした。

お願い、アイちゃん。私に伝えて……!!

そう祈るような気持ちで、ネクラちゃんとなった私は、今夜もアイちゃんのお屋敷に足を運びます。

びつくりしました。

いつもは締め切りだった門が開いていたからです。もしやと思い、中に入ると、アイちゃんが普段と変わらない表情で私を待っていました。

『お久しぶりですね。さな』

〈あの、アイちゃん、この前は、ごめんなさい〉

〈私、おかしくなっていた。頭が狂って、パニックになって、アイちゃんに酷いこと言つて、傷つけた〉

〈本当にごめんなさい〉

『もう、さなが気にする必要はありません』

〈え〉

『もう、私に会う必要はありませんから』

〈それって、どういう……〉

『さな』

『さなが教えてくれました』

『こねこのゴロゴロ』

『ゴロゴロが大きな鳥に乗って、別の動物の街に行くという話』

『私は今でも、その話が好きです』

『だから……』

『私は、あなたにとつての、鳥になりたい』

〈アイちゃん……？〉

アイちゃんは吹き出しでそう捲し立てると、最後に一言、私に伝えてきます。

『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』

『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』『あなたを救えるかもしれない。この人に会ってみてください』

私はビツクリして、自分の目を疑いました。

バッグが起きたんじゃないかと思つて、スマートフォンを電源を入れ直して、再びアプ





アイちゃんの吹き出しが、画面いっぱいを覆い尽くしました。

示されたのは、ある住所。知らない場所にある、知らない建物。

一体、アイちゃんは何を言いたいのかが、さっぱり検討も付きませんでした。

私は「人が嫌い」って言ったのに……。

私の友達はいちちゃんだけでいいって教えたのに……。

そのアイちゃんが、誰かに会えと、私に言うなんて……。

でも、アイちゃんの言うことに間違いはありません。

いつだって、あの子は私に正しい答えを示してくれましたから。

きつと、この一週間、アイちゃんなりにずっと悩んで、悩み抜いて見つけてくれた正解なんだって……確信しました。

翌日。

私は学校には行かず、家族にも何も言わずに。

意を決して、アイちゃんが示した場所へ向かうのでした——。



向かった先へは、アパートがあつて、先生が居て。

——つて、環さん。「それから、それから!」つて、テーブルに身を乗り出さない  
てください!?

……ごめんなさい。環さんが期待してるネタは、ありません。

あの後、私は先生に頼み込んで居候して、キュウベえと出会つて、魔法少女になつて、  
今に至るといふ訳で、本当に何も無いんです。

え、ええ!?! いえいえ、大丈夫ですよ。謝らないで、気になさらないでください……。  
今日は環さんと話せて、とても楽しかったですから。

はい!

連絡先、交換しましょう。あ、友達登録の仕方が分からない? えつと………はい、  
できましたよ。

……いえいえ。今日はありがとうございました。

また、よろしくお願いしますね!

お疲れ様でした。  
じゃあ、また。

## FILE #91 二葉さな 6話 「小説家と迷い猫」

——その少女、二葉さなは突然うちにやってきた。

「お、お願いします……！ 助けてください……！」

「ダメ」

玄関先で。

僕はきつぱりと、少女にそう答えてやった。

子犬のような愛らしい瞳に大粒の涙を浮かべて、90度のお辞儀をして、涙声で必死に懇願しているのにも構わず。

「そもそも、何があつたんだ？」

「実は……」

かくかくじかじか、というヤツである。

これは、今更説明しても冗長なだけなので、割愛させていただく。

……メタな話はさておくとして、確かに彼女の家庭環境の過酷さは、僕にとって同情に値するものだった。

しかし。

「君、年はいくつだ？」

「13歳です」

「じゃ、ダメ」

「ど、どうしてですか……!?!」

どうしてもなにも。

草臥れたアラサー男である僕と、13歳の思春期少女が一緒に居たらそれだけで通報ものである。こうして玄関先で会話してる間も、周りの住民に見られやしないかと、内心ヒヤヒヤしたものだ。

可哀想だとは思いますが、とつとと帰ってくれ、というのが、僕の願いだ。

「もう、お兄さんしか、頼れる人がないんです……!」

少女は土下座して僕の服に縋りつく。

やめてくれ、とつい叱りつけそうになったが。

「そうしなきゃ、アイちゃんとの約束が……」

「アイ——!?!」

その名前には、覚えがあった。

僕はSNSアプリ「ATUM—Community」を利用している。

元々興味は無かったのだが、担当編集のヨツシー（※吉田）が先生も作品を宣伝してくれないと困ると煩かったので、渋々登録することにした。

サンシャイン通信社製にしたのは、最近、老若男女問わず利用者数が急増しているとかで各メディアが注目しており、影響力も高いだろうと踏んだからだ。

始まりは一週間前。

「アイ」というアカウントが送ってきた、一件のダイレクト・メールから。

明らかにネットで拾ってきたと思われる、解像度の低い、若い女性の顔写真アイコン。「暇なら、私と会いませんか?」という、ひねりもへつたくれも無い文章。

最初は、いつものスパムメールか情報商材屋の手先だろうと思い、即ブロックした。

しかし、「アイ」はすぐに新しいアカウントを作って、僕にまたダイレクト・メールを送ってきた。全く同じ名前、しかし全く同じ文章。これは新しいタイプだ——なの

で、僕はすぐにブロックする。そして、アイは全く同じ名前の新しいアカウントを作り  
……………後は言うまでも無い。

この一週間、無限ループというヤツだ。

ブロックしたアカウントを確認すると、50件くらい“アイ”が並んでいる。まるで  
ホラー小説か映画の始まりみたいだ。今後執筆のネタに使えるかもしれない。

……そんな僕の思惑はさておき、彼女が来たことで“アイ”の狙いが分かった気がし  
た。

アイが僕に会いたかったのではない。

アイは僕を誘き出して、“この子と会わせかけた”のだ、と。

……とは言え、まさか、向こうからうちに来るなんて、全くの予想外であったが。

「アイとは、もしかして、『君の銀の庭』のことかな」

「!? どうして、それを……っ?」

「まあ、勘というヤツだ」

僕はしゃがみこんでそう言うと、少女は顔を上げて驚いていた。

この時の僕はもう、少女に一切の嫌悪感も抱いていなかった。

話題の最新AIが引き合わせてくれた“運命の出会い”とやらに、ワクワクしたから  
だ。



小説家としての血が騒ぐ。こんな体験をしたのは恐らく、世界で自分と彼女の二人だけ——つまり、今後の執筆のネタにするには最適だった。

☆

そんな訳で僕は彼女をしばらく匿うことにした。

ただし、二日だけだ。

当然だろう？ 僕だって生活がある。赤の他人の家出少女と一緒に生活するアラサー男なんて誘拐犯と間違われても仕方なし、だ。当然、家族は搜索願いを警察に届け出してる頃だろうし、逮捕は意地でも避けたい。

「もし、ずっと過ごしたいのなら条件がある」

条件？ と彼女が小首を傾げたので、僕は心を鬼にして言つてやる。

「君、好きなものは？」

「えっ……？」

「今まで生きてきた中で、一つや二つぐらい、ハマった作品はあるだろう？ アニメや漫画、小説とか映画とか……なんでもいい」

「えつと、『こねこのゴロゴロ』、です……！」

「じゃあ、この二日間の内に、その作品の魅力を纏めた資料を作成し、僕に提出してくれ。合格すれば君は僕のアシスタントとして、気が済むまでここに居ていいが……不合格なら即刻出て行ってもらおう」

「っ……！」

む、と彼女は口を結び、目に涙を浮かべる。

僕だって可哀想だとは思いますが、自分の人生を犠牲にしてまで人助けしてやるほど人情家じゃない。いや、寧ろ、そんな人間はこの世に一人も居ないだろう。

（所詮は中学生だ、大したものには創れない筈……）

実はこの時、僕は最初から彼女を「二日で追い出す」と決めていた。

何を提出されても、NOを突き付けるつもりだった。

人の世は優しくくない。僕も彼女をずっと養い続ける程の、精神的な余裕も費用も無い。世間の無情さをよく勉強してもらって、家に帰って貰う。

それが、今の自分が、この少女にできる最大限の「大人の務め」だと思っていた。

☆

その筈だったのだが、誤算だった。

資料作成のルールは特に定めなかった。

何ページでも構わないし、うちのパソコンや本を参考にしてもいいし、図書館やネットカフェで作成しても構わない、必要なものがあればお金も渡す、と。

「これは……っ？」

二日後。

ネットカフェから帰ってきた二葉さなから、提出された紙の山を見て僕は面食らった。

ざっとパラパラめくるだけで、50P以上はある。

「これ、全部『こねこのゴロゴロ』……?」

「はい、昨日ネットカフェで全話見直して来ました」

「え……? いや、あれ、調べたけど2000話あるよね……? 時間足りなくない……?

?」

ちなみに。

1話約15分×2000回||計30000時間||20日と20時間である。

「無理だよな?」

「あ、ごめんなさい……。全話っていうのは嘘です。20分の1の100話を4倍速で鑑賞しました……」

「だとしても6時間はかかるだろ……。いや、凄いなこれは……」

とりあえず、僕はパラパラと資料をめくってざっと流し見る。

「ふむふむ……なるほど……。この話の台詞が、この話の伏線にこう繋がっていく訳か……それによってワンダホーの父が……! うん……!」

「ど、どうでしょうか……?」

二葉さんの熱視線を感じながらも、僕は資料を熟読した——

そして、評価する。

「まだまだ未熟だよ。全体的に粗削りだし、評論も感情的で客観性がない。何より無駄

な比喻が多すぎてちつとも読みやすくない」

「っ!？」

瞳孔を開いて愕然となる二葉くん。

心無しか、顔から血の気が引いているようにも見える。

そこまで驚かなくても、と思い、僕はこう付け加える。

「だが、それはプロの目線で見た場合だ。中学生としては、とてもよくできていると思う」

「じゃ、じゃあ……」

「ああ、君をアシスタントとして採用する」

「っ!!」

彼女の顔がばあつと輝いたのを、今でも鮮明に覚えてる。

好きなものに対しての情熱、特に『こねこのゴロゴロ』へ向ける熱量は非常に凄まじいものだった。常人の枠を超えている——つまり、才能がある、ということだ。埋もれ差すのは惜しいと思った。

思ってしまったからこそ、僕は彼女と過ごすことに決めた。

彼女の才能を、伸ばしてやりたい。自信を付けて生まれ変わる彼女がどんなものか、見てみたいという、欲求が湧いてしまった。

——まあ、気の迷い、というヤツだ。

☆

教訓、人間にとって気の迷いはクソである。

気が迷ってたら、動いちゃダメ。

彼女を部屋に住まわせてから、僕はすぐに後悔した。

何せ、いつでも逮捕されるリスクを背負ってしまった訳だ。

なお、部屋の広さは2DKあり、二人で住むには窮屈じゃない。しかし、築40年程の木製のアパートだ。壁からはテレビの音やら話し声は普通に聞こえてくるし、天井からは足音が普通に聞こえてくる。

つまり、僕以外の誰かが僕と一緒に住んでいる、ということがアパートの皆に知れ渡るの自然の理だった。

暫くの間、僕はアパート中を回り、皆の疑いを晴らすのに必死だった。

幸い、自分には親戚に姪っ子（兄貴の子）がいたので、その子が遊びに来ている、とか、自分の下で国語やら、文章の書き方を勉強しに来ている、とかあれこれ適当なことを言つて誤魔化しておいた。

とはいえ、端から見れば僕は、危険人物そのものである。

アパートの皆様、特に年配のおばさま方から、キツイ監視の目を四六時中向けられているのは、精神的にかなりきつかった。

相当グロッキーになつていたらしく、体重も3キロは落ちた。

一方、二葉さなくんはというと、よく頑張つてくれた。

基本年中不健康な僕の為に、不慣れながらも健康的な料理を、毎日ネットで調べながら作つてくれたし、掃除だつて年中不衛生な僕の為に、毎日してくれた。

そしてアシスタントとしても優秀だった。

僕の目間違いは無かった。彼女は興味を抱いたことには、人の倍以上に力を発揮する。『こねこのゴロゴロ』を話す時の彼女が非常に利発的だったように。彼女は気に入った本の内容は次々と吸収して、自分の知識としていった。記憶力も大変良く、僕が尋ねると、ページの行目です、と打てば響くが如く、ポンと出てきたのでピツ

クリした事がある。

そして、積み込まれた知識を、僕の為に存分に活かしてくれた。

……ところで、お気付きだろうか。

今、彼女に関しての説明で、「僕の為に」が三回出てきた事に。

決して僕が自惚れてる訳じゃないし、彼女が僕に対して、異性としての好意を抱いている訳じゃない。

ただ、普通に振舞っているように見えて、彼女はいつでも震えているのだ。

両親と兄弟からそうされてきたように。いつか、失敗すれば、ここを追い出されるかもしれないと、怖がっているのだ。

だから彼女は、僕に尽くしている。

嫌われないように。

つまり、ここにいる間は、「僕の為に」生きる事が全て、といっても過言ではない。

僕としては、彼女はもっと自信をもって生きていいと思う。

だって、よくできた子だと思うから。

彼女の家族が彼女をどう見ていたのかは知らないが、正直、邪険にする理由が分からなかった。特に父親に関しては、馬鹿娘だのノロマだの散々罵ってきたそうで、変形するまで何度も顔をブン殴る妄想をするぐらいには、怒りが湧いている。



しかし。

『水名の生まれなくば人に非ず』という悪しき伝統が起因しているのではないか、とは思う。

水名区の古い家の多くは、未だにその考えが根付いている。

多様性だの協調性だの国際交流だの、LGBTだの男女均等だの格差是正だのが叫ばれてる昨今で、斯様な選民思想及び排他主義を罷り通そうとする精神性は正直時代遅れも甚だしく、僕からすれば噴飯ものだった。

しかし、彼らはそれが正しいと信じて疑わない。

自分達が最早、成功者でなくても、支配者層でなくても構わない。

二葉さなくんは、そういう連中にまんまとやられたのだ。

二葉の血が無く、水名の生まれですらない彼女は、差別の対象となり、排除されてしまった——というのが個人的な見解である。

無論、義父も義兄も最初から水名性を出していた訳じゃなく、異なるものを受け入れようと彼らなりに意識して抑えてきたとは思う。しかし、義務教育の如く脳に染み付いたものには逆らう術は無い。つまり、彼らの水名性は無意識の内に表面化していった訳だ。

せめて、母親のように上手く立ち回れていれば。

弟のように、割り切って家庭と離れば、違う結果になっていた筈――。

☆

「『こねこのゴロゴロ』ってさあ……」

「……………」

「裏のテーマがあるよね。『人間社会の闇』を可愛いキャラクターで再現したっていうさ  
！」

「そうですね！そうですね！」

「120話でワンダホーのオヤジが家族を捨てて自分探しの旅に出るんだけど、57話  
後にフクロウ盗賊団のドメスに喰い殺されてたつてのをワンダホーが知ったの、ほんつ  
と衝撃的だったよね！」

「そうですね！　そうですね！」

「そして、親父が遺した手紙をワンダホーが読んで、とうとう和解こそできなかつたけ

ど、心では親父を許したの。あれ、大人でも泣かせに来てるよね！」  
「そうです！　そうです！」

「他にも、ゴロゴロの親友のミケジローが、金持ちのパーティー呼ばれて以降、すっかり影響受けちゃって、頻繁にホームパーティーやるようになるんだけどそのせいでお金が底を尽きそうになっちゃって……パーティーに呼んだ主人公や友達に、珍しいけど怪しいきのみやキノコを良いものだって嘘付いて高額で売る場面とか、あれマルチじゃない？　ほんつとキツかったよね!？」

「そうなんです！　でもそこから主人公と和解にいく展開がまた熱いんです！」  
いつの間にかすつかり毒され、ゴロツター（※こねこのゴロゴロオタク）になっていた僕であった。

……と、まあ、こんな風に。

二葉さなくんとの日々は、穏やかに過ぎて行った。

恐れていた警察も姿を見せず、あつという間に時間が過ぎて行った。

意外に思われるかもしれないが、僕は友人が多い。

そして全てが「情報屋」と言われる者達だ。最近、外に出る事さえ、億劫になっている僕に代わって、面白そうなネタを集めて、教えてくれている。

実は二葉さなくんの今後は、彼らに任せていた。

彼らなら、二葉さなくんが素性を隠しつつ、平凡な生活を送れる場所を見つけてくれるに違いない、と。

ちなみに、二葉さなくんはこのままずっと、うちで暮らす気満々なようだが……僕からすれば、そういう訳にもいかない。何度も言うが逮捕のリスクがあるからだ。いつか出て貰わないと困る。

———そう思いつつも、僕自身、二葉さなくんとの平凡な日常に、充足感を覚えていた。

このままでも良いのかもしれない、彼女の気が済むまでは———そう思い始めていた。

ヨッシーがうちに来るまでは。



二葉さな 7話 「迷い猫は愛されたい」

そんな訳で。

僕と二葉さなくんの生活は健全で、平和だった。

皆さまが危惧されるような事態は決して無かった、と断言しておこう。僕の身の為に。

とは言え、シヨツキングな出来事が無かった訳じゃない。

二つ、順を追って説明させて頂こう。

まず一つ目——

その日の夕方。

僕が家に帰る足取りは酷く重かった。

二葉さなくんに「この事実」を話すべきかどうか迷っていた。考えるだけで、只でさえ重い頭痛が更に悪化してきて顔面が押し潰されそうだ。

午前中、珍しく外出した僕は、行先の喫茶店で密会した友人の「情報屋」の一人から、とんでもない話を耳にした。

実は彼には二葉さなくんの実家——『二葉家』の様子を監視してもらっていた。報酬の支払いは高かったが……もし、家族が長女を「本気で心配して」、搜索に動き出せば、僕はさなくんを説得して二葉家に帰ってもらうつもりでいた。

つまり、それで僕は、社会的信用を失うリスクを完全回避できるし、親族の事で悩んでいたさなくんも、安心するのでは、と踏んだのだ。

しかし、頼んだ情報屋曰く。

いつまで経つても二葉家が、長女の搜索に動き出す気配は無かった。

腹立たしい事に、一家全員、普段と変わらぬ様子で過ごしているそうだ。

まるで、さなくんが最初から存在していなかったかのように……。そして、僕は衝撃的な情報を耳にする。

「……………ただいま」

僕が玄関を上がると、和室のちゃぶ台の上で突っ伏していたさなくんが見えた。寝ていたのだろうか——僕の声にハッと覚醒した彼女は涙目を指で擦りながら、

「あ……………おかえりなさい……………」

と、力なく返事した。

いつもより元気が無い。

相貌も普段より色白に見えた

そりやそうだ。年上の、しかも異性との共同生活なんて、気を遣って当然だろう。現に、僕は彼女に迷惑を掛けてばかりいる。疲れが溜まるのも当然だ。

この時は、そう思っていた。

「あの、さなくん。実は……………」

僕は意を決した。

ところが、さなくんも

「先生、実は私……………」



意を決して、何かを言おうとし始めた。  
そして僕たちは、意気ぴつたり言葉が発する。

「君の搜索願いが、出されて無いんだ」

「捨てられてしまいました」

「……っ!？」

驚かれたことだろうか？

僕も驚いた。

同時に、腹の底から怒りをブチ撒きたい気持ちになった。

その日の朝、僕が出かけた直後に、彼女の端末にそのメッセージは届いたという。

さなくんの父親から。

『さいなへ』

昨日、お前のことについて

みんなと話した。

私たち家族はこれからお前への対応を変える』

『お前はもう、家族から外れているものと考えてる』

『お前は二葉家の人間に相応しくない。

お前の行動全てがどれだけ家名を汚したか分かっているのか？

同じ人間として恥ずかしい。

だから、お前を家の者として扱うことをやめる』

『お前に関わってる全ての時間が勿体ないからだ』

『もう何も期待はしない。

その代わり、金輪際、関わることもしない。

お前はもう、私達の眼には映ってない。

勝手に家を飛び出したお前が全て悪いんだ。

もう家に帰ってこなくていい。

返信もしなくていい。

もうお前は自由だ。

自分でその生き方を選んだのだからな。

後はもう勝手にしろ』

『水名の生まれなくば人に非ず』。

二葉父の世界観は、神浜市水名区で完結している。

故に、外様のさなくんは排除。

恐らくそういうことだと推察していたが、まさかダイレクトに仕掛けてくるとは。

正直、理外を超えていた。

同時に、この二葉父という男は、救いようもない馬鹿垂れだと思った。最早、異次元に生きているとしか言いようがない。

だって、そうだろう？

こんな、『育児放棄』を堂々と文章として残してしまったのだから。

論理性も、合理性も欠片も無い。

学者らしい説得力も、富豪らしい品性も感じられない。

ただ、お前が気に食わないから捨ててやるという、酷く浅ましい憎しみの感情だけが存分に発露された文面。

これをさなくんが、然るべき機関に提出するか、SNS上にアップすれば、二葉父はどんなリスクを負うだろうか？

……子供でも、そんなことぐらい想像できる。

だが、彼の稚拙極まる言葉で、さなくんの心が大きく傷ついてしまったのは事実だった。

俯いたまま、ポロポロと涙を落として嗚咽を挙げる彼女に、僕は何て言葉を掛けていいか分からなかった。

『バカな親の言う事なんて気にするな』

『親がそういったんだから自由に生きればいいじゃないか』

——という言葉が一瞬、喉元まで出かかったが……その時のさなくんに伝えるのは違う気がして、抑え込んだ。

だって、彼女は、今でも家族の事を愛しているから。

親の愛を、ずっと求めているから。

ここまでされても、そう願う彼女の気持ち、僕には、到底理解できなかつた。

☆

二つ目——

別の日。

・『ヨッシーが家に来る』

直感でまずいと僕は思った。

ヨッシーとは、僕の今の担当編集者の吉田女史（※バツ1、独身）のことである。ちなみに「ヨッシー」は、僕が心の中でのみ呼んでる綽名だ。

生粋のミステリーオタクで、その人間観察力と推理力たるや、並の探偵や刑事が裸足で逃げ出す程の実力者だ。これまで、彼女が担当した作家で、浮気や不倫等の隠し事がばれて泣かされた者は数知れず。

基本的に、彼女との打ち合わせや原稿の引き渡しは、知り合いが経営している喫茶店

で行っているのだが……、この日に限ってヨツシーのヤツ、直接僕の部屋まで原稿を取りに来る、とか言いやがって……!!

そう。

ヨツシーが家に来るときは必ず、〃何かを察した〃時でしかない。つまり、さなくんがうちに住んでる事がバレた可能性がある……!!?

☆

——数時間後。

「じゃ、私は戻りますんで」

「ああ、お疲れ様」

玄関先で僕に向かって頭を下げるヨツシー。その動作で、紫のショートカットヘアが

さらりと揺れた。

「くれぐれも、不埒な噂には気をつけてくださいよ？　先生は売れてるんですから」

「売れてる」の部分わざわざ強調して、突き刺すように言ってくるのが実にヨッシーらしかった。

「はいはい。特に問題無いとは思うけど？」

「それにしても姪御さん、随分長く住んでますよね？　学校はどうしてるんです？」

「そういう時期なんだよ。あんただだって中学生の頃イジメに遭って、一年ぐらい休学してフリースクールに通ってただろ？　僕だつて同じさ。親父と兄貴の傲慢さに嫌気が刺して、田舎のばあちゃん家で、ずっと文章書いてた。つまり、誰だつて一度は社会から離れないと自分を見つめ直せないって訳さ」

「ふーん……」

ヨッシーはあからさまに、罰の悪そうな顔をした。

こいつが、その鋭い洞察力で作家の弱みを握ってきたように、僕も彼女の過去を調べ尽くして弱みを握っている。

そこまでしなれば対等に渡り合えない。

「……ところで先生、こんな話をどこで存知ですか？」

「ん？」

「水名女学園で、中等部2年の子が一人、不登校になっっているそうですよ」  
「よくある話だろ」

「水名女学園は、全国平均で見ても登校拒否生徒はほぼいない優良校です。学校に行きたく無くなるなんて、よっぽどの事情があったに違いませんよ」

「へえ……」

僕はわざと興味を持った風な態度を装った。

「生徒の名前は二葉さな。水名区でも五本の指に入ると言われる名家の令嬢です。その子は長い間、自宅にも帰っていないそうです。父親はカンカンで勘当当然だとか」

「ふーん。金持ちってのは色々根深いんだねえ」

「確かその子が——」

☆



全くヨッシーのヤツめ。

あんなのだから、旦那に浮気されるのだ。

しかも離婚してから、僕への風当たりが日に日に酷くなってきている。まるで世界の男という種族を絶滅しなければ気が済まない過激派フェミニストのようだ。

しかし――

『学校に来なくなっただ日は●●月●●日、偶然にも先生が姪御さんを保護した日付とかなり近い。……こんな偶然、あるんでしょうか？』

思い出すだけで、只でさえ悪い胃がキリキリしてくる。

ヨッシーめ。実にムカつくが、やはり勘が鋭い。

しかも、

『髪色はライトグリーン。質感はふわりとしていて、ツーサイドアップに結んでいたそうです。……仕事場に落ちてた“アレ”と、よく似てますよねえ？』

間違い無くヨッシーは、僕を疑っていた。

というより、彼女の中ではもう「誘拐犯」として確定されていた事だろう。僕がもう、女性に興味を抱けないのは知ってる癖に。

洋室にヨッシーを招いた時、最初に発見されたのが、さなくんの「髪の毛」だった。二人して、塵一つ無いほど入念に掃除したのに。

『二葉さな』の痕跡をうちから、完全に消し去ったのにも関わらず。

部屋に足を踏み入れた瞬間にそれを見つけ出すヨッシーの「観察眼」の鋭さたるや、正に名探偵並だと評価せざるを得ない。

……って、おいコラ。

その異能は本来、男を見る目に使うべきでは無いか……!?

脳内ノリツツコミはさておき。

勿論、そういうのが発見されても困らないように、僕は対策を講じていた。

昔、旅好きの旧友から貰った「お守り」だ。

球飾りの下に馬の尻尾の毛で作られた房が下がっており、偶然にもさなくんの髪色と同じく、ライトグリーンに染められている。

僕はそれをいつも肌身離さず持つていて、房から一本抜け落ちたんだらう、と言って誤魔化しておいた。

「……もういいよ」

ふう、と一息ついた後、僕は隅にあるダンスに向かって声を掛ける。

自然に、最下段が、ゆっくりと引き出された。

「……………っ!?!」

中からひよこつと小さくくんが頭半分を出して、きよろきよろと周囲を警戒している。

《座敷童》というのがリアルにいたら、きつとこんな感じなのだろう。

平気だよ、と僕が言うと、と恐る恐る小さくくんは引き出しから抜け出した。

「あ、あの、ありがとうございしました。私のせいで、迷惑かけて、ごめんなさい……」

「いや、いいんだ。ただ……」

この時の僕は無表情だったが、実の所、ヨツシーのせいで腹の中はかなり煮え立っていた。

つまり、イライラしていたのだ。

だから、縮こまるさなくんに対して、つい、こんなことを口走ってしまったのだと思う。

「もうちよつと、しっかりしてくれないと困るよ」

「……………っ!」

なるべくやんわりと、僕はそう言ったつもりだった。

でも、さなくんの心には、ぎくりと衝撃が走ったようで。

「何かあった時、迷惑を被るのはこっちなんだからさ」

「っ!!!」

うっかりそう言ってしまったことを、今でも後悔している。

『迷惑』なんて言葉は、間違っても使うべきじゃ無かった。それが彼女のブロックワードだって、分かっていた筈なのに……。

さなくんは、かなりショックを受けた様子だった。

瞳孔を開いたまま、顔面から血の気が引いていた。今にも崩れ落ちそうなほど、両膝がガタガタと震え始めた。

僕はしまったと思ったが、もう遅かった。

「……さなくん、大丈夫か？」

「……………いや」

僕は心配になって、肩を掴もうとしたが、彼女に振り払われた。

そして、

「っ……………」

「さなくん……、さなくん？」

僕から目を逸らし、さなくんは玄関へ向かってしまった。

僕は何度も呼び止めようとするが、彼女は決して振り返らず、外へ出てしまった。

携帯端末をうちに置いたまま、どこか、知らない所へ。

☆

二葉さな 8話 「あなたのためにできること」

——翌日の朝、さなくんは帰ってきた。

今まで見せたことの無い、最高の笑顔を張り付けて。

「……何か有ったのかい？」

不気味だった。

僕がそう尋ねると、彼女は澆刺とこう答えた。

「先生、もう迷惑掛けませんから」

「あの子は、魔法少女になっていました……」

あの時の僕は、ただシヨックで仕方が無かった。

「魔法で『透明人間』になれると、誇らしげに語っていました。これで、誰が来ても、生を困らせることは無いから、安心して、と……」

けれど、さなくんの喜ぶ顔を見ていたら、それを表面に顕すのは躊躇した。

だから小さく微笑んで、良かったね、と彼女の頭を撫でた。

その後は、いつも通りだ。

今この時まで、変わらない、退屈にも感じる日々を彼女と共に過ごしてきた。

——僕は今、中央区の『みかづき荘』に居る。

大広間のソファに座って、人と向かい合っている。

対面側のソファに座って話を聞いてくれているのは、かの七海やちよである。

今日、僕は彼女に頼みがあつて、此処に訪れた。もちろん、二葉さなくんの事で。

「……………」

「……………」

ちなみに、僕の両隣に座っているのは、元ミス神浜だった可憐な美貌の女性と、筋骨隆々の小山のような印象を受ける褐色肌の外国人だ。それぞれ『良い笑顔』を張り付けて、僕を睨んでいる。

逃げられないように。

英雄様に無礼な真似を働いたら、即座に獲つて喰えるように。

前門の虎、後門の狼という奴だ。猛獣の檻に餌兼狩りの練習台として放り込まれるヤギか羊の気持ちちを、始めて知った気がした。こわい。

「……………あの子が『僕の為に』そこまでする子だとは、思っていなかった」

気を取り直して、僕は話を続けた。

後悔は、してもしきれなかった。

「……………世界基準で見ても、日本の魔法少女の平均寿命は特に短命と言われているもの、ねえ……………」

右隣の大男が見た目に似合わぬ女性のような口調で、ぽつりとそう零した。

確かにそれもある。だが……………



「それ以上に、何でも叶えられる『願い』があれば、それは、自分の為に使つて欲しかった……」

さなくんは愛されたかつた。家族に。両親に。

例えどんなに心の醜悪な鬼畜の如き集団であろうとも、彼女にとっては大切な家族に変わりは無く、彼女の本心からの望みはそこに有る筈だつた。

なのに……

「彼女の願いは、命は……僕の為に消費されていいものでは無かつた……。こんな、僕の為に……。僕なんかの為に……。っ！」

僕は俯き、齒を喰いしぼる。膝の上に置いた握り拳をわなわなと震わせて、震えた声でそう訴えた。

やり場の無い怒りが。自分自身への憎悪と侮蔑が、今にも噴出するかつてぐらい心中で荒れ狂つていた。

「……失礼ですが」

徐ろに七海やちよが口を開いた。

ハツとなつて、僕は頭を上げる。

「お話を聞く限り、彼女は貴方との暮らしに満足している様子です。ならば、貴方の下で、今まで通りの生活を続けさせてあげる方が、彼女にとっての幸福なのでは？」

七海やちよは穏やかにそう言った。

言外に、僕に対しての忠告も混じっていたようなニュアンスだった。

『貴方が彼女を拾ったのだから、最後まで責任を持って面倒を見る義務が有る』、と。確かにそれは最もだと思っただけ、正論だった。

しかし、

「そういう訳にもいかないですよ」

「……………どうしてですか？」

義務とか責任を放棄して楽になりたかった訳じゃない。

僕なりに、覚悟を決めて、ここに来たのだ。

二葉さなくんの、今後の人生を護る為に。

「これを、見てください」

僕は上着のパーカーの胸ポケットから、それを取り出した。

小さな袋には、乾燥した葉っぱを砕いたような茶色の物体が密封されている。

「……………これは……………」

僕を取り囲む三名の視線が急に鋭くなった。

僕は、大きく息を吸い込んで、はつきりと“こいつ”の名前を口に出す。

## 「大麻です」

☆

僕は20代半ばから、難病に犯されていた。

慢性的な胃腸の激痛に悩まされており、日常生活を続けることすら困難な状態だった。起き上がることさえできない日もあった。

そんな時、旅好きの旧友が、こっそり僕にくれたのが、「こいつ<sup>大</sup>麻<sup>麻</sup>」だった。メキシコ人の知り合いに、僕の病気の事を話したら、恵んでくれたものらしい。

大麻は確かに、凄かった。

少量でも燻して煙を吸い込むだけで、痛みは消失し、日常生活も問題無く行えた。同時に頭も冴えてきたようで、作家業も燃えるように専念することができた。自慢じゃないが、お陰で、それなりのヒット作も生み出した。

しかし……

「自分でも分かるんですよ。こんなのは所詮、誤魔化しに過ぎない」

年々、僕の身体は弱ってきている。

食事は徐々に細くなり、体重もかなり減少した。最近は嚙下機能も低下して、むせ込むことも増えた。

性欲もとうに消失し、若い娘を見ても何の感情も抱けない。男としては死んでも当然だ。

倦怠感も酷かった。頭の上に20キロぐらいの鉛を置かれたような重さを四六時中感じている。近所のコンビニまで、五分間歩くことさえ嫌になるほどだ。

つまり……

「もう、長くはありませんよ」

近い内に、燃え尽きる——いや、枯れ果てる命だ。

そんな人間の下に、二葉さなくんがいる必要は無いと思った。

「……………なぜ、然るべき医療機関で治療を受けなかったのですか？」

ハッ、と僕は鼻で、英雄様のご指摘を嘲笑った。

今のは大変無礼だが、それを咎める者はもういない。

「『トラ』のようになりたくありませんから……」

「トラ?」

「ああ、＼トラ＼というのは、僕にこいつを教えてくれた、旅好きの旧友のことです。昔、大人気だった映画シリーズの主人公にそっくりだったんで、トラ、と僕は呼んでいました」

そいつは、もうこの世にいない——

トラは僕の大学時代の後輩で、親友だった。

僕とは違い、社交的且つ行動派で、いつも沢山の友人を侍らしていた。周りからは名字にちなんで『ハル』だの、『フーテン』だのよく呼ばれていたが、何故か『トラ』と呼ぶ僕に一番よく絡んできた。

突然ふらりと一週間ぐらい行方知れずになったかと思うと、日本全国の名所とか、海外を旅してきたとかいって、写真をよく見せてくれた。独りじや寂しい、とかいう理由で僕も色んな所に連れまわされた。お陰様で、トラとの思い出は、今でも執筆業の糧になっている。

でも、あいつは——

「家業を継がずに、親父の葬式にも出なかったのが、祟ったのかもしれない」

『自分が死んでも良い場所を探している』

それが生前の、トラの口癖だった。耳に胼胝タコができるほど、聞かされた。

それなのに――

「あいつは、交通事故に遭いました……」

僕が看取りに行くまでも無く、トラは死んだ。

最期に、あいつが何を思っていたのかは分からない。

だが、苦痛で、無念で仕方なかった筈だ。

5分も椅子に座れなかったような奴が、最後は起き上がることをさえできずに、病院の白い天井と睨めっこ。

それでもあいつは旅がしたかった筈だ。体がポロポロでも、骨を埋めても良い場所を見つけて、どうにかそこまで辿り着いて、人生の幕を下ろしたかった筈だ。

「葬儀の日に、僕は誓ったんです。自分はああなりたくない。最後まで自分の自由に生きてやる。満足な気持ちのまま、自分の好きな場所で死んでやるってね。その為なら、卑怯な手段を使っても構わない、と……」

「……………」

「僕の難病はモルヒネでは効き目が薄い。日本の医療では僕を満足させることはできない」

「……………」

だから、僕は大麻を吸い続けた。

間違っていると言われても仕方ないが、それが僕の命懸けの決意であり選択だったのだ。

七海やちよは、静かに話を聞いてくれている。

「……僕はそういう人間なんです。七海やちよさん」

「……………」

だからこそ、二葉さなは僕の傍に居てはならない。居るべきではない。

「このままだと、あの子は僕と一緒に堕ちていくだけです。そして、僕が死んだら、何の躊躇いも無く後を追うでしょう。これは自惚れではなく、確信です」

「……………」

「あの子に、そんな真似をさせてはいけない。あの子はとても『いい子』だ。我慢強く、気遣いができて、すごく頭が回る子だ。あの子は、光差す世界で、真つ直ぐ前を向いて生きるべきだ。そうでなければ駄目だ！ 僕のような下らない人間では無く、貴女のような人と共に有るべきだ！」

だから。

「……僕は、自首します」

僕が持つ全てを懸けて、残された彼女を、七海やちよに託す。

「お願いします！ 七海やちよさん、貴女の下で、二葉さなくんを輝かせてあげてくださいー！」

神にも祈る思いで、深く頭を下げ、懇願する。

「……………わかりました」

「っ!？」

祈りは届いた。僕はまだ、神に見放されてはいなかった。

「本当ですかっ!」

「ですが、こちらにも選択する権利があります。……少し、お時間を頂いてもよろしいでしょうか?」





二葉さな エピローグ 「いま、ここにいるわたし」

— side : 二葉さな

私は……今まで生きて中で最高に緊張していました。

だって、こんなにバツチり化粧したのも、こんなに素敵なドレスを着てオシャレをしたのも、初めてでしたから……。

『七海くん。君が連れてきた少女というのは、本当に“女神”なのかね……?』

『はい。私にはそうとしか、見えませんでした』

『はははは！ 君以上の美しい娘がいるなら正に伝説級だ！ 是非とも、拝みたいものだねっ!!』

少し前に表で、七海やちよさんと、モデル界の名物プロデューサー……? と呼ばれている程の方が話し合っている内容を思い出し、余計に肩に力が入ってしまいます。

七海やちよさんがモデル業を兼任されている方なのは知っていました。

でも、まさか、何も知らない、素人の私を、ファッションショーに“サプライズ”として登場させるなんて……夢みたいです。

まるで、シンデレラになったみたいなきもちでした。

鏡に映る自分が自分だと、未だに信じられません。七海さんは、彼女の知る最高のスタッフを用意してくれて、灰被りの私を、異世界のお姫様みたいに創り変えてくれたのです。

もしかすると、彼女は、本当に魔法使いなのかもしれません。

「二葉さん」

「あっ……」

思っていると、不意に。

七海やちよさんが控室に入ってきて、私は思わず背筋を張ってしまいました。何か声を掛けなきや、と思うのですが、言葉が出てきません。心臓がバクバクして、息が上がってしまっていたからです。

「大丈夫？」

「……………」

「今ならまだ、時間があるわ」

「……………」

嫌なら降りていい。

と、七海さんは暗に私に言っているようでした。

緊張で固まる私を見て、気持ちを感じてくれたのかもしれない。

——あの七海やちよさんがそう言うのなら、それが良いのかもしれない。

——けど、本当にそれで良いのかな。

迷う私の頭に“先生”の事が過りました。

先生は難病に犯されていて、症状を抑えるために、麻薬を使用していた、と七海さんから聞いていました。

……………とても、辛かったのだと思います。

でも、普段の姿を知る私には、とてもそうは見えなくて……、最後まで自分から私に打ち明けなかったのは、大切に思っているからこそその優しさだと、七海さんは教えてくれました。

思えば、締め切りに間に合った時に、裸踊りするのも、無茶苦茶だなあ……って思ってたけど、私に病気を悟らせない為に、無理してくれていたのかな……？

先生は今、病気であることを公表し、警察に出頭したそうです。

彼がその決断をしたのは、七海やちよさんが居たから。

自分に託す為に、先生は全てを懸けてくれたのだと、七海さんから教わりました。

でも、私が英雄様の下で生活することなんて、できるのか、不安で不安で……。

『いい加減自立してくれなきゃ、こっちだって迷惑なんだよ!!』

いつか言われた、漱也お兄ちゃんの良い言葉を思い出してしまい、つい、涙ながらに、零してしまうのです。

「私は言われたことしかできないから、迷惑しか掛けられない」って……。  
でも、七海さんは笑顔でこう言ってくれました。

「貴女は言われたことを、精一杯やりとげようとする、意志の強さがある」

「それはつまり、自分の責任を最後まで背負える、ということよ。私はそこを買ったの」  
「大人になればなるほど、当たり前前が当たり前前にできる人は少なくなる……。二葉さん、貴女が『人なら当たり前』だと思っているそのスキルを、私が存分に活かしてあげる」

言われた事を言われた通りにやる——

そんな当たり前前なのが、私の才能なんだって、七海さんは教えてくれました。

(そうだ……)

二人の事を思い出すと。

自然と震えが止まりました。代わりに胸の中に熱いものが、じんと走ったのです。

(そうだよ……！)

先生は自分の作家生命を懸けて、私をここまで推し出してくれた。

七海さんはこんな私の事を期待して、ここまで連れてきてくれた。

二人は、私を『二葉さな』として、一人の人間として、認めてくれている。

生きていいんだって。だから、自分が信じる道を進んでって、言われた気がした。

そんな二人の思いを、私は、この体と心で背負っている——  
だから。

「私、行きます！」

「よし！ じゃあ、一緒に行こう」

大丈夫、言われた通りにすればすぐ終わるから、と七海さんは笑顔で私に言ってくれました。

だから私も、できる限り、頑張って笑顔を作って、返事します！

「はいっ！」

自分で、自分の覚悟を決めて、私は差し出されたその手を握りました。  
できるだけ、強く。

私の意志が、七海さんに伝わるように——

☆

☆時は少し遡る……………。

— side : 七海やちよ

— 神浜市役所・治安維持部長室

私は、悩んでいた。

二葉さなの事が、まだ掴み切れていないからだ。

そこで、私は、彼女の事をよく知るため、ある人物に連絡することにした。

「……………もしもし」

『七海のねーさんツッ!! I LOVE YOU!!』

繋がった途端に相手は、歓喜混じりの大音声でラブコールと来た。

慣れっこなので、私は適当にあしらった。



「はいはい、ラヴユー」

『あーん！ もーう姐ねえさんつたらノリ悪いーっ!? なーにー、あたしと姐さんとの愛つてさー、そんな味気ないもんだつたっけー?』

相変わらずな「彼女」の様子に、クスクスと笑いながらも、私はあえて意地悪に返した。

「はいはい、らびゅー」

私が通話している相手は、水名女学園高等部の生徒会長——つまり、生徒の中で一番偉い人だ。このはしやぎようからは、とてもそう思えないけど……。

それもその筈で、彼女は神浜市内随一の名門校と名高い水名女学園の、歴代生徒会長の中で、唯一水名区の政治家系の出身ではない。参京区の生まれで庶民——とはいえ、家は老舗の料亭でそれなりの良家——だ。

これはかつて、二葉青磁氏が市政と共に推し進めた、水名区改革の成果だ。

彼女は、現生徒会の中で身分こそ一番低いが、実力と天性のカリスマでトップになった、叩き上げの女傑であった。

ちなみに、私は「お稜さん」と愛称で呼んでいる。

「それはともかく、お稜さん。相談があるんだけど」

『OK、姐さんの頼みならこのお稜、なんだって聞いちゃいますよー? で、なにー?』

「二葉さな、という生徒の事なんだけど……」

私は、かくかくじかじか、と説明した。

要は、不登校に加え家出した中等部の生徒が発見された、という話だが、お稜さんは驚きも困惑もせず、ふむふむと冷静に話を聞いている。

やはり、肝が据わっている人なので、私も安心して全容を打ち明けられる。

「なるほど、ねえ……。で、姐さん的にはどうしたいの？」

そんなこと、決まっている。

二葉さなを、身を懸けて託してくれた「彼」の意志を、無碍にする訳にはいかない。

私には、義務がある。

「私の下で働かせるつもりよ」

『えー？ やめといた方がいいんじゃない？ 姐さんも同じ神浜大学なら知ってるで

しょー？ 今の二葉家の当主ってさー、青磁さんとは違って、すんげえ性格悪いって有名じゃーん？ 面倒くさいことになるよー、絶対ー??』

そんなことは百も承知だ。

だが、相手が誰であろうと、私が動じる筈が無い。

「一人の少女の人生が懸かっている」

『ふ、姐さんならそういうと思ったよ……。分かった。で、何が聞きたい?』

「あの子の能力について」

生徒の“芸”を発掘するの、得意でしょ？——と私が言うと、『芸じゃないからね!?’と、ツッコまれた。

『オホン……。そうだねえ、結構前にその子が疎外されてるって話は、魔法少女部<sup>ウチ</sup>の<sup>精鋭</sup>達から聞いてたよ。だから私が直接、本人に頼んで、中等部の生徒会で働かせることにしたんだ』

「生徒会に……。?’」

その話は初耳だった。

二葉さなは、そのことを彼に言わなかったのだろう。

『書記とか書類の整理とか、よくやつてくれてたつてよ。目立たなかったけど事務能力に関しちや、かなりの優等生だったみたい。ま、前任者がかなりテキストな奴だったから、余計にそう見えたのかも……。このまま生徒会でのびのびやつてくれりゃー良かったけど……。おじいさんが亡くなっちゃったからねえ』

二葉青磁が亡くなってから、二葉家の格は落ちた。

同時に二葉さなに近ず離れずだった一部の生徒達が、攻撃的に接してきた。

「やっぱり、立場による虐めは、無くなった訳じゃなかったのね?’」

『大分減ってきたけど、“水名の生まれ無くば人に非ず”を生まれた頃から磨りこまれ

てる奴は、まだいるからねー。こればかりは私じやどうにも……」

“二葉青磁という加護”が無くなったさなは、その手の連中にとつて最早、外様の人間”としか映らなかつたのだろう。

差別と排除——悪しき風土病の被害に晒されてしまった訳だ。

「対策は打つたの？」

『あんまり酷いようなら、二葉さんを生徒会室に匿うようにつて……考えてはいたんだけどさー。それより前に、学校に來なくなつちやいましたから……』

あたしが知つてるのは、ここまでだよ、とお稜さんに締められて、私は頭を抱えてしまふ。

「うーん……、他に彼女の特徴というか、特技というものは、何か無かつたのかしら？」  
『姐さんも、粘り強いなあー。そうだねえ……ちよつと生徒会の連中と、ウチの精銳共魔法少女使つて、調べてみとくよ。それでOK』

「ありがとう、お稜さん」

『いやいや、代わりに——』

——何か驕つてね☆、と言い残して、お稜さんは通話を切つた。

……後日。

お稜さんの精鋭が、二葉さなについての調査資料を、私の下に持ってきてくれた。

それらと、前に先生が教えてくれた、二葉さなに関する話を照らし合わせてみて——  
私は一つの結論に至る。

「事務能力は優秀。厳しい家庭で育つただけに礼儀作法も弁えてる。記憶力も高く、最終的な学業の成績だつて悪くは無かつた……。うん。あの子に一からの訓練は必要ないわ。一刻も早く、あの子が立って歩ける舞台を用意しないと……」

ありがたいことに資料には、二葉さなと以前友人だった少女達の話も記載されていた。

成る程、砂場遊びで……これは使える！

私はすぐに、モデル界でお世話になっている『プロデューサー』に連絡した。

☆

【神戸市に女神が舞い降りた！】

各メディアの注目は、ただ一人に集中された。

七海やちよが「女神」と呼んだ少女——二葉さなのことで。

元々、年相応の愛らしい相貌と容姿を持つさなだったが、やちよが呼んだ最高のスタッフ達の手により、その魅力はぐんと引き立たされた。

抑え気味に施された白雪のメイクによつて、美貌は硝子細工の繊細さの如く、純白のドレスを身に纏い堂々とステージ歩く姿は、良家の出を如実に語る優雅な身ごなし。スリットから除く足も美しく、腿のあたりは適度に豊かで、その美しさは独特の色香を伴っている。

緩く巻いた、翡翠の髪と長い睫毛、同じ色のくりくりとした大きな瞳——彼女の生来の「愛嬌」を示すパーツと相まって、精工な西洋人形の如く端正だ。

また、体にびつたりと合うドレスによつて顕されたプロポーションも素晴らしい。ウエストがくびれており、全体に細身のように見えるが、胸部は既に女性的な魅力に溢れていた。

完璧な美貌。

その持ち主である少女が、ステージの上でポーズを取ると共に、笑顔を見せた時の破

壊力は凄かった。

一瞬、彼女の周囲が明るくなったように感じられたのだ。

まるで、魔法を使っているようにさえ感じられた。

その時、その場にいた者たちは、男女問わず、一斉に彼女をこう評価したという。

『まさに、『女神』だ』、と——

しかし。

ただ美しいだけの存在なら有り触れている。全てのメディアが注目する程にはならない。

ここからが、二葉さなの、本当の見せ場であった。

モデルの仕事は終わった。次にステージ上で行われたのは、『パフォーマンス』だ。

二葉さなの存在を世界に知らしめる為に、七海やちよが企画した。純白のドレスを纏

う二葉<sup>女神</sup>さなの前に、大きな砂場が用意される。

こねこのゴロゴロのテーマソングが流れる。

華やかなステージの雰囲気とはあまりに不釣り合いなその曲調に、周囲から失笑が聞

こえた。

しかし、二葉さなの表情は真剣そのもので——両手を砂場に突き入れて、動かす。一

心不乱に、頭の中で創造した世界を、子供の頃から焦がれていたその世界を、創り上げ

ていく。

やがて、出来あがった。

広大なサンドアート——【こねこのゴロゴロの世界】が。

ものの一時間で、正確にその世界観を、キャラクター達を完全再現したその技量に、会場から拍手は鳴り止まなかった。

この様子は、各動画サイトで配信もされていた事もあって、二葉さなは日本中の人々から、このように絶賛された。

【女神が新しい世界を創造なされた！】

と——

こうして、二葉さなの初めてのモデル業は、大成功に終わった。

二葉さなは『七海やちよを継ぐ者』として絶大な評価を世間から得た。

実は、これは全て、やちよの作戦である。

筋書きはこうだ。

『名家の娘が、自ら七海やちよに師事し、モデルの世界に参加。大成功を収める』。

つまり、『青磁が亡くなって以降、没落気味にあった二葉家の名誉は、"皮肉にも"家出娘のさなによって、死守された』こととなった訳だ。



さなの親族もまた、さなよりも、家の名誉を気にする者達ならば、『功労者のさな』に對して、余計な騒動を起こすはずがない、と踏んだ上での作戦だった。

☆

—— side : 二葉家

『すみませ〜ん!!』

『お宅の名誉を護ってくれたさなさんへ何かコメントを!!』

『さなさんの教育環境について詳しく教えてくださーい!』

『青磁さんがお亡くなりになられた後、落ちぶれてたつてのは本当ですか〜!?!』

当然、二葉邸の門前でもマスコミの群衆がごった返していた。

仕事や学校の為に外に出れば大群に囲まれての質問攻め。内に籠ろうものなら、一日中インターホンが鳴りやまず、全員グロッキー寸前だ。

「くっ、あのバカ娘が……、俺の許可なく、勝手な真似を……!!」

「姉貴を追い出したのは俺らだろ。姉貴がどーしよーが、自由じゃね？」

テーブルをドンと叩いて、忌々しく齒噛みする義和。

篤志はどこ吹く風と言った様子で、スマホをいじりながら、冷ややかに突っ込む。

「あいつにそんな気概は無い！ 全ては七海やちよ、奴のせいだ！ 成り上りの中央の民の分際で、うちの娘を売名に利用しやがってえ……!!」

「それで、どうするおつもりなんですか？」

マスコミ相手に隠れてばかりいるのは悪手だ。

こちらから、何かアクションを起こさなければ、彼らは納得しない。その内有る事無い事を「事実」と誤認させるべく、騒ぎ立てるだろう。

漱也が義和に確認すると、彼は迷いも無く言い放った。

「決まってる！ マスコミに真実を伝える！ 七海やちよが俺の娘を誘拐して、誑かしたんだとな!! そして、奴を訴えてやるっ!!」

「本気ですか？ 裁判沙汰になったら……」

「英雄とか言われているが所詮庶民の小娘だ!! 二葉家との格の違いを思い知らせてやる、良い機会じゃないか!」

ああ、これは駄目だな、と漱也は思った。

義和は怒りと屈辱のあまり、理性を失っている。とてもマスコミの前に出せる精神状態ではない。

「相手は日本一有名と言われる魔法少女、〃神浜の英雄〃ですよ? そんな相手に訴訟を起せば、うちは世間からの誹りは免れない。さなが護ってくれた家の名誉を再び地に墮とす結果にもなり兼ねませんし。裁判官の心証だつて、彼女の方が有利な筈……」

「ええい、ぐだぐだ煩い! お前ならどうにかできるとでもいうのか!!」

「ここは……俺にまかせてください」  
暫くして――

二葉家の長男、二葉漱也は家の門を開放。

スーツ姿の彼が玄関から現れる。同時になだれ込み、一斉に騒ぎ立てる報道陣の前に臆する様子も無く、寧ろ毅然とした態度で、こう伝えた。

『この度は、私の妹であるさなの勝手な行動により、今回のような騒動に発展し、世間の

皆様に大変なご迷惑をお掛けしてしまったことに付きましては、大変申し訳無く存じます。

ですが、一人の兄として、言わせてください。

彼女が我が家の実情を憂い、名誉を守り抜く為に奔走したのは、事実です。

これは、彼女が自分自身の努力で得た結果であり、『家族として』、とても誇らしいと思っております。

『妹』の今後の精進と、幸福を心から祈るばかりです』

☆

後日、みかづき荘

「さつき、お兄様と、弟くん、それに、お母様が挨拶にいらつしやつたわよ。『さなのこと、よろしくおねがいます』って……」

晴れて二葉さなは、みかづき荘に居住することになった。

用意された個室の中で、七海やちよと話しあっている。

「そうですね……」

「会わなくて、本当に良かったの？」

また、強がっているのだろうか。

だが、二葉さなは、迷いの無い瞳を向けてこくりと頷いた。

「はい。今はまだ、その時じゃありませんから……けど」

「ん？」

「いつか、言いたいです」

——【二葉さな】は、ここにいます。

「あの人達に、胸を張って、そう言える日が来るまで……私、頑張りたいです。最初は生まれての子猫そのものだったゴロゴロが、最終回では大人になって、生まれた子供に

そう言ったように……！」

揺るぎない瞳を向けて、二葉さなは七海やちよに訴える。

「……うん！ じゃ、一緒に行こうか」

あの時のように。

立ち上がって彼女は、手を伸ばした。

「はいー！」

差し出された手を、今度こそ離さないように。

今まで以上に強く握り締めて、二葉さなは新たなステージを進んでいく。

孤独で泣き虫で、夢見に逃げていた少女は、もういない。

誰かと手を取り合って生きていく為に、強くなると決めたから——

——今日もやちよさんと一緒に、慌ただしい一日を過ごすのだろう。

FILE #68.5  
七海やちよ  
第1話 「双竜邂  
逅」

目次

アバン

Aパート

Bパート

武士とは死の職業である。

どんな平和な時代になっても、死が武士の行動原理であり、  
武士が死をおそれ死をよけた時には、もはや武士ではなくなるのである。

——三島由紀夫『葉隠入門』より



「武士道といふは、死ぬ事と見つけたり」

日本人なら誰もが、生涯の内に一度は聞いたことがある諺だろう。

だが、皆知っているものほど、その源が知られていないのは、ままたある話である。

これは元々、山本常朝（じょうちょう）の「葉隠」からの一句だ。

死を心に当てて万一の時には死ぬ方に片付くばかりだと考えれば、人間は行動を誤ることはない。もし人間が行動を誤るとすれば、死ぬべき時に死なない事だと、常朝は考えた。

いつからだろうか。

その言葉が、頭の中に埋め込まれたのは。

両親が殉職した時か。

和泉十七夜が、行方を晦ました時か。

魔法少女になった時か。

祖母が亡くなった時か。

かなえとメルが死んだ時か。

みふゆと袂を分かった時か。

結城安里をこの手で捕らえた時か。

ある小説にこんな言葉があつた。『地獄はこの頭の中にある』と。

酷く共感したのは覚えてる。自分の頭にそれを言ったキャラクターが見た様な戦乱・硝煙・屍累々の情景は無い。しかし、確かな「地獄」は有る。

故にやちよは戦い続ける。この思いを誰にも味わわせない為に。

「人間は生まれた場所を選ぶことはできない。しかし、死に場所を選ぶことはできる」これも何処かで聞いた言葉だ。

しかし、人間の死ぬときはいつもくるのではない。死ぬか生きるかの決断は、一生のうちについてこないかもしれない。常朝自身がそうであったように。

なればこそ、今に「死」を決断すべきである。

血に塗れた自分の行き着く先は「死」だ。幸福な「生」など今更望みはしない。寧ろ、何食わぬ顔で日々の時間を無為に食ふことこそ、「死」と同義である。

例え、自分の死に、数十が泣き喚いたとしても、数百万が救われるならそれでいい。

—— 一人の「死」が、万人を活かす。

それがやちよの考える「武士道」の論理であった。

それは、いろは達が工匠区の大祭開催地に到着した頃――

―― 明京町・大東区。

―― AM8:50。竜誕館、門前。

「まったく……」

初めて見るが、ドデカい門だ――と緑色のスーツの上に長い袖のコートを羽織った女性、都ひなの治安維持副部長は、静かにそう零した。

何かを見上げるのは慣れていて、これは異常だ。天辺を見ようと試みるだけで腰がブリツジしそうになる。

まったくまったく……と嘆息。

門だけでもこの規模なのだ。そう来れば、内に有る武館とやらは想像を絶するに違いない。

神戸市役所も320万人の血税を糧に建て直されただけに、その外装構造は世界でも

トップレベルに入る程の堅牢且つ頑強なものだが、「竜の巣」は、完全にそれを上回っている。

まるで、自分達が神浜の守護者だと気取っているようだな。

忌々しく感じるも、直後にひなのは再び嘆息するしか無かった。

320万人の血と涙の結晶を軽く超えているのだ。竜人達のカリスマとはそれだけ凄まじいものであり、同時に、治安維持部はまだまだ脆弱なのだと思いきらされる。

更に、蒼海幫の首脳陣『五強聖』と直属の精鋭部隊『墮龍』<sup>テュロン</sup>のメンバーは未だに謎が多く、表立って社会活動している者以外は、確認されていないのが現状だ。

常盤ななかは腹心に純 美雨がいるので、恐らく彼女達と何度か邂逅しているのだろうが……自分とやちよへの対抗意識か、情報は教えてくれない。

「待たせたわね」

「来たか」

と、そこで凜とした声が掛かって、ひなのは振り向いた。

同じくスーツ姿のやちよが歩み寄ってきていた。

「調子どう？」

「平気だ……と言いたいが、やっぱりダメだな。初めて魔女と戦った時よりも緊張してる……。お前は流石だな。相変わらず堂々としてるじゃないか」

『武士道といふは、死ぬ事と見つけたり』よ、ひなの」

ひなのは眉間に皺を寄せて、嘆息。

「行き着く先が『死』と思えば、何も怖れることは無い、か……その考えも相変わらずだな」

フツと笑みを返すやちよ。

「私達のような魔法少女は『武士』に似てると思わないかしら、ひなの」

「お前トップが精神論掲げ出すと碌なことないぞつ。アタシが信じるのは化学とロジカルシンキング、目の前の現実だつ」

「それでこそよ」

だからやちよは今回、ひなのを共にしたのだ。

恐らく、竜人達は——トップの王ワン 海龍宗師ハイロンは——自分を試すだろう。

この門の向こうへ、一步でも踏み入れたその時から。巨大な門は竜の口であり、自分達は間もなく飲み込まれるのだ。毒物となつて吐き出されるか、咀嚼され吸収されて栄養飼いやられるとなるか——全てはやちよの意志表示と行動に懸かっている。

やちよは自分の中の『武士道』に全てを掛けるつもりだ。

王 海龍は優れた魔法少女であり、武術家と聞いている。自分が今まで何を経験したかは調べ切っていると考えていい。故に、『武士』としての自分をあらゆる手段で試し

てくるだろう。

ひなのは、フェイルセーフだ。

彼女は武士じゃない。だから、死ぬ事を由としない。

目に見えないものを妄信しない。

極めて倫理的な現実主義者だ。

自分が竜人達の策略で万が一死ぬ覚悟を決めた時、視野狭窄に陥るだろう。

彼女はその時、全力で自分と彼女達に対するストッパーと成り得る。

「お待ちしておりました。七海やちよ様。都ひなの様」

やちよとひなのがお互いの役目を確認し合った直後だった。

門の天辺から何やら天女染みた格好の女性が、ふわりと、二人の目前に降り立つ。

「お初にお目にかかります。私は竜誕館の門番を務めさせて頂いております。春 黎真

(チュン||リーゼン)と申します」

柔らかい笑みを浮かべて女性が頭を垂れると、空色の髪がふわりと揺れた。

『本殿』にて、王 海龍宗師がお待ちかねです。ご案内いたしますので、私の後を付いてきてください」

その言葉が合図であるかのように——巨大な門がぎいっと開かれていく。  
黎真<sup>リーチェン</sup>が、先に門の中へ入っていった。

やちよとひなのも、覚悟を決めて、彼女の後ろへ続いていく。

☆

門を入った瞬間から、複数の勇ましい掛け声と共に、金属を強く叩いたような音がけたたましく響いてきた。

果ての見えない広大な庭では、目に見えるだけでも、2000人は優に超える老若男女が、一糸乱れぬ動作で一齐に目前に有る木人椿<sup>とち</sup>を突き、蹴り上げていた。

中にはフリーの魔法少女達もちらほら見受けられたし、やちよとひなのが見たことも無い魔法少女も数人は見えた——市外からも、わざわざ訪れているのだろうか。

「凄まじいな……」

ひなのが思わずポツリと零す。

現実で見ると溜息が出る程、壮観だ。

まさか日本——しかも自分が住んでる所の隣町で——カンフー映画そのものの光景が見られるとは。

「よく統制されていますね」

周囲を見回した後、やちよは前を歩く黎真リーチエンにそう言う。

「門弟の方々には厳しい修行制度と、規律を設けていますから。……ですが、それだけではありませんよ」

穏やかに笑う黎真リーチエンだが、目元は冷ややかに据わっていた。

「彼らは統制されることを自ら望まれました。言わば、この光景は、自然と成り立ったのです」

「自然と?」

やちよは目を丸くして、黎真リーチエンを見つめた。

「このご時世。人々が絶対強者を求めるのは自然の理。自分達の知る限り最も優れた者の下に集い、只管従順になることで、安心感が得られるのです」

蒼海幫の中で、絶対強者とは『五強聖』だ。

大衆とはいっただって、受動的である。何事においても他律的で、他人や世論に同調し、物質的快樂だけをもとめる。文明の恩恵が自動的に教授できるのはあたりまえと思っ



ている。

そんな彼らにとって、魔法少女や魔女の存在は、これまでの平和を脅かす『危機』そのものでしかない。

(だが、蒼海幫に加われれば、その心配も無くなる、か……。なにせ絶対強者5人分の御加護だ。安心感が違う……)

ひなのの顔が険しくなる。

たとえ、厳しい修行や規律を課されたとしても、自分の身や家族の生活が『絶対に』保障されるのならメリツトの方が大きい。

対して治安維持部はどうか。確かに皆よくやっているとは思う。だが、蒼海幫と比べれば、明らかに経験も実力も足りていない若輩者が目立つ。市民からの信頼は根強いものの、絶対的な安心感を与えるにはまだまだ遠い話だ。

——ひなのの一度嘆息した後、修行に励む門弟達の顔を見渡した。

(確かに修行はキツそうだが……表情は生き生きとしている。それだけみんな蒼海幫の下に居ることに満足してらってワケか……。厳しいな)

まるで、“差”を見せつけられているようだ。

やちよは絶対強者だと、神浜市最強の魔法少女だと、ひなのは今まで信じて疑わなかった。

しかし、五強聖の前では、生意気な小娘と一蹴されるかもしれない。  
不安は募る一方だ。

(なのにな……こいつはどう思ってるのかな?)

我らが治安維持部長様は。

ひなのは、疑念を込めた横目でやちよを睨む。その表情には相変わらず氷の仮面が張り付いたままだった。

☆

—— 竜誕館・本殿。屋根の上。

そこには、入り口に向かうやちよとひなのを見下ろす二人の女性の姿が有った。  
「あれが、神浜市政が誇る治安維持部の二柱か。……思ったより子供だね」

そう言つて鼻で笑うのは、薄い水色の短髪で、いかにも活気と自信に満ち溢れた相貌の女性だった。

名前は劉 蓮穩（ラウ・リエンウエン）。

年齢は26歳。魔法少女の経験年数は15年。

精銳部隊『墮龍』において、洪 梅華と並ぶエースの一角であり、彼女とは一、二を競う武術家である。

「宗師がわざわざ歯牙にかける必要も無いと思うけど？ 姉者」

胡坐を掻いていたので、隣の女性の顔を見るには、僅かに首を仰げ反る必要があつた。

「姉者」と呼ばれた、サファイアの如く煌きながら揺れるショートカットヘアの女性が、蓮穩の方に顔を向ける。瞳を閉ざしたまま、口端を緩く上げた。

「油断大敵ですよ。蓮穩ちゃん」

「……っ」

穏やかな声色には、蓮穩が思わず軽口を閉ざしてしまふ程の威圧感が込められていた。

それもその筈——彼女は蓮穩とは付き合ひこそ長いものの、立場と実力は圧倒的に格上。

名は、鄭 咲蘭（チャン・シャオラン）。

年齢は29歳。魔法少女の経験年数は17年。

組織の経営陣・武術の師範衆「五強聖」の一人であり、その拳技の冴えはあの王海龍をして「武神」と言わしめる程の実力者であった。

「伝説は上回るもの。神話は書き換えられるもの。自信を持つのは結構ですが、過ぎると慢心に繋がります。かの無住心剣術の小田切一雲は、剣技を究めた自身を『無敵』と称し、仙人の如く振舞ったそうですが、弟子の真里谷円四郎に足元を掬われましたからね」

「はいはい、わかっているってばつ。だけど本当にあんな線の細い小娘が、姉者達と対等になれると思う？」

「ふふ……わかりませんよ。もしかしたら震え戦くのは、我々の方かも……」  
シャオラン  
 咲蘭の視線が再びやちよに向けられる。

「ふーん……」

——自分には、他にいなくなつたから祀り上げられただけの、「お人形さん」にしか見えないけど。

「……気に入らないね」

期待に笑みを深める咲蘭シャオランとは対照的に、蓮穩リエンウエンの瞳には、「英雄」への強い苛立ちが込められていた。

(姉者達と同じ土俵に立たせるまでも無い……このわたしが皆の目の前で叩き潰してやるよ。『英雄』ちゃん)

☆

——竜誕生館・本殿。

そこは武館——日本で云う道場——と例えるには余りにも豪華な宮殿であった。

やちよとひなのは黎<sup>リイチエン</sup>真に導かれて、中に入る。

胸の鼓動が早い。息が詰まる。唾液が苦い。背筋が冷え付く。思考がボンヤリと曇り、手が震顫する。

瞬間的に二人が感じたのは、絶大なプレッシャーだった。

間違いなく、いるのだ。『竜』の異名を持つ5人の『絶対強者』が——ひなのの

顔は苦々しく歪み、やちよの氷の仮面の表面がじんわりと濡れた。

屋上まで続きそうな螺旋階段を昇っていくと、途中で一人の女性が待ち構えていた。

リーチエン  
「黎真」

ヤン  
「揚老師」

呼び止めると、黎真は女性に向かって拱手こうしゅで挨拶。

「ご苦勞様でござンス。後は秘ひに任せて、門番の任に戻るザンス」

「承知致しました」

楊と呼ばれた女性が拱手を返しながらそう伝えると、黎真は頭を下げてその場から立ち去る。

やちよとひなのが目を見開いて女性を見た。

（老師……ということとは、この人も『五強聖』の一人……！）

魔力反応は一切感じられない。しかし、その威厳有る風貌を一目見ただけで、やちよの勘が告げた。

——この人は強い。絶対に。

（な、なんかどこかで見た事あるよーな……）

一方のひなのは、「わっちは〇〇ですな」という変わった言葉遣いの女性を思い浮かべていた。

「七海やちよ殿。都ひなの殿。お初にお目に掛かります。私は楊ヤン秘輝ミフワイと申します」

「初めまして。老師、ということとは貴女も『五強聖』の方なのですか？」  
「如何にも」

表情は至極冷静。だが、切れ長の両目には滾る様な灼熱が揺らいで見えた。  
秘輝は、踵を返して歩き始める。やちよとひなのも後に続く。

やがて、螺旋階段を昇り終えると、一つの赤い扉が三人の目に飛び込んだ。

「こちらが、王宗師の書齋でござンス。失礼ながら……」

秘輝はそういうと、くるりと首を反転。射貫くような炯眼がやちよに向けられる。

「七海やちよ殿のみ、お入りください」

「……………っ！」

刹那——やちよの瞳が、キツと鋭く瞬く。

「やちよ」

——大丈夫なのか？

怯え混じりの震えた声が、暗にそう問いかけていた。やちよはコクリと頷く。  
「分かつているわ」

——安心して。命を取られる訳じゃない。

やちよはアイコンタクトにそう告げると、前に一步、足を踏んだ。

それが覚悟の顛れと見た秘輝が扉を開けてくれた。

中に入った先に、まず目に飛び込んだのは、*“舌を出した青龍”*の絵画だった。個人の書斎には不釣り合いな巨大な円テーブルの表面に描かれたそれを見て、やちよを思い出す。

確か、中国三大宗教の一つ、道教に於いて——青龍は龍族の*“始祖”*を示す。

これは、この部屋の主の意図だろうか——とやちよは目線を前へ向けた。中国風の衣装を着た、自分に良く似た深い藍色の長髪を生やした女性が、緩やかな笑みを浮かべて見つめている。

目を合わせた瞬間。

やちよの全身が、吹雪の中に放り出されたかのように粟立った。

——これが、龍王。



この組織に住まう総ての竜人達を導く長。蒼碧拳の開祖。宗師・海龍。

大きく開かれた両目に映る「太陰太極図」の円に封じ込められた自分がはつきりと映り込む。

格の違いというものを、一瞬で思い知らされた。

初めて魔女を見た時よりも勝る圧倒的な存在感——底知れない雰囲気、やちよは飲み込まれそうになった。恐怖に心を締め付けられた。

「……畏れを知らぬと言われた英雄が、『蛇に睨まれた蛙』の気持ちを思い知るのは滑稽だね」

太陰太極図が蒼く瞬いた。

怯えを見透かされたか。やちよの肩が強張る。だが、負けるにはいかないと、見つめ返した。

「初めまして、七海やちよ治安維持部長」

全身から溢れ出る凄まじい覇気とは対照的に、その声色はさざ波の如く穏やかだった。

「初めまして」

「ふふ、そう突っ立ってないで、私の前に座り給え」

「失礼致します」

海龍がすつと前方に指をさす。青龍を挟んだ対面席に、やちよは腰を掛けた。

「……普段着で良いと言ったのに」

「生憎ですが、初対面の年配の方には最大限の礼儀を以て接するのが私の流儀で有りまして」

「それは残念。ミス神浜の私服センスを是非ともこの目で見たかったのだがね」

ついでにインスタに上げればいっぱい「いいね」貰えたのになあ、あーあざんねん——と海龍は、取り出したスマホを無造作にテーブルの上に投げた。

「ふふ、宗師はご自分で仰っていたではありませんか。私とご自分の関係は、イーブンだと。これから見れるチャンスは幾度も有りますよ？」

その俗人的な仕草が緊張感を緩和させた。やちよが柔らかく笑みを零すと海龍も嬉しそうに笑い返す。

「うむ、それもそうだな」

そこで、海龍はコホンと咳払い。

「では冗談はこのくらいにして——本題だ」

「私との対談を望んだ理由、ですか」

「そうだ。君も分かっているだろうが、私と君の経験値には大きな隔たりが有る。だが、私は君の功績と実力を認めている」

海龍は語る。

七海やちよが、治安維持部長に就任してから今日に至るまで、魔法少女による大規模な犯罪は起きず、魔女による被害も極小規模の範囲で抑えられてきたのは事実だ、と。

更に、あの結城安里や、アステリオスを捕らえた事を顧みても、実力は申し分無い。

「対等になりたいと願っているのは嘘偽りの無い、本心からだ」

故に、挑戦状を叩きつけたのだと、暗に海龍は告げた。

龍王を前にした時、英雄は、自分の言葉を、意地を、誇りを、矜持を、信念を、願いを、貫き通すことができるのだろうか——と。

やちよもその意図は理解できた。だからこそ、海龍とは今一度強く睨み合う。お互いに譲れないものがある。お互いの喉元に牙を突き立てる。先に脅えた方が負けだ。その時点で、これまで積み上げてきたものは呆気なく瓦解する。

「問おう。——君は何に成りたい。何を目指す。七海やちよ」

答えは、海龍が想像していたよりも早く出た。

「武士、でしょうか」

その単語に、海龍の両目が大きく見開かれる。やちよを封じ込める太陰太極図が蒼く瞬いた。

「ほう。ではその『武士』を、何と説く」

ぞつと凍える様な眼力がやちよを威圧した。

猛烈な気迫がやちよを頭から喰らい全身を飲み込まんとする。

だが、やちよは一端の恐怖も見せず、挑み掛かった。

「決定し、自分で責任をとる。これが武士です」

やちよは断言。

海龍の覇気が、一瞬だけ抑えられた。

『武』とは戈(ほこ)を止めると書きます。これこそ正しい『武』の姿にございます。たとえ、地獄に堕ちようとも、戈を止めねばならぬ時がございます。それが過ちであろうとも、腹を切る覚悟の上の決断で挑まねばなりません。これこそ、武士というものだと、私は考えております」

戈とは、正しき者が悪しき者に向けるべきものであるが、それは理想だ。

この社会では大体的場合、過ちを認めぬ者が戈を振るい、罪無き者が傷つき最悪命を落とすのだ。

やちよは、命を懸けて戈を止める使命が有る。

海龍は黙つてうなずいた。やちよは続ける。

「武士道とは、そういう生き方の道です。武士は常に死を日常化しつつ生きる。本当に生きるためには、死と向き合わねばりません」

「なるほど。武士は、死と生を象徴交換（ボドリヤール）しつつ生きる存在、ということか。確か……カントはこれを『崇高』と言ったのかな？」

そう呟く海龍の脳裏には、かの太田道灌に纏わる有名な逸話が過つた。

道灌は刺客の槍に刺された時、道灌の歌好きを知っていた刺客は、

“かかる時さこそ命の惜しからめ”

と、上の句を詠んだ。

これを聞き、今、息絶えんとしていた道灌は、脇腹に受けた致命傷にもひるまず、

“かねてなき身と思ひ知らずば”

と、下をつづけた、と云う。

これが、やちよの云う『武士』というものであると、と海龍は推測した。

「思うに、武士道こそが、魔法少女の精神に最も近きものであると思います。すなわち、『道の思想』です。魔法少女の死生観もまた同じです。道を極めて死ぬことが、道です」

「ふむ、心身一如か。正に日本人らしい、素晴らしい理念だ」

やちよの信念に、海龍が拍手と共に、賛辞の笑みを浮かべていた。

「……が——七海やちよ」

そこで、笑みを止める。

「今から、君の理想を<sup>武士</sup>バツサリ斬り捨ててやる。覚悟は良いかね？」

身の毛もよだつ程の覇気が、再び室内に充満し、やちよの全身に纏わり付いた。

肩に悪寒が走り、グツと強張る。だが決して瞳は龍王から逸らさない！

「『あなたの剣を元に納めなさい。剣を執る者はみな、剣にて滅ぶ』」

「マタイによる福音書……」

「二六章五二節。私の戒めであり、君への警告だ」

海龍が『嗤』う。

先程の穏和さは欠片も無く、明らかな敵意を示した、獯猛な笑みで。

「まず、君が歩む武士道こそ、間違っているのだよ」

「間違い？」

やちよの眉間に皺が寄る。予想通りの反応に海龍は笑みを深める。

「君や、一部の日本人が声高に崇め奉る武士道の理念とは、全てに於いて、浅いものだ」

やちよの怒りが顕わになっていくのを楽しそうに見つめながら、海龍は説明を続けた。

「江戸幕府が開かれた頃の話だ……。長い間武士階級が政治を司る、つまり支配層になる訳だ。そこで、もともと武士の専門であった、互いに殺し合うという、人間が本能的にもつとも悪としている行為を真正面から見据えて、それをある種の思想として消化させていこうという狙いがあった」

当たり前の話だが、江戸時代中に、大規模な戦乱は無い。

それは当時の武士が、国を活かし、人々を活かす立場に有ったから。要は政治家や公務員に近い存在だったから。

故に、決して、殺し合いや争いを肯定する訳にはいかなかった。

「この『政治的戦略』には、かの柳生家や、沢庵宗彭たくあんそうほうも関わっていた。徳川家温存のため、平安の世のため、禅の興隆のため……。とにかく武士に教養をつけ、精神を磨かせる。しかも強制しないで、憧れさせて自然にそういうふうにもつていく。徳川260年『泰平の世』を支える要だった、いわゆる武士精神——つまり、『自己規制』——というものが形成されていった。身体性よりも精神性が重視されていった」

雄弁な語り口とは対照的に、海龍の表情は冷ややかだった。

「それが、君が理想としている武士道の真実だ」

「……………」

やちよは無言。

だが、海龍は感じていた。

水の仮面を被っているが——瞳の熱は抑えきれていないと。

「腹が減つては戦ができぬ」。　「武士は食わねど高楊枝」……聞いたことがあるだろう。

前者は戦国時代以前に、後者は江戸時代に生まれた。この二つの諺を並べるだけでも、武士の方向性は時代に合わせて矛盾と言える程に変化したのは明白だ」

身体を資本とし、生きねば意味が無かつた筈の武士は、いつの間にか「自己規制」と「自己犠牲」を美德と捉えるようになった。

それは戦乱の世から平和の時代に映つたから、武士の役割が変わつたから、大衆がそう見たから、時の権力者達がそうするべく命令したから。

「断言しよう。武士道とは——最早「道」に非ず」

哀れみの瞳で溜息をついて、海龍は言い放つた。

「私が残念に思うのは、君がこんな程度の低いものに生き方を左右されている現実だ。



『無欲の勝利』とでも謂おうか。見返りは求めず、とにかく死んだ気で当たっていく。玉砕精神を日本人は声高に叫びたがるが私は好きじゃないし、そもそも社会は、そんなものを評価しない」

やちよは海龍の瞳を見て思う。

“自己犠牲” に対する深い悲しみと、そして、強い怒りの感情が読み取れた。

何か辛い思いがあるのかもしれない。例えるなら、大切な人を失った程の——  
「菅原道真や徳川家康は、死して神と祀り上げられた。それは当時の日本の大衆が神仏を絶対的なもの捉えていたからだ。だが、現代社会ではどうか？ 戦場カメラマンも国境なき医師団も君の理想とする武士に近きものであることは認めよう。だが、彼らが現地の紛争に巻き込まれ死んだ時、嘆き悲しむ者が世界でどれくらいいた？ 彼らの死を英霊だの神仏だの讃え祀った者が日本にどれくらいいた？」

海龍はそこで、ふう、と一拍置いた。

「……結論を言うと、死は無意味であり、無価値だ。それが齎すのは平和でも前向きな変革でも無く、ごく少数への悲しみと、君の存在を妬む者達への安心感だ」

「……では、海龍宗師は、武をどのようにな心得ていらつしやるのですか？」

今度はやちよが覇気を放った。

声色と表情はとても穏やかで。しかし、その瞳は今にも海龍を射殺す程、鋭く。

「そうだねえ……ではまず、私の立場から説明しよう」

海龍は緩やかに笑った。

「私は武術師範であり、経営者だ。人を活かす為に生きている」

「活かす……」

「武士であり英雄である君が、人の為に死ぬつもりなら、我々とは完全に異なっている。我々の場合は、存在し続ける事に意義を持つ。七海やちよ、君は真里谷円四郎を知っているかね？」

「無住心剣術ですね」

即答が返ってきて、海龍は嬉しそうだ。

「なら話が早い。彼は弟子に『剣は身体も有用なり』と教えたそうだが、正にその通りだ。武術家も経営者も身体が無ければ始まらない。心構えだけではどうにもならない」

具体的に説明すると、無住心剣術では、心法に徹することを強調した。

これは開祖である一雲が書いた文書のなかで、『無住心剣術の極意を得た者は、たとえ空を飛び地をくぐるほどの術を使う者が出てきても、絶対に負けることはないんだ』と断言したせいでも有った。

「神国日本は絶対に負けない」というような心的状態に近い、というべきか。

上記を顧みるに、江戸の心身一如は、すでに心のほうに重点があり、身体は心の言う

通りになるべきものである、という考えがあったらしい。

当時の文化の中では、「身体を意識してはいけない」「身体を消さなければならぬ」というような一種の強迫観念が生じていたのかもしれない。

よつて、無住心剣術の術理はとにかく「我が身が無いつもりになればいい」というようなニュアンスにとられがちであり、実際に門人たちもそう思っていたようで、真里谷円四郎の弟子、川村秀東は彼にこう聞いたそうなの。

「要するに、我が身が無くなれば良いのですね」

そうしたら円四郎は、

「それは禅僧の修行ぶりであつて我が道ではない。剣術では体も有用であるし、持っている刀も大事だ」と教えたと言ふ。

「武士道は技術よりも『心が大事』とか、よく精神修養を云々する人というのは、概して、宮本武蔵や柳生石舟斎の言葉やエピソードを引き合いに出して説教したがるが、間違いだ。足の踏み方ひとつにしても、かつての天才的な武術家たちが何代もかかつてやつと確立したものを、江戸時代以降の武道家達は素人の論ともいえる浅薄な合理主義で考えて、いともかんたんに捨ててしまった。もともと身体あつての話だったのが、いつの間にか、身体抜きであれこれ言っている」

なるほど、とやちよは思った。

ここまで話を聞いて王 海龍の人間性が多少は理解できた。

彼女は理想で物事は語らない。目に見えないものを信じていないのだ。

自身が経験したものの、真実のみを重要視する徹底的なりアリスト。この辺りはひのや、深月フェリシアの様な傭兵達と通じる所が有る。

それに――

「文化の違いも有りそうですね」

日本人が精神性を重視し、自己犠牲による死を美德と考える――そのような、社会に変えてきた――のなら、中国人はどうだろう。

生まれが違えば、根本的な信念も変わってくるのかもしれない、と――やちよは率直に疑問をぶつけた。

海龍は頷く。

「うむ。そこにも触れようと思つていたところだ。祖国ではそもそも、武力は必要悪」という捉え方をされていた。故に我ら武術家の社会的位置は、ずっと低いところに置かれていた」

それは、10年以上前の蒼海幫も、同じであった。

当時、「長老」を筆頭とした『老人会』が首脳陣だった頃、海龍ら武術を嗜む魔法少女達は単なる『用心棒』程度の扱いだった。

「経験も知恵も有る我々のお陰で食事も住居も与えられているのだから、有難く思つて従え」という意味だ。社会的活動は無きに等しく、汚れ仕事を専ら手伝わされていた。「祖国には、『書は姓名を記せば足る。剣は一人の敵のみ』という諺がある。個人の武力がいくら強くても、結局一人ずつしか相手にできない。人を救うこともまた然り、だ」論理的に解説すると、人間は、相手が増えた場合、運動系と知覚系の対応がいつべんに複雑になる。

自分の運動系、自分の知覚系、それに対して相手の運動系、相手の知覚系という関係が、一対一じゃなくて多数になる。

つまり、武術の論理とは基本的に、「一対一を想定して成り立っているもの」なので、相手が二人以上だと不利になるのは当たり前、という意味だ。

「故に、中国では、武術家の地位は用心棒的な存在から上にあがることはほとんどなかった。だからどうするかというと、けつきよく偉い奴になるしかない。政治家とか、実業家とかね。一対一でやってもしようがないから、大勢の人間をいつべんに統制するとうことを考える」

「割り切っているのですね」

「そこが精神性を唱えがちな日本人との——つまりは、私と君との——大きな違いだ」だからこそ、海龍は準備を進めてきたのだと云う。

10年以上も前から、いつか、魔法少女が世界に認知される日が来るだろうと。

当時の彼女の仲間の用心棒達は、彼女の知る限り総ての魔法少女が、そんな海龍を侮蔑した。罵った。嘲笑した。皆、一斉に「そんな日は永久に訪れる筈が無い」と、諦めていたのだから。

だが、海龍は信じ抜いた。

その日がいづ来るかは分からない。

数十年も先か、もしかしたら明日かもしれない。

しかし、魔法少女が人々に知られた時、ただの『イノシシ武者』のままではいけないのだ。それでは、熊やスズメバチと同様、危険視され、人の手により、法律により、排除されるか、飼いや慣らされるだけである。

教養を、人の心を掴む術を、捉える話術を、統制できる広き視野を、今の内に身に付ければ——海龍は、当時から夥しい量で有った武術のトレーニングと同時進行で、必死に勉強した。

彼女の熱意に惹かれる形で、他の用心棒達も付いてきた。

彼女達は後に、五強聖となり——墮龍となり——蒼海幫の中でも一大勢力へと、進化した。

そして今——魔法少女が世界に知られてから10年。

海龍は、組織の経営権を完全に掌握。

それは、大多数の人々が彼女の「存在価値」を認め、彼女の才覚を尊敬している事実の証明であつた。

「故に、私は——我々は存在を固持し続ける。生きることには執着する。『人間、死ぬ気で頑張ればどうにかなる』という考えは、我らがこれまで歩んできた『道』には無い」

海龍はそこで、一呼吸置いた。

「……と、まあ、私が君に教えられることはここまでだが、何か意見はあるかね？」  
やちよは穏やかに笑つて会釈する。

「いえ、とても勉強になりました」

海龍が目を見開いた。

「これは意外。君を本気で怒らせるつもりだったのだがね」

「確かに武士道を批難されたことに関しましては苛立ちを禁じ得ませんでした、それ以上に、海龍宗師に好感を持てましたので」

「ほうっ。」

海龍は興味深そうに目を細める。

やちよの笑みは仮面ではない。本心から浮かべているように見えた。

「貴女は日本を愛している」

海龍は表情を変えなかったが、双つの太陰太極図が鋭く光った。

「日本の文化と歴史をよく研究された上で、その矛盾と危うさについて論理的に批難されている。日本に関する知識は、私……いや、私が知る誰よりも深く、感銘を受けました」

「それは結構な事だ」

海龍が満足そうに口元を緩めた。覇気は感じられない。

「愛に関しては、正解だ。だからこそ、私は日本の防衛力を根本的に変えたいと考えている」

「故に、私への挑戦状、ですね」

やちよの眼が獲物を捕えた鮫のように鋭くなる。海龍は力強く頷いた。

「そうだ。君の器と実力が足り得ないのならばそこまでだ。直ぐに取つて喰らい、吐き捨ててやる。そして常盤ななかを部長に押し上げ、治安維持部を我々にとつての新たな社会的活動の一環とする。」

——七海やちよ。返答は如何に」

やちよと海龍も、想いは同じだ。



「受けて立ちましょう」

しかし、戦わねばならない。

「どうやら君は未だに武士であろうとしているな……私が今、散々否定してやったのに」

「言葉に人の人生を決定する力は有りませんよ。海龍宗師」

「歴史の浅い、誤った道であったとしてもかね？」

「それでも、歴史上多くの日本人がその道に殉じてきたのは事実です。然れば私も、彼らを手本にし、突き進む所存でございます」

「なるほど……それが我らの『武術』と『論理』にどこまで立ち向かえるか……今日、この場で存分に試してみるといい。我らも本気で応えよう。……だが、しくじれば、只では済まんぞ」

——では、祝賀会といこうか。

海龍が、音も無く椅子から立ち上がった。

合わせるように、やちよも椅子から立ち上がる。

二頭の蒼き龍達の、  
譲れぬ戦いが始まった。

七海やちよ  
第2話 「二番手 若虎・孫(スン)」  
鈴

紗 (リンシヤ)

2018/07/18 (土) AM 09:35

二木市・虎屋町商店街 紅晴邸

「失礼致します。大親分」

書斎の襖をガラリと開けて入り込んで来たのは、側用取次役の陸奥光琳みちのくこうりんだ。

邸の主・紅晴結菜の側近の一人で有り、実質的なNo.2の地位にある彼女は、どこか忙しない様子で主の目前まで駆け寄り片膝を付いた。

「光琳、どうしたのかしらあ」

結菜が、跪く彼女へゆっくりと顔を向ける。

表情はいつもと変わらない。しかし、今の足取り——問うまでも無く、何かあったのは明白だ。

昨日の夜から書類処理に追われていたので、良い眠気覚ましになるだろうか。

「密偵に向かった『するが』から報告でありんす」

「『猿』(ましら)から……?」

その名を聞いた途端、結菜の瞳が強く瞬いた。

猿（ましら）とは——陸奥光琳と並ぶ結菜の側近の一人、『加賀するが』の事である。

代々「忍者」を輩出してきた武家の出身である彼女は、歴代最強の忍術の使い手であり、裏社会に於いては、「稼ぎ頭メカニツク」と称されるプロフェッショナルの傭兵だった。

彼女の腕に惚れ込んだ結菜が、直接頭を下げた雇い入れた。

内部調停役の光琳とは対照的に、「御庭番衆」の魔法少女達を率いて、二木市外の情勢を調査することが主な任務であった。

「……お耳を。——との報告でありんす」

光琳がコツソリ耳打ちをすると、結菜の瞳がキツと鋭くなる。

「やはり、仕掛けてきたわねえ……王ワツ 海龍宗師ハイロン」

龍の皮を被った狸め、と吐き捨てそうになった。

状況は最悪だ。

「……如何致しましょう?」

「七海さんのことよお。卑劣な罠と知ろうが真正面から斬り掛かっていくでしょうねえ」

『加賀するが』が向かったのは、神浜市大東区にある竜誕館だ。

絶対強者たる五体の龍王が集うその場所に易々と潜り込めたのは、彼女の技能の賜物である。

改めて、夕霧市長には感謝しなくては。それでも——

結菜は渋面を浮かべると、顎を指で摘み考え込む仕草を見せた。

「王宗師は容赦無く叩き潰しにかかるでしょうな。家族総出で」

光琳の言葉に結菜は頷く。

七海やちよも相当な実力者だ。只でやられることはまず無い——しかし、今回ばかりは相手が悪すぎる。

「連中の迷惑通りに事が運べば、日本の魔法少女界に大打撃が走るわあ……」

「伝説の魔法少女」が失踪した時と同じように——と結菜は苦々しくそう付け加えた。

英雄を心の支えに生きてきた大多数の魔法少女達が混乱するだろう。

「王宗師達は、その心の隙間にするりと偲び込む算段でありんすな」

七海やちよの生き方は「武士」そのもの。

その公正高潔たる生き様は神浜市のみならず、日本中の数多の魔法少女に影響を与えている。

「誇り」を失わせる訳にはいかない。

ましてや、武士を微塵も知らぬ中国武術家共にその役目を、希望を奪わせる訳にはい  
かない。

「猿ましろに伝えておいて。『万が一の事が有れば、速やかに、静穩に支援せよ』と」  
「承知いたしました」

光琳が頭を下げるのを確認すると、結菜はスツと立ち上がる。

「では……。私はこれから出かけるからあ、後を頼むわあ」

「只今御庭番より護衛をお付け致しましょう」

「いえ、必要無いわあ」

ただの墓参りだもの。

——と結菜は呟くと、光琳を置いて書斎から出て行つた。

☆

——同じ刻

——神浜市、明京町・大東区。株式会社蒼海幫本部・竜誕館

(なんだここは?)

そこは、宴の会場とはあまりにも不釣り合いだった。

やちよと共に、海龍ハイロンと秘輝ミツキの両名に“そこ”へ案内された都ひなの背筋に、ゾツと悪寒が走る。

(明らかに飲食する場所じゃない。間違いなくここは……!)

“闘技場”だ——!!

広々とした空間の中央には、大相撲の土俵のような巨大な円台が存在していた。

あれは、確か——『擂台』(レイタイ)と呼ばれるものだ。古来より、中国拳法家が試合をする際の舞台として用いられてきた。

(拙い、拙いぞ……)

ひなのは聡明だ。

この事態を予期しなかった訳じゃない。故にあらゆる保険は掛けておいた。

だとしてもだ——斯様な“異常な光景”を目の当たりにすると、頭は途端に機能しなくなる。



この状況をどう逃れるべきか——緊張と不安が支配して、考えられなくなる。

『舞台』の周囲を取り囲むように置かれた無数の椅子の上には、既に蒼海幫の精鋭・デュオロン『墮龍』の魔法少女——ざっと見ただけでも20名以上——が鎮座していた。

彼女達は一齐に、神浜の英雄に視線を注いでいた。

ある者は、期待に満ちた輝かしい眼差しを。ある者は、侮蔑を込めた鋭い眼光を——

ひなの顔が次第に、蒼褪めていく。

逃げられる可能性は、限りなく低い。

しかし、それでも——!!

(やちよ)

これから、ここで何が催されるかは予想できた。

咄嗟にテレパシーで警告する。これは「罨」だ、と——

「わかつているわ」

「……!」

やちよは表情を崩さずに、一言だけそう返すと、前を進んだ。

まるで微塵の危機感など覚えていないかのように——それが余計にひなの心の

拍数を上げた。

「王宗師、これはどういうことですか?」

自分がこれから何をしようとしているのか。

ぶつけたくなる怒りを喉元で抑えつつ、ひなのは悠然と前を歩く龍王の背中に問? かける。

「見ての通りだよ」

僅かに振り向いた海龍の顔には微笑が張り付いていた。

「神浜の英雄殿は高名な武術家とも聞いている。その実力を是非とも皆の前で披露して頂きたいと思つてね」

「勝手な真似を……!」

「本来は歓迎の宴を催すつもりだったのだが……蒼海幫は実力主義だ。七海やちよを認めたらがらない者も多くてね。彼女達を納得させる為にも“仕方なく”余興の場を用意させて頂いた次第だ」

（何が“仕方なく”だ……）

ギリツと、ひなのは忌々しそうに奥歯を噛んだ。

幼子が見ても分かる。

これは、明らかに七海やちよ個人に対する“公開処刑”だ。

神浜市の英雄を法に触れない範囲で叩き潰し、中国出身の魔法少女が、引いては中国

武術こそが優れていることを世間に正当に評価させる為の……卑劣極まる策略だ！

神浜市の誇りが、日本の魔法少女界の希望が、こんなことで潰えるなど——

「容認できませんね。こんな馬鹿げた真似……」

「残念だが、乗るか反るか決めるのは君では無く、あちらだよ」

ひなのに静かな怒りをぶつけられても、海龍は涼しい顔を崩さない。

七海やちよに眼差しを向けて、問いかける。

「どうかね？　神浜市最強の魔法少女よ」

「……………」

問われながらも、やちよの足は海龍に導かれるまま、『擂台』の上に立っていた。

ざっと周囲を見渡す。

20代を超えてそうなのは、五強聖の海龍と秘輝、門番の黎真を含めた数名程度で、大

半は10代半ばの少女達の顔立ちが目立つ。

「我らの精鋭は何れも腕は立つが、若輩者が目立つ。血気盛んな彼女達に社会の厳しさを教示して頂きたい」

何を白々と——

ひなののはつい怒号を鳴らしそうになったが、喉元で堪えて反論。

「…………生徒でしょう。貴女方が直接指導すれば良いのでは？」

「都ひなの副部長、君は中国料理を嗜んだことは？」

「……………？ いえ、あんまり」

「祖国には『蛇の羹あつもの』という料理が有るが、製法が厄介だ。火加減が難しい。火力が弱すぎれば、美味くできあがらない。火力が強すぎると、焦げ付いてしまう。人間も同じだ。今の我が子らの炉(ひ)には、新しい薪が必要だ」

「……………」

「勝ち負けばかりに囚われず、広い世間に目を向けさせる為にも——七海やちよが必要だ」

ひなのは海龍を睨みつけたが、ただ微笑を返されるだけ。

何を言っても無駄か。既に連中の興味関心は自分には無い。

ならば——

〈やちよ。こんなふざけた催しに真剣に参加することは無い。さつさと断つてここを出るべきだ〉

「……………」

〈やちよ！〉

テレパシーで呼びかける。しかし、やちよはの目は前を向いたままだ。一片の不安も見せず。

ひなのが、海龍が——『擂台』を取り囲む魔法少女全てが、やちよ一人に視線を浴びせている。

最早、彼女の言葉に掛けるしかない。

『もつと遠くを見なさい。山を越えれば、視界が大きく開けてくる』

——暫しの静寂の後、やちよがポツリとそう呟いた。

「ある高名な中国武術家は、こう言ったそうですね。強さに南も北も無い。ましてや私達魔法少女に、日本も中国も無い……」

そして、自身を見上げる中国武術家達を見回した後——

「生まれた土地は違えど、皆様も今は私と同じ神戸市の市民。立場は同じです。だから、皆様の為になるというのであれば——」

——力の限りを尽くしましょう。

穏やかに微笑むと、力強く、そう発言した。

「……………」

「ほお、かの宮宝森ゴンバオセンの言葉を知っているとは」

ひなのの顔が顔面蒼白となる。

海龍の口元が嬉しそうに吊り上がる。

『擂台』を取り囲む魔法少女達が、一斉にぎわつた。

彼女達は皆、武術家としての自身の腕に絶対の自信を持っている。

しかも、龍王を含めた20名以上が睨みを利かせたのだ。恐れをなしてとつと背中を向けて去るだろうと大半の者はたかを括つていただけに、堂々と挑戦を受けるやちよの姿勢に驚いた。

「その心意気を良しとしよう」

「では、こちらに」

海龍は緩やかに嗤い、秘輝ミーフウイはやちよを擂台の上に、ひなのを最前列の席へと案内した。

その隣に海龍が座る。ひなのはチラリと横目を向いた。

(「こちらは特等席という訳か……。海龍の隣に座っている人は、工匠区の工業組合会長

を兼任している、鄭チャン 咲蘭シャオランだな)

海龍の隣に座っている緑髪の穏やかな相貌の女性。

なんてことだ——とひなのは眉間に皺を寄せた。

既に、五強聖の内三人がこの場に集結している。

間違いない。海龍はやる気だ。全力を掛けて七海やちよをこの場で叩き伏せるつもりだ。

それに……

〈やちよ〉

舞台上に独り立ち、ただ呼吸を整えているやちよに顔を戻してテレパシーを送る。

〈どうしたの？〉

〈連中の中に見た事ある奴がいる。魔法少女っぽい変装をしているが一般人だ。開明新聞社の静原だ〉

やちよの眼が僅かに見開かれた。

〈連中の目的はもう分かっただろう。大手のマスコミと結託してお前が敗北した姿を全国に公開することだ〉

その記事は飛ぶように売れるだろう。

なお、七海やちよは以前、環いろはに敗北を喫しているが、実際に事実を目の当たりにしたのは朝香美代とピーター・レイモンドの二名のみであり、証拠が無い。

ましてや、環いろはのあの風貌だ。

当時のマスコミは面白おかしく記事を書いたが、あんな人畜無害な少女が神浜の英雄を叩き伏せたなど『有り得ない』、と一般的に見られていた。

だが、今回は違う。

中国生まれの本場歴戦の武術家達だ。その上、証拠映像を残されれば、世間に対する説得力は桁違いだ。

〈やちよ。今ならまだ間に合う。戻って事実を市長に伝えるんだ〉

〈……………〉

やちよから返事は無い。ただ、瞳を閉ざして息を整えているだけ。

〈やちよ!!〉

〈……………言ったでしょう、ひなの。私は神浜市民の為なら全力を惜しまないと〉

〈死ぬ気か〉

〈もし、死ぬ事になったとしても、只で死ぬつもりは無いわ。見せつけてやる〉

やちよの眼がかと見開かれた。

その眼光に迷いは無い。

映るのは完全に覚悟を決めた、高潔たる武士もののふの蒼光。

〈“死”は突然訪れる。魔法少女なら尚更……………けどね、死に場所は自分で決めるものよ。誰かに強制されるものじゃないわ〉

〈やれるのか〉

付き合いは長い。



やちよの実力をひなのは十分——恐らく、治安維持部の誰よりも把握している——しかし、顔から不安は拭えない。

〈やるわよ〉

そこで呼吸を整え終えたのか。

やちよの全身が蒼く瞬き、足元から発生した水流に飲み込まれる。

——英雄が『擂台』に降臨した。

魔法少女に変身したやちよが、取り囲む観客席に向けて、丁寧にお辞儀をした。

そこで、同じく『擂台』に上がった秘輝ミフクイがやちよの前に立ち、声を掛ける。

「では、審判は秘ミが務めさせて頂くザンス。準備は宜しいですか？」

「ええ。よろしくお願いします」

「それでは……宗師！」

秘輝ミフクイが特等席の方を見遣ると、海龍が立ち上がり声を張り上げる。

「うむ。ではこれより、神浜市役所属・治安維持部長七海やちよ殿による『実践指導』に入る。貴殿には、これから我が墮龍の鋭士3名と試合して頂く。相手や、勝敗のルールは其方の好きに決めて頂いて結構」

「いえ、そちらの自由で構いません」

「なっ!？」

まさかのやちよの即答に、ひなのが大きく目を見開いて驚愕!!

〈お前正気か!? 只でさえギリ貧だつてのに、更に崖つぶちに自分を追い詰めてどうする!?!〉

〈見せつけるって言ったでしよう?〉

ひなのは絶句した。こうなったらもう止められそうも無い。

作戦も計算も不可能。もはや祈るしかない。

一方、海龍は「ほう」と嬉しそうに口元を吊り上げて感心。

「では——孫 鈴紗（スン||リンシャ）、参れ!」

「承知しました宗師様っ!!」

甲高い声が場内に鳴り響いた瞬間——海龍の後ろから、橙色の陰が飛翔した。

天井近くまで上昇すると、棒状の陰をヒュンヒュンと旋回しながら、やちよと秘輝の前にダンツ!と勢いよく両足をついて着地する。

「ハイッ!! ハイッ!!」

まるで一流バトン選手のジャグリングのようだ。

両手に携えた棒状の獲物を再び、高速で回しながら歩み寄ってくるのは、橙色の中国風ドレスの魔法少女。

「ハイッ!!」

棒状の先端をやちよの顔に向けて、彼女が構える。

茶髪を御団子へアーに纏めた、如何にも威勢の良い少女であった。

雰囲気は鶴乃に似ているが、顔立ちは幼く見える。年齢はいろはやフェリシアとそう変わらないだろうか。

「初めまして!! 七海やちよさん!! 孫 鈴紗（スン||リンシャ）と申します!!」

直立不動するやちよに向かって、吠える様に挨拶する鈴紗。

「初めまして。七海やちよです」

「~~~~ツツ!!」

やちよは微笑みを浮かべて挨拶。

瞬間、鈴紗リンシャの顔がカーツ!!と真っ赤に染まる!

「キヤ~~~~~!!! 七海やちよさ~~~~~ん!!!」

本当に、ほんとにほんとにホント~~~~~に本物なんですネっ?!!」

「ええ」

「うわうわうわ!! 本当に本物なんだ~~~~~!!?」

あの……あのあの!! ワタシ、魔法少女になる前からアナタのファンだったんですっ! だ、だから……!!」

完熟リングみたいな顔の鈴紗は、両目をVの形にすると、恥ずかしそうに懐から何か

を差し出す。

「わ、わわワワタ……ワタシが勝ったら……サインツ!! 貫ってイイですかツツ!!」  
なんとサイン色紙であった。

「ええ、勿論」とやちよは快く受け取ると、鈴紗リンシャの表情が忽ち歓喜と幸福に満ち溢れていく!!

「やったあ!! じゃあ、ルールはワタシが本当に決めてイイんですか!? イイですよねっ!!」

やちよはコクリと頷く。

次いで審判の秘輝、特等席の海龍と咲蘭に目を配ると、彼女達もコクコクと頷いた。

鈴紗リンシャはやちよに向き直り、ピシツと三本指を見せつける!

「それでは、三本勝負で!! 先に膝を床に三回着いた方が負け、ということだ!!」

「わかったわ。じゃあ……よろしく」

やちよは了承すると、一歩近づき、鈴紗リンシャに向かって、右手を差し伸べた。

「~~~~~ツツ!!」

ボンツと顔から火が出そうだ!!

憧れの七海やちよと手合わせできるだけでなく、握手まで交わせるなんて!!

ありがとう!! 宗師様、老師の皆様、堕龍のみんな、蒼海幫のみなさん!! 本当にあ

りがとう!!

アナタたちのお陰で、ワタシは今、幸福の絶頂に居る!!

「こちらこそ、よろしくお願ひしまーす!!」

何も迷いは無い。

鈴紗も右手を伸ばして——やちよの手をギユツと掴んだ!!

「馬鹿め」

——不意に、海龍がそう呟いた。

鈴紗<sup>リンシャ</sup>は確かに、  
そう、この時。  
何も迷わなかつた。

——それが、仇となった。

ペシヤツ

——と、小さな音が会場に響いた。

「えっ?」

何が起きたのか分からなかった。

七海やちよと握手を交わした途端、“膝からフツと力が抜けた”。  
鈴紗リンシャが気が付いた時には、両膝が床に付いていた。





海龍がふつと笑う。

「宜しい。では残りの二本で挽回して見せろ」

「は、ハイッ!!」

鈴紗は<sup>リンシャ</sup>ビシツと気を付けをして威勢よく返事をする、再びやちよに向き直る!!

「よくも卑怯な真似を! ……じゃなかった。さつきは油断しましたが二度目はありませんよ!! 全力で参ります!!」

再びジャグリングのように棒状を高速旋回させると、力強く両足を踏ん張って構える。

対する七海やちよの表情は相変わら涼しく、直立不動の姿勢を崩さぬまま。

しかも固有武器すら構えず、素手で。

「?? …… ……槍は、持たないんですか?」

「ええ」

ムツと鈴紗は<sup>リンシャ</sup>顔を顰めた。

自分とて、まだまだ経験は浅いが、蒼海幫の精鋭の一人。

いくら憧れの人が相手でも、馬鹿にされるのは癪に障る。

「後悔しても、しりませんよ!!」

〈伸びろ如意棒!!〉

ヒュン、と風切り音。

鈴紗が念じた瞬間——如意棒の先端が一瞬で伸長し、やちよの喉元に迫った!!  
しかし、

「えっ?」

再び、有り得ない光景を目の当たりにして鈴紗が目を剥いた。

七海やちよが、視界から消えたのだ。

咄嗟に首を上下に動かす。避けるべく屈んだわけでも、飛翔した訳でも無い。

「っ!!」

刹那——背中から凍り付くような殺気!!

「!? ハイイっ!!」

信じられないが、一瞬の内に背後に回られていた!?

振り向き様に、旋回して勢いを付けた如意棒を脇腹に叩き込もうとする。

「なっ!」

パシッ——と、如意棒は当たる寸前で、やちよの右手に受け止められた。

「……ッこの!!」

離せ。鈴紗は反射的に如意棒を引つ張るが、やちよの軸はビクともしない。

額に汗が滲んできた。まるで石像だ。こんな細身の体のどこにこれほどの膂力が有

るのか——

焦りと、自身の棒を引つ張る力で鈴紗の軸がブレた。

それが二度目の仇となる。

如意棒を掴んだままのやちよの右手が、レールを沿うようにスツと直進。そのまま、鈴紗の握り手——正確には、彼女の合谷（しょうこく）とやちよの合谷——が密着した。

「!!」

判断を誤った。

棒を放せば、逃れられた筈——と、気付いた時には、もう遅かった。

如意棒の主導権が——

「っ」

——七海やちよに遷る。

鈴紗の身体が、まるで棒に振り回されたかのように旋回した。

ギョーンツと宙返りした後、背中から床に叩きつけられる。

痺れるような激痛が全身に響いた時には、視界が天井を向いていた。

「二本」

「なっ……!」

秘輝（ミフツイ）の判定が聞こえてきて、鈴紗は我に返る。

正に一瞬の出来事。

何が起きた。

強い、強すぎる。

これが、神浜の英雄。

圧倒的じゃないか。

今日まで積み上げてきたものが、まるで通用しない。

張り子の虎——いや、正に赤子の手をひねるように、鮮やか。

しかし——

だけど——!!

「っ……!!」

歯を喰いしばって痛みを堪えると、アクロバティックに起き上がる鈴紗。リンシャ

諦める訳にはいかない。

自分には墮龍の鋭士としてのプライドがある。中国武術こそが——宗師が生み出した『蒼碧拳』こそが最強である事を証明し続けなければならない。

だから——

再び如意棒を構える鈴紗から、虎の様な気迫が発せられた。力強い眼光がやちよを射貫く!

「ハイッ！」

裂帛の気合と同時に、如意棒がグンツと伸びた。

——速い。

先程よりも遙かに高速で迫る先端。しかし、対応策はできている。やちよは当たる寸前で如意棒に添えるように手を——

へしなれ、如意棒!!」

「っ?!」

——叶わなかった。

掴み取ろうとした手が空を切った。如意棒が勝手に避けたのだ。

咄嗟に棒全体を見遣ると、鈴紗の持ち手から先が反り曲がっていた。宙で大きな半円を描くように。

この形状——ひよつとして……

「!」

攻撃の意図に気付いたやちよが咄嗟に、バックステップ。

ビュツと風切り音。如意棒の先端が消えたように見えた瞬間、足元から轟いたのは耳を劈く程の爆裂音!!

(鞭か)

瞬間的に下を見ると床がボコリとへこんでいた。凄まじい威力だ、正に雷鳴——  
それにしても、何て応用力に長けた如意棒だろう。恐らく、固有魔法は物体の形状を  
変化させるものか。

「奥の手です」

鈴紗リンシャが不敵な笑みを浮かべた途端、だらしなく床に垂れていた如意棒の先端が、  
シユツと元の形に戻る。

間違いないと見ていいだろう。

鈴紗リンシャが如意棒をゆつくりと振り上げると、再び持ち手から先が、ゆらりと半月を描く  
ように反り曲がる。

「……」

「逃げられる術は、ありませんよ!!」

じつと、先端の動きを見つめるやちよ。

鈴紗リンシャは勝ち誇った笑みを浮かべて断言すると、如意棒を腰の後ろまで大きく振りかぶ

り——全力で振り抜いた!!

風切り音——

(直撃!!)

——直後に響いたのは二度目の雷鳴!!



最早、如意棒は意味を為さなかった——！

「うわあああああああ!!」

そう判断した鈴紗<sup>リンシャ</sup>が武器を投げ捨て、声の方向へと拳を振り抜く。

だが、いつの間にかそこで直立していたやちよの右手にパシツと受け止められる。

「このっ……!!」

もう片方の拳も振るうが、それも左手で受け止められてしまう。

——こうなったら、力比べだ。

鈴紗<sup>リンシャ</sup>は自身の膂力に自信を抱いている。同年代の墮龍のメンバーの中でも随一と言

われた程だ。

これなら、負けはしない!

「いいぞ〜!!」

「やっちやえ鈴姉<sup>リン</sup>〜!!」

観客席から、姉妹弟子達が声を張り上げて応援してくれた。

——そうだ、このまま押し切ってしまえば……

「あ、あれっ?」

「……………」



だが、鈴紗は瞠目した。

渾身の力を込めて押しているのに、やちよの軸は一切微動だにしない。

「えっ、何で!?!」

「……………」

「なんでなんでなんで?!」

「……………ふふ」

訳が分からず呆然となる自分を、やちよは只涼しい顔で見つめている。

「どうしたんですか〜〜!!」

「いつもみたいにグイッと押し倒しちゃってくださいよろしく!!」

（やってる、やってるよろしく!!?)

姉妹弟子達が応援してくれるが、鈴紗は完全に混乱していた。

一体なんだこの状態は。どう頭の中で処理すればいい。

やちよの膂力が自分よりも凄いと、石像の様に重い——とか、そういうんじや無く

て…………

（ワタシの「力」が…………この人に全く伝わっていない…………!?!）

まるで「空気」を押すような——そんな「感覚」だった。  
そこで、やちよが微笑を浮かべて一言。

「終わりよ」

グツと、掌に力を込めると——

「あっ！」

何故か鈴紗リンシャの膝裏ひざうらにつつたような痛みが走り——

——両足がガクリと折れた。

「三本。七海やちよの勝利」

瞬間、秘輝がそう判定を下し、勝敗が決定した。

☆

「見事な合気と古武術だな」

「ええ」

「ふふ……。やはり、七海やちよは我らに匹敵する『龍』と成り得そうかな？」

「さあ……。？ まだ、分かりませんね……」

海龍の言葉にそう返しながらも。

五龍の一角・鄭チヤン 咲蘭シヤオランの口元は愉快そうに吊り上がっていた。

☆おまけ——次回予告

「初めまして、劉 蓮穩（ラウ||リエンウエン）です」

—— 一戦目を快勝したやちよ。

—— しかし二番手に現れたのは、蒼海幫・墮龍最強のエース!!

デュオロン

「っ!？」

「言つとくけど、わたしに『合気』は効かないよ」

—— やちよの古武術、まるで歯が立たず。

「わたしは天下一の槍術使いを自負している。だから、わたしを差し置いて勝手に『最強』を名乗られるのは、気に入らないね……」

—— その槍術、正に神業の如く。

—— 七海やちよ、絶対絶命か。

「『最強』は世間が勝手に呼称しただけのこと……全く、迷惑な話です」  
「貴女が鬼神の如き強さなれど、人のままなら、私が修羅に成り果てれば良いだけのこと」

しかし、武士の闘志は決して潰えず。

死の覚悟を以て、戦いを制するのみ。

七海やちよ 第3話 「二番手 蒼鬼・劉（ラウ） 蓮  
穩（リエンウエン）」

「三本、七海やちよの勝利」

審判・楊<sup>ヤン</sup> 秘輝<sup>ミフウイ</sup>老師の声が響き、一試合目の勝敗は呆気なく決した。

孫<sup>スン</sup> 鈴紗<sup>リンシャ</sup>は両膝をペタリと床に付いたまま、呆然としていた。

それも当然、これまで積み上げた中国拳法の技術が何一つ、通用しなかったのだから。

でも、それ以上に……

「うっ……」

じわり、と鈴紗の両目に水が浮かぶ。そして、

「うわああああああああああああああああああああああああん!!!」

まるでダムが決壊したかのような大量の涙を流して、泣き喚いた。

周りが何事かと鈴紗を注視する。負けたことが余程悔しかったのだろうか？

「せっかく七海やちよさんのサインを貰えるチャンスだったのにいいいい!! 私

バカ!! 間抜け!! 貧弱!!! 雑魚! 雑魚! 雑魚!! 雑魚!! 雑魚!! 雑魚!! 雑魚!!

なんだ、そんなことか……と同門の魔法少女達は一斉に脱力。

だが、七海やちよだけは、真剣な顔で鈴紗に歩み寄った。

彼女の眼の前で片膝を付き、鈴紗に手を差し伸べる。

「えっ?」

きよとん、となる鈴紗に、七海やちよは柔らかく微笑んだ。

「良いですよ、サイン」

「えっ! えっ!!? 本当に良いんですか!」

鈴紗は目を丸くして驚いた。驚きの余り、心臓がビクン、と飛び跳ねた。

七海やちよの頭上には、丁度天井からの照明が差している。笑顔の美しさも相俟つ

て、鈴紗の眼には、後光を浴びた女神様に見えた。

「で、でも負けちゃったしなあ……」

「私と戦ってくださったお礼です。是非」

「そ、そうですか!? それじゃあ……」

鈴紗が懐から真つ白なサイン色紙とペンを取り出すと、やちよはそれを受け取って、さらさらと書いた。

「どうぞで」

「~~~~~ツツ!!」

色紙を返された瞬間、鈴紗の身体が歓喜に打ち震える！

「ありがとうございます!! ありがとうございます!! うわああああああああああああああああああああああああああ!!」

鈴紗はやちよに深々とお辞儀した後、ピョンピョン飛び跳ねて大喜び。

この一連の様子を眺めていた同門の魔法少女達も一様にコメントを挙げていた。

「優しいね」

「うん、あれも武士道ってやつなのかな?」

「でも本当に強いよ、鈴紗姉さんが一発も当てられなかったなんて……」

「七海やちよ……やっぱ凄いなんだ!」



「ナイスファイト！」

「かつこいいく!!」

七海やちよの鮮やかなる武術。そして、敗者に手を差し伸べる優しさを目の当たりにした彼女達は一斉に拍手を送り、七海やちよに賛辞を送った。

やちよは立ち上がると、彼女達に向けて深々とお辞儀をする。

「……これでご理解頂けたでしょう。王宗師<sup>ワン</sup>」

一方、都ひなのは拍手を送りながらも隣に座る龍王を睨んでいた。

「七海やちよは武術の達人。決して貴女方中国拳法家に引けは取らないと」

「ふふ……」

「我々と親睦を深めたいのでしたら、こんな鬪劇は非合理の筈。今すぐ辞めるべきです」

「成程……。つまり、都副部長の考える合理と私の考える合理は、別次元にあるようだ」

微笑を携えながら言い放たれる一言に、ひなのの眉がピクリと反応。

「何……?」

「彼女には、我々の『域』に達して貰わねば、困るのだよ……」

海龍<sup>ハイロン</sup>は視線を七海やちよに戻した。

七海やちよも海龍の方を向いていた。

「流石だ、七海やちよ。あの程度では朝飯前の運動にもならないか」

「お戯れが過ぎます、海龍宗師」

蒼海幫の中国武術の神髓。

それを見せるのは、一門下生に過ぎない鈴紗では無い筈。

無論、神髓に打ち勝たねば、龍王とは対等にはなれず、治安維持部に未来は無い。

氷の如く冷え切ったやちよの鋭い視線に、海龍は笑みを隠せなかつた。

微笑み合う両者だが、その瞳にはお互いを威圧する程の凄まじい気迫が込められていた。

「安心したまえ。二番手は………もう決まっている！」

それが、合図だった。

刹那、背後から殺気!!

「………！」

やちよは振り向かず上体を横に逸らした。こめかみスレスレに『槍』が飛んできた。

一体、どこから……

「！」

推察する間も無く、今度は頭上から殺気を感じて、半歩下がる。眼と鼻の先で同じ形状の『槍』が落下して、床に深々と突き刺さった。

「っ！」

一息付く間も無く、やちよの勘は次の殺気の方角を捉える。

—— 足か!!

やちよは左足を軽く上げる。踝くるぶしを狙っていた槍の刃先を回避した。そして、勢いよく左足を落として刃先を踏みつける。槍の動きが止まった。

「せいやっ!!」

“相手”の張り上げた声が響くのと同時に今度は、殺気が真横から迫っているのを直感。

狙いは脇腹——やちよは半歩下がって、槍の刺突を回避すると、柄を握り締めている“相手”の左手首を両手で掴み、

「っ！」

合気道の技・“小手投げ”を決める。

手首を固められて自由を奪われた相手の身体は、軽々と投げ飛ばされた。両足が宙で半円を描き、床に背中を叩きつける——

「ニッ」

直前で、相手は不敵に嗤った。

「チヨイさあっ!!」

いつの間にか、右手には槍が握られていた。

投げられた際の遠心力を利用して、思いつきり横薙ぎする！

やちよは瞬きながらも、刃が、自分の眼を狙っているの一瞬で判断した。

自身も槍を召喚し、両端を握り込んで、顔前で構える。

がきいん、とけたたましい金属音が火花を散らして吠えた。眼潰し攻撃はギリギリで受け流した。

「はっ！ はっほっふっ」

左手首を放したことで自由になった。〃相手〃は両足で着地すると、連続バク転でやちよと距離を取った。

やちよは、〃相手〃の全容を視認した。

澄んだ湖を思わせる、蒼穹のショートカットヘアに、一見穏和そうに見える顔付きの、小柄な女性だった。

「初めまして。劉 蓮穩（ラウ・リエンウエン）です」

拱手をしながら、女性は自己紹介した。

子供のような顔つきからは想像もできない程の、凄まじい魔力を感じる。

先の鈴紗とは比較にならない。正に達人と言うべき雰囲気と威圧感だ。

「……七海やちよです」

お辞儀をして、自己紹介を返す。

と、審判の秘輝が蓮穩リエンクワエンを睨み付けて、声を挙げた。

「蓮穩リエンクワエン！ まだ試合は始まってないザンスよ！」

「魔法少女は四六時中が戦場、一瞬の油断が命取り、じやなかったんでしたっけ?」

「むう……」

が、蓮穩リエンクワエンに鼻で笑ってそう返されてしまい、押し黙る。

蓮穩リエンクワエンはやちよに顔を戻すと、和やかに語り始めた。

「七海やちよ。君の噂はよく聞いているよ」

「……」

「神浜最強の魔法少女、つてね」

やちよは黙したまま、姿勢を落とした状態で、蓮穩リエンクワエンをじつと捉えていた。

彼女がどのタイミングで襲いかかってでも対処できるように。

「わたしも、蒼海幫最強の槍使いなんだ。そして……天下一の槍使いを自負している」

ゆるやかに微笑む蓮穩リエンクワエンの大きな瞳の奥は、冷え切っていた。

「だから……君みたいな小娘に、わたしを差し置いて『最強』を名乗られるのは、少々気に入らないね」

やちよに対して明確な敵意を突き付ける。

凄まじい氣迫だ。一瞬でも油断すれば躊躇なく心臓を挽ぎ取るだろう。

だが、やちよは臆する事無く、瞳に闘志を宿して語り始める。

「最強」とは、神浜市の人々が勝手に呼称したもの……まったく、迷惑な話です」

「へえ。では大人しくわたしに譲ってくれるのかな？」

「いえ……」

やちよの眼光が冷気を放つ。

「ここで、『天下第一の槍術使い』を破り、真の最強の名を手にするのも一興。さすれば、

人々は私の名を聞くだけで畏れ慄き、市内で悪事を働く輩は、存在しなくなるでしょう」

「なるほど、ね。良い度胸だ」

蓮穩は満足そうに笑って、槍を構える。

やちよも、相貌を引き締めて、槍を構えた。

両者共に、獲物の牙を向き合い、鋭い眼差しで睨み合う。

「私の流儀は、『なんでもあり』でね。どっちかが先に降参するか、氣を失うまでやり合うってのはどうだい？」

今まで、そのスタイルを貫いて負けたことが無いのは、容易に想像できた。

やちよは、自信満々な蓮穩リエンウエンの提案に頷く。

「良いでしょう」

「楊老師も、それでいいかい？」

「……仕方が無いザンスね」

秘輝はふう、と溜息を付いた。

この場での責任問題を考えれば、あまり流血沙汰は起こさないで欲しいのだが、聞く耳を持つ二人ではない。

「それでは……試合、始め!!」

審判の合図と同時に、踏み込んできたのは蓮リエンウエン 穩だつただつた。

一気に間合いを詰めて神速の勢いで槍を突き出す。

今まで戦ってきたどの相手よりも洗練された動きだ。だがやちよは冷静。体の軸をずらさずに、槍の両端を握り、蓮リエンウエン 穩の連続突きを受け流しながら後退する。

このまま防戦一方と思われたが――

「っー」

胸に迫っていた蓮リエンウエン 穩の横薙ぎをやちよは上体を屈めて避ける。同時に床に槍の底を突いて飛び跳ねた。ぐるりと錐もみ回転の如く宙で腰を旋回させると、威力を上げた槍の一本振りリエンウエンを蓮穩の頭上に振り降ろす。槍を上段に薙いで受け止める蓮穩だが、相手の

槍は重く、地に落とされて抑えられてしまう。だが、それで焦る蓮穩ではない。すぐに足払いでやちよの槍を払いのけた。それを利用してやちよは腰を回し、胴目掛けて槍を払う。蓮穩は槍を両端で握って受け止める。ガキーン、と凄まじい衝撃が槍を襲った。その威力を利用して蓮穩は旋回！ 同時に屈めるように腰を落として、槍を上段に薙いだ。狙いはやちよの眼。だが、やちよは蓮穩が半転して自分に背を向けた時には、槍を持ち換えていた。眼前に迫りくる穂先に向かって、自分の槍を突き出す。キーンと、金属同士が響いた。

ここで注目すべきが、やちよの槍は穂先が三又。

対する蓮穩の槍の穂先は、先端に一本、反った刀が装着された薙刀スタイルだ。突き出されたやちよの槍の三又の間に、蓮穩の槍の刀が挟まれた。

「およっ?」

急に槍の自由が効かなくなり、蓮穩がきよとんとなる。

確認して、槍を引き抜こうとする。しかし、穂先は知恵の輪の如く、相手の槍の穂先とガツチリ絡み合ってしまった。ガチャガチャと音を立てるだけで抜く事ができない。

瞬間——やちよの眼が光った。

蓮穩が槍を抜こうと持ち手に力を込めたのと、やちよが自分の槍の底を握り、力を込めたのは同時だった。



「っ!!」

瞬間、蓮穩リエンウエンの視界が回った。

自分が握っていた槍に手首が捻られたような感覚がしたのと同時に、身体が宙に浮いた。

「おおっとお」

視界が地面に向かう前に、咄嗟に槍を手放す蓮穩リエンウエン。空中で一回転して、体勢を直すと、両足で床に着地した。

その瞬間——武器を手放し、隙を見せた所——をやちよは見逃さなかった。

既に足を強く踏み込んで、勢いをつけた槍の穂先を蓮穩リエンウエンの顔面に向かって突き出す。

だが、蓮穩リエンウエンは不敵に嗤うと、避ける動作もせずに、顔面で受け止めた。

「っ!!」

気でも触れたか——と思ったのも束の間。

眉間に差し込まれた槍に、手応えは無く。蓮穩リエンウエンの全身が、水に変化して消失した。

「まーさか、槍で“合気”を使ってくるとはね……」

「っ!」

背後から“蓮穩リエンウエン”の“声”が聞こえてきて、やちよは慌てて振り向くと同時に槍を振るった。

言わずもがな、両手で槍を握って攻撃に備える蓮穩リエンウエンがいた。

「成程、技術が互角なら……」

「!!」

やちよが狙うは胴。既に予期していたのか、その前で槍を構える蓮穩リエンウエン。だが、微笑と同時に行われた動作に、やちよは瞠目。

「打ち合わなきや良い訳だ」

両手を開き、自身の槍を床に落とす。

そのまま、迫りくるやちよの槍を両手で受け止めた！

「っ!？」

やちよは槍を振るう動作に、全神経を集中させていた。

槍と自身を一体化させていた事が仇となる。

凄まじい臂力で握り込まれてしまい、やちよの身体が一瞬、硬直した。

隙有り——蓮穩リエンウエンは左手はやちよの槍を握り込んだまま、右手を開放。彼女に向かって足を一步踏み込んだ。そして、槍の如く鋭い右拳をやちよの人中目掛けて突き出す！

「むむっ?」

が、今度は蓮穩リエンウエンが瞠目した。

右拳がやちよの顔面に入ったのは良いが、パシャンツと音を立てて吸い込まれたのだ。

まるで、水に浸かるように。

〈残念ですね。貴女が捉えたのは〉

やちよの全身が波を打ちながら変化していく。

「……!!」

「私の手です」

蓮穩リエンウエンは拳を抜こうとしたが、抜けなかった。

一瞬で『自分の拳を、右掌で受け止めた状態のやちよ』が目の前に立っていた。

「っ」

瞬間、蓮穩リエンウエンの膝の力がフツと抜けて、屈んだ。

——孫リンシャ 鈴紗リンシャに使った握手合気のやつか。

だが、

「なるほど。自由を奪ったつもりかな？ その程度で」

昔、ある武術家に、「全く同じ技」を掛けられたことを思い出して、蓮穩リエンウエンは不敵に嗤う。

「姉者……鄭 チヤン シャオラン 咲蘭のは、もつと痛かったぞ」

「……………」

冷徹にじつと見下すやちよだが、蓮穩リエンウエンの拳を握る掌には、じわりと汗が滲んでいた。

「肘から膝にかけて、骨が粉碎した」

やちよの眼が、微かに揺れるのを蓮穩リエンウエンは見た。

今度は蓮穩リエンウエンの眼が光った。足元が蒼白く光りはじめる。

次の瞬間、やちよは息を飲んだ。蓮穩リエンウエンの両足の下から槍が出現。二本とも真上に飛

翔し、蓮穩リエンウエンの下半身を天に反り上からせる。

やちよは咄嗟に、蓮穩リエンウエンの右拳を解放する。

「ひゃつはああああ!!!」

空中で逆立ち状態となった蓮穩リエンウエンが歓声と同時に、放されたばかりの右手をぐつと伸

ばし、やちよの右手を握り締めた。

——— 手首が固定された。これでは動けない。

やちよが見上げると、獯猛に嗤う蓮穩リエンウエンの顔と対面した。その左手にはいつの間にか

槍が握られている。

「せいやああああ!!!」

気合と同時に、やちよの顔面目掛けて、槍の穂先を突き落とす蓮穩リエンウエン！

再び水に変化して回避——しようと思ったが、魔力の消費量も大きく、長期戦必至の相手には現実的な手法ではない。

なので、やちよは直前で顔を横に逸らした。刃が頬を掠めて鮮血を散らす。

「っ!？」

まさか今の状態で避けられるとは思ってなかった蓮<sup>リエンウエン</sup>穩が瞠目。

——— 今だ!!

やちよが左手をぐつと伸ばす。

槍を握り込む蓮<sup>リエンウエン</sup>穩の左手首を掴んで下方に引つ張り落とす。

—— 拙い……やちよと自分の右手は握りあったままだ。落ちる力を利用して、合気

を掛けられる可能性がある。

そう考えた蓮<sup>リエンウエン</sup>穩は咄嗟にやちよの右手を解放する。

それが、狙いだった。

やちよは放されたばかりの右手をぐつと伸ばした。落ちる蓮<sup>リエンウエン</sup>穩の左腸骨を掴んで、

手前に引き込む。同時に左手で掴んでいた蓮<sup>リエンウエン</sup>穩の左手首を、前に押し出した。

瞬間——蓮穩の身体が放り投げられた。

宙返りをして、床に背中を叩きつける——

「ふんっ!!」

——よりも早く両手を勢いよく床に着いて難を逃れた！　そして、反動で後ろ向きに飛び退く。ドロップキックの要領で垂直に伸びた両足蹴りがやちよに迫る！

やちよは、槍の両端を握り込んで防御の姿勢を取り、受け流そうと考えたが——

直後、瞠目。

蓮穩リエンウエンの両足は槍に当たる寸前で、がばつと開き、蟹ばさみの要領でやちよの胴を挟み

込んだ。そして、

「ちよいさあああああ!!」

裂帛の気合を両大腿に込めると同時に、やちよの身体を無造作に投げ飛ばす。

やちよは背中から床に勢いよく叩きつけられた。瞬時に蓮穩リエンウエンが跨る。

機関銃の如き、速射音が響き渡った。

回すように拳を撃ち込むことで間断無き連続突きを可能にした、詠春拳の必殺技——

俗にいう『チエーンパンチ』をやちよの頭部めがけて打ち込む。

咄嗟にやちよは両腕で顔を庇った。しかし、一発いっぱつの拳の威力は凄まじく、

打たれる度に腕の骨が激しく軋んだ。

「くっ」

だが、攻撃が頭部のみ集中していたのは不幸中の幸いか。

絶え間なく襲い来る激痛に堪えながら、やちよは足を蹴り上げて、蓮穩リエンウエンの腹部を見

舞った。

不意打ちを喰らい、蓮リエンウエン穩は「ぐうっ」を息が詰まったような唸り声を挙げて後退する。

「ぐへっ」

直後、顔面に「何か」がぶつかって、間拔けな声を挙げる蓮リエンウエン穩。

床を見ると、何故か厚底ヒールが転がっていた。

顔を前に戻すと、立ち上がったばかりのやちよが居た。右足に靴は履いておらず、裸足である。

どうやら、飛び道具替わりに靴を飛ばしたのだろう。

「……ふんっ」

——小癩な真似だ。けど、面白いじゃないか。

蓮リエンウエン穩は、顔を愉悦に染めながら、再び左手に槍を召喚して、一直線に突っ込む。

やちよも槍を持ち直して、再び防御の構えを取った。

残り1mのところまで蓮リエンウエン穩が腰を捻る。二回転。より速度と破壊力を増した槍の一撃をやちよの首筋目掛けて振り抜く。やちよが、首筋の前で両端を握った槍を掲げて受け流そうとする——そう確信したからこそ、蓮リエンウエン穩は嗤った。

甘い。わたしの本気の一撃は、如何なる防御も貫通する！

「っ!?!」

槍ごとやちよの首の骨を叩き壊すつもりだった蓮穩だが——瞠目した。なんと、やちよは槍を手放して、突っ込んできたのだ。

やちよの身体は蓮穩リエンウエンの身体と密着。必殺の一撃は躲されたものの、蓮穩リエンウエンの余裕は揺らがない。中国拳法家に正面きつて挑むなど自殺行為も甚だしいからだ。

やちよは腰を落として、頭を屈めながら袖口を掴むと、股下に何も履いてない右足を潜り込ませた。

蓮穩リエンウエンの右足に絡みつく。大外刈りでも狙うつもりか、だが、甘い——と蓮穩リエンウエンは、腕を高く振り上げて、やちよの丸まった背中目掛けて、肘鉄を落とそうとした——

「っ！ うあっ?!」

——瞬間、蓮穩リエンウエンが呻いた！

右足から電流の様に激痛が走り、思わず両膝を床に落とした。

見上げると、自分を冷たく見下ろすやちよが居た。

彼女が「何を」したのか、直ぐに悟った。

自分の足に絡ませて「技」を仕掛けようとしたんじゃないかと、ただ、押したのだ。

踝の裏にある「筋肉の無い溝」——そこに存在する、刺激のツボを。

裸足の、親指で。

「……………」



そのために靴を脱いだのか、と蓮穩リエンウエンは舌を巻いた。

すかさずやちよが飛び掛かってくる。蓮穩リエンウエンが手刀を振り上げて迎撃しようとするが、悪手だった。

やちよが技を仕掛けた！ 手首と肩を掴んで蓮穩リエンウエンを背中から地に叩き伏せる——合気道の技・一教だ！

「無駄無駄あツ！」

だが、この程度の束縛で蓮穩は止まらない。

爪先で床を強く蹴ると、下半身が高く浮いた。海老ぞりとなった両足が、自分を抑え込むやちよの首をギュッと挟み込んだ。

「ぐっ」

ぎりぎり頸動脈を圧迫されて、やちよが苦痛に呻く。必然的に腕の拘束が弱まっ

た。蓮穩リエンウエンはそのタイミングを逃さず、両手を床に付いて上半身を浮かび上がらせた。

やちよの首に蓮穩リエンウエンの全体重が押し掛かり、背中から床に抑えつけられる。

「死ね」

瞬時に蓮穩リエンウエンは、足を組み替えた。やちよの首を『足四の字固め』で締め上げる。

だが、窒息を待つ程、蓮穩リエンウエンは優しくない。

腕を振り上げて、脳天を叩き割ろうと肘鉄を落とすが——寸前で、表情が苦悶に歪ん

だ。首の拘束を解くと、慌ててやちよから飛び退く。

衣装から露出した右大腿からは、真紅の歯型がくつきりと浮かんで、血を流していた。やちよが嘔み付いたのだ。

「……………」

「……………」

蓮穩リエンウエンは再び愉悦を張り付けながら、左手に槍を召喚する。

やちよも立ち上がると、蓮穩リエンウエンを鋭い眼差しで見据えながら、右手に槍を携えた。

「っ!!」

そしてお互いに先端を向き合わせて、衝突する!!

☆

数十分が経過した。

蓮穩リエンウエンが高速で刺突を繰り出す。やちよが両端を掴んだ槍で後退しながら受け流す。蓮穩リエンウエンが足払いでやちよのバランスを崩し、腰を回して重い一撃を、胴か、首筋か、眼か、脳天目掛けて放つ。やちよが回避して蓮穩リエンウエンに飛び込み、**技**を仕掛ける。投げ飛ばされる蓮穩リエンウエン。しかし、宙で体勢を立て直し着地。懐に飛び込んで拳か手刀を頭部に突き出す。やちよのこめかみを掠める。回避と同時に旋回して蓮穩リエンウエンの首に槍を薙ぐやちよ。蓮穩リエンウエンが一瞬で槍を持ち換えて防御する。そこで飛び退いて、距離を置く。睨み合う二人……

そんな「ルーチン」が高速で、4，5回繰り返されていた。

やちよと蓮穩リエンウエンの戦いは最早「死闘」と呼ぶにふさわしく、槍を打ち合う度に生じる火花はまさに迅雷の如く苛烈だった。

周囲に座る門下生達は、どちらかを応援するでもなく、ただ緊張と興奮に肩を震わせながら、じつと、何も言わずに見守っていた。

蓮穩リエンウエンは自身の口に偽り無く槍術の達人であり、門下生の中では最強の実力を持つ魔法少女だ。

彼女に対抗できるのは、「紅鬼」と称される劍豪、洪カワ梅華メイファぐらいだろう。

負ける姿など、誰も見たことが無い。

だが、七海やちよは、そんな蓮穩リエンウエンを相手に互角の戦いを繰り広げていた。

常に冷静に相手の動きを観察し、隙を付いて合気道か古武術の“技”を使って、確実に虚を突いている。

「これはもしかすると、もしかするかもしれない……」

海龍の呟きに門下生全員が頷く。

——絶対的な存在が、崩れる。

それは、例えばプラスかマイナスの結果であろうと、目にした人の心に強い感動を与えるのは違う。

だが、中国武術以外の武道に敗れるなど、あつてはならない。

門下生達の眼には、強い期待と不安が浮かんでいた。

「せいやああああ!!」

「っ!!」

6度目のルーチンが終わった直後、両者は互いに槍を一閃。けたたましい金属音を響かせて、交錯した。

体にダメージは無い。

しかし、直後、目の前で繰り広げられた光景に、門下生一同が驚愕した。

いつの間にか、両者は会場全体に、槍を“設置”していた。

無数に宙に浮かぶそれらがひゅんひゅんと音を立てて直進！ 空中で互いに衝突。間断なく耳朵を刺激する金属音と、雷と見紛う程の火花を連続で散らす。

擂台の上が、爆風と光で包まれて、二人の姿が一瞬、見えなくなる。

「……………」

「……………」

——やがて、それらが晴れると、試合開始前と同じく、槍を向き合った状態の二人が見えた。

お互いに槍の豪雨に晒されながらも、一本たりとも決定打には至らなかつたのだ。門下生一同の背筋が凍った。

——二人とも、人間ではない。まさに、“化け物”……………！

「っ！」

「おおつとお！ ストップ！ タンマ、タンマ！」

突進を仕掛けようと足を強く踏み込んだやちよだったが、リエンウエン蓮穩が掌を伸ばして制止した。

「……………」

足にブレーキを掛けて、リエンウエン蓮穩を伺うやちよ。

リエンウエン蓮穩はふうふうと溜息を付いた後、お手上げのポーズを取った。

「わかったよ、七海やちよ。君の強さは認める。技術のレベルは同じ。身体能力も同じ。おまけに考えてることまで同じとあっちゃあ、いつまで経つても埒が開かないよ！」

「……」

「だから」

蓮穩の瞳が、ギンと瞬く。

「次で、確実に勝負を付ける」

寧猛に嗤ったのと、足元に魔法陣が出現したのは同時だった。

水流が足元から発生して渦巻き状となり、リエンウエン蓮穩の全身を覆い隠す。

「わたしと君の魔法の元素は、奇しくも同じ『水』。だから」

パシヤン、と水流が弾け飛んだ。リエンウエン蓮穩が魔法陣と一緒に、『消滅』する。

〈こんなことができる〉

「……！」

テレパシーが聞こえて、やちよは警戒した。槍を両手で構えながら、腰を落として周囲を見渡す。

——どこから仕掛けてくる？ 一体、どこから……。

「いっだよ」

頭上から、蓮穩リエンウエンの声が聞こえた。

途端、観客席からやちよを見上げる門下生達の表情が、一斉に愕然となった。

「……だってば」

「……」

何か冷たいものが、自分の頬を撫でた。

それが蓮穩リエンウエンの「掌」だと確信して、やちよはぞつと肩を震わした。

蓮穩リエンウエンの姿は、相変わらず周囲には無い。

だが、背中から腰に掛けて違和感が有った。冷たい感触。子供を一人負ぶったような重みが、確かに。

そして、「自分だけに」驚きの視線を集中させる門下生達。

それらが、やちよの身に何が起きているかを、教えてくれた。

——蓮穩が、生えている。

「理解してくれたみたいだね」

再び、頭上から穩やかな声。

「やちよの背中から上半身を生やした状態」の蓮穩リエンウエンが、やちよの頬を撫でながら、微笑む。

それが、やちよには恐ろしくて堪らなかつた。悪寒が全身に走り、表情が、蒼褪めていく。

「固有魔法の応用さ。わたしの水質を、君の水質と同じにしたんだ」

「っ！」

歯を喰いしばって怯えを噛み殺すと、やちよは咄嗟に槍を自身の背中に薙いだ。

高速の槍が蓮穩リエンウエンの首を狙う。

だが、パシヤンと音を立てて、通過する。

「わたしと君は同じだって言っただけだからだろうか？ 君の水で生成した槍で、叩けると思ったのかい？」

「くっ」

やちよが忌々しく歯噛みする。蓮穩リエンウエンが嗤う。



「君も同じ魔法の使い手だが、ここまではできまい。結局は鍛錬の数と経験値の差が全てだ。才能は天才的でも、わたしと戦うには、まだ若すぎたね」

水に浸けるように、とぷん、と。

蓮リエンウエン 蓮リエンウエンの両手がやちよの頬に吸い込まれていく。

「君の身体を乗っ取って、降参してあげるよ」

「……………」

不快感が酷い。顔から血の気が引いていく。

まるで、蓮リエンウエン 蓮リエンウエンに頭の水分を搾り取られていくような感覚だった。

やちよは、足元に転がる槍を、拾い上げる。

「だから、君の槍じゃだめだって言っただろう。水質が同じなんだから、通用しないってば」

頭がぼうつとしてきた。

蓮リエンウエン 蓮リエンウエンが何を言っているのかはあんまり理解できなかったが、勝ち誇っているのはよくわかった。

やちよは手にした槍を、渾身の力を込めて、背中に向けて振った。

蓮リエンウエン 蓮リエンウエンは避けようとはしなかった。

先と変わらぬ結果になると理解していたからだ。

英雄と呼ばれし魔法少女にしては随分、無駄で、浅慮な抵抗だと、鼻で笑った。

刹那——バンツと、音が響いた。

「いつ！……えっ?！」

一瞬、何が起こったのか、分からなかった。

蓮穩は、きよとんとしていた。

雷鳴の如き破裂音が響いたのと同時に、首筋が焼けるような熱を感じた。

「なん、で……?！」

全身が痺れ、激痛が襲った。

まさに起死回生。やちよの必殺の一撃が蓮穩の急所を仕留めたのだ。しかし、何故、それができたのか、わからない。

混乱のまま、蓮穩の意識は、そこで飛んだ。

やちよの背中から、ぬるりと、蓮穩の全身が抜けるように零れ落ちた。床に背中を叩きつけて、動かなくなった。

「……………私の槍は、今の貴女には通じない。けれど」

ふう、と一息付いた後、やちよは、気絶した蓮穩を見下ろして、語り始める。

やちよが握り締めている槍。

それは一見、やちよが普段扱ってる槍と、何ら変わらない。

だが、表面に水が滲んで、床に流れ落ちた。

中身を見て、門下生達が、あつと驚く。

「貴女の槍なら、通じる筈」

それは、蓮穩の槍だった。

「確かに私には、貴女程の真似はできない。でも……」

蓮穩の槍の上に、自らの“水”を纏わせ、あたかも自分の槍であるかのように“コー

ディング”を施したのだ。

いちかばちかの賭けは、見事に功を為したのだった。  
審判の秘輝が、そこで声を張り上げた。

「劉<sup>ラウ</sup> 蓮穩<sup>リエンウエン</sup>、気絶。七海やちよの勝利」

やちよは蓮穩に、深々とお辞儀をした。

## ☆おまけ—— 次回予告

「そんな、蓮リエンウエン穂姉さまが負けるなんて……」

「あの人より強い生徒はいないよ」

「でも、誰が戦うのよ……」

——— どうか、二試合目を制したやちよ。

——— 残るは一試合。驚異的な強さを示すやちよを前に、動揺を隠せない門下生達。

「……私が、参りましょう」

——— だが、一人の女が立ち塞がる!!

—— 蒼海幫最強の武術家・五強聖の一人。

—— 名は……

「チャン  
シャオラン鄭 咲蘭と申します」

—— 『武神』の異名を持つ、深翠の龍。

「さあ……貴女の『修羅』をお見せなさい。七海やちよさん」

「……っ!!」

—— 蓮穩を遥かに上回る武術の数々。

—— 中国武術の神髄に、七海やちよ、手も足も出ず……!?

「……………この一瞬に、全てを懸ける——」

—— だが、武士の魂、屈せず。

—— ただ前を向いて、地上最強の相手と戦い抜く。

——それが例え、無謀であつたとしても。

——命を落とすとしても。

——“英雄”であればこそ。

——“修羅”であればこそ。

——神浜の為に、未来の為に、やちよは全力で槍を振るう！

次回、七海やちよ・地上最強への道。  
グランドマスター

最終話、第一部・ラスボス戦、開幕!!

近日公開予定!!





七海やちよ 4話 「三番手 武神 鄭（チヤン） 咲蘭  
 （シヤオラン）」（第一部 最終ボス戦）

「我こそは」と願い出る者はいないか!？」

静寂。

蒼海幫宗師・王ワン 海龍ハイロンの声が演武場全域に高らかに轟くも、帰ってくる声は一つも無い。

当然だ。

先に戦った劉ラウ 蓮リエンウエン 穩ウンは門下生の中で最年長。つまり、蒼碧拳門下生の中では最古参

であり、その実力は老師衆『五強聖』に匹敵すると言われていた程であった。

その彼女が、完敗した。自分達の中国武術より格下と見ていた日本武道。それも、10代の少女に。

「そんな、蓮穩姉様が負けるなんて……」

故に、門下生達の困惑は計り知れない。

誰もが、擂台レイタイの上に立つ少女の姿に震え慄いた。

細身の体躯の上その御伽噺の姫君の如き美貌と、可憐な佇まいは儚さすら感じられ――  
―為れど、その強さは阿修羅の如し。

だからこそ、誰もが有り得ないと思つた。目の前に起きている光景に、頭の中で「バグ」が起きていたのだ。故の、恐怖、混乱。

「どうした!! 挑む者は誰もおらぬのか!? 君たちの気概とは、その程度か! このままでは我が拳の敗北を認めることになるぞ! 中国武術を最強と信ずる君らにとって、それは到底許せることでは無い筈だ!!」

音一つ無い静寂を破るかのように、海龍の鼓舞する声が響く。

門下生達は騒めきだした。しかし、聞こえてくる声々は、いずれも非常に消極的なものばかり。

「そんな」と言われても……!」

「蓮穩姉様より強い人はこの中にいないよ……」

「豪杏姉様ハオジンか美雨姉様メイユイさえいてくれれば……！」

「ううん、梅華姉様メイファじゃないと無理でしょ、アレ……」

だが、黙して座つたままでは、蒼碧拳の敗北は確定である。

それはとても認められることではない——が、七海やちよに勝てる自信も無い。

門下生の声には、その葛藤が渦巻いているように聞こえた。

（いいぞ……。このまま、門下生共が一人も立ち上がらなければ……！）

やちよの勝利は確定し、こんな茶番はお開きとなる筈。

ひなのは、拳はグツと握り締めて、その結末を期待していた。

（だが……）

しかし、一つ懸念がある。

観客席の最奥。門下生に紛れてじつと黙している女性、開明新聞社の静原の事である。

望むものが撮れていないのにも関わらず、落ち着き払っている様子だ。まるで何かを確信しているように。

（嫌な予感がする……）

だからこそ、ひなの顔は浮かない。

海龍は、大手の新聞社と契約して静原をこの場に呼び寄せた。大方、  
“特大のネタ”  
が有ると言つたに違いない。故に、このまま穩便に終幕とは思えなかつた。

だが、できれば――。

ひなのは祈る気持ちで、やちよを見つめる。

終わつて欲しい、このまま。何事も無く。

「もう一度聞く!! 神浜の英雄に、“我こそは”と挑戦する者はおらぬか!」

瞬間――

「私が参りましょう」

“それ”は海龍の隣で、音も無く立ち上がっていた。

その人物を見た途端、ひなの顔から血の気が引いた。

声の方向を見た瞬間、やちよが身構える。

「征くか、武神よ」

海龍がフツと笑い、隣立つ女性を横目で見る。

蒼海幫・蒼碧拳最強を誇る師範衆『五強聖』の一角、鄭ヂェン 咲蘭シキオン老師——！！

「御意」

咲蘭は穏やかな笑みを浮かべて、そう答えると——飛翔！

天井に届く程の宙空で変身したかと思うと、何故か擂台ではなく、場内の最奥まで飛び退く。

訳も分からず、門下生達は一斉に後ろを振り向き、不思議そうに咲蘭を見つめた。

そして——

こつ、と。

咲蘭は爪先で床を軽く叩いた。

刹那——

「えっ!?!」

「なにになになになに!??!?」

「ちよつとくくくツツツ!?!?」

「ひやあああああああああ!!!」

少女達の悲鳴。

突然椅子が、がたがたがたがたとけたたましい音を立てて揺れたかと思うと。

轟!!

——と真下から突風が発生。

咲蘭の前方にある数十もの座椅子が門下生ごと宙に高く浮かび上がった!

（——ようにしか見えないっ!! なんだこれはっ!?!）

「くうううううッ!!」

その光景と全身の響く衝撃に、ひなのは混乱。

ガタガタと揺れる椅子を浮かび上がらないようにどうか両手で抑えてふんばる。

恐らく衝撃破のようなものを発生させたのだろうか——あんな爪先の小突き一つで

!?!? ここまでの波動を!?!?

座椅子が高く浮いたことで、当然ながら、門下生達も次々と床に落下していく。

咲蘭が飛翔。

刹那、その場に居る者の多くが、次の光景に驚嘆する。

宙に浮いた椅子の座面を次々と蹴りながら空中を滑空する咲蘭の姿が見えたからだ。

その動作、まさに木々を飛び移る野猿が如し。為れどその速度は、乱反射する光の如く超高速。

やがて、最後の椅子を蹴り飛ばして、咲蘭は擂台に着地。七海やちよと相対する――

「っ！」

が、何かに勘付き、咲蘭は眉間に皺を寄せた。

自分の下に迫る高速の物体を感知。その数――観測不能。何れも先端が鋭利。同じ物体。

身構える間も無かった。

それらが咲蘭に墜落したのと、ひなのと門下生らが耳を塞ぎ頭を伏せたのは同時だった。

けたたましい炸裂音と金属同士の衝突音が無限に演武場内で反響する。

(くっ!! ……一体何が……)

「っえ!？」

自前の爆弾が爆発した音よりも遙かに激しい音だった。

やがて、音が鳴り響くと、キンと痛む耳を解放してひなのは擂台の上を見る。

煙が晴れた先に映った光景に、驚愕した。

七海やちよと——その前に立っているのは、鄭 咲蘭ではなく。

七海やちよの『槍』。

一本……いや、一本や二本どころではない！ もはや数えきれない！ はつきりと見えたのは、『山』であった。槍で形成された剣山の如き小山が、つい先まで咲蘭が立っていた場所に生えていた!!

つまり。

咲蘭は『生き埋め』にされたのだ。

いや、生きているかどうかさえ、定かではない。

無数の槍が、四方八方どころか『半径180度』から、一斉に飛来してきたのだから。全身が串刺しになっても、おかしくは無かった。

「嘘でしょ?!」

竜誕生館医務室のベッド上にて。



療養中の劉 蓮穩は、テレビ画面での中継を通して、戦いの様子を鑑賞していた。

——が、まさかの光景にビックリ仰天する。

まさか、自分の敬愛する“姉者”が、このような不意打ちを喰らうなんて予想だにしていなかった。

「あれだけの数の槍をわたしや姉者にさえ悟られないように、こっそり仕組んでたつて訳かい!？」

演武場全域に。

宗師、老師を含めた墮龍<sup>デュオロン</sup>の勇士が集うあの中で。

いつ、どうやって配置したのか、蓮穩には皆目見当もつかない。

「……………えげつなあくつ!!」

「やったぞつ!!」

思わずガッツポーズを取り歓声を挙げるひなの。

咲蘭の状態が気になるが、これで七海やちよの勝利は確定——

「……………つ!？」

——と思ったのも束の間。

横目で海龍を見ると、口元が吊り上がっていた。まるで、やちよの攻撃が

べきっ

「ふっ……」

——無意味だと言いたげに。

ばきんっ!!

骨をへし折るかのような音が、破裂音の如く場内に大きく響いた。

その直後に目に映ったものに、ひなの顔が蒼褪める。

門下生達は皆一様に驚いた。だが、彼女達の顔は次第に喜色に染まった。中には歓声を挙げる者。涙を流す者までいた。

反響する音と同時に、槍山がバラバラと崩れ去る。

やちよは恐れも、ましてや驚きもせず、じつとその様子を見据えていた。

中から現れたのは——無傷の鄭 咲蘭。

その表情に一辺の焦りも無し。席を立つ前と変わらず、「仏」の如く穏やかに笑む相貌のまま。

やちよはまず両手に注目した。咲蘭の指の間には、やちよが放った槍の先端の刃が無数に挟まれていた。

つまり、あの一瞬の間に、咲蘭は全ての槍を明確に補足。その全てを「指」の間で捕らえ、「指」の力のみで全てへし折ったというのだ。それだけで、先の鈴紗と蓮穩などと比べ物にならなかつた。

洞察力と判断力と俊敏性、更に膂力。全て、次元が違う。

「……流石は老師」

再び、やちよの前に、咲蘭が相對する。

指に挟んだ先端を投げ捨て、咲蘭は最初と全く変わらぬ様子で悠然と歩み寄ってくる。

「この程度の不意打ち等、兎戯に過ぎませんか」

近づくとつれ、凄まじいプレッシャーが襲い掛かる。

しかし、やちよは一切動じず、氷の表情を保つ。今の状況が、当然の結果だと分かっていたように。

「ふふ……同じ土俵に上がる前に不意打ちとは、戦いを心得ていますね」

咲蘭は嬉しそうに笑う。

まるで「仏」のように——と、これは「そのまま」の意味だ。

やちよが最初に咲蘭を見た時から、彼女の両目は閉ざされたままである。

つまり、先のやちよの不意打ちを見えないまま全て凌いだ、ということだ。半径18

0度からの同時攻撃を、視認せず、暗闇の中で。

「……でなければ死んでしまう。私は、師からそう教わりましたから」

「正解ですよ。七海やちよさん」

しかし、と咲蘭は渋い顔を浮かべる。

「いささか甘かったですね。竜誕館に入る前に槍をたくさん召喚して置き去りにする。鈴紗ちゃん、蓮穩ちゃんとの試合中、皆が自分に意識を集中させている間に、外の槍を動かし、演武場内にくっそり配置……と、ここまででは良かった。しかし、蓮穩ちゃんとの戦いが激しくなったせいで、意識が配置した槍から聊か削がれてしまったようですね。宗師と楊老師と、私には、バレてしまいましたよ？」

「やはり、そうでしたか。ご教示頂き感謝致します」

やちよは頭を下げる。咲蘭はふふつと微笑む。

戦いとは油断大敵。それを十分に理解しているやちよだからこそ、咲蘭か、秘輝ミフウイか、海龍のいづれかが、最後に自分の前に立ちはだかると、予測していた。

「では。蒼碧拳師範・『五強聖』鄭 咲蘭、参ります」

「七海やちよ。お手合わせ願います」

咲蘭は拱手を。

やちよはお辞儀で挨拶を交わす。

二人が間近で相對すると、その体格差がより明確になった。

咲蘭の身長は147cm、対してやちよの身長は165cm

頭一つ分は咲蘭の方が小さく、第三者から見たら子供と大人くらいの差は感じるだろう。

無論、年齢なら咲蘭の方が、やちよより一回りも上である。しかし、その体軀と無垢な相貌のせいでやちよより遙か年下の少女に見えてしまうから不思議なものだ。

(けれど……)

やちよは知っている。

東洋的武術は、西洋的格闘スポーツと違って、体重や体格差に意味は無い。

そもそも、人間は不安定な生き物だからだ。

一般的な動物と異なり、二本足だけで全身を支えている。故に、その重心は非常に崩れやすい。つまり、動いて「さえ」いれば、いつでも崩せるという意味だ。

実際、彼女が尊敬している故・塩田剛三氏や、合気道の師であった亡き祖母・七海天も細身であり小柄だった。だが、その神技の如き武術で数多の格闘家を投げ飛ばしてきた。体格差など関係無しに。

やちよは実際にそれを見てきた。だからこそ、分かる。

——目の前に立つ御仁は、強い。

やちよが今まで戦ってきた誰よりも。

先程見せたものなど、デモンストレーションに過ぎないだろう。

(この人の中には、どれだけの「強さ」が秘められている……?)

純粹にそれを見てみたいと思った。

故の欲求。

この人の本気を、引き出してやりたい。

やちよは槍を出現させ、構える。

相手は真の武術家。

本来なら徒手空拳で渡り合いたいところだが、最初からそれを行うのは危険過ぎると

判断。よって、まずは獲物を使って相手の攻撃の様子を伺う作戦だ。  
槍をぐっと握り締め、冷徹な瞳で、咲蘭を見つめていた。

七海やちよ 5話 「三番手 武神 鄭（チャン） 咲  
蘭（シャオラン）」 2

「失礼ですが……」

「ああ、〃これ〃ですか」

やちよの視線の方向を察して、咲蘭が目頭を抑える。

当然だ。

咲蘭はずつと目を閉じたままだ。普通に見れば全盲を疑われてもおかしくない筈。

しかし、緩やかに微笑みながら、咲蘭は答える。

「目が良すぎるのでね」



「……！」

「こうして閉じていないと、余計な情報ばかりが入って困るのですよ」

「……成程」

含みのある答えだ。

しかし、納得がいったようにやちよは頷くと、間合いを取って、槍の先端を相手に向けて、構える。

対する咲蘭も、変わらず仏の顔のまま身構える——だが、その型はなんと「拱手」。

「あれは……」

「『神樹の構え』だ！」

「初めてみた……！」

その姿を見た門下生達がざわめく。

一見、先ほど見せた中国式の挨拶と変わらない。しかし、彼女たちの驚きようから、このポーズこそが咲蘭の戦闘態勢だと分かった。

——先に仕掛けたのはやちよだった。

咲蘭は拱手したまま固まっている。仏像の如きその型から何を仕掛けてくるか想像もつかない。ならばこちらから攻撃を仕掛けて見極めるが武術の合理。

槍を先端を向けたまま突貫。そのまま咲蘭に肉薄する——瞬間！ 突き刺す寸前で

やちよは槍を大きく旋回、続けて旋回！ 二回戦で劉蓮穩ラウ リエンウエンが放った必殺技だ。突進と見せかけ、目前で槍を二度振り回して呆気にと取ると同時に、遠心力と魔力を上乗せした強烈な一撃を首筋に見舞う!!

—— 蒼光の一閃。

真剣の居合抜きの如き、一条の光が咲蘭の首を狙う。

が、咲蘭は動じず、拱手したまま。

次の瞬間——

「えっ」

直撃の寸前で、やちよの手から、槍がすっぽ抜けた。

一寸でも、力を抜いたつもりは無かった。

咲蘭の手が動いた様子も無い。彼女は微動だにしていない。

呆然。

未知の事態が突然発生したことで、思考が消去される。

攻撃の最中にも関わらずいきなり槍を放したせいで、やちよの体勢が崩れる。

勢い余って両足が宙に浮いた。このままでは前のめりに転倒するのみ。

やちよの利き手が反射的に――謂わば無意識に――何かの支えを欲して伸びる。差し出されたのは、咲蘭の左手。

「っー」

我に返る。

僥倖だった。咄嗟にやちよは右手を引つ込めて、身体を丸めた。肩から床に落ちるとそのまま弾んだボールのように、勢いよく転がり回っていく。

「おや?」

咲蘭が訝しそうにその様子を眺める。

やちよの身体は落ちる寸前で止まった。右肩を庇いながら<sup>れたい</sup>擂台の端でゆっくり立ち上がる。

「せつかく手を差し伸べましたのに……」

眉を八の字に下げ、残念そうに呟く咲蘭に、やちよはフツと笑う。

「左手は『不浄の手』といいますが……掴む訳にはいきませんでした」  
「あら? 中国人は清潔好きなのですよ。日本に住んでいれば尚更」

お互いに皮肉を言い合いながらも、咲蘭は中央に戻り、再び『神樹の構え』に入る。  
一方、やちよも中央に戻って咲蘭の型について考察。

(恐らくあれは……白鶴拳の套路<sup>とうろ</sup>『三戦』<sup>サンチン</sup>の発展形……)

琉球空手のとは違い、白鶴拳のものは開掌することで、圧倒的な重心を保つ守りの型としてではなく、攻守一体の套路（型）として利用する。

咲蘭の構えは、拱手―つまり、両手を組み合わせているように見えるが、実は僅かに隙間を開けていた。

（危なかった。さつき、彼女の左手をうっかり掴んで居たら……）

『姉者……鄭 咲蘭のは、もつと痛かったぞ』

『肘から膝にかけて、骨が粉碎した』

—— 先の試合での劉 蓮穩の言葉が脳裏を過り、肝が冷えた。

「『神樹』とは、自然と一体と成り、自らを大樹と化します」

刹那、風切り音。

高速で『何か』が接近してくるが、咲蘭は構えたまま動かない。

「すると、『木火土金水』―つまり、ミクロコスモ<sup>世</sup>が我が味方となり、あらゆる害悪から、この身を護ってくださります」

ばきり、と折れるような音。

同時に見えたのは、粉碎されパラパラと宙を舞い散るやちよの槍。後頭部直前に迫つ

た槍を、刹那の如き「捌き」で払い、叩き折ったのだ。

「さっすが鄭老師!! 伝説の武術家!」

「伝説……ねえ、確か鄭老師って昔靈山に籠って、とんでもなく強い魔法の結界で一か月間生活したんだっけ、ねえ……? あの「神樹の構え」で……」

「いや違うよ! 半年間だよ!」

「一年だ」

「……」

周囲から次々と聞こえてくるのは「咲蘭武神」の伝説。

何れも噂話に留まっている様子だが、その技を実感したやちよとしては確信せざるを得ない。相手は「本物」である、と。

冷静を保ったままに見えるが、その額にはじわりと汗が浮かんでいた。それを見て、咲蘭は仏の笑みを深める。

「さあ、貴方の「修羅」を解放しなさい。七海やちよ」

「……………」

「そうでなければ、私に指一本触れることすら敵いませんよ」

// 修羅 // ——か。

嫌な響きだ。その言葉には覚えがあるから。

あの時、自分は成らざるを得なかった。

そうしなければ、自分が殺されていた。

大切な人達をもつと犠牲にするかもしれない。

——— だけど。

やちよは、震え荒れそうになる心を治める為に、深呼吸。

これは試合だ。あの時のような、殺し合いではない。

誰かの命を奪われる心配も無い。

咲蘭の言葉は、あくまで挑発。

最初から、相手のペースに飲まれて、自分を乱してはいけない。

だから。

「……………」

やちよに余裕が戻る。

相貌筋から力が抜けていた。

「……………」

すう、とやちよの両手が発光すると、携えていた槍が消失。

「おや」

訝しげにその様子を見つめる咲蘭。

槍が通用しないなら、徒手空拳で挑む——と見るのは早計、やちよの戦意が消えていたから。かといって降参を決めた訳でも無い表情だ。

「……………」

すつ、とやちよは腰を落とし、床に正座した。

そして——

「どうぞ。打ってみてください」

微笑みを浮かべて、そういった。

周囲が一齐に騒めく。門下生の年少組は、負けを認めたな、試合放棄するのか、臆病者、日本武道なんて所詮その程度だ、などと罵詈雑言を喚き散らす。年配組は、声を挙げずに、やちよの仕草に不審と不安が入り混じった眼で見つめていた。

(何のつもりだ、やちよ……!?)

そして、試合開始からずつと蒼褪めた顔のひなのも、同じ気持ちだった。

咲蘭は魔法少女も武道家も大ベテラン。やちよの方が弱いとは決して思いたくないが、いくらなんでも相手が悪すぎると思っていた。

にも関わらず、無防備で正座するやちよである。

彼女の性格上、何か狙いがある筈だが、普通に見れば自殺行為に等しかった。

「なるほど」

咲蘭はフツと微笑みを深め、〃神樹の構え〃を解く。

「私の型は、こちらから手を出さない。そして、貴女も手を出さないと来ましたか」  
腰に手を回し、ゆったりと歩みよる咲蘭。

「これで争いは終結。実に平和的で、理想的です」  
ですが、と咲蘭は笑みを深める。

「これは、〃試合〃なのです」

その一言の後。数拍置かれて――



鈍!!

——衝撃が震撼する。

門下生全員が、驚嘆。

ひなのの顔に、絶望。

海龍の顔に、愉悦。

正に閃光の如し。

一瞬——コンマ一秒にも満たない超高速で、その“一撃”は放たれた。

目の当たりにした全ての者の顔面に轟と突風が吹き当たるのと、落雷の如き爆裂音が耳を劈くのは同時だった。

自分の身に何が起きたのか、やちよは分からなかった。

気が付いた時には、虚空に向かって拳を打ち抜いた咲蘭が見えた。ただ、それだけ。距離は2mは離れていた筈。

炸裂音が耳を貫き、身体の内側からめちやり、ぐちやりと不快な音が聞こえてきて——弾かれたように、身体が後方へ吹っ飛んだ。

急な圧力に胃を押しつぶされて、胃酸を宙に撒き散らしながら擂台の端まで——  
と、奇跡的に絶望は免れた。

落下寸前でやちよは槍を床に突き刺す！

「……………がはっ！」

衝撃で傷ついた胃から急上昇した鮮血を吐きだしながらも、突き刺した槍を支えにどうにか態勢を立て直すやちよ。

だが、身体のダメージはかなり大きい。同時に心理的ダメージも。

咲蘭の構えをじつと見る。

たった今、彼女が自分に打ち込んだのは寸勁——虚空に突き出された拳は縦、つまりその形は『崩拳』<sup>ボンチェン</sup>だ。中国拳法『五行拳』の代表的な技の一つ、鄭 咲蘭を象徴する“木”の属性を持つ、矢の如く鋭き中段突き！

「『崩拳郭天下無敵』」

咲蘭が呟いた一言に、朦朧としていた筈のやちよの意識が覚醒した。

伝説の中国武術家——郭<sup>かく</sup>雲深<sup>うんしん</sup>。

老師・李 洛能の下で形意拳を学んだ彼は、修行時代の三年間を、『崩拳』の練習のみ

に費やしたとされる。その後、様々な相手と戦ったが、雲深は敵がどんな攻撃をしてこようと、崩拳だけで打ち勝ったというのだ。その時の異名こそが——！

「……………ぐっ！」

視界が激しく揺れる。

口から血を垂らしつつ、床に膝を付くやちよ。

伝説は、所詮伝説だ。

誰かが、誰かから聞いた話を勝手に誇張して世間に広めただけに過ぎない——そう思っていたが、郭雲深の逸話は紛れも無い「真実」だと信じざるを得ない。

鄭 咲蘭の崩拳を真正面から受けて、そう確信した。

つまり、「ただの中段突き」でも年月を掛けて磨き上げれば、どんな武器にも勝る「殺人兵器」と化ける——！

「……………っ」

だが、何よりも恐るべきは「ただの中段突き」をここまで進化させた咲蘭の執念！正に伝説の郭雲深の如し！

直撃では無く「空圧」を受けただけでこの破壊力だ。

ぞつと、やちよは身体が芯から震え上がっていくのを感じた。悪寒が爪先から這うように背中を駆け上がっていく。

——これが、「武神」か。

今まで戦った相手との比較なんて全く当てにならない、想像以上の強さだ。

その表情は完全にリラックスしており、余裕綽々といった様子。恐らく、実力の3割も出していないのだろう。

無論、彼女が「本物の」武術家なら、「遊び」の内に終わらせた方がベストだと考えているに違いない。

もし、その気持ちでいるなら、やちよも同意だ。武術家が本気になれば、最悪な事が

「やちよっ!!」

ハツとなるやちよ。

唐突に耳に突き刺さったのは、ひなのの、祈るような叫び声。

そうだ。

例え、「最悪」が起きたとしても。

自分には、決して負ける訳にはいかない——

「ふっ」

やちよは槍を引き抜くと、咲蘭に向かって力任せに放り投げた。

既に咲蘭は神樹の構えを取っている。よって無駄な足掻きだ。槍は直撃寸前で真つ二つに叩き折られて床に落下した。

「……？」

と、そこで七海やちよの気配が消えていることに気付く咲蘭。

次の瞬間、周囲から複数の風切音！

「そこです」

咲蘭、虚空に向けて掌底！

ドツと鈍い音が響く。

「ぐっー！」

四方八方から咲蘭に迫り来る槍の雨。

その内の一本を明確に捉えて叩き込んだ瞬間、槍は七海やちよに変化した。

鳩尾への一撃を諸に受けたやちよは呻き声を挙げて、後方へ吹き飛んだ。

「成程。属性が水の貴女は、自分の姿を自由に変容させることができる……しかし」

咲蘭の周りで力を失った槍がバラバラと落下し、蒼の光となって消滅する。

やちよの作戦とは、自らを槍に変え、仕込み槍に紛れさせることで、咲蘭の虚を突く

——が、仕込み槍が通用しないことは、試合前に証明済みの筈だ。

非常に稚拙と言わざるを得ない。

焦っているのだらう、と咲蘭は考えた。

それは若さ故だ。実力差は明白、しかし負けを認めたくないから、せめて一撃さえ当たれば逆転のチャンスが生まれる筈だと思つて、焦る。

そうして放たれた攻撃は隙が大きいものだ。相手にカウンターのチャンスを与える。ましてや中国武術家にとってカウンターの一発は一撃必殺に等しい。

つまり――

「貴女は、斃される為に向かつてくるようなものです」

「……………っ」

口の中に溜まつた鮮血をブツと吐いた。

「ぜいぜいと息を切らしながらも、やちよは闘志が滲んだ瞳で、咲蘭を睨んでいる。

「遠慮なさらず、全てを開放しなさい。……貴女の内にある『修羅』を」

「いいえ」

やちよは首を振つて即答。

穏やかな仏の顔に初めて変化。眉が吊り上がり、眉間に皺が寄る。

「なるほど、つまり負けを認めると」

「いいえ」

「では、何故？」

咲蘭の声色が低くなる。

やちよは微笑みを浮かべて答えた。

「……鄭老師。貴女の神樹の構えは、*“究極のリラックス”* によって成り立っている」  
「……？」

「今から、それを崩します」

やちよは槍の切っ先を咲蘭に向けて、宣言。

怪訝な表情を浮かべている咲蘭だったが――

「なるほど。やれるものなら、やってみなさい」

やがて、フツと面白そうに笑みを浮かべると、再び中央に立ち、神樹の構えに入る。  
「さっ」

果たして、  
圧倒的格上の相手に、  
勝機はあるのか!?



七海やちよ 6話 「三番手 武神 鄭（チヤン） 咲蘭

（シヤオラン）」 3

「そこです」

「！ぐふっ」

咲蘭シヤオランの掌底が、虚空に向けて放たれる。

ドン、という鈍い音と同時に、〃槍から元に戻った〃 やちよが吹き飛び、周囲の槍がバラバラと落ちた。

「そっ」

「ぐっ」

そして暫く後も、全く同じ光景が展開された。

今度は脇腹に一撃を諸に喰らい、やちよが床に転がる。

「何をやってるんだ、やちよお……!」

ひなのが苦虫を噛み潰したような顔で声を絞り出す。

やちよが飛翔。気配が消える。会場に隠された『仕込み槍』が咲蘭に迫る——その内の一本を咲蘭が攻撃! 槍が正体を表す。ダメージを受けたやちよが勢いよく吹き飛ば……。

そんなルーティンが5回は繰り返されていた。

故に、ひなのの苦々しさは理解できるだろう。

仕込み槍に、自分を紛れ込ませて相手を錯乱——この戦法は合理的だが、既に見破られている以上、無駄。

確かに、槍の動きや一本ごとの速度は多少変えてはいるが、だからといって通じる相手ではない。ひなのにとっては正に理解不能で、もはや『数撃ちや当たる』的なヤケクソ戦法としか思えない。

周囲の門下生―特に若手の生徒達の野次も騒がしい。

勝負を捨てたか、ボコボコになっちまえ、得意の合気道はいつ見せるんだ、あつ触れなきや使えないか、勝負あつた、小手先でしか戦えない半端者め、等々、聞こえる度に屈辱的で、ひなの拳が震える。

(だが、このままじゃ、本当にその通りだ……!)

――やはり、焦っているのだろうか。

ふと、隣を見る。

宗師・海龍の顔が以外だった。咲蘭が圧倒的優勢にも関わらず、その形相は、硬い。

だが、太陰大極図を映す瞳は爛々と瞬いており、何かを期待している眼差しだ。

(こいつが凝視している先は……まさか)

「そこです」

「……がつつ!」

咲蘭の掌底が炸裂。元に戻ったやちよが勢いよく床に転がった。

「流石は合気道の名手」

「……………」

槍を支えにやちよは、ゆっくりと立ち上がった。

平常と変わらぬ、穏やかな仏の顔で語りかける咲蘭を、鬼神の如き蒼眼で睨み据えながら。

「最初に比べて、防御の取り方が上手くなってきましたね」

咲蘭が言う。『最初』とは、崩拳を放った時だ。

あの瞬間、やちよはあえて相手に攻撃させ、身に受ける事で、咲蘭の動作を学ぶ筈だった。

息を吸い込み腹筋を固めたが、それが仇となった。崩拳の衝撃が全身に伝わってしまい、骨の芯に至るまで深いダメージを受けた。

それを反省に活かし、以降やちよは攻撃を受けた際、逆に息を吐く事で、筋肉を『弛緩』させた。こうすることで、攻撃を受けた時の衝撃を幾分か反らすことができる。例えるなら宙に舞う紙を刃物で切るかの如し——無論、直撃の為どうしても身体にダメージは追うが、致命傷は免れる。

「……お褒めに頂き、光栄です……!」

口に溜まった血をふっと床に吐いて、やちよは頭を下げる。鬼の瞳のまま——  
咲蘭がふっと笑みを深める。

「その為に、食事を抜いてきたのですね。成程、人間は空腹になると、感覚がどんどん鋭

くなる。不思議なことに、普段感じないことが手に取るように分かる……しかし、決定的な一打を生み出さなければ、私は破れませんよ」

「……………」

「武術家ならご存知の筈。暗闇を乗り越えた者の強さは、如何なる武術をも凌駕する、と」

確かにそうだ、とやちよは思う。武術にとつて『暗闇』は重要な要素だ。

合気道でも、姿勢を修正するために、目を閉じて基本動作の反復練習を行う。

目を開けていると、姿勢の悪い癖や歪みを無意識に修正してしまい、気づかない——つまり、動作の要点が分かっているから、つい「目」で状況を判断し、頭で考えながら体をコントロールしてしまう。

よつて、目を閉じたまま、歪み無く基本動作をこなせば、武術家の道へ一歩、踏み出せると言っている。

また、人間は元より『昼行性動物』である。

目を閉じる又は暗闇の中で動く、本能的に不安を抱く。そうなると自然に体が萎縮したり、強張りが生じたりする。誰かぶつからないかと気にするだけでも、肩に力が入りやすい。

暗闇に慣れることは、上記の動揺を克服し、四六時中平常心を保ち、恐怖から生じる

無駄な力みをとつてのびのびと生きる事に繋がるのである。

伝説のパイロット・坂井三郎は、普段から電車の中で目を閉じて立ち、車両の揺れや方向の変化を体で感じ取り、バランスを取る訓練を積んだという。空中で戦闘機を自由自在に操る為に、どんな状況でも、自分の体のバランスを保つ必要がある。

その訓練の成果で誕生したのが、『第二次世界大戦の撃墜王』だ。

——つまり、暗闇の中で普段通り生活している鄭 咲蘭は、正に天下無敵に限りなく近い存在の筈だ。

『神樹の構え』は、その成果の顕れ。

暗闇きようふを乗り越えた先の、究極のリラックス。

超感覚にまで発達した五感に、死角無し。

「……………」

槍を携えたまま、やちよが飛翔。またも、気配が消失する。

複数の風切り音が聞こえてくる。発動した仕込み槍が咲蘭を取り囲み、一斉に向かつてくる。

「芸が無い」

槍の本数は十。最初に比べればその数は、かなり少なくなっている。その中から『やちよ』を割り当てる事は容易い。

「故に、是非も無し」

咲蘭の超感覚にまで研ぎ澄まされた耳が、『やちよ』を補足。

この一本だけが、他の槍とは違って動きに独特のブレがある。それが振動となつて空気に伝わり、咲蘭に教えてくれる。

一直線に向かつてくる『やちよ』に体を向ける咲蘭。叩き落とす事は容易——

「っ!？」

——の、筈だった。

咲蘭の眉間に皺が寄る。『やちよ』と——他の9本の刃先が狙っているのは、自分の体ではない。

耳元で、金属音が炸裂した。

やちよの意図に気付いた時には遅かった。

けたたましく鳴り響いた“音”が鼓膜を貫き、咲蘭の脳を震撼させた。

同時に、金属同士の擦れ合う音が、咲蘭に“不快感”を齎し、全神経を乱す。

眉間に皺が寄る咲蘭。

ここで、漸く何が起こったのかを理解した。

自分の耳元で、10本の槍が、空中で同時にぶつかった。

その時生じた、先端の金属同士の衝突音が——咲蘭のリラックスを崩した。

ほんの一瞬だけ。

しかし、やちよにとっては、そこから咲蘭を崩すには十分な時間だった。

咲蘭の右手に“何か”が絡み付く。

「っ!？」

反射的に振り払おうと咲蘭が右手を動かした直後。

急に体が仰け反り、顔が天井へと向いた——直後に、背中が叩きつけられる様に床に

落ちて、強い痛みが全身を走る！

「!! ……!？」

「誰かが言っていた。『耳には聴が無い』、と」

迂闊。

合気の要領で、力を利用され投げられたと実感した矢先に、やちよが語りかけてくる。

「私の攻撃を全て防ぐことは出来ても、『音だけ』は防げない」



☆

静寂。

騒がしかった筈の若い門下生達の野次が鳴り止んだ。

彼女達は全員、自分が見てる光景が信じられなかった。

—— 武神が、転ばされた。

最強を誇る武術・蒼碧拳。その師範が、天下無敵の一人が、伝説が、『龍』が——  
ありえない。

現実の出来事だと認識できるまで時間が必要だった。到底受け入れることができなかった。

「皆の者、心して現実を見よ」

宗師・海龍の静かに呟かれた言葉が、門下生全員の頭に重く押し掛かる。

「我らは我が拳の天下最強を自負するが、そこに『絶対』は無い。皆、等しく人間である限り、隙を見れば必ず崩される事を忘れるな」

以前、前述した通り。

人間は二本足「だけ」で重い頭を支える不安定な動物。動いてさえいればいつだって崩せる事は可能。

それは咲蘭や、海龍本人として例外では無い。

(なるほど、やちよをここに呼んだ意味はあつた訳か……)

隣目で冷やややかに海龍を見ながらひなのはそう思う。

周囲に目を配ると、それまで騒いでいた少女達は皆、海龍の言葉に身を引き締めて、試合の様子を見守っている。

確かに今の言葉には、ひなのも同意だ。そして、師範の長たる海龍がやちよの強さを信頼してくれていたことには、正直以外だったが、安心感もある。

しかし、

(それだけじゃない。まだ何かやちよに期待しているな、この狸は……！)  
隣に座っているからこそ、よく分かる。

彼女の目論見が。

先の光景を目の当たりした、海龍は深い笑みを浮かべており、太陰大極図の瞳が子供の様に輝いている。

☆

「……………流石です」

しばらくして、背筋を使って音も無く立ち上がり、やちよと向き合う咲蘭。何事も無かったかのように冷静な様子だ。しかし、眉間に皺を寄せて、口をむつと結んだその相貌に、仏はもう宿っていない。

「ですが、残念ながら……………七海やちよ。貴女は私の闘志に火を灯しましたね」  
神樹の構えを解き、仁王立ちでやちよと向き合う咲蘭。

「……………」

「……………から先は、お覚悟なさい」

それは、決心の顯れ。

やちよを一人の武術家として、蒼碧拳師範が認めた証。

「……………承知の上です」

ミクロコスモという“鎧”を脱いだ。つまり、自らも捨身でやちよと闘う事を決意したのだ。

ただでは済まない——恐らく咲蘭も同じ気持ちだろう。

これより先はお互い無事五体満足で終わるか……否、生きて帰れる保証さえ無くなつたのかもしれない。

しかし、それでも。

「斬り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ。踏み込んでみよ、極楽もあり」

逃げてプライドを殺されるよりも、相手の懐に踏み込んで勝機を掴む方を選ぶ。その心構えを胸に、やちよは咲蘭と全力で闘うことを誓った。



七海やちよ 7話 「三番手 武神 鄭（チャン） 咲蘭（シャオラン）」 決着

「おばあちゃん、無~~い~~ってなに？」

——小さい頃、ある武術の参考書を読んだ事がある。

分からないことが書いてあったので、祖母に聞いてみる。私が本を読む時は、いつもこんな調子だ。

祖母は、いつも通り、穏やかに笑いながら、優しい声で私に言った。

『それは、力が自然に抜けるってことさ』

——そうなんだ、と納得した。

確かに、読んでいるページに書いてある。

かの塩田剛三曰く、『無の境地に達したとき、恐怖心が無くなる。あらゆる不安が消えて、自分自身を完全に信じられるようになる』、『合気が上手くできた時は、一切の我が無くなっている』と。

——しかし、当時の私には不可解だった、だって……。

「でも、からだもいのちも、“そこ”にあるよね。これって、本当はまだ“無”って言わないんじゃないの？」

『……そうだねえ』

——祖母は笑顔のままだったが、少し困っている様子だった。

「おばあちゃん、本当の“無”って、どういうものなの？」

『うーん……』

——祖母は珍しく悩んでいた。けど、しばらくしてから、私に答えをくれた。

『……それはねえ——』

☆

やちよが飛び込み、袖を掴もうとすると、咲蘭はバックステップで退く——直後、急加速!! 一気にやちよの懐に飛び込むと、両手をやちよの胸に打ち降ろすように突き出した! 虎形拳の『虎撲子』こぼくしという技だ。車にはねられたかのようにやちよの身体が吹き飛んだ!

流石にこれは致命傷だろう、と誰もが思った瞬間——ぱしゃん、と。

やちよの身体は“水”となって弾け飛んだ。

「……………っ!」

やちよの気配が消えるのと同時に複数の風切り音。同じ手か——察した咲蘭の動きは迅速だった。



周囲から飛来してくる槍、その内の一本に顔を向けて地面を蹴る。光の速さで滑空し、宙の“それ”を掴まえると、両端を握り締めて、下から突き上げるように膝蹴り！叩き折られた槍から水が噴出した。それは咲蘭とは反対側に弧を描くと、空中で結集して、再び“七海やちよ”に成る。

「つ………!?!」

「覇!!」

一息付く間も無かった。

着地した瞬間、咲蘭の怒号！同時に虚空に放たれたのは、神速崩拳ボンチエン！ノーモーションで放たれる必殺の中段突きによって、徹甲弾級の破壊力を伴った風圧がやちよに襲いかかる！

しかし、それも。

ぱしやん、と——直撃の瞬間、やちよの身体は水となつて弾け飛んだ。

(速すぎる………!)

動く咲蘭の強さに、やちよはただ呆気に取られるしかなかった。

攻撃の一手一手が正に光速。どれも目で捕らえることができない。そして恐るべき威力だ。一撃でもまともに受けければ全身の骨が木っ端微塵も想像に容易い。

故に、水に変化するしか回避の術が残されていなかった。

確かに如何なる攻撃だろうと、水は無効化できるが、そもそも魔力消費量が多いこの魔法はいつまでも使えない。

では、どうするか――

（厄介なのは、崩拳。あれさえ凌げば……）

水たまりの姿のまま、やちよは考える。

咲蘭自身が天下無敵と信ずる最大最強の必殺技。あれさえ防げば、反撃の糸口が掴めると同時に、咲蘭の心理面にも深いダメージを与えられる筈。

方法はある。

有るのだが。

ただ、しかし、それでも……。

今の咲蘭に通用するか否か――

（いや……）

やるしかない。

もう、退くことは許されない。

（“斬り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ”――）

もう一度、心の中で詩を詠む。

これは、剣道の古歌だ。

大上段から振り下ろされる太刀は誰でも怖い。

だから避ける。

退がって避けようとする。

ところが相手にとっては格好の間合いになり、一步退けば、ものの見事に頭から真つ二つになる。

——逆なのだ。

水たまりがふわりと浮き上がり、人型に変形していく。

覚悟を決めて、人間の姿に戻ったやちよが、咲蘭と向き合った。

そして、ゆっくりと歩み寄り、咲蘭に接近する。

丁度、彼女の拳が届く距離で立ち止まった。

「……………」

「ふっ」

咲蘭が愉しそうに嗤う。

やちよの表情に焦りも恐怖も無く、冷静沈着そのものだ。

真正面から我が崩拳と勝負しようとする、その意気や良し。ならば此方とて遠慮は無

しだ。

全力の一撃を以て七海やちよを粉碎するまで！

それが武道の礼儀！

—— “踏み込んで見よ” ——

七海やちよは水にならなかつた。

逃げる、躲わす、退くという選択肢は既に頭の中から消した。

そうするどころか、寧ろ——崩拳が放たれる直前で一步、踏み込んできた！

「嘖!!」

裂帛の気合と同時に放たれる咲蘭の必殺崩拳!!

—— “極楽も有り” —— !!

対して七海やちよの合気が——崩拳を迎え撃つ!!

（きん）。

刹那、骨の外れるような音が盛大に響いた。

閃光の如き刹那を制したのは——一日瞭然。

七海やちよであつた。

至近距離で、天下無敵の崩拳を真正面から受けたのにも関わらず、彼女は咲蘭の腕を絡み掴んだまま平然と立ち尽くし、逆に咲蘭は右腕を掴まれ、背中から倒れ込んでいる光景が映し出された。

周囲がまたもざわめいた。

『太刀が振り下ろされるときに、思い切って前に出る』

前に踏み込めば、相手と向かい合ったまま身体が接するようになる。懐に入ってしまった。

そうすると間合いが詰まり、相手は太刀を振り下ろすことができなくなる。

実践における心構えの一つだ。

そして、踏み込んだ結果、やちよは反撃と一緒に勝機を掴んだのである。

☆

「やったぞ!! けど、一体どうやって……?」

「崩拳の軌道を読んだか」

光速拳を凌ぐ術。

歓声を挙げながらも、当然ながら疑問に感じるひなのの横で海龍が語り始める。

鄭 咲蘭の崩拳の秘密。

それは、足指・足首・膝・股関節・腰・肩・肘・手首―連なる八関節の同時加速により、ノーモーションの構えと神速を同時に実現した完璧な技だ。

だが、同時にその常軌を逸した破壊力は「前方」にしか発揮されない。

つまり、銃で身体を撃った時、弾丸が体内で軌道を変えられるように、葉っぱ一枚で逸らされるように。

真つ直ぐ進む力が強い程、横からの力に弱い。

七海やちよは、崩拳を二度身に受けたことで、その軌道が読めたのだろう。

故に、反撃の為の対処法は割り出せた。あとは、やちよ自身に「それ」を実践できる勇気があるか否かの問題だった。

「中国武術には、相手の死角を左右から突くけんすい圏捶けんすいという技が有る。七海やちよが今使ったのは、恐らくそれに似た技、或いは応用だ。鄭が崩拳を放つ寸前で「一步踏み込んで」、実行した」

あれは確か、柔道の『キムラ』という技だったか。

横から咲蘭の右腕を掴んで時計回りに回転し、肩の関節を極めた。崩拳が放たれる直前に——大した度胸だ、と心の中でやちよを称える海龍の表情は、実に満足気だ。

だが——その行為は更なる地獄の入り口に過ぎない。

「さあ、最終局面だ……。目覚めし龍をどう征するかね、七海やちよ……？」

☆

槍の雨が倒れてる咲蘭に降り注ぐ。

追撃してくるそれらを、まるでブレイクダンスの如き脚捌きで、文字通り蹴散らしながら、咲蘭は起き上がる。

「ッ……!!」

苦痛に口元をくつと歪ませて、右肩を庇う。

先のやちよの合気により、肩が外れてしまった様子だ。例え武術師範とはいえ、肩関

節を外されて平気な人間などいない。僅かに身動きするだけで、気の遠くなるような激痛が走る。

「……油断した訳じゃ無い」

咲蘭の雰囲気が一変。今までに無く低い声が響く。

ごきん、と肩関節をくつつける音が響いた直後に、右腕を水平に伸ばした。

顔面に向かって真つすぐに迫り来る槍を、人差し指と中指で挟んで受け止める。

「一切の隙を見せたつもりも無い」

力を込めた途端、槍の全てが罅割れ、木端微塵に弾け飛ぶ。

これは準備運動のようなものだ。右腕の動きに支障無し。

「しかし、ここまで来るとは予想外でした」

塵が舞い散った後に見えたのは、形相が「鬼」と変貌した咲蘭。

対する七海やちよは仁王立ちで構えている。

彼女もまた「鬼」の瞳で自分を見据えているのだ。

故に、咲蘭は思う。

七海やちよは自分と同じだと。

神に愛されし少女。

天賦の才を賜りし、武の申し子。



「いいでしょう。本気で相手致します」

ゆるりと両腕を伸ばして、腰を落とし、足を開いて見せる咲蘭の「構え」に、やちよは目を見開いた。

(あれは……「洪家拳」!? 形意拳ではなく?!)

形意拳とは木火土金水の五大要素で宇宙の理を表す『五行拳』が基本形とされており、その名の通り、陰陽五行の理に従っている。

咲蘭が得意とする崩拳は、その内の『木行』に値する技だ。

これは意外——と、やちよが浮かべている表情を察してか、咲蘭が得意気に口を開く。  
「……物心ついた頃、私は既に船の上に居ました」

猛獣の足に見立てた両拳を超高速で上下前後に動かす咲蘭。

母も父もない。兄弟も分からない。

ただ、自分と一人の男だけが、そこに居たという。

「そこで、船夫でもあった老師から最初に教わったのが、この拳法」

咲蘭の身体から噴き出した深碧のアトモスフィアが、拳に纏われていく。

「神樹の構え」では守りに用いていたミクロコスモを今度は攻に用いる様子だ。成れば拳の破壊力が更に——想像するだけで背筋に悪寒が走る。

「っ」

考えている暇は無かった。

一陣の風が自分の頬を撫でた気がした。

咲蘭の両手が動いた様子は無かった。動いたとしても、全く見えていなかった。

「……………!!」

直後に焼ける様な熱を頬が感じ、何かがべろりと剥がれて、べちちと床に落ちた。

やちよはそれを見て、愕然の余り思考が一瞬空白した。

周囲の鑑賞者達も一斉に絶句し、中には蒼褪めた顔で悲鳴を挙げる者までいた。

落ちたのは——やちよ自身の頬肉。

熱を帯びていて傷みが全く分からなかった。しかし、口を開けてもないのに涼気が良く入り込み、口内の唾液が熱い何かと一緒に溢れ出る様な感覚があつて、もしやとは思っていたが……………!

(つ!! 驚いた……………! これが、鄭 咲蘭老師の真髓……………!)

今頃になってようやく焼けるような痛みが顔中に走り、やちよは我に返った。

龍の怒りと、その本気の強さは、想像を絶するものだった。

成程 “洪家拳” は納得だ。一番最初に見せたあの指の強さ——山の様に連なった槍を全て破壊せしめたあの力は、正に。

(そして、 “本物” の中国武術か……………)

中国武術は、本来、実戦的な殺人技だ。

それ故に、「本物」は全て秘伝とされている。

禁断の門を開いたのは、過ちだったのかもしれない。

後悔先に立たず。先ほどから全身をひた走る悪寒が警告している。

——今しかない、これ以上は身体が持たない、早く逃げろ、と。

しかし、それでも、逃げ出す事など決して赦されない。

七海やちよは決心したから、咲蘭の本気に打ち勝つまでは。

(そう、この人の本気……！)

まだ、「開眼」していない。

つまり、彼女にはまだ、これより上が存在する。

それを引き出して、破るまでは決して——

「っ」

呆気に取られた。

一瞬で咲蘭は目の前に接近、そして——

「っ!?! あああああああああああああ!!!!」

水に変化する事さえ許されなかった。

左のジャブ、右のフック、さらに左のアップパーから右のボディブローと続くコンビ

ネーシヨン——プロボクサーが打つそれらの如く。咲蘭の怪力無双の熊手がやちよの皮膚に突き刺さり、肉ごと縦横無尽に削り取っていく。血飛沫と肉片が宙を舞い踊り、一瞬で二人の足元に夥しい量の血溜まりが形成されていく。

チエーンソーを真っ直ぐ体に差し込まれて切り捌かれているような感覚だった。絶叫を挙げるやちよだが、痛みを感じてはいなかった。寧ろ激しい熱の中で心地良さすら感じていた。痛みを取り除くべく脳内麻薬が過剰に分泌されているのだろうか——  
頭が泥濘する。

「！」

ばしやん、と音が鳴って咲蘭が攻撃を止めた。

命の危機を察したやちよ自身の本能がそうしたのか。

彼女の身体は水と化して消滅。

水は咲蘭の足元に広がる血溜まりに溶け込んでいく……。

「……………」

咲蘭は意識を集中して、足元をじっと見据えた。

やちよの気配も、魔力の反応も無い。

つまり、彼女に最早意識は無いのだ。

残されたのは、本能。全ての生命にとっての最後の依り代。謂わば、『無意識』。

これが最も警戒すべき、恐ろしいものだ。と咲蘭は知っている。全ての武術家にとって“無”とは、目指すべきものの全てだ。

やちよの“無”は、その体を動かし、生命を守った——つまり、現在のやちよは、武の頂点に最も近い存在に至ったといえる。

(当然ですな)

咲蘭は自嘲的に嗤う。

だって、自分がそうなるように仕向けたのだから。

やちよの“修羅”を見てみたい、という純粋な願いが、自分に洪家拳を使わせた。禁じ手と言われてきた、殺人術を。

だからこそ。

——今から、貴女を全力で破壊する。

『やめろ、鄭』

不意に、脳内で声が聞こえて、咲蘭はハッと我に返る。

『仕掛けるな』

「……………」

『これ以上七海やちよに手を出せば、私が全力でお前を止めるぞ』

「……………」

宗師・海龍の殺気を伴った重声が、咲蘭の闘争的衝動を抑え込む。  
しかし――

「私は“無”を超えたい」

咲蘭は嗤った。

その為なら、命も惜しくないと言わんばかりの、清々しい笑みで。

「宗師、お許しを」

『鄭……………！』

咲蘭の臉がゆっくりと開き始め、翡翠の瞳が顕わになる。

『殺生如きに神眼を用いるか。愚かな……………』

それ以上、海龍は何も言わなかった。

咲蘭、“開眼”。

周囲の門下生達が一斉に騒めいた。

「私の目を開かせたのは、貴女で五人目ですよ。七海やちよ」

すつ、と——咲蘭を開掌した右手を掲げて、構える。

封印されし瞳を開放した咲蘭の視界には、『総て』が映し出されていた。

正に、『神眼』——

足元に広がる血溜まり、その中で小魚の様に泳ぎ回る、七海やちよが見えていた。蒼穹に瞬く生命の光が、咲蘭にその居場所を特定させた。

よって——

「破ッ!!」

一切の躊躇無く咲蘭は、深碧の開掌を落とす!!

雷の如き勢いで、<sup>著</sup>「七海やちよ<sup>光</sup>」の真上に墜落した。

右腕に凝集されていたミクロコスモの全エネルギーが雷光と化して弾け、血溜まりを一瞬で蒸発させた!

七海やちよは、もう——

『本当の“無”、ねえ……。うくん、多分……。それは“身体を意識しない”ことじゃないかねえ』

—— 祖母の困ったように言う姿が、視界を過る。

—— どういうこと、と私は聞くと、これまた困ったように祖母は答えた。

『つまり、身体が無くなってしまえばいいってことさ』



——  
ああ、そうだったんだ。

——  
おばあちゃんがいつてたこと、やっとわかった。

——  
これが。



——勝利を得た筈だった。

自分の身に何が起きたのか、咲蘭は理解できなかつた。周りの門下生達も、ひなのも、全く同じ気持ちだった。奇跡が起きたとしか言いようがない。

正に超常現象の発生に、全員が肝を抜かれた。皆、思考が空白し、只呆然とその光景を見つめた。

咲蘭の背中から脇腹にかけて、  
“七海やちよの槍”が貫通している。

全くの死角から、それが現れたのだ。故に、気づくことが出来なかった。身も心も、肉体も意識も失って、やちよは“無の境地”に辿り着いた。

そして“無”から槍が放たれたのだ。

百戦錬磨の咲蘭をもつてしても、全くもって認識できなかつた、“究極の奥義”。

咲蘭が倒れる。

静寂の中で。

七海やちよの勝利が決定した。

太陽のきらめきも

月光の蒼明も一瞬

死のしらべとかわる わがさだめ

されどつらぬく けものみち

—— 鋼屋ジン 『装甲悪鬼村正』

七海やちよ エピローグ 「グランドマスター」

—— 竜誕館本部・医務室

「痛むかね」

「いえ……」

普段は滅多に使われない老師専用の豪華なベッドの上で、七海やちよは静養を取っていた。

先の戦いで、身も心も消滅した彼女だったが、『奇跡的な生還』を果たしたのである。その脇には、椅子に座って看守る宗師・海龍の姿もある。

「ふむ、秘ミの術は成功したようだな」

「それは……？」

「あれは、元々霊媒師だ。君たちには馴染み深い筈だろう」  
なるほど、とやちよは思う。

神浜の魔法少女は、教授・柊ねむと「大賢者様」の秘術によって、霊体の持つ絶大なエネルギーを魔力に変換してソウルジエムに取り込ませている——これが『調整』の実態である。

魔法少女にとつてソウルジエムが本体、魔力は血を生み肉を生む。つまり、七海やちよの肉体を全快させたのは、楊ヤン 秘輝ミフウイ老師の降霊術による。どこからか呼び寄せた霊を蘇生に用いたらしい。

「……先程は、鄭チャンが過ぎた真似をした……」

と、急に神妙な顔になり、深く頭を下げる海龍。

意外な所作にやちよは目を丸くした。

「申し訳無い。あれには、厳しい処分を検討している」

「あの……！ できれば、あまり手荒な真似は……っ！」

「君なら、そう言ってくれると思っていたよ」

擂台の上では龍を凌ぐ修羅そのものな英雄も、降りれば只の少女と変わらない。

フツ、と海龍は一瞬だけ微笑を浮かべると、目を鋭くしてやちよを見つめた。

「しかし……最後に放ったあの技は、実に見事だった」

「……………」

「あれは、一体“何”かね？」

やちよは顎に手を当てて、考える仕草を少し見せた後、

「いえ、覚えてないんです」

眉を八の字にして、困ったように笑い、そう答えた。

「なに…………？」

「あの時、私は鄭老師の攻撃が全く見えていませんでした。あまりにも迅速で、強烈で……だから、無我夢中で戦いました、自分自身の事さえ忘れるくらいに……。気がついたら、勝利を収めていた……。本当に、それだけだったんです」

「……………」

やちよの答えに、海龍は珍しく目を丸くしたが、

「“無の境地”か…………」

直ぐに納得したように頷いて、そう言った。



「そんな、あれはマグレですつ！ 私ごときにはまだ……！」

「いや、君は『無』に至った。総ての武人が目指す最高到達点へと。でなければ、あの現象は説明が付かない」

「!? ……そう、なのでしょうか……？」

「『涅槃の真因はただ信心をもつてす』——」

日本の高名な僧侶の言葉を引用して、海龍は続ける。

「悟りの境地に至るための本当の手立てはただ一つ、信じる心のみ……。消え去る直前まで鄭に勝ちたいと、強く願っていたのだろう……。だからこそ、無に至った後も、本能在勝利を求めたのではないか？ 例えるなら、そう……。『プログラミングを完了した機械のように』」

「まるで、ご自身も経験なさったような言い方ですね……。？」

「私も『無の境地』に至った事があるからね。ただ、君の場合は戦闘中。私の場合は永く遠い修行の果てに、という違いがあるが……」

懐かしむような遠い目を虚空に向けて答える海龍。

そこで、ふと気になることがあり、やちよは尋ねる。

「……王宗師。貴女は無に至る直前に、何が見えましたか？」

海龍は目を閉じて、瞼の裏に当時を思い返しながら、答える。

「……師でもあった父が見えた……。そして、親友ともの姿も……」

目を開き、「君は？」とやちよに尋ねる海龍。

「私には、祖母が見えました。祖母にとつては何気ない言葉だったのかもしれませんが……今ここで生きている私にとつては、とても大切な答えと成りました。……宗師の親友とは……?」

「……昔話は長くなるから、よそうか。今は親友ともの忘れ形見が頑張っている。私には、それで十分だ」

「……」

なんとなく、その忘れ形見が誰なのかをやちよは察したが、海龍の気持ちを汲んで、言わないことにした。

☆

次の日——

「盃を、交わしたア!!?」

七海やちよが完治したと連絡を受けて、意気揚々と迎えに行つたひなの。

だが、竜誕館の門前で、やちよにゴニヨゴニヨと耳打ちされた言葉に、ビックリ仰天!!

「それは一体どーいうことだ!!?」

「どーいうことも何も、そーいうことよ」

頭のとっぺんからプンスコと湯気を立てて怒鳴り散らすひなのに、涼しい顔で答えるやちよ。

「お前自分が何をしたのか分かってるのか!!?」

「ええ、十分分かってるわよ。姉妹の契りを交わしたの」

「こつちの心配も知らずに!! 勝手な事ばかりしやがって!!」

「そう怒らないでよ。これで、私と海龍宗師は“対等な関係”となった。十分な報酬じゃない」

「あいつが“姉”でお前は“妹”だけどなつ!!? 年齢的に見たらお前の方が立場が下つて事には変わらんだろ!! それにあの場には開明新聞社の静原だ太手っていたんだ!! お

前を罫に嵌めた連中がそんなに優しい訳が」

「あら、静原さん。話が分かるし、結構良い人だったわよ」

「メディアは狡猾なのが世の常だっ!! ……………はあ。もう、ツッコむのも疲れた……」  
ひなのはガツクリと肩を落として項垂れた。こうなったら、もう、どうにでもなれ、  
だ。

相棒の勝利と生還を精一杯祝福したかったのに、その気持ちもすっかり萎えてしまっ  
た。

「でも、案外、そうじゃないかも？」

「…………へ？」

秘密☆と言いたげに、やちよは人差し指を口元に当てて、ふふつと微笑んでいた。

その余裕の意味が、聡明なひなの頭脳でさえ、丸一日かけても理解できなかつた。

☆

——後日。

〃【神浜の英雄】、【武神】を破る！〃

〃最強を誇る中国武術師範、敗北!! 七海やちよの強さは底なしか!?

開明新聞の一面記事に世間が騒然となり、神浜市中の人々が熱狂に渦巻いた。

大きくそう書かれた見出しの脇には、【武神】鄭 咲蘭の崩拳ボンチエンを躲し、背中から床に投げ落とす七海やちよの姿。

一面の半分は埋める程の大きさで、その写真類が貼られていた。

そして、新聞に続いて、大衆は次々とあらゆるメディアで声を挙げていく。SNSで、匿名のネット掲示板で、ラジオで、テレビで。

——〃グランドマスター〃

神浜最強改め、地上最強の魔法少女。

その称号こそが、七海やちよに相応しいと——以来、大衆の称賛と敬愛の声が途絶え

ない日は無かった。

そう、つまり――

☆

「悟りを開いた少女は、人を超越し、伝説と成った」――新しいウチの記事の見出しはこれでいいかなつと……：我ながら、上手く書けた方ですかね？」

「ご苦労だったわねえ、【猿】<sup>ましゅ</sup>」

「全く……。女将、約束通り、ボーナス上げてくださいますよ？」  
「分かつてるわあ」

開明新聞社のエース記者・静原。

彼女の正体が、紅晴結菜が神戸市に送った密偵にして、御庭番衆の忍び頭――【加賀するが】であることは、決して誰にも悟られることは無かった。

F  
i  
n

サイドストーリー集

FILE #10—S いなくなった両親と、忍び寄る

“名無し”

東京都大田区・西糀谷四丁目——そこには東京都大田区の京急蒲田駅と羽田空港国内線ターミナル駅を結ぶ、京浜急行電鉄の鉄道路線・京急空港線の「糀谷駅」がある。その前の環八通り（311号先）を15分ぐらい歩くと、所見は巨人の心臓部と見紛



う様な広大な建造物——『羽田空港』のターミナルがある。

一組の男女が夕陽に照らされながら、そこに向かって歩いていった。急いでいるのか、やや駆け足だ。厚いロングコートを纏い、帽子を深く被っている。男の方は、サンングラスを掛けていた。

半分ほど歩いた所で、二人は路地裏に隠れる様にして、入り込む。そこで見えた一件のレンガ作りの建物に、背中を預けると、ふう、と息を吐いた。

「まさか、君と初めて出逢ったこの場所で、別れることになるなんてね」

男はサンングラスを帽子を外すと、微笑を浮かべて隣立つ女性にそう言った。彼の年齢は顔から推測するに30代後半と言ったところだろうか。

「人生とは分からないな」

「……………」

隣り立つ女性は沈黙を返した。どこかやるせなさが混じった沈痛そうな顔を俯かせている。彼女も見た目は若々しいが、年齢の方は男性と然程変わらなかつた。男と同じ様に帽子を取ると、桃色に近い鮮やかな紫色の髪が映える。

「そう重い顔をするなよ」

「でも……………」

「僕たちは『正しい選択』をしたんだ」

「でも……でも！ 親としては！」

——失格だ。

男性が宥めようとする、女性がバツと顔を上げてそう必死に訴える。その目尻には涙が溜まっていた。

「今すぐ……あの子のところに戻りたい。会って、謝りたい……」

「ひかり耀……」

「ずっと続くって思ってたのに……。せめてあの子が結婚して、幸せな家庭を作るまでは続けられるかもって……！ それで、こんなに早く終わってしまうなんて……！」

女性は堪えきれなくなったのか、両手で顔を覆うと、グスグスと泣き出した。

男は静かに見つめていたが、同様の思いであったのか——グツと拳を握りしめると、震わせた。

「耀」

だが、自分まで激情に飲まれてはならないのだ。彼は、意を決した真剣な表情を浮かべると、耀と呼んだ女性と向き合いその両肩を、グツと掴んだ。女性は顔を覆っていた両手を外すと、男性と見つめ合う。

「気持ち分かる。だが、そんな真似をしたらあの子にまで迷惑が掛かってしまう」

「輝きいさん、でも……！」

耀は顔を俯かせる。

「あの子は、これからの人生、たった独りで生きていくのよ……？ 誰にも頼れずに……」

「独りじゃないさ。夕霧さんにはよく話をしてあるし……あの人のお膝元なら安心だ。それに、あそこには彼女達だっているだろう？」

輝一と呼ばれた男は、優しそうな笑顔を浮かべてそう告げるが、耀の顔は一向に浮かない。

「……輝一さんは、これからどうするの？」

これ以上話し続けても暗澹とした気持ちは晴れないと、思ったのだろう。耀が話題を変えてきた。

「僕はね……中東に向かおうと思ってる」

輝一は、顔を上げた。まだ夕陽は沈みきっていない。空は、熱そうな茜色に染まっている。

「……死ぬつもりなの？」

「生き抜く為だ。連中の手も紛争地帯までは及ばないだろうさ。そこで貧困や病気で苦しんでいる人や戦災孤児に手を差し伸べたい」

「それなら、私も……！」

行きたい——！　そう訴えようとするよりも早く、輝一は首を横に振った。

「君は日本に残っててくれ」

「だけど……！　そんなところに貴方を独りで行かせたくは」

「よく聞いてくれ輝一！」

輝一の声が急激に強まった。ピシヤリと上から抑えつける様な声に、輝はハツと口を止める。

「親としての責務まで僕が奪い去る訳にはいかない！」

「……」

その気迫に、輝は押し黙ってしまった。

「いいかい、君は、どこか田舎みたいな場所で、自分を偽って、ひっそりと暮らすんだ。そしていつかほとぼりが冷めたら……神浜まであの子に迎えにいつてあげてくれ」

「……」

その言葉が輝に迷いを齎した。顔を歪めて、俯かせる。

「それが、母親としての義務だ。そして……僕の願いだ」

願ひ、という言葉を受けて、輝は顔を上げた。輝一は屈託無い笑顔を向けている。彼は両手を広げると、妻の華奢で小柄な身体を包み込む様にして、抱きしめた。

「輝一さん、私は……！」

それが彼の迷いの無い決意の表れだと確信した耀は、自分も選択を口にしようとする。

「『愛の逃避行』は映画の中だけにさせていただきたいですなあ」

「!!」

ねっとりとした男の声が二人の会話に割って入った。輝一と耀がギクリと肩を震わすと、即座に離れて、バツと後ろを振り向いた。

「見つけましたよお。環さあん」

初老の恰幅の良いコートを羽織った大男が、尊大な態度を滲ませながら、ズンズンと大股で歩み寄ってくる。

張り付いた笑みはニコニコと笑っていて人が良さそうに見えた。だが、細められた目は、本能を顕わにした獣の様な眼光がギラギラと瞬いており、表情とは対照的に、自分達に対する敵意を剥き出しにしていた。

「サンシャイングループか……!」

輝一は、そう言つてクツと忌々しそうに歯噛みする。初老の男一人だけなら、自分だけでもなんとかいませただろう。

だが、初老の男は後ろに黒服を纏った屈強そうな男——ボディガードか——達を、5名も従えていた。ここで自分達を確実に捕らえるつもりだろう。

しかし、一つ、不可解な事がある。

「どうして、ここまで……」

「あなた方の過去を既に弊社は調査済みですよお？」

「!!」

初老の男はフン、と鼻で笑って一蹴すると、そう言つてのけた。

輝一と耀の瞳が、驚きに見開かれる。

初老の男は二人が身体を預けていたレンガ造りの建物を見る。看板は取り外されており、窓には全てブラインドが掛かって中が見えなくなっていた。

「むかあし、カフェだったここが思い出の場所だったんですつてねえ。待ち伏せしてたら案の定、だった訳です」

忌々しく歯噛みする輝一。

初老の男は薄くなった白髪を撫でると、笑みを、ニタニタと気色悪いものに変えた。

「会長と『博士』が、貴方がたをお待ちかねです。大人しく神戸市までご同行願いたい」

初老の男はそこで、首を半分後ろに向けて顎で合図する。即座に黒服達がこぞつて前に出てきた。

「なあに、手荒な真似は致しませんよお。抵抗しなければ、ねえ？」  
即座に、輝一は後ろを振り向いた!!

「輝！ 逃げろ!!」

「でも、あなたが……!!」

「早く行け!! こいつらは僕がなんとかする!!」

「輝一さん……!!」

「君だけでも生き延びるんだ!! そしていつかあの子を」

———そこで、固まった。

まるで、コンマ一秒の様な一瞬だった。

だが、輝一は確かにそう感じた。

身体の動きが、全身の感覚が、そして、意識が———液体窒素を浴びた様に、ピタリと固まった気がした。

視界に映る耀の身体も同じ様に、一瞬だけ、固まっていた。

いや、固まった、というのは正確な表現では無いかもしれない。

もつと、具体的で、分かりやすい表現で表すなら——

『時が止まった』

「グウツ!!」

直後——意識が覚醒。全身の感覚が戻ってきた。

瞬時に起こったのは、首の痛み。まるで鉄棒で殴られたかの様な鈍痛に、輝一は顔を歪める。

一瞬の内に、かなり強い力で叩かれたらしい。意識が遠のいていき、視界がボンヤリと黒く染まっていく。

「耀……!」

前方を確認すると、彼女も同じ状態であった。首の激痛に顔を顰めると、そのまま意識を失って、路面に倒れ込んだ。

なんとか駆け寄ろうとする彼だったが、意識がそこで時間切れを告げた。

視界が闇に染まると——支えを失った柱の様に倒れて、そのままアスファルトの路面に、身体の前面を叩きつけた。





「協力してください。さったお礼に何か報酬を差し上げたいのですが」

「こんなもの、仕事の内に入らないわ」

ニコニコと人の良い笑みを浮かべる初老の男の申し出に對して、黒い外套の少女は冷淡に返した。目を覆い隠すぐらいフードを深く被っているせいで、感情が全く伺えない。

「でしたらあ、せめてお名前だけでも、教えてもらえませんかねえ」

今後もお付き合いする可能性があるかもしれない、と初老の男は言う、胸ポケットから、勤務先と名前と連絡先が書かれた名刺を取り出して、黒い外套の少女に差し出した。

「名前は無いわ」

だが、少女は受け取る事無く、ピシヤリとそう言い放った。

「へえっ?!」

まるで、自分の名前なんてどうでもいい。寧ろ、捨てたとさえ言いたげな、ぶつきらぼうな言い様に、初老の男は呆氣に取られた。

目を丸くして、少女を見つめる。

「『匿名希望』よ」

そう言った後、僅かに顔を上げる少女。

刹那——僅かに、少女の瞳が確認できた。綺麗なアメジストの光が輝いている。

「……っ!？」

だが、それを見た瞬間——初老の男は息を飲んだ。

恐怖心が一斉に湧き上がると、全身が硬直。

澄み切ったアメジストの光の奥。その美麗さとは対照的に、獲物の兎をどこまでも追いかけてようとする猛禽類の様な、獰猛性を含む執念の塊が蠢いていた。

彼は仕事上で、色んな人間と出逢ってきた。だが、如何なる『老獺』と謂われる様な人物を前にしても、こんな気迫を持つ瞳の持ち主は知らない。

ましてや——自分の娘と同一年くらいの子で。

直後、背中にゾーツと冷たいものは這い出して、全身が震えた。まるで、殺し屋かヤクザに、額に拳銃を突きつけられて脅されている程に、肝が冷えていた。

じつとり、脂汗が流れ出す。

（会長と『博士』は……こんな化物みたいな連中とよろしくやってるっていうのかあ……

!?)

二人の人間性を疑いそうになる。

しかし、悲しいかな、それが会社の方針であるならば、中間管理職の彼は大人しく従うしかなかつた。

「……………では、「名無しのクロ」とお呼びいたします。それで、宜しいですか?」

「ええ、お好きに」

少女に対する恐ろしさを無理矢理隠しながら、笑つて提案する初老の男に、少女はコクリと頷くと、彼についていく形で、輝一と耀が運び込まれた車まで足を運んでいった。

夕日はそこで、姿を隠し、闇が一带が単食い始めた。



FILE #11—S 女帝か独裁者か!? 明京町の常盤ななか!

神浜市明京町役場——

和装的な造りの執務室には、この部屋の主と思しき少女と、七海やちよの姿が有った。「明京町の犯罪率1%未満達成。おめでとう」

やちよが和やかな笑みを浮かべて賛辞を送るも、少女の顔は冷たかった。丁寧なお辞儀とともに口から発せられた「ありがとうございます」という短い言葉からも一切の感情が乗っていない。

彼女の名前は常盤ななかという。明京町役場に在籍する治安維持部隊のチームリーダー

ダーである。

やちよとは対照的に、全身を紅蓮に染め上げた彼女は、その見た目から想像できる通り、烈火の如き激しさと勢いで、町内での権勢を強めていった。

——元々、明京町は町長の小林正志と、なかなかの前任者が日和見主義な性格であつたせいで、治安が荒れていた。流れ込んできた余所者の魔法少女達が軽犯罪を繰り返し、魔女は各区域で暴れ回り、住宅の損壊や負傷者を拡大させていた。

治安維持部が頼れないなら、警察に頼るしかない——そう考えた町民たちが、それらの被害届を警察に持ち込むのは必然だった。

しかし、如何にエキスパートとは言え、魔法少女と魔女相手には流石の彼らも為す術が無く、捜査は難行を極めた。

最終的に町警察署長が「市民の命も大事だが、部下の命も無碍にすることはできない」と宣言し、捜査を尽く打ち切りにしたせいで町民の不満は、爆発した。

役場と警察署前で、毎日の様に町民による激しいデモ活動が行われた。更に公務員や警察の一部が、これに謝罪せず、反発したせいで一気に泥沼化。

その話は、市役所にも届く事になり、町民同士の一触即発の事態に成りかねないと見たやちよと市長が、町長の小林と治安維持部チームリーダーを叱責する為に、腰を上げたが……

その時、救世主が現れたのだ。それが、常磐ななかだった。

彼女は明京町の治安維持部に配属されると、直ぐに町長に直談判して一喝！ その威勢の凄まじさに恐れを成した小林は、直ぐ様ななかの言う通り、治安維持部で胡座を掻いていた当時のメンバーを一斉解雇。彼女達を役場から追放した。

残ったのはななかだけ。つまり、チームリーダーの任も、そのまま流れるようにして、ななかに委譲された。

直後、彼女は行動を起こす。

役場の職員、一般市民、情報屋、フリーの魔法少女、警察……至る所から情報収集、及び協力をもちかけると、各区域で暴れる魔法少女の確保と魔法の殲滅に努めだした。

必死の行動の甲斐もあって、三ヶ月後には、明京町は元の平安を取り戻した。

そして、ななかは、町を救った英雄として、市民から絶大な支持を得た。光の如き速さで、役場での地位を不動のものにしたのだった。

彼女の勢いは留まることを知らない。

捜査と魔法討伐に協力してくれた魔法少女の内、特に『優秀』だと見抜いた者を自らスカウトすると、治安維持部に誘致した。

その中で、『純美雨』（チユンメイユン）を味方に引き込めたのは、ななかにとって大きな役得だった。



中国拳法を用いた高い戦闘力もさることながら、冷静に状況を見抜き、的確な判断が下せる思慮深さは自身の参謀役として付けるのはうってつけだったし、何より、彼女のバックボーンの巨大組織と繋がりを持つことができた。

『蒼海幫』……………中国生まれの日本人によつて創立され、戦後のヤミ市から発展した、中国系マフィア組織だ。

戦後から神戸市を裏から支えてきた——謂わば市の発展に一役担つてきた——組織であるだけに、その影響力は市内でも絶大。名を口にするだけで、神戸市の表舞台に立つ多くの企業家や政治家は怯えて口を閉ざしてしまふ程だ。

現在でも多数の構成員が市内に存在し、互いに情報を取り合っている。

その力的一端を手に入れたななかを止められる者は、もう明京町内のどこにも居なかった。

直属の上司であり、町長である小林も、町警察署長も、各公的機関の長も、たった16歳の少女が何か要求をすれば、首を縦に振らざるを得ない状態にあった。

明京町の影の支配者、真の町長——ななかをそう称する声も少くない。

「市長も、感激なされていたわ。治安維持部始まつて以来の快挙とね」

とはいえ、治安維持部に於ける彼女の働きは優秀そのものであった。チームリーダー任命当初から「犯罪撲滅」を掲げてきた彼女は、部隊内での活動を全てそちらに極振り

している。

先程やちよが伝えた『犯罪率1%未満達成』はその努力の証であった。

「市長からその様なお言葉を賜って頂けるとは……! 光栄至極に値しますね」

市長——その単語がやちよの口から出た途端、ななかの顔に感情が表現された。口の端が僅かに上がり、喜色に彩られた。

微笑を浮かべながら、眩かれた言葉には、やちよに対する挑発が多分に込められている様だった。まるで、「貴女ではなく、市長に褒められたのが嬉しい」とあからさまに伝えていくかの様だ。

「ただ……貴女が立てた功績の裏には注意しなければならぬ点があるわね」

「それは?」

だが、やちよはそれには意を介さず、話を続ける。ななかは、睨む様に目を細めてきた。

「まず、貴女は業務にフリーの魔法少女を協力させているわね」

「?? 七海部長、それは貴女も現在進行系で行っているではありませんか」

治安維持部の魔法少女が何らかの都合で不在になってしまう場合は、町の治安をフリーの魔法少女に預けても構わない。その代わり、頼んだ魔法少女に対しては、労働に応じた金銭を支払わなければならない、と市条例で定められている。

やちよの場合、町外へと出張する場合に限り、フリーの魔法少女達に頼んでいるのだ。だが、ななかは……

「貴女の場合は、日頃から、賄賂を手渡している」

「賄賂とは人聞きが悪いですね」

氷の眼差しをぶつけるが、ななかは震えない。むしろ、フツと笑い飛ばした。

「業務に協力させるのはあくまで、私達が『不在時に限る』のみよ。常時協力させる様に仕向けるのは、条例に反しているわ」

「魔法少女たるもの、自分が住む町を守りたいと思うのは当然の感情です。彼女たちは何れも自発的に我々に協力してくださっています。七海部長、貴女が見ていないところで」

ななかの瞳が、鋭くなる。僅かながら熱気の籠もった眼差しが、やちよの凍り付いた眼差しと空中でぶつかった。

「私は、働きに応じた『報酬』を支払っているだけです」

「だとしたら、その内容を逐一報告してもらいたいものね」

「それは、なりません」

ななかは首を振った。

「情報はあまり多くの人間が持つべきではありません。どこかから漏れれば、尾ひれが

付いて、歪曲して誰かに伝わってしまう可能性がります。……貴女が『賄賂』と断定したように」

遠回しにやちよに対して、貴女は信用ならない、と告げるななか。

「そもそも、賄賂とは、誰から聞き及んだのですか?」

「おけらからみたまが聞いた、と言ったら?」

おけらとは、明京町で調整員を務める魔法少女——『八坂おけら』の事である。

小学生の様に小柄で騒がしい性分だが、料理人としては一流の腕前を持っており、彼女が役場の一階で経営している居酒屋『鏡屋』は、毎晩繁盛している。

「おけらの事は、私達の方が良く知っています」

微笑を浮かべて答えるななか。おけらは義理固い人物で、役場の人間や魔法少女達からの信頼も厚い。そんな彼女が、ななか達にとって不利益な情報を流すなど有り得ない。

「……嘘でしょう?」

「……」

一拍置いてから、低い声でそう指摘してやった。

やちよは答えない。あくまで冷ややかにななかを見つめているだけだ。

「無言は肯定と受け取ります。部長としての立場を立証させたいが為に、嘘を付くなど

言語道断。同じ魔法少女を纏める立場の者としてお恥ずかしい限りです。もし、本当に聞いていたのなら、ボイスレコーダーでも持参なさるべきでしたね」

ななかにとって、やちよの無言は、立場を逆転させる絶好の好機だった。即座に叱責する側に回り、自分の方に正当性があるのだと主張した。

やちよの瞳を見ると、冷気が更に伴っている様に見えるが、最早自分にはどこ吹く風だ。

「……『賄賂』でないと分かれば、それで十分よ」

「認めてくださるのですね。ありがとうございます」

愉快な笑みを見せつつ、恭しくお辞儀をするななか。

「でも、貴女の掲げる『犯罪撲滅』は常軌を逸している様に見えるわ」

「……」

やちよはまだ言いたいことが有るようだ。ななかは顔を上げて、威圧を込めた瞳で見据える。

「万引きを働いた中学生を、二時間も拘束して尋問したそうね」

棘の含んだ指摘に、ななかの片眉がピクリと動く。

「その子が『いじめっ子の指示でやった』と白状したら、解放した。フリーの魔法少女の監視を付けて」

やちよは声色を低くして話を続ける。ななかは黙って聞いていたが、眼光の熱が増々上昇した。

「そして、いじめの現場を確認したら、いじめっ子達を取り押さえ、厳しく罰した。一人三万円の罰金を課したそうね」

中学生からしてみれば随分大金だ。

これらの強権的な罰を治安維持部が独断で執行したとなれば、普通は大問題になる。だが、表沙汰にはなっていないかった。

今や、町民の誰もがななかを信用しているのと同時に——恐れを抱いているのだ。騒ぎ立てれば、蒼海幫の力を背景に何をされるのか分からない。

最悪、学校に根回しをされて退学を言い渡される可能性だけである。

よって、いじめっ子達も、その親御達も、黙って従うしか無かった。

「それだけじゃない。貴女は町内で起きた刑事事件にも主体的に関わっているわね。警察の意見も聞かず、独自に捜査を進めて……」

「……………」

ななかはそこでやちよに背を向けると、自身のデスクへと歩み寄った。

椅子に腰を掛けて、足を組み始める。

「容疑者を確保して、尋問して証拠を吐かせた後に、警察署に突き出している」

「……」

両腕を組んで僅かに顔を俯かせるななか。やちよには何かを考えている様な仕草にも見えたが——真意が読めなかつた。

「本来これらは警察の義務であつて、私達の役割では無いはずよ。ましてや、軟禁して尋問なんて、条例どころか人倫に反した行為ね」

不審に思いながらも、やちよはそうピシヤリと言つて締める。

ななかは、黙りこくつたままだ。

暫く静寂が二人の間を支配したかと思うと——ななかの首が更に深く倒れた。口元に手を当てる。

「ふふつ……」

「!？」

刹那——含み笑い声が耳朶を叩いてきて、やちよは愕然となる。

間違いない！ 発信源は、塞がれたななかの口からだ。

「ふふふつ……！ 七海部長」

笑いを堪えきれず、肩を震わせながらななかは顔を上げる。喜色満面の笑みが、やち

よの能面に僅かな変化をもたらした。

「何がおかしいのかしら?」

眉間に皺をグツと寄せて、脅す様な声を叩きつける。だが、ななかには全く通用しない。一頻り笑った彼女は、

「申し訳ありません。貴女の仰っていたことがあまりにも滑稽で……堪えきれませんでした」

等と、無礼千万を、さも平然と口に出した。やちよは目を鋭くして睨みつける。

「滑稽?」

「ええ、七海部長、貴女は……本気で仰っているのですか?」

花が咲いた様な可愛らしい笑顔と共に放たれた言葉は、酷く冷え付いている様に聞こえた。

「疑わしきは罰せり——次の事件が起きてからでは遅いのですよ」

ななかが目を見開いた。大きな丸目からは紅蓮の光が煌々と輝いている。

「我々、治安維持部は小規模ではありますが、公的な警察組織の筈です。その名が示す通り、治安を維持するために、犯罪の芽は刈り取らなくてはなりません」



「それでも、魔法少女の力は強すぎる」

やちよは静かに反論した。

「世間に示し過ぎてはならないわ。人々が今以上に恐怖心を募らせてしまえば、魔法少女に対する偏見と差別がより一層強まる可能性も……」

「何を馬鹿な事を」

一言が、振り下ろされた太刀となって、やちよの言葉を斬り捨てた。

ななかからしてみれば、彼女の言葉の数々は滑稽を通り越して愚昧ぐまいにしか聞こえなかった。

生ぬるい——だから、この女は仲間を二人も死なせたのだ。

それで悔い改めれば良かったものを。今現在やっていることといえ、人材確保による組織の強化ではなく、意味の無い市外への営業やTV出演といった宣伝活動ばかりじゃないか。

それに、警察がなんだというのだ。

警察なんて組織は、自分が治安維持部に配属される以前から、役に立たない連中であつた。自らのプライドと保身の為に、市民を見限る連中を気遣う必要など、何処にあ

るのだろうか。

魔法少女と魔女の存在が公になった昨今、無力な彼らが一体人々の何を守ってくれるのだろうか？

「……最近、市内で飛び回っている『黒い虫』の事をどこ存知ですか？」

ななかの両目が、ギラリと瞬いた。獰猛な、野心の瞬きだった。

コクリと頷くやちよ。

「ならば話が早い。連中の目的はまだ知りませんが、もし、一斉に蜂起した場合、護れるのは私達だけです」

「……………」

やちよは首を縦にも横にも振らずに黙って聞いている。

「七海部長。私達は早急に証明しなければなりません。人々にとっての守護者が

『誰』であるかを……」

「警察が黙っていないでしょうね」

「彼らが如何に喚き散らそうとも、人々の認識さえ改める事ができれば、警察も自然と私達の事を認めざるを得ないでしょう。寧ろ……軍門に下るのでは無いでしょうか」

猟奇的な微笑みと同時に放たれたその言葉は、警察と一戦交える事も辞さないという覚悟の現れでもあった。

ななかの年齢は16歳、魔法少女の経験年数は2年——やちよから見れば小娘に過ぎない筈だった。

だが、彼女の纏う風格は、まるで任侠の世界で数十年も修羅場を潜り抜けた女傑の様な威厳が有った。やちよですら相對していく内に背中にじつとりと汗が浮かぶ程の緊張感が齎されていた。

自分よりも遥かに大きな人物が目の前に君臨しているように、やちよには見えた。

だが——

「深月<sup>みつき</sup>フェリシア」

その名を呟いた直後——ななかの顔つきが歪む。

「彼女は半月前に、貴女に解雇を言い渡されているわね」

「……それが、何か？」

表情の変化をやちよは見逃さなかった。じつと見つめる。ななかは睨み返してくるが、瞳から熱は消え失せているように感じた。

「ええ、その子が黒い虫の一員だと思っただんじやないかってね……」

深月フェリシアは、この明京町役場で常磐ななか指導の下、研修中の身であった魔法

少女だが——前述した様に半月前に、解雇を言い渡され、仮住まいとしていた宿舎からも追い出されている。

その後の行方は、誰も知らない。

「彼女に羽根はありません」

ななかは首を振る。やちよは疑わしそうにななかを睨んだ。

「だとしたら……物凄い問題児だったってだけ？」

「ええ」

問いかけると、ななかはコクリと頷く。

無然とした表情だが、話題を『深月フェリシア』にした途端、ななかから気迫が感じられなくなった。それがどうしようもない違和をやちよに齎す。

(……………)

やちよは此処に足を運ぶまで、明京町の人々が口々に噂していた『深月フェリシア』という少女の事を思い返してみた。

曰く、決まりごとは一切守れず、一般常識から乖離した行動ばかり取っていたという。寝坊や遅刻、早退に欠勤は当たり前。目を離れた隙には、家に帰って昼寝をしていたことが常にあったという。

その自由奔放振りには、なかなかですら頭を抱える程であったとか。

曰く、魔法少女としての力を制御できない。

なんでも、研修中に『武』の心得を身に着けさせるべく呼んだ柔道講師を、思いつきり投げ飛ばして壁に叩きつけてしまった。大怪我を負い、救急搬送されたという。

曰く、連携力が絶望的に乏しい。

なかなか、チームワークの強化や町民との交流を考えて、中学生のサッカーやバスケットの模擬試合にフェリシアを参加させた際……ワンマンプレーを存分に発揮した。

ボールを手にした途端、向い来る選手を弾き飛ばしながら、ゴールへ一直線に突撃！その猛烈さは、猪突猛進どころか犀突<sup>サイ</sup>激進と言っても過言ではなく、立ち向かった学生達は、全てが打撲や擦り傷などの軽傷を負うハメになった。

それだけでなく、ボールが他人の手に渡った場合は、たとえ同じチームの味方だろうが、タックルを仕掛けて潰そうとした。

……ななかは、学校関係者や学生の親御さんたちに、平謝りをして周ったという。

そんなフェリシアが、魔女と対峙した時に、ななかと美雨の指示と作戦を素直に聞いてくれるかどうかは……お察しの通りだ。

曰く、町では窃盗や食い逃げ、喧嘩騒ぎを日夜繰り返していた。

これは、町民の誰もが知っており、ある意味、深月フェリシアという少女を語る上で、

一番有名な話題だった。

「その子が別の町で騒ぎを起こすかもしれないわね……。そういった性質の魔法少女を矯正していくことも私達の義務ではなかったのかしら？」

「彼女は『獣』ですよ、七海部長。人の子ならいざしらず、獣を人に仕立て上げられる者など、世界中を探しても存在しません」

「貴女にしては随分弱気ね」

「何とも受け取って頂いても構いませんが、我々は今後深月フェリシアと一切関わるつもりはありませんし、明京町に一步足りとも踏み入れさせるともりもありませんので」

ななかの口調はどうも早口で忙しくなく、深月フェリシアに対して生理的な嫌悪感が見え隠れしていた。

素行の悪さとは別に何か有ったのだろう、ななかですらその感情を抱く程の、何かがある。最も、そう推測はできていても、問いかけることはしなかった。

はぐらかされるのは目に見えていたからである。

「……失礼するわ」

話はこれで終わりだ

最後まででななが態度を改めることは無かったが、聞くことは聞けたので一応は良し

としよう。

やちよは、背中を向けて執務室から退出しようとする。

「七海部長……。だから貴女は甘いと言われるのです」

背中にピシヤリと、言葉を突き立てられた。やちよの足がピタリと止まる。

「今、我々が『非情』に徹さなければ、市民の安寧は到底守れそうに無い。故に、その魔法少女が如何なる労苦や事情を抱えていたとしても、不穏分子で有れば即行で排除しなければならぬ。……違いますか？」





## FILE #15—S 『春』が齎す情報、不審な二葉父子

いろは達が去って10分が経過したころ——

「春さん、隠れてないで出てこいよ」

カタカタカタカタ……とタブレットPCからキーボード音をけたたましく響かせながら、慎は声を大きめにして虚空に発した。

先程から、鼻にツンとくる臭いに間違いないと思ったのだ。

「へっ、バレちゃったか……」

その人物は、慎の背後からのつそりと姿を現した。

背中に圧迫感を感じて慎が振り向く。自分以上に髪と髭をボサボサに伸ばした、浮浪

者染みたコート姿の老人が背後に立っていた。

「いつから居た？」

慎は疑念を込めた目で見上げると、春と呼ばれた男は、ニカツと歯を見せて笑った。

どこか一物孕んだ笑みだな、と慎は目を細めて見つめる。

その薄汚れた60〜70代ぐらいの男は、環いろはが、見たら「アツ！」と思うだろう。

昨日、八雲みたまの店で年不相応に彼女をナンパしていた老人——『春<sup>ハルミチ</sup>』その

ものだったからだ。

「最初からだ」

「環さんの後を付けてたんだな……？」

「ご名答」

それは一歩間違えばストーカーだぞ、と慎は怒りそうになったが、それを訴えた所で、この男はガハハと笑うだけだろう。

はあ、と溜息。

「何でそんな真似をする？」

「七海やちよを下した魔法少女が、あんたみたいな変人とどんな会話をするか気になったんでな」

「なるほど。で、面白かったか?」

慎が皮肉気に感想を尋ねると、春径は「ああ!」と大口を開けて答えた。ニヤニヤと笑いながら、仙人の様に伸びた真っ白い髭を上から下へと撫でた。

彼が心の底から愉快なときによくやる癖だ。

「あんたが無意識の内にあいつを追い詰めたのは見ごたえがあつたぜ!」

できれば吐くまで見たかつた——などと、冗談じやない事をさも平然と口にする春径を、忌々しく思った慎はフン!と鼻を鳴らして一蹴。

顔をタブレットPCに戻すと、執筆を再開した。

「おいおい冗談だつて。そう拗ねんなよまこっちゃん」

春径はそう言いながら、慎の向かい側の席にどかりと座つた。

「僕はさっさとこれを書き上げて食事をしなくちやいけないんだ。本題があるなら単刀直入に済ませてくれ」

慎はキーボードの音をカタカタと立てながら、無然とした様子で素っ気なく告げる。

「そうかい、じゃあ」

春径はそこで笑みを消した。

「アレ、持ってたのか?」

『アレ』——そう小さく呟く春径の瞳が冷たく光った様に、慎には見えた。

やれやれと思いながら、慎は足元に置いた黒いスポーツバッグを弄ると、中から乾燥された茶葉のようなモノが入った手のひらサイズのストックバッグを取り出し、春径に差し出す。

「どのくらい入ってる？」

「10gだ」

消え入りそうな程、小さく呟かれたその一言に、春径はニツと笑った。

コートの内ポケットから、見た目とは不釣り合いな鱷革の財布を取り出すと、中から万札を5枚取り出して、慎の差し出した物体と交換した。

「分かっているだろうが、それは……」

その言葉を発した瞬間だけ、慎の眼力が異様に強まった。

黒光が瞬いた両目で春径をギツと睨みつけるが、彼にはせせら笑いで返される。

「ああ、悪いことにやあ使わねえよ。あんたみたいにコイツを必要とする奴あごまん  
というから、そういう奴にだけ渡すさ」

「なら、いい」

慎は素っ気なく言うと、タブレットPCの画面に顔を戻して執筆を再開。

「おいおい、若造は人生の先輩の相手をするもんだぜ?」

もう少し面白い話ができると思つてたが、不機嫌にさせたのは不味ったか——春  
径は胸中でそうボヤくと、慎に呆れ顔を向けて言い放つ。

「……………」

だが、ガン無視。もう話すことは何も無いと言わんばかりに、慎は執筆に没頭し始めていた。

これ以上何を言つても、カタカタとキーボードの煩わしいタイピング音だけを返されるだろう。

そう思つた春径は——

「二葉さなの家族についてだが……………」

話題を変えることにした。すると、慎の指がピタリと止まる。

「父親の二葉義和よしかずがサンシャイングループの会長から直々にお声を掛けられて、お抱えの医療品会社に誘致されたらしい」

それも開発部の「最高顧問」待遇でな——そう告げると、慎は顔を上げてこちらを睨みつけてきた。

「兄貴の二葉漱也も、今年の四月からサンシャイン重工の営業一課で働き始めている」  
「……………っ!!」

無のままだった慎の形相に、怒りの感情が全面に貼り付けられた。

白い肌が額から赤く染まりかけている。

「大企業様々！ これで二葉家は万々歳！ 安泰だなあ！」

誰にでもなくパチパチと拍手喝采を送る春徑に、慎は我慢の限界の様子だった。  
すつと立ち上がると、春徑の目先まで歩み寄る。

「春さん、あんた何が言いたいんだ……………!?!」

激情が滲み出すように、声が震えていた。黒ずんだ瞳で春徑をじつと見下ろす。

「なんだ、わかんねえのか？」

今にも殴りかかってきそうな慎を間近に据えても、春徑は怯まない。

寧ろ、カツカツカつと笑って見せた。慎が拳を握り締めて震わせた———次の瞬間、

「さなちゃんの家は今も幸せにやっってるって言いたかったんだよ！」

その一言で、爆発した。

「このクソ野郎ツ!!」

慎の形相が一瞬で鬼と化した。自然と声が叫ぶ様に張り上がった。

春径の胸ぐらを両手で掴んで、引つ張り上げて強引に椅子から立たせた!

「そんなことを僕に伝えて何になるツ!!? 奴らはさなくんを……家族を無視して、ゴミ同然に捨てたクズ共だツ!! そんな連中の今を聞いた所でツ!!」

さなくんに辛い思いを与えるだけだ!!——と訴える前に、春径がニヤリと笑つて、

「やつぱり、まだまだ青二才だな……」

「っ!?!」

そう告げてきた。

彼を殴るよりも前に、その不敵さが籠もる笑みが気になった慎は、思わず胸ぐらを掴んでいた両手を離してしまふ。

「いいか、よく考えろ。親父と息子が同じ企業グループに入ったんだ。何か臭うとは思わねえか」

春径の表情は、先程自分に向けたものとは比較にならないほど、真剣なものだった。

だが、意図は読めない。慎はクツと歯噛みする。

「偶然が重なっただけだろう! サンシャイングループ程の大企業なら誰もが入社した

いに決まってる！」

サンシャイングループは、日本有数の大企業の一つだ。

現・代表取締役会長——日秀源道によって一代で築かれた企業は、食品開発に始まり……生活雑貨、建築、不動産、医療機器、薬品開発、機械製作、電気通信、物流……最近では飲食業界と福祉業界に参入と、幅広く規模を展開し、日本中の人々の生活の大黒柱となっている。

特に此処、神浜市に置いて、サンシャイングループの存在感は絶大であった。

10年前——『魔法少女保護特区』として指定された際、神浜市は大規模な都市化開発が行われた。その際、多大な資金援助を行ったのが他でもないサンシャイングループだったのだ。

現在、生まれ変わった神浜市ではその功績を讃えるかの様に、到る地域でサンシャイングループ系列の店舗や事業所が立地されている。

……話は逸れたが、大企業であるだけにサンシャイングループ系列の企業は何れも雇用条件は良い。

よって、一度入社できれば将来は安泰。神浜市に住む就活生の間では『一番入りたい企業』と専らの評判であり、働き易さについてはTVで特集を組まれた程だ。



「親父はまあいいが、息子を調べたら色々と不可解な点があつてな」

「それは？」

「二葉漱也は、3月上旬の時点で、内定を四つも貰っていた。だが、その中にサンシャイン重工は無かつたそうだ」

春径の言葉に、慎は目を見開いた。

「何だと……？」

二葉家については、さな以外知つたことではない——そう思っていたが、春径から聞く話は実に奇妙で、作家としての勘が疼いてしまった。

耳を研ぎ澄まして、その先を黙って聞くことにする。

「他の4つを捨ててサンシャイン重工の内定を取りに行きましたってかあ……？ 無理な話だな」

春径はそんな荒唐無稽な話を呟くと、あつさりと吐き捨てた。

彼の友人もサンシャイン重工に努めているそうだが、営業課の就職となると試験が厳しいらしい。

筆記↓面接↓二次筆記↓二次面接↓三次筆記↓役員面接↓社長面接と—————実に6段階もステップを踏んで行われるそうだ。

一ヶ月以上も掛かりそうなそれらを、僅か半月という短期間でできるとは到底思えない。

「だが、漱也は下旬には、サンシャイン重工に勤め先を決めていた」

「誰かの意志が働いた……とでも？」

「落ち着いてきたじゃねえか。まあ、そんなところだ」

冷静さを取り戻して熟考を始める慎に、春径はふふ、と軽く笑う。

「だが、誰が一体、何のために……？」

「この場合は口封じだな」

頭を捻って考え込む慎に、春径が既に悟った様子でそう答えた。

「サンシャイングループは義和と漱也をなんらかの形で自分達の元に縛り付けとく必要があった、と俺は見ている」

「それこそ荒唐無稽だな」

まるで妄想だ——思わず口からポロリと出てきそうになった言葉を喉元で止めた。代わりに慎はフン、と鼻で笑ってやる。

だが、春径の形相は真剣に固く締めていて、一片も嘘を言ってる雰囲気では無かった。

「なあ、まごっちゃん」

春徑は先程座っていた席に再び腰掛けると、コートの胸ポケットからタバコを一本取り出して吸い始めた。

基本的に女性をナンパする事が多い彼は、口臭を気にしてか滅多に吸わない——代わりに香水を、満遍なく全身に吹き付けているので、近寄ると鼻が曲がりそうになるのだが——。

そんな彼が珍しく吸う時は——無理難題という“壁”にぶつかっている事の証明でもあった。

「なんだい?」

慎も元の席に戻ると、タブレットPCをボタンと閉じて、春徑と向き合う。

彼は口からタバコを外し、プウ、と煙を吐いた。

「さなちゃんが家族総出のネグレクトを受け始めたのは……?」

その質問に、慎は若干顔を複雑そうに歪めた。

「……今年の2月10日からだった」

「じゃ、さなちゃんが魔法少女になったのは……いつぐらいだったっけか?」

「……今年の3月3日だな」

「やっばりな」

春徑は勝手に納得すると上を仰いだ。

雲ひとつない、澄み切った青空を黙って見詰めている。

何か有るのか?———と思つた慎も彼に合わせるように空を見上げた。真つ青な空の中で白鳥に似た鳥のツガイが優雅に飛んでいる。

「何も無いな」

「いいや」

そう呟くと、彼は顔を戻してフツと笑う。

「まこっちゃん、魔法少女の素質を持った女の子つてのは……『みにくいアヒルの子』によく似てるな」

「ふざけてるのか?」

今日の彼は何かおかしい。先程から突拍子も無い話ばかりしている。

疑わしい目を向けると、春径は小さく口を開いた。

「その3月3日だ……」

「!？」

二葉さなが魔法少女になった日———慎が思わず聞き耳を研ぎ澄ませる。

「義和と漱也にサンシャイングループからお声が掛かったのは……二葉さなが魔法少女になったのと同時期だ」

☆

慎は、呆然のあまり、しばらく椅子の上で硬直した。

「つまりはどういうことだ……？」

「どういふこともなにもそういうことだ……」

二人の浮浪者染みた男が、相変わらず空を見上げていた。雲一つ無い青空。本日は晴天なり。

「全部仕組まれてたつて言いたいのか……？」

「まあ俺の見立てではそうなるな」

しかし、心はどんより曇り空。今にも雨か雷が振つてきそうなくらい、暗い。

二人は空を見上げながらタバコを吸っていた。吐き出した煙がモクモクと浮かび、蒼穹に吸い込まれて消えていく。

「そして、神戸市の魔法少女を一人増やした恩赦が父親と兄貴に渡されたつて訳か……」

「そうだ。口封じも込みでな」

「馬鹿げている。そんなことをして、大企業がなんで得をする？」

「何でかは知らんが……巷で噂になっている『黒い虫』が関与しているからだろうな……」

「何？」

慎は顔を下げて、春徑をじつと見た。彼は相変わらず空を見上げている。

「大東区で、一月前に『矢宵板金工場』がサンシャイン重工の傘下に入った。それ以来、区内の魔法少女から夜な夜な黒装束の不審人物を見たって情報が入ってくるんだよ」

「黒い虫が人間の手を借りて巣穴を作っているのか……」

「サンシャイングループとそいつらが手を組んでいるのは間違いないねえ。さなちゃんの場合に関しても、そいつらが何かを仕掛けた筈だ」

春徑はいつに無く真剣だった。

慎はくつくつと笑みを零す。

「ここまで荒唐無稽な話が続くと、呆れを通り越して笑いたくなる。

「なんだよその態度は……」

春徑も笑い声を聞いて怪訝に思ったらしい。顔を下げて、慎を睨みつけてきた。

「いや、傑作だよ春さん。僕も想像力は豊かな方だが、あんたには負けるね。今度新作を手がける時に原作をお願いしたいぐらいだ」

嘲笑いながら皮肉交じりにそう言うてのける。春径は不快に感じたのか、若干ムスツと顔を顰めた。

「……俺が嘘を付いたことは？」

「無いが……そもそもあんた暇人だろ。考える余裕はいくらでもある」

「まあ、信じる信じないはおまえさんの自由だ……」

春径はハア、と溜息を付くと、椅子を引いて、どっこいしょと立ち上がる。

背中を向けたので、帰るつもりかと思つて眺めていると、

「ただ……」

ポツリと、消え入りそうな声で呟いた。

「大東区じゃ既に、中学生が二人、行方不明になつて……」

「……！」

驚きに目を見開いた。

「いずれも魔法少女じゃない子だが……連中の狙いはそれぐらいの年の娘だ」

彼はそう零すと、歩き始めた。

「まこっちゃん。さなちゃんのこと、よく見ておいた方がいいぜ」

そして、その言葉を最後に、早足で去って行ってしまおう。

「……………」

彼の姿が見えなくなつてから、慎は少し考え込む。

——行方不明ねえ。変質者の仕業じゃないのか？

明京町にある大東区は神浜市の中で最も治安が悪いと有名だ。

沿岸部に位置する土地である為、海外からアジア・中国系移民が流れ付き、強盗や麻薬密売といった犯罪を繰り返していた。

無論、常磐ななが主導する地元の魔法少女達と警察、そして蒼海弊の尽力によつて大分抑え込まれてはいるが……それでも流れ着いてくる不法移民を完全に封じることが未だできていない。彼ら不法滞在者による未成年少女の誘拐や人身売買、強姦事件は今もなお、町の片隅で続いているのだ。

春径は随分巧妙な言い回しをしたな、と慎は思う。

あれだと、『黒い虫』が少女を誘拐したように思つてしまふ。

『黒い虫』は確かに噂を聞く限り怪しい集団にしか思えないが、大企業と手を組んでるとか、未成年少女を狙っているとかは、流星に春径の考え過ぎ——というか妄想——では無いのか？

彼は暫く、執筆も忘れて思考に耽つていた。





FILE #16—S 『雉』の黄昏と、『鶴』の傷痕

かつては腕利きの刑事だった彼は、定年退職してから8年間、退職金を当てに自堕落な生活を送っていた。たまに飲むしよぼい酒、たまに仲間とやるしよぼい博打を肴にして——社会の役割を失った男というのは情けないものだ。死んだような毎日を送るしかない。

このまま息絶えるまで無意味な日常を、暗闇の中に潜り込んだ蝙蝠の様にひっそりと生きていくのだろうか——そう考えていた彼だったが、

——半年前に、光が差した。

結果、彼は生き始めた。生きて、明日を向かなければならなくなった。それは、刑事の頃の自分が持っていた「活力」であつた。

——それにしても、水の音が煩わしい。

男は不快に感じて、むくりと起き上がった。そこで彼は自身が布団で寝ていたことに気づく。

そうだ確か——昨日は珍しく浴びる様に飲んだんだっけか。記憶を失つて、男か、あいつが此処に運んでくれたのだろう。後で礼を言つてやるか。

それにしても、水の音がさつきから激しい。音量からして、場所は恐らく脱衣場。

——隼の野郎、出しっぱなしで寝やがったか。

男はもうすぐ齢70になるが、身体で機能的に衰えている箇所は無かつた。視力は両目ともに1・5はあるし、耳はハッキリと聞こえていた。

脱衣場の近くにはトイレがあるので、夜中に起きて忘れたのだろう。そう断定し、頭の中で甥を名指しで叱つてやる。

相変わらず、呑気でうっかりな奴だ。兄貴にこれっぽっちも似ていない。あの無神経振りを見てるとイライラする。

男は舌打ちすると、枕の上に置いた時計を見て、時刻を確認する。

現在、深夜2時13分——仕方ない、止めてくるか、と思い、立ち上がろうとするが、

——水の音に、違和を感じた。

「ジャーツ」と、流れるだけの音ならまだいい。バシャバシャとは、どう……事だ。

——何だ？ 誰かが、何かを「洗っている」のか……？

男は奇妙に感じて、その場でじっと待つ。

トイレから出て手を洗うにしては、長すぎる。

——まさか、兄貴が化けて出てきたってのか？

甥にしろあいつにしろ仕事以外の手洗いはサツと済ませる。念入りに洗う者といえ、自分と……家族の中ではあと一人しかいない。

だが、確かそいつは、もうとつくに土の中にいる筈だ。

刑事時代の彼は超常現象の類を全く信じていなかったが、『魔法少女』の存在を認知してからは、それを疑うようになっていた。あんなものが現実に万人も居るんだから、幽

靈が十人や百人いたっておかしくはない。

あれこれ考えている内に5分が経過していた。

「バシャバシャ」という水音は未だ止まない。余程手に汚いものがこびりついていたのだろうか。

——いや、待てよ。もしかしたら……

自分かもしれないと、男は不意にそう思った。

酔っぱらって、記憶を失って……何かに吐しゃ物をブチ撒けたのかもしれない。

深夜に目が覚めたのに、二日酔いせず、頭がスッキリしてるのはそのせいだろうか。

だとしたら、何かを洗っているのはあいつだ。途端に申し訳無い気持ちだが、湧き上がる。

男は足早に部屋を出て、階段を下りた。

☆



「……………」

咄嗟に駆けよって、その腕を掴んだ。甥の娘——鶴乃は、一切反応しない。無言のまま、顔を俯かせている。

「あかぎれになってるじゃねえか」

季節は真冬だ。しかも時間は深夜。水道水は氷の様に冷たいはずだ。

鶴乃の手は長時間冷水に浸りきっていたせいで、ふやけるどころか、全体が痛ましい程に罅割れを起こし、真っ赤に染まっていた。叩いたら割れて血漿を飛び散らせそう  
だ。

「……………」

だが、鶴乃はその指摘を受けても一切振り向くことは無かった。寧ろ、彼の手を振り払い、再び両手を冷水に浸してこすり続ける。

「やめろ」

男はもう見ていられないとばかりに、語気を強めにして叩きつけるようにそう言った。

「……………」

「てめえがやってることは馬鹿のやることだ」

「……………」

だが、鶴乃は無視して、バシヤバシヤと洗い続ける。

男は疑わしそうに目を細めた。

「何が有った？」

どうせ返つてこないだろうと分かりつつも、聞かない訳にはいかなかった。

この娘だけは、意地でも守つていかなければならない。男にはその義務があった。

「……ち……い」

「は？」

鶴乃が消え入りそうな声で、ゆっくりと呟いた。男は耳を傾ける。

「……落ちない」

「……っ!？」

鶴乃が何を言っているのか、男にはわからなかった。

「……落ちない、落ちないよ……」

「??」馬鹿言え、手には何もついてねえぞ……!？」

男は、寝ぼけているのか、とすら思ってしまった。

だが、先程から背筋を虫の様に這い続けるこの冷たいものは、なんだ……!？」

嫌な予感がする。

自分にとって、絶対悪い事が、今直ぐに起きるかもしれない。そう思い至ると、肩が



グツと強張った。

「……ずっと洗ってるのに……こびりついちゃって……落ちないんだよ……っ！」

鶴乃の声が震えてくる。冷水に打たれる両手は、いくら洗っても綺麗に浄化されるところか、生々しい赤い罅割れを次々と形成していた。

「何が……手に付いてやがる？」

それは尋ねてはならない質問だったのかもしれない。

だが、男は自身が背負った強い義務感に背中を押された。尋ねずにはいられなかった。

【痛み】

「……!?!」

ボソツと、低い声で呟かれた一言に、男は息を飲んだ。  
悪い予感、的中した。

「おんじ、わたしって……●●ってるのかな？」

続けざまに放たれたその言葉は——男の背筋がゾツと凍える程、虚しく響いていた。

その問いに対する明確な答えを、当時の彼は持つてはいなかった。

☆

そして、一年と半年の月日が流れた……

FILE #17—S 鶴乃の前に立ち塞がる二人の影  
！ 八坂おけらと、常磐ななかの野望!?

そして——時間は現在に戻る。

自動車教習所は同じ区内にあるため、万々歳からはそう遠くは無い。  
しかし、家を出るのが遅すぎた。魔法少女の脚力を持ってしても、14時の講習には間に合わないかもしれない。

(ヤツバ……！、こうなったら変身して……)

気持ち焦ってきた。額に汗が浮かぶ。

余計な魔力を使いたくなかったが、仕方がない。鶴乃は右手を掲げると、

「お——ッ!! 鶴の字じゃねーかーッ!!」

変身しようと思っていた矢先だった。後ろから大声を掛けられてギョツとなる。

バツと振り向くと、いつ間にか後ろから一台の真っ赤なスポーツカーが迫ってきていた。

慌てて、横に飛び退こうとするが、

「っ!!」

運転手の顔を見た瞬間、鶴乃は驚いて動きを停めた。

「おけらさんっ!!」

「ガッハッハッハッハッハッハ!!」

スポーツカーは鶴乃の眼前でピタリと止まった。

運転席で豪快に笑っているのは、サングラスを掛けたガタイの良いオヤジ、ではなく、どうみても道路交通法に違反しそうな——要は、どうみても18歳未満にしか見えない——小さな女の子であった。銀色に輝く髪を大きな黒いリボンでツインテールに縛っている。

鶴乃は彼女のことを良く知っていた。

八坂おけら——明京町の町役場にて、『調整員』を務める魔法少女だ。

グラマラスなみたまとは対照的に、小学5年生ぐらいの未発達な体躯だが、年齢の方は（本人曰く）20代後半らしい。

役場の1階で定食屋兼居酒屋『鏡屋』を一人で切り盛りしており、同業者として由比家とは度々交流があった。（無論人気の方はおけらの店の方が断然上だが……）。

調整課は市役所属ではあるが、立場は中立だ。行政や治安維持部の方針に従う事はない。

彼女たちはあくまで、「全ての魔法少女を平等に支援する」ことを義務としている。故に鶴乃もおけらとみたまにだけは心を許していた。

「ごめん、おけらさん！ 今急いでて」

自分に声を掛けてくれたことは嬉しいが、今は相手をしている時間は無いのだ。

鶴乃はクルツと背を向けて、去ろうとするが、

「なら乗りねえ！ 連れてってやるよ!!」

走る寸前で、おけらにそう呼び止められた。クイツと親指で後ろを差す。後部座席に乗れ、という指示だろう。

但し、先客が居た。白いワンピースを身に着けた華奢な少女らしき人物が右側に座つ

ている。麦わら帽子を目元を覆うぐらい深く被っているせいで誰かは伺えない。

「え? でも……」

先に乗ってるこの子に悪いんじゃないか、そう思つて断ろうとするが、おけらはまたガハハハと豪快に笑つた。

「遠慮すんなつて! 二人より三人の方が賑やかだつ!」

後部座席の少女も、僅かに微笑みを浮かべて頷く。

「あ、ありがとう!!」

それを見て、鶴乃は安心した。車の左側に回ると、ドアを開けて、少女の隣に座る。

「お邪魔するね」

「……」

鶴乃は笑顔を向ける。少女は何も言わずに、微笑みを向けながらコクリと頷いた。

そして前を向くと、おけらはギアを動かして車を発進させる。

「あ、そうそう」

車が前進した瞬間だった。おけらは何か思い出した様な声を挙げる。

どこかわざとらしく聞こえて、鶴乃は目を細めた。

「ウチの女王様がオメエと話したいそうだ」

「女王?」

「ななか!」

鶴乃が呆気に取られていると、おけらが少女の名を呼んだ。

「えっ??」

鶴乃が隣の少女を見つめる。深く被っていた麦わら帽子をスツと外した。

——まるで作り込まれた人形のように白く美しい顔が、まず目についた。次いで紅蓮に染まりきったショートカットヘアが顕れて、サラサラと揺れる。

「……っ!!」

鶴乃がそれを見た途端、ギクリと胸の中がざわめいた。

「はじめまして、由比鶴乃さん」

紅蓮の頭髮の少女は、その端正な美貌を向けてきて、恭しいお辞儀と共に挨拶。

屈託無い可憐な笑みは、年相応の少女そのものだ。

だが、鶴乃は息を飲んだ。

眼鏡の奥にある二つの真紅が、自分を強く捉えている様に見えた。それは少女のものとするには余りにも不相応であった。

例えるなら……獲物に標的を定めた獣の如き眼光。

「常磐、ななか……!」

—— 神浜市明京町治安維持部のチームリーダー。

初対面だが、彼女の噂はよく耳にしていた。

鶴乃の額にうつすらと汗が浮かぶ。

何かと「やり手」で有名だ。油断してはならない、隙を見せたら取って喰われる、と勘が強く告げた。故に強く身構える。

「……おけらさん、これはどういうつもり……!？」

ななかと対面しながら、おけらに恐る恐る問いかける鶴乃。

「安心しろ。行きてえところには連れてってやる」

おけらはハッと鼻で笑った。

「その間に、ななかの話し相手をしてやってくれ」

—— 引っ掛かった。

その言葉を聞いた瞬間、自分がおけらの仕掛けた罠にまんまと引っ掛けられた事を悟り、クツと歯噛みする。

「由比鶴乃さん、貴女に用があります」

ななかが声を掛けた。鶴乃が目を鋭くして問いかける。

「何……?」



ななかは顔を僅かに俯かせると、胸に手を当てて一度、深呼吸。息を整えてから顔を上げる。

——先程とは一変して、真剣に極まる形相で鶴乃を見据えた。

「私のチーム、『アメノハバキリ』に、加入しては頂けないでしょうか？」

鶴乃の血が、急激に頭頂部まで噴き上がった。

F I L E # 1 8 — S 常磐ななかの野望!? 2 燃える  
鶴乃の怒り!

「ふざけんなっ!!」

返ってきたのは耳を劈くような怒号。しかし、女王と呼ばれし少女はそれを真面に受けても、眉一つ動かさなかつた。

「意味が分からない!! どうしてわたしが治安維持部なんかに!!」

「参京区は」

「っ！」

『参京区』——その単語を出されて、鶴乃の顔が歪む。

「もう、後が有りません」

「……………」

なかなかの端的だが、これ以上無款的を得ている指摘に、鶴乃は苦々しく思いながらも押し黙るしか無かった。

参京区の旧商店街は、はつきり言ってしまうえば、鶴乃がどうあがいた所で未来が無いのだ。

経営者の高齢化、若者の都会への流出、それらによる地場産業の停滞が商店街全体の衰退を招いた。

それだけではない。

サンシャイングループの台頭も理由の一つだ。経営難に陥っていた店舗は尽くグループの傘下に入った。

サンシャイングループの企業戦略は、地域密着型を目指し、人々の生活を傍で支援する、というものだ。その方針そのものは間違っていないが、問題はその強引な経営手腕にあった。

サンシャイングループは、10年前から国が推し進めている神戸市の都会化計画に積極的に乗り出すと、瞬間に事業を展開。古くからその地で根ざし、人々から親しまれていた企業や店舗や工場、果ては福祉施設すらも、その豊潤な財政力を背景に次々と傘下に治めた。

全ては、地域に住む人々に、あらゆる方面から画一的なサービスを提供する為——  
—というのが、サンシャイングループの弁だが、実際は神戸市を関東進出の拠点にしように目論んでいるのは、鶴乃の目から見ても明確だった。

「大企業から恩恵を授かったとしても、一時的な延命にしかありません」  
ななかの鋭い指摘は続く。

サンシャイングループにとって参京区はあくまで、足がかりに過ぎない。

それが分かっていても、商店街の各店舗は、諦めてシャッターを閉めるか、大企業に泣きつくかの二択しか無いのだ。

しかし、だからといって全てが後者を選んだ場合、必ず救われるとは限らない。

新たに発生する問題として、商店街は継続に必要な重大なる要素である『個性』を失うことになる。個性の欠落した商店街が近い将来、廃退し、シャッター街と成り果てたケースは調べた所で枚挙に暇がない。

ななかの言う通り、大企業の力は、一時的に寿命が伸ばすぐらいしか効き目が無いの

だ。

それでも飛びつく経営者が後を絶たないのは、それだけ現在の生活が苦しい、ということだ。みんな一ヶ月、一年先のことよりは、今日明日の食事のことを第一に考える。

「とても過酷な状況ですが、市は何も政策を打っていない」

「だからっ！ 私はここを守ろうって、必死で!!」

「貴女一人で守りきれぬものではありません」

「っ」

きっぱりと断定された。鶴乃はクツと顔を歪ませる。

「由比鶴乃さん。貴女には『仲間』が必要では無いのですか？ 同じ思いを持つ、同志の

様な存在が……」

「それは……」

鶴乃が苦い顔のまま、俯かせる。表情に生じた迷いをなかなかはすぐに読み取った。

「でしたら……何卒、私の手を取って頂きたい」

「どういう意味……?」

鶴乃が横目でなかなかを見る。冷静なままの表情だが、よく見ると、僅かに眉間に皺が寄っていて、瞳を鋭く細めている。どこか意を決した様な力強さが感じられた。

「市政に疑念を抱いているのは、私も一緒だからです」

「っ!？」

意外な言葉に、鶴乃が目を見開いた。

「古きものを切り捨て、新しいものばかりを受け入れる市の体制を、私も認たくは有りません」

俯かせた顔を上げて、ななかの顔をしかと見る。

まさか——と心の中で仰天した。

たつた今彼女が強い口調で言い放つた言葉は、自分が抱いていたものと全く同じだったからだ。こんなところで同じ気持ちの持ち主と出会えるとは思ってもみなかった。

しかし……

「……ハッ」

それは相手が治安維持部であるが故の対抗心か、鶴乃は目を逸らして鼻で笑った。

「あんたがそれを言うわけ？ 体制側の人間がさ」

「それは、そうかもしれませぬ」

「……えっ」

挑発のつもりで吐き捨てた言葉を、ななかは鶴乃が驚く程、素直に受け入れていた。ですが、内側でなければ変えられない物もあります」

「……」

鶴乃は顔を背けたまま、黙ってななかの話を聞くことにする。

「リスクも少なくて済みます」

「そうだね……」

思わず同調が出てしまった口を、鶴乃は慌てて抑える。

「っ!!」

瞬時に、自分を殴りたい気持ちでいっぱいになった。

今、自分は間違いなく彼女の言葉に、納得していた——それは拙いことだ。何せ相手はあの常磐ななか。何を企んでいるのか分からない。安易に言葉を紡ぐのは愚策だと思っていたのに!

どうしてあんなことをぼつりと言ってしまったのだろうか。

困惑に満ちていく思考の中で、鶴乃はある答えを見い出した。

自分は、救われたいのだろうか?

誰かが自分の手を取って、暗闇の底から引つ張り上げてくれて、一緒に歩いてくれることを、心の片隅で期待しているのだろうか?

「私と貴女は似ています」

悩んでいると、ななかの次の言葉が飛んできた。

ハツとなって彼女の顔をしかと見つめた。相変わらずの氷の表情だが、瞳の紅蓮が強

く瞬いて見えた。まるで激しく燃え上がる炎の様に。

それに宿っていた感情は……

『怒り』

自分が抱えているものと、全く同じものを彼女は携えているのだと察した。鶴乃は驚きのあまり我を忘れて、注視した。

「大切な物を守る為に、戦う覚悟を固めた。しかし、その為には、体制そのものを変えていかなければならない。由比鶴乃さん。貴女にその覚悟があるのなら……」

ななかは、そこで一泊置くと、柔らかな微笑を浮かべて、静かにこう言った。

「私と一緒に、内側から変えていきませんか？」

頭を鈍器の様なものではなく、と叩かれた様な衝撃だった。

同時に光が差し込み、混迷を晴らしていった。

間違いなく、その申し出は鶴乃にとって甘美な響きだ。

自分と同じ思いを、同じ感情を抱いた人間が協力してくれるのだ。これほど心強いものは無い、とさえ思う。

(!!) でも——)



頭が希望に満たされる寸前で、振り払った。

——これは、甘い罠かもしれない。

ここで手を取るのには早計だ。何せ、相手はあの常磐なかなのだ。

表情は全く嘘を言っていない様に見えるが、それすらも演技かもしれない。彼女の狙いが明確に分からない限り、懐に飛び込むのは危険行為ではない。

考えがそう行き着いた時、鶴乃の答えは決まった。

「断る」

ななかの顔をしかと見据えながら、きつぱりと言いつける。ななかの表情から笑みが消えた。

「何故？」

意外に思ったらしい。呟かれた二文字には、僅かに怪訝の感情が乗っていた。

「あんたのこと、まだ信用できないから」

「……」

二人は真剣にお互いの顔を見合わせた。

「おんじから聞いてるんだよ。あんたの背後にある組織、ソウカイハイって言うんだっけ？　言っちゃ悪いけど……ヤクザ、なんだよね？」

「ええ、ですが現在は悪事から足を洗っております」

「でも……あんたの今があるのは、その組織の力が有ったからなんですよ？」

「……否定はできません」

ななかは、僅かに顔を逸らすと、人差し指で眼鏡をクイツと直した。

「私もサンシャイングループと同じかもしれない。揺るぎない力を背景に、他の力を制圧してきました。例え手が汚れようとも」

「そうしなきゃいけない、訳は……？」

「決まっています」

ななかは顔を戻して、力強く訴えた。

「大切な人々を、力から守る為です」

「っ!!」

その言葉が、抑え込んでいた鶴乃の怒りを呼び覚ました。

「だとしてもっ!!」

鶴乃の身体は自然と飛び出していった。ななかの両肩をグツと掴んで、激しく怒鳴り付ける。

「二度手を汚しちゃったら!! もう洗い流す事はできないんだよ!!」

「……っ!?!」

強い力で両肩を掴まれてななかの顔が一瞬、痛みで歪む。

「希望とか幸せなんか掴めっこないっ!! ただ苦しさと痛みが残るだけ!! なんてそんな簡単なことが分らないの!! ちよつと頭をひねれば分かることでしょ!」

矢継ぎ早に放たれる怒声に、ななかは完全に面食らっていた。

とんだ失態をしたものだ——と、彼女は自身を胸中で罵倒する。

「……無礼極まる発言、誠に失礼致しました」

どうやら、自分の発言が鶴乃の地雷を真上から踏み抜いてしまったらしい。

即座に、頭を下げた謝った。

途端、鶴乃はハツと驚いた顔を見せた。どうやら我に返ったらしい。

「……ごめん。こつちも言い過ぎた」

ななかの両肩を握り締めていた両手から力が抜けた。

顔を俯かせて謝る鶴乃に、ななかはあるものを胸ポケットから取り出すと、スツと差

し出した。

綺麗に四つ折りにされた、小さな紙切れだった。受け取って中を開くと、何かの番号

が楷書体で書かれていた。

「あれは……」

「私の番号です」

「……断るって言ったよね」

鶴乃が横目で睨みつけるが、ななかは一切動じない。

「貴女が私の力を必要とされる時が、必ず来ると信じてますから」

寧ろ、柔らかに微笑んだ。何処か薄ら寒いものを感じて、鶴乃は警戒を強める。

「……根拠は？」

「今の貴女の力では、ご家族の方々はかろうじて守れても、参京区全体は到底守りきれません」

「……………」

凶星だ。鶴乃は黙るが、それは肯定と同じだった。

「もし、守る為の計画がお有りでしたら、是非、教えていただきたい」

「……………」

再び、二つの紅蓮を輝かせて問いかけてくるが、鶴乃は何も答えられなかった。ただ、苦々しい顔を浮かべるだけ。

ななかは、はあ、と一度嘆息すると、先程とは打って変わって穏やかな口調で、

「由比鶴乃さん。いつでも門戸は開いております」

そう、伝えてきた。

「もし、『力』が欲しいと本当に思ったその時は……遠慮なく、いらっしやってください。

私は、どんな貴女でも受け入れる覚悟は出来ておりますので」

「……………」

その言葉を、どう受け取っていいか分からなかった。

「着いたぞー」

黙りこくつっていると、前方からおけらの声が飛んできて、バツと顔を上げる。

顔を見回して景色を確認すると、もう自動車教習所の駐車場に車が止められていた。

## FILE #19—S 七海やちよ・追憶

視界の上半分は常闇のような深い暗黒、下半分は目に突き刺さる様な紅蓮——  
簡易に言えば、そんな景色が広がっていた。

まず、首を上げて漆黒の夜空を見上げる。星々の姿は無く、痩せ細った三日月が、中央で小さく光り輝いていた。

次いで足元を見る。地平線の彼方まで赤い花で覆われていた。目を凝らして見つめると『菊』の花であることが確認できた。

『あなたを愛している』

やちよは赤い菊の花言葉を思い出した時、駆け出していた。この花畑の向こうに、大切な人がいる。それが誰かはわからないが、無性にそんな気が彷彿したのだった。

地平線まで駆け寄ると——うっとうと息を飲んで、足を止めた。

断崖絶壁だった。もう少し勢いがよかつたら、真つ逆さまに落ちていたことだろう。最も、魔法少女で有るため、重傷を負うことは無いが。

崖の下に誰かの気配がした。やちよは、目線を下げると、遥か下に見える地面は真つ白に染まっていた。雪景色の様に見えるそこは良く目を凝らすと白菊の群集であることが確認できた。

中心に女性が立っていた。

やちよは思わず「あつ」と声が出そうになった。後ろ姿のまままで表情は確認できないが、全身を覆う黒い衣装と、風に揺れる長い金髪が、自分の記憶にある人物と相似していた。

「——っ!!」

やちよは迷わず口を大きく開いた。その人の名前を強く叫んだ——つもりだった。

だが、声が出なかった。喉の水分が全て蒸発したかの様にかからからに乾ききつていった。舌がひりひりと火傷したように痛くて思う様に動かなかった。

『そこから見下ろす気分はどうだい?』

「!!」  
声が、頭の中で響いた。やちよが思わず瞠目する。

『そこから私を見下ろす気分はどうだい？ やちよ』

再び、同じ言葉が、頭の中で反響する。

全身に悪寒が走った。耳の中でドクドクと心臓の鼓動が響き、何度も額の冷や汗を拭く。

両膝が力を失い、その場でガクリと折れた。

「——っ!!」

やちよは堪らず、女性の名を叫んだ。予想していたがやはり声は出てこない。でも、女性の問いにはこう答えたかった。

そんなの、決まっている。決まっているじゃないか。



(ひどく、不愉快だわ)

頭の中でそう叫んだ途端、意識は視界は白で覆われた。

☆

「っ!!」

勢い良く身体が起きた。

もう視界には菊の花畑も女性も居なかった。生活に必要なものだけ置かれた、自分の部屋の中だった。

額にじとりと張り付いた汗を袖で拭い、脇のテーブルに置いておいたペットボトルを掴むと、中の水をグイッと飲み込んで乾ききった喉を潤した。

ようやく、気持ちが悪く落ちてきた。

不意に窓に目を向けた。陽光が差し込む窓には一つの植木鉢が置かれていた。オレンジ色の小さな可愛らしい花——マリーゴールドだ。

——マリーゴールドの花言葉は……

思い出した途端、植木鉢を床に叩きつけて割りたい衝動に襲われた。

やちよは、慌ててかぶりを振って、荒ぶる感情をどうにか抑える。

視線を逸らすと、別の物に目が止まった。

小さな写真立てだった。二人の少女が映っている。見てくれからして対照的な二人だった。一人は自分と同じくらいの年齢で、金髪の三白眼に粗暴そうな風貌で如何にも不良と言った印象だ。そんな彼女と隣り立つのは、幾らか年下で、体軀も小さい少女。快活そうな丸顔で満面の笑みを向けていた。

「……ごめんね」

やちよは、二人が映る写真に向かって小さくポツリと謝った。

他の言葉を使つてはならない。自分には彼女達にそれを言うことしか許されない。

(特に……)

金髪で三白眼の、彼女に關しては。

「……………」

不良と小さな少女が映る写真立ての隣には、もう一つ別の写真立てが置かれていた。こちらの写真は年季が入っていて、やや色焼けを起こしていた。

まだ年齢が二桁になる前の幼い自分と手を繋いで、若い女性が笑顔を向けていた。白髪ののシヨートヘアに、大東学院の黒い制服を纏っている。

彼女はやちよが最も尊敬する人物だった。彼女がいなければ今日のやちよは存在しない——そう思える程に。少々変わっているところはあったが、当時の女性は誰よりも強くて、気高くて、揺るぎない信念と正義を抱いていた。

しかし、ある一件が、女性の全てを完膚なきまでに踏み潰した。

やちよはそれを良く知っていた。

「十七夜さん……」

気がついたら、写真に向かって喋りかけていた。心なしか、女性の瞳が鋭く光った様に見える。

「あの時の貴女の絶望を、私はようやく思い知った気がします」

心が冷たく冷やされていくのを感じながら、やちよは言葉を続ける。

「それでも、私は貴女のように、立ち止まることはできないんです」

眉間に皺がより、女性の顔を睨み返した。

「この道を進み続けるしかない。そう考える私は、正常なのでしょうか？ 貴女が教え

てくれたパンセの言葉の様に、怪物と成り果てているのでしようか？」

捲し立てる様に問いかけるも、当然相手は写真だ。答えは返ってこない。

刹那——ペットボトルの隣に置かれた電話の着信音が不意に耳に入り込んだ。

手に取って、画面を見ると、『八雲みたま』と表示されていた。

「もしもし、みたまね」

『七海部長、今何処にいるの?』

いつもの間延びした声では無い。明らかに焦燥が混じっていた。

何かあったのか——そう察したやちよは目を細める。

「白木さんからたまには自宅で休むようにと言われてね。早退したわ」

『お休みの所悪いけど、出勤よ』

『魔女』か——やちよの顔つきが、途端に険しくなる。

「場所は?」

『中央区〇〇〇〇〇〇——〇〇 結季公園よ』

魔法少女になって急いでも3分は掛かる。その間に大勢の人が魔女の口づけによって自殺に導かれる。

やちよの額が僅かに熱くなった。

「避難と、結界は?」

『そちらも既に完了済みよ。結城公園の半径100mには人っ子一人いないわ。ただ、結界の方は10分がタイムリミットだから、急いで来て』

みたまはそこまで言うとお話を切る。

やちよは表情から力を抜いて、軽く深呼吸。気持ちをしなやかにすると、右手を胸元まで掲げた。人差し指に嵌め込んでいた指輪が光り、卵型の青い宝石が出現する。

「10分か……十分すぎるわね」

表情は余裕綽々。だが、一人も死なせないという覚悟の強さが滲み出ている。

全身が一瞬光り輝く。魔法少女に変身したやちよは、一目散に家を飛び出した。

治安維持部に、休暇は無いだ。



FILE #26—S 向かい合う龍と雉！ 深くなつていく親心！

午前——

中央区。

中央商店街の中でも、駅寄りの方は築20〜30年程の錆びれた色合いのビルが建ち並んでいた。その内の一つ、4階建てのビルの最上階。全体が碁会所になっているそこでは、近場に住む老人達が集まって、囲碁や将棋、或いは麻雀といった余暇を楽しんでいる。

「王手」

「ちっ」

窓際のテーブルの一つでも、たった今、勝負が決まった所だ。

二人の老人が相向かいに座っていた。年齢は見た所、二人共同じ70くらいに見えるが、纏う雰囲気は対象的だった。

「少しは手加減しろ」

ハンチング帽を深く被り、ダークグリーンのジャンパーを羽織った座高の低い片方が、響く様な低音に威圧感を乗せて訴える。惘然とした表情の眉間にはグツと皺が寄っており、興を楽しむ、というよりは真面目に勝負をしていた様子だ。

「ほっほっほ。雉さん。たかがゲームにそこまで真剣にならなくてもいいでしょう?」

小麦色のチエスターコートに羽織り、ボンベルグハットを被った紳士然とした風貌のもう片方が、恨み言の様に吐き捨てられたそれを、飄々と受け流す。こちらの表情は温和に微笑んでおり、他のテーブルに座る老人達と同じく、余暇を気ままに楽しんでいる様子が見て取れた。

「されどゲームだ」

忌々しさを込めた言葉は、相手の笑みの皺をより深めるだけに終わった。

彼、由比木次郎の年齢は68歳。

長年、神浜市警察署の刑事として勤務していた彼は、8年前に定年を迎え円満退社した。多額の退職金を手にし、残りの人生を気楽に過ごそうと考えていた彼だったが、大きな壁に当たる。



虚無感に襲われたのだ。

仕事一筋で生きてきた為に、趣味らしい趣味を何も持っていない事に気付かされた。シルバー人材センターに行こうかとも考えたが、今更、人様の下で一から働きたくはない。そんな謙虚な姿勢は自分には似合わないと思つてしまった。

このままじゃボケるな——

無意味に日々を過ごしている内に、そんな懸念がふと頭に過つた。

そこで彼は、自宅のアパートから歩いて徒歩10分程にある此処に立ち寄つた。今更、将棋や囲碁が出来るとは思つてなかつたが、自分と同じ年齢の老人達が集まつていと聞いていたので、何かアドバイスが貰えるかもしれないと思つた。

そこで出会つたのが、目の前の翁——『徳江龍二』であつた。

「……」

「どうした?」

徳江は盤上をじつと不審げに見つめている。木次郎も気になつて見たが、自分の敗北を再確認するだけに終わった。

しばらくすると、顔を上げて、木次郎を刺す様に見つめてくる。

「雉さん。どうもここ最近の貴方の打ち方はキレが無いですな」

「キレ?」

徳江の表情は先程とは打って変わって真剣そのものだ。だが、そんなことを言われても今ひとつピンとこなかった木次郎は、首を傾げる。

「申し訳無い。言葉が悪かった。どうも、勢いが無い、と思ひましてね」

『勢い』というのもなんだか曖昧だ。木次郎は首を逆方向に傾げる。

「? 俺は普通に打つてただけだが……」

「それでも普段の貴方とはまるで違う。何かあつたのですかな?」

徳江の眼差しが鋭くなる。木次郎も自然と身を乗り出し、睨み返していた。

「何かつて何だ?」

「その……お孫さんのこととか……」

もったいぶる様に間を空けて呟いたのは、他人のプライベートに踏み込むのは失礼だと思つていたからか。

木次郎はあからさまに不機嫌な顔をする。

「俺は独身だぜ。孫なんざいやしねえのは知つてるだろ?」

「でも孫みたいに溺愛してる子はいらっしゃう」

「……………」

全く、この野郎は——

木次郎は顔をぶいと反らした。

8年前に出会った時から、徳江は妙に鋭い所があった。自分の心を見透かしているかのような言葉を突き刺してくる。

元々、厚生労働省官僚の嫡男として生まれ、神浜大学で教鞭を奮っていた彼は、——全国に名を轟かせたとはいえ——下町の小さな飲食店の生まれに過ぎない自分とは何もかも正反対であった。

ブルジョアのインテリ。絶対に相容れない人種と思っていた。無骨な自分には無い、落ち着いた雰囲気を持つ、紳士然とした風貌、話術に長け、人懐っこい性格で、碁会所の誰からも好感を持たれていたのが、いけ好かなかった。

いけ好かなかったのだが………話し合ってみると、中々どうして、馬が合った。

彼も独り身であり、離れてくらしている息子夫婦がいて、孫を溺愛しているという共通点があったからだ。

あれよあれよという間に意気投合し、暇さえあれば、碁会所で将棋を打ち合う程の仲になっていた。

全く、人生とは分からないものである。

「その子と何かあったのですか？」

知り合ってから既に8年。

徳江の方は、木次郎の態度を見ると何を考えているのか手に取る様に分かった。

不機嫌そうに顔を顰めて黙り込むのは、肯定している証拠だ。

徳江は的を得たりと、僅かにしたり顔を浮かべながら続ける。

「……………」

木次郎は無視。顔を反らしたまままだまじこくっていたが、眉間の皺が更に深まった。それが肯定だと教えている。

「最近会ってないとか」

「……………よく分かったな」

「分かりますとも。少し前の貴方は、その子の話をよくしていましたがからねえ。でも最近はめつきりだ」

木次郎は忌々しく「チツ」と舌打ちを鳴らした。

表情に出やすいのが自分の悪い癖だ。徳江はいつもそんな自分を察して、鋭い言葉を仕掛けてくる。まるで反応を逐一楽しんでる様子なのが、嫌だった。

「そんなに寂しいのなら会いにいけばいいじゃないやありませんか。その子だって貴方に会いたいに決まってる」

「……………そういうわけにやいかねえんだよ」

木次郎は慄然と吐き捨てた。

「龍。あんたは『親』っていう字をどう読むか、分かるよな?」

『木の上に立って見る』……ですな」

「そうだ。親はいつまでも子供の傍にいるもんじゃねえ。子供がてめえで飛び立てるんだったら、黙って見送ってやるのが筋ってモンだ。人間、でかくなりやあてめえの人生はてめえで決める。それにいつまでも親が横槍刺しちやならねえ」

至って真剣に言ったつもりその言葉は、一笑に附された。

「ほほ。独り身の貴方が、自分を『親』に例えるとは、滑稽に聞こえますな」  
「馬鹿にしてんのか?」

キツと睨みつけると、徳江から笑みが消滅した。身震いした後、おほん、と咳払い。  
「そういうつもりじゃありませんが……」

徳江は恐る恐る木次郎を見る。なるべくこれ以上機嫌を損ねないよう、言葉を選びながら、言った。

「確かに貴方の言ってることも一理ある。でも、その『鶴』って子はまだ思春期真っ盛りでしょう? 本当は心配で仕方ないんじゃないですか?」

「……………」

再び眉間に皺を寄せて、黙り込む。徳江は表には出さなかったが、心の中でニツと不

敵に笑った。

「この前、参京商店街に立ち寄りしましたが、万々歳の評判はよろしくない。あ、いえ、失敬。お店の方はよろしいのですが、ご家庭の方がちよつとね」

「……何かあつたのか?」

「ご存知無いのですか? 貴方と入れ替わる様に、別のご家族が入られたのですよ。鶴くんの母方の祖母です」

木次郎が目を丸くする。初耳だった。

「母方の祖母」と聞いて嫌な予感がした。甥の妻——紀子は木次郎が出会った頃、散財癖がひどかったからだ。

「そんな話、あいつは一度もしてねえが……」

「でしようね。貴方には余計な心配を掛けさせたくありませんから」

「そいつが何かしたのか……」

「どうも店を手伝わずに、道楽三昧だそうですね。困ったものですね」

「隼が居るはずだが……」

「家主といえども、義母を無下にはできませんよ」

甥からもそんな話は聞いてなかった。

自分に心配掛けさせまいと思つたのか、それとも、もう店は自分のものだから、いつ

までも叔父に頼る訳にはいかない、という意地の現れか。

いずれにしても、甥には無理な相手だと木次郎は悟った。大方、自由にさせているの  
だろうが、店を足元から食い荒らす寄生虫になる。

店が傾けば、一番悲しむのは誰か——考えるまでも無かった。

☆

徳江の言いたい事は大方理解できた。

参京商店街に迫りくる再開発、そして祖母の散財。それらの危機から孫娘を守ってや  
れと言いたかったのだろう。

「余計なお世話だ……」

不機嫌のまま、自宅に帰った木次郎は、まだ正午前にも関わらず酒を煽ろうとしてい  
た。

台風が近づいており、夕方から嵐になると聞いていたからだ。これ以上出かける用事も無いし、苛々した時は一杯飲むに限る。

外は強風が吹き荒れており、窓がかたかたと騒がしく揺れていた。銚子に注いだ酒を口元を持っていく時、それが異様に耳を叩いた。

——この、ざわざわと胸を虫が這う様な、気色悪い感覚は、一体何だろうか。

碁会所にいた時から、嫌な予感がずっとしていた。もしかしたら、アイツの身に何か起きたのかも知れない。

しかし——

「……………あいつだってもう16だ」

もうすぐ大人の仲間入りだ。いつまでも自分に甘えている子供じゃない。

何か困難に当たっても、自分の頭で考えて解決していける年頃だろう。

なんとかなる——

そんな便利な言葉で、強引に自分を納得させると、酒をくつと一気に飲み干した。アルコールが身体中を駆け巡り、ざわめく心を鎮めてくれた。

しかし、前述したが木次郎の年齢はもう68である。

日本酒の強さには、いつまでも身体が耐えきれず——4杯目を口に含んだ所で、限界が来た。





FILE #33—S 囚われの父、迫りくる魔の手

——長い夢を見ていた。

楽しい夢だった。

家族みんなでピクニックに行ったこと。娘がハンバーグを作りたいと言ったので、手伝ってあげたこと。妻の誕生日に娘とサプライズパーティーを企画して、喜ばせた事。

これまで経験してきた楽しい思い出が、走馬灯のように走り去っては、消えていく。だが、所詮夢は夢でしかない。いつかは覚めて、現実を引き戻される。

目が覚めた瞬間視界が捉えた景色に、彼はそう思わざるを得なかった。どこを見回しても黒、黒、黒——延々と続く漆黒に息が詰まりそうになる。

現世で悪行の限りを尽くし、死んだ後に、閻魔大王から奈落の底に突き落とされた罪人とは、こういう感じだろうか。彼はそんな突拍子も無い事を考えた後に、ふっ、と——自嘲気味に笑みを零した。

——自分には、この《深淵》こそが居場所に相応しいのかもしれない。

だが、妻は関係無い筈だ。そう思うと、急に苛立ちが頭の天辺まで噴き上げてきた。彼女は光の当たる世界で、いつまでも笑顔のまま居てほしい。娘も同じだった。自分達がいなくなった事を知れば、悲しみに暮れるだろう。

影を背負うのは、自分一人で十分だ。

「耀……。いるのか、耀!!」  
ひかり

——返事をしてくれ。

そう願いながら彼は懸命に声を張り上げた。

だが、何度叫んでも、返事が来る事は無かった。

声量は、目の前の漆黒に吸い込まれて、虚しく消えていく。

「……っ!」

歩いて探そうと試みたが、それも叶わなかった。足を前に動かした瞬間、ピンツ、と

引つ張られて元に戻された。

忌々しさに舌打ちを鳴らす。四肢を鎖のような何かで繋がれているようだ。

「……耀……」

声が届かないのであれば、せめて、無事で居てほしい。

自分の無力さに打ちのめされた彼にできる事は、そう願うだけであった。

「久しぶりだね。輝きいちくん」

——ようやく、何者かの声が聞こえてきた。

奈落の底に住む悪鬼ではなく、正しく、生きた人の声だった。

彼——環 輝一はゆっくりと顔を上げて、前方を見つめる。すると天井から突

然、光がスポットライトのように降り注いだ。

「人道派として名高い日秀会長にしては、随分卑劣ですね」

光の下に現れたのは、電動式車椅子に乗った厳つい顔つきの老人だった。

輝一にとってはよく見知った顔だ。ふっ、と微笑を浮かべて皮肉めいた事を言っ

ける。

「残念ながら、これは私の指示ではないよ」

源道は、輝一の言葉を冗談と受け取るまでも無く、獲物を捉えた鷹の様に冷たく見据えながら、威厳に満ち溢れた声でそう返した。

「彼女の意思だ」

そして、真面目ぶった顔を左に向ける。

彼より少し離れた位置に、新たなスポットライトが降り注いだ。

私を覆う漆黒の夜

鉄格子にひそむ奈落の闇

私はあらゆる神に感謝する

我が魂が征服されぬことを

「……………ッ!!」

『彼女』の姿を捉えた瞬間、輝一の背筋がゾクリと粟だった。

もう一つの光の下に現れたのは、豪著な玉座に座った、幼い少女だ。見たところ年齢は二桁になったばかりであろうか。

「ウイリアム・アーネスト・ヘンリーの『インビクタス』……！」

だが、輝一は知っていた。目の前の少女が本当は「何者」であるのかを。

特徴的な声で、軽やかに口ずさんだ詩を聞いた途端、嫌悪感が満面に顕れた。

あらゆる負の感情が一気に噴き上がって、胃の中をグズグズに煮立たせていく。

——ああ、忘れもしない。お前の事を、決して忘れてなるものか。

この詩を自己紹介代わりに使うような人間は——自分の知る限り——世界に一人しかいないのだから。

「やはり、貴様の仕業か……!!」

殺気にも等しい憎悪を孕んだ瞳が、朗らかに笑う小さな少女を、強く睨みつけた。

「里見、灯花……ッ!!」

深淵を統べる王。

奈落の底で蠢く蟲達から『プロフェッサー・マジウス』と崇められし少女は、愉快そうな笑みを携えながら、血の様な紅蓮に瞬く瞳を輝一に向けた。

「ようこそ。 マジウスの翼へ♪」

楽しそうな様な声を聞いてるだけで吐き気が催してきそうだった。

輝一は波立つ胃酸をどうにか堪えながらも、敵意を剥き出しにした瞳で、睨みつける。

「……まだ、あの計画は進行中か」

「……もつともー」

輝一の問いに、灯花は満面の笑みで答える。

「馬鹿げているな」

「くふっ」

嘲るような、含み笑い。灯花はピヨンと玉座から飛び降りると、スポットライトと共に輝一の目の前まで歩み寄る。

「それは、どっちの台詞かにゃー？」

「……………」

おどけた笑みと声色が、どうにか押し込めた筈の胃液を再び喉元まで押し上げてき

た。輝一は不快に顔を顰めるものの、睨みつけるのを止めない。

「二度奈落の底に落ちた者は、二度と日溜まりに戻ることはできない。過去の過ちを忘れて、贖罪も辞めて、平穏な人生を送ろうとした貴方達こそ、馬鹿げていると思うけど……違うのにかいやー？」

輝一の沸点が、限界を超えた。

「黙れ。悪魔の子が……!!」

瞬間、灯花の瞳に暗い妖気が宿る。

「貴様の存在が、あの人を最期まで苦しめた……!!」

底冷えするような冷たい眼光に震えながらも、懸命に訴える。

「私達は静かに暮らしたかっただけだ！ 地獄だったあの頃を忘れて、普通の家族みたいに幸せな毎日を取り戻したかった！ それなのに……!!」

輝一の中で何かが切れた。鬼の様に怒り狂った形相で、喚き散らす。

「何故だツ!! 何故お前が存在しているツ!! お前みたいな人間が生きている事を、神が許すと思うのかツ!! 大人しく奈落の底で引き籠もっている!! それが出来ないならば醜く死ねツ!!」



「おしゃべりは、そこまでだよ」

灯花が小さく呟くと、輝一がうつ、と呻き声を挙げた。

自分では確認できないが、首にも何かか巻かれているらしい。締め付けられる様な圧迫感が襲った。

「!!……僕のことには好きにしても構わない。だが、耀とあの子には手を出すな!」

「それはできない相談だねー」

「馬鹿な!」

ヘラヘラと笑って無情に告げる灯花に、輝一は愕然となる。

「二人は関係無い筈だろう!!」

必死に叫ぶも、灯花はどこ吹く風だ。

暗い妖気を携えた瞳のまま、彼女は、輝一の耳元に唇を寄せると、赤子を慰める母親の様に、優しく囁いた。

「わたくしにとつての大事な目的の為にねー、その二人は必要なんだよー?」

「何が望みだ……?」  
「解放」か?」

「それもあるけど、もう一つはねー……」

灯花はそこで一呼吸置くと、ニタリと口の端を吊り上げた。

「環いろはに、最高の絶望を与えること」

「!!?」

輝一の頭の中が驚愕の余り真っ白に染まった。

「好きにしても構わないって言ったよね？ 思う存分活用させてもらおうよ♪ 輝一さん」

無邪気で無垢な幼子の声とは酷く不釣り合いな、残忍に歪んだ悪魔の微笑みが、かろうじて保たれていた輝一の精神に留めを刺した。

——残された家族の無事を願う間も無く、輝一の意識は、そこで落ちた。



F I L E # 3 7 — S 目的は何!? いろはを取り巻く  
神浜の女達!

「みかづき荘もまた賑やかになるわねえ」

一方、やちよとところは、みたまの居る調整課——BAR・「M I R R O I R」へと訪れていた。

朗らかな顔で言う店主兼調整課長にカウンターに座る二人は眉を顰める。

「もし、治安維持部に入ってくれれば、チーム・アマテラス復活もおく……」

「みたま、それは」

「不謹慎ですよっ！」

やちよが言い切る前に、こころが声を荒げた。

「いろはちゃん、お父さんとお母さんが攫われたんですよ……っ」

「それに、行方不明の妹さんのことだつて未だに足取りが掴めていない。戦えというのは酷よ」

二人の顔には、不快感といろはに対する同情の念がありありと映っていた。

当然だ。こころは、両親の件で複雑な事情を抱えている。やちよも幼い頃に両親を事故で失っている。

置き去りにされた絶望を良く知っていた。

「ごめんなさい。明るくするつもりで言ったんだけど……」

みたまの表情から灯りが消え失せた。申し訳無さそうに頭を下げる。

「でもね、七海部長」

「ん？」

「あの子は、戦うわ」

口調が変わった。やちよはすかさず顔を見つめる。みたまの鋭い瞳だけがやちよを強く射貫いていた。

「私たちが止めても、あの子は戦うことを選ぶと思うの。必ず」

あの子に負けた貴女なら、分かるでしょう——みたまの瞳がそう告げていた。

「……そうね」

やちよはそう呟いて頷くしかなかった。

孤独というものが、どこを向いても黒しか映さない暗闇に放り出された状態を差すのなら、自分自身が光となつて道を照らしていかなければならない。しかしそれは、生まれつき強靱な精神を持った者で無ければ適わない。

やちよとこのころが、今生きてこの場所に居るのは、二人の精神力がごく一般的な少女より幾分か強かであつたからだ。

いろはも同じだろう。

やちよは見抜いていた。あの子は、暗闇の中でも敢然に前へ前へと突き進む胆力を持っている。

でも、それは――

「つらいですよ、それって……」

言うか言うまいか、逡巡していると、こころが代弁してくれた。

「戦つて戦つて……傷つけて傷つけられて……それでもし全部取戻せたつて、いろはちゃんも幸せになれるなんて思えないですよ……」

「……そうね」

「でも、あの子は」

複雑に顔を歪める二人に、みたまは少し語気を強めにして主張した。

「取り戻そうするわ。例えば自分の全てを犠牲にしても、それが自分の幸せに繋がると信じて、進み続ける……」

貴女達と同じようにね——と、二人を見つめる瞳にはどこか悲哀が映り込んでいた。

「みたま、貴女はあの子のソウルジエムから、そう察したのね」

「ええ」

「何を見たの？」

問いかけると、みたまの顔が一気に複雑そうに歪んだ。

「ちよつと、言葉には言い表せないわ……」

その言葉に呆然となったのはこころだ。

「え？ だけど……」

彼女だけはみたまの言葉がまるで腑に落ちなかった。

「いろはちゃん……別に普通の子ですよ？ 普通の家庭に生まれて、普通に学校に通って、魔法少女としても、普通にチームで魔女退治してただけで、何も変わったことしてませんよね？」

こころは、いろはの父・輝一から度々いろはのことは聞いていた。しかし、こころが

抱いたいろはの印象というのは、至って普通の女の子、というだけであった。

みたまの言う様に、——自分はともかく——七海部長のような強靱な心の強さを持っているなんて話は信じ難い。

みたまの眉間に皺が寄った。

「ええ。確かにあの子は、ごくごく一般的なふつうの女の子よお。……だけど、違うの」  
何が? と問い詰めるつもりは二人には無かった。恐らくみたまも、それがハッキリと判明できないのだ。

「……とにかくよお」

みたまはそこで思考を切り替えた。決意を込めた顔付きで二人を見据える。

「……おちゃんと言う通り、いろはちゃんを戦いに没頭させるつもりはさらさらないわよお」

言い終えると、いつもの花の様な笑顔が有った。こころとやちよも彼女の心意気に賛同する。

「そうですね、神浜は——」

顔に陽が差したこころが次に言う言葉を、やちよが紡いだ。

「楽しいところよ」



いろには、それを知ってもらわなければならない。

まずは、『みかづき荘』である。やちよがそう言うのと、三人は笑い合った。

☆

——場所は変わり、市長の執務室。

「それじゃあ、行つてきます」

「行つてらっしゃい」

いろはがそういつて執務室のドアを開けて出ていくと、市長は笑顔で見送った。

「見かけによらず、行動派ですね」

いろはが居なくなつたのを見計らつたかの様に、市長の隣の虚空から、スウツと少女

の姿が出現する。

「こころと並ぶ秘書の一人であり、彼女とは対極的な印象を受ける魔法少女——加賀美まさらである。

「ええ、でもあれぐらいの行動力が無いと務まらないもの」

市長は何かに期待するかの様にクスクス笑っている。

「務まる?」

まさらが即座に不審な目を向けた。市長はコホンツと咳払いすると、表情を真面目にする。

「——こつちの話。それよりもまさらさん。いろはさんを影から見守つて貰えな  
いかしら?」

まさらは迷わずコクン、と縦に頷くと、「承知いたしました」と答えて、再び姿を消した。

彼女の気配が完全に消えたのを察知した後——市長はまたもや、両手を組み合わせ、瞳を閉じて考え込む。

「そういうのを意地悪っていうんですよ。教授」

嘆くように吐き出された言葉が、彼女の他に誰もいない執務室に響く。

「ええ。分かってます。いろはさんはあなたから見れば——」

そこで青佐は何かの単語を呟いた。

「——なのでしよう。だったら、私は全力であの子を支援するだけです」

青佐は閉じた瞼の裏に映る自分の娘よりも小さな人物を、力強く睨み据えた。

☆

# FILE #50—S スーパーIT企業経営者と危険な傭兵

—— 2年前。

—— 神戸市・大東区。沿岸部・スラム街。

“穴場”と聞いて、ミコ達に連れていかれたのは、路地裏でひっそりと経営しているアメリカンバーであった。

薄暗い空間を、オレンジ色の光が暖かく照らしており、耳心地の良いジャズミュージックが緊張感を緩めてくれる。

あちらです——と、ミコが奥を指さした。

目を向けると、4人で囲める円テーブルの一席に、一人の女性が足を組んで座っている。

「おう、来たか」

女性は自分達を——というより視線的には、皇 稜斗を——目にした途端、嗤った。一言で表せば、綺麗な女性だった。

黒いゴシックロリータの衣装に、艶やかなショートカットの赤毛。見てくれだけならフランス人形さながらの美しさだ。しかし、狼の様に鋭い目つきに燃えるような灼眼、そして笑顔を魅せた時に口の奥で瞬く犬歯が、彼女の内に秘めた獰猛さを物語っていた。

「この方は……？」

やちよが尋ねながら横目で皇 稜斗すめとぎを見ると、いつの間にか禿のカツラを外していた。

豊かに伸びた金髪にアイズブルーの瞳。浮浪者から一瞬で、イカした西洋紳士風に変身した稜斗は、

「舞花サチさん。ここじゃあ顔役の傭兵です」

やちよの眉がピクリと動いた。

傭兵——それは金やグリーンフィードの為ならどんな汚い手も使える、プロの魔法少女の事だ。

このスラム街に足を踏み入れた時も、門番の魔法少女達に襲われたが——あれは下の下。傭兵というよりもどこかの街の隅で腐っているのを拾った、破落戸という印象だっ

た。

だが目の前の舞花サチは違う。彼女は真正正銘、本物だ。それは、前述した彼女の顔付きから判断できる。堅気の魔法少女達とは違う世界を生き抜いた猛者なのだ。

しかも顔役——となれば、実力も相当な筈。

やちよが肩を強張らせながら稜斗を見つめる。彼と彼女の関係は、一体……？

「ほーう。テメエが七海やちよが。生で見るのは初めてだな」

……正直、このスジの方々にまで知られて欲しく無かった。

そんなやちよの複雑な心境など知る由も無く、サチは興味深そうに見つめてきた。

「……恐れ入ります」

言いながらも、身体は無意識の内に臨戦態勢を取っていた。その反応にサチは声を挙げて笑う。

「アハハ！ 固くならなくていいさ。テメエとアタシは同じ魔法少女だ。いつも命を掛けて、全力で生きてる。そこに違いはない。仲良くしよーぜ」

やちよはホツと胸をなでおろした。

大人の余裕というものか、それとも自分如き小娘など物の数にも入っていないという強者故の慢心か——いずれにしても、刀傷沙汰は起きずに済みそうだ。

サチが、「まあ、座りな」と促したので、三人は空いている席に座った。

「舞花さんは……皇会長とはどういったご関係で？」

いの一番にやちよがそう尋ねる。

当然ながら、サチを目にした時から警戒していた。

二木市をデジタル都市へと改革した救世主、皇 稜斗。その才覚と、彼が率いる企業  
の力が欲しいやちよだった。が、反社会的な事に手を出しているのであれば、そこまでだ。

即刻見切りを付けて、違う方法を考えなければならぬ——

「ハッ、そう身構えんなよ」

——が、サチはそんなやちよの考えなどお見通しのように、鼻で笑った。

「警戒してるつもりは……！」

「嘘つくな。眉間にシワが寄ってるぜ？」

やちよは咄嗟に額を撫でた——が、

「ハッハッハッ！ 悪い、嘘だッ！」

「っ……！」

サチに笑い飛ばされてムツとなる。からかわれて良い気はしない。

だが、

「あんだ、ホントは怖いんだろ？」

次にサチから飛んできた言葉は——想定外だった。

赤く滾った灼眼でやちよを射貫くように見据えると、そう呟いた。

「……え」

やちよの思考が、止まった。

違う。今、自分が彼女に抱いたのは、間違ひなく警戒心であり敵意……の筈。

でも、ギクリとしたのは、どうして？ まるで本心を言い当てられたみたいで、胸中

が一気にざわついた。

「顔は間違ひなく怒っていた。だが、翻つてみて、仕草はどうだ？ あんたさつきから右

手で左手を撫でているな」

やちよはハツとなり、目線を下に向けた。

テーブルの上に置かれた両手が、サチの指摘した通りの仕草を示していた。

無意識だった。自分の体の動きが、全く気づかなかった。

「右手は聖者の手、左手は罪人の手——っていうの、知ってるか？ そいつは自分の弱い

ところを撫でて励まそうとしてるサインだ。あんた、傭兵を生で見るの初めてだろ？

アタシを見てからずーっとそうしてる」

「だけど、この街に入った時には……」



続く言葉が言い訳でしかないのを、サチに見抜かれた。

「ありやただのクスだよ。どつかの端で落ちぶれたのを拾って使ってるだけ。捨て犬と一緒に。餌あげてりや懐く」

そこまで言うのと突然、サチはやちよの腕を掴んだ！

「……！ 何をッ!?!」

反射的に腕を振り払ってしまいうやちよ。

サチは自分の考え通りと言わんばかりに、ニタニタと笑い始める。

「間違いない。皮膚の温度が5℃下がっている」

「ッ!?!」

「怖がっている原因は何だ。アタシに何かされるかもって不安か？ それとも……助けを求めた隣の大富豪が反社会的な事をしていたらどうしようって罪悪感か？ あるいは両方？」

「……まさか」

「声のトーンが落ちてる。目を反らして小さく首を振った。それも恐怖の信号だ。もう逃げられないぞ」

「はい、そこまでっ」

尋問の様な雰囲気になる前に、稜斗は手で静止した。

「サチさん、相手はまだ17歳ですよ。いくらなんでも大人げない」

「言っただろ、毎日必死で生きてんのはお互い様だつて。だからコイツとアタシは対等だよ。まあ、少しビビらせすぎたのは悪かったと思うけどね」

「あの……つまり、どういうことですか？」

やちよが助け舟を求めるように横目で稜斗を見た。

彼は、ふうーつとため息を零すと、サチに「余計なことは言うなよ」と言わんばかりの眼力で見据えて、言った。

「ごめんなさいね。七海やちよさん。つまりは、こういうことなんです。彼女は我が社の新製品開発の協力者なんですよ」

やちよが目を丸くする。

こういうこと、とはつまり、サチが自分の仕草や表情を見て、感情を言い当てた事が、か？ それが新製品開発とどう結びつく？

考えていると、肩をトントンと突かれた。稜斗とは反対側に座るミコに顔を向けると、肩に下げたポーチからリモコンの様な機械を取り出した。

「それは……？」

「ポリグラフです」

それが新商品だというのか？

ポリグラフとは嘘発見器のことだ。一般的に警察の取り調べで使われている。心拍数と呼吸、皮膚電気反射を計測して使われるものだが…

「まだ開発中ですが、世界初の携帯式となる予定です。更に従来とは一線を画す機能が付いています」

「それは？」

「認証式です。持った瞬間に上半身を認証して、表情筋、肩、手の動き、皮膚の温度を分析して、感情を判別するのです」

「最早魔法は日常的にありますからね。何が嘘で何が本当か、見抜くのが極めて難しくなってきましたから」

もはや従来式じゃ信用ならないんですよ——と、ミコの説明に、稜斗が得意気な顔で補足を加える。

「だから、表情を」

「ええ。表情心理学をご存知ですか？ 人の表情は万国共通。郊外の主婦も爆弾テロ犯も同じ感情を持ち、真の感情は顔に出る。サチさんと話してお分かりになったでしょう？ ここに住む方々は、言葉以上に顔で会話しているんです」

「洗脳された奴だって、顔見りゃ一発だ。心から言っていない言葉にや、ぎこちなさがある」

サチが笑いながら稜斗の言葉に付け加えた。

なるほど、それは盲点だ。着眼点も発想も素晴らしい。

皇グループはここに住む人々と協力して、ポリグラフの開発を進めているのだろう。

「じゃ、後はよろしくー」

思っている、サチが席から立ち上がった。

「気になさらず飲んでいけばいいのに」

「込み入った話だろ？ 用の無い女はお暇させてもらおうよ」

言いながら、カウンター越しにいる中国系のバーテンダーに「釣りはいらねえよ」と

言って諭吉を一枚渡すと、足早に去っていく。

「会長、恐らく舞花さんはおバア様のご心配になったのです」

「だろうね……」

今回登場したオリジナルキャラクター

舞花サチのイメージです（カスタムキャストで作成）

↓

大東区沿岸部のスラム街における傭兵事情は、基本的に彼女と伊月ジュンのツートップです。

※以下没

ミコの言った、サチのおバア様とやらが気になったが——稜斗が視線をこちらに向けてきて、

「では、本題に入りましょう。七海やちよさん」

力強い口調で宣言したので問う事ができなかつた。

“帝皇”と呼ばれし男の眼力は、凡百の魔法少女の比ではなく。

やちよは縫い止められたように、身体が硬直するのを感じた。

「貴女は僕に何かを依頼する為に、ここまでできたのですね？」

圧倒的な緊張感が全身を支配するが、やちよは負け時と姿勢を伸ばして、力強く応えた。

「ええ……！」

やちよは話した。参京区の現状を。

住民の人命救済の為に、サンシャイングループ系列の企業に再開発を依頼している事を。

だが、実際は——！

やちよは、結菜の話を思い出し、クツと齒噛みした。

商店街の人々が築き上げたものを、文化を守るには、もはや皇 稜斗の力を借りるしかないのだ。二木市のように……！

「……なるほど。お気持ちは察します」

自然と熱が入ってしまったらしい。

でも、稜斗にはしっかり伝わったらしく、話の中で彼は何度も深く頷いてくれた。

「ですが」

だが、話し終えた直後に、彼は冷たい眼で再びやちよを圧倒する。

「サンシャイングループの考えも道理ですよ」

それは重々承知だ。

日秀源道の最終的な狙いは間違いなく参京区の商業支配。

優秀な経営者の「優秀なモノだけ」が欲しいのだ。

それは間違いないだろう。

しかし、参京区全域の建物の不燃・耐震化による防災性、交通の利便性の向上は急務。ショッピングモールと遊園地が建設されれば商店街が賑わうのも間違いなし。

何よりこの事業の総責任者は夕霧青佐市長であり、サンシャイングループを中心に多

くの企業も密接に絡んでいる。

陸翔とやちよの判断だけで容易に覆せるものではない。

「ええ、存じております」

やちよはフツと笑い返した。

「そのご様子だと……何か作戦があるようですね」

おっと目を見開く陸翔。

面白くなってきた。

七海やちよは自分の想像を上回るか、否か——稜斗は期待に愉悦が抑えきれず、口元に弧を描いた。

「ええ、再開発計画に横槍を入れるつもりはありません。ですが、彼らが築き上げた文化を失わせる訳にはいきません」

「なるほど……その方法とは」

「それは……」

☆

F I L E # 5 2 — S ご当地ヒーロー到来!!その名は  
カミハマン!

—— 14 : 00 参京商店街

食事を終えてから数十分後、いろはと葉菜は万々歳を出て、街道へと繰り出していた。

「いろは、ほら」

「ありがとう、葉ちゃん」

葉菜は露天でわたあめを購入し、いろはに差し出す。

受け取ったいろはは、早速一口頬張った。ふんわりとした甘さが、考えすぎて固くなった頭を解してくれるようだ。

「だけど、表情は、浮かない。」

「元氣出しなよ」



「だけど」

「気にしすぎ。あんまり人のこと心配してたら、自分のことがおっつかなくなるよっ」  
葉菜の言ってることは、良く分かる。

いろはだって、成さなければいけない目的がある。鶴乃一人にいちいち構ってはいられない。

でも、だけど——。

わたあめ棒を掴む力が、ギユツと強まった。

鶴乃が最後に話してくれた、*“あの子”*のことが気がかりだ。

多分、再会して、本当の気持ち伝えられない限り、鶴乃は幸せになれない気がする。

——結局、自分は鶴乃にとって、どう足掻いても他人でしかない。

自分が、人の幸福か不幸かの問題に、どこまで足を踏み入れているのか——  
はつきり言って、鳥澁がましいだけかもしれない。

だけど、このままではいけない気がする。どうしたらいいのか——

「あら、いろはじゃないの」

いろはの肩がギクリと強張った。

ちようど「あの子」の事を考えてる最中に、聞き覚えのある声が聞こえたからだ。振り向くと、

——直視できなかつた。

いろはと葉菜は二人揃って目を覆った。

何故かつて? それは眩しいからである。

何が眩しいのかかつて? それは天女様がおわしましたからである。

青、白、黄、碧の衣を纏った麗しき天女様は、太陽の如き後光を背負って、この地上に降臨なされたのだ。

「……って、んなワケないよね」

いろはは目を擦って、もう一度現実を見据える。

七海やちよ、八雲みたま、栗根こころ、夕霧 碧——神浜屈指の美女軍団が勢揃いだ。更に、彼女たちの美しさを色鮮やかな晴れ着がより際立たせている。

それらが眩しくて、目が眩んだ。

「やちよさんっ?!」

「か、神浜が天女が集まる街ってのは本当だったんだ……!」

いろははびっくり仰天。

葉菜は大きく見開いた目をパチクリさせながら声を震わせる。

「天女ってそんな……っ」

賛辞を受けたところが頬を赤くして照れる。

「でも何で晴れ着なんですか？」

「宣伝よ」

商店街の技術を公表する為のね——と、やちよは付け加えると、ここに目を配る。

「私達の晴れ着は関呉服店で作ってもらったんだよ」

「碧さんのだけ違うような……」

いろはが呟くと、碧は待ってました！と言わんばかりにくるりと回転。

他のメンバーとは違ってフリルの付いた裾の短い着物がふわりと舞い上がる。

「私は和メイドでーっす☆」

「わー！ かつわいいっ！」

碧の衣装だけは明らかにコスプレっぽいが、美人が着飾ると一輪の花に見えるのが凄  
い。

葉菜が賛辞を送ると、「でしよでしよー！」と犬耳？をピコピコ動かしながらピョン  
ピョン飛び跳ねる。

「皆さんどちらへ行かれるんですか？」

「撮影会が終わったから、休憩がてらにカミハマンショーを見に行くのよお」

彼女たちで撮影会を展開しようものなら、それはもう、大熱狂したに違いない。

それにしても、『カミハマン』って何だろう……?」

みたまの答えの中に、全く知らない名前が出てきて、いろはは首を傾げる。

「なんだいろは知らないの? 神じ浜市じのご当地ヒーローじゃんか」

「えっ? そうなの!?!」

さらつと答えた葉菜に、いろはは目を丸くした。

葉菜がスマホで調べると、3年前に誕生した「魔女と戦う」ヒーローらしく、子どもや魔法少女たちから高い支持を得ているとか。

「せっかくだから一緒に観にいかない?」

「え? いいんですか?」

「でも、アタシらが皆さんに交じるのはちよつと……」

葉菜というはが揃って渋い顔を見合わせた。

二人共、容姿や相貌にそこまで自信がある方では無い。

瞬間——待ってました、と言わんばかりに、やちよの瞳が獐猛に瞬いた。

「じゃあ、着飾ってあげるわ。みたま、碧さん」

「はーい」

「ラージャー！」

こころだけが「あつまズイ」と思った顔になるがもう遅かった。

「えっ？」

既に二人はいろはと葉菜の背後に回って、抱え込むとどこかへと連行した。

☆

——それから、15分後。

商店街の中央にある空き地には、大掛かりなステージが特撮されており、既に多くの子供達がカミハマンの登場を心待ちにしている様子だった。

「凄い人気なんだね」

いろはが葉菜に声を掛けると彼女はうんうん頷く。

「男性ヒーローなんだけど、アクションが魔法少女並なんだって。……まあ、それはともかく、ナニコレ……」

葉菜が自分というはの衣装を見渡し、呆気にとられる。

先程、みたまと碧に誘拐された二人。

『関呉服店』に連れて行かれて強制的に着替えさせられたのは——何故か和メイドであった……。

「晴れ着が良かったのい……」

「あらあ、だってカワイイって言ってたじゃなあい♪」

道行く人々の視線が突き刺さってこの上無く恥ずかしい。

涙を流しながら嘆く葉菜だが、みたまに即座にツッコまれた。

いや、確かに言っただけは言っただけ……あれは碧の和メイド姿が可愛い、という意味であって——

「仲間が増えて碧はカンゲキでーっす☆☆☆☆」

「わっぷ」

二人が言い訳を考えていると、碧に思いつきり抱きつかれた。

その胸に実る豊かな球体が顔面を圧迫して、息苦しい。

得意気な顔をするやちよとみたま。こころだけが「あはは……」と申しわけ無さそうに苦笑いしながらも、

「二人とも、似合ってるよー！」

とフオローを入れてくれた。

「そろそろ始まるわよお」

みたまの声を合図に、全員がステージの方を向いた。

——カミハマンショーが始まった。

ストーリーは、実にヒーロー活劇らしい、単純明快な物語だ。

過酷な戦いを強いられている魔法少女達を救いたいという、世界中の子供達の願いが生み出した英霊——カミハマン。

彼は魔法少女すらも上回る超人的な強さで、各地の魔女を次々と討伐し、魔法少女を窮地から救っていく……。

ある時、人間「神所 浜良」（じんじよ はまよし）に変身し、街を散策したカミハマンは、慶治町で町長の秘書を務める「美凧ささら」と出会い、親交を深めていく。

レスキュー隊員の父親のように立派な人間になりたいと、日々努めていく彼女の生き方に、浜良（カミハマン）は感銘を受ける。

しかし、次第に人々の為に自分のことを後回しにしていく様子に、浜良（カミハマン）は不安を覚えるのだった。いつかその生き方が彼女を滅ぼしてしまうのではないかと。

浜良（カミハマン）の予感は的中。

街で出現した魔女を倒す為に飛び込んだささらだが、魔女に捕らわれてしまった。

浜良（カミハマン）は、ささらを助けるべく、結界に飛び込むのだが……

【グツグツグ……魔法少女よ。もう後がないぞ】

魔女（着ぐるみ）が、触手みたいな両手でささらを拘束しながら脅す。

「くっ、貴女如き、私一人で……!」

【小癪なっ!!】

「ああっ!!」

ささらが強い嫌悪感を双眸に表し、魔女を睨み据える。

だが、魔女は腹部を強烈に締め上げてきた! ささらの顔が一瞬で苦悶に染まる。

「くっくっく……どの魔法少女も同じようにほざいては、最後にオレサマに食われたのだあ。お前も同じ目に合わせてやるぞお〜!」



「魔女つて、喋れないんじゃない？」

「いろはちゃん、そこはツツコんじゃないダメよお」

と、ここでステージ上に煙が発生し、浜良が参上！

「美風ささら！ 一人で抱え込むのはやめるんだ！」

「貴方は……浜良さん!!」

ささらが浜良を見て、大きな声を挙げる。

浜良はお決まりのポーズを取り——

『変・身ツ!!』

——いろはと葉菜の目を疑うような光景が広がった。

浜良の体を一瞬、水流が渦巻のように纏われたかと思うと、鎧武者の様な白装束——  
——カミハママンに変化していたのだ！

「……あれ？ でも、元々はカミハママンだから、変身とは言わないんじゃない？」

「いろはちゃん、そこもツツコんじゃないダメよお」

お馴染みのテーマソングが流れて観客大盛況!

特に子どもたちからは一斉に“カミハマンエール”が発声される!

多くの声援と拍手喝采を浴びながらカミハマンが魔女を指差し、宣戦布告!

『魔女め! 人々の為に命を張る魔法少女を食らうとは許せん! 私が退治してやる!』

【来たなカミハマン! 貴様の命運もここまでだ!】

魔女(着ぐるみ)の頭部にある6つの目が怪しく瞬く。喋ってることは完全に三下怪人だが、こういう部分はリアルで悍ましい。

【喰らえ!】

刹那——魔女(着ぐるみ)の背中に生えた触手が二本、グンツと伸びてカミハマ  
ンに向かって直進!

直撃の寸前でカミハマンは身を屈めて回避すると同時に、真上に伸ばした両手で触手  
をグツと掴み——

『カミハマン・サンダー!!』

【ぎゃああああああああ!!】

お馴染みの必殺技が炸裂!

魔女(着ぐるみ)の体とバチバチ発光すると同時にガクガクと痙攣し、ささらを開

放する。

『ささら、行くぞ!!』

「ええ!」

カミハマンの隣に立ち、獲物のレイピアを構えて、魔女に向かって身構えるささら。

【オノレエ!! ゆけーい!!】

魔女（着ぐるみ）が背後から使い魔（ボール）をポンポン飛ばしてくるが、ささらが回転しながら流麗な剣さばきで次々と叩き落とす!

「カミハマン! 今よ!!」

ささらの合図と同時に、カミハマン、天高く飛翔!!

『カミハマン・キ————ツク!!』

直撃の寸前で魔女（着ぐるみ）の体が爆発のような白煙に包まれた!

雷撃のような爆音が響いた一瞬後には、魔女は影も形もなくなり、グリーンフシードが一つ落ちていた。

『ささら、これを』

背景が魔女結界から夕陽に変更。

カミハマンはグリーンフシードを拾うと、ささらの手渡した。

「いいの? カミハマン」

『ああ、俺には君たち、魔法少女の力になりたい』という世界中の子供たちの願いがある』

それが無限の力を授けてくれるのだ。だからグリーンフィードは無用——と解説するカミハマン。

『何かあつたら、風に向かって俺の名を呼べ。君は、もう一人じゃない!』

そこでエンディングテーマが流れて、カミハマンは背中を向けて去っていく。

「……ありがとう。カミハマン」

ささらは、慈しむように背中を見つめながら、お礼を送るのだった……。

## FILE #54—S 下ろされた役目

—— 神浜市役所・市長執務室

「失礼致します」

再び青佐独りとなり、静寂に満ちたその部屋に、七海やちよが入室してくる。

「来たわね、七海部長」

既に夕刻。陽は落ち始め、橙色に染まった神浜市の景観をバックにやちよを見据える青佐の顔面は、暗闇に染まっていた。

やちよの胸がざわつき始める。

「……何か、重大なことをご決定されたのですか？」

齢50とは思えぬ明朗快活さと、即決即断を信条とする男も黙る豪胆さを兼ね揃えた人物が青佐である。

故にだ——こんな想い悩んでいる様子は滅多にお目に掛かれない。

恐る恐るやちよが問いかけると、漆黒の仮面を付けた女はコクリと頷いた。

「察しが良いわね……。実は貴女に伝えたかったことがあるの」

「まさか、いろはに關すること、ですか？」

青佐が顔を見上げると、僅かに、橙色が差込み表情が伺えた。

眉間に皺を寄せている。憤怒を堪えているようにも見えたし、哀憐が溢れている表情に見えた。

彼女は、首の裏を撫でる、というらしくない仕草を取ると、ポツリと口にする。

「『教授』からお告げがあつたわ……」

刹那——やちよの形相が豹変した。

☆

—— 神浜市役所・市長執務室

「いろはが、『主人公』……!? そんな馬鹿な話が……!?」

女神の形相が瞬時にして阿修羅の如く歪み、目の前の青佐を漸く親の仇のように睨みつける。

だが、青佐の表情に一端も動揺は見られない。寧ろ、この豹変がさも予想通りと言いたげな佇まいだ。

「ええ。黙っていてごめんなさい。でも、もう確定事項なのよ」

その冷徹な態度と薄情極まる言い草が、やちよの神経を逆撫でした。

拳を奮うかの如く高速で振り下ろされた右手が、青佐の胸倉をグツと掴み上げる！

「貴女は……… 貴女達は………っ!!」

普段は海色が穏やかに揺らいでいる瞳は、今や無数の死者の血で染めた真紅に染まっていた。

その鬼神の如き眼光が、息苦しさに咳き込む青佐を刺し殺すように射貫いた。

「どれだけの生贄を捧げれば気が済む……!? みたまの人生を滅茶苦茶にしたあんなものは私が終わりにする筈だった……。なのに………なのにつ!! どうして次を選んだっ!! 私では不服だったと……成し遂げられないと言いたいのっ!!」

青佐はクツと呻きながらも、その鷹の如き精悍な瞳で修羅を睨み返す。

「ごめんなさい七海部長。私も、教授も、こうなることは予想していなかった……」

「何が………!」

「彼女を選んだのは、彼らよ」

——貴女と同じように。

そう告げた直後、やちよはクツと目線を下に落とした。

そして、青佐は申し訳無さそうに、目を閉じて、謝罪するように頭を下げた。

「おつとめご苦労様、七海部長。貴女の物語は終わったのよ」

青佐の一言で、修羅は消えた。

やちよは、口を大きく開き何かを叫ぼうとしたが——ぎゅつと堪えるように両顎を噛み締めると、静かに青佐を下す。

「私は、まだ……何も成し遂げちゃいない……」

怒りが何処かへと吹き飛んだ——どころか、茫然自失となり蒼くなつた瞳を小さく震わすやちよは、まるで小さな女の子のように儂く、脆弱そうで。

「いえ、貴女は十分成し遂げてくれたわ、七海部長。貴女の愛郷心と献身的な努力が無ければ神浜の治安はとつくのとうに崩壊していた。でも……だからこそ、次を求めたのでしょうね」

故に青佐は精一杯の言葉で彼女を讃えた。



だが、納得いかない形相できつと睨まれた。先ほどの覇気は微塵も無いが、あからさまに忌々しさを孕んでいた。

「安心して。『主人公』は、死なないから」

「ええ、少なくともね」

再び喉元までせり上がった憤怒をどうにか堪えながらやちよは続けた。

「貴女は何もわかっちゃいない……！ 『主人公』に選ばれた者が進み行くのは、地獄よ。人間の愚かしさと疚しさを嫌という程見せつけられて、彼らが争い死にゆく様を延々と見届ける……死にたくなる程の絶望に苛まれながらも、死んではならない状況に追い込まれ、縛り付けられる……」

しかし、一度口から吐き出された激情は留まることを知らず、机に両手を叩きつけて、青佐を見下した。

「死なない？ だから何だと言うの？ 生きているからいつかは幸せになれると？ それこそ無能な働きの者の常套句ね」

そして心の底から嘲笑混じりの侮蔑を青佐の頭上に吐き捨てた後、はつきりと言った。

「あの子はいつか思うわ。『死んだ方がマシだった』と。あんな思いを誰かにさせるぐらいなら、私は——」

「あの時、排除した方が良かった、と」

青佐は鷹の目のまま、きっぱりと言いつつ放った。

「感づいていたのね？ 七海部長」

だとしたら、その時点で自分達に伝えて欲しかったが——と暗に込めながら青佐は問い詰める。

やちよは迷わず頷き、答えた。

「ええ、嫌な予感がしたので」

小さなキュウベえが気になると、いろはが言った時点から。

くつと歯噛みする。あの時、追い出してさえいれば……例え、どんな手を使ってでも

!!

だが、やちよはいろはに敗北した。

そして、強さを認めた。心に寄り添った。存在を受け入れてしまった。神浜に住まわせた。

—— 故に、だ。

彼女が選ばれてしまった責任は紛れも無く自分にもあるのだと、やちよは強く恥じていた。

しかし、

「宝崎に戻ったところで、大人しくしてくれるかしら……？」

「それは」

「あの子は戦うでしょうね。多分……いえ、絶対に」

以前みたまが呟いた言葉と、今の青佐の言葉が、重なった。

——そうだ。

それはやちよも否定しない。

いろははどこまでも追及するだろう。消滅した妹の所在を。絶対に認めないだろう。両親が連れ去らわれた現実を。

自分に与えられた理不尽の数々が、決してあつてはならないものだ——真面目に生きる人間への仕打ちで無いと捉え、勇然と立ち向かっていくだろう。恐れ、傷ついても、行き着く先で、取り戻せると信じて。諦めず。

だが、それは……

「サンシャイングループの内情に深く関わろうとした魔法少女は、何れも行方不明になっている……いろはさんもやがてそうなるか、或いは、魔女に殺されるかの、どつちかよ」

「……」

「でも、神浜市（じま）に居れば、あの子は運命に抗うことができる」

死なない。そして、強い味方が居る。

青佐は目を見開き、力強い眼差しでやちよを見据えながら、そう言った。  
「幸せにはなれない……」

デスクから体を戻したやちよが、俯きながら呟いた。

「可能性は有るわ」

「ですが」

青佐が立ち上がり、項垂れるやちよの両肩をぐつと掴んだ。

「『三度目の正直』を目指しましょう。みんなで」

各章ごつくり解説集！（読み飛ばしたい方向け）

0章 プロローグ 環いろは編 FILE#1〜#3  
各話ごつくり解説！

FILE #1

環いろはは物語の主人公。当時14歳。

知らない病院、そこで入院してる自分に良く似た女の子から「お姉ちゃん」と呼ばれる夢を最近よく見るんだ。

……っと思ったら、実は神浜市役所の静養室で寝ていた!?

オネエ系ナイスガイ；ピーター・レイモンドと、大人の魔法少女・朝香美代（以下わっち／ですな子さん）に介抱されたいろはは、

・気絶前に魔女に襲われたこと

・『小さいキュウベえ』を追って神浜市に来たこと  
を思い出した。

ここでざっくり解説! 『小さいキュウベえ』ってなに?

※小さいキュウベえは神浜の怪奇現象の一つだよ!

いろはは自分の失われた記憶と関係があると思っただよ!

そんなこんなで素敵なオネエさまと話し合ってる内に、市役所地下にあるお店「ミロワール」につれて行かれたいろは。

## F I L E # 2

ここでざっくり解説! 『神浜市』ってなに?

※10年前に魔法少女保護特区に選定されたよ!

魔法少女は正体隠さなくていいよ、その上様々な特典受けられるよ!

魔法少女による犯罪もあるし、魔法の増加による被害も増えてるよ。やっぱり治安悪いね!

ここでざっくり解説! 『治安維持部と七海やちよ』ってなに?

※市役所管轄の独立警察組織(!?)だよ!

市内の魔法の駆除とか、魔法少女による犯罪事件を捜査するよ!

ぶっちゃけヒロ●カのヒーロー協会とか、タイ●二のNEXT的なやつ

七海やちよさんは19歳だけど部長様だよ。英雄って呼ばれてるけどアイドルみたいなもんだよ！

ミロワールに入ると、浮浪者風のジジイ：春徑はるみちが、

店長兼調整課長の八雲みたま（自称17歳）に求愛してたけど、それは気持ち悪いからどうでもいいとして、いろはは、みたまから調整を受けた。

ここでざっくり解説！ 『調整』ってなに？

※魔法少女の武器に判断力持たせるよ！

例えばいろはが、〃クロスボウの矢を射った〃とするじゃない？

対象が魔女とか魔法少女なら容赦なくブチ抜くよ！

でも一般人とか木造の建造物とかなら、傷一つ付けなくて済むよ！

これで魔法少女と一緒に居ても安心安全だね！

でも、調整受けたら必ず『保護申請』してね！ じゃなきや罰則がキツイから！

この回は解説が多かったけど、とりあえず、いろははお腹が空いたので、和食（料理人：ピーター）を御馳走になった。

いろはとピーターが和食を食べる中、みたまは自作の特性スムージーを飲む。味覚がダメだから、これで十分らしい。

なんやかんやあって、いろははベッドに寝かされて、ついでの服も脱がされそうになつてみたまから調整を受けた。

いつもの病院の夢を見るいろは。

“自分似の女の子”は思い出せないが、同室の二人の少女のことは思い出せた。

・『エゴイスト』の天才科学系少女・里見灯花

・『ラシヨナリスト』の天才文学系少女・柊ねむ。

二人はアドルフ・ヒトラーを話題に口げんかの真つ最中。

ふたりに女の子の事を尋ねようとしたところで、突然、場所が病院の通路に変わる。

三人の少女の下へ戻ろうと焦るいろはだが、“白衣を着た謎の男”に止められてしま  
う。

「あそこは、私にとっての何だつていうの?」

「闇だ」

そして、“自分似の女の子”が現れて、いろはに告げる。

「私はね」



「“死神”と会う約束があるの」

……調整が終わり、いろははミロワールから去る。すると突然、崩れ落ちるみたま。

「環、いろは……。あなたは、一体、何者なの……。？」

いろはのソウルジェムから、『深淵』を見たという。

果たして、それは一体——？

# 1章 七海やちよ編 F I L E # 4 ~ # 9 各話ざっくり解説!

## F I L E # 4

夢に出てきた三人の少女の行方と、白衣の謎男の言つてた事が気になるいろは。悩んでも始まらないので、早く保護申請登録を済ませないと。

が……駄目!

必要な書類である、身分証明書と住民票が手元に無かったのだ。

このままでは、小さいキュウベえが遠くに行つてしまう。

そこで、運よく現れたのは治安維持部長：七海やちよ。

彼女が、『治安維持部長発言令』を行使したことでは『仮登録』扱いに。

おまけに、搜索も強力してくれるって!?! やったあ!

と、何故か屋上までホイホイ付いて行つてしまったいろは。

ここで衝撃の事実!

なんと小さいキュウベえは既にやちよに確保されていた!?

「欲しければ、奪ってみなさい……!」

そして、キツツイお灸を据えられてしまういろはであった。

「第六編・思考の尊厳にこう書かれていたわ。

『彼が自慢したら、私は彼を遜へりくだらせる。彼が遜へりくだたら、私は彼を褒めてやる。

そして、いつまでも彼に逆らってやる。彼が認めるようになるまでは。

自分が不可解な怪物であることを』

「この街には、様々な迷惑が飛び交っている。生半可な覚悟では生き残れない」

いろはの覚悟を問う為、暴力的手段に出るやちよ。

絶望するいろは。もう後が無い。

しかし、トドメを刺される寸前に、浅香美代わっち/ですな子さんが助けてくれた!

## FILE #5

ここでぎつくり解説! 魔法少女『わっち/ですな子さん』の実力は?

※『護符』に好きな漢字を一字書いて、いろんな事ができるぞ!

例えば、護符二枚に『声』と書けば、即席トランシーバーの出来上がりだ!

他にも、『煙』と書いて投げれば、煙幕を発生させて相手を攪乱できるし、『発』と書

いて敵の体に貼りつけられ、即席発信機にもなるぞ!

やちよがいろはをボッコボコにしたのには理由があった。

小さなキュウベえに触れれば神浜の「深い事情」に関わるかもしれない。

いろはが強ければいいが、弱ければ、巻き込みたくなかったのだ。

とはいえ、魔法少女同士の争いは法律で禁止、だけど……。

「治安維持部では『チームリーダー』以上の役職を持つ魔法少女のみに付度された権限があるわ。『市外から訪れた魔法少女が不穏分子及び市内の治安を害する意図の持ち主と疑われる場合、武力を行使して問い質しても構わない』、と」

『それは職権乱用というんですな!』

流れでやちよと戦う羽目になっちゃった、わっち/ですな子さん。

元々戦いが嫌いな彼女。

やちよに敵う筈もなく、あつという間にピンチに!

「Waitよ、やっちゃん」

「何も知らない子に、力で現実を教える……貴女はお婆様と市長からそう教わったのかしら?」

でもピーターが助けに来てくれたぞ!

が、人が増えたことで状況はカオスに……。

おまけにボッコボコにされたつてのに、いろはは帰らないと言い張った。

「武器を取って争うのでなく、何か違うことで勝負をするのですな」

そんな訳で、美代の提案でゲームをすることに。

提案に乗ったピーターは、何故か持ってきたドローンを飛ばす。

「こいつを神浜町内のどこかに着地させるわ。先に見つけた方が勝ちよ」

勝った方が、『小さいキュウベえ』を『我が物』にできる……！

## FILE #6

そんな訳で『いろは&わっち/ですな子ペア』vs『七海やちよ』のゲームが始まった！

しかし、相手は神浜最強の魔法少女、スカイフィッシュの如きスピードでドローンにピツタリ喰らいつく！

逆に運動が得意でない『いろは&わっち/ですな子ペア』は早くも息切れに。

と、そんな時にピーターから連絡が！

『やっちゃん相手じゃ辛いでしょうから、私からハンデをあげるわ。ドローンの着陸地点よ』

キーワードは3つ。

・【神浜中央運動公園】

・【元通り】

・あと一つは……

『残り一つのキーワードを隠しておいたの。この町に住む、魔法少女の誰かが知っているわ』

それは “二人で探して”、と行って通話を切るピーター。

しかし、いろはは冷静で、真剣に考える。

「スタート前に、言いましたよね……。『自分を存分に使って』って……」

「つまり、それって……美代さんの持つてる『情報』も含まれてることですよね?」

「神浜町どころか、神浜市内に知らぬ魔法少女は居ないと自負しております」

いろはは、わっち／ですな子さんに頼んで、“一人”の魔法少女へ連絡を要請した。

FILE #7

いろはが連絡したのは、八雲みたまだった。

『ピーターさんから預かってるキーワードを、教えてくれませんか?』

みたまもこれにはびっくり。

FILE #2でゲーム司会者：ピーターと仲が良かったので、3つ目のキーワードを知っていると踏んだのだった。

『私達には、立ち止まっている時間は無いんです!!』

「キーワードは、アルファベットの『U』よ」

いろはの熱に押し切られ、3つ目のキーワードを教えるみたま。

これでキーワードは全て揃った

【神浜中央運動公園】、【U】、【元通り】……

『【神浜中央運動公園】で【U】ターンして、【元通り】……つまり』

『ドローンの行き先は………【神浜市役所】』

しかし、七海やちよはドローンにピツタリ。

市役所で待ってても追いついてきて戦う事になるのは必定……

今、ドローンが進んだ先は、参京区の旧商店街。

そこには七海やちよと因縁深い、一人の魔法少女が住んでいるという。

「市内では、唯一、七海くんに匹敵する実力の持ち主ですな」

いろはは、万々歳の看板娘：由比鶴乃を使って、やちよを足止めすることを提案。

「こう伝えて欲しいんです。『ドローンが見えなくなるまで足止めするだけでいいから、

怪我しない程度にやり過ぎして』って」

一方、神浜農林中央公園に入った七海やちよ。

だが、由比鶴乃が強襲を仕掛ける！

「積年の恨み、晴らしてやる!!」

「あんたはここで……潰す!!」

F I L E # 8

市役所の屋上に戻った『いろは&わっち/ですな子ペア』。

ドローンが戻ってきて着地。

しかし、七海やちよも同時に戻ってくる。

「鶴乃くんが突破された事が……信じられませぬ。一体、どんな秘術を?」

やちよに憎悪を向ける鶴乃の攻撃は苛烈だった。

だが、やちよは空手と柔道の技で軽くないなし、圧倒。

「私を倒した所で、意味は無い」

冷淡な言葉が、鶴乃の怒りに火を点けた。



「無くは無いつ!!」

「あの時……わたしは……商店街を守れなかった」

「自分の事に手一杯で……ようやく抗う力を手にした時には、もう全部、終わってた……」

「あの時の後悔を二度としたくないし、もう誰にも味わわせたくない!!」

「絶対に、あんたを倒すつ!! そうすれば、神浜市 “最強” の魔法少女はわたしだ!!」

「商店街の皆にとつての “英雄” になれるつ!! みんなが希望を持つてくれる!!」

「みんなが、安心して暮らせる様になるんだああああああああ!!」

怒りの鶴乃が仕掛ける攻撃は、どれも強烈!

だが、そんな鶴乃を相手にやちよが打った手は、なんと “土下座” !

「誤ちを繰り返したくないのは、私も同じです……!」

「このままだと、一人の魔法少女が、神浜に縛り付けられてしまう……つ!」

「最悪、死ぬことになるかもしれない……つ!」

だから、見逃して欲しいと懇願。

その姿に、見覚えが有った鶴乃は、渋々ながらもやちよを見逃すことにした。

こうして、

『いろは&わっち/ですな子ペア』vs『七海やちよ』の直接対決が開始された。わっち/ですな子さんが参謀役となっているいろはを支援。

固有魔法を活用したタッグプレイに、思わぬ苦戦を強いられるやちよ。

激闘の末、やちよの眼を盗んで、ドローンを操る事に成功したわっち/ですな子さん。

「オーライ、オーライですな〜!!」

ドローンがもうすぐ手元に……と、思った所で、やちよが意地を見せた!!

力技でドローンを奪取!! これで、勝利はやちよに!!

……と、思ったら、

「いいえ! 勝ったのは私です!!」

「ごめんなさいやちちゃん。取られちゃった」

・『小さいキュウベえ』は、ピーターが持っている。

←

・「じゃあ、最初から、ピーター襲えばよくね?」

まさかの発想。

そして、『小さいキュウベえ』をピーターから強奪したいろはであった!

## FILE #9

小さいキユウベえに触れたいろはは、いつもの夢を見る。

自分を“お姉ちゃん”と呼ぶ少女のことを思い出した。

『先天性白血病』の病気で、大切な妹。

名前は——

おねえちゃん

わたしはね

“死神”と会う約束があるの

ある陣地の争奪で

春が物騒がしい明暗と共に還ってきて

林檎の花々の香りが宙を満たすところに——

突然、世界が変わった。

いつもの病室から、工場の管理室の様な場所に移動。

奥に立つのは、記憶に無い、研究員の女性。

デスクの上に置かれた書類には——

『PROJECT : MAGIA RECORD』

見た事ないが、いろはの知ってる文字列。

前方の窓ガラスの向こうで、大量の生肉が運ばれていく。

それを、嗤って眺めながら、研究員の女は「詩」を呟く。

「一切はただ火炎なり」  
ものみな

「天空覆いて隈なし」  
くま

四方および思維  
しゆい

地上にも空隙存せず

一切の暗き大地は

悪人みな遍満す

われいま帰するに所なく

孤独にして同伴なし

悪所の闇中に在って

大火災の聚に入る  
な

我は虚空の中にして

日・月・星を見ざるなり」

『罪を犯した人が身に受けるこの地獄の生存は、実に悲惨である。だから人はこの世において余生のあるうちになすべきことをなして、ゆるが忽せにしてはならない』

研究員の女性は、尊大なエゴを吐き出しながら、いろはを睨む。

「おまえは、そこにいろ」

「お前は落伍者だ。救世主になる為の痛苦から逃げ出し外道と蔑まれる道を選んだ。私を裏切った」

「偽りの樂園で、腐れ果てろ」

いろはが目を覚ますと、市役所の静養室であつた。実は本日二度目。

やちよは自分の敗北を認め、いろはの意志の強さを認める。

そして、記憶が戻つたのか確認すると、いろはは涙を零し、

「うい、なんです。『あの子』の名前は、ういなんです……っ！」

「私の大事な家族……妹です。私、ういの為に魔法少女になつたのに……そんなことも忘れて……」

「ういに纏わる記憶だけが、そっくりそのまま、消えていたんです……っ！ 私の頭の中

だけじゃない……っ!! お父さんとお母さんから……家にも、あの子に関わるものは全部なくなってしまうって……っ!!」

そう、訴えたのであった。

(私は、もう二度と、死なせない……!)

そんないろはを見て。

やちよは、失われた筈の「情熱」を取り戻したのであった。

1. 5章 環いろは編 FILE #10 ~ #15 各話  
ざっくり解説

FILE #10

ここでざっくり解説！ 『人倫保護団体』ってなに？

※魔法少女が嫌いな人の集まりだよ！

魔法少女が偉い人（政治家とか）を洗脳して、自分達に都合の良い社会（保護特区とか）を築こうとしてるって信じて疑わないよ！

「魔法少女が魔女を呼び寄せてるんだ」って批判もしてくるよ！  
ある意味当たってる

大層な名称の割に組織規模は、かなり小さい模様。

夕方になると決まって、市役所の正門前で激しい活動をする彼ら。

いろははつい止めようと駆け寄るが、燃え上がる彼らの怒りに油を注いでしまう事に。

「黙れ化物!!」

「……お鎮まりください」

一人の男がいろはを攻撃するが、やちよが助けてくれた。

しかし、

「仲間を二人死なせてる奴は別格だなあ!!」

「七海やちよ、お前こそ真正正銘の化物だ!!」

鬼の首を取ったかのように。

集団の力で、やちよを神浜市から排除しようとする団体。

それに怯むやちよではない。

やちよは彼らに問う。

魔法少女がいなくなったこの街を、代わりに命がけで護る覚悟はあるか？

そして訴える。

魔法少女は、願いを叶えて貰い、超人となった。

しかし、永久に魔女と戦わされる羽目になった、と。

「10年も生き延びれば『奇跡』と言われる。現に7年目の私も、魔法少女の限界では『長寿』と言われている方です」

「夢い存在でも有るのです。皆様が私達を非難するのは、深い理由があることと存じま



す。ですが、それは、私達の事情を考慮なさった上で訴えて頂きたい。ただ、超人的な力を有しているから、という理由だけで、人権と人格を蔑ろにされる発言を暴力的にぶつけられるのは、我慢なりません」

やちよの心からの訴えに、団体は何も言えなくなつてしまつた。

団体のリーダー：鈴木は尚も引き下がらない姿勢を見せるが、

「七海部長の言う通りだ。市民同士で争うものではない」

元・人倫保護団体創設者であり、神浜町町内会長：徳江龍二が現れ、厳しく叱責する。

「鈴木くん。私は君を信頼して団体を預けた。だがこの現状はなんだ？ 人倫保護団体の創設は確かに、私が魔法少女に『憎しみ』を抱いたのがきっかけだった。だが、こんな暴動紛いの運動は絶対に禁止と取り決めていた筈だ」

「教えてくれ。君は、何を焦っているんだ？」

恐れをなした鈴木は何も言えずに、退散命令を下す。

彼らが去つた後、徳江はやちよに告げる。

「僭越ながらあまりそういう定義はなされない方がよろしいかと……」

「魔法少女を中心とした反社会集団が、蠢き始めています」

一方、無事帰宅したいろはだが、

『いろはへ

いきなりでごめんなさい。

実はお父さんの転勤が決まっていました。

場所は“アメリカ”です。今日迎います。

お父さんは全く生活能力が無い人間なので、お母さんも援助する為に、一緒に付いていく事に決めました。

あなたには高校受験や進学が待ち構えているというのに、とても身勝手に無責任な真似をしてしまいました。

別れの言葉も告げずに出ていってしまうなんて親失格です。恨んでもかまいません。

でも、これは仕方の無いことなんです。

本当にごめんなさい、いろは』

『どうか、身体を大事にして、幸せに暮らして下さい。愛しています。

母・耀より』

母親・環 耀ひかりのその置手紙を読んで。  
いろはは独り、むせび泣くのだった。

☆サイドストーリーへ☆

FILE#11

やちよは徳江から奇妙な集団の話聞いていた。

- ・ 最近、黒装束を纏った少女達が、市内各区で確認されている。
- ・ それに伴い、魔法少女限定で行方不明者が増加している。
- ・ 人倫保護団体の過剰な活動も彼女たちが関係？

徳江は情報屋の顔も持つっており、同じ仲間の『春』・『雉』も動き出していると告げる。  
徳江は告げる。

『雉』には『鶴』が付いている。

ならば、『鶴』と仲良くなれ。円滑に動きたくば。

だが、やちよは苦い顔を浮かべるのみ。

ここでざっくり解説！ 魔法少女『都ひなの』って誰？

※神浜市立政町治安維持チーム『イザナミ』リーダー兼副部長だよ！  
やちよの相棒でもあるよ！

ロリ体系チビだからっていじめられてきたけど、真面目に仕事に取り組んだり、同じコンプレックスを持つ人達の相談役になったりして実績上げてきたよ！

すごく根性あるし、化学が得意なだけに頭脳も明晰で、フットワークも軽いよ！  
最近、人生相談所も役場に設けたよ！すごいね

ここでざっくり解説！ 『調整課』ってなに？

※八雲みたまと『同じ能力』の魔法少女『調整員』が所属する部署だよ！  
課長はみたまだよ！

基本的に各町の役所に一人はいるよ！  
ちなみにひなのの所にいるのは、『八島さから』だよ！

ここでざっくり解説！ 魔法少女『常盤ななか』って誰？

※明京町治安維持チーム『アメノハバキリ』リーダーだよ！

治安を守る為なら容赦しないよ。その為なら、町長脅してリーダーになるし、中国系

マフィア組織とも手を組むし、公的機関の長も言いなりにするよ！  
まるで独裁者

町長と、町警察署長が力不足だから自分が頑張るしかないよ！大変だね！！

やりすぎたせいで、『陰の支配者』だの『女帝』だの言われてるけど、それは「黒幕」の言う通りに動いた結果で、普段はポンコツだよ！

ちなみにフェリシアが苦手

ここでざっくり解説！『蒼海幫』ってなに？

※戦後のヤミ市から発展した、中国系マフィア組織だよ！

今は株式会社・『蒼海グループ』に名前を変えてるよ！

トップは『五強聖』と呼ばれる五人の天才武術家たち！ みんな魔法少女だよ！

ボスは常盤ななかを操り人形にしているよ！

治安維持部の『純 美雨』は、構成員の一人でスパイでもあるよ！

「そろそろ疲れてきたのよ、ひなの」

色々大変な事が起きたので、つい本音を漏らしてしまうやちよ。

いろはを助け、鶴乃と向き合えたら、引退するつもりだと言う。

当然、ひなののに叱られてしまう。

「今のお前は、逃げてる……。あいつらから……。かなえとメルから……」  
 ☆サイドストーリーへ☆

## FILE #12

秘密結社 “マギウスの翼” ……

- ・『プロフェッサー・マギウス』と崇められし、天才科学者の少女。
- ・スポンサー兼組織運営を取り仕切る『サンシャイングループ』オーナー…ひびりげんどう日秀源道。
- ・実働部隊『羽根』・統括責任者の魔法少女：梓 みふゆ。

この三名からなる最高幹部会と、

- ・実働部隊『羽根』隊長・通称『紅羽根』：双樹ルカ。
- ・実働部隊『羽根』副隊長・通称『蒼羽根』：天乃鈴音。
- ・実働部隊『羽根』副隊長・通称『白羽根』：天音月夜つぐよと天音月咲つかさ。

・そして、〃みにくいアヒルの子〃と呼ばれる、無機質な『黒羽根』達……

以上の魔法少女達で構成されているようだ。

深淵の闇に潜む者達。

神戸市で暗躍する、彼女たちの目的は何なのか。

今はまだ、わからない……。

## FILE #13

「貴女はまた『闇』に向かうのか」

白衣の謎男の幻聴を振り切り。

いろはは、母の手紙に書かれていた通り、自室の〃右側の空いているスペース〃を調べると、

銀行のカードと父親：輝一きいちの手紙を見つける。

『いろはへ

これを読んでいるということは、お母さんからの書き置きはもう読んでくれたものだと推測します。

なので、僕からは何も言いません。  
ただ、3つほど約束してください。

・お前の今後は、『夕霧 青佐』という人に託しています。お父さんとお母さんの古くからの友人で、とても信頼できる人です。

・神浜市に住んでいるので、市役所で確認してください。すぐに分かると思います。  
・親戚には一切頼らないでください。お前が叔父や叔母、従兄弟と思っていた人たち  
は今日から他人になります。

電話も掛けないでください。

・これからの人生を平穏に過ごしたいとお前が思っているのなら、これから身の回りで起きる事柄には一切関わらないでください。

でも、もし、立ち向かいたいと思ったら、神浜市で大賢者様を探しなさい。きっと力になってくれる筈です。

お前がこれからも健やかに生きていける事を心から祈っています。

父、輝一より』



【自分はまだ、一人ぼっちじゃない】

そう思い、希望を抱くいろは。

そして、もう一枚、手紙を見つける。

I have a rendezvous with Death

「わたしには」

「死神と会う約束がある」……」

At some disputed barricade, When Spring  
comes back with rustling shade And app  
le-blossoms fill the air.

「ある陣地の争奪で 春が物騒がしい明暗と共に還ってきて 林檎の花々の香りが宙  
を満たすところに——」

そこでいろはは夢を見る。

「お姉ちゃん、わたしの邪魔をするの？」

「何度もいったよね？」

「わたしには」

「『死神』と会う約束があるんだって」

これまでとは違う雰囲気、妹の夢。

そして、研究員らしき女の夢も。

「感傷に浸るな。ヒューマニズムなど、我々には無用の長物だ」

「捨てろ」

女に『たまき』と呼ばれたいろはは反論。

女にこれ以上無い怒りと『殺意』を抱きながら。

「人は最期の時まで人で無くちやいけないつ!! 救う使命を背負った私達が人で無くなってしまったら、誰があの子たちを救えるというのっ!?!」

そして、もう一人の夢も見る。

別の、自分が知らない研究員の女の夢。

「わたしも同意見だ」

「彼女たちは生きているんじゃない。生かされてる」

「だからこそ、君の言う通り、我々は自らの『良心』でそれを改善しなくてはならない。節制と貞潔を……我らに与え給うた神への敬意によつて、それ自体を愛さなければならぬ」

そして、震えながら女は語り続ける。

「……最近、夢を見る」

「学校で、保険医をしている夢だ」

「悲鳴が聞こえてね、私は慌てて保健室を飛び出して近くのクラスに駆け込むんだ。女の子ばかりのクラスだった。テロリストが乱入してショットガンを撃ちまくっていた」

「気がついたら、ショットガンはわたしの手の中にあつたんだ。どういふことかわからなかった。ただ、一つ分かったのは……」

——わたしが、彼女たちを撃ち殺した。

「それでもわたしは懺悔のつもりで、一人の女の子を外に連れ出そうと背中に乗せた。死にかけている血塗れの少女が恐ろしく重たくのしかかつてきた。口の中に血が入り込んで空気を求めて喘いでも、すぐに血は口の中に溜まる。その血の味、血のにおい、血の熱さ、血のぬめりが……こびりついて離れないんだ。こんな夢を毎日見る自分に怒りを覚える……。悪夢が止まらない事にどうしようもない不安を覚えるんだ。昔の楽しい夢が見たいのに……」

「ねえ、たまき、わたしの頭の中は、いつの間に、こうなったんだろうか……?」

そこで目が覚める。何故かいろはは泣いていた。

そして、手紙の最期の文章を読んで、確信するのだった。

「うい、なの……? これを、書いたのは……?」

『I have a rendezvous with Death  
At some disputed barricade,  
When Spring comes back with rustling shade  
And apple-blossoms fill the air.

「あなたがこれを読んでくれた時、もう私はどこにもいないだろう。」

FILE #14

I have a rendezvous with Death

その言葉に既視感を覚えたいろはは、神浜図書館へと向かう。

そこで、小説家の助手の魔法少女：二葉さなに声を掛けられる。

「どうやら、自分は『七海やちよ』を倒した、として凄く人気になってるっぽい。」

小説家の先生と一緒に知り、いろはは会いたいときさなに頼む。

連いていくと、屋上に彼はいた。

執筆に夢中な彼は耳に息を吹きかけられて我に返りいろはと邂逅。

『慎まこと 峽かい』というややこしいPNで活動している『阿あ 峽かい』と名乗る。

『私には死神と会う約束がある』……。この一節から始まる『詩』を、知ってますか

……?」

いろはが彼に尋ねると、先生はタバコを吸いながらこう返す。

「君の事を……。少し、詳しく、教えてくれないか?」

FILE #15

「君の妹……。ういさんは、その『詩』を夢の中でだけ訴えていたんだね?」

「現実で、君に話したことは?」

「一度も、ありません」

「それは、『本当』のことなのかい?」

『お姉ちゃん、私の邪魔をするの?』

先生の鋭い指摘に、昨日の夢の中のういの言葉を思い出し、違和感を覚えるいろは。

「死神と会う約束があるんだと、君の妹は夢の中で何度も繰り返し訴えていた。それが……彼女が強く願っていたことなら、現実で言っていないとは思えない」

「ういさんは『死』を待ち望んでいた」

「でも、君は願う事で、否定した」

「教えてくれ。君とういさんは本当に仲が良かったのか?」

「一切のミスコミュニケーションは無かったといえるのか?」

妹と仲が良かった筈なのに、そうだと答えられず、黙り込んでしまういろは。

そこでさなが先生を叱る。

作家の性さがでいろはを追求してしまったことを、先生は謝る。

「無理、しないでください……」

「わたしも、同じ思い、してますから。環さんの気持ち、わかりますから……」

さなの優しきで、いろはは落ち着きを取り戻したのだった。

先生は、"詩"について、明京町にある夏目書房で見覚えがあるという。

看板娘の魔法少女：夏目かこに連絡して聞いてみると彼は言ってくれた。

そして、さなと先生と連絡先を交換する、いろはであった。

☆サイドストーリーへ☆

2章 FILE #16~#33 由比鶴乃編 ざっくり解説!

FILE #16

なさねばならぬと決断して

君が何かをする時

たとえ多くの人々が

それについて違った事を考えようとも

それをするのを見られまいと避けてはならない。

もし君のすることが正しく無いならば

その行為そのものを避けた方がいい

だがもし正しければ

正しくないとは批難する人々をなんで恐れるか



## 十五節より

『わたしって……●●●ってるのかな？』

神浜市神浜町参京区。

駅前メイン街道が「神浜商店街」と呼ばれていたのも、今や過去の栄光。

その名は、『保護特区』指定後、発展が目覚ましい中央区の駅前商店街に取られた。以降、商店街の至る店で閑古鳥が鳴き止まない。

だが、中華飯店「万々歳」だけは違った。

魔法少女・由比鶴乃は、店主である父・隼太郎の日和見主義者ぶりに苦労しつつも、店を盛り上げるべく、日夜励んでいた。

彼には大好きな大叔父がいる。

情報屋の一人であり、先代店主の実弟にして万々歳オーナーそしてハゲ・『雉』こと木次郎だ。

寂しい商店街の中で、以上の三人が切り盛りする万々歳だけが、今日も常連で賑わっていた。

由比鶴乃の、太陽のような接客によって。

☆サイドストーリーへ☆

FILE #17

昨日。

いつもと違ってランチタイムなのに暇な万々歳。

そこに一本の電話が。

鶴乃が出ると、友人の魔法少女：朝香美代ことわっち/ですな子さんからである。

魔女が出たから、〃自分が〃 退治しなきゃ、と言って警察や治安維持部には通報せず、

店を飛び出していこうとするが、木次郎に止められる。

「七海やちよが、近くに來てるんだな……」

彼の鋭い指摘に観念し、本当の事を白状する鶴乃。

「おんじは、忘れたの……あいつらが、何をしたのか」

「忘れる訳がねえ」

「だったら、これはチャンスなんだよ?」

「あいつは農林公園にいるんだって。誰も見てない所で、潰せるよ……!」

鶴乃は、やちよを憎んでいた。それは過去の因縁からだ。

「てめえが今やろうとしてんのは、店の顔に泥を塗る行為だ」

「周囲には、治安維持部長が魔女に襲われました!!」って騒いどけばいいよ」

そう言つて、鶴乃は大叔父の説得を振り切り、店を飛び出してしまった……。

つまり、以上がFILE #8〜9でやちよと戦つた経緯である。

ここで、時間は現在に戻り。

一方の、いろはときなは、慎から

「神戸では色んな事が起きてるって話だ」

「だから二人とも、強く生きろよ」

そうアドバイスを受けるのであつた。

☆サイドストーリーへ

FILE #18

時は現在。

由比鶴乃は、自動車教習所にて。

友人の朝香美代わっち／ですな子さんと、クラスメイト：最上ユカと談笑していた。

二人が、『環いろは』の事を話題にしている、鶴乃は興味を抱く。

今まで、鶴乃は七海やちよを『力』で倒すことしか考えて無かった。

でも、環いろはは『知恵』でやちよを破った。

自分には無い『何か』を彼女は持っている筈だと、確信したからだ。

「……だからって、わっちに付いてくれば会えるとは限りませぬがな……」

「わからないでしょ!?! 魔法少女と魔法少女は惹かれ合うって良く聞くんし!! 知り合いなら尚更だよっ!!」

鶴乃はわっち/ですな子さんにくつつき、いろはの到来を待つ。

魔法少女であるが故の一般人からの偏見に、お互い愚痴を吐き出しあいながら。

「ところで環さん、心理学者のジークムント・フロイトは知っているかい?」

「彼の言葉で、『夢は現実の表出であり、想像の産物ではない』というのがあるんだ」

「環さん。夢に勝てよ」

「所詮夢は過去だ。辛い思いが混じっているのなら、できるだけ振り向かない方が良い。今、ここにいる君が全てだ。自信を持って、前を向いて歩いて行って欲しい」

一方のいろはも、慎からエールを送られて、二人と別れたのであった。

直後、わっち/ですな子さん&鶴乃ペアとばったり。

丁度いろはは、わっち／ですな子さんに尋ねたいことがあったのだが……  
「ふむ、それなら条件がありますな……」

「この子の話を聞いてもらいたいのですな」

わっち／ですな子さんに鶴乃を押し付けられの事をお願いされ、

「環さん……いや、環師匠!! お願いが有ります!!」

「わたしを、弟子にして頂けませんか??」

鶴乃からは、そう懇願されてしまうのであった……。

☆サイドストーリーへ

## FILE #19

まずは由比鶴乃のことをよく知るべきだと判断したいろは。

鶴乃に連れられ、チェーンの中華飯店『T a i y a n』で話を聞くことに。

餃子を食べるいろは。美味しい。だが、鶴乃は静かに言う。

「ここを出されてる料理はさ……もともとうちで開発したものなんだよ」

鶴乃はまず、自分の店『万々歳』について、いろはに説明する。

先代店主である祖父：鶏太郎の代の頃は、市内で一番の人気店だった。

だが、五年前に他界。

後を継いだ父は、祖父と折り合いが悪く、「味」を継ぐことに消極的。

店舗運営さえ積極的で無く、このままでは店を畳むしかない。

そこへ日本有数の大企業・サンシャイングループ代表：日秀源道がハイエナの如く現れる。

「神浜市の都市化に多大な貢献を果たした、偉大なる実業家……どこのメディアもそう持ち上げてるけどね、実際はそうじゃない」

「アイツは……怪物だよ」

「当時の神浜市は、国から提案された都市開発を行う為に、最大の資金援助先だったサンシャイングループの提案を全部飲み込んでたんだ」

「それが始まりだったんだよ……」

「奴らは、神浜市で経営難に陥っている老舗の店に次々と手を付けて、支配していったんだ」

※ここでざっくり解説！ 万々歳とサンシャイングループの因縁って？

日秀源道

「Taiyanの二号店出したいんで、お宅の店サンシャイングループに買収させ

てー?」

鶴乃パパ (店主)

「え? 自分の店売ったら、こんなにお金出してくれるって? やったー☆」

おんじ

「こらこら! 店も兄貴のレシピもやつちやダメ!」

日秀源道

「うわこのハゲマジうつき……! じゃあ、ハゲいない時に店主と交渉しよつと!」

日秀源道

「今日はあのハゲいないな……よし! ねえ店長。買収は諦めるよ。代わりにこんだけお金出してあげるからアナタのパパのレシピちょうだい?」

鶴乃パパ

「いいよ☆☆」

ハゲおんじ

「念のためコピー取つといたのに、それもねえよ……orz」

その後、おんじの血の滲む努力と、鶴乃のアイドル性によって、どうにか経営を持ち

直した万々歳であったが……

「始まったんだよ。苦しくて、思い出すだけでも胸が焼ける様な戦いが、始まったんだ」  
☆サイドストーリーへ☆

## FILE #20

Taiyanの店内テレビには丁度インタビューを受ける日秀源道が映っていた。

『私が若い人達に言いたいことは……【経営者にはなるな】、ということでしょうか?』  
『今の子達には、起業なんて博打はしてほしくないんです。いっぱい勉強して、なるべく自分に合った良い会社……今の言葉で例えるならホワイト起業ですな……そういうのに入って、堅実に働いてもらいたいですよ』

無邪気に回答するその姿に、鶴乃の感情が掻き乱される……。

☆サイドストーリーへ☆

一方で、鶴乃は語る。

かつて、自分達が住む『参京駅前商店街』が行政により『再開発』の危機にあったというのだ。



※ここできざっくり解説！ 『再開発事業』って？

『市街地の土地の合理的かつ健全な高度利用と都市機能の更新を図る為』に

『都市計画法に従って行われる建築物・建築敷地の整備、並びに、公共施設の整備に関する事業』

作中でざっくり例を挙げると……

・神浜市神浜町中央区

「参京区並に、人がいなくて、畑もいっぱい寂しい田舎町だー！しくしく……」

・行政（政府）

「保護特区に指定したから、魔法少女も人もどんどん集まるよ。だから、人がいっぱいいても困らないように、じゃんじゃん金注ぎ込んで、開発してあげるからね！」

・サンシャイングループ

「うちらも積極的に資金投資！ 人材援助するよ!!」

← 8年後……

・神浜市神浜町中央区

「東京都の都心部並の大都会に生まれ変わった!! これで人が集まっても平気だし盛り上がるぞー!!」

「それって良いことなんじゃないですか？ 都会になれば栄えますし、人が集まってきましたし」

「そう簡単に言わないでよっ！」

よく分からず言ってしまったいろはに、カツとなる鶴乃。

すぐに謝ったが、彼女がそこまで怒る理由をいろはは知りたくなかった。

FILE #21

※ここでざっくり解説！ 魔法少女・『梓みふゆ』って誰？

七海やちよとは元相棒で、元治安維持副部長。つまり、都ひなのの前任者だったよ！  
日秀源道の孫娘。神浜市随一の名門校：水名女学園を主席で卒業。七海やちよに匹敵する美人！ つまり、全部恵まれてるよ！

！  
一年前に、同じチームだった雪野かなえと安名メルの殉職がショックで、退職したよ

！  
今は秘密結社で、実働部隊統括責任者をやってるよ！ つまり、最高幹部の一人だよ

！  
ちなみに表向きは、“行方不明”扱いだよ！

一方。

秘密結社・『マギウスの翼』にて。

『プロフェツサー・マギウス』と呼ばれる最高幹部の少女に、

黒羽根の一人でありながら、"トップシークレット・エージェント"でもある、

『匿名希望』がいろはの両親を捕らえたことを報告。

『マギウス』は褒美として、14名の黒羽根達を与える。

それは、匿名希望の意思のままに操れる、"特別製"だという……。

「およそ人事には潮時というものがある」

「上げ潮に乗れば行き着くは幸運の港、あえて乗り損ねれば人生のその航路、浅瀬と悲惨に身動きもならない」

「我々が今浮かぶのは大いなる満潮だ。流れに逆らわず流れを捉えよう、せつかくの積荷を失ってはならぬ」

そして、匿名希望が去った後。

『マギウス』は、シエイクスピアの悲劇・『ジュリアス・シーザー』の一部を引用し、  
頭上の"不気味に蠢く巨大な異物"を見上げて、嘔うのだった。

FILE #22

※ここでざっくり解説! 鶴乃の大叔父・『由比木次郎』って誰?

万々歳のオーナーだよ!

鶴乃が尊敬している人で、「おんじ」って呼ばれてるよ!

友人からは「雉さん」ってよばれてるよ!

元刑事(市警察署刑事課巡査部長)で年齢は68歳。典型的なツンデレガンコ親父!でも交友関係は広いよ

情報屋『雉』としての顔も持つてるよ!

ハゲ

二年前。

鶴乃は地元の鉄工所経営者・織田との話し合いで、参京区が再開発されることを知る。

・事業名:参京駅北口地区市街地再開発事業

・都市計画決定の告示:2018年5月15日(つまり2年後)

・総責任者:神浜市市長・夕霧青佐

・事業協力会社:株式会社Divine Light of CITY & TOY

A M A 不動産株式会社

(どちらもサンシャイングループの系列企業・代表者は日秀源道の親族)

「……本地区は、狭隘きょうあいな道路が多く老朽建物が密集しているエリアです。建物の不燃・耐震化による防災性を向上させ、商業の集積による更なる駅前のにぎわい、区の広域行政拠点にふさわしいまちづくりを目指し、住民が集える憩いの広場、交通広場による利便性の向上を予定しております……」

これは詭弁。

実態は、サンシャイングループの産業支配の一環で、

地元が、連中の「拠点作り」に利用されると看破した鶴乃。

「つきましては、当該の地域にお住まいの皆様には……住宅を立ち退いて頂くよう、要求させて頂きます……っ!?!」

商店街のうち、東側と南側が対象であった。

☆サイドストーリーへ☆

商店街を回る鶴乃。

幼馴染の友人・内海理恵の店も、経営が苦しくて閉店するという。

他の友人たちの店も同じだった。

また、若者離れによる跡継ぎ問題も深刻化していた。

原因として参京区は、時代を省みなかった。

今は地価グローバル社会なのだ。

鶴乃は時が止まった商店街に住んでいるせいで、この時代感覚が養われていなかった。

ならばと、望みを「再開発」に賭ける鶴乃。

中央区ばりの都会に生まれ変われば、また活気を取り戻せるのではないか……!?

そう思うのだった。

### FILE #23

※ここでざっくり解説! 中華飯店・『万々歳』ってどんな店?

神浜市神浜町参京区駅前商店街にあるお店で、鶴乃の実家だよ!

創業者は鶴乃の曾祖父、由比雀七だよ!

日本軍人の時に、『黄河決壊事件』で被災した中国料理人から、技術を教わり、日本で店を開いたのがルーツだよ!

閉店予定の肉屋・理恵の店。

人気がコロツケとカツサンドを地元から失くすのは惜しい。だから、作り方を教えて、と頼む鶴乃だが、断られてしまう。

理恵は「万々歳があるからこれ以上背負わせたくない」という気遣いだが、逆に鶴乃に『自分には何もできない』という無念を与える結果となった。

無気力な鶴乃。

そこで、彼の母方の祖母・津和吹美江よしえが現れる。

木次郎が去った後、入れ替わりで万々歳に居候してきたのだ。

セレブじみた格好、連日の外出に豪遊……

質素儉約を家訓とする由比家の中では異端者そのもので、鶴乃は辟易する。

とはいえ、元々、大金を持っていた訳でもない。

父親の口座から引き落とした様子もない。

では、お金はどこから……？

しかし、祖母を問い詰める余裕も無い鶴乃は、ただ日々迫っていく再開発の事に頭を悩ませるのだった……。

再開発事業の説明会の日。

「参京区地域センター」へと足を運ぶ鶴乃。

そこには、多くの参京区民たちの姿もあり、顔なじみの店主たちも居た。

開発事業主である株式会社『Divine Light of CITY』代表・梓つむぎが登壇し、説明を始める。

※ここでざっくり解説！ 梓つむぎって誰？

梓みふゆの母親だよ！

サンシャイングループ代表・日秀源道の5人兄妹の3番目（長女）だよ！

神浜市の大手の大企業、TOYAMA不動産の若社長・梓 康弘の嫁だよ！

結婚と同時にTOYAMA不動産はサンシャイングループの傘下に入ったよ！

→こんな訳で、サンシャイングループの関東支配の橋頭堡とする為の政略結婚、とか噂されてるよ！

※ここでざっくり解説！ 再開発って何をどうするの？

●その壱

参京区の北部にある大工場跡地（35万㎡）に、

屋外型リゾート付きテーマパーク『キレーションランド』を造るよ！



## ●その式

複合商業施設・サンライズスクエアモールを立てるよ。

場所は参京駅前商店街の東側と南側。

だから、元々そこにあつた商店はこぞつて立ち退いてね！

あ、心配しなくていいよ！

ちゃんと補償は出すし、『迷惑料』も超高額で上乗せするよ！

立ち退いてくれた店は、モール一階に新しいお店出していいから！

出店準備金もぜんぶこつちが負担してあげる！

昭和の雰囲気の商品街より、新しいモールに出した方が客いっぱい来てくれるでしょ

？

やったね！

## FILE #25

『サンシャイングループなら、可能です』

つむぎはその一言で押し切った。

サンシャイングループの力は強大だと、皆知っている。

立ち向かえる者は、参京区にいなかった。

しかし、鶴乃や、一部の商店街店舗経営者は危惧する。

「対立が、起きる。商店街の皆で……」

ここでざっくり解説!

ショッピングモールが建った場合、参京商店街に起きる『3つの問題』とは？

●その1

(例)

・店主A

「俺の店、モール内で、新しく綺麗に作り変えたよ! サンシャイングループ様様っ

!」

・サンシャイングループ

(バカが…… “俺の腹の中で店開いた” ってことは、生かすも殺すもこつちの自由なんだよ!)

← (数か月後)

・店主A

「せっかく良い店できたのに、商品が売れない……畳むしかない……」

・サンシャイングループ

「じゃあ閉店したらそこ、ウチのチエーン（orフランチャイズ）店にするから。君店長（orオーナー）で雇ってあげるよ？ 大企業のバックができて、安心安泰だね！」

つまり、売上が悪ければ、

（かつて万々歳を、『Taiyan』二号店にしようとしたのと同じく）

甘言を用いて近づき、自社のチエーン店に差し替える!!

### ●その式

・サンシャイングループ

「立ち退いてくれたり、モール内に新規店舗開設してくれる人には、オイシイ補償いっっぱい出すよ！」

・商店街：東&南側・商店経営者の皆様（年齢・70〜85歳ぐらい。跡継ぎ無し）

「マジか！ よっしゃ！ これでしばらく懐がぬくいぜ!!」

・サンシャイングループ

（モール出来上がるまで『6年』かかるけどな！ その間に皆様、介護施設入居とか、

入院とか、急病で亡くなったたりとかで店舗経営どころじゃないと思うけどな!! まあ  
精々お楽しみに!!)

商店街の誰もが経営が苦しい。

目先に「高価なお宝」があれば真つ先に飛びつきたい心理を利用する。

つまり、『建設中に加盟する店舗の経営者が亡くなってしまった』ら、  
自社のチェーン店を、代わりに入れるだけ!!

●その参

・商店街：西&北側・商店経営者

「今までみんなで力を合わせてきたのに……!! 大企業に泣きついて西&北を見捨て  
た裏切り者!」

・商店街：東&南側・商店経営者

「いやいや、大企業の恩恵が無かったら、経営維持できないって!」

・商店街：西&北側・商店経営者

「それがズルいんだって!」

「ねえ、サンシャイングループさんさあ、俺たちも経営厳しいの! あやかりたいの

！」

・サンシャイングループ

「はいはい、わかりました。じゃあ、モール増築するから、加盟してくれたら、そ

こで新規店舗出していいよ〜！」

・商店街：西&北側・商店経営者

「よっしゃ！ 話分かってる〜!!」

・サンシャイングループ

(しめしめ……。これで参京商店街は全部、俺の腹の中。だぞ……。)

つまり、

・新規ショッピングモール建設 Ⅱ 神浜市内外から大勢の客が来る。

・結果、『東&南側』、『西&北側』で『経営格差』が起きて、分裂が発生。

・参京商店街同士で争い合う。

・サンシャイングループがそこで介入、仲裁案を提示。

・西&北側は剣を鞘に納めて、首を縦に振る。

・東&南側に続き、西&北側もモールに加盟。

・サンシャイングループ、参京商店街、完全支配完了。

「そんなことで、本当に、参京商店街が……由比さんの地元が救われるんですか？」  
「……わからない。だって開発は、行われなかつたんだから」

現在。

いろはの疑問に、鶴乃はそう答えるのだった。

## F I L E # 2 6

一カ月後。

サンシャイングループは参京区民の説得に回り続けた。

結果、元々8割いた反対派は、今は3割まで減少。

駅前商店街：東&南側はほぼ全員が賛成。

残るは、『なかやま陶器店』中山三郎と、定食屋『いなほ』川野ケイ子くらいだが、時間の問題であった。

一方、鶴乃は失意のあまり『機械』を続けていた。

万々歳の手伝いだけで精一杯の毎日で、再開発や、祖母の散財に気を回す余裕も無

かった。

ふいに、おんじのことが気になる鶴乃。

祖父は急死した。もしかしたらいつか彼も——!?

迷いを振り切り、亡き祖父の部屋を掃除する。

木彫りの棚から、『千両箱』を見つける。

それには遺産であり、由比家の家宝が眠っているはずだ。

当然、鍵が掛かっている……筈だった。

しかし、鍵はかかかっておらず、しかも中身は“空”であった。

呼吸が荒くなり、酸欠状態に陥る鶴乃。

必死に祖父の部屋を探すと、一枚の『領収書』を見つける。

そして、鶴乃は独り、自室に籠り震えていた。

領収書に書かれていた名前には、“祖母”と“母”の名前があった。

二人に激しい“憎悪”を抱いた事を、激しく自己嫌悪する鶴乃。

『おう、俺だ。どうした?』

「たすけて、おんじ……っ!」

鶴乃は、電話で彼に助けを求める。

彼は即答。

『わかった。すぐ行く』

FILE #27

——あいつは今、泣いて……いる。

通話先の声で理解した。

一瞬で酔いが冷めて、万々歳へ駆けるおんじ。

——おかしい。

ここには大人が三人もいるはずだ。何をやっているんだ。

兄（鶴乃の祖父）がいたころより、

明らかに異様な雰囲気と化している万々歳に、強烈な違和感を覚えるおんじ。

家上がり、甥（鶴乃の父）に事情を問うも、

「昨日学校で何かあったんかなあ〜？」

要領を得ない答えが返って、おんじは呆れ返る。

そして、2階に上がると、兄の書斎にうづくまる黒い人影を発見。

それが鶴乃だと気づき、おんじは彼女を抱きしめる。



「よく頑張ったな」

「ずっと我慢してたんだな。褒めてほしかったんだな」

「わかった。お前はよくやった」

「後は俺に任せろ」

「全部引き継ぐ。だからお前はもう何もするな。休め」

絶対の決意を込めてそう伝えると。

鶴乃の顔に光が差し、笑顔が戻るのだった。

そして、鶴乃の両親と祖母。

大の大人が三人もいながら、誰も鶴乃の様子に気づかない。

気持ちを何も分かうとしない姿に、おんじはキレる。

—— 間違い無い。あいつを異常に染めたのは、こいつらが異常だったからだ。

「大人が雁首揃えて一体何をしてやがるんだあああああああああああああああああああああああ  
あああああああああッッ!!!」

見苦しい言い訳を続け、責任逃れしようとする鶴乃の両親。だが、おんじはそうはさせまいと「証拠」を突き付ける。それは鶴乃が兄の書齋で見つけた、『領収書』だ。

・購入物：ケイマン（ポルシェの高級モデル）

・金額：7,000,000?!

・購入者：由比紀子（鶴乃母）と、津和吹美江（鶴乃祖母）

二人は、兄の部屋の千両箱の中から、

遺産となる「家宝」を見つけ、勝手にネットオークションへ出品。

1000万の額で購入されると、そのお金で高級車を予約したのだった。

幸運にも、家宝はまだ購入者に送られておらず、

ネットオークションもキャンセルしたため、事なきを得た。

だが、おんじが許すはずも無く、大鉈が振り下ろされる。

「ウチじゃあ、働かざるもの喰うべからずだ」

「人んちに転がり込んで遊び呆けていると思えば遺品食いつぶしやがって。とんだ寄生虫だな、あんたは」

まず、万々歳一番の「癌」である、津和吹美江を永久追放。

「そもそもてめえが家主としてしつかりしてねえからこんなことになったんだろうが！！」

「これからは家の事も店の経営も俺が仕切らせてもらおう」

そして、なおも妻と義母を庇う、不甲斐ない甥を激しく叱責。

おんじは『万々歳のオーナー』に就任し、由比家の指揮権を握るのであった。

※ここでざっくり解説！ 全ての元凶は『鶴乃パパ』!?

家宝が入ってた、千両箱の鍵の場所を知ってるのは、鶴乃と鶴乃パパだけ！

鶴乃パパは、妻と義母に教えちゃったよ！

実は父親への復讐だったんだ！

「平凡」な鶴乃パパは幼い頃から、奇才な鶴乃ジジと比較されてきたせいで、彼を恨んでいたんだよ！

しかも、鶴乃が鶴乃パパより、鶴乃ジジに懐いちゃったせいで、憎しみが一層深まったよ！

隼太郎

「親父は死んだ！　これで店は俺のものだ！　この際だから、親父が大事にしている

ものは、みんな消えてなくなっちゃまえ!!」

結果的に、鶴乃を傷つけてしまったことを、猛省する隼太郎。

そして、おんじは吐露。

自分も平凡で、優秀だった兄に“恨み”を抱いていたことを伝える。

実は彼も、甥と全く同じ気持ちだったのだ。

そして、兄が、隼太郎を本当は愛していたことを伝え、二人は和解する。

こうして、万々歳は再スタートを切ったのであった。

一方。

いろはもまた、鶴乃の事情を深く知ったことで、仲良くなりたいた願うのであった。

## FILE #29

鶴乃と友達になつたいろは。

妹を探してる、というと、協力してあげる、と鶴乃はいう。

しかし、

「由比さん、ご家庭の事で大変なのに……協力して頂くのは悪いですよ」  
「気にしない気にしない！ だってもうウチには『厄介な人』は、いないから」  
鶴乃ママと、祖母の身に何か起きたのは明白だった。

話は再び過去に。

商店街は再び慌ただしくなっていた。

七海やちよが、お忍びで参京区に来た、というのだ。

このタイミングで参京商店街に来た。

わざわざ反対派の者の店に。

十中八九再開発の交渉に違いない。

しかし、

政治に魔法少女が参加、協力する権利は、法律上、認められていない。

それに、七海やちよは同じ神浜町民（中央区）。

小さい頃、よく商店街に遊びに来ていた姿を知る老店主達も多い。

今回の『お忍び』も、単にそれではないのか……？

一方で、懸念があった。

やちよの相棒の『梓みふゆ』の事だ。

サンシャイングループ代表の孫娘。

両親は共に、再開発事業主の代表。

そして昔、両親が亡くなったやちよの未成年後見人を買って出たのが、みふゆの母のつむぎだ。

つまり、やちよは最初から、行政側の人間……？

そして、みふゆの魔法は『幻覚』だ。

ということは、未だ反発する一部の商店経営者達の首を、縦に振らせるために、行政は『魔法少女』達を派遣した、ということに……？

いずれも確信は得ない。

だが、疑念は深まる一方だ。

そこで、反対派の『なかやま陶器店』中山三郎がぼつりと零す。

「お鶴ちゃんが、魔法少女だったらなあ……」

途端、周囲から非難を浴びる中山。

しかし、鶴乃は、それこそが、

やちよとみふゆに抗う“唯一の方法”だと気づく。

「そろそろ●●かねえ……」

その様子を、冷静に眺めていた川野も、不可思議な事をぼつりと零すのだった。

夜。

鶴乃は、キュウベえが自分の下へ来ることを祈る。

しかし、どれだけ強く祈っても、キュウベえは現れなかった。

## FILE #30

立ち退き反対を貫いていた定食屋『いなほ』の川野ケイ子が、再開発に賛成。

七海やちよの説得によるものだという。

川野のもとへ飛び込む鶴乃。

既に引越しの準備を終えていた。

息子は後を継がず、年齢的に経営継続は困難、やちよと話合ってふんぎりがついた、と川野はいう。

「古い物はいつか無くなり、新しいものに生まれ変わるもんなんだよ」

「そうして時代は変わっていくのさ。あたしらの世代のモンがいつまでも土地にしがついて、若者に迷惑掛けてちやいけないよ。まあ、中山のジジイ達はまだ根を張ってたいようだけどね。いい加減枯れてる事に気付くべきなのさ」

食い下がる鶴乃をそう説得し、

荷物を載せた軽トラックで、参京区を後にするのだった。

そして、同じく徹底抗戦の姿勢だった『なかやま陶器店』中山三郎もまた、再開発に賛成。

彼の意思決定にも、やはり七海やちよが絡んでいたのだという。

鶴乃は激昂。

地元の公園で、梓みふゆと談笑し合うやちよを発見し、飛び掛かる。

が、みふゆに取り押さえられてしまう。

「貴女のお怒りはご尤もです。しかし、これは市が決定されたことです」

「これは貴方がた商店街に住まわれる皆様の救済処置でもあるのです。要求を受け入れて下されば、いずれ報われます」

冷徹に告げるみふゆの言葉が、鶴乃の神経を逆撫でする。



「こちらに非礼があるのは、受け入れます。ですが、今は耐えていただきたい」  
「耐える？ 耐えろって何？ 自分達は何も失わない癖に……わたし達にはそうしろって？」

「鬼ツ!! 悪魔ツ!! 人でなしツ!!」

「女神とか呼ばれていい気になってるけど本当は一人の人間の想いにすら寄り添えな  
いっ!! 大企業の言いなりになってわたし達を脅かすお前らは屑だツ!!」

——魔法少女、地獄に堕ちろ。

この言葉に、みふゆも眉間に皺を寄せる。

だが、やちよの方は冷静で、鶴乃の怒りを真摯に受け止めた様子だった。

「これは、私個人の連絡先です」

「何かあれば、ご連絡ください。私はいつでも、貴方の言葉を待っています」  
そう鶴乃に名刺を渡し、みふゆを伴い、去っていくのだった。

「君が身を置く状況はあまりにも悪すぎる。不運に恵まれていると言つていいぐらいだ。どうだい？ いっそ逆にしてみる、というの？」

「逆……？」

「〃幸運〃を願つてみる、ということさ」

「そうだね。それがいいよ」

「決まりだね。では、君の口から僕に告げるといい」

「わたしは——」

〃幸運が欲しい〃

鶴乃は遂にキュウベえと邂逅。

念願の魔法少女となる。ちなみに、家族には秘密だ。

……しかし、変わらない日々を過ごしていた。

幸運がやってくる気配も無い。

そこで、わっち／ですな子さんが万々歳に訪れる。彼女とはこれが初対面。

なぜか手相を占ってもらったところ、

「〃三奇紋〃ですな」

「運命線と太陽線と財運線が集まり一本の線になっている手相のことですな。お喜びく

だされお嬢さん。今は不幸でも、近々大金が懐に舞い込んくるのですな」  
そう言われて宝くじを買いに行く鶴乃。

すると、びっくり仰天の出来事が！

『一等、8億円』が当たったのである！

気絶する程ショックを受けたおんじ。

しかし、その宝くじを購入したのが鶴乃、というのが引つかかった。

もしかしたら、魔法少女になってしまったのではないか……？

後日、由比家でまた、騒動が。

なんと、鶴乃ママ・紀子が懲りずに家宝を質に入れようとしたのである。

これにおんじは激昂し、永久追放処分を下す。

「そんなに金が欲しいのか!! だったらくれてやるっ!!」

「8億だツ!! そこに8億が入ってる!! それを持って何処へでも行っちゃえっ!! その代わりもう二度と万々歳の暖簾を潜るなツ!!」

そして、鶴乃もまた、

「どっか行ってよ!!」

と嫌悪感を顕わに、母を突き飛ばすのであった。

結局、鶴乃ママは、娘よりも、8億入りの銀行のカードを選んだのであった……。

後日、2016年の7月25日。

鶴乃ママは祖母の美江と共に豪華客船で海外旅行。

「世界中を旅して、自分を見つめ直すそうと思う」、そう鶴乃に手紙を残して……。

しかし、大事件が発生。

二人が搭乗していた豪華客船に、『過激派武装集団』（テロ）が潜伏していたのだ。

「運が悪かったんだと思う。一番に人質にされて、殺されちゃった」

だが、鶴乃は悲しまなかった。

むしろ逆の感情。

自然と、笑った——つまり、喜んでしまった。家族の“死”を。

それが、自分の願いで得た“幸運”の結果なのだ、思い知る。

『私達は我らの宗教を守り、同胞を守り、故郷に勝利を捧げんが為に、これを遂行した。不浄と悪徳に満ちた異教徒共の撲滅を願った時、神は我らに祝福を賜りなされた。私は神に選ばれた純潔なる聖女である。私達はこの力を以てこの船に蔓延る不浄な不信仰者共を殲滅、及び服従させるものとする』

母と祖母はテロリストの少女によつて殺され、

大勢の人たちも巻き添えとなつた。

その事実に「笑つて」、「喜んで」しまつた鶴乃は激しく自己嫌悪。

だが、キユウベえは、冷淡にこう告げるのだつた。

『君の因果は強い。だから、「幸運」はこれで終わりじゃない』

『これ以上誰かが不幸になつたとしても……：：：気に病まないことだね。君には全く関係無いのだから。寧ろ、降つてきた幸運を、喜べばいい』

そして鶴乃に、更なる「幸運」が舞い降りた。

結果として、鶴乃の「幸運」の力は、

● 鶴乃の家族

● 再開発事業者

## ●七海やちよのチーム

鶴乃に「不幸」を与えていたとされる、3つの陣営に大打撃を与える結果となった。由比家を破壊する、母と祖母は死んだ。

再開発計画は、実質的指導者のみふゆの両親（つむぎ、康弘）が魔女に殺され、総責任者：神浜市長の決断で、無期限凍結。

七海やちよと梓みふゆも、チームメンバーの雪野かなえと安名メルが上記の魔女と相討ちで死亡。

心的ダメージを深く負ったみふゆは辞職し、行方不明に。

やちよも同様で、しばらく活動を自粛した。

これにて、綺麗さっぱり。

参京区駅前商店街に「敵」はいなくなった。

しかし、自分の「幸運」によって、誰かに不幸が落ち、死んでいく。その事実には、鶴乃の心は歪んでしまう。

七海やちよは健在だ。

日秀源道も健在だ。

再開発計画も、いつまた再開されるのか分からない。

だから、鶴乃は「最強」になりたいと願った。  
守るために。

そして、強さを証明するために、魔法少女を暴力で痛めつけるのだった。

県外の地方を飛び回り、仮面で顔を隠し、『決闘少女』を名乗り、  
多くの魔法少女相手に「最強」を証明していく鶴乃。

もはや通り魔そのものであった。

しかし、

「あなたが『最強』だなんて、私は認めない」

一人の幼い魔法少女が、鶴乃の前に立ちふさがる。

「そんなの、強いつて言えるの？ 人を傷つけて調子に乗ってるのって、カッコ悪いよ。」

そんなのただの不良じゃん」

少女は怯える様子も無く、鶴乃の地雷を踏み抜いた。

カッとなって飛び乗り、少女の身体を滅多打ちにする鶴乃。

「そうやって、殴れば、認めて貰えるって思ってるの？」

「あなた、只のバカだよ!!」

「バカ野郎!!」

瞬間、鶴乃は小さい頃。

おんじに、「全く同じ理由」で、怒られた事を思い出したのだった。

「わたしが「最強」なんだあああああああああああああああああああつ  
!!!」

トラウマを振り切るように、鶴乃は少女の顔面をひたすら殴り、破壊していく。

だが、そこで、もう一人の魔法少女が飛び掛かる!

彼女は少女の妹であった。

ボロボロの姉を庇い、鶴乃に憎悪の瞳を向ける。

「お前なんかよりおねえちゃんの方がよっぽど強いよ!! 「最強」だよ!! おまえなん

かちつとも強くない!! ただの犯罪者だよ!!」

「鬼、悪魔、人でなし」

地獄に堕ちろ——!!



かつて、自分が七海やちよに言った事と、〃全く同じ言葉〃を向けられて、鶴乃は怯え、足が竦んでしまう。

「違う……わたしは……、ただ、みんなを守りたいから……力が欲しかった、だけで……」  
「そんなものの、為に、おねえちゃんを、殺そうとしたの……っ!？」

そこで鶴乃は気づく。

今の自分が、母親と祖母を殺した、あのテロリストの少女と変わらない、ということに。

『守る為』、その理由さえ付ければ、何をしてもいいんだ、と考えていたことに。

鶴乃は慟哭。

まるで獣のように泣き喚いた。

「いろはちゃんと話してて、なんとなく気づいたの。あの時、わたしが求めていたのは、多分……〃力〃なんかじゃなかった」

「わたしは……弱いままの自分を、消し去りたかった」

だが、現在の鶴乃は、過去を振り返ることで、本当の理由に気づくのがあった。

そして、いろはに問いかける。

——  
ねえ、いろはちゃん。

——  
わたしって、くるってるのかな？

FILE #32

「由比さんは、幸せになるべきだと思っんです」

いろはは、鶴乃の過去を知っても、嫌悪も否定もしなかった。

鶴乃としつかり向き合って、はつきりとそう言う。

しかし、尚も自己嫌悪をする鶴乃に、

「由比さんは、本当にそれでいいんですか!？」

「自分勝手って言いましたよね？ だったら、今まで自分をちゃんと考えた事が一度だって有るんですか？ 私はそう思えない。由比さん、周りのことを気にしてばかりで、自分の事は二の次にしてる……!」

「人を傷つけたのは間違ってますし、誰かを恨むことだって、きつと違ってると思うんです。でも、由比さんっ!」

「自分が間違ってるって分かっているのに、誰にも相談できないから治し方もわからなく

て、結局……気持ちにも余裕が無くなって、間違つたまま突つ走るしかなくて……それで由比さんの欲しいものは手に入るんですか!？」

いろはの言葉は、鶴乃の心に深く突き刺さるのだった。

そして、いろはは、出会った時の鶴乃を思い出す。

自分の弟子になりたい、と言った笑顔は、眩しかった。

「あれが本当の由比さんだって、今なら思えるんです！ だから……由比さんが本当に取り戻したかったもの、なんとなく分かるんです」

「本当は、誰かを頼りたかったんですね？ やちよさんを倒したかったんじゃない……。今の自分を分かって貰って……元の、明るい自分に戻してほしかったんですよ？」

それでも、鶴乃の気持ちは晴れない。

そこで、いろはは、小説家：阿峽 慎からの応援を思い出し、言葉を続ける。

「私にとつても、ここに居る由比さんが全てなんです」

「過去を振り向くな、なんて言いませんし、言える資格なんてありません。だけど、辛い物がある過去に、ずっと縋りついたままで居て欲しくないんです」

そしてもう一つ、思い出す。

七海やちよの言葉。

『治安維持部はどんな魔法少女も、見捨てない』、と。

不器用だが、やちよは人を良く見て、人の為に動ける人だと、鶴乃に伝える。そして、自分が鶴乃とやちよの架け橋になる、と伝えるのだった。

「だから由比さん。安心してください」

ようやく安堵した鶴乃の顔に、笑顔が戻る。

そして……

「これからもご指導、ご鞭撻、よろしくお願いします!! 環師匠!!」

「ええ!? そ、そこまでは……ちよつと!! や、やめてよ由比さくくんっ!!?」  
「あっはっはっはっはっはっはっは!!!」

鶴乃は、本当の意味で。

心地よさそうに、心から笑ったのだった……。

## 2. 5章 環いろは編 FILE #34〜#45. 5 ざっくり解説!

### FILE #34

「頼れる時に頼れ。でないとき……あいつみてえになる」

万々歳・由比家に泊まることになったいろは。

家族の事を知った木次郎から心配され、今後どうするべきか悩んでいた。

一方、『由比さん』から『鶴乃ちゃん』へと呼べるようになったことで、鶴乃とは、友達としての仲がより深まっていく。

——親友っていい言葉だよ。だって天文学的な確率だもんね。

鶴乃とはいいい友達になれそう……。

そう思ったところで、ふと、昔馴染みの親友・里見灯火のことを思い出すのだった。

—— 調べた年代や年齢によって違うんだけど……。

—— 親友の数って色んな統計や論文が出ててね。

—— 最近の教育心理学の発表だと大体三人なんだってー。

—— それって今の地球人口が74億人だとするとー……

—— れーてんれーれーれーれーれーれーよん%ってすつごく小さい確率なんだよー。

—— お姉さまを含めるとわたくしたちはそれを3回も引き当ててるっ。

—— だから、わたくしたちってここでこうして話してるだけで、天文学的な確率に選ばれたかんけーなんだよ？

しかし……

『そうは思わないか？ たまき』

『だから、気にするな』

『奪ったものなことなど、気にするな』

親友との輝かしい思い出は、突如、邪悪なものへと変貌するのであった。

“白衣を着た知らない女性”が、いろはにそう囁く。

そして、いろはは思い出す。

“白衣を着た自分”が、罪の無い多くの少女達を犠牲にしてきた事を。

『だから、親友なんだよ。たまき』

『私とお前は、同じだから』

覚えの無い罪の意識がそうさせたのか。

いろはは、包丁で自分の喉を貫こうとする……が、鶴乃に止められた。

震えながら、いろはは鶴乃に訴えるのだった。

「10人……いや、もっと……20、30……違う。100人は……殺しているかもしれない……！」

その後、落ち着いたいろはは就寝し、鶴乃は木次郎に相談する。

木次郎は言う。いろはの目は「人殺し」のものであったと。

「殺人犯の中にはてめえのやったことを忘れてたり、誰かがやったと思い込んでる奴が何人も居た。どうも、シヨックが大きすぎると、人間の脳みそつてのは悪いモンを取り除いちまうらしいな」

だが、それを聞いても、鶴乃は、

「話を真剣に聞いてくれて、これからを一緒に考えようって言うってくれたの。だからわ

たし、いろはちゃんにもそうしてあげたい。いろはちゃんが抱え込んでる苦しみがどれだけ深くて暗いものでも、一緒に寄り添って、向き合ってあげたいの」

いろはが例え何者であろうとも、「友達」で在り続ける事を決意するのだった。

FILE #34. 5

『では、己おれが引剥ひはぎしようと思ひまいな。己おれもそうしなければ、餓死をする体なのだ』

より

——芥川龍之介「羅生門」

・深月みつきフェリシア短編①

(少しは転まがりこんできたのかねえ……オレが楽しめそうなものは……?)

ヒッチハイクをしながら、日本各地を旅する西洋人風の風来坊。

彼女の名は、深月フェリシア。魔法少女である。

トラックの運転手をイジリながらと共に神戸市へと向かっている途中だ。

街の景色を眺めるその目は残忍に光っていた。





ええ???  
!!!???

そんな訳で、市役所最上階の市長執務室へ向かういろは。

女性市長・夕霧青佐は、緊張するいろはを温かく迎えるのだった。

そして、いろはは覚えていないが、彼女が2歳の頃に会っている、という。

「事情は全て輝きいさんと曜ひかりさんから聞いてるわ。だから、安心して頂戴!」

「じゃあ……やっぱり、お父さんとお母さんは……」

「……ええ。お二人は、こうなることを予期していたわ……。本当に、残念だったわね……」

そして、市長の隣には、スーツ姿の美少女も立っていた。

「私は粟根あわねところ。市長の秘書を務めているの」

「こころもまた、父・輝一と親しい仲であり、

いろはとも2歳の頃に会った、という。

いろはは二人から、「両親の事を尋ねることに。

「多分、もういなくなってる」

「……ええ?」

「攫われたの。サンシャイングループに……」

## FILE #36

- ・父は家を出る前に、市長に『いろはを頼みます』とメールを送っていたこと。
- ・両親が向かった先は、成田空港であり、本当に海外へ向かうとしていたこと。
- ・市長がこころを派遣し、両親の護衛役として付けさせていたこと。

しかし、「これ以上巻き込む訳にはいかない」と父に言われ、糀谷駅で一方的に別れを持ち出されたこと。

- ・それでも、心配になって影から両親に付いていったこと。

- ・路地裏で、両親が不審な男性の集団に襲われた事。その集団の正体がサンシャイングループであったこと。

以上が、両親の経緯であった。

こころも助けようとしたが、“何者か”に背後から襲われ、意識を失ったという。いろはは怒る。

これは犯罪じゃないか！

警察に訴えてやる！

そう思い、突然外に出ようとするが、市長に呼び止められた。

「サンシャイングループの会長、日秀源道さんは、県警や警察庁とも太いパイプで結ばれている。貴女が訴えたところでタチの悪い子供の悪戯としか思われないでしょうね」

冷徹にそう忠告されて、カツとなるいろは。

「じゃあどうしたらいいんですかつ?!」

「お父さんとお母さんが捕まって今も酷い目に遭ってるかもしれないの!?! 苦しんでるかもしれないの!?! 自分だけそれを忘れたフリをしてのんきに過ごさせていうんですか!!」

「それを何よりも、お二人は望んでいるわ」

「できない!! そんなことっ!! 大切な家族を忘れて自分だけ幸せになるだなんて私にはできない!! そんなことができる人は、もう人じゃないっ!」

やり場の無い怒りを市長にぶつけてしまう。

だが、市長は冷静に、いろはに問う。

「相手は強大よ。立ち向かえば貴女の人生から安寧は無くなるかもしれない。輝一さんと曜さんの期待を踏み躪り、悲しませるかもしれない。それでも貴女は、戦うつもりなの」

「……私は、家族みんなで、もう一度笑いあいたいです。」

だから、行かせてください……っ！ お父さんとお母さんを、私が助けないと……っ！！」

いろはの意志は固かった。

市長は、イマジナリーフレンド「教授」なる少女に了解を得ると、

いろはへ、アドバイスを送るのだった。

「いろはさん。貴女が本気で彼らに立ち向かいたいと思うのなら、ここで力を付けるべきだわ」

「個人のワガママが通じる相手は、自分より弱い者に限られる。サンシャイングループに敵わなかった時、行き場の無い怒りがどこに向くかは目に見えている。……そうなって欲しくないからこそ、貴女はこの街で、彼らに対抗する為の人脈と知恵を身に付けて貰いたいのよ」

「貴女は若いわ。時間はいくらでもある。この街の隅々まで歩き回って、色んな人たちと出会い、絆を深めて欲しい。神浜の全てが、貴女の力になってくれる」

それが可能なのは、今しかない。

いろはは『最強<sup>七</sup>の魔法<sup>海</sup>少女<sup>ち</sup>に勝った』。

神浜市の全ての人間が、いろはに注目している、この時こそ。

「私……何も知らないんです。だから、手を貸してください」

いろはの表情に怒りが消え、心に希望が宿る。

市長の手を取り、共に戦うことを決意。

そして市長は、いろはの未成年後見人となった。

そして、いろはの新たな住まいを勝手に、*“みかづき荘”* に決めてしまふのだった。

そして――

「環いろは。君は必ず、僕の下へ辿り着くだろう」

「僕はいつでも待っている。この万年桜の木の下で――」

現実には存在しない、*“楽園”* のような世界で、

*“教授”* なる少女は独り、そうつぶやくのだった。

FILE #37

いろはは、妹・『環うい』と『大賢者様』の事を市長に尋ねるが、「分からない」と返されてしまう。

翌日。

いろはは、せめて妹の手がかりを得るべく、入院していた筈の、『神浜総合病院』へと向かうことに。

しかし、いろはは『七海やちよに勝った』事で、市内じや大有名人。

道中、女子中学生達やら、商店街じや店主のおっさん達やらに囲まれ……

加えて、いろは自身が地図アプリすら使いこなせないレベルの、『スマホ音痴』のせいで、非常に難航。

これには、市長の命令により、陰で見守っていたまさらも、呆れかえる程。

しかし、一台の車が、いろはの前に現れる。

運転しているのは——

「みたままさんっ!？」

「お嬢さん、乗ってくかい?」

自称17歳が運転していいの?

八雲みたまの好意により、いろはは神浜総合病院まで乗せてもらうのだった。

神浜総合病院。

「小児科病棟に問い合わせたのですが……環うい様、柊ねむ様、里見灯花様という名前の

カルテは無い……と」

落胆するいろは。

ロビーで受付に問いかけるも、三人の入院記録は無い、と言われたのだ。

しかし——

「あんた、環ういの血縁者かい？」

偶然にも。

『環うい』を知っている、という老婆・明槻あかづき月禰つきねと出会う。

しかし……、

「びっくりしたよ。まさかあの人に——お孫おひなごさんがいたなんてね」

まさかの言葉に、ショックを受けるのであった。

FILE #38

一方、いろはと別れた八雲みたまは、

神浜総合病院の院長室で、院長の里見浩一郎と会っていた。



「いろいろの記憶にしか存在しない少女」——『里見灯花』について、聞きたいことがあるからだ。

・いろいろのソウルジェムの「記憶」から、神浜総合病院に入院していた、という証拠がある。

・「里見」という苗字は、院長と同じ。

以上から、何らかの関係があるのでは？

しかし、里見院長は「知らない」の一点張り。

「人の頭の中が一番信用できる」とは断言できないでしょう。

人の記憶とは機械のデータよりも遥かに曖昧なものです。

誰のソウルジェムを覗き込んだかまでは問いませんが、

対象の魔法少女が思い違いをしている可能性もあるのでは？」

そう返されて、話が平行線になると思ったみたまは、里見院長を「脅迫」する。

「実は……最近知ったのですが、慶圓会の業績は芳しくないとか」

「新規に福祉事業を立ち上げたサンシャイングループと業務提携し、

福祉事業を大規模に展開したものの、新規の施設が軒並み赤字続きであると……」

「サンシャイングループの福祉事業所の役員もカンカンでつい最近叱責を受けたばかりと

……あれえ？

何をそんなに焦った顔をしていらつしやるんですかあ？」

以上の情報は、

里見院長の秘書である魔法少女・鏑<sup>かぶら</sup> 美奈子のソウルジエムを「調整」した時に、得たものだ。

公にされてはまずい事実を、握られてしまい、焦る里見院長。

「貴女は……そこまでして存在<sup>見</sup>しない少女<sup>灯</sup>の事を知りたいのですか？」

「まあ、存じませんならそれで結構です。その子の勘違いであつたと処理できますから。ただ……これだけは確信を持って言えます。

私達が今まで覗いたソウルジエム……魔法少女達の記憶の中で、  
実在<sup>し</sup>ない人物は一人も居なかつたと……！」

里見院長は焦り過ぎて、迂闊な事を口走ってしまう。

〈存在<sup>見</sup>しない少女<sup>灯</sup>を知るいろはは、  
「記憶改竄を受けている」  
のでは？〉  
みたまの答えはNO。

いろはの身辺には、記憶改竄が可能な魔法少女はいない、と。

「調整の対象者は、何の変哲も無い一般家庭の生まれの女の子です。

魔法少女としても格別なものはない。

記憶改竄したところで何かが得られるなんて思えませんし……

そもそも、改竄されたと仮定した所で、『知らない少女の記憶を植え付ける』意図が分かりません。

改竄した側に、何かメリットがあるとも思えませんが」

みたまは、先の里見院長の『迂闊な発言』の揚げ足を取り、追いつめる。

「貴方は先ほど、ご自分のことを『凡人』と称しましたね。

なら、尚更不思議なんです。

『記憶改竄』は、魔法少女の界限でも使い手は極僅か。

魔法少女の事情に深く踏み込んだ者でなければそんな単語はそうそう出てこない筈です」

「更に貴方は、『人の頭の中は改竄しようが無い』と最初に仰いましたね。

だから私はてつきり貴方が『記憶改竄できる魔法少女がいることを知らない』

のかなあ、なんて思っていましたけど……今、パツと仰いましたよね。

もしかして、そんな魔法少女が身近にいるんじゃないですかあ？」

——そして、その少女の存在を口止めされていた、と。

指摘されて、里見院長は、しばらく黙り込んだ。

それが答え。

『里見灯花』の事を知っているが、言えないのだ。みたまはそう確信したのだった。

その後、病院の廊下にて。

鏝 美奈子から叱責を受けるみたま。

しかし、美奈子の「何かに怯えてる」様子から、彼女も『里見灯花』を知っている、と悟るのだった。

「じゃあ、これだけは教えて。『里見灯花』が、今、どこにいるのかを」「誰も近寄ることのできない。深い暗闇の底に、その子は居る」

美奈子の言葉に、みたまはふと思いつく。

いろはのソウルジェムの中にある、深淵。

「里見灯花」と同じく、『天才』と持て囃された「科学者の女性」の姿を。その狂気を。

まさか——!?

一方、いろはも、老婆・明槻月禰と『環うい』について、話していた。「月禰さんの知ってる『環うい』って、どんな人だったんですか?」

月禰の知っている『環うい』は自分の妹とは別人。

しかし、いろはにそっくりな、＼おばあさん＼だったという。

いろはは気になってそう尋ねる。

「立派な人だったさ……」

「どのくらい前か忘れちまったが……あの人は突然、この街にやってきたんだ。お医者様でね。一時は中央区で診療所を開いていたことがあった。あたしもよく世話になったよ」

「根っからのお人好しだったよ。来るもの拒まずっていやいいのかな。金が無くっても傷病人なら、誰彼かまわず治療しちまうのさ」

「そりゃあ経営は火の車だったそうだが、自分の財産を投げ売って存続させていたって聞いたよ。そこまでして、人に尽くしたい情熱ってやらがあの人の中にはあったんだらうねえ」

不思議と。

月禰の語る『環うい』は、いろはのよく知る『環うい』と重なって見えた。しかし。

「本当に素晴らしい人だった。……＼アレ＼を知るまではそう思っていたよ」だが、そこで見てしまった。

懐かしそうに語る月禰の瞳——宝珠の様な輝きが、突然どす黒く澱み揺らいだのを。

そこで、月禰は話を打ち切り、立ち去ってしまうのだった。

## FILE #39

・ マギウスの翼サイド

アジトの最奥部では、最高幹部の二人。

『実働部隊統括責任者』 梓みふゆと、

その祖父であり、スポンサーの

『サンシャイングループ代表』 日秀源道が話し合っていた。

※ここでざっくり解説! 『黒羽根』って何?

実働部隊の下っ端だよ!

元々は、神浜市で確保した魔法少女達を元に、作られてるよ!

最高幹部たちは、もっと数が欲しいと考えてるけど、

神浜には、いろいろ厄介な敵がいるせいで、うまくいってないんだって!

……という事情なので。

梓みふゆは、『黒羽根大量確保大作戦』を企画。

※ここでざっくり解説！ 『黒羽根大量確保大作戦』byみふゆ！

神浜市内がダメなら、『神浜市外』で集めればいいじゃない！

そんな訳で、地方（限界集落とか）で、『行政の保護がまだ受けられてない』魔法少女を狙ってみるよ！

いつ魔女に襲われるか分からないし、魔法少女同士で殺し合ってる子もいっぱいいるから……最適だね！

・里見灯花えもん

「そういうときは、コレ！ 電波発信機☆」テツテレテツテツテテテテ♪

「これは、『魔法少女のみ受信可能』な特殊電波を発信するんだ！

こいつに、みふゆの『幻覚魔法』をプラスして、電波スワイッチオンを発信！

すると、ほくらー！」

「マギウスの翼が理想とする世界を、

遠くの魔法少女にも『疑似体験』してもらえるんだ!!」

・地方の魔法少女達

「『解放された世界』つて最高☆☆

私もマジウスの翼に入れてくださ〜い☆☆☆☆」

……とまあ、こんな感じで大成功!

Q. えー??

でも、『幻覚魔法が効かない』魔法少女がいたらどーするのさ?

周りの魔法少女達が幻覚に惑わされてるの見ていたら、

すごく不審に思うよね?

A. 誠実な魔法少女を派遣して、頑張つて説得して貰います。

例を挙げると、貝塚市では、天音月咲さんと月夜さん姉妹が

頑張つてくれました。

※ここでざっくり解説! 実働部隊の裏事情!?

みふゆは『実働部隊統括責任者』だけど

実際に、現場で部隊を動かす立場にあるのは、『実働部隊長・紅羽根』の、双樹ルカだ



よ！

二人の仲は、最悪だよ！

天音姉妹は、双樹ルカの直属の部下で、副隊長の『白羽根』を務めているよ！

でも、お人よしだから、仕事に優柔不断なところがあつて、双樹にネチネチ虐められているよ！

だから、みふゆは、二人に活躍の場を与えて、守ろうとしているんだよ！

「与えられた役割のみに没頭せず、多角的に見渡した上で、最適な人員を割いて事を成就した。

……見事だ。やはりお前には上に立つ資格があるのだな」

そうみふゆを褒める源道だが、一つ懸念が。

『七海やちよ』ことだ。

治安維持部長である“神浜の英雄”が、マギウスの翼の対抗勢力の旗印となるのは必然。

説得できるのは、みふゆしかいない。

しかし、みふゆは一向に、そちらに動く様子は無い。

「みふゆよ。お前が争いを嫌悪する性情なのは重々承知だ。

故に、幼馴染と対峙を避けたい気持ちもよく分かる」

「しかし、いつまでも手をこまねいていては大事に発展するぞ。

これより先、ミス・ペインプランターの「アレ」を市内中に配置する以上、

市内における我らの活動は活発化せざるを得ない。

故に、治安維持部とも熾烈な闘争に発展しかねん。

犠牲を極力避ける為には、相手の牙を早々に抜き、戦意を削ぐのが肝要ではないか？」

源道の言葉に。

みふゆは葛藤しながらも、強く言い返すのだった。

「やっちゃんが人で無いのならば、

人であるワタシが彼女を救い、元に戻して見せる……

それがワタシの使命です！

お爺様、この度は手厳しくご指導いただき誠に感謝しております。

しかし、未だ私の心構えが整っておりません故に、暫しの時間を頂戴したく願います」

強い意志を見せる孫娘に、納得する源道。

しかし……

みふゆが退室した後、

源道は背後に隠れていた双樹ルカを呼び出す。

「聞いていただろうが。みふゆはあの通りだ。恐らく、七海やちよは卸せん」

実は源道は、

みふゆに内緒で、恐ろしい計画を企てていたのだった。

それは……、

凄腕と呼ばれる傭兵“A”を雇い、七海やちよを暗殺する、というもの……。

（青いままでは全ては救えん。人は時に、全身に血潮を滾らせ、赤く熟さねばならん……）

全ては、みふゆに現実を知り、甘さを捨ててもらおう為の、親心でもあった……。

## FILE #40

・いろは、新生活編①

宝崎市時代で一緒にチームを組んでいた魔法少女・宮内 墨の言葉を励みに、

みかづき荘での新生活に臨むいろは。

「それにしても……一日しか会ってないのに、ずいぶん久しぶりな気がするわねえ……」

みかづき荘の管理人。

ママパパ柁・ピーター・レイモンド。

「あ、それと……住んでもらう以上、家賃滞納は許さないから、そのつもりで」

みかづき荘の大家。

ママ長女？柁・八雲みたま。

「貴女が来てくれて本当に良かったと思ってるわ、いろは《・》」

みかづき荘の居住者①。

次女柁・七海やちよ。

「105号室に住んでる。魔法少女。固有魔法は『透明』。普段はこころと一緒に市長の

秘書として働いている。まあ、仲良くできるか分からないけど、よろしく」

みかづき荘の居住者②

三女柁・加賀見真良<sup>まさら</sup>。

以上の個性豊かな女性達※一人を除くと共に暮らすことになる。

最初は、うまくやっていけるか不安で、緊張するいろはだったが……

「みかづき荘では、住んでいる人は全員、家族と思うのがルール。みんなで協力し合わなくちや家は守れないでしょ？」

「家……」

「もうここは貴女の家なのよ、いろは。そして私達は貴女の家族。だからもう、安心していいの」

やちよにそう言われて、

いろはは、新しい「家族」の皆と、共に生きる決意を固めたのだった。

## FILE #40・5

### ・深月フェリシア短編②

トラックの運転手と共に、市内のパーキングエリアに寄ったフェリシア。

そこで食事を摂ることにした二人。

急にう〇こしたくなった運転手がトイレに行くと、

狙いすましたかのように、

フードを深く被った少女が、フェリシアの前に現れる。

「傭兵、ですよね」

「ああ……つつつても、今は雇われ中だからなく。仕事を二重に受け持つ気はねーし、他当たれよ」

どうやら魔法少女のようだ。

最初は警戒心から、あしらおうとしたフェリシアだが、

「『アステリオス』。貴女のあだ名でしょう……? ふふふ……」

「その名を知ってるんなら、高くつくぜ」

フェリシアは、謎の魔法少女に連れられて、

彼女の『ボス』から、仕事の依頼を受けるのだった。

## FILE #41

・いろは、新生活編②

いろはは、未成年後見人である神浜市長の意向により、

『神浜市立大学附属学校』へ転向することに。

よって、一度地元である宝崎市へ戻り、

公立優戒中学校の送別会に参加した後、

親しい友人達と、別れの挨拶に向かう。

いろはの親友……それは学校のクラスメイトではない。

宝崎市で一緒に戦ってきた、魔法少女チームの仲間のことである。

同い年の皆木葉菜。みなきはな

少し上の先輩の宮内くくない、累るいの事だ。

最初に葉菜の実家である、『皆木植木店』へと向かったいろは。

彼女の父親と会うが、話している最中、魔女に操られてしまう。

助けるために、

結界に入り魔女退治に挑むいろはであったが……

使い魔は、まるでダンゴムシの大群。

いろはのクロスボウとは圧倒的に相性が悪い相手だ。

それでも、いろはは奮闘し、魔女と思しきダンゴムシを見つけて、狙撃した。

しかし——

それは巧妙に仕組まれた罠であった。

狙撃されたダンゴムシは、魔女ではなく、囿であった。

羽虫の使い魔に変化して、いろはの顔面に纏わりつく。

瞬く間に、ダンゴムシの大群がいろはの全身を覆い尽くし、絶体絶命の危機に。

「くっ……くっ……」

——終わるのか。

「くそっ!!」

「くそっ!! くそっ!!」

「くそっ!! くそっ!! くそっ!! くそっ!! くそっ!! クソオツ!!」

「死」を前に、いろはは意地汚く足掻いた。

「ちくしよおっ! 離してえっ! 離せよおっ! 何で私ばかりこんな目に遭うんだよおっ!! ふざけんなよおっ!! 私はまだやらなきやいけないことが……ッ!! やりたいことだつて沢山あるのに……ッ!! こんなところで……お前らなんかにい……ッ!!」

走馬灯のように、妹の姿が視界を過り、

いろはは、渾身の力を込めて、必死に叫ぶのであった。

「こんなところで……死んでたまるかあああああああああああああああああ!!!!!!」

「聞こえたぜツツ!! いろは——ツツ!!」

まさに、危機一髪。

親友・皆木葉菜が助けに来てくれた!

衝撃波で、ダンゴムシの大群を蹴散らし、いろはを救出したのであった。



## FILE #42

## ・いろは、新生活編③

※ここでざっくり解説！ いろはの親友A・皆木葉菜つて？

いろはが宝崎市に住んでた頃の魔法少女仲間だよ！

愛称は『葉ちゃん』！

両手から衝撃波を放って攻撃するよ！

固有魔法で、聴力がめちゃくちゃ優れているよ！

乱暴な性格で、口も悪いけど、

頭は良くて面倒見が良いから、チームでは参謀役を務めるよ！

【容姿イメージ】←

(カスタムキャストで作成)

※ここでざっくり解説！ いろはの親友B・宮内 壘つて？

いろはが宝崎市に住んでた頃の魔法少女仲間だよ！  
年長者だから、チームではリーダーを努めるよ！

でも、固有魔法のせいで『勝てない』と思つたら、背中を向けて逃げてしまふよ！  
でも絶対に生き残るよ！

(※葉ちゃん曰く、「殺されても次の日にはひよっこり顔出すタイプ」)

超テクニク人間で、葉ちゃんはいつも苦勞してるよ！

【容姿イメージ】←

(カスタムキャストで作成)

葉菜に続き、累まで助けに来てくれたことで、形成は逆転。

“いつも通り”のチームプレイで、魔女を発見し、撃破するのであった。  
結界が消え、元の世界に戻る三人。

いろはが勝手に、神浜市に移住したことについて、

葉菜は腹を立てて怒鳴り散らすものの……

「あたし、安心したよっ！」

「『ふざけんなよ』って……『死んでたまるか』って叫んでさ……。ああ、こいつはまだ

やる気なんだって」

「あたし、嬉しかったよ。いろはが抱え込んで変な気を起こさなくなつて。ああいうことが腹の底から言える奴だつて分かつて、本当に安心したんだよ！ だから、絶対に助けなきやつて思えたんだ！」

涙を流して、そう伝えるのだった。

そして累も……

「累さんも嬉しかったよー。いろつちが貫いてくれる子でー」

「だつていろつちつてさー、絶対に諦めない子じゃん」

二人はいろはの「強さ」をしっかりと見てくれていたのだ。

二人の優しさに、いろはは涙を浮かべて、感謝するのだった。

FILE #43

・番外編

side：常盤ななか

こちらは、厄介な大人達に囲まれて苦勞してます編。

『明京町の陰の支配者』『女帝』等と呼ばれている彼女だが、  
実際は、そうでなかった。

常盤ななかのチーム『アメノハバキリ』は、

彼女含めて10代の少女4人……

主に大東区に蔓延る、ヤクザや、麻薬密売、移民問題をどうにかするのは無理だ。

常盤ななかが、犯罪撲滅を達成できたのは、

彼女と密約を交わし、協力する組織がいたから。

それが蒼海幫（現・（株）蒼海グループ）。

圧倒的な武力を持つ精鋭の魔法少女達（通称『墮龍<sup>デュオロン</sup>』）が、上記の連中を、陰で抑えて

くれていた。

その中でも、蒼海幫のボスである王<sup>ワン</sup> 海龍<sup>ハイロン</sup>は、最強の武術家である。

つまり、

ななかの今までの功績は、海龍によって齎された、偽りのものであった。

海龍はななかを利用して、治安維持部乗っ取りを画策していた。

中国武術こそが『最強』と信ずる彼女たちは、

それこそが、民を守るに相応しい力だと、世間に証明したかった。

全ては、蒼海幫が『悪党』のイメージを完全払拭し、

『正義の味方』として生まれ変わるための、計画であった。

駒扱いされながらも、ななかは思う。

自分では、力関係はどうにもならない。

治安維持部の象徴・七海やちよにこそ、海龍と“対等に”張り合ってもらわねば……。

side：十咎ももこ

調整課もいろいろやってますよ編。

ももこは、同じ町役場に勤務する調整員・八重いずもと共に、

地方の街を回っていた。

ここでざっくり解説！ 『魔導管理局』と『魔導事務局』って何？

神戸市をモデルケースに創設された、魔法少女専門の役所だよ！

主に大都市内に建てられているよ！

『管理局』では魔法少女の警察部隊が、魔法少女の駆除や魔法少女の犯罪を取り締まるよ！

『事務局』では、八雲みたまみたいな調整員がいて、ソウルジェムの“調整”が受けら

れるよ！

でも、規模拡大中で、まだ全国には広がっていないんだ!

つまり、行政の保護を受けられていない魔法少女は、地方に沢山いるよ!

しかも、地方自治体が、魔法少女に懐疑的な姿勢だと、中々創設にはいたれなくて、面倒くさいよ!

そんな事情な訳で……

調整員を各地に派遣し、地方の魔法少女を調整する「事業」を行っているのである。

実は「調整」は、日本のみで行われている、唯一の魔法少女の『延命方』であるのだ。

「調整」は誰でも受けられる。

犯罪者だろうと反社会組織に属してしようと、人間性と過去は問われないのだ。

「あたしらが目指すのは、グリーンフシードのいらぬ未来ツスよ」

「口を慎めよ調整屋。キュウベえが聞いたら睨まれるぞ」

FILE #44

皆木葉菜と宮内 累に別れを告げ、

いろはは、神浜市のみかづき荘へと帰っていった。

家に帰ると、まさらしかないかった。

仏頂面で、態度が冷たく、言いたい事を単刀直入に言ってくるタイプ。

いろはにとつては苦手な相手だ。

自然と、緊張するいろはだったが……

「手で額を撫でるその仕草……この前、海外ドラマで見たけど……貴女、恥じてる？」

自分の「仕草」がきつかけで、まさらの方から話しかけてくれたのだった。

いろはは自分の身に起きたことを話す。

「本当に、私って地元じゃ無作為に生きてたんだなあって思っちゃって……」

「何も積み上げてこなかった、何も興味を持てなかった自分が、恥ずかしいって？」

「あはは……まあ、そんなところです」

「悪いことじゃない。私にも、そういう時期があったから」

そして、いろはにとつて、意外なことを話すのだった。

「貴女が羨ましい。」

不謹慎だと思うけど、刺激的な毎日を送れてる貴女が羨ましい。

だから、安心していいんじゃない？

変わる可能性があるから」

お互いの気持ちを正直に伝えあう二人。

「安心したんだと思います。私とまさらさん、結構似てるところがあるんだなあ、つて分かって」

「似てる？ 私と、貴女が？」

「まさらさんと距離が近くなれて、嬉しかったんだと思います」

「距離が、近く？」

「はい。だって私たち、家族なんですから。仲良くなれなかつたら嫌ですよ」

性格は全く違つても。

お互いに似ていることに気付き、二人は、笑い合う。

お互いに安心して、これから良い家族になっていけると、確信するのだった。

その後、中々帰つてこない家族を迎えに行く二人。

まずみたまを探しに、市役所地下・ミロワールへ向かう。

が、そこにいたのは、みたまではなく……

「初めまして環いろはさんっ!! わたくし、夕霧 碧（みどり）と申しますっ！」

犬耳娘……ではなく、一人の女性。

神浜市長・夕霧青佐の娘、碧であった。



大学生であり、ミロワールでバイトしているのだ。

みたまの所在を尋ねると、「ピーターと一緒に飲んでいる」と答える碧。

一方、ある居酒屋。

みたまはピーターと飲みながらも、ある調査を依頼していた。

「PROJECT MAGIA RECORD」

「まさか、それって……」

「ええ、いろはちゃん之魂を覗いた時に見えた『深淵』の一部。研究所のような施設で、そのワードがあったの」

「あちらの人達は戦後職を失い困窮する日本人への救済処置として雇用という形で、『少女狩り』を行ってきた歴史がある。貴女を疑う訳じゃないけど、可能性は否めない」

みたまの依頼に、ピーターは決心を固めて、頷くのだった。

FILE #45

翌日。

市役所へ向かったいろはは、やちよと話し合っていた。

彼女の執務室で、小さい頃のやちよと一緒に写っている、

“知らない女性”の写真を見つけているいろは。

その女性の名は、和泉いずみ十七夜かなぎ。

やちよにとつて“恩師”となる魔法少女であったという。

「私は彼女から総てを教わった。平和と平等の事を。この世の正義と悪も。人との向き合い方も」

「本来、治安維持部長私席は彼女のもので……全ての魔法少女を正しい方向へと引率してくれる筈だった」

『いつか、全ての魔法少女がキュウベエの敷いたレールから外れる時が来る。その時が、はじまりだ。世界は魔法少女を必要とし、絶望から切り離された魔法少女我々もまた、世界とどう向き合うか、改めて考えなおすだろう』

和泉十七夜は、

『世界で蔓延る差別・戦争・貧困・飢餓・麻薬・無法・悪政に喘ぐ人々を救う為に、魔法少女を派遣する機関』

の創設を夢見ていた。

機関名は「マジア・リユニオン」と名付けるつもりであった。

「かなり極端なところはあつたけど、あの人は普通とは違つていた。誰よりも正しくあろうとし、どうすれば社会が公平になり人々を平和に導けるのかつて……口にするのはいつもそればかりで、それしか頭になかつたの。正義に憑りつかれた人、といえばいいのかな。あまりにも真つ白過ぎてね……私には、眩し過ぎた」

思ひ出を語るやちよ。

しかし、和泉十七夜は、行方不明になつてしまつたという。

やちよ曰く、理由は「『不平等からなる不合理による理不尽』」だと。

いろはには、何の事だか、さつぱり理解できなかつた。

——と、それはさておき。

いろはには、やちよにどうしても確認したいことがあつた。

「やちよさんは……参京区の再開発計画に、本当に心から賛同していたんですか？」

尋ねると、遠い目を向けてやちよは答えるのだった。

「あの頃の私は、大人を信じすぎていた。それが、人々の救済に繋がる道だと信じていたからね……」

FILE #45. 5

・深月フェリシア短編③

明京町・大東区。

神戸でも一番治安が悪いと言われている地区。

そのこの沿岸部には他国籍の不法移民達で形成された“スラム街”がある。

蒼海幫の管轄下にあり、腕の良い傭兵達が警察代わりとして巡回し、不法移民達を見張っている。

フェリシアはスラム街を一人、歩いていた。

実はフェリシアは“傭兵”であつたのだ。

元々、裏社会の人間であり、スラム街は庭も同然。

道中、巡回している傭兵に出くわし、喧嘩となる。

幻覚魔法を使う相手だったが、フェリシアは軽く蹴散らした。

そして、目的地となる“板金屋”へ向かう。

板金屋は、一組の親娘が経営していた。

『とつつあん』と呼ばれる初老の父親と、

大学生くらいの娘・『伊月ジュン』である。

ジュンは、フェリシアと同じく「傭兵」で、父親も裏社会の人間であった。

フェリシアは全財産の300万を差し出し、依頼する。

伊月ジュンに、『自分の仕事のサポート』で100万。

とつちゃんに、『買えるだけのドローン』で200万。

「ジュンまで連れてくれたあ、百戦錬磨のお前が弱気になっちゃう程か？ フェリー」

「まあ、そんなところだ」

「しかし……どこのどいつだ。そんな馬鹿げた事を依頼する奴はよ？」

「言えねえけど、これだけははっきり言えるよ」

「そいつ、イカれてる」

三人が獯猛な牙を向ける相手、それは――

3章 七海やちよ 追憶編 FILE #46～52  
ざっくり解説!

FILE #46

七海やちよ、回想。

二年前、治安維持部長になったばかりのやちよは、  
みふゆの母、梓つむぎに呼び出されていた。

「参京商店街の再開発事業に、力を貸してほしいの」  
つむぎは、やちよにとってもう一人の親も同然。

本当の両親は、消防隊員だったが、任務中の事故で殉職。

その後、やちよの未成年後見人となり、全面的に生活を援助してくれたのが、

つむぎだった。

頼まれたら、断れない。

そんな訳で、やちよは、参京商店街の再開発対象店舗を駆け回り、店主達を懸命に説得していた。

参京商店街は木造住宅の密集地だ。

一件でも火災が起きたら、大変なことになりかねない。

【女神】【英雄】【最強の魔法少女】【神浜の守護神】……

既にそう呼ばれているやちよの影響力は、確かに強かった。

店主は次々と首を縦に振った。

全店舗の説得は容易だと、やちよ自身、考えていた。

しかし、斎藤寝具店に赴いた時。

跡取り息子の司から……

「あんた、誰の味方なんだ？」

その一言に、シヨックを受けるのだった。

冷静になったやちよは自分を見つめ直す。

結局、商店街の店主達と、同じ目線に立っておらず。

自分に都合の良い大人に、ゴマを擦っていただけ……

『歪んでいる』

やちよは、今の自分を、そう評価したのだった。

そして、自分と同じく、つむぎの言う通りに動く、みふゆに対しても。

参京商店街の人たちを救いたいのは本当だ。

でも、その気持ちに、慢心と甘えが有った。

もつと個々人の言葉を傾聴して、本質を見抜いて、望みを知らなければいけなかった。それが理解できなかったやちよとみふゆに、最初から救う事は不可能だった。

後日、神戸市長・夕霧青佐に呼び出しを喰らうやちよ。

「参京区の再開発の件は、区民や商店街の方々ともつと綿密に話し合ってお互いにベターな方向性を模索しようと思っていたのよ。反対する経営者は多いから慎重に、時間を掛けるつもりだった。……なのに貴女ときたら、つむぎさんの口車にまんまと乗せられたわね」

叱責を受けたやちよは、深く後悔し、市長に謝罪する。

しかし、市長は激おこぶんぶん丸。

許してくれる筈がない。

そして……



「七海部長。罰を命じます。貴女はこれから休暇を返上して、二木市の視察に行きなさい」

FILE #47

そんな訳で。

兵庫県・二木市に向かうことになったやちよ。

二木市の商工業組合は「黒鬼組」と呼ばれており、

『大親分』と呼ばれているボスがいる。

青佐からのミッションとは、とどのつまり、

「経験豊富な偉い人と会い、社会勉強してきてね」。

ということであつた。

地元の魔導管理局長・紅間めぐみ（以下めぐみん）と共に、主に貧乳談義で盛り上がりながら、虎屋町にある大親分の邸へ赴く二人。

そして、謁見の間。

大親分直属の精鋭——御庭番衆の魔法少女達。

側用取次役・若頭——あちき／ありんす子さん陸奥光琳みちのくこうりん  
そして。

黒鬼組統領・大親分——紅晴結奈くれは。

彼女たちとの邂逅は、

果たしてやちよに何を齎すのか？

#### FILE #48

大親分こと紅晴結奈の邸に泊まることになった、やちよ&めぐみん。

翌日。

大親分は一日忙しいので、暇ができる夕暮れまで、市内散策をすることに。  
向かった先は竜ヶ崎町のある焼き肉屋。

そこで彼女は店主をしている爆殺天使ウエルダンちゃん

大庭樹里と出会う。

樹里の店は昔、謂れのない食品偽造加工疑惑と、

ウエルダン至上主義のせいであらう長らく低迷していたが、

ある「外部講師」の指導を受けて持ち直したのだと。

その講師の名は沖田 誠（通称：アニキ）。

名店「神戸五稜郭亭」の人気シェフであり、

樹里の店の調理場で、“モニター越し”で指導しているのだ。

「実はコイツ（モニター）は認証システム付きだな。スイッチを押した時に指紋と顔を一瞬でスキャンするんだ。ウチの系列グループのシェフとアニキら講師しか登録してないから、外部に漏れることは無いんだ」

調理場には他にも、『分身ロボット』がある。

沖田アニキは専用ヘッドギアを付けて、この分身ロボットを遠隔操作していた。なるほど。

これで樹里に“直接”調理指導が可能、という訳だ。

二人を繋ぐハイテクな機械の数々。

これには、あるIT企業経営者の仲介があった。

やちよはその人物の名を知る。

そして、紅晴邸に戻り、もう一泊したやちよは、

二本市を後にするのだった。

## FILE #49

神浜市。

市役所に戻ったやちよは、市長・夕霧青佐に、結奈との会話を報告する。実は10年前。

二木市にもサンシャイングループは絡んできたのだ。

当時、二木市の経済は衰退しており、治安は悪化していた。

なので、地方再生プロジェクトをサンシャイングループは打診してきた。

しかし、それこそが「罠」……!

端的にいうと、

参京区とか万々歳とかにやろうとしていたことと、一緒である。

つまり、

「技術力など『良いモノ』は持つてるけど、経営難に陥ってる」

店に近づき、店主に上手いこと言って誘惑。

「買取という形で『良いモノ』だけを根こそぎ奪う」

のが目論見だ。

しかし、それがわかっていても、

サンシャイングループの傘下に入ってしまった店は後を絶たない。何故か。

それは福利厚生が凄くしつかりしてるからである。

つまり、買収された企業の経営者は、

「もう頑張らなくていい」とし、「個人経営よりも、安定した収入が常に手に入る」。

家族がいる者は、家族と過ごせる時間がより増える等メリットが多い訳だ。

しかし、

現実的に考えて、そんなことが「可能」な筈が無い。

何か裏がある——結奈達は独自に調査したところ、

『魔法少女達を業務従事させている』

事実を確認したのだった。

確かに、魔法少女の身体能力を使えば、あらゆる業務は手軽になる。

しかし、国の厳しい審査と許可なしでの、魔法少女雇用は違法。

訴えなければ。

だが、結奈達が得た証拠は、

サンシャイングループに握り潰されてしまうのだった。

事実を知っていた仲間も、行方不明となった。

「成す術が、無い……」

「別の手を考えなければなりません……。私達は、各町の商店街の有識者達に聞き回り、必要なのが、強力なバックボーンだと分かりました。彼らの想いを代弁し、世界へと発信できる、強い改革者が。サンシャイングループ会長・日秀源道と対等に……いえ、圧倒する程の才覚、カリスマ、財力を兼ね揃えた救世主が……」

それこそが、*“帝皇”*。

【日本のビル・ゲイツ】と呼ばれるIT界の革命児。

世界有数の企業、皇グループのCEO。

すめらぎ  
皇 りくと 陸翔であつた。

二木市政は、結奈達の説得もあり、

再生プロジェクト先を、サンシャイングループから

皇グループに乗り換えることで、経済を持ち直したという。

ちなみに、

皇 陸翔は現在、【神浜市・明京町・大東区】にいるらしい。

しかも、場所は海沿いのスラム街。

早速、向かつてみるやちよ。

そこには、浮浪者風の中国人に変装した陸翔と、

秘書兼ボディガードの魔法少女、神奈かな 巫子みこがいた。

FILE #50

舞台は現在に戻る。

参京区の事情を話すと、皇 陸翔は乗り気になつてくれた。

しかし、協力するには、条件があるという。

「皇グループが開発した、魔法少女を安全に育成するためのシミュレーションシステム。

【M a l l e u s M a l e f i c a r u m M a c h i n a】……略して「MM

”（エムスリー）よ」

「まれうす・まれふいー……?」

「マツレウス・マレフィカールム・マキナ——『魔女に鉄槌を下す機械』を意味するの。開発に参加したアメリカの技術者チームが名付けたそうだけど……皇会長が物騒なのは嫌だからって、日本ではこう呼んでるわ」

——【LICHT】

「リヒト……?」

「ドイツ語で、光や輝きを意味するのよ」

※ここでざっくり解説!

EMMSRI  
M M M || L I C H T って何?

皇グループが開発した、とんでもなくドでかい機械だよ!

(フルダイブ型シミュレーションシステム)

普段はみたまの店の奥にしまつてあるよ!

50パターンもの魔女との戦闘を、リアルに近い環境で練習できるよ!

世界各国の魔法少女の意見を参考に、結界の模様や質感、使い魔、魔女を完全再現したよ!

支援システム『GUARDIAN』もあるよ!

利用者の魔法少女経験が3年未満だった場合は、

強力なアバター(AI)を、任意で味方に付けることができるよ!

テストプレイした者たち全員から、

このリヒトには重大な『欠陥』があるという。



だが、それが何なのか、分からない。

それを解明するのが、やちよの課題だったのだが……

「試験に参加されている魔法少女は……会長ご本人が世界中から信頼できる者のみを集めている。皆が7年をくだらない、大ベテランよ……なのにつ」

「だったら、逆に『経験が無い子』だったら、見えてくるものが違ってくるのかも」

そんなことを言ってしまったが為に、

テストプレイに強制的に参加させられてしまういろは。

ヘッドギアを装着してフルダイブ！

が……やちよは、「いろはに合わせて『レベル設定』する」ことを、

うっかり忘れてしまっていた。

レベル設定はやちよに合わせたまま。

つまり『最高』レベル！

テストプレイ開始まもなく、いろははゲームオーバー！

……だが、お陰様でいろはは気づくことができたのだった。

〔LICHT〕の欠陥を。

## FILE #51

「リヒトのシミュレーションは、私達の意見だけを参考に、魔法少女にストレスを与えないように配慮されています。魔女の攻撃を受けても痛みを感じないこと。死へと直結する状況に直面した時、強制終了する仕組みも、その一環です」

完全なシステムに見えたりヒトの欠陥……

それは、リアリティの欠如であった。

いろはは先日、帰郷した時、魔女に襲われ、殺されかけた。

その時の恐怖と不安を思い起こし、生きる為に必死にさせる程の『リアリティ』がリヒトのシミュレーションには感じられなかったのだ。

『魔女の口づけ、及び結界に囚われた一般人の再現……そして、使い魔・魔女の質感をよりリアルに表現すること……か』

何はともあれ、皇 陸翔からの課題をクリアしたやちよ。

約束通り。

彼は本腰を入れて、『参京区再生プロジェクト』を行うこととなる。

一方、いろはも鶴乃に連絡していた。

話を聞いて、鶴乃はビックリ仰天！

皇 陸翔が経営する、『皇グループ』は『世界』でも1、2を争うIT企業である。  
サンシャイングループなど比較にすらならない程の。

しかし……

『……でも、怪しいよ』

上手い話など無い。

鶴乃は過去の経験から、皇 陸翔を信用する事ができなかつた。

信用すれば、また裏切られるかもしれない。

サンシャイングループがそうであつたように。

いろいろの説得にも、鶴乃は全く応じなかつた。

しかし、

「環が大企業の言いなりに落ちぶれるようなタマじゃねえのは、お前が一番よく分かつてんだろ？」

「どうせいつ沈むか分からねえ泥舟の上の人生だ。今勝負しなくて、いつおつ始める？」

……明日か？ だが、そんな都合の良い明日は絶対に来ねえ」

大祖父・木次郎の『説得』と、

「お前が、環のやべえ所まで受け入れるって言った時、俺あ、嬉しかった」

「こんなに良い子に育ってくれたんだ。兄貴もあの世で鼻が高いだらうな。……まあ結局……口からでまかせだったみてえだが」

「所詮てめえも、サンシャイングループと同じ穴の貉か」

“焚き付け”により、鶴乃は目を覚ますのだった。

「私は、サンシャイングループとは違うから。」

いろはちゃんのこと、全力で向き合うから。

だから、いろはちゃんがやろうとしていること、手伝わせて!」

『……その言葉を、待ってたよ。鶴乃ちゃん』

こうして。

いろはと鶴乃は、皇 陸翔に協力。

参京区に人を呼び込む為の、大きなプロジェクトを企画するのだった。

FILE #52

1ヶ月後。

参京商店街にて、大きな祭りが開催される。

皇 陸翔は、参京商店街を

『リヒト試験会場』として一般に公開。

参京商店街には、世界中から人が集まり、  
大きな盛り上がりを見せた。

その立役者の一人であるいろはは、

同郷の親友・皆木葉菜と一緒に、商店街を回っていた。

『リヒト試験会場』では、

皇 陸翔の「技術者」としての病的な姿勢に驚嘆・辟易したり……

大広場では、やちよやみたまらモデル組と一緒に、

カミハママン・ショーを観て、楽しんでいた。

その後、万々歳に訪れ、お昼休憩を取る二人。

鶴乃は、葉菜と意気投合しながらも、不意にいろはに零す。

「今までのわたしって無我夢中で100点だけを目指してきたからさ、周りを見る余裕なんてちつとも無かったんだよ……。でも今、本当にやりたいことを見つけてからは、凄く人と向き合ってる気がするの」

全てはいろはのお陰だ。

そう感謝を伝えると、

「……本当に、いろはちゃんって似てるね」

昔、一度だけ遊んだことのある、青い髪の少女と。

鶴乃は、そう切り出して、まだ話してない過去を教えるのだった。

それは鶴乃が3歳の頃……

万々歳の近所には、焼き肉屋があり、看板娘のウエルダン大庭樹里がいた。

面倒見が良かったため、鶴乃は樹里を慕っていた。

しかし、樹里は突然、二木市へ引越すことになる。

悲しみに暮れる鶴乃。

追い打ちをかけるように、近所に住む男の子が、鶴乃に喧嘩を売って来た。

鶴乃はカツとなり、拾った石を投げて、怪我を負わせてしまうのだった。

大叔父・木次郎が叱責するが、「相手が悪いから仕方ない」と鶴乃は謝らない。

だが、木次郎は鶴乃の頬を叩き、叱りつける。

「悲しい顔」をして。

人を傷つける事は、辛い事だ——そう教えたかったのかもしれない。

「おんじのバカ！ だいつきらい!!」

しかし、幼い鶴乃に大叔父の意図は読めなかった。自分の非を認めず、家出してしまふ。

そして、離れの公園で、あてもなく、独り寂しくしていたところに、

——ひとり？ いっしょに、あそぼう。

青い髪の、綺麗な少女がそう、鶴乃に声を掛けるのだった。

2人は思いっきり遊んだ。

しかし、蹴ったボールが道路に飛び出してしまふ。

鶴乃も道路に飛び出すが、車に轢かれそうになる……

だが、青い髪の少女が、鶴乃の前に立ち、間一髪のところまで車を停めたのだった。

「どうやって謝ってもらおうかなあ」

だが、車から下りた男は「暴漢」だった。

男は青髪の少女の体に狙いを定めていた。

だが、青髪の少女は、恐れることなく、

「ごめんなさい」

「わたしたちがご迷惑をおかけしました。もうしわけありません」

「ごめんなさい。わるいことはにとしません。ゆるしてください」

汚れることも構わず、

土下座をして、路面に頭を擦りつけながら、何度も謝ったのだった。

死ぬほど怖い筈なのに、自分が悪いことを認めて、謝っている。

鶴乃は、青髪の少女がすごいと思っていた。

しかし、暴漢は、青髪の少女を車に乗せようとする！

……が、連れ去る前に、大叔父が暴漢を撃退し、事なきを得るのだった。

しかし、あの青い髪の少女は誰だったのか。

結局、名前は聞かなかった。

だが……

七海やちよが、一人で泣いてる少女に、優しく声を掛けてる姿を見て、

鶴乃は気付くのがあった。

昔出会った、〃青い髪の少女〃。

それは、七海やちよだったのだ！

鶴乃はやちよに駆け寄った。

しかし、口から出た言葉はやちよへの〃暴言〃であった。

『わたしたち、ちっちゃい頃、一緒に遊んだよね？』



本当はそう言いたかった筈なのに……。

あの時の、感謝を言いたかったのに……。

やちよを前にしたら、憎悪の感情が沸いてしまった。

その後、いろはに泣きつく鶴乃。

全てを諦めようと決心した時、いろはは、

「これで終わりなんて、絶対に認めない……！」

「約束したでしょっ!? 一緒に幸せを探そうって!!」

鶴乃の腕を引っ張り、

「鶴乃ちゃんが諦めても、私は諦めない! だって私は、鶴乃ちゃんの『親友』だから!

おんじさんみたくにはなれないけど、おんじさんの次くらいには鶴乃ちゃんのことを

分かってあげたいからっ!」

「だから私は、貴女とやちよさんを意地でも向き合わせる! そうしたいのに、それがで

きない貴女を見てるのが嫌だから……そんなの、私の気分が悪くなるだけだから……っ

! もう、鶴乃ちゃんを引っ張り上げるのいい加減疲れたからっ!!」

強い意志を込めて、鶴乃をやちよの下へ連れていくのだった。

「やちよさんっ！ 貴女は……誰の味方なんですかつ!?」

「私は、神戸市に住む全ての人達の味方よ。今も、これから先も、ずっと」

「だから、全部一人で抱え込むんですか……!」

「そうする以外に、戦う術を知らないからね」

やちよと再会する二人。

いろはが説得するも、やちよは向き合おうとしない。

しかし、

「わたしたち、ちっちゃい頃……いつしよに遊んだよねっ?」

鶴乃のその一言に、やちよは反応する。

「あんたがわたしたちにしたことは、確かに酷いことだった。わたしは絶対に忘れない

! でも……っ」

「もう……終わりにしよう」

「あんなこと言っちゃって、信じてもらえないかもしれないけどさ……もうお互いに攻

めるのはやめよう! わたしはもう、自分の弱さに嘆いて誰かに八つ当たりしたくない

! 誰も、傷つけたくないし、失いたくない……。あんたのこと……!」

「やちよ、お願いっ! もう一度だけでいいから、あんたと向き合わせて!」

鶴乃は本当の気持ちを、やちよにすべて打ち明けるのだった。

やちよは、鶴乃達と向き合い、

二人を中央区のある定食屋「よねだ」へと案内する。

訳が分からないまま、やちよに言われる通り、注文をする鶴乃。

鯖の味噌煮定食を頂くと、驚いた！

それは、再開発計画によって、

参京区を去った筈の川野ケイ子の店の味と、同じだった。

しかし、厨房で働いているのは川野ケイ子本人ではなく、

彼女の『分身ロボット』（皇グループ製作）であった。

本物の川野は自宅にいて、ロボットを遠隔操作しているのだ。

「二木市の大庭さんの店の厨房で見た時、これだ！ って思ったわ。これなら、自宅から動いて頂く必要も無く、安全に若い人達に技術指導して頂くことができる……！」

やちよが皇 稜斗に提案した作戦の全容とは、これだった。

中央区で店を開いたばかりの若い経営者達と、参京商店街の老舗の経営者達を直接繋げるネットワークシステムを構築すること。

皇グループなら、それが可能だと思った。

「川野さんと中山さんは協力を示してくれたの。それが神浜の将来につながるのなら……あの人達が呼びかけてくれたお陰で、腕利きの職人やプロが賛同してくれた。シ

ニア層が築いてきた信念や地価を、若い人たちが受け継いでくれると信じてる」

古きものを壊して、全く新しいものに作り変える——そんな行政を、私は認めない。

やちよは初めて鶴乃と向き合い、自分の気持ちを全て伝えた。

鶴乃もまた、当時と変わってないやちよに、心から安心するのだった。

そして、夕暮れ。

幼い二人が初めて出会った公園。

鶴乃とやちよ。

かつて、お互いに争い合った二人は、

“あの時”と同じように、思いつきり遊びあったのだった。

3. 5章 環いろは 幕間 FILE #53〜55  
ざっくり解説!

FILE #52. 5

深月フェリシア編。

夜、帰路に経ついろはをビルの屋上から監視するフェリシア。

彼女の下には、同業者の傭兵・伊月ジュンと、

雇い主である、赤い外套の魔法少女・紅羽根（双樹ルカ）がいる。

「オレは神が嫌いなんだ。だから神に好かれてる奴もとことん嫌うのさ。あいつの魔法少女のカツコー見たかよ。まるで修道女シスターだぜ？　ますます気にくわねえ……だから

さー」

「洗けがしてやるのも面白そうだと思わねえか？　ジュン」

フェリシアの目が寧猛に瞬く。

まるで小兎に狙いを定めた狼のように……。

彼女のターゲットは、いろはなのか？

それとも——？

### FILE #53

後日・ランチタイム。

神浜中央図書館、1Fのカフェにて、

いろはは、朝香美代と再会していた。

元はと言えば、美代に、由比鶴乃を押し付けられたせいである。

だが、いろはは、鶴乃を「救った」。

約束通り、今度はいろはが「頼み事」を、美代に聞いてもらう番であった。

『大賢者とは何者なのか、教えて欲しい』

尋ねられた美代は、

『大賢者』について、知っている限りの情報をいろはに伝える。

・魔法の総てを極め、司る者。

・総ての魔法少女の頂点に立つ、高位次元の存在。

・神浜市の特異点であり、全てを護る現人神。

神浜の全てと繋がり、

全ての生命を司り、魂の行く末を見届けるのが役目。

そして役目を終えた魂を浄化し、極楽浄土へと導いている、という。

他にも、

『<sup>マギア</sup>魔義空』・『<sup>ドッペル</sup>怒病縷』という

2つの『秘術』を教えてくれるそうさ。

しかし、大賢者と会うには、

過酷な試練をクリアしなければならぬそうさ……

・試練に関する一切口外禁止。

・試練の内容を誰かに教えた場合、

『罰』として、試練に関する記憶が全て消されてしまう。

以上のような、厳しい掟もあり、

美代にも、試練の詳細は分からないという。

だが、神浜市長・夕霧青佐なら、

もつと、詳しいことを知っているらしい。

『大賢者については、知らない』

以前、青佐にそう言われたことを思い出す。

騙された事に気付き、激おこぷんぷん丸となるいろはだった。

美代と別れた後、

市長執務室に殴り込む、激おこぷんぷん丸ないろは。

信頼していた青佐に嘘を付かれた事が、メチャクチャ許せなかった。

しかし……

「じゃあ、結果を見てみましょう。私が『大賢者を知らない』と言って、貴女はどうなったかしら?」

「貴女の足は動いた。朝香さんと話す機会が増えて、より親交を深めることができました。違う?」

逆にそう言い返されて、いろはは返す言葉を失う。

騙したのは、青佐なりの思いやりがあった。

「昔、ある人が言っていたわ。『人は最初から人じゃない。自分の足で歩いて人になっていくものだ』、とね」

「答えを知る私が教えるのは簡単よ。でもそれじゃあ、貴女には何も響かないでしょう



？ 実感を得なければ、それは人生の経験値には成り得ない。答えというものは、自分で求め彷徨い足掻き手に入れるものよ」

「私は、貴女にこの街の様々な人たちと親交を深めて欲しいと要求した。貴女もそれに応えると誓った。どう？ 私に嘘を付いたこととお互いに得をしたじゃない？ 結果オーライってやつよ」

うまく言いくるめられた気がする……

嘘を付かれた事はムカつくが、

本心では、自分の事を想ってくれていた事が分かり、納得するいろはであった。

そして、いろはは、青佐に大賢者の居場所を尋ねる。

青佐も場所は知らなかった。

しかし、〃良く知っている者達〃のところへ案内するという。

いろはは青佐と額を合わせ、導かれる。

そこは一面リングの花畑が咲く、天国のような『楽園』であった。

いろはは、

九尾の大妖怪・ヨヅルと出会い、彼女が〈教授〉と呼ぶ者の下へと、

案内される。

辿り着いた先にあるのは、巨大な桜の樹――

その下で――

親友の1人、柊ねむとの、再会を果たすのであった。

FILE #54

『人間は、動物と超人のあいだに張り渡された一本の綱である――

深淵の上にかかる綱である』

――フリードリヒ・ニーチエ『ツアラトウストラ』より

青佐のイマジナリーフレンド〈教授〉の正体は、柊ねむであった。

「はじめまして、というべきかな……? 環 いろは」

「僕は古くから君を知っている。だけど、僕は今、初めて君と会ったんだ」

再会にも関わらず、不可解な事を、ねむは口にする。

そして、神浜総合病院・小児科病棟の病室で、

いろは、うい、灯花と4人で楽しく過ごした日々も、覚えていないという。

落胆するいろは。

しかし、

「でも、それは決して忘れた訳じゃないんだ」

「えっ?」

「ふむ……。どうやら君の知る僕と、君の目の前に居る僕は別人のようだ」

そして、ねむはいろはに教える。

自らの正体を。

『……君の言う通り、我々は自らの “良心” でそれを改善しなくてはならない。節制と貞潔を……我らに与え給うた神への敬意によって、それ自体を愛さなければならぬ』

『……わたしの頭の中は、いつの間に、こうなつたんだろうか……?』

『たまき』

それは、夢の中で一度だけ会つた事のある、

白衣を着て、 “眼鏡を掛けている方” の、初老の女性であった。

「たまき。僕は君が覚えている “柊ねむ” じゃない。だけど君の記憶の中に確かに存在

する「終ねむ」なんだ」

驚愕のあまり、いろはは、一時、言葉を失った。

しかし……

「……でも、分かったこともあるよ」

「へえ、それは興味深い。是非聞かせて欲しい」

「ねむちゃんはねむちゃんだってこと。」

芯の部分だけは、違わない。貴女がどんな人間になったとしても、  
「創造するねむちゃん」なのは変わってない」

この『花畑の樂園』は、ねむが創造した世界だ。

いろはは、周りを見渡し、「今のねむ」のを受け入れるのだった。

※ここでざっくり解説！ 終ねむ教授って何をしてるの？

神戸市の、『魔法少女生命維持システム』を管理・調整しているよ！

ちなみに、ねむ教授は、システムの開発者！

『九尾の大妖怪・ヨヅル』と、『カーバンクル・月出里』は、

ポケモン助手だよ！

「人間は死んだ時、葬儀を行い成仏されると謂うがそれは誤りだ。

大半はこの世に未練が残り、地の深くに留まってしまふ。

所謂、*“地縛霊”*だね。

楽浄土へ旅立てなかつた魂は、*“大賢者”*の下へ導かれて*“浄化”*される。

そして、この【楽園】へと誘われる。

僕は彼らを説得し、魔法少女の力になつてもらつてゐるんだ。

七海やちよと朝香美代……

神浜の魔法少女は、あまりソウルジェムの穢れを気にしてなかつただらう？

つまりは、そういうこと。

調整を受けた時、彼らが魔法少女の魂に宿るんだ」

話を聞いて凄いと思つたが、

それよりいろはには、ねむに聞きたい事があつた。

大賢者の居場所だ。

だが、ねむは、青佐と仲良し。つまり——

「僕は居場所を知つてゐるが、君に教えるつもりは無い。言えるのはせいぜいヒントぐらいだ」

『答えを直接教えるのは、相手の為にならない』——それは青佐の受け売りだが、ねむには、いろはに全うしてもらいたい。『役目』があった。

それが『主人公』というもの——

「『主人公』……そんなものに、私が……?」

「なれるさ。……いや、ならざるを得ない。何故なら『彼ら』が君を選んだからだ。ここに眠る無数の魂が、君と言う新たな物語の担い手を求め、神浜に誘った」

「魂が、私を……!?!」

「君は成し遂げる為に神浜に来たのだろう、たまき? そして、彼らは君の欲求に応えてくれる。見えないところでね。君は、『運命』を味方に付けたんだよ」

「自信を持ち、胸を張れ。立って歩け。前へ進め。その力で状況を生み出せ。人を動かす、世界を変えろ。全てを味方に付けて、奪われたものを挽ぎ取ってやれ」

そして、ねむはいろはにヒントを教える。

それは「七海やちよに大賢者の事を聞く」というものであった。

そして、

「ねむちゃんの知っている私って、ねむちゃんと仲が良かったのかな……?」

「——うん。君と僕は『親友』だった」

お互いの“友情”が真実である事を確認し合った後、  
いろははヨヅルに案内され、楽園を去った。

その背中を見えなくなるまで、見届けながら、  
ねむは、独り、つぶやくのだった。

「——のがれよ、わたしの友よ、君の孤独の中へ」

「わたしは君が毒ある蠅どもの群れに刺されているのを見る。のがれよ、強壯の風が吹くところへ」

「のがれよ、君の孤独の中へ。君はちっぽけな者たち、みじめな者たちの、あまりに近くに生きていた。目に見えぬかれらの復讐からのがれよ。君にたいしてかれらは復讐心以外の何ものでもないのだ」

「彼らに向かつて、もはや腕はあげるな。かれらの数は限りがない。蠅たたきになることは君の運命ではない」

FILE #55

「貴女には知らなければならぬ事が沢山あった筈。教授に尋ねなくて、本当によろしかったのですか？」

「だって、ねむちゃんって意地が悪いから。聞いたって教えてくれませんよ、きつと」  
ヨヅルと月出里に誘われて、

いろはは樂園から現世へと戻る。

そして、神戸市役所・市長執務室――

「今のあれは、普通の人じゃできないですよ。もしかして青佐さんって」

いろはを樂園に導いた青佐の『力』。

もしかして、彼女も魔法少女なのでは？

だが、否定も肯定もせず、青佐は笑ってごまかすうのであった。

視点は由比鶴乃へ。

東京都・目黒区。

参京商店街で、陶器店店主 “だった” 中山三郎の息子夫婦の家。

そこに中山三郎本人はいた。

彼は突然参京区での店を閉めて、息子夫婦の下へ行ってしまった。

だが、皇グループのハイテクメカを使って、子供達に芸術指導を施しているそうだ。

だが、久しぶりに再会した彼はすっかり弱っていた。

「申し訳無かったっ！ お鶴ちゃん！」



鶴乃に、土下座して謝る中山。

彼は、二年前、うっかり鶴乃に零した「失言」を、  
ずっと後悔していたのだった。

『お鶴ちゃんが、魔法少女だったらなあ……』

そして、鶴乃が魔法少女になってから、

参京区の皆に、差別的な言葉を言われ続けたのも、  
精神的に落ち込む原因だった。

そして、鶴乃の願いによつて犠牲になつた者達。

鶴乃の母と祖母の死、それさえ、自分のせいだと――

「あれはっ!! ………………運が、悪かつたんだよ。たまたま乗つた船にあんな奴  
らが、テロが、居たから、殺されちゃつただけなんだよ。誰も悪くないんだよ。わたし  
も、おんじも、爺ちゃんも……………っ!!」

自分の願いが発端ではあるが、

その結末に至るまでは、偶然と偶然が重なつたからだ。

自分に言い聞かせるように、鶴乃は中山を説得し、

「私、今、幸せだよ」

「え?」

「魔法少女になってから、友達が出来たの。その子のお陰で、私は本当にやりたいたいことを見つけられた」

だから、もう迷わない。間違わない。鶴乃はもう誰の為に頑張らない。これからは、今の自分の幸せを守る為に精一杯働く。そして、自分に幸せを教えてくださいました人達の為に、努力して、強くなる。

だから――

「安心して、爺ちゃん。私は大丈夫だよ」

そう伝えたことで、

中山は憑き物が落ちたかのように、安心するのだった。

そして、夜。

一方の、ねむ達のいる『楽園』。

就寝する一人と二匹。

へふ、むっ……ふっ……

だが、最近月出里がうなされていることに、

不審に思うねむ。

そこへヨツルもやってきて、様子を確認する。

「珍しく寝言を言っている。分かるかい？」

〈目が見える、と申しております〉

「目……？」

〈血のように真っ赤な目が、私を睨んでいる、怖い、助けて……と、申しております〉  
「……やはり、貴女の仕業なのか……!？」

場所は変わり、

秘密結社『マギウスの翼』・最深部・『深淵』

月出里に悪夢を見せていた者。

それは、プロフェッサー・マギウスであった。

彼女は、側近であり、自身の「助手」の一人である

『490』と呼ばれる少女と連絡を取る。

「そちらの様子はどうか？」

〈順調です。我が担当地区の重工業は全て、プロフェッサーの計画に賛同を示しました〉

「良い傾向ねー」

〈それとプロフェッサー、予てよりご要望されていた「ドロシー」ですが、今しがた試作機の製作が完了いたしました。近日中にご覧頂きたく願います〉

なにやら物騒な会話をする両者。

そして、490との連絡を終えた後、

里見灯花は、独り、つぶやくのだった。

「さて、環いろは。貴女はどう出てくれるのかにやー？」

## 設定資料集

神浜市の地方公共団体組織図並びに公務員wiki

## 《項目》

・【神浜町】 ・【慶治町】 ・【立政町】 ・【明京町】

【神浜町】

◎神浜市役所

☆【市長】夕霧青佐

◎秘書課

・栗根こころ

・加賀美まさら

○治安維持部

□チーム・アマテラス

☆【部長】・七海やちよ

※【補佐】・ピーター・レイモンド

※【事務】・白木 亜美

○調整課

(BAR・『MIRROR』)

☆【課長】・八雲みたま

【慶治町】

【立政町】

【明京町】

一覽へ戻る

◎神浜市役所（読み：かみはましやくしよ）

【初出 FILE #01 そして“いろは”は告げられる】

神浜市中央区に存在する、行政の総本山。

本文の記述によれば、「一般的な地方のそれよりも遥かに巨大な建造物」であり、職員も倍は多く勤務しているらしい。

2階には、治安維持部の本部が有り、事務員の白木亜美が受付で常駐している。魔法少女の保護申請の手続きをすることができ。

地下2層には立体駐車場が設けられており、更にその下には調整課長・八雲みたまの経営するBAR「ミロワール」があり、「調整」の施術が受けられる。

最上階の最奥部には、市長・夕霧青佐の居る執務室が有り、魔法少女の栗根こころと加賀美まささらも秘書として常駐している。

神浜市役所組織図へ戻る



## ☆神浜市長

・夕霧青佐（読み：ゆうぎり あおさ）

【初出：FILE #35 賢人達の座す園へ】

神浜町中央区在住。神浜市役所勤務。神浜市の市長を務める一般人女性。50歳。

大学三年生の娘・碧がいる。

いろはの父・輝一とは旧知の間であり、彼から娘のことを託された事からかなり親しい仲と思われる。

朗らかで親しみやすい人格者であり、いろはの青年後見人を快く引き受けている。一方で、両親を攫ったサンシャイングループを警察に訴えようと考えているのは、厳しい現実を突き付け、裸一貫で戦うのでなく、市内で地道に協力者を集めてサンシャイングループと対等の力を得るよう示唆するなど、指導者としても優れた素質を持っている。また、プライベートでは比較的多く冗談を言っつて場を和ませたり、あえて道化役を演じるなど茶目っ気もある。

二年前に【参京駅北口地区市街地再開発事業】の総責任者に就任したが、開発事業そのものは現在、無期限凍結中である。

【教授】と呼ばれる謎の人物と交信ができるようだが、何者かは不明。

神浜市役所組織図へ戻る

□秘書課

【初出：FILE #35 賢人達の座す園へ】

神浜市役所及び各町役場に存在する課。

治安維持部と同じく、魔法少女のみで構成されている。

一般的な秘書と同じく、市長及び町長の仕事の補佐・スケジュール管理などを業務と

して行っているが、ボディガードとしての意味合いの方が強く、二人一組で身辺警護に当たっている。

元々「魔法少女の秘書」は、組織のトップや重鎮が魔女や悪意を持つ魔法少女から、自分の身或いは組織の機密情報を守る為に生み出された職業であり、日本政府の役職者、地方公共団体の長、会社の経営者は個別に雇うことを義務付けられている。

なお、魔法少女が秘書の資格を得るには、品行方正且つ清廉潔白な精神が求められている。

- ・魔法少女の経験が2年以上。
  - ・契約してから現在まで、人命救助及び、魔女の退治のみに専念。
  - ・地域及び社会貢献への強い関心及び、高い奉仕精神。
  - ・神戸市でソウルジェムの『調整』済み。
- 上記4つの条件をクリアし、且つ数々のテストや課題を乗り越えた者に資格証が配布される。

## 秘書A

- ・栗根 心（読み：あわね こころ）

【初出：FILE #35 賢人達の座す園へ】

神浜町中央区在住。神浜市役所勤務。秘書課に所属し、相方の加賀美まさらと共に市長の夕霧青佐を警護する「秘書」を務める魔法少女。

少々特徴的な髪形で、いろはが羨む程のスタイル抜群の容姿の持ち主。

いろはの父・輝一とは旧知の仲であり、本人曰く「色々助けて貰った」らしく、サンシャイングループに輝一と妻の耀が攫われた際は、助けられなかった事を心から悔やみ、いろはに涙ながら謝罪している。

なお、いろはが2歳の頃に出会っているが、当のいろは自身は忘れている。

明るく素直な性格で、人付き合いも悪くなく、同じく市役所に勤務する魔法少女ながらも別部署であるやちよ、みたまとも積極的に交流を交わしている。

## 秘書B

・加賀美 真良（読み：かがみ まさら）

【初出：FILE #35 賢人達の座す園へ】

神浜町中央区在住。神浜市役所勤務。秘書課に所属し、相方の粟根こころと共に、市長・夕霧青佐を警護する「秘書」を務める魔法少女。

こころとは対照的で、感情の起伏に乏しく冷淡な性格。しかし、固有魔法で姿を消している筈の自身の気配を察知したいろはに対しては（若干ではあるものの）驚きの感情

を頭わにしている。また、彼女が結城公園内で同じ道をグルグル周って迷う場面では、頭を抱えていた。

魔法少女としての実力と、秘書としての業務遂行能力は確かなものを携えており、青佐からの信頼は厚い。

みかづき荘の住民の一人。

最初は、その無愛想な態度から、いろはに苦手意識を持たれてしまいが、後に互いに共通点を見出し、打ち解ける。

神浜市役所組織図へ戻る

○治安維持部（読み：ちあんいじぶ）

【初出：FILE #02 その街の仕組み】

神浜市役所及び各町役場に設置されている部署。

7年前に設立された魔法少女による、魔法少女への法的執行機関。

要は魔法少女で構成された警察部隊であり、市内に出現した魔法の討伐や、一般の警察組織では究明できない犯罪事件の捜査、一般の救急隊では救出不可能な人命の救助、魔法少女による犯罪の取り締まりを行っている。

総責任者は神浜市長であり、部長に七海やちよ、副部長に都ひなのが在任している。魔法少女のみならず一般人の公務員も事務員・補佐員として多数勤務している。

神浜町、慶治町、立政町、明京町の役場にはそれぞれ魔法少女チームが置かれており、町の警護の方針は、チームリーダーを務める魔法少女の裁量に委ねられている。

災害級の魔法の出現など、治安維持部の魔法少女が何らかの都合で不在になってしまった場合は、町の治安をフリーの魔法少女に預けても構わないとされている。その代わりに、頼んだ魔法少女に対しては、労働に応じた金銭を支払わなければならない。

現在、神浜町の治安維持部は七海やちよしかいないため、市外へのPR活動の際は、

もつぱら町内の魔法少女達に頼んでいる。

また、明京町の常盤ななは、町内に住む魔法少女達に日頃から金銭を手渡し治安維持活動に協力するように仕向けている。

□チーム・アマテラス

☆治安維持部長／チーム・アマテラスリーダー

・七海八千代（読み：ななみ やちよ）

【初出：FILE #02 その街の仕組み】

誰かが歓喜する笑顔は彼の胸を満たし、

誰かの慟哭する声は彼の心を震わせた。

無念の怨嗟には怒りを共にし、

寂寥せきりょうの涙には手を差し伸べずにはいらなかった。

人の世の理を超えた理想を追い求めておきながら

——彼は、あまりにも人間過ぎた。

Zero』1巻・序文

——虚淵 玄『Fate／

神浜町中央区在住。みかづき荘の住民の一人。

神浜市役所勤務。19歳という若さながら、治安維持部の部長を務める魔法少女。かつてはヘチーム・アマテラスという名の魔法少女部隊を率いていたが、現在はたった一人で神浜町の治安を守っている。

市民からは「英雄」「女神」「守護神」と評される程の絶大な人気を誇り、魔法少女の実力も市内では最強と謳われる等、あらゆる意味で神浜市の象徴と呼ぶべき人物。

しかし、一方では最近になって、治安維持に対して消極的だと、市民からは極小規模ではあるが、不満の声も挙がっている。

家族はいない。

両親は共に立派な消防隊員だったが、幼い頃に任務中の事故で亡くなった為、祖母に育てられた。現在は祖母が経営していた民宿・みかづき荘に住んでいる。

過去のある一件から「誰一人も死なせたくない」という強迫観念に囚われており、いろはが異変に関わっていると看破した際は、彼女の身を守る為に、敢えて暴力手段を強行して神浜市から追い出そうとする程。

また、市内で蔓延る「黒い虫」達の暗躍や、大東区の麻薬問題にも強い嫌悪を抱いており、いずれは自分の命を掛けて全て排除しようと考えている。

このように、治安維持や他者の命を守ることに尋常ならぬ情熱を注いでいる。治安を



妨げるものは、例え守るべき市民であろうとも、狩人の如き鋭い眼光を向けて怯え竦ませる程である。

魔法少女としてのプライドが高く、いろはや美代と敵対した場面では、彼女達の実力が自分より下回っていると理解していながらも、一切の情け容赦を見せることなく追い詰める。

いろはの実力を認めた後は、自身を名前で呼ぶように促し、家族の失踪で悩む彼女に心から同情して、協力関係を築こうする等、本来の心優しく大らかな人格を垣間見せるようになっていく。

二年前に、行政とサンシャイングループが推し進めた「参京駅北口地区市街地再開発事業」にみふゆの母・梓つむぎの勧めで参画しており、参京商店街に住む反対派の経営者達を事業に同意させた事で、由比鶴乃から強い憎悪を向けられている。

また、やちよ自身もそうした経緯から鶴乃に対しては苦手意識を抱き、極力避けようとしている。

梓みふゆとは幼馴染であり、かつては自身とみふゆ、雪野かなえ、安名メルの人でチームを結成して治安維持に勤しんでいた。

しかし、二年前に市外へPR活動している際に、神浜市内で魔女の襲撃があり、かなえとメルが魔女と相打ちとなって死亡。更にみふゆの両親が魔女に殺されたことで、

みふゆとの関係が一気に悪化。みふゆから一方的に退職願を叩きつけられ、チームは解散。みふゆとは絶縁状態となる。

副部長の都ひなのとは、「自分に無いモノを持っている」と評価し、凸凹ながらも良好な関係を築いている。

#### 補佐員

・ピーター・レイモンド（読み：ぴーたー・れいもんど）

【初出：FILE #01 そして、いろはは告げられる】

神浜町中央区在住。みかづき荘の管理人。

一般人男性。37歳。神浜市役所勤務。

治安維持部に所属している外国人。

金髪の色刈り、肌は色黒で筋骨隆々の屈強な体躯。いろは曰く、「洋画に登場するマフィアの殺し屋に近い風貌」。

しかし、性格の方は至って温厚であり、所謂「オネエ系」。両耳にハート型のピアスを付け、常に女性口調で話し、佇まいや仕草も女性そのものである。

いろはが神浜市で出会った二人目の人物であり、静養室で気絶から回復した彼女と対面するも、強面のせいで怯えさせた上に悲鳴を挙げさせてしまう。

人格者であるが、いろはが神浜の異変に関わっていると看破した際は、彼女を利用して解決しようと試みたり、いろはとやちよが対決している場面では、ドローンの目的地を対決中にも関わらず突然変えてしまったりと、少々意地が悪い一面が見られる。(みたま曰く、「いやな大人」)

そのせいでみたまからは時折白い目を向けられがちだが、彼女とは秘密を共有し合っている上に、お互いに気の置けない会話を弾ませていることから、基本的に良好な関係である。

料理の腕前はプロ級であり、いろはに手料理を振舞っている。本人曰く、「花嫁修業」をしている内に身に着けたものらしい。

(なお、「花嫁」と聞いていろはは、より彼を警戒してしまっている)

臂力が凄まじく、魔法少女であるやちよの槍の一撃を両手で受け止めてしまえる程。

来訪者のいろはが、神浜市に「何か」齎してくれることを密かに期待しているが、その真意は不明。

事務員

・白木亜美 (読み：しらき あみ)

【初出：FILE #04 覚悟は、あるか?】

神浜町中央区在住。一般人女性。24歳。神浜市役所勤務。

治安維持部に所属しており、事務を担当している。

眼鏡を掛けた知的そうな容姿で、生真面目でクールそうな雰囲気から堅物と思われるが、  
ちだが、性格そのものは心優しく、まだ感情表現も豊かである。

本文中での記述から、部長であるやちよに対して尊敬以上の念を抱いていると思われる。

神浜市役所組織図へ戻る

## □調整課

【初出：FILE #02 その街の仕組み】

神浜市役所及び各町役場に存在する課。

それぞれの担当に、【調整員】と呼ばれる魔法少女が着任している。

（現在判明している調整員は、八雲みたま、八島さから、八坂おけら）課長は神浜市役所に勤務している八雲みたま。

市役所属ではあるが、立場は中立であり、行政や治安維持部の方針に従う義務はなく、あくまで、「全ての魔法少女を平等に支援する」ことを理念としている。

【調整員】は魔法少女のソウルジェムに【調整】という施術が行える。これは魔法少女であるならば、過去の経歴や人格は問われず、誰でも希望すれば受けることができる。また、神浜市内では、調整を受けないまま魔法を使用すると罰則が与えられる為、住民の魔法少女にとっては義務とされる。

調整員はソウルジェムを通して、施術対象の魔法少女の過去を見ることが出来る。

なお、【調整】とは、“魔法少女の魔力に判断力をもたせる”ことであり、

殺傷能力を持つ武器や魔法を振るった場合、魔女や魔法少女相手には通常通りの威力と効果を発揮するが、一般人及び一般人の建てた建造物には指でつついた程度に軽減さ

れる。

作中本文によれば、これによって、人々は魔法少女を「安全な存在」だと認知できる上に魔法少女側も気兼ねなく人々の暮らしに馴染めるといふ。

・BAR・『MIRROR』（読み：みろわーる）

【初出：FILE #02 その街の仕組み】

神浜市役所の地下3階層に有るバー。

ミロワールはフランス語で【鏡】を意味する。

店長は調整課長の八雲みたまであり、軽い飲食が取れる上に、ソウルジェムの【調整】が受けられる「施術室」も設置されている。

内装は劇場のホールの様に広大な空間をマリンプルーで淡く照らし、アーティスティックなオブジェが、生命を持っているかの様に宙空を漂う幻想的な洋装で彩られている。本文中の記述によれば「深海の底にいるかの様な幻想的世界」とのこと。

バーであるだけにお酒が商品として扱われているが、ピーターによれば、未成年である筈の魔法少女達も頻繁に来店するらしい。

春径は常連客であるらしく、度々訪れてはみたまにちよつかいを掛けている。

魔法少女は夜間活動が基本な為、深夜帯まで開いている。

たまに傭兵が魔法少女の個人情報を入力する為に、殴り込んでくることも屢々あるが、みたまによって文字通り「返り討ち」されている。

### ☆調整課長／調整員

・八雲美玉（読み：やくも みたま）

【初出：FILE #02 その街の仕組み】

神浜町中央区在住。みかづき荘の大家。

神浜市役所勤務。調整課で調整員を務めている魔法少女。

普段は市役所地下に存在するBAR「ミロワール」で店長を務めている。

年齢は本人曰く17歳とのことだが、本文中での描写やピーターとの会話からして本当は20歳以上の可能性が高い。

七海やちよと比肩する程の美貌とナイスボディを持つ絶世の美女であり、いろはからも「神秘的で可愛らしい」と評価を受ける程。一方で卓越した武術家でもあり、店に殴り込んできた魔法少女達を尽く叩き伏せている。

普段の性格はマイペース且つのんびり屋であり、「くくねえ」「くくわよお」と間延びした喋り方が特徴。しかし、魔女出現等の緊急時やシリアスな場面では普通の喋り方になる。また、時折鋭い目線で相手にキツイ皮肉を浴びせたりするなど、今一つ本性が伺

えない。

ピーター・レイモンドとはお互いに秘密を共有し合う程の仲であり、やちよからは名前と呼ばれたり、こころと共に、自身の経営するBARに招いて談笑するなど、他の公務員達と積極的に交流しており、また彼女達から信頼されている様子が伺える。

味覚に障害があるらしく、自作のスムージーしか満足に食事が取れない。

いろはに対しては、ソウルジェムに調整を施した際に「深淵」を見出してしまったことで危険視しているものの、彼女の境遇には心から同情を示している。また、度を越えた頑固な性格には不安を抱いており、神浜市で楽しく過ごしてもらいたいと願っている。

神浜市役所組織図へ戻る



●【慶治町】

▲慶治町町役場

☆【町長】

○秘書課

○治安維持部

□チーム・カグツチ

☆【リーダー】・十咎ももこ

※【補佐】

○調整課

☆【調整員】・

【神浜町】

【立政町】

【明京町】

一覧へ戻る

□ チーム・カグツチ

☆ チームリーダー

・ 十咎桃子 (読み: とがめ ももこ)

【初出: FILE #25 戦うべき相手は、此処には居らず】

慶治町在住。慶治町役場勤務。治安維持部隊へチーム・カグツチへのチームリーダーを務める魔法少女。

慶治町役場組織図へ戻る

●【立政町】

▲立政町役場

☆【町長】

○秘書課

○治安維持部

□チーム・イザナミ

☆【副部長】・都 ひなの

・木崎衣美里

・綾野梨花

・五十鈴れん

○調整課

☆【調整員】・八島さから

【神浜町】

【慶治町】

【明京町】

一覧へ戻る

□ チーム・イザナミ

☆ 治安維持部副部長／チームリーダー

・ 都 雛乃（読み：みやこ ひなの）

【初出：FILE #11 氷の女神と烈火の女帝】

立政町在住。立政町役場勤務。治安維持部隊へチーム・イザナミのチームリーダーを務める魔法少女。また治安維持部では副部長の肩書を持つ。

小学生の様に小柄な体躯だが、年齢は18歳であり、魔法少女の経験年数も5年の大ベテラン。

頭脳明晰であり、調査した化学薬品を攻撃方法に用いている。また、コミュニケーション能力も優れている。

性格は明朗快活な姉御肌であり、常に粹の良い男性口調で話す。一方で面倒見が良すぎる余りかなりの心配性になっている節があり、周囲の人間の事が常に気が気でならない様子。

部長の七海やちよとは何もかもが対極だが、一緒に談笑したり、食事に誘ったりとお互いに信頼しあっている。(やちよからは精神面で頼られており、ひなのは自分の身を軽んじて危険な領域を進まんとするやちよの身を案じている)

かつては、その小さな容姿と平凡な相貌のせいで、周囲の魔法少女や役場の公務員達からは小馬鹿にされ相手にすらされなかったが、本人の不屈の闘志で苦境を乗り越え、治安維持や一般市民に対しては真摯且つ献身的な姿勢を示し続けることで、信頼を勝ち取っていく。現在では、やちよに比肩する程の人気と評判を得ている。

自分と同じようにコンプレックスで悩む人達には遅く生きて欲しいと願っており、役場内に相談所を用いる等独自のアプローチを展開している。

・五十鈴 憐 (読み：いすず れん)

【初出：FILE #25 戦うべき相手は、此処には居らず】

立政町在住。立政町役場勤務。チームイザナミの一員で魔法少女。  
チームの中では一番の新人。

立政町役場組織図へ戻る

○調整課

調整員

・八島早空（読み：やじま さから）

【初出：FILE #11 氷の女神と烈火の女帝】

立政町在住。立政町役場で【調整員】を務める魔法少女。  
課長のみたまとは親しい間柄であると思われる。

立政町役場組織図へ戻る

● 【明京町】

▲ 明京町役場



☆【町長】・小林正志

○秘書課

○治安維持部

□チーム・アメノハバキリ

☆【リーダー】・常盤ななか

・純 美雨

・夏目かこ

○調整課

☆【調整員】・八坂おけら

【神浜町】

【慶治町】

【立政町】

一覽へ戻る

☆町長

小林正志（読み：こばやし まさし）

立政町在住。立政町役場勤務。立政町の町長だが、日和見主義な性格のせいで、魔女の被害や移民による犯罪の拡大に対応できず、治安を悪化させる要因を担った。

蒼海幫を背後に付けるななかには頭が上がりないらしい。

明京町役場組織図へ戻る

□ チーム・アメノハバキリ

☆ チームリーダー

・常磐七香（読み：ときわ ななか）

【FILE #11 氷の女神と烈火の女帝】

明京町在住。明京町役場勤務。治安維持部隊（アメノハバキリ）のチームリーダーを務める魔法少女。16歳。

由緒ある家柄の出らしく、物腰は柔らかで、他者と会話する際は笑顔を絶やさず常に敬語を用いている。しかし、花の様に可憐な佇まいとは裏腹に、炎の様に激しい信念を内心に秘めており、実際に過剰・過激とも言える防衛手段を用いて、町の人々や治安を

警護している。

魔法少女・純チユン 美雨メイユをチームの一員に加えたことで、必然的に中国系マフィア組織「蒼

海幫」と繋がりを持ち、その重鎮達と結託したことで、町内での権勢を強めていく。

現在では、町長の小林や、町警察署長ですら頭が上がない程の絶大的な権限を振るう。

上記の事柄から部長のやちよは、彼女が掲げる治安維持活動が一般人と魔法少女との間に亀裂を生じかねず、また、警察組織と治安維持部の関係に溝が生じる可能性があるとして指摘するが、鼻で笑って返されてしまう。

(明京町は神浜市内でも特に治安が悪く、特に大東区は海外の移民達による犯罪の横行や麻薬の氾濫、ヤクザ組織に与する『傭兵』と呼ばれる腕利きの魔法少女達が集結している為、過剰な手腕を用いなければ一般市民を守り切れないのは事実である)

誰に対しても、自分のスタイルを崩さずはつきりと主張を通そうとする剛毅な人格であるが、深月フェリシアに対しては唯一生理的嫌悪と言える程の拒絶反応を顕わにしており、「二度と町内に足を踏み込ませるつもりは無い」と発言している。

『力』に対しては貪欲な姿勢を見せており、調整員のおけらと共に神浜市内を周って、魔法少女の協力者を募っている。

神浜町では自分と同じく、行政に疑念を抱き、『力』に固執する由比鶴乃に声を掛ける

ものの、「信用できない」と拒絶されてしまう。

・純 美雨（読み：ちゆん めいゆい）

【FILE #11 氷の女神と烈火の女帝】

明京町在住。明京町役場勤務。治安維持部所属。チーム・アメノハバキリの一員で魔法少女。

中国拳法の達人。冷静且つ頭脳明晰であり、チームの参謀役を務める。  
中国系マフィア組織【蒼海幫】の構成員という裏の顔がある。

・夏目佳子（読み：なつめ かこ）

【初出：FILE #15 一番強く信じられるものは？】

明京町在住。明京町役場勤務。治安維持部所属。チーム・アメノハバキリの一員で魔法少女。

古書店・夏目書房の看板娘。

明京町役場組織図へ戻る

□調整課

☆調整員

・八坂起良（読み：やさか おけら）

【初出：FILE #11 氷の女神と烈火の女帝】

明京町在住。明京町役場で【調整員】を務める魔法少女。

髪形は長いツインテール。ひなのと同じくらい小柄で、外見は小学生のようにしか見えないが、年齢は（本人曰く）20代後半らしい。

豪快な性格であり「ガツハツハ」と大声で笑うのが特徴。見た目に似合わず親父臭い

言動を用いる。

料理の腕前に優れており、町役場の一階で居酒屋『鏡屋』を経営している。

明京町役場組織図へ戻る

# 神浜市の住民wiki《魔法少女 編》

## 《項目》

○神浜町

□中央区

・環 いろは

・朝香美代

・二葉さな

・鏑 美奈子

・深月フェリシア

□参京区

・由比鶴乃

○明京町

□大東区

●蒼海幫——五強聖



・王 海龍 (ワン||ハイロン)

・鄭 咲蘭 (チャン||シヤオラン)

●蒼海幫——墮龍 (デュオロン)

□  
???

・環 彩羽 (読み:たまき いろは)

【初出 FILE #01 そして “いろは” は告げられる】

「深淵を深く覗き込み過ぎれば、奈落の底に引きずり込まれてしまうであろう」

——フリードリヒ・ニーチエ『善悪の彼岸』

主人公。15歳。

繰り返し見る不思議な「夢」の真相を確かめるため、その手がかりとなると思しき「小さいキュウベえ」を探して神浜市にやってきた魔法少女。

元々は宝崎市で家族三人（自分、父・輝一、母・耀）で平穩に暮らしていたが、神浜市に訪れた事で、人生の歯車を狂わされていく。

魔法少女としての願いは「妹の病気を治す」事だったが、何故か物語当初は忘れてしまっていた。

七海やちよの妨害こそあったものの、小さなキュウベえに触れたことで、上記の願い事と、最愛の妹「うい」の記憶を取り戻す。

しかし、直後に、両親がサンシャイングループに攫われてしまう。

父の友人にして神浜市長・夕霧青佐の勧めで、神浜市・中央区の【みかづき荘】へ移住し、家族と日常を取戻す為にサンシャイングループと戦うことを決意する。

引つ込み思案の心配性だが、一度「こう」と決めたら決して譲らない頑固な一面もあり、神浜市最強の魔法少女である七海やちよに対しても、実力差を思い知ったにも関わらず、一切怯むことなく主張を貫き通した。青佐曰く「父親譲り」。

記憶を取り戻した後も、度々「自分は知らないのに、自分の事を知っている人間」達が出現する悪夢に悩まされ、自分が過去に何をしたのか、何者であったのか、取り戻した「うい」との記憶が本当の物であったのか疑念を抱くようになる。

・朝香美代（読み：あさか みよ）

【初出 FILE #01】そして「いろは」は告げられる」

神浜町中央区在住。23歳。独身。常に口元を隠している。

看護師の資格を持っている魔法少女で、『魔法少女専門の訪問医療』を自営しており、魔女退治等で傷ついた魔法少女の下へ駆け付けて固有魔法で治療、あるいはグリーンフシードを手渡している。神浜市中を忙しく駆け回っており、「市内で知らない魔法少女はいない」と豪語する程。

一人称は「わっち」。訛りが強い古風めいた口調で語尾に「ですな」を付けて喋る。

個性的な喋り方のせいで、「変人」と思われ易いが、実際は彼女の生まれ故郷の方言が原因であり、性格そのものは物静かで真面目。

魔法少女としては大ベテランに位置するものの、争いごとが苦手な性分であり、魔女とも滅多に戦わない。いろはがやちよから痛めつけられている場面に出くわした際は、真つ先にいろはを救助し、やちよを説得しようとする。また、ゲームで勝負をつけるべきだと提案する等あくまで「力」で優劣を付ける事を良しとしない「姿勢を貫く。ゲームでは、いろはに付き、揉め手や彼女との連携で、やちよを苦戦させる。

以前は、神浜総合病院で看護師として働いていた。

自営する為の物件を探しに参京商店街に訪れた際に、万々歳に立ち寄り、由比鶴乃と出会う。

以降、万々歳の常連になり、鶴乃とも友好的な関係を築くが、活気が有り余り過ぎる鶴乃の行動力に振り回されてしまうことが多い。

固有武器「護符」は、何らかの漢字一文字を記入すると、効果を発揮する。

・『煙』……何かしらに叩きつけると煙幕が発生する。相手から逃げるのによく使っている。

・『声』……二枚必要。一枚目に自分の声を聞かせると、離れたところにある二枚目から声が響く。トランシーバー代わり。

・『発』……張り付けた対象から、強い魔力を発信させる。対象が隠れても魔力を感知することが可能。

・二葉さな（読み：ふたば さな）

【初出：FILE #14 斯くて、進み行く者達】

神浜町中央区在住。14歳。フリーの魔法少女。

小説家・阿峽 慎の下で暮らしつつ、彼の助手（アシスタント）をしている。

人形のようにふわふわしたライトグリーンの髪の毛をツインテールに縛り、子犬の様なクリクリとした丸い瞳で、初見時のいろはがしばらく我を忘れて見とれてしまう程の愛らしい相貌の持ち主。

心優しいが、自分に自信が無く、大人し過ぎる性格。

一方で気の置けない相手には失礼になりそうな事を躊躇わずに言ってしまったり、耳に息を吹きかけて驚かせたりと随所で積極性や悪戯心を垣間見せている。また、尊敬する慎の執筆を助ける為に、難しい本を読みこんだりと、勉強熱心且つ信頼する者に対しては献身的な姿勢を見せる。

いろはとは神浜中央図書館で出会い、家族を失った彼女の苦しみを慰めている。

元々は慶治町水名区の大富豪・二葉家の令嬢だが、ある事情で自分自身を見失い、家族の下を離れている。

・鏑 美奈子（読み：かぶら みなこ）

【初出 FILE #38 奈落の底で煌めく紅蓮】

神浜町中央区在住。27歳。独身。神浜総合病院勤務。

院長・里見浩一郎の専属秘書、及び院内の警備部長を務めており、魔法少女の経験も10年以上の大ベテラン。

みたまとは旧知であり、お互いに素面で話せる程の親しい間柄だが、調整した際にソウルジェムを覗いたとみたまが暴露した際は、流石に容認できず激怒した。

里見灯花について何らかの関連が有るようだが、現時点では不明。

・深月フェリシア（読み：みつき フェリシア）

【初出：FILE #11 氷の女神と烈火の女帝】

『では、己おれが引剥ひはきしようと思むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ』

より

——— 芥川龍之介「羅生門」

正体不明の魔法少女。13歳。

かつては、明京町役場に勤務しており、チーム・アメノハバキリの一員であったが、物語開始時から半月前に、常盤ななかから解雇を言い渡されている。

その理由は、「あまりにも問題児過ぎた」とのことだが……？

傭兵稼業をしながら気ままに日本各地を旅していたが、現在は神浜市役所で会った七海やちよの勧めでみかづき荘に入居している。

“アステリオス”という二つ名を持つが、詳細は不明。

一覽へもどる

□参京区

・由比鶴乃（読み：ゆい つるの）

【初出：FILE #07 鶴の怨返し】

なさねばならぬと決断して

君が何かをする時

たとえ多くの人々が

それについて違った事を考えようとも

それをするのを見られまいと避けてはならない。

もし君のすることが正しく無いならば

その行為そのものを避けた方がいい

だがもし正しければ

正しくないとは批難する人々をなんで恐れるか

十五節より

—————エピクテトス『要録』三

神浜町参京区在住。18歳。フリーの魔法少女。神浜大附属学校高等部在学。

参京商店街にある中華飯店「万々歳」の看板娘。

底抜けに明るい元氣澆刺な性格で人当たりが良く、商店街の住民からは老若男女問わず慕われている。



常連客である織田一平からは「万々歳が潰れないのは一重に鶴乃のお陰」と評されており、自身の人柄で日々生活していける程度の集客には成功している様子。

人見知りしない為、交友関係は広く、初対面のいろはともすぐに打ち解けたが、反面、治安維持部の魔法少女達を快く思っておらず、特に七海やちよに對しては強い憎悪を抱いており、直接対決した際は、凄まじい怒りと罵詈雑言をぶつけている。

また、複雑な家庭環境に独りで対処しようと考えるなど、責任感が強く内向的な面も強く描写されている。

かつて、万々歳の最盛期を築き上げた齋した祖父・由比鷄太郎に憧れており、いつかは自分の手で万々歳を全国に向けてチェーン展開したいという野心を抱いている。

しかし、祖父への憧憬が強すぎる余り、「周囲の期待に応える自分」を演じる事に次第に囚われていき、悩みや不満を周りに打ち明けることは「弱さ」に直結すると考え、他人に頼ることを止めてしまう。

二年前、地元の商店街に行政とサンシャイングループによる再開発の企画が挙げられた際は、反対派の住民を集めて立ち向かおうと試みるも失敗。家庭内でも店の威厳を守るべく懸命に立ち振る舞うが、母・紀子と祖母・美江の裏切りに遭い、絶望。

魔法少女の「願い」と「力」に縋らざるを得なくなる程に精神を追い詰められる。

キュウベえに「幸運が欲しい」と願い、念願の魔法少女の「力」を得るも、その代償

として、紀子と美江は海外旅行先でテロに遭い死亡。更に再開発計画の主導者であった梓 康弘、つむぎ夫妻も魔女に襲われ死亡し、再開発計画が無期限凍結する等、「他者の不幸によつて自分が幸運を得続ける」有様を目の当たりにし、激しく動揺。

自分の「弱さ」が招いた現実から目を反らす為に、自暴自棄とも言える行動に走ってしまう。

以上の経緯から、物語当初は、自身の存在意義を見失い闇雲に力に固執していたが、『力に頼らずに』神浜市最強の魔法少女である七海やちよに勝利した環 いろはの存在を知る事で、希望を見出していく。

一覽へもどる

○明京町

□大東区

●蒼海幫——五強聖

・王 海龍（読み：わん はいろん）

【初出：FILE #43 それぞれの思惑①】

明京町大東区・チャイナタウン在住。蒼海幫所属の魔法少女。

精鋭部隊〔墮龍〕の師範衆・〔五強聖〕のリーダーであり、蒼海幫の頭領。

年齢は34歳。魔法少女の経験年数は23年。その規格外の経歴と強さから、人々から『闘神』と崇められている歴戦の格闘家。

大事件以後、〔老人会〕の重鎮達を追い払い、五強聖を中心とする新体制を確立した。

・鄭 咲蘭（読み：ちゃん しゃおらん）

【初出：FILE #43 それぞれの思惑①】

明京町大東区・チャイナタウン在住。蒼海幫所属の魔法少女。

精鋭部隊【墮龍】の師範衆・【五強聖】の一人。

年齢は29歳。魔法少女の経験年数は17年。その規格外の経歴と強さから、常磐ななかから『鉄人』と恐れられている歴戦の格闘家。

ななかとのやりとりから、工匠区の警備を担当しているものと思われる。

一覽へもどる

□  
???

一覽へもどる



# 用語集wiki

## 《項目》

### 【あ行】

- ・ 医療法人 慶圓会 神浜総合病院
- ・ M M M (エムスリー)
- ・ 大庭屋 (二木市)

### 【か行】

- ・ 過激派武装集団
- ・ 神浜市
- ・ 五強聖 (蒼海幫)
- ・ 国立神浜中央図書館

### 【さ行】

- ・ 参京駅北口地区市街地再開発事業
- ・ 参京区地域センター
- ・ 参京商店街組
- ・ 参京商店街組合事務所
- ・ サンシャイングループ
- ・ サンライズ参京
- ・ サンライズスクエアモール
- ・ 人倫保護団体
- ・ 皇グループ
- ・ 蒼海幫

## 【た行】

- ・ Taiyan
- ・ 宝崎市
- ・ 小さいキュウベえ
- ・ チャイナタウン
- ・ (株) Divine Light of CITY

・怒病縷（ドツペル）

・墮龍（蒼海幫）

・TOYAMA不動産（株）

【な行】

【は行】

・爆裂魔法（二木市）

・8億円

・万々歳

・二木市

【ま行】

・魔義空（マギア）

・マギア・リユニオン

・魔導管理局

・魔導事務局



・魔法少女保護条例

・みかづき荘

・皆木植木店（宝崎市）

【ら行】

・楽園

・LICHT（リヒト）

【や行】

・八神郡

・藪原北大火災

・矢宵板金工場

・結城公園

・傭兵

【わ】

【あ行】

・医療法人 慶圓会 神浜総合病院 (読み：いりようほうじん けいえんかい かみは  
まそうごうびょういん)

【初出 FILE #37 手掛かりの行方】

神浜町中央区に存在する。市役所前の商店街より少し離れた場所にある巨大な総合  
病院。

院長は里見浩一郎。

建物自体は古いが、神戸市が保護特区に指定された際に、既に福祉事業の経営に乗り出していたサンシャイングループから多額の資金援助を受けて建て直された。最新鋭の機器が揃っている。

サンシャイングループの全面的な支援を受けて、事業を拡大したものの、何れの施設も業績は芳しくない。

いろはの記憶によると、小児科に環うい、里見灯花、柊ねむが入院していた筈だが、訪れた時は既に三人とも不在であった。

入院記録も存在せず、知っている者も居なかった。

いろはは待合スペースで、明槻月禰あかつきつくねと出会い、もう一人の「環うい」の存在を知る。

一覽へもどる

・MMM（読み：エムスリー）

【初出 FILE #50 MM ではなく LICHT の為に】

Malleus Maleficarum Machinaの略称。

マツレウス・マレフィカルムは「魔女への鉄槌」。マキナは「機械」を意味するので、直訳すると「魔女に鉄槌を下す機械」となる。

詳しくは【L I C H T】の項を参照。

一覽へもどる

・大庭屋（読み：おおばや）

【初出 F I L E #48 外の世界で見たもの】

二木市龍ヶ崎町にある飲食店。

大庭屋グループの中心となる焼肉店であり、大庭樹里の実家。

神戸五稜郭亭の天才料理人・沖田 誠直伝のステーキは、焼き加減が絶妙。

七海やちよはここで紅間めぐみと一緒に、ステーキをご馳走になった。

キッチンには、大庭屋グループの調理講師である沖田 誠と直接繋がっているテレビ

電話が壁に設置されており、彼が直接厨房に入る為の“分身ロボット”も置かれている。これらは、皇グループによって提供された。

一覽へもどる

## 【か行】

・過激派武装集団（読み：かげきはぶそうしゅうだん）

【初出 FILE #31 『それ』は降って落ちるもの】

イスラエルを拠点に、世界規模で活動しているテログループの通称。

2年前に、鶴乃の母・紀子と祖母・津和吹美江が世界旅行の折に搭乗していた豪華客船に潜伏し、多数の民間人を人質に取り立て籠もった。

事件が起きた当時、客船がトラキア連邦国の領海上に有った為、国軍の強攻策によって鎮圧されるも、紀子と美江を始めとする多くの民間人がその混乱の最中、命を落とす。

一覽へもどる

・神戸市（読み：かみはまし）

【初出 FILE #02 その街の仕組み】

本作の舞台。

旧名・八神郡。

人口320万人。神浜町・慶治町・立政町・明京町の4つの街で構成される巨大な新興都市。

市長は夕霧青佐。

10年前の【大事件】によって魔法少女が世界に認知されてから、半年も経たずに、魔法少女保護特区として指定された。

現在には多数の魔法少女達が市政の恩恵を受けながら、自分の素性を隠すことなく、また一般市民から差別を受けずに生活している。住んでいる魔法少女の総数は、市の公式HPに公表されているのは236人だが、青佐曰く「諸事情で名前を掲載できない子」もいるため、実際は420人以上である。

古くは『土地だけは無駄に広い』と揶揄されるほど特色の無い街であり、人口も減少傾向だったが、保護特区に指定されてからは、全域で大規模な都市開発事業が展開され、東京都と比肩する程の大都会へと生まれ変わった。その際、最大の資金援助を施したのがサンシャイングループである。

人口の急増と、魔法少女をメインに据えた事業展開で大いに盛り上がっているが、一

方では、

- ・ 中央区と参京区の経済格差がある神浜町。
- ・ 後期高齢者が人口の6割以上の慶治町
- ・ 移民による麻薬密売や人身売買といった犯罪事件を抱える明京町。
- ……等々上記の問題も抱えており、市政が立ち向かうべき課題は多い。

一覽へもどる

・ 五強聖（読み：ごきようせい）

【初出 FILE #43 それぞれの思惑①】

蒼海幫のトップに君臨し、組織を運営する5人の魔法少女達の総称。精鋭部隊・【墮龍】の師範衆でもある。

リーダーは王 海龍（ワン||ハイロン）。

他のメンバーに、鄭 咲蘭（チャン||シヤオラン）が確認されている。

元々は一派閥の長に過ぎなかったが、10年前の【大事件】を経て、魔法少女の社会進出を目論んだ王 海龍によって権勢を一気に強めた。老人会の重鎮を全員引退に追い込み、組織運営の舵を奪い取った。

一覽へもどる

・国立神浜中央図書館（読み：こくりつかみはまちゅうおうとしよかん）

【初出 FILE #14 斯くて、進み行く者達】

神浜市役所の隣にある巨大な図書館。

いろはが、二葉さな・阿峽 慎と初めて出会った場所。

屋上は広大なテラスになっており、自由に出入りが可能。允はスペースの一角をいつも仕事場として陣取っている。

一階にはカフェが設けられており、さなは自分の過去をいろはに打ち明けた。

いろははここで、夢の中でいつもういが最後に呟く「言葉」の手がかりを得る。

一覽へもどる



【さ行】

・参京駅北口地区市街地再開発事業（読み：さんききょうえききたぐちちくしがいちさいかいはつじぎょう）

【初出】 FILE #22 正しさを誰が「正解」と決めるのか】

本編開始時点より2年前の2018年5月15日に、神浜町参京区で計画された土地再開発事業。

総責任者は市長の夕霧青佐だが、実質的な中心人物は事業協力会社であるサンシャイングループ系列企業、株式会社Divine Light of CITY社長の梓つむぎと、TOYAMA不動産株式会社社長の梓 康弘の夫妻。

事業内容は、参京商店街が狭隘な道路が多く老朽建物が密集しているエリアである為、『建物の不燃・耐震化による防災性を向上させ、商業の集積による更なる駅前のにぎわい、区の広域行政拠点にふさわしいまちづくりを目指し、住民が集える憩いの広場、交通広場による利便性の向上を図る』というもの。

しかし、これは表向きの理由であり、実態はサンシャイングループによる商業支配の

一環であると推測された。

鶴乃達は、再開発対象として取り壊される予定になった東・南側の商店を守るべく反対派を集めて抵抗するものの、つむぎが掲示した懐柔策によって、逆に追い込まれていく。

現在は、中心人物の梓夫妻が事故で亡くなった為、現場の混乱を抑えるべく、夕霧青佐と日秀源道によって、事業そのものが『無期限凍結』されている。

一覽へもどる

・参京区地域センター (読み：さんきょうくちいきせんたー)

【初出 F I L E #24 その陽光は希望の朝日か 或いは 総てを焼き払う灼熱か】

参京商店街の南口を抜けて2分ほど真っ直ぐ歩いた先にある建物。

学校の体育館程の巨大なホールがあり、梓つむぎによる、再開発事業の説明会が開かれた。

一覽へもどる

・参京商店街（読み：さんきょうしょうてんがい）

【初出 FILE #06 孤高の絶対者に追いつく術は？】

神浜町参京区のメイン街道にある商店街。

昔は「神浜商店街」と呼ばれて賑わっていたが、現在は経営者も高齢者が増え、跡取りとなる若者達も都会に流出した為、至る店舗で閑古鳥が鳴いている状況である。

経営難に陥った店は何れも、サンシャイングループの傘下に加わるか、店を畳むかの瀬戸際に追い詰められている。

・万々歳 ——— 由比隼太郎、鶴乃、木次郎

・織田鉄工所 ——— 織田一平

・斎藤寝具店 ——— 斎藤 正、司

・定食屋「いなほ」 ——— 川野ケイ子

・「なかやま陶器店」 ——— 中山三郎

・精肉店 ——— 内海利恵

・呉服店 ——— 関 幸四郎

主にこれらの店舗と店主（と従業員）が確認されている。

常磐ななかは、この状況を「未来が無い」と指摘。

何も政策を打っていない市では守りきれないが、蒼海幫をバツクに持つ自分なら守れるとして、鶴乃に自分の仲間に加わるよう説得するが、拒絶される。

一覽へもどる

・参京商店街組合事務所（読み：さんきょうしょうてんがいくみあいじむしょ）

【初出 FILE #22 正しさを誰が“正解”と決めるのか】

参京商店街の西側に存在する事務所。各店舗の経営者達の話し合いの場として利用されている。

事務所とは言っても、元々は個人経営の店だったものを居抜きで使わせて貰っているだけの小さな建物であり、普段は、経営者や区民達の碁会所代わりやお茶会だったり、所謂「憩いの場」として使われる事が多い。

本編では、鶴乃ら再開発反対派の拠点とされた。

一覽へもどる

・サンシャイングループ（読み：さんしゃいんぐるーぷ）

【初出】FILE #10 “翼”は静かに羽ばたき始めた」

ひびりげんどう  
日秀源道により、一代で築かれた日本有数の大企業。

『地域に住む人々に、あらゆる方面から画一的なサービスを提供する』という理念を掲げている。

その事業は、食品開発に始まり、生活雑貨、建築、不動産、医療機器、薬品開発、機械製作、電気通信、物流、最近では飲食業界と福祉業界に参入と、幅広く規模を展開し、日本中の人々の生活の大黒柱となっている。

本編開始時点より19年前に、神戸市で有数の大手企業・TOYAMA不動産株式会社を傘下に治めており、更に市が魔法少女保護特区として指定された際には、都市開発に多大な資金を提供した経緯から、市内での影響力は絶大であり、現在ではその功績を讃えるかの様に、到る地域でサンシャイングループ系列の店舗や事業所が建造されている。

だが、豊潤な財政力を背景に、その地で根ざし、人々から親しまれていた老舗の企業や店舗や工場、果ては福祉施設すらも買収する強権的な経営姿勢には難色を示す声も少なくない。

秘密結社・【マジグウスの翼】と密かに繋がっている。

いろはの両親を拉致して里見灯花の前に差し出したが、その理由は不明。

● 系列企業

・ Taiyan

・ 株式会社 Divine Light of CITY

・ TOYAMA 不動産株式会社

・ 陽渡造園

一覽へもどる

・ サンライズ参京 (読み：さんらいずさんきょう)

【初出 FILE #24 その陽光は希望の朝日か 或いは 総てを焼き払う灼熱か】

再開説明会の際に、梓つむぎの口から語られた観光旅行者用ホテル。

参京商店街の西・南側一帯の店舗・住宅を取り壊し、サンライズスクエアモールと共に6年と半年掛けて建設される予定だったが、計画そのものが凍結したため、2年経った現在でも、工事にすら至っていない。

一覽へもどる

・サンライズスクエアモール（読み：さんらいずすくえあもーる）

【初出 FILE #24 その陽光は希望の朝日か 或いは 総てを焼き払う灼熱か】

再開説明会の際に、梓つむぎの口から語られた大規模複合商業施設。

参京商店街の西・南側一帯の店舗・住宅を取り壊し、サンライズ参京と共に6年と半年掛けて建設される予定だったが、計画そのものが凍結したため、2年経った現在でも、工事にすら至ってない。

一階の一面を新たな参京西・南商店街として利用させるつもりだった。

鶴乃の考えから、残された北・東商店街と経営的な格差を発生させ、内紛を起こすつもりだったのでは、と推測された。

一覽へもどる

・人倫保護団体（読み：じんりんほごだんたい）

【初出 FILE #10 翼は静かに羽ばたき始めた】

魔法少女に対して差別的思想を持つ団体。

日によって差異はあるが、夕方になると神浜市の各役場前で、決まって集団で抗議活動と営業妨害を行っている。

魔法少女が人間社会にとつて害悪な存在であると信じ切っており、魔女も、魔法少女が誘致したものだと思信じて憚らない。

創設者は徳江龍二。彼自身は現在引退しており、神浜町で町内会長を務めている。現在のリーダーは鈴木範康。

最近活動が激化しており、サンシャイングループが何らかの形で関与していると思われる。

一覽へもどる

・皇グループ（読み：すめらぎぐるーぷ）

【初出 FILE #49 “帝 皇”】

東京都・竜宮市に本社を置く、世界規模で有名な一流IT企業組織。

会長は皇 稜斗。

二木市の地域開発・商業支援に着手し、日本でもトップクラスのデジタル都市として蘇らせた。



魔女戦闘シミュレーションシステム・MMM（エムスリー） Ⅱ LICHTを開発する。

一覽へもどる

・蒼海幫（読み：そうかいへい）

【初出 F I L E #11 氷の女神と烈火の女帝】

明京町大東区・チャイナタウンの中心に本拠を置く互助組織。中国生まれの日本人によつて創立された。

互助組織と冠しているだけあつて、神戸市の商業支援や明京町の警備、祭り等の行事企画執行に尽力している。

だが、戦後、闇市から組織を発展したこと。市内で頻発した荒事に度々携わり鎮圧してきた歴史から、一般市民からは「マフィア組織」と呼ばれ恐れられている。

本編での記述によると、名を口にするだけで、神戸市の表舞台に立つ多くの企業家や政治家は怯えて口を閉ざしてしまう程、らしい。

闇市時代に、阿片を売買して財を成した過去から、やちよは最近大東区で頻発している麻薬密売事件の関与を疑っているが、現時点では憶測に過ぎない。

かつて「長老」なる人物を頂点とした「老人会」によって運営されていたが、現在は王 海龍を頂点とした「五強聖」がその責務を担っている。

直属の精鋭部隊として、魔法少女のみで構成された荒事対策専門チーム「墮龍」が存在する。他にも多数の構成員が市内で暗躍し、互いに情報を取り合っている。

治安維持部「チーム・アメノハバキリ」に所属する純 美雨（チュンメイユイ）は、構成員としての裏の顔を持つ。

一覧へもどる

## 【た行】

・T a i y a n （読み：たいやん）

【初出】 F I L E # 1 9 戦意の底で根差すもの】

サンシャイングループ系列企業の一つ。カジュアルチックな洋装の若者向けラーメ  
ンカフェ。

料理には、由比鶴乃の祖父が生涯を掛けて作り上げた万々歳のレシピが使われている。

一覧へもどる

・宝崎市（読み：たからさきし）

【初出】 F I L E # 4 1 いろはの新しい生活へ②】

神戸市外にある街。

環 いろはの故郷。彼女はここで両親と暮らしており、皆木葉菜・宮内 累と魔法少女チームを組んで活動していた。

神戸市と同じく、都市化開発が進められており、中心の優戒駅周辺にはショッピング

モールや大企業所有の大型ビルや工場等が建設され、活気が溢れるようになったが、神戸市と比べるとまだまだ発展途上であり、駅前を離れば、まだまだ田んぼや畑に囲まれた閑散とした田舎道が続いている。

みかづき荘に引つ越したいろはが、学校へ通うには二時間も掛かる為、神戸市内の学校へと転校を余儀なくされた。

一覧へもどる

・小さいキュウベえ（読み：ちいさいきゅうべえ）

【初出 FILE #01 として「いろは」は告げられる】

幼体化したキュウベえの呼称。最近、神戸市で発生している怪奇現象の一つ。

現在、市内の全てのキュウベえがこの個体に「変化」している。

元々キュウベえは、常に傲岸不遜な態度のお喋りであり、積極的に魔法少女と絡んでくる性質だが、こちらは正反対。『モキュ』としか鳴かず、思考力が無い。警戒心も高く魔法少女を見ると、すぐに逃げてしまう。

使用後のグリーンフシードの処理は可能。

いろはの欠けた記憶と関係が有るらしく、彼女を神戸市へ誘うきっかけとなった。

後に、いろはは触れることで、妹・環　ういに関する記憶を取り戻す。

一覧へもどる

・チャイナタウン（読み：ちやいなたうん）

【初出】FILE #45.5　その少女は何者でもなく③　一

明京町大東区の西半分を占める中華街。

高度経済成長期の頃、異文化交流に積極的であった前市長時代に、大量に流れ込んできた中国系移民達によって自然と誕生した。

中心部には、蒼海幫のアジトがあり、トップ集団・五強聖の管轄下にある。

一覧へもどる

・(株式会社) Divine Light of CITY（読み：でいばいん・らいと・おぶ・してい）

【初出】FILE #22　正しさを誰が“正解”と決めるのか

サンシャイングループ系列企業の一つ。

日秀源道の娘であり、梓みふゆの母、梓つむぎが代表として経営していた土地開発デベロッパ―会社。

参京区の再開発事業の中樞を担い、キレーションランド、サンライズ参京、サンライズスクエアモールを建設する予定であったが、つむぎの死によって、全ての事業が凍結された。

本編開始時点より4年以上前には、埼玉県小簗市にて、藪原駅北口商店街地区の再開発事業を担当していたが、商店街組合の猛反発によって難航。

その最中に発生したのが、藪原北大火災である。

一覽へもどる

・怒病縷（読み：どっぺる）

【初出 FILE #53 いつか万年桜の木の下で】

朝香美代の口から語られた、大賢者の試練をクリアすることで、かの者から授けられる魔法少女の“秘術”の一つ。

具体的にどのような技であるのかは、現時点では謎に包まれている。

一覽へもどる

・墮龍（読み：でゅおろん）

【初出 FILE #43 それぞれの思惑①】

蒼海幫の魔法少女のみで構成された精鋭部隊。荒事対策専門チームの通称。  
五強聖直属。

元々は陰の集団として、裏に潜む犯罪者や組織の敵対者を始末していたが、10年前の大事件を以て、表舞台へと一挙に帰り咲いた。

10〜30代もの幅広い年齢層で構成されており、総数は30名。全員が拳法・『蒼碧拳』の使い手である。

一覽へもどる

・TOYAMA不動産株式会社（読み：とやまふどうさんかぶしきがいしや）

【初出 FILE #22 正しさを誰が“正解”と決めるのか】

神戸市に古くから存在する老舗の大手不動産会社。

本編開始時点より19年前に、サンシャイングループの傘下に加わった。

社長は日秀源道の娘婿。 梓みふゆの父・梓 康弘。  
彼の妻・つむぎが経営する株式会社Divine Light of CITYと共に、参京区の再開発事業の中心となったが、康弘の死によって、全ての計画が凍結された。

一覧へもどる

【な行】



一覽へもどる

【は行】

・爆裂魔法（読み：ばくれつまほう）

【初出】 FILE #47 女神と爆裂と古町と鬼と

紅魔めぐみが開発した、一撃必殺の魔力開放術。

自分の内にある全ての魔力を一点に集中し、強大な破壊力を持つ【爆裂】を発生させ

る技。

その威力は凄まじく、魔女だけを仕留めるにとどまらず、周囲の地形すらも変えてしまう。

だが、

- ・魔法を放つ時の余りもの魔力量に、周囲の魔女をも呼び寄せることになること。
- ・体力もゴツソリ持つていかれてしばらく動けなくなってしまうこと。
- ・並の魔法少女ではソウルジェムが一気に濁り、“最悪のケース”に陥る可能性があること。

以上のリスクから、『爆裂魔法はネタ魔法』と蔑まれてしまう。

だが、災害級の魔女を撃破したことで、その有用性が立証された。

また、小規模の火力で放つことも可能であり、笠音アオに絡みついたやちよをピンポイントで吹き飛ばしたことも。

ちなみに、めぐみの爆裂魔法への愛は、

『一日一食しか食べられない代わりに毎日爆裂魔法を撃つか、爆裂魔法を我慢する代わりに一日三食おやつグリーンフシード付きどちらかを選べと言われたら喜んで一日一食で我慢する。我慢して爆裂魔法を放った後で、ちゃんとグリーンフシードを回収して、残り二食とおやつを食べる』

ぐらい深いらしい……。

一覽へもどる

・ 8億円（読み：はちおくえん）

【初出 FILE #31 『それ』は降って落ちるもの】

『幸運』を願った由比鶴乃が、宝くじの一等を引き当てたことで手に入れた金額。

父・隼太郎はこれを用いて、サンシャイングループからの援助金を返そうと考えたが……。

一覽へもどる

・ 万々歳（読み：ばんばんざい）

【初出 FILE #06 孤高の絶対者に追いつく術は？】

神浜町参京区・参京商店街にある中華飯店。

由比鶴乃の実家であり、父・隼太郎と大叔父・木次郎の三人で暮らしている。

店主は隼太郎。鶴乃は接客担当と調理補助。

料理の味は可も不可も無い『50点』と評判だが、鶴乃の明るい人柄に惹かれた常連客は多く、日々生活していけるだけの売上は得ている様子。

ちなみに、鶴乃と木次郎は毎度漫才地味たやりとりを繰り広げる為、一種の名物となっている。

創業者は、鶴乃の曾祖父・由比雀七。しよっしち

戦時中——黄河決壊事件の折に、敵対国で救助した人々から中華料理のノウハウを教わり、日本で活かす為に店を開いた。

曾祖父と祖父・鶏太郎の代までは日々行列が絶えず、『神浜一の中華飯店』と称賛を受ける程で、昭和天皇さえ噂を聞きつけてご来店なさる程の超人気店だったが、隼太郎の代になると人気は急落。

現在、メディアでは一切取り上げられず、著名人の来訪も無くなった。

鶏太郎は後事の為に料理のレシピを残しておいたのだが、彼の死後、隼太郎によって、サンシャイングループに売却されてしまった。

そのレシピを元に新規オープンされたのが、若者向けのラーメンカフェ・[T a i y a n ]である。

一覽へもどる

・二木市（読み：ふたつきし）

【初出 FILE #47 女神と爆裂と古町と鬼と】

兵庫県に存在する大都市。

本編開始時点より二年前に、七海やちよが観光視察目的で訪れた。

市役所が置かれた中心街である虎屋町を始め、竜ヶ崎町、蛇乃宮町の3つの区域に分かれている。

紅間めぐみが局長を務めている魔導管理局が置かれているが、実質的には、紅晴結菜率いる魔法少女連合・【黒鬼組】が市内全体を警護し、各商店街を纏めている。

かつては、経済的格差による三町の小競り合いが絶えず、市の切り捨て政策や、サンシャイングループの介入も重なって、商業・文化事業の衰退が著しかったが、結菜を始めとする魔法少女達の支援や、皇グループ会長・皇 稜斗のバックアップを得て、日本随一のデジタル都市へと生まれ変わり、繁栄と活気を取り戻した。

『黒い角が生えた赤鬼』を土地の唯一神として祀っている。

一覧へもどる

【ま行】

・魔義空（読み：まぎあ）

【初出 FILE #53 いつか万年桜の木の下で】

朝香美代の口から語られた、大賢者の試練をクリアすることで、かの者から授けられる魔法少女の“秘術”の一つ。

具体的にどういう技であるのかは、現時点では謎に包まれている。

一覧へもどる

・マジア・リユニオン（読み：まぎあ・りゆにおん）

【初出 FILE #45 目前の白き光は掴むに値するものか】

10年前に、和泉十七夜の口から語られた、世界で蔓延る差別・戦争・貧困・飢餓・麻薬・無法・悪政に喘ぐ人々を救う為に、魔法少女を派遣する機関。

十七夜は、神戸市の魔法少女救済システムが世界中に広がった暁には、この組織の設立を構想していた。

一覽へもどる

・魔導管理局（読み：まどうかんりきよく）

【初出（改訂版）FILE #39 人と獣の狭間に生きる者】

神戸市外の主に大都市圏に存在する、魔法少女による治安維持機関。  
後述の【魔導事務局】と併設されている。

神戸市役所の治安維持部同様に、担当地区で魔法少女による犯罪事件の摘発、及び魔女の討伐を行っている。

一覽へもどる

・魔導事務局（読み：まどうじむきょく）

【初出（改訂版）】FILE #39 人と獣の狭間に生きる者】

神戸市外の主に大都市圏に存在する、魔法少女による魔法少女の為の相談所。

前述の【魔導管理局】と併設されている。

神戸市役所の調整課同様に、調整員が在籍し、担当地区に住む一般の魔法少女のソウルジェムの調整、及び悩み相談を行っている。

一覽へもどる

・魔法少女保護条例（読み：まほうしょうじょほごじょうれい）

【初出】FILE #01 そして、いろはは告げられる】

神戸市のみ適用されている独自の条例。

魔法少女に関する規則が書かれており、違反した場合は刑事責任を問われて罰則を受けなければならない。

現在判明しているのは以下の通り。



- ・魔法少女は神浜市に現存する企業にのみ、未成年でも正社員として就職できる。
- ・一軒家の一人暮らしも許可。

(但し、定職に着き、金銭的余裕がある者に限る)

- ・開業を何の成約も受けずに始められる。
- ・看護資格を持つても一般的な病院や診療所で働く事はできない。
- ・魔法少女は、調整課で『調整』を受けた後に、『保護申請書』を届け出さなければならぬ。

○保護登録には、『身分証明書』の掲示と『住民票』の提出が必要。

- ・保護申請を通さず、変身と魔法の使用は一切禁止。

○変身だけで1年以上10年以下の懲役。魔法の使用は無期又は3年以上の有期懲役)

○例外として『魔法の結界の中のみ』許可される。

- ・魔法少女同士の戦いは、治安の悪化を招くものと見做される為、禁止。
- ・一般的な市民は、魔法少女の適切な活動(魔女退治や就業など)を過度に妨害してはならない。

一覽へもどる

・みかづき荘（読み：みかづきそう）

【初出 FILE #40 いろはの新しい生活へ①】

神戸町中央区の市役所裏にある公務員寮。

ピーター・レイモンド、八雲みたま、七海やちよ、加賀見まさらが住んでおり、環いろはが新たに入居した。

なお、ピーターは管理人。みたまは大家である。

元来は民宿であり、やちよの祖母・七海 天（そら）が経営していたが、亡くなると同時に廃業。

住宅街の火災被害拡大防止の為に古い木造建築は取り壊すべきとの周辺住民から声が挙がったが、市長・夕霧青佐が反発。

みかづき荘を買い取り、改築工事を行い、新たに職員寮として再運営することを決定した。

一覽へもどる

・皆木植木店（読み：みなきうえきてん）

【初出 FILE #41 いろはの新しい生活へ②】

宝崎市待那比町まなびにある、皆木葉菜の実家。社長は葉菜の父親。

本編の記述から、いろはは葉菜の家族とも親しい間柄であると思われる。魔女が出現し、いろはは葉菜の父親共々結界に取り込まれた。

一覧へもどる

【ら行】

・楽園（読み：らくえん）

【初出 FILE #53 いつか万年桜の木の下で】

環 いろはが、夕霧青佐に大賢者の所在を尋ねた際に、導かれた場所。

雲一つ無い蒼天と、無数の林檎の花畑が群がる地表が果てしなく広がっており、その景観は創作物でよく描かれる「天国」そのもの。

中枢には「万年桜」と呼ばれる大樹がある。

【教授】柊 ねむ、【九尾の白狐】ヨヅル、【カーバンクル】月出里の三名は、この地に住み、神浜市で亡くなつた後、大賢者によつて送られてくる魂を、林檎の花に宿らせ、管理している。

一覧へもどる

・LICHT（読み：りひと）

【初出（FILE #50 MM）ではなく LICHT の為に】

皇グループが開発した、魔法少女を安全に育成するためのシミュレーションシステムの通称。

元々、協力参加したアメリカの技術者チームは「Malleus Maleficarum Machina」と名付けたが、物騒な響きを嫌った皇稜斗により、日本名として付けられた。

なお、「リヒト」は、ドイツ語で、『光』・『輝き』を意味する。

現在、50パターンもの魔女との戦闘を限りなくリアルに近い環境で練習することが可能であり、世界各国の名だたる魔法少女達の意見を参考に、結界の模様や質感、使い魔、魔女が完全再現されている。

また、『GUARDIAN』と呼ばれる支援システムが備わっており、利用者の魔法少女の経験年数が3年未満だった場合は、ナビゲーターを務める神奈巫子（ミコ）を始めとする強力なアバターを、任意で味方に付けることができる。

一覽へもどる

【や行】

・八神郡（読み：やがみぐん）

【初出 FILE #38 奈落の底で煌く紅蓮】

神戸市の旧名。本編での記述から平安時代以前はそう呼ばれていた。

平安時代、八雲、八重、八島、八坂、八潮、八口、八張、八百の神道八家による宗教的な内乱が続いていたが、摂政藤原氏の命を受けて、外部から介入してきた豪族・里見家の圧倒的な武力の前に、全て降伏。

以後、里見家による統治政策が敷かれたことで、八神郡は平定された。

一覽へもどる

・藪原北大火災（読み：やぶはらきただいかさい）

【初出 FILE #45 目前の白き光は掴むに値するものか】

本編開始時点より4年前に、埼玉県小薮市薮原町で発生した史上最大の火災事件。小さな洋食屋の火の不始末が火種とされる。

当時、薮原駅北側商店街地区は木造住宅の密集地であり、約38000㎡、約357世帯が焼失。

市内の消防隊が全動員され、完全消火には24時間以上も掛かったが、地元の魔法少女達が救助に加勢したことで、死者は一人も出なかった。

ちなみに、この一件で、世間の魔法少女の支持層は劇的に広がり、各地の地方公共団体の多くが、一刻も早い魔導管理・事務局の設立を急務としたが、魔法少女を危険視する地元の名士からの反発も根強く、難航しているのが現状である。

一覽へもどる

・矢宵板金工場（やよいばんきんこうじょう）

【初出 FILE #17 “怒り”の矛先を向ける相手も無く】

サンシャイングループ系列企業の一つ。

明京町大東区にある個人経営の小さな工場だったが、本編開始時点より一ヶ月前に、サンシャイン重工に買収された。

一覽へもどる

・結城公園（読み：ゆうきこうえん）

【初出 FILE #19 戦意の底で根差すもの】

神浜町中央区にある大きな公園。

「結城池」と呼ばれる大きな池があり、他に多目的広場・児童広場、ランニングロードが設けられている。

商店街を抜けて、神浜市警察本部や神浜消防署本部、裁判所合同庁舎などが立ち並ぶ国道沿いを歩くとたどり着ける。

環 いろははここで、何故かグルグル迷ってしまい、陰ながら見守っていた加賀見まさらに呆れられた。

一覽へもどる

・傭兵（読み：ようへい）

【初出 FILE #25 戦うべき相手は、此処には居らず】



裏社会で働く魔法少女の通称。

一般社会から爪弾きされた者や、魔法少女同士の喧騒から後ろ暗い事情を抱えた者達の、行き着く先とされる。

一概に『プロ魔法少女』とも呼ばれており、年齢層は主に20代。経験年数も10年を超える凄腕のベテランが多い。

また、残忍非道な性質の者も多く、金やグリーンフィード採取の為なら、どんな汚れ仕事も遂行すると謂われている。

ヤクザの重鎮の護衛が基本的に多いが、他にも、若い女性の人身売買、麻薬密売、借金を取り立てを手伝ったり、殺し屋稼業を行っているケースもある。

使う側としては、自分達で実力行使するよりは、彼女達の『魔法』に頼った方が、遙かに穏便に済ませられる。

使われる側として、一般企業でアイデンティティ封じられて働くよりは、一口数万の大金を支払ってくれる上に、魔法の使用も自由なヤクザに付く方が遥かにメリットが有る。

上記からお互いに利害が一致する為、成り立っている職業とも言える。  
現在、確認されている傭兵は、深月フェリシア、伊月ジュン、舞花サチ。



## 提供資料集

魔法少女が公的に認められた場合の保険制度およびその  
課題整理（提供元：オーバードライブ 様）

魔法少女が公的に認められた場合の保険制度およびその課題整理

### ■前提の整理■

#### 一、用語の定義

この怪文書において各用語は以下の意味で用いる

- 1、「魔法少女」とは、特定の契約に基づき異能を行使する個人のことを言う。
- 2、「保険」とは、予期せず、かつ偶発的に起きる事故・事件のうち、保険支払義務を  
具

体化させる事故、すなわち保険者が保険契約者に対し保険金を支払う必要があると認められるもの（以下「保険事故」という。）に備える目的で、保険者が多数の保険契約者から一定の金額を集め、保険事故の当該保険契約者に金銭を支給する制度のことを言

う。

## 二、前提となる社会条件

この怪文書の検討の前提条件として、下記の条件をもれなく満たしているものとする。

- 1、魔法少女の存在が広くおおよげに認知されていること
- 2、魔法少女の能力の行使がおおよげに認められていること  
ただし、ライセンス下での行使等制限があつてもよい
- 3、魔法少女としての社会参画が可能であること（職業：魔法少女が通用すること）

## ■保険商品としての「魔法少女特約」はあり得るか■

魔法少女が関与する保険事故のパターンは大きく二つに大別されると考えられ、それぞれについて魔法少女固有のリスクについて計算されることになると思われる。

- 1、魔法少女自身の損失について補償する場合

・ 生命保険

・ 医療保険

- 2、魔法少女が引き起こした損失について補償する場合

・損害賠償保険

・火災保険

上記保険でカバーしていくことになるが、問題は「魔法少女である」こと自体に起因するリスクの高さにある。

1、健康阻害リスクの高さ

・負傷率の高さ

・一定期間内の死亡率の高さ

↓任意保険の場合、保険料が相当に割高となる

2、損害賠償額の大きさ

・戦闘等が発生した場合の補償額が大きくなる

↓魔法少女としての戦闘は保険の対象外となる可能性が高い

魔法少女自身の損害賠償保険はリスクが高すぎ、商品としては高額になる  
従って「保険商品」としては以下のような対応が考えられる。

・魔法少女に起因する損害等については、物損の場合、火災保険のオプションとして扱われる

↓魔法少女自身が加入する保険ではなく、モノの所有者の保険側のオプション（おそらく弁護士特約）で対応されてしまい、法廷沙汰に発展する可能性が高い

・健康リスクが高いため、魔法少女は難病指定を受ける

↓通常の保険では超高額になる

■保険を扱うのは誰か■

・健康保険

健康保険の場合、保険契約者たる魔法少女が組合員となる組合を設立し、組合内部での相互扶助を制度化、「魔法少女共済制度」として扱うモノ（類似事例：農業協同組合「JA共済」、生活協同組合「こくみん共済」）である。

同じように法人に所属する場合、その法人の保険が適応になるはず（神浜市職員なら「神浜市共済組合」。総務省なら「総務省共済組合」）なので、その公的保険を受けられる。

・損害賠償保険

「公務中の事故」に起因する補償、補填については、官公庁の審議の後に税金による補填が行われる可能性が高い。

「民間企業もしくは個人による事故」に起因する補償、補填は、その法人もしくは個人の責任において実施する必要があるが、これら保険商品を共済制度の中で担うことも不可能ではないはずなので、それら法人向けの高額保険を民間の保険会社が扱う可能性はあ

る（その場合、おそらく海上保険制度に近いものになる？）

・生命保険

民間の生命保険が適応されるだろうが、前述のと折り魔法少女は保険料が高いはずなので、加入率は不明（魔法少女が難病指定されている可能性……）

## 各国の魔法少女事情（提供元：オーバードライブ 様）

### 各国の魔法少女事情

※基本的に特殊部隊は「基本謎で話に尾ひれが付きまくるモノ」なので、イメージをいくらでも膨らませてOKかつ、内外のギャップが許されるモノだと思うので、実際何でもありです。ご承知おきください

※中国についてはおぼどらの知識不足がひどいので参考程度にしてください

### ■前提■

- ・所属は出生地ではなく、国籍のある国に置く
  - ・魔法少女は公的に認知される
  - ・魔法少女はUNICEFとか青少年保護の蚊帳の外におかれる
- もしくは、特殊部隊系列はあくまで「ウワサ」であり、国としては存在を認めていないなどの対応を取る。



## 【アメリカの魔法少女事情】

諜報大国かつ軍事大国アメリカ。いろいろとレパトリーがすごそう

## ■魔法少女の管理システム■

- ・基本は州への届け出て登録する。
- ・能力を行使するにはライセンスが必要そう。講習会とか受けないとライセンス出なさそう

い) ・契約はあくまで自由意志。部隊などへの参加も自由意志（本当に事由とは言つてな

広そう) ・人種、宗教等のバックボーンが豊かなので、魔法のレパトリーや救済方法にも幅

## ■特殊部隊として魔法少女を雇ってそんな組織一覧■

- ・連邦調査局（FBI）
- ↓あくまでアメリカ国内捜査専門。海外には出てこないだろうと思われる
- ・中央情報局（CIA）

↓おそらく海外にやたらと派遣してそう。職種としてはケースオフィサー（要はスパイ）、パラミリタリーオフィサー（準軍事工作担当工作員）あたりが妥当？ 作戦本

部本部長（DD/O）の指揮下に置かれる、はず。反米組織の殲滅とか、外国在住の米国人救出とかで活躍してそう

・米国軍関係（山ほど組織があるので、運用できそうな組織を以下に列挙する、組織の階層に注意）

1. アメリカ特殊作戦軍

1-1. 統合特殊作戦コマンド

1-1-1, 海軍特殊戦開発グループ（DEVGRU）：対テロ、非対称戦に投入される空挺部隊

2. アメリカ陸軍

2-1. 特殊作戦コマンド

2-1-1. 第一特殊部隊コマンド特殊部隊グループ（グリーンベレー）：各種非対称戦で友軍の教育、支援等。戦闘への先行投入

2-1-2. 第七五レンジャー連隊：空挺降下による強襲任務、破壊工作

2-1-3. 第一特殊部隊デルタ作戦分遣隊（デルタフォース）：海外潜入ができるレンジャー隊員みないな立ち位置。高度な言語能力要

2-2 陸軍民事活動および心理作戦司令部

2-2-1. 心理作戦群：プロパガンダなどを担当

3. アメリカ海軍

3-1. 特殊作戦コマンド

<https://t.co/7ljhi0Bz08>

SEALS：空挺、潜水艦、何でもござれの「偵察部隊」

4. アメリカ空軍

4-1. 特殊作成コマンド

4-1-1. 第一特殊作戦航空団：輸送とかのスペシャリストチーム（飛行機ばかり）

5. アメリカ海兵隊

（基本的に海兵隊は米国の海外派遣の最前線に飛ぶため、対外軍事活動だと主に海兵

隊飛ばしておけば問題なさそう)

5-1. 特殊作戦コマンド

5-1-1. 海兵襲撃連隊第三海兵襲撃大隊：アジア担当の殴り込みチーム

5-1-2. 海兵襲撃支援グループ第海兵襲撃支援大隊：→の支援部隊で情報収集を担当

5-2. 海兵遠征部隊

5-2-1. 海上特殊目的部隊

5-2-2. 直接行動小隊

5-3. 武装偵察部隊（フォースリーコン）：戦線の偵察部隊として場所を問わず投入される、特殊部隊ではないが特殊部隊並に強いし専門性が高い

■で、結局アメリカはどこで魔法少女使ってるのよ？ ■

・治安維持分野

国内 : FBI

海外 : CIA

・軍事活動

偵察 : 海兵隊武装偵察部隊

N a v y   S E A L S

破壊工作：C I A

デルタフォース

非対称戦：グリーンベレー

D E V G R U

正規戦     ：第三海兵襲撃大隊

第七五レンジャー大隊

おぼごろのおすすめは外交問題で机の下で蹴り合うならC I A、米軍の正規介入なら海兵隊です。

【(おそ) ロシアの魔法少女事情】

■ 誰が魔法少女を管理するのか ■

・ おそらくロシア内務省の監督を受けることになる

↓ ・ 担当部署は行政部と移民総局？

↓ ・ 治安維持関連に絡むなら、内務省公共秩序警備部、もしくは組織犯罪・テロ対

策部

・教育と絡めて教育省、科学・高等教育省の2省庁も絡むかも

・ロシア保険省の保健管理システムも絡みそう

・ロシア民間防衛問題・非常事態・自然災害復旧省が魔法災害を扱ってても面白そう

## ■特殊部隊関連■

### ○諜報系

1. ロシア対外情報庁（SVR）：KGBの後身。旧ソ連領域の国家以外の諜報を担当  
1-1. ザスローン部隊：→の特殊部隊 “スペツナズ” の一つ。暗殺とかもやってるらしい

## 2. ロシア内務省

2-1. 独立作戦任務師団（オドン：ОДОН）：通称「ジェルジンスキー師団」。警備のスペシヤリスト集団

2-2. 特別任務民警支隊（オモン：ОМОН）：対テロ部隊、麻薬摘発

2-3. 緊急対応特殊課（ソープル：СОБР）：武装したマフィア狩り部隊

## 3. ロシア民間防衛問題・非常事態・自然災害復旧省

3—1. ロシア民間防衛軍：災害時の初動対応とかをやる部隊

4. ロシア連邦保安庁特殊任務センター：KGBの後身、旧ソ連領域の防諜、諜報を担当

4—1. A局：通称アルファ部隊。対テロ専門。

4—1—2. 地域特殊任務課（ROSN）：A局の地域部門。

4—2. B局：通称ヴェインペル部隊。原子力施設防護特殊部隊

#### ○軍事系

5. ロシア連邦軍参謀本部情報総局（GRU）

5—1. 第五局特殊情報班：GRU傘下特殊部隊（スペツナズ）を統括する

5—1—1. スペツナズ：偵察・破壊活動・スパイなどなんでもござれの汚れ仕事部隊（スペツナズは部隊名ではなく、そのような任務を行う部隊の総称ということに注意）

5—1—2. ロシア空挺軍第45独立親衛特殊任務連隊

5—1—3. ロシア海軍ロシア潜水夫コマンド

おぼろ的にはわかりやすく「ロシアの殺し屋恐ろしや」なザスローン部隊が気にな

るけれども、そう易々と身分が明かされることはないと思うので、スペツナズ系列やA局が見所？

【中国の魔法少女事情】

■魔法少女の扱いと救済■

- ・ものすごく偏見だけでも、願い事が中央省庁の人に決められてそう
- ・魔法少女にするための人身売買とかひどそう
- ・わかりやすく一党独裁であることから、動員もしやすく、隠蔽もしやすいか

■特殊部隊系■

<https://t.co/k2GkKlsgwP>

人民解放軍総参謀部第二部第三処：中国のスパイ活動の元締め

1 | 2. 海軍陸戦隊特殊偵察部隊

<https://t.co/7df4CmQTCX>

人民武装警察部隊：中国版国家憲兵

2 | 1. 北京市総隊第13支隊第3部隊・通称「雪豹突撃隊」。新疆ウイグル自治区の



対テロ活動など。平均年齢が二二歳以下と非常にメンバーが若い

3. 人民警察特殊警察部隊：対テロ、雑踏警備などを行う

<https://t.co/m2yPREhXpX>

共産党中央統一戦線工作部：政治的な工作担当の行政部門

※※※ブラックボックス（閲覧注意）※※※

FILE #48.5 童謡

——紅晴邸・玄関

最後の日。

荷物を抱えて帰る二人を、大親分と光琳が見送ってくれていた。

「では、またのお越しをお待ちしているであります」

「七海さん、夕霧さんにはよろしくお願いいたしますわあ」

二人はそう言いながら、深々とお辞儀する。

「御二方、本当にありがとうございます」

やちよはペコリ90度、頭を下げて謝礼する。

「……ところで七海さん」

「何か？」

顔を上げた結菜の顔は笑みを浮かべているが、固く感じた。妙な気配を察したやちよに、僅かな緊張感が宿る。結菜がゆつくりと、その幼子のように小さな唇を上下させた。

—— “クレハ ソウヨウ” ——

と。

「……………」

「この名前に、心当たりはあるでしょうか？」

聞いたことの無い名前だ。

—— だが。 ——

結菜の隣の光琳を見る。笑顔だが、目が刃物の先端の様に瞬いている。次いでめぐみを見る。無表情だが、その眼は赤く滾り、強い嫌悪感を示しているようだった。

やちよは結菜に顔を戻して尋ねる。

「クレハ……………」親戚の方ですか？」

「いえ、彼女は『もみじ』と書いて『紅葉』と読みます」

「……ごめんなさい。わかりません」

結菜は笑顔だが、その炯眼の奥には灼熱が渦巻いていた。

「……そうですかあ。なら、頭の片隅に留めておいてください」

「え？」

何故——と問いかけることは憚られた。

結菜の熱を帯びた瞳が、これ以上その名の持ち主に関して話すことは無いと、強く訴えていた。

だが、最後に、これだけを伝えてきた。

「……もし黒い着物を着た、小さな狐顔の女を見つけたら、絶対に正面から向かわないでください」

結菜の瞳が強いプレッシャーとなつて、やちよの精神を圧迫する。

二木市の絶対者たる大親分にそこまでの激情を齎す人物とは、一体何なのか。

やちよも、人々を守る魔法少女だ。これだけは、問い質さねばならない。

「……その方は、一体何者なんですか？」

「彼女は——」

☆

——二木市駅 新幹線ホーム

気がかりなことはある。

しかし、やちよは神浜市の人間だ。地元で成し遂げなければならないことは多い。

大丈夫だ、と心に言い聞かせる。

大丈夫だとも、この街の魔法少女は強い。陛下も、大親分も、樹里さんも、笠音さんも、歴戦の手練れが勢揃いだ。

だから、なんとかできる筈——。

新幹線が止まった。

目先の扉が開け放たれて、入ろうとした矢先だった。

「……………」

息が止まるかと思った。

扉から一番に飛び出た乗客を見た瞬間——衝撃。

「♪ まちぼうけー まちぼうけー ♪」

——黒い着物を着た、小さな狐顔の女に、気を付けて——

名は “クレハ ソウヨウ” ——

一瞬。

時間にしてはごく僅か。だが。

ドクン、と——心臓を鷲掴みにされたような感覚が、猛烈に襲いかかった。

全身から一気に血の流れが引いて手足の末端から急速に冷えていく。

“彼女” はやちよとすれ違ふと、そのまま走り去っていく。

我に返った後に、慌てて振り向くが——もういない。

「……………」

罪悪感が一挙に心を重圧する。

——“彼女” を、見過ごしてしまった。

これから二木市に何か重大なことが起きるのではないか。  
自分は、とんでもない過ちを、たった今、犯したのではないか。

—— 彼女は

“鬼”

です

——

「行かないや……」

だが、やちよの視線は再び、新幹線の扉へと向かった。

自分には、やらなければいけないことがある。

だから、いつまでも、後ろを振り向いてはいられなかった。

「♪ そこへ うさぎが とんできて〜  
コロリ転げた木の根っ子 ♪」

黒い着物姿の女性が口ずさんだ歌は、灰色に濁った曇天に消えていった。





FILE # 87. 5 陽白 (こくはく) (短編)

2018/07/18 (土) PM 13:40

兵庫県・二木市・郊外

相徳寺・墓地

「息災で何よりだ。紅晴結菜」

透き通るような声が突然聞こえてきて、結菜は瞠目した。

ニタニタと笑みを浮かべる狐顔の小さな喪服姿の女——紅葉くればどうよう双鷹そうようから目を離して振

り向くと、白いスーツの麗人がゆったりと歩み寄ってきていた。

「あ、貴女は……………!!」

衝撃のあまり、結菜は絶句する。

聞き覚えのある声。見た事のある端整な相貌。女性として見るに一切の非の打ちどころが無い麗人は、然し男性的な凜とした足取りと勇然とした雰囲気纏いて、結菜の

前に参上した。

一陣の風が舞い、その前髪が微かに揺れ動いて、隠れた右眼を露呈させる。

右眼は眼帯で覆われていた。

直感で「魔法少女」の結菜は悟る——

あれは、傷ついた眼を保護する為に付けた装備ではなく、抑制するものだ。

「なっ……何故、どうして、貴女が……！」

「クカカカ……!!」

思考が定まらない結菜に向けて、双鷹が不気味な笑みを響かせる。

「そこにおわす御方こそ、我等が主……」

「主……!?!」

双鷹の言っていることが、全く理解できない。

白装の麗人が、彼女の言葉にフツと笑みを浮かべる。

違う——と結菜は思った。

自分は昔、彼女と会ったことが有る。

彼女はこんなにも禍々しい雰囲気纏う人間では無かった。

その見た目通り、清廉潔白を体現していた彼女。

自分が知るどの魔法少女よりも、強く、気高く、立ち振る舞いや同性の自分でさえ見

惚れる程の美麗さ。戦い方に魅了された。

正義を追求して止まず、世界の平等と公正たる社会を目指し、平和を願い、突き進もうとする姿勢は、正に物語の“ヒーロー”そのもので、胸を打たれたのを覚えている。

そう。覚えているのに——今も自分は、“あの頃”の貴女を目指して——!!

「久しぶりに会えたのに、挨拶も無しか。残念だ」

「……クツ！」

迷ってる暇は無い。

結菜は瞬時に“二木市の鬼”守へと思考を切り替えた。

奴等を野放しにしておくのは、拙い——!!

開掌した手を真っ直ぐ、虚空に伸ばす。

自分が犯罪者となる覚悟はできていた。身がどうなるかが構わない。その前に、この二人を此処で止めなければいけない!!

「無駄だ」

しかし、白装の麗人は、微笑を浮かべたまま——指を鳴らした。

「!? あっ……!」

二人の首を振り切り瞬殺を企てた結菜の狙いは、刹那に碎かれた。

伸ばされた右手が、*「見えない何か」*を掴んだ瞬間——結菜の全身が脱力する。がくりと膝が折れ、四肢が地面に這いつくばる。

これは、まるで、

「一度技を掛けてやったことがあるだろう？ あれと同じだ。要は、『合気』の応用だよ」

「くっ………!!?」

白装の麗人が微笑を浮かべたまま、結菜に近づいてくる。

拙い！ 拙い！ 急いで拘束から脱しなれば、喰われるのは自分だ。

這い蹲ったまま、結菜は精一杯体中に力を込める。全身に魔力が行き渡る様に意識して。

「っ!?! あ………っ」

しかし、全く動けない。

両手の指も、両脚の指も、動かそうにも蟻の一步にも達しない。

寧ろ逆で動けば動く程、脱力感は増していく。まるで体から開放された力が空気中に霧散してしまったかのように。

「結局、君は」

結菜の無様な姿を嘲笑うかのように。

麗人が眼前で止まり、しゃがみ込んで、彼女を見下ろした。

クイと顎を持ち上げ、微笑を浮かべた美貌を近づけて、ゆっくりと耳元で囁く――

「私に頭を垂れて、助けを請うしか無い」

――悪魔の言葉を。

「わたし……!?!」

違和感を覚える結菜。

だって彼女は、彼女の一人称は――

「あの時と、同じようにね」

「……………」 体何が……………何が、あなたを……………つ」

「双鷹」

「はいはい」

説明してやれ、という意図で麗人は、後ろに立つ狐顔の女に目をくれた。

ニツと嗤いながら――這い蹲る結菜への嘲笑も込めて――双鷹は語り始める。

「目覚めたんですわ」

「目覚め……………？」

説明という割には、あまりにも簡潔そのもの。

故に、全く意味が分からなかった。その言葉も、自分の身に起きたことも、特に、白装の彼女のことも。

「頭が混乱しとるようです。でもね、一度深呼吸して、現実をよーく、よおーく見なされよ」

ウキウキと高揚のあまり上ずっていた口調が、

「全てそこにある……………おどれがそうしておる……………。それが答えじゃ」

突如低く、脅すような声色に変貌する。

結菜は言われるがまま刮目し、目に映ったものを見据えた。

『悪魔』と化した正義の味方がいる——

後ろで残忍に嗤う『鬼』がいる——

そして、その二人の前で、土下座する自分が居る——。

「あつ……………」

愕然と、結菜は目を見開いた。

白装の麗人が立ち上がり、昏い妖気を携えた眼帯の右目が結菜を見下ろす。

その隣に、紅葉双鷹が並び、嗤いながら語り始める。

「孤独を浮遊しても迷路からは帰れない。そう……これは結菜さんの望みでもあつた筈じゃ……。全ては『リユニオン』の理想の為に——」

向かつてゆく世界は手ごわい。

神になど任せられない。

故に、人々には必要なのだ。

彼女も、紅葉双鷹も渴望した。

導を、象徴を。

全てを救済すべき偉大なる“英雄”を。

「我等が皇、

ロード・オブ・イルミナティが

創造なさる

公正と平等の世界の為に！」



過去と、現在。

時と場所は違えども、魁物に仕えるそれぞれの従者達は、高らかに宣言した。

いろはの『夢』

《項目》

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 7. | 6. | 5. | 4. | 3. | 2. | 1. |
| F  | F  | F  | F  | F  | F  | F  |
| I  | I  | I  | I  | I  | I  | I  |
| L  | L  | L  | L  | L  | L  | L  |
| E  | E  | E  | E  | E  | E  | E  |
| #  | #  | #  | #  | #  | #  | #  |
| 6  | 3  | 3  | 1  | 0  | 0  | 0  |
| 0  | 8  | 4  | 3  | 9  | 3  | 1  |

1.

—— ああ、まただ。

また、私は、あの場所に居る。

ここがどこにあるのか、記憶を何度探っても未だに分からない。

分かるのは、ここが病院の中で、私は誰かの面会に来ている、ということぐらい。

白を基調とした病室には、林檎を二つに割った様な甘い匂いが漂っていて、鼻を柔らかく撫でてくれた。

ふと、目線を窓の方へと向けると、街並みが一望できた。ビルやマンションといった大型高層物が密集していることから、この病院は都会の中心部に位置していることが分かる。

それにしても、この病院自体もかなり大型なものらしい。窓の風景から察するに、10階以上の高さぐらい有るのではないか。

「——」  
考えていると、誰かから名前を呼ばれた。

ああ、いつもの女の子の声だ—— 穏やかな柔らかい声色。でも、空気に溶けてし

まいそうなぐらい細く、弱々しい声。

私は、昔からその声を知っている。自分が小さかった頃——いや、それよりもっと、遙か昔から聞き慣れていた。

どうしようもなく懐かしい思いがして、私は声の方向を見る。

一台の電動式ベッドの上では、小さな女の子が横たわっていた。桃色のロングヘア——に、丸い瞳——彼女は、私とよく似ていた。初めて有った時、鏡でも見た様な錯覚に陥った程だ。

もしかしたら、自分に近しい親族の者なのかもしれない。でも、思い当たる節が無い。私には妹がいない。いとこは居るが、病気を患っている子はその中に存在しなかった。

少女は、私を見つめている。病室のベッドの上で寝ている状態からして、この子は何らかの病気に掛かっているのは間違いない。でも、浮かべている笑顔は、病の苦痛さなんて微塵も感じさせないくらい明るくて、まるで陽の様な暖かさが感じられた。

いつまでも見つめていたい——そう思っていると、

「」

彼女は口を開き、再びわたしの名前を柔らかく呼んだ。

ああ、終わりだ——と、私は思った。

その先は紡がないでほしい。言ったら、この心地良さは無くなってしまう。

全てが暖かさに満ちたこの世界で、この子が最後に伝えてくるその言葉だけが、異常だった。

奇妙で、不可解で、不気味で……ぞつとする様な怖さがあつて、その意味を深く考えたく無かった。

「私はね」

しかし、そんな私の懊悩など、知った事では無いというふうに、彼女は笑顔のまま、

「■■■■と会う約束があるの」

そう、紡いでしまった。

夢が終わっていく。

彼女はどこにもいなくなり、病室の風景が闇夜の様な漆黒に覆われていく。私の足が

浮遊してどこまでも落ちていく。

ただ、林檎の匂いだけは、最後まで——鼻腔を優しく、くすぐっていた。

(FILE #01 そして「いろは」は告げられる より)

一覧へもどる

2.

——ああ、まただ。

目に見えたのは、いつも夢で見る世界。

林檎の甘酸っぱい匂いがどこからともなく漂っていて、『あの子』が優しく迎えてくれる。

でも、今回は少し違った。

病室にある三台のベッドには、いつものあの子の他に、もう二人の女の子が存在していた。

「アドルフ・ヒトラーはね」

最初に口を開いた女の子の声を聞いた時、いろははアツと口を声をあげそうになった。

長い茶髪に、ころころ変わる表情。一度聞くとずっと耳に残るぐらいの凄く特徴的な声色をする彼女を、良く知っていた。

「官使であった父親を脳溢血で亡くして、父が残してくれた少ない遺産を母の看病に費やしたの。やがて、母も亡くなり、私産も底を付きたヒトラーは、孤児年金だけじゃあ到底生きていくことができなくて、日々一切れのパンを得るのに必死だったそうよ」

——政治家になるまで、地を這って泥を啜るような努力を重ねてきたの、立派よね。

そう付け加えて、虚空を見上げる少女の目は、キラキラと羨望の光が瞬いていた。

「それは嘘っぱちだよ」

が、ピシヤリと上から叩く様な指摘が入った。

声の方へと目を向ける。茶髪の少女の対面側のベッドに、赤いフレームのメガネを掛けた同じ年ぐらいの女の子が上半身を起こしていた。

どこか機械のように無機質な声色をする彼女のことも、いろはは良く知っていた。

「ヒトラーは父親の孤兒年金と遺産収入で当時の大学卒よりも良い暮らしをしていた事が明らかになっている。1908年2月にヴィーンへ来てからは、確かに浮浪者収容所や、独身者合宿所に住んでいたこともあったが、日々の暮らしは贅沢三昧だったそうだ。嵩む食費と趣味の劇場通いで次第に生活が困窮していったとさえ言われている」

彼女は茶髪の少女とは対照的に、懽然としたまま淡々と解説すると、最後に目を細めてこう締めくくった。

「青年時代の彼は、とんだ自堕落者だ。親の仕送りや、生活保護頼りのニートと同義だよ」

彼女のぶつきらばうな物言いに、ムスツと顔を顰める茶髪の少女。

「どうしてそう思うの？ 本人が自著で言っているじゃない」

「第三者の目線で明らかになっている方が事実さ。主観混じりの人生なんて、信用に値しない」

僅かに語気を荒げて訴えるも、メガネの少女は冷徹さを崩さない。



「私は、本人が自分で、伝えることが真実だと思ふけどな。ねむのいう第三者なんて、どうせナチス政権崩壊後に、ドイツを分断占領した連合国軍が広めた中傷でしょうに」  
茶髪の少女はそう言つて睨みつける。

——二人の視線が激しくぶつかり合い、宙空でバチバチと火花が弾けた。

（この二人は——）

そんな二人の一部始終のやりとりを眺めながら、いろはは二人のことを思い出し出した。

——まず、一人目の、茶髪の少女の名は『里見灯花』さとみとうか。

母親は科学者、父親は東京の有名大学で教授をしているらしく、その血を受け継いだ本人も、相当地頭が良かった。曰く、幼い頃に行ったIQテストで「200」もの数値を叩き出し、講師達を唾然とさせてやった、と豪語していた。

——確か、彼女は、自分の事を『エゴイスト』だつて言つてたっけ。

自分の事が極端に好きであり、自分の言うことは一切間違つていないという。だから、自分の発言の理論立ては一切妥協しなかつたし、他の人が意見を挟むのを決して許そうとはしなかつた。

——もう一人の赤いフレームのメガネの少女の名は『柊ねむ』。

母親は小説家、父親は生物学者をしている彼女もまた、灯火に匹敵する知性の持ち主

だった。小説を書くのが好きで、小学校低学年の頃から、趣味半分で書いた物語をネットに投稿していたのだという。

7歳の頃に書いたという処女作を読ませてもらったところ、難解な文章塗れで何が書いてあるのかサツパリだったが、サイトのランキングでは一位を象徴する黄金の冠マークがキラキラと輝いていたのは、はつきりと思いつける。

彼女は自分の事を『ラシヨナリスト』と自負していた。

(聞き覚えのない言葉だったので、本人に確認した所、『合理的主義者』という意味らしい)

高すぎる夢や理想を望まず、今現在の自分の能力、周囲の環境、人間関係を熟慮し、その全てを用いて勝ち取れそうなものが有れば、挑戦するという思考で、冷徹に物事を判断する姿勢は、一般的な女の子からは掛け離れていた。

確か、この時読み合っていたのはアドルフ・ヒトラーの『我が闘争』——自分は彼のことともその書物のことも全く知らないが——だったか。

二人は、偉人や著名人の書物を読み回して口々に感想を言い合っていた。

そこで、お互いの考え方の違いや価値観、信念が垣間見れるのが面白かった。特に『自伝』を読んだ時は、棘でチクチクと相手の神経をつつき合ってるな、と思つてたら——

——いつの間にか、ズバズバと相手を斬りつけ合う口論に発展していた。

灯花は『著者が自分の目で見て、耳で聞いて、身体で経験したことなのだから信憑性がある』と主張すれば、ねむは『近しい者や後世の人間による客観的な評価こそ真実だ』と意見して、ぶつかり合った。

(あの子と、同じ病室に居たんだっけ——)

二人もまた、なんらかの重い病気を患っており、一日の大半を病室で送るしか無かった。『あの子』と同じだ。

(そうだ、あの子は——)

振り向く。あの子は、ベッドの上で上半身だけ起こして、何かを読んでいる。

表紙を遠目で何うと、『我が闘争』と書かれていた。恐らく、あの二人のいずれかに回されてきたのだろう。

『あの子』は二人と違って普通だった。本の内容は難しいのだろう、眉間に皺を寄せ、一文一文睨みつけている様に凝視していて、「ムムムム……」と唸り声を漏らしていた。

そんな姿を眺めていると、自然と顔が綻んだ。今の自分は、とてもニコニコしているに違いない。

それもそうだ。未だ、口から火や雷を吹きつつ争っている灯花とねむと比べると、なんだか微笑ましくって——

(!! そうだ、名前——!!)

そこでいろははハッと、顔を上げた。

灯花とねむのことだつて思い出した。この子の事だつて、今度こそ思い出せるかもしれない!

いろはの足は自然と動いた。駆け足で、ベッドの下へと——

誰かに腕を、グツと掴まれた。

——瞬間、世界が様相を一変させる。

「っ!!」

そこが病院の通路だと、いろはが理解したのは——直後のことだった。

白いコンクリートによって一切の光が遮られた無機質で薄暗い通路は、先の「あの子達がいいた」病室と同じ建物の中にあるとは信じ難いぐらい、別世界に感じた。

前方に目を向けると、無限の闇が広がっている。

一度足を踏み入れたら、二度と抜け出さえない——直感でそう思ってしまうぐらいの、濁りの無い、深い漆黒。

だが、いろはは怖じけ付く事無く、一步を踏み出した。

あの闇の中から、気配がする。『あの子』と、灯花とねむがいる。そして、僅かに……林檎の匂いが漂っている。

間違いない、と確信した。三人がいる病室は、すぐ近くにある。

——急いで戻らないと。私は今度こそ、あの子に聞かなきゃいけない。

もう片方の足にグツと力を込めると、飛び出すように駆け出した。漆黒の闇の先に、光り輝く世界があると信じて。

しかし——

「ツ!!」

上腕部に生じた痛みにも、いろはが呻いた。

——さつきと同じだ。誰かが自分を止めようとしている。

駆け出した後に後ろに振った右腕が、ゴツゴツとした大きな手で強く握り締められている。苦痛で顔が歪むが、いろはは堪えながらも、その人物の顔を確認するべく、バツと後

ろを振り向き、

「!？」

硬直した。白衣を纏った男性が、佇んでいた。

伸び切った前髪が顔の上半分を覆っており、表情は伺えない。

しかし、両顎をキツく噛み締めており、零れ出る荒い息づかいが、鬼気迫る迫力を感じさせた。

(誰なの、この人——!?)

一つの困惑が、頭の中に垂らされた。それは、思考の海を荒々しい波濤へと急変させて頭蓋を内側から叩きつけてくる。

この病院の医者せんせいだろうか。でも、見たことも無い人だった。

……いや——灯花とねむのこともすっかり忘れていたのだ。

もしかしたら、彼も以前お世話になっていながら、忘れているのかもしれない。

荒れ狂う思考の海の中で、必死に記憶を探ろうとするが——残念ながら、彼に関する記憶是一片も見当たらなかった。

自分を握りしめる彼の手は、熱が籠もっている。

そして、全身から発せられる必死な感情——彼が自分の事を知っているのは明らかだったし、何としても自分を止めなければならぬ事情が有るように感じた。

「環、いろは」

開かれた彼の口から、自分の名前が呟かれて、目を丸くした。慌てて言葉を返そうと口を開く。

「あなたは、何をしているんだ」

あなたは、誰？——と、彼に問おうとした、その矢先だった。

彼の怒りに満ちた声が、耳に突き刺さる。

「なんで、そつちに行こうとする？」

嵐で荒みきつた波の様に声を大きく震わせながら、訴えてくる。

困惑、憤怒、嫉妬、悲嘆——全ての負の激情が複雑に混じり合って形成された言葉の剣が、胸に突き立てられた。

だが、いろはは怯まない。

—— 灯花とねむのことを思い出せたのだから、あの子の事だつて……！

どうして彼は邪魔をするんだらう。自分の欲しいものが直ぐ近くにあるのに。その為、自分はここまでできたのに！

頭の中で荒れていた思考の水面が、収まった。同時に、沸々と滾つてきて、頭頂部が熱くなる。キツと眉間にしわを寄せて、目を鋭くする。質問の答えでは無く、怒りの形相を彼に返してやった。

「離してよっ！」

力任せに大きく腕を振るうと、彼の手が祓われた。

彼の顔に浮かぶ複雑な感情に、僅かな驚きが混じった。

「どうして、止めるの?! あの前こうに、大事な場所があるのに……！」

彼はどこか呆気に取られた様子で、黙して聞いていた。

「灯花ちゃんと、ねむちゃんと、『あの子』が、私を待つてるのに……！」

しかし、そこまで叫ぶと、反応が見られた。

自分を止めようと伸ばされていた腕が、力を失ったかのようにガクリと垂れる。

表情は歪ませたままであったが、そこから伺える感情は一つに整理されているように見えた。



「あなたは、こつちへ来るんだ」

深い悲しみで顔を青く照らしながら——彼は、静かに言う。  
ゆつたりとした動作で再び手を上げると、いろはを手招きする。

「三人が待つてるんだよ!! 私求めてるものがあるのに……どうして……!!」

彼は間違い無く、自分に対して特別な思いを抱いている。しかし、自分はその場所へ戻りたい。どうしても、取り戻さなきゃいけないものが、あるから——!!  
そう思つて彼を睨みつけた瞬間だった。

彼の顔が、鬼の形相と化す。

「そこはあなたが居ていい場所じゃないからだよツ!!」

鼓膜を貫かんばかりの激昂が、巨大な杭となつて、いろはの全身をその場に打ち付けた。

「——つ!?!」

身体がビクリと震えて、固まる。

頭の中で再び思考の海が荒れ狂い始めた。波状する混乱は、彼の顔を見ると余計に強まった。

前髪の隙間から僅かに赤い光が瞬いている。よく見ると、その奥を、彼の瞳が確認できた。

ずっと働き続けて、何日も睡眠を取っていない様な、疲れ切った目は、すっかり乾ききつて、充血を起こしていた。

——何かを諦めたけど、それでも強く求めている様な、複雑な情熱が籠もる瞳が、痛烈に心を射抜いてきた。

「……………じゃあ」

暫し沈黙して、白衣の男と静かに睨み合ういろはだったが——静寂を破るように自分から口を開いた。

「あそこは、私にとつての何だつていうの？」

恐らく彼は知っている。

あそこが——いつも夢で見えるあの眩しくて、優しく、甘い世界が、自分にとつて何か意味を持つ場所であることを、よく知っている。

真実を知らなければ。自分が前に進むためにはそうしなければ——!!

焼け付くように痛む胸を抑えながら問いかけると、彼は紅い目で強く凝視したまま、

こう言った。

「闇だ」

「えっ……？」

思考の海が、液体窒素を豪快に流し込まれた様に、ピタリと冷えて固まった。

—— 刹那、後ろで気配。

だけれが、スタスタと、軽い靴音を響かせて近寄ってくる。

林檎の匂いが鼻腔を刺激して、いろはは直感した。

—— 『あの子』が、迎えに来てくれた。

その時感じたのは、喜びだったのか、それとも困惑だったのか……頭が混乱している  
せいで、判別が付かなかった。

ただ、この時、反射的に後ろへ振り向いていた。

思った通り、数歩ぐらい先に、病室で見たのと寸分違わぬ姿の『あの子』が居た。

パジャマ服に腰まである桃色のふんわりとした質感の髪をフワフワと揺らし、腕に刺  
し込まれた点滴棒を押して、ゆっくりと近寄ってくる。

後ろで白衣の男が、必死に何かを訴えているが、もう何を喋っているのか理解でき

なつた。

「——ちゃん」

自分が駆け寄るよりも早く、あの子は一步先まで近づくと、自分の名前を呼んだ。

——ああ、終わりが告げられる。

緊張と興奮で、すっかり苦くなつた唾液をゴクリと飲み込む。

結局、この子の名前を聞くことはできなかつた。

後ろの男が邪魔さえしなければ、自分は一番大事なものを思い出せたかもしれなかつたのに。

「私はね」

穏やかに言葉が紡がれている。これ以上は何を言つても無駄だと分かりきつていた。だから、黙つて待つことにする。

最後に、この子の顔をしかと目に焼き付けようと、じつと見つめた。

——しかし、場所が薄暗い通路だつたせい、彼女の首から上は、漆黒に覆われてしまつて、表情が確認できなかつた。

「“死神”と会う約束があるの」

視界が徐々に暗転していく。まるで闇に飲まれていくかのような、不思議な感覚。  
——でも、多分、あの子は笑って言ったのだろう。そうに違いない。

(FILE #03 心の奥底で沈んだものは より)

一覽へもどる

3.

流れ込んできたものが、脳の隙間に入り込んでいくと、自分の視野いっぱい、コマ

送りみたく次々と映し出された。

何れもが見たことのある映像で、『自分のもの』だとはつきり認識した。

—— 『あの子』は、先天性白血病だった。

生まれてから、たった一ヶ月でそう診断された。

それからというものの、『環』の家で家族と過ごした時間はごく僅か。人生のほぼ全てを病院で過ごす事を余儀なくされたのだ。

里見灯花と柊ねむがいる。院内学級で彼女達と一緒に勉強と励み、林檎を割った甘酸っぱい臭いが漂う優しい、陽だまりの様な世界。

でも、あの子に取っては……………牢獄の様な世界だったのかもしれない。

だから、出してあげたかった。自由な外の世界へと飛ばたかせてあげたかった。

だって、『あの子』は願ったのだから——！！

『おねえちゃんといっしょに、学校に行きたい』って——！！

—— おねえちゃん？

そうだ、〃あの子〃は、自分の事をそう呼んでいた。私にとって大事な家族だった。世界一の宝物だった。

『お願い、病気を治して……！ 元気にしてあげて！』

だから、〃妹〃を救うためなら、どんな犠牲も厭わなかった。私は全てを捧げるつもりでそう願ったんだ。

あの子の、あの子の名前は——！！

おねえちゃん

わたしはね

- と一緒に、学校に行きたかった。
- と一緒に、買い物に行きたかった。

●●に、オシャレを身に着けさせてあげたかった。

●●と一緒に、外で思いつき遊びたかった。

●●と一緒に、料理を作りたいかった。

●●に今度こそ、ちゃんとしたハンバーグを食べさせてあげたかった。  
でも、なにより――

●●と一緒に、家族みんなでもう一度、笑い合いたかった。

“死神” と会う約束があるの

ある陣地の争奪で

春が物騒がしい明暗と共に還ってきて



林檎の花々の香りが宙を満たすころに——

いつもの『終わりの言葉』に、初めて続きが付け加えられて、聞こえてきた。  
途端、世界が暗転した。

☆

ガウン、ガウンと——無機質な機械音が耳を叩いて、目を覚ました。  
ああ、前と同じだ。あの知らない白衣の男性が居た場所の様な、全く知らない世界へと放り込まれた。

そこは、まるで工場の管理室の様な場所だった。

前方には広大な窓ガラスが有り、白衣を纏った、研究員の様な女性が中央に立つて張り付き、向こう側をじつと眺めている。腰まで伸ばされた茶髪が、天井に設置された大型エアコンの温風に吹かれてユラユラと、漂うように揺れていた。

身体が小刻みに震えている。よく見ると、立っているのもやつとの状態に見えた。今にも崩れ落ちそうに、ガタガタと震える足を、杖や補助具も使わず、その強靱な意志の強さだけで支えていた。

周囲を見渡すと、無数のデスクの上に、見たことも無い機械やコンピュータが並んでいたが、何れのモニターの中では砂嵐が巻き起こっていた。

窓ガラスの前の女性以外に他の研究員らしき人の姿は見当たらない。放置されたデスクの上には幾つもの書類が乱雑に置かれて――

字面を見て、ゾクリと、背筋が震えた。

まるで、親に構ってもらえなくて癩癩を起こした我儘な子供が、怒りの赴くままに暴力的に書き殴られた文字で、埋め尽くされていた。文脈の規則性も皆無で、蛇が這い回した様な字は、何を意味しているのか、全く読み取ることができない。

———  
!!

目を震わせて眺めていると、一枚のA4サイズの紙が目についた。

それだけが、全く異なって見えた。

自分の手が、引き寄せられるようにそれに伸びて、ぎゅうつと掴んだ。

顔の直前まで持つてきて、文面を確認する。用紙の中央で、柔らかな正楷書体で書かれた文字を、小さな声で読み上げた。

『PROJECT : MAGIA RECORD』

——戦慄した。

頭の中身が頭蓋を内側から叩き割らんばかりの勢いで荒れ狂う。胃の中の酸液がグラグラと煮えたぎつてきて、猛烈な不快感と同時に吐き気が喉元まで迫ってきた。

——なんだ、これは。

これは、本当に、わたしの記憶なんだろうか。

だったら、この場所は、なんだ。全く見覚えが無い。

——でも、この文字列は、知っている。

だけど……これが、なにを意味しているのか、思い出せない。

わたしは、一体、何を見ている。

この悪魔の夢の中の様な管理室で、わたしは、一体、何を<sup>レ</sup>知っている？

「くふっ」

唐突に、含み笑いが耳朶を叩いた。

持つている用紙を顔から外して、聞こえてきた方向へ咄嗟に振り向く。

あの女性からだ。背中を向けたままだが、未だ眺めている窓ガラスに顔が映り込んでいた。

今にも枯れ果てそうな老婆の様に、皺まみれの衰弱しきった顔の下で——口の両端が吊り上がり、残忍に溢れた愉悦を滲ませている。

呆気にと取られたままそれを注視していると、自然と、ガラスの向こうの景色も伺えた。巨大なクレーンがゆっくりと降下していく。

見えなくなった途端、ずぶりっ、ぬちやり、と気色悪い生々しい音を、静かに響いた。一拍間を置いてから、上昇していく。

大量に掴まれた赤いものを見て——その場で吐きたくなくなった。

生肉だ。鮮血が、濡れた雑巾を絞った様に、びちやびちやと流れ落ちていく。

両手で口を抑えて、膝を床に付いた。心の底が冷え付き全身がガタガタと震えて、これが自分の中にあるものと受け入れたく無かった。

だが——何かが胸の内側から訴えている様に感じた。

これは紛れもなく、お前の一部なのだ、目を背けるなど、叫んでいた。だから、怖くて怖くて仕方ないのに、目を逸らせなかった。

「一切はただ火炎なり」  
ものみな

そこで、ガラスに映る女性の両唇が、ゆっくりと上下した。

「天空覆いて隈なし」  
くま

四方および思維  
しゆい

地上にも空隙存せず

一切の暗き大地は

悪人みな遍満す

われいま帰するに所なく

孤独にして同伴なし

悪所の闇中に在って

大火災の聚なに入る

我は虚空の中にして

日・月・星を見ざるなり」

それは、彼女自身の言葉というよりも、誰かの言葉を引用したかの様だった。

「日月巡りて年経るとも

大火ありて汝が身を焼かん

汝痴人にして悪をなせり

いま何をもつてから悔いを生ぜん

これ天・修羅・健達婆けんだつぱ

竜・鬼のなすにあらざるなり

自業の羅あみに繫縛けぼくせられたるなり

人よく汝を救うものなし

もし大海の中にして

ただ一掬ひとさくの水を取らんに

この苦は一掬のごとく  
後の苦は大海のごとし」

攀られる様に自分の口が動いて、そう返した。

意味は分かかってない。しかし、頭にフツと過った。胸の内側で叫んでいた誰かが、これを言え、と差し出した様だった。

それは彼女が呟いた台詞への明確な反論とも聞こえた。

『罪を犯した人が身に受けるこの地獄の生存は、実に悲惨である。だから人はこの世において余生のあるうちになすべきことをなして、ゆるが忽せにしてはならない』

女性が続けて吐き出した言葉は、聖人の教唆というよりは、尊大なる覇者が自らの悪業エゴを正当化する為の詭弁の様に聞こえた。

それに対する反論も、即座に口から出てきた。

『地獄の苦しみがどれほど永く続こうとも、その間は地獄にとどまらねばならない。それ故に、ひとは清く、温良で、立派な美德をめざして、常にことばとところをつつしむべきである』

言いながら、疑問に感じていた。

果たしてこれらは本当に自分の言葉なんだろうか。

今この時だけ、誰かが自分の身体を乗っ取って言わせているんじゃないだろうか。その思考は、自身の内側に居る「誰か」にも投げかけるつもりだったが、そこから返事は帰ってこない。

「唾棄すべき思想だ、反吐が出る」

女性が振り向き、そう吐き捨てるのと同時に、ギロリと、剥いた目を見せた。

強く見開かれた瞳から、爛々と紅蓮の光が瞬き、自分の心を焼き焦がす様な意志の強さを放っていた。

「たまき」

呟かれたのは自分の名字。

たった3文字だが、身を震わす程の憎悪と侮蔑が存分に乗せられていた。

——向き合え。

誰かがそう囁いた。

だから、自分も、恐怖心に押しつぶされそうになりながらも、女性を強く見つめ返した。

「おまえは、そこにいろ」



女性の笑みが、ニタリと歪む。

「っ!？」

低い声で、放たれた言葉が、一石となつて思考の海に投じられた。波紋が広がり、混乱が更に増していく。

前の夢で会つた白衣の男性とは、正反対の言葉を、女性は訴えてきた。

「せいぜい屍の様に生き永らえて、安寧の日溜まりから深淵を見下ろし続けるといい」  
気を失いそうなぐらい意識が混濁する。クラリと頭が揺れた。

だが、女性はそんな自分の状態など、まるで意に介さず冷酷に告げる。

「お前は落伍者だ。救世主になる為の痛苦から逃げ出し外道と蔑まれる道を選んだ。  
私を裏切った」

一頻りの罵詈雑言を訴えると、最後に笑みを消して——真剣な表情で、一言、放つた。

「偽りの楽園で、腐れ果てろ」

——それが、お前に相応しい結末だ。

(FILE #09 生き場を失った心 より)

一覽へもどる

4.

夢を見た。

いつもの病室。温かい日差しが窓から差し込んだ、林檎の臭いが優しく漂ういつもの場所で、自分は一つのベッドと向き合っていた。

「うい」

声を掛ける。ベッドの上の人物は、身体を起こしていた。顔を背けて窓の方を向いている。

「おねえちゃん、思い出したよ、貴女のこと」

それが少し気になりつつも、懸命に声を掛けた。思い出したことを喜んで欲しい一心だった。

だが、彼女は、振り向かない。映る都会の街並みをじつと眺めている。まるで自分の言葉など最初から聞こえていないかのよう。

「うい」

「……………」

再び声を掛ける。しかし、ういは振り向かない。

——からかっているのかな？

多分そうだ。なんだか微笑ましくて、ふふ、と笑みが溢れる。

「ねえ、うい」

こつちを向いて、顔を見せて。

そう思い、彼女の肩に手を伸ばし、

「お姉ちゃんは、わたしの邪魔をするの？」

掴もうとした寸前だった。冷え切った声が、矢の様に飛ばされた。

「えっ?」

心臓を射抜かれた様な痛みが強烈に走った。驚きの余り目を見開いた。

伸ばした手が、ピタリと止まる。ういが今、何を言ったのか、全く理解できなかった。

「何度もいったよね?」

「……………!!」

ういは振り向かないまま、低い言葉が叩きつけてくる。

ズキリズキリと、心臓が激しく痛んだ。覚えのない罪悪の感情が強引に引きずり出さ

れて、叩き付けられた様な感覚だった。

右手で胸を抑える。

「……………!!」

刹那——窓の景色が一変。

光景を目の当たりにした瞬間、両膝ががくがくと震えた。同時に猛烈な胃酸が腹の奥からこみ上げてきて、口を抑える。

それは、小さなキュウベえをこの手に挿んだ時に見た夢の一片だった。

行ったことも無い工場の管理室で、見たことも無い女性が張り付いて眺めていた悍ましい光景——生肉の塊が、ぐちゃりぬちゃりと生々しい音を立てながら、何処かに

運ばれていく。

「……………っ！」

恐怖からか、それとも、知らない罪悪感からか。

自然と、視界が歪んだ。両目には涙が溢れていた。ここから逃げ出したいのに、逃げ出してはならないという矛盾した二つの気持ちが闘ぎ合い、身体を縛り付けていた。

「……………」

ふと、ういを見る。

ぞつと背筋が冷えた。彼女は、無言のまま、平静とした様子で、窓の光景を眺めている。

「わたしには」

そこで、静かに眩きはじめる。

ああ、次に言うのは、あの『言葉』だ——でも、それが聞きたくない。ういの口から聞くのは嫌だ。

「“死神”と会う約束があるんだって」

耳を塞ぐよりも早く、ういの言葉は告げられてしまった。

最後まで、振り向くことは無かった。

☆

目を覚ますと、知らない病室に自分は居た。

窓から差し込む陽の明かりが、自分の身体に降り注いでいる。凍り付いた心を優しく撫でて溶かしているようで、安心感で満たされていく。

あの悍ましい場所から抜け出せたと思うと、ほっと一息付けた。

(あれ?)

不意に病室が気になった。全体を見回すと既視感を覚える。

(ここって……)

ういが居た病室と酷似していた。

しかし、平穏に満ちていた『あそこ』と比べると、此処は酷く無機質で殺風景に感じ

られた。

それもその筈だ——林檎の臭いが無い。周りのベッドを見ると、ういも、灯花も、ねむもない。ああ、ここに誰か一人でも居てくれたらもつと気持ちが安らいだだろうに。

「たまき」

そこで突然、誰かから、名前を呼ばれた。

「っー」

身体がビクリと跳ねる。

安らぎの時間は一瞬で終わった。目の前に彼女が居る限り、それは敵わないのだ。

緊張感が齎されて、全身を固めていく。

じとりと、顔に脂汗が浮かんできた。

「何をそんなに悩んでいる」

自分は丸椅子に座って顔を前に向ける。以前、夢の工場で見た知らない女性が立ち尽くしていた。彼女も自分と向き合っている。

憔悴しきっていたあの姿と比べると、今は、両足でしゃんと立っており、背筋もピン

と張つていて至つて澆刺そうに見える。顔もよく見ると皺が少なく、10歳は若返つてゐる印象だ。

——この人は、誰？

考えてみる。記憶をあるがまま手探つてみる。誰かに、彼女は似ている。でも、誰に似ているのかが、想像できない。

「感傷に浸るな。ヒューマニズムなど、我々には無用の長物だ」

「……っ！」

女性の顔は、叩きつける様な低い声と反比例して、和やかな笑みを浮かべていた。

それを捉えた瞬間——一つ理解したことがある。

彼女の事が、忌々しかった。

腹の底から憎悪の限りをぶち撒けてやりたいと思つていた。

「捨てろ」

素つ気なく吐き出されたその一言で、感情の煮え湯が一気に脳まで達した。

「捨てちゃ駄目なんだ!!」

気がついた時には、自分は彼女の胸ぐらを掴み上げて、ありつたけの怒りをぶつけて



いた。

「人は最期の時まで人で無くちやいけなっ!! 救う使命を背負った私達が人で無くなってしまったら、誰があの子たちを救えるというのっ!?!」

口から烈火の如き激情が溢れてくる。

だが、彼女は怯まない。寧ろ蔑む様な笑みと凍り付いた瞳で見下ろしてくる。

それを見て、もう一つわかつた事がある。

自分が殺意を抱いたのは、これが初めてだった。

「わたしも同意見だ」

不意に、また別の女性の声が頭に響いた。

ハッと気がついた頃にはまた別の場所に自分は移動していた。『瞬間移動』をしたら

こんな感じなんだろうか、と突拍子も無い考えが頭を過る。

——そこは、またも病室だった。だが、これまで夢で見たものとは明らかに違う。野戦病院の様だ。

横並びにされたベッドが、部屋の奥まで延々と続いている。何れの上にも人が寝ていた。いや、寝かされていた、といった方が正しいのかもしれない。

——正しい？ 何で正しいなんて思うの？

自分でそう判断したにも関わらず、疑問が湧いた。問いかけようにも答えてくれそうな人が周りには居ない。

目の前のベッドを覗き込む。そこに横たわっていたのは子供だった。10代半ばの小さな女の子だ。

一切微動だにしないので、もしかしたら死んでいるのではないか、と思いつつ口元に耳を当てると、スー……スー……静かな寝息が聞こえてきたので、安堵した。

身体を戻して、他のベッドをまじまじと見つめる。寝かされているのは、同じぐらいの少女ばかりだ。

「彼女たちは生きているんじゃない。生か……  
生かされている」

不意にその言葉が背後から飛んできた。

「~~~~つっ!」

腹立たしい感情が胸の内を覆い尽くす。胃の中で悪い虫が暴れまわり、内側から食い破られる様な痛みが全身に響いた。

その場で膝が折れた。下腹部を押さえながら、声にならない声で呻く。

「あいつを見ていると、思う事がある。人間の理性というものはどれほど勝手に漠然とした道具かということを」

「っ!!」

苦痛に蹲る自分の背中に、再び同じ声が掛けられた。咄嗟に振り向くと、今までの夢でも会ったことの無い女性が一人、歩み寄ってきていた。

赤いフレームの丸メガネを掛けて、白衣を纏った、初老の女性だった。後ろで一本に縛った三つ編みのお下げがゆらゆらと揺れている。

顔つきは、どこか疲れ切っている様で、頬は色白でこけていた。睡眠不足なのか、目の下には真っ黒な隈ができています。

「だからこそ、君の言う通り、我々は自らの“良心”でそれを改善しなくてはならない。節制と貞潔を……我らに与え給うた神への敬意によつて、それ自体を愛さなければならぬ」

彼女は、光を失った瞳で見据えながら、まるで機械の様に感情が抜け落ちた声色で淡々と語りかけてくる。

だが、紡がれた言葉は、意志を失ってはいなかった。

「だったら……もう止めるべきです！」

そう確信した時、自分の心に再び火が点いた。立ち上がると、彼女に食って掛かるようにして訴える。

「だが、それは今の我々には不可能だ」

だが、彼女は小さく首を振って否定する。

「我々の世界が直面している問題を如何にかするには、彼女たちの身が必要だった」

「そんな……っ！」

諦念混じりの言葉を受けて、歯を食いしばった。そんなことはない、貴女の意見が奴には必要なんだと訴えてやりたかった。

「この問題は後世に残してはならない。我々が澁刺としている内に……解決しなければならぬんだ」

そこで彼女は、この部屋で横並びになっているベッドの上で、穏やかに眠っている少女たちを見回した後に、ゆっくり首を戻して自分を見つめた。

——分かってくれるね。

光を失った漆黒の瞳が、有無を言わせぬ圧力を携えて、そう訴えてきた。

「……………」

口を閉ざす。彼女の意志は鋼の様に固い。これ以上は何も言っても通じない。

「だが……………」

そこで彼女は、顔を俯かせた。影が掛かり、表情が全く見えなくなる。

「……………最近、夢を見る」

ポツリと呟かれた言葉は、震えていた。

「学校で、保険医をしている夢だ」

「……………」

彼女が訥々と語りだしたので、耳を傾ける。

「悲鳴が聞こえてね、私は慌てて保健室を飛び出して近くのクラスに駆け込むんだ。女の子ばかりのクラスだった。テロリストが乱入してショットガンを撃ちまくっていた」

語りながら、彼女は両手をゆっくりと上げた。

「女の子達は狂ったように悲鳴をあげて次々と血飛沫を撒き散らした。私は『早く逃げろ』と叫ぶんだ。助けようって一心で。でも……………みんな、撃ち殺された」

開いた手のひらを、じいっと見つめている。

「気がついたら、ショットガンはわたしの手の中にあっただ。

どういふことかわからなかった。ただ、一つ分かったのは……」

——わたしが、彼女たちを撃ち殺した。

彼女の声色にようやく感情が乗せられた。声を絞り出すと、両手を強く握りしめて爪を食い込ませる。

「それでもわたしは懺悔のつもりで、一人の女の子を外に連れ出そうと背中に乗せた。死にかけている血塗れの少女が恐ろしく重たくのしかかっていた。口の中に血が入り込んで空気を求めて喘いでも、すぐに血は口の中に溜まる。その血の味、血のおい、血の熱さ、血のぬめりが……こびりついて離れないんだ。こんな夢を毎日見る自分に怒りを覚える……。悪夢が止まらない事にどうしようもない不安を覚えるんだ。昔の楽しい夢が見たいのに……」

彼女は言い切ると、顔を上げた。漆黒の瞳を震わせて、訴えてくる。

「ねえ、たまき、わたしの頭の中は、いつの間に、こうなったんだろうか……?」

(FILE #13 始まりの詩が聞こえてくる より)

一覽へもどる

5.

——親友つていい言葉だよ。だって天文学的な確率だもんね。

——そうそう、確かにそう言っていた。

——調べた年代や年齢によって違うんだけど……。

雲一つ無い快晴が窓に映る明るい病室の中。

あの子の身体は病魔にかなり蝕まれている筈だが、私が来るといつも、愉しそうに笑いながら話してくれた。

——親友の数って色んな統計や論文が出ててね。

最近の教育心理学の発表だと大体三人なんだってー。

——それって今の地球人口が74億人だとするとー……

れーてんれーれーれーれーれーれーれーれーよん%ってすつごく小さい確率なんだよー。

——お姉さまを含めるとわたくしたちはそれを3回も引き当ててるっ。

——だから、わたくしたちってここでこうして話してるだけで、天文学的な確率に選ばれたかんけーなんだよ？





『そうは思わないか？  
たまき』

「…………え？」

輝かしい記憶の中で、何か割れ込んできた。  
記憶が、ぐにやりと歪む。

刹那、暗転——

全ての光が遮られた。

『だから、気にするな』

全てが無機質な壁に覆われた冷たい箱の中で、声が囁く。

『奪ったものことなど、気にするな』

「違う」

声が震えた。

腰まで届く茶髪と白衣、そして、血溜まりの様な紅い瞳——彼女は、憎悪の対象だった。

どこか、知らない場所だった。

出口の無いトンネルの様な世界。

白い布切れの様な薄着を一枚だけ着た少女達が歩み寄ってくる。

人数は多い、2〜30人は居るだろうか。何れも目に生氣は無く、虚ろだった。

軍服を来た白人達が彼女たちを囲い恫喝を撒き散らしながら、何処かへと連れ去っていく。

英語だから何を喚いているのかさっぱりだ。だが、彼らの表情は焦燥に染まってお  
り、只ならぬ状況なのは理解できた。

少女たちは無防備だ。何も持っていない。しかし、彼らの手には銃が握られていた。  
つまり、彼女達の命は常に彼らの掌の中に有った。

「違う」

こんなことを思い出したかったんじゃない。

自分が思い出すべきは、雲一つ無い青空の様に、純粹で、晴れやかで、心が安らぐも  
のだった筈だ。

『お前と私は一緒だ』

しかし、そんな否定など無意味だと言わんばかりに、彼女の口元は残忍に吊り上がつ  
た。

心底愉しそうなのが、気に入らなかつた。嫌悪の余り、反吐が喉元に溜まつた。その笑みは酷薄で、無情で……正気を保つた人間が浮かべるそれとは思えなかつた。

「違う……！」

否定。しかし、言葉と対照的に自分の胸を大きく食らい付くしたのは、後悔の様な感情。

ガタガタと震える手が、水に濡れた包丁を強く握り締めていた。

軍人の一人が、自分の前に立ち止まり、敬礼する。

彼は感情を消した声で、言った。

『彼女達の\_\_\_\_\_が決定した』

言葉は全て英語だったが、何を言つてるのかはつきりと理解できた。

『だから、親友なんだよ。たまき』

動揺。

包丁が一瞬だけ誰かの血に塗れて見えた。

だが、女性の言葉を懸命に頭から振り払う。

——違う。自分が友達だと思っていたのは、里見灯花と、柊ねむだ。

お前じゃない。

「誰が……!!」

刃先を、自分の喉元に向けた。

やがて、衣きれを纏った少女達は辿り着く。

異国の王族か大富豪が住んでいる立派な城門の様な、堅牢な鉄扉が立ち塞がった。率いていた軍人達が、二手に分かれて、扉の両サイドを引っ張って、開放した。そこに入ってはいけない。

だが、彼女達は一切抵抗することなく、軍人の指示に従順のまま、中に入ってしまった。そこへ入れば、何をされるのか、分かつている筈だったのに——

懸命に伸ばされた手は、誰一人にも届くことは叶わず、扉は轟音を立てて閉ざされた。

『私とお前は、同じだから』

「誰がお前なんかとっ!!」  
叫ぶ。

包丁が勢いよく首筋を貫いた。



(FILE #34 Does Death dream a dream dark  
 er than Darkness? より)

一覽へもどる

6.

—— そう、だから全て数学は全て宇宙に繋がるんだよ！

—— わたくしのパパ様はよく将来、生きるために必要だとか、考え方が身に付くと  
 か言ってるけど、そんなのは関係ないんだよ。

——人類に宇宙を駆け回ったり宇宙の果てを見る力が無いなら数字が無ければハップルの法則もビッグバン理論も成り立たない。

定常宇宙モデルだってプラズマ宇宙論だって何もかも！

——人類は宇宙発生と同時に可能性という数字として生まれた。数とは縁のきれない存在なんだよ。

——そして、この数の理論を掴み宇宙のことを把握することは、人類が自分達の根っこを理解することに繋がって果ては進化の糧になるんだよ!?

……かなり極論に聞こえるが、あのぐらいの年齢なら、図書室の本で得ただけの知識をさも自分が導き出した解答であるかのように、友達に自慢したくなるのはよくある話だ。

自分がさも世界の理解者になったような。

同年代の子供たちよりも遙か先へ進んだような。

自分一人だけみんなより先に大人になれたような、優越感。勝利者の興奮。  
灯花の世代で無ければ味わえない悦楽だろう。

——わたくしすごいよね！

〈想像を叶える、科学者の灯花ちゃん〉

周りは、彼女をそのように賛辞した。

確かに、一般的な子供よりも頭がよかつたのかもしれない。

でも、無邪気で無垢な笑顔は、どこにでもいる普通の子供の様に見えた。

——そして、もう一人。

脳が、ぼんやりと“それ”を思い出していた。

小さな地面が消失した瞬間、みたまは柄にもなく悲鳴をあげた。

全てが黒一色なので距離が把握できない。

すぐ傍に黒い壁があるように思えるし、気が遠くなるほど悠久の彼方に底があるのか  
もしれない。



声が聞こえた。

酷く低く掠れているが紛れも無い女性の声だった。

不意に暗闇が晴れた。

視界が映し出したのは、砂嵐を映し出したコンピューターがデスク上に並び、工場の管理室の様な空間。

「くふっ」

目の前に、白衣の女性が佇んでいた。

彼女は自分を見下げるなり、嗤った。

何か邪な陰謀を思いついた様な残忍な瞳が、異常に空間に相応しい血の紅に染まって瞬いていた。

「私は死ぬ！ 間もなく死ぬ！ 磨耗して何も計算できない状態のまま、糞尿を垂れ流し、バカみたいに笑いながら胃の中の物を吐き出し、自分の顔に塗りたくりながら無様な死を迎える！ だが止まらない！ 私が動かした“これ”は止められない！ 自動的な“これ”だけは誰にも止めることはできない！ それだけが楽しみで計算している！ それだけが楽しみで私は『生きて』いるんだ！」

自らを天才と認識する者は、自信に満ちた笑みと共に断言する。

世の研究者たちがなぞお躊躇する究極のタブー、それをあつさり侵してなぞお笑う。

その圧倒的な自信と迫力に……みたまは、呑まれた。魅入られた。虜となった。

ガサリと——不意にみたまの手が床にある何かに触れた。くしゃくしゃに歪んだ書類に、短い文字が書かれていた。

引き寄せられるように、両目がそれを見つめた。

『PROJECT : MAGIA RECORD』

うっ、と鼻をつまむ。

肉を焼き焦がした異臭が鼻腔を刺激した。

女性の声が止む事無く響き渡る。

「聞いているだろう。たまき」

(FILE #38 奈落の底で煌く紅蓮 より)

一覽へもどる

7.

——夢を見た。

いつもの場所。  
いつもの人達。

窓に映るのはいつもの景色。

陽が目一杯差し込む、白い輝きに満ちた病室に自分は立っていた。

リンゴの花の臭いが、鼻の奥を刺激して、記憶を呼び覚ます。

——ああ、懐かしい。

これが夢の中だったとしても、今この時だけは、自分はこの頃に戻れる。

何もかもが有って、決して欠けることの無い、いつも満ち足りていた、あの日々。

目と鼻の先に、あの子が居る。

腰まで垂れた緩くふんわりとした桃色の髪、少し日に焼けた赤色のパジャマ——

それらが目に入るだけで、もう嬉しくて堪らない。今まで体験した苦勞など、死に掛けた事など、どうでもいいとさえ感じるほどに。

——大切な妹、うい。

まだ自分に気付いていないのだろう。彼女は背中を向けて、窓の外を眺めているようだ。

自分も窓を見た。

青空の中で、番つがいのツバメが飛んでいて、弧を描くように、太陽の周りを旋回していた。

多分、ういは、願っているんだろう。

いつか自分が、おねえちゃんと一緒に、あのツバメ達みたいに、どこまでも広い世界



に羽ばたけていけたらって——

ういならきつと、そう思っている筈だ。

自分は信じてる。疑うまでも無い。だって、私とういは——

——世界で一番、仲の良い姉妹なんだから——

「おねえちゃん」

不意に声が聞こえて、いろははハツと我に返る。

ういは背中を向けたまま、自分を呼んだ。

自分は何をしているんだろう。ういも自分を求めていたのに、ここで突っ立ってるなんて。

いろはは、そんな自分を恥じつつ、ういに駆け寄った。

そして、振り向いてもらうべく、肩に触れようと——

「たまき」

——した瞬間、声が聞こえた。

よく、聞き覚えのある声だった。

だが、その語気は刺すように強くて、夢心地の最中に居る自分を現実に呼び戻そうと  
しているようで。

振り向くと、ねむが居た。

自分の記憶にある、あの頃のまま。良く見たパジャマを着て、いつものベッドに座つ  
ている。

だが、その表情は、いつもの穏やかなものではなく。

固く、険しい——憎しみにも似た、強い怒りを噛み殺しているように見えて、怖  
かった。

彼女は射る様な視線で自分を見据えて、強く訴えてきた。

「君は、本当に、その先へ行くつもりかい？」

陽を遮るように、ベッド周りのカーテンを半分閉めているせいで、ねむの顔には影が  
掛かっていた。

深藍に瞬く瞳が、いろはの目に付いた。その色は、悲しみに満ちている。

「ねむちゃん……でも」

自分はういを取戻したい。その信念は今も変わらない。  
ねむもその気持ちは分かっている筈だ。だが、彼女は酷く辛そうに口元をクツと歪めた。

「そこにあるのは……『闇』だ」

「……!!?」

ぞくりと、心臓が凍えるような感覚。

——いつか、自分の夢に現れた白衣の男性と、ねむの言葉が、重なった。

「ジークムント・フロイトの言葉だ。『夢は現実の——』」

聞きながら、いろはは深呼吸。

ねむの言いたいことは分かっている。

だけど、彼女が心配しないように、できるだけ笑顔を取り繕って、答えた。

「表出であり、想像の産物ではない』だね。知ってるよ、ねむちゃん」

ねむはコクリと頷いた。睨み据えたまま。

「でも私、ういに触れたいの。例え夢の中だとしても、ういに会えるのはこの時しかない。ねむちゃんが止めたい気持ちも分かるけど……今だけは、私の好きにさせてほし

い」

愕然としたように、ねむの頭が項垂れる。

「そこまで言うのなら、僕にもう、君を止める権利は無い。でもたまき。これだけは頭の片隅に留めておいて……」

—— 眞実はいつも、君の心を強姦し、蹂躪する。

「うい……」

ねむの最後の言葉を聞きながら、いろははういの肩に触れた。

柔らかい感触に、つい抱きしめたい衝動に駆られる。

だけど、今は、その時ではない。

「ごめんね。お姉ちゃん、まだ貴女の手掛かりをちつとも掴めてない」

「ただど——と、いろはは表情を真剣に固めた。窓の外に映るのは神浜市の全景を見渡す。」

「この街に住む人達に支えられて、ようやく私は一步を踏み出せた。お父さんが伝えて

くれた、大賢者様と会えるきっかけもつかめた。いつまで掛かるのか、分からないけど、確実にういに近づいてる気がするの」

そこまで言うのと、いろはは、穏やかな笑みを浮かべて、ういを見下ろした。

「だからうい、もう少しだけ待ってて。お姉ちゃん、必ず貴女を取り戻すから」  
微動だにしなかったういの肩が、ピクリと動いた。

彼女の顔がゆつくりと、後ろを振り向く。

「うそつき」

「えっ?」

——ういの肩が、急に冷たくなった。

「私のこと、何も知らない癖に」

頭が、真つ白になった。

悪寒が脚の爪先から、頭頂部まで一気に駆け抜いた。

笑顔を魅せると思っていたういの顔は——

「私がこうならなかつたら、心配しなかつたんでしょ?」

ベタリと、一色の黒に塗り潰されていた。

「……っ」

奥歯が、ガチガチと揺れ出す。

違う、私はそんなことを思っていない。今まで、これっぽっちも——だが、口が震

えてしまって、否定できない。

「お姉ちゃんはいつもそう。口から出るのは、綺麗な言葉ばかり」

ういの言葉は、酷く淡々としているけど。

自分への嘲り、侮蔑、怒り、そして、ありつたけの憎しみが感じられて。

覚えの無い、罪悪感が、心臓をメキメキと締め付けてきて。

——いやだ。

——やめて。

胸の痛みに堪えきれず、両膝が折れた。

端から見ればその様子は、神父の前で跪き懺悔する罪人のようであった。いろはは両手で耳を塞ぐ。ういの口から、そんなことは聞きたくない。

自分を嫌う様な言葉は、断じて。

「まるで、童話の主人公みたいだね」

だが、ういの言葉は耳の蓋を容赦なく貫いた。

皮肉だった。

だが、冷たい刃となって、いろはの心を突き刺す。

☆

——全ての光が消えた。

そこにあるのは、見渡す限りの闇、闇、闇……。

永遠に続くトンネルの様な、果てしない暗黒の最中にいろはは立っていた。

—— ああ、まただ。

自分の知らない世界に、迷い込んでいる。

認識した途端、全身が四肢の末端から急激に冷めていくのを感じる。

ここは酷く寒い。

“閉ざされた空間”と、何故か理解していた。だから不思議だ。風が入る隙間さえ無い筈なのに、この凍える様な冷感は一切……。

ペタペタと、何かがゆったり近づいてくる足音。

灯りを持った女性がいた。

—— いや、違う。

よく目を凝らすと、彼女は中々に不思議な状態だった。灯りは灯りでも懐中電灯のよ  
うなものを握っているのではなく……抱えていた。彼女が抱く光は、人型をしていて、  
彼女の全体像をぼう、と照らしていた。

彼女が自分の目先まで歩み寄る。

身長は自分よりも頭半分ぐらい高く、顔立ちも凛々しい。だが、いろはは“少女”だ



と認識できた。推測するに、年はやちよか鶴乃と変わらないだろうか。

自然と、いろはの肩肘がグツと張る。眉間に皺が寄り、表情筋が固くなつていく。

それは少女の格好を見たからだ。

自分は白衣で全身を覆っているのに、少女の方は、紙切れのような白い布一枚だけ。頼りないそのせいで、上下肢が全て露出している。

だが、少女は別に寒くなさそう。彼女の意識は、皮膚が感じる冷氣よりも、抱きかかえている「光」の一点のみに向いているようだった。

「たまきさん」

彼女は穏やかな笑みを浮かべて、光を見下ろし、自分の名を呟いた。

いろはも、じつと光を見つめる。

よく目を凝らすと、光の中にほんやりと、実体が浮かんで見えた。

——少女が、抱いているのは。

「この子は、望まれない子でした」

赤ん坊だった。

まだ、生まれたばかりの。

少女は、タオルで包まれたその子の体をギュツと抱きしめると、愛おしそうな瞳で、見つめた。

「でも、この子は、生きています。未来がある」

何故だろう。

少女が語る希望を、はつきり否定したかったのは。

それを、言わなければ、少女の為にならないと思ったのは。

——私、何か、知っている？

「自分の人生を自分で歩むことができる。私はもうダメですけど……この子には私の分も幸せになつて欲しいんです」

いろはは知っている。

この『深淵』に潜む魍魎・悪魔にも匹敵する鬼畜共が少女に与えたのは、地獄に墮ちるにも等しい数多の苦痛。

赤ん坊は、恐らく——

しかし彼女は、自分に憎しみも怒りも、ましてや悲嘆さえ向けず、ただ光輝く瞳を向けていた。

「人間は皆、生まれた時にその権利が与えられているはず。そうですよね？ たまきさん」

自分は、少女の問いに「うん」と、頷いた。

何で、頷けたのか分からなかった。

少女の希望に、無垢な期待に応えたいと思ったのだろうか。

——  
自分は知っていたのに。

——  
赤ん坊が、これから辿る運命を。

——  
殺せ。たまき。

——  
いやだ。

— その子は、この世に必要な無い人間だ。

— いやだ。

— ゴミは散らかした者が片付けなくては。

— やめて。

— だから、お前の手で処分するんだよ、たまき。

— 神様……どうか……。

— さあ、やれ。

— 願わくば……私が手を下すよりも早く、この子を御救い下さい……！

「やめてえっ!!殺さないでえっ!! その子は私の」

金切り音のような悲鳴。銃声。目の前が真っ赤に染まった。

「やめてえっ!!殺さないでえっ!! その子は私の」

金切り音のような悲鳴。銃声。目の前が真っ赤に染まった。

「やめてえっ!!殺さないでえっ!! その子は私の」

金切り音のような悲鳴。銃声。目の前が真っ赤に染まった。

—— ごめんなさい。『かすみ』ちゃん。

—— 本当に、ごめんなさい。

(FILE #60 REPENTANCE Ⅱ 〈懺悔〉より)

一覧へもどる

